岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 59

百間川沢田遺跡 2
百間川長谷遺跡 2

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 Ⅵ

1985

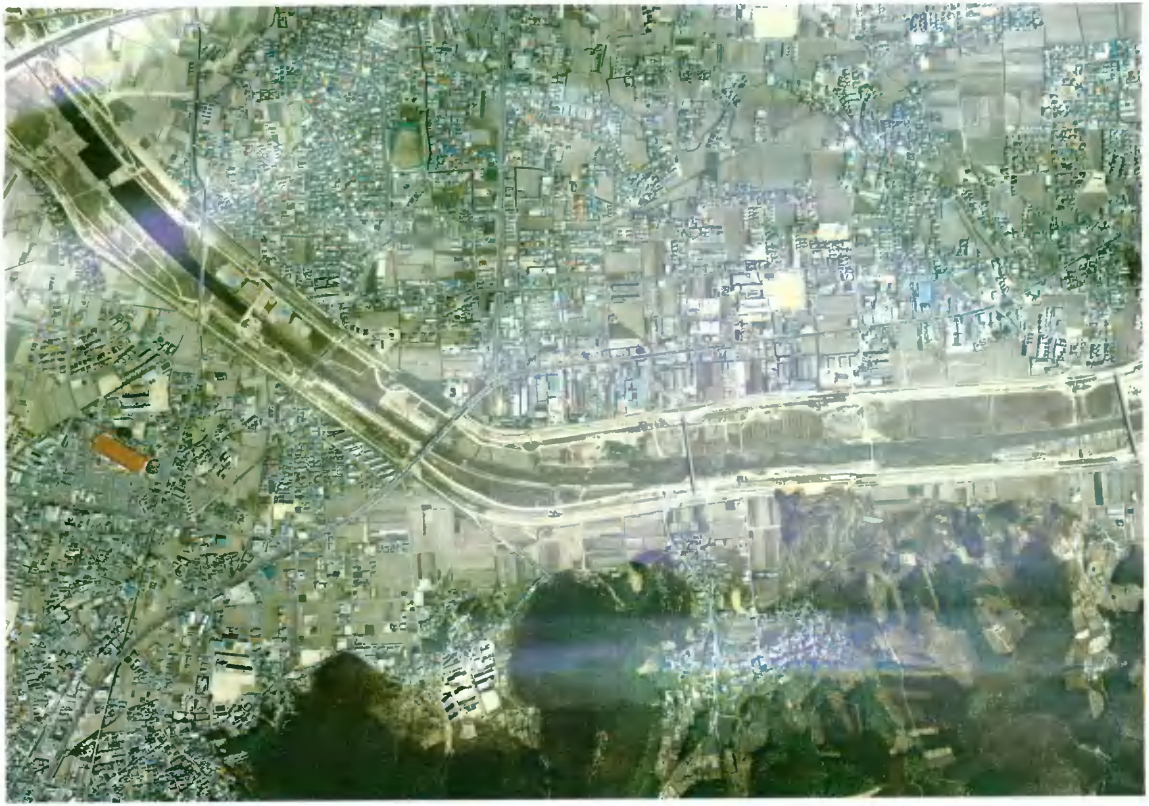
建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 59

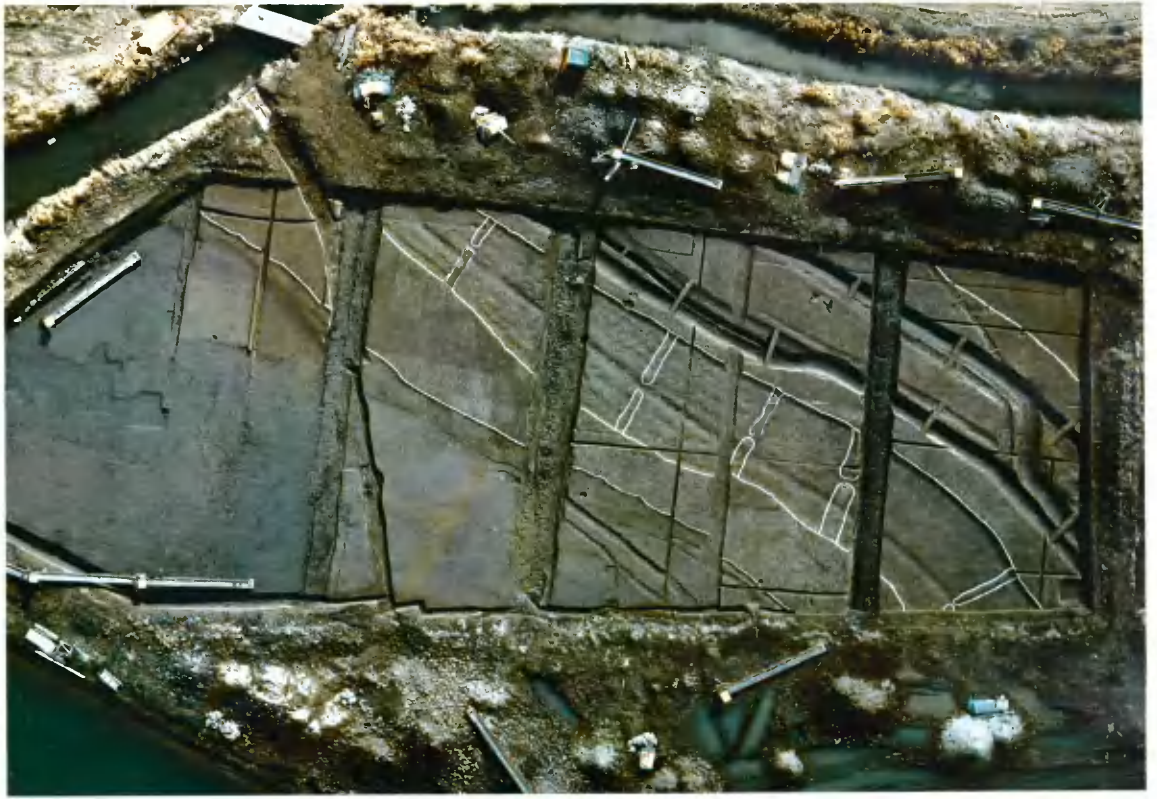
百間川沢田遺跡 2
百間川長谷遺跡 2

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 Ⅵ

1985
建設省岡山河川工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会



巻頭図版－1　百間川遺跡群周辺航空写真



巻頭図版－2　高縄手B調査区帯状水田（航空写真）

序

岡山市街の東を流れる百間川は，江戸時代に岡山城下を旭川の洪水から守るためにつくられた人工河川でありますが，この百間川の改修工事に伴って，岡山県教育委員会では，昭和52年度から百間川遺跡群の調査を実施しており，昭和57年度からは第２次調査に入り，現在も継続中であります。

本報告書は第１次調査の最終報告にあたり，昭和52年６月から，昭和57年３月まで調査を行った百間川沢田遺跡２，百間川長谷遺跡２をとりあげます。これらの調査区からは縄文時代後期から古墳時代の住居跡群，広域にひろがった弥生時代後期の水田および灌漑施設，古墳時代のガラス滓の貴重な遺構・遺物が発見され，全国的にも注目されました。

これらの成果をおさめたこの報告書が埋蔵文化財の保護・保存，更には今後の研究の一助となれば幸いと存じます。

現地での発掘調査の実施，報告書の作成にあたって，建設省中国地方建設局・岡山河川工事事務所，ならびに百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員をはじめとする関係各位から寄せられた多大の御協力と御指導に対し，厚く御礼申しあげます。

昭和60年３月

岡山県教育委員会

教育長　宮地暢夫

例　　言

1. 報告書は旭川放水路（百間川）改修工事に伴い，建設省中国地方建設局の依頼を受け，岡山県教育委員会が1977～1981年に発掘調査を実施した百間川沢田・長谷遺跡の発掘調査概要である。なお，沢田遺跡部分は第1次確認調査における第2微高地及び沢田散布地である。
2. 調査期間は1977年6月13日～1981年3月31日である。
3. 発掘調査および報告書の作成にあたって，旭川放水路（百間川）埋蔵文化財保護対策委員会の助言を受けた。また，石材の肉眼同定には岡山理科大学三宅寛教授，平井典子氏，花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し，有益な教示と助言を得た。一部の木器については，元興寺文化財研究所保存科学研究室に委託し，研究所員松田隆嗣氏の教示を得た。各氏に対し記して深甚の謝意を表す次第である。
4. 報告書の作成は，1984年4月以降1985年2月まで文化課分室・岡山県古代吉備文化財センターにて整理作業を実施し，文化課職員・岡山県古代吉備文化財センター調査課職員が執筆し，文責は文末に記した。
5. 遺物の整理，実測および実測図の浄写，遺構図の浄写は，おもに各担当者が行い，一部の土器・木器の実測に，有森万久，武田恭彰，赤松光晴，竹本聡美，石器の実測および浄写に，山田雅子，文章の浄写，拓本は，岡本香織，伊井瑞恵，小野晶子各氏の協力を得た。遺物の写真撮影は，井上弘，岡田博，浅倉秀昭が行った。全体編集は二宮が行い，各調査区の編集には，中野雅美，内藤善史，山磨康平，下澤公明，岡本寛久，浅倉秀昭があたった。

   また遺物整理には，森本耶須子，平岩章子，綱沢靖枝，平井典子，坂本由美子各氏の協力を得た。
6. 報告書で用いる高度値は海抜高であり，方位は磁北である。
7. 報告書に掲載の縮尺率は，それぞれに示した。出土遺物の実測図の数値を示していないものは，1/4の縮尺である。
8. 報告書で用いる時代区分は，一般的な政治区分に準拠し，それを補うために文化史区分と世紀を併用した。
9. 調査地区は調査後，小字名に準拠し，横田，高縄手A，高縄手B（流田（ながれだ）を含む），竪石（たていし），開山下（かいざんげ）（足洗（あしあらい）を含む）四元（よもと）の6区，さらに長谷（ながたに）遺跡（五ノ坪）にわけた。
10. 報告書に関係する遺物，実測図，マイクロフィルム等は，岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325―3）にて保管している。

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境…… 1
第２章　調査の契機および経過…… 5
第３章　百間川沢田遺跡……13
　第１節　横田調査区……13
　第２節　高縄手Ａ調査区…… 119
　第３節　高縄手Ｂ調査区…… 262
　第４節　竪石（たていし）調査区…… 362
　第５節　開山下（かいざんげ）調査区…… 376
　第６節　四元（よもと）調査区…… 386
第４章　百間川長谷（ながたに）遺跡…… 401
第５章　まとめ…… 409
　第１節　百間川沢田遺跡発掘調査概要…… 409
　第２節　石器…… 412
　第３節　弥生時代後期の土器…… 422
　第４節　古墳時代初頭の井戸について…… 429
　第５節　花粉・分析結果報告…… 432
　第６節　百間川沢田遺跡高縄手Ａ調査区溝―113出土の馬歯 …… 454

図　目　次

第 1 図　百間川位置図……1
第 2 図　百間川周辺遺跡分布図
　(1/50,000)……2
第 3 図　百間川周辺地形および調査区
　設定図（1/15,000）……7
第 4 図　百間川周辺地形および調査区
　設定図（1/15,000）……8
第 5 図　グリッド設定と小字名
　(1/5,000) ……9
第 6 図　包含層出土遺物……13
第 7 図　弥生時代前期遺構配置図
　(1/1,000) ……14
第 8 図　横田調査区弥生時代遺構全体図
　(1/800) ……折り込み 1
第 9 図　竪穴式住居―1（1/80)……15
第 10 図　竪穴式住居―１出土遺物（１）…16
第 11 図　竪穴式住居―１出土遺物（２）…17
第 12 図　土壙―１・２(1/30)・出土遺物…18
第 13 図　土壙―３（1/30）……18
第 14 図　土壙―３出土遺物……19
第 15 図　土壙―４（1/30)・出土遺物
　(1/6) ……20
第 16 図　土壙―５（1/20)・出土遺物 ……20
第 17 図　土壙―６（1/80)・出土遺物 ……21
第 18 図　溝―１（1/40)・出土遺物（１)…22
第 19 図　溝―１出土遺物（２）……23
第 20 図　溝―１出土遺物（３）……24
第 21 図　溝―１出土遺物（４）……25

第22図 溝―1出土遺物（5）……26
第23図 溝―2（1/80）・出土遺物（1）…27
第24図 溝―2出土遺物（2）……28
第25図 溝―3（1/40）・出土遺物……29
第26図 溝―4（1/30）・出土遺物……30
第27図 溝―5（1/30）・出土遺物……30
第28図 溝―6（1/30）・出土遺物……31
第29図 溝―8（1/40）……31
第30図 溝―9（1/60・1/30）・出土遺物…32
第31図 溝―7（1/30）……33
第32図 溝―10（1/30）……33
第33図 溝―11・12（1/30）……33
第34図 包含層出土遺物……34
第35図 弥生時代中期遺構配置図
（1/1,000）……35
第36図 土壙―7（1/100）・出土遺物……36
第37図 土壙―8～11（1/150）……36
第38図 土壙―8（1/30）……37
第39図 土壙―9（1/30）……37
第40図 土壙―10（1/30）……37
第41図 土壙―11（1/30）……38
第42図 土壙―12（1/30）……38
第43図 土壙―13（1/30）……38
第44図 土壙―14（1/30）……39
第45図 土壙―15（1/30）・出土遺物……39
第46図 溝―13（1/30）・出土遺物……40
第47図 溝―15（1/30）……40
第48図 溝―16（1/30）……40
第49図 下層水田全体図（1/400）……41
第50図 包含層出土遺物……42
第51図 横田調査区弥生時代後期全体図
（1/800）……43
第52図 溝―17（1/30）・出土遺物……44
第53図 溝―18（1/30）……44
第54図 溝―19・20（1/15）……45
第55図 溝―21～25（1/60）……45
第56図 溝―26（1/20）……46
第57図 溝―27～29（1/30）……46
第58図 溝―30（1/30）……46
第59図 溝―31（1/30）……47
第60図 溝―37～43（1/400）……48
第61図 横田調査区弥生時代後期水田
（1/800）……折り込み49
第62図 A～D水田（1/600）……50
第63図 水田（1/300）・出土遺物……51
第64図「島状高まり」遺構―15（1/125）・
出土遺物……52
第65図 包含層出土遺物（1）……53
第66図 包含層出土遺物（2）（1/2・1/3）…54
第67図 横田調査区古墳時代遺構配置図
（1/800）……折り込み2
第68図 竪穴式住居―2（1/40）……55
第69図 竪穴式住居―3・4（1/80）……56
第70図 竪穴式住居―3・4出土遺物……57
第71図 竪穴式住居―5（1/60）……58
第72図 竪穴式住居―5中央穴（1/30）・（竪
穴式住居―5出土遺物……59
第73図 竪穴式住居―6（1/60）……60
第74図 竪穴式住居―6出土遺物……61
第75図 竪穴式住居―7（1/60）……62
第76図 竪穴式住居―7出土遺物……63
第77図 竪穴式住居―8（1/60）……64
第78図 竪穴式住居―8出土遺物……65
第79図 竪穴式住居―9（1/60）・
出土遺物……66
第80図 建物配置図（1/120）……67
第81図 建物―1（1/80）……68
第82図 建物―2（1/80）……68
第83図 建物―3（1/80）……69
第84図 建物―4（1/80）……69
第85図 建物―5（1/80）……70
第86図 柱穴列―1（1/80）……70
第87図 建物―6（1/80）……71
第88図 建物―7（1/80）……71
第89図 建物―8（1/80）……72
第90図 建物―9（1/80）……72
第91図 井戸―1（1/30）・出土遺物……73
第92図 井戸―2（1/30）・出土遺物……73
第93図 井戸―3（1/30）……74
第94図 井戸―3出土遺物……75

第95図 井戸—3上面及び周辺出土遺物…76
第96図 井戸—4（1/30）・出土遺物（1）…77
第97図 井戸—4出土遺物（2）……78
第98図 井戸—4出土遺物（3）……79
第99図 井戸—5（1/30）・出土遺物……80
第100図 井戸—6（1/30）・出土遺物……81
第101図 井戸—7（1/40）・出土遺物（1）…82
第102図 井戸—7出土遺物（2）……83
第103図 井戸—8（1/30）……84
第104図 井戸—8出土遺物……85
第105図 井戸—9（1/30）・出土遺物……86
第106図 井戸—10（1/30）・出土遺物（1）…87
第107図 井戸—10出土遺物（2）……88
第108図 井戸—10出土遺物（3）……89
第109図 井戸—10出土遺物（4）……90
第110図 井戸—11（1/30）・出土遺物（1）…91
第111図 井戸—11出土遺物（2）……92
第112図 井戸—11出土遺物（3）……93
第113図 井戸—12（1/30）・出土遺物……93
第114図 井戸—13（1/30）・出土遺物……94
第115図 土壙—16（左）・17（右）（1/30）…95
第116図 土壙—18（1/60）・出土遺物……95
第117図 土壙—19（1/30）・出土遺物……96
第118図 土壙—20（1/30）……97
第119図 土壙—21（1/30）・出土遺物……97
第120図 土壙—22（1/30）……98
第121図 土壙—23（左）・24（右）（1/30）…98
第122図 土壙—23・24出土遺物……99
第123図 溝—45・46（1/30）…… 100
第124図 溝—47・48（1/30）…… 100
第125図 溝—49（1/30）…… 100
第126図 溝—50（1/30）…… 101
第127図 溝—51（1/30）・出土遺物…… 101
第128図 溝—52・53（1/30）…… 102
第129図 溝—54（1/30）…… 102
第130図 溝—55・56（1/30）…… 102
第131図 溝—57～62（1/100）・出土遺物 103
第132図 溝—63～66・63′・66′（1/100）（1/30）・出土遺物…… 104
第133図 土器溜り—1（1/40）…… 105
第134図 土器溜り—1出土遺物（1）… 106
第135図 土器溜り—1出土遺物（2）… 107
第136図 土器溜り—1出土遺物（3）… 108
第137図 土器溜り—1出土遺物（4）… 109
第138図 土器溜り—1出土遺物（5）… 110
第139図 土器溜り—2（1/40）・出土遺物（1）…… 111
第140図 土器溜り—2出土遺物（2）… 112
第141図 土器溜り—2出土遺物（3）… 113
第142図 包含層出土遺物（1）…… 114
第143図 包含層出土遺物（2）…… 115
第144図 横田調査区中～近世遺構全体図（1/1,000）…… 116
第145図 溝—69・柱穴群（1/100）…… 117
第146図 溝—67・68（1/30）…… 118
第147図 包含層出土遺物…… 118
第148図 高縄手A調査区・206・7L西壁土層断面（1/2,000・1/80）……119
第149図 干物樋門地区遺構図（1/300・1/175）…… 121
第150図 干物樋門地区土層断面（1/100）…… 122
第151図 高縄手A調査区縄文・弥生時代遺構図（1/500）……折り込み3
第152図 土壙—25（1/40）…… 123
第153図 斜面堆積—1土層（1/80）・出土遺物（1）（1/2）…… 124
第154図 斜面堆積—1出土遺物（2）… 125
第155図 斜面堆積—2出土遺物…… 126
第156図 斜面堆積—3（1/80）…… 127
第157図 斜面堆積—3出土遺物…… 128
第158図 竪穴式住居—10出土遺物…… 129
第159図 竪穴式住居—10（1/80）…… 130
第160図 土壙—29（1/30）・出土遺物（1）（1/3）…… 131
第161図 土壙—29出土遺物（2）…… 132
第162図 土壙—33（1/40）・出土遺物（1）（1/2）…… 133
第163図 土壙—33出土遺物（2）…… 134
第164図 土壙—35・36（1/40）…… 135

第165図 土壙—37（1/30）・出土遺物 … 136
第166図 土壙—38（1/30）…… 137
第167図 土壙—38出土遺物…… 138
第168図 土壙—39・40（1/30）・土壙—39
出土遺物…… 139
第169図 土壙—41（1/30）・出土遺物 … 140
第170図 土壙—42（1/30）・出土遺物 … 141
第171図 土壙—43（1/30）・出土遺物 … 142
第172図 土壙—46（1/30）・土壙—44～47
出土遺物…… 143
第173図 土壙—44・46・47出土遺物…… 144
第174図 土壙—48（1/30）・出土遺物 … 144
第175図 土壙—49（1/30）・出土遺物 … 145
第176図 土壙—50（1/30）…… 145
第177図 土壙—51（1/30）・出土遺物 … 146
第178図 土壙—52（1/30）…… 146
第179図 土壙—53（1/30）・出土遺物 … 146
第180図 土壙—54出土遺物…… 147
第181図 土壙—55（1/30）・出土遺物 … 147
第182図 土壙—56（1/30）・出土遺物 … 148
第183図 土壙—57（1/30）…… 149
第184図 土壙—58（1/30）・出土遺物
（1/2）…… 149
第185図 土壙—59（1/30）・出土遺物 … 150
第186図 土壙—60（1/30）・出土遺物 … 150
第187図 土壙—61・61′(1/30)・出土
遺物…… 151
第188図 土壙—62（1/30）・出土遺物 … 152
第189図 土壙—63（1/30）・出土遺物
（1/2）…… 152
第190図 土壙—68（1/30）…… 153
第191図 土壙—68出土遺物…… 154
第192図 土壙墓—1（1/30）…… 155
第193図 土壙墓—2（1/30）…… 155
第194図 溝—69（1/50・1/40）・出土遺物
（1）（1/2）…… 156
第195図 溝—69出土遺物（2）…… 157
第196図 溝—69出土遺物（3）…… 158
第197図 溝—70（1/60）・出土遺物（1）
（1/2）…… 159
第198図 溝—70出土遺物（2）…… 160
第199図 溝—70出土遺物（3）…… 161
第200図 溝—70出土遺物（4）…… 162
第201図 溝—70出土遺物（5）…… 163
第202図 溝—70出土遺物（6）…… 164
第203図 溝—71（1/30）…… 164
第204図 溝—72（1/40）・出土遺物 …… 165
第205図 溝—73（1/30）・出土遺物 …… 165
第206図 溝—74（1/30）…… 166
第207図 包含層出土遺物…… 166
第208図 高縄手A調査区弥生時代後期
水田遺構図（1/500）……折り込み4
第209図 水田土層柱状図（1/60）・水田層
出土遺物…… 167
第210図「島状高まり」遺構—17断面（1/80）
・溝—75出土遺物（1/3）…… 168
第211図「島状高まり」遺構—25断面（1/60）
・「島状高まり」遺構出土遺物（1）
…… 169
第212図「島状高まり」遺構出土遺物（2）
…… 170
第213図 溝—75・77・78・89・90(1/60)… 171
第214図 溝—98（1/100）…… 172
第215図 溝—98付近土層断面（1/30）… 172
第216図 溝—79・101(1/40)・出土遺物… 173
第217図 土器溜り—3（1/40）・
出土遺物（1）…… 174
第218図 土器溜り—3出土遺物（2）… 175
第219図 土器溜り—3出土遺物（3）… 176
第220図 土器溜り—4出土遺物（1）… 177
第221図 土器溜り—4出土遺物（2）… 178
第222図 包含層出土遺物(1/2) …… 179
第223図 竪穴式住居—11（1/60）・
出土遺物…… 180
第224図 高縄手A調査区古墳時代遺構図
（1/500）……折り込み5
第225図 竪穴式住居—12（1/60）…… 181
第226図 竪穴式住居—12出土遺物(1)… 182
第227図 竪穴式住居—12出土遺物(2)… 183
第228図 竪穴式住居—13（1/60）・出土遺物

（1）(1/2) …… 184
第229図 竪穴式住居—13出土遺物（2）… 185
第230図 竪穴式住居—14（1/60）・竪穴式住居—14・15 出土遺物 …… 186
第231図 竪穴式住居—15（1/60）…… 187
第232図 竪穴式住居—16（1/60）・出土遺物…… 188
第233図 竪穴式住居—17(上)・18(下)(1/60)・竪穴式住居—18出土遺物…… 189
第234図 竪穴式住居—17出土遺物…… 190
第235図 竪穴式住居—19（1/60）・出土遺物…… 191
第236図 竪穴式住居—20・21（1/60）・出土遺物（1）…… 192
第237図 竪穴式住居—21出土遺物（2）… 193
第238図 竪穴式住居—21出土遺物（3）… 194
第239図 竪穴式住居—22（1/60）・出土遺物…… 195
第240図 建物—10（1/100）…… 196
第241図 井戸—14（1/30）・出土遺物 … 197
第242図 井戸—15（1/30）・出土遺物 … 198
第243図 井戸—16（1/30）・出土遺物 … 199
第244図 井戸—17・19（1/30）・井戸—17出土遺物…… 200
第245図 井戸—18（1/30）・上層出土遺物（1）…… 201
第246図 井戸—18上層出土遺物（2）… 202
第247図 井戸—18下層出土遺物（1）… 203
第248図 井戸—18下層出土遺物（2）… 204
第249図 井戸—20(1/30)・出土遺物（1）205
第250図 井戸—20出土遺物（2）…… 206
第251図 井戸—21（1/30）・出土遺物 … 207
第252図 井戸—22（1/30）・出土遺物 … 208
第253図 井戸—23（1/30）…… 208
第254図 井戸—25（1/30）・出土遺物 … 209
第255図 井戸—26（1/30）・出土遺物 … 210
第256図 井戸—27(1/30)・出土遺物（1）211
第257図 井戸—27出土遺物（2）(1/4)… 212
第258図 井戸—28（1/30）・中・下層出土遺物（1）…… 213
第259図 井戸—28中・下層出土遺物（2）214
第260図 井戸—28中・下層出土遺物（3）215
第261図 井戸—28上層出土遺物…… 216
第262図 井戸—29（1/30）・出土遺物 … 217
第263図 井戸—30（1/30）・出土遺物 … 218
第264図 井戸—31（1/30）・出土遺物 … 219
第265図 井戸—32(1/30)・出土遺物（1）220
第266図 井戸—32出土遺物（2）…… 221
第267図 井戸—33出土遺物（1）(1/6)… 221
第268図 井戸—33(1/30)・出土遺物（2）(1/6)…… 222
第269図 井戸—33出土遺物（3）…… 223
第270図 井戸—34（1/30）・出土遺物 … 223
第271図 井戸—35（1/30）…… 224
第272図 井戸—36（1/30）・出土遺物 … 224
第273図 井戸—37（1/30）・出土遺物 … 225
第274図 井戸—38・39（1/30）・井戸—39出土遺物…… 226
第275図 土壙—69（1/30）・出土遺物 … 227
第276図 土壙—71（1/30）…… 228
第277図 土壙—72（1/30）・出土遺物 … 229
第278図 土壙—73・74・76（1/30）…… 229
第279図 土壙—75（1/30）…… 230
第280図 土壙—77（1/30）…… 230
第281図 溝—103～107（1/60・1/30）・溝106・107出土遺物…… 231
第282図 溝—108（1/30）・出土遺物…… 232
第283図 溝—110～112(1/30)・出土遺物 232
第284図 溝—113～118（1/300・1/60)… 233
第285図 溝—113・114・116・118出土遺物 234
第286図 溝—115出土遺物 …… 235
第287図 溝—117出土遺物 …… 236
第288図 溝—119（1/30）・出土遺物…… 237
第289図 溝—120（1/30）…… 237
第290図 溝—121（1/30）・出土遺物…… 237
第291図 溝—122（1/100）・出土遺物 … 238
第292図 溝—123（1/30）・出土遺物…… 238
第293図 土器溜り—5出土遺物（1）… 239
第294図 土器溜り—5出土遺物（2）… 240
第295図 土器溜り—5出土遺物（3）… 241

第296図 土器溜り—5出土遺物（4）… 242
第297図 土器溜り—5出土遺物（5）… 243
第298図 土器溜り—5出土遺物（6）… 244
第299図 土器溜り—5出土遺物（7）… 245
第300図 土器溜り—5出土遺物（8）… 246
第301図 土器溜り—5出土遺物（9）… 247
第302図 土器溜り—5出土遺物（10）… 248
第303図 土器溜り—6・7・8出土遺物… 249
第304図 土器溜り—9（1/40）…… 250
第305図 土器溜り—9出土遺物…… 251
第306図 土器溜り—12（1/30）・
土器溜り—11出土遺物…… 252
第307図 土器溜り—12出土遺物（1）… 253
第308図 土器溜り—12出土遺物（2）… 254
第309図 包含層出土遺物（1）…… 255
第310図 包含層出土遺物（2）…… 256
第311図 包含層出土遺物（3）…… 257
第312図 溝—125（1/30）…… 258
第313図 高縄手A調査区古代以後遺構図
(1/500) ……折り込み6
第314図 溝—128～131(1/60)・出土遺物 259
第315図 溝—132，土壙—79（1/40）・
出土遺物…… 260
第316図 包含層出土遺物…… 260
第317図 近代墓出土遺物…… 261
第318図 高縄手B調査区北壁柱状図
(1/50)…… 263
第319図 O・P北壁土層断面（1/80）…264
第320図 高縄手B調査区縄文時代・弥生時代
（上）・古墳時代～近代（下）
遺構配置図（1/1,000)…折り込み7
第321図 旧河道土層断面（1/80）…… 265
第322図 P・Q北壁土層断面（1/60）… 266
第323図 W・X北壁，トレンチ土層断面
(1/100) …… 267
第324図 縄文時代・弥生時代（前・中期）
遺構配置図（1/800)…… 268
第325図 斜面堆積—4出土遺物…… 269
第326図 微高地斜面堆積（1/300・
1/120)…… 270
第327図 土壙—80・81（1/60）…… 271
第328図 土壙—82・83（1/60）・
出土遺物…… 272
第329図 土器溜り—13・14（土壙状凹部）
(1/40)…… 274
第330図 土器溜り—13～14東西土層断面
(1/80)…… 275
第331図 土器溜り—14下層土壙状凹部
(1/40)…… 275
第332図 土器溜り—13出土遺物（1）… 276
第333図 土器溜り—13出土遺物（2）… 277
第334図 土器溜り—13出土遺物（3）… 278
第335図 土器溜り—13出土遺物（4）
(1/3) …… 279
第336図 土器溜り—13・14出土遺物 直上
層出土遺物（1/2)…… 279
第337図 土器溜り—13出土遺物（5）
(1/2) …… 279
第338図 土器溜り—13周辺出土遺物（1）
(1/2) …… 180
第339図 土器溜り—13周辺出土遺物（2）
(1/3) …… 281
第340図 土器溜り—14出土遺物（1）… 282
第341図 土器溜り—14出土遺物（2）… 283
第342図 土器溜り—14出土遺物（3）… 284
第343図 土器溜り—14出土遺物(4)
(1/2・1/3)…… 285
第344図 土器溜り—14下層土壙状凹部
出土遺物(1)…… 286
第345図 土器溜り—14下層土壙状凹部出土
遺物(2)…… 286
第346図 土器溜り—13上位出土遺物（1/2）
…… 287
第347図 210Q～210R包含層出土遺物
(縄文時代晩期)…… 288
第348図 210Q～210R包含層出土遺物
(弥生時代前期・中期) …… 289
第349図 210Q～210R古墳時代遺構混入遺物
(1/2・1/3)…… 290
第350図 落ち込み出土遺物…… 291

第351図 包含層出土遺物（1）（1/2）…… 292
第352図 包含層出土遺物（2）…… 293
第353図 溝—133（1/30）・出土遺物…… 294
第354図 溝—134（1/30）・出土遺物(1/2)294
第355図 溝—135（1）（1/60）…… 295
第356図 溝—135（2）（1/60）…… 295
第357図 溝—135出土遺物 …… 296
第358図 溝—136出土遺物(1/2)…… 296
第359図 溝—136（1/40）…… 296
第360図 弥生時代後期（左）・水田（右）
遺構配置図（1/1,200）…… 297
第361図 包含層出土遺物…… 298
第362図 溝—137（1/40）…… 299
第363図 溝—137出土遺物（1）…… 299
第364図 溝—137出土遺物（2）…… 300
第365図 溝—137出土遺物（3）(1/2)…… 301
第366図 溝—137出土遺物（4）(1/2)…… 302
第367図 溝—138（1/30）…… 302
第368図 溝—139（1/20）…… 303
第369図 溝—140（1/20）…… 303
第370図 溝—141（1/20）…… 303
第371図 溝—142（1/20）…… 303
第372図 溝—143（1/30）…… 304
第373図 溝—144（1/30）…… 304
第374図 U・V溝群（1/400）…… 305
第375図 溝—145～147（1/30）…… 306
第376図 溝—147出土遺物 …… 307
第377図 溝—148～150（1/30）…… 308
第378図 溝—153（1/30）…… 309
第379図 溝—154～156(1/150)・
出土遺物…… 309
第380図 溝—157（1/150）…… 310
第381図 M～P水田（1/400）…… 311
第382図 R～V水田（1/750）…… 312
第383図 水口（1/50・1/60）…… 313
第384図 U・V 帯状水田（1/600）・溝—151
・152（1/500）・出土遺物 …… 315
第385図 W～Y水田（1/400）…… 316
第386図 W～Y水田層出土遺物（上）・
包含層出土遺物（1）(下) …… 316
第387図 包含層出土遺物（2）(1/2) …… 317
第388図 包含層出土遺物（3）…… 318
第389図 古墳時代（左）・古代～近代（右）
遺構配置図（1/1,200）…… 319
第390図 竪穴式住居—23（左）・24（右）
(1/80)…… 320
第391図 竪穴式住居—24・出土遺物…… 321
第392図 竪穴式住居—25（1/80）…… 322
第393図 竪穴式住居—26（1/80）・
出土遺物…… 322
第394図 竪穴式住居—27（1/80）・
出土遺物…… 323
第395図 竪穴式住居—28（1/60）…… 324
第396図 井戸—40（1/30）…… 325
第397図 井戸—40出土遺物…… 326
第398図 井戸—41（1/30）…… 327
第399図 井戸—42（1/30）…… 327
第400図 井戸—42出土遺物…… 328
第401図 井戸—43（1/30）・出土遺物 … 329
第402図 井戸—44（1/30）…… 329
第403図 井戸—44出土遺物…… 330
第404図 井戸—45（1/30）…… 331
第405図 井戸—46(1/30)・出土遺物（1）332
第406図 井戸—46出土遺物（2）…… 333
第407図 井戸—47(1/30)・出土遺物（1）334
第408図 井戸—47出土遺物（2）…… 335
第409図 井戸—48（1/30）・出土遺物 … 336
第410図 井戸—49（1/30）・出土遺物 … 337
第411図 井戸—50（1/30）・出土遺物 … 338
第412図 井戸—51(1/30)・出土遺物（1）339
第413図 井戸—51出土遺物（2）…… 340
第414図 井戸—52（1/30）・出土遺物 … 341
第415図 土壙—84（1/30）…… 342
第416図 土壙—85（1/30）・出土遺物 … 342
第417図 土壙—86（1/50）・出土遺物 … 343
第418図 溝—158（1/30）…… 343
第419図 溝—158（1/40）…… 344
第420図 溝—158出土遺物（1）…… 345
第421図 溝—158出土遺物（2）…… 346
第422図 溝—158出土遺物（3）…… 347

第423図 溝—158出土遺物（4）…… 348
第424図 溝—158出土遺物（5）…… 349
第425図 溝—160（1/30）…… 349
第426図 溝—161（1/30）…… 350
第427図 溝—162（1/30）…… 350
第428図 溝—163（1/100）・（1/30）・
出土遺物…… 351
第429図 溝—164（1/30）・
出土遺物（1）…… 352
第430図 溝—164出土遺物（2）…… 353
第431図 溝—165（左）・溝—166（右）
（1/30）・溝—166出土遺物 …… 354
第432図 溝—167（1/20）…… 354
第433図 溝—168（1/60）…… 354
第434図 溝—169（1/30）…… 355
第435図 溝—170（1/30）…… 355
第436図 柱穴列—2（1/100）…… 355
第437図 古墳時代水田層出土遺物…… 356
第438図 包含層出土遺物…… 356
第439図 建物—11（1/30）…… 357
第440図 南北溝と野つぼ状土壙（1/200）
・溝A出土遺物(1/2) …… 358
第441図 柵列状遺構・出土遺物…… 359
第442図 包含層出土遺物…… 360
第443図 竪石調査区遺構配置図（1/300）362
第444図 土層断面位置図（1/1,000）…… 362
第445図 西壁（A—B）土層断面（1）
（1/60）…… 363
第446図 西壁（C—D）土層断面（2）
（1/60）…… 363
第447図 西壁（E—F）土層断面（3）
（1/60）…… 364
第448図 東壁（G—H）土層断面
（1/60）…… 364
第449図 西壁（I—J）土層断面（4）
（1/60）…… 365
第450図 土器溜り—15出土遺物…… 367
第451図 包含層出土遺物（1）…… 368
第452図 溝—172（1/30）・出土遺物…… 368
第453図 包含層出土遺物（2）…… 369
第454図 柱穴—1出土遺物…… 370
第455図 井戸—53（1/30）・出土遺物 … 370
第456図 土壙—87（1/30）・出土遺物 … 371
第457図 土壙—88（1/30）・出土遺物 … 371
第458図 溝—173（1/30）…… 371
第459図 溝—173出土遺物 …… 372
第460図 484′水田及び下層溝出土遺物… 373
第461図 水田1/200・（1/60）…… 374
第462図 包含層出土遺物（3）（1/2）… 375
第463図 開山下調査区土層断面
（1/100）……376・377
第464図 弥生時代遺構（1/500）…… 378
第465図 微高地端と溝—176(1/100)…… 378
第466図 溝—175(1/60)・出土遺物 …… 379
第467図 溝—177(1/60) …… 380
第468図 溝—178(1/60) …… 380
第469図 不整形土壙群（1/60）…… 381
第470図 不整形土壙群出土遺物…… 381
第471図 水田層出土遺物…… 382
第472図 弥生時代後期水田（1/500）…… 382
第473図 弥生時代後期水田細部
（微高地付近）（1/150）…… 383
第474図 弥生時代後期水田細部（調査区
南端・溝—179)(1/150)……383
第475図 中世遺構（1/500）…… 384
第476図 土壙—89（1/60）…… 384
第477図 包含層出土遺物…… 385
第478図 四元調査区位置図
（1/2,000）…… 386
第479図 四元調査区遺構図（1/200）…… 387
第480図 四元調査区1～4区土層断面
（1/100）…… 388
第481図 四元調査区4～6区土層断面
（1/100）…… 389
第482図 四元調査区全体図(1/1,000) … 390
第483図 縄文時代晩期土器…… 390
第484図 土器溜り—16出土遺物…… 391
第485図 土器溜り—16(1/60)・
出土遺物…… 392
第486図 7区他出土石器（1/2）…… 393

第487図 弥生時代中期土器…… 394
第488図 溝—187出土遺物 …… 395
第489図 弥生時代後期土器…… 395
第490図 溝—190・193（1/60）…… 395
第491図 溝出土土錘（1/2）…… 397
第492図 土器溜り—17(1/30)・出土遺物…… 398
第493図 長谷遺跡調査位置図（1/1,500）…… 401
第494図 長谷遺跡遺構配置図（1/200）… 402
第495図 東壁土層断面（1/100）…… 403
第496図 溝—198（1/30）…… 404
第497図 溝—198出土遺物 …… 405
第498図 溝—199・201・202・205(1/30) … 406
第499図 包含層出土遺物…… 408
第500図 石鏃の形態分類…… 413
第501図 製作手法模式図…… 424
第502図 土器断面重複図…… 426
第503図 百・後・Ⅱ古相器種分類図（1/8）…折り込み7
第504図 百間川原尾島遺跡丸田調査区・百間川兼基遺跡大上田調査区主要花粉・胞子化石ダイアグラム… 437
第505図 花粉分析サンプル採取位置…… 440
第506図 百間川原尾島遺跡川内調査区主要花粉・胞子化石ダイアグラム… 441
第507図 花粉分析サンプル採取位置…… 443
第508図 花粉分析サンプル採取位置…… 443
第509図 百間川沢田遺跡高縄手A・B調査区主要花粉・胞子化石ダイアグラム…… 449
第510図 溝—113出土馬歯実測図(1/3)… 454

表　目　次

表—1 編年対比表……10
表—2 弥生後期水田一覧表…… 457
表—3 横田調査区竪穴式住居一覧表… 460
表—4 横田調査区建物一覧表…… 460
表—5 横田調査区井戸一覧表…… 461
表—6 横田調査区土壙一覧表…… 461
表—7 横田調査区溝一覧表……462
表—8 横田調査区柱穴列一覧表…… 463
表—9 横田調査区玉類一覧表…… 463
表—10 横田調査区土製品一覧表…… 464
表—11 横田調査区石器・石製品一覧表 464
表—12 横田調査区金属器一覧表…… 465
表—13 横田調査区土器観察表…… 466
表—14 高縄手A調査区竪穴式住居一覧表…… 478
表—15 高縄手A調査区建物一覧表…… 478
表—16 高縄手A調査区井戸一覧表…… 478
表—17 高縄手A調査区土壙・土壙墓一覧表…… 479
表—18 高縄手A調査区溝一覧表…… 480
表—19 高縄手A調査区土製品一覧表… 482
表—20 高縄手A調査区玉類一覧表…… 482
表—21 高縄手A調査区金属器一覧表… 483
表—22 高縄手A調査区石器・石製品一覧表…… 483
表—23 高縄手A調査区木器・木製品一覧表…… 485
表—24 高縄手A調査区土器観察表…… 486
表—25 高縄手B調査区竪穴式住居一覧表…… 508
表—26 高縄手B調査区建物一覧表…… 508
表—26′ 高縄手B調査区柱穴列一覧表… 508
表—27 高縄手B調査区井戸一覧表…… 508
表—28 高縄手B調査区土壙一覧表…… 509
表—29 高縄手B調査区柵列状遺構一覧表…… 509
表—30 高縄手B調査区溝一覧表…… 509
表—31 高縄手B調査区土製品一覧表… 510
表—32 高縄手B調査区玉類一覧表…… 510
表—33 高縄手B調査区石器・石製品一覧表…… 510
表—34 高縄手B調査区金属器一覧表… 520
表—35 高縄手B調査区木器・木製品一覧表…… 521

表—36　高縄手Ｂ調査区土器観察表…… 522
表—37　竪石調査区井戸一覧表…… 533
表—38　竪石調査区土壙一覧表…… 533
表—39　竪石調査区溝一覧表…… 533
表—40　竪石調査区土製品一覧表…… 533
表—41　竪石調査区石器・石製品一覧表 533
表—42　竪石調査区土器観察表…… 533
表—43　開山下調査区土壙一覧表…… 537
表—44　開山下調査区溝一覧表…… 537
表—45　開山下調査区土製品一覧表…… 537
表—46　開山下調査区石器・石製品
　　一覧表…… 537
表—47　開山下調査区土器観察表…… 537
表—48　四元調査区土壙一覧表…… 539
表—49　四元調査区溝一覧表…… 539
表—50　四元調査区土製品一覧表…… 539
表—51　四元調査区石器・石製品
　　一覧表…… 539
表—52　四元調査区土器観察表…… 540
表—53　長谷遺跡溝一覧表…… 541
表—54　長谷遺跡土製品一覧表…… 541
表—55　長谷遺跡石器・石製品一覧表… 541
表—56　長谷遺跡土器観察表…… 541
表—57　石鏃の長幅比…… 413
表—58　石鏃の重さ…… 413
表—59　石鏃の長幅比…… 416
表—60　石鏃の重さ…… 416
表—61　出土石器一覧表…… 421
表—62　試料表…… 432
表—63　試料表…… 438
表—64　試料表…… 445
表—65　試料表…… 447
表—66　試料表…… 451
表—67　下顎臼歯の比較表…… 456

図　版　目　次

巻頭図版—1　百間川遺跡群周辺航空写真
巻頭図版—2　高縄手Ｂ調査区帯状水田
　　（航空写真）
図版1　1.発掘前遠景（南東から）
　　2.発掘前遠景（西から）
図版2　1.発掘前遠景（北から）
　　2.横田調査区南側全景（西から）
図版3　1.弥生時代遺構（北から）
　　2.弥生時代遺構（北西から）
図版4　1.弥生時代遺構（東から）
　　2.溝—6・9・10（北東から）
図版5　1.竪穴式住居—1（東から）
　　2.竪穴式住居—1（東から）
図版6　1.竪穴式住居—1遺物出土状況
　　2.竪穴式住居—1炭・焼土検出状況
図版7　1.土壙—4（北西から）
　　2.土壙—6（南から）
図版8　1.溝—1（西から）
　　2.溝—1遺物出土状況（西から）
図版9　1.溝—3（西から）
　　2.溝—3断面（西から）
図版10　1.溝—5（東から）
　　2.溝—5断面（南から）
図版11　1.溝—9（南西から）
　　2.溝—9（北から）
　　3.溝—9断面（西から）
図版12　1.土壙—7（東から）
　　2.土壙—15（南西から）
図版13　1.土壙—8（南西から）
　　2.土壙—10（西から）
図版14　1.下層水田（北から）
　　2.下層水田（東から）
図版15　1.溝—17・18（南東から）
　　2.溝—21～25（北東から）
図版16　1.溝—38・40・41・42（東から）
　　2.溝—39～41（西から）
図版17　1.「島状高まり」遺構—15東西土層
　　（南から）
　　2.「島状高まり」遺構—15南北土層
　　（西から）
　　3.「島状高まり」遺構—15盛土除去
　　後溝—37・38全景（北から）

図版18　1.弥生時代後期水田（南西から）
2.弥生時代後期水田（北東から）
図版19　1.弥生時代後期水田（北東から）
2.弥生時代後期水田（西から）
図版20　1.弥生時代後期水田（北から）
2.弥生時代後期水田（北東から）
図版21　1.水田・「島状高まり」遺構―15全景（北西から）
2.微高地～水田間土層（東から）
図版22　1.竪穴式住居―2・3（南西から）
2.竪穴式住居―4（南から）
図版23　1.竪穴式住居―5（北から）
2.竪穴式住居―5中央穴（東から）
図版24　竪穴式住居―5柱穴
図版25　1.竪穴式住居―6（東から）
2・3.同土層断面（東から）（北から）
4.同検出状況（東から）
図版26　1.竪穴式住居―7（南から）
2.同最終床面（南から）
3.同遺物出土状況（南から）
図版27　1.竪穴式住居―8検出状況（南西から）
2.竪穴式住居―8完掘（南西から）
図版28　1.竪穴式住居―9（南西から）
2.同上と竪穴式住居―8付近（南西から）
3.竪穴式住居―9土層断面（南から）
図版29　1.古墳時代遺構群（北から）
2.建物―5（東から）
図版30　1.建物―2・3（東から）
2.建物―8（南から）
3.建物―4（北から）
図版31　1.井戸―2（南から）
2.井戸―2遺物近影
図版32　1.井戸―3（東から）
2.井戸―4（北東から）
図版33　1.井戸―4遺物出土状況（北東から）
2.井戸―5（東から）
図版34　1.井戸―6（西から）
2.井戸―7（東から）
図版35　1.井戸―8上層遺物出土状況（北東から）
2.井戸―8下層遺物出土状況（南西から）
図版36　1.井戸―9（南から）
2.井戸―9（南から）
図版37　1.井戸―10断面（南々東から）
2.井戸―10上層遺物出土状況
図版38　1.井戸―10河原石検出状況（東南東から）
2.井戸―10河原石除去後（南々東から）
図版39　1.井戸―10下層遺物出土状況（南々東から）
2.井戸―10完掘（南々東から）
図版40　1.井戸―11（東から）
2.井戸―11（東から）
図版41　1.井戸―12（西から）
2.井戸―12（西から）
図版42　1.井戸―13（西から）
2.井戸―13（南から）
図版43　1.土壙―19（北から）
2.土壙―23（右）・24（左）（南東から）
図版44　1.溝―64・66（北西から）
2.溝―63・63′・66′（北西から）
3.溝―50・51（東から）
図版45　1.溝―52～54（北東から）
2.溝―55・56（北東から）
図版46　1.土器溜り―1（北から）
2.土器溜り―1
図版47　1.土器溜り―2（北々西から）
2.土器溜り―2
図版48　1.溝―69・69′・中世柱穴群(西から)
2.溝―69・中世柱穴群（南から）
図版49　竪穴式住居・土壙出土遺物
図版50　溝出土遺物
図版51　土壙溝出土遺物

図版52　土壙・包含層出土遺物
図版53　竪穴式住居出土遺物
図版54　井戸出土遺物
図版55　井戸出土遺物
図版56　井戸出土遺物
図版57　井戸出土遺物
図版58　井戸出土遺物
図版59　土器溜り出土遺物
図版60　土器溜り出土遺物
図版61　1.高縄手A調査区207G弥生時代遺構（東から）
2.高縄手A調査区208G弥生時代遺構（東から）
図版62　1.207H弥生時代遺構（東から）
2.208H弥生時代遺構（西から）
図版63　1.207・8L弥生時代遺構（南から）
2.209・10K弥生時代遺構（西から）
図版64　1.土壙—27（東から）
2.209M旧河道下がり（北々西から）
図版65　1.208J弥生時代前期遺構（東から）
2.竪穴式住居—10（西から）
図版66　1.土壙—29（南から）
2.土壙—33（東から）
図版67　1.土壙—35（西から）
2.土壙—37（西から）
図版68　1.土壙—38（南から）
2.土壙—38土器出土状況
図版69　1.土壙—39（北から）
2.土壙—39土器出土状況
図版70　1.土壙—48（東から）
2.土壙—42（南から）
図版71　1.土壙—53（東から）
2.土壙—55・56（東から）
図版72　1.土壙—55（北西から）
2.土壙—56（南東から）
図版73　1.土壙—61・61′（北西から）
2.土壙—62（北から）
図版74　1.土壙—68（南東から）
2.土壙墓—2（北東から）
図版75　1.溝—69（北から）
2・3.溝—69土器出土状況
4.溝—69北壁土層断面（南から）
図版76　1.溝—70（北から）
2.溝—70断面（北から）
図版77　1.209M弥生時代後期水田（北から）
2.206・7F弥生時代後期水田（北から）
図版78　1.209J～L弥生時代後期水田（西から）
2.210L弥生時代後期水田（北から）
図版79　1.208J～L弥生時代後期水田（西から）
2.208・9J・K弥生時代後期水田（東から）
図版80　1.207G・H弥生時代後期水田（東から）
2.206・7L弥生時代後期水田（南から）
図版81　1.208・9I「島状高まり」遺構（北から）
2.「島状高まり」遺構—24断面（北から）
図版82　1.溝—75～78・90（東から）
2.208・9K・L遺構掘りあげ状況（北西から）
図版83　1.溝—80（北から）
2.溝—98（北から）
図版84　1.土器溜り—3（西から）
2.土器溜り—3（北から）
図版85　1.土器溜り—3土器出土状況
2.土器溜り—4（北東から）
図版86　1.209J・K古墳時代遺構（南東から）
2.209M古墳時代遺構（北から）
図版87　1.竪穴式住居—11（南から）
2.竪穴式住居—12（東から）
3.竪穴式住居—12土器出土状況
図版88　1.竪穴式住居—13（北東から）
2.竪穴式住居—13土壙
3.竪穴式住居—13柱穴礎板

図版89　1.竪穴式住居—14（南東から）
2.竪穴式住居—15（南西から）
図版90　1.竪穴式住居—16（南西から）
2.竪穴式住居—16中央部炭層
3.竪穴式住居—20鉄鏃出土状況
図版91　1.竪穴式住居—17（左）・18（右）（西から）
2.竪穴式住居—18床面検出状況
図版92　1.竪穴式住居—21
2.竪穴式住居—21銅鏡出土状況
図版93　1.竪穴式住居—21炉検出状況
2.竪穴式住居—21土器出土状況
3.竪穴式住居—21（北東から）
図版94　1.208・9Ｌ古墳時代竪穴式住居（北東から）
2.竪穴式住居—22土器出土状況
図版95　1.井戸—14（南から）
2.井戸—14土器出土状況
3.井戸—15（東から）
図版96　1.井戸—16（南から）
2.井戸—16土器出土状況
図版97　1.井戸—18（南西から）
2.井戸—18遺物出土状況
図版98　1.井戸—20（北から）
2.井戸—19（南から）
3.井戸—22（東から）
図版99　1.井戸—25（南から）
2.井戸—26（南から）
図版100　1.井戸—27（北から）
2.井戸—27土器出土状況
3.井戸—27木製品出土状況
図版101　1.井戸—28上層土器出土状況
2.井戸—28中層土器出土状況
図版102　1.井戸—28下層土器出土状況
2.井戸—28最下層土器出土状況
3.井戸—28（東から）
図版103　1.井戸—30上層遺物出土状況
2.井戸—30土器出土状況
3.井戸—30（北から）
図版104　1.井戸—31（西から）
2.井戸—33（東から）
図版105　1.井戸—32（南から）
2.井戸—32土器出土状況
図版106　1.井戸—34（東から）
2.井戸—35（南から）
3.井戸—36（南西から）
図版107　1.井戸—37・38・39（北東から）
2.井戸—39（東から）
図版108　1.溝—113（北西から）
2.溝—113馬歯出土状況
図版109　1.溝—114～118検出状況（東から）
2.溝—115土器出土状況
図版110　1.溝—117土器出土状況
2.溝—122（北から）
図版111　1.土器溜り—5（南東から）
2.土器溜り—5土器出土状況
図版112　1.土器溜り—8（南から）
2.土器溜り—8（西から）
図版113　1.土器溜り—9（東から）
2.土器溜り—12（北から）
図版114　1.土器溜り—12（東から）
2.土器溜り—12土器出土状況
図版115　1.溝—128～131（北から）
2.畝状遺構（北から）
図版116　1.斜面堆積—1出土遺物
2.斜面堆積—1出土遺物
図版117　弥生時代前期土壙出土遺物（1）
図版118　弥生時代前期土壙出土遺物（2）
図版119　弥生時代前期土壙出土遺物（3）
図版120　溝—69・70出土遺物
図版121　溝—70出土遺物
図版122　土器溜り—3出土遺物
図版123　土器溜り—3・4出土遺物
図版124　弥生時代後期水田・「島状高まり」遺構・包含層出土遺物
図版125　古墳時代竪穴式住居出土遺物
図版126　竪穴式住居—21出土遺物
図版127　井戸—14・15・20出土遺物
図版128　井戸—18出土遺物
図版129　井戸—26・27出土遺物

図版130 井戸—28・32・39出土遺物
図版131 井戸—33出土遺物
図版132 土器溜り—5・9出土遺物
図版133 1.高縄手B調査区落ち込み（南から）
2.高縄手B調査区落ち込み（南東から）
図版134 1.土壙—80検出状況（北東から）
2.土壙—83検出状況（北から）
図版135 1.土器溜り—13・14検出状況（南から）
2.土器溜り—13土器出土状況（北から）
図版136 1.土器溜り—13土器出土状況と土層断面（南西から）
2.土器溜り—13土器出土状況（南から）
3.土器溜り—13東部分土器出土状況（南から）
図版137 1.土器溜り—14検出状況（北から）
2.土器溜り—14土器出土状況（北から）
図版138 1.溝—137・138・158・159（東から）
2.O・P溝群（南から）
図版139 1.溝—133（北から）
2.溝—134・137・158（北から）
図版140 1.溝—135土層断面（北西から）
2.溝—135（西から）
図版141 1.S～T全景（西から）
2.S～T全景（東から）
図版142 1.溝—135・136（西から）
2.溝—135（西から）
図版143 1.溝—136（北東から）
2.溝—136土層断面（北東から）
図版144 1.V～W溝群（西から）
2.W～Y溝群（東から）
図版145 1.溝—143（南から）
2.溝—153（南東から）
図版146 1.W～Y溝群（南東から）
2.W～Y溝群（北西から）
図版147 1.溝—148～150（南東から）
2.溝—145（南東から）
3.溝—145～147（南東から）
図版148 1.溝—148・149（南東から）
2.溝—148（南東から）
3.溝—152（南東から）
図版149 1.溝—154～156（北から）
2.溝—157（西から）
図版150 1.N～P水田（西から）
2.O～P水田（西から）
図版151 1.水田取水口（南東から）
2.水田取水口（南から）
図版152 1.R・S水田（東から）
2.R・S水田（西から）
図版153 1.U・V水田（西から）
2.U・V水田（東から）
図版154 1.帯状水田（南東から）
2.帯状水田大畦（北から）
3.帯状水田大畦（南西から）
図版155 1.帯状水田・第2水田（南東から）
2.帯状水田・溝—152（東から）
図版156 1.V・W水田（北から）
2.W～Y水田（北西から）
図版157 1.竪穴式住居—23(右)・24(左)（東から）
2.竪穴式住居—24柱根検出状況（西から）
図版158 1.竪穴式住居—25・26・27，溝—164（南東から）
2.竪穴式住居—25（南東から）
図版159 1.竪穴式住居—26灰層検出状況（南から）
2.竪穴式住居—26（南から）
図版160 1.竪穴式住居—27（北東から）
2.竪穴式住居—28（南東から）
図版161 1.井戸—40（南から）
2.井戸—42（南から）
図版162 1.井戸—43（南から）
2.井戸—44（西から）
図版163 1.井戸—45（北から）

2.井戸—46（南西から）
図版164 1.井戸—47（北西から）
2.井戸—47木器出土状況（南から）
図版165 1.井戸—48（南から）
2.井戸—49遺物出土状況（南東から）
図版166 1.井戸—50（南から）
2.井戸—50遺物出土状況（南から）
図版167 1.井戸—51遺物出土状況（南から）
2.井戸—51完掘（北から）
図版168 1.井戸—52（南から）
2.土壙—85（南から）
図版169 1.溝—163（東から）
2.溝—161・162（北西から）
図版170 1.溝—164（東から）
2.溝—164遺物出土状況（北西から）
図版171 1.溝—164土層断面（南東から）
2.溝—164土層断面（南東から）
図版172 1.溝—166（東から）
2.溝—165および古墳時代水田（東から）
図版173 1.溝—169・170（北西から）
2.溝—168（北東から）
図版174 1.柵列状遺構（南東から）
2.柵列状遺構—2（東から）
図版175 1.建物—11（北から）
2.南北溝（西から）
3.U・V溝状遺構（南から）
図版176 斜面堆積及び落ち込み出土遺物
図版177 土器溜り—13出土遺物（1）
図版178 土器溜り—13出土遺物（2）
図版179 土器溜り—13・14出土遺物（1）（ヘラ描き施文土器）
図版180 土器溜り—13・14出土遺物（2）
図版181 土器溜り—14出土遺物（1）
図版182 土器溜り—14出土遺物（2）
図版183 土器溜り—14出土遺物（3）・土器溜り—13出土頭骨（ニホンジカ）
図版184 土器溜り—14出土遺物（4）・土器溜り—14南辺出土焼土塊
図版185 土壙—83・土器溜り—13・14・包含層出土石器
図版186 溝—135出土遺物
図版187 弥生時代後期出土遺物
図版188 1.溝—164出土遺物
2.出土鉄器・玉・管玉
図版189 井戸—40・42・44 出土遺物
図版190 井戸—44・47・51出土遺物
図版191 井戸—46・47出土木製品
図版192 竪石調査区全景（南から）
図版193 1.大畔（東から）
2.弥生時代後期水田（南から）
図版194 1.縄文時代遺物出土状況（東から）
2.井戸—53検出状況（南から）
図版195 竪石調査区出土遺物
図版196 1.開山下調査区不整形土壙群検出状況（西から）
2.不整形土壙検出状況（西から）
3.不整形土壙群完掘後全景（北から）
図版197 1.微高地端と溝—176・177・178（北から）
2.微高地端土層断面（西から）
図版198 1.溝—178（西から）
2.溝—176・177（西から）
図版199 1.溝—175（西から）
2.水田端と溝—177土層断面（西から）
図版200 1.3区水田全景（北から）
2.1・2区水田全景（北から）
図版201 1.4区水田全景（北から）
2.5区水田全景（南西から）
図版202 1.3区水田細部・微高地付近（東から）
2.5区水田細部・南端溝—179（東から）
図版203 1.土壙—90（北から）
2.土壙—89（東から）
図版204 1.四元調査区1区・2区溝検出状況

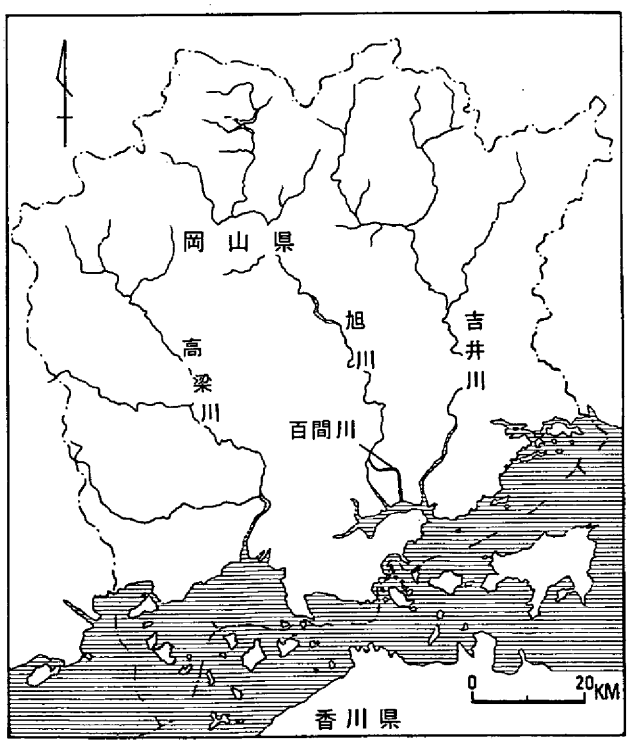
（西から）
2.四元調査区３区・４区溝検出状況（西から）
図版205 1.５区・６区古墳時代遺構面（東から）
2.５区・６区溝検出状況（東から）
図版206 1.７区溝検出状況（西から）
2.７区弥生前期土器溜り—15（東から）
図版207 1.４区溝—187土器出土状況（南から）
2.５区古墳初期土器溜り—16（東から）
図版208 1.５区溝—185・186土層断面（南から）
2.４区土壙—91（北から）
図版209 四元調査区出土遺物（１）
図版210 四元調査区出土遺物（２）
図版211 四元調査区出土遺物（３）
図版212 1.長谷遺跡溝群全景（北から）
2.長谷遺跡東壁断面（南西から）
図版213 1.溝—202検出状況（北西から）
2.溝—201遺物出土状況（北から）
3.東壁際トレンチ内遺物出土状況（北から）
図版214 長谷遺跡出土遺物
図版215 高杯形土器形成手法
図版216 溝—113出土馬歯

第１章　地理的・歴史的環境

百間川は江戸時代（寛文年間）に，津田永忠によって岡山城下を旭川の洪水から守るため築造された一大人工河川である。岡山市竹田から分かれた旭川放水路（百間川）は，旭川左岸を南東に流走して原尾島付近で東に向きを変え，操山山塊の北側を東進し，米田で再び南に流路を変え，沖元で児島湾に注ぐ。その幅200～300ｍ，流程約13kmにおよぶものである。

百間川が位置する旭川の左岸平野（旭東平野）は，北に竜の口山系，東に山王山，南に操山山塊をひかえた肥沃な水田が展開する一大穀倉地であるが，近年市街化の波に押され，その景観は急激に変貌しつつある。

岡山平野は今から約7,000年前，縄文時代前期の海進をピークとして，それ以降の海退および旭川の堆積物によって形成された沖積平野である。この旭川も現在は一流路にまとめられているが，古くは数条に分かれており，また幾筋もの分流が平野一帯に流走していたらしく，それら旧河道の両岸にはいくつもの自然堤防が形成されている。

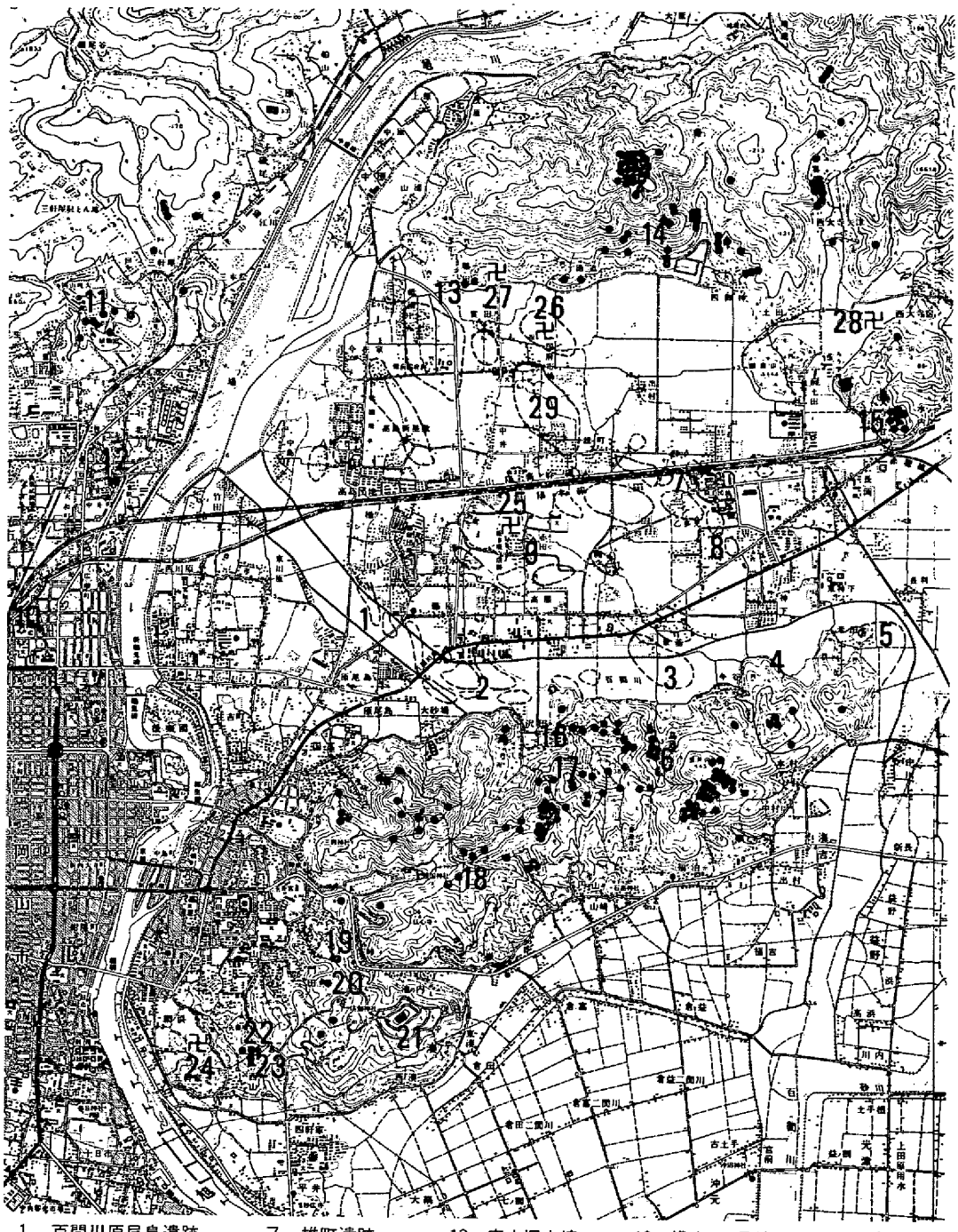


第１図　百間川位置図

岡山付近で確認されている遺物のうち，最も古いものとしては，後期旧石器時代のものである操山旗振台北部遺跡（註１）出土のナイフ形石器がある。

縄文時代の遺跡は，丘陵に散布する後期の朝寝鼻貝塚（註２）と他に数か所石器散布地が存在しているが，新たに百間川改修工事に伴い，百間川沢田遺跡（註３）から縄文時代中期の土器片２片，および同後期の土器片10片を採集した。この中期の土器片は磨滅が激しく，上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性も考えられるが，後

百間川沢田遺跡２・百間川長谷遺跡２



１．百間川原尾島遺跡
２．百間川沢田遺跡
３．百間川兼基･今谷遺跡
４．百間川長谷遺跡
５．百間川当麻遺跡
６．兼基遺跡
７．雄町遺跡
８．乙多見遺跡
９．赤田遺跡
10．南方遺跡
11．一本松古墳
12．神宮寺山古墳
13．唐人塚古墳
14．備前車塚古墳
15．山王山古墳
16．沢田大塚古墳
17．金蔵山古墳
18．旗振台古墳
19．操山103号墳
20．操山106号墳
21．湊茶臼山古墳
22．網浜茶臼山古墳
23．操山109号墳
24．網浜廃寺
25．幡多廃寺
26．成光廃寺
27．賀田廃寺
28．井寺廃寺
29．備前国府

第２図　百間川周辺遺跡分布図（1/50,000）

期の土器片においては残りもよく，また昭和34年の国道2号線百間川橋建設の際にも出土していることなどから，岡山平野においてはこの時期から沖積地における集落の開始が考えられる。

縄文時代晩期の遺跡は，いずれも弥生時代につながる複合遺跡である。調査で明らかにされた例としては，津島遺跡（註4），百間川原尾島遺跡，同沢田遺跡，同当麻遺跡，雄町遺跡（註5）などがある。百間川原尾島遺跡においては，遺構の性格を明らかにできなかったものの，縄文時代晩期の柱穴状土壙を検出している。津島遺跡は縄文時代晩期～弥生時代にかけての遺物および弥生時代の水田遺構，竪穴式住居，高床倉庫，貯蔵穴などの遺構が検出されている。雄町遺跡は縄文時代晩期～平安時代にかけての遺物および，旧河道・溝・竪穴式住居・土壙墓などの遺構が検出されており，特に，弥生時代中期の水利施設が明らかにされるとともに居住区と墓域が明確に区分されていることが判明した。

弥生時代中期の遺跡は，前述の遺跡の他に南方遺跡（註6），赤田遺跡（註7），乙多見遺跡（註8）などがある。南方遺跡からは人骨および土壙墓，灰穴などが検出されており，赤田遺跡からは，高杯形土器で蓋をした甕棺墓が出土している。百間川今谷遺跡は弥生時代中期を中心として，古墳時代におよぶ複合遺跡であるが，特に弥生時代中期の土器片とともにガラス滓が多量に出土しており，また1間×2間～5間までの建物を20数棟検出している。なお当遺跡の南側に位置する操山の谷部からは3個の銅鐸が出土している（註9）。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡は，急激にその遺跡数をふやし，当平野に形成された微高地の大半には集落が営まれた可能性が強い。一方，百間川原尾島遺跡，同沢田遺跡，同兼基遺跡では，弥生時代後期終末の洪水によって埋没した水田が明らかになった。これによると，微高地縁辺部および旧河道上に水田が形成されており，前者は10㎡～40㎡前後の小規模な区画であるのに対し，後者は200㎡前後とその規模も大きい。また，百間川原尾島遺跡から弥生時代中期中葉に比定される水田も明らかにされた。

古墳時代の遺跡は，百間川原尾島遺跡，同沢田遺跡，同兼基遺跡，同今谷遺跡，同当麻遺跡，雄町遺跡などでは竪穴式住居，井戸などの遺構が明らかになっている。一方，古墳についていえば，平野の北にある竜の口山系には13面の舶載鏡を出土した備前車塚古墳（註10）が，南にあたる操山山系には網浜茶臼山古墳，湊茶臼山古墳，金蔵山古墳（註11），東にあたる山王山には，山王山古墳群がある。これらの丘陵上には，これ以降後期古墳も含め200基をはるかに越える古墳が確認されている。

旭川の左岸に広がる平野には，ほぼ全体に条里制の遺構が見られる。この旭東平野に見られる条里遺構は，正確に南北方向（註12）を示している。この平野の北西部には，備前国府跡が推定されている。備前国府は，倭名抄（註13）によれば，備前国御野郡に所在すると記されて

いる。その推定地については，大きく二説ある。一説は，国長宮を中心とする説（註14）と他の説は現在の国府市場を中心とする説である（註15）。現状では，いずれとも決し難い。推定国府跡を挟んでその側には，賞田廃寺（註16）があり，南側には，幡多廃寺（註17）がある。また，国府市場の東には，成光廃寺も所在する。この国府跡の北西部（岡山市祇園）より，南東部（岡山市長利）にかけて，条里制に規制されない状態で，河道の痕跡が見られる。この河道は，平野を斜めに横切っていたものが，長利付近からほぼ南へ流れを変えて海へ注ぐものである。この流路の変換点に百間川当麻遺跡が所在し，古代倉庫群及び中世の建物群を検出している（註18）。

註

註１　鎌木義昌「第１編　原始時代」『岡山市史』古代編　岡山市役所　1962

註２　註１に同じ。

註３　岡山県教育委員会の昭和53年度の調査において出土している。

註４　『岡山県津島遺跡調査概報』岡山県教育委員会　1970

註５　「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972

註６　『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会　1971

註７　『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1976

註８　正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告』３　1973

註９　鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961

註10　註１に同じ。

註11　西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館　1959

註12　高重　進「農村・耕地の歴史地理」『岡山県の地理』福武書店　1978

註13　正宗敦夫校訂『倭名類聚鈔』風間書房　1970

註14　石田　寛「第４編　第３章　旭川左岸平地の条理」『岡山市史』古代編　岡山市役所　1962　巌津政右衛門「第５編　第１章　備前国府」『岡山市史』古代編　岡山市役所　1962

註15　木下　良「国府と条里との関係について」『史林』50巻５号　1967・９　高橋　護「古地形からみた備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告』１　岡山県教育委員会　1971

註16　『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1971

註17　註７に同じ。

註18　本章は，『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39の「第１章　地理的・歴史的環境」をもとに，その後各報告書で一部加筆したものを再掲載したものである。

第２章　調査の契機および経過

建設省は旭川の放水路（百間川）の改修計画をたて，昭和49年には，耕作者・地権者との交渉の結着を見た。百間川河床には，「百間川遺跡」所在が周知されていて，岡山県教育委員会文化課では，遺跡範囲の確認，遺跡の現状保存発掘調査計画等について協議を必要とするため建設省から文化財保護法第57条の３に先だつ事前協議の文書の提出を求めた。協議の結果，まず岡山県教育委員会による確認調査を実施した。

昭和51年11月から昭和52年３月までの確認調査によって，原尾島・沢田・兼基の３か所に微高地を確認し，昭和52年４月からは本格的調査に着手した。百間川原尾島遺跡にかかる左岸用水・新田サイフォン・新田樋門については，『百間川原尾島遺跡』１（1980）で報告された。その他の調査地域についても順次報告書を出版している。確認調査で明確となった第２微高地百間川沢田遺跡については，昭和53年５～６月，トレンチによる調査を実施して，全域に弥生時代の水田がひろがっていることを確認した。昭和52年からは低水路部分の調査に着手した。広域に検出された弥生時代の水田については，航空写真の撮影も行った。低水路部分に現代の用水路があるため，昭和55年４月からは前年度調査部分へ用水路を付け替えて残りを調査した。昭和56年度には長谷遺跡樋門導入水路にあたる部分の調査を実施して，第１次５か年計画にかかる百間川沢田・長谷遺跡の調査を終了した。

報告書の作成は，昭和54・55年度の２年間は１名の専従職員を配置し，各１冊の報告書を作成した。昭和56年度は，10月までに一部を残して調査が終了したので，全員が報告書作成に従事し，１冊の報告書を作成した。昭和57年度は，７名が専従し，第２次５か年の発掘調査と併行して報告書作成を行った。

百間川沢田遺跡の調査では，百間川堤防上に打ち込まれている建設省基準杭を利用し，両岸の杭を結んだ線を基準線とし，20×20mの最少基準区画を設定した(第５図)。海抜高は建設省の設置した水準点によっている。百間川沢田遺跡としてまとめた全長570mに及ぶ範囲には，一部原尾島が入るがここでは百間川沢田遺跡に含めることにした。調査した地域が長大で遺構数も多いことから小字名をとって地域に区分し，それぞれ横田・高縄手Ａ・高縄手Ｂ・竪石・開山下・四元の調査区とした。高縄手調査区の場合は長大であるため二分した。Ａ・Ｂとし，それらの関係は第５図に示した。

他の調査区では樋門・同導入水路があり，樋門・同導入水路という呼称も用いる。

調査の構成

発掘調査は建設省中国地方建設局と委託契約を締結した岡山県教育委員会があたり，調査の専門的指導および助言を得るため，岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた下記の方々に「旭川放水路改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」（以下，対策委員会）の委員を委嘱した。

旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会委員（あいうえお順）

・福南中学校	池葉須藤樹	・岡輝中学校	角田　茂
・岡山大学	小野　昭	・岡山市教育委員会	出宮徳尚
・岡山理科大学	鎌木義昌	・岡山大学	春成秀爾
・岡山大学	近藤義郎	・岡山女子看護専門学校	水内昌康

昭和52年度

岡山県教育委員会

文化課長	飛田真澄	文化財保護主事	松本和男（調査担当１～３月）
課長補佐	塩見　篤	同	柳瀬昭彦（調査担当）
主幹	小川佳彦	主事	浅倉秀昭（　同　）
文化財主幹	難波　進	同	藤井守雄（庶務担当）
文化財二係長	光吉勝彦	同	江見正己（調査担当）
文化財保護主査	葛原克人（調査担当）	同	中野雅美（　同　）
主事	小倉　昇（庶務担当）	同	内藤善史（　同　）
文化財保護主事	伊藤　晃（調査担当12月）	調査補助員	平井泰男

昭和53年度

岡山県教育委員会

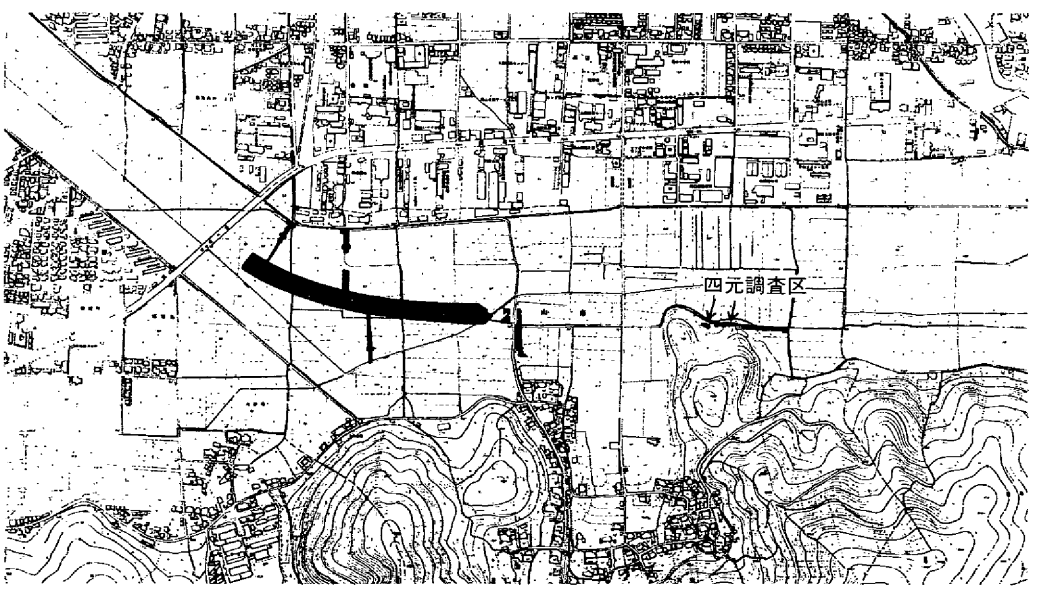
文化課長	飛田真澄	文化財保護主事	井上　弘（調査担当）
課長補佐	吉光一修	同	松本和男（　同　）
主幹	小川佳彦	同	岡田　博（　同　）
文化財主幹	難波　進	同	高畑知功（　同　）
主事	小倉　昇	同	二宮治夫（　同　）
文化財二係長	光吉勝彦	同	浅倉秀昭（　同　）
文化財保護主査	河本　清	同	福田正継（　同　）
同	正岡睦夫（調査担当）	同	江見正己（　同　）
文化財保護主事	下澤公明（　同　）	主事	藤井守雄（事務担当）

主事	中野雅美（調査担当）	調査補助員	島崎　東
同	内藤善史（　同　）	同	堀川　純
調査補助員	平井泰男	同	山本悦世

昭和54年度

岡山県教育委員会

文化課長	近藤信司	文化財保護主事	高畑知功（調査担当）
課長補佐	吉光一修	同	二宮治夫（　同　）
主幹	光吉勝彦	同	江見正己（　同　）
文化財主幹	難波　進	主事	藤井守雄（事務担当）
文化財二係長	河本　清	文化財保護主事	中野雅美（調査担当）
主任	林　正人	主事	内藤善史（　同　）
文化財保護主査	正岡睦夫（調査担当）	同	平井泰男（　同　）
文化財保護主事	下澤公明（　同　）	同	島崎　東（　同　）
同	井上　弘（　同　）	同	光永真一（　同　）
同	渡辺　光（　同　）	調査補助員	平井典子
同	岡田　博（　同　）		



第３図　百間川周辺地形および調査区設定図（1/15,000）

百間川沢田遺跡２・百間川長谷遺跡２

昭和55年度

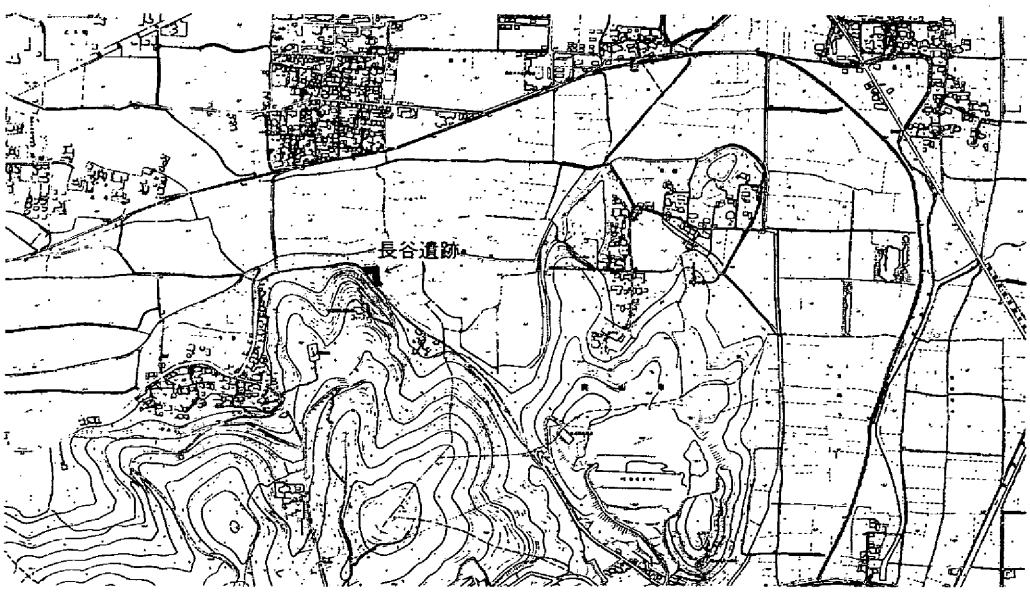
岡山県教育委員会

文化課長	近藤信司	文化財保護主事	高畑知功（調査担当）
課長補佐	吉光一修	同	二宮治夫（　同　）
文化財主幹	難波　進	同	岡本寛久（　同　）
文化財二係長	河本　清	主事	金尾一志（事務担当）
主任	田中建治	文化財保護主事	中野雅美（調査担当）
文化財保護主査	正岡睦夫（調査担当）	同	内藤善史（　同　）
同	井上　弘（　同　）	主事	平井泰男（　同　）
文化財保護主事	渡辺　光（　同　）	同	島崎　東（　同　）
同	山磨康平（　同　）	同	光永真一（　同　）
同	岡田　博（　同　）	調査補助員	平井典子

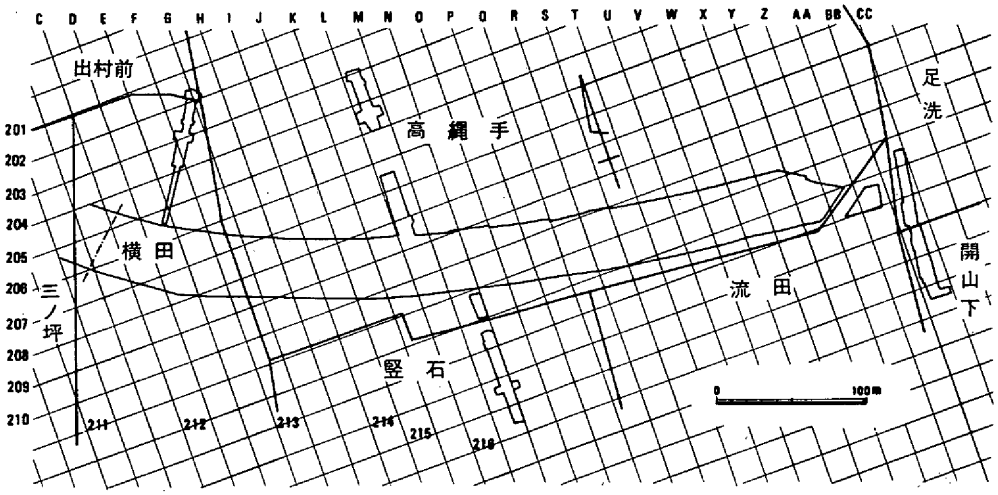
昭和56年度

岡山県教育委員会

文化課長	早田憲治	埋蔵文化財係長	河本　清
課長代理	吉光一修	主任	田中建治
文化財主幹	高原健郎	文化財保護主査	正岡睦夫（調査担当）



第４図　百間川周辺地形および調査区設定図（1/15,000）



第5図　グリッド設定と小字名（1/5,000）

文化財保護主事	渡辺　光（調査担当）	文化財保護主事	中野雅美（調査担当）
同	山磨康平（　同　）	同	内藤善史（　同　）
同	岡田　博（　同　）	主事	平井泰男（　同　）
同	二宮治夫（　同　）	同	島崎　東（　同　）
同	浅倉秀昭（　同　）	同	光永真一（　同　）
同	岡本寛久（　同　）	調査補助員	平井典子
主事	金尾一志（事務担当）		

最後に，5年間の発掘調査にあたって，厳寒，猛暑の中で調査員と労苦を共にしていただいた現場作業員の皆様に心より感謝いたします。

時期区分について

近年，岡山県南部においては，考古資料が急増するなかで，弥生時代～古墳時代前期にかけての編年試案（註19）がいくつか提示されており，その時期区分も年々細かくなり，かつ修正されつつある。一方，百間川河川敷内においては縄文時代中期～近世に至る遺物が出土しており，特に弥生時代～古墳時代前期にかけての遺物は莫大な量にのぼる。このため当遺跡群においてもこれら各地区出土の遺物を検討した上で，時期区分し，前記したものとの比較検討する必要がある。しかしながら調査は現在も進行中であり，また遺物の微細な点においてこれまで出されている各遺跡の編年案はそれぞれ若干の相違がみられることから，現段階では弥生時代～古墳時代前期にかけては百間川の遺跡に最も近接する雄町遺跡における編年案および備中ではあるが上東遺跡の編年案，さらに雄町遺跡との並行関係を参考にしながら大きく区分しておいた。なお，現段階でもより細分し得る遺構・遺物があり，これは文中では古相・新相として

標記しておく。以下，表について若干の説明を加える。

弥生時代前期をⅠ～Ⅲ，同中期をⅠ～Ⅲ，同後期をⅠ～Ⅳ，古墳時代前期をⅠ～Ⅲに大別し，その頭に百間川を付した。なお文中では百間川弥生時代前期Ⅰは百・前・Ⅰ，百間川古墳時代前期Ⅱは百・古・Ⅱのように表記する。

百・前・Ⅰは無軸木葉文を，百・前・Ⅱは壺形土器における削り出し凸帯および，甕形土器の篦描き沈線を，百・前・Ⅲは甕形土器の篦描き沈線の多条化を目安とする。百・中・Ⅰは甕形土器の櫛描き沈線を，百・中・Ⅱは従来菰池式と呼ばれていたものを，百・中・Ⅲは凹線文の盛行を目安とする。百・後・Ⅰは雄町７・８類および上東・鬼川市Ⅰを，百・後・Ⅱは雄町９・10類および上東・鬼川市Ⅱを目安とする。百・後・Ⅲは長頸壺の最終段階と考え，百・後・Ⅳは甕形土器の擬凹線の出現を目安とする。百・古・Ⅰは甕形土器の櫛描き平行沈線文の出現を目安とし，百・古・Ⅱは甕形土器の櫛描き平行沈線文の退化および壺形・甕形土器の丸底化を目安とし，百・古・Ⅲは川入遺跡大溝上層出土の土器を目安にし，また当地方における須恵器出現以前の時期を呼ぶ。

表―１　編　年　対　比　表

時代＼遺跡			百間川	雄町	上東・川入
弥生時代	前期	津島	百間川前期Ⅰ		
		門田	百間川前期Ⅱ	雄町１	
			百間川前期Ⅲ	雄町２	
				船山２	
	中期	南方	百間川中期Ⅰ	高田	
				雄町３	
		菰池	百間川中期Ⅱ	船山５	
				菰池	
				雄町４	
		前山Ⅱ	百間川中期Ⅲ	前山東	
				雄町５	
		仁伍		雄町６	上東・鬼川市０
	後期	上東	百間川後期Ⅰ	雄町７	上東・鬼川市Ⅰ
				雄町８	
			百間川後期Ⅱ	雄町９	上東・鬼川市Ⅱ
				雄町10	
		グランド上層	百間川後期Ⅲ	＋	上東・鬼川市Ⅲ
		酒津	百間川後期Ⅳ	雄町11	オの町Ⅰ
古墳時代	前期	王泊六層	百間川古墳時代Ⅰ	雄町12	オの町Ⅱ
					下田所
			百間川古墳時代Ⅱ	雄町13	鬼川上層
				雄町14	＋
			百間川古墳時代Ⅲ	雄町15	川入・大溝上層

なお，この時期区分は当遺跡群調査終了の時点で，弥生時代以外の時代も含め，改めて組み直し，それぞれの時代区分および細分を行う予定である。　（江見）

註

註19　正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972

伊藤　晃・柳瀬昭彦「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第２集　岡山県教育委員会　1974

間壁忠彦他「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報』第10号　倉敷考古館　1974

出宮徳尚他『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1975

柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977

藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第４号　1979

高橋　護「弥生土器」『月刊考古学ジャーナル』1980．3

発掘調査作業員（昭和52年～56年）

足羽登起男・足羽義正・赤木春男・秋山義男・有森茂男・浅岡保久・荒川憲一・有松常夫・赤城久夫・赤木達也・赤木輝吉・荒川悦郎・有森万久・今井菅一・岩田実衛・今岡綱太・今井勉・入江武夫・石井康太・井本利則・池上正・石浜常夫・入江俊平・池邦夫・石邨卓治・岩藤健司・石橋亀雄・石原重信・犬飼巌・遠藤明雄・海野清・宇治郷久夫・江本吉春・江国正明・後谷実・遠藤直朗・後谷幸生・荻野知史・岡白郎・大柿役一・岡本賢二・大賀繁男・小川末男・岡本昇太郎・応武正之・小椋雅己・尾形一也・太田昌二・大谷修一・大津千明・大森善太郎・河野忠義・甲秋夫・金光正裕・貝原規文・川本稔・片岡一夫・西郷安夫・(故)岸繁男・久山通郷・国富武志・国富驊行・柆田武雄・久山智・国重正男・国重正武・熊原正裕・窪田敏昭・熊代喜使太・後長繁範・小西修・河野佳生・小谷進一・河野勝影・小林秀行・河野忠義・佐々木和勲・佐藤国一・佐野雅男・佐野堅・定中進一・酒井寿哉・佐藤章・佐藤栄治・中山進一・柴田実・白川武示・白神貴士・杉本四郎右エ門・椙元要・末野栄蔵・妹尾亥三五・竹原孝親・多田陽一・高木淳彦・田原稔・高取修一・田村文明・高田清人・田坂剛行・竹井半一・武田光・難田中典・多田正・谷本信平・旦利秋・峠和彦・池上士郎・中塚敏夫・中村剛朗・中田伸二正・波永光・西岡利夫・西本真一・西本喜市・則金敏雄・野々村修司・服部公男・服部忠正・服部常人・服部邦英・畑本敏男・長谷通誉・服部弘・原美千春・原田浩文・林道博・馬場昌一・平松信義・船越一男・藤本順一・藤原幸治・藤本孝市・堀川純・牧本一男・松本友彦・松本勇作・松本忠義・松本武夫・(故)松本寿・松本金房・松本一男・真鍋九平・松本昌樹・松村吉郎・松本孝一・松本好厚・松島康夫・松本三郎・光石善一・三宅浩・水内通・三木恒治・目黒兼信・森安毅・元川雅夫・森安春光・森安克己・森安博・森安金一・森谷肇・(故)矢部文治・山下誠・山本満郎・山原毅・山本浩司・横浜隆・立古雅明・渡辺勝・和田充弘。

足羽藤枝・赤木文子・石田芙美子・出原喜美子・岡崎洋子・太田照子・岡本和子・岡本忠子・小野妙子・尾高幸子・太田郁子・川井静子・金岡トシエ・籠井須磨子・河合葉子・北村昭子・楠見静子・黒田紀子・国塩志保里・黒川和江・小西静江・伍賀芳子・苔口幸江・坂本由美子新名定子・谷口祥子・武居昌子・竹本聡美・次田享子・津島健子・寺尾俊子・中村初子・長塩里子・西崎貞子・西崎宏子・西崎知子・西崎美代子・二宮明美・野崎千珠子・服部勝得・服部美登利・原住子・羽原徳子・浜八重子・藤田光子・藤田元女・藤田球江・(故)松本千枝子・松本あい子・真野春江・溝口春子・三好裕子・光岡八重子・守安幸恵・森元初恵・山下ツヤ子。

現場事務所には，後谷日出子・松本千賀子・池田恵・山本智恵子・山本悦世・岡崎順子・平井典子・岡本(坂本)由美子。

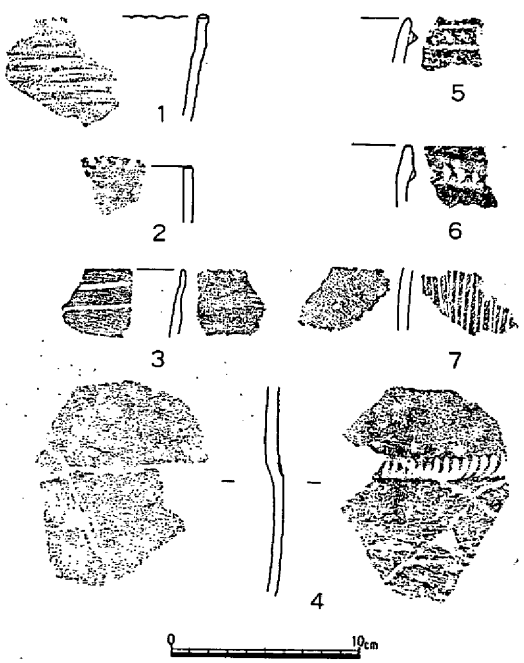
土器洗いには，板谷春子・神馬真佐子・土井原弘子・東山富貴江・森小代子。

第3章　百間川沢田遺跡

第1節　横田調査区

1　横田調査区の概要

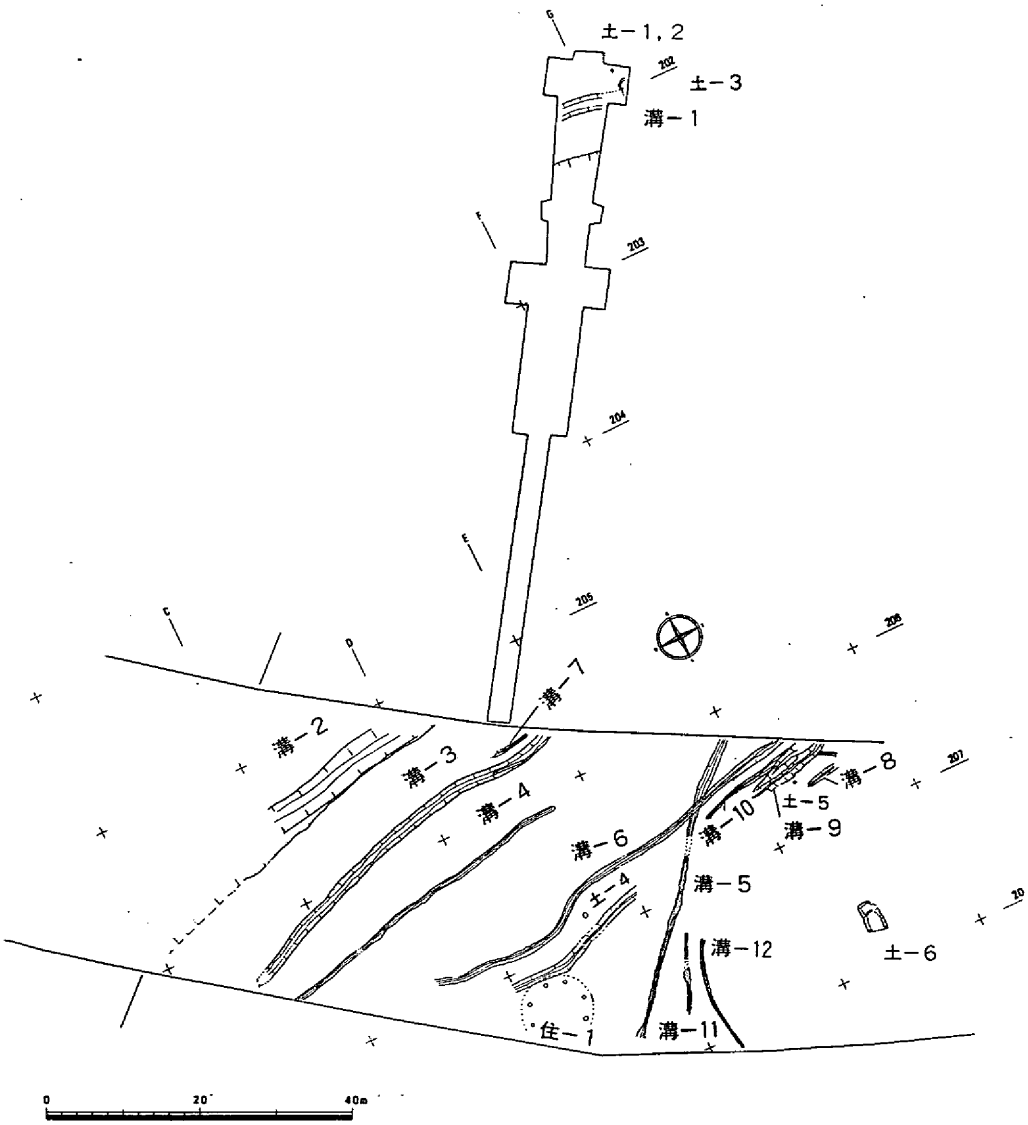
本調査区は，百間川沢田遺跡の西端部に位置している。本調査区は，大部分を占める低水路部分と，その北側に接する樋門部及び導入水路である。調査区内の立地は，低水路部のほとんどが微高地部に当り，低水路部の北側の端部から低位部が展開する。さらに，樋門部の北側端部に微高地の端部が認められ，この間約60mの低位部が存在する。微高地上は，表土下に中世の包含層が部分的に残存し，さらに下層に古墳時代の包含層が認められる。この古墳時代の包含層は，2～3層に分層が可能で，上層には5世紀後半から6世紀後半の須恵器を伴う。下層は，古墳時代初頭のもので，数多くの遺構を検出した。その下層に弥生時代前期の包含層が認められる。縄文時代の遺構は検出されていないが，晩期の土器片が少量出土した。弥生時代前期の遺構は，微高地縁辺部に溝が集中する傾向がある。また，竪穴式住居も認められ居住区としても意識されている。弥生時代中期では，微高地上に溝及び土壙が存在し，低位部にも水田が展開される。さらに弥生時代後期には，低位部に水田が広がり，徐々に微高地縁辺部及び微高地にも造田化が進み，その造田過程を示す溝が多く検出された。これらの水田は，一時の洪水により，多量の砂で埋没し，その水田は放棄された。古墳時代には，初期の竪穴式住居，井戸などが多く検出され，居住区域として変容する。以後は徐々に衰退していったことが窺える。



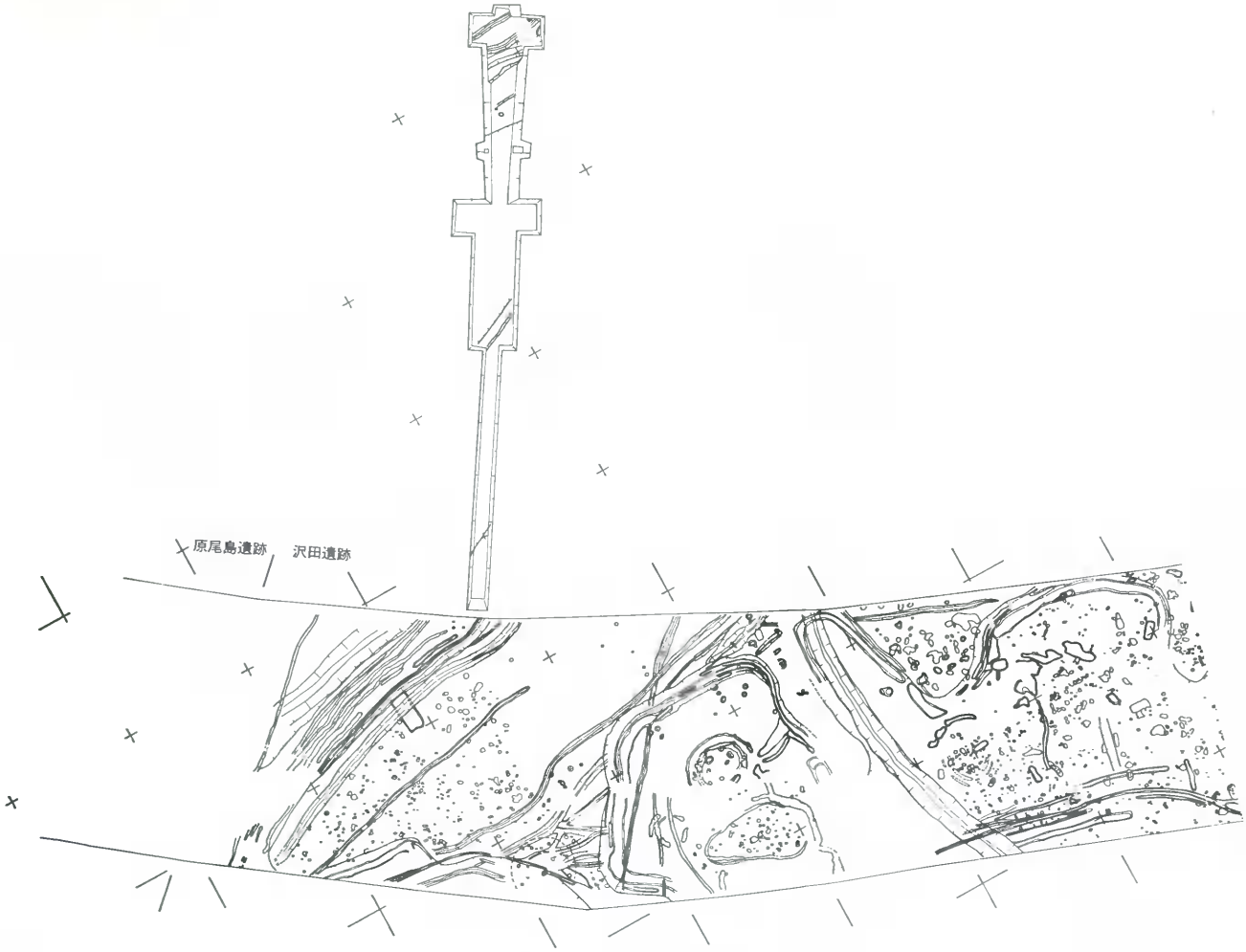
第6図　包含層出土遺物

２　弥生時代前期の遺構・遺物

横田調査区では，弥生時代前期の遺構と考えられるものとして竪穴式住居１軒，溝12本，土壙６基が検出された。また，柱穴状土壙についても前期の遺物を伴うものもあった。その遺構のほとんどは，微高地上に位置するものである。微高地は，弥生時代後期の水田開発に伴い微高地北側の縁辺，及び微高地南側は掘削をされており，遺構は溝などの深いもの以外は削平を受けて残存していなかった。



第７図　弥生時代前期遺構配置図（1/1,000）



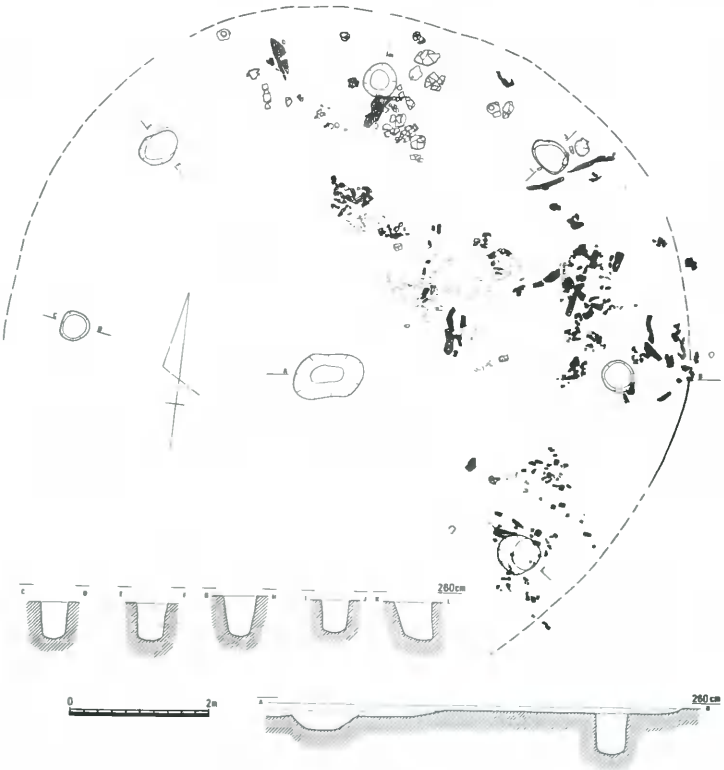
第8図　横田調査区弥生時代遺構全体図（1/800）

（1）　竪穴式住居

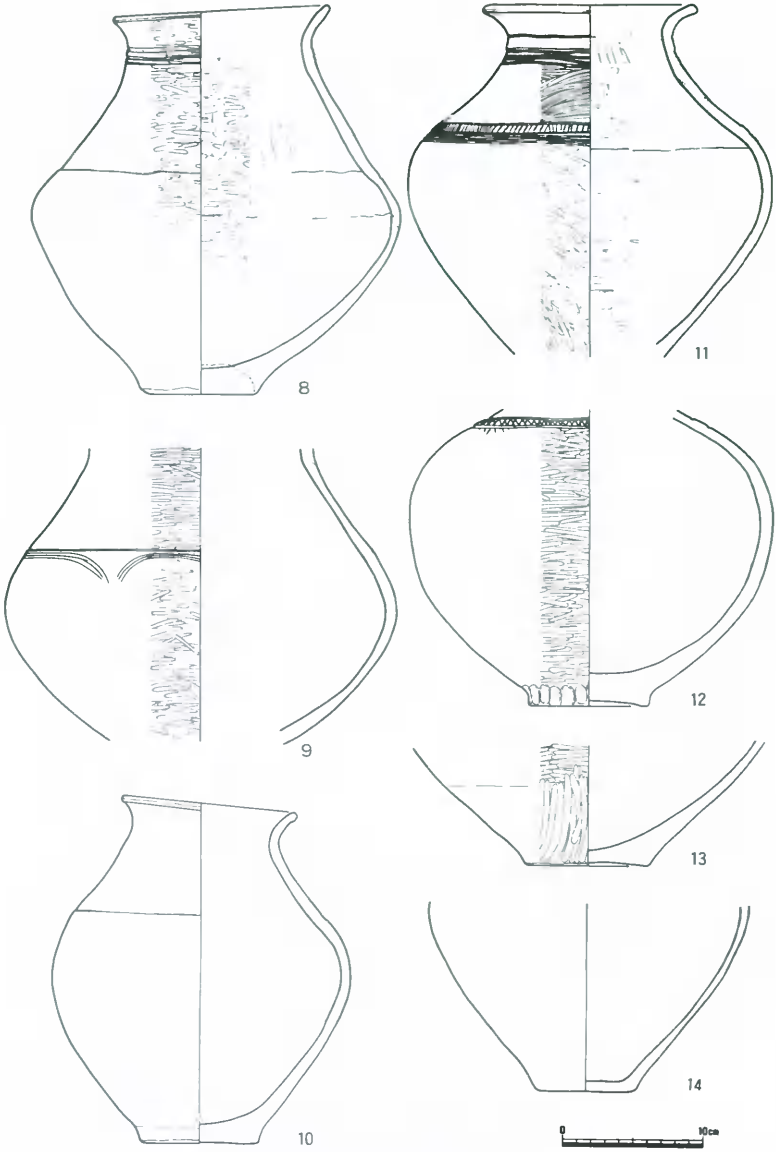
竪穴式住居—1（第9～11図，図版—5，6）

207Dの北西部において検出された遺構で，南西端は調査区外におよんでいる。また，調査区内の南西側半分は，弥生時代後期の水田等により削平を受けており，検出できたのは柱穴および中央の土壙（中央ピット）のみである。北東側においても弥生時代中期の溝等により削平されたところがある。壁体溝等は確認されておらず規模・形状等は判然としないが，遺物の広がり等から直径950cm程の円形を呈する竪穴式住居が想定される。

検出された床面は海抜250cm前後で，土器・サヌカイトと伴に炭・焼土塊が多く認められている。炭は主に柱材として使用されていたもので火災により放棄された住居址の様相をよく留め



第9図　竪穴式住居—1（1/80）

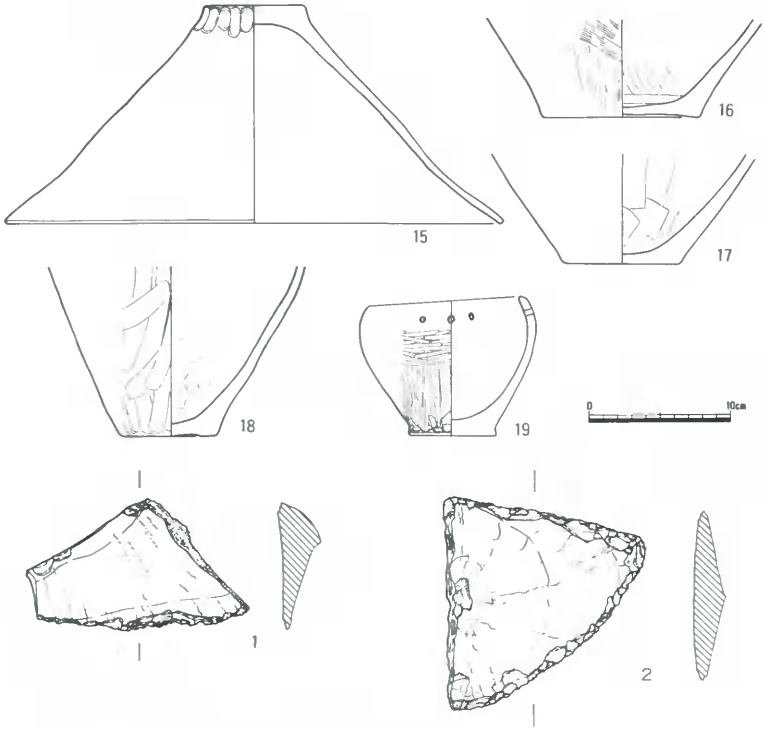


第10図　竪穴式住居―１出土遺物（１）

ている。検出された柱穴は6本であるが，調査区外に2本が想定され，8本で構成されていたと考えられる。心々距離は260〜320cmでまちまちである。個々の柱穴の規模も径40〜60cmと異なり円もしくは楕円の平面形を呈している。柱穴の底はほぼ海抜200cm前後であまり差がない。なお底はおおむね直径30cm前後の円形であり，あまり差のない規模の柱を50cm程埋めて建てていたものであろう。中央ピットは100×60cmの隅丸の平行四辺形に近い平面形を呈している。深さは床面から30cm程を測り，断面形は皿状を呈している。埋土中にサヌカイト製の石鏃・楔形石器およびサヌカイトの剥片等の出土がみられるものの，炭・焼土等はみられなかった。

出土遺物としては，ほぼ完型に復元できた壺8・10，蓋15，鉢19等多くの土器片が床面直上の覆土中にみられる。またスクレイパー1・2等のサヌカイト製の石製品および剥片が多く床面等にみられる。

時期は出土遺物等から百・前・Ⅱと考えられる。　（内藤）

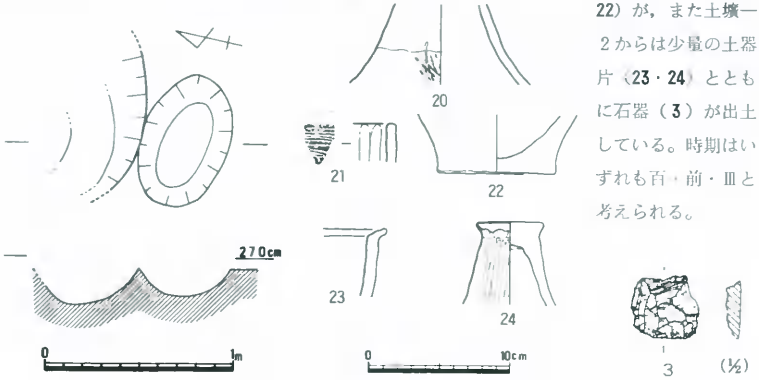


第11図　竪穴式住居―1出土遺物（2）

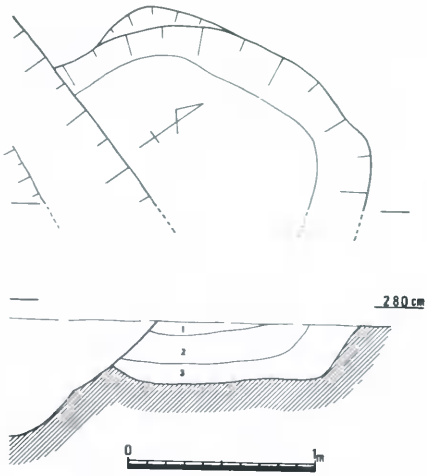
（２） 土　　壙

土　壙―１，２（第12図）

201Ｇの南西部に位置する。土壙―１は調査区外にのびており，一部を検出したにすぎないため全体の形状は明らかではない。土壙―２は約70×45cmの楕円形を呈し，深さは約15cmを測る。埋土はいずれも暗灰褐色粘質土が一層のみである。土壙―１からは少量の土器片（20～22）が，また土壙―２からは少量の土器片（23・24）とともに石器（３）が出土している。時期はいずれも百・前・Ⅲと考えられる。



第12図　土壙―１・２（1/30）・出土遺物



１．暗灰色粘土　　３．暗褐灰色土(黄色砂ブロックを含む)
２．暗灰褐色土(炭・焼土粒多い)

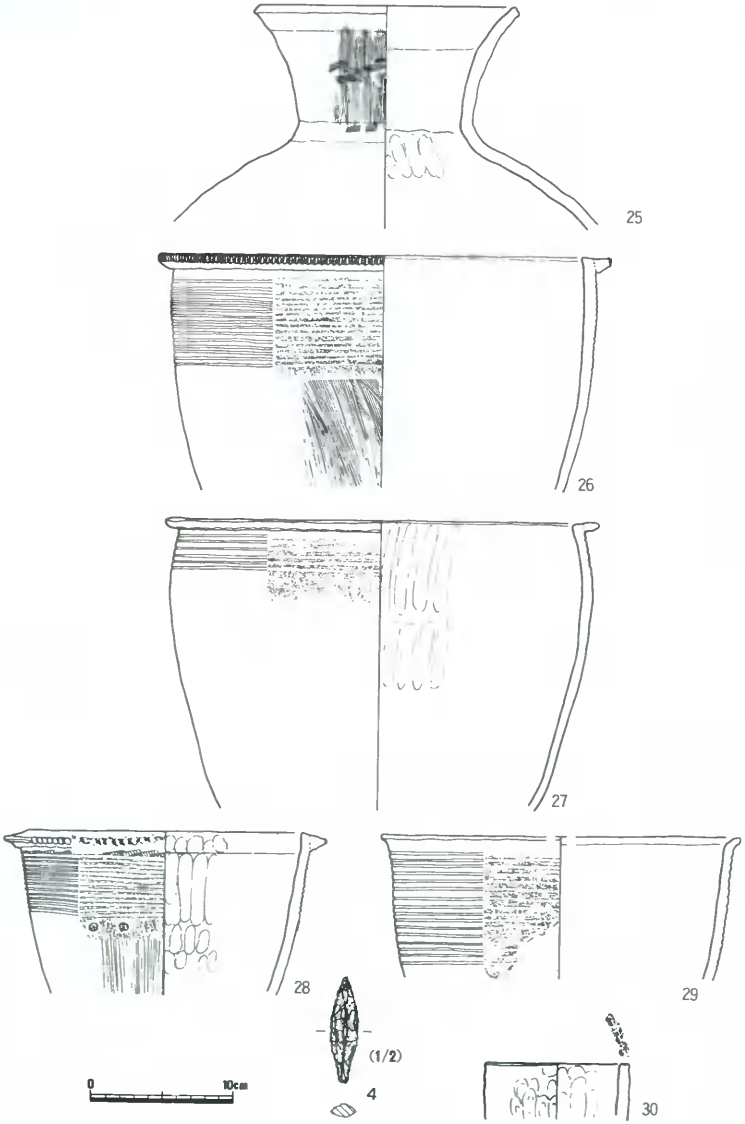
第13図　土壙―３（1/30）

土　壙―３（第13図）

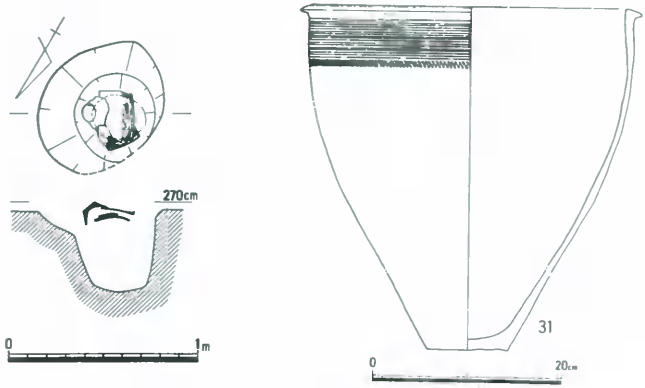
201Ｇの南西部に位置する。一部調査区外にのびており，全体の形状はその南端部が溝―１によって切られているため明らかではない。検出部分から円形に近いものではなかったかと推定される。深さは最深部で約40cmを測る。埋土は３層認められた。

出土遺物としては，壺，甕などの土器，および石鏃（４）などの石器がある。

時期は溝―１よりは古いと考えられるものの百・前・Ⅲの範疇におさまるものと考えられる。　（平井）



第14図　土壙―3出土遺物



第15図　土壙―４（1/30）・出土遺物（1/6）

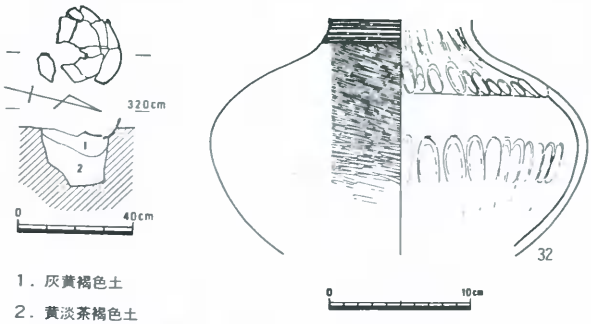
土　壙―４（第15図，図版７）

206Ｄの南西区で検出された。検出面では長径75cm，短径60cmの楕円形を呈するが，13cmほど下がると直径45cmの円形になる。深さは検出面から44cmを測る。底は長径28cmの凹面で，壙壁は垂直に近い。検出面で大型の甕の破片が折り重なって出土した。同一個体の破片で，2/3程度の残存である。出土状態からは，破片で何かを塞いだような感じを受ける。埋土は暗褐色粘性土で，底はグライ化している。土器の示す時期は百・前・Ⅲである。　（岡本）

土　壙―５（第16図）

206Ｆ土壙―14の南西で微高地端部に位置する。遺構の掘り方は不鮮明で確認されず，遺物のみが検出されたものである。遺構の上部は削平により消滅したものであろう。断面図の埋土状態は土壙の堆積を示しているものではない。

遺物から百・前・Ⅲに比定されよう。



１．灰黄褐色土
２．黄淡茶褐色土

第16図　土壙―５（1/20）・出土遺物

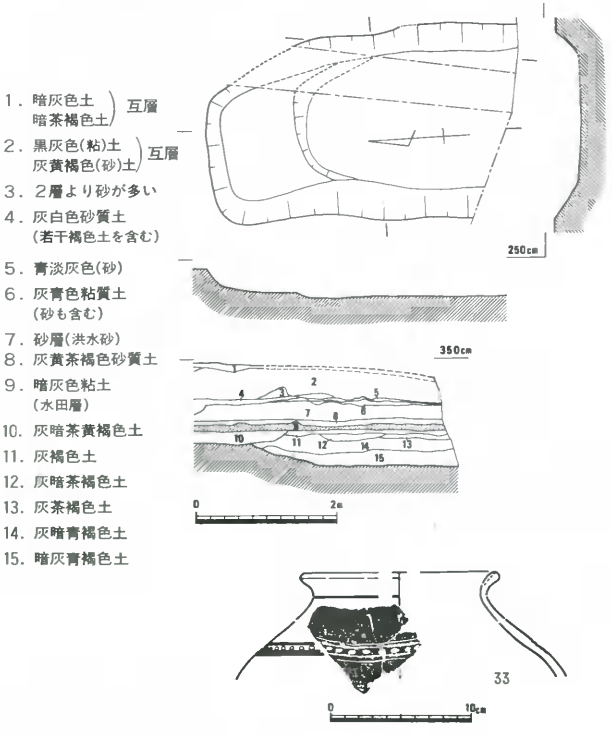
土　壙—6（第17図，図版7）

207F中央やや南西よりで検出された平面形態が長方形に近い形を呈すると思われる土壙であるが南側が切り取られているため，形態，規模等は不明である。

土壙は水田層除去後に検出され，一部（東辺側）は現排水路取り除き後において検出され，遺構は北辺側で段状の掘り方を呈するものである。おそらく2基の土壙が切り合って作られていた可能性がうかがえるものであるが，調査段階においては確認することはできず，東辺の南北土層断面図においては，土壙の一部分をかすめているのみであるため不明確であった。

いずれにせよ，土壙自体は水田層下において検出されたこと，さらに出土遺物は土壙埋積土中より33が含まれていた。

以上のことから，時期は百・前・Ⅲに比定されるであろう。　（二宮）

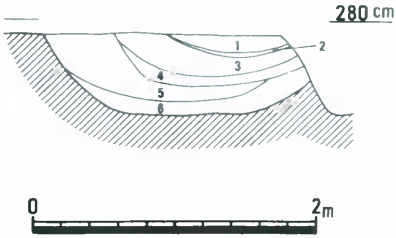


第17図　土壙—6（1/80）・出土遺物

（３）　溝

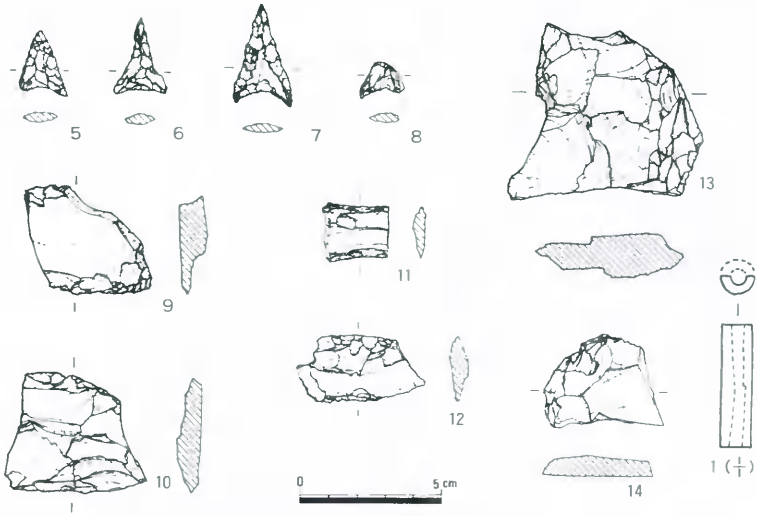
溝―１（第18図）

201Ｆ・Ｇの南端部と202Ｆ・Ｇの北端部をやや湾曲しながら東西に走る溝である。幅約210㎝，深さ約60㎝を測る。肩部の一部は溝―55に切られ，東端部では土壙―３を切っている。底のレベルは海抜210㎝前後で，検出部分の西端と東端はほぼ同一の海抜高を示している。

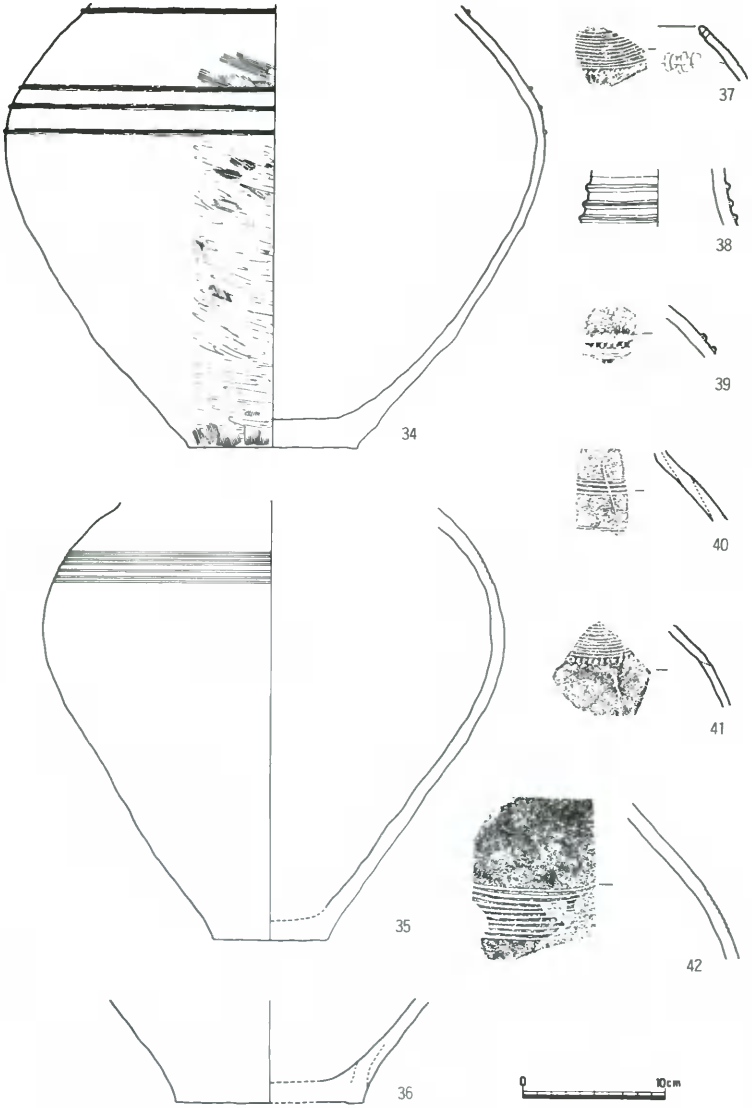


埋土は第18図の２層と４層を境に大きく３層に分離できる。図示した遺物のうち，土器**44**・**52**・**53**・**60**・**64**・**77**および石器**5**・**6**・**11**・**12**・**14**は１と２層から，また土器**41**・**49**・**51**・**63**・**72**は，３・４層から，また土器**34**～**37**・**44**～**47**・**58**・**59**・**61**・**62**・**67**・**69**・**73**～**75**・**78**・**80**・および石器**7**～**10**・**13**は５・６層から出土した。**50**は１・２層と５・６層出土のものが，また**56**は３・４層と５・６層出土のものが接合している。時期は百・前・Ⅲである。

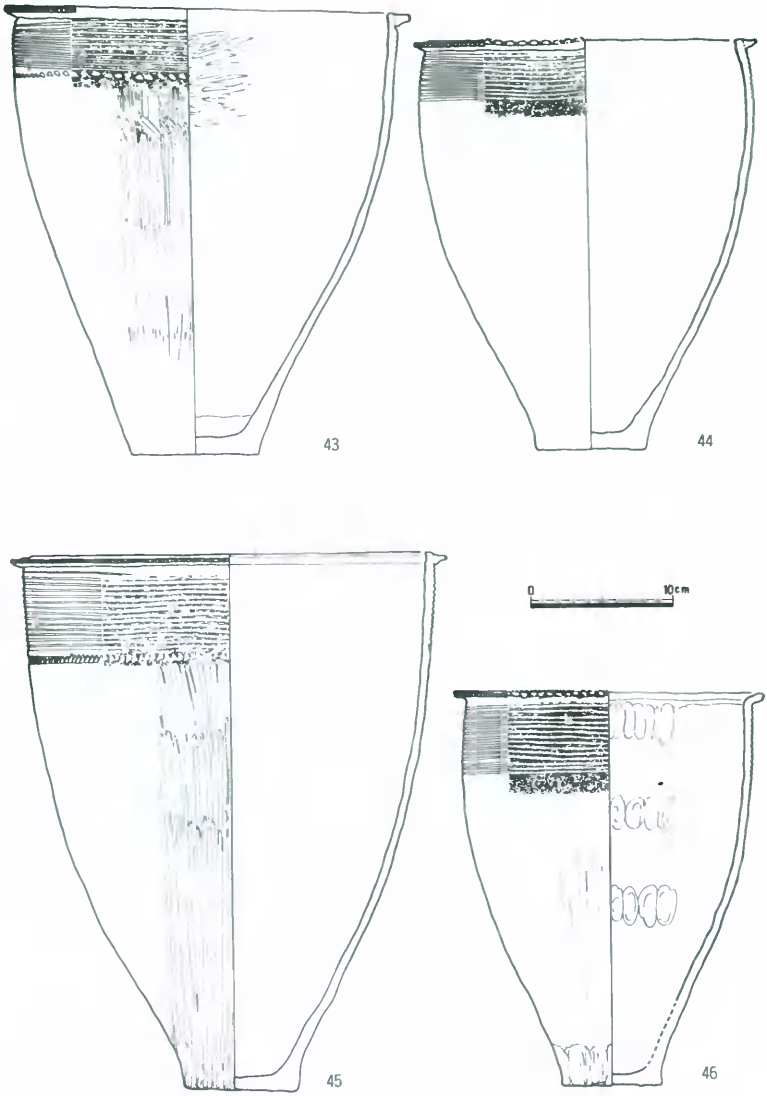
（平井）



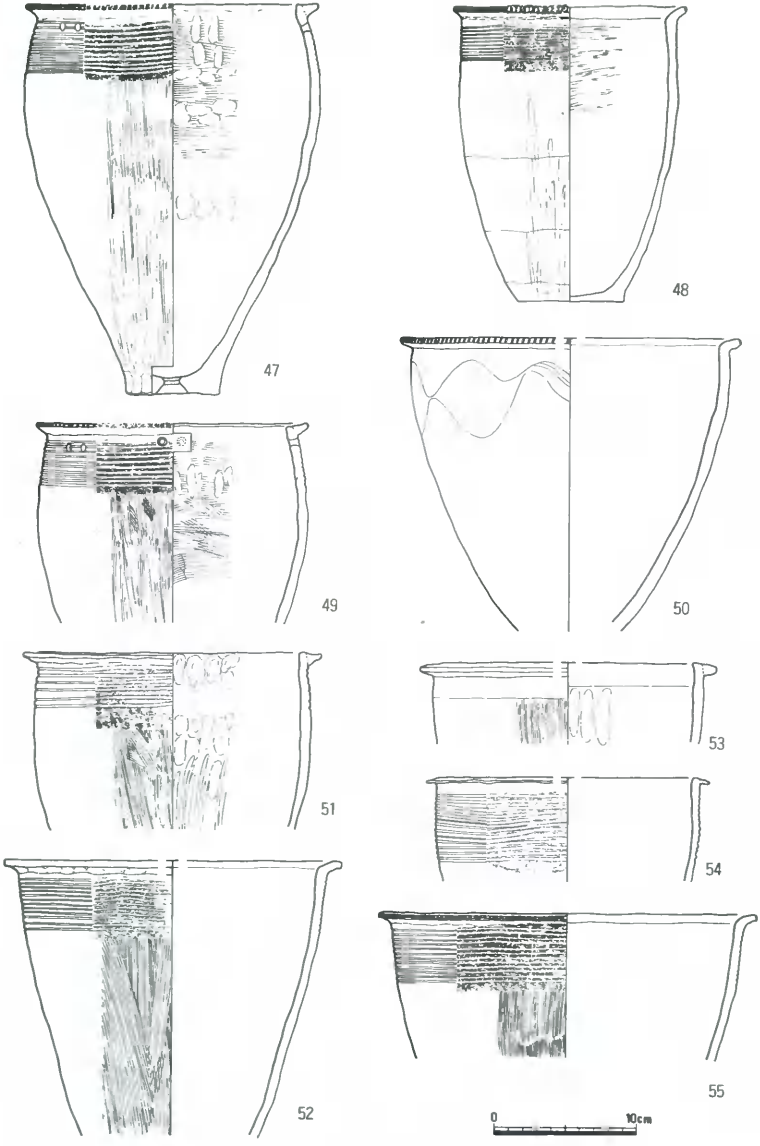
第18図　溝―１（1/40）・出土遺物（１）



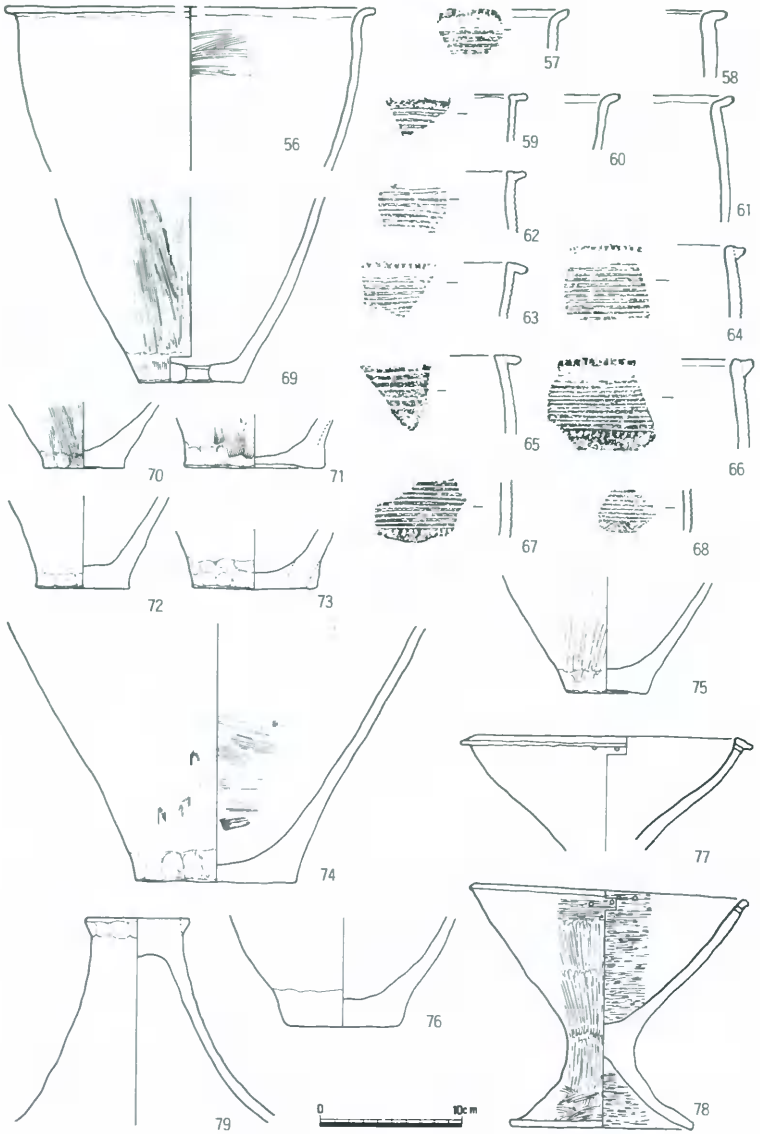
第19図　溝―１　出土遺物（２）



第20図　溝―１　出土遺物（３）



第21図　溝―１　出土遺物（４）

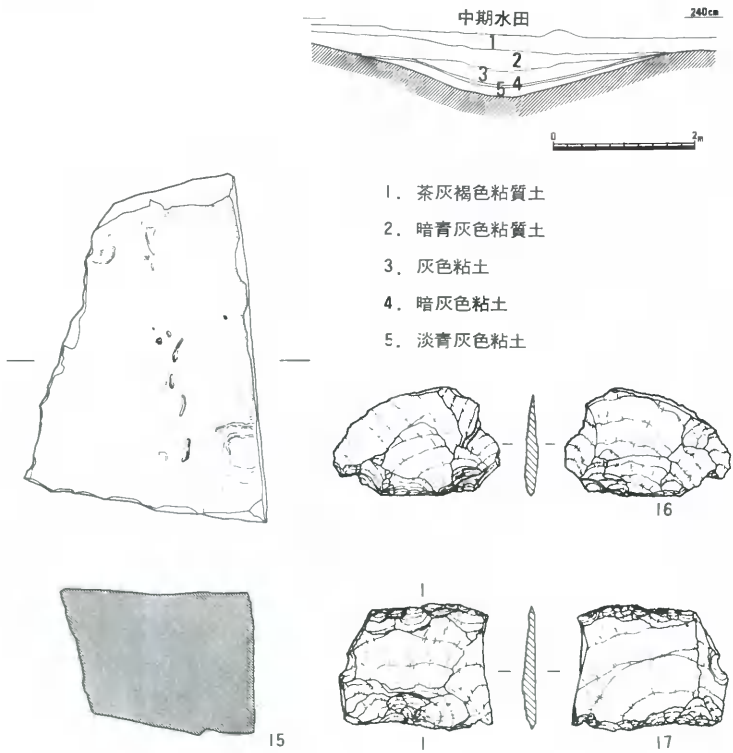


第22図　溝―１　出土遺物（５）

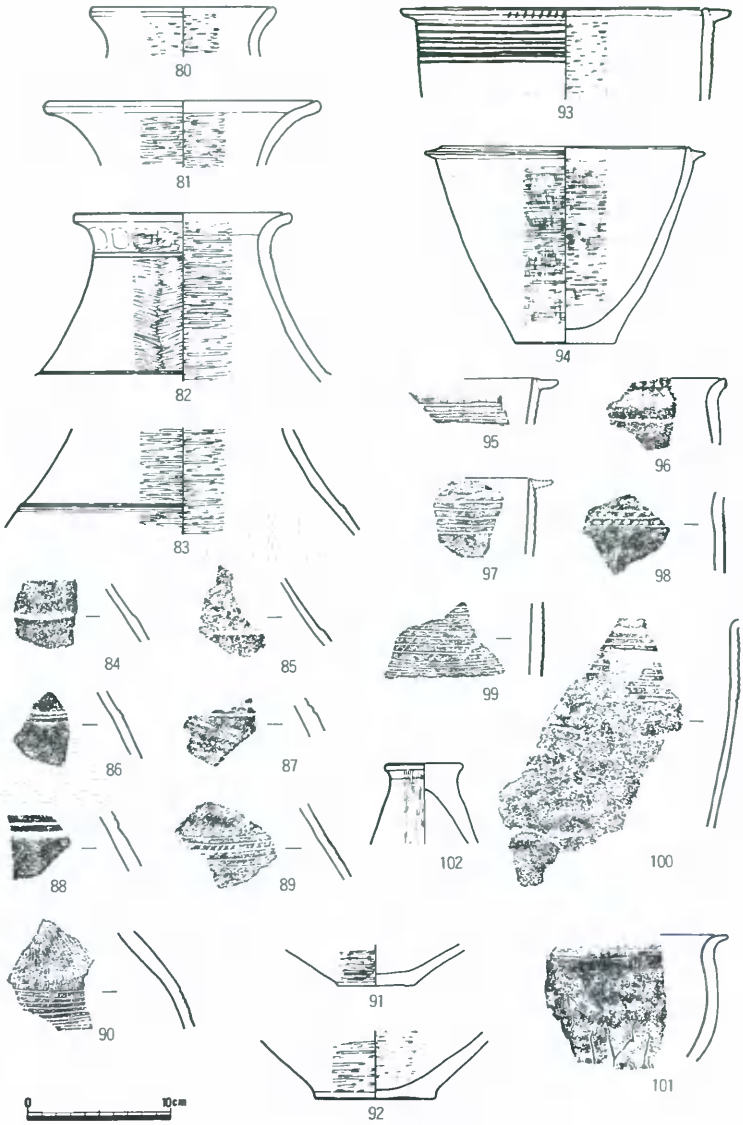
溝―２（第23図）

調査区西端の微高地北側に位置し，微高地下りの裾部にあたる。溝は，南西～北東方向に微高地下りに平行して流走する。規模は，幅約450cmを測るが，溝の肩部は明瞭でなく，溝内も凹凸が激しい。このような状況の溝は，遺跡の東部の高縄手Ｂ調査区の溝―135，136などと状況が類似する。溝内は，レンズ状の堆積が認められ，第４層の有機質土を中心に相当数の土器が出土した。

出土した土器は，壺形土器（80～92），甕形土器（93～101），蓋形土器と考えられるものが出土した。図示した以外，少量の土器片がある。また，土器の他15，16，17の石器などが検出されている。これら出土した土器は，百・前・Ⅱ，Ⅲ期の特徴を示すものである。



第23図　溝―２（1/80）・出土遺物（１）

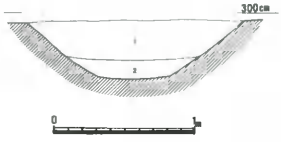


第24図　溝―２　出土遺物（２）

溝―３（第25図）

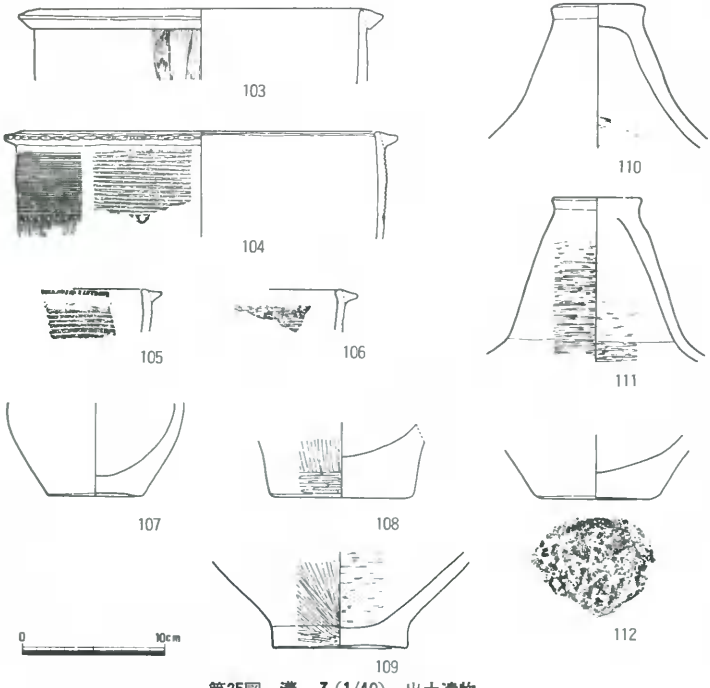
この溝は，微高地残存部の北側微高地縁辺部に検出されたものである。微高地縁辺に沿って南西～北東方向に流走する。規模は，幅約150cm，深さ約40cmを測る。溝内は，上下２層に堆積層が認められる。上層には，焼土塊，炭が多く包含していた。

出土遺物は，底部に少量ながら土器を検出した。甕は，逆Ｌ字口縁のもので，体部に多条のヘラ描き沈線を施す**104**～**106**と無文のもの**103**があった。また，**110**の壺の底部には数粒の籾痕が認められる。



１．茶褐色泥砂

２．暗茶褐色粘質土

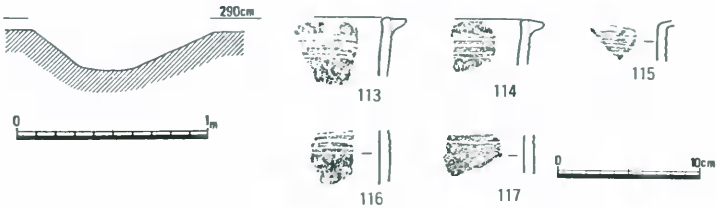


第25図　溝―３（1/40）・出土遺物

溝―４（第26図）

この溝は，溝―３の南側に位置する。溝は，ほぼ東西方向に検出され，東から西に流走する。また，溝―３と同様に微高地の下りと平行する。規模は，下流部で長さ約100cm，深さ約25cmを測るが，上流部の東側では，徐々に浅くなる。

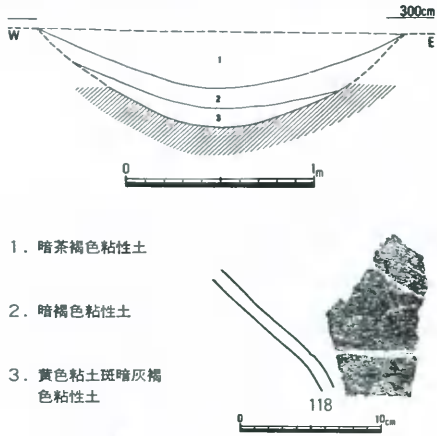
溝内は，単層で茶褐色土が堆積していた。出土遺物は，少量の土器を検出したにとどまった。出土した土器は，百・前・Ⅲの特徴を示す。（中野）



第26図　溝―４（1/30）・出土遺物

溝―５（第27図，図版10）

206Ｅから207Ｄに位置し，検出長は41ｍである。北東から南西へ流れていたと考えられる。検出面で幅130cm，深さ25cmを測るが，調査区北壁の断面から推測すれば幅185cm，深さ52cm程度はあったようである。幅の割りには深さがなく，断面形は浅い椀形となっている。溝壁の傾斜は緩やかで，溝底は平坦に近い。溝内の堆積土は３層からなり，いずれも粘性土で，最下層には，地山の砕粒が含まれている。溝底は調査区北端で海抜238cm，南端で223cmを測る。溝の時期であるが，出土遺物が僅少なため正確には判断しかねるが，微高地の上層の暗褐色土層下に存在することと，遺物がすべて前期のものであることから百・前・Ⅱと推定している。

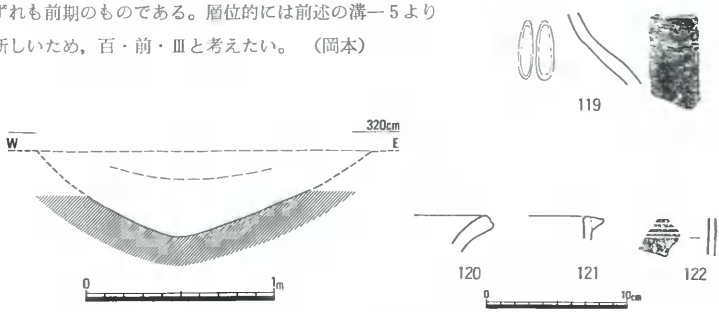


第27図　溝―５（1/30）・出土遺物

溝―６（第28図，図版４）

206Ｆから206Ｃまでの56ｍ分を検出した。206Ｆから西に走り，206Ｄで少し蛇行し，また西方向へ続く。溝底の標高は206Ｆで

268cm，206Cでは261cmである。検出面で幅90〜130cm，深さ15〜30cmを測るが，調査区北壁の断面観察によれば，幅200cm，深さ45cm前後あったものと推測される。溝壁の傾斜は緩やかで，断面形は頂部の丸い低平な逆三角形を呈する。埋土は暗褐色粘性土1層であるが，上方と底では若干色調や質を異にしている。時期を判断するための遺物は僅少であるが，それらはいずれも前期のものである。層位的には前述の溝—5より新しいため，百・前・Ⅲと考えたい。（岡本）

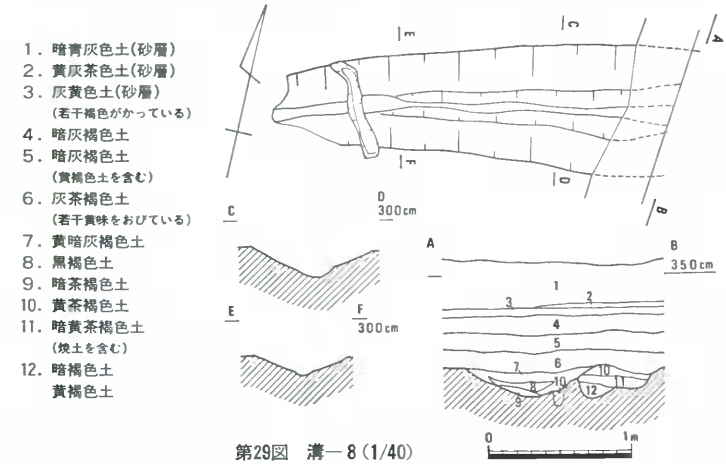


第28図　溝—6（1/30）・出土遺物

溝—8（第29図）

206Fの中央やや南よりに位置し，西は弥生時代後期の水田，東は中近世の溝により切断された現存長さ480cmで，検出面での幅は60cm〜90cm，深さ13cm〜20cmを測る溝である。溝は北東から南西に流走するもので，南西部で，止水施設の跡と思われる痕跡が認められた。

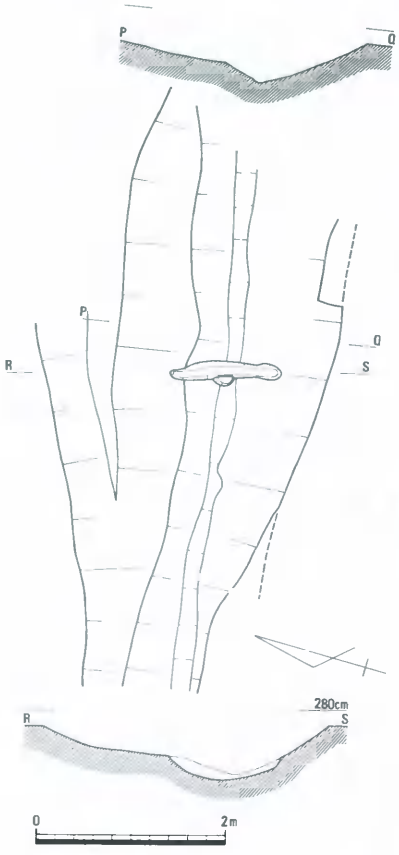
溝の時期は，弥生中期の土壙により切られていることから弥生時代前期に比定されよう。

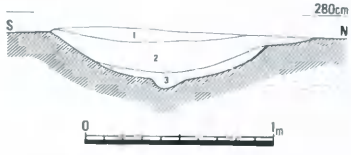


第29図　溝—8（1/40）

溝―９（第30図，図版11）

206Ｆから207Ｄまで続くが，途中，弥生時代後期の水田開削によって消失しているため，検出長は約30ｍである。溝底の標高は206Ｆで252cm，207Ｄで241cmを測る。規模は，206Ｆで幅240cm，深さ50cm前後を測るが，206Ｄでは幅140cm，深さ30cm程度と小さくなる。全体を通じては後者の規模をもつようで，206Ｆでの拡張は溝底に検出した堰状遺構の影響かと考えられる。幅の割には深さがなく，溝壁は緩やかである。ただ，北壁は途中に肩をもち，そこから傾斜がやや急になっている。溝底には幅20～30cmで一段深い溝が走っている。このため，断面形は一見乳房状を呈している。埋土は三層に分けられる。いずれも微砂層だが，底にいくほど粘性が強い。１層には多量の焼土，３層には炭粒を含んでいる。206Ｆの溝底で検出した堰状遺構と考えられるものは，長さ120cm，幅20cm，深さ６cm程度の細長い土壙で，なんらかの水制施設を埋め込んだ痕跡であろう。この溝の時期を示す遺物はきわめて少ないが，層位関係を考慮に入れて，百・前・Ⅲと推定している。



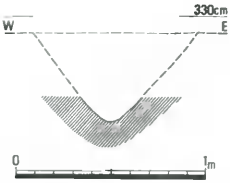


1．茶褐色微砂（焼土塊多し）　2．暗灰褐色粘性微砂　3．灰黒褐色粘性微砂

第30図　溝―９（1/60・1/30）・出土遺物

溝―7（第31図）

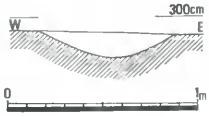
205Dで検出された。微高地の端部に位置し，かなりの部分が弥生時代後期の水田開削によって消失しているとみられ，検出長は6mにすぎない。検出面では幅30cm，深さ12cmを測るが，調査区北壁断面によれば，幅85cm，深さ50cm程度に復原される。溝底の標高は273cmである。溝壁の傾斜は急で，断面はV字形を呈する。時期を判断する遺物を欠くが，層位的には百・前・Ⅲと推定される。



第31図　溝―7（1/30）

溝―10（第32図，図版4）

206Eと206Fで16m分を検出した。検出面で幅75～95cm・深さ10～20cmを測る。溝底の標高は206Fで274cm，206Eで268cmとなり，わずかに西へ傾斜している。溝壁の傾斜は緩やかで，断面形は，浅い椀形を呈する。下流側は弥生時代後期の水田開削で消失しているが，その削平端付近で少し南へ曲がるようである。時期を示す遺物は出土していないが，層位の上からは，百・前・Ⅲと推定される。（岡本）



第32図　溝―10（1/30）

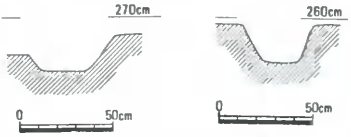
溝―11（第33図）

この溝は，調査区の南側溝―5，12の間に位置する。溝が検出された地点は，弥生時代後期の水田開発により，微高地が掘削されているため，水田層下に溝の底部が残存していたものである。残存していた規模は，幅約50cm，深さ約20cmを測る。しかしこの溝は，本来幅約100cm，深さ50cm以上の規模であったであろうと考えられる。また，溝の続きとして北側の微高地上に検出されておらず，溝―8・9・10に湾曲して接続する可能性がある。

出土遺物は，土器の細片を少量出土したにとどまった。出土した土器は，胎土等からみて前期の特徴をもつものであった。

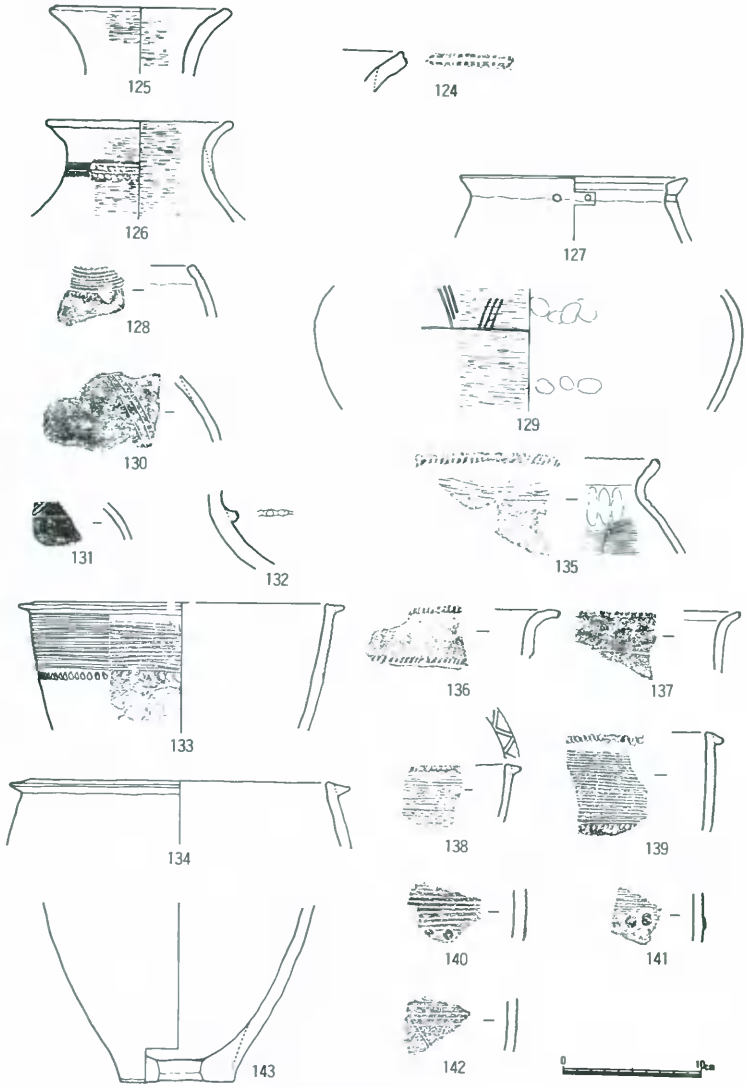
溝―12（第33図）

この溝は，溝―11の東側に隣接して検出された。溝―11と同様に弥生時代後期の水田層下に検出されたもので，ほぼ南北方向から東に湾曲するように流走する。おそらく溝―8・9及び10に接続するものと考えられる。規模は，幅約40cm，深さ約20cm残存していた。この溝もまた溝―11と同様に復元すると幅約100cm，深さ約50cmの規模である。



第33図　溝―11・12（1/30）

出土遺物は，土器が少量出土したのみで，土器の胎土から察して前期のものと考えられる。

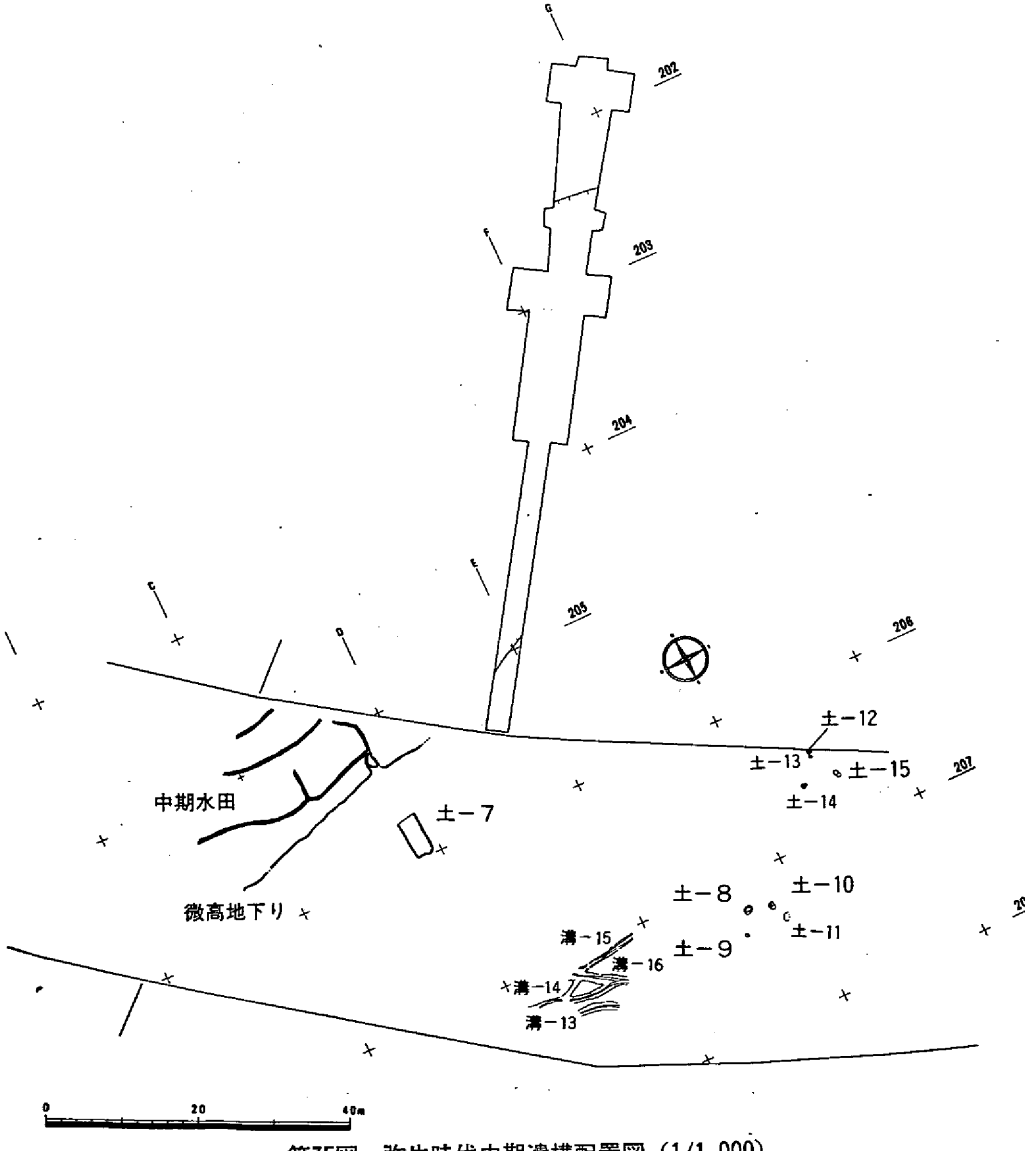


第34図　包含層出土遺物

3　弥生時代中期の遺構・遺物

本調査区での弥生時代中期の遺構は，微高地に土壙9基，溝4本が検出された。溝は，4本とも調査区南側に集中して検出された。いずれの溝とも出土遺物は少なく，中期に限定できるものではなく前期より掘られていた可能性もある。また，溝は微高地中央部を東から西へ流走するものである。

また，微高地北側の低位部には水田が広がる。　（中野）



第35図　弥生時代中期遺構配置図（1/1,000）

（1） 土　　壙

土　壙―７（第36図）

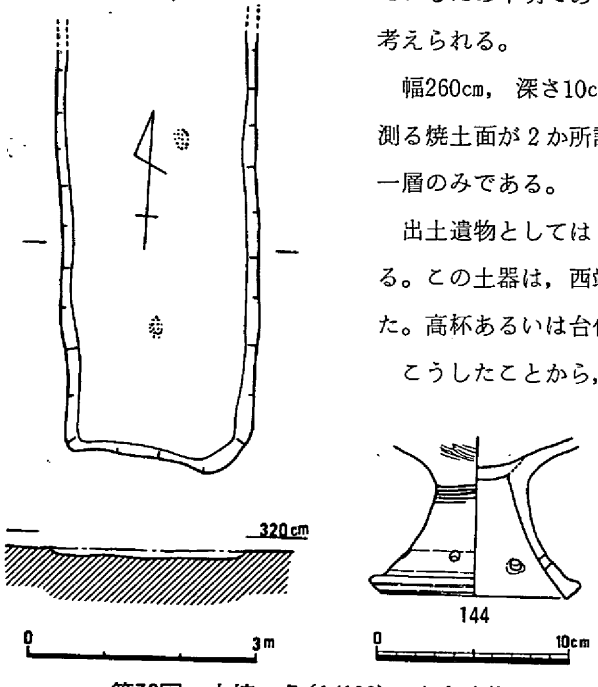
205Ｃの南東部において検出された土壙である。北辺は弥生時代後期の水田によって切られているため不明であるが，ほぼ長方形を呈していたものと考えられる。

幅260cm，深さ10cm前後を測る。底面には約30×20cmを測る焼土面が２か所認められた。埋土は暗褐灰色粘質土が一層のみである。

出土遺物としては土器（144）が１点出土したのみである。この土器は，西端部中央において底面に接して出土した。高杯あるいは台付鉢の脚部と考えられる。

こうしたことから，この土壙は，柱穴などが検出されていないものの作業小屋的な性格が考えられるかも知れない。

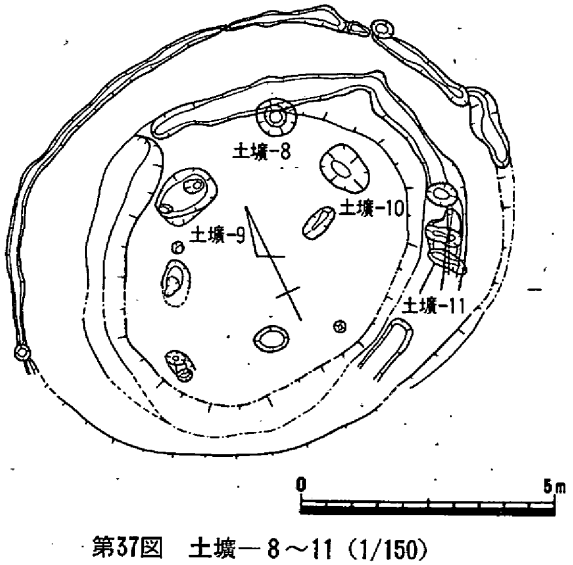
時期は，弥生時代前期の溝が埋没したのちに掘られていることや出土した土器の特徴などから弥生時代中期後半と考えられる。　（平井）



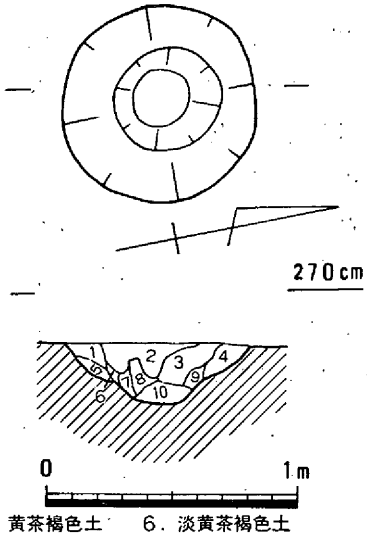
第36図　土壙―７（1/100）・出土遺物

土　壙―８（第38図，図版13）

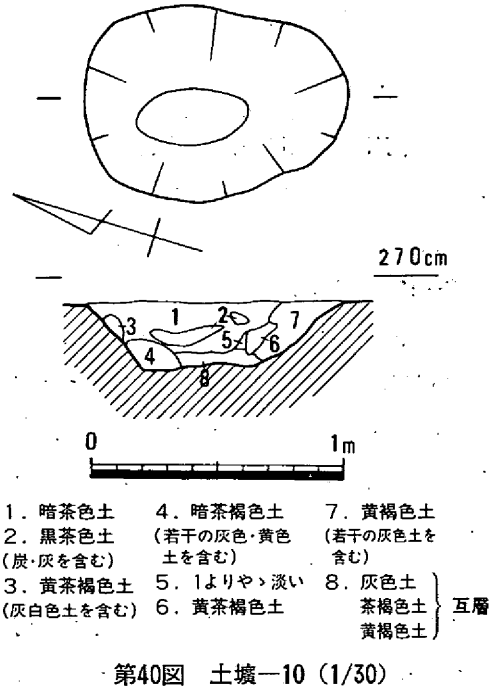
207Ｅ「島状高まり」遺構―15の下層で，土壙―10の北に位置する。平面形態はほぼ円形で，２段掘りの形態を示している。土壙の規模は径78cm，最深部で23cmを測り得ることができた。土壙の断面埋土状態においてみれば，土層は撹乱され埋土中からは土器の細片が少量確認されたのみであり，遺構は，検出時点で，他の遺構との切り合い（土壙は弥生時代後期の溝―37が北側の一部を切っていることが確認された。）によって時期を決定せざるをえないもの



第37図　土壙―８～11（1/150）



第38図　土壙―8 (1/30)



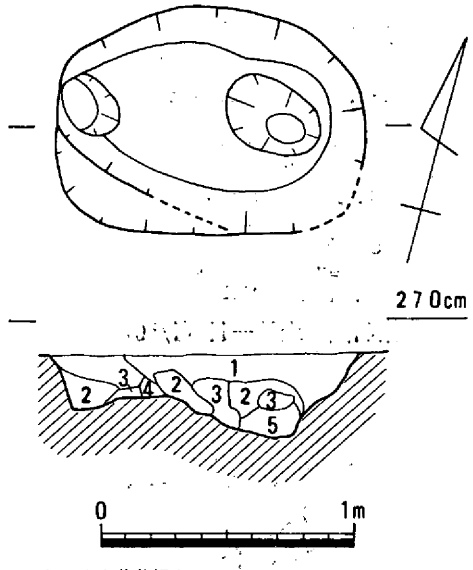
第40図　土壙―10 (1/30)

である。

以上のことから弥生時代中期に相当する遺構と思われる。

土　壙―9（第39図）

207E「島状高まり」遺構―15盛り土除去後において検出され，土壙―8の南西に位置する歪な隅丸長方形の平面形を呈する土壙である。規模は長辺123cm，短辺90cm，底面の東

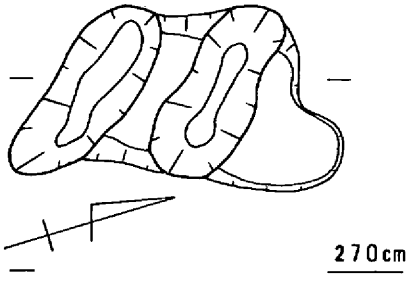


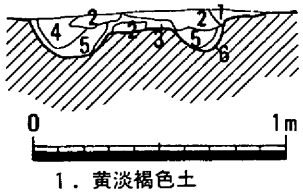
第39図　土壙―9 (1/30)

西において一段深くなり最深部で33cmを測ることができた。埋土中からは少量の土器片を認めたのみである。検出面から考えて，弥生時代中期の遺構であろう。

土　壙―10（第40図，図版13）

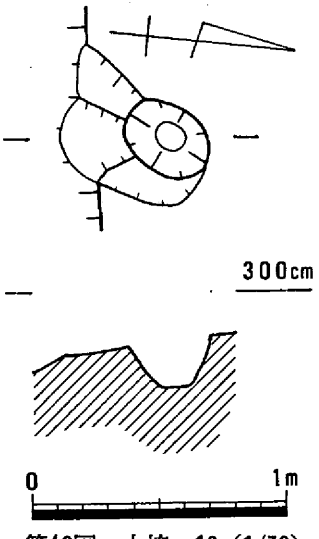
207E「島状高まり」遺構―15除去後において検出された遺構である。平面形は長径106cm，短径78cm，深さ28cmを測ることができ，掘り方





1．黄淡褐色土
2．暗灰褐色土
3．黄淡褐色土
4．黄淡褐色土 暗灰褐色土 互層
5．黒灰褐色土
（若干淡黄色土を含む）
6．暗灰淡褐色土

第41図　土壙―11（1/30）

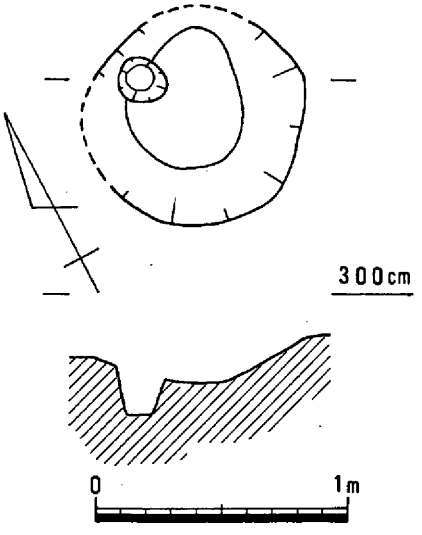


第42図　土壙―12（1/30）

は南東がゆるやかで，北西がかなり急に掘り込まれ，埋土土層は乱れ，埋土中から少量の土器破片が確認されたのである。検出面から考えて弥生時代中期の可能性もある土壙である。

土　壙―11（第41図）

207Ｅ「島状高まり」遺構―15盛り上除去後，土壙―10の南側に位置し，北西～南東方向の長楕円形を示す掘り方が並行して２基存在し，その一部を溝―37が切った状態で検出した。埋土中から



第43図　土壙―13（1/30）

若干の土器片が出土している。遺構の切り合いから弥生時代中期の時期に相当しよう。

土　壙―12（第42図）

206Ｆのほぼ中央北隅で，土壙―13の北に位置する不整円形を呈する土壙である。規模は径87cm，深さ15cmを測る。掘り方は浅鉢形を呈し，出土遺物は皆無で，検出面から推測して弥生時代中期の可能性のある土壙である。

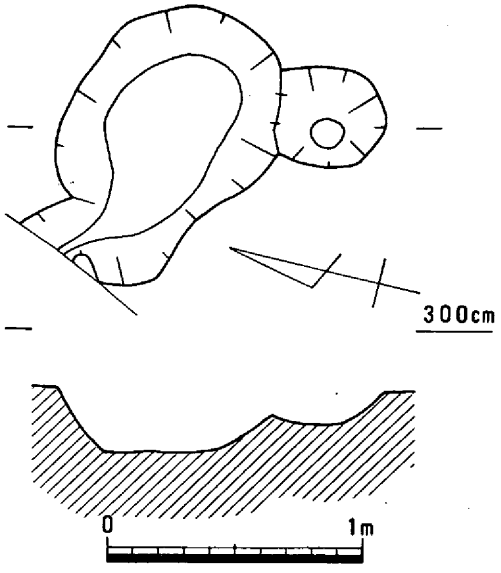
土　壙―13（第43図）

206Ｆ中央付近北隅で土壙―12の南に接して位置する遺構である。平面形からみた土壙は楕円形と，隅丸長方形の掘り方を示す遺構が重複した形をなしている。前者は平面が37cm×28

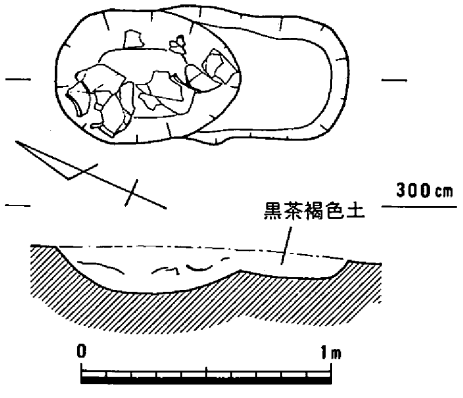
cm，深さ18cmを測り，後者は計測不能，さらに土壙の南側では溝―9を切断している。土壙の時期は弥生時代中期といえよう。

土　壙―14（第44図）

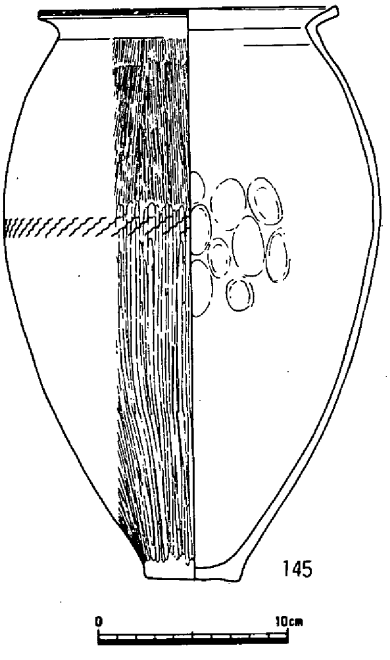
206F中央やや西よりで，土壙―5の東北東に位置して検出された不整楕円形を呈する土壙で，大小の土壙が切り合い関係で検出されている。規模は推定95cm×76cm，深さ26cm，44cm×40cm，深さ13cm，を測るが，北西に延びるものについては不明である。よって土壙が2～3基重複しているものであろう。いずれの壙内からも遺物は確認されていない。遺構が検出された層から推察して，弥生時代中期に相当する遺構といえよう。



第44図　土壙―14（1/30）



第45図　土壙―15（1/30）・出土遺物



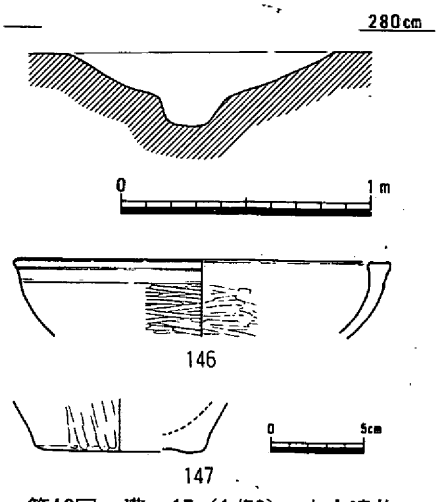
土　壙―15（第45図，図版12）

206F中央やや東よりに位置し，遺構は隅丸長方形と，楕円形の土壙が重複して溝―8を切った状態で検出された。壙の規模は前者の短辺48cm，深さ10cm，後者は74cm×52cm，深さ18cmの揺り鉢形の断面形を呈した土壙である。埋積土中からの遺物は後者より図示した甕が1個体出土している。遺物，切り合いから百・中・Ⅱの時期に相当する遺構であろう。　（二宮）

（２）溝

溝―13（第46図）

207Ｄのほぼ中央の微高地上で溝―15に平行して検出された溝で，東―西方向に流路をもつ。溝の両端は水田造成時の微高地掘開により削平されている。検出された溝の規模は，幅100～110cm，深さ約30cmで掘り方は緩斜面を呈している。溝の中央部の底は幅約20cm，深さ10cm程が一段低くなり，若干の凹凸がある。溝さらえが行なわれていたと考えられる。溝の流走方向は不明である。出土遺物は少なく，ほとんどが細片で，図示できたのは**146・147**の２点で，この溝の時期は出土遺物から，百・中・Ⅱの時期と考えられる。



第46図　溝―13（1/30）・出土遺物

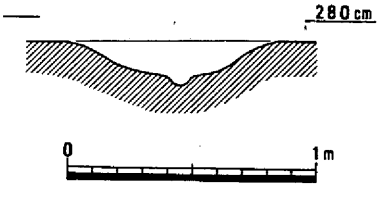
溝―14

207Ｄの微高地上において検出された溝で，溝―13から分岐して北東―南西に流れる溝で，溝―13と同じ様相を呈している。

出土遺物はないが，溝―13と同時期であろう。

溝―15（第47図）

207Ｄの微高地上において，溝―13のすぐ北側に平行して検出された，東―西方向に流れる溝で，両端は水田造成時の微高地掘開により削平されている。検出された溝の規模は，幅80～110cm・深さ約25cmで，底は真中に幅10cm・深さ５cm程の凹みがみられる。埋土は灰茶色粘質微砂である。流走方向は不明である。出土遺物はほとんどなく，図示できる遺物はない。

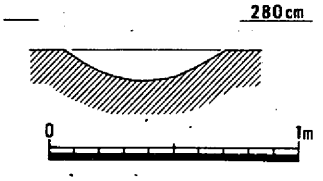


第47図　溝―15（1/30）

この溝の時期は，検出状況等から弥生時代中期と思われる。

溝―16（第48図）

207Ｄの微高地上において，溝―15に交錯して検出された，北東―南西に流れる溝である。溝―15との交点部分が後世の削平を受けており，両者の関係は判然としない。溝の規模は，幅50～65cm・深さ約12cmで断面は皿状を呈している。出土遺物はなく埋土等から，溝―15と同時期か，大きく隔たらない時期と推定される。　（内藤）



第48図　溝―16（1/30）

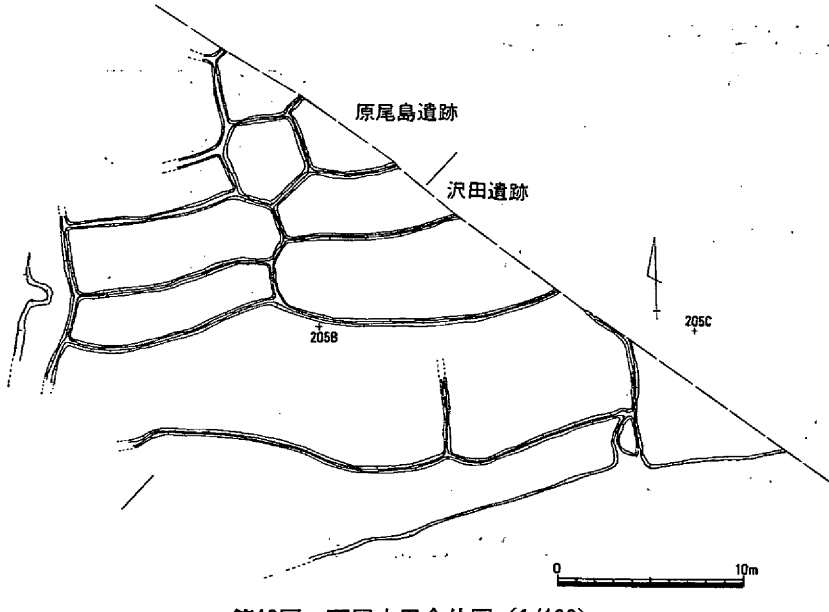
（3）水田遺構（第49図）

この水田は，上層の弥生時代後期末の水田に対して「下層水田」と称しているものである。今回報告する水田遺構は，調査区の北側の低位部に検出されたものである。下層水田は，上層に弥生時代後期末の水田が存在し，さらにその下面に弥生時代後期の遺構面が存在し溝—26が掘られている。下層水田は，その弥生時代後期の下部に畦畔を伴なって検出されたものである。

この下層水田は，耕土が脱色された灰白色粘土層で，畦畔もまた同質の土層で造られている。水田耕土の上層には，数cmの厚さで有機質土の暗灰色土が存在する。このような堆積状況は，百間川原尾島遺跡で検出されたものと同一である。

検出された畦畔は，幅約30cm，高さ5cmを測る。検出された畦畔は，いずれも小型のもので，大畦は認められなかった。小畦畔は，上層の水田の畦畔と類似しており，恒常的なものでなく，毎々につくられたものであろう。畦畔は，「T」，「Y」字に派生して一区画を構成している。今回検出された水田区画は，古地形の流路である北から南方向への流水に対して，横方向に細長く区画されている。さらに東西方向の畦畔は，下流方向に若干弧を描いている。区画は，より均等分割的な区画性は認められないものの，古地形に規制されつつも，規則性，均等性を指向する方向性はうかがえる。

下層水田の時期は，前述したように弥生時代中期中頃〜後期中頃に水田の使用時期を求めることができる。

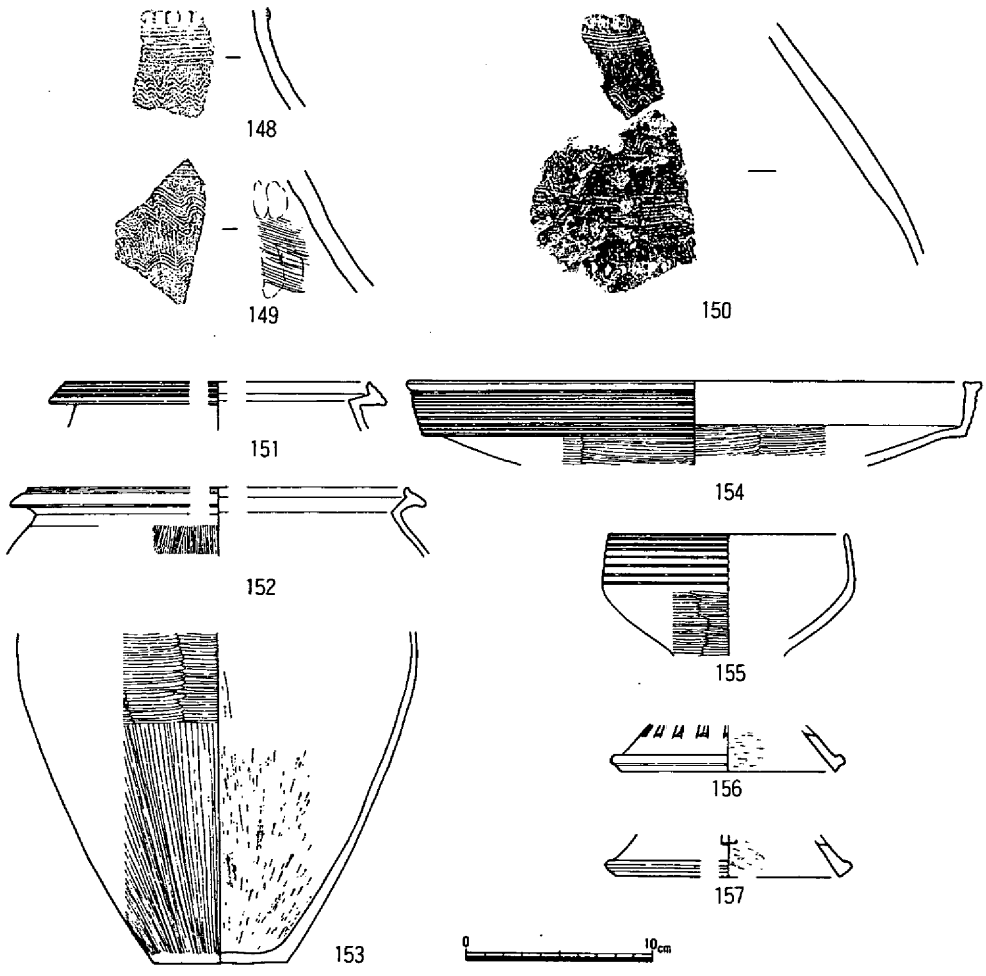


第49図　下層水田全体図（1/400）

（４） 包含層出土遺物（第50図）

横田調査区では，弥生時代中期の遺構として先述したように土壙及び溝などが検出された。しかし，遺構内においても伴出する遺物は少なかった。また，遺構にともなわない遺物も図示した以外に少量出土したにすぎない。これらの土器は，微高地上の包含層及び低位部の斜面堆積中に含まれていたものである。

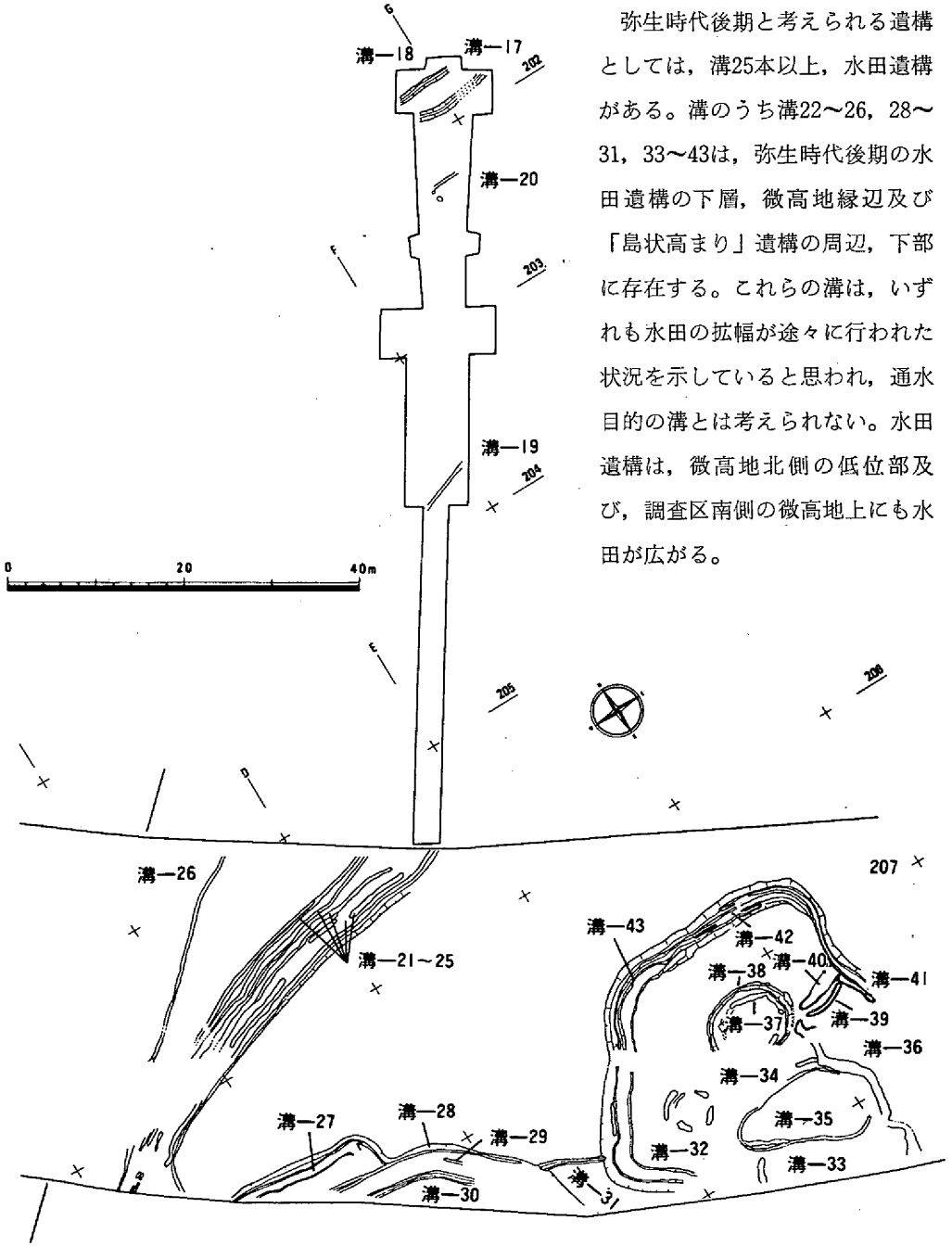
図示した**148～150**は，いずれも壺形土器で体部に櫛描波状文，平行直線文が施文されている。これらの土器は中期の前半期に属するものである。また，**151～157**は甕及び高杯の口縁部に数条の凹線文が施れており中期の後半期の特徴を示すものである。



第50図　包含層出土遺物

4　弥生時代後期の遺構・遺物

弥生時代後期と考えられる遺構としては，溝25本以上，水田遺構がある。溝のうち溝22～26，28～31，33～43は，弥生時代後期の水田遺構の下層，微高地縁辺及び「島状高まり」遺構の周辺，下部に存在する。これらの溝は，いずれも水田の拡幅が途々に行われた状況を示していると思われ，通水目的の溝とは考えられない。水田遺構は，微高地北側の低位部及び，調査区南側の微高地上にも水田が広がる。



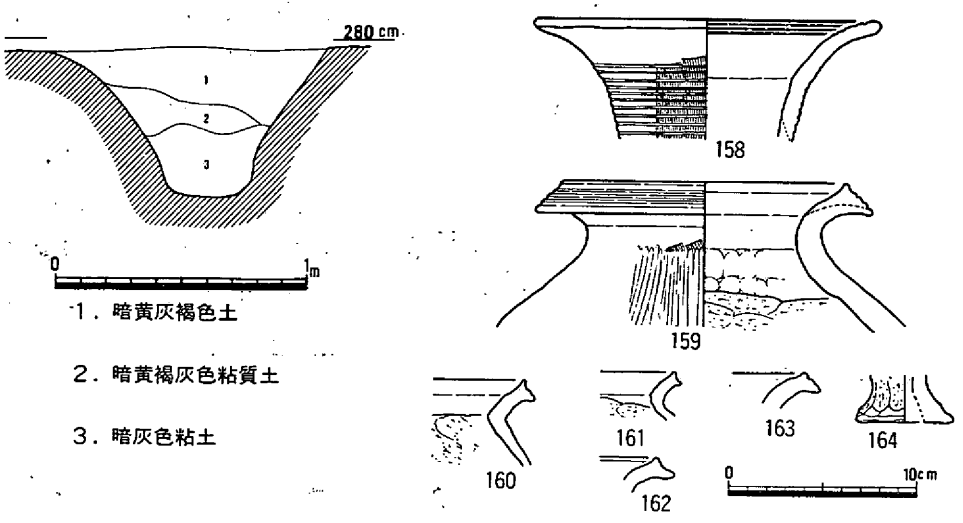
第51図　横田調査区弥生時代後期全体図（1/800）

（1）　溝

溝—17（第52図）

201Ｆ・Ｇの南部分において検出された。幅80～110cm，深さ約60cmを測る。断面形はＶ字形に近く，最下層には暗灰色粘土が堆積している。底面の海抜高は約220cmである。流走方向は明らかではない。

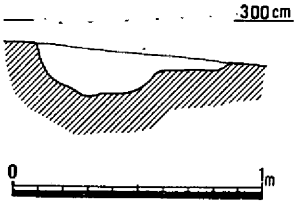
出土遺物としては，壺・甕・製塩土器などがある。これらの土器から時期はほぼ百・後・Ⅱと考えられる。



第52図　溝—17（1/30）・出土遺物

溝—18（第53図）

201Ｆ・Ｇの南部分において検出された。ほぼ東西方向に走る。幅約90cm，深さ20cm前後を測る。底面の海抜高は約220cmである。埋土は溝—17の最上層に堆積しているものと同じ暗黄灰褐色土が一層のみである。時期は出土遺物がほとんどないため明らかではないが，土層関係などから溝—17とほぼ同時期と考えられる。



第53図　溝—18（1/30）

溝—19（第54図）

203Ｅの南東部に位置する。弥生時代後期の水田層を除去したのちに検出された。幅20～35cm，深さ15cm前後を測る。底面の海抜高は200cm前後である。埋土は灰黒色粘土である。出土遺物がほとんどないため時期は明確ではないが弥生時代後期のものと考えられる。

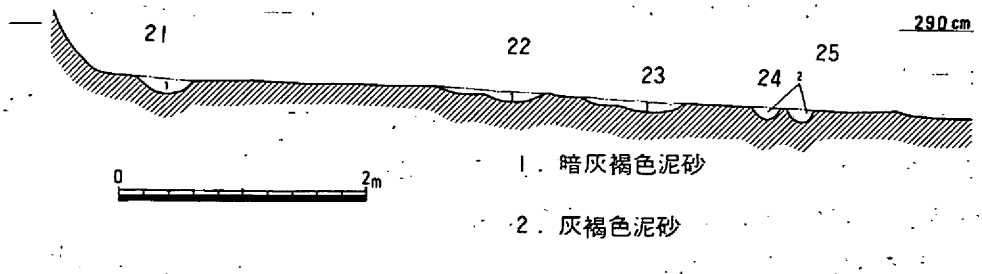
溝—20（第54図）

202Fの北東部に位置する。弥生時代後期の水田層を除去したのちに検出された。幅30～40cm，深さ5～10cmを測る。埋土は暗灰色粘土である。底面は凹凸が著しい。微高地の肩部に沿って走る溝で，時期は弥生時代後期と考えられる。

第54図　溝—19・20（1/15）

溝—21～25（第55図）

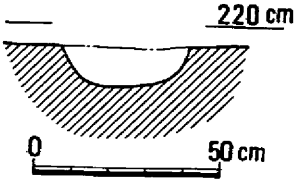
205C・D，206Bにおいて弥生時代後期の水田層を除去したのちに検出された溝である。いずれも微高地の肩部に沿って走っている。底面は凹凸が著しい。溝—21は幅30～50cm，深さ10～20cmを測る。溝—22は幅30～60cm，深さ2～10cmを測る。この溝は1本の溝としてつながっておらず途中で切れている。溝—23は幅40～110cm，深さ5～10cmを測る。この溝の幅は一定ではなく，検出した中央部分で最も広くなり肩部に段をもっている。溝—24は幅20～80cm，深さ5～10cmを測る。この溝も溝—23と同様に肩部に段をもつ幅広の部分がある。溝—25は幅40～80cm，深さ5～10cmを測る。この溝は205C部分においては2条に分離している。いずれも出土遺物がほとんどないため時期は明確ではないが，土層関係などから弥生時代後期のものと考えられる。このような微高地の肩部に沿って走る溝あるいは溝状遺構は，他の調査区においても認められている。その性格については明らかではないが，微高地を削って開田を行った際，あるいは水田を使用していた際に，微高地との境を削り込んだ結果つくられた溝ではないかと考えたい。そうだとすれば，溝—25からある段階の微高地と水田との境界を想定することができ，このことは溝—25と微高地との間の水田区画の特徴とも一致するように思われる。



第55図　溝—21～25（1/60）

溝―26（第56図）

204Ｃ，205Ｂ・Ｃにおいて弥生時代後期の水田層を除去したのちに検出された溝である。幅20～45cm，深さ10～15cmを測る。底面の海抜高は200cm前後である。時期は弥生時代後期と考えられる。溝―19と同一のものである可能性が強い。（平井）



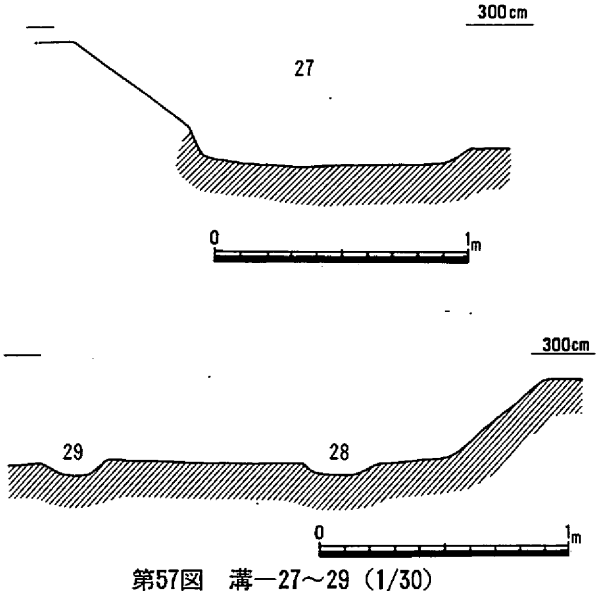
第56図　溝―26（1/20）

溝―27（第57図）

この溝は，微高地の南側に東西方向に検出された。先述した溝―22～26と同様に微高地を掘削して水田開発された際の水田と微高地の間に仕切られた溝であると考えられる。

規模は，幅約110cm，深さ約10cmを測るが，溝底部は凹凸が激しく肩部も明瞭でない部分もある。溝内は，灰褐色粘質土が堆積している。

出土遺物は，認められなかったが水田との関係から弥生時代後期中頃を中心とする時期が想定される。



第57図　溝―27～29（1/30）

溝―28（第57図）

この溝は，溝―29の南側に溝―29と同様に水田層下部に検出されたものである。性格等についても溝―29と同じものと考えられる。規模は，幅約30cm，深さ約５cmを測る。出土遺物は認められなかった。

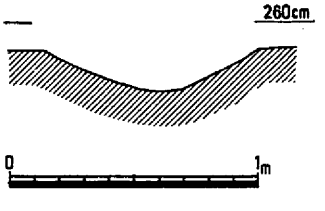
溝―29（第57図）

溝は，溝―28の南側を流走する。残存状態は悪く，溝底部が一部検出されただけである。幅約25cm，深さ約５cmを測る。

溝―30（第58図）

207Ｃから207Ｄにかけて北西―南東に微高地に沿って，弧状の流路をもつ溝で，断面は皿状を呈している。流走方向・性格等は不明であるが，微高地の下がりと関連をもつものと考えられる。出土遺物はない。

時期は弥生時代後期の水田層下にあるもののそれ程隔た

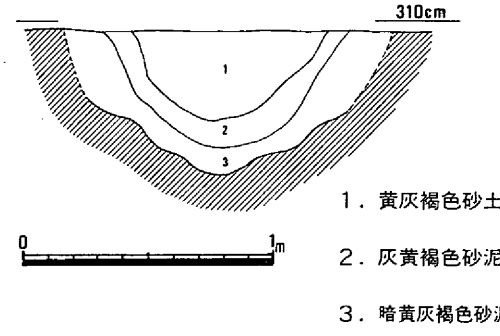


第58図　溝―30（1/30）

らないものと考えられる。　　（内藤）

溝—31（第59図）

この遺構は，微高地端部から南へ延びる島状高まりの根元付近を横断し，東西の水田をつなぐ形で7mにわたって掘削された水路である。土層は3層に大別されるが，一本の溝がのちに少なくとも2回の掘削によって再使用された状況を示し，各層の下面をそれぞれ水路の底部として，3時期にわたって機能していたことを窺わせる。



第59図　溝—31　(1/30)

各層ともほとんど遺物を含まず，水路の存在時期が明確ではないが，一度に埋まった状況を示す黄灰褐色砂は周辺の水田層を覆った洪水砂と同じ砂であり，上部の水路が水田と同時に存在していたことは明白である。また，水路が最初に掘削された時期は，その機能から微高地縁辺部に開田の手が加わってのちであり，百・後・Ⅱ期以降と考えられる。　　（柳瀬）

溝—37（第60図）

207E「島状高まり」遺構—15盛り土除去後に検出された弥生時代後期の水田に伴う溝であり，初期の「島状高まり」遺構に伴う溝状遺構である。溝は完全に島をめぐっているわけではなく，途切れながらでも続いている。時期は弥生時代後期の水田に伴う時期の溝である。

溝—38（第60図）

溝—37の外周をめぐっている幅は30cm前後で，深さ10cm前後を測ることができる溝である。溝としての役をなさず，単にかき上げによる凹と考えられる。水田に伴う時期のものである。

溝—39（第60図）

207F中央西よりで溝—38，39の東に位置している。この溝は，弥生時代後期水田層除去後検出されたもので，溝—37と同時に存在した可能性のある溝である。

溝—40（第60図）

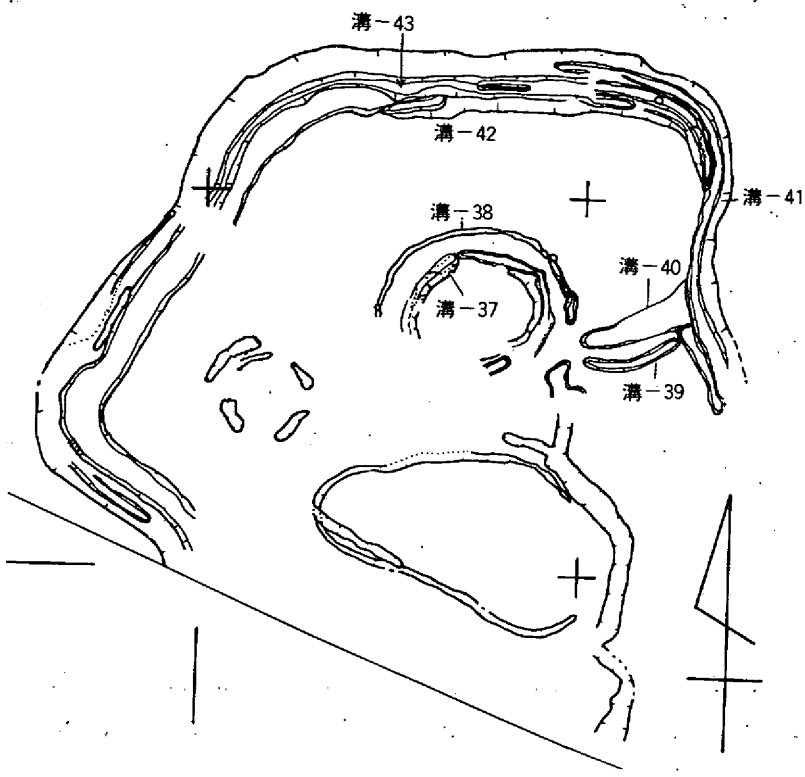
溝—39の北側に接して位置し，ほぼ東西方向の向きを示している。溝—39より後に機能していた可能性がうかがえ，溝—38と同時に存在していたものであろう。

溝—41（第60図）

206・7EFで微高地端部をめぐる幅50cm～100cmを測り，206EのFラインやや西で丸味を持って終る溝である。溝—40の次に作られた遺構といえよう。

溝—42（第60図）

206E・Fで微高地にそって東西方向に作られている深さ10cm前後の浅い溝，幅は次期の溝に削られているため不明，この42は39あるいは37と同時に存在していた可能性がある。



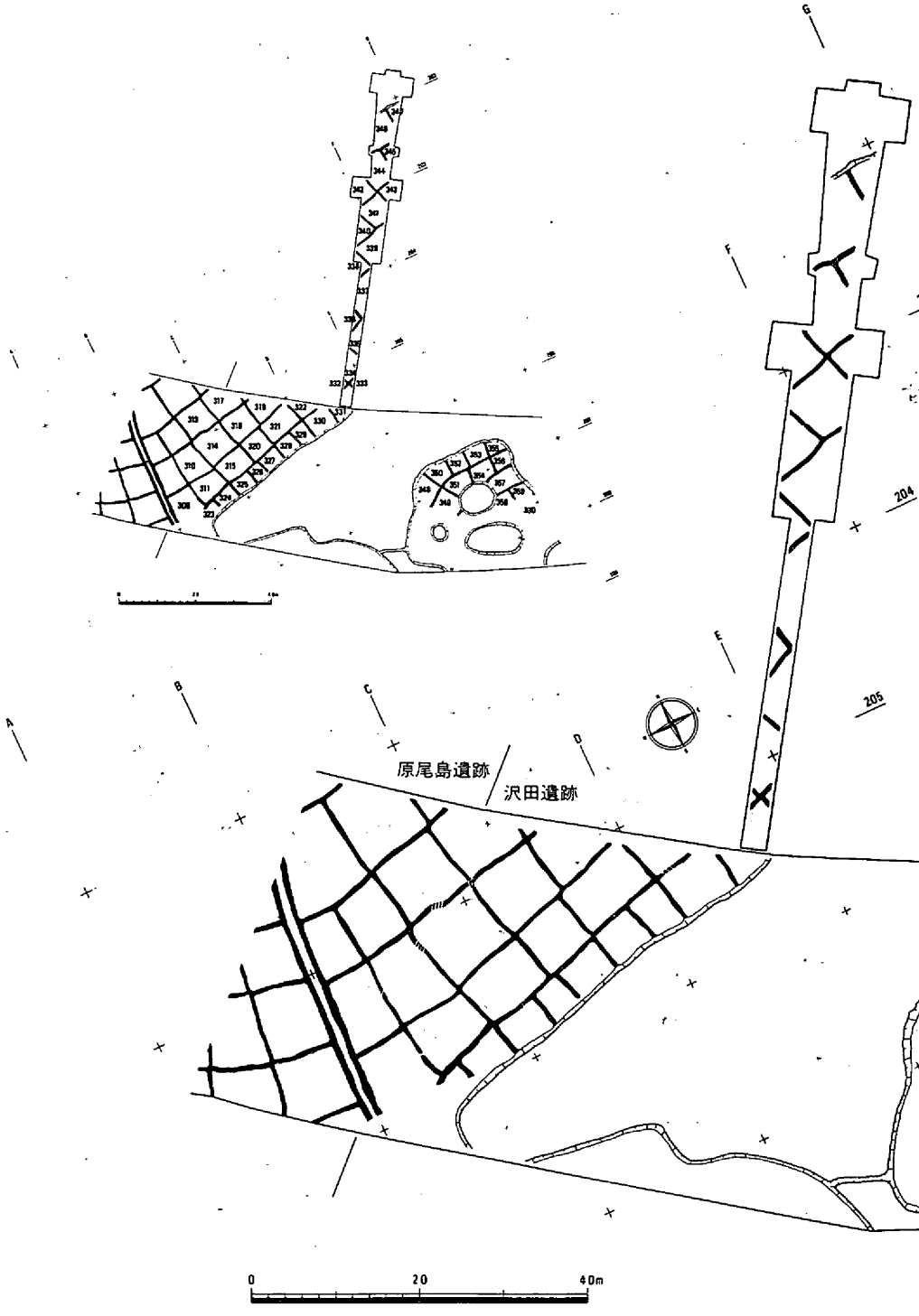
第60図　溝—37～43（1/400）

溝—43（第60図）

206E・207Dにかけて微高地端却裾を「く」字状にめぐる幅60cm～120cm，深さ10cm前後を測る。43は最後の水田拡張時において作られた可能性が高い遺構である。

以上のように，横田調査区における弥生時代後期の溝は，その大部分が上層に位置する弥生時代後期末の水田遺構との関係でとらえることができた。これらの溝—22～26，28～31，33～43は，いずれも土器の伴出は皆無に近く，時期を限定することが困難であった。しかし，「島状高まり」遺構中の遺物出土状況などから，これらの開田段階が弥生時代後期中頃を中心とする時期から行われたことが明らかとなった。

また，溝—33～43が存在するこの微高地上の開田が，「島状高まり」遺構＝いわゆる何らかの障害物を残してまで順次水田を拡大していった当時の社会的背景が今後問題となろう。また，微高地上の開田は，微高地部と約30cmほど堀り下げ水田面が形成しており，その際の堀削された残土の処理等の問題点も興味をおぼえるところである。

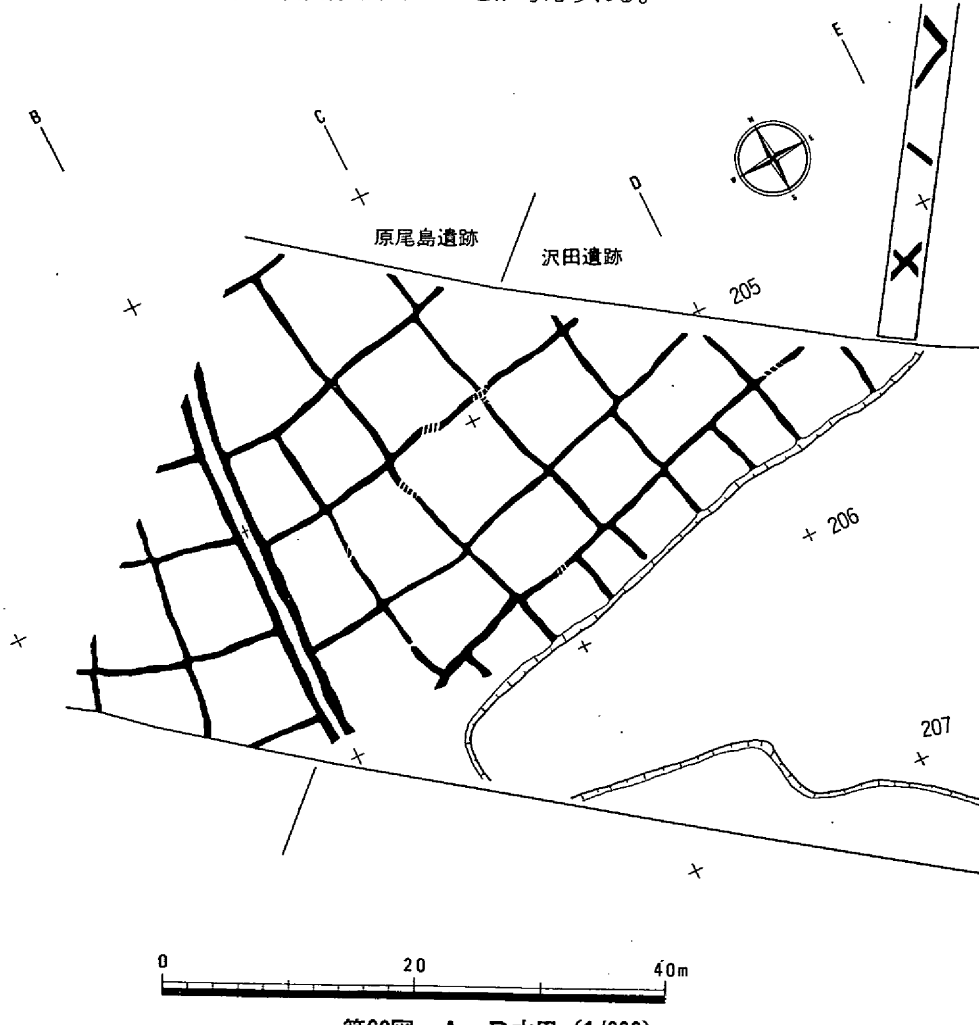


第61図　横田調査区弥生時代後期水田（1/800）

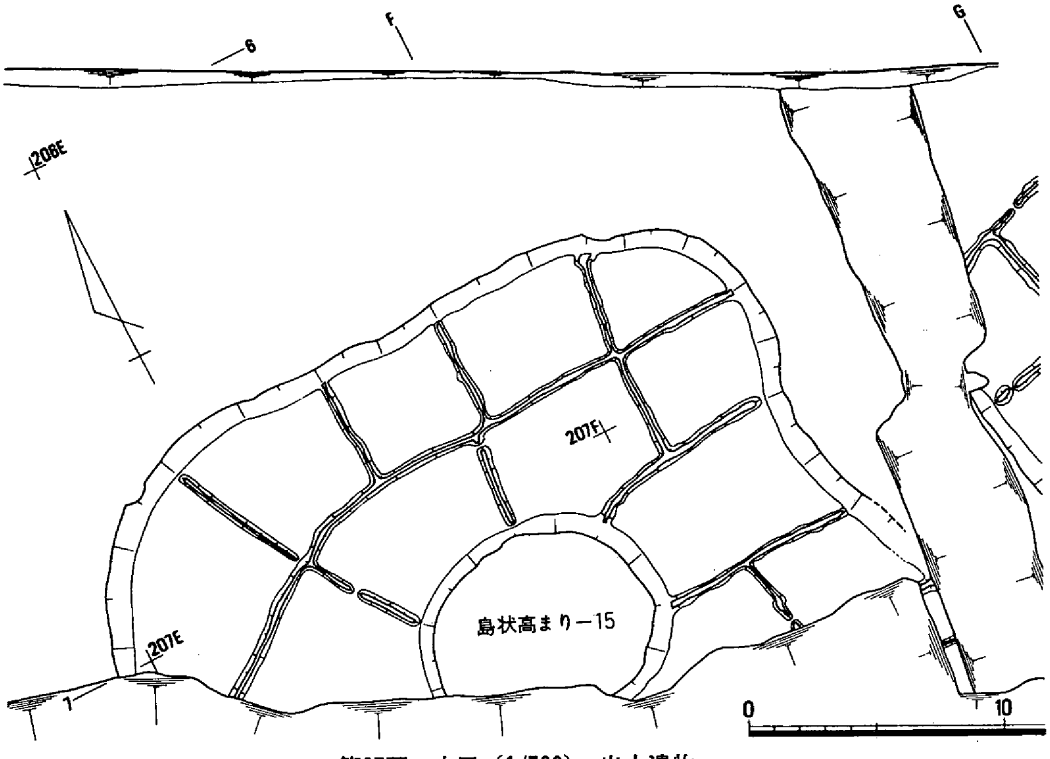
（２） 水田遺構（第61・62・63図）

横田調査区に おいては，低位部に広がる水田（第62図），微高地上の水田（第63図）が検出された。

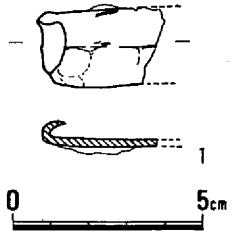
低位部の水田は，低水路部の北側端部から樋門部の北側端に確認された微高地までの約60ｍの間に形成されている。この間を７～８枚に区画し，より「田」の字状に画区性，均等性をもった造田を行なっている。しかし，微高地縁辺の323～331の水田は，他の水田に比べて畦畔が多く，小さな区画を行なっている。この323～331の北側の畦畔は，他の小畦畔に比べてやや大きめの「中畦畔」的なものである。また，この畦畔の線上は本来の微高地の下りのラインと一致する。さらには，この水田層下層には第51・55図のように微高地に平行して多数の溝が存在する。上記のような状況からみて，当初は本来の微高地までの計画的造田が行なわれ，さらに微高地縁辺部の造田化が順次行なわれたことが考えられる。



第62図　A～D水田（1/600）



第63図　水田（1/300）・出土遺物



水　田（第63図，図版21）

206・7ＥＦにおいて「島状高まり」遺構―15を核とするような形で，その核から放射状に畦畔がのび，さらに枝分かれして水田面を小区画している。分枝した畦畔には数ケ所に水口を伴っている。

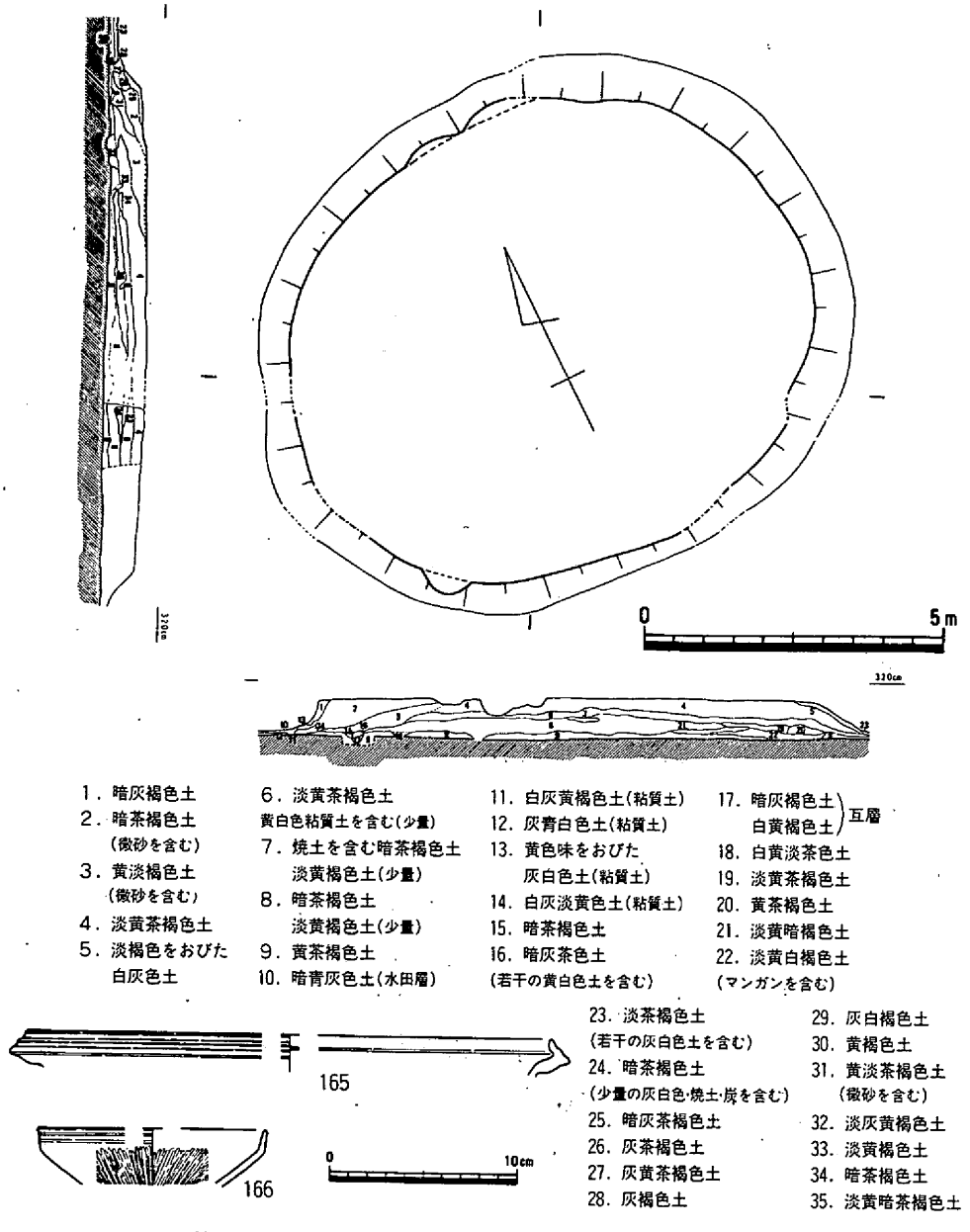
「島状高まり」遺構を中心とした水田遺構はすべて弥生時代後期と考えられる時期の洪水砂によって，一度に埋没している。

洪水砂は黄灰褐色～淡茶褐色の細砂で，水田層に近いほど粘質をおびている。洪水砂の堆積は40～50cm位いである。堆積した洪水砂層中において，図示していないが弥生時代の土器片も確認されている。

「島状高まり」遺構―15（第64図，図版21）

207Ｅ東よりに位置して検出した。平面形をみるとやや東西に長くなった楕円形を示している。この「島状高まり」遺構が水田と同時期のものであるということは，「島状高まり」遺構の斜面部に水田埋没時の洪水砂が堆積していることや，「島状高まり」遺構に畦畔が接続，あるいは「島状高まり」遺構から水田層がのびていることから明らかである。

この「島状高まり」遺構と水田との高低差は，「島状高まり」遺構の上部が後世における削



第64図 「島状高まり」遺構—15 (1/125)・出土遺物

平の対象となっていることが多いが，約50cm～60cmを測る。一方，この「島状高まり」遺構の断面をみると，中央部は数層のほぼ水平堆積層が認められ，縁辺部についてみれば，「島」はわずかづつ太っている。その反面微高地部は削り取られていることになっている。　(二宮)

「島状高まり」遺構—13・14（第60・61図）

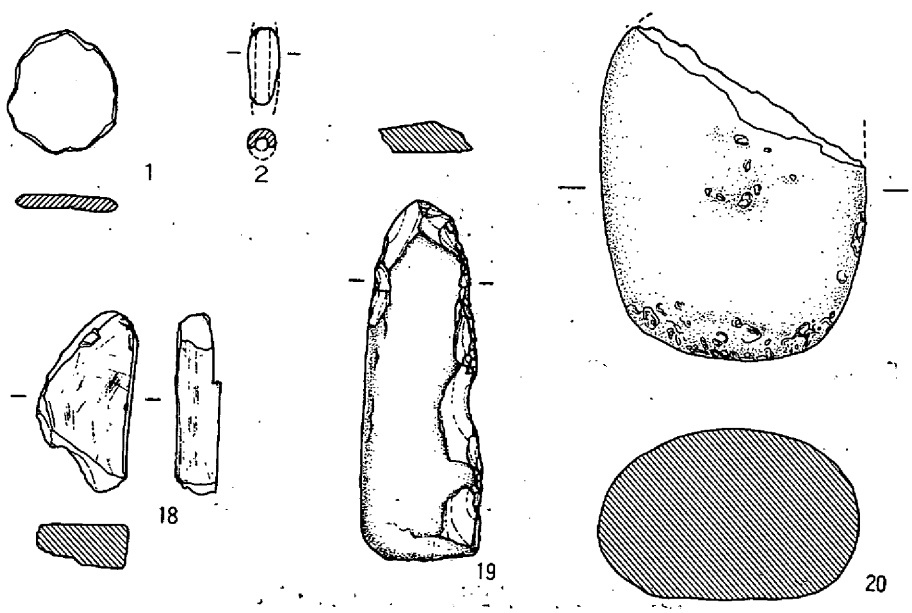
この遺構は，調査区南側の微高地に開発された水田中に位置する。平面形は，ほぼ円形を呈し，上端幅約410cm，下端幅500cmを測る。水田面と比高差は約30cmである。「島状高まり」遺構の堆積状況は，第64図と同様に芯の部分は水平堆積状況を示し，端部は斜面堆積を呈する。この芯部は，微高地の残存部にあたり，斜面堆積は「島状高まり」遺構が残存した後の堆積層として理解できる。この地点では，畦畔が検出できなかったが，他の状況からみて「島状高まり」遺構を中心に畦畔が放射状に派生していたものであろう。また，「島状 高まり」遺構の斜面堆積を除去すると溝—33が検出できる。このような状況は他の「島状高まり」遺構，微高地縁辺部にみられるもので，水田開発の過程の産物として解せられる。

「島状高まり」遺構—14もまた同様なものと考えられる。規模は，長軸約16m，短軸約8mを測り，楕円形を呈する。

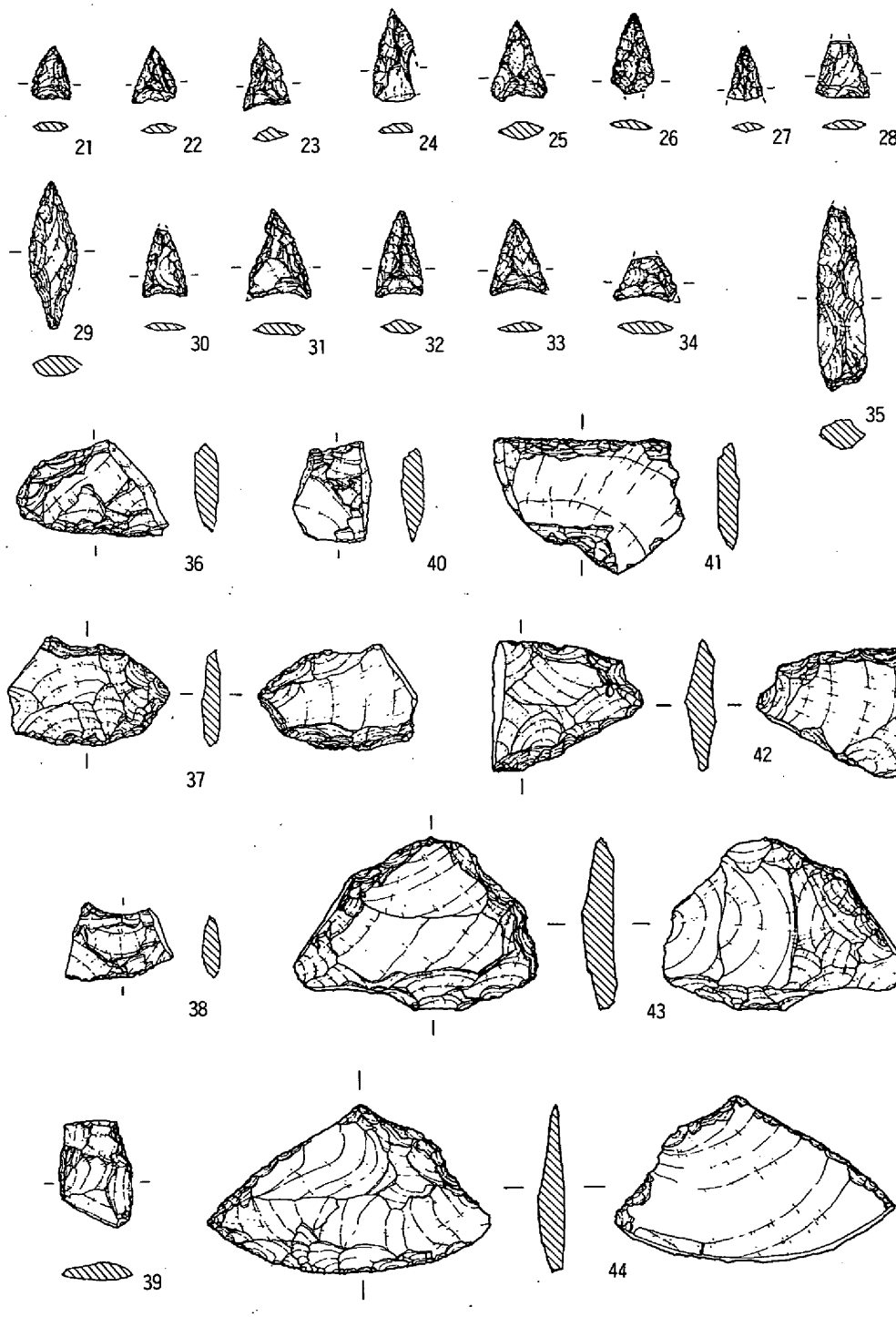
（3）包含層出土遺物（第65・66図）

横田調査区では，弥生時代後期の遺構としては溝だけである。その溝のほとんども水田遺構に関連するもので，遺物を伴出するものは皆無に近かった。図示した遺物は，弥生時代後期と限定できるものはなく弥生時代の包含層遺物として取扱っている。図示した遺物のほとんどは石器で，弥生時代前期の包含層に含まれているものもあると考えられる。

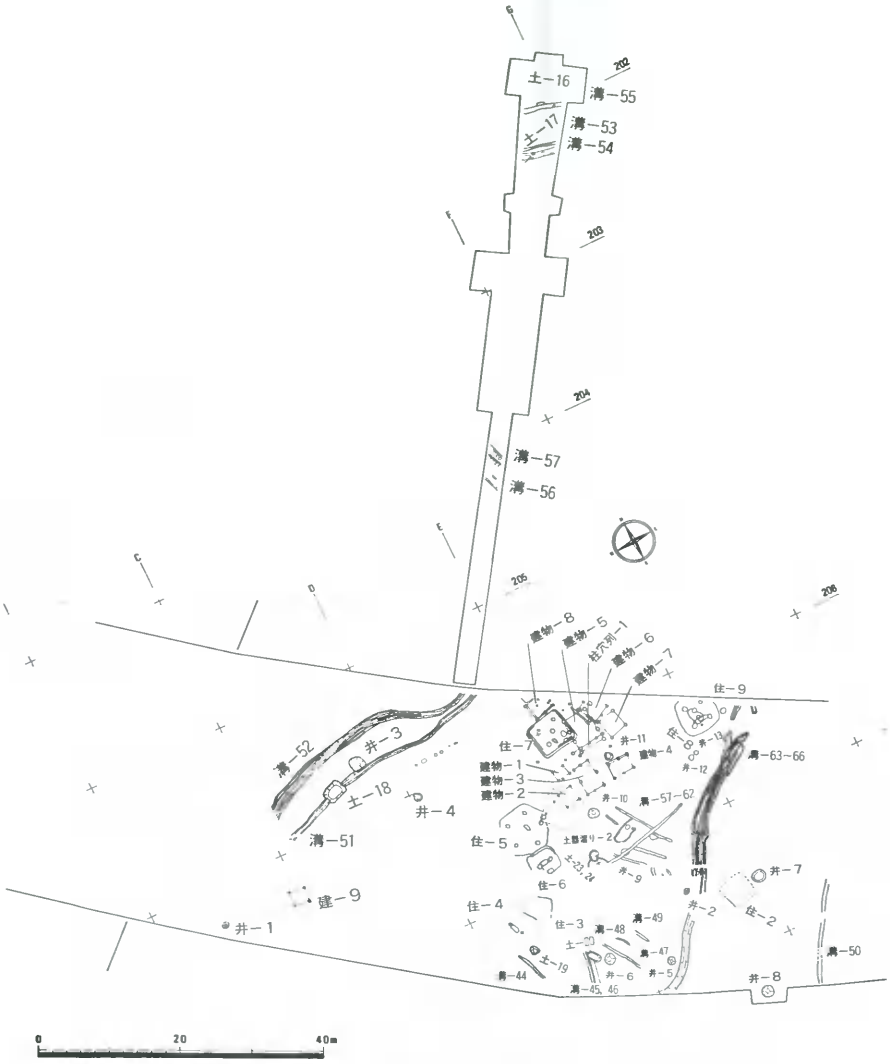
図示した土製品1・2は，紡錘車の未製品，土錘である。また石器は，石鏃，スクレイパーを中心に多量に出土した。（中野）



第65図　包含層出土遺物（1）（1/3）



第66図　包含層出土遺物（2）（1/2・1/3）



第67図　横田調査区古墳時代遺構配置図（1/800）

5　古墳時代の遺構・遺物

横田調査区全域に遺構が分布している。竪穴式住居8軒，建物7棟，井戸13基，土壙9基，溝22本と多くの遺構が検出された。いずれも微高地上に占地し，居住域を形成している。竪穴式住居8軒，井戸13基と井戸の数が多く，竪穴住居の建て替え，後世の削平等による消失をふまえても，当時竪穴式住居1軒に対して最低1基の井戸を占有した可能性を示している。

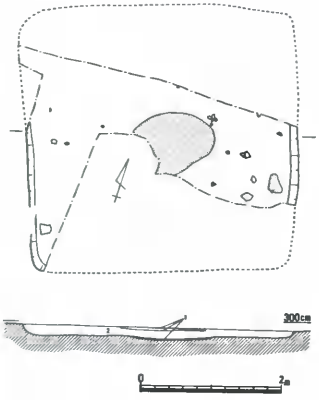
また，低位部では，弥生時代後期の水田を覆った洪水砂層の上部に，比較的安定した堆積状況が認められる。これらの低位部では，いまだ畦畔等の確認はなされてないものの，水田化されていたと考えられる。

（1）竪穴式住居

竪穴式住居―2（第67図）

横田調査区の東端部に位置する。住居址は，弥生時代後期の水田を覆う洪水層の上面で検出された。掘り方もまた，その洪水層を切り込み，床面も砂層中に終わり，住居址全体が砂層中に構築されている。

住居址は，検出状況が困難であったため，一部を明らかにしたにすぎなかった。平面形は，検出された状況からみて，隅丸長方形を呈するものと考えられる。規模は，一辺を380cmを測れるものの他辺については不明である。このため住居址の平面形が，方形もしくは長方形になるかは断定できない。住居址内は，壁体溝及び柱穴については確認できなかった。住居址床面には中央西側端部に，焼土，炭，灰が認められた。さらに，その下層にも住居址中央部に炭，灰が認められ，建て替えが行われたことが推測できる。また，床面と接して土器が少量出土した。



1．炭　　2．灰褐色泥砂

第68図　竪穴式住居―2（1/40）

出土遺物としては，埋土中と床面から土器の少片が少量出土した。これらの土器は図示できるものではなかったが，百，古，Ⅱ期の特徴を示す甕などが認められた。（中野）

竪穴式住居―３（第69図）

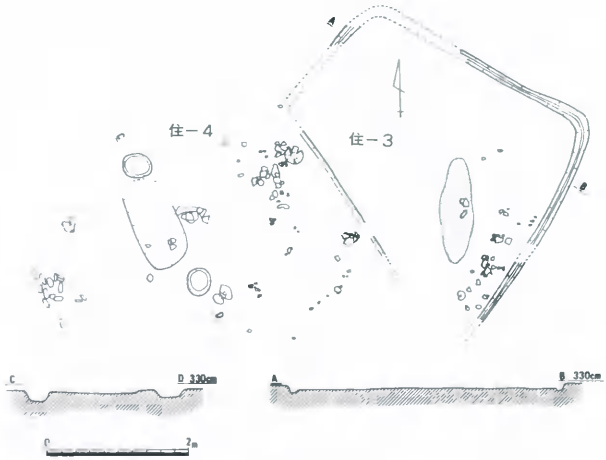
この住居址は，207Ｅの東側に位置する。中世の包含層である灰白色粘土層の下層に存在する暗灰色粘質土面で検出された。残存状況は非常に悪く，住居址の一部を確認したにとどまった。また，住居址の東側は，竪穴式住居―４によって切られている。壁体溝は，幅約15cm，深さ約10cmを測る。

住居址は，壁体溝の一部を検出できたため，隅丸の方形もしくは長方形の平面形を呈することがわかる。また一辺は，390cmを測る。柱穴及び中央ピットは確認できなかった。住居址の東側床面には，160×20cmの範囲に焼土面及び灰，炭が散布していた。さらに東端部の床面には，土器が散在していた。

出土遺物は，**167**，**168**，**174**などがある。これらの土器は，竪穴式住居―４との時期差は認められない。土器の特徴は，百・古・Ⅰ期を示すものである。

竪穴式住居―４（第69・70図）

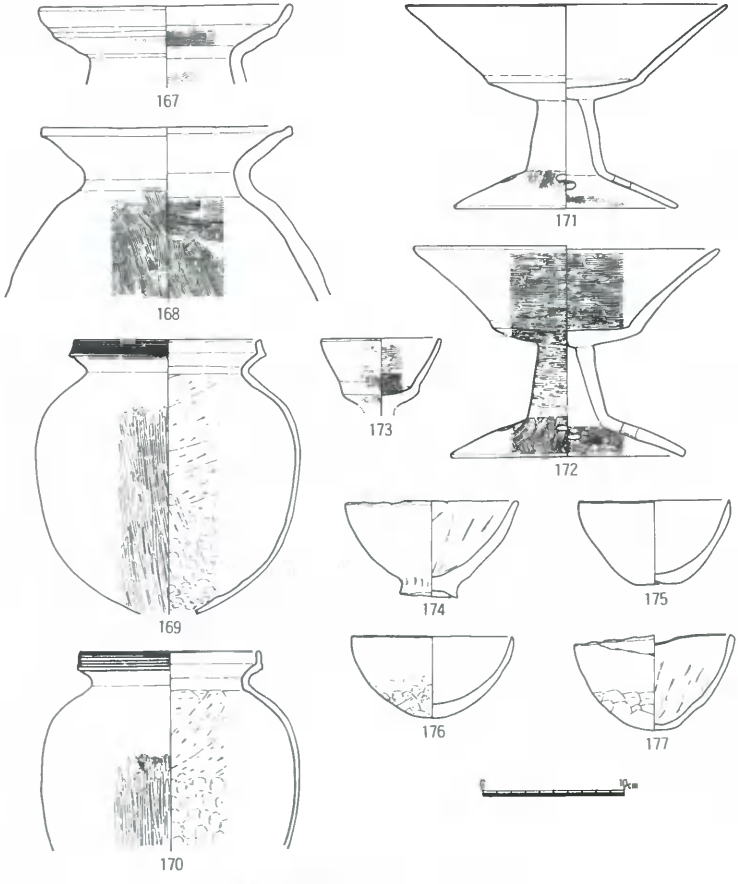
竪穴式住居―３の西側に位置するものである。この住居址もまた残存状態が悪く，壁体溝などは検出できなかった。そのため形態，規模等については不明である。しかし住居内には，柱穴が２本検出されこれらの位置関係からみて，方形及び長方形の平面形をもつ２本柱の竪穴式住居と考えられる。また柱穴の間には，130×60cmの落ち込みがあり炭・灰などが少量認められた。



第69図　竪穴式住居―３・４（1/80）

出土遺物としては，住居址床面に土器が出土した。これらの土器は，**169**，**170**の甕，**171**，**172**の高杯及び，**175**～**177**の小型の鉢を含んでいる。これらの土器は，いずれも百・古・Ⅱ期の特徴を示すものである。

この竪穴式住居―3，4からの出土した土器をみるかぎり，住居址間の時期差は認めがたい。この竪穴式住居―4は，竪穴式住居―3が放棄されたのち，あまり時間的差がないうちに建て替えられたものと考えられる。（中野）

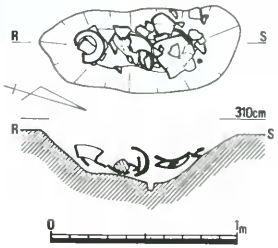


第70図　竪穴式住居―3・4出土遺物

竪穴式住居―５（第71・72図，図版23・24）

206Ｄに所在する。残存状態は悪く，埋土の厚さは深くても５㎝，浅いところは２㎝にすぎない。このため，平面形についてはやや確実性を欠くが，検出面では五角形を呈していた。５辺のうち北辺のみが完存していたが，その長さは430㎝で，わずかに内湾している。対角線の

第71図　竪穴式住居―５（1/60）



距離は720cmを測る。柱穴は5個で，柱間は北・西・南西が310cm，北東・南東は280cmである。柱穴の掘り方は，床面では直径50～60cmの円形だが，一段深くなると35×30cm程度の長方形に変わる。柱穴底に礎板を残すものが2個，柱根をとどめるものが1個あり，柱根の材質はマツであった。柱穴は長方形の長辺をすべて住居の中心へ向けている。住居の中央よりわずか東に中央穴をもつ。長径106cm，短径45

178

179

180

181

182

183

184

0　10cm

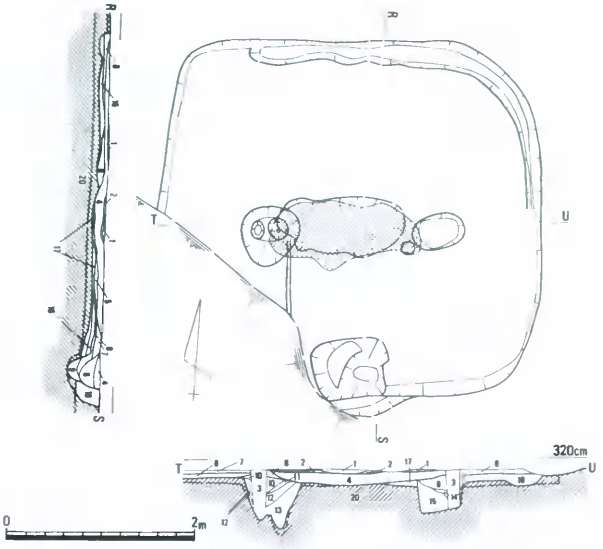
第72図　竪穴式住居―5中央穴（1/30）・竪穴式住居―5出土遺物

cmで，壙壁は45°の傾斜をなし，底面に到る。埋土は焼土と炭を若干含んでいた。中央穴内からは大形の土器片が集中して出土したが，１個体分ではなく，また，床面出土のものとも接合した。中央穴から１ｍ西の床面に長径30cmの焼土塊が認められた。床面の遺物はこの焼土塊を中心にして分布していた。なお，中央穴から南に散布する大形土器片は 第72図 180のもので，一部中央穴からも出土している。住居の床面の標高は308cm，住居の時期は百・古・Ｉである。

この竪穴式住居の東に近接して焼土塊を認めたが，周辺には柱穴が検出されなかったため，竪穴式住居の確認には至らなかった。若干の可能性があることを付記しておく。

竪穴式住居―６（第73・74図，図版25）

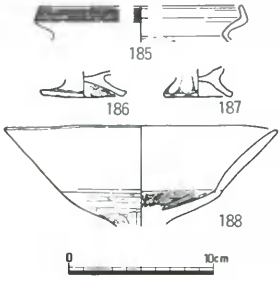
206Ｄ区，竪穴式住居―５の南に接して位置する。同住居址の一部を切っている。平面形は隅丸方形を呈し，一辺350cmを測る。深さ15cm程度の残存である。幅15～25cm，深さ４cmの壁体溝が北辺から東辺の一部で検出されたが，他の辺には認められなかった。柱穴は２個で，柱間は205 cmである。東柱穴は長径56cm，短径37cmの楕円形を呈し，深さは40cmを測る。西柱穴は長径64cmの不整円形で，深さ60cm，底に２個の柱痕穴を残していた。２個の柱穴の間には炭



1．灰黄褐色微砂
2．炭
3．灰黄褐色微砂
4．淡灰黄褐色微砂（底に炭層）
5．暗灰黄褐色微砂
6．暗灰褐色微砂
7．灰茶褐色微砂
8．暗灰黄褐色微砂
9．暗灰色微砂
10．灰黄褐色粘性微砂
11．暗灰色粘性微砂
12．暗灰褐色粘性微砂
13．茶褐色粘性微砂
14．暗灰色粘性微砂
15．茶褐色粘性微砂
16．淡灰黄色微砂
17．暗灰色粘性微砂
18．灰黄褐色微砂
19．暗灰褐色微砂
20．暗灰褐色粘性土

第73図　竪穴式住居―６（1/60）

層の拡がりがあり，長径160cm，短径75cmで東西に長く，一部は西柱穴の埋土上に及んでいた。炭層の厚さは最大で３cmである。この住居址中央の炭層は２層あり，いずれも炭層の範囲は床面が凹んで浅い土壙状を呈している。図示したものは下の方の土壙で，長径135cm，短径64cm，深さ10cmの規模である。住居址の南辺には81×62cmの方形土壙が付属している。底は２段になり，深いところで住居址検出面から34cmを測る。この壙中，第73図６の層から高杯の杯部が出土している。埋土の観察によれば２面の床が存在したとみられ，このことは西柱穴や南辺土壙の形状からも確認される。ただし，住居の掘り方には変化は認められない。床面の標高は296cmを測る。住居の時期は百・古・Ⅰである。



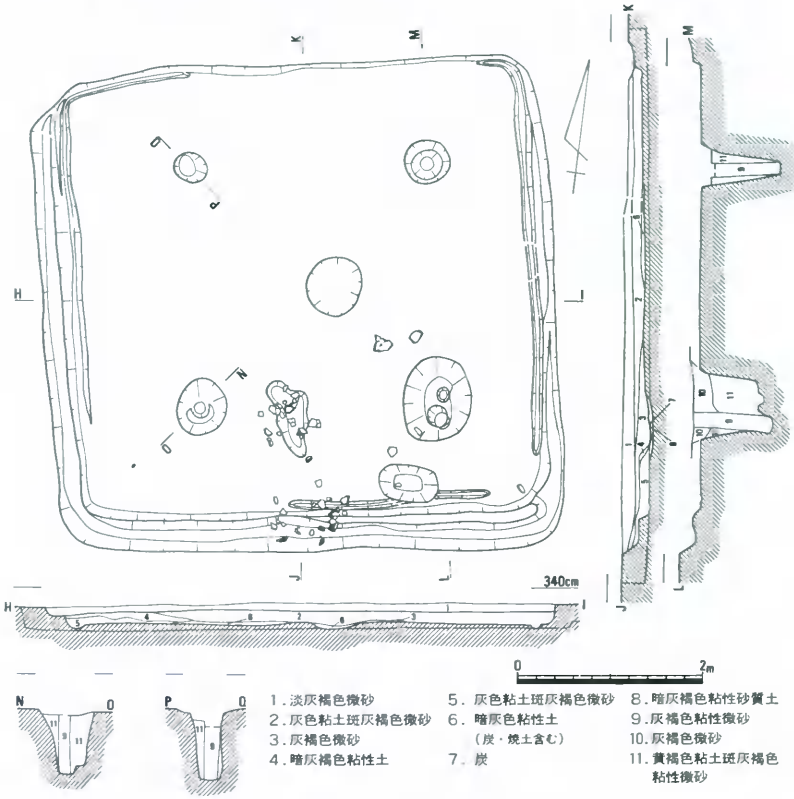
第74図　竪穴式住居―６出土遺物

竪穴式住居―７（第75・76図，図版26）

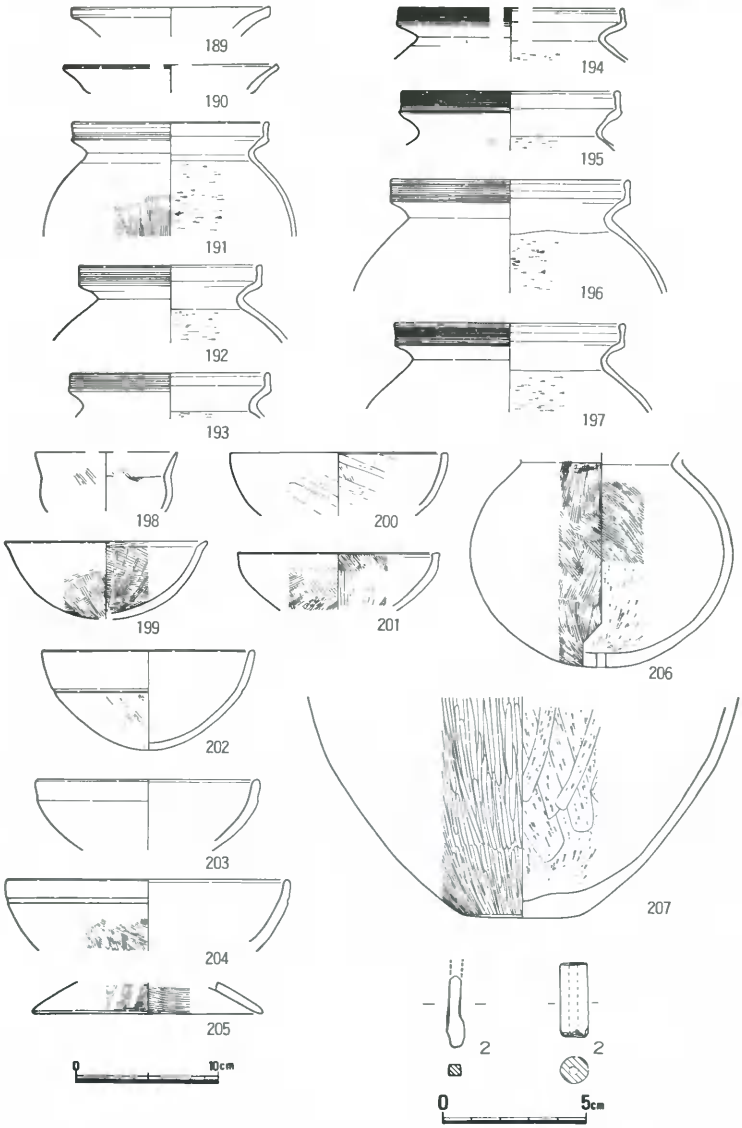
206Ｅ区の北西端に位置する。隅丸方形で，東西545cm，南北510cmの規模をもつ。西辺が東辺より短いため，やや歪んでいる。南辺と西辺は二段になっていたが，これは後に述べるように拡張の結果と考えられる。中の段で測ると東西520cm，南北474cmとなる。壁体溝が東辺と西辺，それに南辺の一部で確認できた。東辺の溝は幅10～15cm，深さ３cm程度である。柱穴は４個で，柱間は東西間250cm，南北間260cmと南北が若干長い。しかし，南側の柱穴はいずれも柱痕が２個あるようで，検出面で確認されなかった方の柱痕によれば南北間も250cm程度になる。柱穴の掘り方は一定しない。北西のものがもっとも小さく，長径36cmの長円形，北東のものは直径48cmの円形，南西のものは長径60cmの長円形，南東のものは最大で長径88cmの楕円形を呈する。柱穴の深さは70～75cmを測る。住居の中央には直径63cm，深さ８cmの円形の中央穴があり，炭と焼土が埋土に含まれていた。また，南側の２柱穴の中間西寄りにも長径85cmの不整形な落ち込みがあり，底に炭の薄層がみられた。深さは８cm程度である。南東柱穴の南30cmには長さ62cm，幅38cm，深さ28cmの方形土壙が付設されている。壙内埋土には炭・焼土は含まれない。

この住居址は深さ20cm前後の残存にすぎなかったが，埋土はやや複雑な状況を示していた。第75図１の層の底は南辺では中の段の上面と繋がり，住居址内でほぼ水平に拡がっていることから最終の床面ではないかと考えている。住居を若干拡張し，床を貼り直したと思われる。南側の柱穴が大きいのは掘り直しのためであろう。ただ，この最終床面には炭や焼土の顕著な拡がりが確認されなかったためいくらかの疑念は残る。４と５の層はベッド状遺構と呼ばれる高

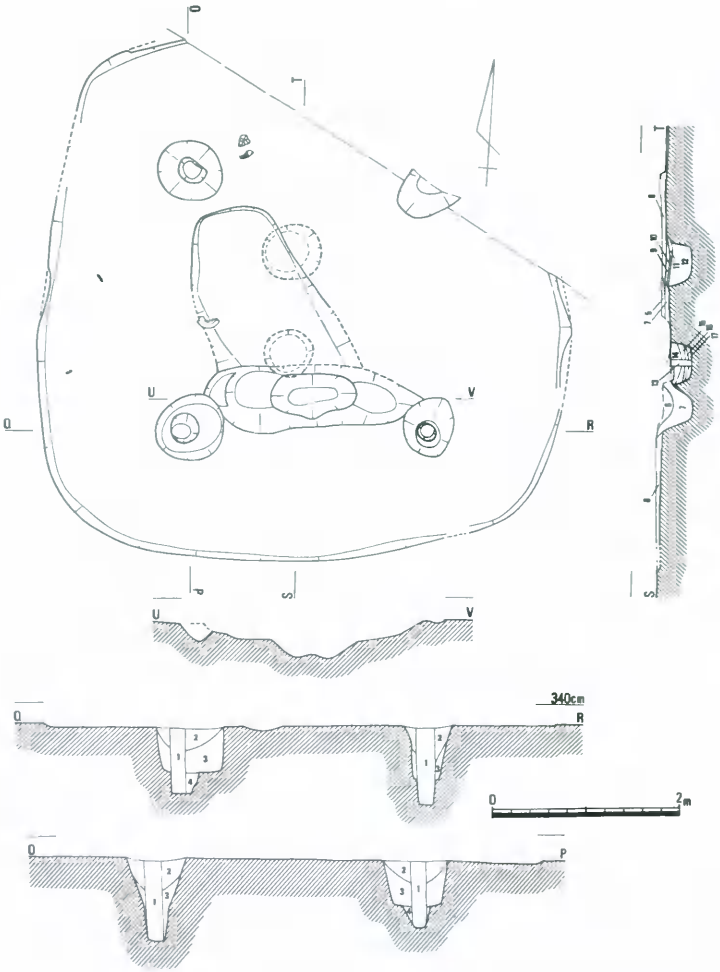
床部の可能性がある。最終床面を少し掘り下げた段階で西辺側に幅95cm，南辺側では65cm程度の幅で検出された（図版26―２）が，北辺と東辺には認められなかった。５の土は粘土のブロックを含んだ微砂層で人為性が考えられる。ただ，西辺側の断面では肩が明瞭でなく，６の層が４・５の層の下にもぐることが注意を要する。６の層には炭・焼土が含まれている。遺物はほとんど１の層から出土し，南辺中央から南側柱穴間に集中していた。最終床面から数cm浮いているが，管玉は床面に近い。図示した遺物はすべて１の層出土である。最初の床面の標高は302cm，最終床面のそれは314cmを測る。住居の時期は百・古・Ⅰである。



第75図　竪穴式住居―７（1/60）



第76図　竪穴式住居―７出土遺物

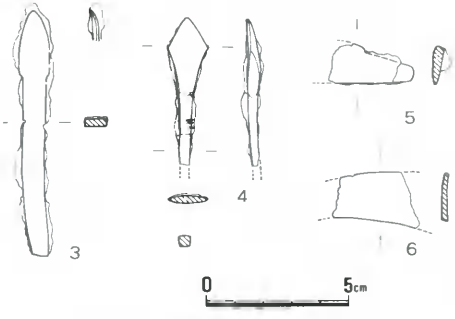


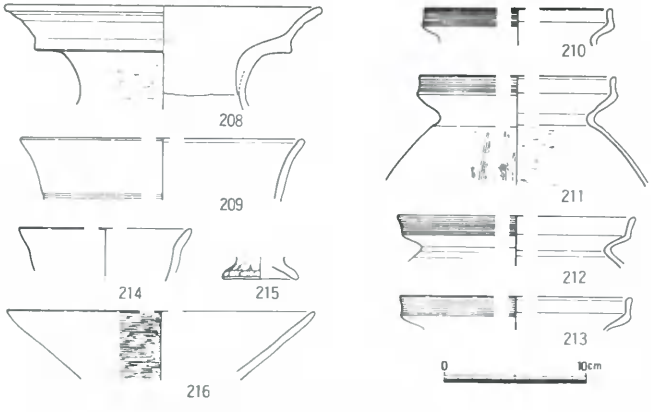
1．灰褐色粘性微砂
2．灰黄褐色砂質土
3．黄褐色粘土斑灰色粘性微砂
4．灰色粘土斑黄褐色粘土
5．淡灰褐色微砂
6．灰黄褐色微砂
7．灰黒褐色砂質土
8．灰褐色砂質土
9．暗灰色粘性土
10．灰褐色粘性土
11．黄褐色粘性土
12．暗灰褐色粘性微砂
13．灰褐色微砂
14．淡灰褐色微砂
15．淡灰褐色微砂斑
灰褐色粘性微砂
16．灰褐色微砂
17．暗灰色粘性微砂

第77図　竪穴式住居―８（1/60）

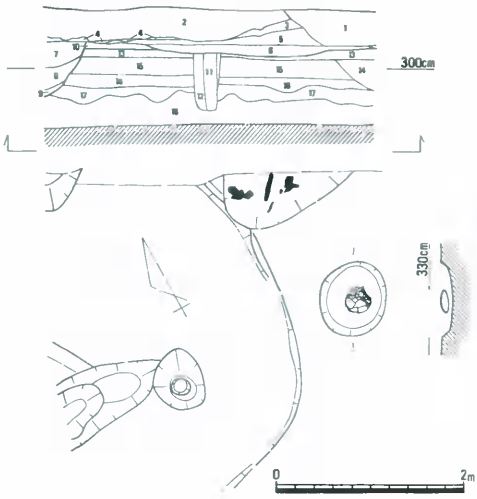
竪穴式住居―8（第77・78図，図版27）

206F区の北西端で検出した。わずか5㎝程度の深さしかないため平面形にはやや不安があるが，隅丸で胴張りの方形を呈している。東西560㎝，対角線は640㎝を測る。壁体溝は認められなかった。柱穴は4個である。北西柱穴は長径70㎝，南西柱穴は74㎝，南東柱穴は65㎝で，いずれも円形ないしは長円形である。4柱穴のうち北東以外は柱が柱穴底から沈んでいる。柱穴の深さは50～60㎝と考えられる。南側の2柱穴の間に長さ230㎝，幅67㎝の長楕円形の土壙があり，中央部が長径89㎝，短径48㎝の楕円形で一段深くなる。壙内埋土には炭粒が含まれ，底に炭の堆積が多い。中央穴が南へずれたものと考えられる。深さは42㎝である。この中央穴から北西へ，長さ180㎝，幅135㎝，深さ8㎝前後の浅い落ち込みが伸びている。埋土は中央穴と類似し，やはり底には炭が多い。この落ち込みと中央穴との境を断面で観察すると，中央穴が落ち込みを切っていると判断される。落込みの下から2個の柱穴が検出され，この住居が当初2本柱ではなかったかと思われたが，2個の埋土が大きく異なること，接近しすぎること，住居の中軸線から西へずれることなどから疑問視される。北の柱穴は径63㎝，南は52㎝を測



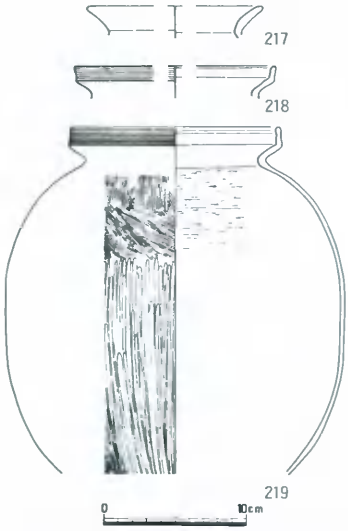


第78図　竪穴式住居―8出土遺物



1．撹乱層
2．置土
3．撹乱層
4．灰黄褐色細砂
5．灰色粘性土
6．灰褐色粘性砂質土（炭・焼土を含む）
7．灰褐色粘性砂質土
8．暗灰褐色粘性微砂
9．黄色粘土斑暗灰褐色粘性土
10．暗灰褐色砂質土
11．暗褐色粘性土
12．暗褐色粘性土
13．暗灰褐色粘性砂質土
14．暗褐色粘性土
15．暗褐色粘性土
16．暗茶褐色粘性土
17．黄褐色粘土斑暗茶褐色粘性土
18．黄褐色粘土

る。他の住居址の可能性がある。住居址の床面の標高は317 cm，時期については百・古・Ⅰかと考える。



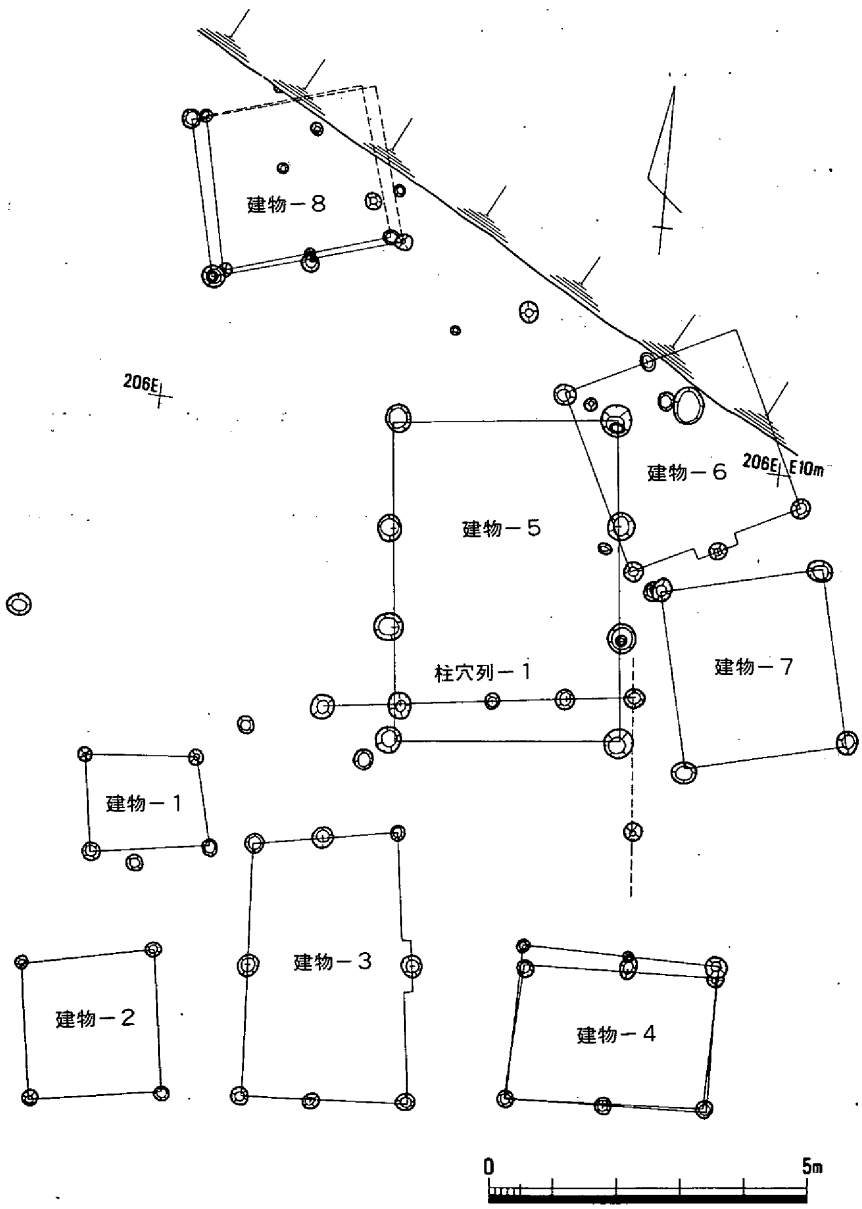
第79図　竪穴式住居―９（1/60）・出土遺物

竪穴式住居―９（第79図，図版28）

竪穴式住居―８の東肩を切っている土壙が検出された。壙内には多くの炭や焼土が含まれ，炭化材もみられた。検出面で長径137cm，深さ10cmのこの土壙は竪穴式住居の中央穴とよく類似した様相を示していることから，ここに竪穴式住居の存在を想定した。第79図６の層が中央穴の埋土にあたる。しかし，周辺の精査では柱穴は確認できず，わずかに調査区北壁で中央穴下にある柱穴を，そして中央穴から70cm南で完形に近い甕の入った土壙を検出したにとどまった。この土壙は直径82cmの楕円形を呈するが，深さは８cmと浅く，柱穴とは考えられない。住居に伴うかは明確でないが，近接していることは注意される。（岡本）

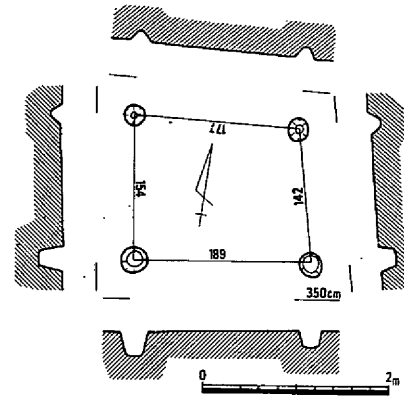
(2) 建　　物

206E区の北西部分から205E区にかけて，古墳時代の建物群が検出された。8棟の掘立柱建物と1列の柱穴列からなるが，重複するものがあったり，方向の異なるものがみられ，同時に存在したとは考えられない。数棟が2～3時期に亘って移転したり，建て替えられた結果であろう。建物―2・3・4は南辺がほぼ1列に揃い，ほぼ等間隔で位置することから同時期に存



第80図　建物配置図（1/120）

在したと考えられ，柱穴列—1か建物—5のどちらかがこれに共伴した可能性が高い。8棟の建物のうち2間以上の桁行をもつものはすべて束柱をもたない。したがって倉庫ではなく，住居と考えたい。この時代の建物の特徴かもしれないが，それぞれの建物の柱穴を結んだ平面形はどれも正確な長方形とはならず，かなりの歪みがみられる。建物—5がかろうじて長方形を保っているのみである。建物—5はこの建物群の中心的存在であることから，念入りに作られたためでもあろうか。柱穴の埋土は淡灰褐色微砂で古墳時代の竪穴式住居の埋土ときわめてよく類似している。しかし，建物—5の柱穴が竪穴式住居—7の壁体溝を切っているのが確認されたことから，竪穴式住居よりは新しいと考えられる。柱穴からの遺物の出土は僅少であるが，須恵器はみられない。このことから，この建物群は古墳時代前半のものと考えている。



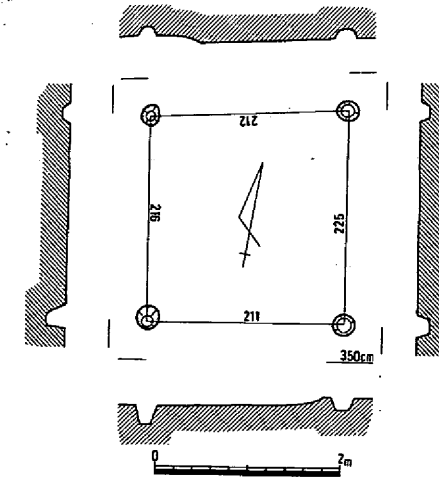
第81図　建物—1 (1/80)

建　物—1（第81図，図版29）

建物群の南西に位置し，もっとも規模の小さい建物である。1×1間で，平面形はかなり歪んでいる。柱間は図示の通りで，東西が長い。柱穴は直径25cm前後，深さは，もっとも深い南西柱穴で25cm，浅い北東柱穴は12cmにすぎない。南西柱穴底の標高は288cmを測る。北辺と東辺のなす角度は100°，西辺の方向はMN9°Wである。

建　物—2（第82図，図版30）

建物群の南西隅に位置する。1×1間で，平面形は方形に近いが，南北がわずかに長い。北東柱穴が長方形の規格から少し北へずれて位置しているため，北辺と南辺は平行しない。北辺と東辺のなす角度は87°である。柱穴の規模は直径22〜25cm，深さは北東柱穴で10cm，南西柱穴では28cmと，建物—1と同様に南辺側が深い。南西柱穴底の標高は283cmを測る。西辺の方向はMN10°Wで，建物—1とほぼ等しい。建物—1との距離は170

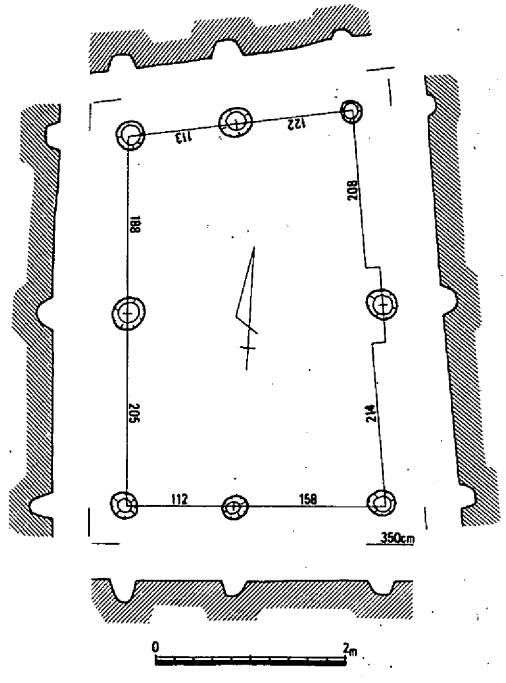


第82図　建物—2 (1/80)

cm程度である。

建　物―3（第83図，図版30）

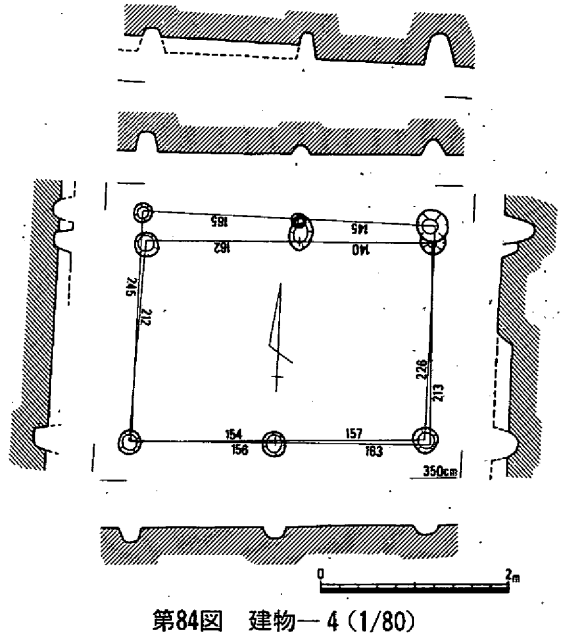
建物群の南辺の中央に位置する2×2間の建物である。かなり不整形で，4角はすべて角度を異にする。北東角88°，南東角85°，南西角89°30′，北西角97°30′を測る。さらに東辺の中央柱穴は辺から14cm東へずれている。各辺とも中央の柱穴は中点からはずれている。このように，細部についてはかなりでたらめであるが，全体としては南北棟の建物を構成している。柱穴は直径23～36cmと変化があるが，30cm以上のものが多い。深さは9～25cmで，南西角柱穴の標高は288cmである。西辺の方向はMN3°W，東辺はMN8°Wを測る。建物―2との距離は120cmで近接している。



第83図　建物―3（1/80）

建　物―4（第84図，図版30）

建物群の南東隅にあり，建物―3から156cm離れている。2×1間で，東西棟の建物である。北辺の柱穴はそれぞれ重複し，建て替えられたものとみられる。柱穴の切り合いからすれば縮小されている。どちらの建物も歪んでいるが，初期のものは北辺の両角，次期のものは東辺の両角が直角で，他の1角は86°30′と85°30′である。柱穴の規模はかなり削平されたものがあるため一定しないが，直径30cm，深さ20～30cm程度を測る。

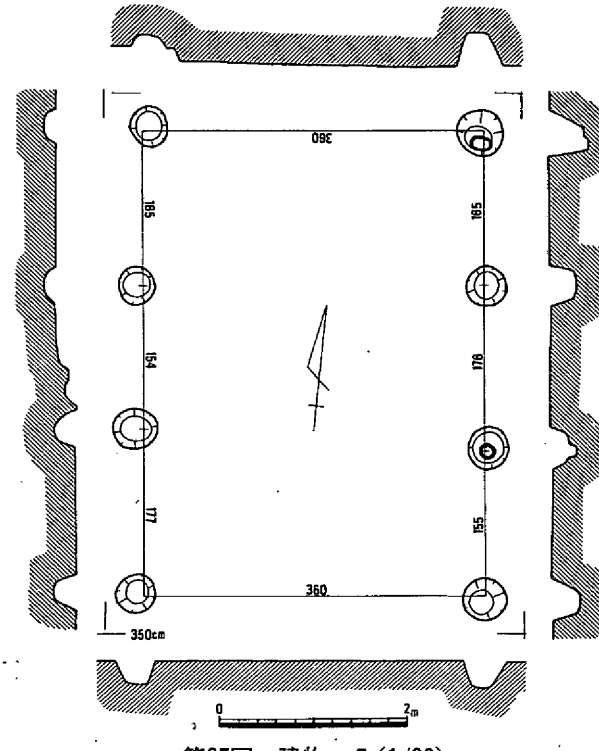


第84図　建物―4（1/80）

柱穴底の標高は285cm。建物の東辺の方位は初期ＭＮ45′Ｅ，次期ＭＮ２°Ｗである。

建　物－５（第85図，図版29）

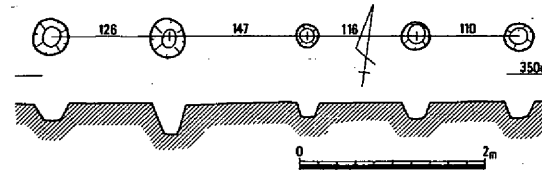
建物群の中核となる大形の掘立柱建物である。３×１間の規模をもつ。平面形はほぼ長方形となり，他の建物にくらべて企画はしっかりしているが，それでも桁行南から２番目の柱穴の位置に狂いがある。梁間360cm，桁行全長496cmを測る。柱穴の規模は直径45～50cmと，他の建物の柱穴の1.5～２倍になる。２個の柱穴で柱が沈んだ痕跡が認められ，その径は16cmと22cmである。柱穴の深さは25～37cmで，北東隅の柱穴底の標高は284cmを測る。柱穴の東辺の方向はＭＮ－６°－Ｗを示し，建物－２と建物－３の東辺の方向に近い。建物群の配置にある程度の方向性が考慮されていたとすれば，建物１～５は同じ方向性をもつことから，共存の可能性が高い。建物－５と建物－３の距離は144cmを測るが，この距離は，建物－３の建物－２・４との距離に近く，このことも共存の可能性を高める。



第85図　建物－５（1/80）

柱穴列－１（第86図，図版29）

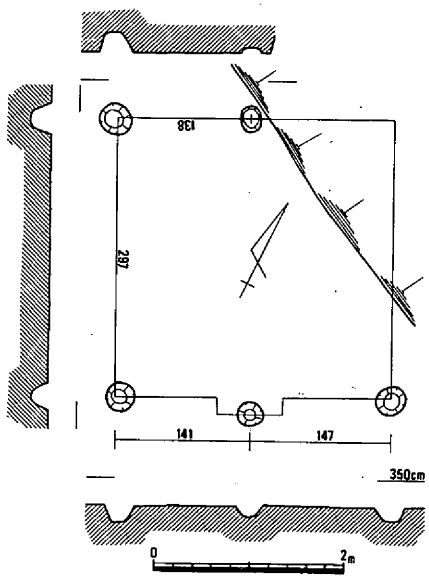
建物－５の南半で重複している４間の柱穴列である。柱穴の規模・柱間ともに不揃いであるが，一直線上に位置し，建物－１・２の南辺と近似した方向をもつことから柱穴列としての存在を考慮した。５個の柱穴のうち最大のものは西から二番目の柱穴で，直径41cm，深さ30cmを測り，最小のものは中央の柱穴で，直径25cm，深さ16cmの規模である。東端の柱穴底の標高は304cmで，列の方向はＭＮ82°Ｅを測る。この方向は建物－３の東辺とも直交する。



第86図　柱穴列－１（1/80）

建　物―6（第87図，図版29）

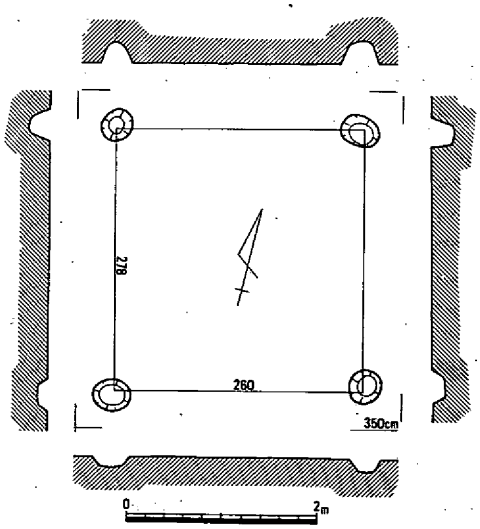
建物―5と重複し，方向を大きく異にする。1×2間であるが，短辺側が2間になっている。いちおう南北棟と考え，北辺と南辺の中央柱穴は規模が小さくて浅いことから束柱の可能性もある。北東柱穴が調査区外にあるが，平面形はほぼ長方形を呈する。ただ南辺の中央柱穴は辺から18cm南にずれている。各隅の柱穴は直径31～35cm，深さは15～21cmを測るが，南辺と北辺の中央柱穴は直径27cm，深さ16・12cmとひと回わり小さい。北西柱穴底の標高は299cmである。東辺の方向はMN25°30′Wを測るが，この方向に近い建物は他にみられない。建物―7との距離は45cmときわめて接近しているため，共存は考えにくい。方向と距離の2点からすれば建物―6は孤立している。



第87図　建物―6（1/80）

建　物―7（第88図，図版29）

建物―6の南，建物―5の東65cmに位置する1×1間の建物である。南北棟と考えられる。南西柱穴がわずかに北へずれているが，ほぼ長方形の平面形をもつ。柱穴は直径35～40cm，深さ10～15cmで，他の建物の柱穴より少し大きめである。北東柱穴底の標高は296cmを測る。柱穴底の標高は建物―1～5のそれと比較すると10cm程度高く，建物―6と近い。このことも，方向と共に，時期の相違を示すものかもしれない。東辺の方向はMN13°30′Wを測り，建物―8の西辺の方向と近似する。

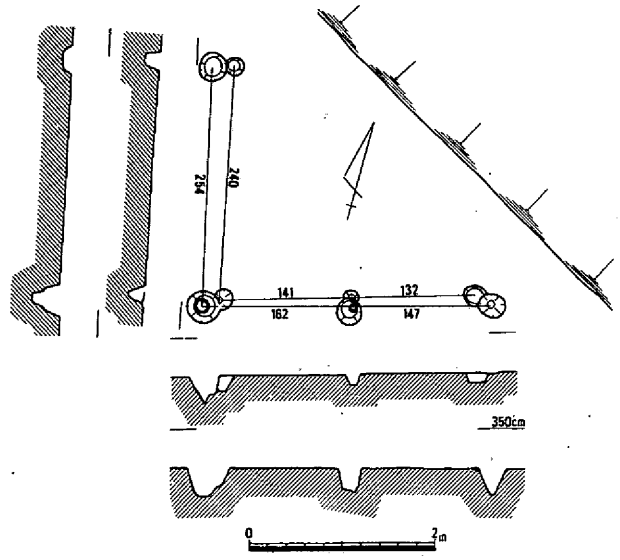


第88図　建物―7（1/80）

建　物―8（第89図，図版30）

建物群の北端に位置している。調査区端に存在しているため明確ではないが，

２×１間ではないかと想定している。各柱穴ともに重複がみられ，新しく建て替えられたことがわかる。わずかに拡張されたにすぎないが，その割りには柱穴が一段と大形化している。企画そのものには大きな変化はみられず，南西隅の角度は，初期が85°，次期が86°30′を測る。初期の建物の柱穴は直径17～25cm，深さ10～16cmであるが，次期の建物の柱穴は直径28～35cm，深さ10～29cmと10cm程度大きく深くなっている。南辺の中央柱穴底の標高は初期で297cm，次期は286cmを測る。西辺の方向は初期がMN11°30′W，次期がMN13°Wとなり，前にも述べたように，この方向は建物―７の東辺の方向と近い。

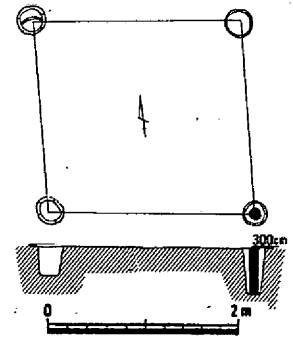


第89図　建物―８(1/80)

以上に述べたことから，この建物群は，方向性と重複関係ならびに建物間の距離から，少なくとも三期に分けられる。建物―１～５は共存した可能性が高く，建物―６～８とは時期を異にするようである。建物―６～８は建物群の北半にあり，一部調査区外に柱穴が想定されていることからすれば，北の調査区外に建物―６～８と方向を同じくする建物群の存在は十分に想定することは可能である。今後の調査に期待したい。　（岡本）

建　物―９（第90図）

206Ｃ区のＣライン上に位置する１間×１間の小さな建物である。柱の心々距離で東西220cm，南北200cmと少し東西に長く，やや菱形を呈している。近辺にもまだ柱穴を数本検出しているがまとまるものはない。この建物柱穴の大きさは平均直径30cmあり，南東隅の柱穴には直径12cmの柱痕に木質が少量残存していた。また柱穴の深さは26cm～55cmを測る。時期については出土遺物が全くないため断定できない。土層から考えて弥生後期～古墳初頭の可能性が高い。　（浅倉）

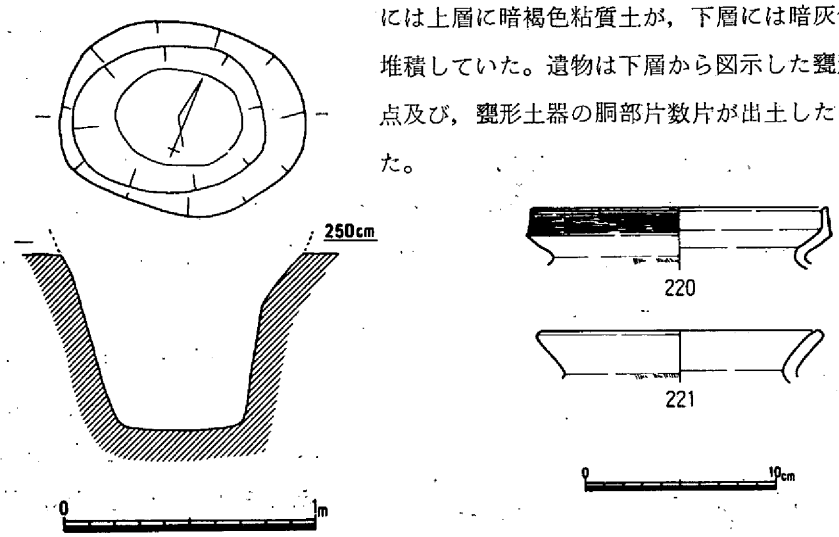


第90図　建物―９(1/80)

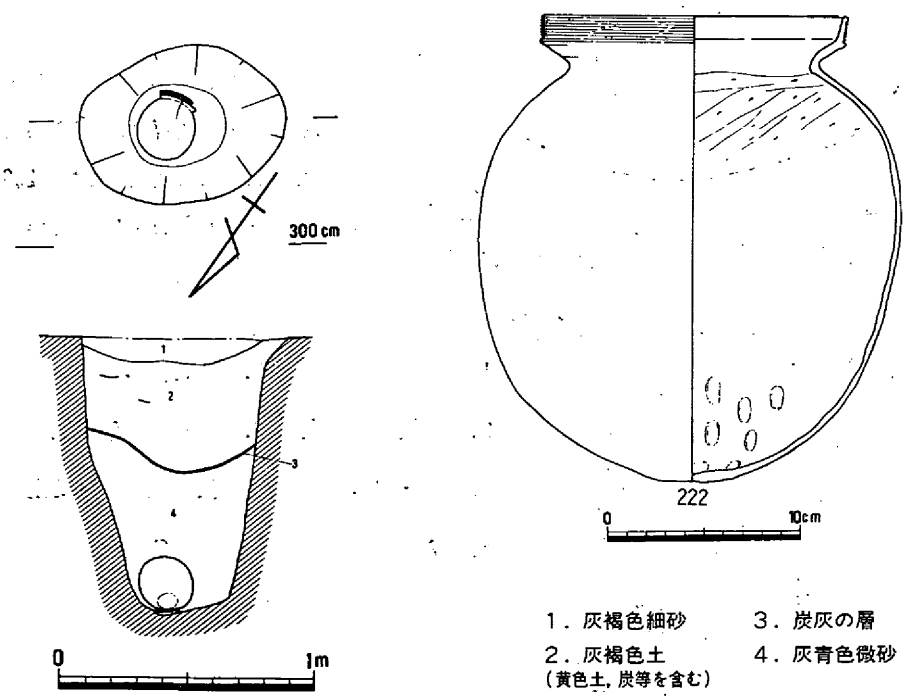
（3）井　　戸

井　戸－1（第91図）

206Bから検出された。平面形態は径約100×70cmの楕円形を呈し，深さ70cmを測る。遺構内には上層に暗褐色粘質土が，下層には暗灰色粘質土が堆積していた。遺物は下層から図示した甕形土器片2点及び，甕形土器の胴部片数片が出土したのみであった。（江見）



第91図　井戸－1（1/30）・出土遺物



第92図　井戸－2（1/30）・出土遺物

井　戸－２（第92図）

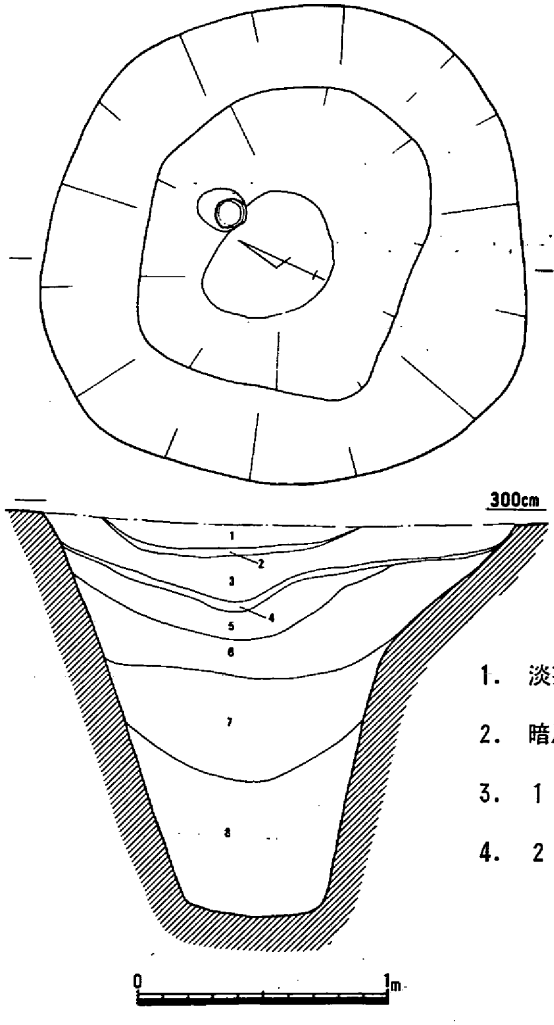
井戸は，弥生後期の水田址を埋める洪水砂の上から掘り込まれたものである。井戸の平面形を見ると，ほぼ楕円形を呈し，長径82cm，短径62cmを測る。掘り上げた井戸の深さは110cmを測る。井戸の底面からは，横向きの状態で甕型土器一個が出土した。（井上）

井　戸－３（第93図）

この井戸は，Ｄラインの西側の溝―51と溝―52の間に位置する。井戸の一部は，溝―51と切り合っているものの先後関係は明らかでなかった。

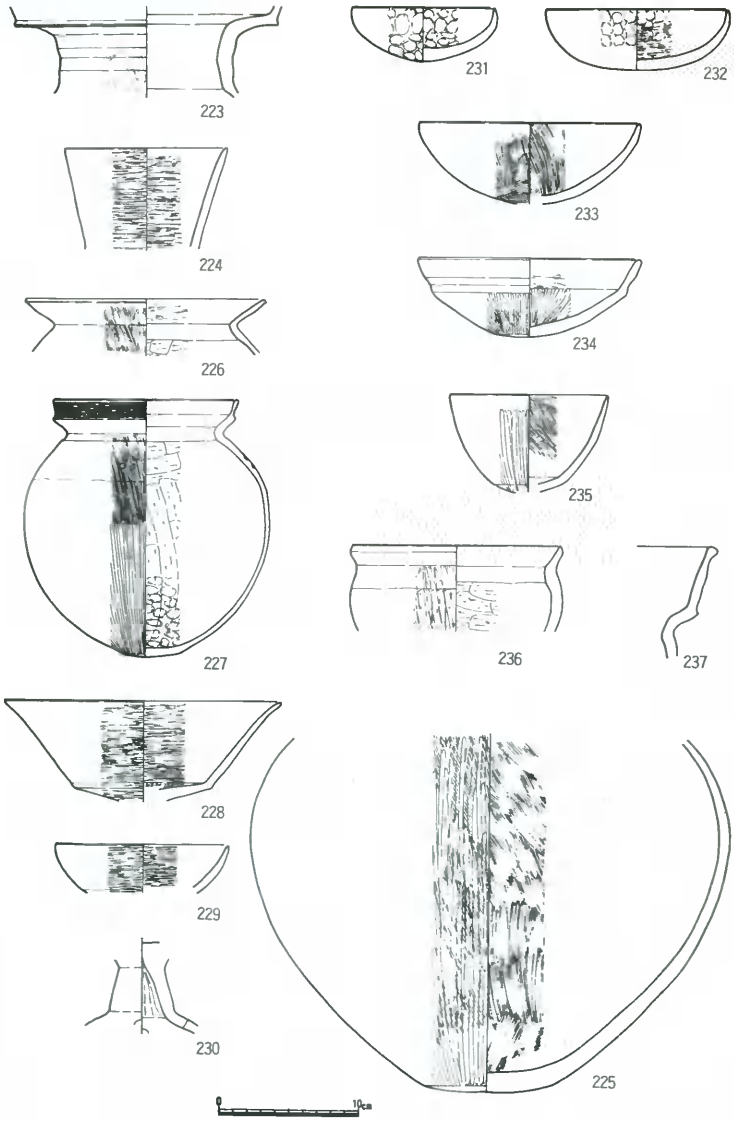
平面形は，径約190～200cmのほぼ円形を呈するものである。深さは，約155cmを測り，底部の海抜高は，約140cmを示す。井戸は，弥生時代後期末の水田を覆っている砂層の上面から掘り込まれている。掘り方は，上部の40～50cmを擂鉢状に掘り，さらに下部から底部までは角度を変えて直線的に掘られている。底部の径は，40～50cmを測る。堆積状況は，第１～８層までレンズ状の堆積が認められ，第１，４層には炭，焼土を含んでいた。

出土遺物は，223～225などが各層から出土した。227は，第３層より検出されたものである。また，238～255は，井戸の上面及び周辺から出土したものである。

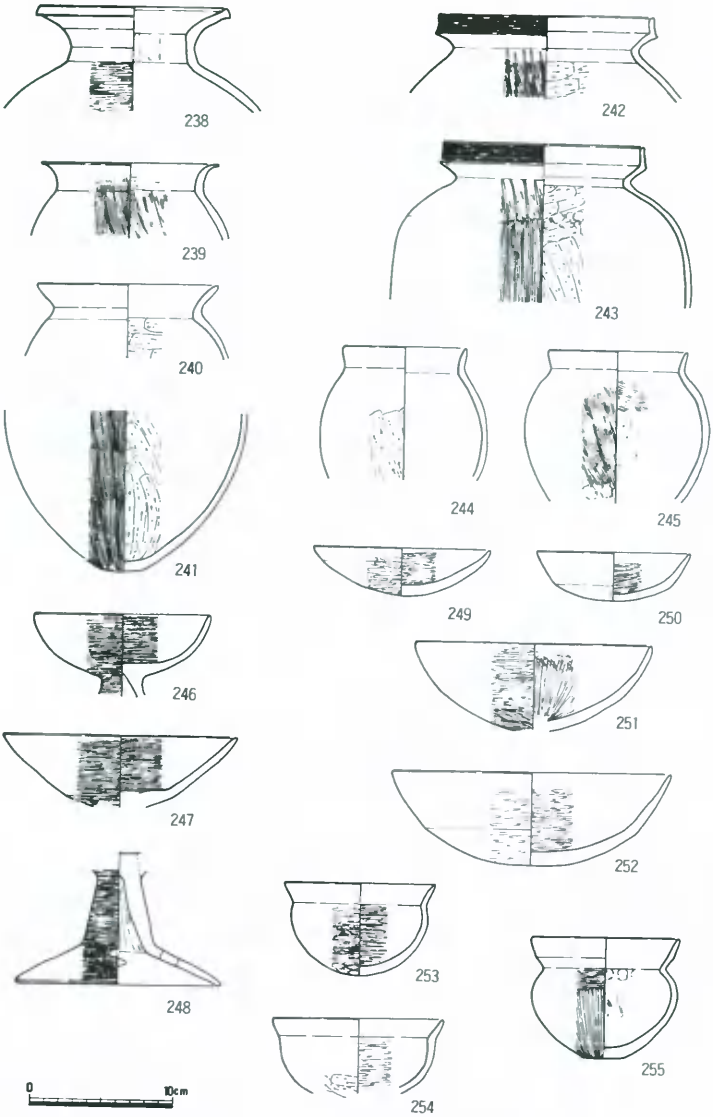


1．淡茶灰色砂土　5．１と同じ
2．暗灰色砂質土　6．淡茶灰色砂質土
3．１と同じ　7．淡緑灰色砂質粘土
4．２と同じ　8．暗灰色粘土

第93図　井戸－３（1/30）



第94図　井戸―3　出土遺物

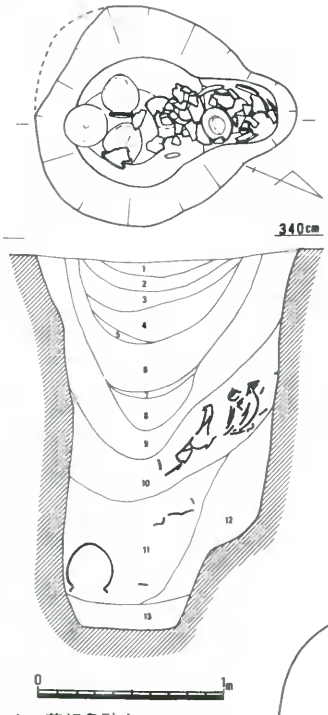


第95図　井戸―３　上面及び周辺出土遺物

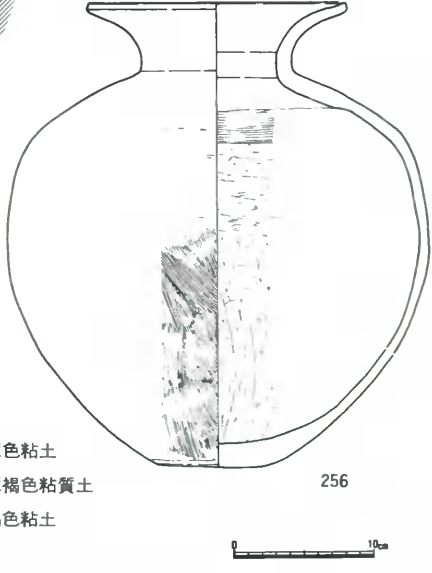
井　戸－4（第96・97・98図）

この井戸は，206Dの地点に位置する。平面形は，円形のものに一方が張り出す様な形態である。規模は，140×120で，深さは約200cmを測る。底部の海抜高は，約130cmを示す。掘り方は，基本的には上部から直線的に掘られているが，北側では下部で段を有する。堆積状況は，井戸が放棄される段階の第10～12層の内大量の土器が北側から投げ込まれている。この第11層の下部には，263～267を中心に完形の状態で放棄されたと思われるものもある。また，第1～8層の堆積は特徴的で，井戸が一時埋まったのちまた第8層まで掘られたような状況を想起させる。

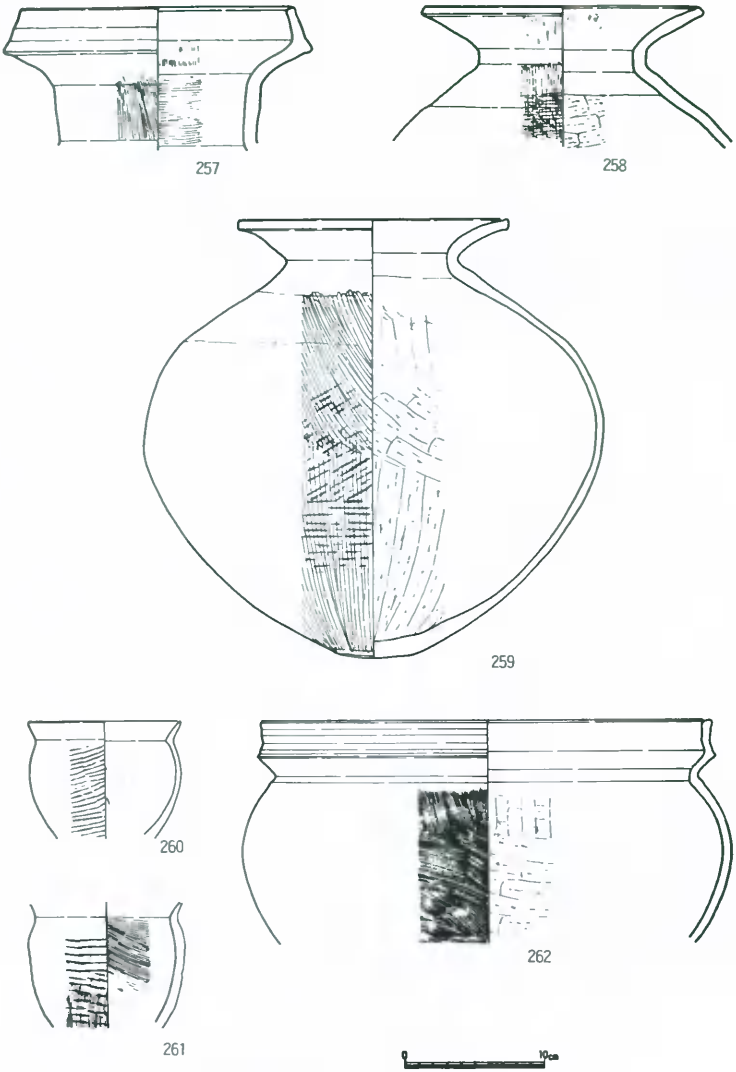
出土した土器は，百・古・Ⅰ期である。



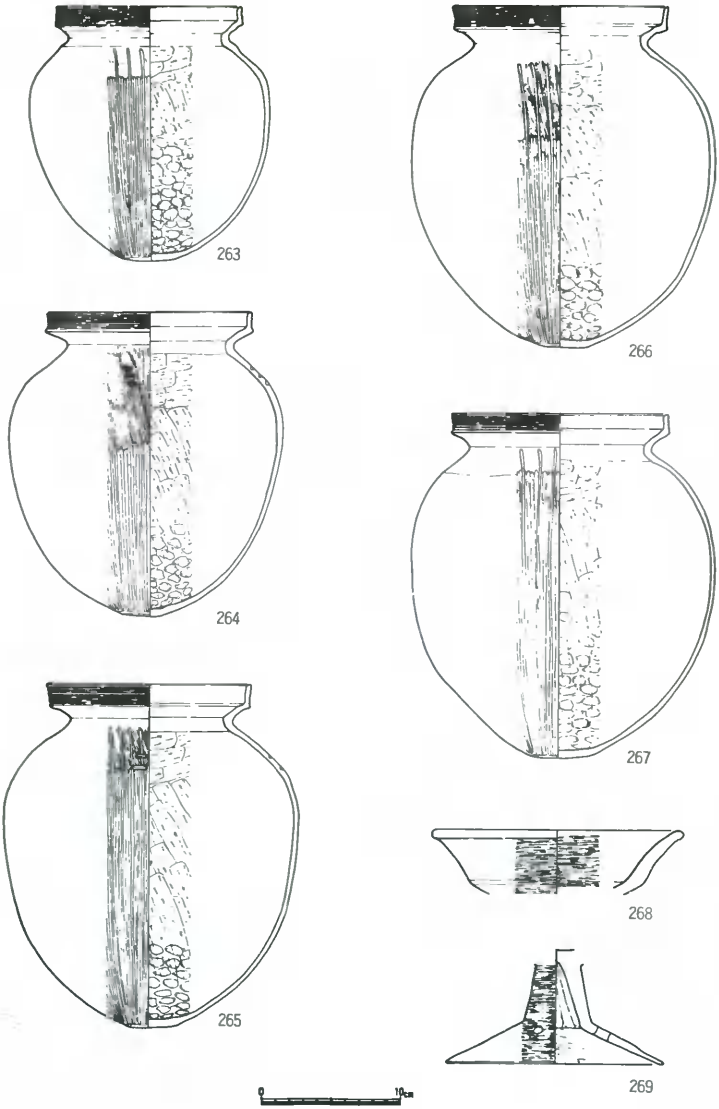
1　茶褐色砂土
2　淡灰黄色砂土
3　茶灰色粘質土
4　淡黄褐色砂土
5　淡茶灰色砂質土
6　暗茶灰色粘質土
7　淡茶褐色砂
8　6と同じ
9　茶灰褐色砂質土
10　淡茶褐色粘質土
11　暗灰色粘土
12　暗灰褐色粘質土
13　灰褐色粘土



第96図　井戸－4（1/30）・出土遺物（1）



第97図　井戸―４　出土遺物（２）

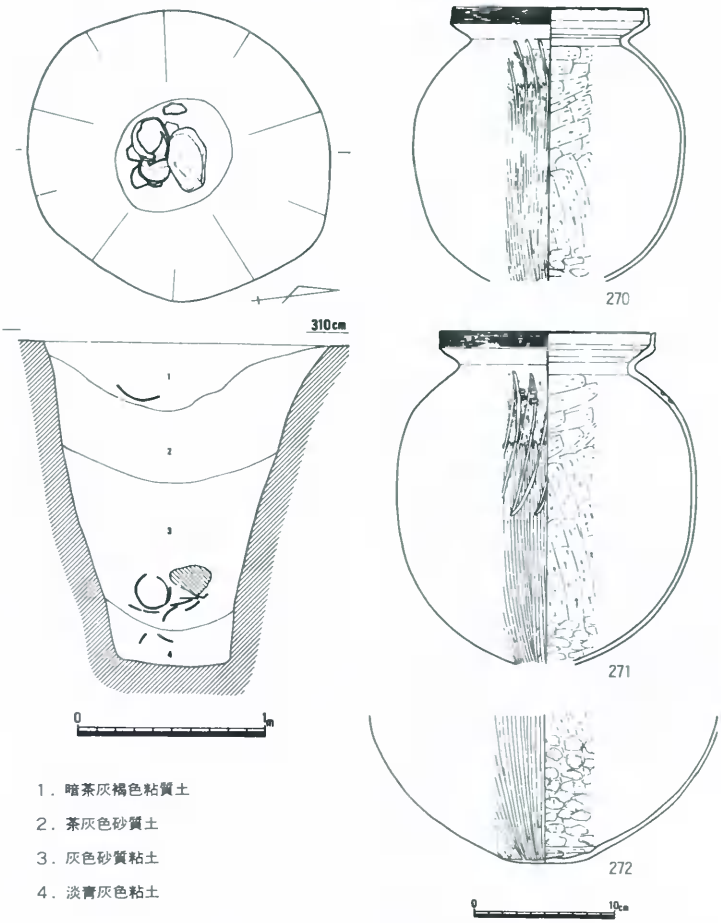


第98図　井戸－4　出土遺物（3）

井　戸―５（第99図）

208Ｅ地点よりやや北西部に位置する。規模は，直径約150～160cmの円形を呈し，深さ約170cmを測る。底部の海抜高は，130cmである。掘り方は，底部径が約55cmで，上部から傾斜をもって掘られている。井戸内は，第１～４層がレンズ状に堆積している。

出土遺物は，第３層の下部に集中的に認められ，270，271の完形に近い土器が含まれている。



１．暗茶灰褐色粘質土
２．茶灰色砂質土
３．灰色砂質粘土
４．淡青灰色粘土

第99図　井戸―５（1/30）・出土遺物

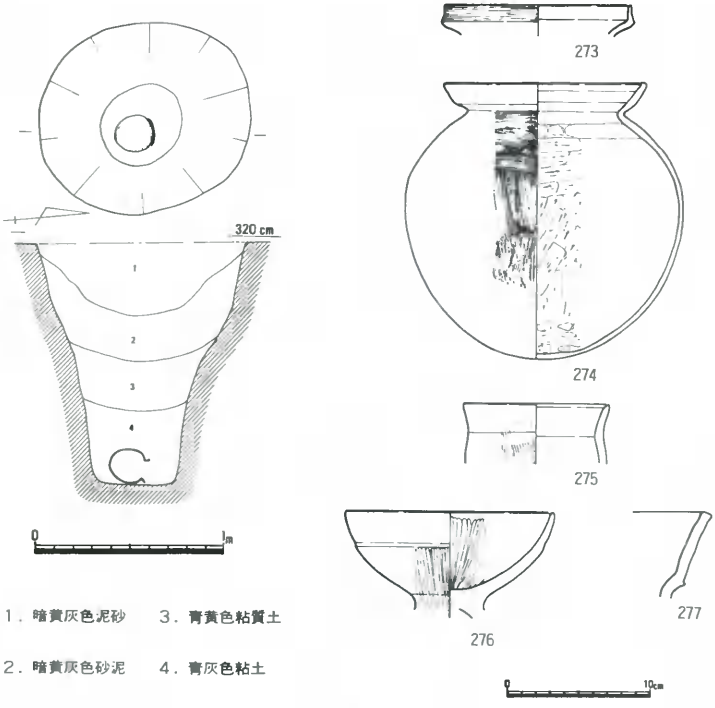
第１，４層からも少量の土器が出土した。各層からの出土土器には，時期的な差は認められなかった。出土した土器は，百・古・Ⅰ期の特徴を示す。

井　戸－６（第100図）

井戸－５の東約10cmに検出された。規模は，直径約100～115cmの円形を呈する。深さは，検出面より約130cmを測り，底部の海抜高は約185cmである。掘り方は，上部から中位ぐらいまでやや広めに掘り，それから底部にかけてはやや傾斜度をかえて掘られている。

出土遺物は，底部に接して**271**の完形の甕が横たわった状態で検出された。

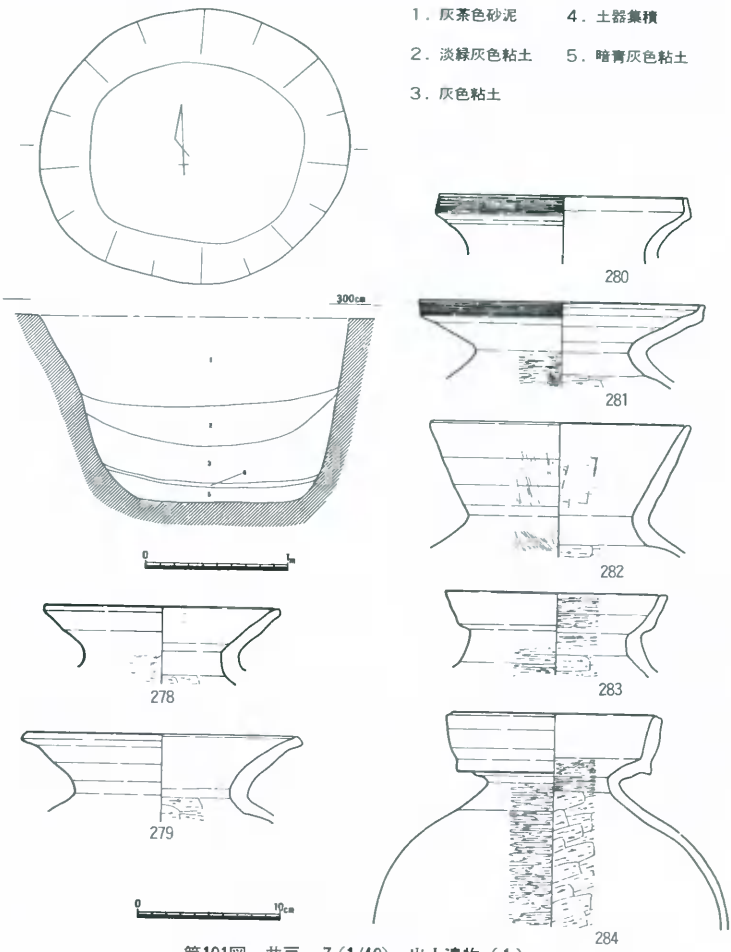
このような状態の出土例は多く，井戸の使用停止時における何らかの行為と有機的関係を示すものであろうか。図示したもののうち，**273**，**274**は他に比べてやや後出のものと考えられる。百・古・Ⅱ期。



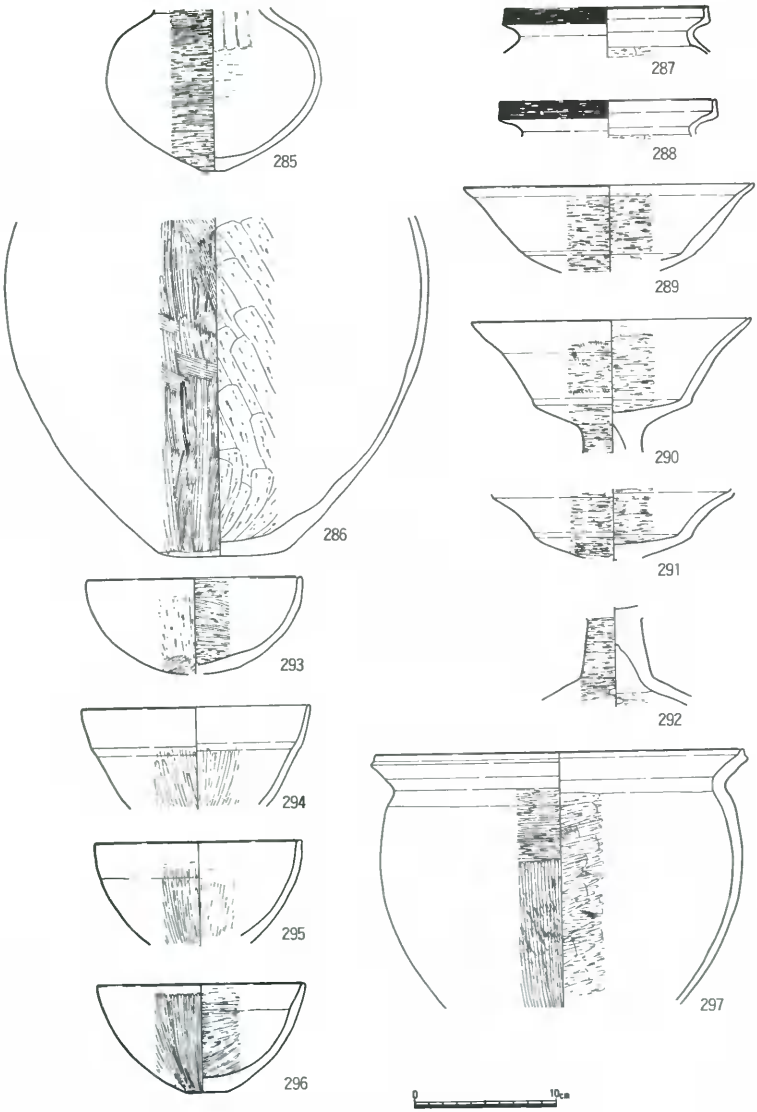
第100図　井戸－６（1/30）・出土遺物

井　戸－７（第101図）

この井戸は，竪穴式住居－３の東側に近接する位置にある。井戸は，下層に存在する弥生時代後期の水田址を覆う洪水砂の上面で検出された。規模は，直径約200～220cmのほぼ円形を呈する。他の同時期の井戸に比べて，比較的大形の規模のものである。深さは，約130cm残存しており，底部の海抜高は約160cmである。井戸内は，第１～５層がレンズ状に堆積し，第４層



第101図　井戸－７（1/40）・出土遺物（１）



第102図　井戸―７　出土遺物（２）

は土器が数cmの厚さで集積して層を残していた。

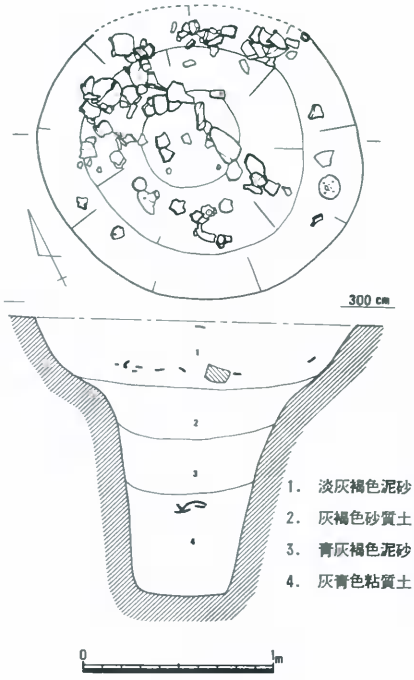
出土遺物は，第４層からの土器がその大半を占めた。その土器は，完形になるものが少なく，その大部分は少破片のもので，図示できるものも限定された。出土した土器の特徴としては，壺類の破片は多く認められたものの，甕は少なかった。土器は，他の層からも少量出土したが，時期的な差は認められなかった。また，第３層の下部には，二又鋤の一部と思われる未製品が検出されたが，残存状態が悪く図示できるものではなかった。これらの出土遺物は，百・古・Ⅰ期の特徴を示すものと考えられる。

この井戸は，竪穴式住居―３に近接する位置にあるが，その間は数ｍで竪穴式住居址の構造上，両者が共伴していたとは考えがたい。

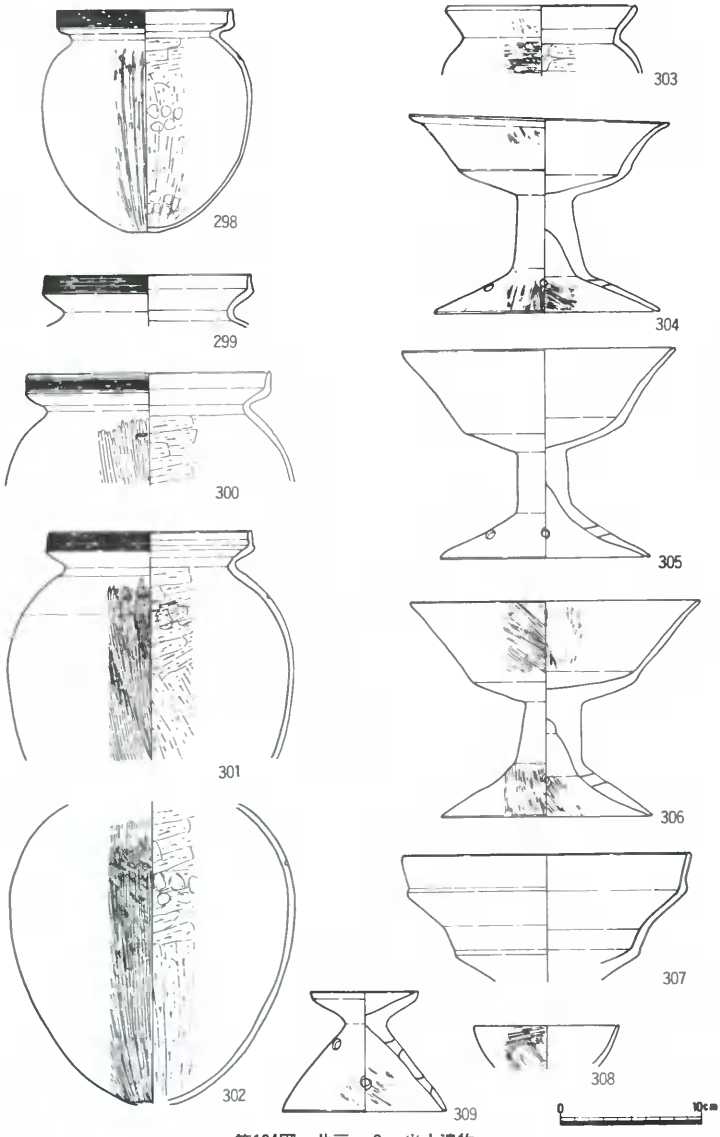
井　戸―８（第103図）

この井戸は，当初その一部が調査区南端に検出されたため，拡張区を設けて全容を明らかにした。規模は，直径約155～170cmのほぼ円形を呈する。深さは，約145cm残存していた。底面の海抜高は約145cmを示す。掘り方は，上部の約40cmほどは擂鉢状に落ち込み，以下底部にかけては角度を変えて掘られている。井戸内は，第１～４層が堆積し，第１層には破棄された状態で土器や石が多量に検出された。出土遺物は，第１層中に検出されたものがほとんどであった。また，第４層中にも少量の土器が出土した。これら出土した土器は，298～302の甕，304～309の高杯が多く含まれており，壺などは破片が少量含まれていたにすぎない。出土した土器は，百・古・Ⅰ期と考えられる。

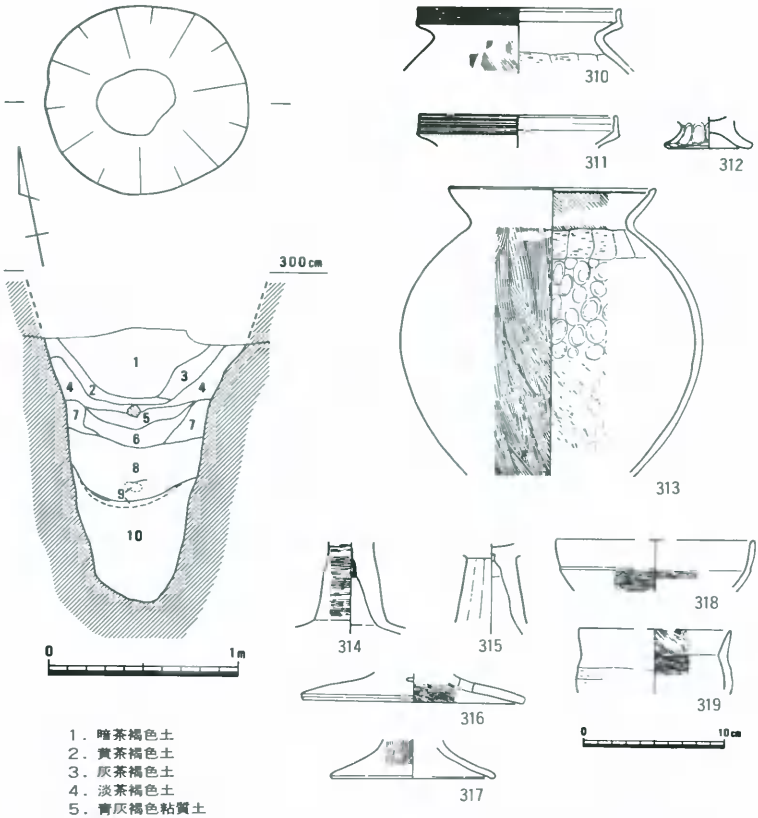
（中野）



第103図　井戸―８（1/30）



第104図　井戸―8　出土遺物

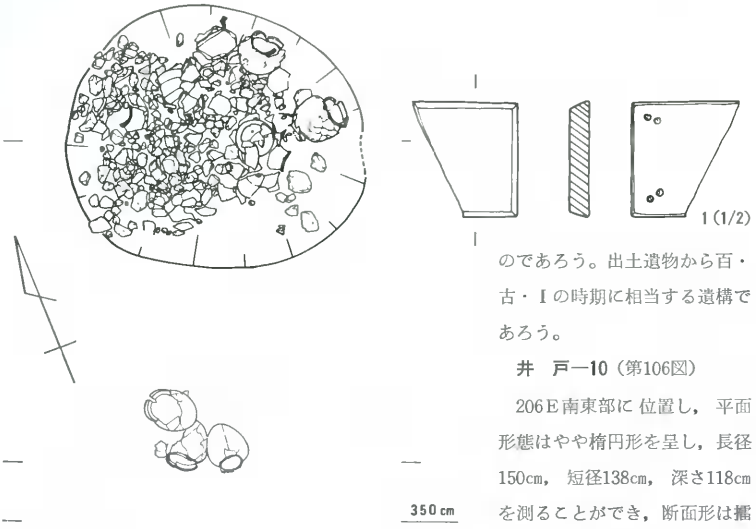


1．暗茶褐色土
2．黄茶褐色土
3．灰茶褐色土
4．淡茶褐色土
5．青灰褐色粘質土
（若干砂を含む）
6．暗黒灰色粘質土
7．暗灰色土
（若干の白黄緑色土を含む）
8．黒灰色粘質土
（若干の砂を含む）
9．炭化物の層
10．黒灰色微砂まじりの粘質土
（白淡黄緑色土を混入している）

第105図　井戸―９（1/30）・出土遺物

井　戸―９（第105図）

207Ｅグリッド近くに位置し，弥生時代後期の洪水砂の除去後，水田面検出中確認された遺構である。井戸本来は洪水砂上の暗褐色微砂質粘土層からの掘り込みと考えられる遺構である。検出時の平面形態は径104×100cmのほぼ円形を示し，最深部で134cmを測り得た。井底は歪な楕円形で東が深まって掘り上げられている。埋積土層はレンズ状を呈してはいるものの，中位以上においては若干みだれている。これは人工的に埋めたも

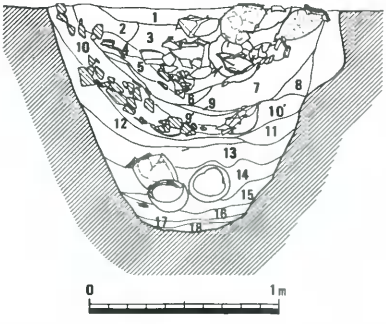


のであろう。出土遺物から百・古・Ⅰの時期に相当する遺構であろう。

井　戸―10（第106図）

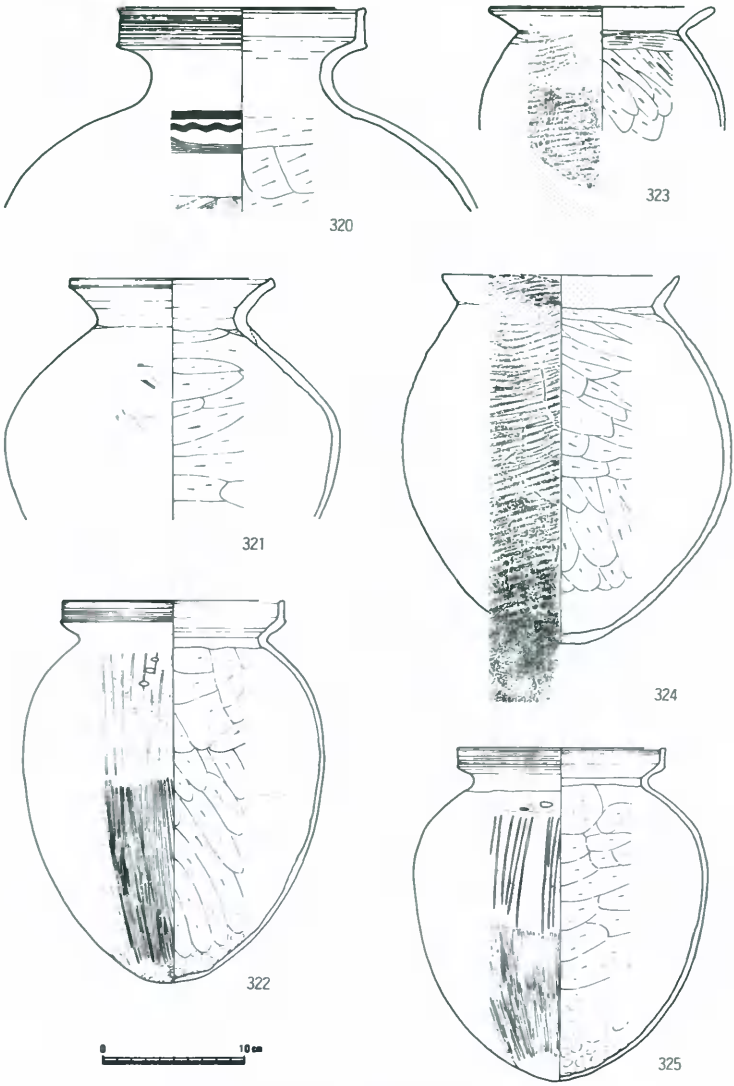
206E南東部に位置し，平面形態はやや楕円形を呈し，長径150cm，短径138cm，深さ118cmを測ることができ，断面形は擂鉢状で，底部は丸味を持って終っている。埋積土中程にかけて，河原石が整然とあたかも貼り付けられたかのような形で検出され，この礫層中には焼土，炭，ガラス滓等が混入していた。これらは埋没途中で人為的に投入されたものであろうと考えられるものである。遺物は上層部が多く，下層部では少なく14層中から完形，あるいは完形に近い形の甕が3個体分出土している。また，ガラス滓のほかに，上層から，石帯（1）が，一点確認されている。

出土遺物からは時期は百・古・Ⅰに比定できよう。

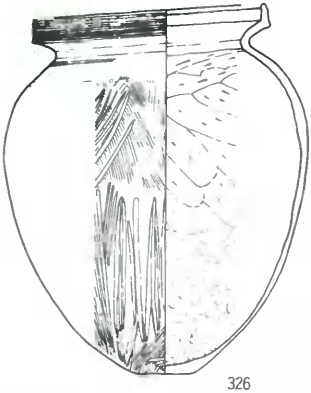


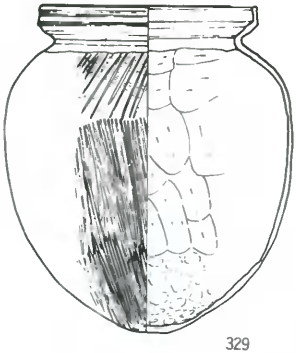
1．暗茶褐色土
（若干の黄褐色土の混ざり）
2．黒褐色土
黄茶褐色土　互層
3．黄茶褐色土
黒灰褐色土（少量）
4．黒茶褐色土
（若干の黄褐色土を含む）
5．暗茶褐色土
暗灰色土
6．暗茶褐色土
暗灰色土（少量）
（炭・ガラス滓を含む）
7．暗茶褐色土
8．7より若干淡い
9．黒茶褐色土
9′．暗茶褐色土
黄褐色土
（炭を含む）
10．若干灰色をおびた暗茶褐色土
10′．暗青灰色粘質土
（炭化物をかなり含む）
11．暗褐色土
白黄褐色土
（若干の老化物を含む）
12．暗茶褐色土
黄褐色土（若干）　混層
13．暗褐色土・白黄褐色土
（少量の灰色粘土を含む）
14．青灰色土
黄茶褐色土（少なめ）　互層
15．暗青灰色粘土
16．青灰色粘質土
黄褐色粘質土　互層
17．黄茶褐色粘質土
18．淡黄緑白色粘質土

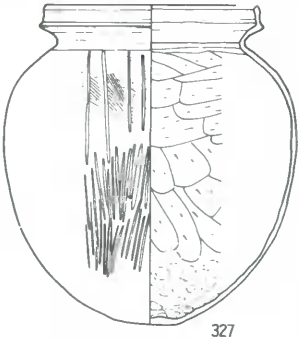
第106図　井戸―10(1/30)・出土遺物（1）

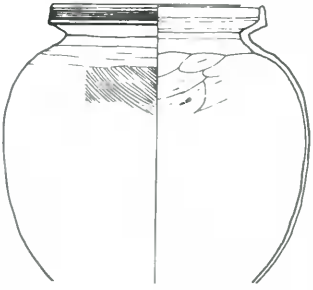


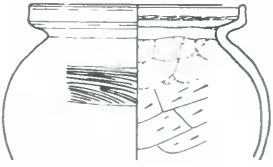
第107図　井戸―10　出土遺物（２）

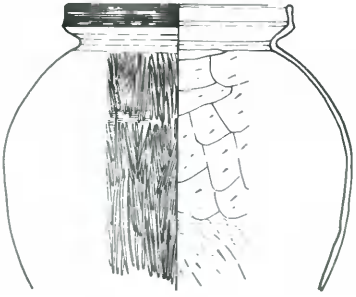




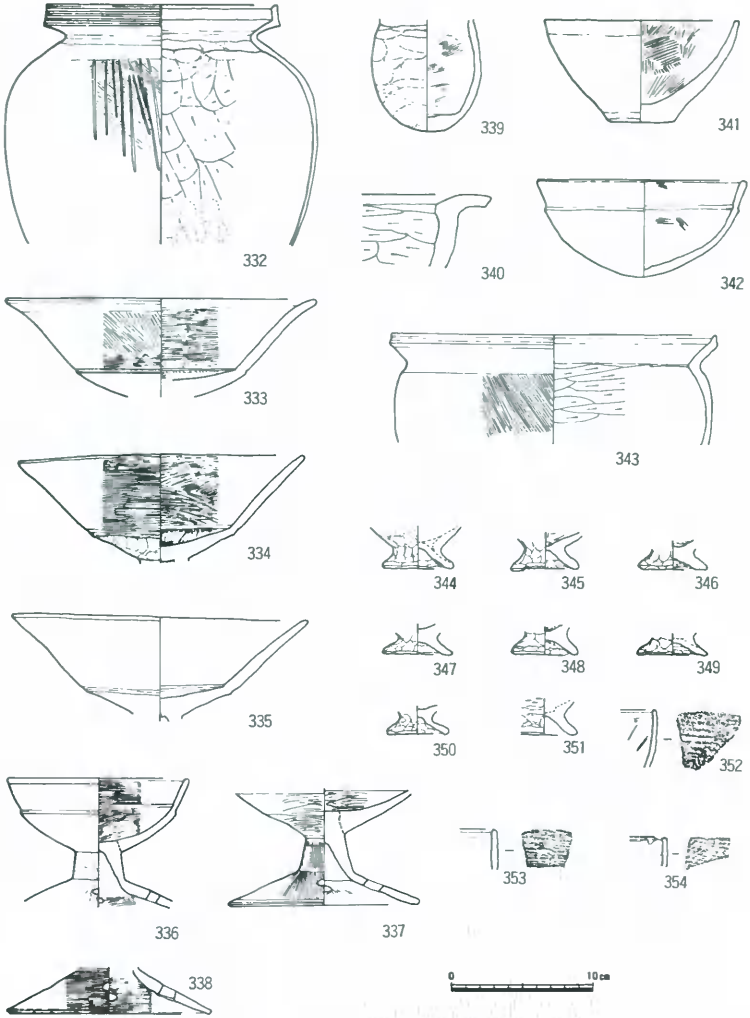




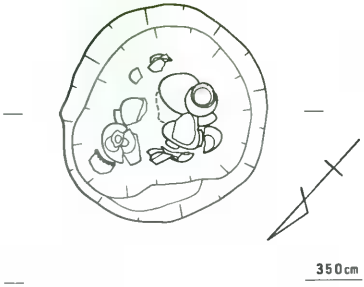


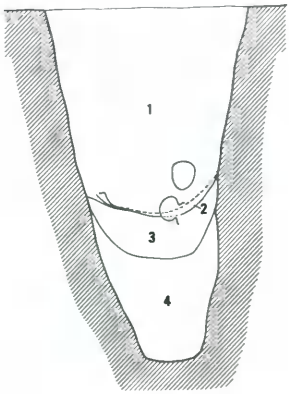


第108図　井戸―10　出土遺物（3）



第109図　井戸―10　出土遺物（４）



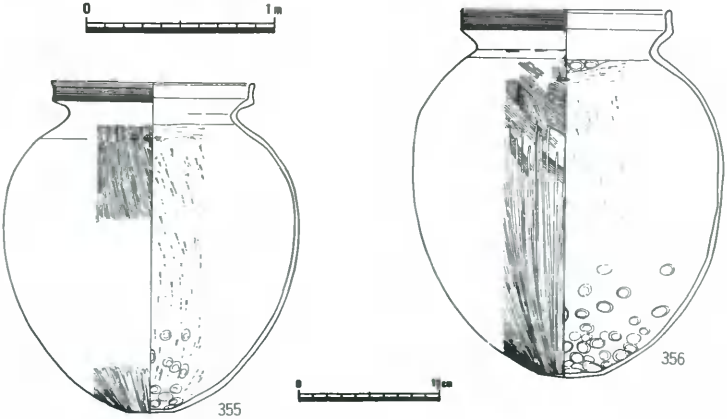


井　戸―11（第110図）

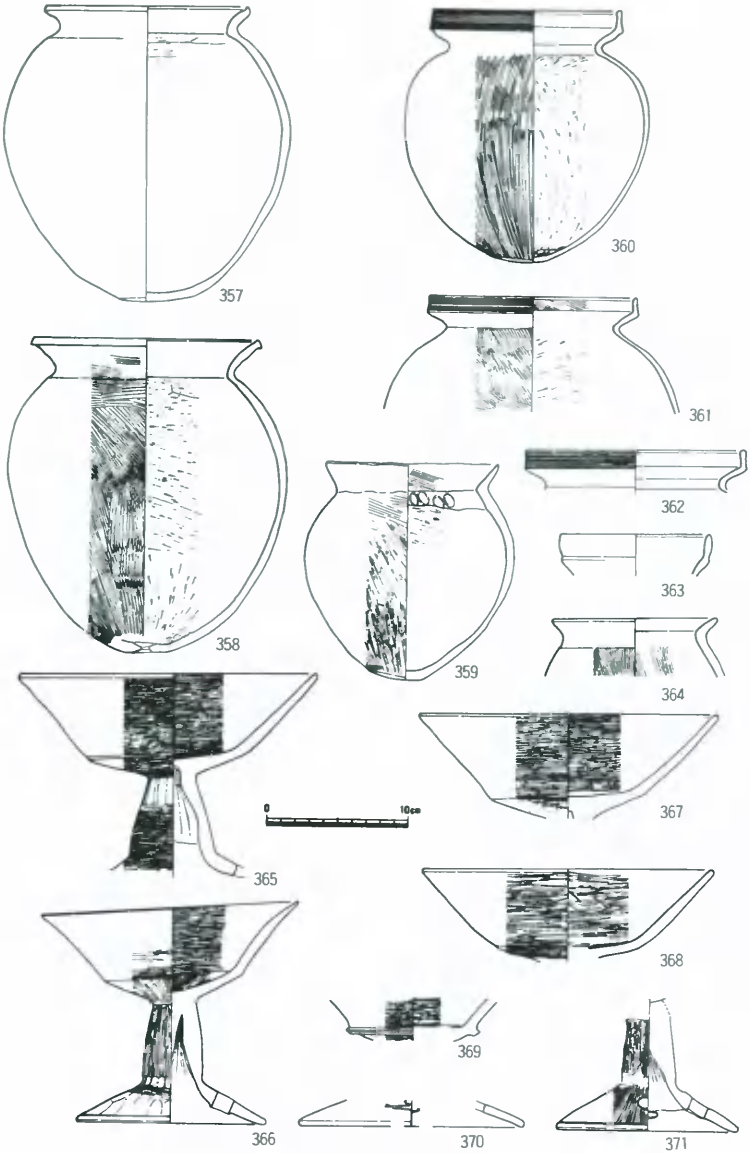
206Eの中央やや北西よりに位置し，遺構の検出時の平面形態は110cm×115cmのほぼ円形を呈し，遺構の掘り下げに従って平面形態に変化が出はじめ，平面形が北に長い楕円形に変化し，北側が小さく，南が広い「ヒョウタン」形を示す平面形で，中位北側が段状を呈していた。埋没土層はレンズ状を呈し，最深部で186cm，井底径30cmを測ることが出来た。遺物は埋没土中位から，甕・高杯・椀等が集中して出土している。

1．暗茶褐色土
（微砂を含む）
2．黒灰青色粘質土
（若干の微砂・炭化物を含む）
3．黒灰色微砂を含む粘質土
（炭（化物）を含む）
4．暗青灰色粘質土
（かなりの微砂を含む）

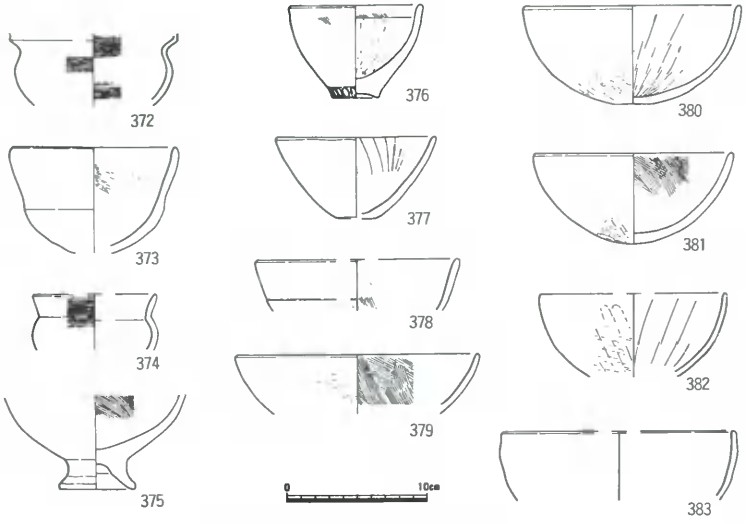
以上の出土遺物から，この井戸の時代は百・古・Ⅰに相当するものと考える。（二宮）



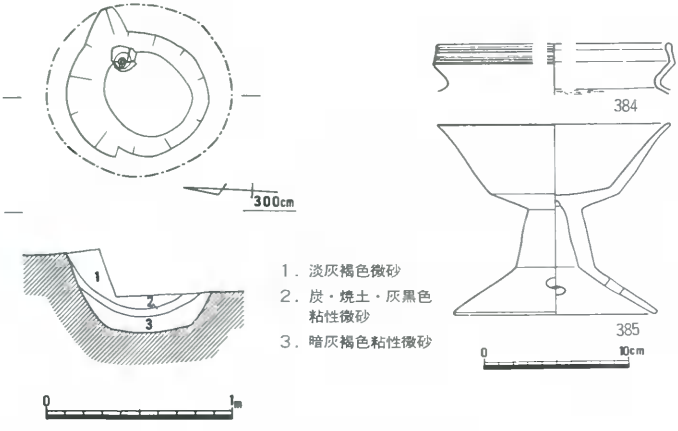
第110図　井戸―11(1/30)・出土遺物（1）



第111図　井戸―11　出土遺物（２）



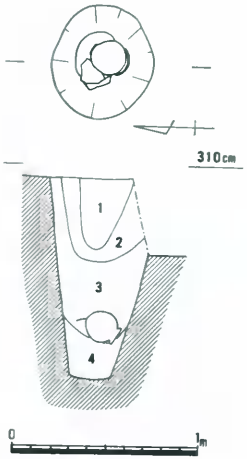
第112図　井戸―11　出土遺物（3）



第113図　井戸―12（1/30）・出土遺物

井　戸—12（第113図，図版41）

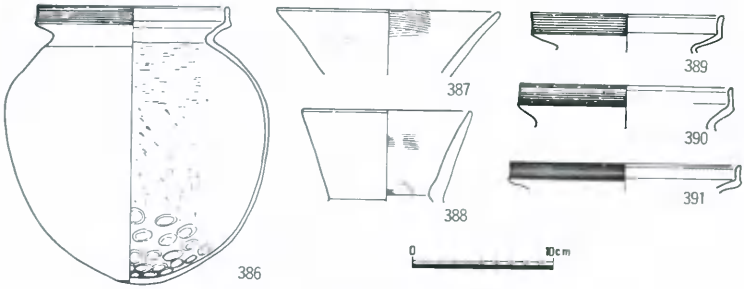
206F区東端中央付近に位置する。弥生時代の包含層を掘り下げる途中で検出されたため，かなりの削平を受けている。平面形は円形を呈し，検出面で直径77cm，推定復原100cmを測る。深さは検出面から22cm，推定で61cm程度と考えられる。壙壁の傾斜はかなり急で，60°前後の傾斜をもっている。底面は若干凹んだ平坦面となり，その長径は47cmである。埋土は3層で第2層には炭・焼土が多量に含まれていた。この第2層の底が，ある時点での井戸の底になっていたとみられる。この間層を挟み，第1層・第3層はともに微砂層である。高杯形土器の大きな破片（第113図—385）が第1層と第2層の境界で出土している。この井戸の底の標高は236cmを測る。この標高は他の井戸のそれにくらべて高く，わずか10cm程度の距離で隣接する井戸—13の底より40cm上方にある。このため井戸としての機能に若干疑問があるが，埋土の状況は井戸の堆積に類似している。図示した土器は第1層出土で，時期は百・古・1と考えられる。



1．黄色粘土斑灰褐色微砂
2．灰褐色微砂
3．暗灰褐色粘性微砂
4．青灰色粘土

井　戸—13（第114図，図版42）

206F区，井戸—12の東に隣する。検出面で長径61cmの長円形の平面形をもつ。壙壁は83°と急傾斜で，長径27cmの底面に至る。底面は中央がやや凹んでいる。井戸の深さは107cmで，底の標高は196cmを測る。かなり細長い小形の井戸である。埋土は4層からなり，上層はU字状の堆積を示している。しかし，第1



第114図　井戸—13（1/30）・出土遺物

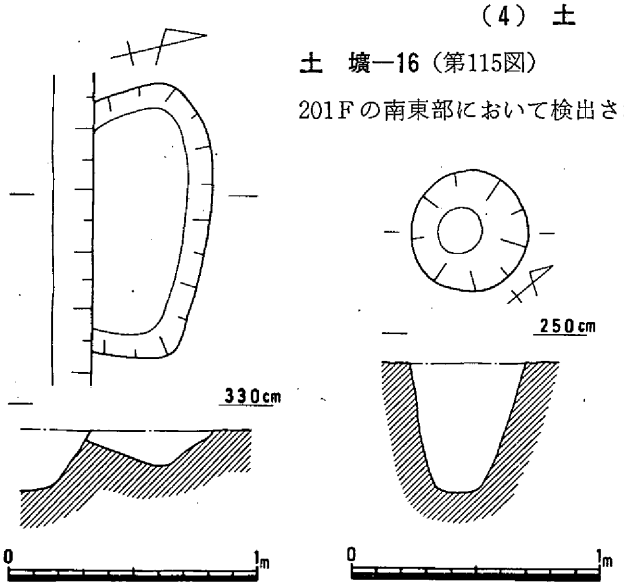
層と第2層の境界は明瞭でなく，第2層と第3層もよく類似した土である。第4層は粘土層で，井戸として使用されている間に堆積したものとみられ，完形の甕形土器がこの層の上面から出土した。誤って転落させたものであろうか。出土した遺物は少なく，389以外は第1～3層の出土である。このうち387は第2層と第3層から破片が出土していて接合された。これらの土器の示す年代は百・古・Ⅰである。（岡本）

（4）土　　壙

土　壙―16（第115図）

201Fの南東部において検出された。南端部が溝―54によって切られているため全体の形状は明らかではないが，本来不整長方形を呈していたものと思われる。長さ106cm，深さ14cmを測る。埋土は灰褐色粘質微砂が一層のみである。

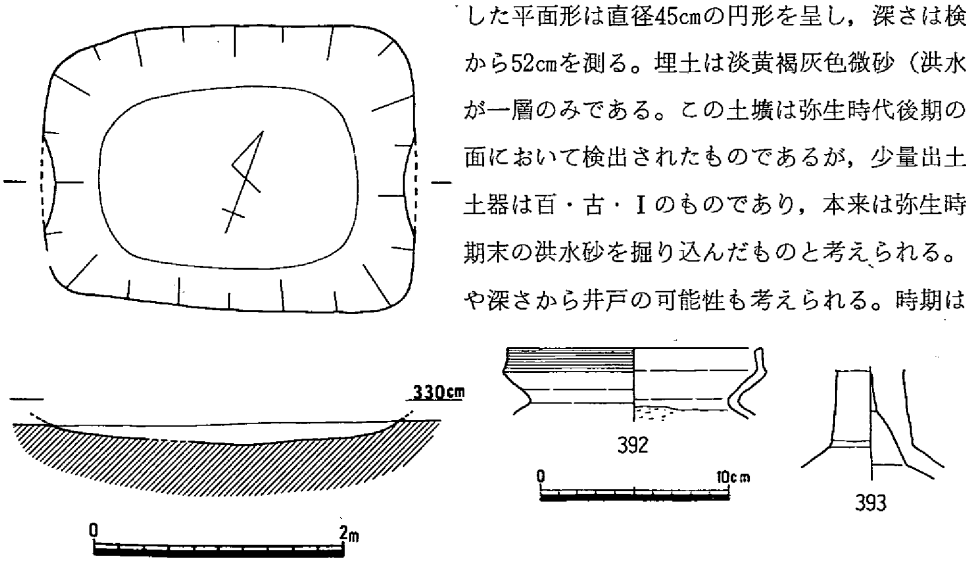
出土遺物としては少量の土器片があるにすぎない。これらの土器や検出状況などから時期はほぼ百・古・Ⅰであると考えられる。



第115図　土壙―16（左）・17（右）(1/30)

土　壙―17（第115図）

202Fの北東部に位置する。検出した平面形は直径45cmの円形を呈し，深さは検出面から52cmを測る。埋土は淡黄褐灰色微砂（洪水砂）が一層のみである。この土壙は弥生時代後期の水田面において検出されたものであるが，少量出土した土器は百・古・Ⅰのものであり，本来は弥生時代後期末の洪水砂を掘り込んだものと考えられる。形状や深さから井戸の可能性も考えられる。時期は百・



第116図　土壙―18（1/60）・出土遺物

古・Ⅰであろう。

土　壙―18（第116図）

205Ｃの南部分において検出され，溝―50によって切られている。295×223cmの隅丸長方形を呈し，深さは約10cmを測る。底面は浅い皿状を呈し，わずかに凹凸がみられる。埋土は暗灰褐色粘質微砂が一層のみである。

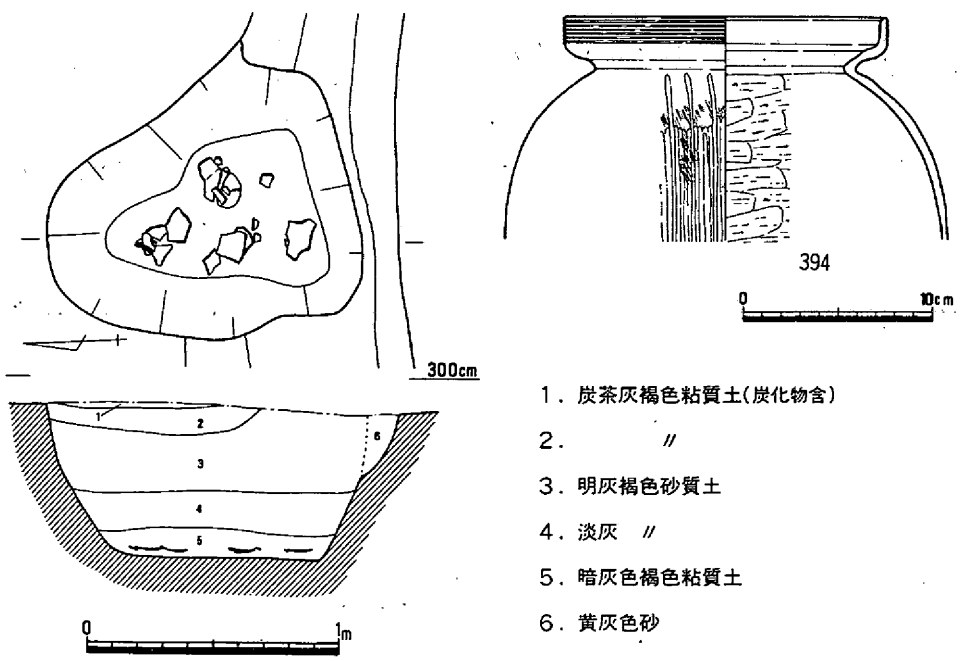
出土遺物としては，少量の土器片がある。

時期はほぼ百・古・Ⅰであると考えられる。（平井）

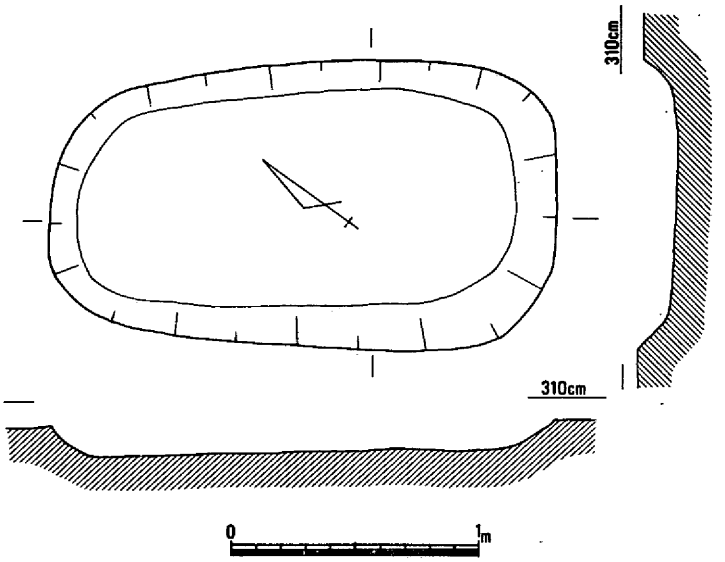
土　壙―19（第117図）

この土壙は，洪水砂で埋没した溝―31を切断して存在する。平面的には不整円形を呈し，埋土は大きく４層にわかれる。土層は水平堆積を示す。付近にはこの種の土壙は存在せず，規模や形態からすれば柱穴や井戸にはなり得ない。

遺物はおもに最下層にのみ出土しており，底部から２～３cm浮いたほぼ同一面に甕形土器片が散見された。甕形土器片はほぼ一個体分を満たすが，図示した部分より下半については部分的にしか接合できない。ただ，底部片はほとんど丸底化している。口縁部に施された櫛描沈線が浅いことや，胴部の形態が球形化しつつあることなどから，百・古・Ⅱの時期と考えられる。（柳瀬）



第117図　土壙―19（1/30）・出土遺物



第118図　土壙―20（1/30）

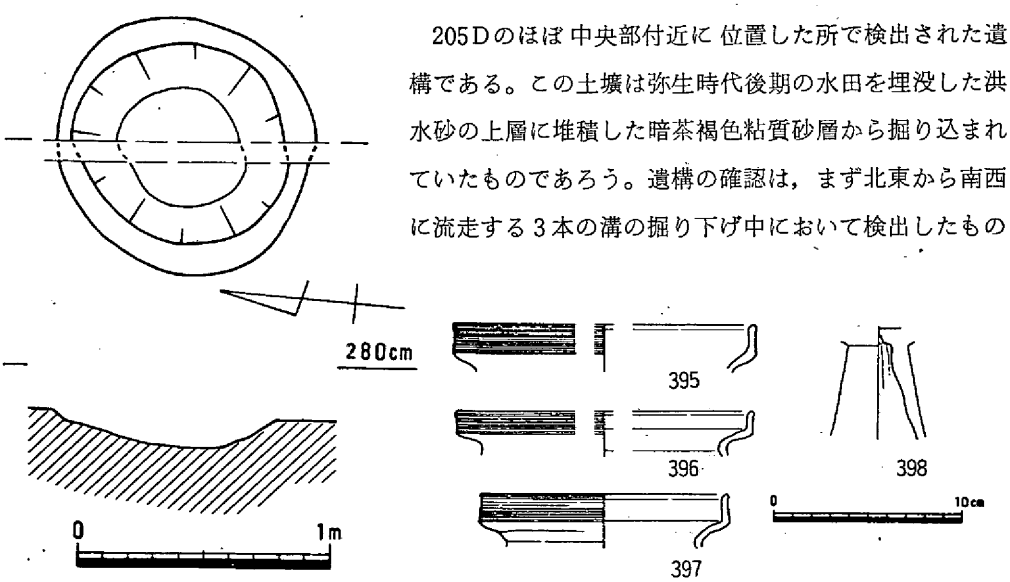
土　壙―20（第118図）

この土壙は，調査区南側の溝―45，46の上部に位置する。規模は，長軸約200cm，短軸約120cmで長楕円形を呈する。深さは，約10cmと残存状態はよくなかった。

出土遺物としては，土器が少量出土した。出土した土器は，細片であったが百・古・Ⅰ～Ⅱ期の特徴を示すものであった。

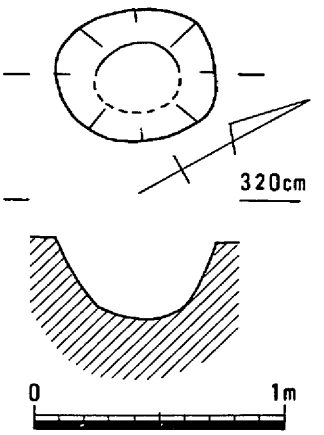
土　壙―21（第119図）

205Dのほぼ中央部付近に位置した所で検出された遺構である。この土壙は弥生時代後期の水田を埋没した洪水砂の上層に堆積した暗茶褐色粘質砂層から掘り込まれていたものであろう。遺構の確認は，まず北東から南西に流走する3本の溝の掘り下げ中において検出したもの



第119図　土壙―21（1/30）・出土遺物

で，検出された土壙は上部は削平を受けているため，わずかに下部が残存しているにすぎなかった。検出された土壙の規模は，100cm×105cmのほぼ円形，深さ12cmを測りえた。時期は百・古・Ⅱといえよう。



第120図　土壙―22（1/30）

土　壙―22（第120図）

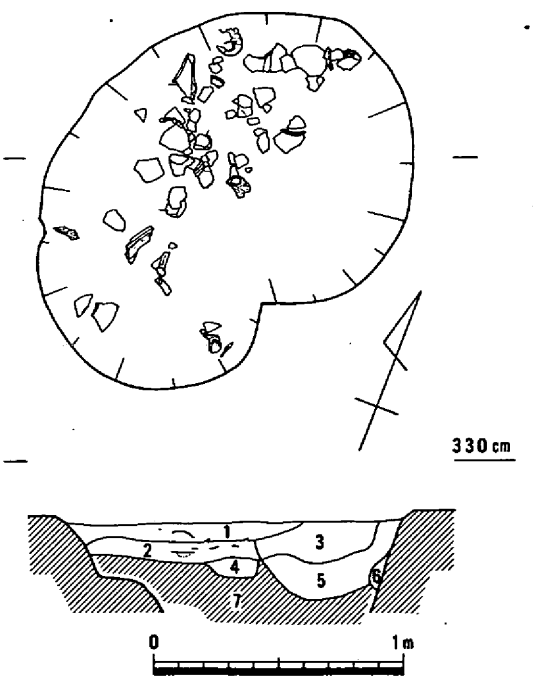
206Ｅの南側近くに位置し，弥生時代後期の水田面を埋没した砂層上に堆積した暗褐色粘土質微砂層中に検出した土器溜り―２の調査後に検出された土壙である。この土壙も土壙―21と同様に上部が削平を受けている可能性があるように思われる。

土壙の規模は64cm×53cmの楕円形の平面形態で，最深部で32cmを測ることができた。また，堆積土中から遺物はない。検出された他の遺構等からこの土壙の時期は古墳時代初め頃の遺構と考えられる。

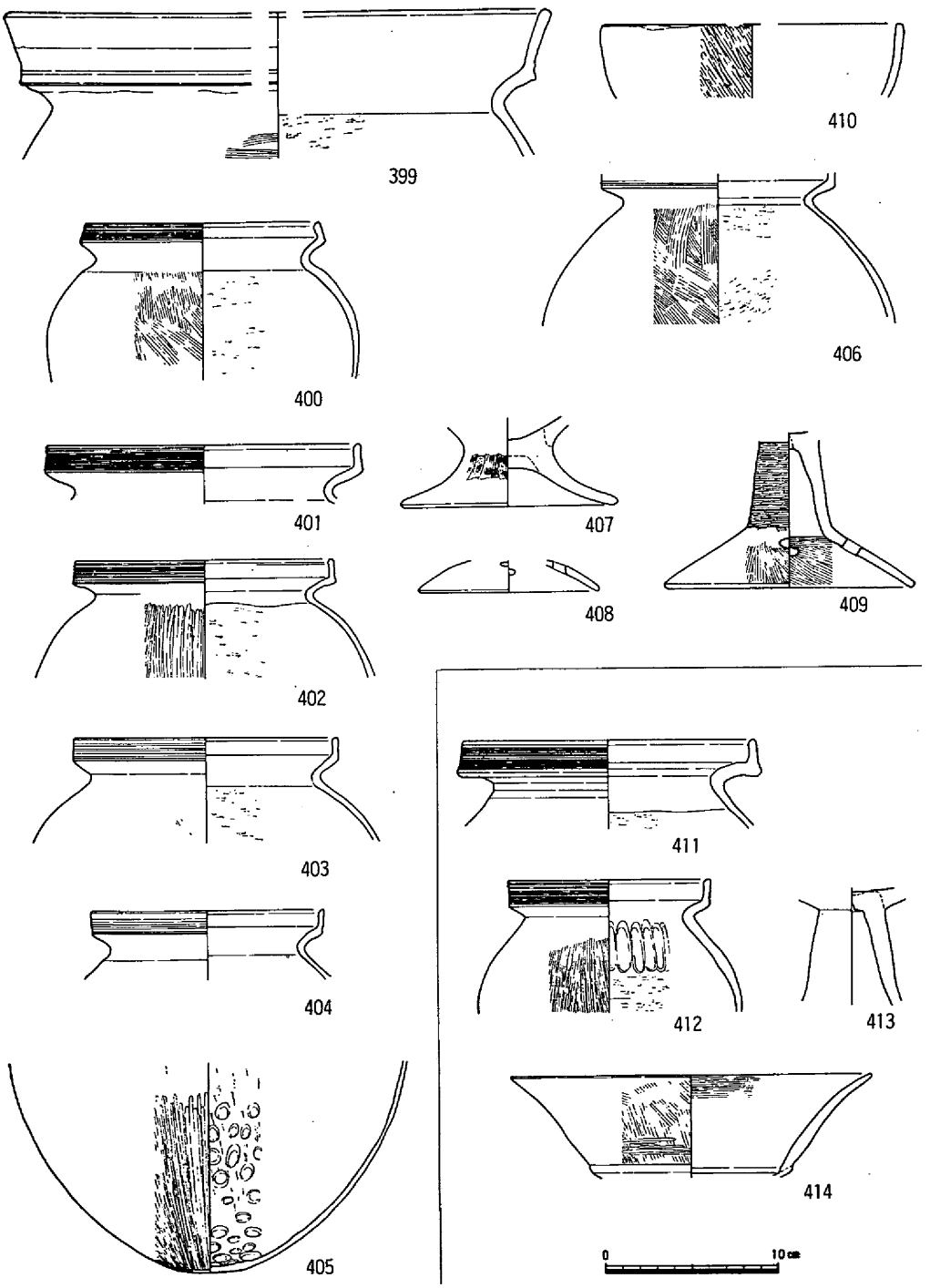
土　壙―23，24（第121図）

グリッド207Ｅに接する所に位置して検出された遺構である。検出された遺構は，洪水砂上の暗褐色粘土質微砂層より掘り込まれ，３基の土壙が切り合い関係で検出された。ここでは２基をとりあげてみる。

23は径約90cm，24は117cmを測り，ほぼ円形の平面形態を示していたものと思われる。深さは23が12cmで，24が35cmを測り得た。さらに，土層断面から24が先行して掘られ，これが埋没した後に23が掘られていることが断面から明確に認められた。土壙の埋積土中からは，かなりの遺物が検出されたが大部分が24に伴うものである。23・24から出土した遺物には，壺・甕・鉢・台付壺・高杯等があるが，完形品になる個体は存在していない。土壙の時期は，検出された面，あるいは，出土遺物等からして



第121図　土壙―23（左）・24（右）（1/30）



第122図　土壙―23・24出土遺物

百・古・Ⅰに比定されるのではなかろうか。　（二宮）

（５）　溝

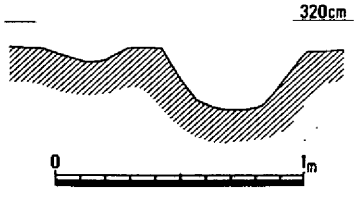
溝―44

土壙―20の西側に位置する。溝は，古墳時代の包含層である暗灰色粘質土で検出された。検出された深さは，約５cmほどで残存状態はよくなかった。

規模は，幅約40cm，深さ約５cmを測り，ほぼ南北方向に流走するものである。性格等については不明であるが，溝―47・48・49と同様な規模，方向が認められ有機的関係が想起できる。また，溝内には暗黒灰色粘土層が堆積していた。出土遺物は，ほとんど検出できなかったが，状況からみて古墳時代初頭の時期と考えられる。

溝―45（第123図）

井戸―５の西側に位置する。溝は，北北東～南南西に流走するものである。また，溝―46も溝―45の東に隣接し，２本の溝は同一方向に伴走する。規模は，幅約35cm，深さ約５cmを測る。溝内は，溝―46と同様に暗黒灰色土が堆積する。出土遺物は認められなかった。



第123図　溝―45・46（1/30）

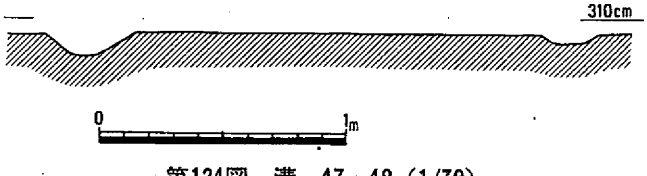
溝―46（第123図）

溝―45の東に位置するもので，溝―45と伴走し北北東～南南西の方向に流れる。規模は，幅約60cm，深さ約25cmを測る。

出土遺物は，溝内から古墳時代初期の土器が少量出土した。

溝―47，48（第124図）

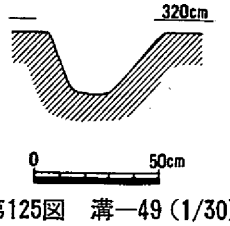
この溝は，井戸―５の東側に検出されたものである。北北西から南南東の方向に流路をとる。規模は，幅約35cm，深さ約10cmを測る。出土遺物は認められず，検出状況からみて古墳時代初頭のものであろうか。また，溝―48も溝―47と同様なものと考えられる。



第124図　溝―47・48（1/30）

溝―49（第125図）

この溝は，調査区の南東端に位置する。規模は，幅約45cm，深さ約25cmを測る。流路は，北東から南西方向に流走すると考えられる。この溝―50と同一方向のものとしては，溝―21～24がある。溝内は，暗灰色粘土が堆積する。



第125図　溝―49（1/30）

出土遺物は，土器が少量出土した。出土した土器は，古墳時代

初頭のものと考えられる。　（中野）

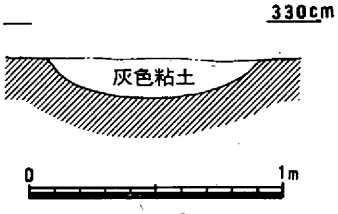
溝—50（第126図）

205C・Dの南部分において検出された溝で，ほぼ東西方向に走る。土壙—18を切っている。幅45～100cm，深さ15～20cmを測る。埋土は灰色粘土であり，百・古・Ⅰの包含層と考えられる暗灰褐色粘質微砂層を掘り込んでいる。時期は出土遺物が土器の小片であるため明確ではないがほぼ古墳時代初頭から前半のものと考えられる。

溝—51（第127図）

205C・Dの南部分において検出された。ほぼ東西方向に走っているが，205D部分から南方向に曲っている。また，205C部分では，2条に分離している。幅50～100cm，深さ15～20cmを測る。埋土は溝—50と同じ灰色粘土である。

出土遺物には土器がある。418の甕の体部外面には右上がりの細かい平行タタキメが観察できる。時期は出土した土器からは，百・古・Ⅰと考えられるが，埋土の状況をみるとそれよりもやや下る可能性もある。



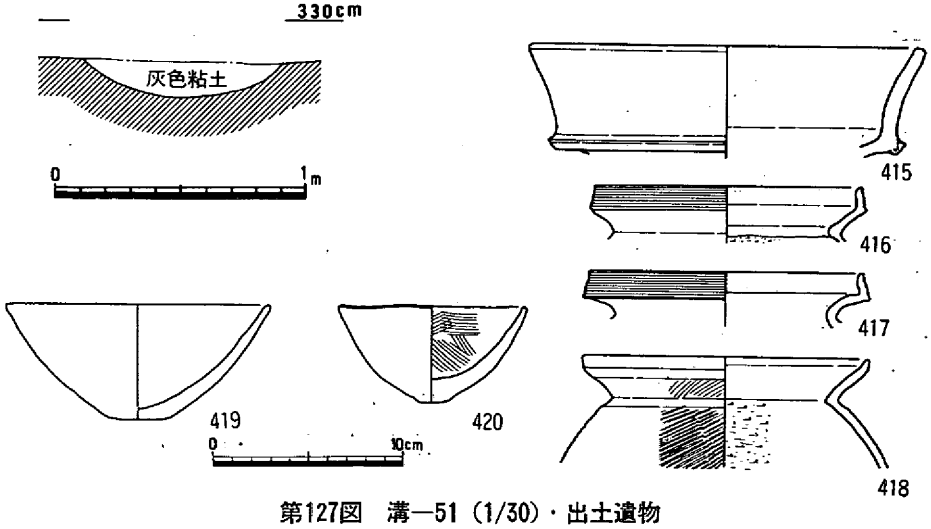
第126図　溝—50（1/30）

溝—52（第128図）

202Fの北東部において検出された。幅約30cm，深さ7cm前後を測る。埋土は2層認められた。出土遺物としては少量の土器片があるにすぎない。時期は百・古・Ⅰと考えられる。

溝—53（第128図）

202Fの北東部，溝—52の南において検出された。幅75～95cm，深さ10cm前後を測る。埋土は2層認められた。埋土中からは少量の土器片が出土している。時期は百・古・Ⅰと考えら



第127図　溝—51（1/30）・出土遺物

れ，溝―53とほぼ同時期のものであろう。

溝―54（第129図）

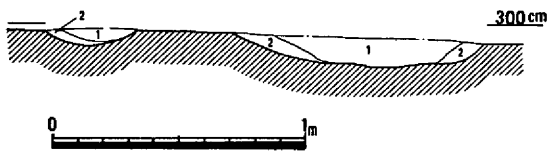
201Ｆの南東部において検出された。土壙―16を切っている。溝―52・53の北に位置し，これらとほぼ平行して走っている。底面は海抜300cm前後を測る。埋土は２層認められた。

出土遺物としては少量の土器片があるにすぎない。

時期はほぼ百・古・Ｉと考えられ，溝―52・53と同時期のものであろう。

溝―55（第130図）

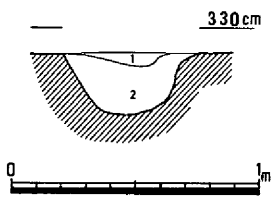
204Ｅの北部分において検出された溝で，北西―南東方向に走る。幅100～125cm，深さ20cm前後を測る。この溝の中，および南西部には柱穴状の凹みが２個一対で3列検出されている。こうしたことから，この溝は用・排水路といったものではなく，柵あるいは杭列にともなう溝と考えた方がよいかも知れない。埋土は暗灰色粘土が一層である。



1．灰褐色微砂

2．淡灰褐色微砂

第128図　溝―52・53（1/30）



1．淡褐灰色微砂

2．灰褐色微砂

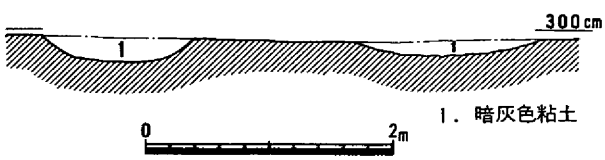
第129図　溝―54（1/30）

出土遺物がほとんどないため時期は明確ではない。しかし，この溝の埋土である暗灰色粘土は，百・古・Ｉと考えられる暗灰褐色粘質微砂層の上層に堆積しているものであることから，百・古・Ｉよりも新しく，ほぼ古墳時代のものと考えておきたい。

溝―56（第130図）

204Ｅの北部分において検出された。北西―南東方向に走る。溝―55の南西に位置し，溝―56とほぼ平行して走っている。幅110～140cm，深さは10cm前後を測るにすぎない。埋土は溝―56と同じ暗灰色粘土である。

出土遺物がほとんどないため時期は明らかではないが，埋土の状況から溝―56と同時期と考えてよいであろう。（平井）

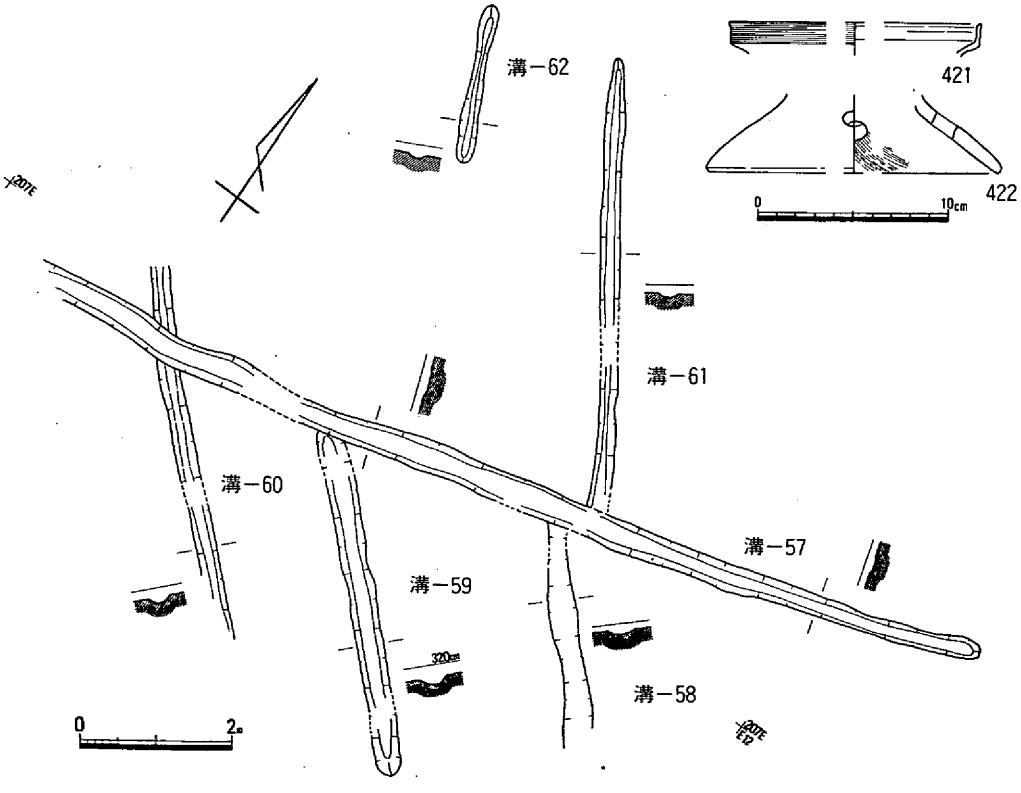


1．暗灰色粘土

第130図　溝―55・56（1/30）

溝—57・58・59・60・61・62（第131図）

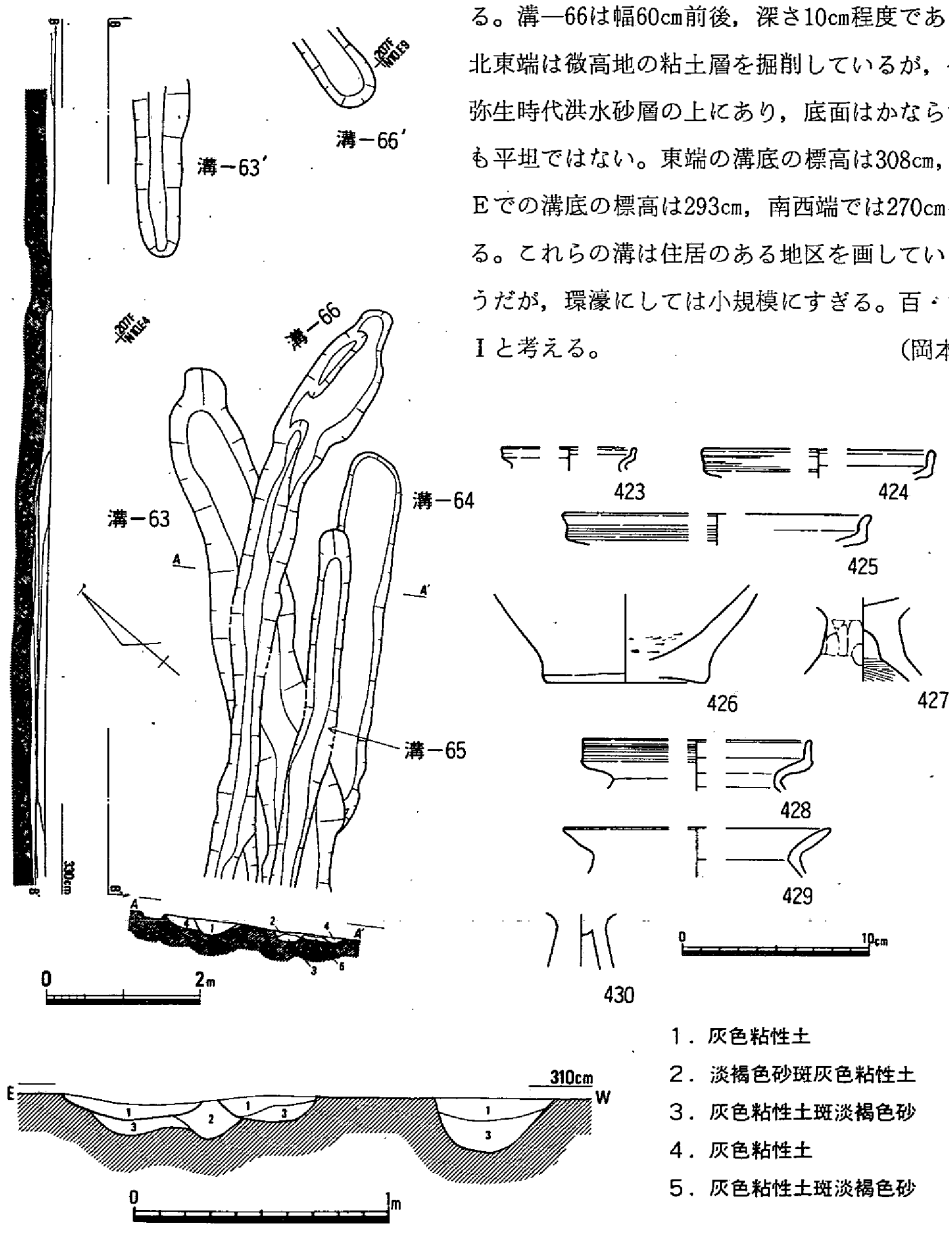
206Eと207Eの境界付近に検出された溝群である。いずれも残存状態が悪く，当初の形態を残しているとは考えられない。溝—57は13mにわたって検出された。幅40cm，深さ3～5cmを測る。方向は東西方向で，東端の標高は311cm，西端は307cmを測るが，溝底の傾斜はほとんど水平に近い。溝—58は5cm程度の深さで，3.7mの検出にすぎない。幅は45cmである。断面は皿形を呈する。溝—59は4.7mあり，幅35cm，深さ10cmを測る。溝—60は幅25～30cm，深さ5～7cmで，溝底は標高302cm前後，かなり凹凸があるが傾斜はほとんどみられない。溝—61は長さ7.6mで，幅30～35cm，深さ5・6cm，溝底の標高304cmを測る。溝—62は痕跡のようなもので，長さ212cm，幅24cm，深さ5cmと小規模である。6本の溝のうち，確実に溝としての機能をもっていたと考えられるものは溝—57だけである。他の溝はいずれも中途半端で，むしろ平行しあっていることが注意される。207Dにも同様の方向をもつ溝状遺構がみられる。これらは連続する遺構としてよいが，その機能は判然としない。埋土はどれも淡灰褐色微砂である。図示した土器は溝—61出土で，この土器や層位関係から，これらの溝は古墳時代前期のものと考えられる。



第131図　溝—57～62（1/100）・出土遺物

溝—63・64・65・66・63′・66′（第132図，図版44）

206Ｆから207Ｅへ続く溝である。206Ｆでの観察によれば４本の溝が切り合っていると判断され，これは掘り直しによるのではないかと考えられる。溝—65・66・63・64 の順に古くなる。この溝と対応する形で，溝—63′・66′が北東から伸び出している。検出全長は38ｍである。溝—66は幅60cm前後，深さ10cm程度である。北東端は微高地の粘土層を掘削しているが，他は弥生時代洪水砂層の上にあり，底面はかならずしも平坦ではない。東端の溝底の標高は308cm，206Ｅでの溝底の標高は293cm，南西端では270cmを測る。これらの溝は住居のある地区を画しているようだが，環濠にしては小規模にすぎる。百・古・Ｉと考える。（岡本）



第132図　溝—63～66・63′・66′（1/100）（1/30）・出土遺物

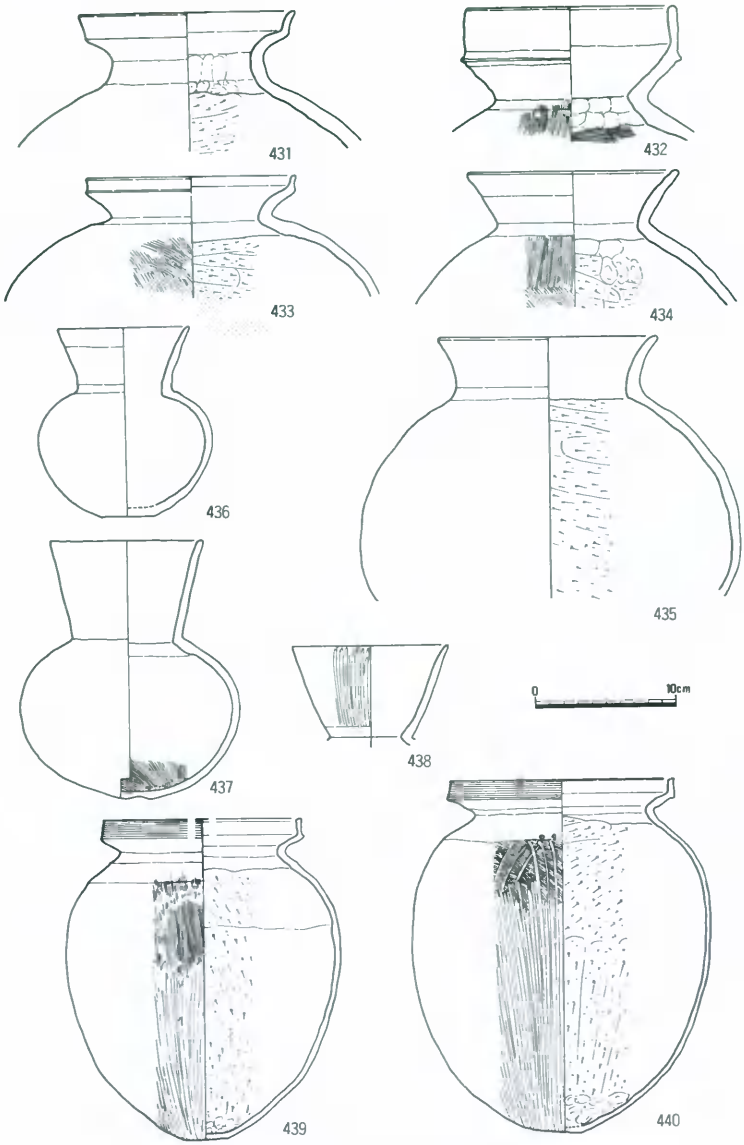
（6）土器溜り

土器溜り—1（第133図）

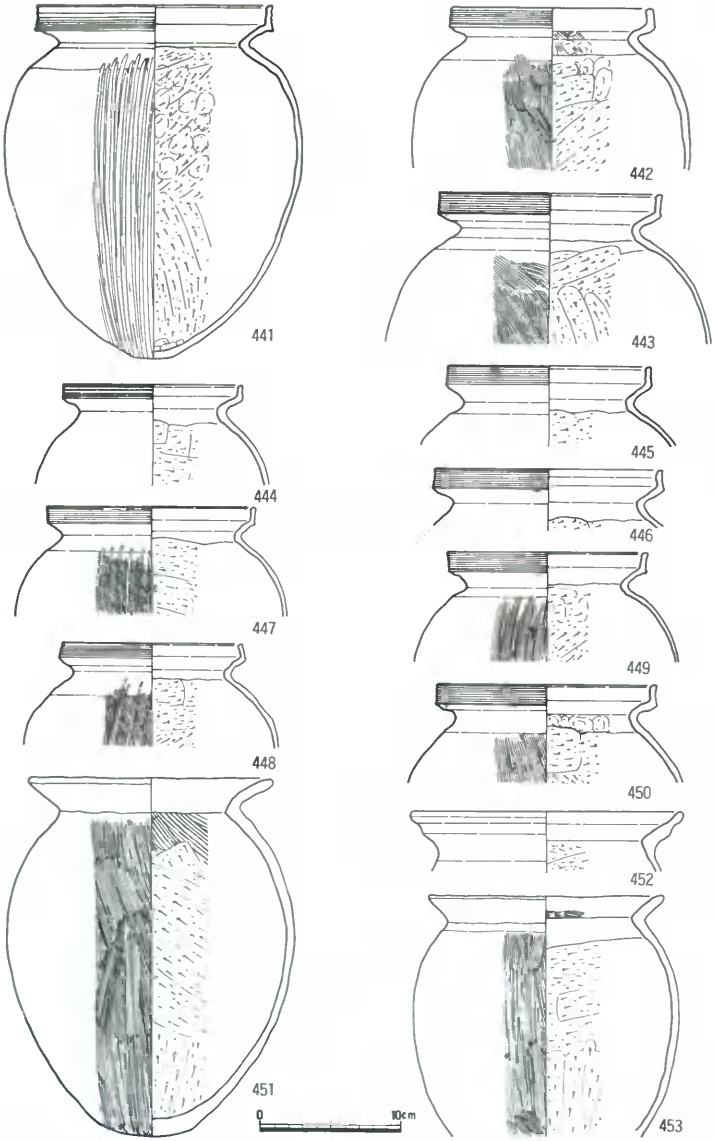
第133図　土器溜り—1（1/40）

205Dの西部において検出された。弥生時代後期の水田層が洪水砂によって埋没した後に堆積した黒褐色粘質微砂中から出土する土器溜りである。土器は約6×3mの範囲内に集中して検出されたが，土壙その他の遺構のような切り込みを認めることはできなかった。平面的にみると特に土器の集中する部分が長方形状を呈し，その北部に完形に復元できる土器などの密集が認められる。これらの復元可能な土器は，本来そこに置かれていたものが押しつぶされたような状態を示している。土器のレベルをみると約10〜15cmの幅に収まり，底面もほぼ一定している。出土する土器には壺・甕・高杯・鉢・椀・手焙などがある。また土錘と考えられる土製品が2個出土している。

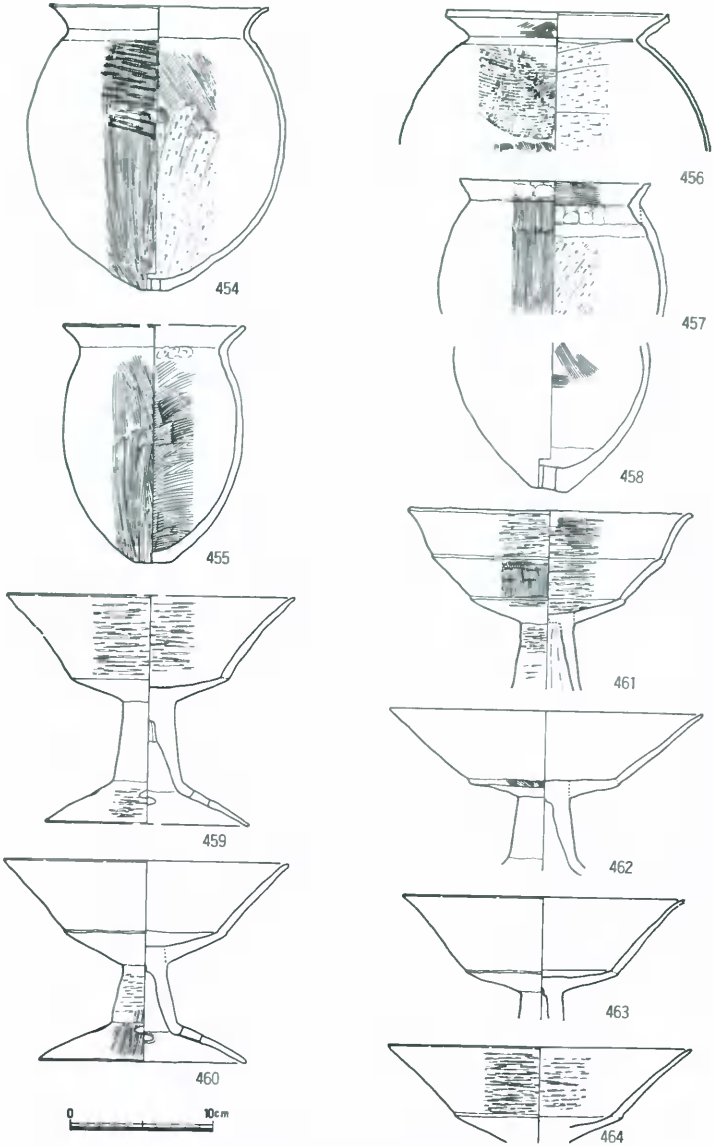
時期はほぼ百・古・Ⅰであろう。　（平井）



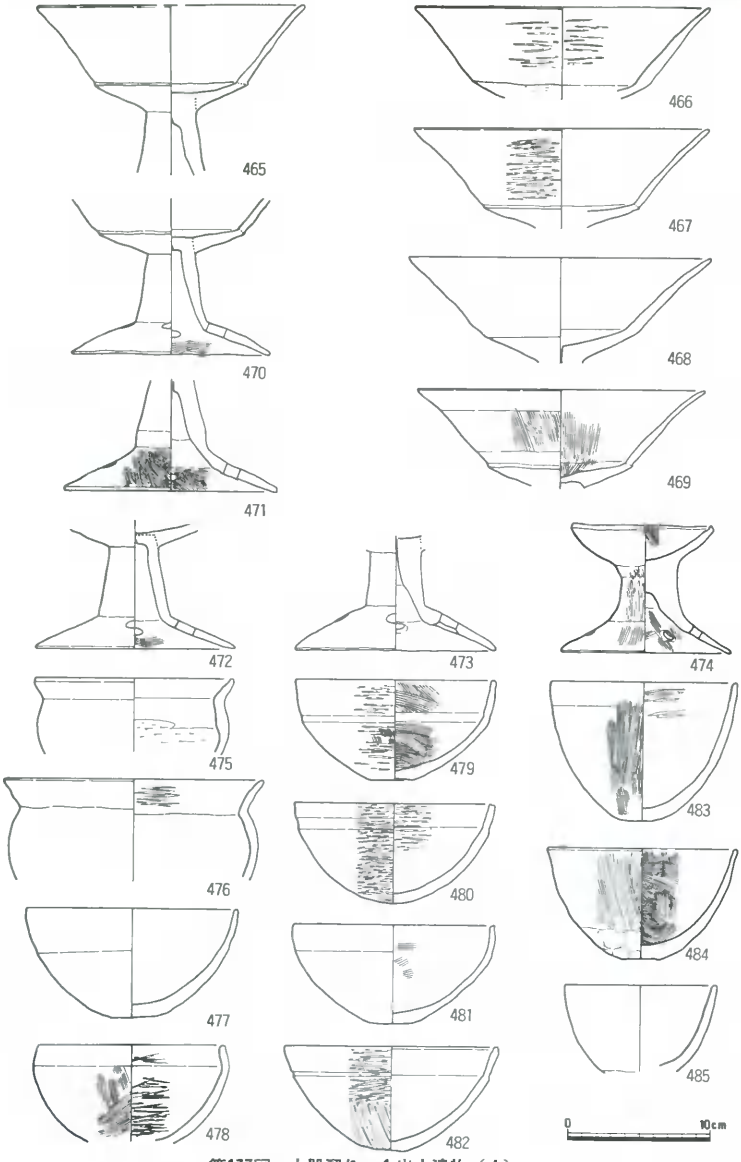
第134図　土器溜り－１出土遺物（１）



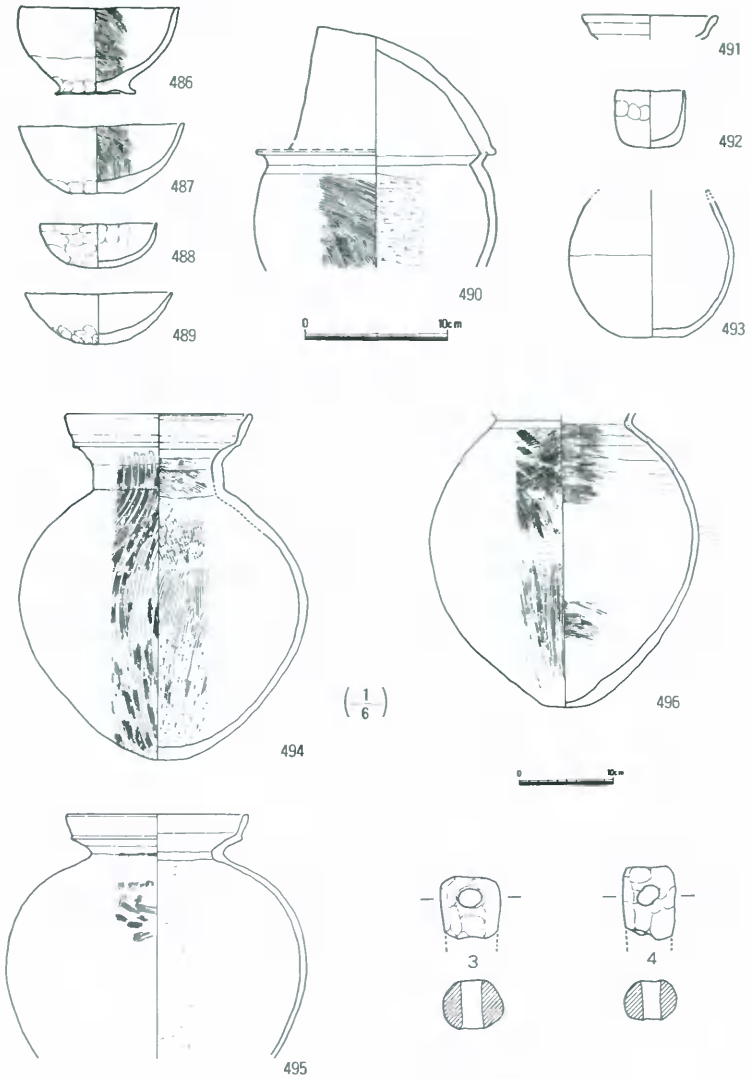
第135図　土器溜り－１出土遺物（２）



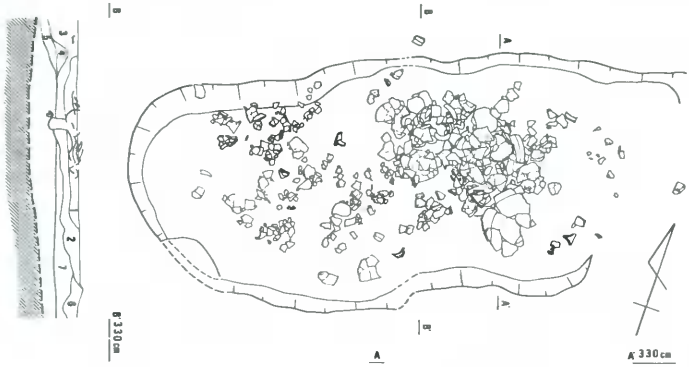
第136図　土器溜り－１出土遺物（３）



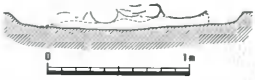
第137図　土器溜り－１出土遺物（４）

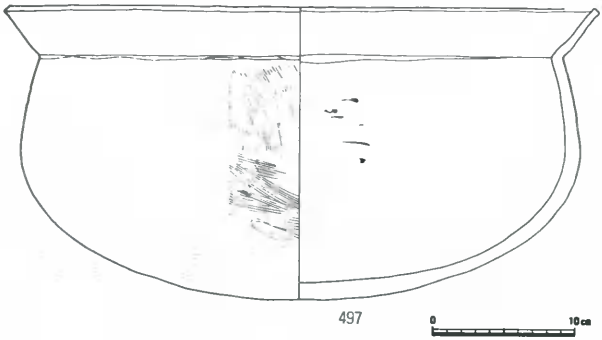


第138図　土器溜り－１出土遺物（５）



1．暗茶褐色土
(若干の灰白色の砂まじり)
2．1より若干うすい
3．黄茶褐色土
(砂質がかっている)
4．3よりやゝ黒味をおびている
5．黄茶褐色土(砂質)
6．茶褐色土(若干砂質がかっている)
7．黄褐色土(砂質)

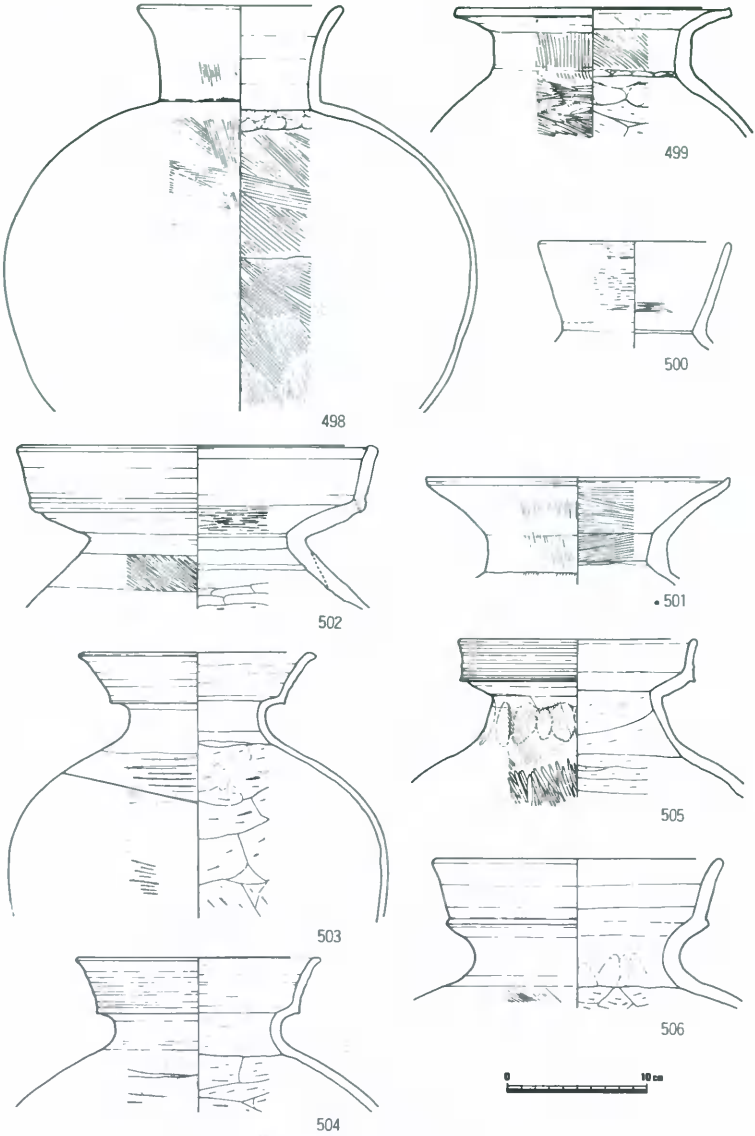




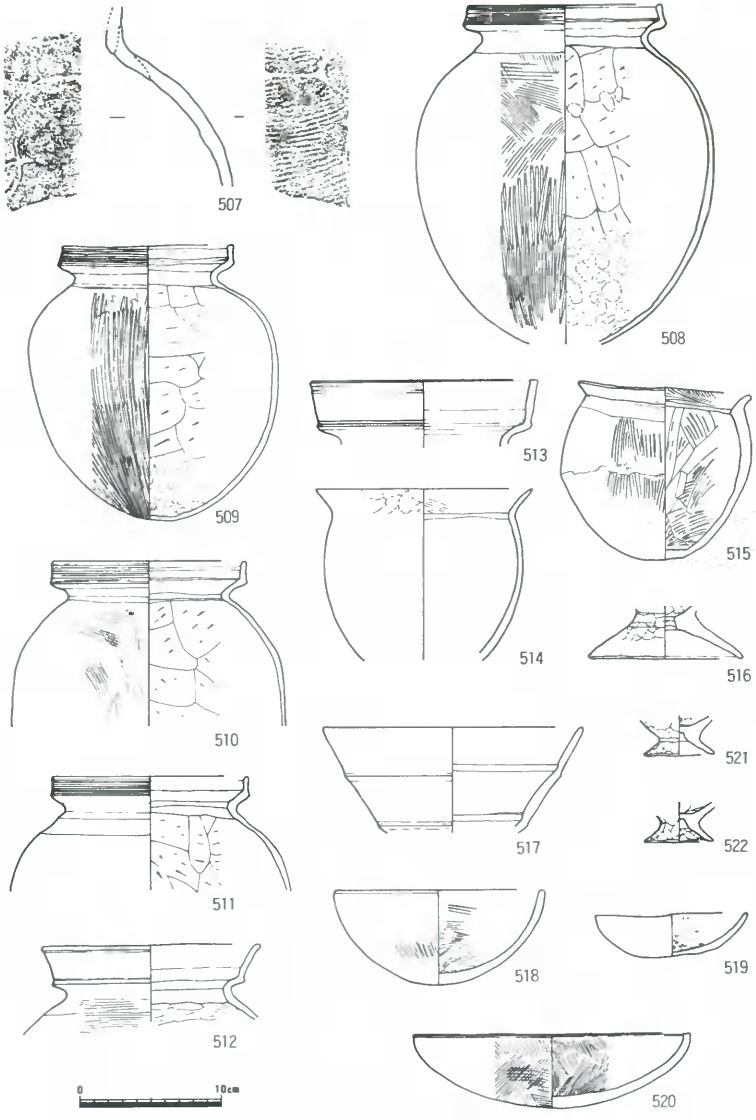
第139図　土器溜り―2(1/40)・出土遺物（1）

土器溜り―2（第139図）

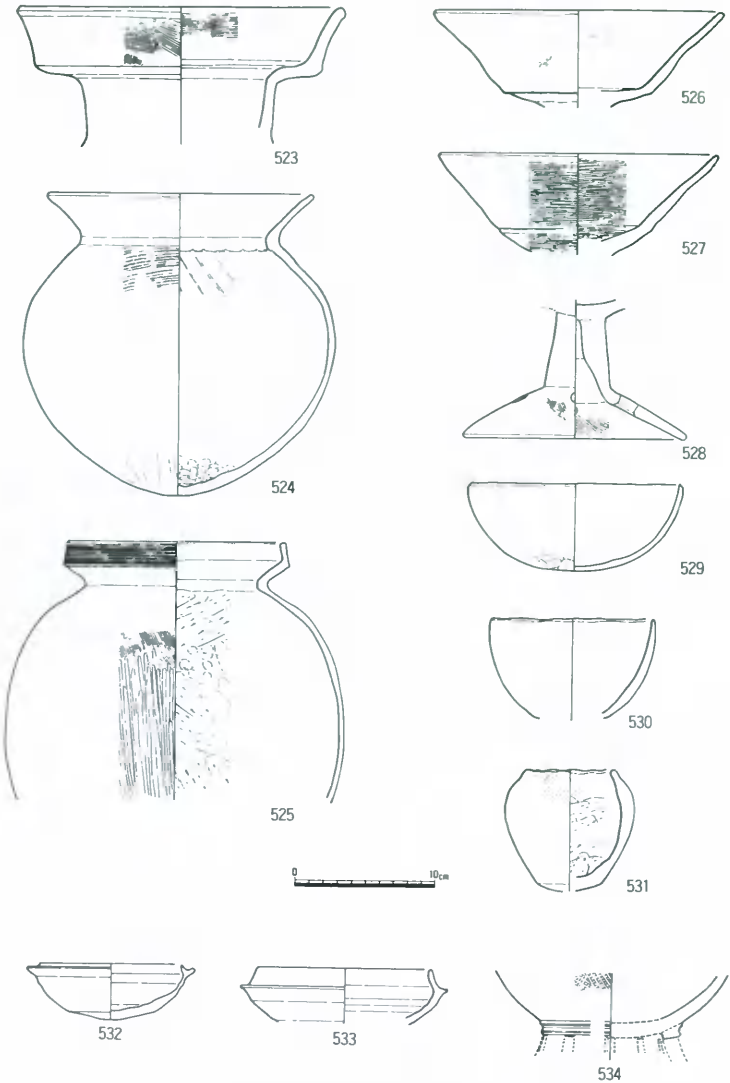
206Eの南西部において検出された遺構で，弥生時代後期の水田面を洪水砂によって埋没した後に堆積した暗褐色粘土質微砂層中から検出された土器溜りである。土器は180cm×400cmの平面不整形の若干凹をおびた範囲内に集中して検出されたが，これが土壙であるか否かは認めがたいものであった。特に土器の集中する部分は中央部が多く密集して認められた。復元可能な土器が押しつぶされた状態を示している。時期は百・古・Ⅰであろう。　（二宮）



第140図　土器溜り－２出土遺物（２）



第141図　土器溜り－2出土遺物（3）



第142図　包含層出土遺物（1）

（7） 包含層出土遺物（第142・143図）

横田調査区においては，その全域において古墳時代の包含層が堆積していた。微高地上では，10cm前後の包含層が認められ，低位部に向かって徐々にその包含層が厚く存在する。

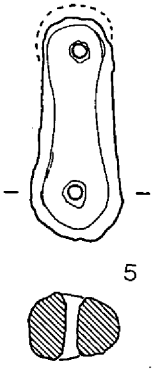
この古墳時代の包含層である暗灰色粘質土は，2層～3層に分層が可能である。その包含層上層には，図示した**532・533**などの須恵器が含まれる。これらの出土する須恵器も，5世紀後半～6世紀前半，6世紀後半～7世紀初頭の2時期のものが多く，将来これらの時期に分層できる可能性も考えられる。

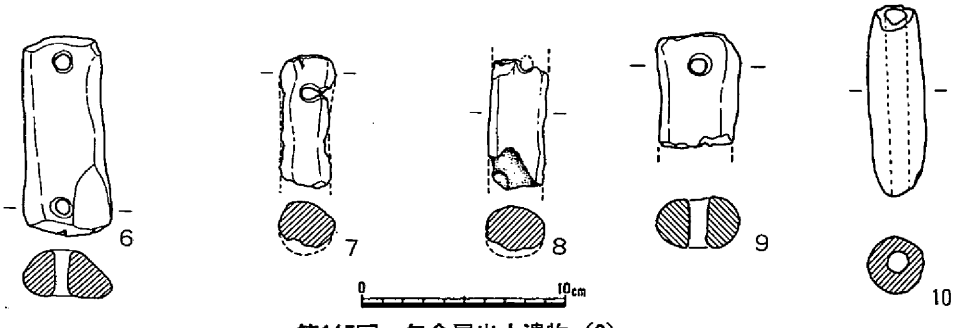
一方，包含層下部は，古墳時代初頭の時期と考えられている。この包含層は，百・古・Ⅰ～Ⅱ期を中心とする土器が多量に包含しており，本調査区出土の全遺物の過半数以上を占めている。このことは，先述した竪穴式住居，建物，井戸，土壙など多数の遺構が集中して認められることに起因するものである。この地点が古墳時代初頭の居住域として，安定した状況の立地を占地したと思われる。

図示した土器は，いずれも先述した包含層から出土したもので，**523～531**の土器は下層のものである。この古墳時代初頭の土器の中で壺は，多種多様の形態が存在する。比較的大型の壺が多く認められ，小型の壺は**437**の様な直口壺が特徴的である。大型の壺は，口縁部が外反するもの，屈曲するものさらには，上方に拡張するもの，二重に縁をもつものなど変化に富む。甕は，「く」の字口縁を有するものがある程度認められるが，今回の調査でも圧倒的に**525**のような特徴をもつ甕がその大部分を占めた。また，**529・530**のような小型の鉢がその比率を高めている。

また，包含層からは土器以外に，石器，土製品などが若干数出土している。石器は，図示しなかったが，砥石の破片が数個検出された。土製品は，第143図の土錘である。**5**～**10**の土錘は，**6**～**9**のような双孔のものと**10**の管状のものがあった。これらの土錘は，上下いずれの層からの出土が限定できえていない。

ここでは，古墳時代のものをとくに報告する。

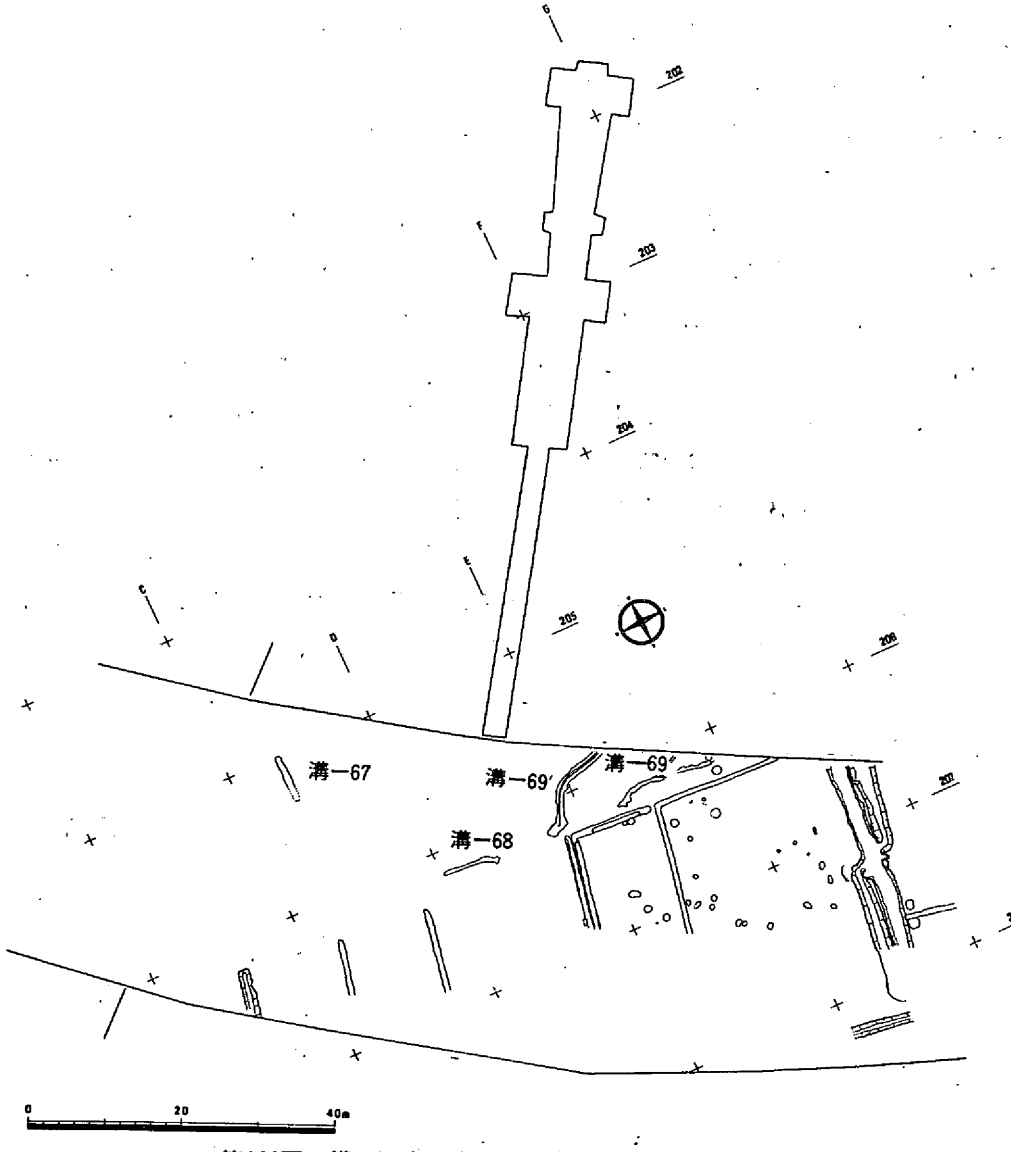




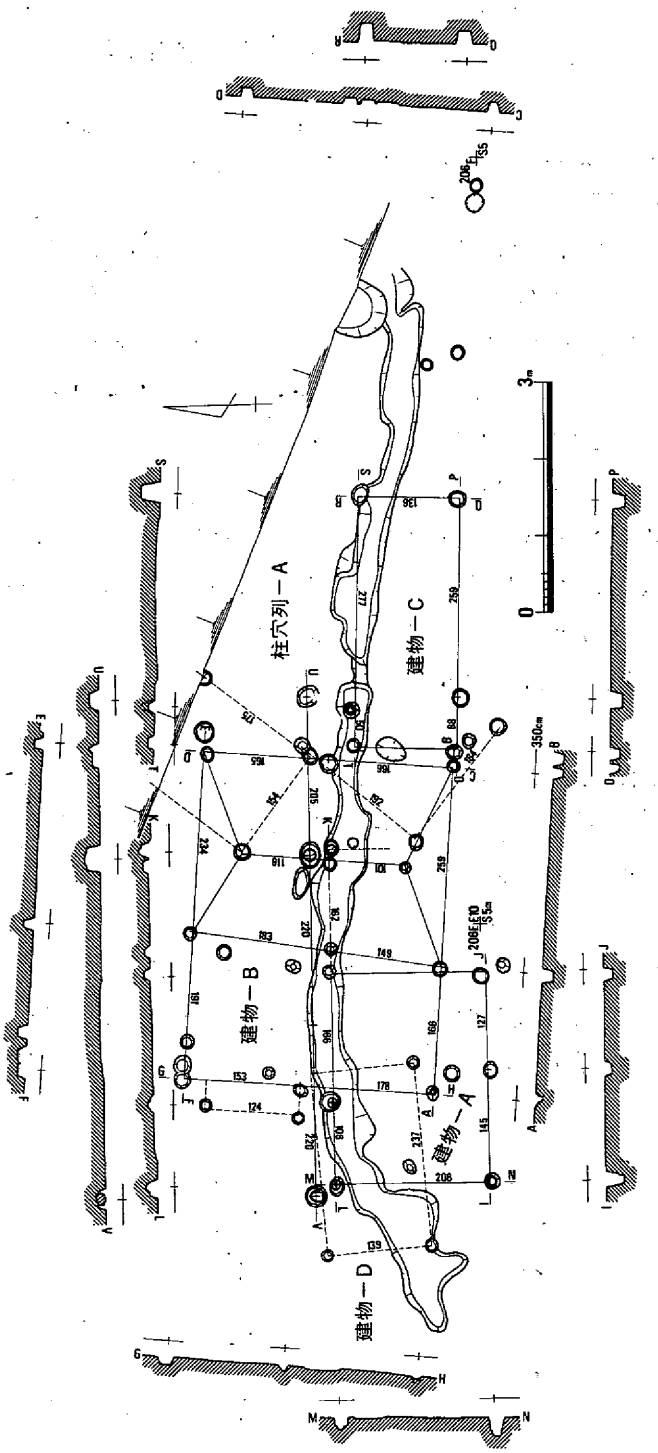
第143図　包含層出土遺物（2）

6. 古代・中世の遺構・遺物

横田調査区における古代以降の遺構はきわめて少なく，いずれも中世のものである。206Ｅでは柱穴群と溝が３本検出されているが，他には，205Ｃと206Ｄでそれぞれ溝が１本検出されたにすぎない。これら中世の遺構はいずれも調査区一帯にある中世の包含層の灰白色粘土が落ち込んだものである。この灰白色粘土層からは早島式土器の出土が顕著であり，14世紀以降と考えられる。また古代の遺物もいくらか包含されている。



第144図　横田調査区中〜近世遺構全体図（1/1,000）



第145図　溝―69″・柱穴群（1/100）

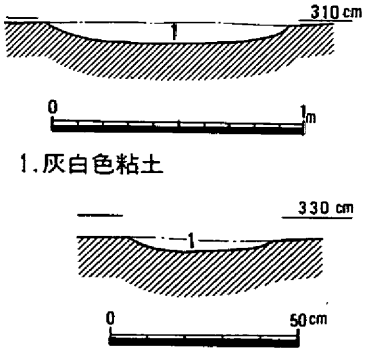
溝―69″・中世柱穴群

（第145図，図版48）

206E の北半でかなりの柱穴が集中して検出された。柱穴の直径は小で15cm前後，大は40cm程度とかなり幅がある。深さは浅いもので7cm，深くても17cmにすぎず，あまり良好な残存状況とはいえない。柱穴の中には柱痕跡をもつものや礎石をもつものがあり，柱穴で間違いないが，なかにはかなり疑問なものもみられた。これらの柱穴群の中央に溝―69″が位置している。溝とはいいながら，平面形はきわめて不整形であり，深さも，もっとも深いところで6cmと，幅の割りにはきわめて浅い。中央より少し東のところで東西に二分されるようで，これらの状況からすれば常時流れるような溝という感じは受けない。また，後述するような推定建物との位置関係も良好ではなく，雨落ち溝のようなものとも考えられない。したがっ

て，その機能については不明と言わざるをえない。なお，溝の幅は西半の中央付近で44cmを測り，溝底の標高は325cm程度である。

百間川遺跡群で検出された中世の建物には平面形の不整形なものが多く，厳密な企画をもつものはまれである。当区の建物群も同様であり，検出時点から建物として明瞭に把握できたものはなかった。第145図に示しているものは，いずれも柱穴の深さを主要な根拠として，図上で復原したものである。もっとも可能性の高いものは建物—Ａで，２×１間の東西棟である。西辺の方位はＭＮ1°Ｅを測る。次いで建物—Ｂが想定される。２×２間の大形建物で，東半には束柱を考えてみた。西辺の方向はＭＮ5°Ｅである。建物—Ｃ・柱穴列—Ａの可能性は低いが，存在したとすれば，建物—Ａとの共存が考慮される。破線はかすかな可能性を示したにすぎない。この建物群から６ｍ北西で２本の浅い溝を検出した。あたかも柱穴群を囲むような形態をしているが，直接の関係は明確でない。この溝—69′は幅40〜50cm，深さ５cm前後にすぎない。（岡本）



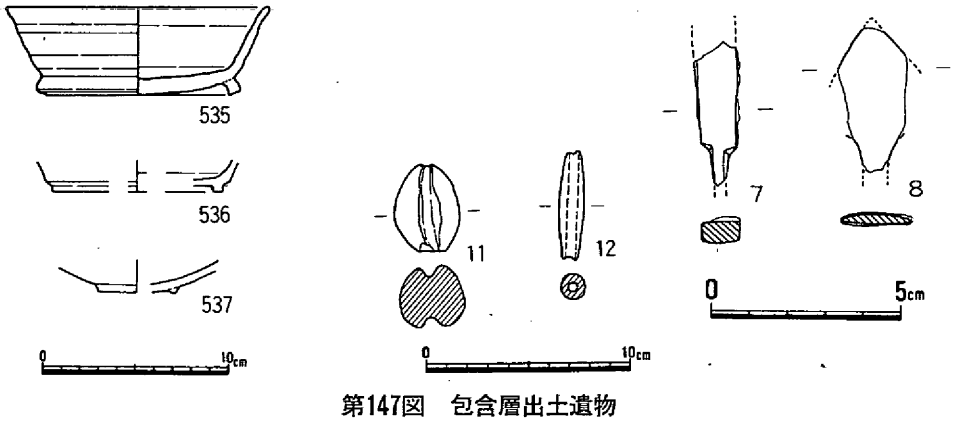
第146図　溝—67・68（1/30）

溝—67（第146図）

205Ｃの北西部において検出された溝で，ほぼ南北方向に走る。幅40〜70cm，深さは２〜６cmを測るにすぎない。検出できた長さは約650cmである。出土遺物はなかったが，灰白色粘土によって埋っていることから中世のものと考えられる。

溝—68（第146図）

206Ｄの北西部において検出された溝で，ほぼ東西方向に走っている。幅75〜95cm，深さは５〜10cmを測るにすぎない。検出できた長さは約760cmである。出土遺物はないが，溝—67と同様に灰白色粘土で埋っていることから，中世のものと考えられる。（平井）



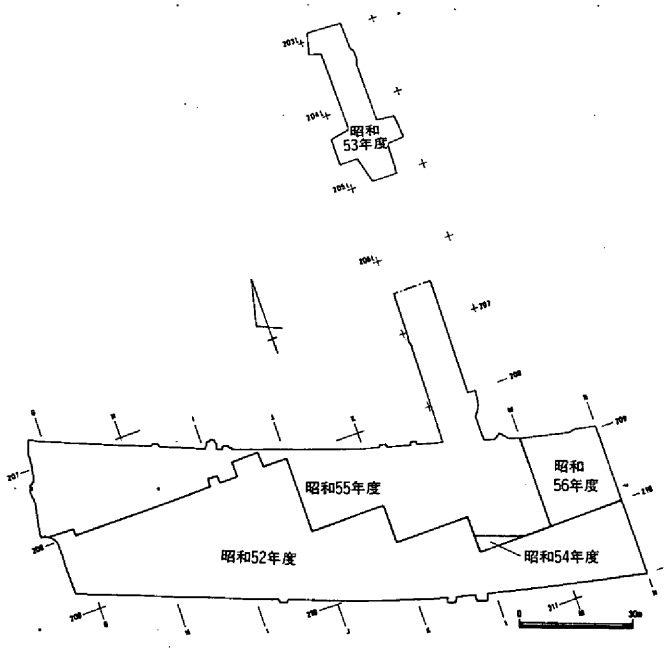
第147図　包含層出土遺物

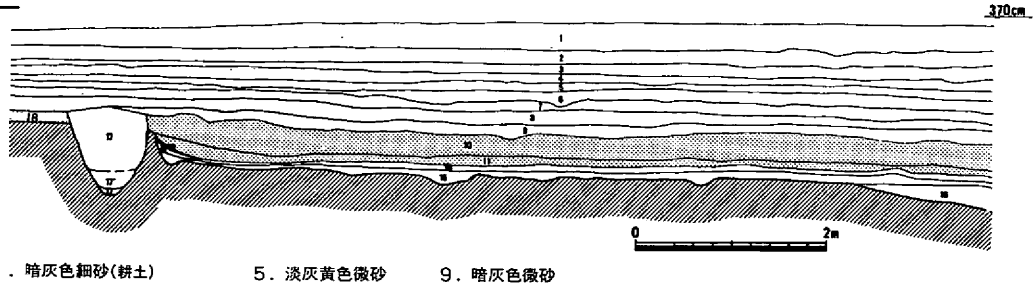
第2節　高縄手Ａ調査区

1. 調査区の概要

高縄手Ａ調査区は，百間川沢田遺跡のほぼ中央に位置している。調査は，第148図に示すごとく，調査区を区切って昭和52年度から昭和56年度にかけて断続的に行われた。まず，昭和52年度に低水路部分南半分（208Ｇ～210Ｍ）の調査を行い，続いて昭和53年度には樋門工事に伴い干物樋門地区（203・４Ｌ）の調査が，昭和54年度には工事の都合で209Ｌの三角形部分だけの調査が行われ，そして昭和55年度に干物樋門導入水路（206Ｌ～208Ｌ）から低水路北半分（206Ｇ～209Ｌ）の調査が，最後の昭和56年度に209Ｍの調査が行われた。

高縄手Ａ調査区は，前節の横田調査区とは深く掘り込まれた現代溝を，後節の高縄手Ｂ調査区とは弥生時代以前の旧河道の下がりは





1．暗灰色細砂(耕土)
2．灰色・明黄褐色混合中砂(床土)
3．淡灰色粘質微砂
4．淡灰黄色粘質微砂
5．淡灰黄色微砂
6．灰色粘質微砂
7．灰褐色粘質微砂
8．暗灰褐色粘質微砂
9．暗灰色微砂
10．淡黄灰色細砂(洪水砂)
11．灰色粘質微砂(洪水砂)
12．灰白色細砂
13．茶灰褐色粘質微砂
14．灰白色粘質土(水田層)
15．灰色粘質土
16．暗灰黄色粘質微砂
17．灰褐色粘質微砂(井戸−24)
18．暗茶灰色粘質土

第148図　高縄手Ａ調査区・206・7Ｌ西壁土層断面（1/2,000・1/80）

じめるＮラインをもって便宜的に区切ったもので，弥生時代後期の水田は旧河道上に高縄手Ｂ調査区に向って連綿と続いている。なお，旧河道上の弥生時代後期の水田については一括して後節に報告されている。干物樋門地区と干物樋門導入水路地区の間には，低水路地区の東端に検出された旧河道が横たわっており，干物樋門地区は旧河道を挟んだ対岸の微高地上に位置するもので，干物樋門導入水路・低水路地区とは分けて次に概要を述べる。なお，この干物樋門地区と干物樋門導入水路地区の間については，旧河道上に弥生時代後期の水田が確認され，干物樋門地区の下がりには縄文時代晩期から弥生時代前期の包含層を確認したものの，調査地区が狭小な為，旧河道の調査は行っていない。

干物樋門導入水路・低水路地区（第148図）

この地区では早い時期の調査と，既調査区の低水路掘り下げ工事の終った後の調査とでは，調査環境等に相当の差が生じ，また，一つの遺構がかなりの時間の経過をもって調査されるなど遺構の検出状況に多少の相違がみられる。図の土層断面は，干物樋門導入水路地区北半西壁のものである。当地区では，耕土下40～60cmの海抜300cm前後に古代から中世にかけての包含（５・６）層が，海抜280cm前後に古墳時代の包含（７～９）層が認められる。その下は微高地（18層）・「島状高まり」遺構および弥生時代後期の水田を一気に覆った洪水砂（10・11）層である。弥生時代後期の水田（14）層は，海抜210cm前後に認められる。16層は旧河道下がりの堆積土である。

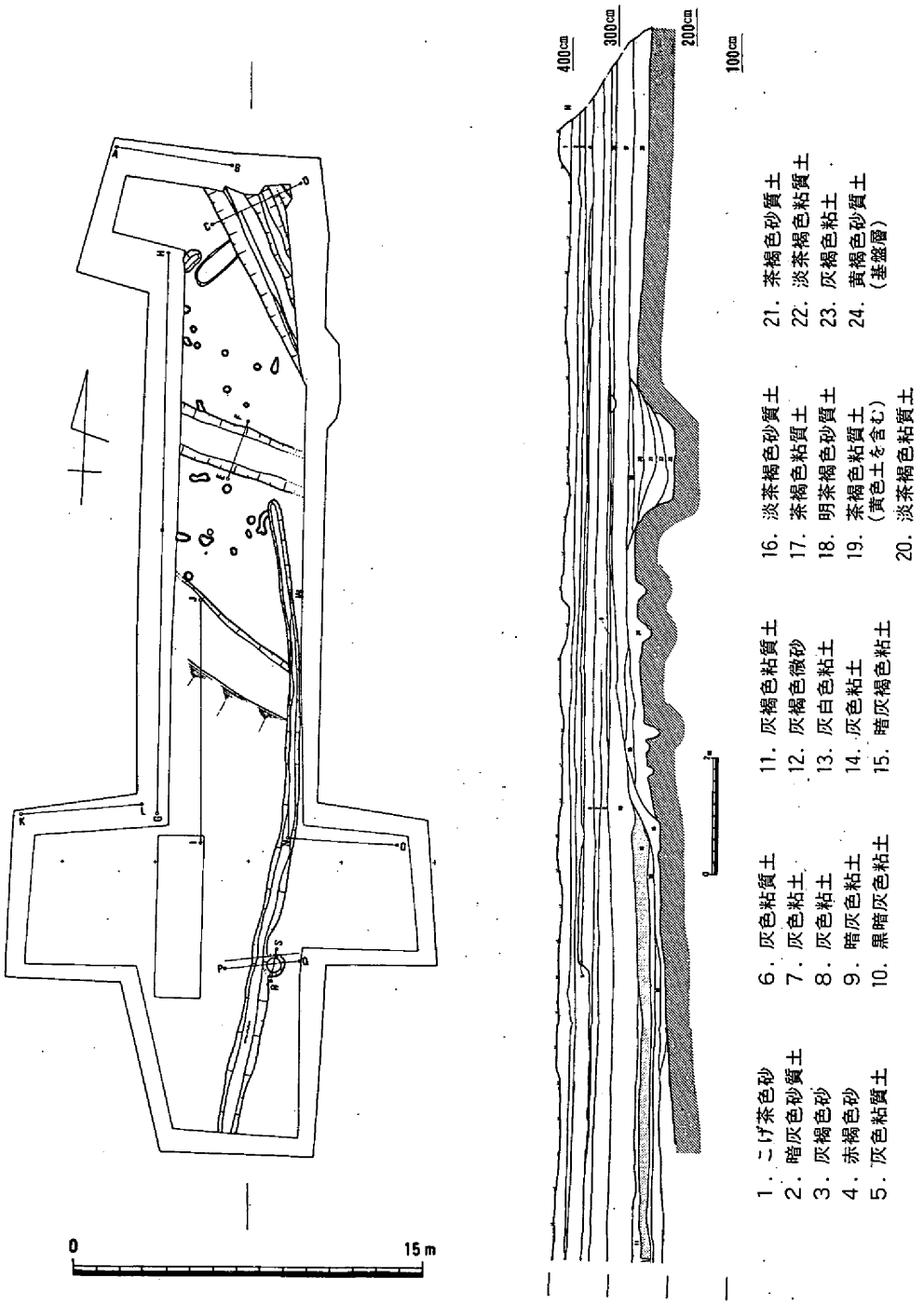
縄文時代の遺構および遺物はいずれも旧河道付近において認められている。弥生時代前期の遺構としては，竪穴式住居１軒・土壙40基・土壙墓２基・溝５本が検出されている。弥生時代中期の遺物は若干みられるが，遺構の確認されたものはない。弥生時代後期の遺構は，水田と「島状高まり」遺構，およびそれらに伴うと考えられる溝状遺構の他に土器溜りが２か所ある。古墳時代の遺構としては，竪穴式住居12軒・建物１棟・井戸26基・土壙10基・溝21本・土器溜り８か所が検出された。その他，中世の遺構として溝７本と畝状遺構が確認された。（内藤）

干物樋門地区（第149・150図）

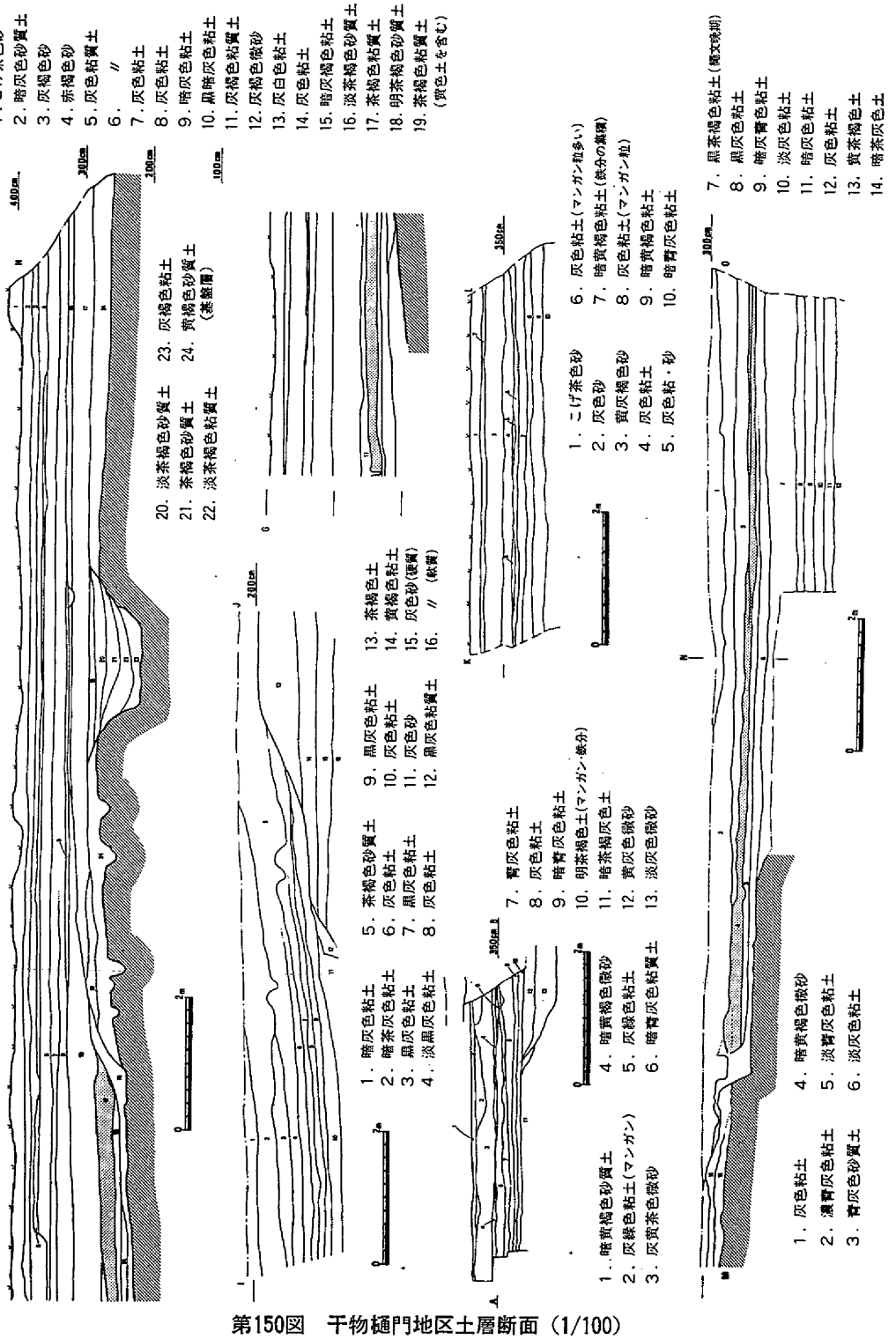
干物樋門の発掘調査は昭和53年11月の１か月間に実施された。従来の樋門部分の改築工事に伴うものであり，その規模は延長約45ｍ，幅7.5～18ｍを測り，面積約500㎡である。

調査前状況は調査区中央に幅約300cm，深さ約100cmの南北に走る用排水路が機能しており，まず作業は，流路を調査区の東に付け変えることより開始された。付け変え後は重機により表土から約50cm，灰色粘（質）土上面までの排土を行い，そこより削り出しを実施した。

遺構は海抜300cm付近より南北に走る中世の溝が検出され，その下位より古墳時代前期の溝，弥生時代後期末の水田域，居住域，弥生時代前期の溝等が確認された。水田遺構の下位では微高地肩口および下がり部が検出され，そこより弥生時代前期，縄文時代晩期の包含層に至る。



第149図　干物樋門地区遺構図（1/300・1/175）



第150図　干物樋門地区土層断面（1/100）

第151図　高縄手A調査区縄文・弥生時代遺構図（1/500）

この調査区では調査区北側半分が微高地，南側半分が旧河道の形状を呈していることが判明した。　（高畑）

2．縄文時代の遺構・遺物

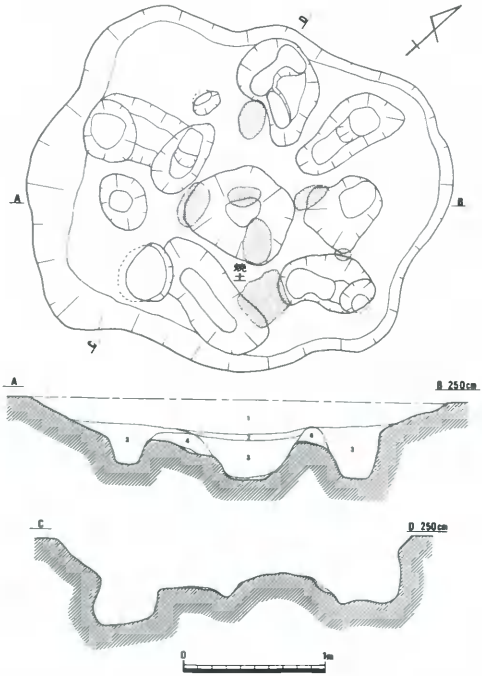
高縄手A調査区では，縄文時代の遺物の出土は旧河道およびその周辺に集中しており，大半は，旧河道の斜面堆積土から出土したものであるが，210Mにおいては不整の穴を何か所も穿った土壙が4基検出されている。

（1）土　　壙

土　壙—25～28（第152図，図版64—1）

土壙4基は，調査区の南東端部のMライン周辺に位置する。土壙は，いずれも基盤層の黄褐色土から掘り込まれているものの，検出は非常に難しいものであった。

土壙—25は，300×250cmを測る楕円形を呈する。土壙内は，中央部と中央部を囲うように土壙が掘り込まれている。これらの土壙は，30～70cmの大きさのもので，深さは20～30cm程である。また土壙内は，中央部土壙及び中央部高位部を中心に焼土面が多数存在する。さらには，まわりの土壙内も含めて大きな焼土塊が検出されている。土壙の埋土には，炭，焼土が多数混入している。土壙の性格等につ



1．淡黄茶色砂質土

2．炭

3．淡黄褐色粘質土（焼土，炭含む）

4．青黄褐色粘質土

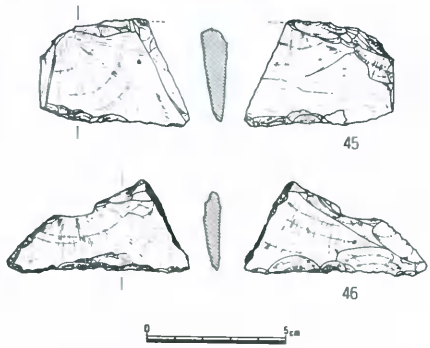
第152図　土壙—25（1/40）

いては不明である。土壙埋土からは，縄文時代晩期の土器の細片が数点出土した。土壙—26〜28も同様なものである。

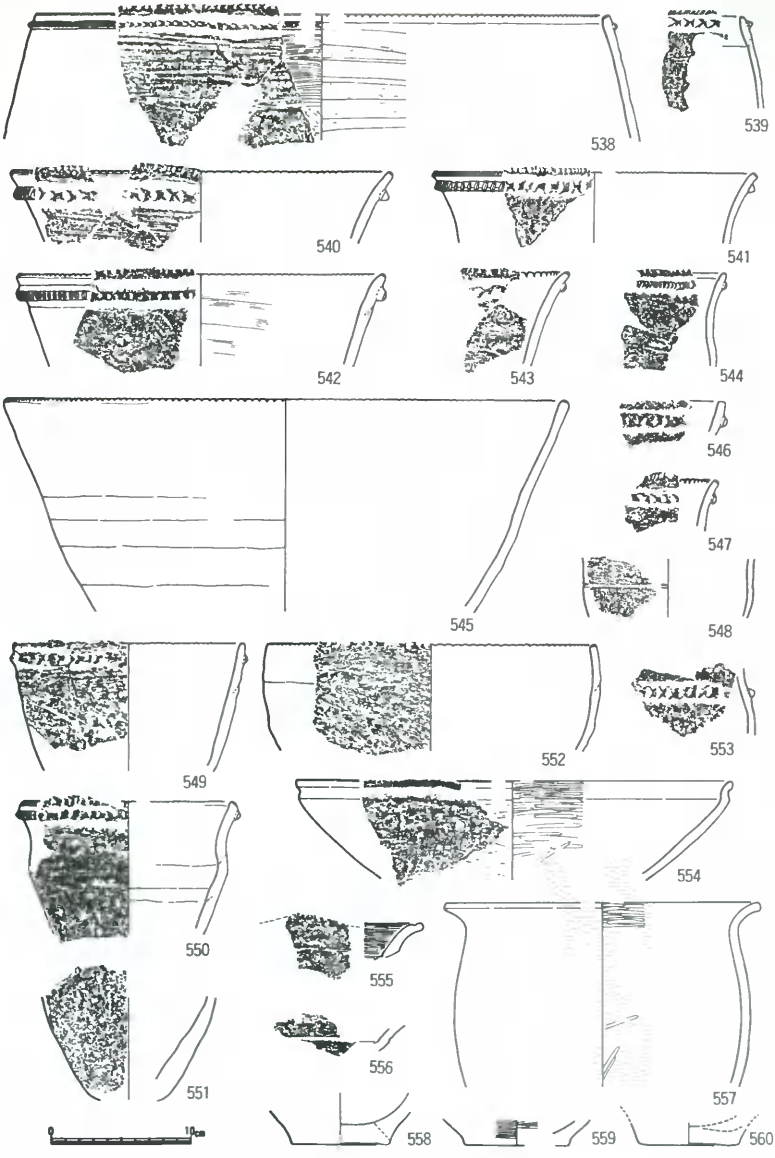
（中野）

斜面堆積—１（第153・154図，図版64）

209Mの東端にある。高縄手Ａ調査区からＢ調査区にまたがる旧河道の西岸部である。この旧河道へ東西両岸の微高地から土砂が流れ込み，この中に多量の遺物が包含されている。河道が川としての機能をしだいに失っていくような状態での埋没と考えられ，洪水等による瞬時の埋没ではない。この堆積層の最上層には縄文時代晩期の土器が多く含まれているが，弥生時代前期の土器片も認められる。したがって，完全に埋没して平坦になるのは弥生時代前期のことと判断される。第153図の土層図によって説明を加えたい。１は耕土と置土で現代層である。２〜４の層は灰色系の粘土層で早島式土器などを含み，中世の層である。灰色粘土と通称している。６は暗灰色粘性微砂層で古墳時代の須恵器がかなり含まれ，他に土師器の出土も多い。４と６に挟まれた５はあまり遺物を出さないが，層位的には古代の層と考えられる。９は弥生時代の洪水砂層，10・11は弥生時代後期水田層である。13〜15層が斜面堆積層で，青灰色〜灰黒色の粘土層である。調査時は14・15層を分離できず一時に掘り下げたため，この



第153図　斜面堆積—１土層（1/80）・出土遺物（１）（1/2）

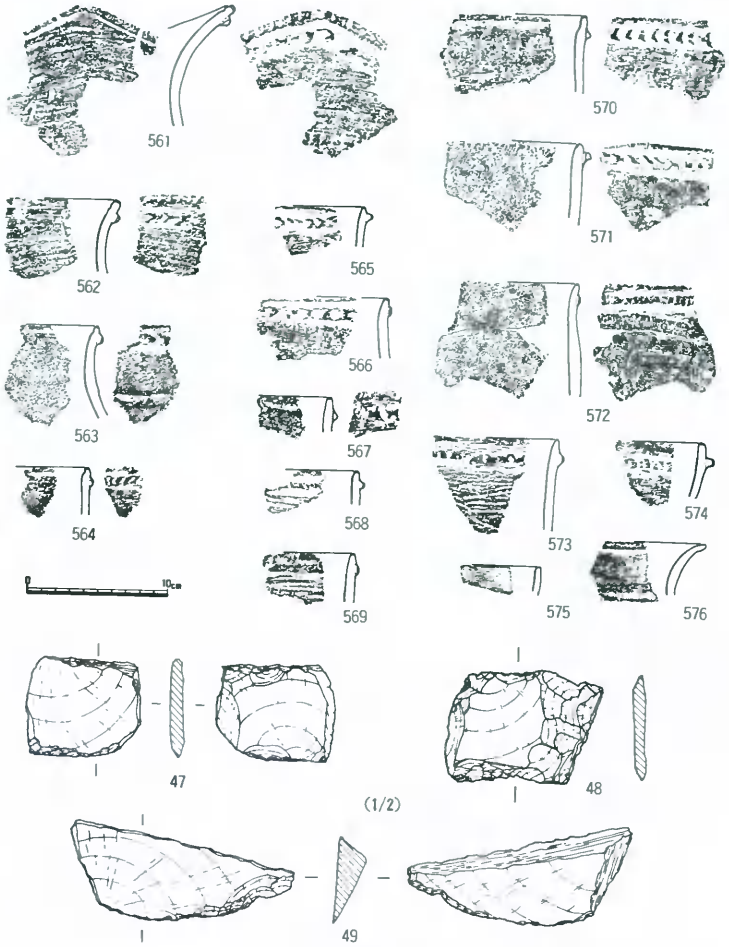


第154図　斜面堆積―１出土遺物（２）

際に出土した土器を図示した第154図には弥生式土器も含まれている。　（岡本）

斜面堆積―２（第155図）

この地点は，調査区西端部に存在する旧河道の肩口にあたる。この旧河道は，幅約60cmのもので，縄文時代晩期の時点では自然流路として存在していたと考えられる。この斜面堆積は，旧河道肩口から河道下層に堆積する黒灰色粘土層で，肩口周辺に土器が多く包含していた。こ



第155図　斜面堆積―２出土遺物

のような状況は，斜面堆積―1，3と同様なものである。しかし，これら斜面堆積―1～3は縄文時代晩期にあって各々時期差がある。

出土遺物は，図示した561～576のほか相当量出土した。出土した土器は，大部分が深鉢で口縁部に貼付突帯をもつ。また，口縁部内面の口唇部に沈線をもつもの（561～564，570）も含まれる。さらに外面は，条痕を施すもの（561，562，568，569，573）が残るなど突帯の有する土器の中でも古相の様相をもつ。（中野）

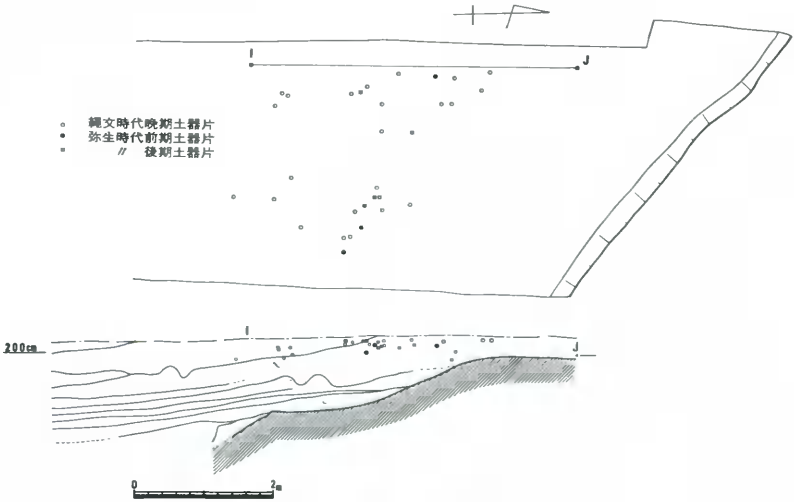
斜面堆積―3（第156・157図）

204Lに位置し，204線南側より基盤層の下降が認められ，肩口の方向は北西より南東に走る。

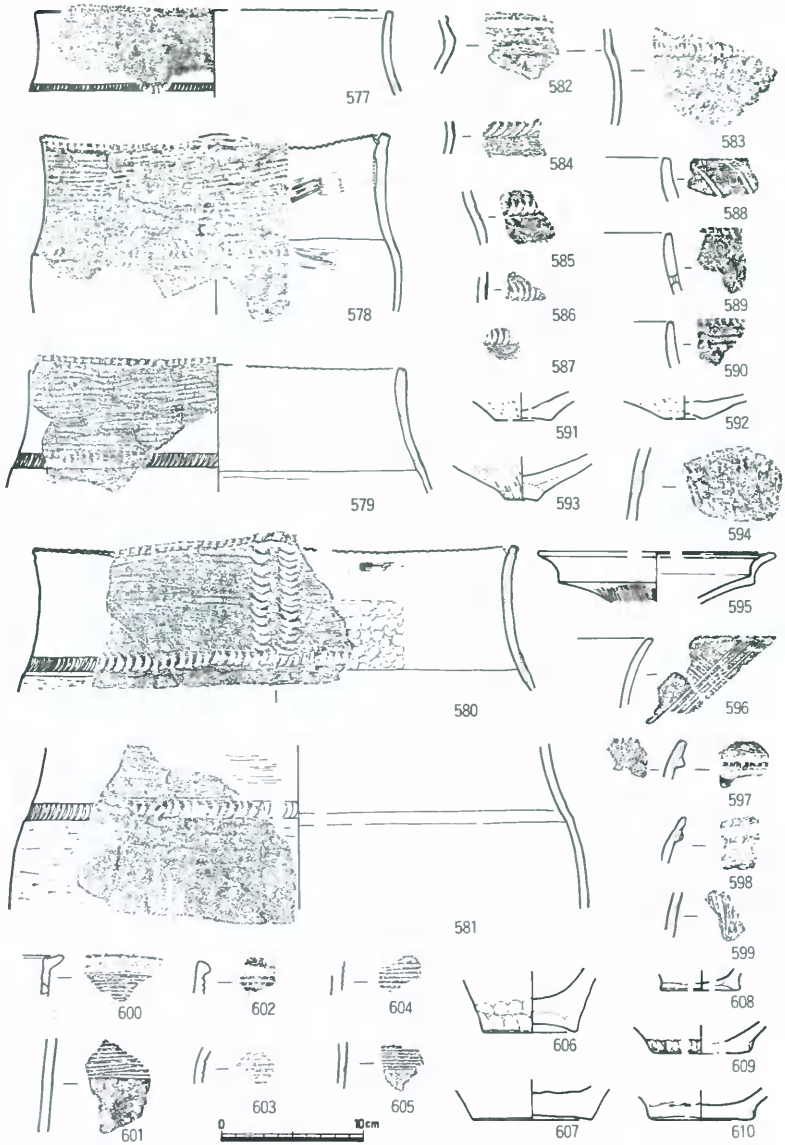
遺物の出土範囲は2×4m間に限られており，縄文時代晩期・弥生時代前・後期の土器片が肩口より約8m内に認められた。土器小片は2層の暗茶灰色粘土層中に大半が含まれており，3層の黒灰色粘土内および，3・4層間（海抜150cm）に557～581等の大型片が認められた。

4・5層の上面は微高地上より継続する基盤層と同一面を形成しているものと考えられ，遺物はすべてこの線より上層で出土している。

557～581，583～594等は原下層式，597～599等は黒土BⅡ式に並行するものと考えられる。582は縄文時代後期，600～610は弥生時代前期に比定することができる。595については類例に乏しいが縄文時代晩期に属すると考えておきたい。（高畑）



第156図　斜面堆積―3（1/80）



第157図　斜面堆積―３出土遺物

3.　弥生時代前期の遺構・遺物

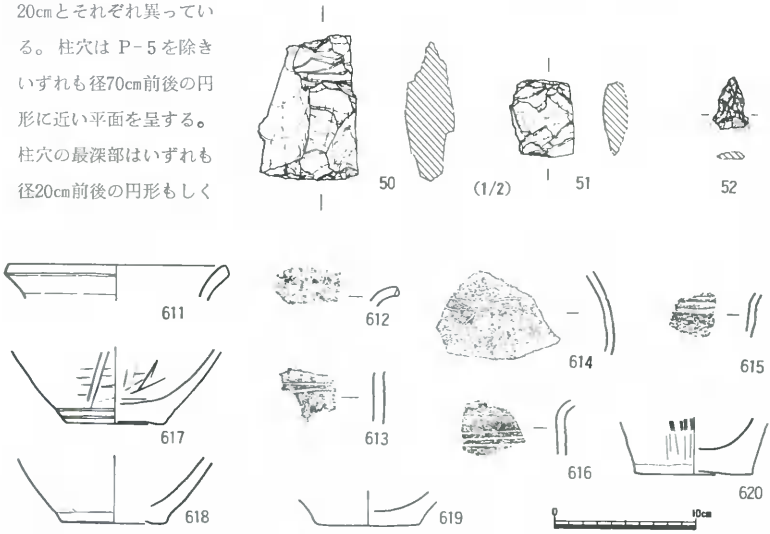
高縄手Ａ地区では浅い遺構は水田等により削平されていると思われるものの，調査区のほぼ全域において遺構・遺物が確認されている。確認された遺構は，竪穴式住居１軒・土壙40基・溝６本等であるが，調査区の西端および中央で検出された 幅350cm程の大溝は，調査外区で繋がる可能性をもつものである。この溝の埋土からは相当多数の土器片が完形のものを含め出土しており，近くに生活区域のあったことを窺わせる。

（1）　竪穴式住居

竪穴式住居―10（第158・159図，図版65―２）

208Ｊのほぼ中央，「島状高まり」遺構―22の北東端の下において検出された遺構である。検出できたのは，７本の柱穴（Ｐ－１～Ｐ－７）と，真中にある土壙状の窪み（中央ピット）および，南西部で長さ４ｍ程に亙り壁体と思われる５～６cmの段差が確認されたのみである。この為，遺構の形状・規模等は判然としないが，直径７～８ｍの円形もしくは円形に近い多角形を呈するものと想定される。

中央ピットから各柱穴までは２ｍ前後を測る。また，壁からＰ－４までは65cmである。床面は海抜230cm前後で，柱穴の深さは，床面から最も深いＰ－７で65cm，一番浅いＰ－５ではわずか20cmとそれぞれ異っている。柱穴はＰ－５を除きいずれも径70cm前後の円形に近い平面を呈する。柱穴の最深部はいずれも径20cm前後の円形もしく

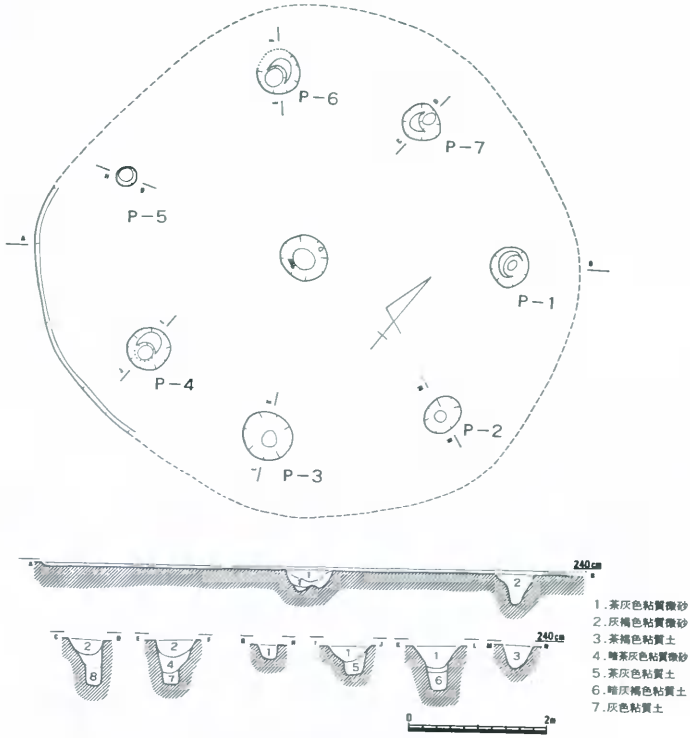


第158図　竪穴式住居―10出土遺物

は楕円形を呈しており，おそらくそれくらいの太さの柱材が使用されていたものと思われる。それぞれの柱間は，Ｐ－３とＰ－４が190㎝と少し狭い他は，いずれも約220㎝と均一である。中央ピットは径60㎝程の円形に近い平面形を呈し，底は床面から深さ20～30㎝で凹凸をもっている。埋土には茶灰色粘質微砂の２層目に多くの炭が含まれている。

出土遺物には，土器およびサヌカイトがみられる。土器はいずれも細片で，図示できた10点のうち**611・614・617・620**が中央ピットから出土している。サヌカイトは中央ピットから図示した楔形石器**51**，石鏃**52**をはじめ多くの剥片が，また，Ｐ－１および覆土中からも多くの剥片が出土している。出土した剥片は全部で505片総量479.2ｇにおよび，ここで石器の作られていた可能性がある。

時期は出土した土器等から百・前・Ⅱと考えられる。　（内藤）



第159図　竪穴式住居―10（1/80）

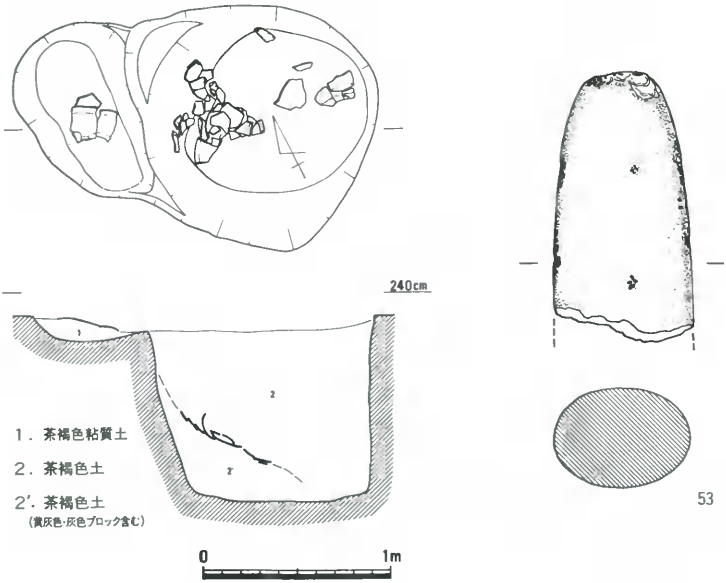
（2）土　　壙

土　壙—29（第160・161図，図版66—1）

207G区ほぼ中央付近に検出した円形に近い掘り方に楕円形の浅い落込みを伴う土壙である。

付随する浅い掘り込みは長径95cm・短径60cmの楕円形を示し，深さ15cm程を測る。円形に近い掘り込みは径130cm・深さ100cmの明瞭な掘り方を示す。堆積土は灰色と茶灰色をなす粘質の混り土で層位的に明瞭に識別できなかった。ただ西側からの土器の堆積層中には若干スミ（灰）を多く含んでいた。

時期は出土遺物から百・前・Ⅱと考えられる。　　（山磨）

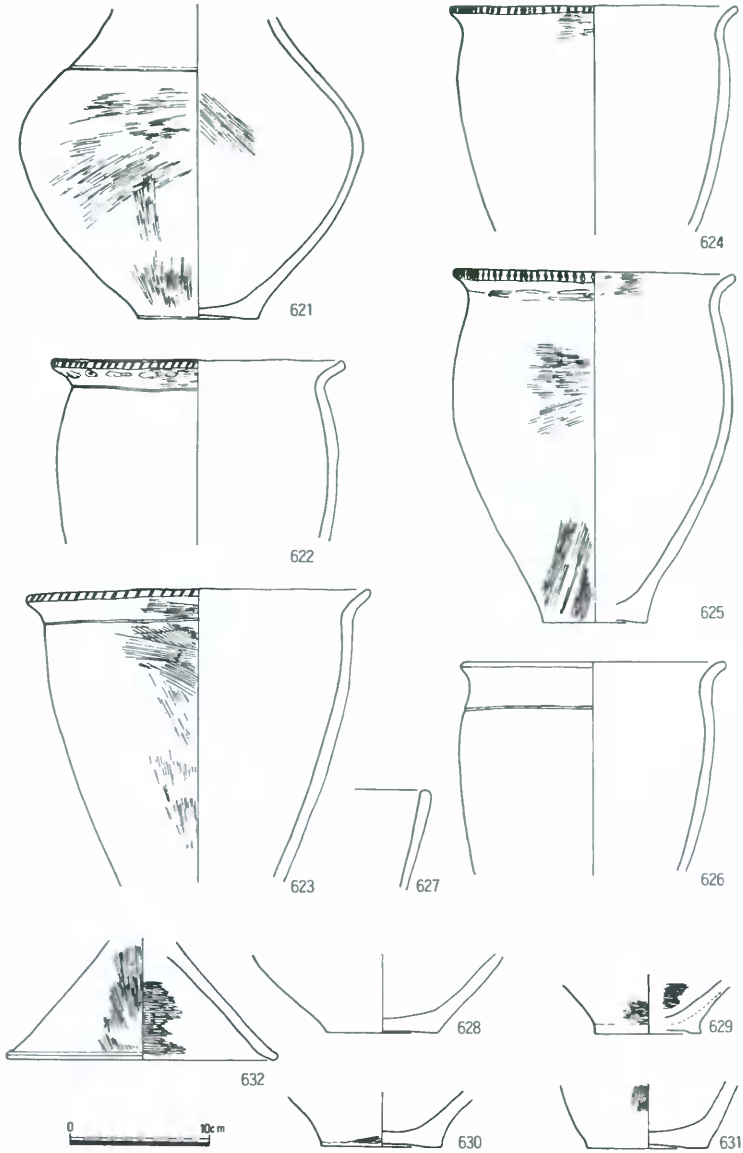


第160図　土壙—29（1/30）・出土遺物（1）（1/3）

土　壙—30

207Gのほぼ中央において検出された遺構である。中心から三方向に任意に延びたような不整の平面形を呈し，底面は凹凸をもつ窪み状の土壙である。海抜260cm程の検出面から深いところで25cm，浅いところで16cm程で底に至る。いくつかの小土壙が複合している可能性も考えられる遺構で，出土遺物としてはわずかに土器の細片があるが図示できる程のものはない。

時期は出土遺物等から百・前・Ⅱと考えられる。



第161図　土壙―29出土遺物（２）

土　壙—31

207Gのほぼ中央で検出された，170×110cm程の長方形に瘤の取り付いた平面形を呈する土壙である。深さは約50cmで中央が5cm程一段窪んでいる。遺物は土器細片，サヌカイトの剝片がある。時期は百・前・Ⅱ頃と思われる。

土　壙—32

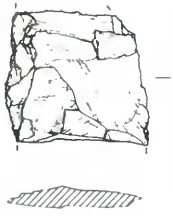
207G中央やや東寄りに検出された，南北に長軸をもつ長楕円の平面形を呈する土壙である。深さ15cm程で，出土遺物としてわずかに土器の細片がみられる。図示できる程のものはない。

時期は出土遺物等から百・前・Ⅱと考えられる。　（内藤）

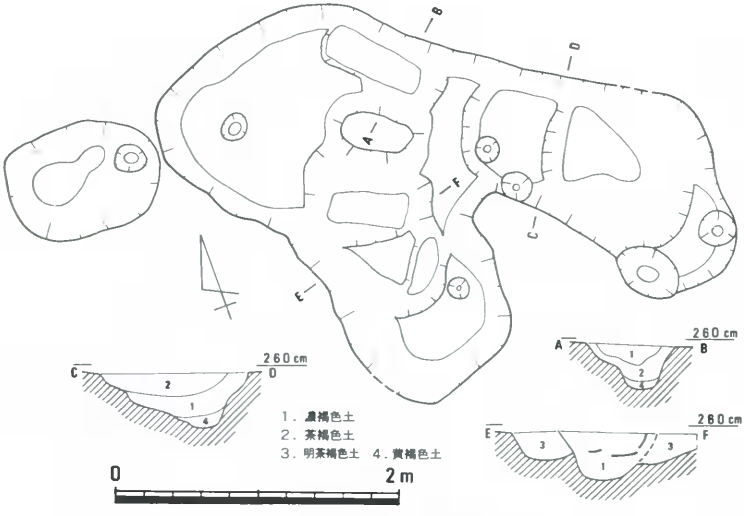
土　壙—33（第162・163図，図版66—2）

207G区北西隅付近で検出した複数の土壙が重複した不定形な土壙である。掘り方は明瞭な輪郭を示さず，スリ鉢状をなし，底に向って徐々に小さくなり，深さ40〜50cmを測る。堆積土は茶褐色を中心とする土層で，土壙の切合いについては識別できない状況であった。

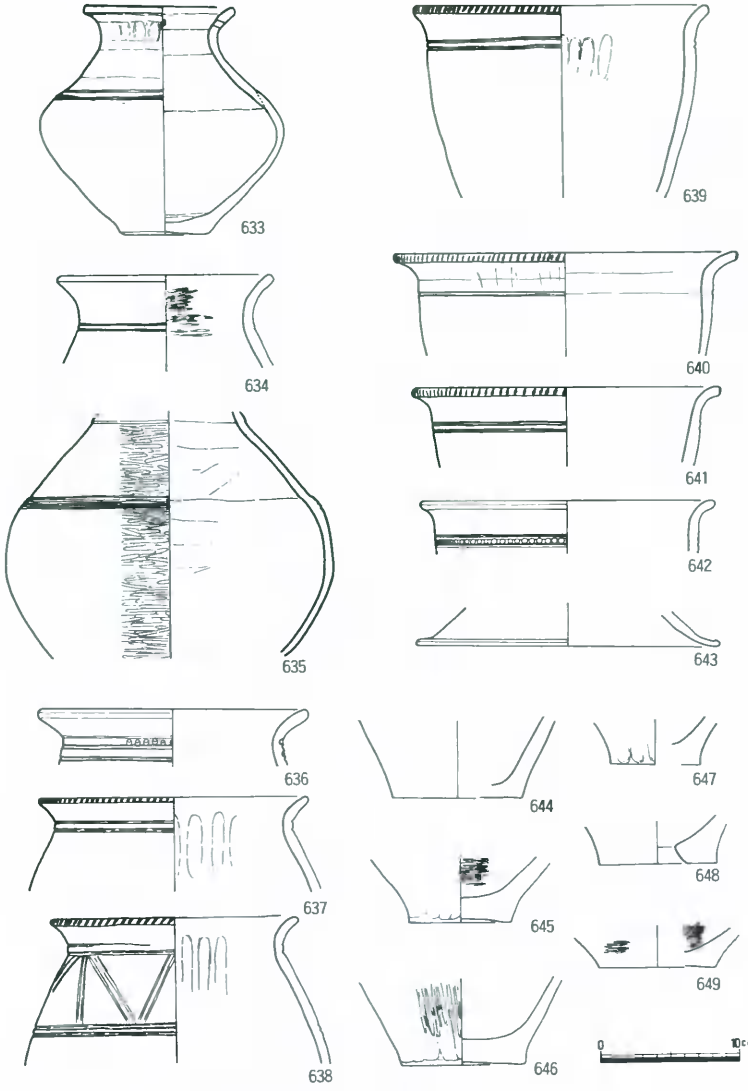
時期は出土遺物から百・前・Ⅱと考えられる。　（山磨）



54



第162図　土壙—33（1/40）・出土遺物（1）（1/2）



第163図　土壙―33出土遺物（２）

土　壙—34

207G東端において検出された。140×40cmの長楕円形を呈する土壙である。深さは約30cmが確認されている。出土遺物は，土器の細片がある。時期は百・前・Ⅱと思われる。　（内藤）

土　壙—35（第164図，図版67—1）

この土壙は調査区西側のHラインに位置する。基盤層の黄褐色より検出されたもので，南側の一部は溝により削平を受けている。規模は長さ約210cm，幅約65cmの長楕円形を呈し，深さ約35cmを測る。出土遺物は，少量の土器が出土した。いずれも前期のものと考えられる。

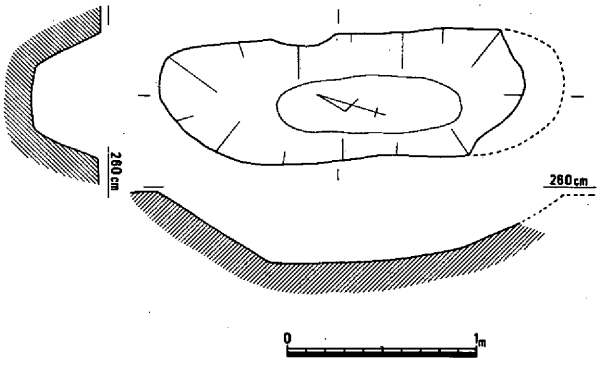
土　壙—36（第164図）

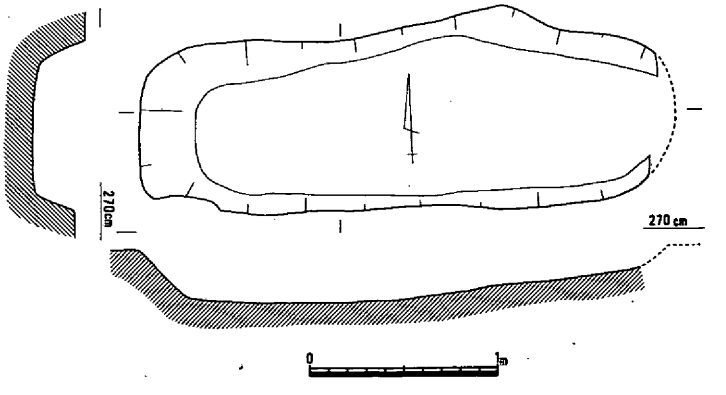
この土壙は，「島状高まり」遺構—18の下部に検出された。規模は，長さ約280cm，幅約100cmを測り，平面形は長楕円形を呈する。深さは，約25cm残存していた。土壙の長軸は，東西方向を示す。出土遺物は，前期の土器が少量検出された。

土　壙—37・37′（第165図，図版67—2）

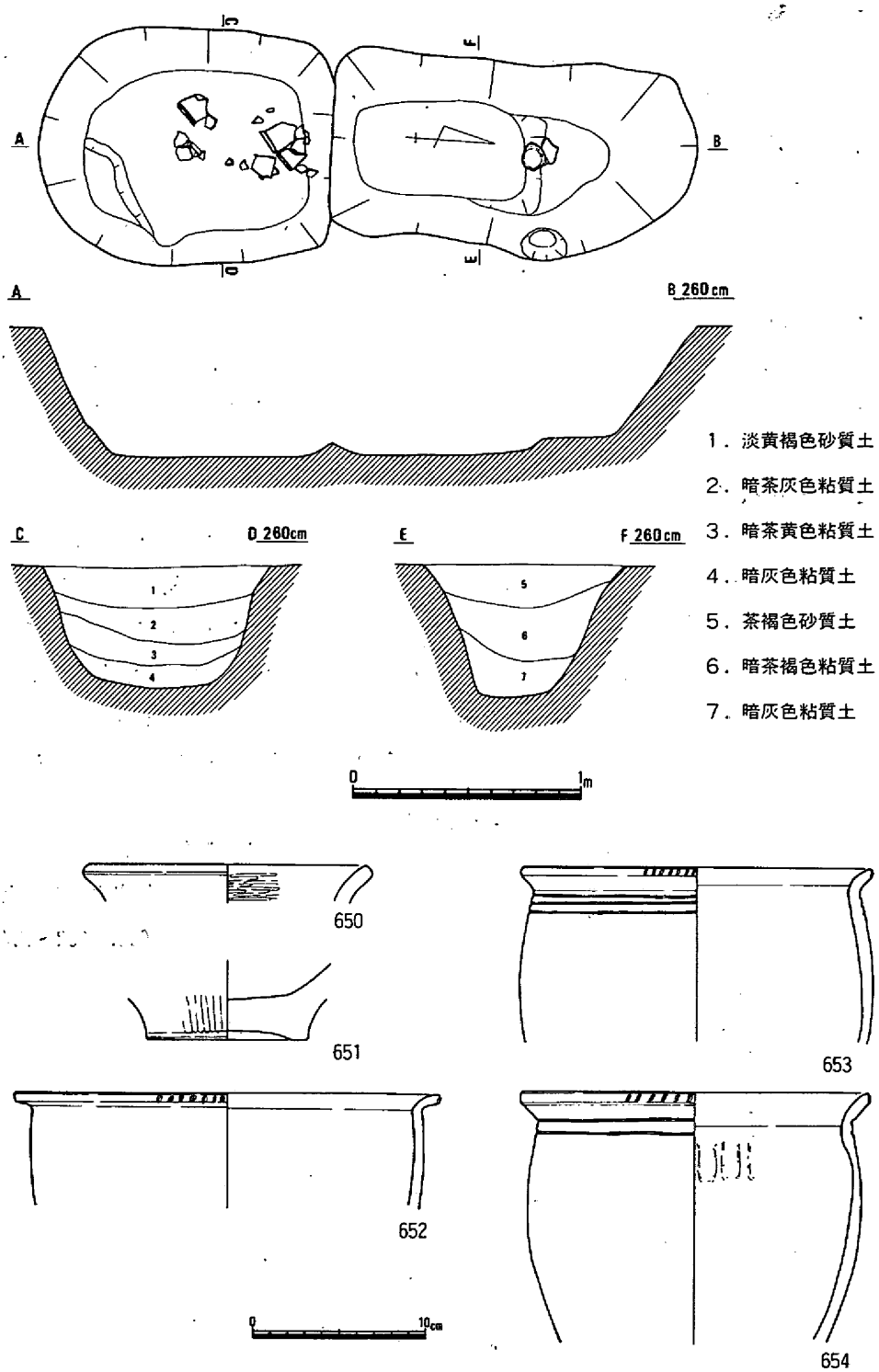
この土壙—37・37′は，当初1基の土壙として認識していたものである。土壙—37は，125×100cmの楕円形を呈し，深さは約60cmを測る。土壙—37′は，約160×80cmの長楕円形を呈する。深さは，約60cmを測る。土壙—37・37′の先後関係は明らかでなかった。

出土遺物は，いずれも土壙底部より土器が検出された。土壙—37からは，**650，652～654，**





第164図　土壙—35・36（1/40）

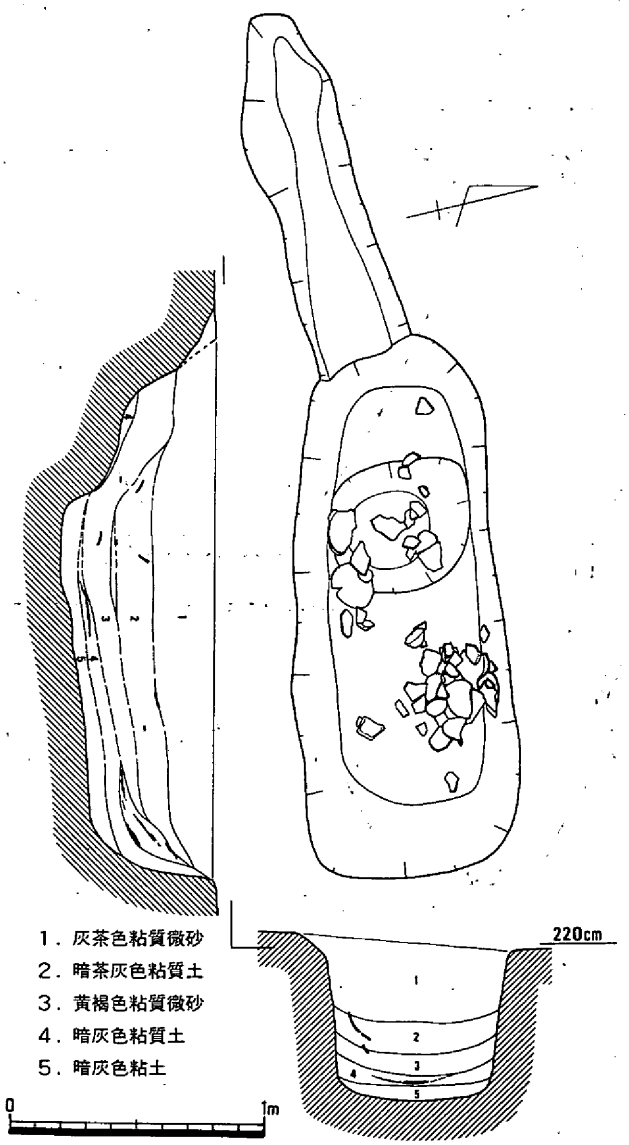


第165図　土壙—37，37′（1/30）・出土遺物

土壙—37′からは651が出土した。これらの土器は，百・前・Ⅱ期の特徴を示すものである。また，土壙の長軸は東側に隣接する土壙—35と同様にほぼ南北方向である。　（中野）

土　壙—38（第166・167図，図版68）

207Hの北部において検出された遺構で，東西に少し細長い隅丸長方形を呈す土壙である。規模は長辺200cm・短辺80〜90cm・深さ50〜60cmを測る。土壙の中央よりやや西よりの底に50cm四方程の範囲で5〜10cm程の窪みがある。また，土壙の西端から西に向って長さ150cm程・幅40cm・深さ10cm程の溝状の窪みが伸びている。規模などから墓壙とも考えられるが，木棺痕跡等はなく副葬品とみられるものもない。性格は不明である。埋土は五層に分かれ4層には炭層がみられる。



第166図　土壙—38（1/30）

出土遺物は主として2〜4層に，ほぼ完形に復元された甕661，鉢664・665の他壺等の土器片がある。またサヌカイト製のスクレイパー55等の石製品，サヌカイトの剝片がみられる。

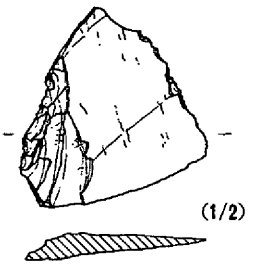
時期は出土遺物等から百・前・Ⅱと考えられる。

土　壙—39（第168図，図版69）

207Hの南東部において検出された遺構で，ほぼ南—北に長軸をもつ，150×105cmの長方形に，長さ100cm程の尾が取り付いた形状を呈する土壙である。壁面は緩やかな斜面をなし，東辺および南辺の一部に焼土の付着がみられる。底は，海抜230cmの検出面から深さ20cmを測り平坦である。埋土は六層に分か

れ，5層の淡茶灰色粘質土中から炭化物・焼土塊と伴に土器片・石器・サヌカイトの剝片等が出土している。土器はいずれも細片であり，図示できたのは**666～669**の壺等4点のみである。また，石製品としては**56**の石鏃等がある。遺構の性格等は不明であるが土器片や焼土塊，炭化物等が任意に埋没しているところから，最終的にはごみ穴のようなものとして埋没したと考えられる。

時期は出土遺物等から百・前・Ⅱと考えられる。



55

土　壙—40（第168図）

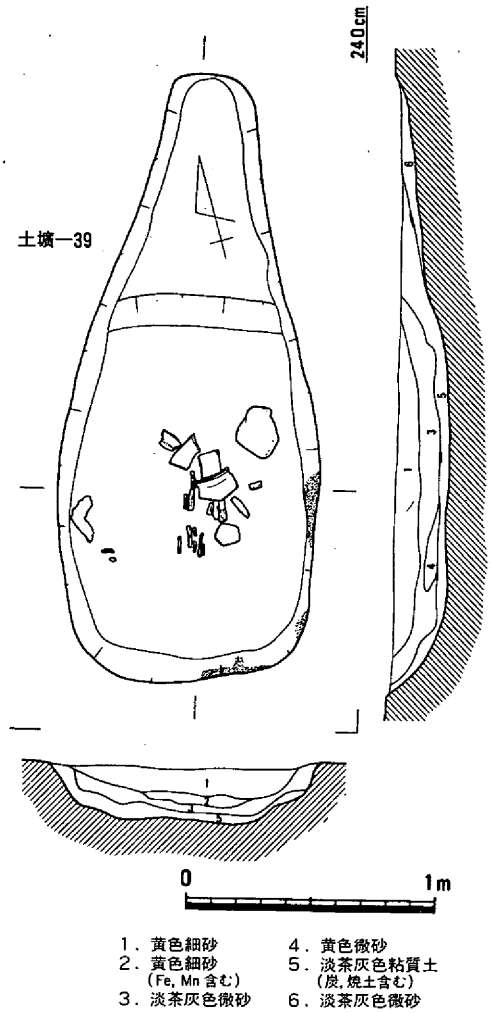
207Hの東部南端に おいて 検出された，ほぼ南—北に 長軸をも

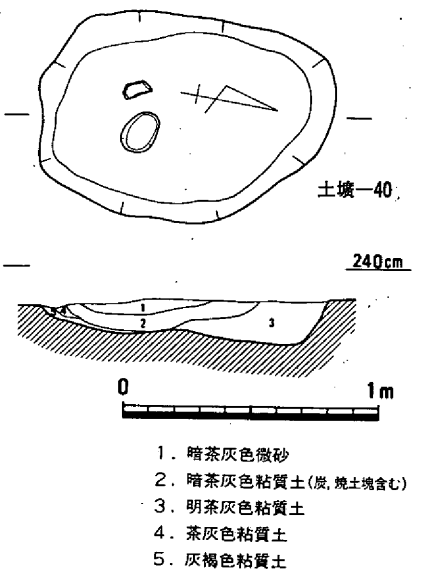
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665

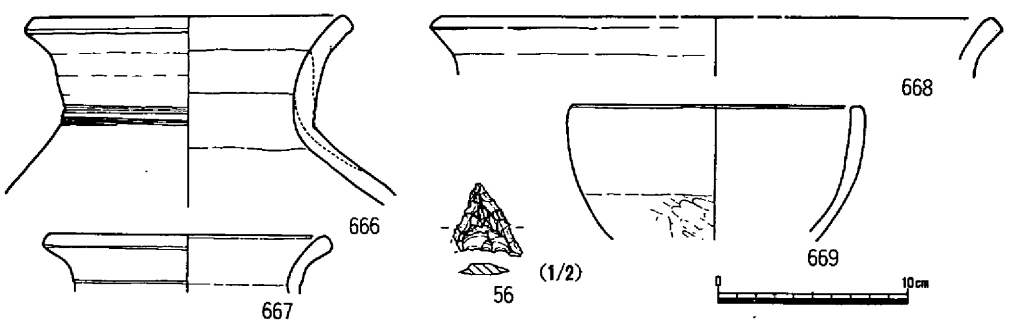
第167図　土壙—38出土遺物

ち，115×80cmの規模の不整楕円形を呈する土壙である。深さは海抜230cmの検出面より15cm前後を測る。埋土は五層に分かれ，1・2層はレンズ状の堆積をなしている。2層の暗茶灰色粘質土中から焼土塊・炭化物と伴に土器細片が出土しているが，図示できるものはない。遺構の性格等は不明である。

時期は出土遺物等から百・前・Ⅱと考えられる。（内藤）







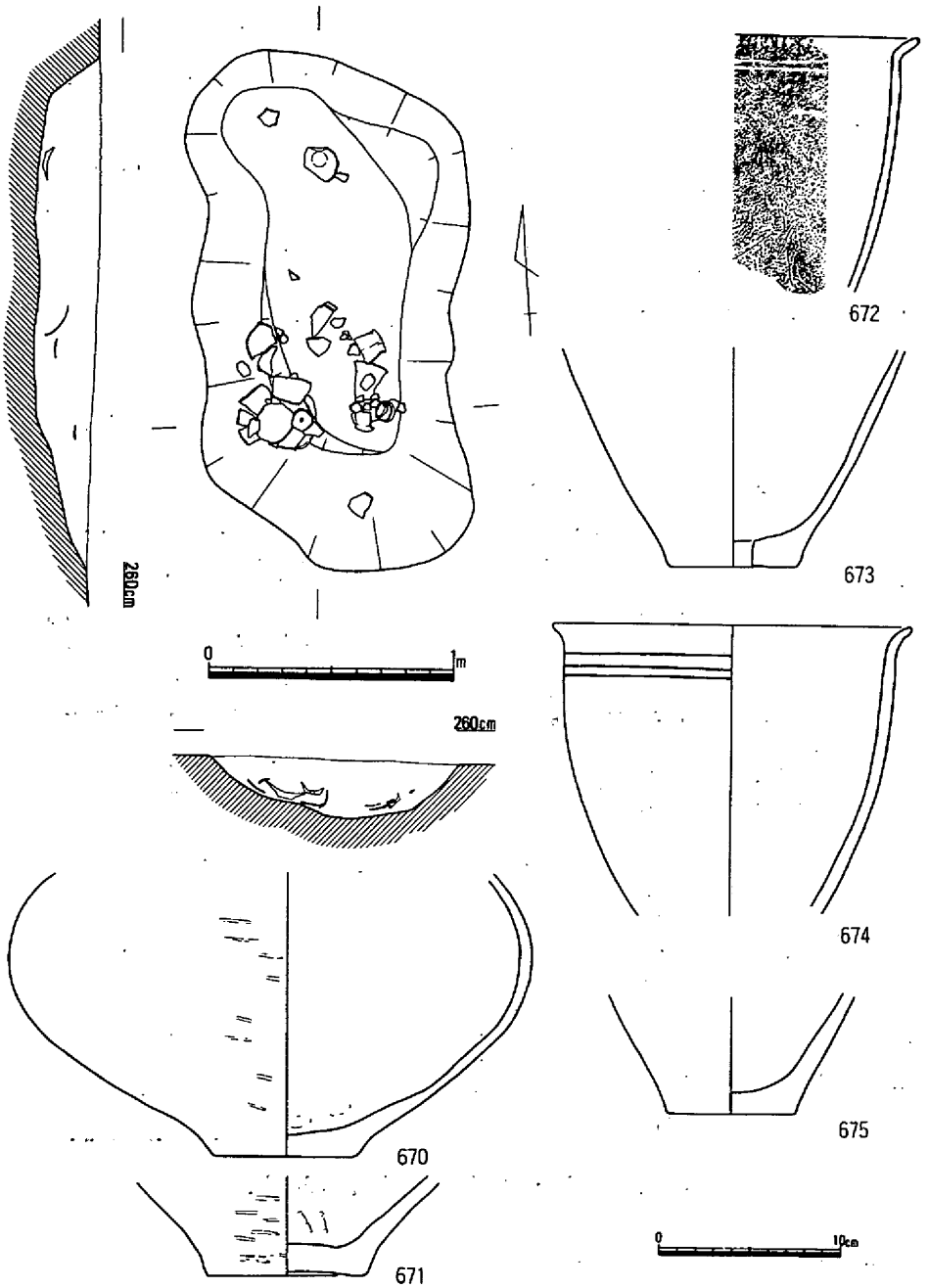
第168図　土壙—39・40（1/30）・土壙—39出土遺物

土　壙—41（第169図）

208H北部中央から検出された。平面形は不整長方形を示し，検出面での規模は210×110cm

深さ25cmを残す。土壙南方は緩く掘り込まれているのに対し，他はやや急な角度であり，南西部には一段高くやや平坦な面が認められ，土壙内には暗茶褐色粘質土が堆積していた。

遺物はいずれもほぼ床面に接した状態で出土しており，これら遺物の底部の位置から，口縁部を欠損した壺形土器670及び，底部穿孔の甕形土器673は南西部平坦面に，674・675の甕形土

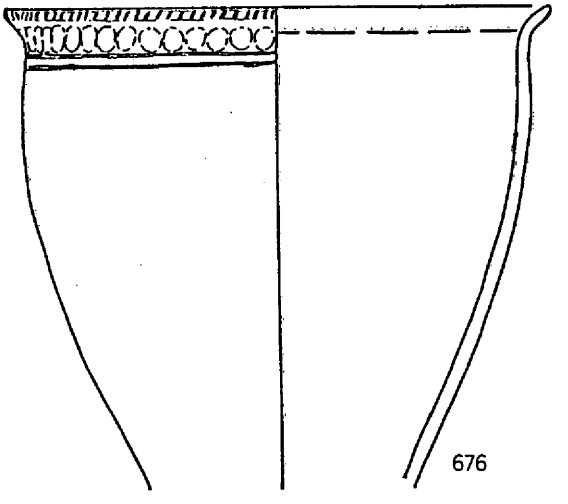


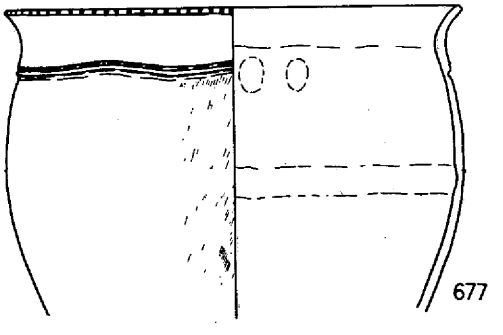
第169図　土壙—41（1/30）・出土遺物

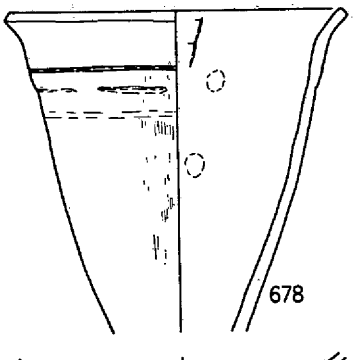
器は南東部に埋置されていたものと思われる。なお，土壙北部で出土した壺形土器671は底部のみで，他に接合資料は発見されなかった。　（江見）

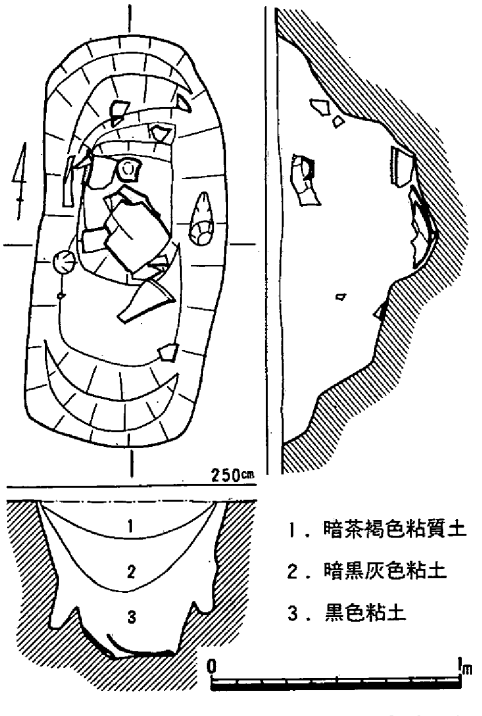
土　壙—42（第170図，図版70—2）

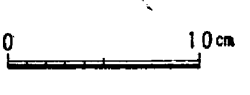
208Hの南に位置する平面が楕円形の土壙である。長軸はほぼ南北に向く。規模は長径160cm・短径75cm・深さ60cmを測る。この土壙の特徴は掘り方が3段の階段状を呈していることである。そして東西の側壁には一対の杭跡が発見された。階段状になった土壙の例は百間川原尾島遺跡の左岸用水調査区で初現している。杭跡があるということは板状の土留めが想定でき，墓か貯蔵穴の可能性が考えられる。土層は三層に分けられる。堆積はきれいなレンズ状を呈











第170図　土壙—42（1/30）・出土遺物

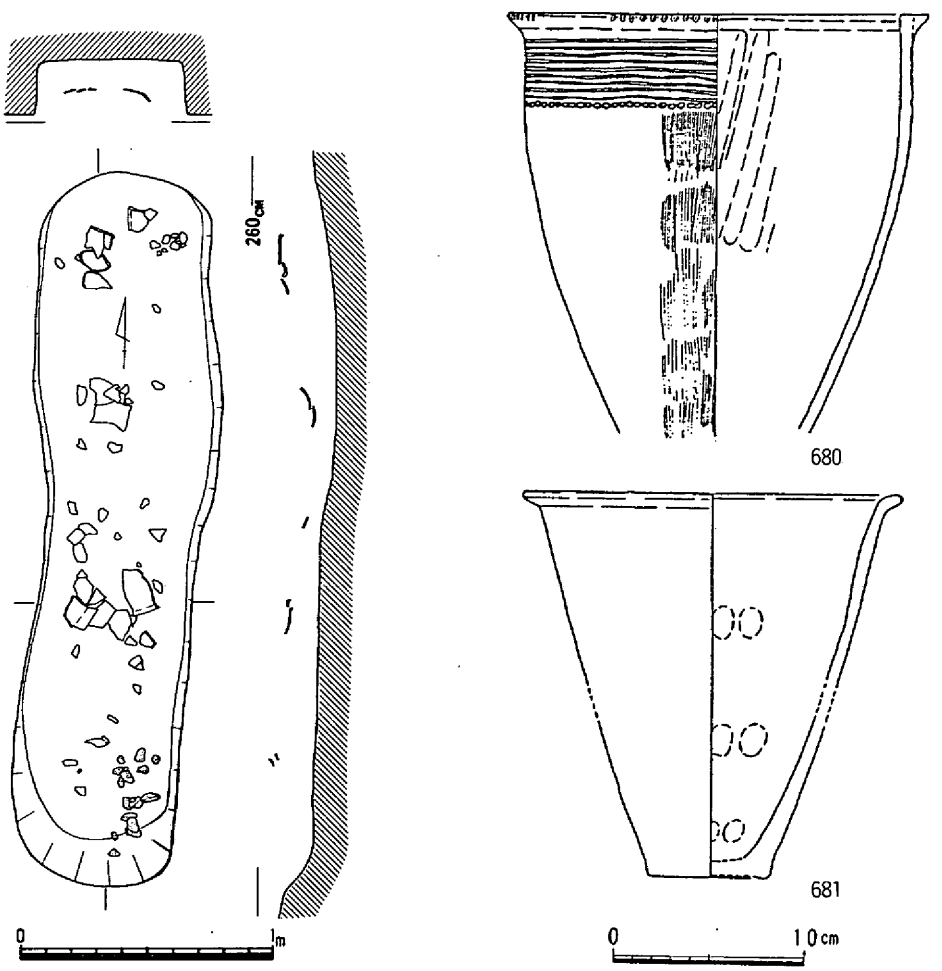
す。遺物は底面に密着して一個体分の甕が大きな破片となって出土している。意識的に破砕されたものか。この土壙の時期は甕の形態から百・前・Ⅱと考えたい。

土　壙―43（第171図）

209Hの北に位置する平面が長楕円形を呈する土壙である。長軸はほぼ南北に向く。規模は長さ285cm・幅70cm・深さ20cmを測る。この土壙の特徴は南北両端が次第に浅くなって消滅していることである。したがって長さはもっと長かったものと思われる。

遺物は図右に図示した２個体の甕形土器が破壊された状態で出土している。底面に密着している土器片は見られず，いずれも10cm以上浮いた位置で発見された。上の甕は貼り付け凸帯の端部に刻み目を施し，ヘラ描きの沈線は９条も見え，その下端には一列の刺突文を施す。下の甕は「く」の字状に外反する口縁部を持ち，無文である。

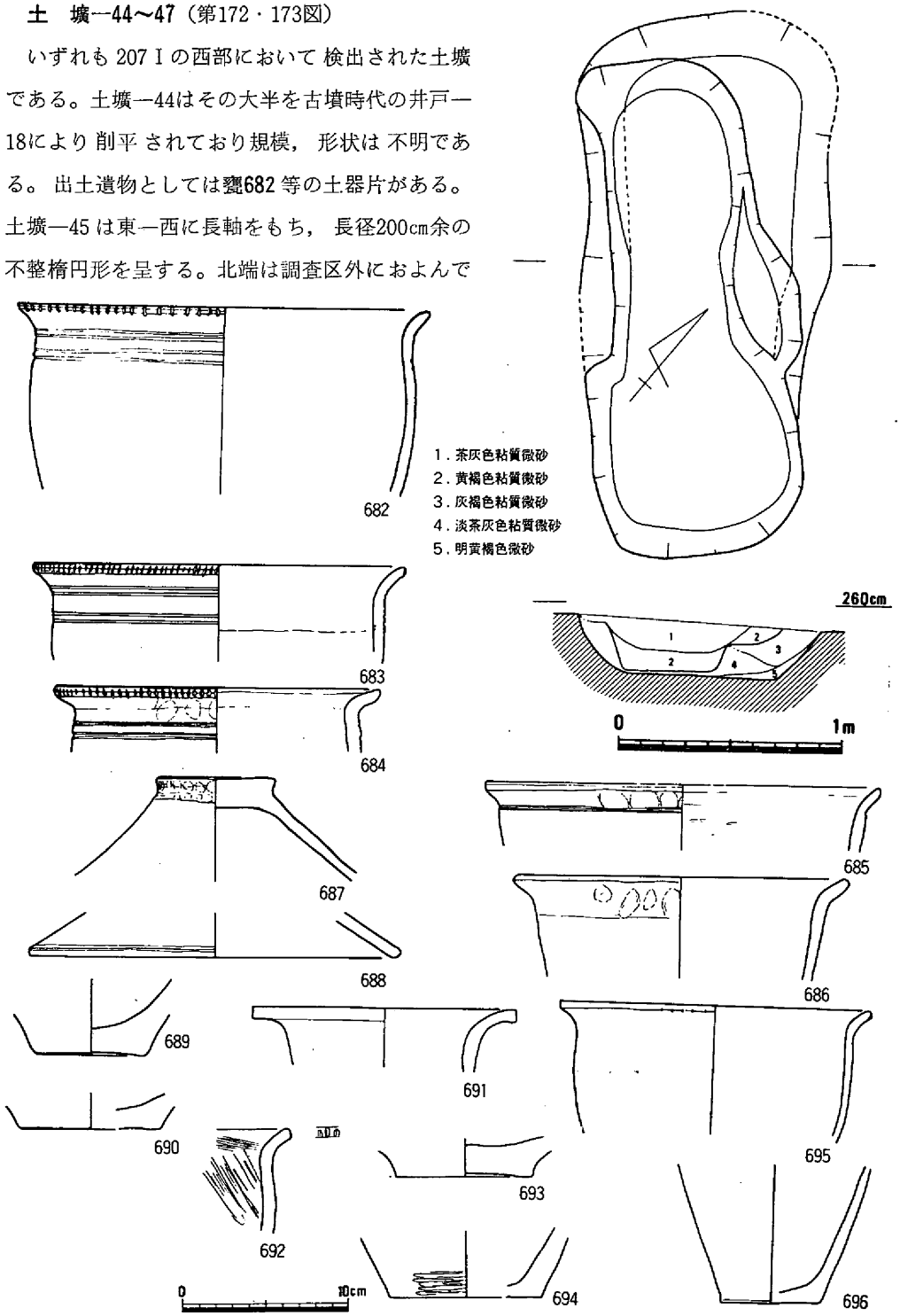
この土壙の性格は判らないが，時期は出土土器から百・前・Ⅲに比定できる。　（浅倉）



第171図　土壙―43（1/30）・出土遺物

土　壙—44～47（第172・173図）

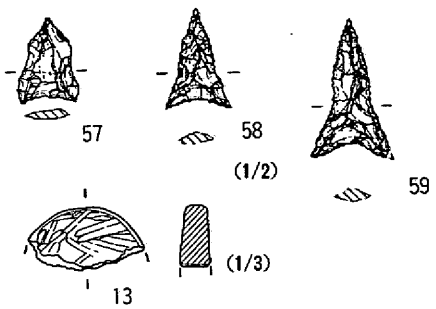
いずれも207Ⅰの西部において検出された土壙である。土壙—44はその大半を古墳時代の井戸—18により削平されており規模，形状は不明である。出土遺物としては甕682等の土器片がある。土壙—45は東—西に長軸をもち，長径200cm余の不整楕円形を呈する。北端は調査区外におよんで



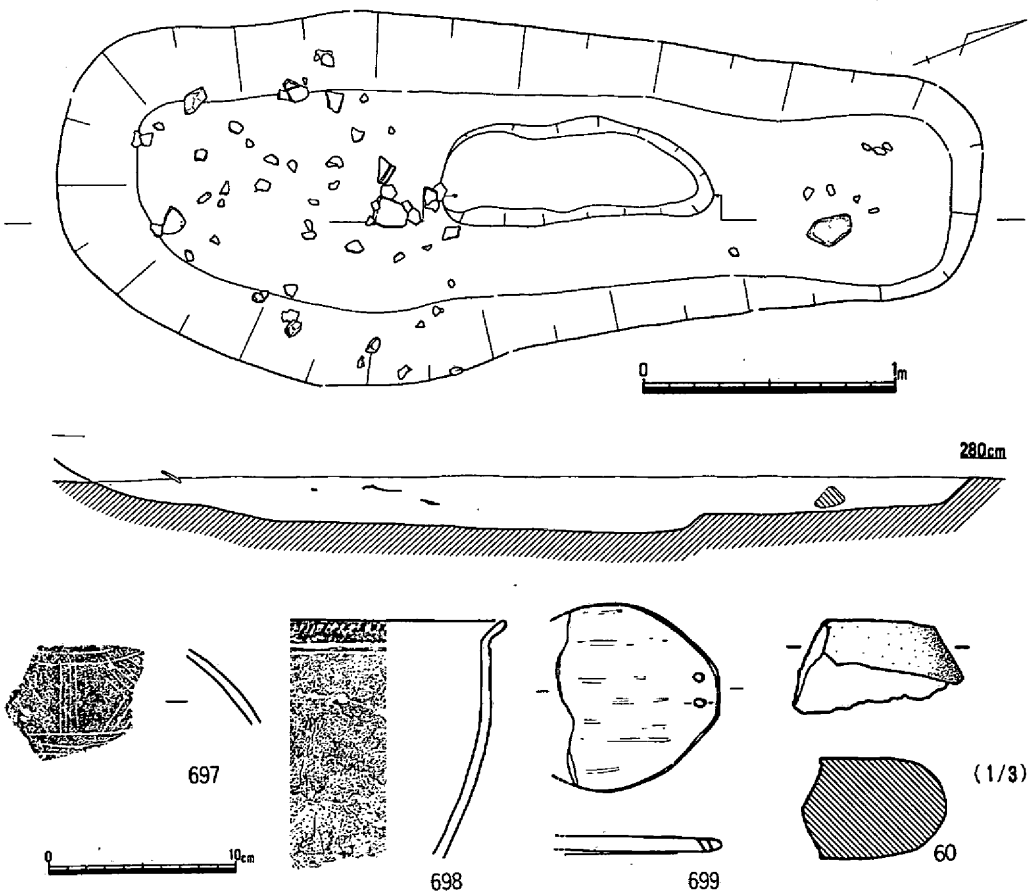
第172図　土壙—46（1/30）・土壙—44～47出土遺物

いる。壙壁は緩やかに下がり，深さ45cm程が確認されている。出土遺物は甕等の土器片683～690の他石鏃58・59が出土している。土壙―46は北西―南東に長軸をもち，220×100cm程の長方形を呈する土壙で，２つの土壙が切合ったと考えられる。底は検出面から25cmを測り平坦である。出土遺物には土器細片とサヌカイト剝片，紡錘車13がある。土壙―47はいくつかの小土壙の集ってできた不整形を呈するもので，底は凹凸である。出土遺物には土器片691～696，石鏃57がある。

時期はいずれも百・前・Ⅱと思われる。（内藤）



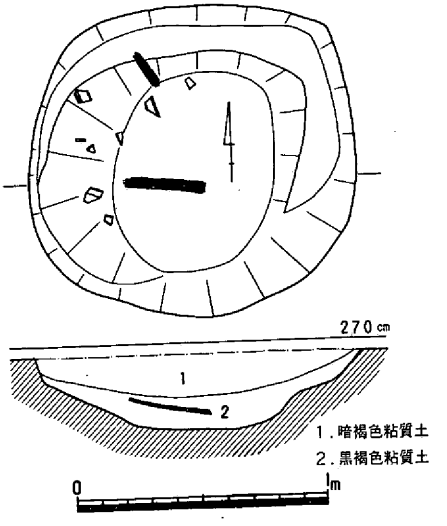
第173図　土壙―44・46・47出土遺物

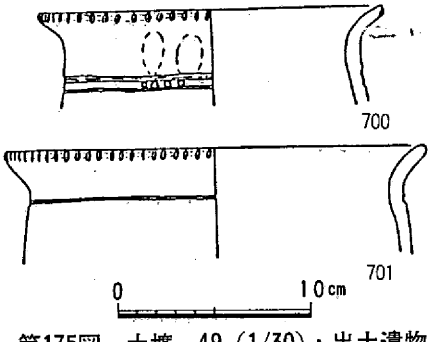


第174図　土壙―48（1/30）・出土遺物

土　壙—48（第174図，図版70—1）

207Ⅰ南部中央，古墳時代竪穴式住居—11の下層から検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し，長さ360cm・幅140cm・深さ20cmを測る。土壙中央部はさらに一段掘り込まれた部分が認められた。主軸は北々東を示す。土壙内には暗茶褐色粘質土が堆積しており，出土した遺物はいずれも小破片で，土壙底部より遊離した状態で出土している。**697**は壺形土器片で，箆状工具による浅く，細い施文がなされている。破片上部に2本，下部に3本の直線文が，その間には縦方向に4本の直線文及び逆「く」の字状の施文がなされている。**699**は推定約⅓が欠損しており，図のように平面形は正円を呈さず，左右にやや延び，縁辺の2個の小孔は1対になるものと思われる。壺あるいは木製容器等の蓋と考える。　（江見）



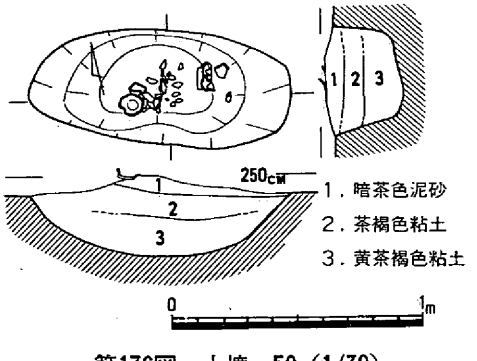


第175図　土壙—49（1/30）・出土遺物

土　壙—49（第175図）

208Ⅰの南西隅に位置する不整円形の平面を持つ土壙である。規模は長径130cm・短径125cm・深さ30cmを測る。遺物としては土器の細片と木炭片が出土している。図化できたのは甕の口縁が2点で，いずれも口縁端部にヘラによる刻み目が施され，口縁と体部の境に1～2条のヘラ描き沈線が施されている。

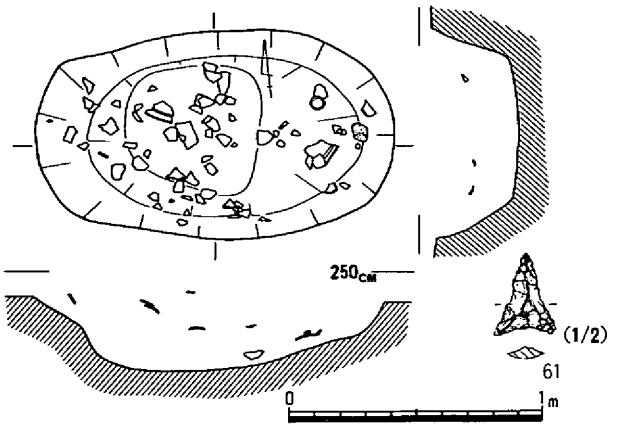
この土壙の性格はごみ捨て穴か。時期は出土土器からみて百・前・Ⅱに比定する。



第176図　土壙—50（1/30）

土　壙—50（第176図）

208Ⅰの中央から東寄りに位置する楕円形の土壙である。長軸はほぼ東西に向う。規模は，長さ100cm・幅45cm・深さ30cmを測る。土壙の特徴は，底部が舟底状を呈することであろう。堆積土は，三層に分けることができ，土器は1層の暗茶色泥砂にほとんど包含されている。出土遺物は，土器の破片で，壺形土器の底部片が見える。この土壙の性格は

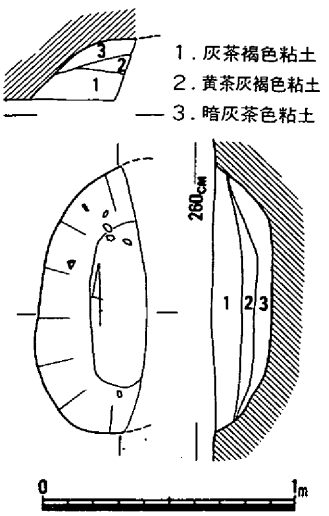


第177図　土壙―51（1/30）・出土遺物

不明。時期は出土土器から見て百・前・Ⅱと考えたい。

土　壙―51（第177図）

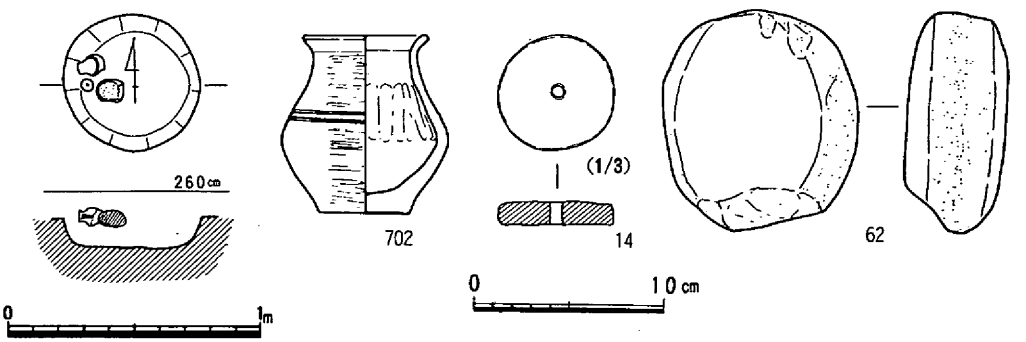
209Ｉの北端中央部に位置する楕円形の土壙である。長軸は，ほぼ東西にある。規模は，長さ140cm・幅83cm・深さ30cmを測る。この土壙の特徴は，底部が階段状を呈することである。土器の出土状況は，図の様に破片となって投げ込まれたことを示している。甕の破片が目立つ。甕の口縁部は「く」の字状に外反し，端部に刻み目があり，体部上方に２条のヘラ描き平行沈線を施す。また，サヌカイト製の石鏃が１点出土している。これから土壙の時期は，百・前・Ⅱに比定できる。



第178図　土壙―52（1/30）

土　壙―52（第178図）

208Ｉの西端に位置する楕円形の土壙である。東半分が新しい時期の溝によって切断されている。長軸はほぼ南北に向う。規模は，長さ105cm・幅推定70cm・深さ25cmを測る。土壙の特徴は，底部が舟底状を呈するということ。堆積土は，三層に分けることができる。出土遺物としては，土器の細片が少量見えるだけである。図示できるほどのものはない。土壙の性格は，不明。時期は，土器片から見て

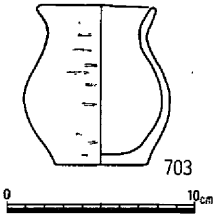


第179図　土壙―53（1/30）・出土遺物

百・前・Ⅱに比定したい。

土　壙—53（第179図，図版71—1）

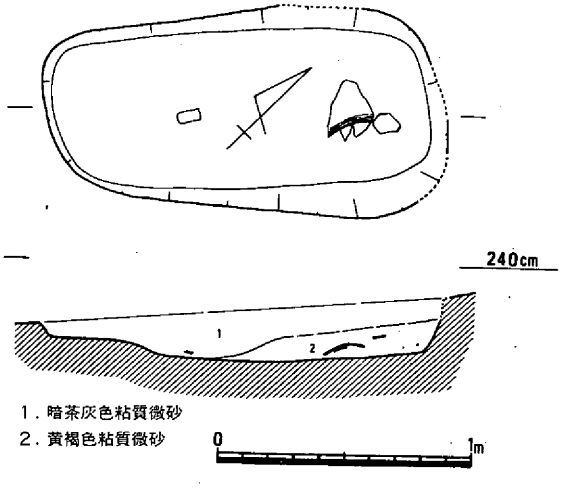
209Ⅰの西方，土壙—52の東方に位置する円形の小土壙である。規模は直径55cm・深さ15cmを測る。特徴としては出土遺物が注目できる。小型のほぼ完形の壺形土器は弥生時代前期の壺の形態をよく示している。土製の紡錘車と磨石を伴っている。以上3点の遺物が土壙検出面で西の方に片寄って発見できた。この土壙は祭祀に関連するものと考えられる。時期は百・前・Ⅱに土器からみて比定できる。（浅倉）



第180図　土壙—54 出土遺物

土　壙—54（第180図）

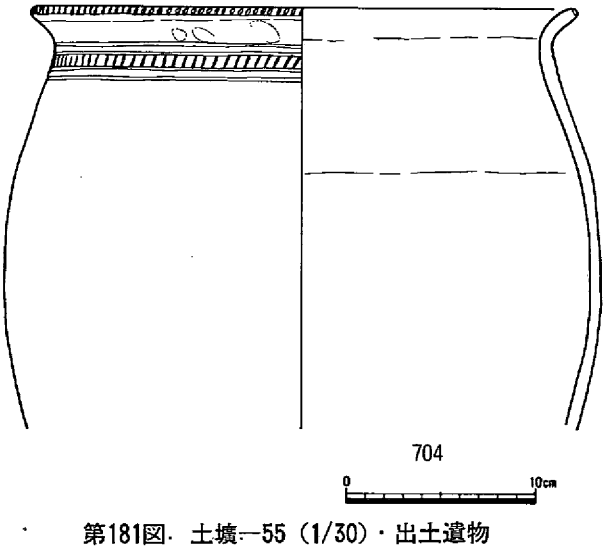
208Ⅰの北西部から検出された。土壙は柱穴状を呈し，直径38cmの円形プランをもち，深さ約20cmを残す。土壙内には暗灰色粘質土が堆積しており，土壙の中央上部から，完形の小型壺**703**が横転した状態で出土した。他にサヌカイトの剝片が出土している。なお，周辺遺構のあり方から，当土壙は住居址内の柱穴とは即断し難く，その性格は不明である。（江見）



土　壙—55（第181図，図版72—1）

208Jの西部北端において検出された遺構で，北東—南西方向に長い長方形の平面をもつ土壙である。規模は長辺160cm・短辺70～80cm・深さ20cm程で南西側が一段（約5cm）高くなっている。埋土は三層に分かれ2層中から図示した甕**704**が出土している。その他に遺物はほとんどみられなかった。形状から墓壙の可能性が考えられるが判然とはしない。

時期は出土遺物から百・前・Ⅱ



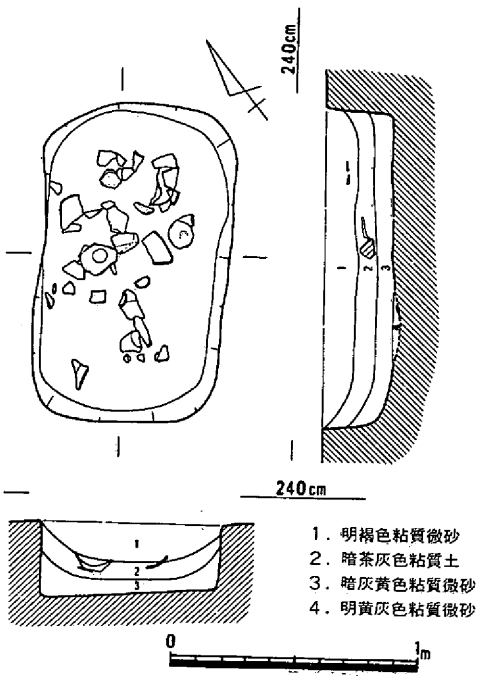
第181図．土壙—55（1/30）・出土遺物

と考えられる。

土　壙—56（第182図，図版72—2）

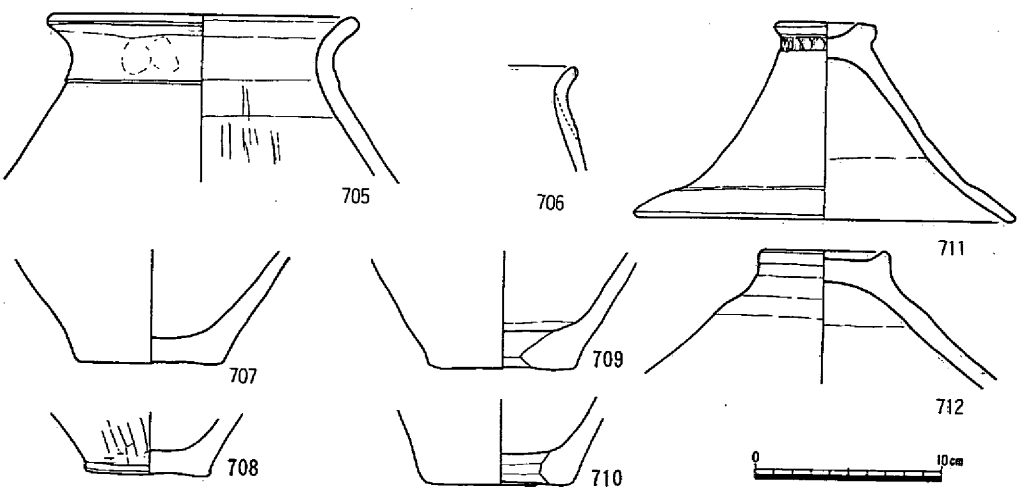
208Jの北部において検出された遺構で，北東—南西に長軸をもつ130×80cmの規模の長方形を呈する土壙である。深さは検出面の海抜230cmより約30cmを測り底はほぼ平坦である。掘り方はほとんど真直ぐに下がるものの木棺痕跡等は認められない。埋土は四層に分かれ，遺物は1・2層から土器片・サヌカイトの剥片が出土している。土器はほとんど細片であるが，蓋711はほぼ完形に復元されている。また，709・710はいずれも焼成後に底部穿孔されたものである。遺構の性格は判然としないが形状等から墓壙とも考えられるものである。

時期は，出土遺物等から百・前・Ⅱと考えられる。



土　壙—57（第183図）

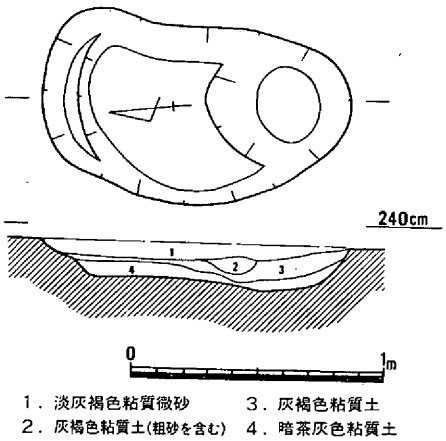
208Jの中央やや南東部寄りに，竪穴式住居—10と溝—70との間で検出された，南—北



第182図　土壙—56（1/30）・出土遺物

方向に長軸をもつ不整楕円形を呈する土壙である。規模は120×70cmを測り，深さは海抜230cmの検出面から15cm程であり，南側は5cm程低くなっている。埋土は四層に分かれ，1層の淡灰褐色粘質微砂中から土器が出土している。土器はいずれも細片で図示できる程のものはなかった。遺構の性格等は不明である。

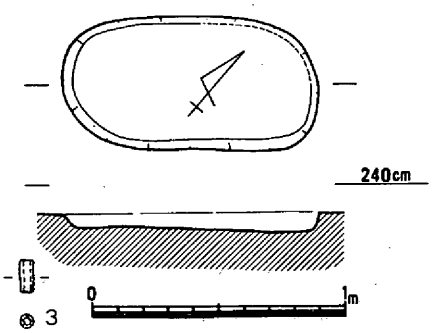
時期は出土遺物等から百・前・Ⅱと考えられる。



第183図　土壙—57（1/30）

土　壙—58（第184図）

208Jの南西端において検出された土壙である。北東—南西方向に長軸をもち，短辺が丸味をもった長方形を呈する。上部を水田造成時に削平を受けている為か，海抜230cmの検出面より深さ5cm程を測るのみである。底は平坦である。埋土は黄褐色のブロックを含む茶灰色粘質微砂が一層である。中央部やや南寄りの底面近くで，碧玉製の管玉3が1点出土している。土器は甕の細片がある。時期は出土遺物等から百・前・Ⅱと考えられる。　（内藤）



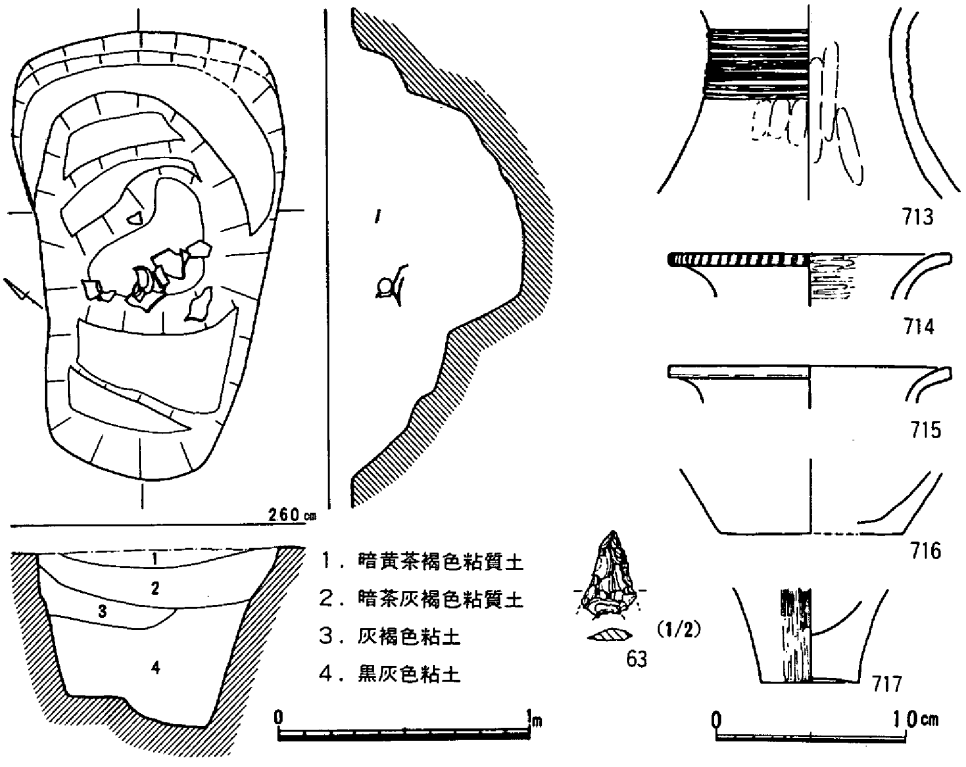
第184図　土壙—58（1/30）・出土遺物（1/2）

土　壙—59（第185図）

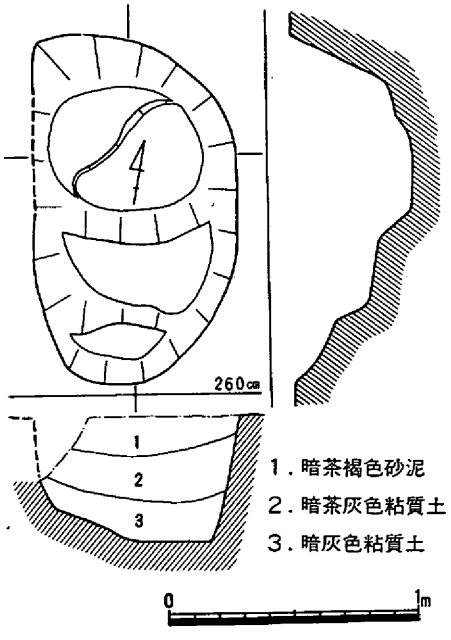
209Jの南東に位置する不整楕円形の平面を持つ土壙である。長軸は北東から南西に向いている。規模は長径180cm・短径90cm・深さ70cmを測る。この土壙の特徴は土壙—42と同様に，掘り方が階段状を呈していることである。土層は四層に分けることが出来る。3層が北から堆積した状態を見せるほかには自然的である。2層から若干の土器が出土している。図化できたのは5点で，壺と甕がある。壺の頸部にはヘラ描きの8条の沈線が施されている。底部外面にはヘラ磨きと刷毛目調整が行われている。なお石鏃も1点出土す。時期は土器から百・前・Ⅱに比定できる。

土　壙—60（第186図）

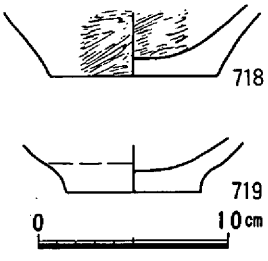
210Jの北端に位置する不整楕円形の平面を持つ土壙である。規模は長径130cm・短径80cm・深さ50cmを測る。長軸はほぼ南北に向う。この土壙の特徴は土壙—42と同様に掘り方が階段状を呈するということである。土層は三層に分けることが出来る。遺物は各層から少量の土器細片が出土しているが，図化できるものは底部2点である。どっちも壺と考えられ，内外面とも



第185図　土壙—59（1/30）・出土遺物



第186図　土壙—60（1/30）・出土遺物



ヘラ磨き調整している。この土壙の性格は墓かあるいは貯蔵穴で，時期は土器片から百・前・Ⅱに比定できる。（浅倉）

土　壙—61・61′（第187図，図版73—1）

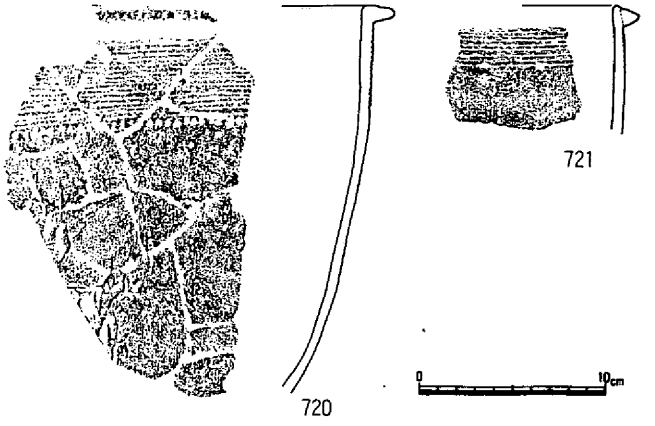
210K 地点の南東の調査区南端に位置する。土壙—61は，当初半分が検出されたため，南に拡張区を設けて全容を明らかにした。しかし，拡張区内には別の土壙（土壙—61′）が存在した。土壙—61は，土壙—61′より南側に削平を受けていた。規模は，長さ約305cm・幅約80cmを測り，平面形は長楕円形を呈する。深さは約35cm残存していた。

出土遺物は，最下層の6層より図示した土器などが出土した。時期は，百・前・Ⅲ期。

また，土壙―61′は土壙―61の南側にその一部を検出した。全容が明らかでないものの，規模，形態などは土壙―61と同様なものと思われる。出土遺物はほとんど認められなかったが，百・前・Ⅲ期に含まれると考えられる。

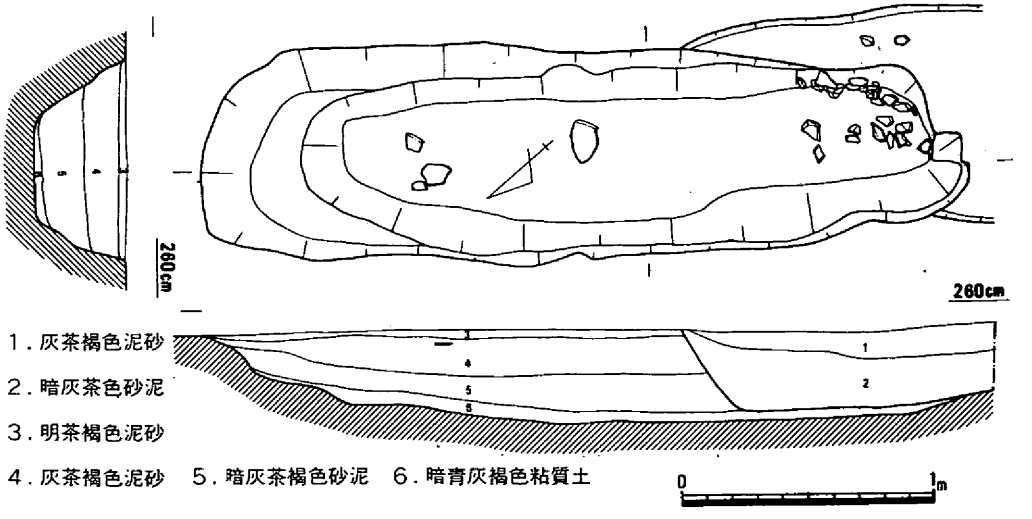
土　壙―62（第187図，図版73―2）

この土壙は，調査区南端に一部が検出されたため，南側に拡張区を設けて明らかにしたものである。また，土壙―61，61′は西側に隣接する。規模は，長軸約290cm，短軸約105cmで平面形は長楕円形を呈する。深さは，約30cmを測る。土壙の掘り方は，一方で段がつき土壙東側は二段掘になっている。土壙内は，第1～3層がレンズ状に堆積する。また，土壙底部には少量の土器が出土した。出土した土器は，百・前・Ⅲ期の特徴を示すものであった。



土　壙―63（第189図）

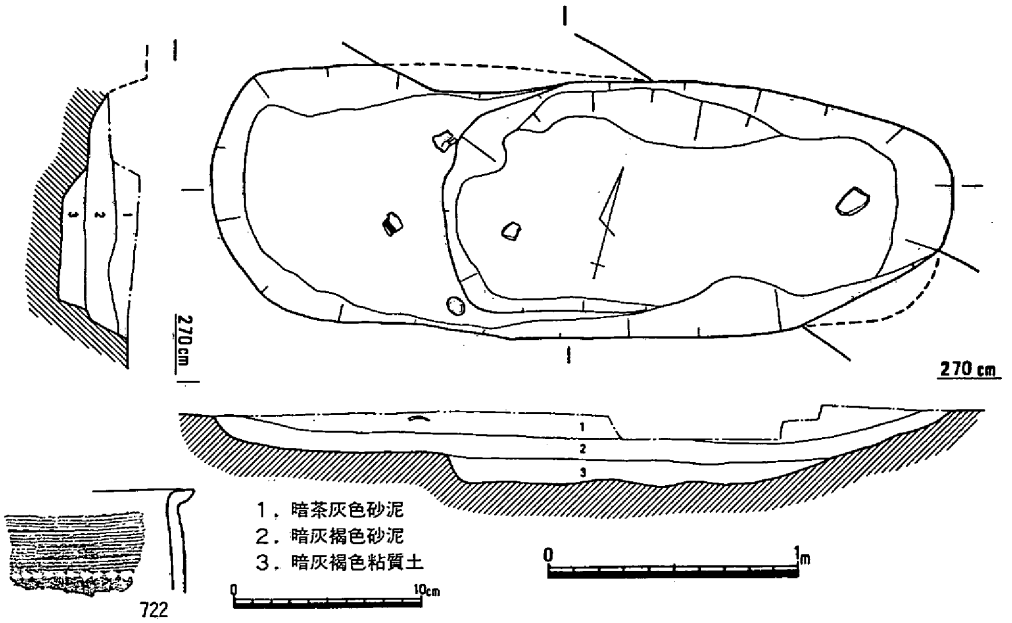
210L地点の北東数mに位置する。土壙は，弥生時代後期水田層下の黄褐色土の基盤層より検出され，南側の一部は井戸―32に切られている。規模は，長さ約175cm，幅約90cmを測り，平面形はほぼ長方形を呈する。深さは，約30cm残存していた。



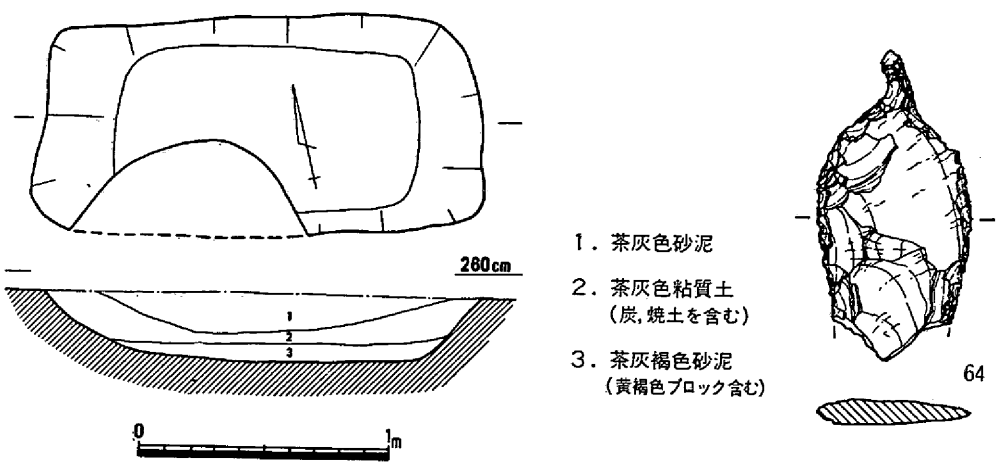
第187図　土壙―61・61′（1/30）・出土遺物

掘り方は，ほぼ逆台形を呈し，１～３層がレンズ状に堆積していた。

出土遺物は，百・前・Ⅱ～Ⅲ期の土器の小片が少量出土した。その他図示した石匙を１点検出した。　（中野）



第188図　土壙―62（1/30）・出土遺物



第189図　土壙―63（1/30）・出土遺物（1/2）

土　壙—64

208Lの西端中央部において検出された不整形を呈する土壙である。130×115cmの規模で，深さは50cmを測る。壙壁は緩やかに下がる。出土遺物はないが弥生時代前期と考えられる。

土　壙—65

209Lの北西部において検出された，105×70cmの規模で楕円の平面形を呈し，長軸は南北方面にもつ深さ約50cmの土壙である。出土遺物はないが弥生時代前期と考えられる。

土　壙—66

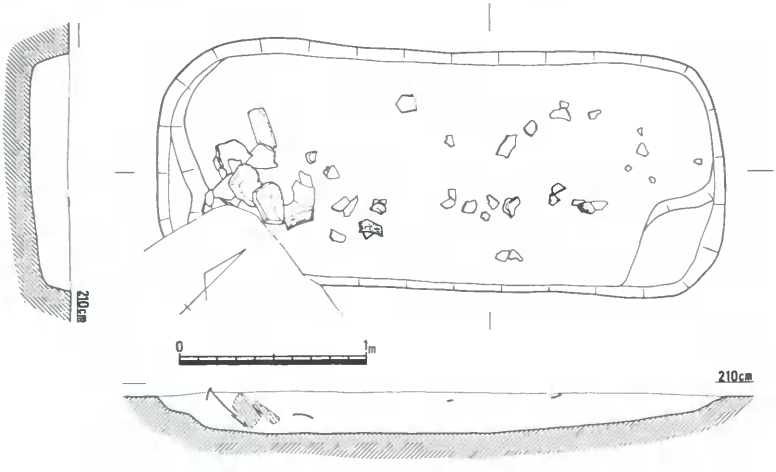
207Lの南西端において検出された遺構で，複数の小土壙が切合った不整形を呈する土壙である。200×180cm程の規模で深さは10〜25cmを測り底面は凹凸をもつ。埋土は茶褐色粘質微砂で，埋土中に焼土塊・木炭片等を含むが土器等はない。時期は弥生時代前期と思われる。

土　壙—67

207L西端中央部において検出された不整形を呈する遺構である。西端は調査区外におよび，長さ約230cm程・最大幅185cmが確認された。深さは，海抜230cm前後の検出面から10cmの浅い土壙である。遺物はないが弥生時代前期と思われる。　（内藤）

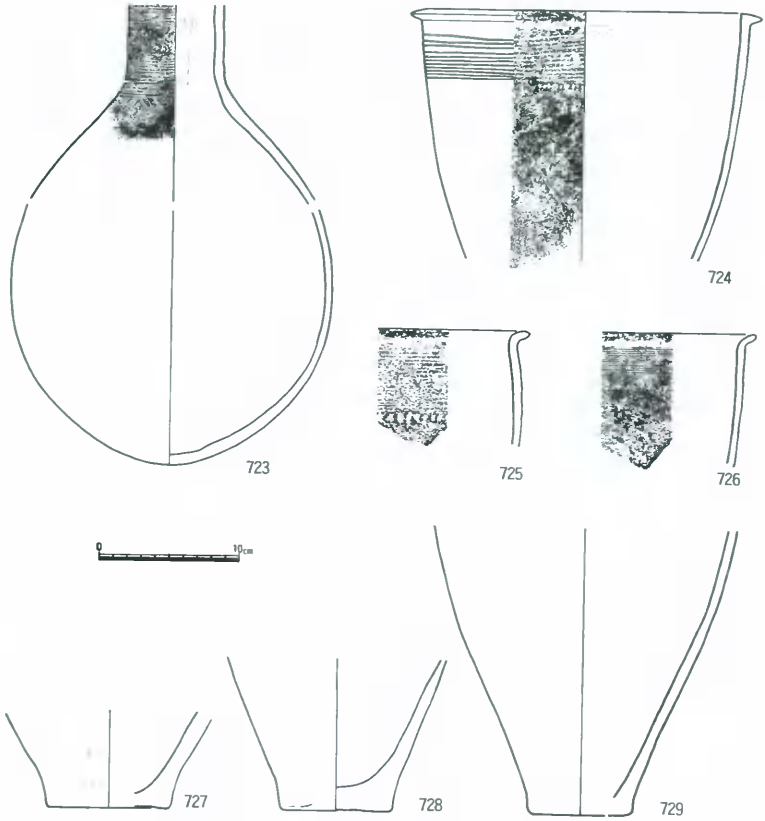
土　壙—68（第190・191図，図版74—1）

207Hの南東隅から検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し，長さ300cm・幅125cm・深さ20cmを測る。主軸は北々東を示す。土壙内には暗茶褐色粘質土が堆積しており，土壙の北およ



第190図　土壙—68（1/30）

び南の一部に一段高い平坦面がある。遺物は土壙全体に散在していたが，土壙南部から径15cm前後の礫とともに，壺形土器及び甕形土器が重なり合った状態で出土している。723は底部丸底の壺形土器で，頸部は篦状工具による細く，深い沈線が巡らされている。胴部外面には格子状の擦痕が部分的に観察され，籠に吊して使用されたと考えられる（註1）。甕形土器724・725の体部には多条の篦描き沈線が施されているが，726は櫛状工具による施文であり，前期～中期への過渡的な様相が窺える。当遺跡の他の遺構のあり方からすれば，当土壙は前期の範囲の中で考えた方が妥当であろう。（江見）

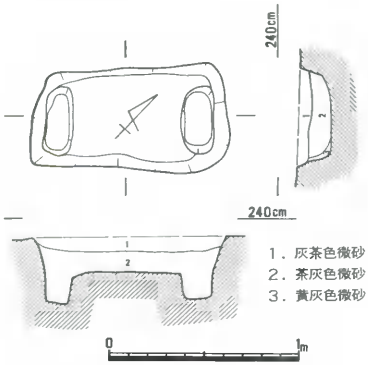


第191図　土壙—68出土遺物

（3）土　壙　墓

土壙墓―1（第192図）

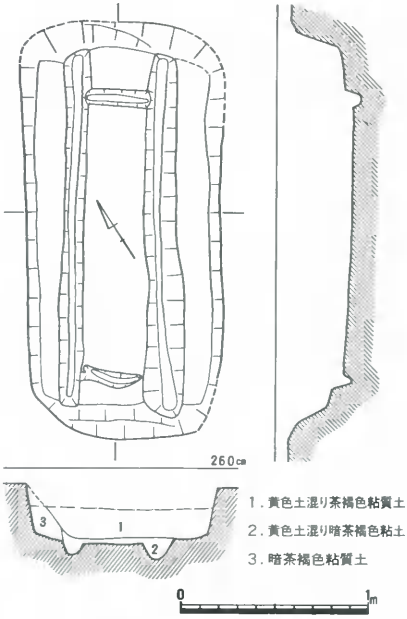
208Ｉと208Ｊの境の南端，土壙―58のすぐ西で検出された遺構である。主軸は北東―南西方向で土壙―58とほぼ平行している。規模は長辺100cm，短辺50cmを測り，底面は長軸の両端が一段掘り込んだ形で検出された。底までの深さは，上部を水田等により削平されていると思われれる海抜230cmの検出面から約20cmを測る。長軸の両端の窪みはいずれも35×15cm程の規模で深さは底からさらに10～15cmあり木棺痕跡と想定されるものである。埋土は二層に分かれ，遺物はみられなかった。時期は弥生時代前期と思われる。（内藤）



第192図　土壙墓―1（1/30）

土壙墓―2（第193図）

209Ｊの北西端に位置し，「島状高まり」遺構（微高地の先端部分）下部で検出できた長方形の平面形を呈する土壙である。長軸は少し東偏しているが，ほぼ南北に向いている。規模は長さ270cm・幅100cm・深さ30cmを測る。この土壙の特徴は床面に凵形の溝が検出されたことである。溝の幅は10cm，深さは床面から5cmを測る。なお，土壙の床面は平坦である。遺物は全く見られない。この土壙の性格は木棺墓と考えたい。同種のものは208Ｊに小型のものが一つ見える。時期は検出面が弥生中期より下らないことから中期あるいは前期と推定する。（浅介）



第193図　土壙墓―2（1/30）

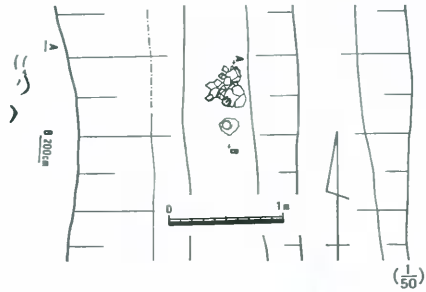
（４）　溝

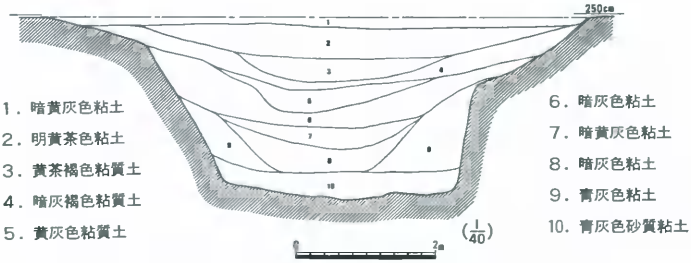
溝―69（第194～196図，図版75）

当調査区の東端に位置し，Ｇラインにほぼ平行して南北方向に流走する溝であり北端で若干東向きに曲ってはいるが，検出面での溝は，幅300cm～360cm・深さ106cm～160cmを測り得た。さらに遺構の断面ではレンズ状に推積する部分も認められる部分もあった。また検出された溝底は207Ｆ内で浅くなっているようであるが，溝自体は上層に位置する中～近世と同じく北→南の方向で流れていたものである。

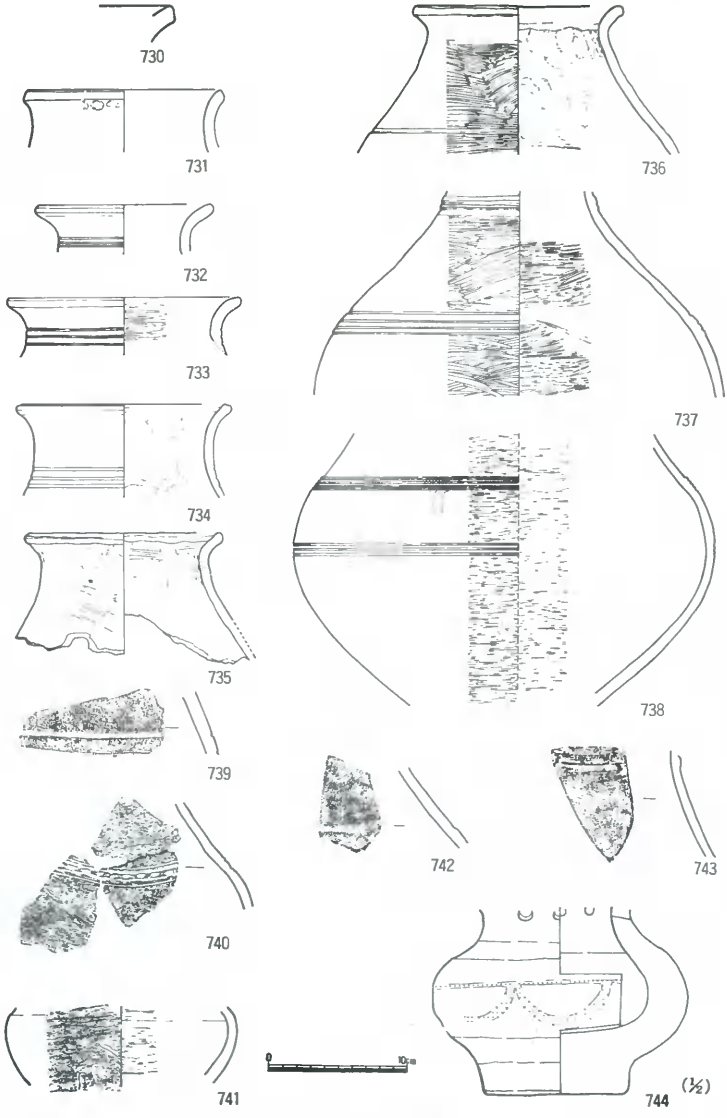
出土遺物には第195図彩文土器**738・744**，転用器台とおぼしきもの**735**，底部穿孔土器**747**，等が出土している。さらにはモミ痕跡の認められる土器（甕の底部）**753**も検出されている。さらに溝内埋積土中からは，植物の種子（モモ・ウリ）等も同時に検出されている。溝の時期は，出土遺物等から百・前・Ⅱ期に比定されよう。

（二宮）

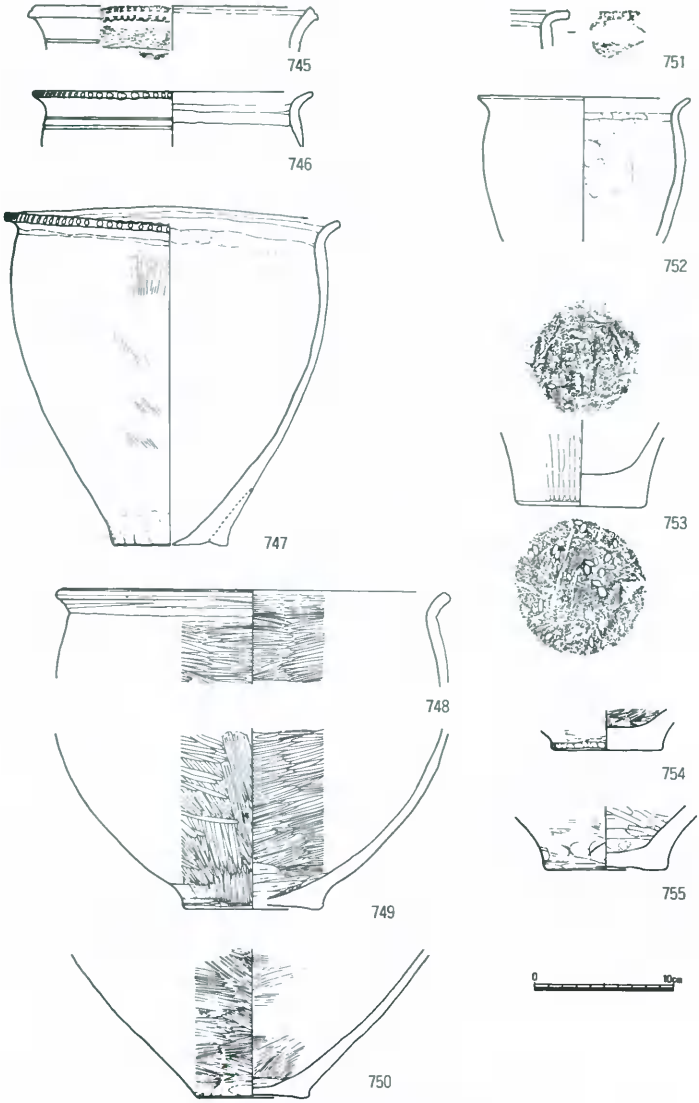




第194図　溝―69（1/50・1/40）・出土遺物（１）（1/2）



第195図　溝—69出土遺物（2）

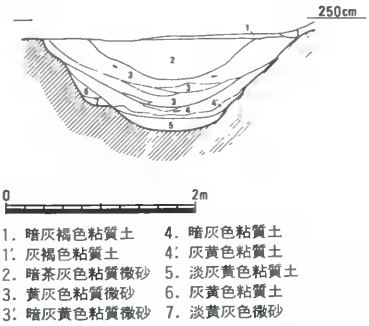


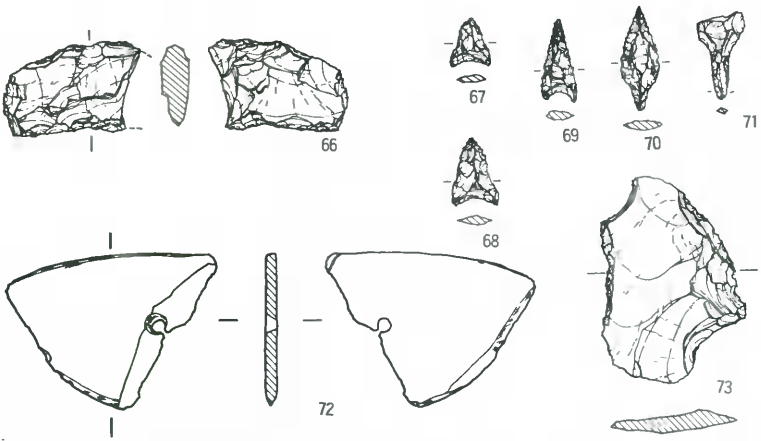
第196図　溝―69出土遺物（３）

溝—70（第197～202図，図版76・120・121）

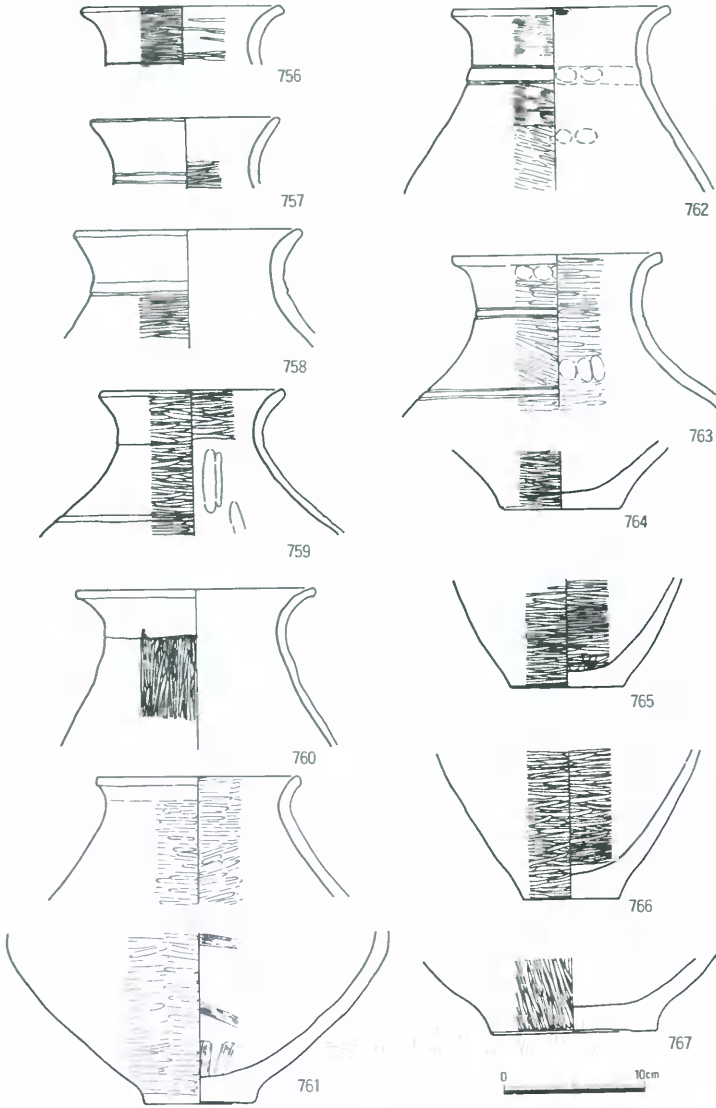
208Kの西部から209Jの南西部にかけて，長さ約40mに亘り，弥生時代前期の竪穴式住居—10等の東側に検出された，北東から南西方向にやや彎曲気味に流走する溝である。規模は，検出面で幅280～400cm・深さ100～130cmを測る大溝である。断面は，北部では検出面から緩やかな斜面をもって底に至るが，南部ではやや急なV字溝に近に形状を呈している。埋積土は，大きくレンズ状の堆積を示す，2層の暗茶灰色粘質微砂，3（3′）層の黄灰色粘質微砂，4（4′）層の暗灰色粘質土，5層の淡灰黄色粘質土の四層に分かれる。2層は炭・焼土塊等を含んでいる。4層の下位，4′層には非常に多くの炭が堆積している。溝の底のレベルは，海抜130cm前後で，検出範囲内において顕著な差はみられず，流走方向は不明である。

出土遺物は，埋積土の各層に石器・土器等が多く認められている。石器としては結晶片岩製の磨製石庖丁**72**，サヌカイト製の石庖丁**66**，スクレイパー**73**，石鏃**67～70**，石錐**71**等の石製品の他にサヌカイトの剥片が出土している。土器は，完型の甕・蓋・小型壺をはじめ，壺・甕・蓋・鉢等の土器片が多く出土している。

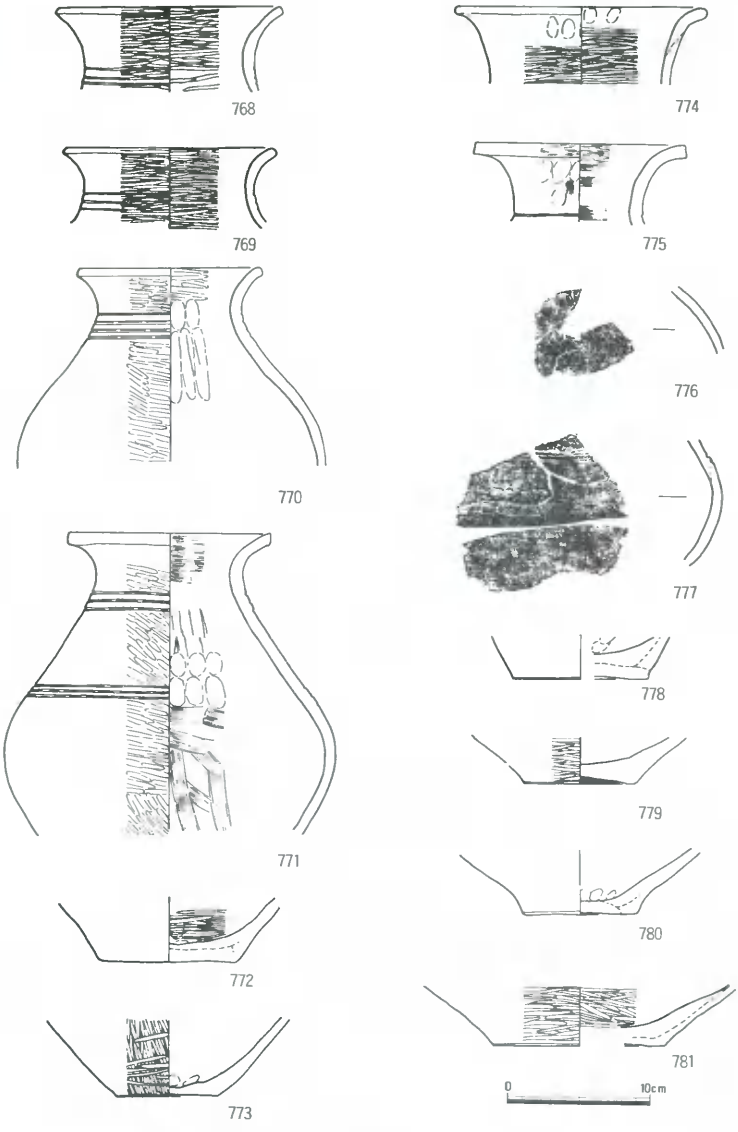




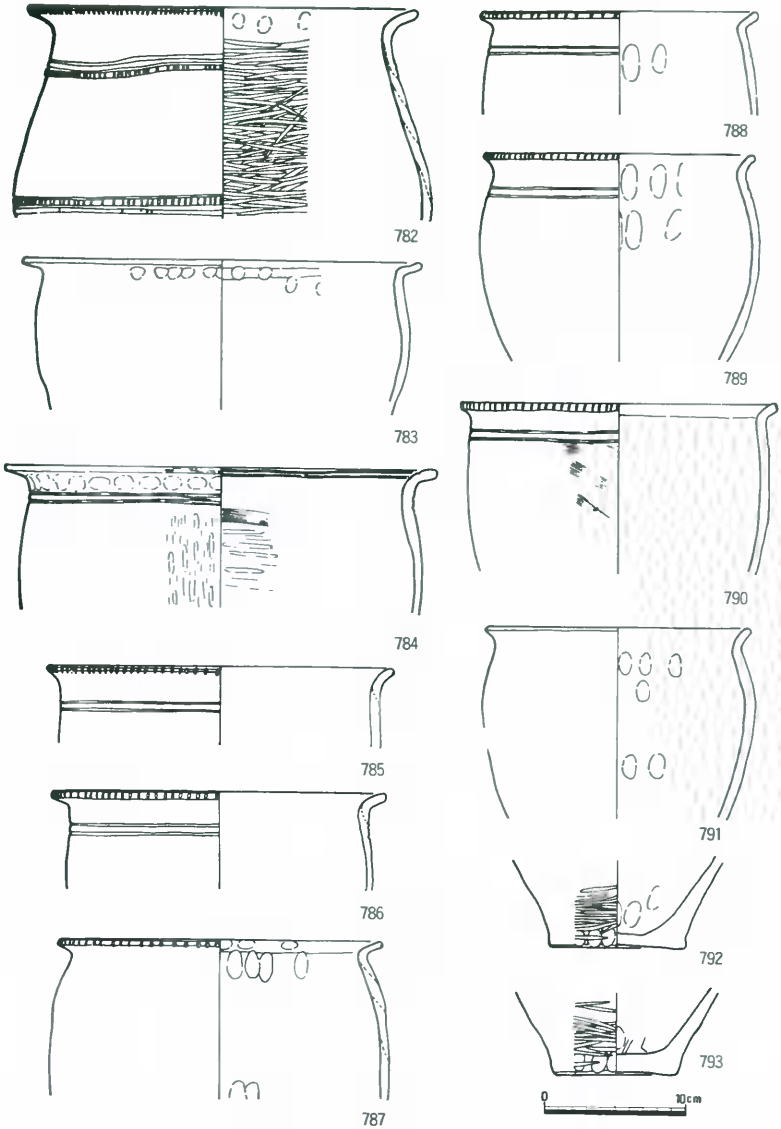
第197図　溝—70（1/60）・出土遺物（1）（1/2）



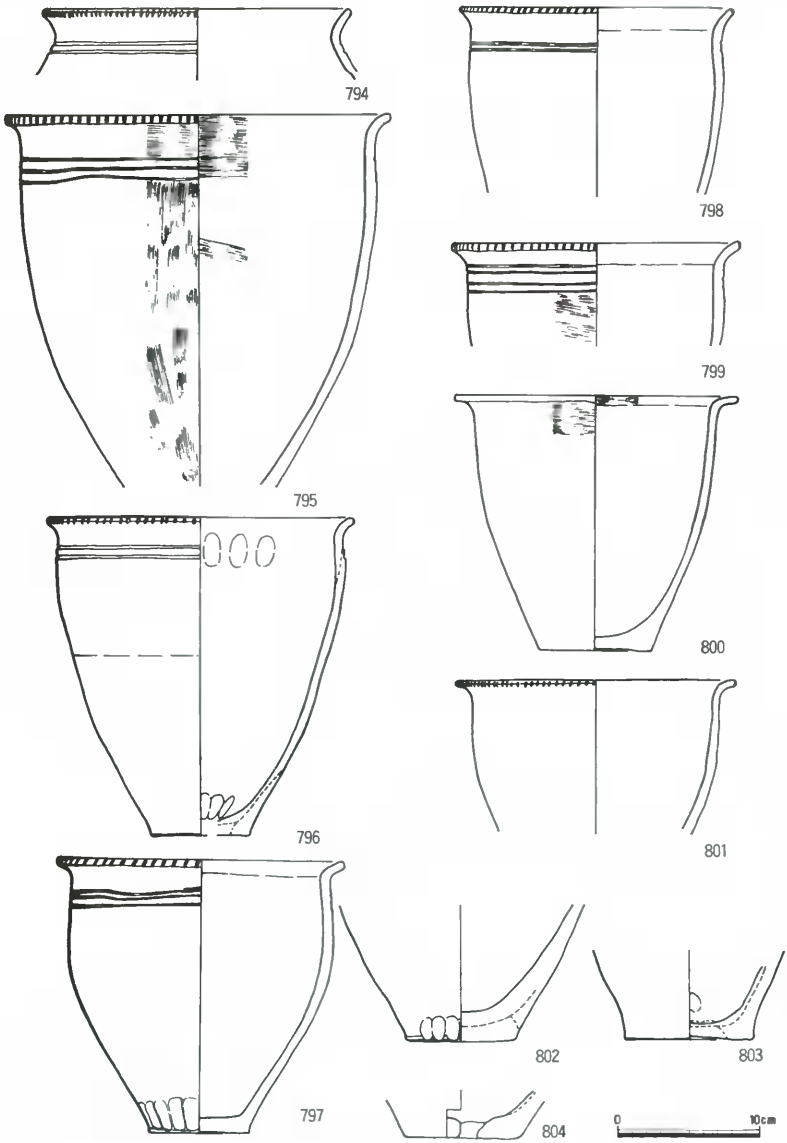
第198図　溝―70出土遺物（２）



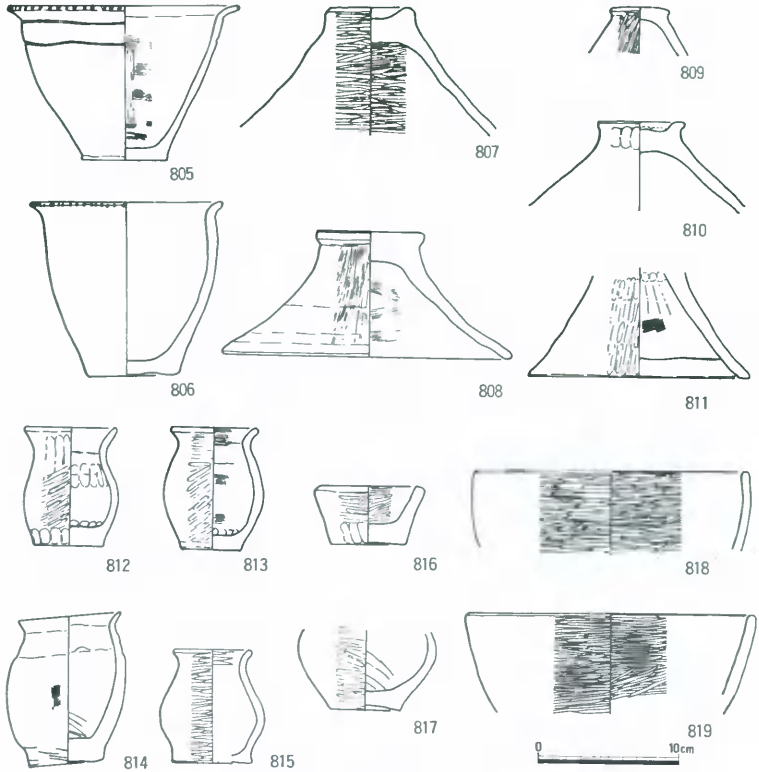
第199図　溝―70出土遺物（３）



第200図　溝―70出土遺物（４）



第201図　溝―70出土遺物（５）

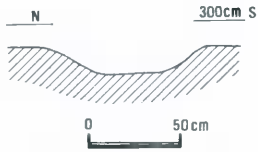


第202図　溝—70出土遺物（6）

これらの土器片のうち何点かは，埋積土の上層と下層のもの，或いは遺構の北部と南部から離れて出土したものが一つに接合されていることから，この溝は，かなり短期間に埋没したと考えられる。なお，206F～208Gで検出された溝—69は，この溝とほぼ似た様相を呈しており，調査区外において接続或いは合流する可能性も考えられるが，遺構の性格は不明である。時期は，出土遺物等から百・前・Ⅱと考えられる。（内藤）

溝—71（第203図）

206・7G区の微高地上に検出した浅く皿状の断面を



第203図　溝—71（1/30）

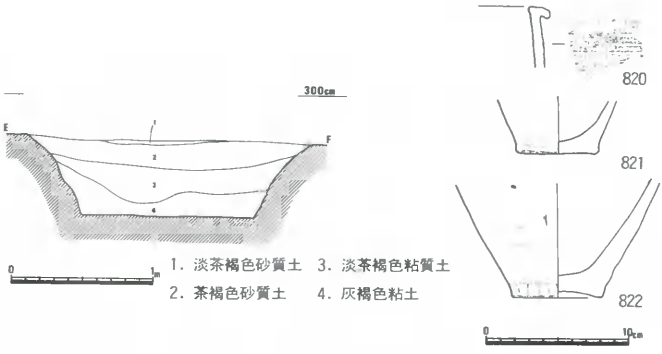
呈す溝状の遺構である。現存長22m・最大幅100cm・深さ18cmを測り，北西から南東方向に向いている，低部レベルはほとんど差が認められない。

時期は，埋土中の若干の出土遺物から弥生時代前期と想定される。（山磨）

溝—72（第204図）

203Lの中央に位置し，ほぼ東西方向に流走する溝である。上端部幅約200cm・下端部幅約120cm・深さ約56cmを測り，断面は逆台形を呈する。溝内堆積土は四～五層からなり，遺物は灰褐色粘土層上面を中心に820～822の甕形土器が出土している。時期は百・前・Ⅲに比定できる。

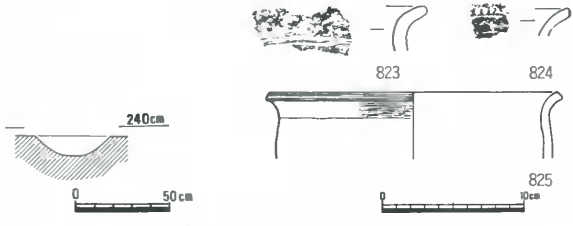
微高地縁辺に廻るこの類の溝は水田関連として把えることができそうである。（高畑）



第204図　溝—72（1/40）・出土遺物

溝—73（第205図）

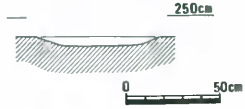
208Jの南西部，竪穴式住居—10の南西部に隣接して6m程が検出できた，西北西—東南東方向にやや彎曲した流路をもつ溝で，幅約50cm・深さ10cm程を測る。検出できた範囲が狭小で，流走方向および遺構の性格等は不明である。出土遺物としては甕等の土器がみられる。時期は，弥生時代前期と考えられる。



第205図　溝—73（1/30）・出土遺物

溝―74（第206図）

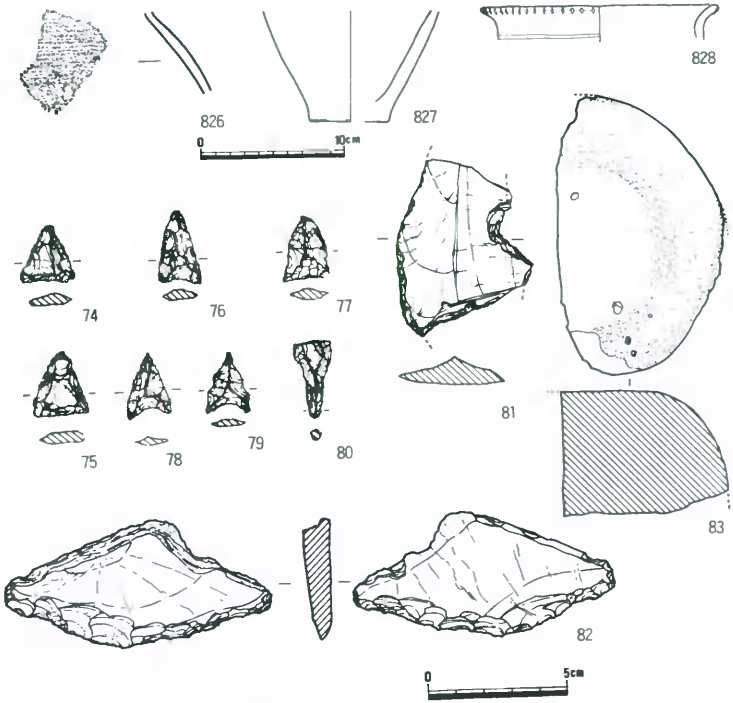
207Ｌの南端において検出された，東―西方向から北北西―南南東方向に途中で屈曲する溝である。最大幅は90cmを測り，深さはわずか５cm程が確認された。出土遺物はなく，遺構の性格等は不明である。時期は弥生時代前期と思われる。（内藤）



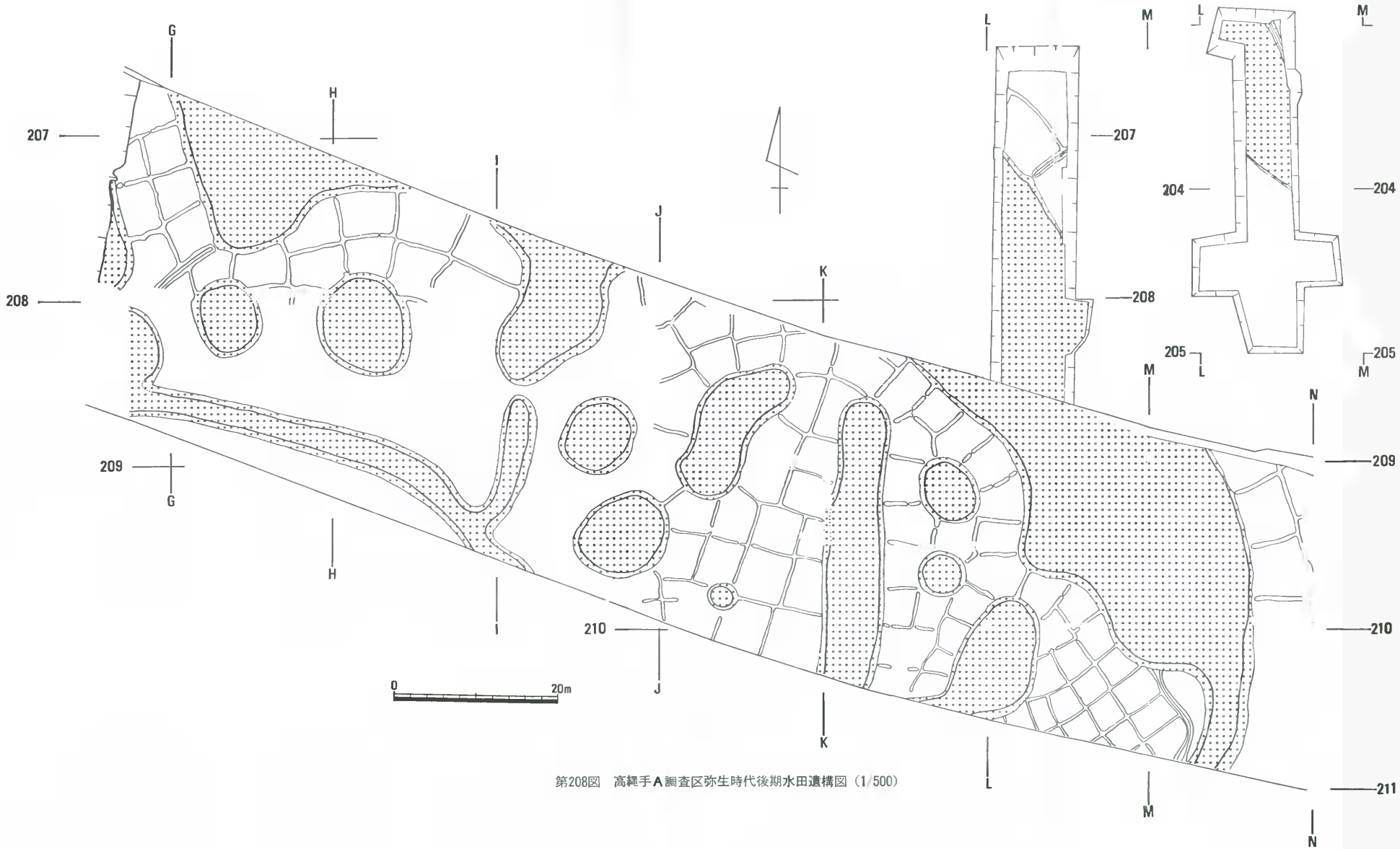
第206図　溝―74（1/30）

（５）包含層出土遺物

高縄手Ａ調査区においては，調査区のほぼ全域において，水田遺構・「島状高まり」遺構・微高地部包含層除去後の黄褐色微砂の基盤層上から，多くの土器片・石製品およびサヌカイトの剥片等弥生時代前期の遺物が出土している。図示できたものは826～828の土器および74～83の石製品である。これらの遺物の中には，基盤層上に確認された不定形の窪み状の，性格不明の小土壙から出土したものも含まれている。（内藤）



第207図　包含層出土遺物



第208図　高縄手A調査区弥生時代後期水田遺構図（1/500）

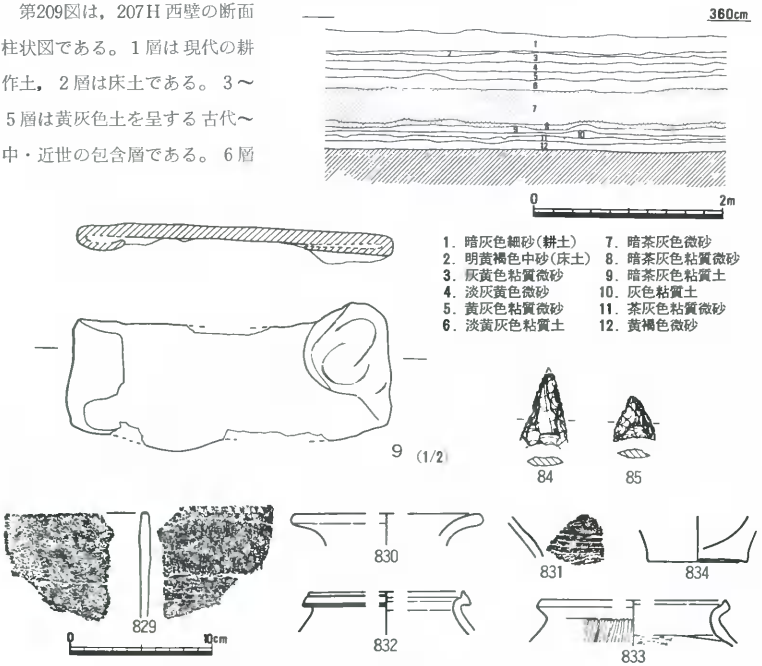
5.　弥生時代後期の遺構・遺物

高縄手A調査区では，微高地部を除き，全域から水田遺構および「島状高まり」遺構が検出されている。水田は初期の調査では一部未検出に終わっているが，その地区においても水田は存在していたと想定される。「島状高まり」遺構は，大きなもの・小さなもの・円いもの・細長い道状のものなど，様々な形状のものが全部で11検出されている。その他には，微高地や「島状高まり」遺構の縁辺に沿っている溝が22本検出されている。遺物は，水田層から鉄製の摘鎌が出土している他，土器片・石鏃・石斧等が水田・「島状高まり」遺構から出土している。

(1)　水　　田

高縄手A調査区では，微高地と「島状高まり」遺構を除き，全域から水田の畦が検出されている。最も初期に調査を行った208F～209Iについては，平面では未検出に終わったものの，断面の観察等から，この地区においても水田のあったことが確認されている。

第209図は，207H西壁の断面柱状図である。1層は現代の耕作土，2層は床土である。3～5層は黄灰色土を呈する古代～中・近世の包含層である。6層



第209図　　水田土層柱状図(1/60)・水田層出土遺物

の淡黄灰色粘質土層は古墳時代の包含層である。７・８層はいずれも暗茶灰色微砂層で，８層は下層の影響を受けやや粘質を帯びている。この二層が，水田を覆っている洪水砂である。９層の暗茶灰色粘質土が弥生時代後期の水田層で，10層は床土と考えられる。

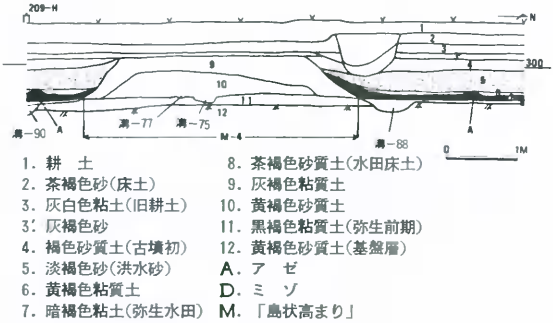
検出された水田は，微高地や「島状高まり」遺構に制約されつつも，それぞれの地域では均一でほぼ方形に近い区割りをしている。高縄手Ａ調査区で検出された水田は一枚が，大きいものは９×5.5ｍの50㎡程から，小さいものは４×2.5ｍの10㎡程のものまである。特に210Ｌでは小区割となっている。畦は幅40～50㎝で，高さ４～５㎝程が確認されている。畦には「水口」と称される切れ目が所々に見られ，一本の畦に水口が２か所みられるものもある。207Ｇと207Ｌでは少し規模の大きい幅120㎝前後，高さ20㎝程の大畦が検出された。水田面のレベルは，微高地の南側では海抜241㎝前後でほぼ均一であるが，旧河道上に検出された，206・７Ｌの水田面は少し低く，河道の下がり際のものは海抜210㎝である。また，畦を隔てた河道の中心に近い側の水田はさらに低く，海抜195㎝を測る。

出土遺物としては，稲の穂刈りに使用されたと思われる鉄製の摘鎌９（註２）がある。（内藤）

（２）「島状高まり」遺構

「島状高まり」遺構―17（第210図）

208Ｆから209Ｉにかけて細長い回廊状の複雑な形状を呈する遺構である。天場幅2.5ｍ・下場幅4.0ｍの断面が台状になり，長さ60ｍを測り209Ｉで二又に別れる。この形状がなぜ出来たのかは，百間川兼基遺跡の微高地と凹地との関係で明らかになっている。すなわち自然地形を利用して凹地を水田に開墾し，微高地が「島状高まり」として残ったものである。土層観察からもそう言うことが出来る。断面図中の９層・10層・11層は百間川沢田遺跡の基本的層序と一致する。なお５層は水田を普遍的におおう旭川の洪水砂である。４層はその直後の古墳時代初頭の百・古・Ｉの土器を包含する。７層は弥生後期の水田耕作土で，Ａは畦畔の

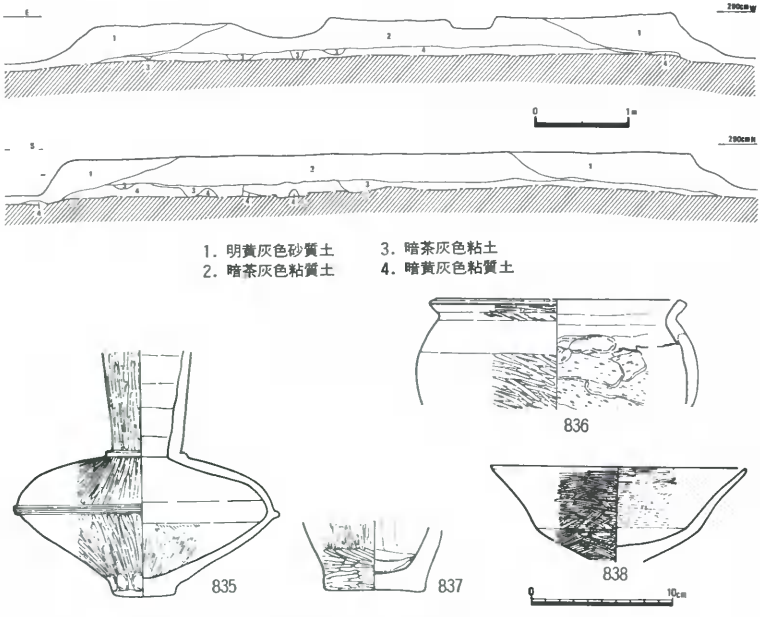


第210図　「島状高まり」遺構―17断面（1/80）・溝―75出土遺物（1/3）

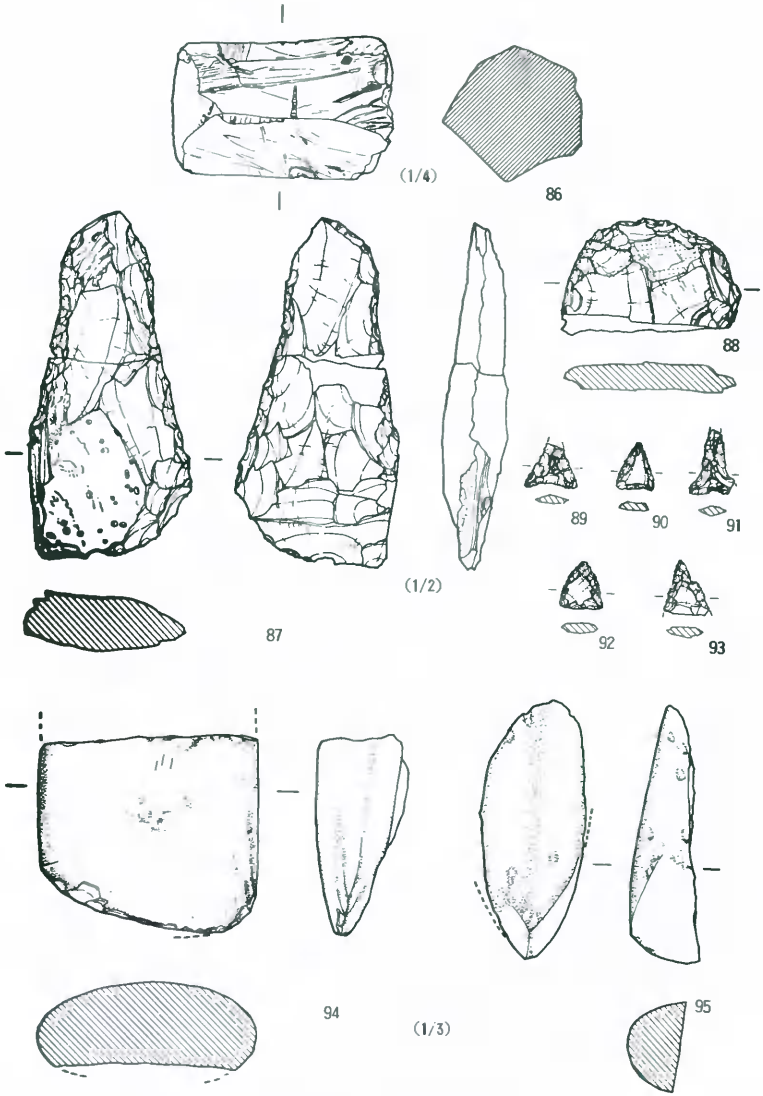
高まりである。また溝—88は長さ25m・幅80cm・深さ15cmの「島」を巡る溝で，水田下にあるけれど水田とほぼ同時代の脇溝と考えたい。溝—90も同様で，規模は長さ20m・幅100cm・深さ10cmある。溝—75と溝—77は微高地のほぼ中央部を通る浅い溝で，溝—75が長さ50m・幅50cm・深さ15cmを測り，図の弥生時代前期の土製紡錘車15を出土し，溝—77が断続してはいるが長さ40m・幅30cm・深さ10cmを測り溝—76と同じものと考えられる。この2本の溝は11層を切っていることから，弥生時代中期に入り，水田か畑地灌漑用に機能したと思われる。（浅倉）

「島状高まり」遺構—25（第211図）

209K区北東隅に検出した長径8.6m・短径7.0mを測り，やや楕円形の形状をなす「島状高まり」遺構である。周囲の水田面との比高差40cm程，頂部平坦面の海抜高2.8mを測る。当遺構の周囲には，東側に微高地端部，南側に円形と西側に帯状の「島状高まり」遺構が位置し，これらに向って放射状に小畦畔が延びている。この小畦畔のうち明瞭に当該遺構に接続しているものは，南側の一本のみで他はいずれも「島状高まり」に取りつく部分に水口を設けて途切れている。



第211図　「島状高まり」遺構—25断面（1/60）・「島状高まり」遺構出土遺物（1）



第212図　「島状高まり」遺構出土遺物（２）

当遺構の縦横断面の観察からは，中心に上面径約3.5ｍ，下端径4.5～5.0ｍの中心核（第211図―２～４層）が存在し，その周囲に明黄灰色をなす土層（１層）が取りまいている状況を示している。また，「島状高まり」遺構の１層と周囲の水田層を除去した時点で，「島状高まり」遺構の裾を巡る溝を南側に一部検出している。

出土遺物は，中心核の周囲（１層）から弥生時代後期後半の時期と考えられる遺物が出土しており，また，中心核，及び，その下層より弥生時代前期の土器片が出土している。（山磨）

（３）　溝

溝―80～83

溝―80は，206Ｆから207Ｇにかけて「コ」の字状に検出され，幅100～140㎝・深さ15～20㎝で断面は皿状を呈する。溝―81は，溝―80の東側に並行するもので，幅30～40㎝・深さ８㎝程を測る。溝―82は207Ｇから207Ｈにかけて検出され，溝―83は南側に並行するものである。

これらの溝は，微高地の端部に沿って検出されたもので，途切れてはいるものの溝―80と83，溝―81と82はそれぞれ連続している一つの溝状の遺構である。出土遺物はみられない。

溝―84

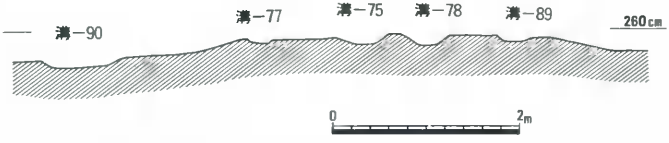
207Ｇの南端において検出された，少し弧状を描く溝で，幅60～70㎝・深さ５㎝程で，断面は皿状を呈している。この遺構は「島状高まり」遺構―18の縁辺部に沿っているもので，溝―85・86と同じ性格のものである。出土遺物はない。（内藤）

溝―85・86

これらの溝は，「島状高まり」遺構―18の下部に検出された。溝はいずれも円弧状に存在し，この地点が水田化していく過程の産物と考えられる。開田の際に障害物として残された「島状高まり」遺構も数次にわたり縁辺部の掘削が行われたことがわかる。

溝―87

この溝は，溝―85・86の東側に位置し，水田下層に検出されたものである。溝は，ほぼ南北



第213図　溝―75・77・78・89・90（1/60）

方向でやや蛇行する。規模は，幅約60cm・深さ約15cmを測る。溝内は，暗灰褐色土が堆積していた。出土遺物はないものの，検出状況からみて弥生時代後期のものであろう。

溝—78・89・90（第213図）

溝—78・89は，「島状高まり」遺構—17上の下位に検出したものである。この両者の溝は，幅40～50cm，深さ5～8cmを測るが，残存状態はよくない。いずれの溝も「島状高まり」遺構—17上に乗っており，水路的性格が考えられる。また，溝—90は，水田層下層の「島状高まり」遺構の下端に存在するもので，溝—80・84～86などの溝と同様な性格のものであろう。

（中野）

溝—91・93～97・99

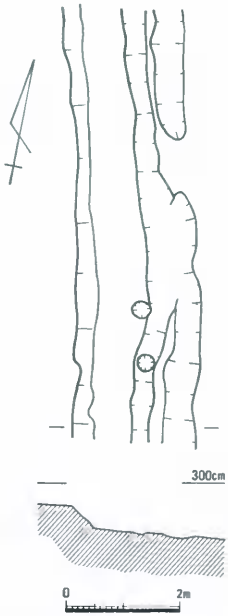
207Ｉ，208Ｊ・Ｋにおいて検出された溝状の遺構である。規模はそれぞれ異るが，いずれも微高地，或いは「島状高まり」遺構の縁辺部に沿っているものである。水田造成時に生じた遺構とも考えられるが判然とはしない。いずれも出土遺物はないが，弥生時代後期と思われる。

溝—92

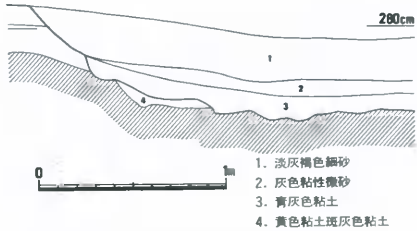
208・9Ｊにおいて検出された，幅15cm・深さ6cm程の細い溝である。南半部は「島状高まり」遺構—22の縁辺に沿っているが途中から屈曲して離反している。微高地の縁辺に沿っている溝と同じ性格のものかどうか不明である。遺物はなく，時期も判然とはしない。（内藤）

溝—98（第214・215図，図版83）

207Ｌから209・210Ｍに亘って検出された。高縄手Ｂ調査区にまたがる旧河道上に開かれた弥生時代後期の水田の下にある。第215図で説明すれば，１が弥生時代後期の



第214図　溝—98（1/100）



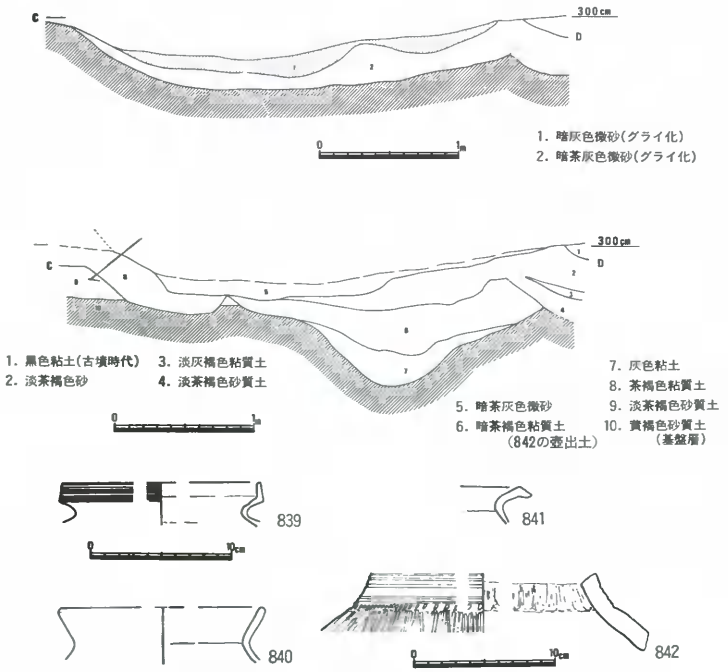
第215図　溝—98付近土層断面（1/30）

洪水砂層，2・3が水田層であり，この水田層の底の凹凸が溝—98の断面にあたる。この溝は2本，ところによっては3本になっていて，それぞれ幅40〜90cm，深さ3〜8cmで，底には多くの凹凸がみられる。したがって，形態上は溝であっても，実際の機能は不明確で，むしろ，水田を開いたり，拡張するための掘削の際に生じた可能性が高い。（岡本）

溝—79・100・101・124（第216図）

203Lの中央上部に位置し，北西から南東に流走する溝群である。合計4〜5本の溝が若干位置を変えながら同一方向に配置されている。

個々の前後関係は，いわゆる水田埋没砂（弥生時代後期末）を中心にして説明を加えてゆく。まず，洪水砂の堆積した溝—100は幅約310cm・深さ約50cmを測り，断面は皿形を呈している。839の甕形土器が砂上面より出土している。溝—100を切るそれより新しいと考えられる溝



第216図　溝—79・101（1/40）・出土遺物

—124が東端部に一部をのぞかせている。

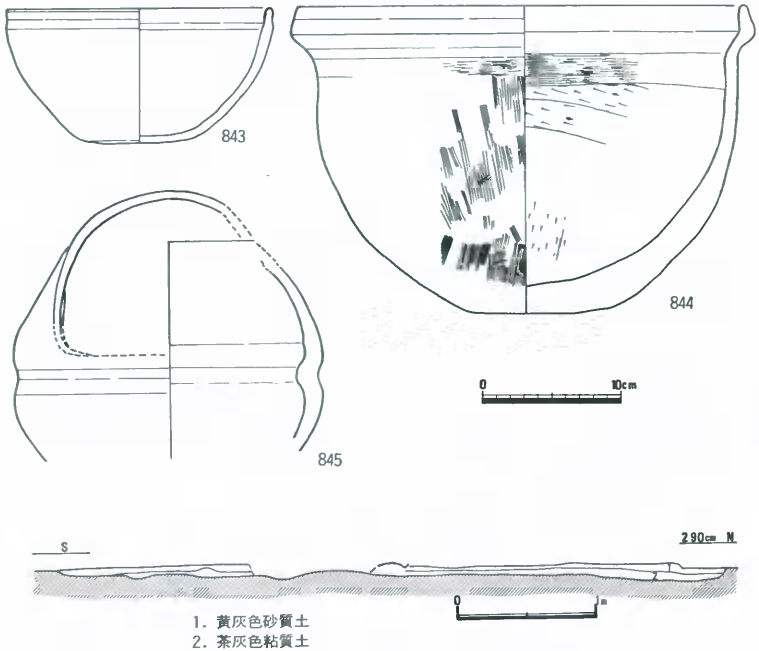
溝—79・101は溝—100によって切られているが，溝—79・101との前後関係は明確でない。溝—101の暗茶褐色粘質土内より長頸壺の破片842が出土しており，百・後・Ⅲよりも古い時期に機能していたことが理解できる。（高畑）

（4） 土器溜り

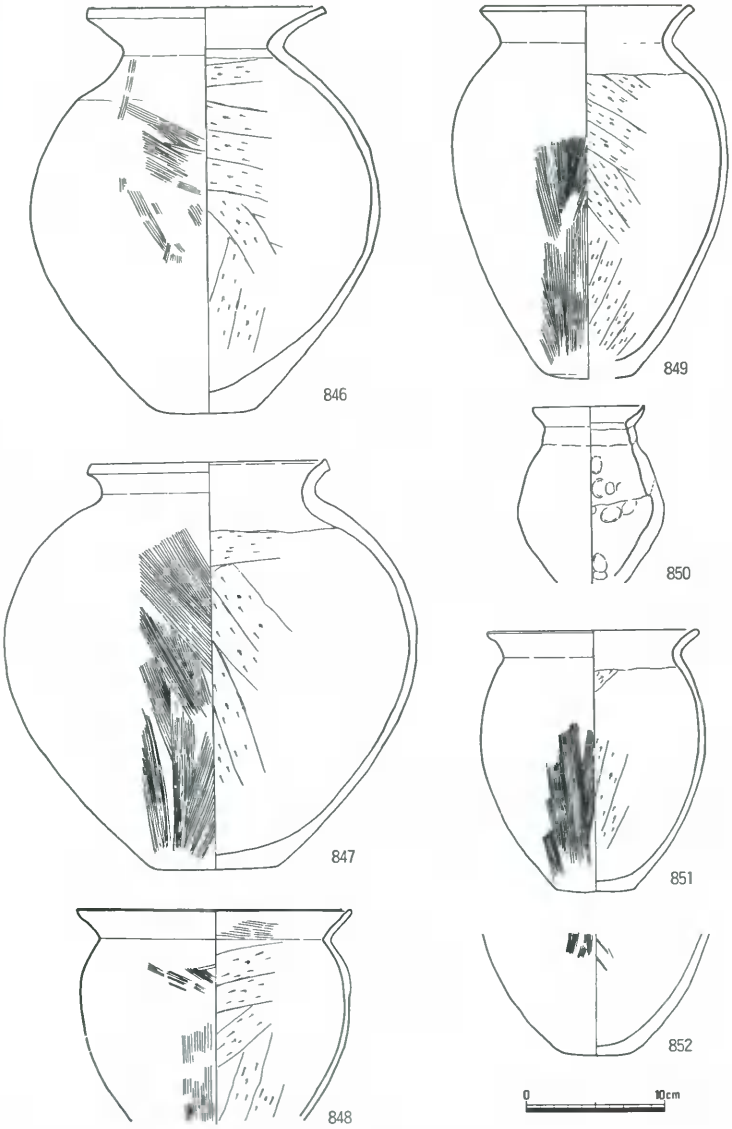
土器溜り—3（第217～219図）

208・9L区間，東端の微高地上に検出した土器溜りである。検出当初は，竪穴式住居等の遺構も想定されたが，明瞭な掘り方を示さず，微高地上面の浅いくぼみに堆積した東西5m，南北4mの不定円形の広がりをなす土器溜りと判明した。深さ10～15cm程度と浅く，堆積層も黄灰色を中心として，上層にやや砂質土，下層にやや粘質をおびた土層を認めたにすぎない。

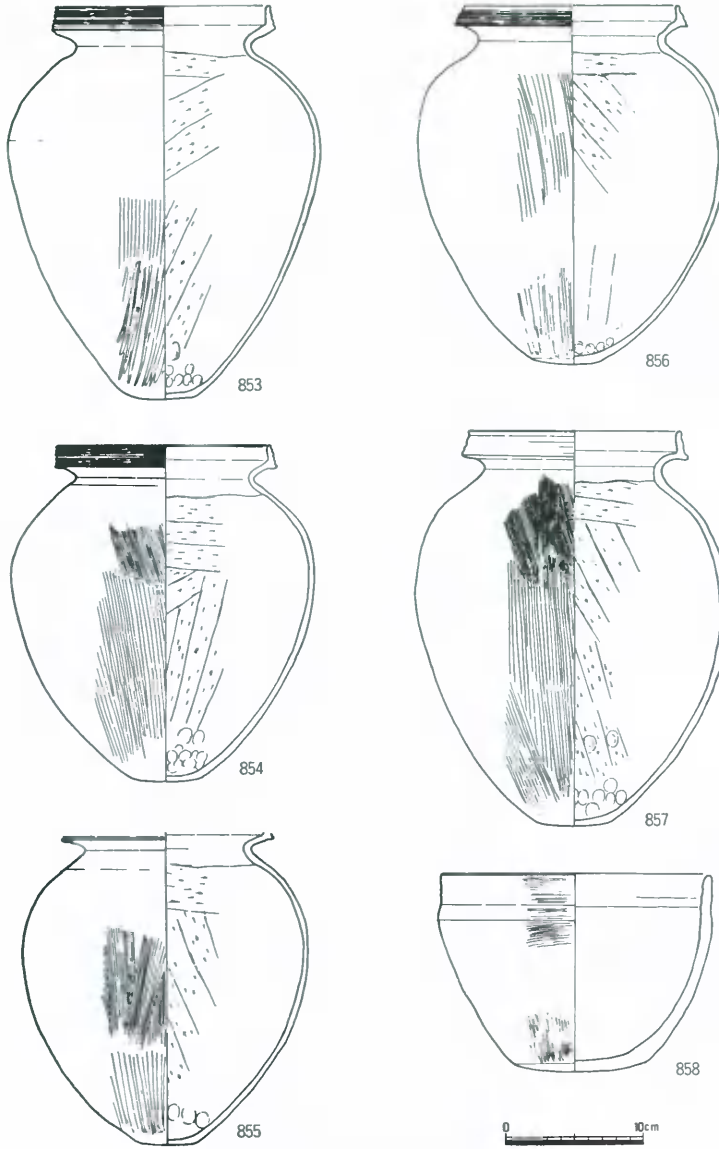
遺物の出土状況は，完形に近い土器や大形の破片が，まとまった状況での出土状態を示し，壺・甕・鉢・手焙形土器の器種が認められた。



第217図　土器溜り—3（1/40）・出土遺物（1）



第218図　土器溜り―３出土遺物（２）

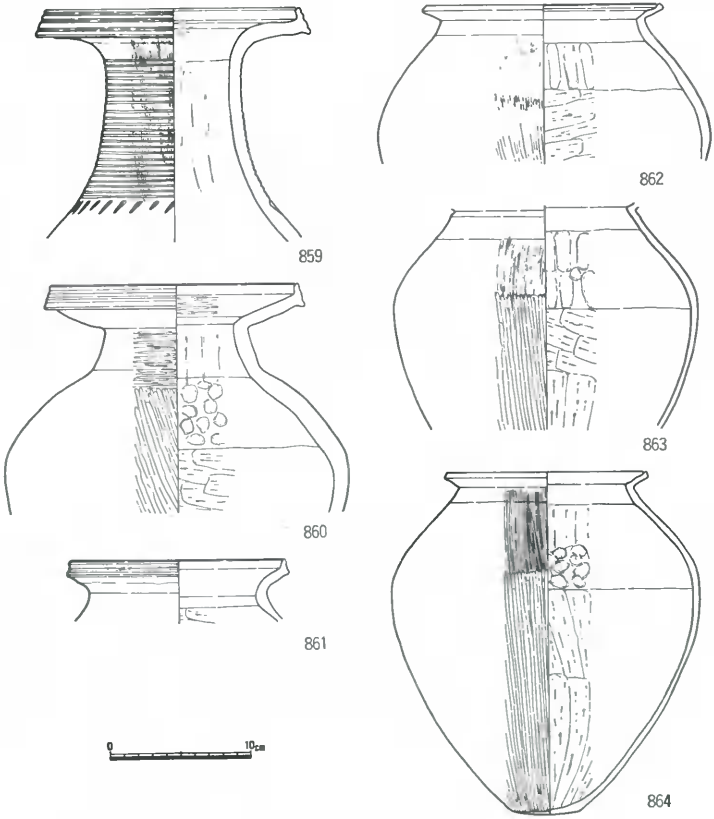


第219図　土器溜り－３出土遺物（３）

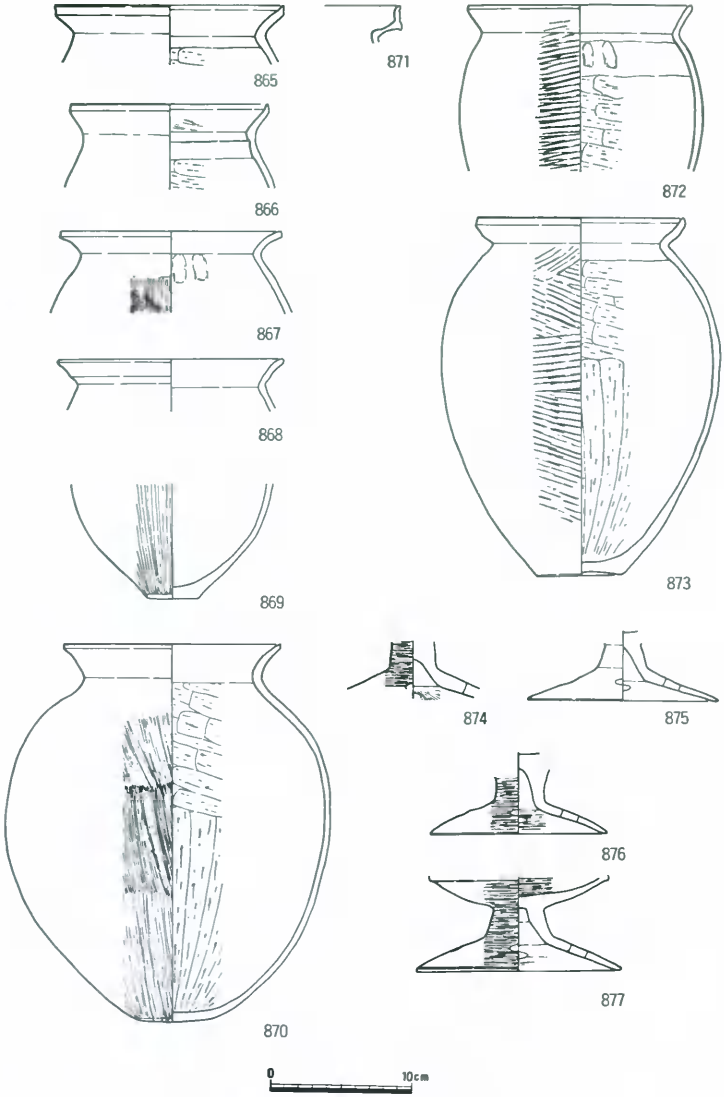
出土土器の形態的な特徴は，底部がいずれも若干平底を残していることや，甕形土器の口縁端部にいずれもヘラ描きによる沈線文が施され内傾したシャープな立上りを示していること等があげられる。なお高杯形土器の出土は一点も認められなかった。これらの土器の諸特徴から百・後・Ⅳの良好な一括資料と考えられる。（山磨）

土器溜り－4（第220・221図）

調査区の南東端部に検出されたものである。これらの土器群は，水田化された北側の微高地残存部から水田遺構にかけて点在していた。土器は，全て砂により埋っており，この砂層は弥



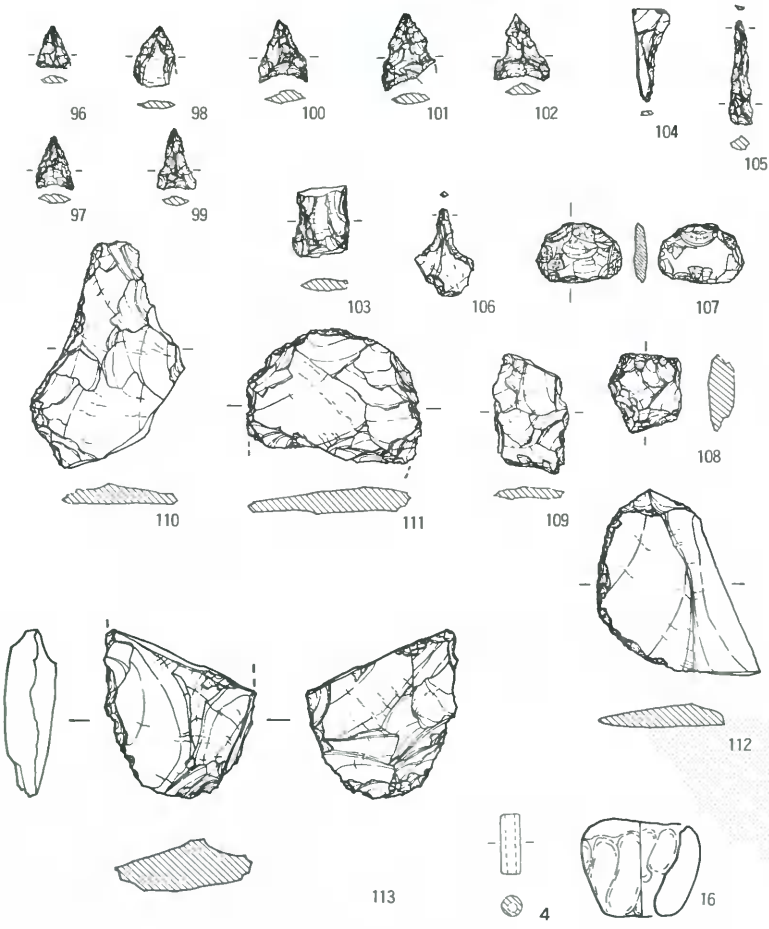
第220図　土器溜り－4出土遺物（1）



第221図　土器溜り－４出土遺物（２）

生時代後期の水田を覆った洪水砂層である。土器は，北側の微高地上に在ったものが洪水の際に流されてこの地点に埋ったものと考えられる。

これらの土器群は，この地域に存在する水田の洪水による埋没時期を決定できる好資料といえる。これらの土器は，その特徴から百・後・Ⅳ期のものと考えられる。　（中野）



第222図　包含層出土遺物（1/2）

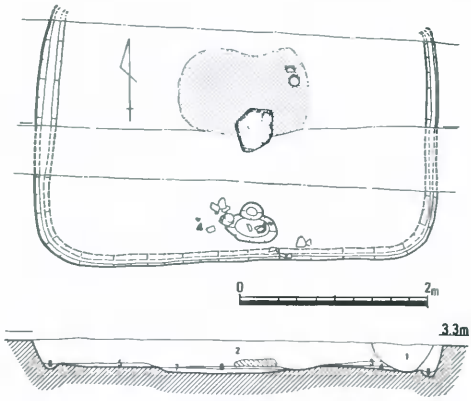
（５） 包含層出土遺物

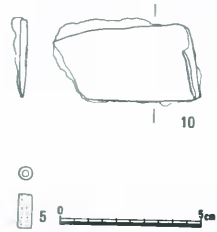
高縄手Ａ調査区では，弥生時代後期の遺構としては水田遺構およびそれに関連すると思われる遺構がほとんどであった。この為，遺物は極めてまれであり，土器等はいずれも細片で図示できるものはない。石製品は時期が判然とせず，弥生時代のもので，前期と確定できなかったものを含んでいる。

（内藤）

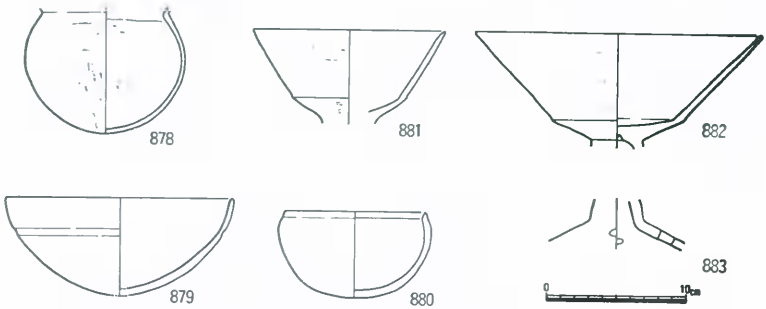
6． 古墳時代の遺構・遺物

高縄手Ａ調査区では，調査区のほぼ全域において，古墳時代前期の遺構を中心として，古墳時代の遺構・遺物が検出されている。検出された遺構は，竪穴式住居12棟・建物１軒・井戸26

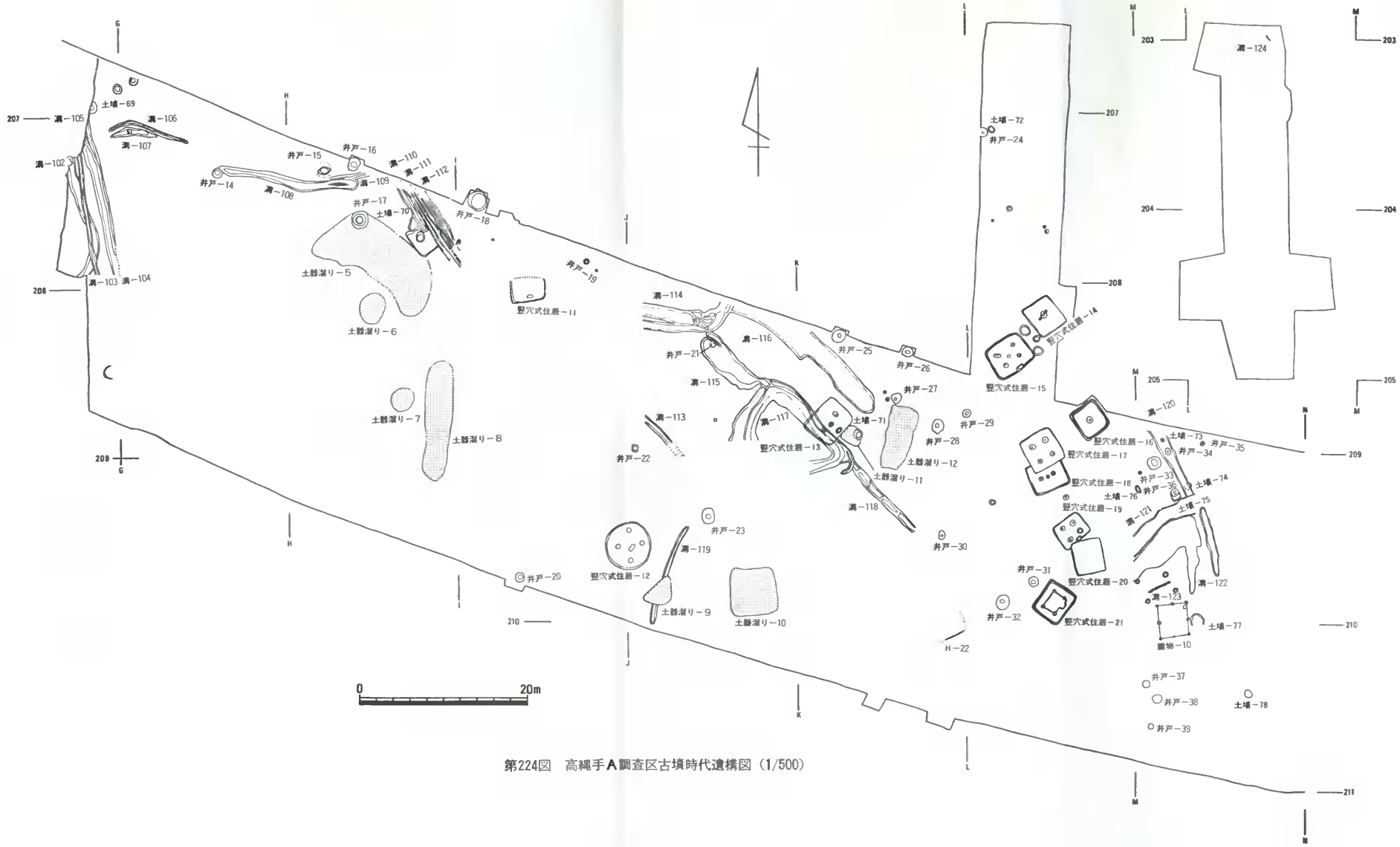




1．灰褐色泥砂
2．灰褐色粘質土
3．焼土
4．褐灰色粘質土
5．黄褐色粘質土
6．炭
7．黄褐色粘質土層下面炭
8．灰褐色粘質土



第223図　竪穴式住居―11(1/60)・出土遺物



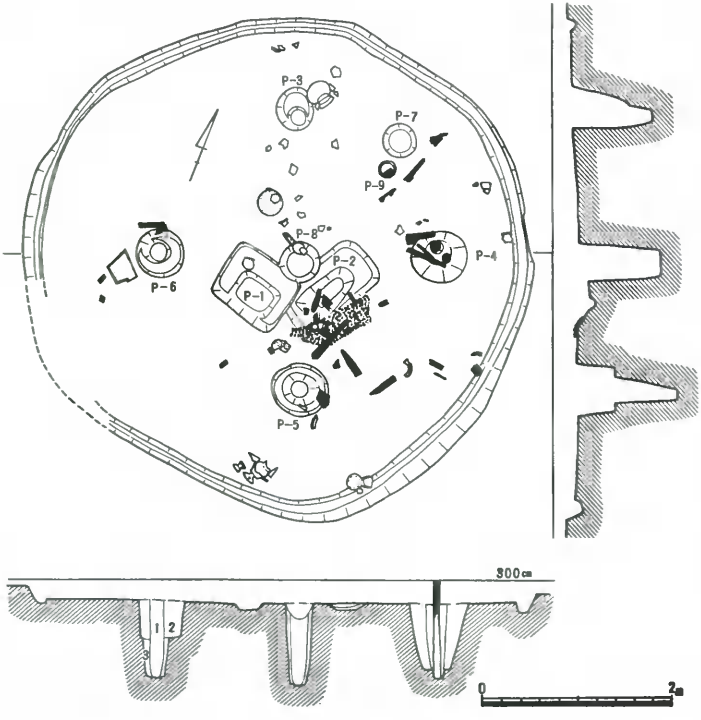
第224図　高縄手Ａ調査区古墳時代遺構図（1/500）

基・土壙10基・溝23本・土器溜り8か所である。また遺物はこれらの遺構から大量の土器が出土した他，玉類としては管玉・臼玉各1個が，いずれも竪穴式住居から出土している。また，鉄鏃等の鉄製品8点が，竪穴式住居・井戸等から出土している。臼玉の出土した竪穴式住居からは素文の小型銅鏡も出土している。その他に土製の土錘4点も竪穴式住居等から出土している他，砥石・石錘・敲石等の石製品が11点出土している。　（内藤）

（1） 竪穴式住居

竪穴式住居―11（第224図，図版87―1）

208Ⅰの北部から検出された。当住居は北辺及び主柱穴を確認するに至らなかったが，平面形態は隅丸長方形を呈するものと推定され，残存する計値は長辺420cm，短辺240cm，深さ30cmを測る。床面中央部は径約120cm，深さ約8cmの範囲が一段低くなっており，その上層には炭が堆積していた。一方，住居址南部からは浅い小土壙と，深さ15cmの楕円形土壙が重複した状



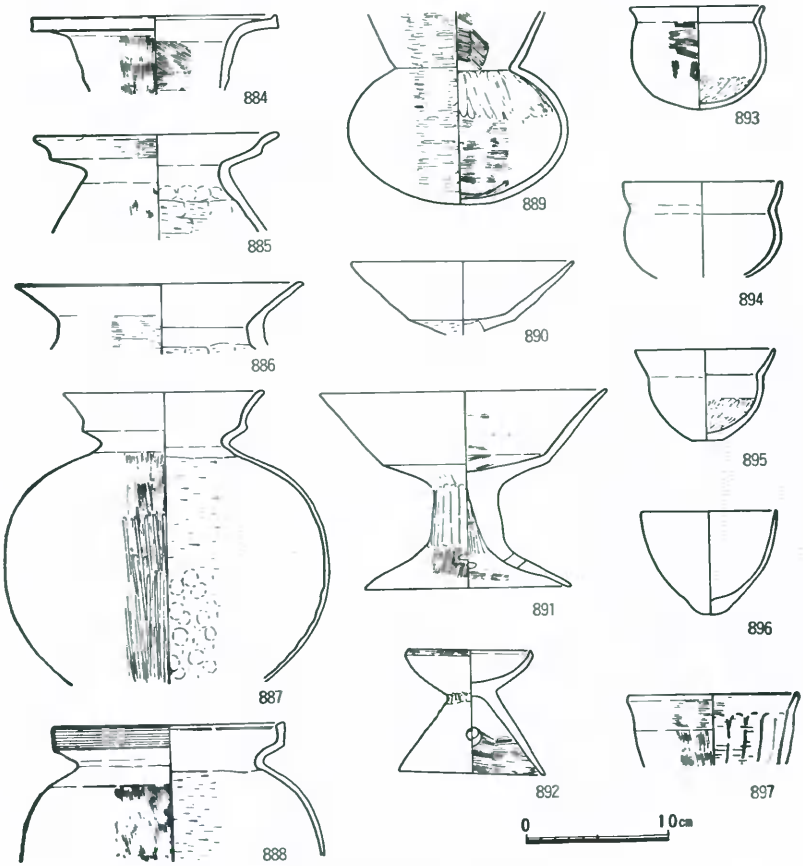
第225図　竪穴式住居―12（1/60）

態で検出された。遺物は床面中央から，作業台と考えられる偏平な花崗岩をはじめ，**879～883**が，楕円形土壙からは**878**が出土した。なお，鉄鎌及び緑色凝灰岩製管玉は覆土中から出土したものである。

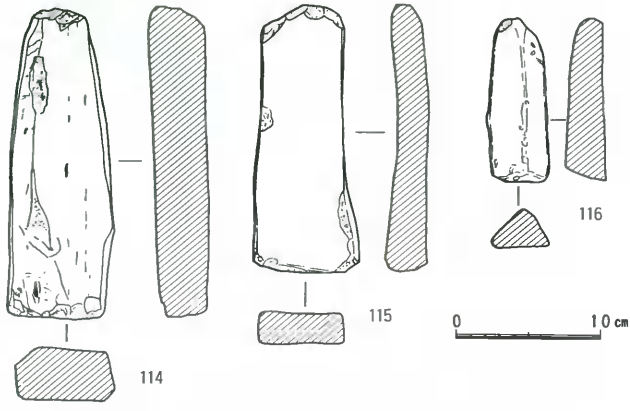
時期は土器の特徴から百・古・Ⅱと考えられる。（江見）

竪穴式住居―12（第225～227図，図版87―2・3）

209Ｊの Ｊライン上に位置し，直径500cm・深さ10cmを測る多角形の住居址である。検出面の



第226図　竪穴式住居―12出土遺物（１）



第227図　竪穴式住居―12出土遺物（２）

海抜高は300cmで，遺構の半分が「島状高まり」遺構の上にある。火災に遭遇して放棄されたものでＰ―４では柱の根元が立ったまま炭化したものが検出できた。また図で黒く塗りつぶしているものは焼け落ちた屋根材である。遺物の出土状況は突然の火災を思わせるように，例えば高杯の上に小形壺が乗ったまま倒れた状態で土器が出土している。壁体溝は１本で多角形の平面形を呈し，幅15cm・深さ平均５cmを測る。柱穴は４本の主柱穴と中心部に１本深いものが認められた。中央ピットは長方形を呈し，これが２個ある。Ｐ―４の炭化材も２本ある。このことから１度建て替えられ，しかも先の住居も火災に会っている可能性が高い。床面は１面しか確認できなかった。炉址は１個検出できた。中央ピットの南縁には径２～３cmの小さな河原石を敷きつめている。Ｐ―６の南東には一辺20cm程の作業台と考えられる花崗岩角礫が置かれていた。出土土器は壺３・甕１・広口壺１・高杯２・小型器台１・小型坩３・小型鉢２等が見える。このうち**889**と**891**と**892**は復元してほぼ完形になった。**887**は完形であったものが底部だけ後世に削平されたものと考えられる。石器は砥石が３点出土している。**114**は長さ23cm・幅７cm・厚さ４cm・重さ1.1kgを計り，５面使用し，石材は砂岩である。**115**は長さ19cm・幅７cm・厚さ３cm・重さ610ｇを計り，４面使用し，石材は砂岩である。**116**は長さ12cm・幅４cm・厚さ３cm・重さ170ｇを計り，３面使用し，石材は凝灰岩である。この住居址は土器から百・古・Ｉの時期に比定できる。（浅倉）

竪穴式住居―13（第228・229図，図版88）

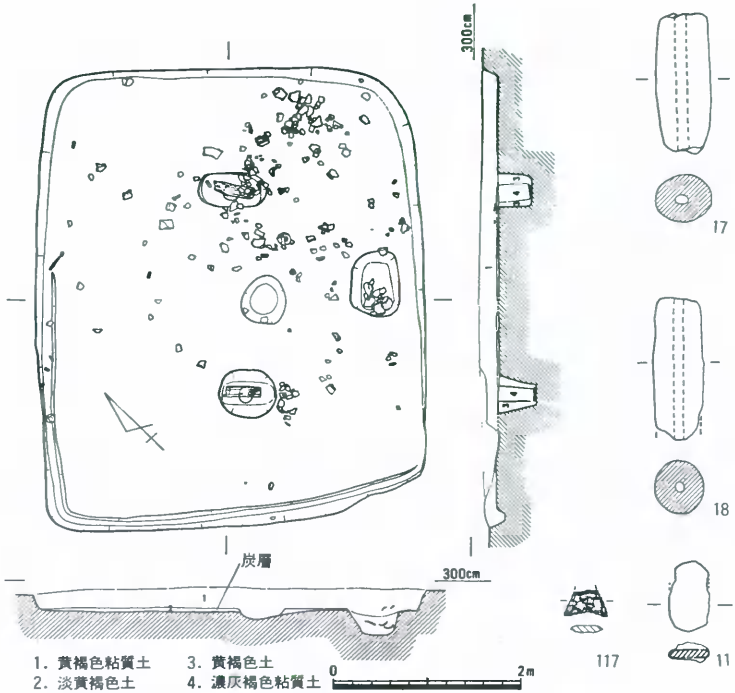
208Ｋ区南西隅に検出した完存する竪穴式住居である。平面形は，やや台形気味の方形を呈し，長軸方向で最大490cm，最小440cm，短軸方向410cmを測る。掘り方は，南端を一部溝―117に上

面を切込まれているが，最大20cmの壁高を測る。壁体溝は，南半1/2程に認められた以外には，充分に認められなかった。柱穴は，長軸の中軸線に220cmの間隔を置き２本検出した。柱穴掘り方は，いずれも不明瞭であったが，柱痕は一部グライ化し明瞭に残り，径15cm程の棟持柱が想定される。柱穴は，床面から深さ40cmを測り，底面には，いずれにも長さ40～50cm，厚さ２～３cmの礎板が完存しており，柱の安定を保っていた。

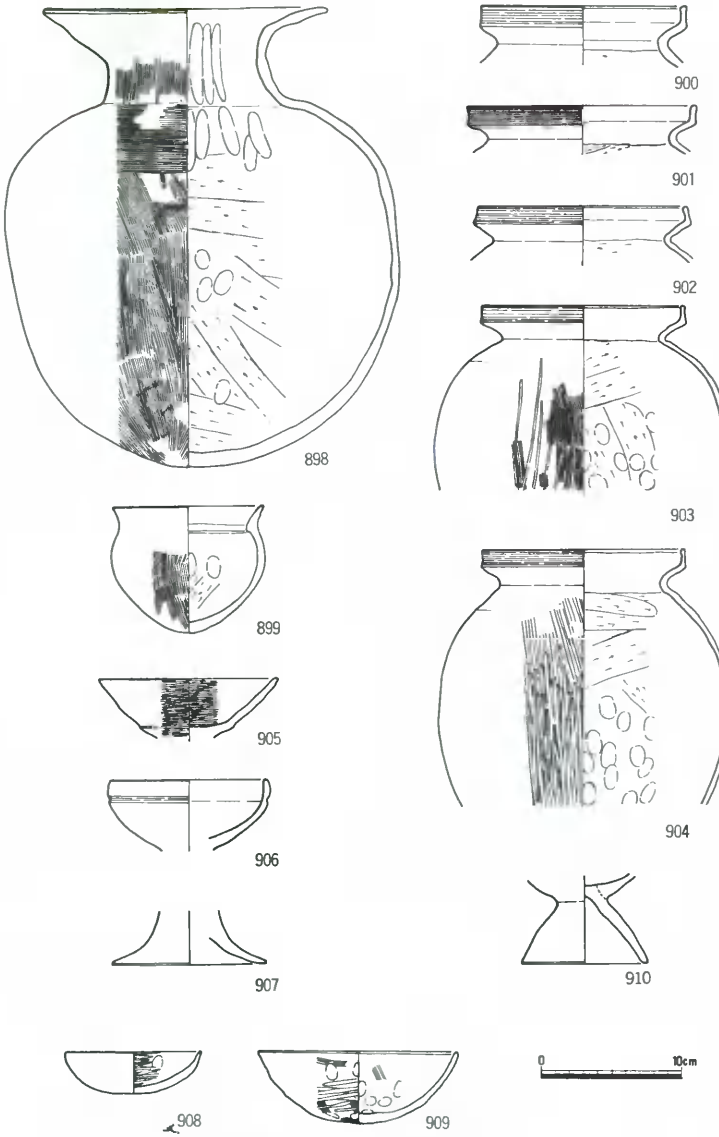
中央ピットは，住居中央やや東よりに検出した。径45×55cm，深さ10cm程でスリ鉢状の断面を呈し，ピットの北側斜面には木炭が広がっていた。また掘り方の北東辺中央付近に，長辺70×短辺50cmの隅丸長方形を呈し，断面逆台形で深さ30cmを測る土壙を検出している。

出土遺物は掘り方内の北西半にかなりの広がりを持つ遺物の出土が認められた。

時期は百・古・Ⅰと考えられる。　　（山磨）



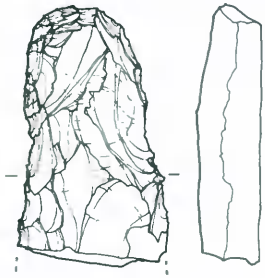
第228図　竪穴式住居―13（1/60）・出土遺物（１）（1/2）



第229図　竪穴式住居―13出土遺物（２）

竪穴式住居―14（第230図，図版89―１）

208Ｌの北部において検出された遺構である。検出平面は，長辺400㎝，短辺360㎝のやや歪んだ，隅丸長方形を呈し，床面は海抜277㎝程である。壁高はわずかに４～５㎝を残すのみで，壁体溝はない。中央部に不整形の窪みが認められ，そのす



118

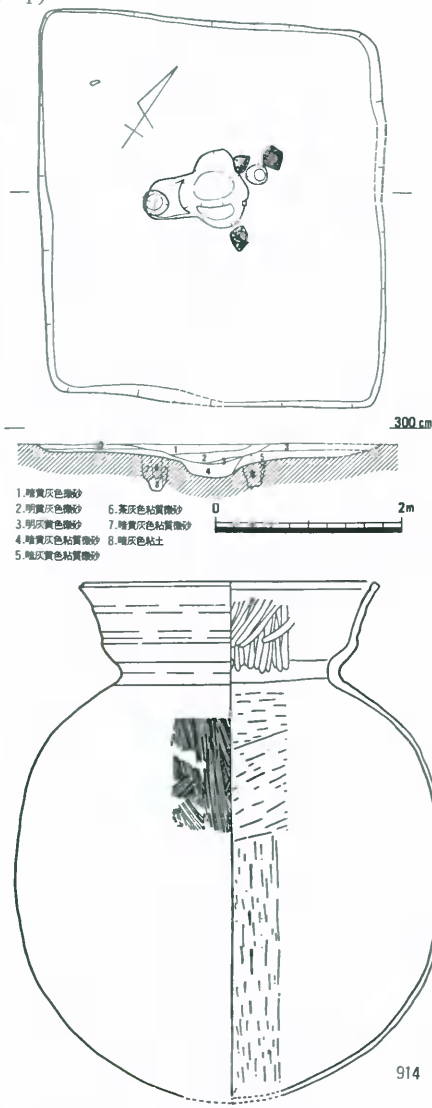
(1/2)

911

912

913

0　10cm

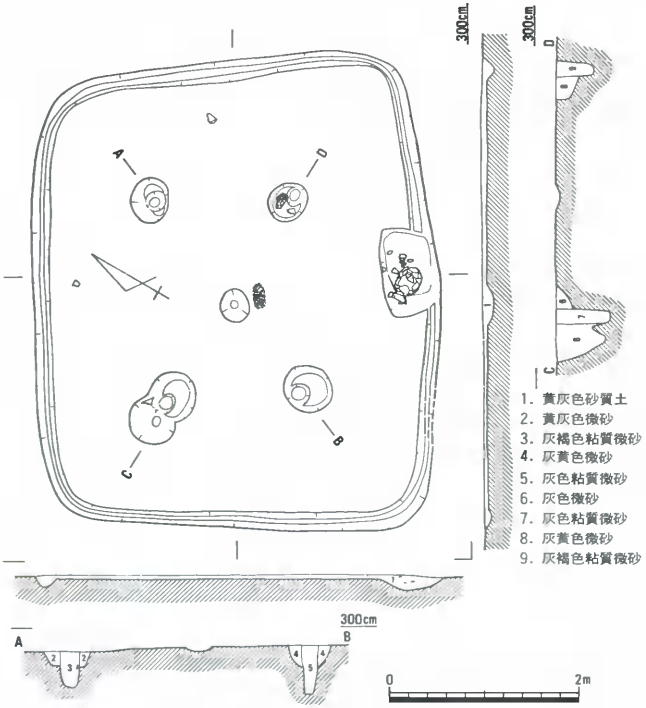


第230図　竪穴式住居―14（1/60）・竪穴式住居―14・15出土遺物

ぐそばに深さ30〜35cm程の柱穴状のピットがあるが，遺構のバランス等からみて，柱穴とするには少し不自然である。中央部の不整形の窪みの周辺には焼土塊および炭化物が認められた。土器はわずかに細片が認められたが，図示できる程のものはない。118は東部の床面で出土したサヌカイト製の石鏃である。時期は出土遺物等から百・古・Ⅱと考えられる。

竪穴式住居—15（第230・231図，図版89—2）

209Lの中央やや北西寄りで，竪穴式住居—14に隣接して検出された遺構である。検出平面は長辺が465cmと505cmで短辺が415cmの隅丸台形を呈している。床面は海抜282cm程で平坦である。壁高はわずかに2〜3cmを残すのみで，壁に沿って幅18cm，床面からの深さ8〜10cm程の溝（壁体溝）が巡っている。柱穴は4本が確認され，1本は建て直しが行なわれている。柱穴はそれぞれ径40〜50cmの円形或いは楕円形を呈し，床面からの深さは，40〜55cmを測る。いずれも柱痕を残しており芯々距離は短辺側は140cm・長辺側が210cmをそれぞれ測る。中央には35

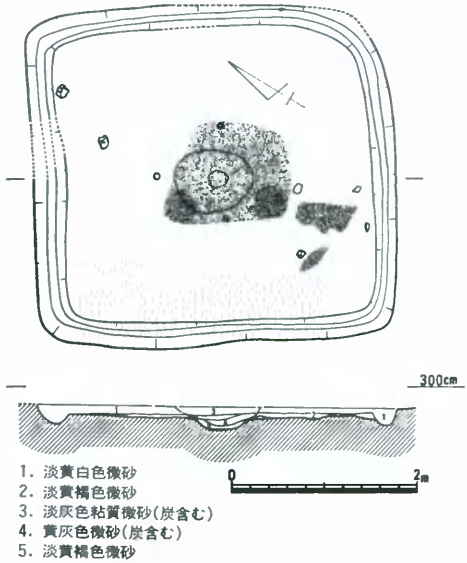


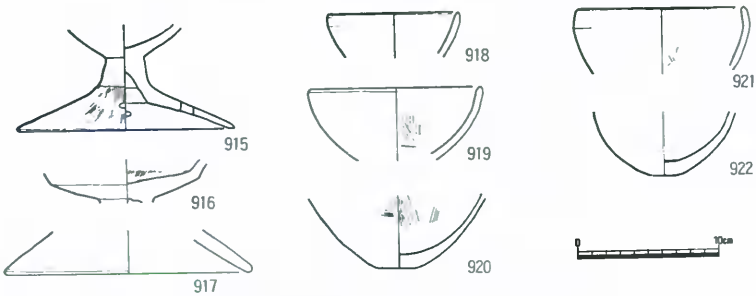
第231図　竪穴式住居—15（1/60）

×30cm程の楕円形を呈する。深さ５cm程の浅い窪みがあるが焼土は南隅で確認されている。南の長辺の中央部壁際に90×60cmの隅丸長方形を呈し，深さ15cm程の入口の施設の想定される遺構である。この遺構の埋土中から甕等の土器片912～914が出土している。914は１次の確認調査（註３）の時に出土していた土器である。時期は出土遺物等から百・古・Ⅱと考えられる。

竪穴式住居－16（第232図，図版90－１・２）

208Ｌの南東部，調査区の北端において，一部拡張して検出された竪穴式住居である。検出平面は，長辺380cm，短辺350cmのほぼ方形に近い隅丸長方形を呈している。床面は海抜270cm程で平坦である。主軸は北西－南東を向いている。壁高は７～10cmを残し，壁面に沿って20～30cm，床面からの深さ10cm程の溝（壁体溝）が巡る。柱穴はないが，中央部に，長径80cm・短径65cmの不整楕円形を呈し，床面からの深さ25cm程の窪み（中央ピット）が確認されている。また中央ピットに，中央部および南部床面の広い範囲に炭・炭化材の広がりがみられ，火災を受けた可能性がある。出土遺物





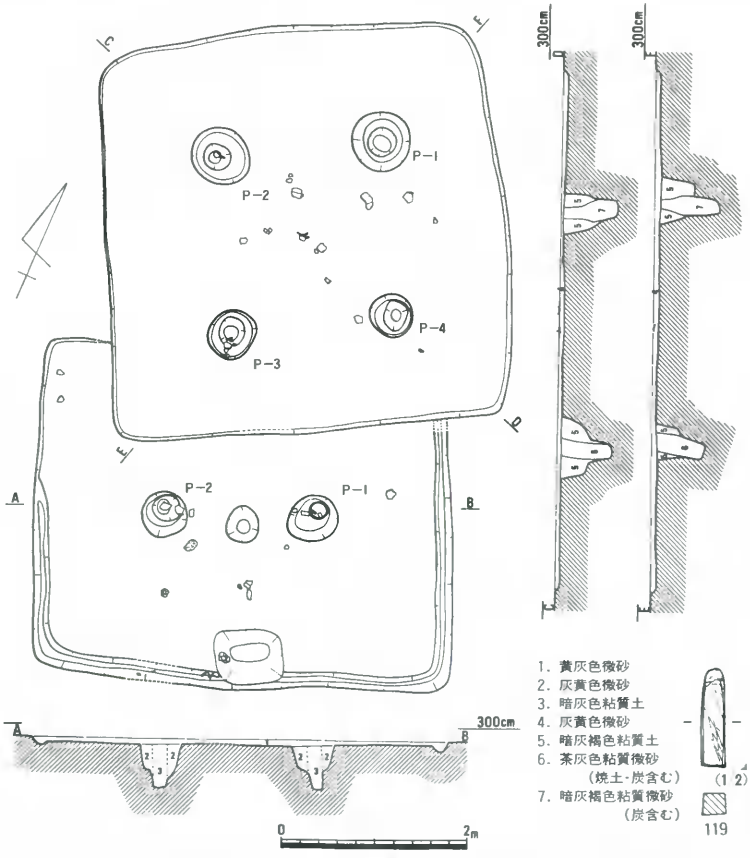
第232図　竪穴式住居－16（1/60）・出土遺物

は，高杯等の土器片915～922がみられるが，いずれも細片である。

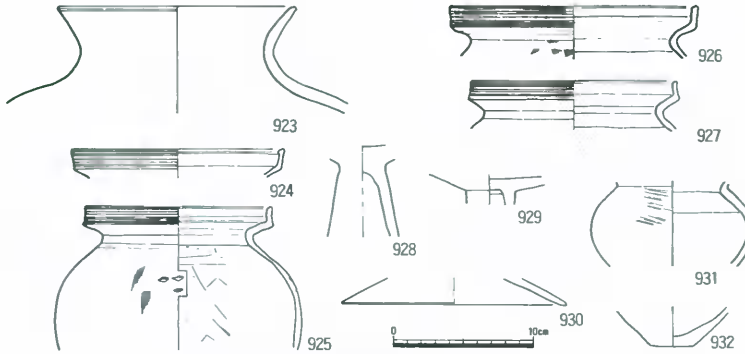
時期は，出土遺物等から百・古・Ⅰと考えられる。

竪穴式住居―17（第233・234図，図版91―1）

208Lから209Lにかけて検出された遺構で，南側は，竪穴式住居―18を切り込んでいる。検出平面は，一辺420cm程の隅丸方形を呈しており，床面は海抜282cm程で平坦である。主軸は南―北から少し西に振っている。残存状態は悪く，壁高は3cm程を残すのみである。壁体溝はなく，柱穴4本が確認された。柱穴は直径45～60cmの円形或いは不整円形を呈し，いずれも床面



第233図　竪穴式住居―17（上）・18（下）（1/60）・竪穴式住居―18出土遺物



第234図　竪穴式住居―17出土遺物

から50～60cmの深さの柱痕が確認された。柱痕の芯々距離はＰ－１とＰ－２が175cm，Ｐ－２とＰ－３が185cm，Ｐ－３とＰ－４，Ｐ－４とＰ－１が180cmである。

出土遺物は，床面および柱穴の埋土中に土器が散在しているもののいずれも細片で，図示できたものは，壺・甕・高杯等10点（**923～932**）のみである。

時期は，出土遺物等から，百・古・Ⅱと考えられる。

竪穴式住居―18（第233図，図版91）

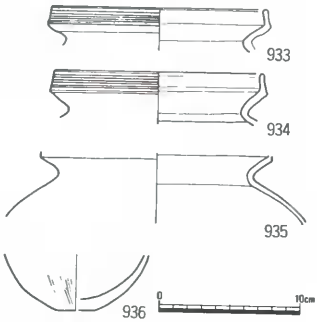
209Ｌの北端中央部において検出された竪穴式住居である。北東部が竪穴式住居―17により削平を受けているが，長辺450cm，短辺350cm程の隅丸長方形の平面を呈すると思われる。主軸は東北東―西南西にもち，東辺から南辺さらに西辺の半はまで壁面に沿って溝が確認された。溝は，幅18cm程で床面からの深さは３～４cmである。また壁高は５～６cm程が確認された。床面は海抜280cmで平坦である。柱穴は長軸方向に２本が確認された。直径50cm程の円形或いは不整円形を呈し，床面からの深さは，いずれも45cm程を測る。西側の柱穴の底には柱根片がわずかに残存していたが，東側の柱穴は柱痕を残すのみである。柱痕の芯々距離は165cmを測り，柱痕から壁面までは，それぞれ140cmを測る。長辺の中央部壁際に，70×60cmの隅丸長方形を呈する浅い窪みが確認された。入口の施設の想定される遺構である。また中央部には直径35cm程の不整円形を呈する浅い窪みが確認されている。

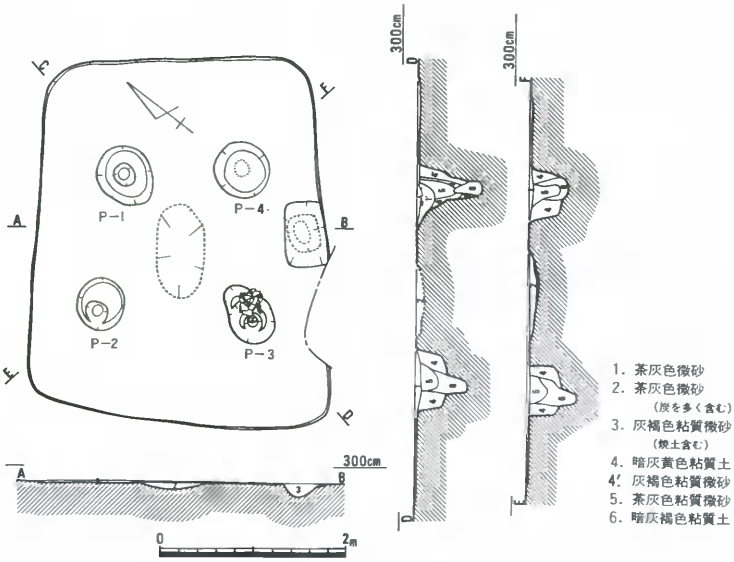
出土遺物は，床面・柱穴・壁体溝中に土器が散在しているもののいずれも細片であり，図示できる程のものはなかった。なお，南側の壁体溝の中央よりやや西寄りから，携行用の砥石と思われる石製品**119**が出土している。

時期は，出土遺物等から百・古・Ⅰと考えられる。

竪穴式住居－19（第235図）

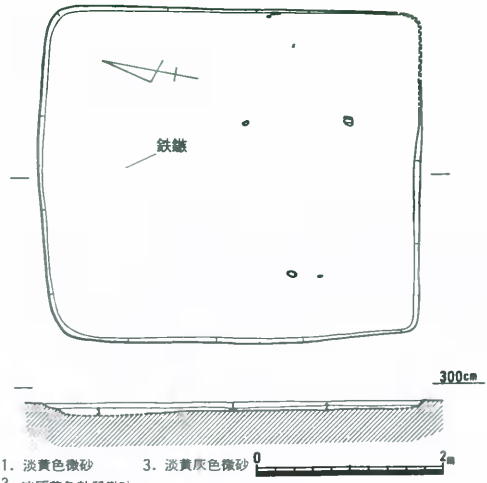
209Lの中央において検出された竪穴式住居で，南部の一部が，竪穴式住居—20により削平されている。検出平面は，短辺280～320cm・長辺350～390cmの歪んだ隅丸四辺形を呈し，主軸は東北東—西南西にもつものである。残存状態は悪く壁高はわずかに1～2cmを残すのみである。床面は，海抜282cm程で平坦である。柱穴は4本が確認されている。いずれも径50～60cmの規模で円形もしくは楕円形を呈し，深さは，一番浅いP－4で40cm，最も深いP－3では70cmを測る。いずれの柱穴にも柱痕は残存していなかったが，柱痕跡が認められた。柱痕の芯々距離はP－1とP－2が145cm，P－2とP－3が165cm，P－3とP－4が160cm，P—4とP－1が125cmを測る。住居址の中央部には長径50cm，短径25cmの楕円形部分が深いところで10cm程の窪みをもち，底に2～3cm炭層がみら

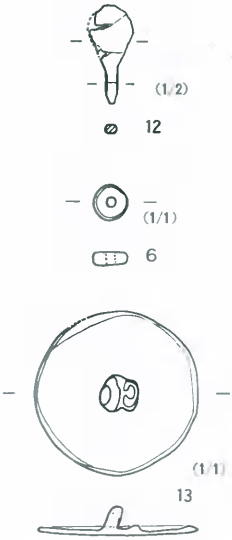


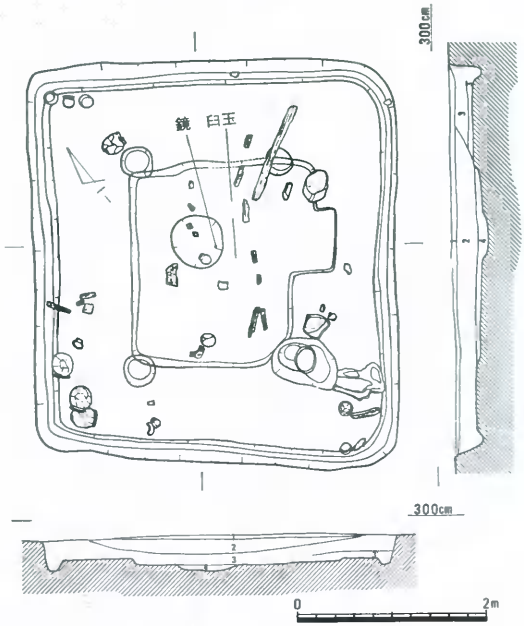


第235図　竪穴式住居—19（1/60）・出土遺物

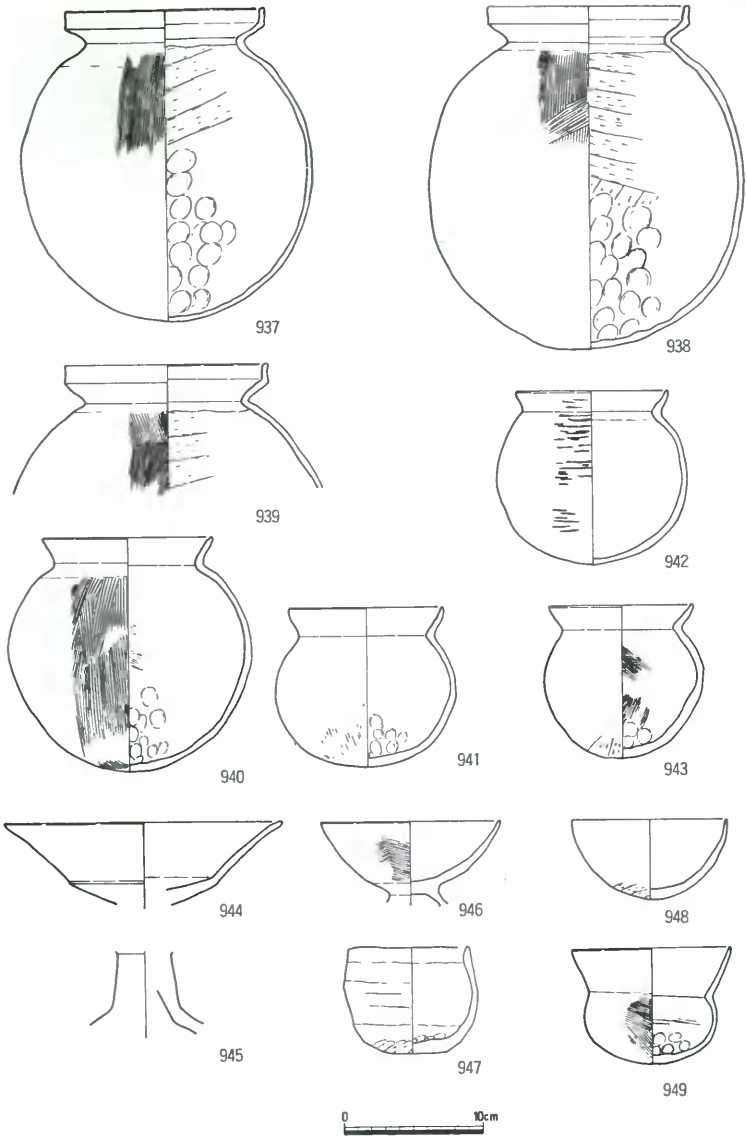
れる。また住居址の長辺の一方である南東辺の中央部壁際に70×45cm程の長方形の範囲に，深いところで15cm程の窪みがみられる。住居址の入口施設が想定される遺構である。出土遺物は，床面，覆土ともほとんど認められず，柱穴のP－3の上層でわずかに甕等の土器片933～936が認められている。時期は出土遺物等から百・古・Ⅱと考えられる。







第236図　竪穴式住居―20・21（1/60）・出土遺物（1）



第237図　竪穴式住居―21出土遺物（2）

竪穴式住居—20（第236図，図版90—3）

209Lのほぼ中央部において検出された竪穴式住居である。北東隅の一角が，竪穴式住居—19と交錯してこれを切っている。遺構の残存状況は，きわめて悪く，検出面で長辺405cm・短辺350cmの隅丸長方形を呈しているが，壁高はわずかに8～12cmを残すのみである。ほぼ南—北方向に主軸をもっている。床面は，海抜275cm前後のレベルで平坦面をなしている。柱穴・中央ピット・壁体溝等の施設は全く認められず遺物がわずかに散在しているのみである。

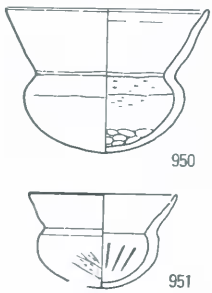
出土遺物としては，床面および覆土中に，土器およびサヌカイトの剝片，鉄器がある。土器はいずれも細片で図示できる程のものはない。鉄器12は，中央北部の海抜281cmの覆土（淡黄灰色微砂）から出土したもので，長さ3.5cm・最大幅1.5cm・最大厚さ3cmを測る鉄鏃である。

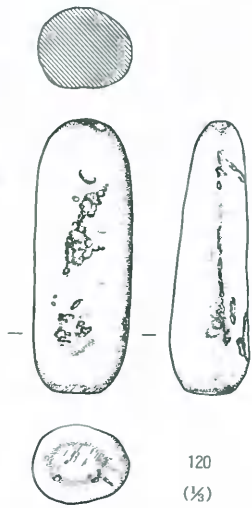
時期は，出土遺物等から古墳時代前期と思われる。（内藤）

竪穴式住居—21（第236～238図，図版92・93・126）

当住居は河川改修の工事工程のため南半1/3程を1980年1月に，北半2/3を1980年11月と2回にわたって調査を行った。北半部を開始時点で，既に南半部は掘削され消滅していたため，遺構の検討や図面の接合等に一部支障をきたしたことは否めない。

平面プランは東西400～440cm，南北380～390cmを測る。やや台形の方形プランである。掘り方内周囲には，幅90cm前後，高さ12～13cmのベッド状の高まりが巡っている。このベッド状遺構は，西辺中央付近でやや不明瞭となり中央に向って除々に下降気味である。しかし，基本的には全周していたものと想定される。住居中央部の掘り方は，東西170cm，南北220cm，ベッド部分とのレベル差12～13cmを測り，中央やや北西よりに径55cm，深さ7～8cmの中央ピットを設けている。柱穴は，ベッド状遺構の各コーナーに設けられ径





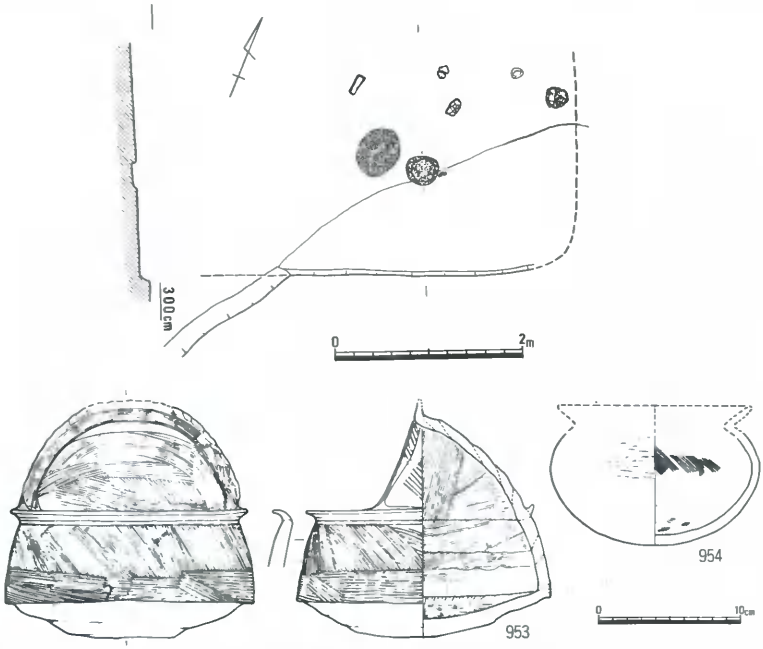
第238図　竪穴式住居—21出土遺物（3）

30cm前後，深さ30～50cmを測る。柱間は，長軸方向がいずれも220cm，短軸方向が北側で155cm，南側が165cmを測る。

当該住居は火災を受けて廃棄されており，床面上には炭化した家屋構造材と伴に，多くの共伴遺物が一括出土している。炭化材は住居中央付近で長軸に平行する方向に多く，両側では長軸に直交する方向に出土が認められることから，長軸方向の棟が推察される。

出土遺物は，北西コーナー及び南西コーナーにそれぞれまとまったかたちで完存の土器が認められた。南東コーナー床面からは，両端に使用痕のある敲石が出土している。また浅い鉢状をなす中央ピット内から仿製小型素文鏡と，近くから滑石製臼玉1点が出土している。小形銅鏡は，中央ピットの肩口からやや下った位置に鏡背を上面に何らの施設も伴なわず単独で出土している。鈕付近にはわずかに丹の痕跡が認められた。

また，中央ピット南西付近から出土した炭化物には，編目状の痕が認められたが取上げ不可能であった。当住居は，出土遺物から火災にあい廃棄された百・古・Ⅱの時期の良好な一括資料である。　（山磨）



第239図　竪穴式住居―22（1/60）・出土遺物

竪穴式住居—22（第239図，図版94—2）

この遺構は，「島状高まり」遺構—27を一部切断して存在する。調査の過程では，黄灰色洪水砂層の上層部（暗黄褐色砂質土）に包含される土器溜りの一部とも考えられた。しかし，床面と思われる平坦面に出土遺物の底面がほぼそろうことや，同面に焼土が存在すること，「島状高まり」遺構にかかる部分に住居址状の落込みの一部が検出されたことなどから住居址と断定した。焼土面は2箇所に検出されたが，どちらも下部への熱影響は少ない。ただ，片方の焼土下は土壙状に浅い凹みとなっている。柱穴は検出し得なかった。床面には，数個体の土器片とともに完形の手焙り形土器（953）や完形に近い小型鉢形土器（954）などが出土している。

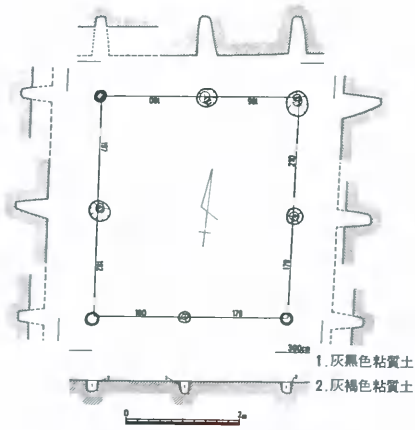
手焙り形土器は，底部，胴部，頭部の3つをつなぎ合わせて製作したと見られ，特に後二者には輪積みの痕跡が明瞭に観察された。底部外面を除きほぼ全体を荒いハケ目で調整し，口縁端部はL字状につまみ出し，口縁部から続いて胴部を繞らせる凸帯にはナデが加えられている。954は口縁部を欠くため，器形的には坩形土器か鉢形土器かの区別はつかないが，部分的な破片などから図のように推定した。なお，胎土には精製粘土が使用されている。（柳瀬）

（2）建　　物

建　物—10（第240図）

209Mと210Mの境界に位置している。2×2間の南北棟の掘立柱建物である。束柱は検出されなかった。平面形はかなり不整形である。北西角は92°，北東角87°，南東角92°30′，南西角88°30′とすべて直角にはならず，また各辺の中央の柱穴も中心からずれている。しかし，百間川遺跡群で検出された同時期の建物はむしろ不整形なものが一般的であり，当建物もこの例にもれない。柱穴は直径38～45cm，深さ55～70cmを測る。径の小さいものは検出面が相違したためである。各柱穴で柱痕跡を検出しており，その直径は10～17cmを測る。床面積は13.3㎡で，百間川遺跡群内では中形の規模をもつ。東辺の方向はMN—4°—Wである。古墳時代前期であろう。

（岡本）



第240図　建物—10（1/100）

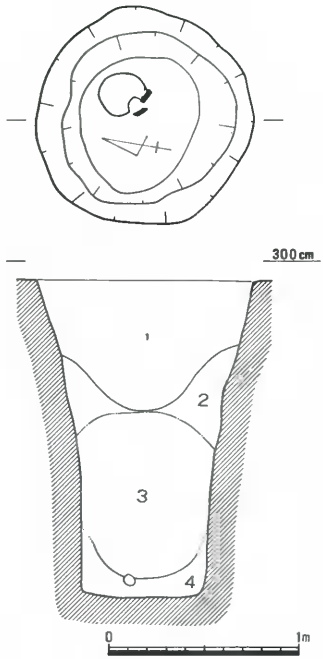
（3）井　　戸

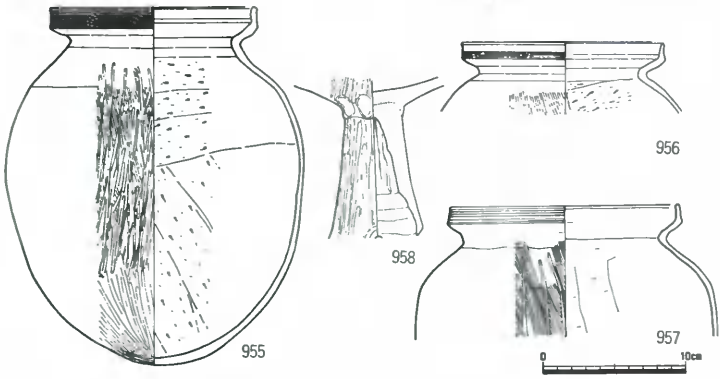
井　戸—14（第241図，図版95—1・2）

207Gのほぼ中央部溝—108の西端において検出された井戸である。検出面では直径115㎝のやや歪んだ円形を呈している。検出面から深さ170㎝を測り，井戸の底は海抜120㎝である。断面形は，検出面より底に向って次第にすぼまっている。埋積土は遺構検出中に崩壊した為2層以下が判然としない。1層の淡茶灰色土は，レンズ状の堆積をなすもので二次堆積の可能性がある。最下層の暗灰色粘質微砂層は，青灰色粘土をブロック状に含んでおり，植物遺体が多くみられる。

土器は底近くから，「く」の字状に外反した口縁部から上方に立ち上がった口縁端部の外面に7条の櫛描平行沈線を施し，少し長目の卵形の体部で丸底の甕955がほぼ完形に近い状況で出土している他に，甕の口縁片956・957，高杯の脚部片958等の土器片が出土している。

時期は出土遺物等から百・古・Ⅰ～Ⅱと考えられる。





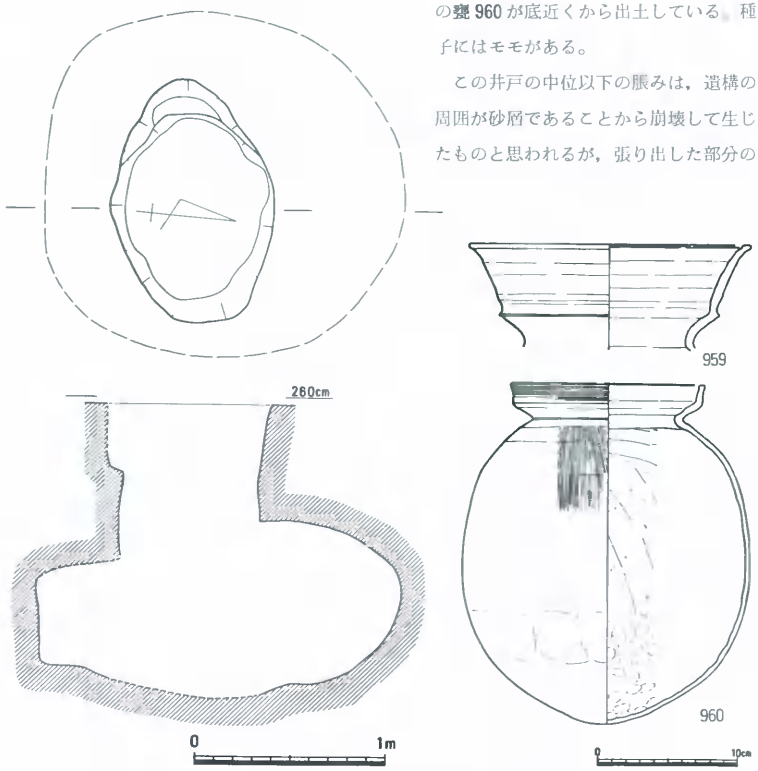
第241図　井戸—14（1/30）・出土遺物

井　戸—15（第242図，図版95—3）

207Hの西部，調査区の北端近くで，井戸—16のすぐ西側において検出された井戸である。検出面では，長径130cm，短径85cmの楕円形状を呈し，長軸はほぼ東—西方向にもっている。深さは検出面から約160cmが確認され，底は海抜100cm前後と思われる。この井戸は北半は微高地に掘り込まれているものの，南半は弥生時代後期の水田およびその水田を覆った洪水砂層を掘り込んでいる為，遺構検出中に崩壊が著しく明確に検出することが出来なかった。

断面は，検出面から60cm程はほぼ真直ぐに下がるもののそれから著しく横に脹らみ，袋状の形状を呈するものである。埋積土は検出途中で遺構が崩壊した為不明である。出土遺物は中位の最も外に張り出した付近等から土器片および石器・種子・木片等が出土している。また完形の甕960が底近くから出土している。種子にはモモがある。

この井戸の中位以下の脹みは，遺構の周囲が砂層であることから崩壊して生じたものと思われるが，張り出した部分の



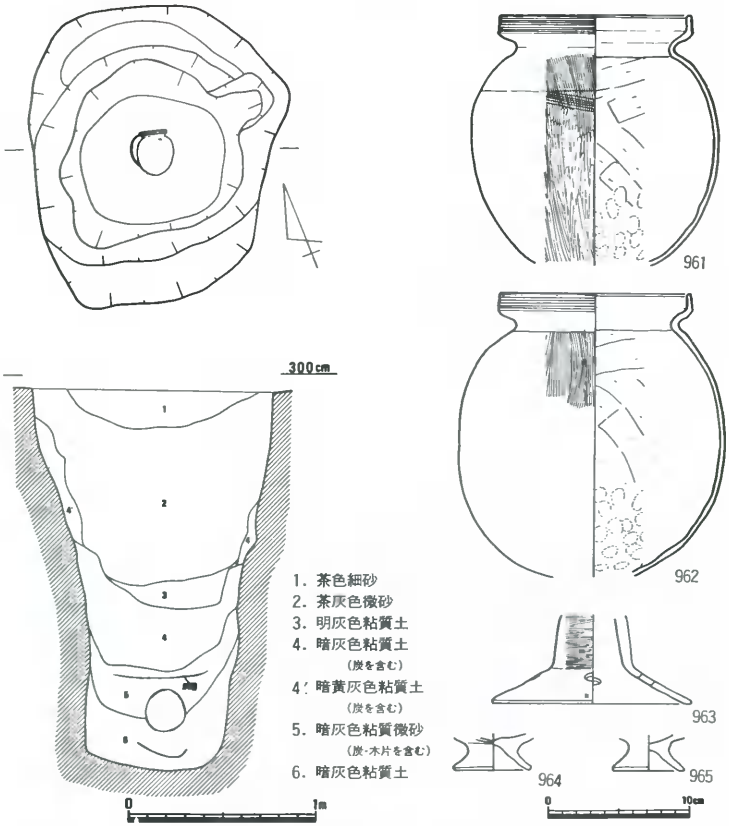
第242図　井戸—15（1/30）・出土遺物

底が桃等の種子が多数出土しており，沖積地の遺構とはいえ貯蔵穴風の用途をも含む可能性がある。

時期は出土遺物等から百・古・Ⅱと考えられる。

井　戸—16（第243図，図版96）

207Hの調査区の北端で，井戸—15の東隣に検出された井戸で，規模は160×130cmのやや南—北に長い不整楕円形を呈する。深さは検出面から200cmを測り，底は海抜90cmである。埋土は大きく六層に分かれる。5層は暗灰色粘質微砂で少しの炭化物および木断片を含み，上部に



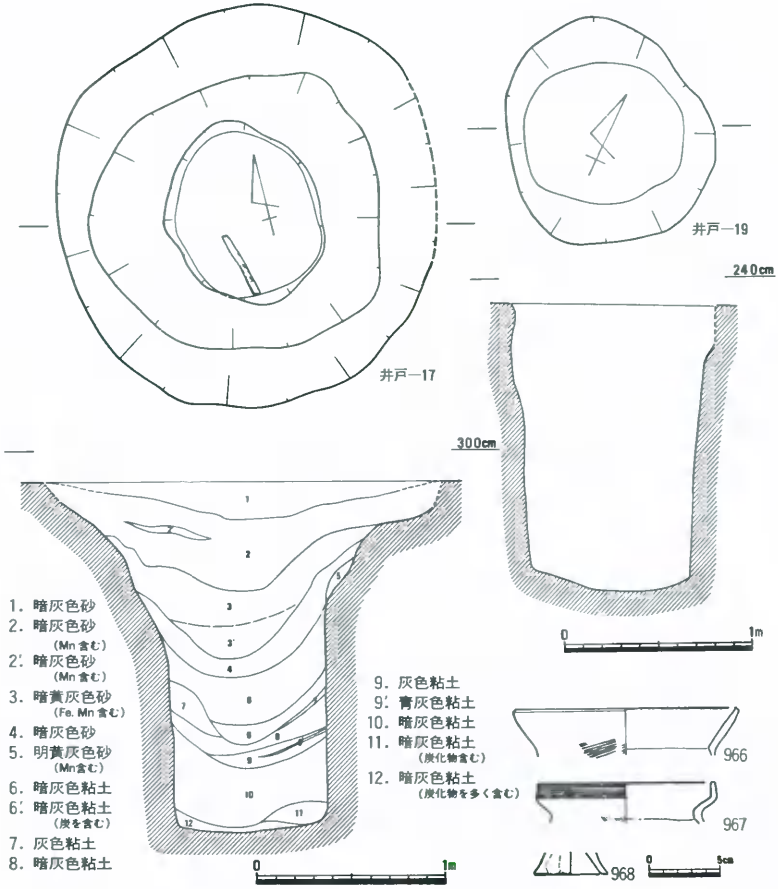
第243図　井戸—16（1/30）・出土遺物

は灰層がみられる。5層と6層の間から完形の甕962が出土している。この他に出土遺物としては，もう一点ほぼ完形に復元された甕961の他は，高杯や製塩土器の台部片および種子がある。

時期は出土遺物等から百・古・Ⅱと考えられる。

井　戸—17（第244図）

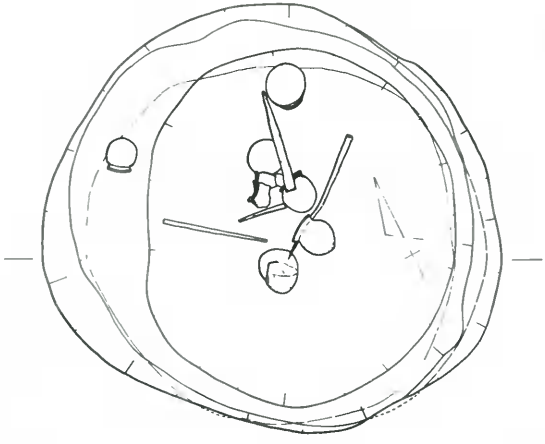
207Hのほぼ中央において検出された井戸である。この井戸は，古墳時代前期の土器溜り—

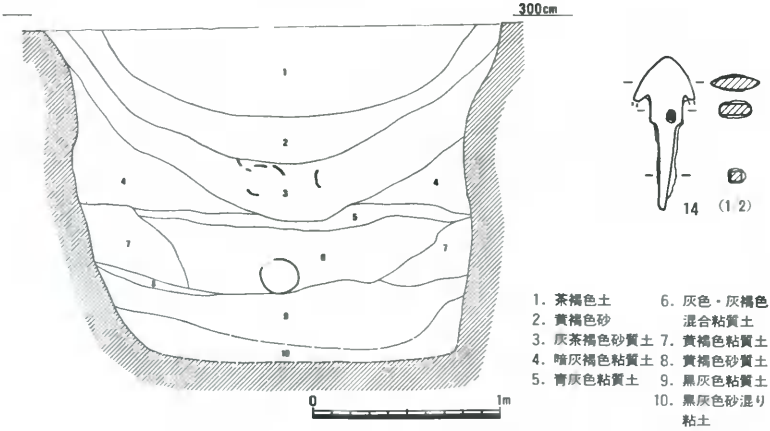


第244図　井戸—17・19（1/30）・井戸—17出土遺物

5の北端部を切り込んで掘られているもので，検出規模は，長径210cm，短径190cmの円形に近い楕円形を呈するもので，南―北方向に少し長い。深さは180cmを測る。断面は，海抜200cm前後の中位までは次第にすぼまっていき，それより下位は，ほぼ真直ぐに下がる。中位以下は100×80cm程の楕円形を呈しており，上位の遺構周囲が，弥生時代後期の水田を覆っている洪水砂であることから，本来はこの程度の規模であったものの上位部が崩壊して，検出規模にまで拡大したものと思われる。底は，海抜100cmである。埋積土は，十二層に分かれ，中位の4層まではレンズ状に近い堆積をしている。1層は明らかに二次堆積土である。3′層には炭が含まれている。

出土遺物としては，土器の他に，長さ35cm・太さ3cm程の棒状の木片，サヌカイトの剝片がみられる。土器はいずれも細片であり，図示できたものは3点のみである。





第245図　井戸―18（1/30）・上層出土遺物（1）

966は外面を叩き目で調整した甕の口縁部片である。**967**は上方に立ち上がった口縁部外面に櫛描き平行沈線の施されている甕の口縁部片である。**968**は製塩土器の台部片である。

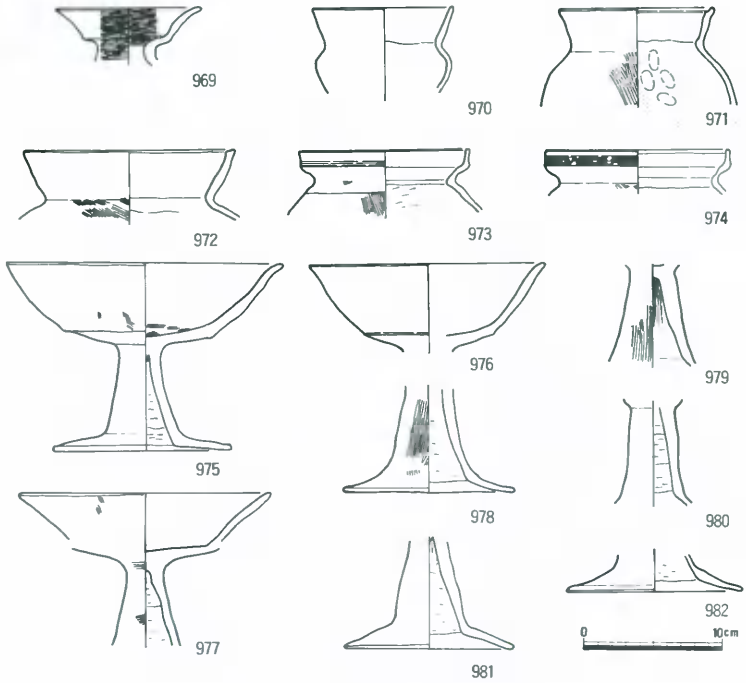
時期は，出土遺物等から百・古・Ⅰと考えられる。（内藤）

井　戸—18（第245～248図，図版97,128）

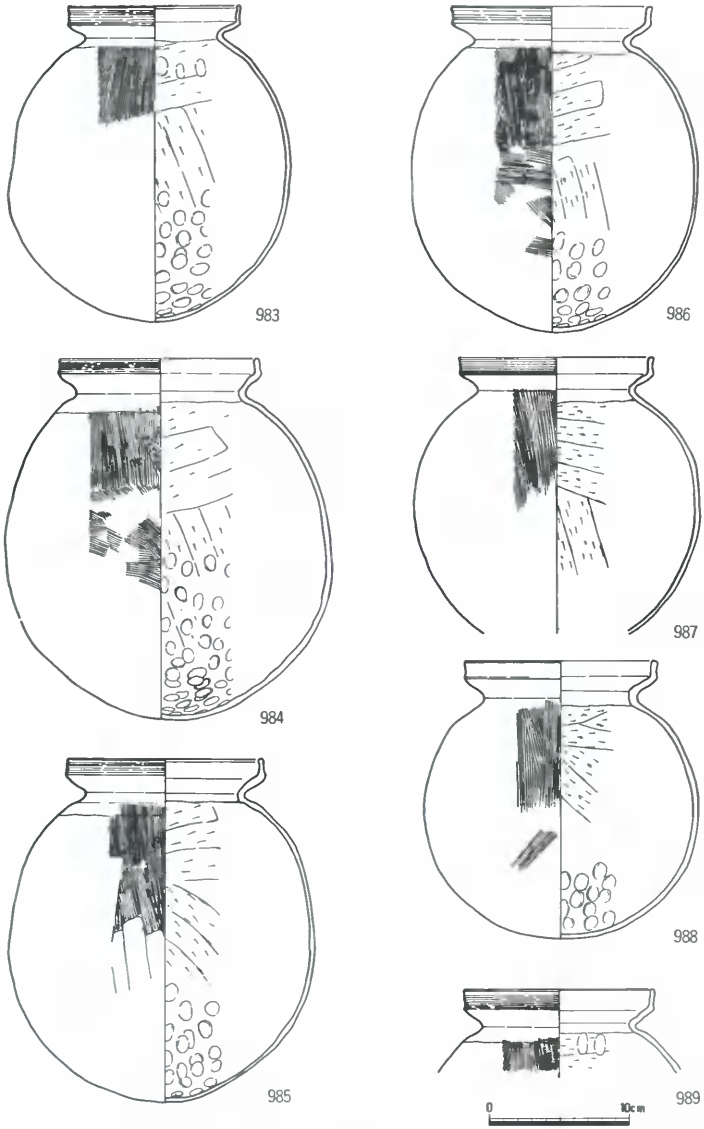
207Ⅰ北端を一部拡張して検出した，やや大形の素掘りの井戸である。掘り方平面形はほぼ円形をなし，最大径240cm，深さ180cmを測る。断面は垂直に近く，一部では袋状をなす部分も認められた。底径は190cmのほぼ円形を呈す。井戸内堆積土は，上部3層までは凸レンズ状の堆積を示し，4層以下はやや水平面の堆積状態を示している。また，出土遺物も3層に認められた灰茶褐色砂質土層以上と以下の土器とに大きく区分できる。上層出土遺物中には**973・974**の如く，古い時期の混入と考えられるものも認められるが，おおむね百・古・Ⅲと考えられる。

下層出土遺物は百・古・Ⅱの良好な一括資料とみられる。

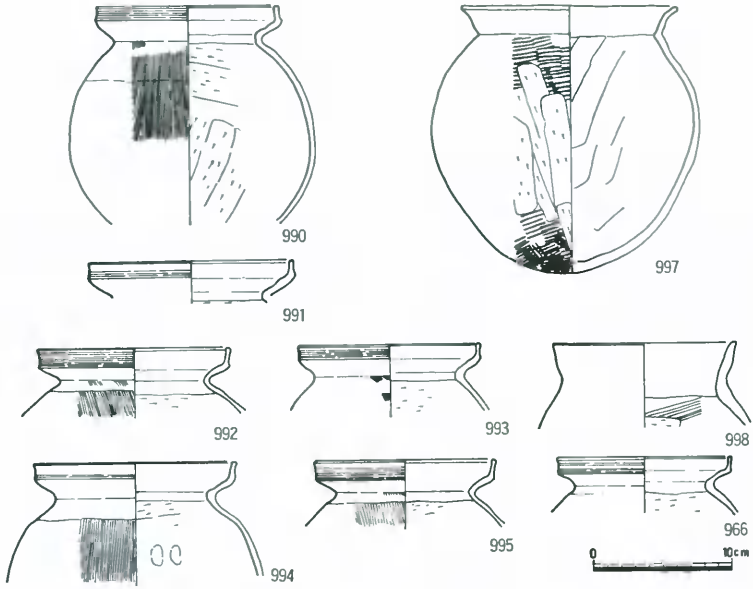
（山磨）



第246図　井戸—18上層出土遺物（2）



第247図　井戸―18下層出土遺物（１）



第248図　井戸—18下層出土遺物（2）

井　戸—19（第244図，図版98—2）

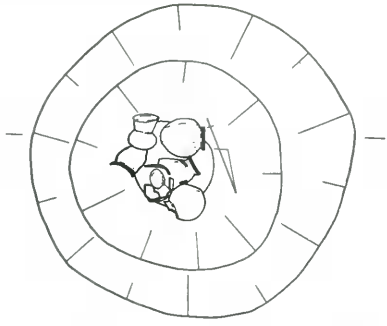
207Ｉの南東部において検出された井戸である。北端の上部を後世の溝—127に削平されている為，やや歪な形状を呈しているが，径60cm程の円形を呈するものと思われる。深さは75cmを測るのみで，底のレベルは海抜155cmである。出土遺物はない。

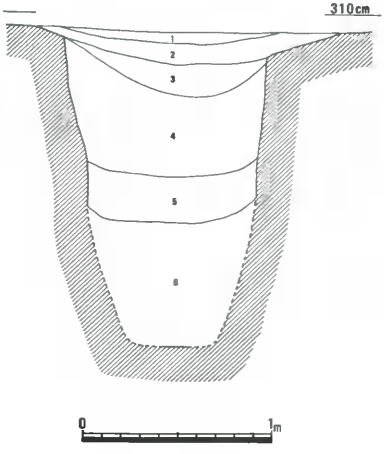
時期は，検出状況等から古墳時代前期と思われる。（内藤）

井　戸—20（第249図）

この井戸は，調査区の南端のＩラインとＪラインの間に位置する。弥生時代後期の水田を覆う洪水層である砂層上面で検出された。

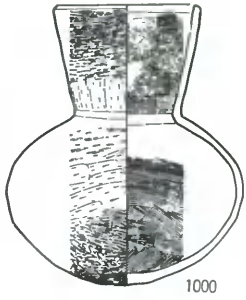
規模は，直径約170cmを測り，平面形は円形を呈する。深さは，約165cmを測り，井戸底部の海抜高は135cmである。掘り方は，上部約20cm程をやや広く擂鉢状に掘り，さらに下部を角度をかえて直線的に底部まで掘り下げている。井戸底部の径は約40cmである。井戸内の堆積状況は，第１～６がレンズ状に堆積している。また，第１～５層までは遺物の出土は少なかった。最下層である第６層では，図示したほとんどの土器が出土した。1000～1002などの完形の土器が含まれていた。特に1002は，外面体部に叩きを施すもので，胎土も当地域周辺のものとは異



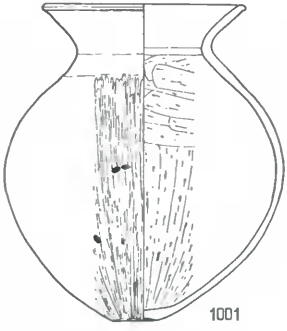


1. 黄灰色粘土　4. 淡茶色砂泥
2. 茶褐色砂土　5. 淡青灰色砂質土
3. 淡茶褐色砂泥 6. 淡灰色粘土

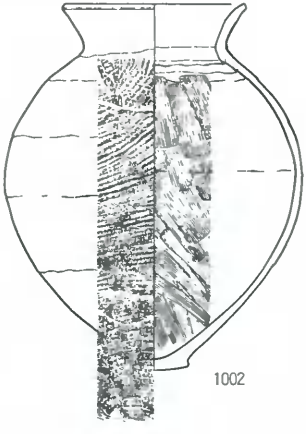
999



1000



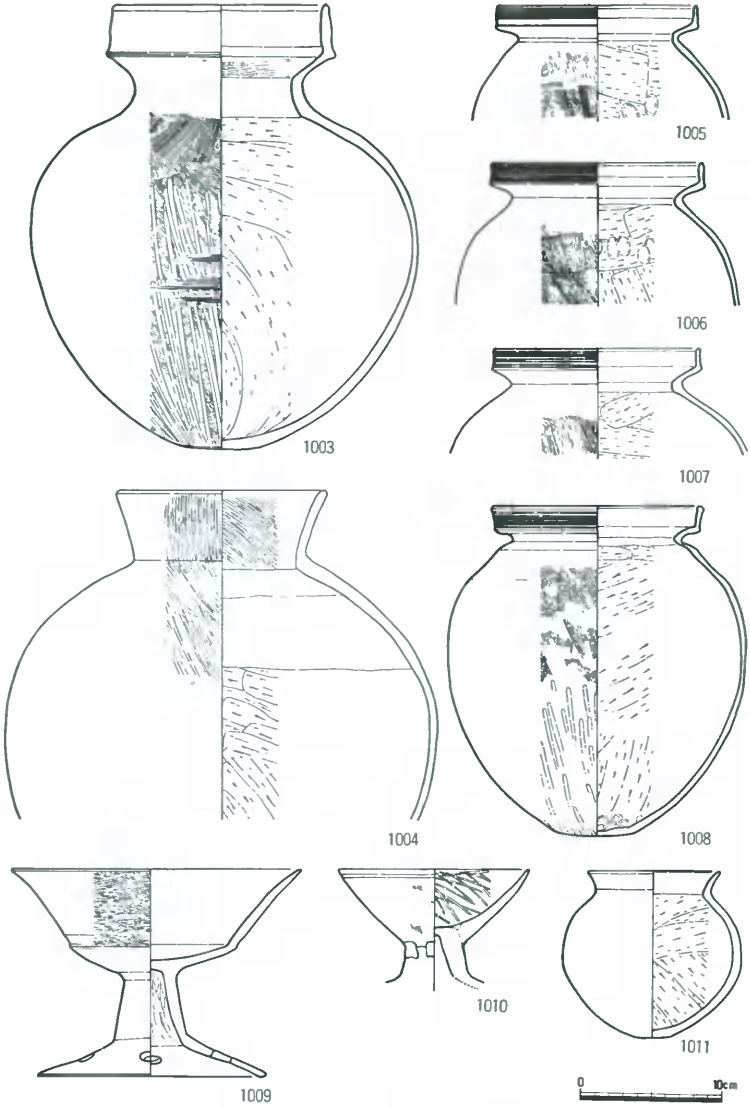
1001



1002

0　10cm

第249図　井戸—20（1/30）・出土遺物（1）



第250図　井戸―20出土遺物（２）

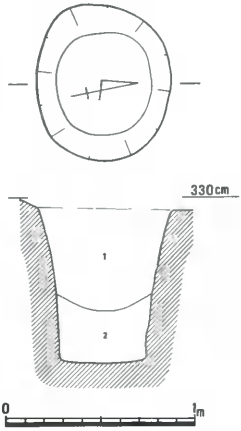
質のものである。これは，器形，調整，胎土等からみて，畿内の大和川流域よりもたらされたものであろう。これらの土器は，百・古・Ⅰ期と考えられる。　（中野）

井　戸—21（第251図）

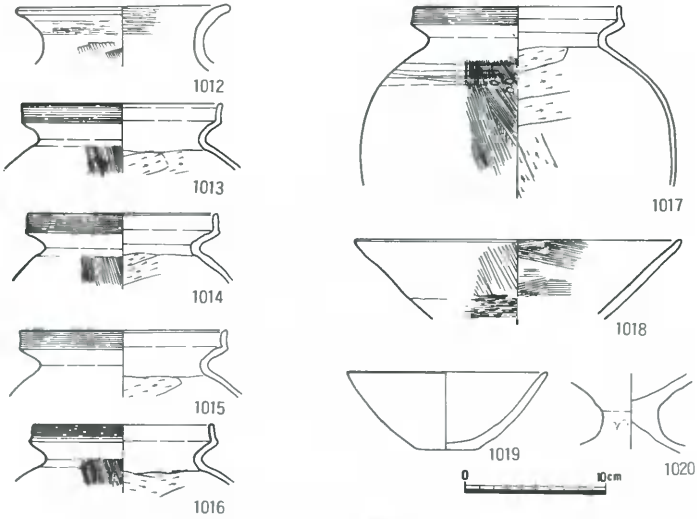
208Ｊ，溝—48の北西端に検出した井戸状の遺構である。溝—48の北端底面には，土器溜り状の遺物の出土が認められ，当該遺構の上層堆積中にも落込んで広がっていたことから，溝—48底面をベースとして掘削されていた可能性が強い。検出平面形は，長径80cm，短径70cmのやや楕円形を呈し，底に下るにしたがい円形となり底部で径50cmのほぼ円形を呈し，深さ80cmを測る。堆積土は，上層に淡い黄褐色砂質土と下層にやや粘質の濃灰色土の二層に大別できた。

出土遺物は，下層堆積土層中のみを当該遺構の出土遺物として取り上げたが，溝—48内出土遺物と時期差は認められず，百・古・Ⅰと考えられる。

（山磨）



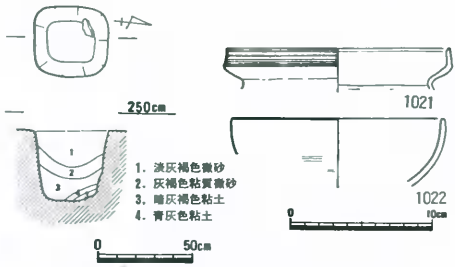
1．淡黄褐色砂質土
2．濃灰色粘質土



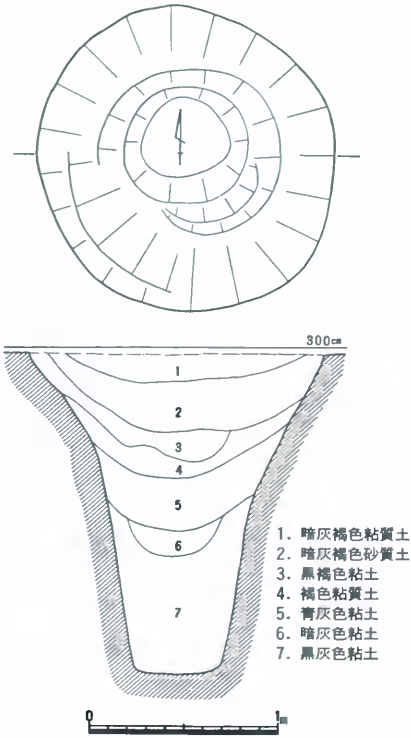
第251図　井戸—21（1/30）・出土遺物

井　戸—22（第252図）

208Ｊの南西端において検出された一辺40cm程の方形を呈する井戸である。掘り方は真直ぐに下がる。弥生時代後期の水田層除去後に検出した為，深さは40cmを測るにすぎない。底面の海抜高は205cmである。埋土は四層に分かれる。出土遺物としてはわずかに甕1021・鉢1022の土器片がみられる。



第252図　井戸—22（1/30）・出土遺物



第253図　井戸—23（1/30）

時期は出土遺物等から古墳時代前期と考えられる。　（内藤）

井　戸—23（第253図）

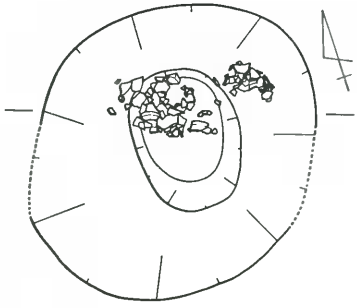
209Ｊの中央からやや北に寄った所に位置し，竪穴式住居—12の東約７ｍ離れて検出した円形の素掘りの井戸である。規模は長径163cm，短径155cm，深さ170cmを測る。埋土は七層に分けることが出来る。１層は暗灰褐色粘質土，２層暗灰褐色砂質土，３層黒褐色粘土，４層褐色粘質土，５層青灰色粘土，６層暗灰色粘土，７層黒灰色粘土である。３層が西方から堆積したことが観察できる。その他にはきれいなレンズ状の自然堆積を示している。井戸壁の南東隅が少し広くなっているのは井戸掘り下げ作業に都合がよい。底部の海抜高は130cmを測るが，発掘後の湧水はほとんどなかった。遺物は上層から土師器細片が数点出土しているが図化できるほどのものはない。この井戸の時期は出土土器からみて，竪穴式住居—12と同じ百・古・Ｉと考えたい。（浅倉）

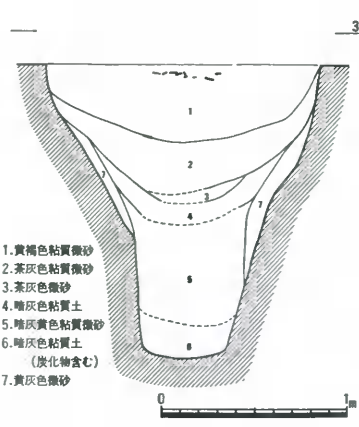
井　戸—24

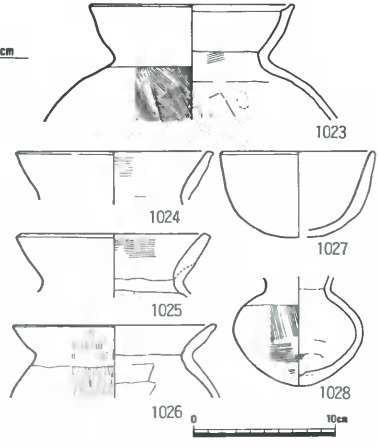
207Lの北西部において検出された井戸である。西端は調査区外で拡張して検出した。また大半を側溝により削平してしまい，検出できたのはわずかである。規模は120×100cmで楕円形を呈し，深さは90cm程確認できた。底は海抜170cmとやや高い。埋土は1層の灰褐色粘質微砂，2層の淡灰色細砂，3層の灰色粘質土の三層に分かれる。出土遺物はないが検出状況から古墳時代前期と思われる。

井　戸—25（第254図，図版99—1）

208Kの西寄り，調査区の北端で（一部拡張して）検出された井戸である。検出プランは長径170cm・短径150cmの円形に近いやや歪な楕円形を呈する大きな遺構である。検出面から下に70cm程までは次第にすぼまって75×60cmの楕円形になる。遺構の周囲が洪水砂であることから，本来はこの程度の規模であったものが，壁が崩れて拡大したと考えられる。深さは155cmを測り，底は海抜130cm程である。埋土は七層に分かれ，最下層の暗灰色粘質土には植物繊維の炭化物がみられる。土器は，1層の灰褐色黄褐色混合粘質微砂中に破片が一括してみられたが，これ



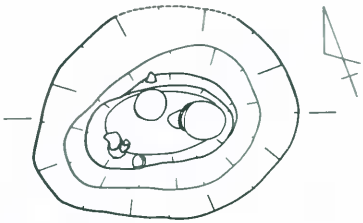


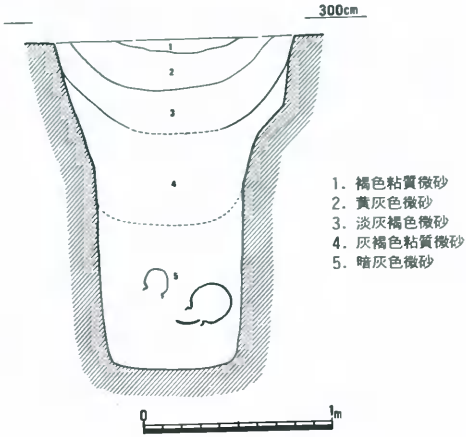


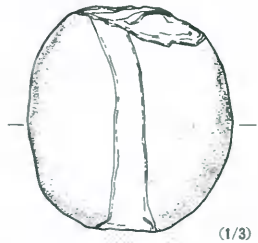
第254図　井戸—25（1/30）・出土遺物

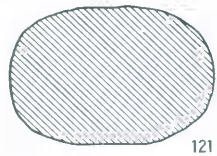
らは二次堆積の可能性があり，この井戸―25に伴うとはいい難い。その他にはわずかに細片がみられたのみである。

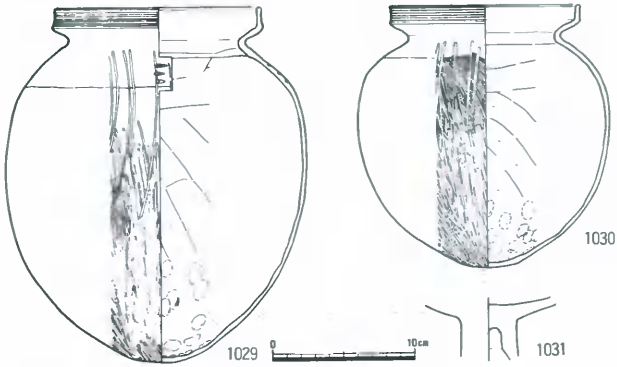
時期は検出状況等から古墳時代前期と考えられる。











第255図　井戸―26（1/30）・出土遺物

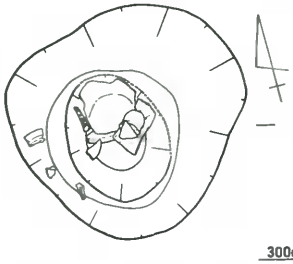
井　戸—26（第255図，図版99—2）

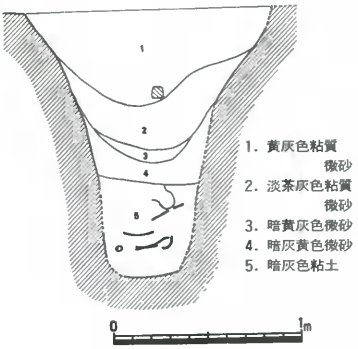
208Lの中央部，調査区の北端において一部拡張して検出した井戸である。長径140㎝・短径115㎝を測り，東—西方向に長軸をもつ楕円の平面形を呈する。深さは，検出面より170㎝を測り，底は海抜115㎝である。断面は中位までやや急に下がり，それ以下は真直ぐに下がる。埋積土は五層に分かれ，中位まではレンズ状に堆積している。出土遺物としては，5層から完形の甕2点1029・1030等の土器が出土した他，1・2層からも土器の細片が出土している。また，4層からは図示した石錘1点121が出土している。

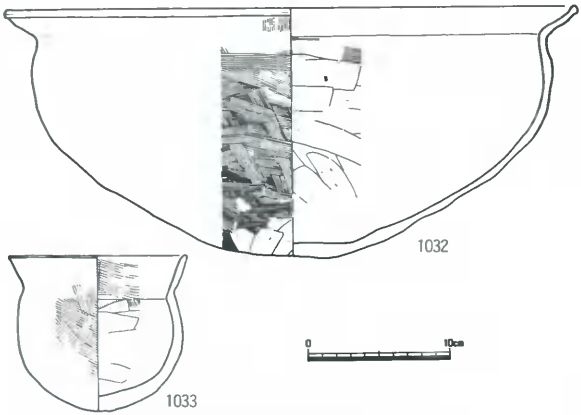
時期は，出土遺物等から百・古・Ⅱと考えられる。

井　戸—27（第256～257図，図版100）

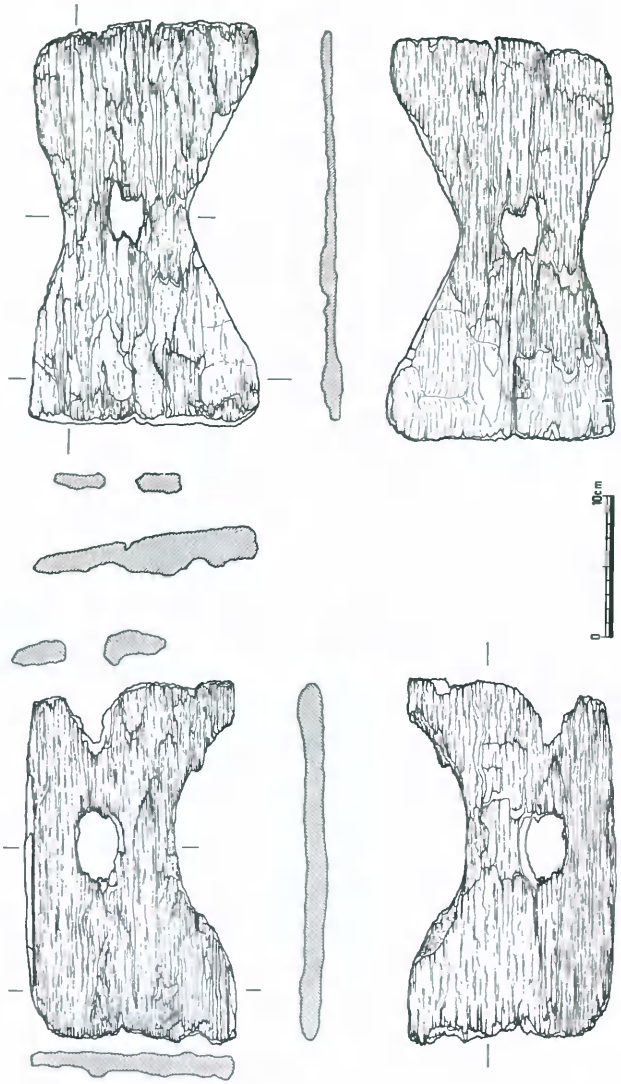
208Kのほぼ中央において検出された遺構で，検出面で径110～120㎝の歪な平面形を呈する井戸である。深さは140㎝を測り，



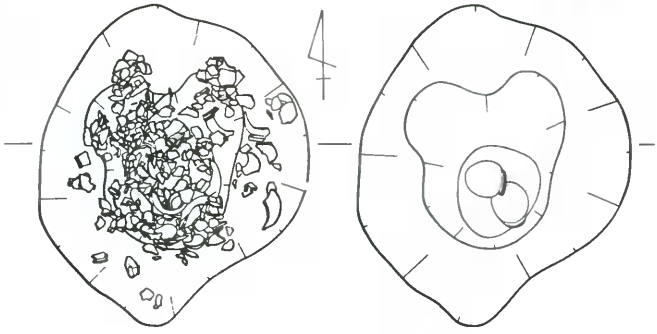


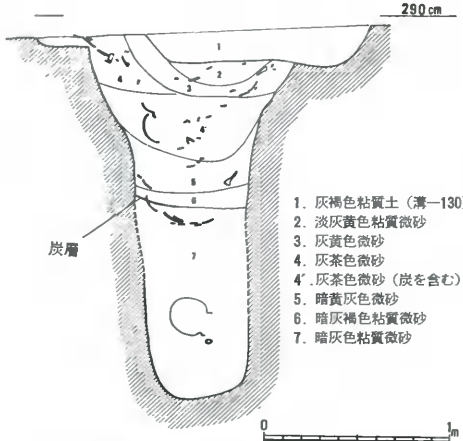


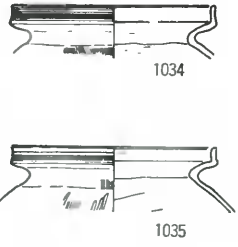
第256図　井戸—27（1/30）・出土遺物（1）

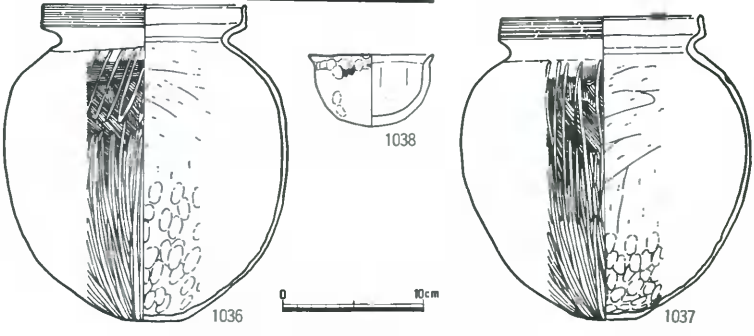


第257図　井戸－27出土遺物（２）（1/4）

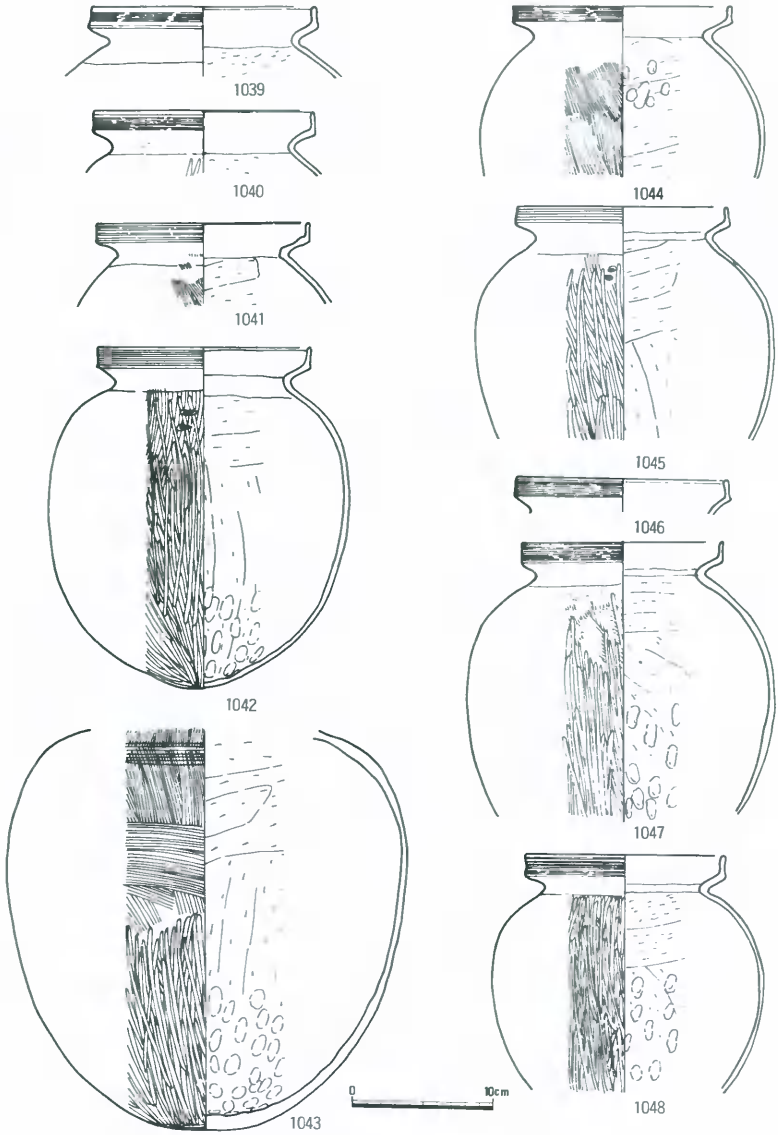




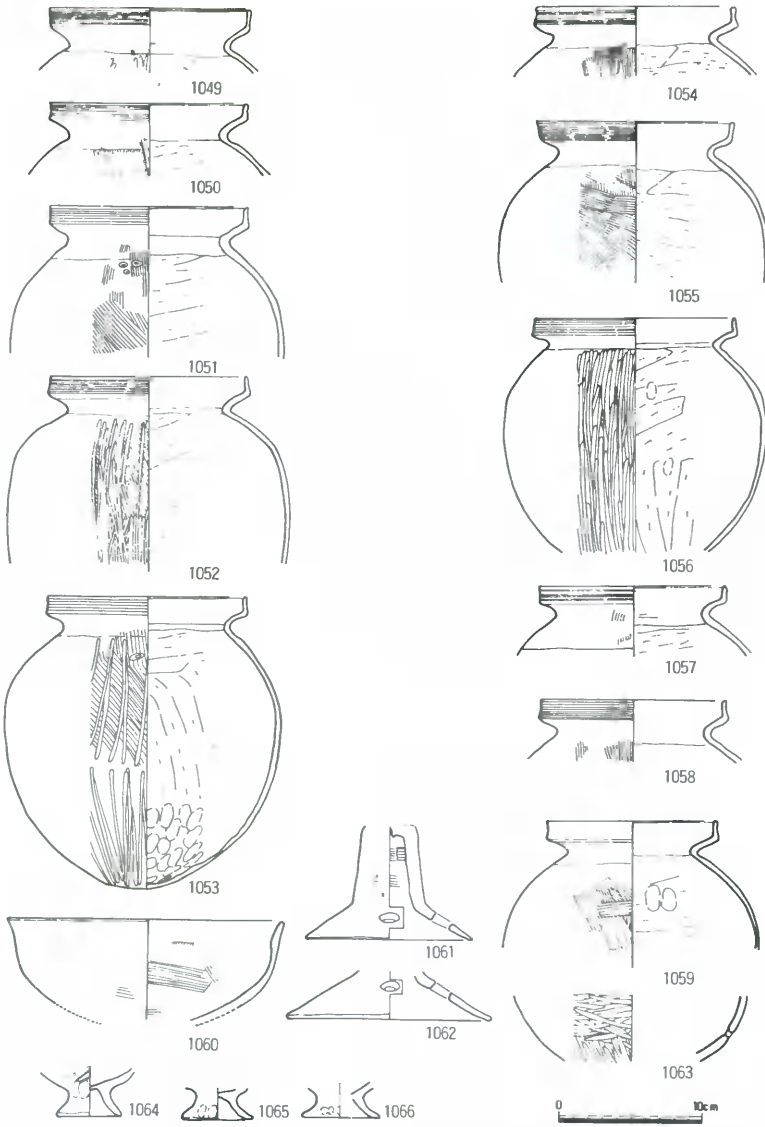




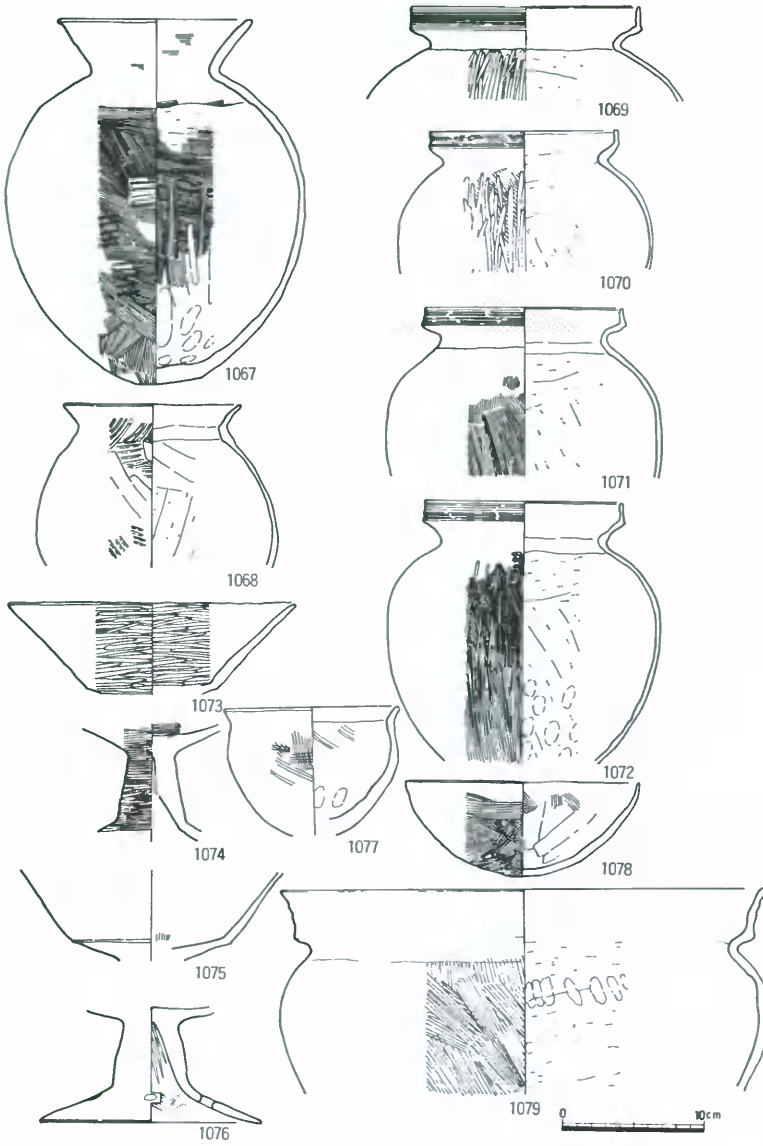
第258図　井戸—28（1/30）・中・下層出土遺物（1）



第259図　井戸―28中・下層出土遺物（２）



第260図　井戸―28中・下層出土遺物（3）



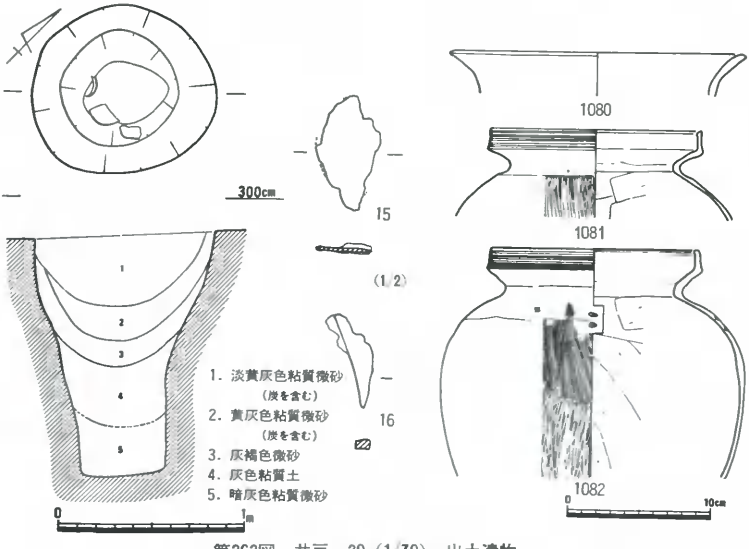
第261図　井戸―28上層出土遺物

底は海抜140cm程である。断面は中位まで擂鉢状にすぼまり，それより下位は，ほぼ真直ぐに下がるものである。埋積土は，大きく五層に分かれ，中位の3層まではレンズ状に堆積している。出土遺物は6層から完形の小型丸底壺**1033**および，ほぼ完形に復元された大型の鉢**1032**等の土器片の他に板状の木製品**1**・**2**が出土している。木製品はいずれも中央に30〜40mmの穴が穿たれ，長辺の両面，或いは片面に抉りが入っている。

時期は出土遺物等から百・古・Ⅱと考えられる。

井　戸—28（第258〜261図，図版101・102）

208Kの南東部において検出された井戸である。東半の上部が，後世の溝—129により削平されている為，検出面ではやや歪な平面形を呈しているが，長径170cm・短径140cmの，南—北方向に長軸をもつ楕円形が想定される。深さは，検出面より190cmを測り，底は海抜90cmである。断面は，検出面より50cm程は緩やかにすぼまり，それより下位は真直ぐに下がる。埋積土は2〜7層まで，大きく六層に分かれ，4′層の灰茶色微砂層には炭が含まれている。また，6層と7層の間には炭層がみられる。出土遺物としては，すべての層（2〜7層）に土器がある。7層の下位，底から30〜50cm上で完形の甕2点**1036**・**1037**と鉢**1038**が出土している。**1034**〜**1066**の土器は5〜7層から出土したもので，大半は立ち上がった口縁部外面に，多条の櫛描平行沈線を施す甕で，図示した土器33点のうち25点を占める。**1067**〜**1079**は2〜4層から出土したも



第262図　井戸—29（1/30）・出土遺物

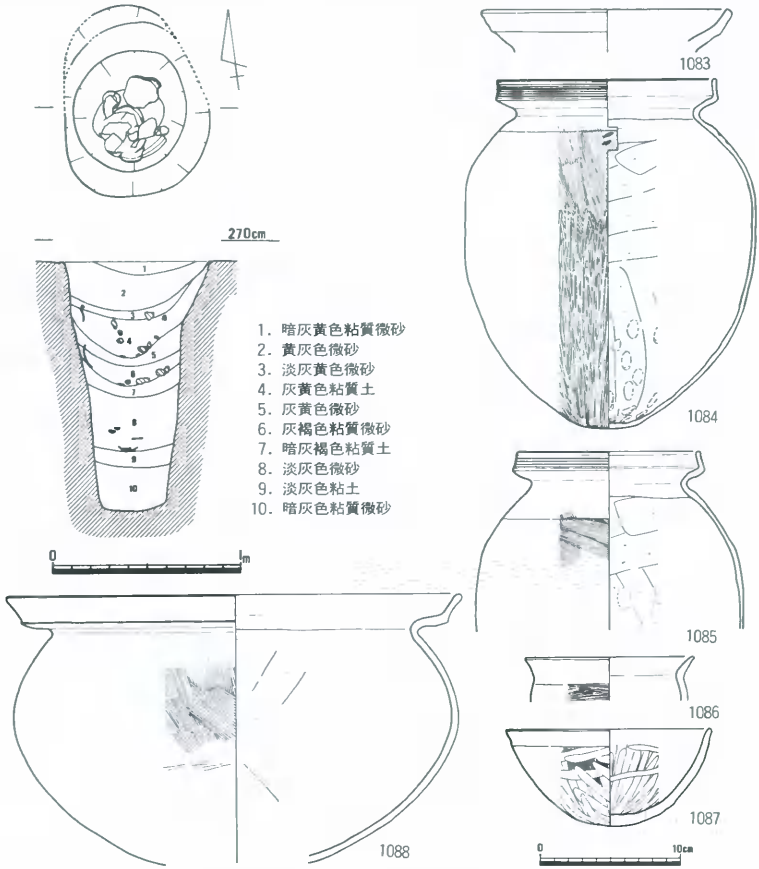
のである。

この井戸は今回検出された井戸のうちで最も深く掘られていたものの一つで，この井戸から非常に多くの土器片が出土していることはこれらが意図的に投棄されたとも考えられる。

時期は出土遺物等から百・古・Ⅰと考えられる。

井　戸—29（第262図）

208の中央よりやや南寄りのLライン上において検出された井戸である。長径100cm・短径90



第263図　井戸—30（1/30）・出土遺物

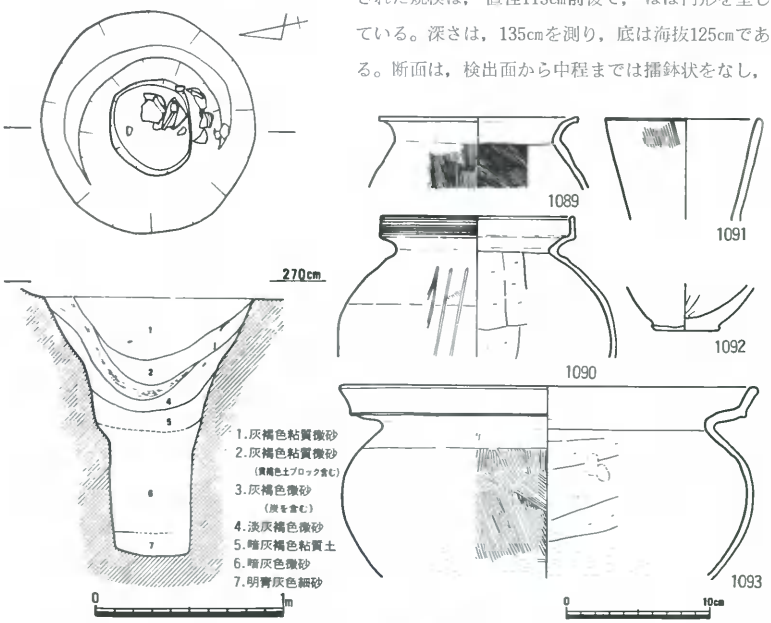
cmの楕円形の平面形を呈する。深さは130cmを測り，底は海抜153cmである。埋土は五層に分かれ，上層はレンズ状の堆積をしている。また1・2・4層は炭を多く含んでいる。4層の灰色粘質土から甕等の土器片が出土している。1層から出土した鉄製品**15・16**は何に使用されたものかは不明である。時期は出土遺物等から，百・古・Ⅱと思われる。

井　戸－30（第263図，図版103）

209Kの東部中央において検出された，不整楕円の平面形を呈する井戸である。長径100cm・短径75cm程を測り，南北方向に少し長い遺構である。検出面から底までは130cmを測る。底は40×30cmの楕円形を呈し，海抜高は127cmである。埋土は十層に分かれ，4層の灰黄色粘質土，6層の灰褐色粘質微砂，8層の淡灰色微砂層から拳大程度の石が土器と伴に多く出土している。**1088**の鉢は2層の黄灰色微砂から出土したものである。その他に**1083～1087**等の土器が完形のものを含み出土している。時期は出土遺物等から百・古・Ⅱと考えられる。

井　戸－31（第264図，図版104－1）

209Lの南部において，竪穴式住居－21の北西にすぐ隣接して検出された井戸である。検出された規模は，直径115cm前後で，ほぼ円形を呈している。深さは，135cmを測り，底は海抜125cmである。断面は，検出面から中程までは擂鉢状をなし，



第264図　井戸－31（1/30）・出土遺物

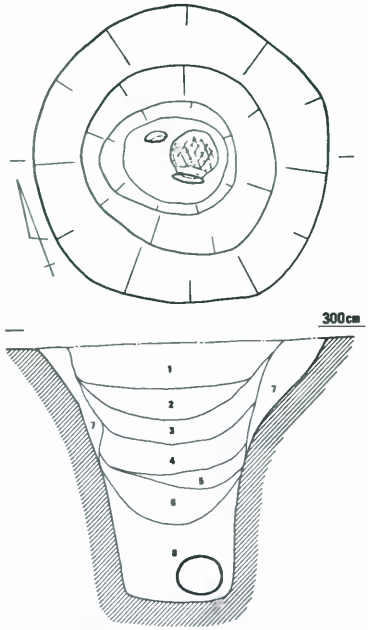
それより下位は真直ぐに下がっている。埋積土は七層に分かれ，２層の灰褐色粘質微砂層には多く黄褐色土のブロックを含んでいる。また，３層の灰褐色微砂層は真中に炭層の堆積が認められている。

出土遺物としては１～４層から土器が認められている。土器はいずれも破片であり，壺1089・1090，鉢1093等が出土している。

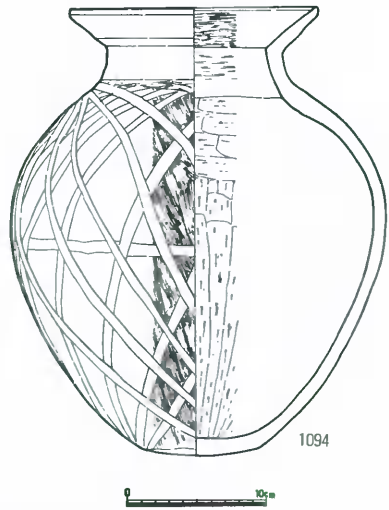
時期は，出土遺物等から百・古・Ⅱと考えられる。　（内藤）

井　戸－32（第265・266図）

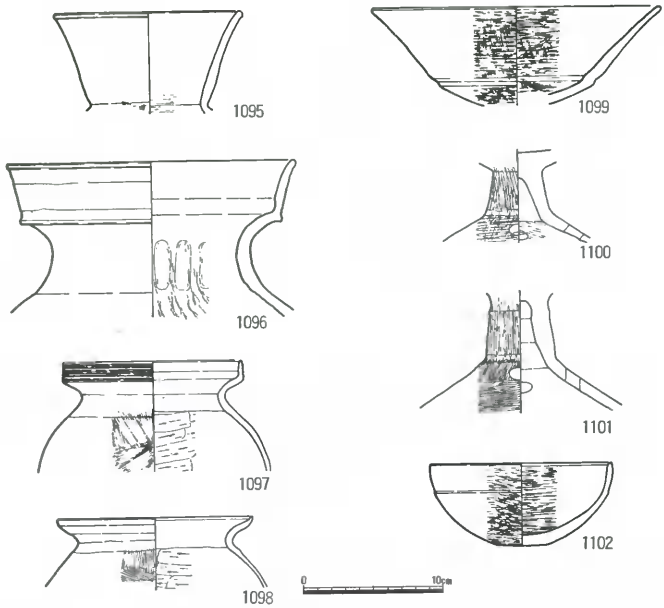
この井戸は，210Ｌ地点の東側に位置し，竪穴式住居－21の西側に隣接して検出された。井戸は，直径155～160cmのほぼ円形の平面形を有する。深さは，約135cmを測り，底部の海抜高は160cmを示す。井戸の掘り方は，上部約50cmほどを擂鉢状に掘り，さらに下部を底部まで角度をかえて直線的に掘られている。井戸内は，１～８層がレンズ状に堆積する。最下層の８層



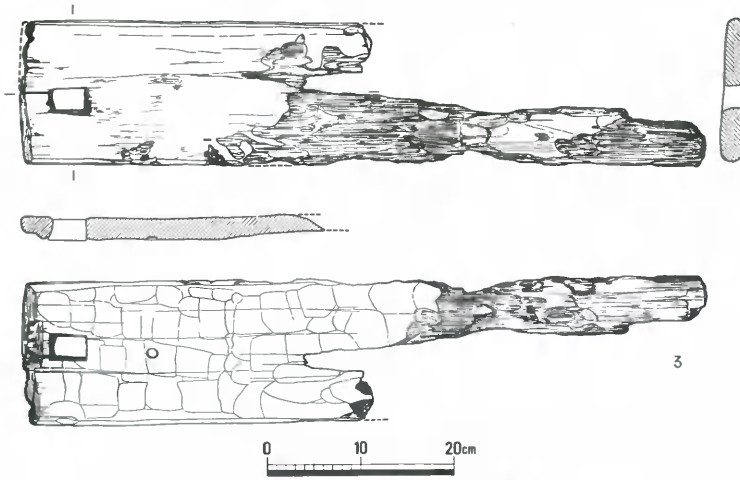
1. 淡灰黄褐色粘質土
2. 淡茶灰色砂泥
3. 淡黄灰色粘質土
4. 茶灰色粘土
5. 茶灰色粘土（黄色土ブロック含む）
6. 淡茶黄色砂質土
7. 淡灰褐色砂土
8. 暗灰色粘土



第265図　井戸－32(1/30)・出土遺物（１）



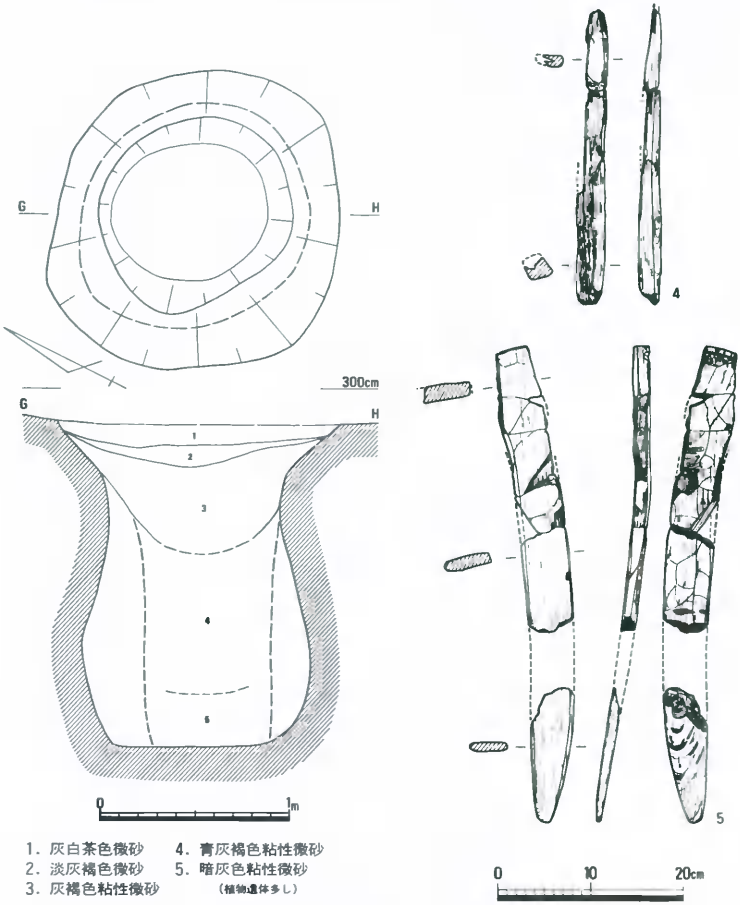
第266図　井戸―32出土遺物（2）



第267図　井戸―33出土遺物（1）（1/6）

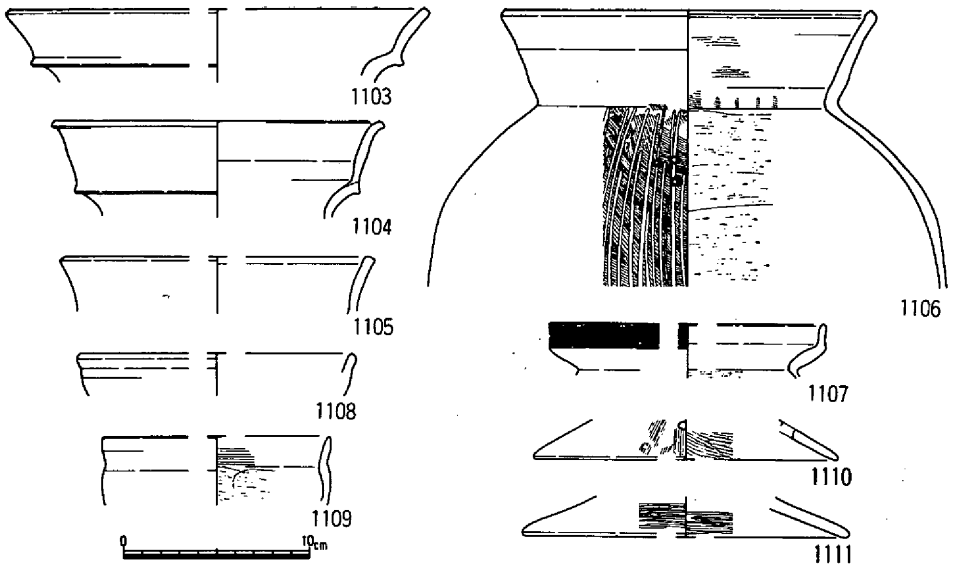
には，暗灰色粘土の中には灰が多く認められた。また，最下層には底部よりやや浮いた状態で完形の壺が横たわっていた。

出土遺物は，8層から1094・1102が出土し，他の図示した土器は4～6層からのものである。1094は，壺形土器で土器の外面頸部から底部に竹の籠目を施している。籠目は，幅約1cmのものを頸部から底部に対角線上にもっていき，体部全体を斜格子状に編んでいる。また，体部中央に横方向に1本入れている。出土した土器は，百・古・Ⅰ期。（中野）



1．灰白茶色微砂　4．青灰褐色粘性微砂
2．淡灰褐色微砂　5．暗灰色粘性微砂
3．灰褐色粘性微砂　（植物遺体多し）

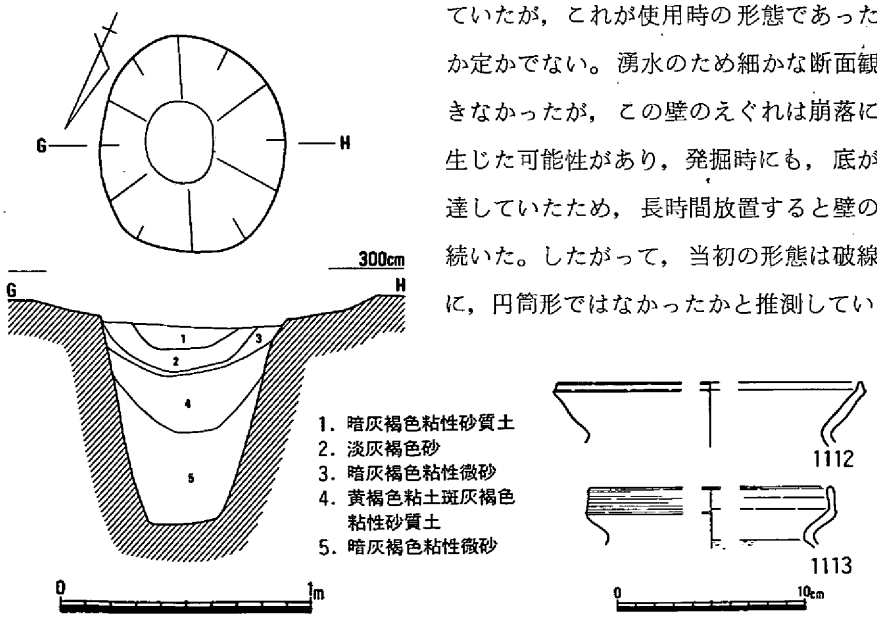
第268図　井戸―33（1/30）・出土遺物(2)（1/6）



第269図　井戸—33出土遺物（3）

井　戸—33（第267～269図，図版104）

209Mの北西端にある。検出面で長径169cm，短径147cmの不整円形を呈しているが，30cmほど深くなったところで長径106cmとかなり縮小し，それから下はやや袋状となる。湧水が激しかったため，底については深さを確認しただけで詳細な形状は不明である。壙壁は袋状を呈していたが，これが使用時の形態であったかどうか定かでない。湧水のため細かな断面観察ができなかったが，この壁のえぐれは崩落によって生じた可能性があり，発掘時にも，底が砂層に達していたため，長時間放置すると壁の崩落が続いた。したがって，当初の形態は破線のように，円筒形ではなかったかと推測している。井

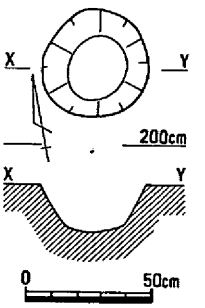


第270図　井戸—34（1/30）・出土遺物

戸の深さは171cm，底面の標高は112cmを測る。埋土は五層に分けられる。5層には植物遺体が多く含まれ，木器の他，土器も多くこの層から出土している。時期は百・古・Ⅱである。

井　戸—34（第270図，図版106）

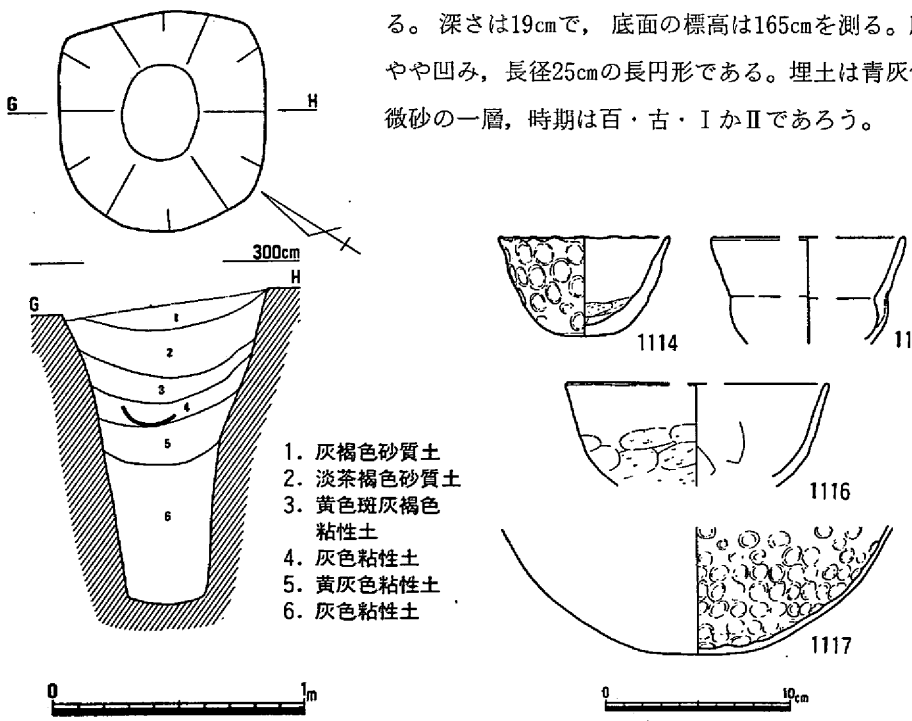
209Mの北西境界上にある。井戸—33の北東90cmにあたる。検出面で，長径87cm，短径72cmの楕円形を呈する。深さは82cm，底面の標高は200cmである。底面は長径33cm，短径26cmの楕円形でほぼ平坦である。壙壁の傾斜はかなり急で，傾斜角は75°～80°を示す。埋土は五層に分けられる。3層は2層とよく類似しているが，粘性があり，より固くしまっている。この3層までが上層で，これより下の層では埋土が2種の土の混合になっている。時期については遺物が少なく明確でないが，百・古・Ⅰの末か百・古・Ⅱの初めと考える。



第271図　井戸—35（1/30）

井　戸—35（第271図，図版106）

208Mの南端にあり，井戸—34から北北東へ3.5mほど離れた位置にある。この井戸はもともと弥生時代後期の洪水砂層を穿って掘られていたものだが，洪水砂層を除去した水田層の上面で検出された。長径44cm，短径41cmで，ほぼ円形を呈する。深さは19cmで，底面の標高は165cmを測る。底面はやや凹み，長径25cmの長円形である。埋土は青灰色粘性微砂の一層，時期は百・古・ⅠかⅡであろう。



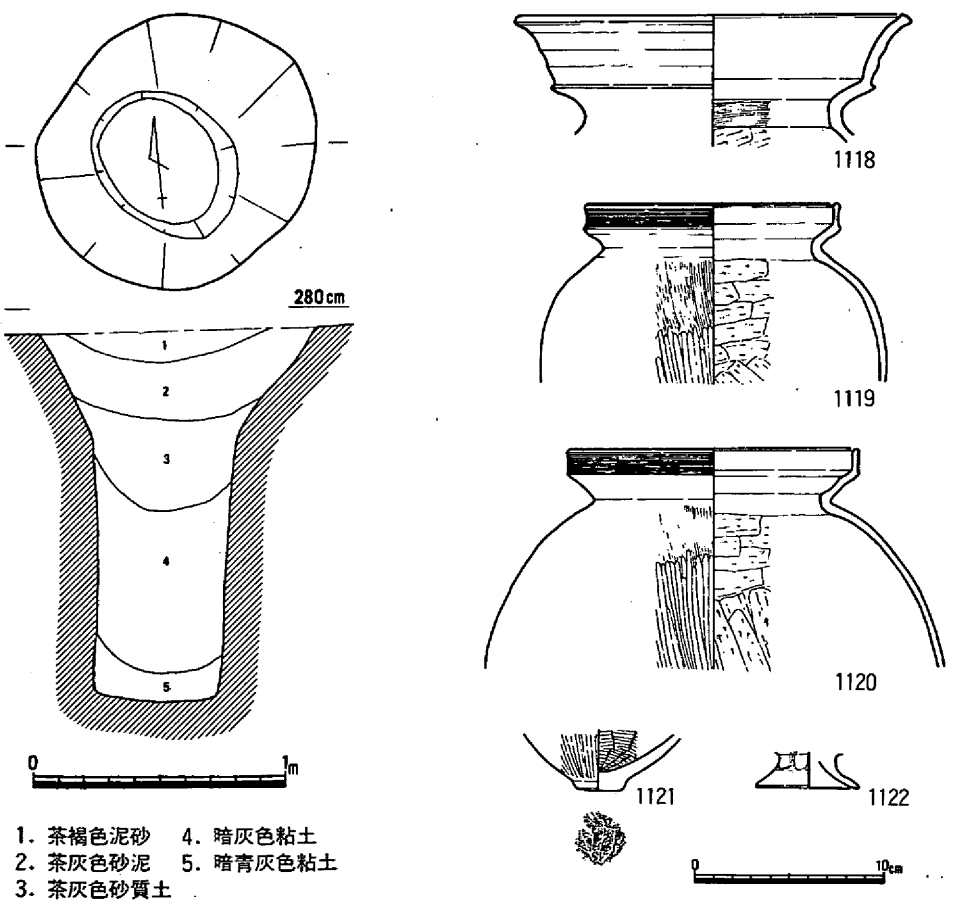
第272図　井戸—36（1/30）・出土遺物

井　戸—36（第272図，図版106）

209M，井戸—33の南東3mに位置する。平面形はやや四角張った円形で，長径88cm，短径81cm，深さ125cmを測る。底の標高は164cmである。底面はやや凹み，長径38cm，短径30cmの楕円形を呈する。壙壁の傾斜は急で，80°～85°になっている。埋土は六層に分けられる。4層から甕形土器1117が出土している。上層が砂層，3～6層の下層は粘性土層である。時期は百・古・Ⅱである。（岡本）

井　戸—37（第273図）

この井戸は，井戸—38・39を含めて3基の井戸が近接して存在する。3基の井戸とも，弥生後期水田を覆う洪水層の砂の上面で検出された。平面形は直径100～115cmの不整円形を呈し，深さは約145cmで底部は海抜165cmを測る。井戸の掘り方は，上部を擂鉢状に掘り，さらに下部を底部まで直線的に角度を変えて掘られている。出土遺物は，各層より少量の土器片を出土したが，時期的な差異は認められなかった。これらの土器は，百・古・Ⅰ～Ⅱ期の特徴を示す。



1．茶褐色泥砂　4．暗灰色粘土
2．茶灰色砂泥　5．暗青灰色粘土
3．茶灰色砂質土

第273図　井戸—37（1/30）・出土遺物

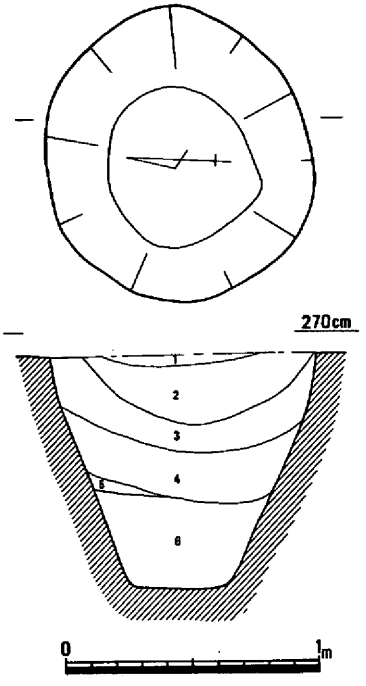
井　戸—38（第274図）

井戸—37の西側に検出された。規模は，直径105～120cmで不整円形の平面形を呈し，深さは約95cmで底部は海抜高170cmを測る。

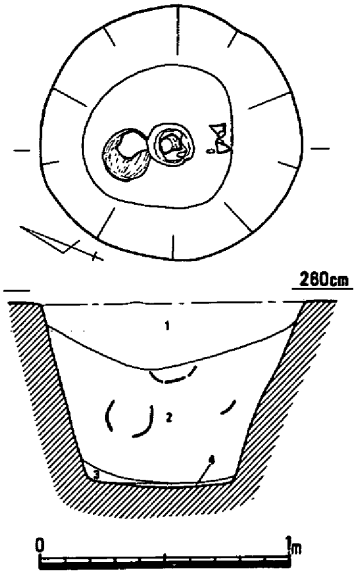
出土遺物は，少量の土器が出土したが図示できるものはなかった。それらの土器片は，百・古・Ⅰ～Ⅱ期のものと考えられる。

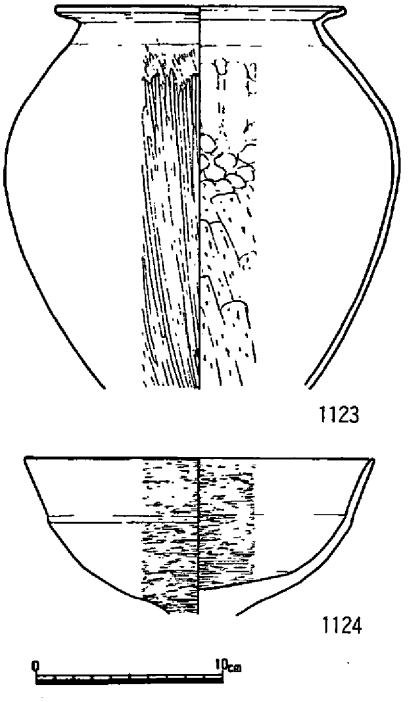
井　戸—39（第274図，図版107）

井戸—38の南側に隣接して検出された。平面形は，直径約100cmの円形を呈し，深さ約70cmと比較的浅かった。底部の海抜高は約180cmほどであった。井戸内は，１，２層がレンズ状に厚く堆積し，２層中には図示した土器が出土した。1123は，従来より播磨，讃岐地方によく見



1．茶褐色砂質土　4．青灰色粘土
2．淡茶褐色砂質土　5．暗茶灰色粘土
3．茶褐色砂土　6．暗灰色粘土





1．淡茶褐色砂土　3．暗青灰色粘質土
2．暗灰色粘質土　4．ワラ灰

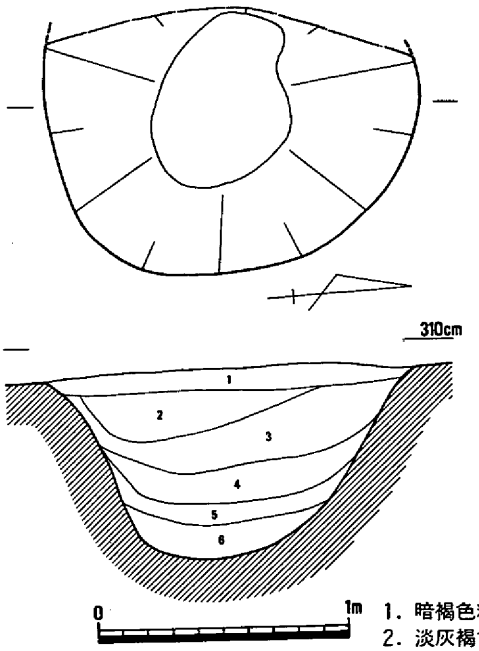
第274図　井戸—38・39（1/30）・井戸—39出土遺物

られる堅緻で雲母を多く含む土器である。百・古・Ⅰ期。　（中野）

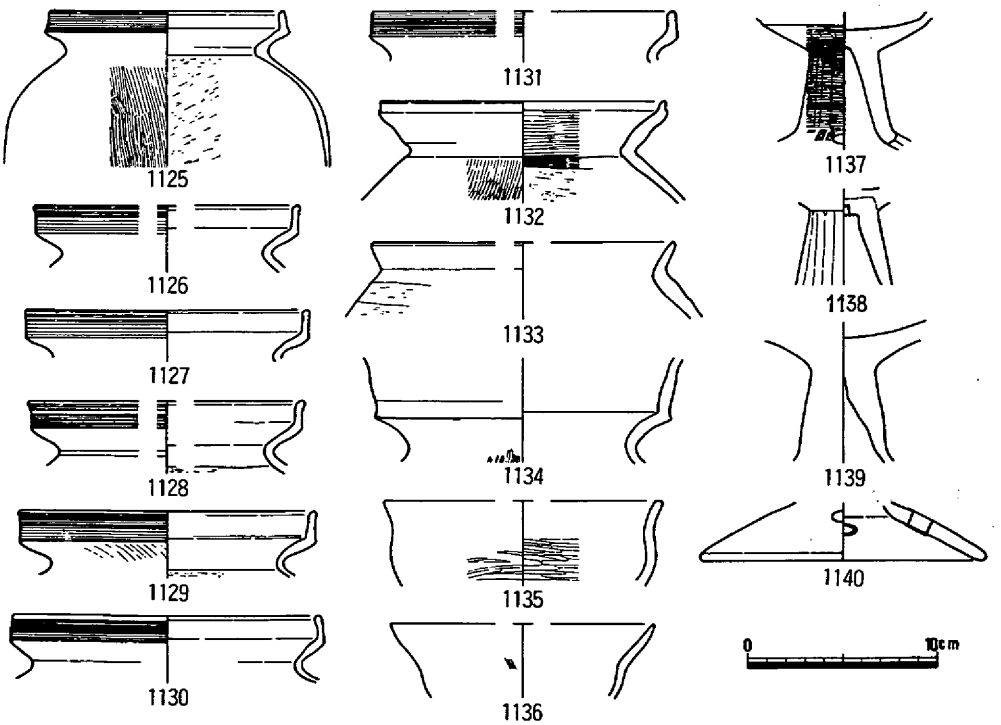
（4）土　　壙

土　壙—69（第275図）

207Gの南西部で検出された。現用水路によって一部を削られている。検出面で長径147cm，深さ74cmで円形を呈している。断面形は椀形で，底面はかなり凹み，壙壁との境は明瞭でない。底の標高は227cmを測る。埋土は六層に分けられる。2種の土の混合からなる層が多い。6層は炭粒を含み，底に青灰色粘土の沈着がみられた。かなり多量の土器が出土している。それらの示す年代は百・古・Ⅰである。　（岡本）



1．暗褐色粘性砂質土
2．淡灰褐色砂斑
暗褐色粘性砂質土
3．暗褐色粘性砂質土斑
淡灰褐色砂
4．灰褐色微砂
5．青灰色粘土斑
灰褐色微砂
6．灰褐色微砂



第275図　土壙—69（1/30）・出土遺物

土　壙—70

207Hの東部で，溝群（溝—110～112）の南西部において検出された遺構である。北東側が，溝群および別の土壙状の遺構により削平されている為，全体の規模は判然としないものであるが，一辺350cmを測る。隅丸方形或いは隅丸長方形を呈すると思われる。深さは，わずか2～3cmを測るのみで，底は平坦面をなすが，中央やや北寄りの部分は115×100cm程の楕円形を呈する別の小土壙により40cm程掘り窪められている。

埋土は，黒灰色微砂が一層堆積しているのみである。出土遺物としては，わずかに土器の細片がみられるものの図示できる程のものはなかった。

時期は，検出状況等から古墳時代前期と考えられる。（内藤）

土　壙—71（第276図）

208Kの南端において，竪穴式住居—13に隣接して検出された。古墳時代前期の土器溜り—11と重複した状況にある遺構である。規模は一辺100cm程のやや歪んだ方形を呈するもので，深さは30cmを測る。

堆積土は，上下二層に分かれる。1層の砂質の淡茶褐色土層中には，上面に広がる土器の一群が落ち込んだ状況を示していた。

遺構の時期は，出土遺物等から百・古・Ⅰと考えられる。（山磨）

土　壙—72（第277図）

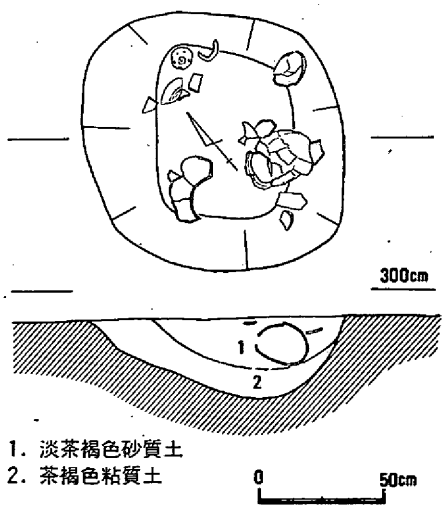
207Lの北西部において，井戸—24に隣接して検出された土壙である。規模は，長径90cm・短径70cmで楕円形を呈しており，深さは海抜255cmの検出面から25cmを測り，底は平坦である。埋土は二層に分かれ，1層は茶灰色粘質土で土器片と伴に炭を含んでいる。2層は灰色砂質土である。

出土遺物としては1層を中心に土器片が出土しているが図示できたのは，ほぼ完形近くに復元できた甕1点1141のみである。

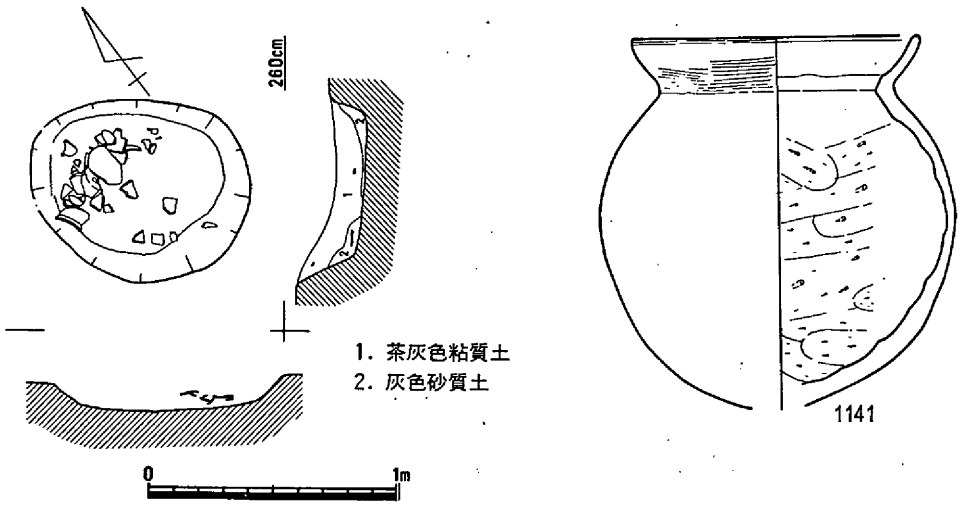
時期は出土遺物等から百・古・Ⅱと考えられる。（内藤）

土　壙—73（第278図）

208Mの南端，溝—120の底で検出された。楕円形を呈し，長径42cm，短径31cm，深さは17cmを測る。底面は平坦で，長径25cm，標高は256cmである。断面形は台形となる。壙内埋土は淡灰褐色微砂斑暗灰色粘性微砂で，ブロック状で混合しあっ



第276図　土壙—71（1/30）



第277図　土壙―72（1/30）・出土遺物

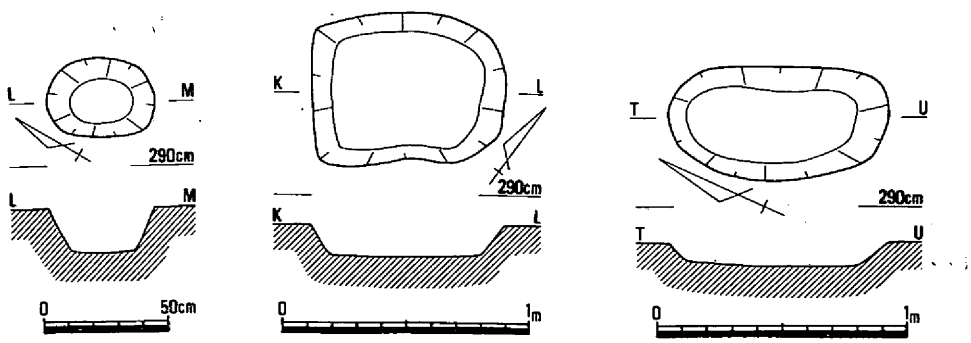
ている。壙内からは遺物の出土をみなかったが，隣接する遺構との類似関係から，古墳時代前期の遺構と考えられる。

土　壙―74（第278図）

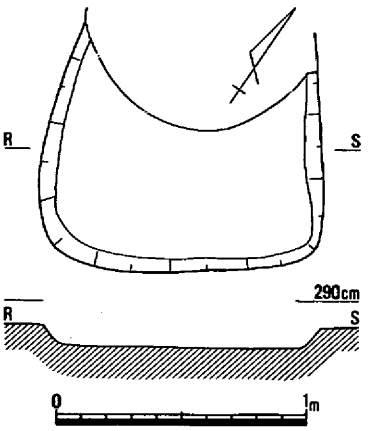
209Mの北西部に位置する。やはり溝―120によって切られている。検出面で長さ77cm，幅58cmを測る不整方形の土壙である。深さは13cmで，断面形は皿形を呈している。底面は平坦で，その標高は266cm，長径は61cmである。埋土は淡灰褐色微砂斑灰色粘性微砂で，古墳時代のものらしい土器片をわずかに含んでいた。時期は古墳時代前期と考えられる。

土　壙―75（第279図）

209Mの北西部にあり，井戸―36に切られている。土壙―74の南西1mにあたる。長さ111cm，深さ10cmで，平面形は不整方形，断面形は皿形を呈する。底面の標高は271cmである。埋土は暗褐色粘性微砂の一層である。遺物は僅少で，古墳時代らしいものがみられる。井戸―36に切られていることから，時期は百・古・ⅠかⅡである。



第278図　土壙―73・74・76（1/30）



第279図　土壙―75（1/30）

は16cmと浅い。底面は凹凸をもち，最深部の標高は274cmである。断面形は皿形となる。埋土は二層に分けられる。2層には地山の砕粒とおぼしき黄褐色粘土粒が含まれている。土器片はかなりの数出土したが，いずれも細片で，図示しうるものはなかった。それらの示す年代は古墳時代前期である。この土壙は，前の土壙―73～76にくらべて，より実在性の高い遺構である。

（岡本）

土　壙―78

この土壙は，調査区の東端部に位置し，旧河道の肩口に検出された。規模は，長さ約105cm，幅約75cmで平面形は楕円形を呈する。深さは，約45cmを測る。土壙内は，上層に灰褐色粘質土，下層に暗灰色粘土が堆積していた。性格については不明である。

土壙内からは，下層を中心に土器が出土した。土器は，いずれも細片であったが，百・古・Ⅰ～Ⅱ期のものである。

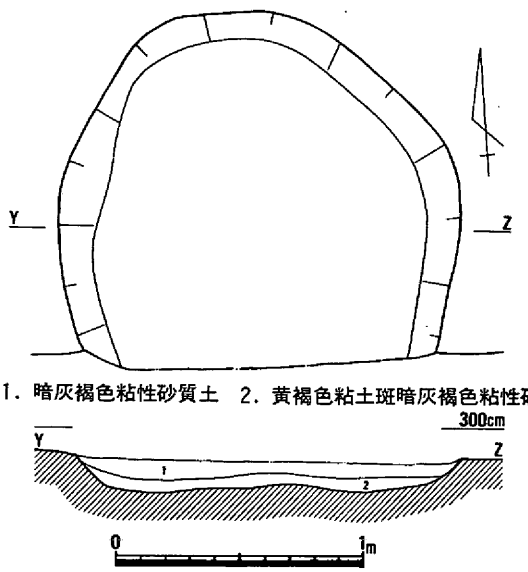
（中野）

土　壙―76（第278図）

209Mの北西端，土壙―75の西3.5mにある。長楕円形の平面形で，長径87cm，短径45cmを測り，深さは9cmにすぎない。断面形は皿形である。底面は平坦で，標高は267cmを測る。埋土は灰褐色微砂の一層である。古墳時代前期の土器を若干出土している。この時期の遺構としてよい。以上，73～76の土壙はいずれも不整形で，機能も不明である。

土　壙―77（第280図）

209Mと210Mの境界に位置し，建物―10のすぐ東にある。ほぼ円形を呈し，直径159cmを測る。深さ



第280図　土壙―77（1/30）

(5)　溝

溝—102～105（第281図）

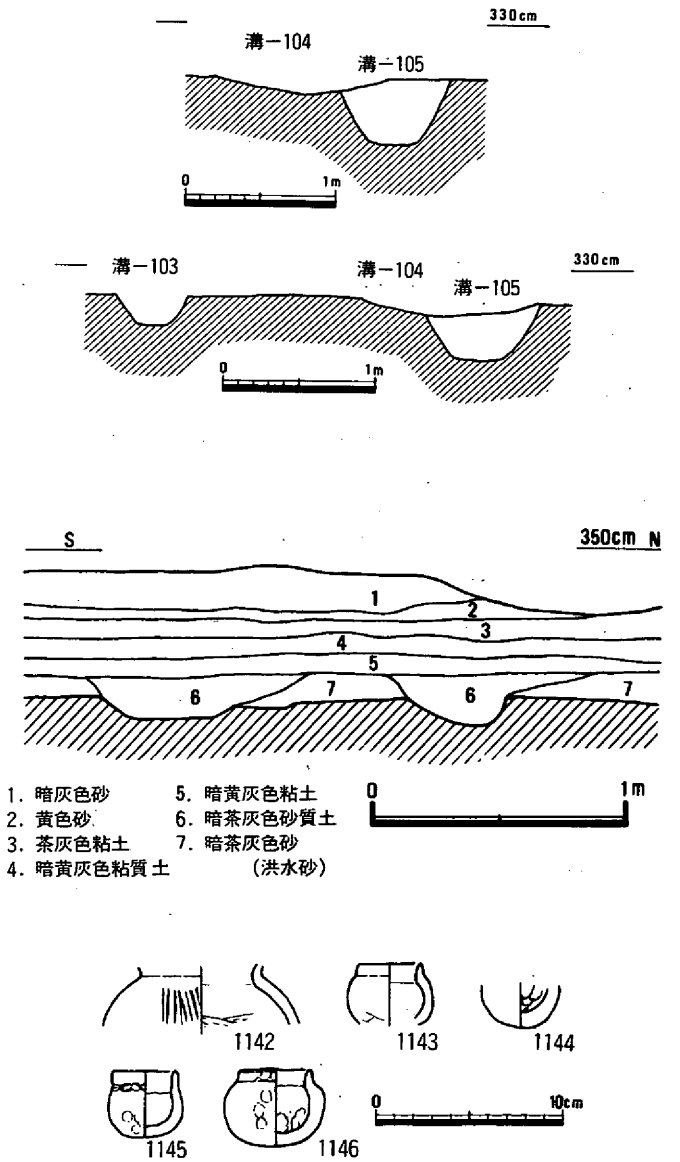
グリッド207F内東端に位置し，いずれの溝も北側部分が現代溝によって切られている遺構である。溝—102は幅100cm～140cm，最深部で10cmを測るもので208G近くで南西にカーブして流走する溝である。溝—105はほぼ南北に流走し，幅50cm～60cm，深さは12cm～22cmで，南が高く北に低くなり，北方向に流れていたと思われる溝である。溝—104・105は上下関係であり，溝—105の埋没後に溝—104が使用されたものである。溝—103の幅は約70cm，深さは25cm～40cmを測り得た。溝—105同様北に下がった形態である。溝—104は幅90cm～140cm，深さは10cm前後を測ることのできた溝であり，溝底高から北から南に流走していた溝である。以上4本の溝は若干の差はあるが，いずれも百・古・Ⅰの時期のものと想定される溝である。　（二宮）

溝—106・107（第281図）

207G北西隅に検出した2本の溝状遺構である。両溝は20～30cmの間隔を置き，ほぼ同様のカーブをなし並行している。

溝—106は，全長10m，幅50cm，深さ10～15cmを測り東端から西端に向って10cm程のレベルの低下を示す。溝—107は，全長5.5m，最大幅100cm，深さ10cm程を測る。

いずれも断面はスリ鉢状を



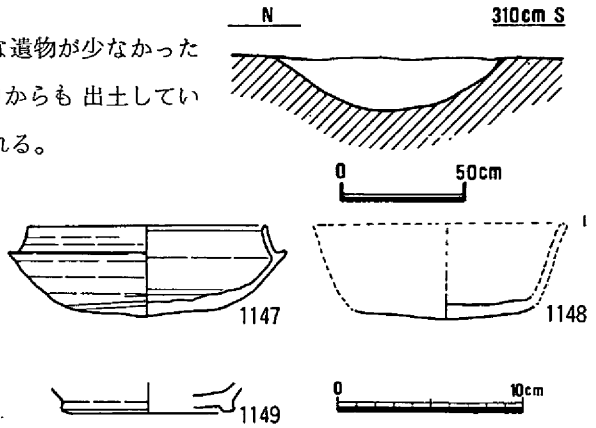
第281図　溝—103～107（1/60・1/30）・溝—106・107出土遺物

呈し，茶灰色土が堆積している。

出土遺物は，細片が多く図示可能な遺物が少なかったが，ミニチュア製品がいずれの溝中からも出土している。諸特徴から百・古・Ⅱと想定される。

溝—108（第282図）

207G・H間に検出した全長16.5m，幅80～130cm，最大深さ20cmを測る溝状の遺構である。東端では2本に分かれた部分も認められ重複した遺構の可能性もある。溝底部レベルは西端から中心に向って16cm低下し，中心から東に向って5cm程上っている。



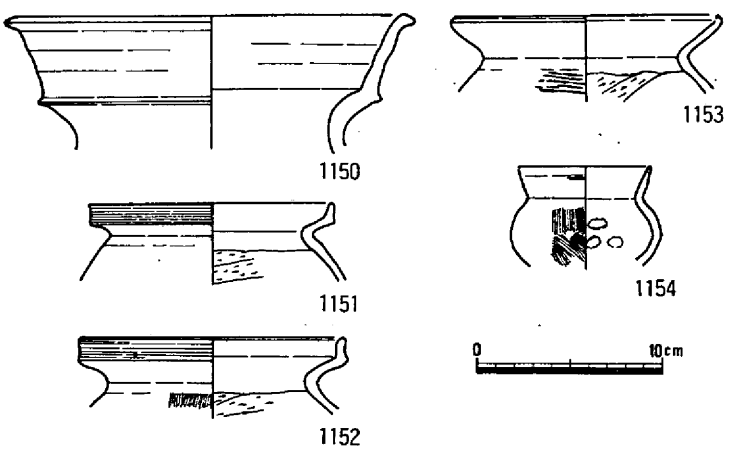
第282図　溝—108（1/30）・出土遺物

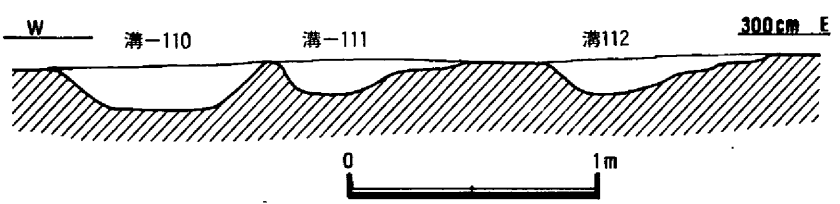
出土遺物は，**1147**が溝底面から出土している。他に埋土中に**1149**の高台付の須恵器片の出土も認められることから古墳時代以後としておきたい。

溝—110～112（第283図）

207H東端に北西から南東に並行して走る3本の遺構である。いずれも幅80～100cm，深さ15cm程度を測る同形同大のものである。ただ西端の溝—110は途中で終っており検出長6.3mを側る。底部レベルは溝—111・112ともほとんど差が無い。

出土遺物は，溝—111・112については細片のため図示できなかっ



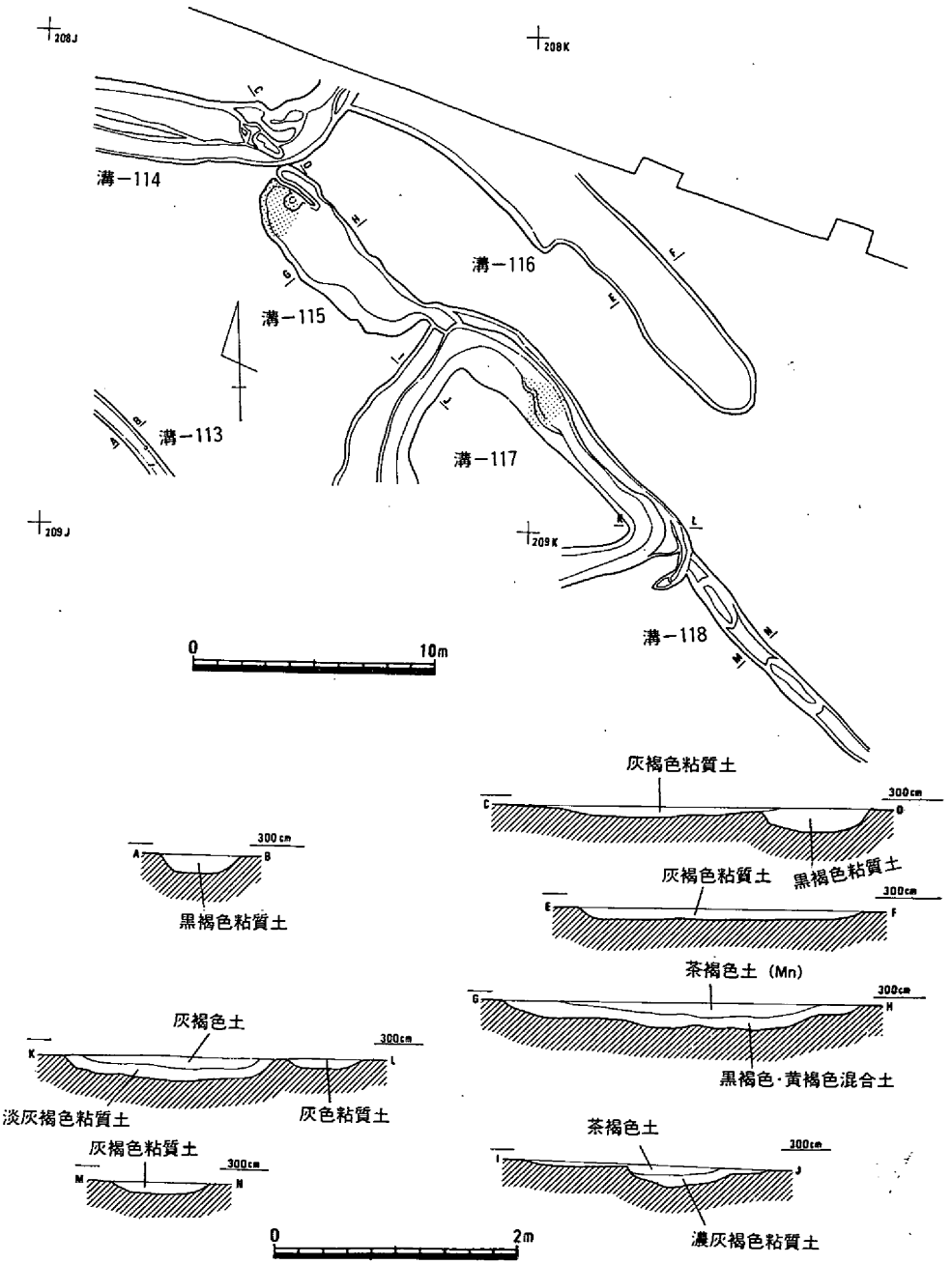


第283図　溝—110～112（1/30）・出土遺物

た。溝—110と時期的にへだたりのないものと考えられる。時期は，百・古・Ⅱの範疇であろう。

溝—113（第284・285図，図版108）

208J調査区南西隅に検出した溝状の遺構である。検出長5m，幅70cm，深さ20cm前後を測



第284図　溝—113～118（1/300・1/60）

り逆台形の断面を呈す。溝内出土遺物で注目されるものは，南西端の溝底面から出土の馬の上下一対の歯がほぼ完全な形で出土したことである。

時期については，図示した器台形土器**1160**以外に確定すべき遺物が無く，百・古・Ⅱ以後の古墳時代の範疇と幅を持たせておきたい。

溝—114（第284・285図）

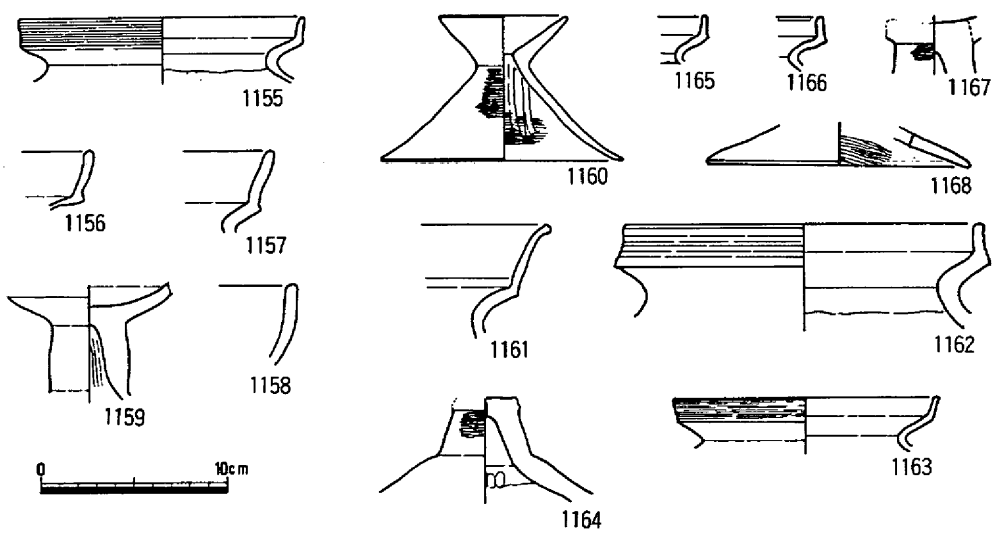
208Ｊ北西隅に検出した複数の溝状遺構である。検出西端部では，わずかに間を置き並行した２本が認められた以外は重複し，不明瞭な部分が多い。南側に位置する溝はやや深く明瞭で，検出長11ｍ，幅100cm，深さ10～20cmを測り，Ｌ状に屈曲し北に向っている。底部レベルは，西端を最高とし北東端で－15cmのレベル差が認められる。これに対し北端の溝はやや浅く，中央付近での断面観察の結果では，南側の溝の上面を切込んで，ややカーブしながら溝—115に続くものと想定された。なお溝—116との関連も考えられるが不明瞭であった。

出土遺物**1155～1159**は，一括掲載したが時期的には差がなく，百・古・Ｉの範疇でとらえられる。

溝—115（第284・286図）

208Ｊ中央付近に検出した，全長8.5ｍ，幅240cm，深さ25cm程の溝状の遺構である。北西端は，溝—114の北側の浅い溝に続くものと想定される。南西端では，溝—117に連続する。溝底面はかなりの凹凸が認められ，北西端では二又状に分れている。

出土遺物は，北端に重複して検出した井戸—21付近に土器溜り状を呈した遺物が認められた以外は少量であった。時期は，百・古・Ｉと考えられる。



第285図　溝—113・114・116・118出土遺物

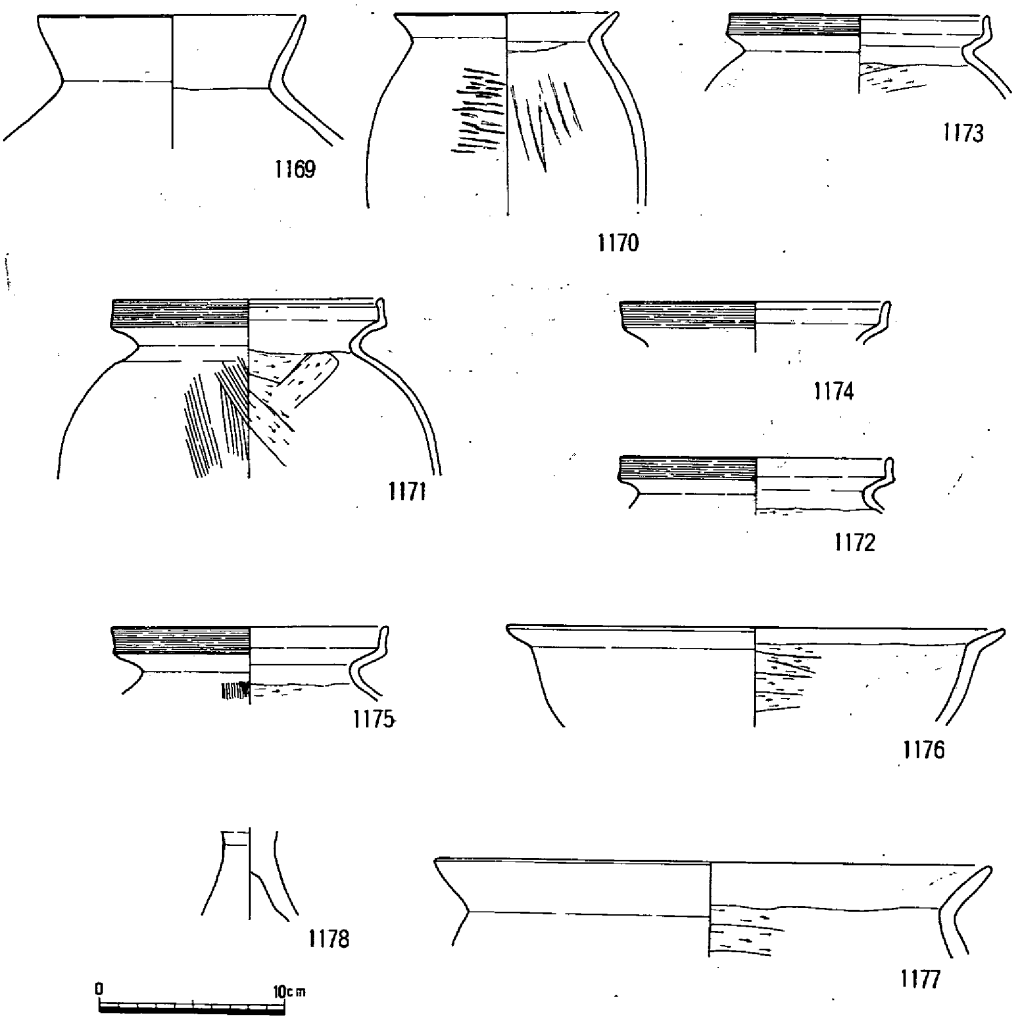
溝—116（第284・285図）

208J・K北端に検出した，北西から南東にゆるくカーブしている浅い溝状の遺構である。北西端は溝—114と接合するが，切合いは不明瞭である。規模は検出長20m，幅200～270cm，深さ15cm程である。底部レベルは高低差がほとんど認められない。

時期は，出土遺物**1161～1164**から百・古・Iと考えられる。

溝—117（第284・287図）

208J・K間にわたり検出した三角形状に巡る溝状遺構である。北西角で溝—115と連なり南西隅で溝—118と接合する。北東辺では，竪穴式住居—13と重複し，住居上面に溝が切込でいる。検出長22m，最大幅300cm，平均幅100～200cm，深さ20cm前後を測る。北東辺には，最大

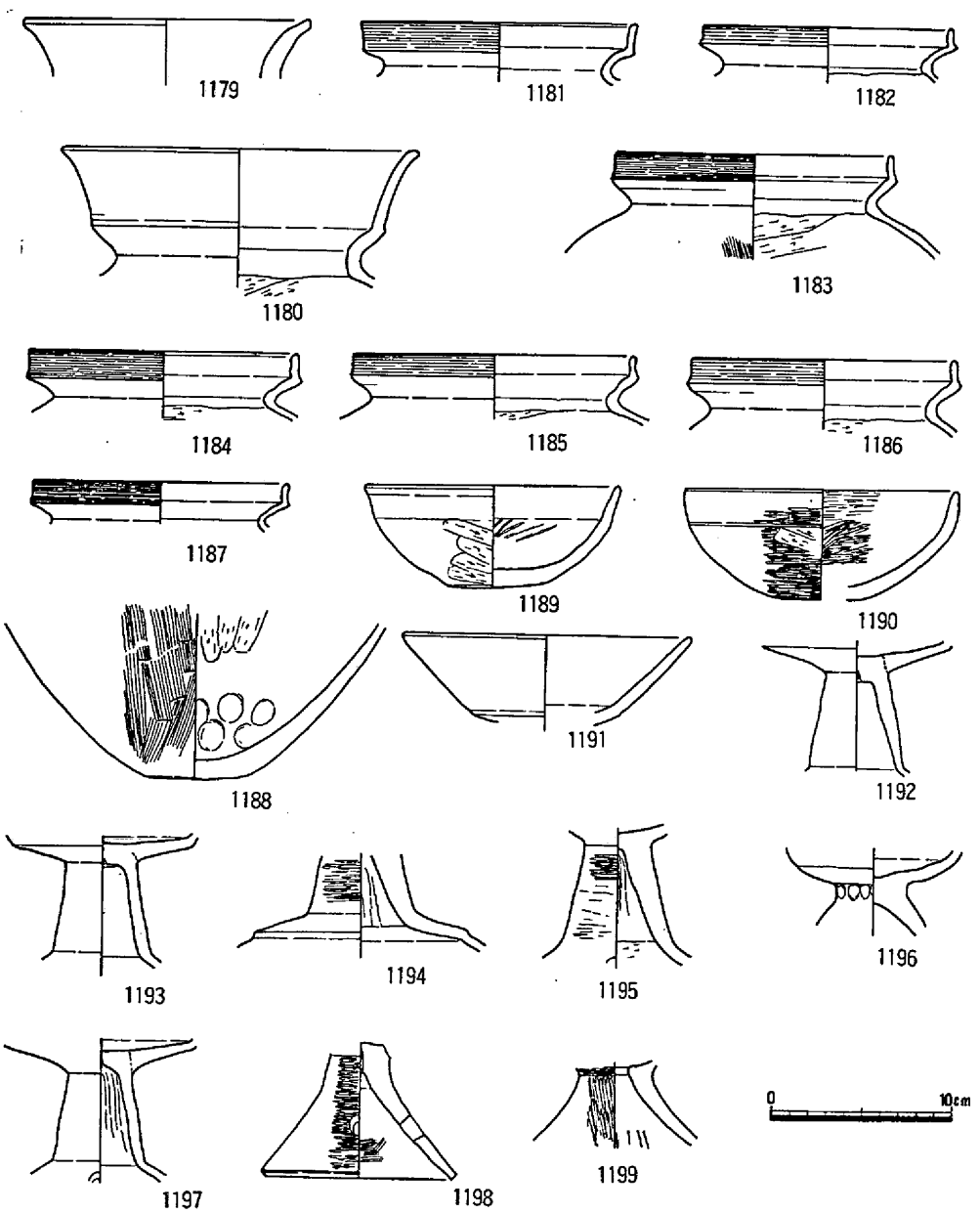


第286図　溝—115出土遺物

幅70cmのテラス状の段が認められた。この段は南東角に全長３ｍ，幅50cmの弧状に枝分れした溝に連なることから，別の溝の重複が考えられる。三角形状に巡る部分の底面は，ほとんどレベル差が無い。

出土遺物は，北東辺の北よりの底面にかなりまとまった状態で遺物の出土がみられた。

時期は，百・古・Ｉが考えられる。



第287図　溝―117出土遺物

溝—118（第284・285図）

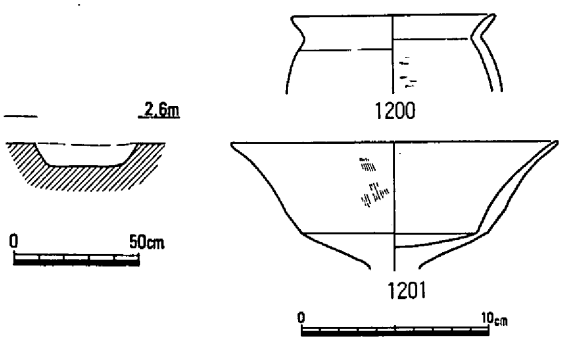
209K北西から南東方向に検出した浅い溝状遺構である。北端で溝—117に接合する。検出長11m，幅100cm前後，深さ10～20cmを測る。溝底面は，2～3m間隔で10cm程度のレベル差で深い部分と浅い部分が交互に掘り込まれている。底面は，凹凸をなすが両端部でのレベル差はほとんどない。

時期は，出土遺物1165～1168から百・古・Ⅰと考えられる。（山磨）

溝—119（第288図）

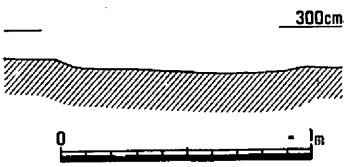
209Jの南西部から検出され，土器溜り—9に切られていた。最大幅40cm，深さ10cm，長さ12mを測る浅い溝で，溝内には暗灰褐色粘質土が堆積していた。遺物は土師器数片が出土しており，その特徴から百・古・Ⅰ期のものと考えられる。

（江見）



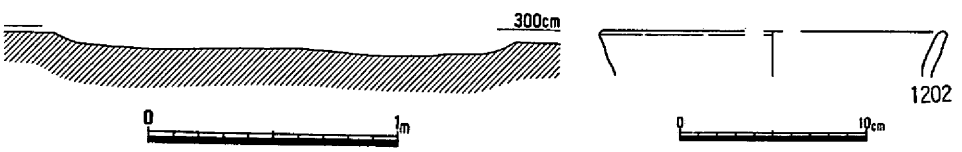
第288図　溝—119（1/30）・出土遺物

溝—120（第289図）



第289図　溝—120（1/30）

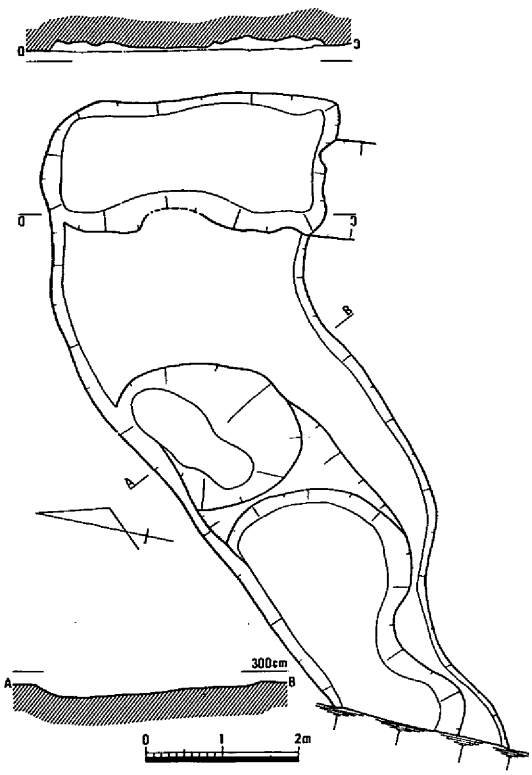
209Mの北西部から中央部にかけて検出された。微高地の肩の縁と平行していて，地形との関係が考慮される。溝—121によって切られている。北の部分で幅91～160cm，深さ3～11cm，南の部分は幅90cm前後，深さ4cm程度である。溝底の標高は北端で280cm，南端で282cmを測り，ほぼ水平と考えてよい。形態からすれば，溝としての機能は疑問視される。埋土は黄褐色砂斑灰色粘性土である。時期は古墳時代前期であろう。



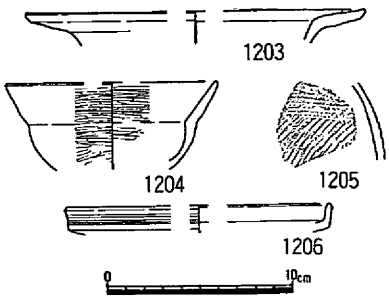
第290図　溝—121（1/30）・出土遺物

溝—121（第290図）

209Mの西半にあって，溝—120と直交するように位置する。幅は広いところで222cm，狭いところでは145cmを測る。深さはわずかに5cm前後である。溝底の標高は東端で288cm，西端で293cmとなっていて，西がやや低い。埋土は黄褐色砂質土である。遺物は少なく，図示しうるものは1点である。時期は古墳時代前期と考えられる。

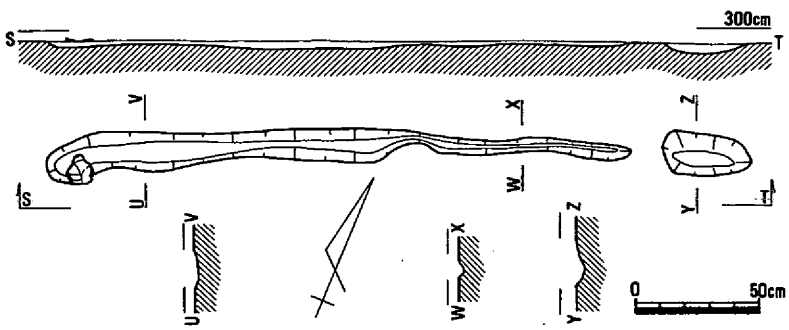


第291図　溝―122（1/100）・出土遺物



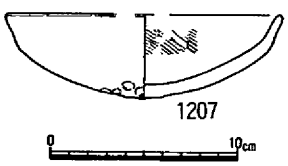
溝―122（第291図，図版110）

溝―121と接して，同方向に走る。溝底には大きな凹凸があり，溝としての機能は疑問で，むしろ溝状の大形土壙と表現した方が適切である。東端から南に細長く伸び出した溝があり，これは溝―120と平行する。幅は160～368cm，深さは土壙部分で15～20cm，それ以外では9cmである。溝底の標高は東端土壙内で264cmを測る。埋土は淡灰褐色微砂・暗灰褐色粘性微砂・暗茶褐色粘性土の混合，時期は百・古・Ⅱである。



溝―123（第292図）

209Mの南西部にある。幅10～30cmの細く小さい溝の痕跡である。深さは2～4cmにすぎない。埋土は暗褐色粘性土で，他の古墳時代の遺構の埋土が砂であるのにくらべると異質である。時期は古墳時代前半である。　（岡本）

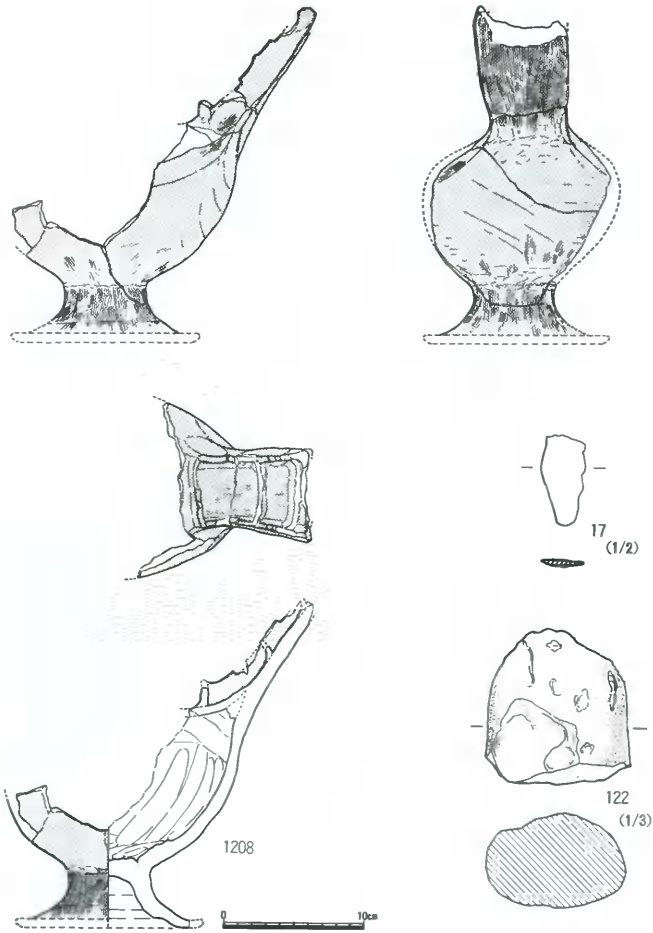


第292図　溝―123（1/30）・出土遺物

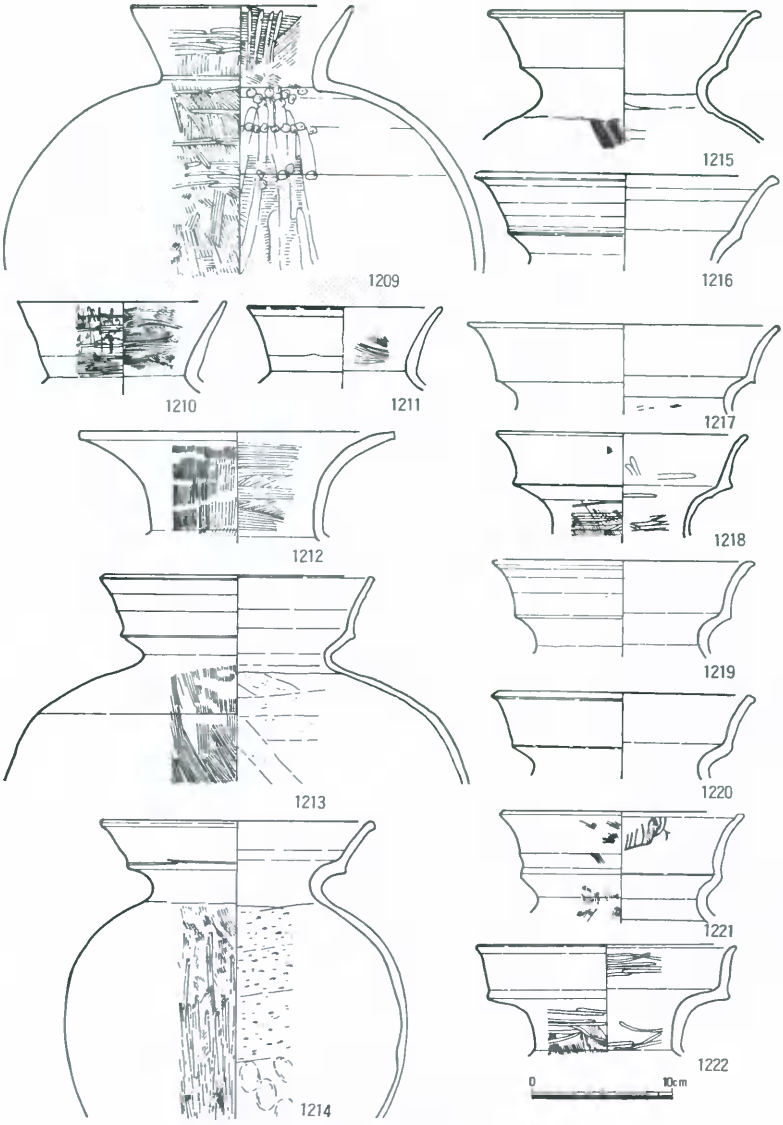
（６）土器溜り

土器溜り－５（第293～302図，図版111）

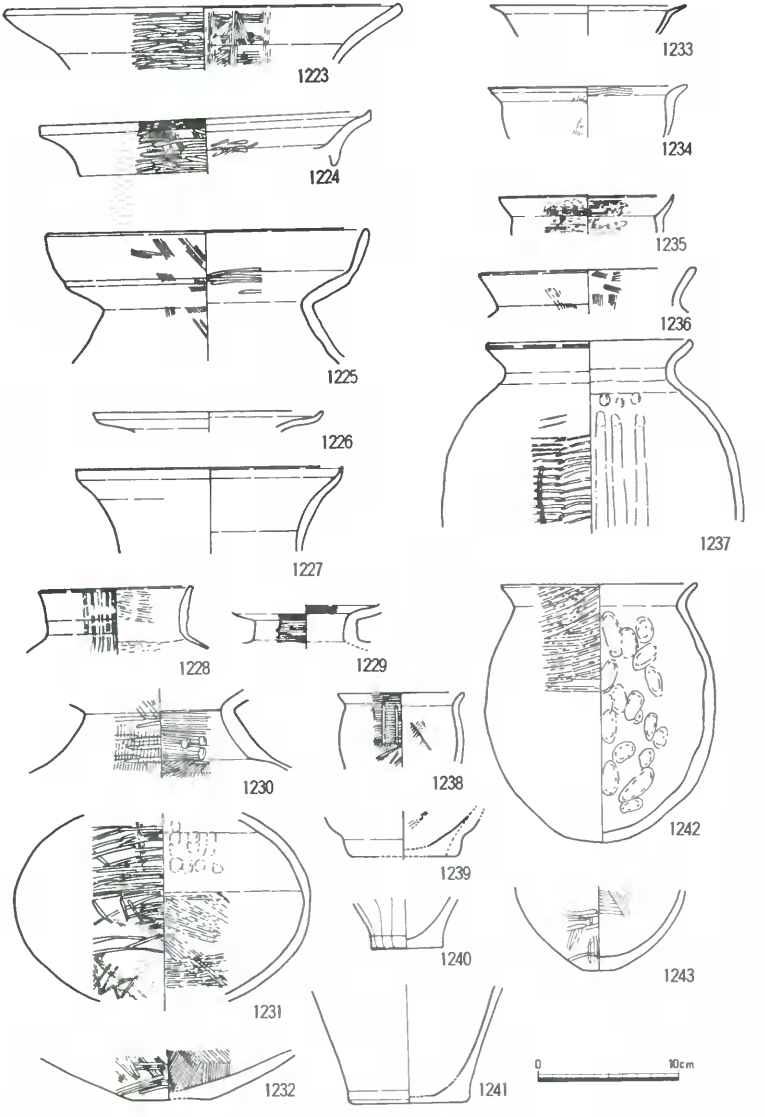
207Ｈの南部から208Ｈの北端部にかけて検出された土器溜りで，一部を調査時の側溝により削平されている。長さ15m・幅６mの範囲に非常に多量の土器片が認められている。土器の



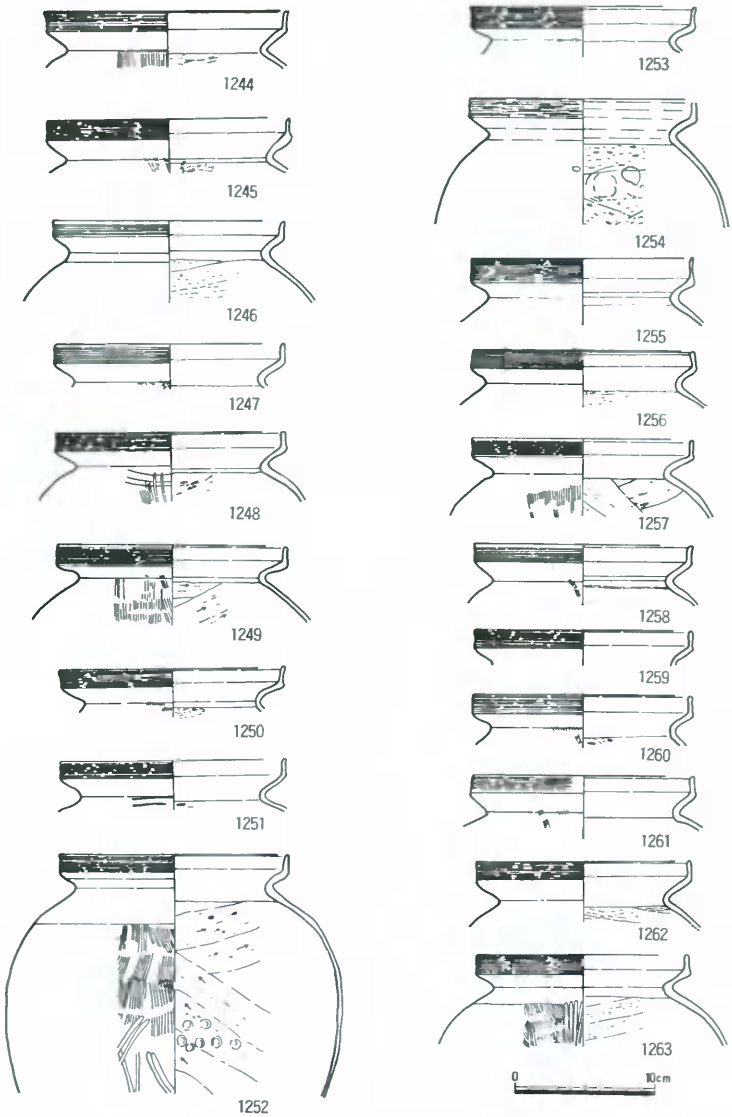
第293図　土器溜り－５出土遺物（１）



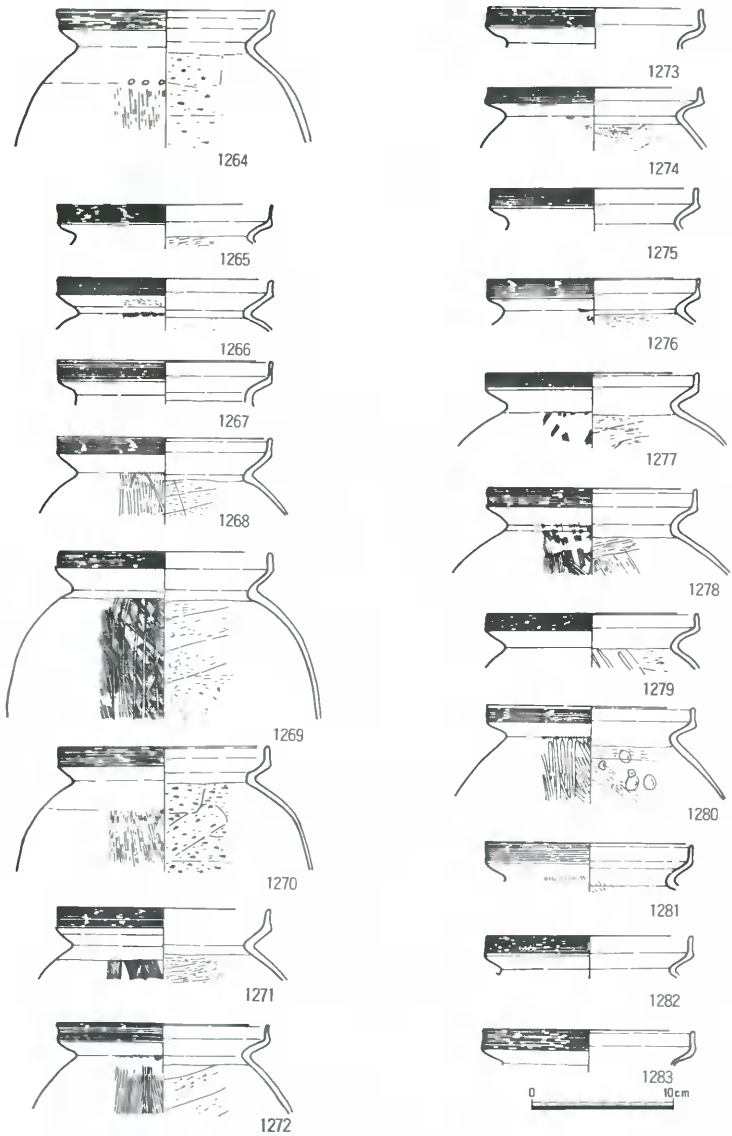
第294図　土器溜り－５出土遺物（２）



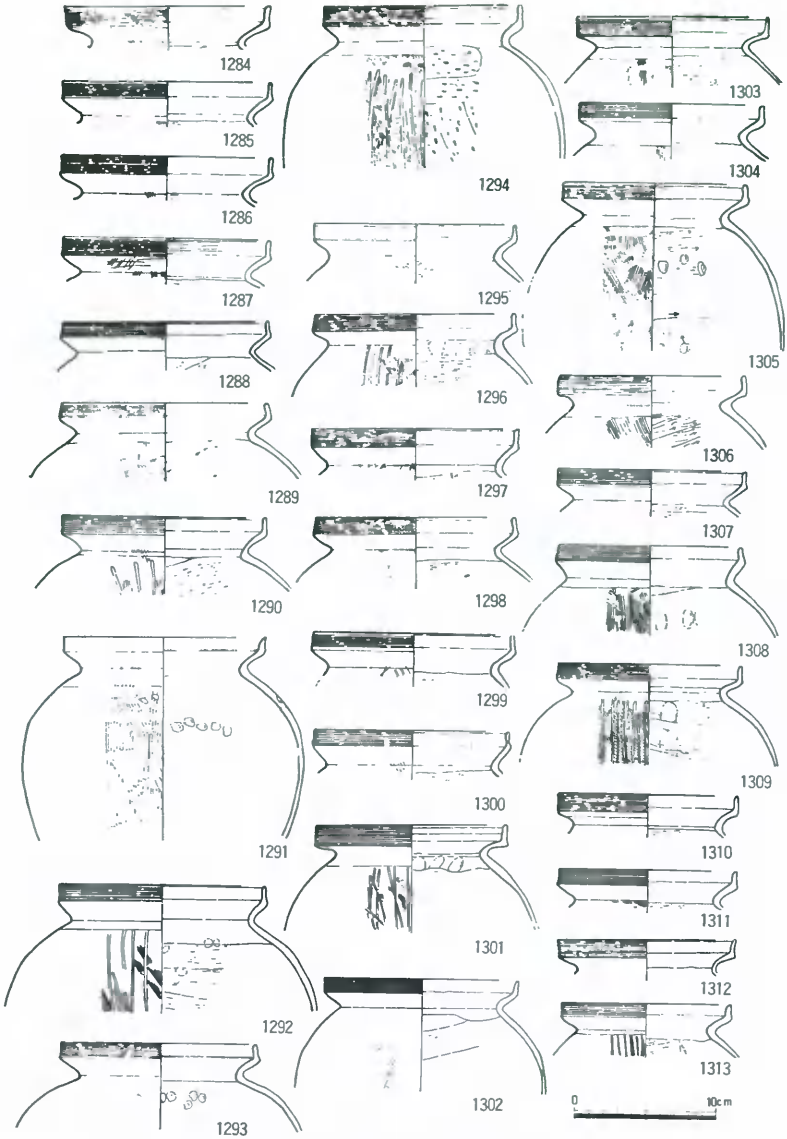
第295図　土器溜り－５出土遺物（３）



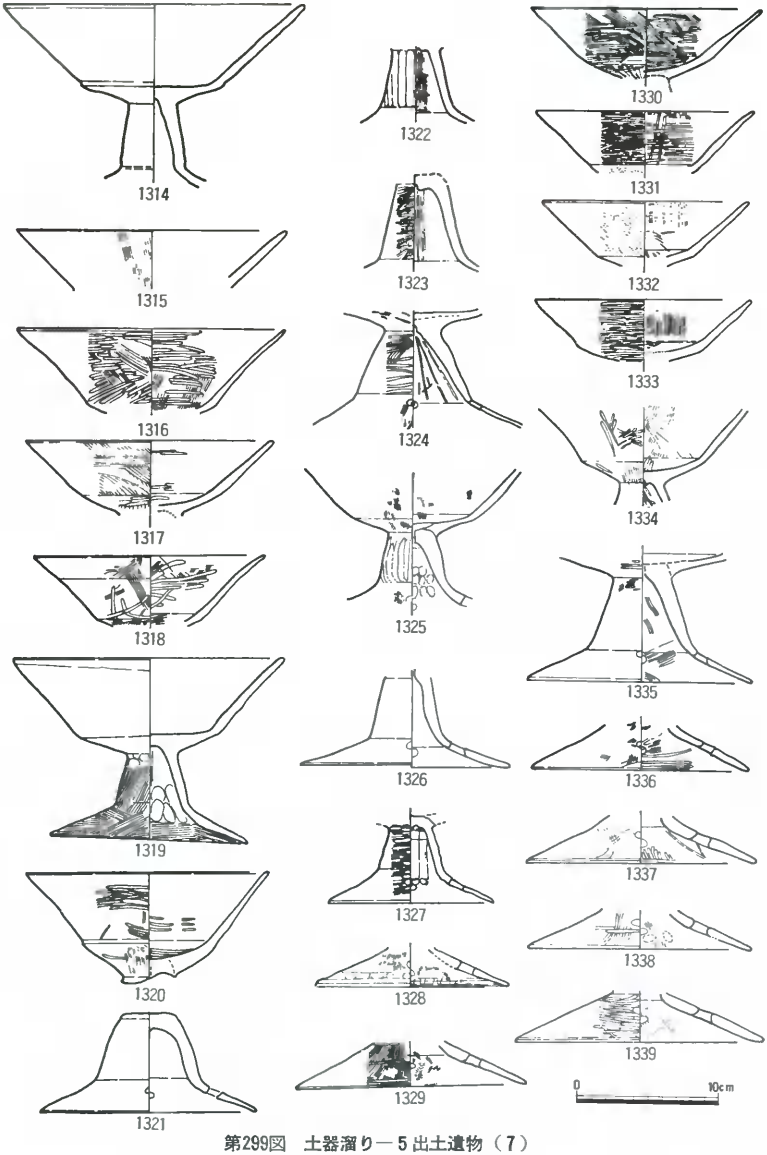
第296図　土器溜り―５出土遺物（４）



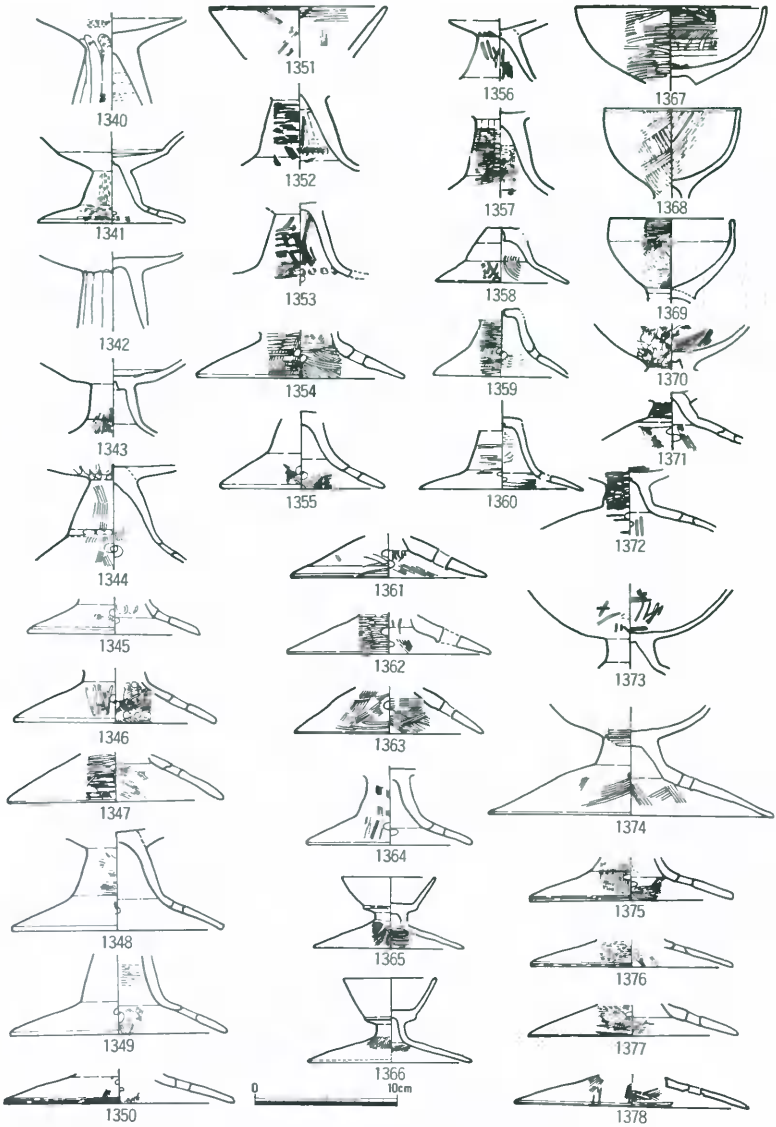
第297図　土器溜り－５出土遺物（５）



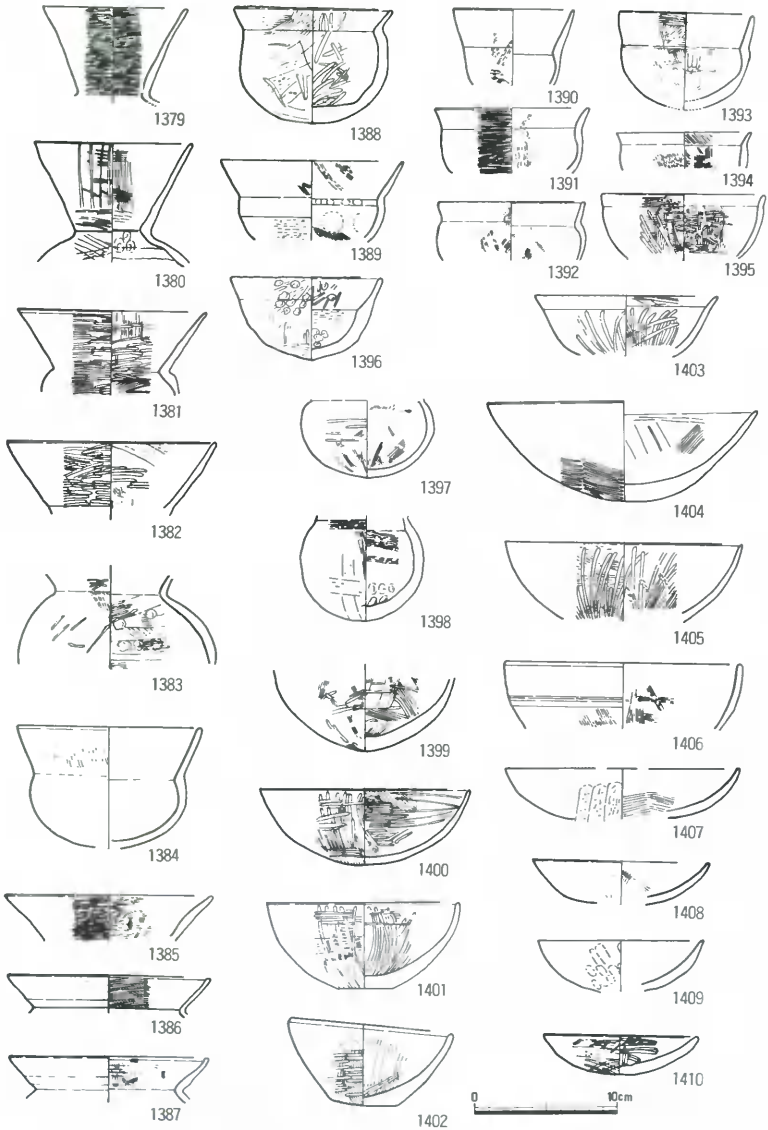
第298図　土器溜り－５出土遺物（６）



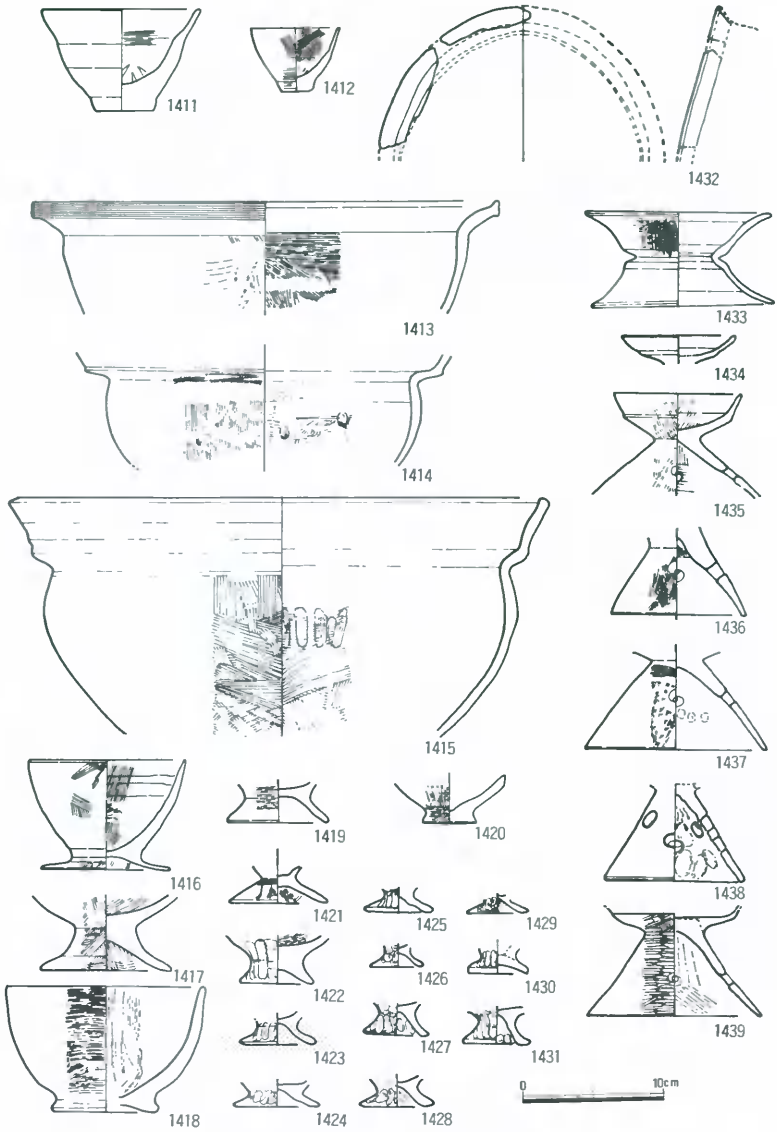
第299図　土器溜り－５出土遺物（７）



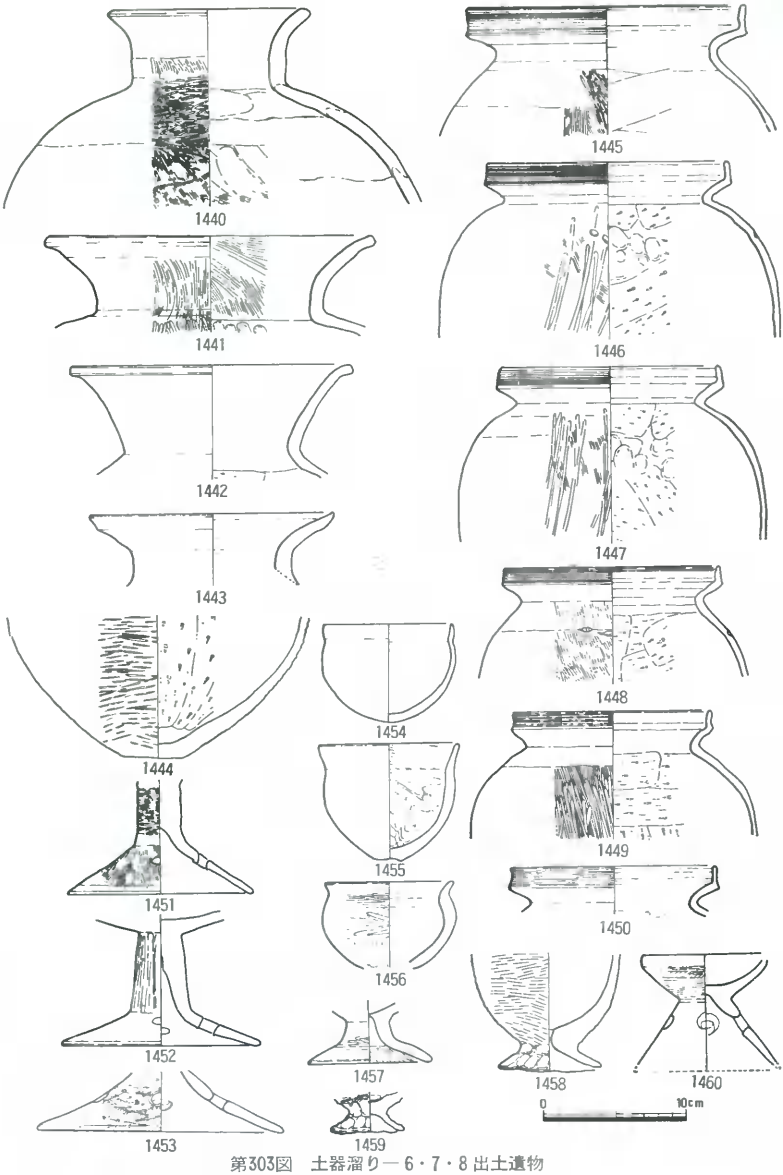
第300図　土器溜り－５出土遺物（８）



第301図　土器溜り－５出土遺物（９）



第302図　土器溜り－５出土遺物（10）



第303図　土器溜り―６・７・８出土遺物

種類も壺・甕・高杯・鉢・器台・製塩土器等多器種に亙っている。**1208**は，土器溜りのほぼ中央部から出土したもので，体部上半は一部分が出土したのみで全体の型は，明らかではないが，端部の形状から，須恵器の飾り高杯等にみられる構造船のようなものが想定される。

土器溜り－6（第303図）

208Hの北端で，土器溜り－5の南西部に隣接して検出されたもので，4×3mの楕円形の範囲に，台付鉢**1458**等の土器片の出土しているもので，土器溜り－5と一括されるものであるかもしれない。時期は，出土遺物等から百・古・Iと考えられる。

土器溜り－7（第303図）

208Hの土器溜り－8のすぐ西隣において検出された土器溜りである。径2.6m程のほぼ円形の範囲で，甕**1445**等の土器片の出土しているもので，土器溜り－8に一括されるものであるかもしれない。時期は，出土遺物から百・古・Iと考えられる。

土器溜り－8（第303図，図版112）

208Hから209Hにかけての東端部において検出された土器溜りで，長さ14m・幅3.3mの範囲に土器片がほぼ均一に検出されたもので，壺**1440**～**1443**，甕**1444**・**1446**～**1450**，高杯**1451**～**1453**小型の鉢**1454**～**1456**，器台**1460**，製塩土器**1459**等が出土している。（内藤）

第304図　土器溜り－9（1/40）

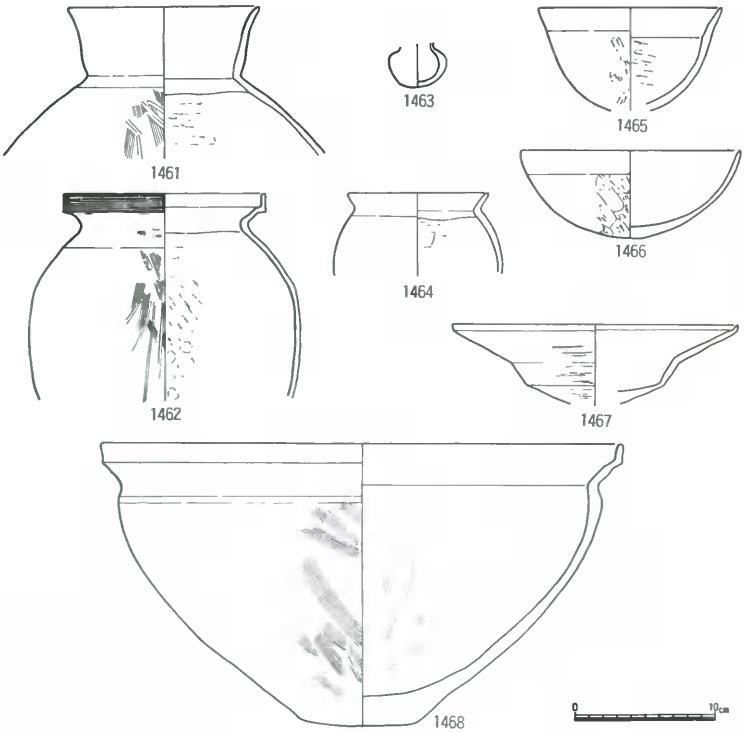
土器溜り—9（第304・305図）

209Ｊ南西部から検出された。中央部にむかって緩く窪む溜りで，400×250cm，深さ15cmを測り，溝—119を切っている。窪みには暗灰褐色粘質土が堆積していた。遺物は窪み内全体から出土しているが，特に西部に多くみられた。なお，遺物は大半が破片であったが，**1468**は完形に復元出来た。

これら遺物は百・古・Ⅰ期に属するものと考えられる。

土器溜り—10

209Ｊの南東部から検出された。一辺約５ｍの隅丸方形を呈し，深さ約20cmを測る。断面形は前記土器溜り—９と同様，中央部が緩く窪むもので暗灰褐色粘質土が堆積していた。遺物は土師器小破片のみであったが，その特徴から土器溜り—９と同時期と考えられる。（江見）



第305図　土器溜り—９出土遺物

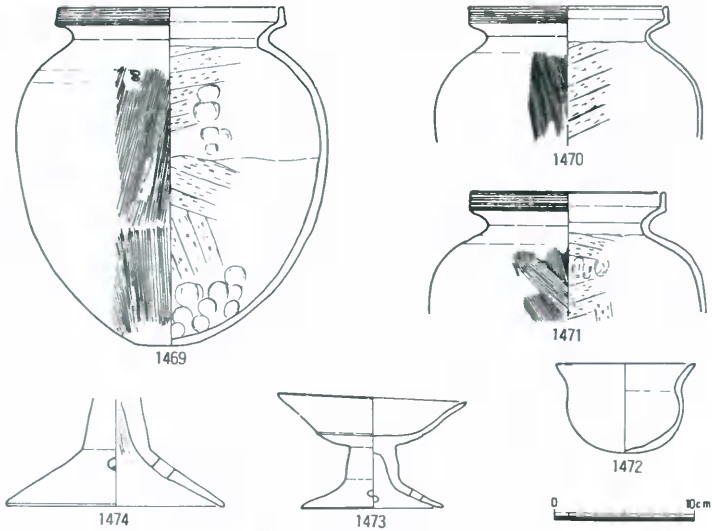
土器溜り―11（第306図）

208Ｋ南端の竪穴式住居―13東側に検出した木炭（灰）層の広がりを伴う土器群と方形の土壙との一括遺構である。検出した土器の広がりは，東西2.2ｍ，南北２ｍ程度の小範囲に，何らの掘り込みを持たずほぼ水平な面に広がっている。土器溜り中央には，木炭（灰）の水平な広がりや炭化材の出土も認められた。この土器溜りを持つ遺構の性格については，竪穴式住居の施設も想定されたが，柱穴や周溝等の検出は行えず，断定はできなかった。

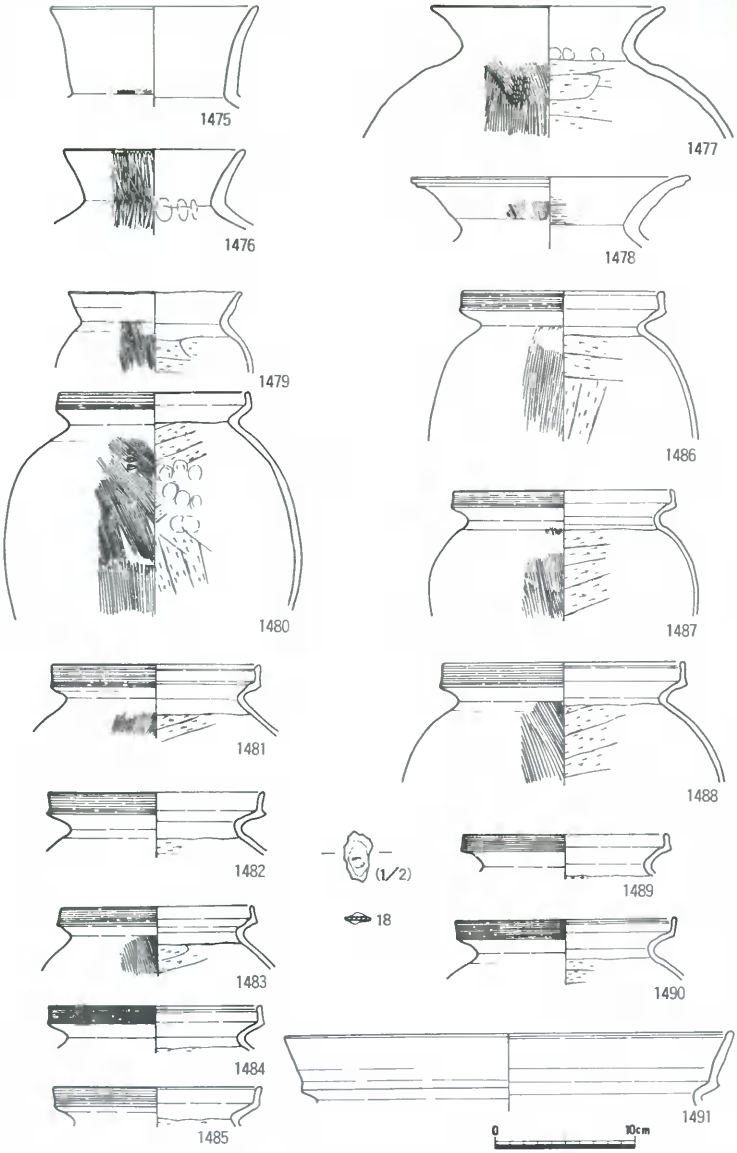
遺構の時期は，出土遺物から，百・古・Ｉと考えられる。

土器溜り―12（第306～308図，図版113―2，114）

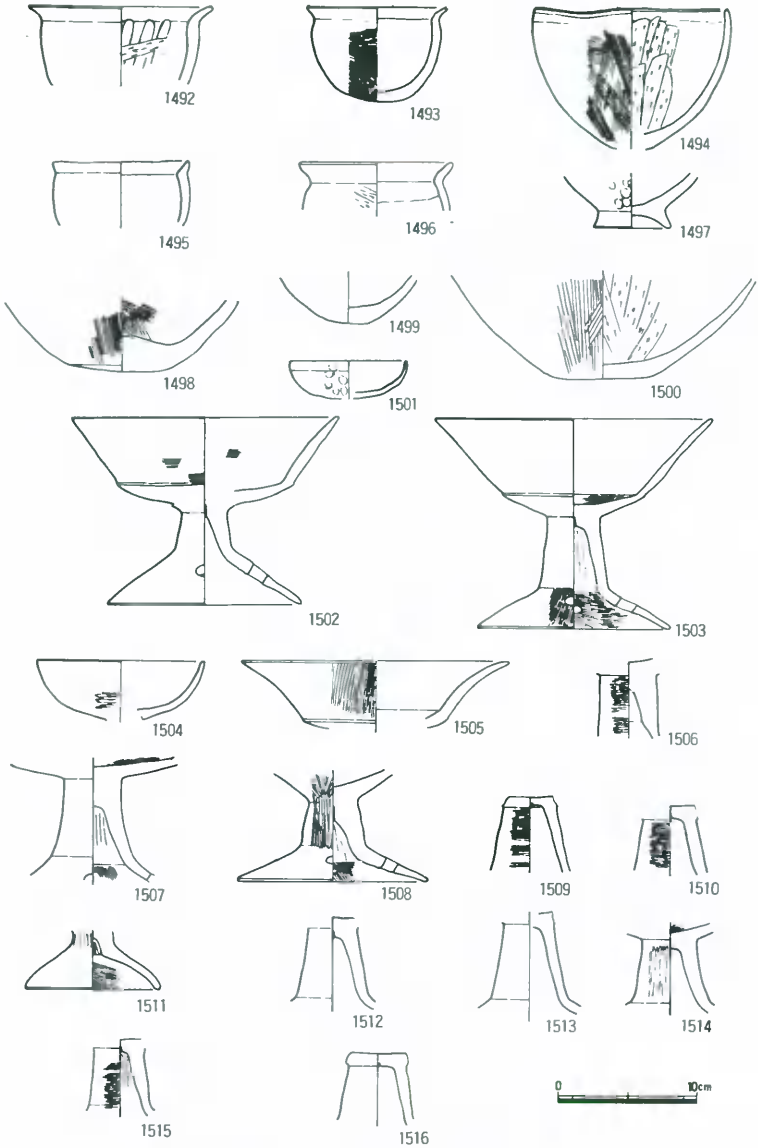
208・９Ｋ間に検出した長方形の土器溜りである。当初，南側2/3程の長方形部分を竪穴式住居を想定して検出作業を行ったが，底面が水平を示さず，浅いくぼみ状を呈したことから土器



第306図　土器溜り―12（1/30）・土器溜り―11出土遺物



第307図　土器溜り―12出土遺物（１）

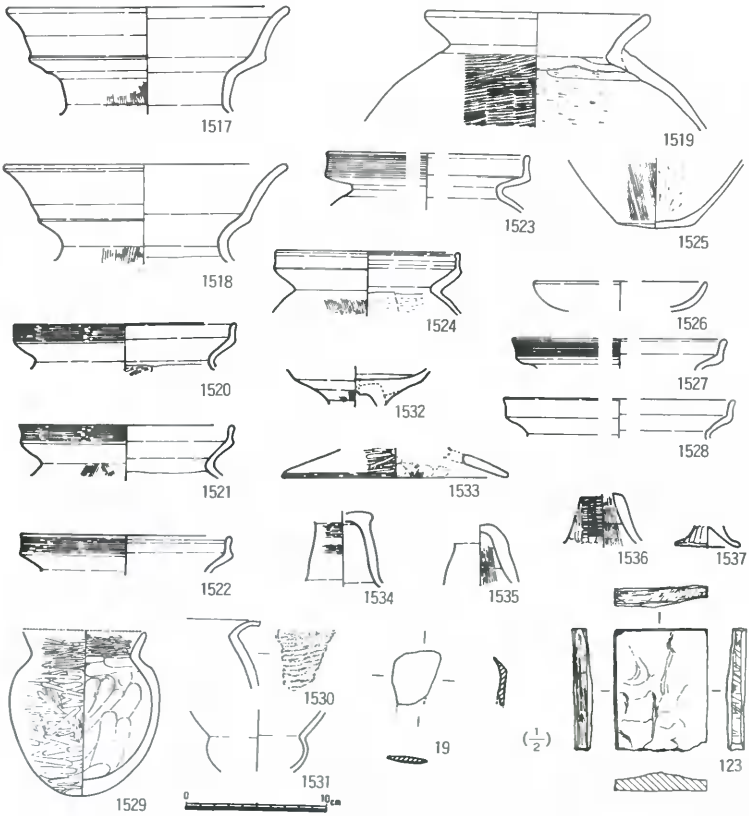


第308図　土器溜り―12出土遺物（２）

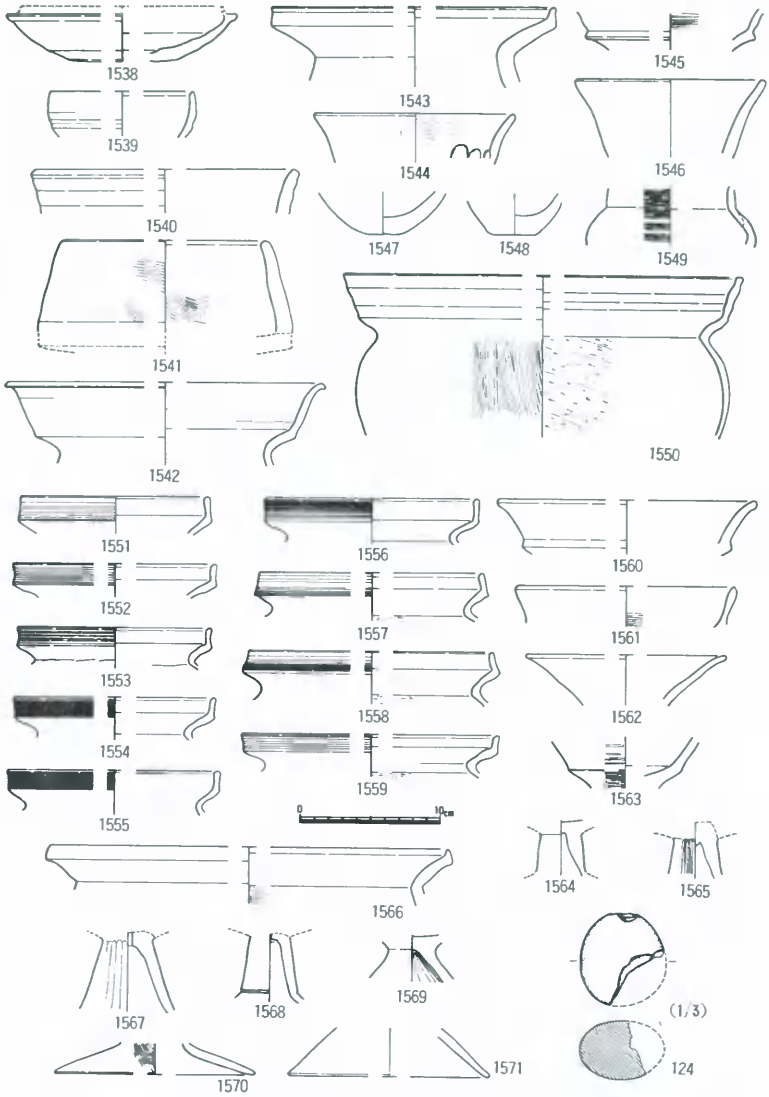
溜り状のものと断定した。また，北端1/3についても土器の広がりが認められ，それぞれ別の土器溜りとして取扱かった。しかし，報告書作成段階で，検出状況や図面・遺物の出土状況を検討した結果，同一の土器溜りが拡がったものと判断したため同一遺構として掲載した。

溜りの広がりは，南北7.5m，東西3.5mの長方形を呈し，中央部分が南北方向に浅く溝状に一段低く下っている。深さは中央部で平均20cm程，最大25cmを測る。土器の広がりは，北端と，南端の２ケ所に集中していた。遺構内堆積土は，木炭を含む灰茶褐色砂質土で層序の区別はできない。

時期は，出土遺物から百・古・Ｉと考えられる。　（山磨）



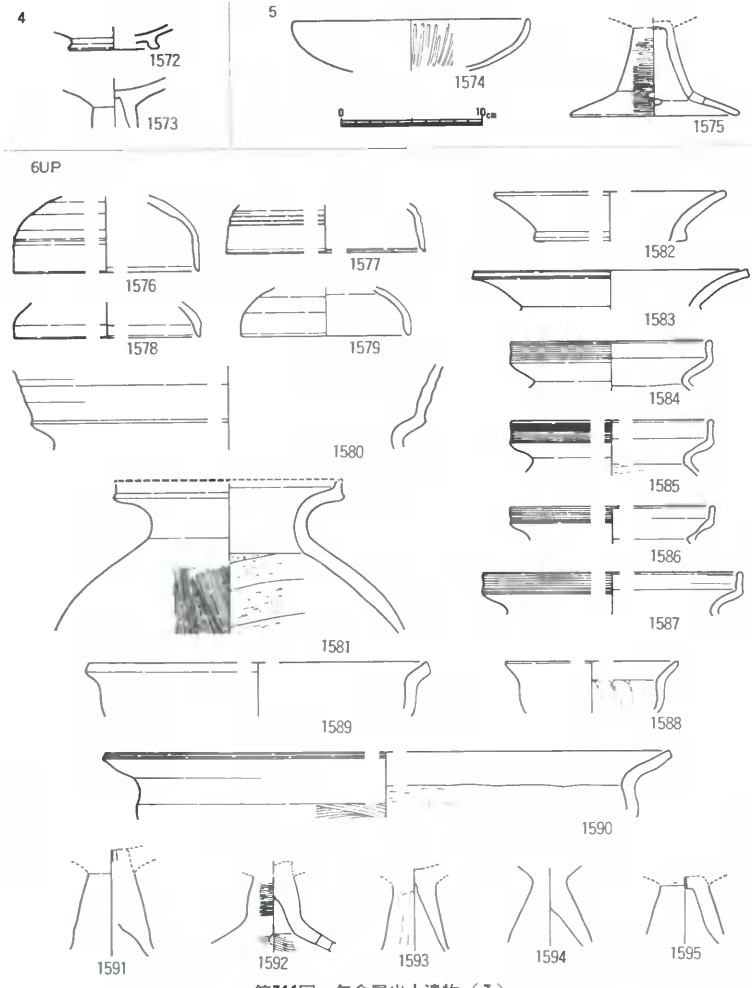
第309図　包含層出土遺物（１）



第310図　包含層出土遺物（２）

（７） 包含層出土遺物

第310・311図はともに209Mの包含層から出土した土器である。各区の左上の数字は第153図の土層番号と対応している。すなわち，第310図の６ DOWN は第153図６の層の下半を示す。第311図の４は４の層，５は５の層である。第153図の６の層である暗灰色粘性微砂層には多量



第311図　包含層出土遺物（３）

の遺物が含まれていたので，この層を上下二分して図示した。若干の弥生式土器を含むが，大半は百・古・Ⅰから6世紀までの遺物である。この図をみる限り，上下で時間的な差異はあまりみられない。4と5の層については遺物が僅なため，図示した土器でこの層の時代を判断することはできない。なお，第309図の**1519**・**1523**・**1525**は第153図の17の層出土で，とくに**1519**はその上面で出土した。 (岡本)

7. 古代・中世・近世の遺構・遺物

高縄手A調査区では，明確に時期決定のできた遺構はあまり多くない。古墳時代よりも新しく，近代にまで下がらないと思われる遺構を含め，溝8本・土壙1基および畝状遺構2が確認された。

(1) 溝

溝—125（第312図）

206・7Gから207Hにかけてゆるくカーブしながら調査区北端に北西から南東方向に検出した浅い溝状の遺構である。検出長25m，幅60〜100cm，深さ5〜6cm程を測る。断面は浅いスリ鉢状を呈し灰色粘質土が堆積している。溝内には一部中央に高い部分が認められることから複数の溝，あるいは掘り替えの可能性もある。

溝内出土遺物は，細片のため図示不可能であったが，断面観察や検出面，堆積土から中世の時期と考えられる。

溝—126

207G区南端に検出した溝状の遺構である。検出長19m，幅60cm，深さ10cm程を測り，ほぼ直線で東西方向に延びている。土層断面の観察や遺物等から近世以後のものと考えられる。

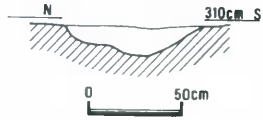
溝—127

207Ⅰ調査区北端に検出した全長16m，幅40〜100cm，深さ5〜6cm程を測り，ゆるくカーブした溝である。断面は浅いスリ鉢状を呈し，灰色粘質土が堆積している。溝底部はほとんどレベル差が無い。

出土遺物は，細片のため図示不可能である。検出面や堆積土，出土遺物等から中世の遺構と考えられる。

溝—128〜131（第314図）

208・9Kにて古墳時代包含層を掘り込んだ状況で検出した南北方向に流走する複数の溝である。断面観察及び検出プランから幅50〜100cm，深さ10〜20cm程度の4本の溝が重複していることが認められた。

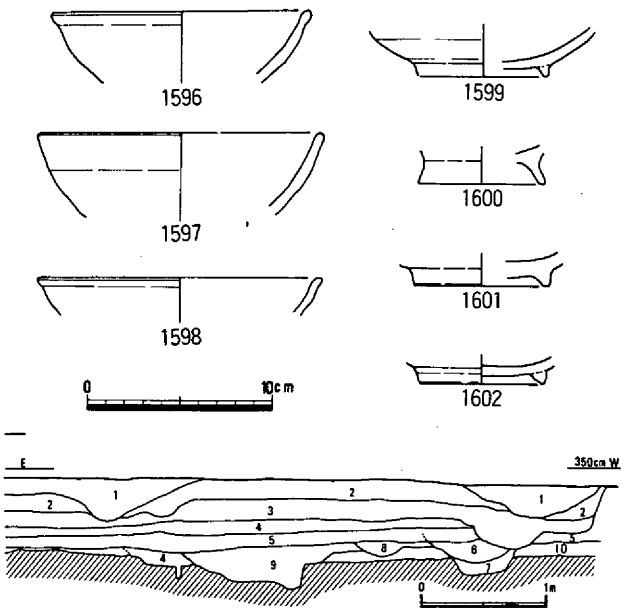


第312図 溝—125（1/30）

第313図　高縄手Ａ調査区古代以後遺構図（1/500）

埋土はいずれも灰白色を基調とする粘質土で溝底面には砂の堆積が一部薄く認められた。底面レベルは南に向ってわずかに下降しており，検出長20mの調査区内で－10cm程度のレベル差を示している。当遺構は未検出の南側にもほぼ直線的に連続していたものと想定される。

溝内からは，土師質椀，図示不可能であったが須恵器片，瓦器片の出土も認められ中世（鎌倉時代）を中心とした時期が考えられる。（山磨）



1. 撹乱土
2. 耕　地
3. 黄褐色砂
4. 青灰色粘質土
5. 黄灰色粘質土
6. 灰色粘質土
7. 灰白色粘質土
8. 暗灰色粘質土
9. 灰褐色粘質土
10. 灰茶褐色砂質土

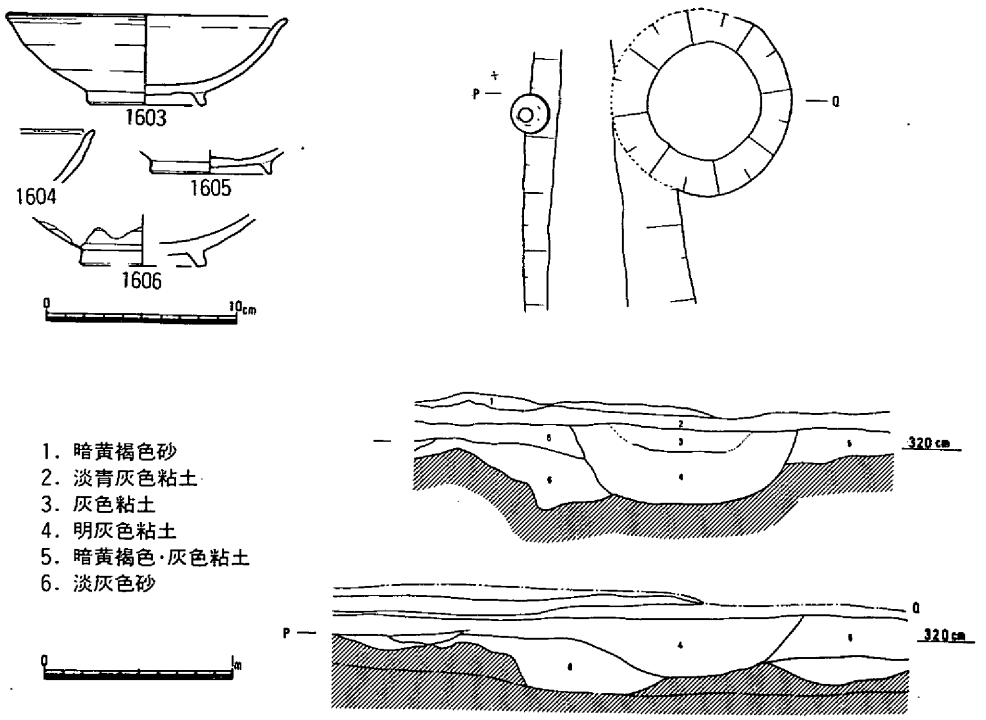
第314図　溝―128～131（1/60）・出土遺物

溝―132，土壙―79（第315図）

203Lの中央下位より205Lに向って南北に位置し，全長約27m，最大幅115cm，深さ23.5cmを測る。断面形状はU字形を呈している。削平を受けたと考えられ，北側では消失しており，下流に向い徐々に深さをましている。溝底には淡灰色砂が堆積しており，伴出遺物として**1603～1606**の土器があげられる。**1603**の早島式の椀は完形品であり，溝上層より出土している。

時期は12世紀後半・末に比定することができる。

また，溝―132は土壙―79によって左岸肩口を切られており，溝の排絶後に5層の暗黄褐色，灰色粘土等を中心とする堆積後の所産である。遺物は検出できなかったが，状況より中世の土壙と考えられる。（高畑）



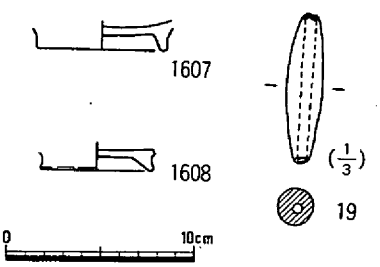
第315図　溝―132，土壙―79（1/40）・出土遺物

（２）畝状遺構

高縄手Ａ調査区においては，208Ｊの南東部および，207・８Ｌにおいて複数の窪み状の溝が南北方向に走るのが確認された。208Ｊのものは，わずか長さ８ｍ・幅1.2ｍ程の範囲で幅15～30cm・深さ２～３cmの切れぎれの窪み状の溝に灰白色粘質土の堆積しているのが確認された。また，207・８Ｌにおいては，長さ33ｍ・幅８ｍの範囲に，幅50～15cm・深さ２～３cm最も深いもので６～７cm測る，やはり切れぎれの窪み状の溝に灰白色粘質土が堆積している。これらには遺物等が含まれておらず時期等も判然としないが，検出状況等からみて中世以後の畑等の畝の跡ではないかと考えられるものである。

（３）包含層出土遺物

高縄手Ａ調査区においては，古代以降の遺構の検出は極めて少なく，遺物の出土もまれであった。第316図の遺物はいずれも207・８Ｌの灰白色粘質土から出土したもので，1607・1608は平安時代末から鎌倉時代初頭の「早島式」といわれている高台付の椀の破片である。（内藤）



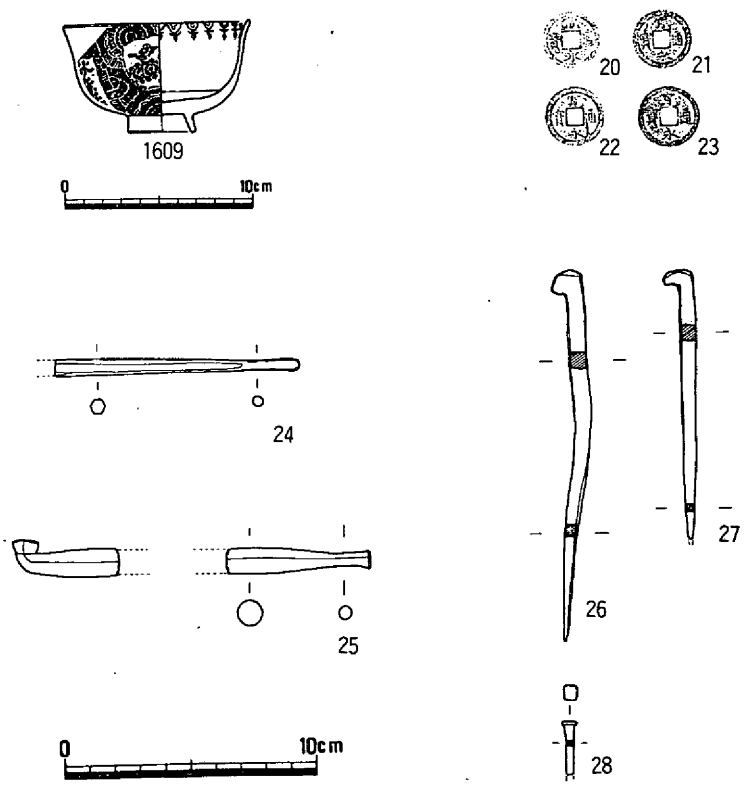
第316図　包含層出土遺物

8. 近代の遺構・遺物

近代墓（第317図）

203Lの溝―79，溝―72間より比較的まとまって出土したものである。調査前まで機能していた用水路の下位にあたり，グライ化現象の進んだ場所であり，遺構の存在は確認できなかった。その周辺より座棺の底を思わせる不整形の円板が出土している。

磁器の茶椀1点，釘3点，キセル2点，銭4枚である。茶椀外面には「秋意淡泊」の四字が刷り込まれており，明治以降のものと考えられ，これらの遺物より墓の可能性をも含んでいる。（高畑）



第317図　近代墓出土遺物

註

註1．高橋護氏（岡山県立博物館）から御教示を得た。記して感謝の意を表します。

註2．川越哲志「弥生時代の鉄製収穫具について」松崎寿和先生退官記念事業会編『考古論集』1977，3

註3．葛原克人他『百間川遺跡第一次調査概報』1977，3．P．3･9 においてB―23から出土の壺棺として報告されている。

第３節　高縄手Ｂ調査区

１．高縄手Ｂ調査区の概要

当該調査区は，東西総延長500ｍにわたる百間川沢田遺跡高縄手調査区のうち，ほぼ中央を南北に分断する旧河道より東側約250ｍ，幅40ｍの範囲を対象としている。調査区のグリッド番号はＮからＺ区の12区間である。いずれの地区も河川改修工事による低水路にあたる地区で，総面積10,000㎡程度である。行政区画では，岡山市沢田字高縄手に該当する。

この地区の基本層序は微高地部分（第318図左）に示した如くの層位が基本をなしている。以下その概要を説明する。

微高地・低位部とも第Ⅲ層までは，同様の堆積をなしている。第Ⅰ層は現代の耕作土層，第Ⅱ層は灰白色粘質土をなす土層で，百間川原尾島遺跡から沢田遺跡と広範に認められ中世を中心とする遺物包含層である。第Ⅲ層は灰褐色～暗灰褐色の粘質土層をなす。この土層も広く百間川の遺跡群を覆っており，古墳時代全般にわたる遺物包含層である。

次に微高地部分では，これ以下第15層まで弥生時代全期間にわたる包含層が続き，第16層の黄褐色粘土を基調とする基盤層に達する。

一方，低位部（微高地の一部）では第８層に人工的な掘削痕である水田層（暗灰色粘土）が広範囲に広がり，この埋積土である第７層の洪水砂層が水田層上面を覆っている。低位部では洪水砂埋土水田層以下に，下層の水田層が一部に認められる。

この調査区の自然地形は，西から東に向ってゆるやかな起伏が認められ，それぞれの地形に応じた土地利用が調査結果から認められた。

西端部の旧河道は，幅約40ｍあり，河道の底は平坦に近い（第321図）。東岸と西岸のいずれも縄文時代晩期の土器片を含んだ土層がある。この土層は河床面にも連続するが遺物はほとんど含まれていない。粘土質であることから縄文時代晩期の時点ですでに沼状を呈していたものと推定される。

上層には粘土層が数層あって，その上に水田面が形成されている。弥生時代末の洪水にあって埋没しているのは他の地域の水田と同様である。旧河道東岸の自然堤防状を呈している微高地は東西最大幅70ｍを測り，当調査区最大の微高地をなし，最も安定した地形を形成していたものと思われる。縄文時代晩期のものとしては微高地北端中央付近に土器溜り状の落込みが検出されている。多量かつ大形の土器片や石器等の出土から付近に遺構の存在が示唆される。

この微高地西端は，東側より若干高くなっており，この高くなったところに弥生時代前期か

ら古墳時代前期まで多数の溝が集中して掘られている。いずれも用水路と判断されるもので，東にのび水田に続くものもある。

古墳時代前期には，井戸・土壙などがあり溝群の東側には竪穴式住居も検出されている。古墳時代以後の遺構は，希薄でP～Q区間にわずかに掘立柱建物1棟・溝などを検出しているのみである。

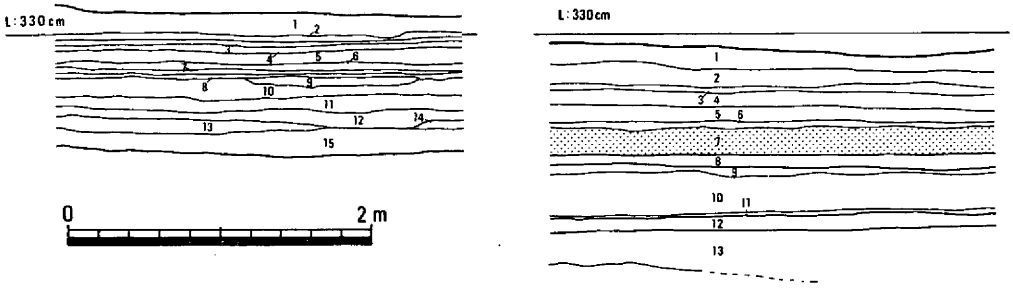
この微高地以東の検出遺構は弥生時代後期の埋没水田がほとんどを占め微高地・低位部のすべてにわたり水田・水利施設として利用されている。水田化された東西130mの調査区のほぼ中央に狭小な微高地が形成されている。この微高地をはさみ西側に幅70m程の浅い低位部，東側には大きくレベルが低下し，低湿地もしくは旧河道である様子を見せている。(第318図右・第323図)

埋没水田区画は，いずれも北西から南東方向に向き水田面・用排水路も同様に南東に向って下降している。自然地形を大幅に改革することなく地形にそった水田開発が行われた様子が見られる。

また，洪水砂による埋没水田以前の溝も水田面下や微高地上に掘削されている様子から水田開発の時間的な経過もとらえられている。

弥生後期の埋没水田以後の遺構は，希薄でわずかに古墳時代初頭の井戸や古墳時代の水田層が確認されたのみである。

古代の遺構としてはV・W区付近で柵列状の遺構などを検出している。　(正岡・山磨)



微高地

1. 暗灰色砂
2. 灰橙色微砂
3. 灰橙色微砂
4. 灰橙色微砂
5. 淡黄褐灰微砂
6. 白黄灰微砂
7. 淡黄灰粘土
8. 白灰色粘土
9. 淡灰黄色微砂質粘土
10. 淡灰褐色包含層
11. 褐灰土
12. 褐灰土
13. 淡灰黄褐土
14. 暗褐灰土
15. 暗褐灰土(淡黄褐土)
16. 淡灰黄色粘質土

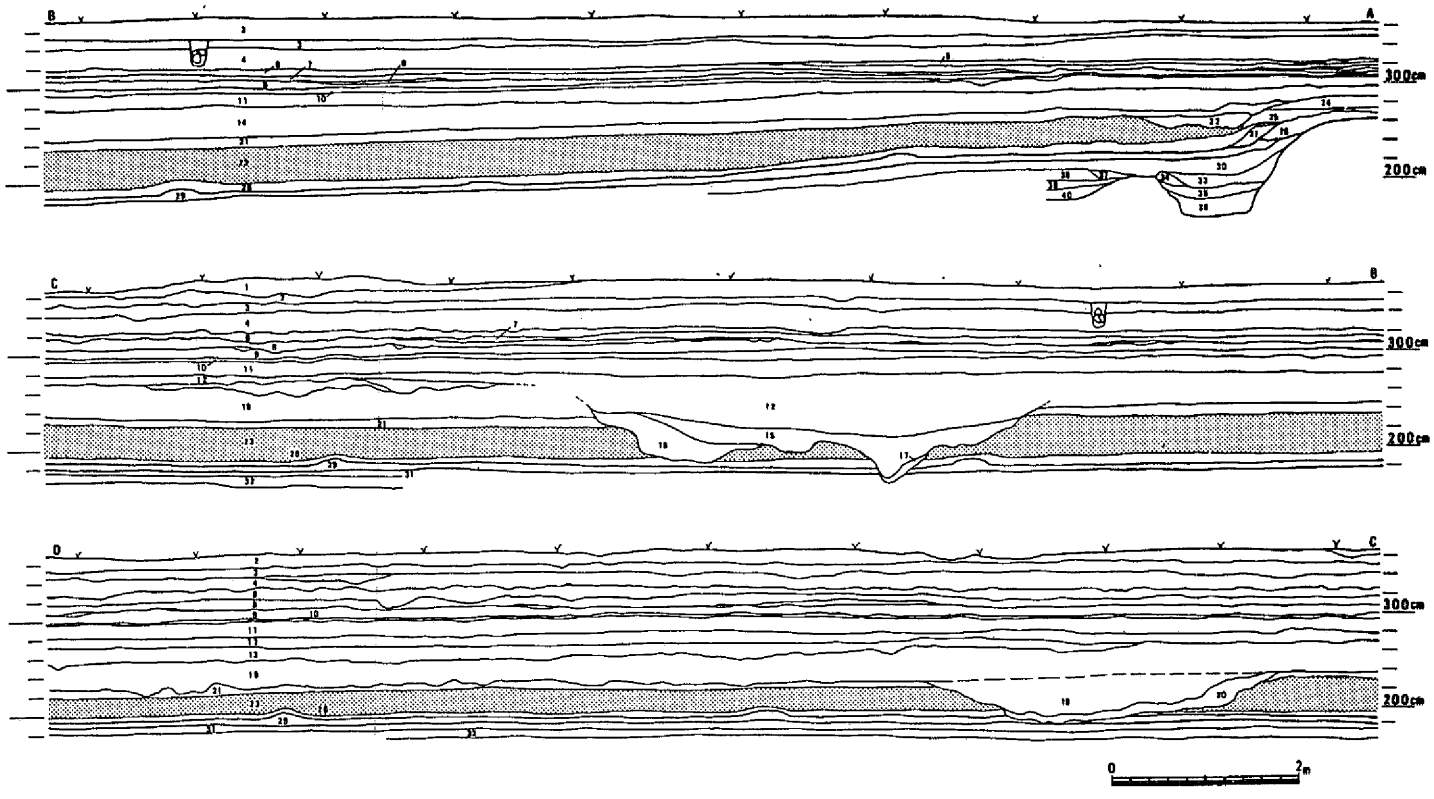
I　II　III

低位部

1. 耕　土
2. 床　土
3. 灰白色粘土
4. 淡灰色粘土
5. 灰色粘土
6. 暗灰褐色粘土
7. 洪水砂層
8. 暗灰色粘土(水田層)
9. 灰色粘土
10. 黄褐色土
11. 黒色粘土
12. 淡灰色粘土(下層水田層)
13. 暗灰褐色粘土(炭粒を含む)

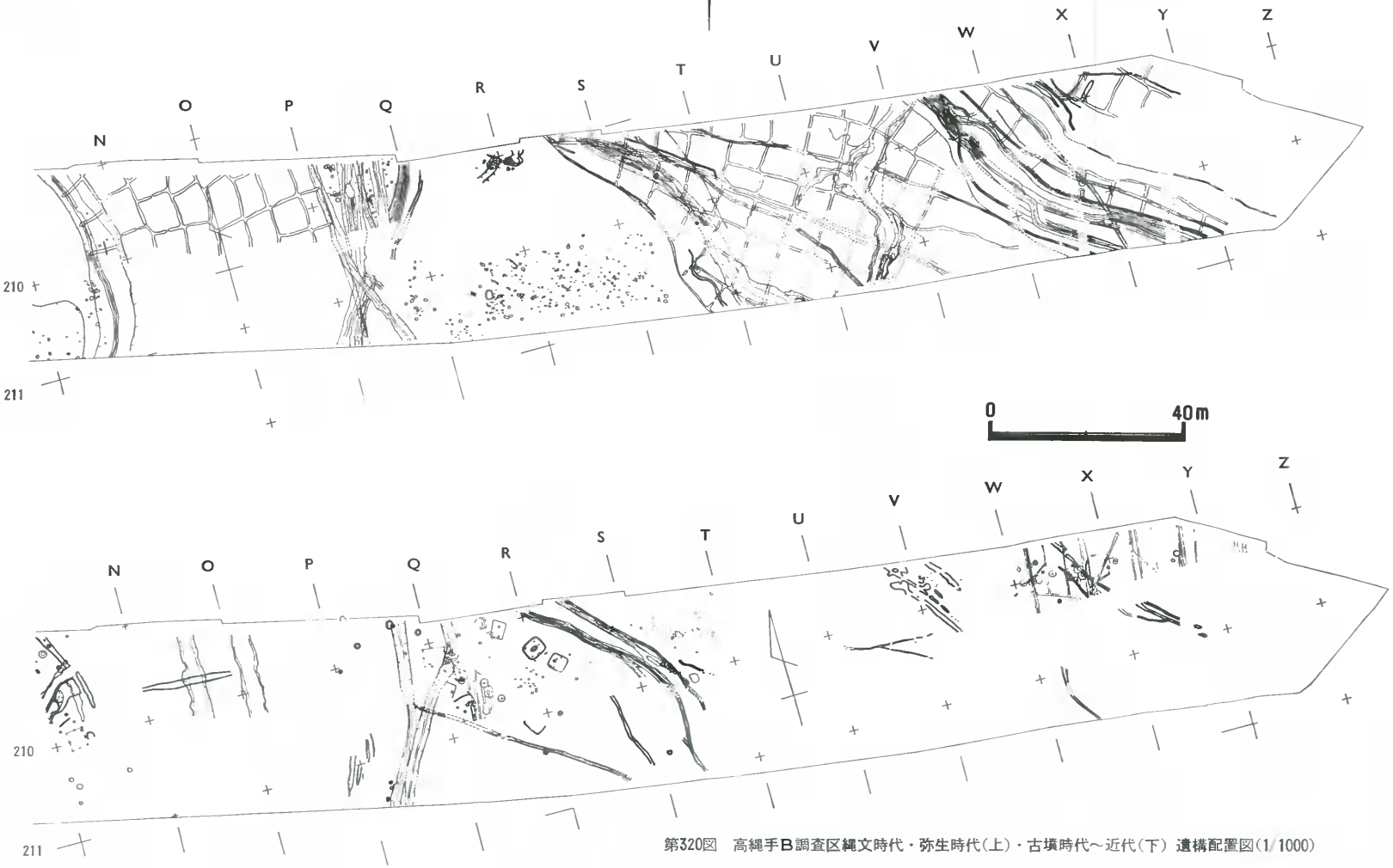
I　II　III

第318図　高縄手B調査区北壁柱状図 (1/50)

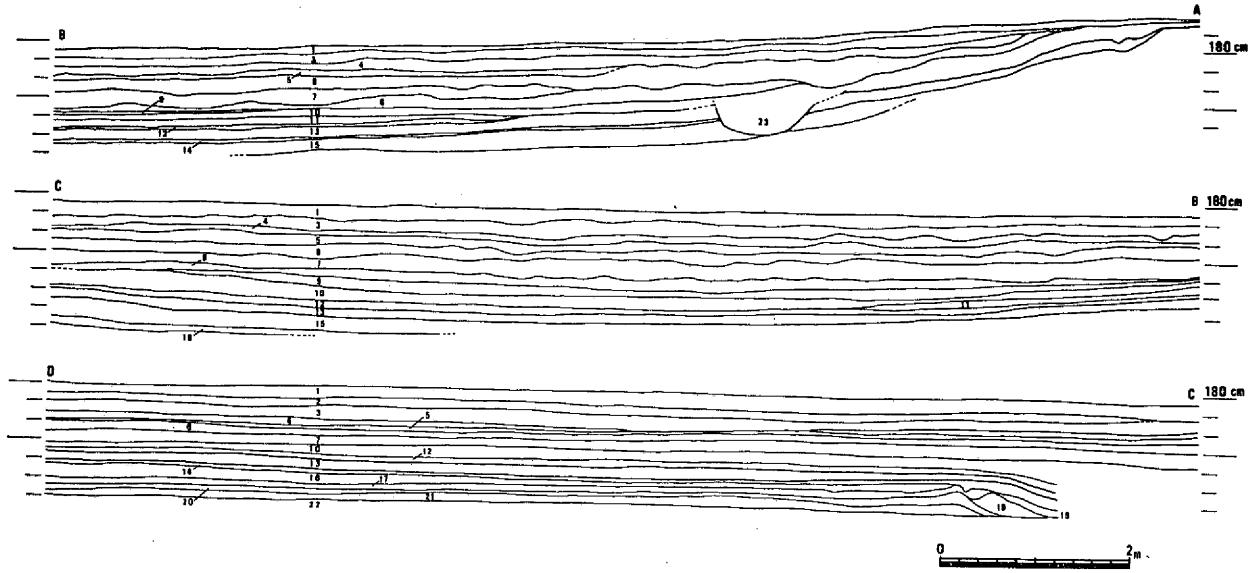


1. 黄灰色粗砂
2. 灰青色微砂
3. 灰褐色細砂
4. 灰黄色細砂
5. 淡灰色微砂混り粘土
6. 灰色微砂混り粘土
7. 淡灰色粘土
8. 灰色粘土
9. 灰白色粘土
10. 灰色粘土
11. 灰白色粘土
12. 淡灰色粘土
13. 暗灰青色粘土
14. 灰褐色粘土
15. 暗灰色粘土
16. 灰色粘土ブロック混り青灰色細砂
17. 青灰色細砂
18. 青灰色粘土
19. 黒色粘土
20. 淡灰色細砂
21. 灰色粘土（古墳時代水田層）
22. 灰青色粘土
23. 青灰色細砂
24. 淡灰色粘土
25. 淡灰青色粘土
26. 青灰色粘土混り細砂
27. 暗灰褐色粘土
28. 灰褐色粘土
29. 灰色粘土（弥生時代後期水田層）
30. 暗灰茶色粘土
31. 灰青色粘土
32. 暗灰青色粘土
33. 暗灰褐色粘土
34. 黄灰色粘土
35. 灰色細砂混り粘土
36. 暗灰青色粘土
37. 暗灰色粘土
38. 灰黄色粘土
39. 灰褐色粘土
40. 淡灰色粘土

第319図　O.P北壁土層断面（1/80）

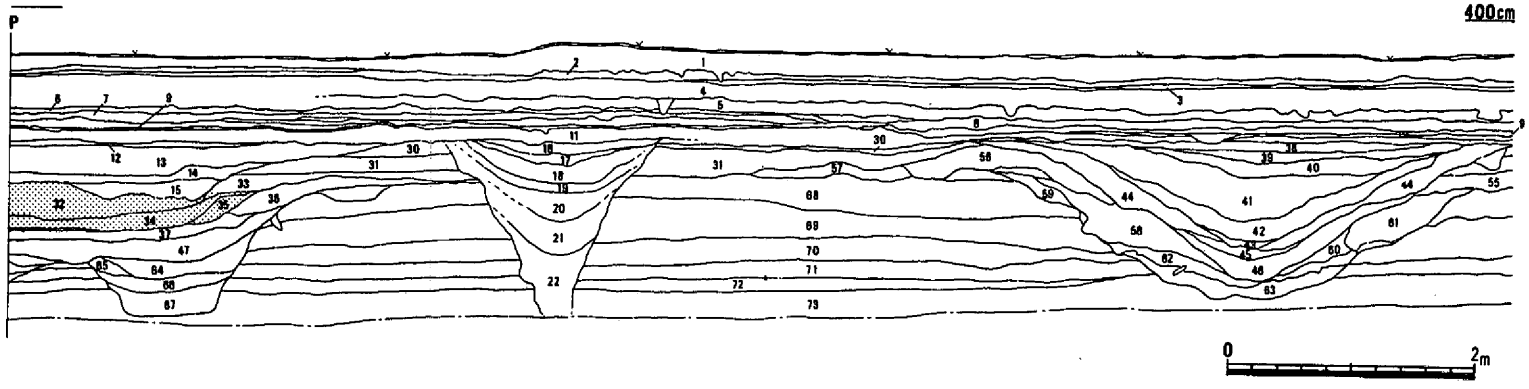


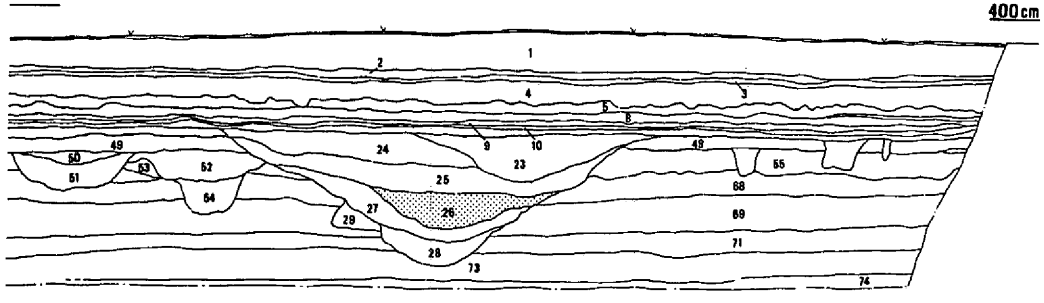
第320図　高縄手B調査区縄文時代・弥生時代(上)・古墳時代～近代(下)　遺構配置図(1/1000)



1. 灰青色粘土
2. ややうすい帯青黄色粘土
3. 淡灰色粘土
4. 淡青灰色粘土
5. 灰色粘土
6. 白色粘土
7. 淡灰色粘土
8. 暗灰色粘土
9. 灰白色粘土
10. 暗灰色有機質混り粘土
11. 灰色粘土
12. 青灰白色粘土
13. 灰色粘土(縄文時代晩期)
14. 青灰白色粘土
15. 青灰色粘土
16. 淡灰色粘土
17. 青灰白色粘土
18. 灰色粘土
19. 淡灰色粘土
20. 淡灰色粘土
21. 灰色粘土
22. 灰褐色有機混り粘土
23. 暗灰色粘土

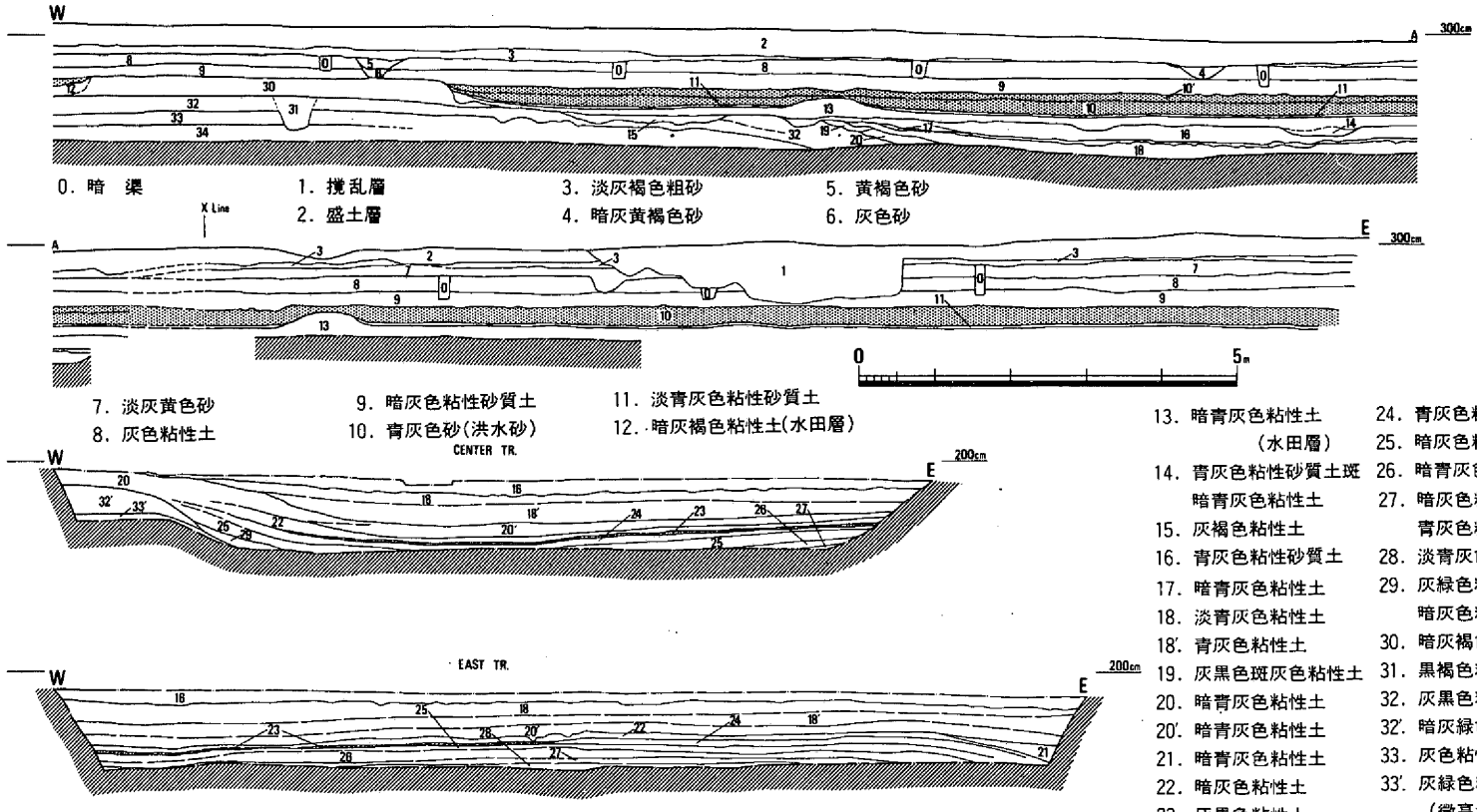
第321図　旧河道土層断面（1/80）





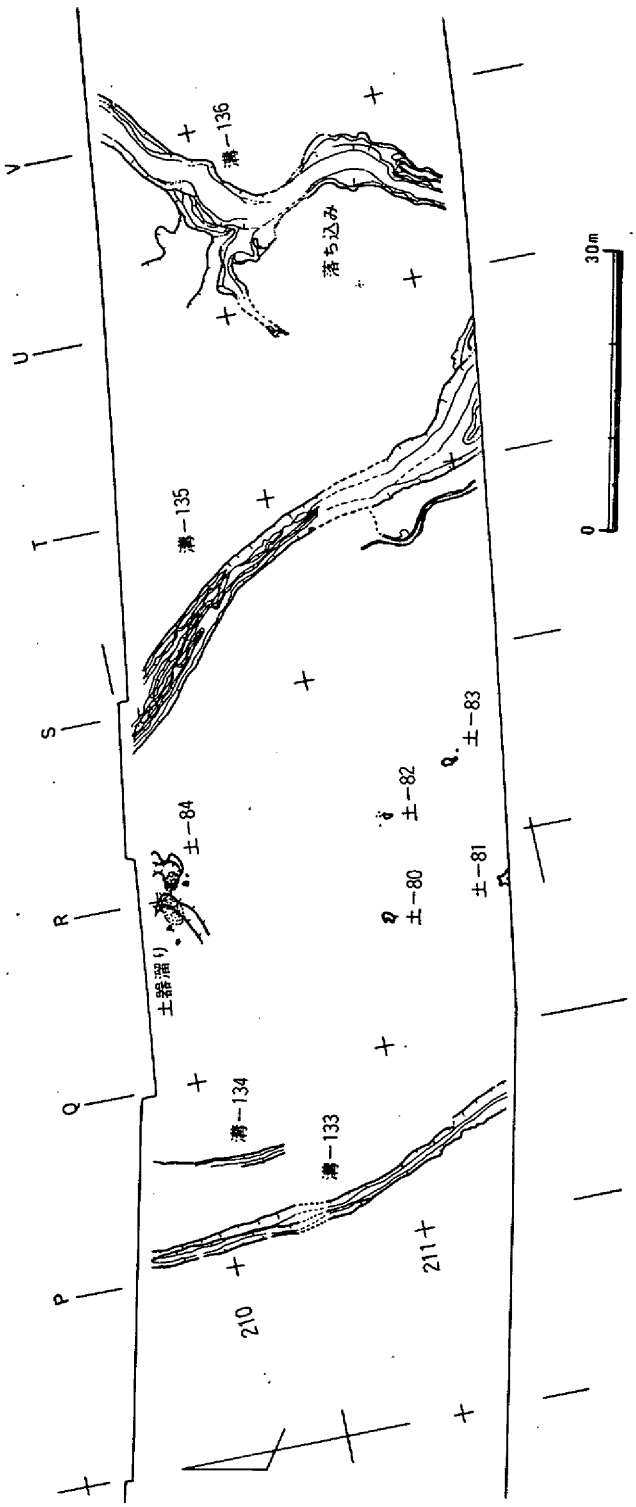
1. 水田層(現)
2. 茶褐色粗砂
3. 灰褐色土
4. 灰茶白色細砂
5. 灰白色細砂
6. 淡灰色粘土
7. 灰白色粘土
8. 灰褐色土
9. 灰色土
10. 暗灰色土
11. 淡灰色粘土
12. 淡灰白色粘土
13. 灰白色粘土
14. 灰色粘土
15. 灰青色粘土
16. 灰褐色粘土
17. 暗灰色粘土
18. 茶灰色砂(含、マンガン)
19. 暗茶灰色砂
20. 茶灰青色砂
21. 青灰色砂
22. 青灰色粘土
23. 茶灰色粘土(含、炭)
24. 茶灰色粘質砂
25. 茶灰色粘土
26. 茶灰青色粗砂
27. 青灰茶色粘土
28. 青灰色粘土
29. 茶灰色粘土
30. 灰色土
31. 淡灰色粘土
32. 灰黄色砂
33. 灰褐色土
34. 灰色砂
35. 暗灰褐色土
36. 灰茶褐色土(含マンガン)
37. 灰色粘土(水田層)
38. 灰色土
39. 茶灰色砂
40. 明茶灰色土
41. 茶灰色粘質砂
42. 茶灰色砂
43. 茶灰色粘土
44. 灰茶色砂
45. 暗灰色粘土
46. 青灰色粘土
47. 暗灰色粘土
49. 灰茶色粘土
50. 茶灰色粘土
51. 灰茶色粘土
52. 茶灰色粘土
53. 明茶灰色粘土
54. 茶灰色粘土
55. 茶灰色土
56. 黄茶色土
57. マンガン粒多い
58. 青茶灰色土
59. 茶灰色砂
60. 茶灰色土
61. 灰茶色土
62. 青灰色粗砂
63. 青灰色粘土
64. 暗灰褐色土
65. 黄灰色土
66. 灰色土
67. 暗灰青色粘土
68. 茶灰褐色土
69. 暗灰色微砂
70. 黄褐色微砂
71. 暗灰青色粘土
72. 暗青灰色粘土
73. 暗青灰色粘土
74. 黄灰色砂質土

第322図　P・Q北壁土層断面（1/60）



13. 暗青灰色粘性土（水田層）
14. 青灰色粘性砂質土斑暗青灰色粘性土
15. 灰褐色粘性土
16. 青灰色粘性砂質土
17. 暗青灰色粘性土
18. 淡青灰色粘性土
18′. 青灰色粘性土
19. 灰黒色斑灰色粘性土
20. 暗青灰色粘性土
20′. 暗青灰色粘性土
21. 暗青灰色粘性土
22. 暗灰色粘性土
23. 灰黒色粘性土（炭を大量に含む）
24. 青灰色粘性土
25. 暗灰色粘性土
26. 暗青灰色粘性土
27. 暗灰色粘性土斑青灰色粘性土
28. 淡青灰色粘性土
29. 灰緑色粘性土斑暗灰色粘性土
30. 暗灰褐色粘性土
31. 黒褐色粘性土
32. 灰黒色粘性土
32′. 暗灰緑色粘性土
33. 灰色粘性土
33′. 灰緑色粘性土（微高地基盤層）
34. 灰色微砂

第323図　W・X北壁・トレンチ土層断面（1/100）



第324図　縄文時代・弥生時代（前・中期）遺構配置図（1/800）

2.　縄文時代の遺構・遺物

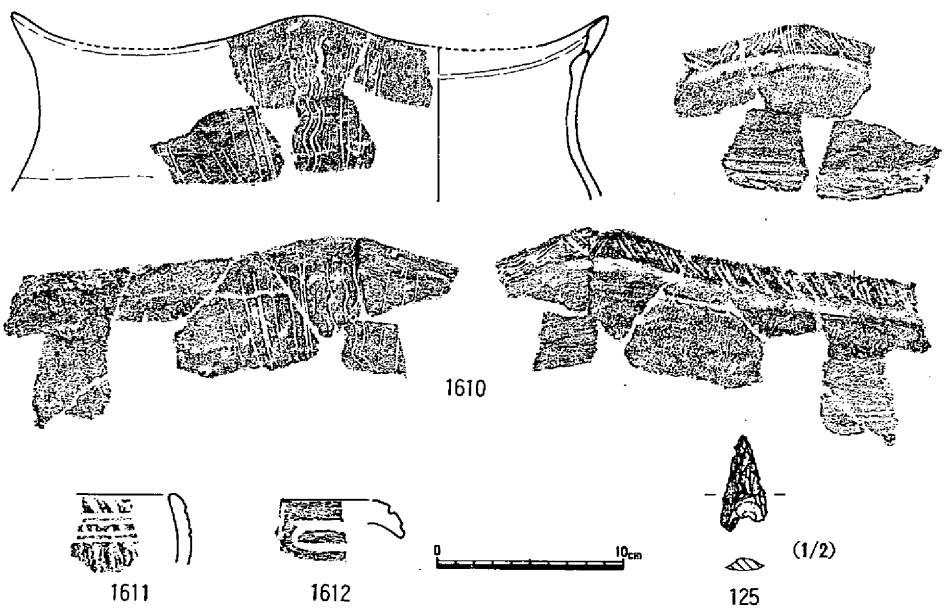
本調査区では，東側微高地の下部で縄文時代後期の遺物を包含する堆積が確認され，後期の段階で沖積地への進出が明らかになった。また，西側の微高地では縄文時代晩期の遺構が検出され多量の土器，石器が出土した。

（1）斜面堆積

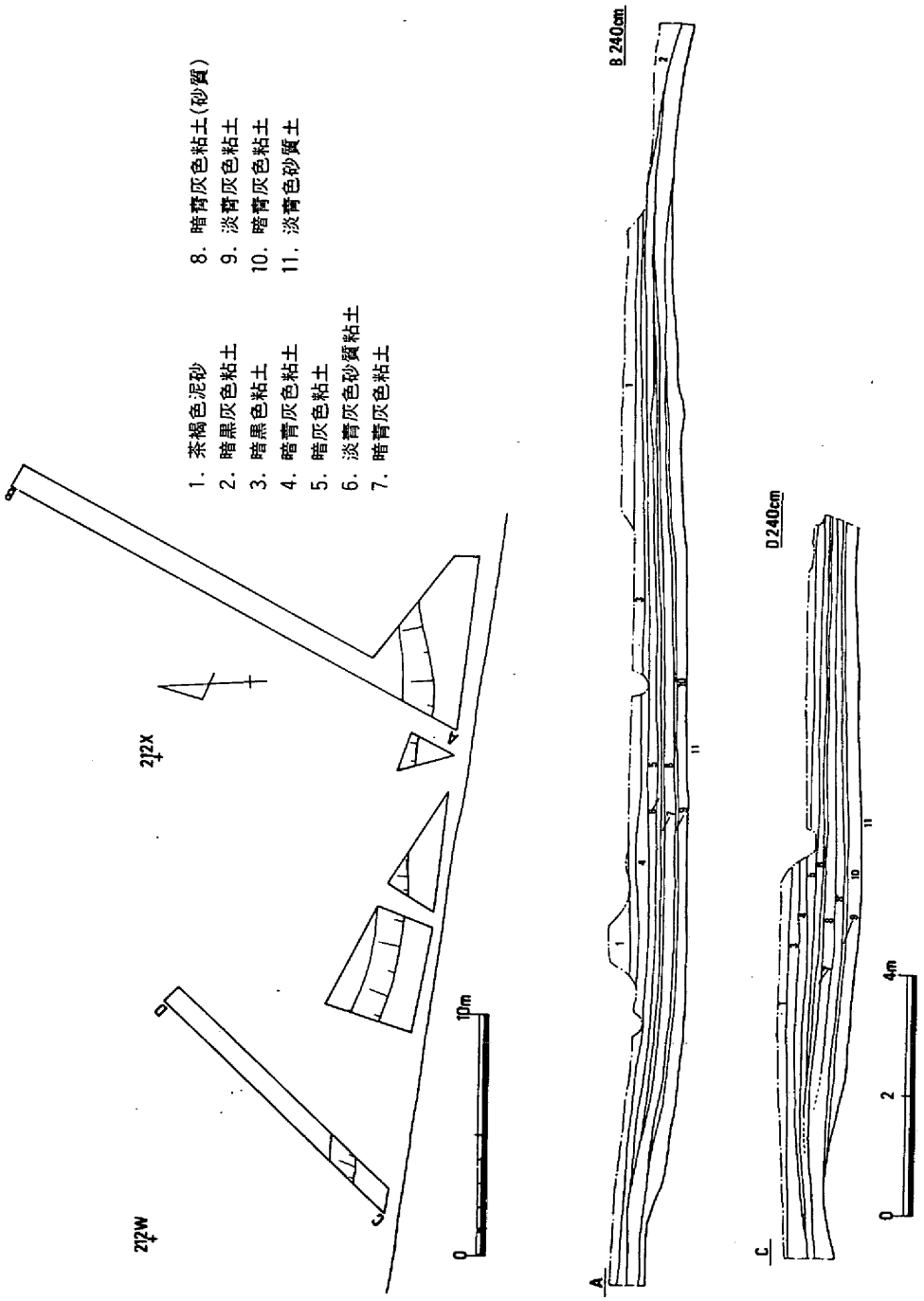
斜面堆積―4（第325・326図）

この地点は，調査区東側の微高地の下部に位置する。この微高地には，いわゆる縄文時代晩期～弥生時代前期以後の基盤層である黄褐色土が存在する。この黄褐色土下に，土層確認のトレンチを設け掘った結果，下層に縄文時代後期の包含層の存在が明らかになった。第326図の4層が黄褐色の基盤層でその上層の第3層が凹部に存在する縄文時代晩期の包含層である。その下層に第11層を基盤層とする幅約16～17cmの凹部が存在し，北西～南東方向にその凹部が続く。縄文時代後期の遺物は，このレンズ状に堆積した第8～10層から出土したものである。遺物は，南側の第11層の高位部及び肩口に多く検出された。また，この高位部の一部には，炭・焼土が点在することが確認された。出土した土器は，残存状態もよく調査区南側に居住域の存在する可能性も考えられる。この第11層は，縄文時代後期の基盤層と考えられ，上層に存在する縄文時代晩期以後の基盤層と合せ2面の基盤層があるといえよう。この地域が，沖積化していく過程で，部分的に先行する微高地上に縄文時代後期の段階に進出したものと考えられる。

（中野）



第325図　斜面堆積―4出土遺物

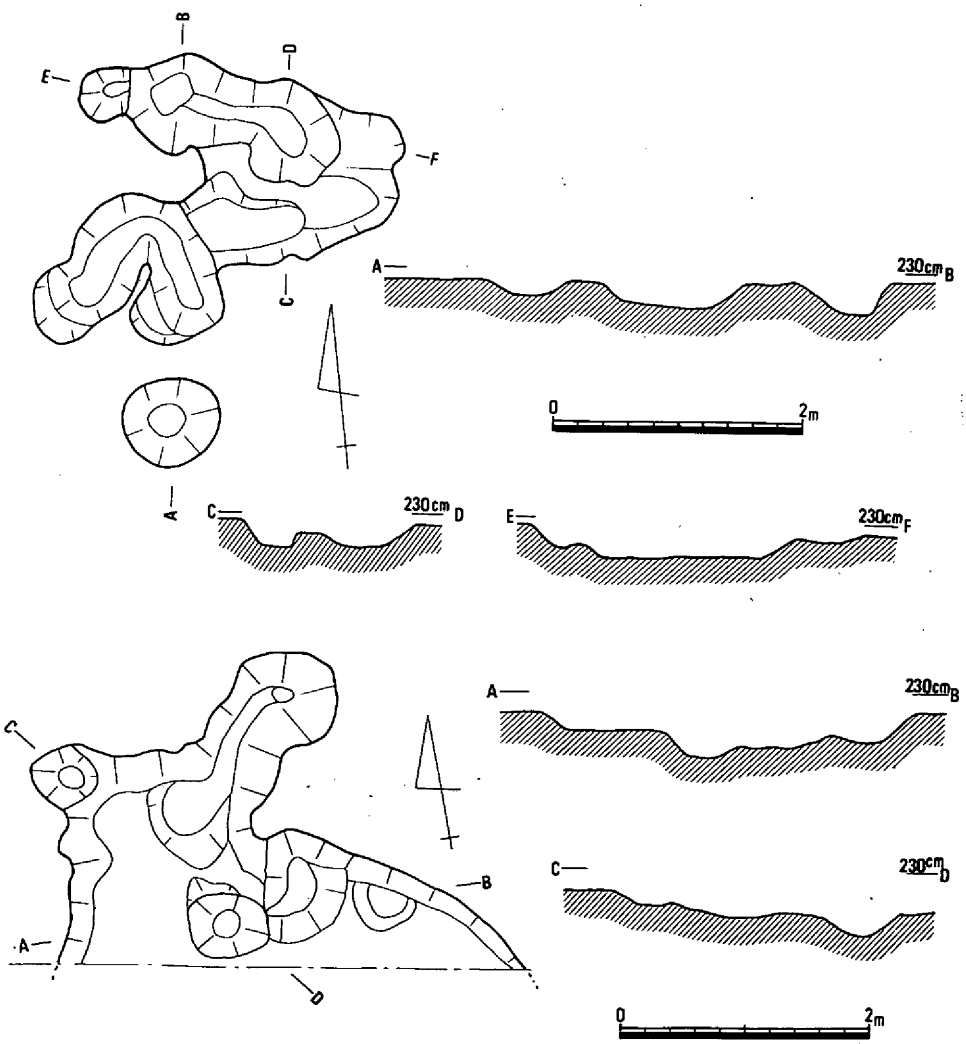


第326図　微高地斜面堆積（1/300・1/120）

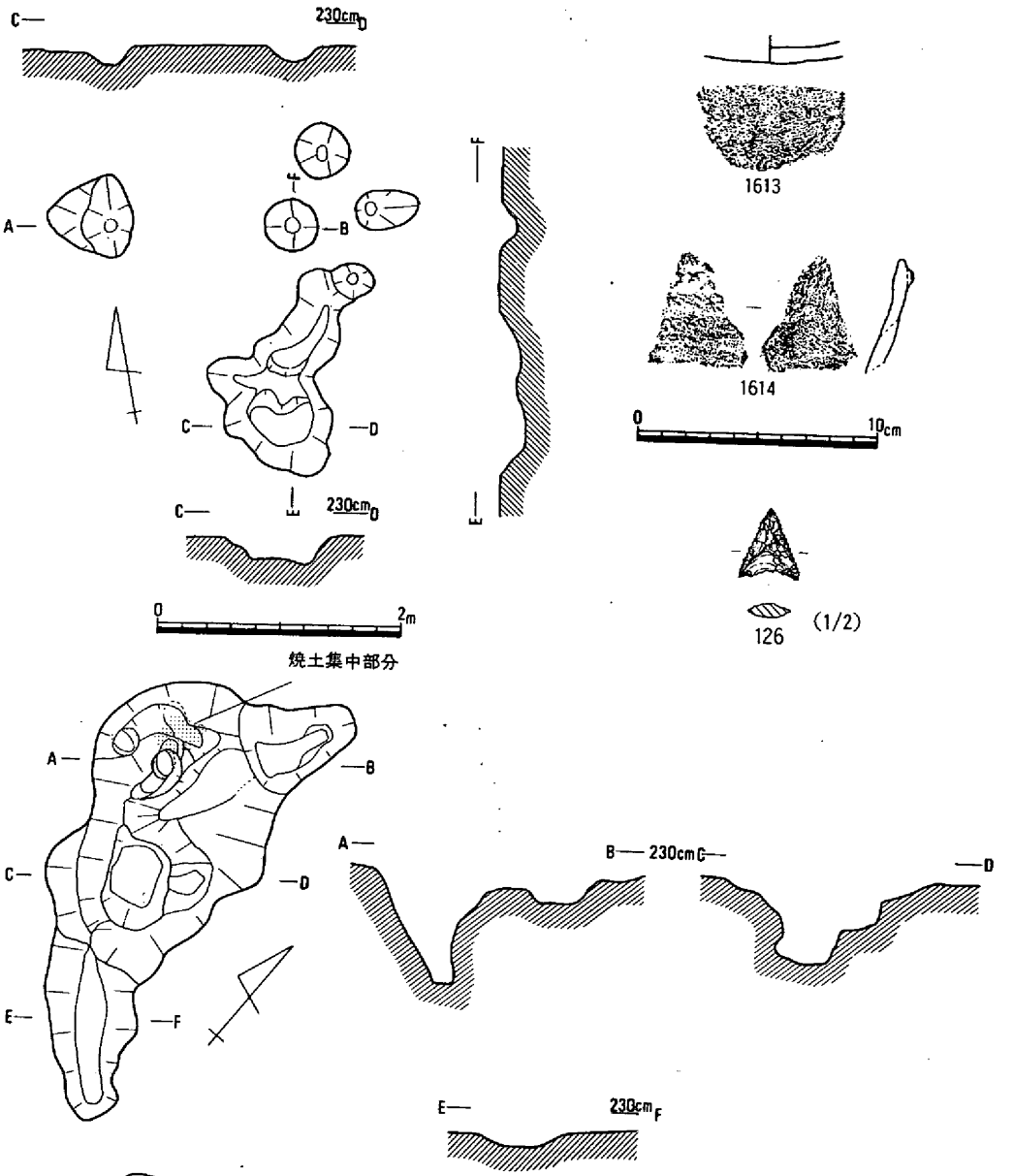
（2）土　　壙

土壙—80～84（第327・328図，図版134）

211Q～211R地区にかけて散在する。検出レベルと海抜210cmから220cmで，明瞭な掘り方をもたず，焼土片・炭片の散布が濃密で，青味を帯びた暗灰褐色粘土が埋積する。いずれも不整形な平面形を示し，土壙—80・82のように小さな柱穴状の凹みを伴うものもある。また土壙—83では北西隅の部分はおよそ85cmも深くなり，その周縁では焼土が集中的に認められる。出土遺物の中にはサヌカイト細片や焼土小塊のほか，わずかに土器片が含まれ，胎土・焼成や形状からいずれも縄文晩期土器片と推定されるものである。土壙—81からは深鉢形土器片の底部**1613**，土壙—83からは，やはり深鉢形土器の口縁部が出土しており，晩期後半に比定される時期を示している。また，後者からは石鏃**126**も出土している。これらの土壙は後述の土器溜り



第327図　土壙—80・81　(1/60)



第328図　土壙—82・83　(1/60)・出土遺物

—13・14の検出レベルからおよそ，20〜40cm低い位置を占めているが，やはり微高地上に位置しており，居住区の一画を占めていることは疑う余地はない。当時の住居構造は明らかにされていないが，火が日常的に使用される炉あるいは，火所のような性格をもつ土壙群とも考えられるのではないだろうか。自然に生じた凹みではなく，人為的な掘削によって形づくられた土壙と推察される。

(3) 土 器 溜 り

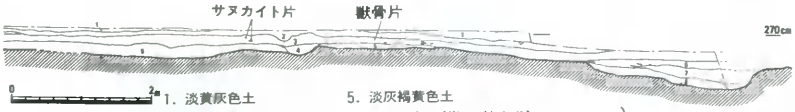
土器溜り—13・14（第329～345図，図版135～137，177～185）

210Q区と210Rの北辺境界付近で検出した2か所の土器溜りで，前者は海抜2.5mを測る微高地高位部の平坦面に位置し，淡灰黄色微砂質土層からなる基盤層高位部となっている。後者は，この東方へ傾斜する裾部分に位置し，東西約4m，南北約3mの範囲に不整形な土壙状凹みに拡がる土器溜りである。厳密には，後者を土壙としてとりあげるべきかもしれないが，出土遺物の同時廃棄性や共存性が強く，このように土器溜りとしてとりあげることとする。

土器溜り—13は，頂部のレベルは海抜2.53mを測り，約6～7m離れた南辺部では約10cm低くなり緩かに東・南方向に下降する地形を呈し，約12㎡の狭い範囲を占める。土器が多数包含される土層は黄褐灰色を基調とした微砂質の土層で，木炭細片や焼土片あるいは焼土塊（図版—184）などと共伴する。この土層の上位には，弥生式土器を含む淡褐灰色土層が覆っており，土器片は特に南縁部に出土が目立つ。これらの弥生前期関係の出土遺物は，末尾の第347図に示すとおりである。土器の大半は弥生前期の中段階に比定されるが，**1767**のように古段階もしくは後述の縄文晩期の土器群と共伴する可能性が強い甕片の出土がみられ，注目される。この土器溜り—13の西端部には，深さ約3～6cmを測る浅い不整円形の2か所の凹みがあり，比較的焼土片の集中が目立つことから，当時の居住地区に近く，しかも火の使用場所に極めて近接していることがわかる。出土土器の大半は，破片となっているものの，器表の残存はよく，接合関係や同一個体が土器溜り—14の西縁部出土土器に及ぶものもあるが，比較的近接した位置で接合関係が確認されている。第332～335図に掲げる土器群がこの土器溜り—13の主体をなす一括遺物で，第337図に掲げる石器が確実に共伴する。更に第338・339図に掲げる石器群も土器溜り検出上位や縁辺部で出土しており，共伴する可能性の強い石器群と考えられる。**208**・**209**以外はすべてサヌカイト製である。他に，サヌカイト剥片やチップが多量に散布出土しており，石器製作場所との近い距離を示唆しているといえる。

土器の器種構成は，壺（**1616**・**1617**・**1623**），鉢（浅鉢：**1627**～**1634**，**1635**，深鉢**1624**～**1626**，**1636**～**1660**）があり，それぞれ精製・粗製に大別され，更に深鉢では大形・小形に分けられる。また，精製土器の破片を利用した穿孔土器片**1615**の出土が注目される。鉢の中には体部上位にヘラ状工具による文様が描かれた破片が目立ち，**1630**・**1638**などの特異な文様のほか，山形文あるいは複線鋸歯文風の直線文を組合せた施文が描かれている。また，**1674**～**1677**のように浮線網状文が描かれた小形鉢があり，中部地方から持ち運ばれてきた移入土器として特筆される（註1）。深鉢の中には**1624**・**1625**などのように器表面がヘラミガキ状によく磨研された精製土器がみられ，煮沸土器とは形状・用途が異なる器種が存在し，成形技法や調整から，液体・穀物などの貯蔵に使われたのではないかと推察される。口縁部外面直下に貼付けら

第329図　土器溜り—13・14（土壙状凹部）（1/40）



1. 淡黄灰色土
2. 淡黄褐灰色土
3. 黄灰褐色土
4. 黄灰色土(焼土、炭斑)
5. 淡灰褐黄色土
6. 灰黄褐色土(炭斑・焼土斑)
7. 暗灰褐色土(炭斑・焼土斑)
8. 暗灰黄褐色土(わずかな炭斑・焼土斑)

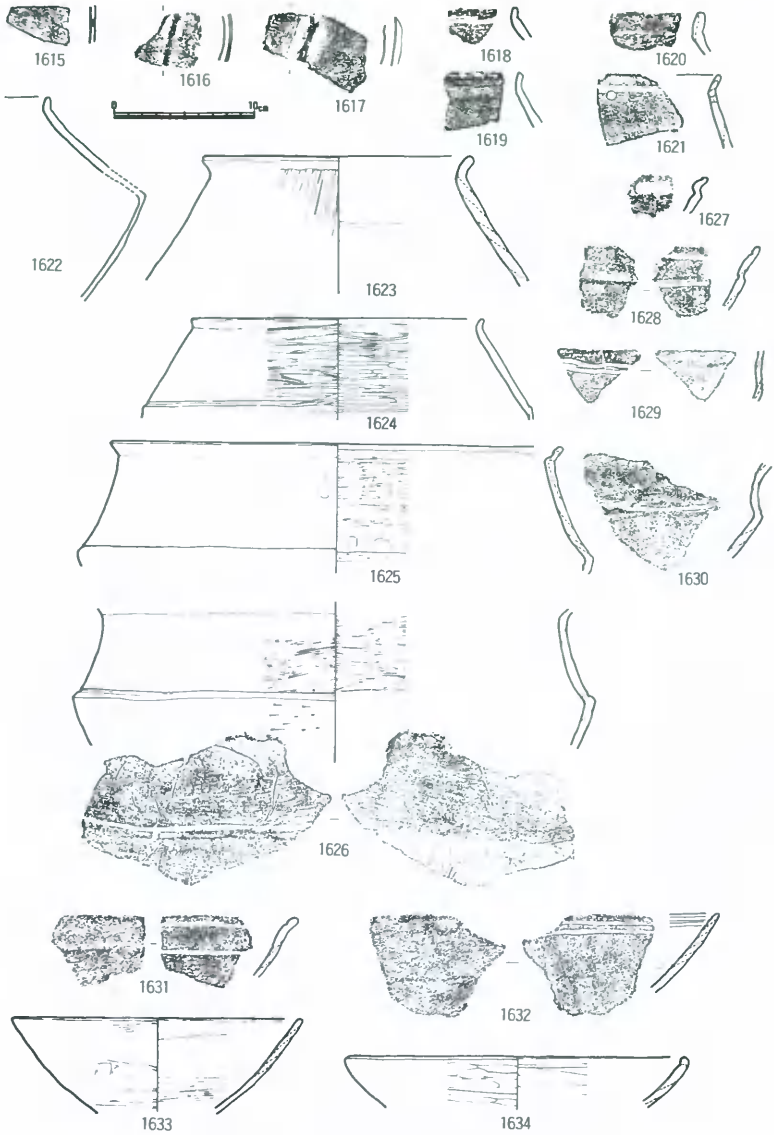
} 土器溜り－14

第330図　土器溜り—13～14東西土層断面（1/80）

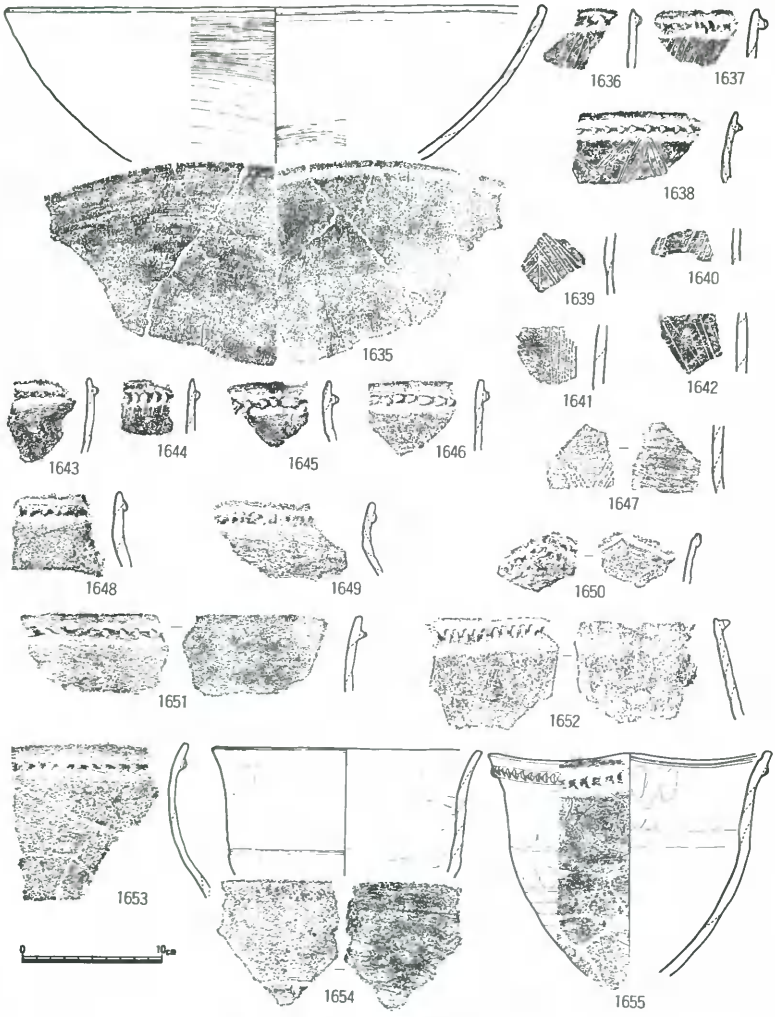
1. 灰黄褐色土(焼土斑・炭斑濃)
2. 青灰色粘質土(焼土斑・炭斑濃)
3. 暗青灰色粘質土(灰黄色土ブロック含む)
4. 暗灰褐黄色土(焼土斑)

第331図　土器溜り—14下層土壙状凹部（1/40）

れた刻み目突帯は，浅鉢及び精製土器には認められず，すべて深鉢にみられる。その大半は板状工具によって刻まれ，V字形をなしているものが多いが，やや巾が広いものや，刻みこみの深いもの，傾斜するものなど多様である。また，1652のようにヒゴ状の棒状圧痕によるものがわずか1点のみみられる。更に，刻み目突帯が体部の上位・下位の境界にも貼付けられた，いわゆる2条突帯のものが存在する一方，下位部分がヘラ描き沈線で表現されたもの1657や，口縁部の貼付け突帯がみられず，このヘラ描き沈線のみめぐるもの1654など多様な器形が混在する。しかも口縁部内面にヘラ描き沈線をめぐらす1650・1655・1657があるが前者2点は波状口縁を示す。第344図に掲げる底部片は，いずれも鉢のものと考えられるが，どの器種に対応す

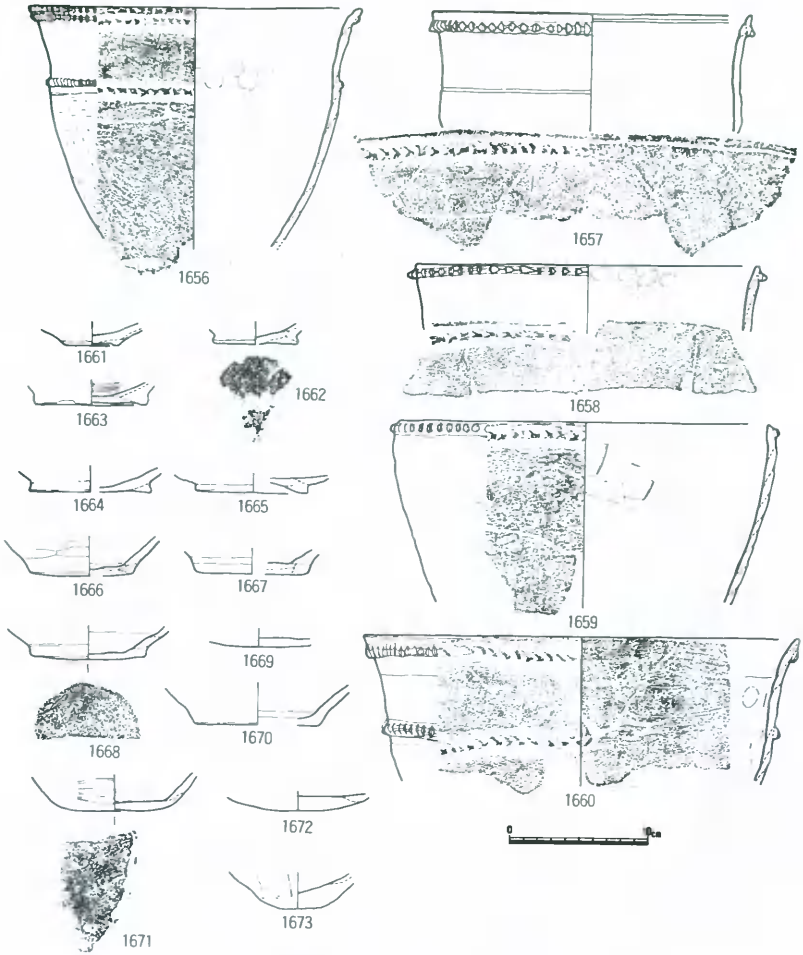


第332図　土器溜り―13出土遺物（１）



第333図　土器溜り―13出土遺物（２）

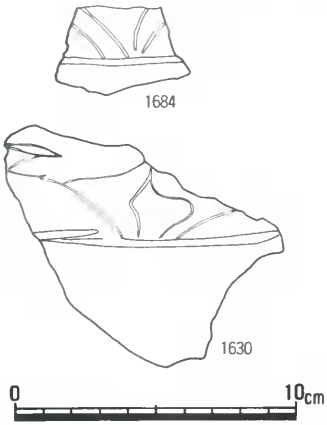
るかは，特定できない。総じて内底部が比較的丁寧に磨研されている**1665**・**1669**などは浅鉢と考えられよう。また**1671**は外底部の中央がやや凹み，煤の付着が認められることから煮沸に用いられた深鉢の底部と考えられる。平底と丸底に分けられるが，前者は凹面をなすもの**1661**・



第334図　土器溜り―13出土遺物（３）

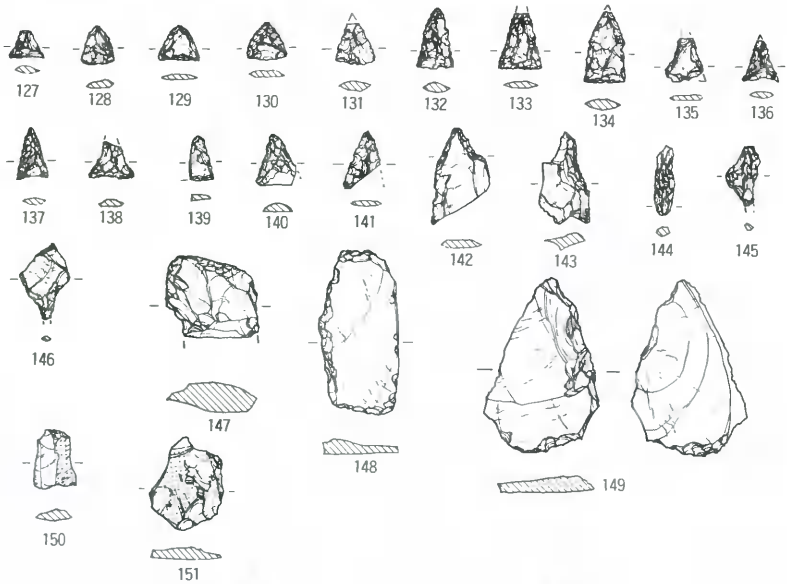
1665などとやや凸面をなすもの1666・1668に細分される。土器の成形技法の特徴については，特に粘土の接合にあらわれ，壺1623や精製の深鉢1625を除くと観察可能なものはすべて内傾接合である。1656や1659のように数cm単位の粘土紐が整然と積みあげられた痕跡が看取されるものがある。器表の調整は，粗製の深鉢では，体部外面上位はナデで仕上げるものが多く，下半

第335図　土器溜り―13出土遺物（４）（1/3）

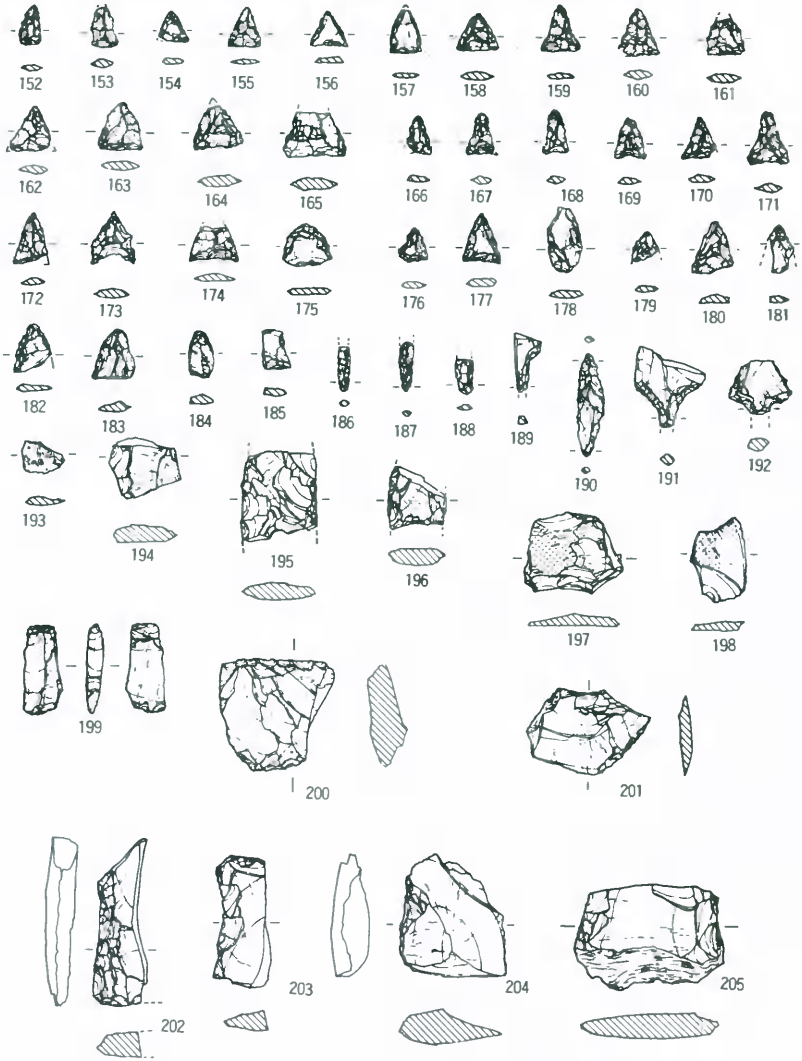


第336図　土器溜り―13・14直上層出土遺物（1/2）

にはヘラケズリ痕跡を残すものも多くみられる。内面には，ナデあるいは指頭押圧調整痕跡を残すものが目立つが，**1647**のように丁寧なヘラミガキ状の調整で仕上げたり，**1659**のように硬目の板状工具によってナデ調整を施すものもある。色調は全体的に灰褐色ないし



第337図　土器溜り―13出土遺物（５）（1/2）

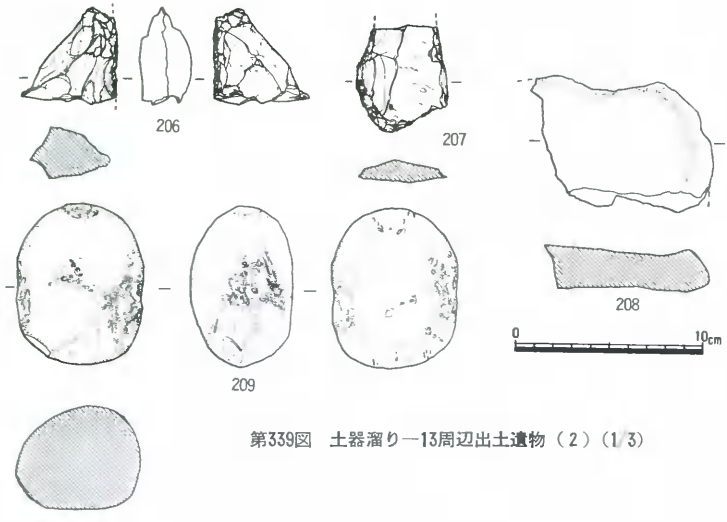


第338図　土器溜り―13周辺出土遺物（１）（1/2）

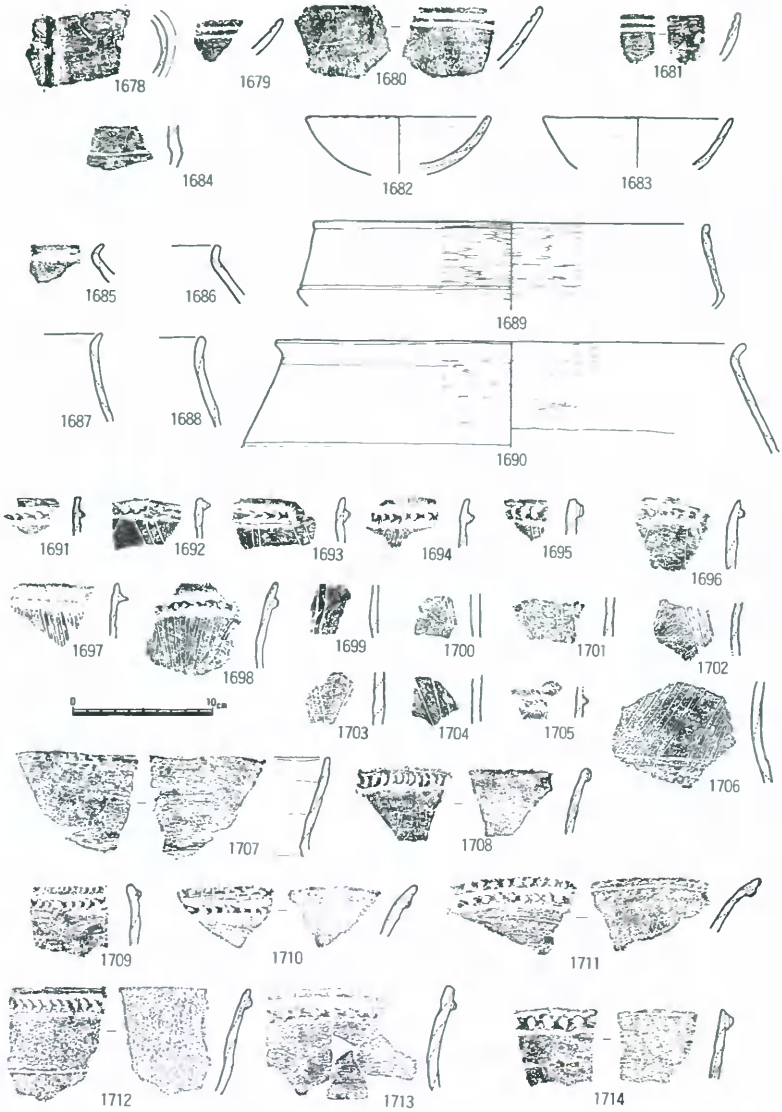
は橙褐色を呈するものが大半を占めるが，1659のように灰白色，1660のような黄橙色を呈する明るい色調のものも多い。胎土には石英・長石のほか赤色砂粒や雲母が含まれているが，精製土器では微砂粒を含んだ精良土が用いられ，雲母の含有量が目立つ。総じて焼成は堅緻なものが多い。

石器は，前述のように大半がサヌカイトで，石鏃がもっとも多く，ついで石錐が顕著である。その他，スクレーパー・楔形石器・石鍬片207・石槍195などの他，花崗岩製の叩き石209などが出土している。これらの石器と共に出土した剥片やチップの量はこの数倍にものぼり，相当量のサヌカイトが使用されたことを物語っている。このほか図版183に掲げる鹿（ニホンジカ）の骨が，かたまって出土しており，火を受けて石灰化した後頭骨と頸骨であることが判明している（註2）。

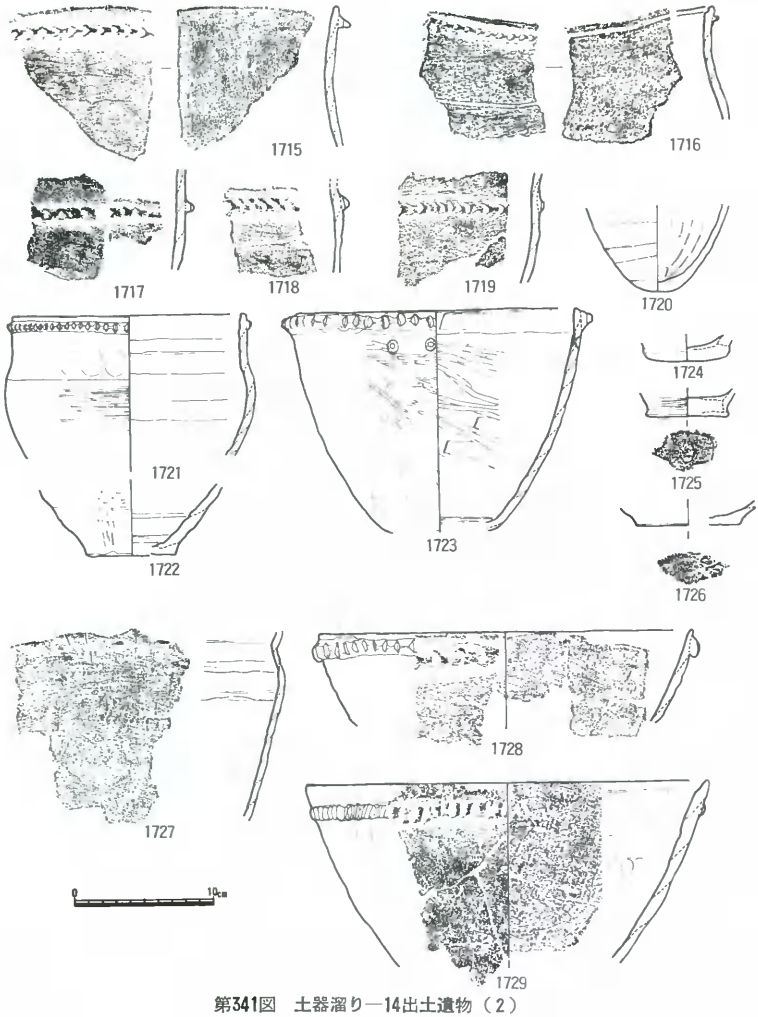
土器溜り—14は，土器溜り—13と平面的に連続し，土器溜り—13の頂部より約4m東の海抜約2.3mのレベルで土壙状の凹部西肩が検出された。凹部の法面は緩かで，微高地の高まり部分縁辺の凹地といった様相を示し，北部分に更に延びる。埋積土は，炭や焼土片を多く含む暗灰褐色土や暗灰黄褐色土で，土器溜り—13に比べるとやや粘質で色調が暗い。第330図に示すように，南側には不整なプランを示す，深さ6～8cmほどの浅い凹みが存在し，土器溜り—13周辺の凹みと同様である。図の網目部分が示すように焼土が密集して検出された部分がある。また，第330図に示すように，この凹地の下部で更に土壙状の不整形な凹部が検出され，おそ



第339図　土器溜り—13周辺出土遺物（2）（1/3）

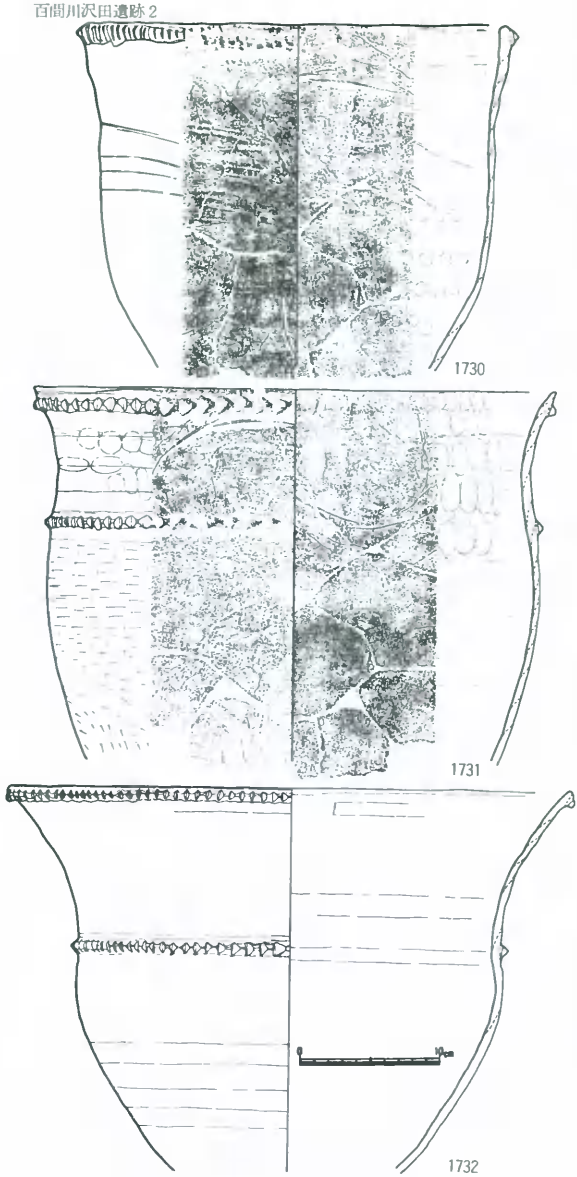


第340図　土器溜り―14出土遺物（１）



第341図　土器溜り—14出土遺物（2）

らく同一の土壙状凹部と理解される。埋積土は，土層がやはり焼土細片を多く含む灰黄褐色土で，下層はややグライ化して暗青灰色粘質土が埋積している。したがって，この凹地部分の深さは，50〜60cmを測ることが明らかとなった。この土壙の用途・性格等は明らかではないが，

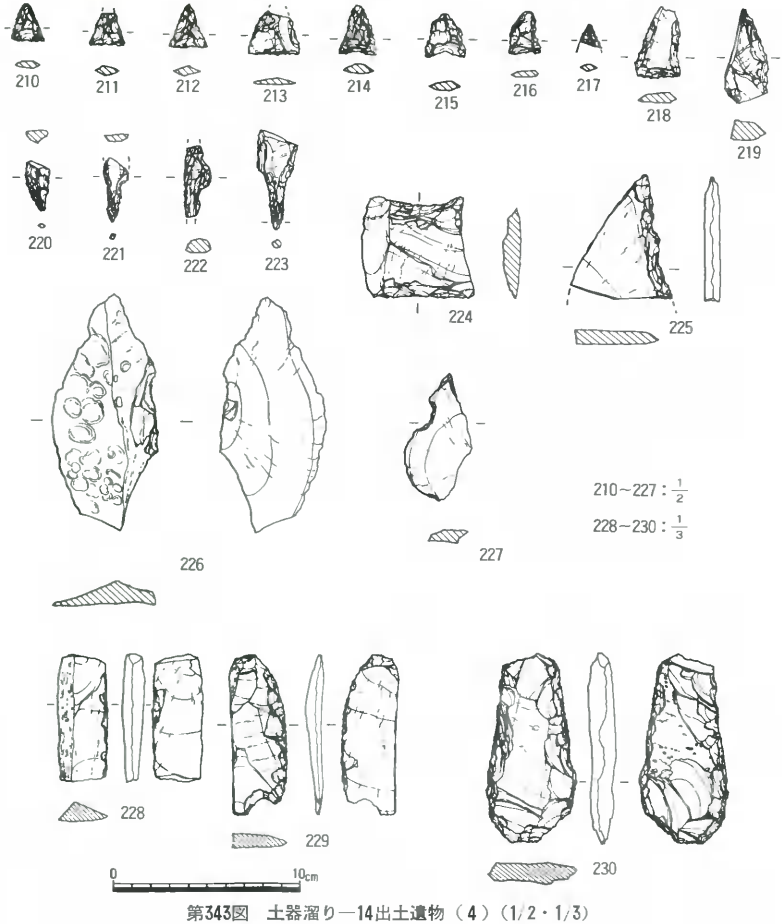


第342図　土器溜り―14出土遺物（３）

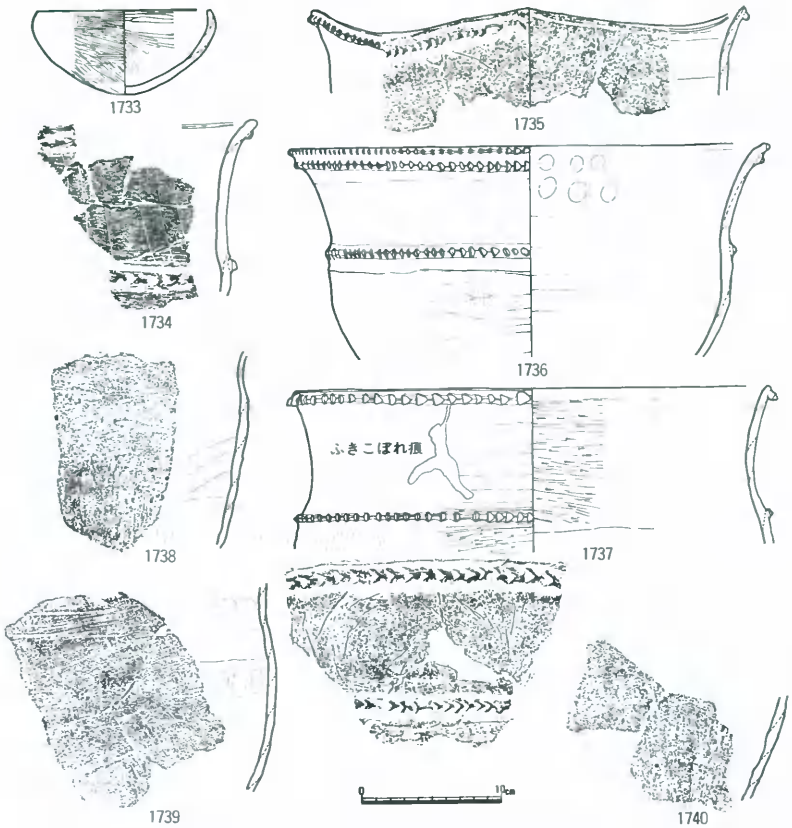
多量の土器・石器をはじめ焼土や木炭が埋積していることによって，当時の生活面と同一面に存在し，しかも居住地区に近接していたことは疑い得ない。

出土遺物は，土器溜り―13とほぼ同様，縄文晩期の土器・石器・サヌカイト剥片等である。土器の大半は破片となっているが，器表面の残りがよく，かなり全形を復元できたものもかなりみられる。器種構成は前述の土器溜り―13と全く同じで壺1678，浅鉢1679～1683，精製深鉢1685～1690，粗製深鉢多数となっている。特に注意されるのは，1678や1684などは，各々1617や1630と同一個体片とみなされることである。また，深鉢の中に刻み目突帯やヘラ描き文様を全くもたない，薄手の粗製土器1707～1727がみられ，1720の小形深鉢も注目される。ヘ

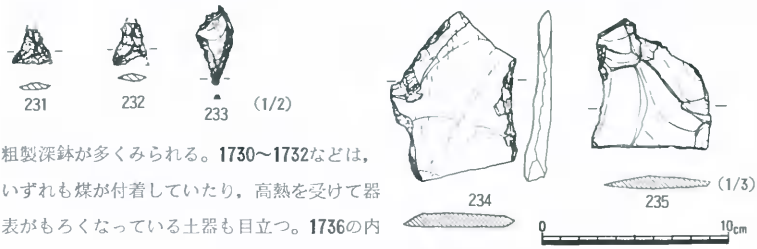
ラ描き文で飾られた土器はいずれも小片であるが1692や1693のように2・3条の斜線文を飾るものと，1697や1706のように多条化するものとがある。刻み目突帯をもつ深鉢では，1709～1711のように口縁端面にも刻み目がめぐる個体もある。更に1723のように内外面に荒いヘラミガキ調整で仕上げられ蓋に伴うとみられる2孔の穿孔がみられる。深鉢の中には1728・1729などの器高が低い土器がみられる一方，容量も大きい1730・1731のように長胴化した大形品もみられる。下層凹部出土土器もほぼ同様の内容をもつが，内外面を丁寧に磨研された小形鉢や，



第343図　土器溜り―14出土遺物（4）（1/2・1/3）

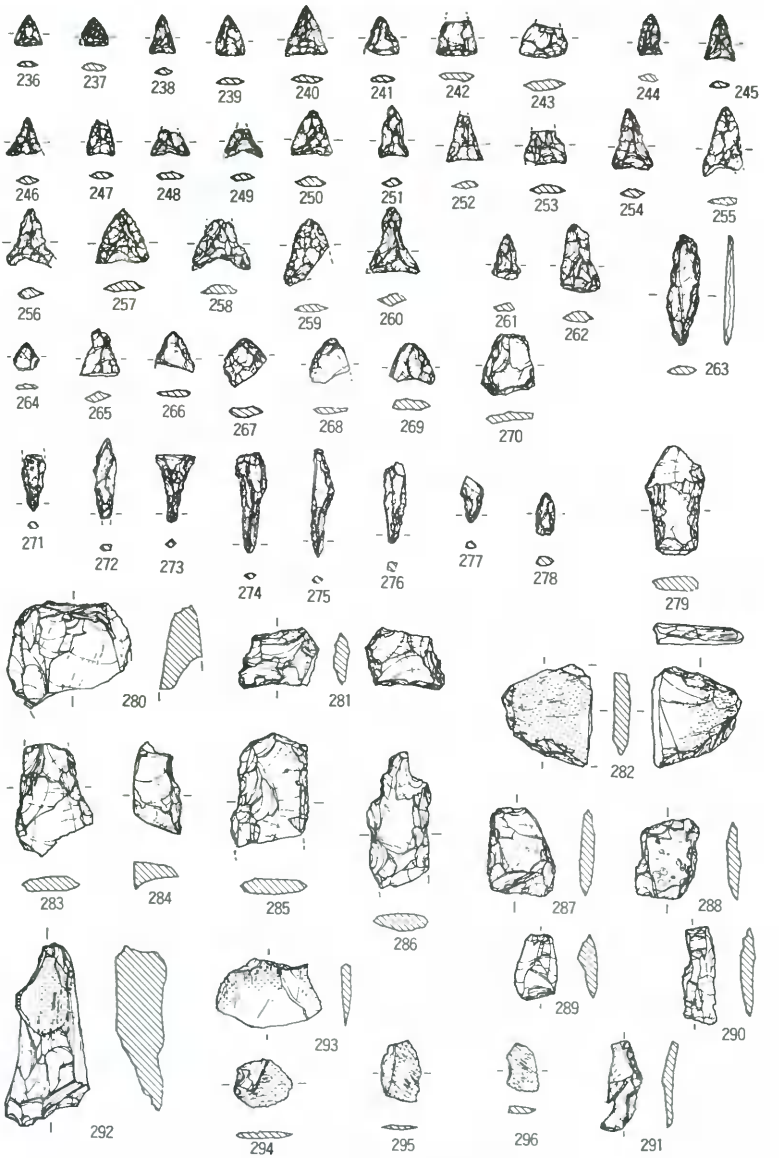


第344図　土器溜り―14下層土壙状凹部出土遺物（１）

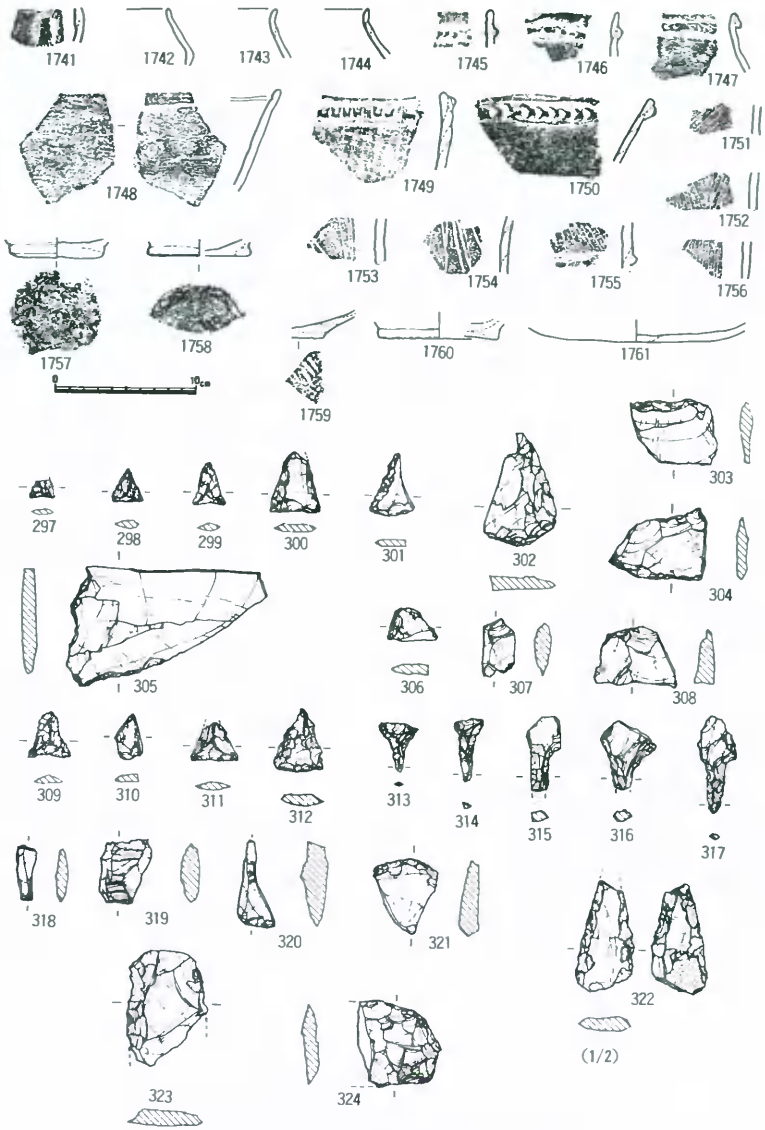


粗製深鉢が多くみられる。1730～1732などは，いずれも煤が付着していたり，高熱を受けて器表がもろくなっている土器も目立つ。1736の内

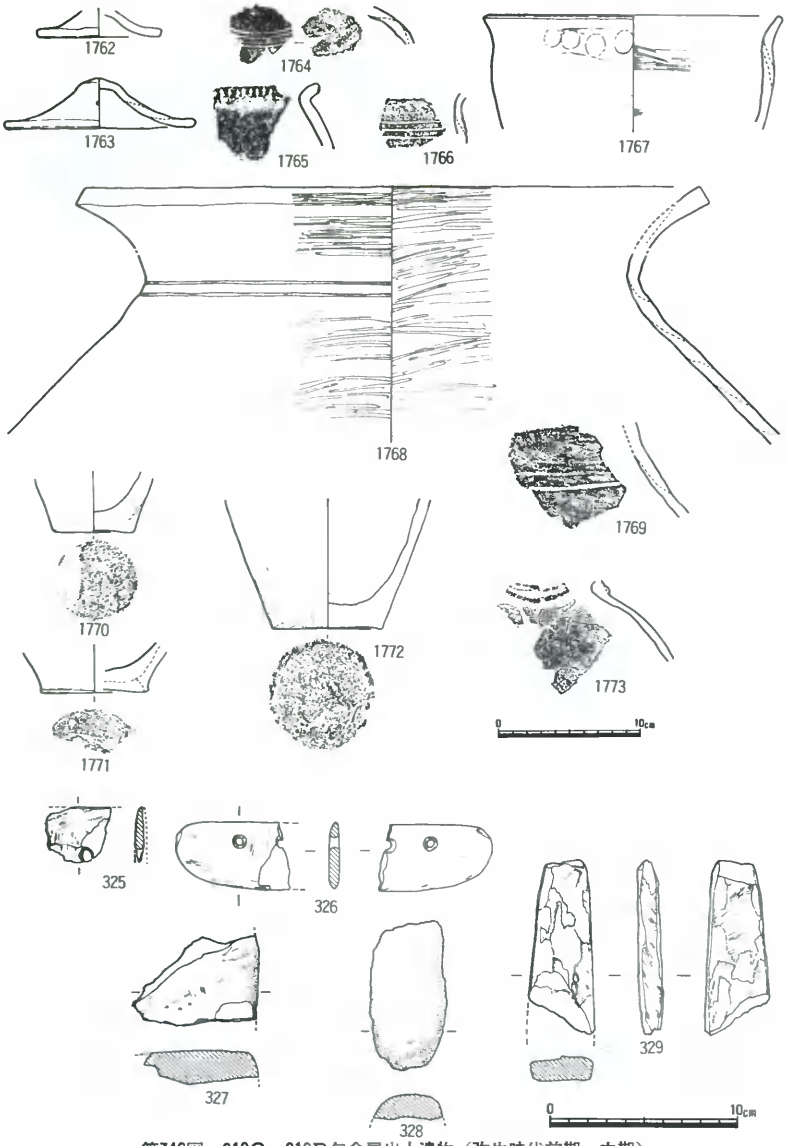
第345図　土器溜り―14　下層土壙状凹部出土遺物（２）



第346図　土器溜り―13上位出土遺物（1/2）

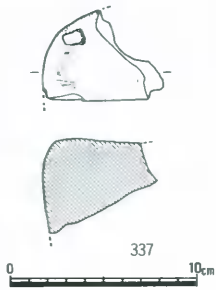


第347図　210Q～210R包含層出土遺物（縄文時代晩期）



第348図　210Q～210R包含層出土遺物（弥生時代前期・中期）

第349図　210Q～210R古墳時代遺構混入遺物（1/2・1/3）



面には赤色顔料が付着しており，特殊な用途が推察される。

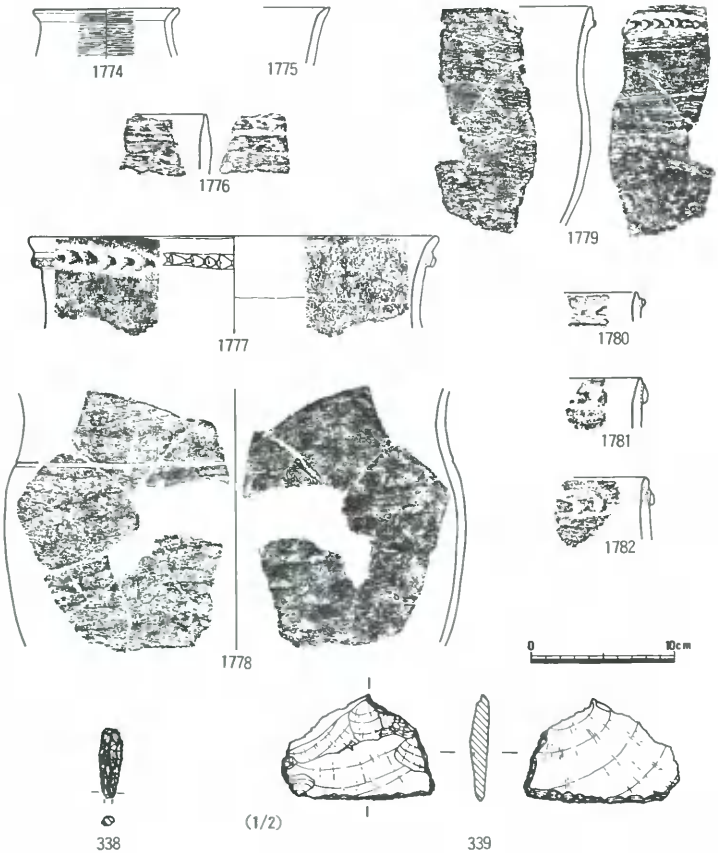
出土石器はすべてサヌカイト製で，石鏃・石錐・スクレーパー・楔形石器・石庖丁形石器・石鍬などがみられる。特に228・229の石庖丁形石器と石鍬230が注目される。ことに230は表裏共に使用による磨耗痕を残し，207と同様の刃先を示している（註3）。これらは，弥生時代前期の石器との関わりが注目される重要な遺物である。

以上，土器溜り—13・14について概略を述べた。この時期について，出土土器から若干の考察を加えておきたい。従来，瀬戸内地方の縄文時代晩期後半の標式土器としては，黒土ＢⅡ式（前池式）が知られているが，今回出土した一括土器は，器種構成や技法の点で確実に後出的な特徴を示している（註4）。また，同じ旭川水系の原式土器にみられるヘラ描き文の影響が色濃く看取される（註5）。一方，弥生式土器の起源という観点からみると，津島南池地点出土の晩期突帯文系の土器との類似点もみられるが，弥生式土器の成立との間には更に一型式程度の過渡期が存在するものとみられる。近畿地方では，船橋式と近似し（註6），器種構成や形態などの点が指摘されるが，ヘラ描き文や波状口縁も認められず，刻み目のない突帯など，型式的には直接的な影響に乏しいとみられる。北九州地方の夜臼式との共通性は部分的に観察され，器種の上でも1616・1623のように壺が存在することや，1663・1666・1671は底部の作り方など技法的な点が注目され，時期的に併行する可能性が強い。このように「沢田式」とも型式設定される多量の一括土器の出土によって，他地域の出土品との関係が一層明確に把握されるようになった点が特筆されよう。板付遺跡では，夜臼式併行期に水田址や板列・矢板列などが発見されており（註7），沖積平野の一画で開田が進められたことが判明しており，百間川遺跡群でも，相前後する時期に旭川東岸に拡がる平野の一画で，定住的な集落が形成され，稲作が開始された可能性が考えられよう。今後の調査によって，溝・住居跡・水田跡などの発見が期待される。本節を草するにあたっては，高橋護，家根祥多・深澤芳樹の各氏をはじめ多くの人々のご教示を得た。深甚の謝意を表する次第である。（岡田）

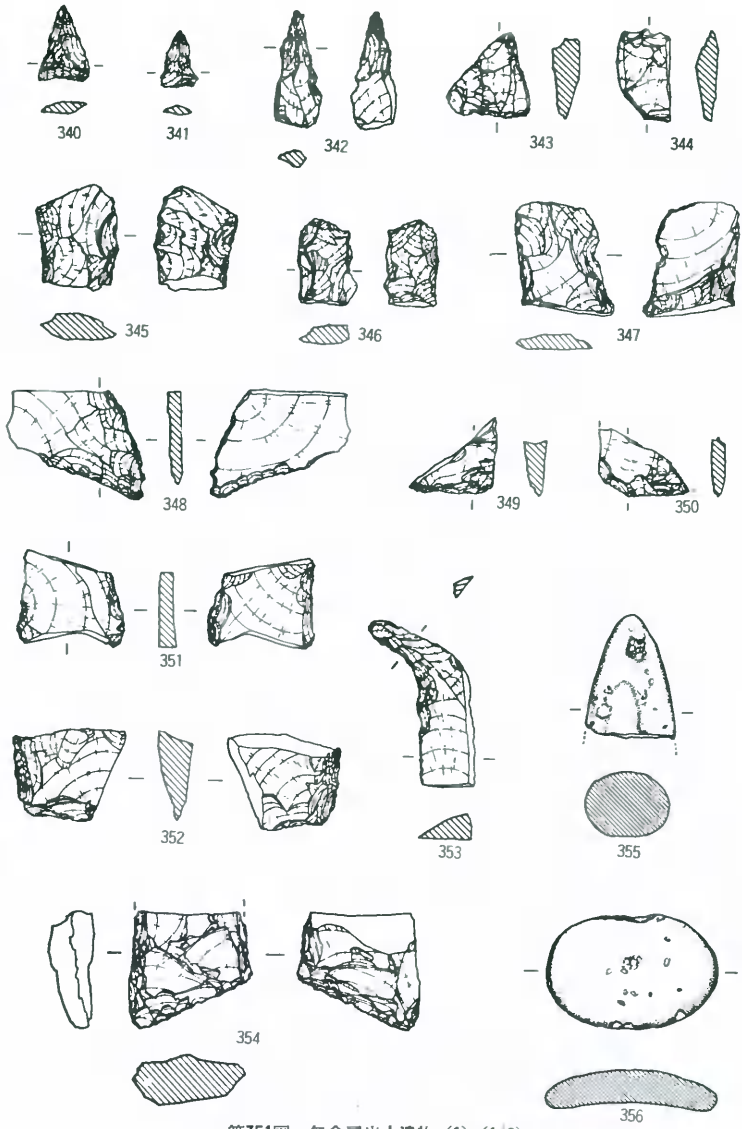
落ち込み（第350図）

V～Wの間の212ラインやや南側に位置する。この地点のS～Wにかけては，微高地間の低位部にあたり，縄文時代晩期の包含層が堆積している。この落ち込みは，包含層中の凹部で土器，石器が散在し，その周辺は焼土塊，炭，が多く認められた。

出土遺物は，図示した**1774**～**1782**以外にも少量土器が出土した。**1774**は，精製土器的なもので小型の壺になるものと考えられる。この土器は，夜臼式に認められるものに類似する。**1774**も**1775**と胎土が似るものである。深鉢は，いずれも口縁部に貼付突帯を有する。　（中野）



第350図　落ち込み出土遺物



第351図　包含層出土遺物（1）（1/2）

第352図　包含層出土遺物（2）

百間川沢田遺跡２

註

註１　高橋護氏のご教示による。大洞ＣＩ式併行期に比定される。「樋口五反田遺跡―長野県中央自動車道建設に伴う発掘調査（上伊那郡辰野町その１）」長野県教育委員会，1973。

註２　金子浩昌氏の同定による。

註３　土器溜り―13の北側約3ｍの部分で大形のサヌカイト製石鏃が2点出土している。(昭和58年５月出土。)

註４　坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」笠岡市教育委員会　1956。

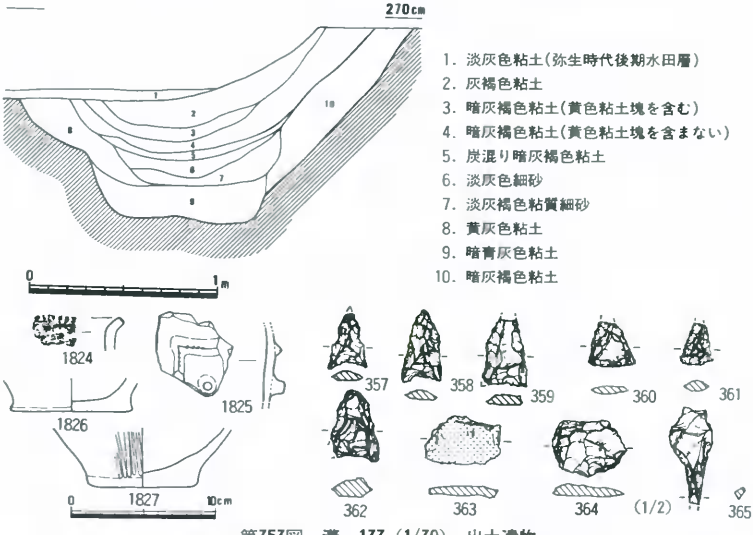
註５　鎌木義昌・江坂進「岡山県御津町原遺跡」(「瀬戸内考古学」２）1958。

註６　原口正三ほか「船橋遺跡」平安学園考古学クラブ　1972。

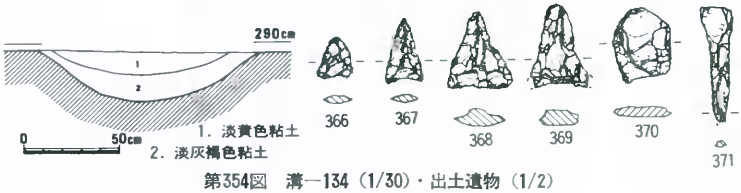
註７　沢皇臣・山崎純男ほか「板付遺跡調査概報（板付遺跡周辺報告書―５　1977～８年度)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集　福岡市教育委員会　1979。

３．弥生時代前期・中期の遺構・遺物

南北に流走する旧河道の東にひろがる微高地上に遺構・遺物が検出されている。旧河道斜面と河道の反対側にも弥生時代前期の包含層がみられる。上面には溝以外の遺構が検出されないことから，上面が削平されていると推定される。遺構としては溝を４本検出している。



第353図　溝―133（1/30）・出土遺物



第354図　溝―134（1/30）・出土遺物（1/2）

（1）　溝

溝—133（第353図）

209Pから210Pに続く溝である。旧河道の東岸にあたり，南側に寄ると東へ少し屈曲する。後の遺構によって削られた部分が多い。209Pでは弥生後期末の水田造成のため，西側は削り下げられている。断面を観察すると，数回の溝さらえが行われたことがわかる。断面はU字形を呈する。最もよく残存している部分で測ると，幅250cm，深さ95cmである。

埋土中からは弥生時代前期の土器片・石器のほかに縄文時代晩期の土器片・多数のサヌカイト片が出土した。土器には円形浮文とL字に配した突帯のある壺片**1825**，口縁部を「く」の字状に外反し，端部にきざみめを施した甕片**1824**がある。石器には，石鏃**357**～**362**，石錘**365**，再調整痕のある剝片**363**・**364**がある。いずれも石材はサヌカイトである。

時期は，百・前・Ⅱに属する。

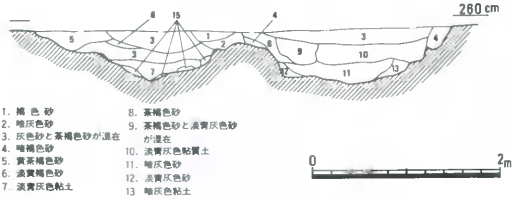
溝—134（第354図）

209Pから210Pに続く溝である。210Pの南側まではのびていない。一部は溝—8によって切られている。全体に浅い。検出時の溝は，幅116cm，深さ26cmである。

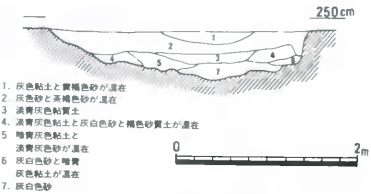
埋土中からは，弥生時代前期の土器片が少量出土しただけであるが，サヌカイトの小片は100点以上になる。（正岡）

溝—135（第355，356図）

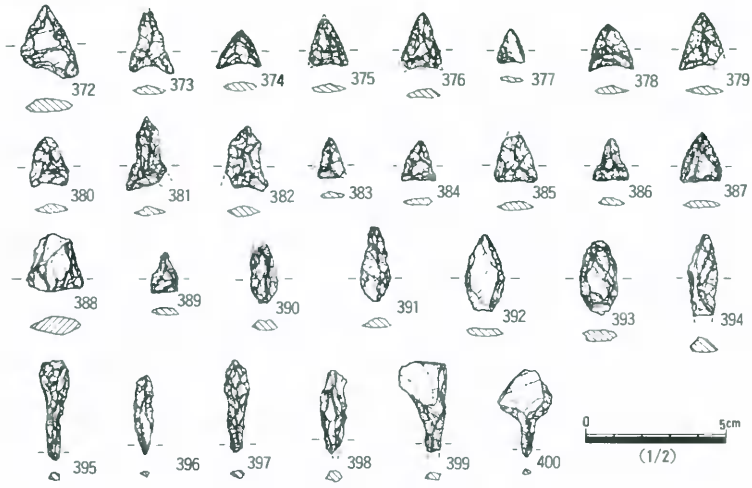
この溝は，調査区中央のS～Uに位置する。微高地の東側の裾部に位置し，微高地に沿って存在する。溝は，北西から南東方向にやや蛇行しながら流走する。また，北側では二叉に分れたりし，全体的に肩口が明瞭でない。規模は，幅約300cm前後，深さは約50cmを測る。溝幅は，一定せず振幅が大きい。溝の掘り方もまた，人工的に掘削されたものとは考えがたく，自然流路に若干の手を加えたものと考えられる。溝底も凹凸が激しい。出土遺物は，縄文時代晩期，弥生時代前期の土器，石器が数多く出土するものの，少量ながら櫛描文を施した中期の土器が検出されている。



第355図　溝—135（1）（1/60）



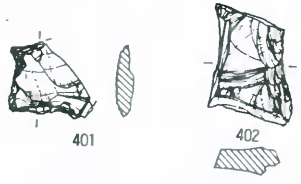
第356図　溝—135（2）（1/60）



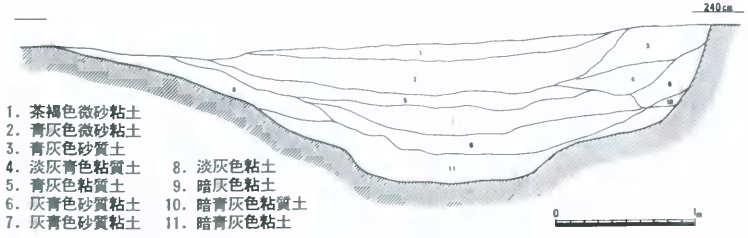
第357図　溝―135出土遺物

溝―136（第358・359図）

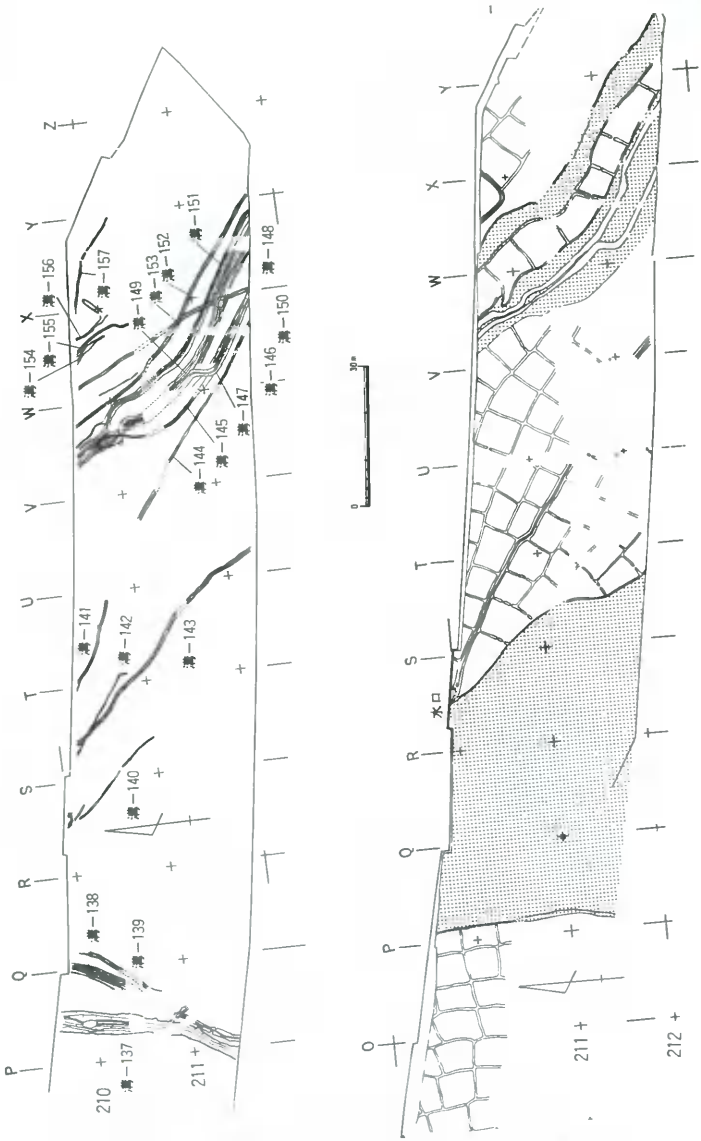
Ｕ～Ｖの間に位置し，溝―136と同様に東側に存在する微高地の西側裾部に検出された。溝は，北東から南西方向に蛇行しながら流走する。規模は，幅460cm，深さ約100cmを測る。出土遺物は，縄文時代晩期，弥生時代前期の土器など出土遺物の主体を成したが，弥生時代中期の櫛描文を施文したものが少量出土した。溝は，諸状況が溝―135と酷似している。さらに，調査区南側では流路が接近し合流する可能性が高い。（中野）



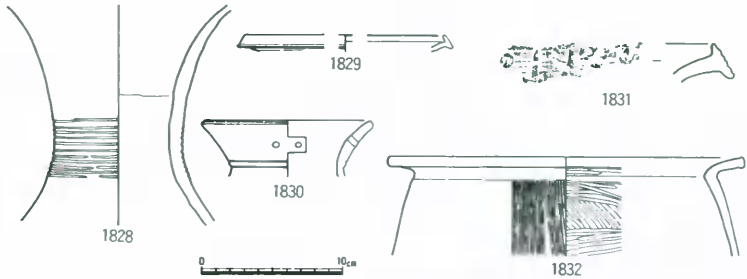
第358図　溝―136出土遺物（1/2）



第359図　溝―136（1/40）



第360図　弥生時代後期（左）・水田（右）遺構配置図（1/1,200）



第361図　包含層出土遺物

4.　弥生時代後期の遺構・遺物

地形は弥生時代前・中期とほとんど変っていない。旧河道は少し堆積が進行し，新たに水田化されている。弥生時代末の洪水によって，少し低くなった部分は砂で埋没し水田や溝の状況を知ることができる。河道の東岸部分は一段高くなり，幹線の用水路が掘られ，この東には水田がひろがっている。東寄りの地点では南北に帯状に連続する水田も検出されている。検出された遺構としては，水田のほかに溝21本がある。遺物には，土器・石器・鉄片がある。

（1）　溝

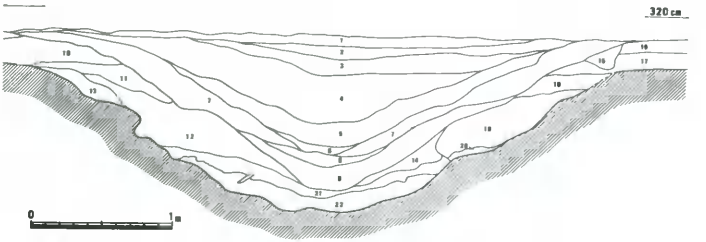
溝—137（第363～366図，図版139）

209Ｐから211Ｐに続いている。南端の一部は211Ｏにかかっている。210Ｐにおいて弥生時代前期の溝—133を切っている。溝の規模は大きい方である。比較的よく残存している地点で測ると，幅430cm，深さ98cmである。埋土の上部は粘質をおびているが，下層には細砂・粗砂が多い。210Ｐでは，下部には木片も残存していたが，溝底の東端でわずかに残存した杭を検出している。

埋土中には，土器片が多い。209Ｐでは，埋土の上部に弥生時代後期の大型土器片が多く含まれている。下部の細砂・粗砂の中からは，多量の石器・サヌカイト片を出土した。弥生時代前期・同中期の土器片のほか，縄文晩期の土器片も多く，石器の属する年代は明確にしがたい。

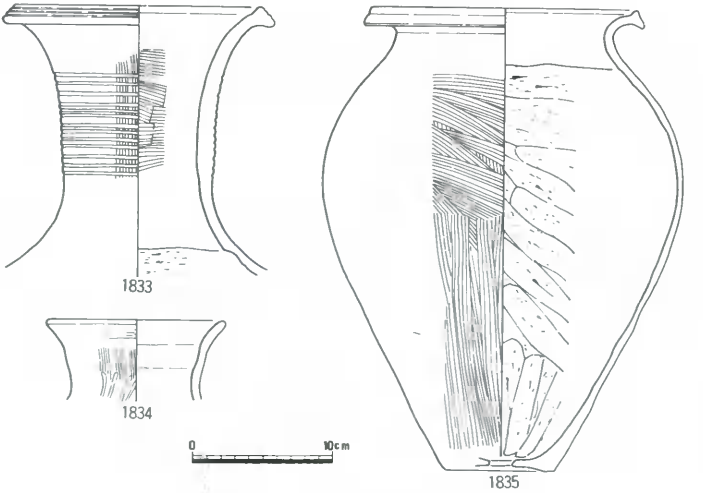
出土遺物には，壺**1833**・**1834**，甕**1835**～**1843**，鉢**1844**，台付鉢**1845**，高杯**1846**～**1854**，石鏃**403**～**428**，石槍？**429**，楔形石器**430**，**437**，**438**，石鏃未製品**431**，不定形刃器**432**，石錐**436**，スクレイパー**439**，**441**，石鍬か石庖丁の破片**440**，再調整剝片**442**，打製石庖丁**443**，不明**444**，石鍬**445**，砥石**446**，敲石**447**がある。

時期は，百・後・Ｉに属する。

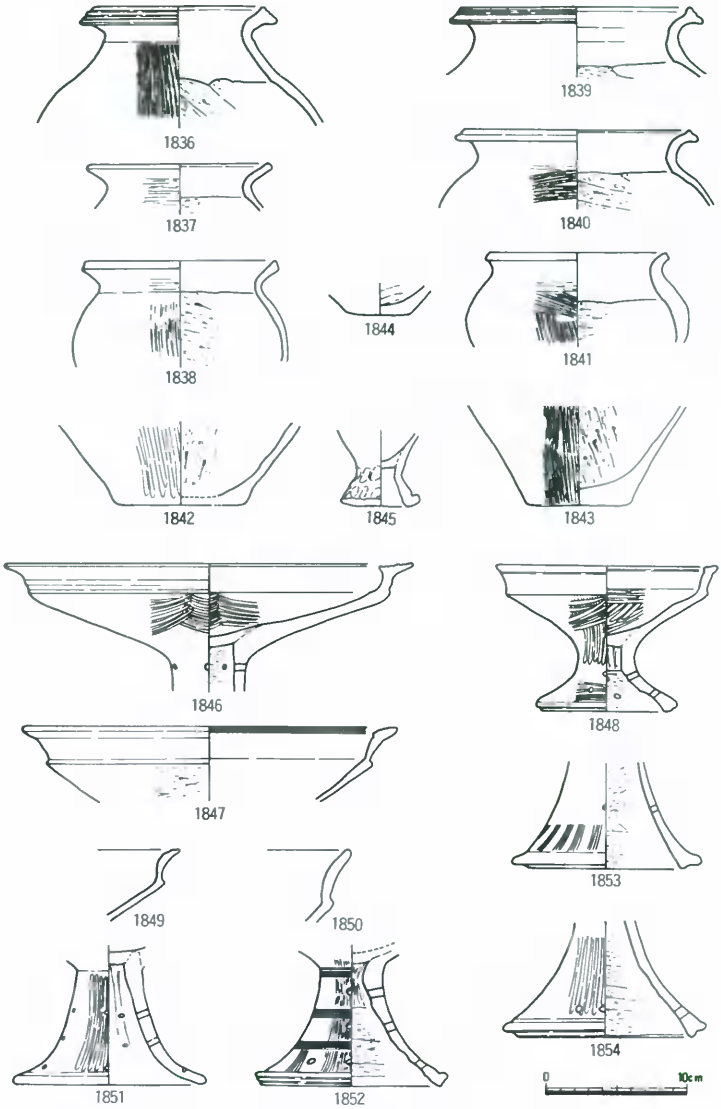


1. 茶灰色細砂
2. 茶灰色粘土混り細砂
3. 明茶灰色粘土混り細砂
4. 茶灰色粘土混り細砂
5. 茶灰色細砂
6. 茶灰色細砂混り粘土
7. 灰茶色細砂
8. 暗灰色粘土
9. 青灰色粗砂混り粘土
10. 茶灰色細砂混り粘土
11. 茶灰色粘土混り粗砂
12. 青茶灰色粘土混り粗砂
13. 茶灰色細砂混り粘土
14. 青茶灰色粘土混り粗砂
15. 黄灰色細砂混り粘土
16. 茶灰色粘土
17. 灰茶色粘土
18. 茶灰色細砂混り粘土
19. 灰茶色粘土混り細砂
20. 淡灰色細砂
21. 青灰色粗砂
22. 青灰色粘土

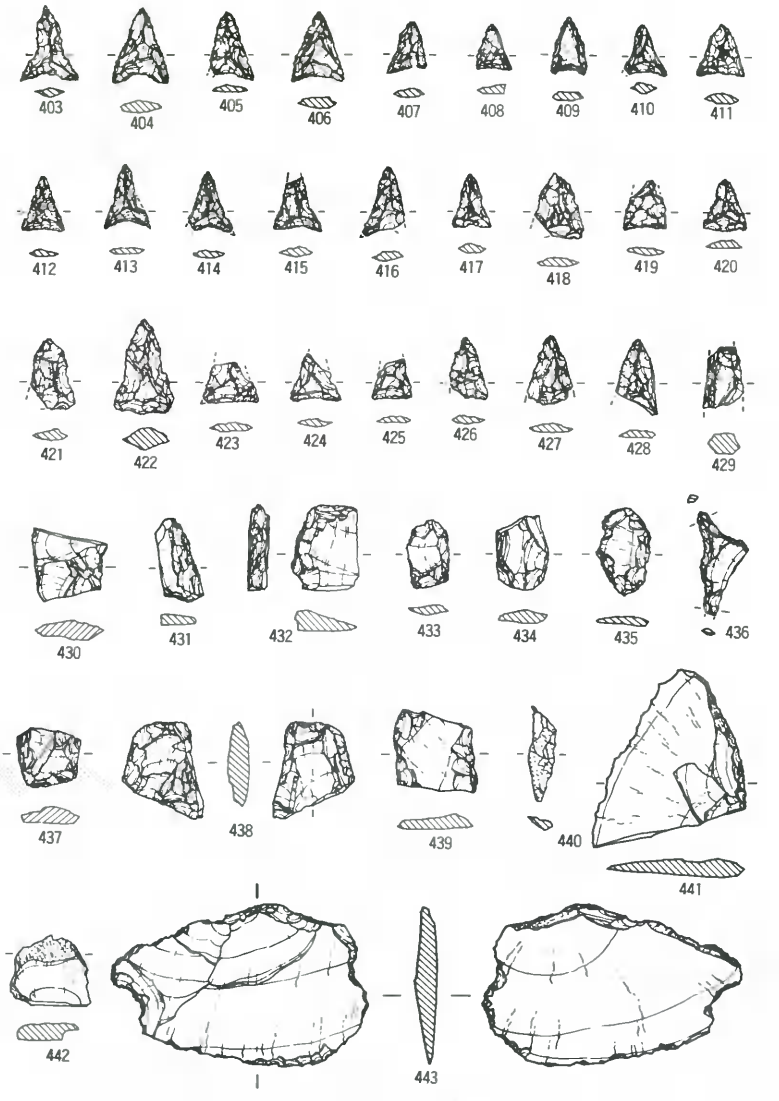
第362図　溝―137（1/40）



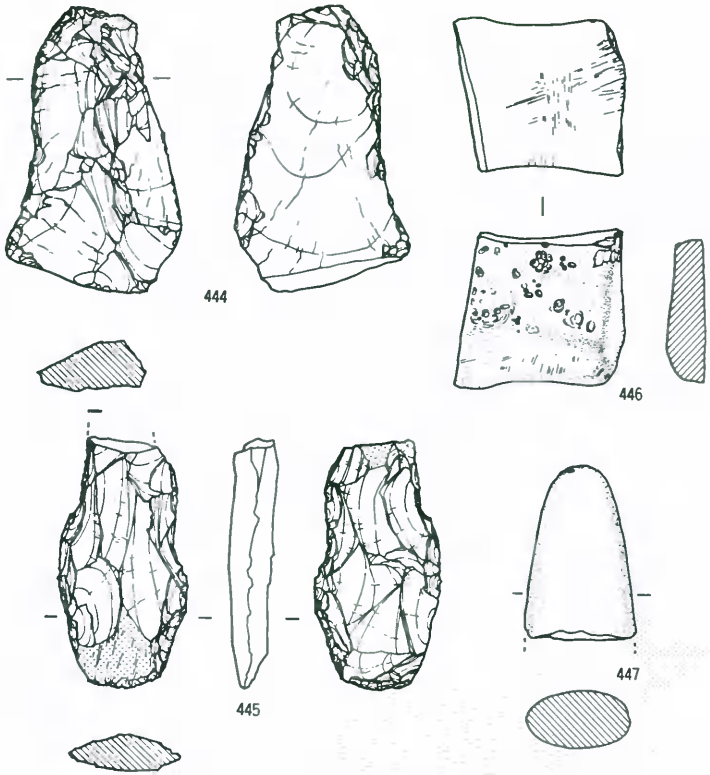
第363図　溝―137出土遺物（1）



第364図　溝―137出土遺物（2）



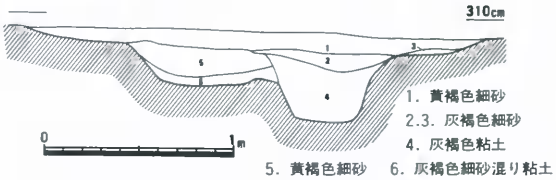
第365図　溝—137出土遺物（3）（1/2）



第366図　溝—137出土遺物（4）（1/2）

溝—138（第367図）

209Qから210Pへ続く溝である。埋土中からは，弥生時代前期の土器片・石鏃・サヌカイト片が検出されている。後年，北側の調査が行われて，弥生時代後期の土器を検出しているので，この時期に比定するのが妥当であろう。（正岡）

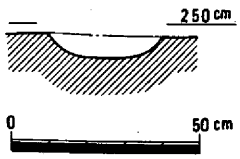


第367図　溝—138（1/30）

溝—139（368図）

209Sと210Sにおいて水田層を除去したのちに，微高地部分と水田部分の

境に沿って検出された溝状遺構である。幅は20〜40cmと一定ではなく，深さも5cm前後と浅く，底面の凹凸が著しいことから，水を流すための溝とは考え難い。

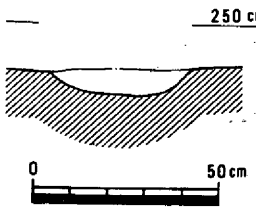


第368図　溝—139（1/20）

時期は弥生時代後期のものと考えられる。

溝—140（第369図）

210S・Tにおいて，弥生時代後期末の水田層を除去したのちに北西—南東方向に検出された溝で，溝—8に切られている。北西部は調査区外にのびるが，南東部は逆L字状に終っている。幅30〜40cm，深さは5cm前後を測るにすぎない。埋土は灰茶褐色粘質土が1層である。



第369図　溝—140（1/20）

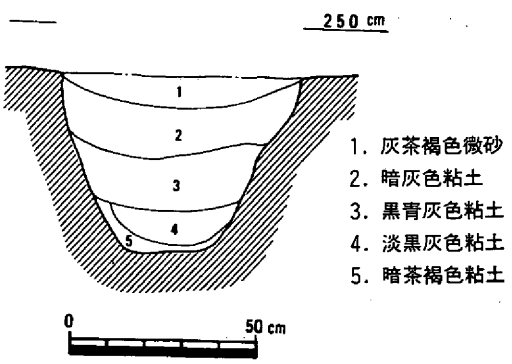
時期は弥生時代後期と考えられる。

溝—141（第370図）

210S・T，211T・Uにおいて北西—南東方向に検出された溝で，溝—7を切っている。幅50〜80cm，深さ50cm前後を測る。断面形はU字形を呈し，埋土は5層に分離できる。流走方向は北西から南東と考えられる。底のレベルは海抜190cm前後である。

出土遺物としては少量の土器片および石器片がある。

時期については，弥生時代後期末の水田層を除去したのちに検出されることなどからほぼ弥生時代後期のものと考えられる。

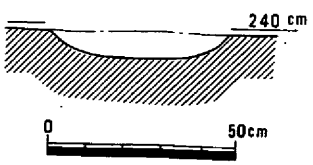


第370図　溝—141（1/20）

溝—142（第371図）

210Tの中央部において北西—南東方向に検出された溝である。幅40〜60cm，深さ10cm前後を測る。

出土遺物がほとんど無いため時期は明確ではないが弥生時代後期末の水田層を除去したのちに検出された溝であることなどから弥生時代後期のものであろう。　（平井）



第371図　溝—142（1/20）

溝—143（第372図）

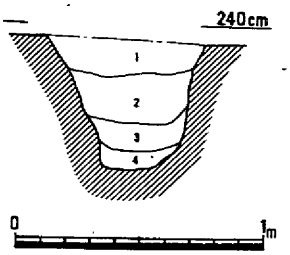
この溝は，調査区中央の微高地の間に位置する。ほぼ微高地と平行しながら北西からやや蛇行して南東方向に流走するものである。溝は，弥生時代後期末の水田層の下層で検出された。規模は，幅約60cm，深さは約50cmを測る。溝内は，第

1～4層がレンズ状に堆積する。

出土遺物は，ほとんど検出できなかったが，第4層から少量の土器が出土した。出土した土器は，弥生時代後期中頃のものであった。

溝—144（第373・374図）

東側微高地上のW～X間に位置する。この微高地上存在する溝—145～152と帯状水田の下部に検出されたものである。溝は，北北西から南南東方向にやや蛇行しながら流走する。



1．灰褐色砂泥
2．茶褐色砂泥
3．青灰色粘質土
4．暗青灰色粘土

第372図　溝—143（1/30）

規模は，幅が約90cmで，深さ約45cmを測るが，上部の溝などによってかなり削平を受けていると考えられる。出土遺物はほとんど検出されなかった。時期については，限定できないものの他の溝群及び帯状水田より古いことが確認されており，これらの状況からみて弥生時代後期の前半期におさまるものと考えられる。

溝—145（第374・375図）

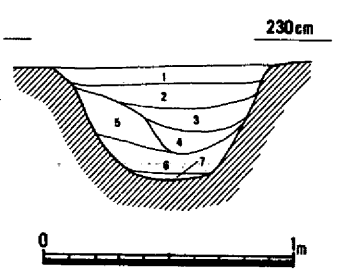
この溝は，微高地の西端に位置する。調査区北側で大きく蛇行しながら，北西から南東方向に流走する。調査区北側，南側では，溝—146，147などと重複する。

規模は，幅約90cm，深さ約85cmを測る。溝内は，第1～10層までがレンズ状に堆積している。この溝は，諸状況から数回の掘り直しが行われている。

出土遺物は，ほとんどみとめられず弥生時代後期と考えられる土器が少量出土している。

溝—146（第374・375図）

この溝は，溝—145と一部重複してその北側に位置する。溝—145の南側肩口が削平を受けているため残存状態はよくない。規模は，幅約80cm，深さ約20cmを測る。出土遺物は，土器が少量出土したが時期を限定できるものではなかった。

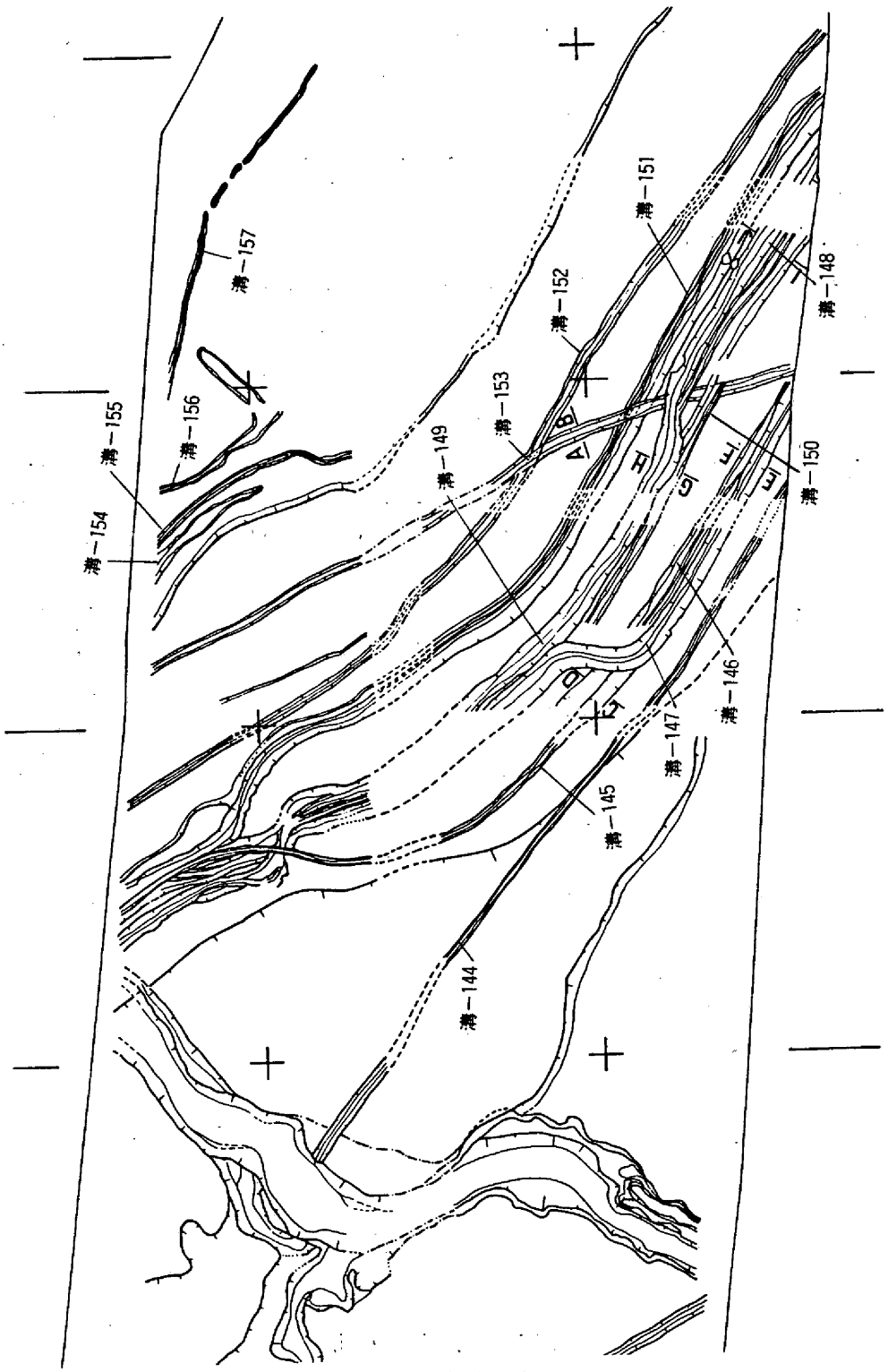


1．灰褐色粘質土
2．灰黄褐色粘質土
3．淡青灰色粘土
4．暗青灰色粘土
5．青灰色粘土
6．暗青灰色粘土
7．灰黒色粘土

第373図　溝—144（1/30）

溝—147，147′（第374・375・384図）

この溝は，帯状水田及び溝—149の西側に隣接する。従来この溝—147は，第384上図の溝—147′の下部の溝にあたり，溝—147が埋没したのちに溝—147は改修的掘りなおしが行われている。また，溝—149と溝—149′も同様な関係と考えられる。この一帯，いわゆる微高地の西側が，溝域として意識され



第374図　U・V溝群（1/400）

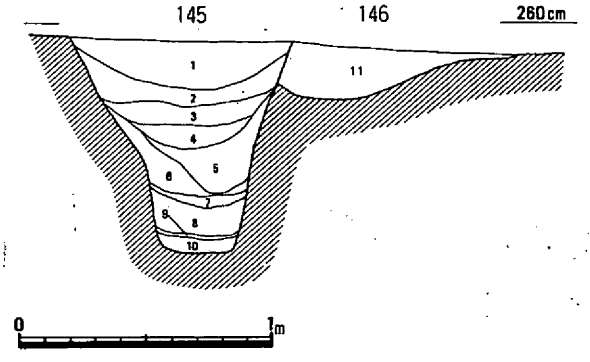
ていた地点にあたる。溝—147は第375下図の第4～8層にあたり，溝—147′が同図の第1～3層に相当する。溝—147′は，帯状水田を含めた弥生時代後期の水田を覆っている洪水砂層と同様な砂層で埋没している。これは，溝—149′についても同じで，水田埋没時に溝—147′，149′が水路として同時期に存在したことが明らかである。溝—147は，ほとんど溝—147′と流路が重なる。幅約110cm，深さ約50cmを測る。出土遺物は少量の土器が出土した。

溝—148（第374・377図）

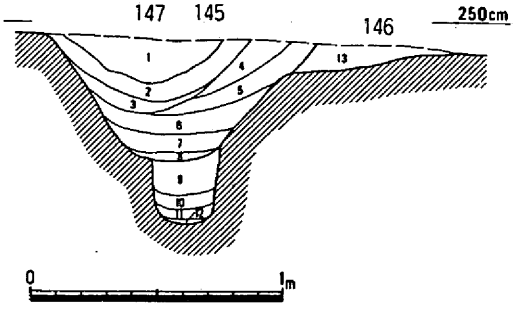
この溝は，溝—147の東側に位置し，溝—149の下部に検出された。流路は，溝—149とほとんど重なり，北西から南東方向に流走する。規模は，幅約80cm，深さ約70cmを測る。溝の掘り方は，溝—145と同様にU字形に掘られている。溝内は，レンズ状の堆積を示す。出土遺物は，土器が少量出土した。溝—147とほぼ同時期のものと考えられる。

溝—149，149′（第374・377図）

この溝は，溝—147の北側及び溝148の上部に位置する。この溝—149，149′は，先述した溝—147，147′の関係と同様なものと考えられる。溝—149は，第379上図の第5～7層，第379図



1. 灰褐色砂質土
2. 淡灰黄褐泥砂
3. 淡灰茶褐色砂泥
4. 灰褐色粘質土
5. 青灰色粘土
6. 暗緑灰色粘質土
7. 灰色粘土
8. 暗青灰色粘土
9. 青灰色砂
10. 青灰色粘土
11. 淡黄褐色泥砂



1. 灰褐色微砂
2. 黄灰褐色砂
3. 暗灰色粘土
4. 淡茶褐色泥砂
5. 黄灰色泥砂
6. 淡茶灰褐色泥砂
7. 灰色粘土
8. 黒灰色粘土
9. 緑灰色粘質土
10. 濃緑灰色粘土
11. 暗灰色粘土
12. 灰白色砂
13. 淡黄褐色泥砂

第375図　溝145～147（1/30）

下図第7～12層にあたる。溝幅は，振幅があり100～135cmで，深さは約50～60cmを測る。この溝も検出状況からみて数回の改修的行為が行なわれていることが認められる。また，溝―149′は，第379上図第1～4層，第379下図の第2～5層で，溝内の堆積のほとんどは砂層で埋没している。また，溝―149は調査区北側で溝―147と交差する。さらに溝―145と溝―148も同様である。以上のように溝―145，148，溝―147，149，溝―147′，149′は，形態，堆積状況及び位置関係層位関係など類似点が多いことが指摘できる。このことは，これら2本の溝が対になって，当初から存在していたと考えられる。

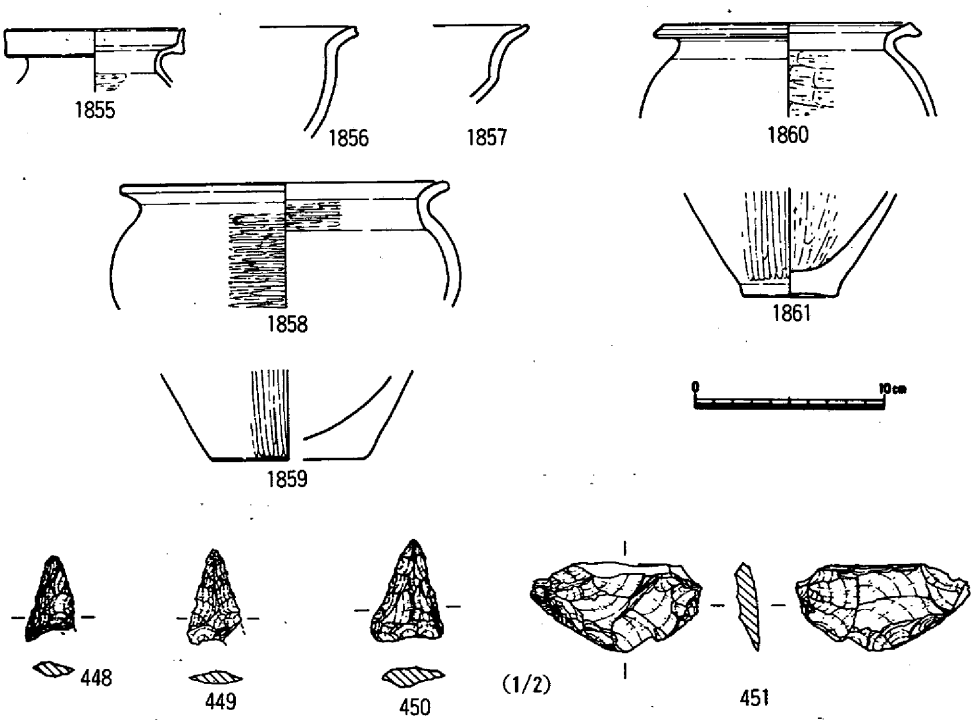
溝―150（第374・377図）

この溝は，溝―149の南側に接し，微高地南側でその一部が検出された。溝―147，149などに切られており残存状態はよくない。溝は，幅約70cm，深さ約10cmを測る。

出土遺物は，検出されていないが他の溝との切り合い関係からみて，溝―146と時期が対応すると考えられる。

溝―151（第384図）

この溝は，帯状水田における第2水田面に検出されたものである。調査区北側では，帯状水田の西側を平行して流走していたものが，途中から帯状水田内の西側端部に引き込まれてい



第376図　溝―147出土遺物

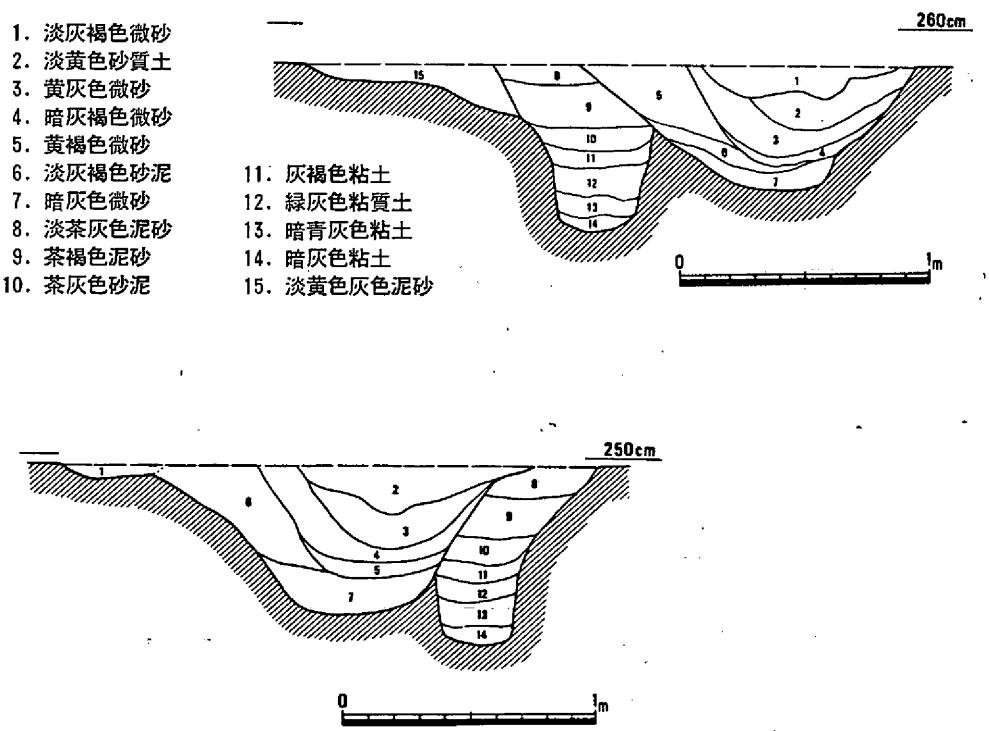
る。溝は，西側肩部と帯状水田の肩部を利用するが，東側は水田の畦畔状の土手を設けている。この溝は，212ラインより南側の帯状水田への水を供給するためのものであると考えられる。

溝―152（第384図）

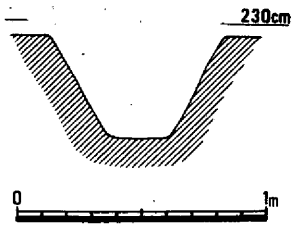
この溝は，帯状水田の下部に検出された。帯状水田の上層の第１水田面から切りこまれており，下層の第２水田面の使用されていた時には水田に伴う可能性も考えられる。また，溝は第１水田面検出時には，溝の堆積層の陥没で溝状にその痕跡が認められた。溝は，第２水田面との先後関係は明らかでないものの，さほど時期差を求めるほどではないと考えられる。

溝―153（第378図）

この溝は，調査区東側のＶ～Ｘ間に位置する。微高地を掘削して開田された水田層の下層に



第377図：溝―148～150（1/30）

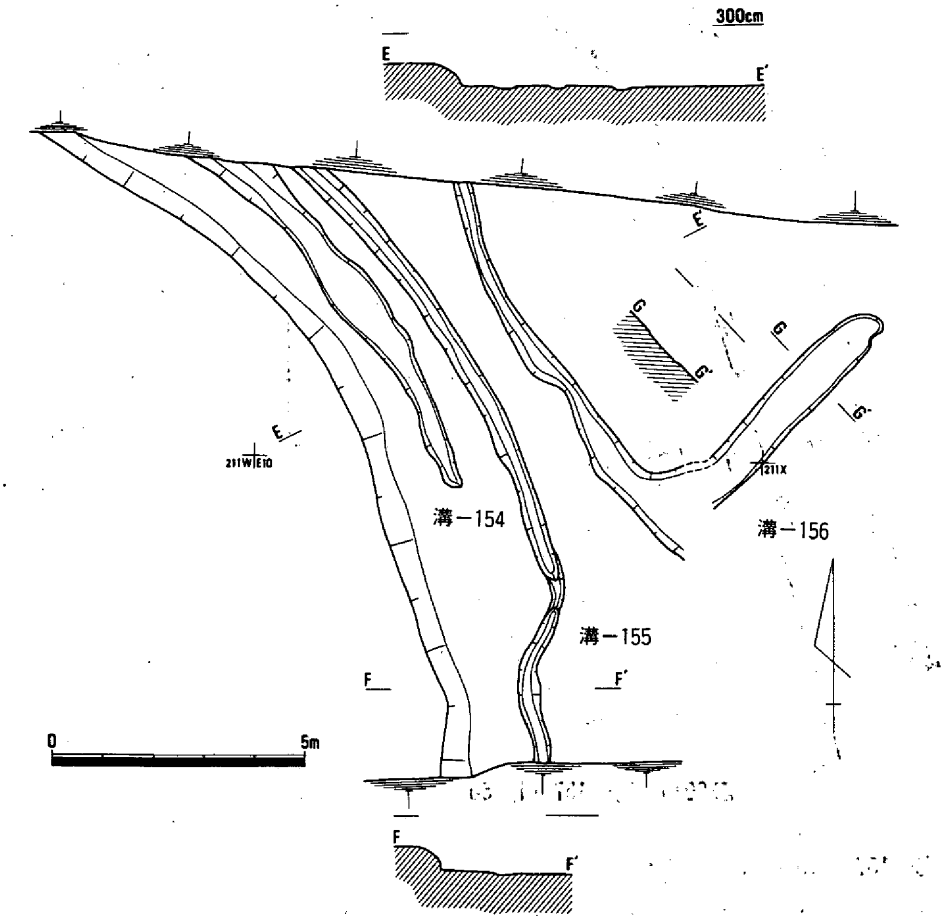


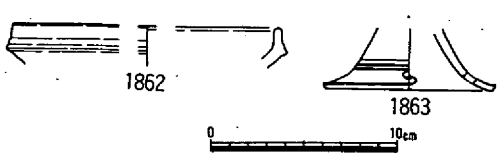
第378図　溝—153（1/30）

検出された。溝は，北西から南東方向に直線的に流走する。規模は，幅約70cm，深さ約40cmを測る。溝内は，上下2層の堆積があり，上層とは，暗茶灰色粘質土，下層に暗茶褐色砂質土が認められた。出土遺物は弥生時代後期の土器が少量出土した。（中野）

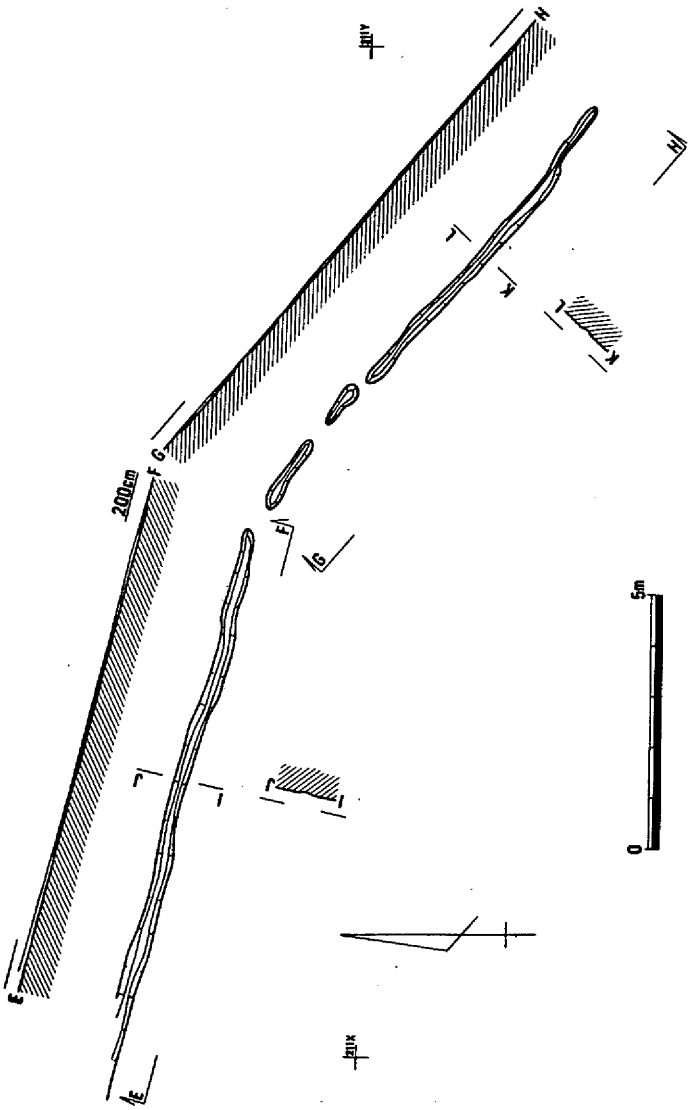
溝—154・155・156（第379図，図版149）

210・11Wに位置する。沢田遺跡の所在する微高地より東の低位部一面に拡がる弥生時代後期の水田層を除去した段階で検出された。微高地の縁に沿うように伸びている。このような溝は百間川遺跡群では微高地や「島状高まり」の縁辺にしばしば認められる





第379図　溝—154～156（1/150）・出土遺物



第380図　溝—157（1/150）

ので，この溝もその1例と考えられ，同様の機能ないしは形成過程を経たものであろう。

溝-154は幅38～94cm，深さ5～10cm，溝—155は幅40～50cm，深さ5cm前後を測る。溝—156は210・11の境界付近で直角に折れ5m東に伸びる。この部分は幅90cm，深さ5cmである。

埋土は154が淡青灰色粘性土，155が暗青灰緑色粘性土，156は暗青灰色粘性土とそれぞれ異なる。

図示した土器は154から出土している。百・後・Ⅱであろう。

溝—157（第380図，図版149）

210Xから211Xにかけて位置している。やはり弥生時代後期水田層を除去した段階で検出された。210Xで東南東に伸びていたものが，途中で屈折して南東へ方向を変える。深くても4cm程度の残存にすぎず，ところどころで削平されて消失している。幅は30～40cmで，23m分を検出した。溝底の標高は北西端で172cm，南東端で168cmを測る。遺物が出土していないため時期は明瞭ではない。溝としての機能を考えてよいようである。（岡本）

（2）水　　田

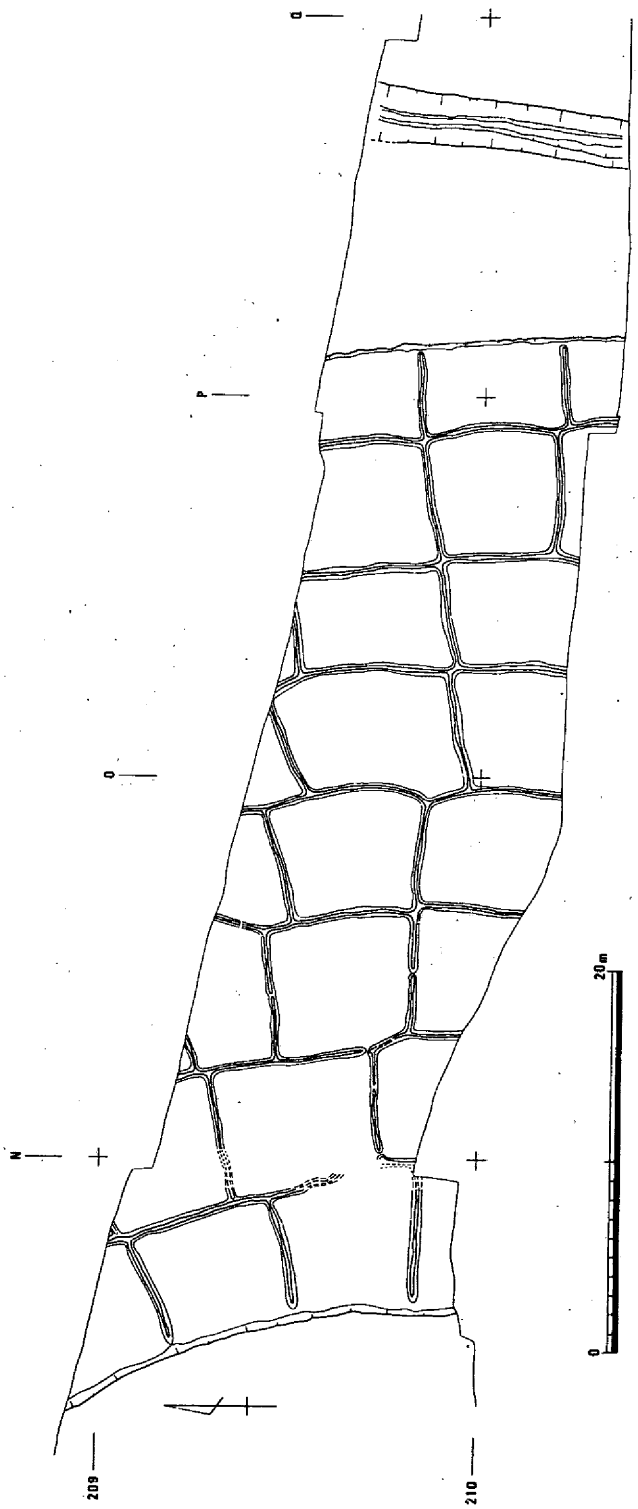
M～P水　田（第381図，図版150―1）

209Mから209P西端部分にかけて検出できた水田遺構である。水田は，縄文時代晩期頃に形成された幅約50mを測る河道の上面に，河道埋没後営まれたものである。

水田は，約40cmの洪水堆積砂によって厚く覆われていた。そのため，水田を構成する畦・水田面等の遺存は良好で，所々において水口の確認もなされた。

洪水砂除去後，面的に検出できた水田の規模は，東西52mで，東西両端ともに比較的直線気味に微高地との境を画する。微高地端部と水田面との比高は，約40cmを測る。中央部にいくにしたがい比高はさらに約20cm増すが，これは下層に所在する河道と後世堆積土の土圧に起因する事象であり，本来水田面はほぼ一定に近くあったと考える。水田面の海抜は，中央部分で約190cm，東西両端部分でそれぞれ約225cmと約210cmを測る。

畦は，いずれも下端幅約50cm，高さ約5cmを測る小さいものばかりで，大畦は存在しない。東西南北方向を基調に，比



第381図　M～P水田（1/400）

較的直線気味に水田を区画する。この小畦により形成された水田のもので，面積的には40～50㎡を測る小規模水田である。

水口は，東西両端の微高地との接点に共通して認められる。他には西側より数えて3番目の水田列の東西方向畦の中央部に認められる。

水田の時期は，弥生時代後期末頃が考えられる。（島崎）

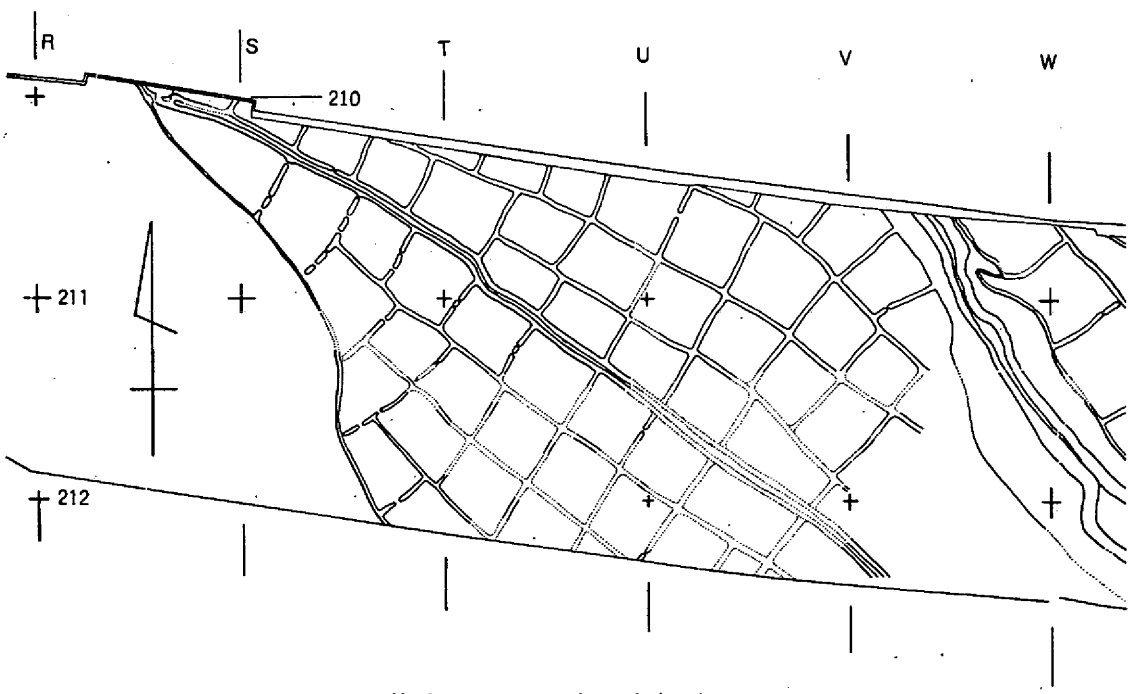
R～V水　田（第382図）

210Rから212Vにかけて検出された遺構である。水田は厚さ約20cmの洪水堆積砂によって覆われていた。そのため，水田面の遺構は良く遺存し確認された。

洪水砂層除去後，210R北端中央部から南東に向って流走する畎畝が検出され，水田の区画はこの畎畝に平行，あるいは直角に小畦畔が取り付いて開かれている。畎畝，すなわち水路は確認された範囲内においては519に向ってのみ水口が認められ，その他への水口は存在していない。

小畦畔に伴う水口については，畎畝より北東側においては数少ないが，南西側においては多数存在していることが確認されたが，このように一方にのみ多く構築されているということは，取・排水に関連があるものであろうが，南西部の微高地に接する小畦畔全てに認められ，東側はほとんど検出されなかった。

水田の時期は，洪水砂による埋没の時期，すなわち弥生時代後期末頃と考えられる。（二宮）



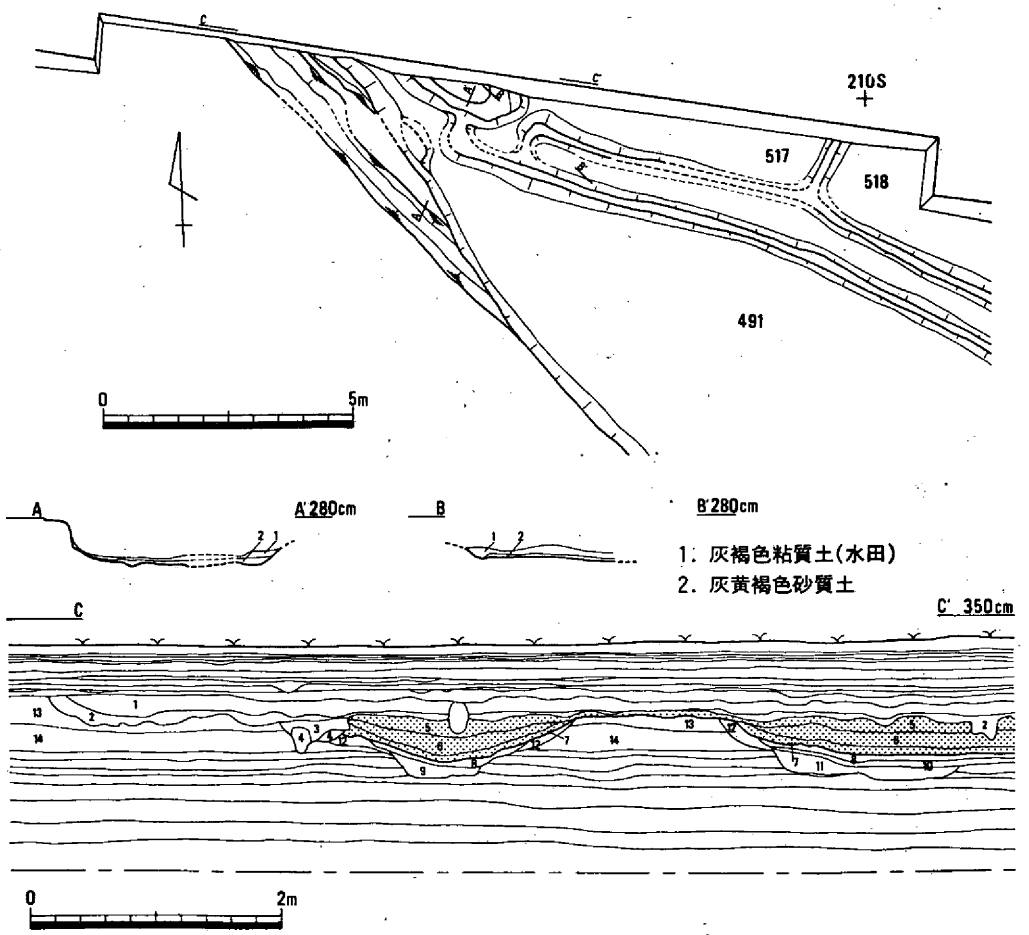
第382図　R～V水田（1/750）

水　口（第383図）

210R北端中央部において，微高地上を流走した用水路の水田への開口部が検出された。

溝は幅約120cm・深さ35cm前後を測り，基本的には小畦畔2本によって形成された畎畝に繋がるものと考えられる。本来は9層までを逆台形に掘り込んでいるが，8層の水田土壌が底面を覆っており，ゆるやかな水流が想定される。

畎畝は幅50cm・高さ5cm程度の2本の小畦畔によって形成され，幅約70cm・深さ8cm前後の浅い溝状遺構となっている。用水路から畎畝への移行部分では水田491・水田517へそれぞれ水口が開いており，畎畝の両側の水田への取水口となっている。



1. 灰色粘土(古墳時代水田)
2. 灰褐色微砂質粘土
3. 暗灰褐色土(溝－165)
4. 褐灰色土(溝－166)
5. 明灰黄色微砂(洪水砂)
6. 淡黄褐灰色微砂(洪水砂)
7. 淡黄灰色弱粘質微砂(洪水砂)
8. 暗灰色粘土(水田)
9. 灰褐黄色微砂質粘土
10. 褐灰色粘質土
11. 淡褐灰色土
12. 黄褐灰色微砂
13. 褐灰色土
14. 明灰黄色土

第383図　水　口（1/50・1/60）

以上の基本的構造をもつこの部分であるが，洪水砂による埋没時の状況は若干異なっており，畎畝内の２か所で堰止めた様相が見られる。これにより，畎畝および水田517への取水は止められ，水田491へのみ取水できる形となっている。畎畝以北の水田についてはこの水口の他に北方での取水が考えられ，この部分では畎畝以南の水田への取水のみを意図したとも考えられるが，畎畝への水流を止めたことは畎畝の用水路としての機能を否定するものであり，水田全体への用水の必要がなくなったことを示すものであろう。稲作行程において水の要らない時期，すなわち刈り取り直前の時期が，洪水砂による埋没の時期と考えられるものである。（光永）

帯状水田（第384図，巻頭図版―２）

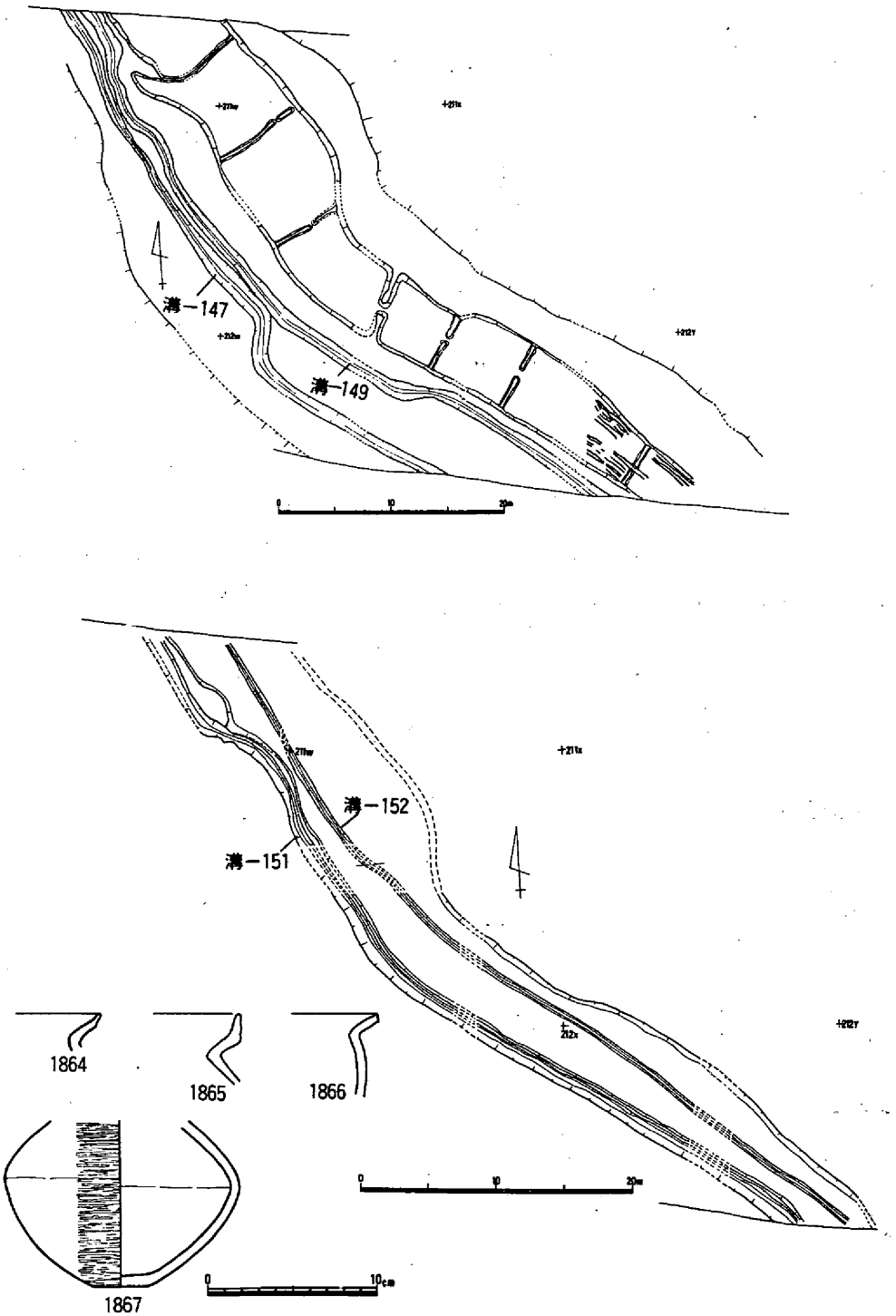
調査区東端部のＶ～Ｚ間に北西～南東方向の微高地が存在する。微高地両側端部は，低位部からの水田拡幅のため，微高地部は，幅約23ｍの狭長な微高地が残存する。帯状水田は，その狭長な微高地上を掘り下げ，幅５～10ｍの細長い水田が形成されている。この帯状水田は，畦畔で区画されてこの一区画は，６～10ｍの正，長方形を構成する。水田を区画している畦畔には，小畦・大畦が検出された。また，水田のほぼ中央は，畦畔が切れ水口が認められた。水田の南側では，水田面の凹凸が顕著で検出が難かしかったものの，その凹凸が規則性をもっていることが明らかになった。この凹凸は，帯状水田に沿うように５～６条の畝状を呈していた。この畝状のものの存在が，帯状水田での水稲耕作を想起する上で，生じる問題点については解決できていない。帯状水田の西側には，溝―147′，149′が位置するが，溝と帯状水田とは位置関係に意識されている。この２本の溝は，いずれも帯状水田を含む水田を覆う洪水砂層と同様な砂層で埋没している。水田550は，北西部に水田凹部が張り出しており，それにともない溝―149′もその張り出し部で，やや屈曲しており相互関係を窺がわせる。さらに，この溝―149′をその部分で堰をすることによって，帯状水田への水の供給が考えられる。また，この水田面下流の畦畔に水口が切られているのを意識せざるを得ない。また，帯状水田は上記した第１水田面の下層に第２水田面が存在する。（中野）

Ｗ～Ｙ水　田（第385図）

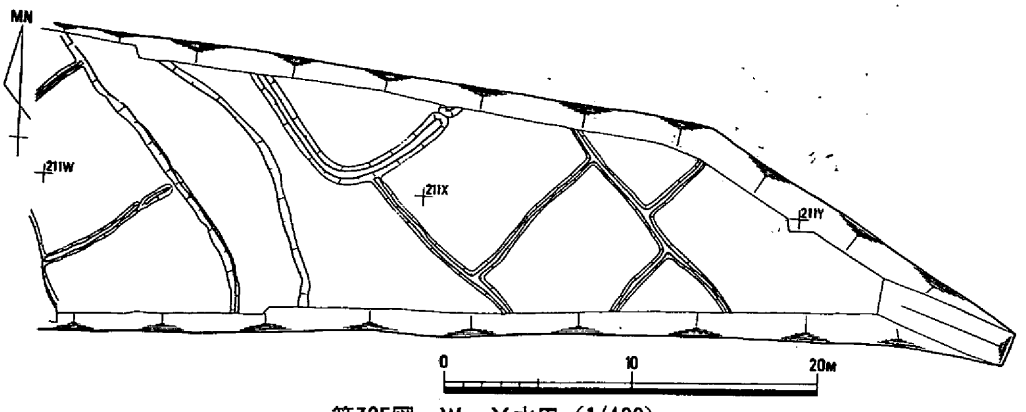
高縄手Ｂ調査区東端に検出した水田遺構である。南半部の調査からは水田面の確認が行えず，当調査区においては低位部からの水田面の検出を主要な目的とする調査を実施した。

旧地形は，西岸の微高地から東に向い地形が除々に下降し始め水田検出の低位部は旧河道もしくは低湿地と想定される場所である。

水田は微高地縁辺では，幅５ｍ程の削平を行い，水田面の造成を行っている。水田面は厚さ20～30㎝の洪水砂が覆り，他地区の水田と同様の状況を示している。水田跡検出は東西40ｍ，南北10ｍ程と面積として狭小な地区であったため計７面の水田区画面を検出したのみであった。この地区以東はすでに改修工事により掘削され，さだかでないが元来はさらに東に続き開



第384図　Ｕ・Ｖ帯状水田（1/600）・溝―151・152（1/500）・出土遺物

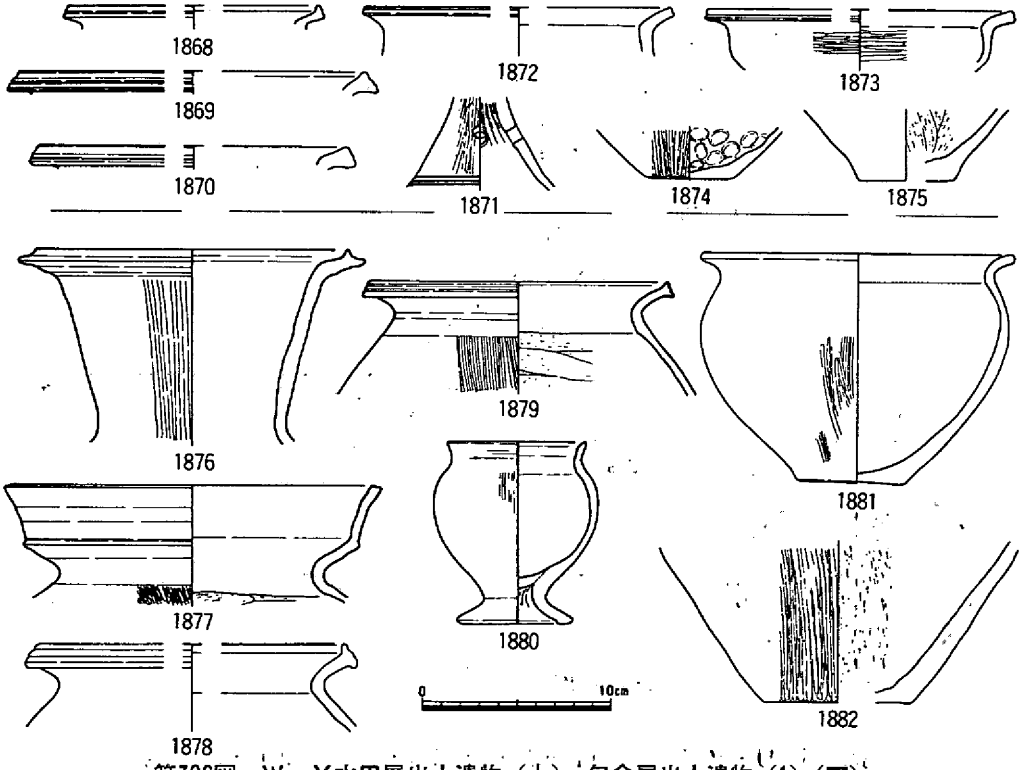


第385図　W～Y水田（1/400）

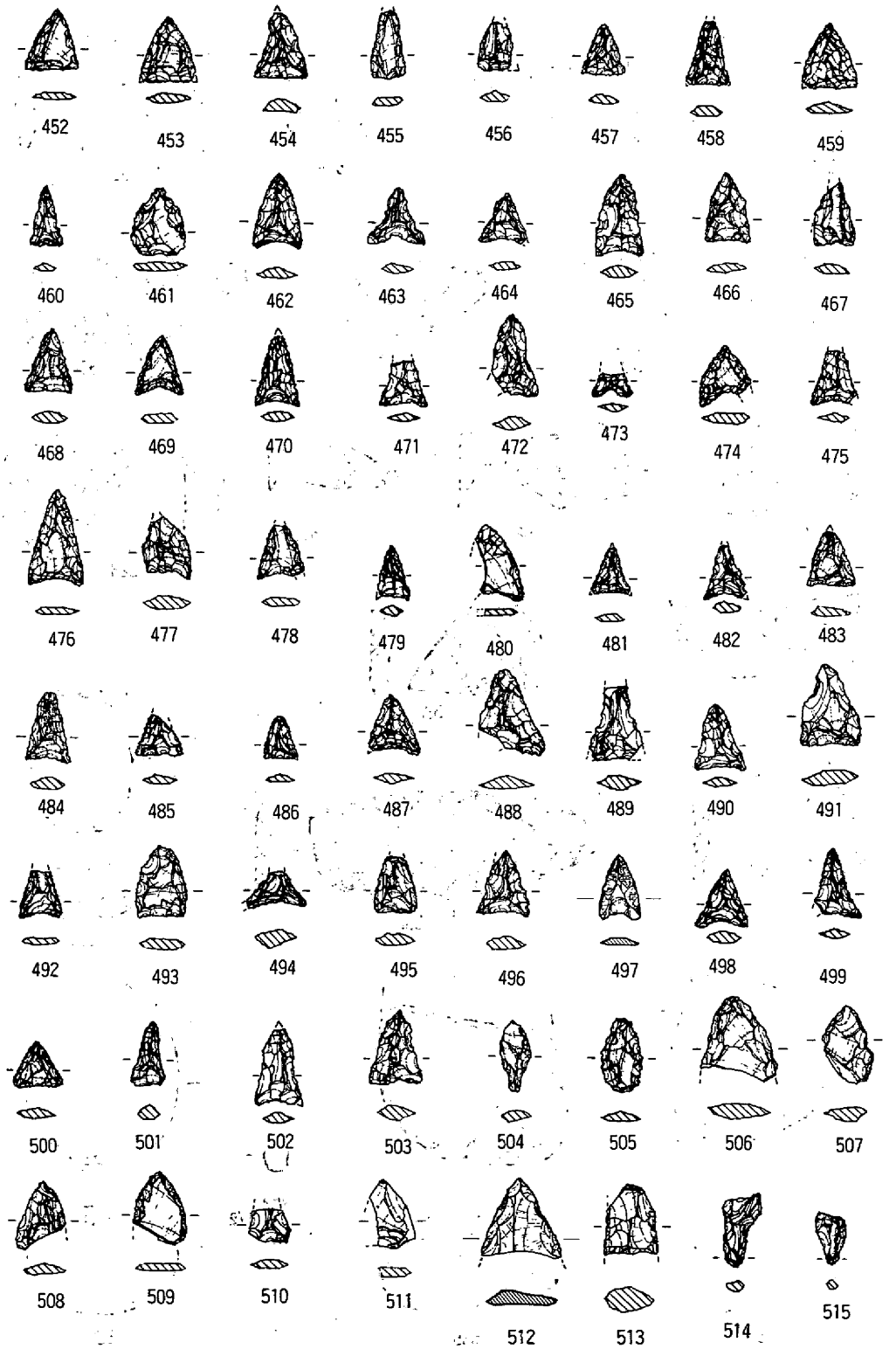
山下調査区に検出した水田面へと連なるものと考えられる。

畦畔は，北西―南東方向を基準とした方位を示しており，S～W区間に検出した水田畦畔や微高地に検出した帯状の水田とほぼ向きを同じくしている。

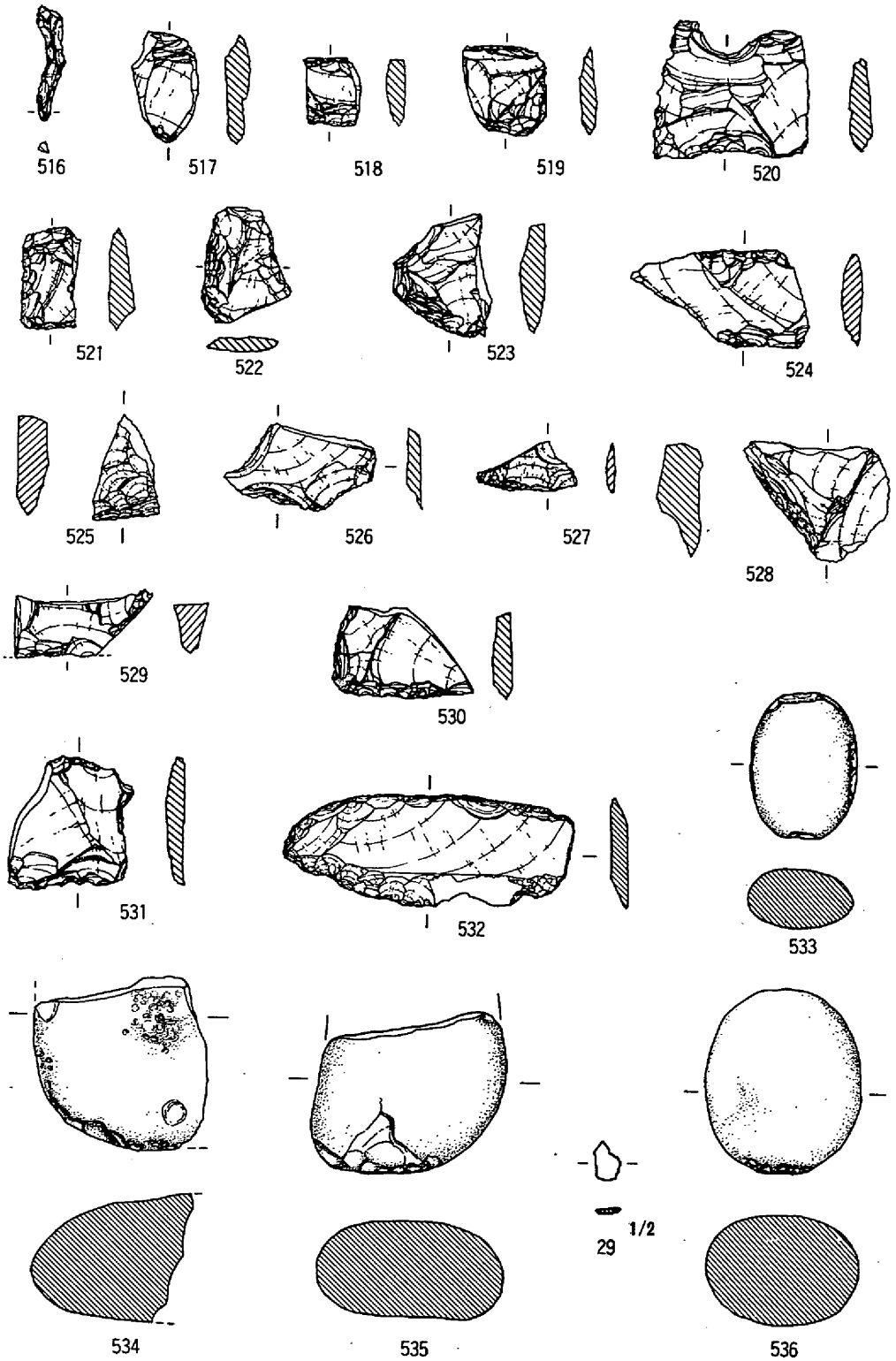
北西隅ではL字状に屈曲する幅90cm，高さ20cmの大畦を検出した。この大畦と微高地間の水田面には畦畔が認められなく北西―南東方向に幅の狭い細長い水田をなしている。　（山磨）



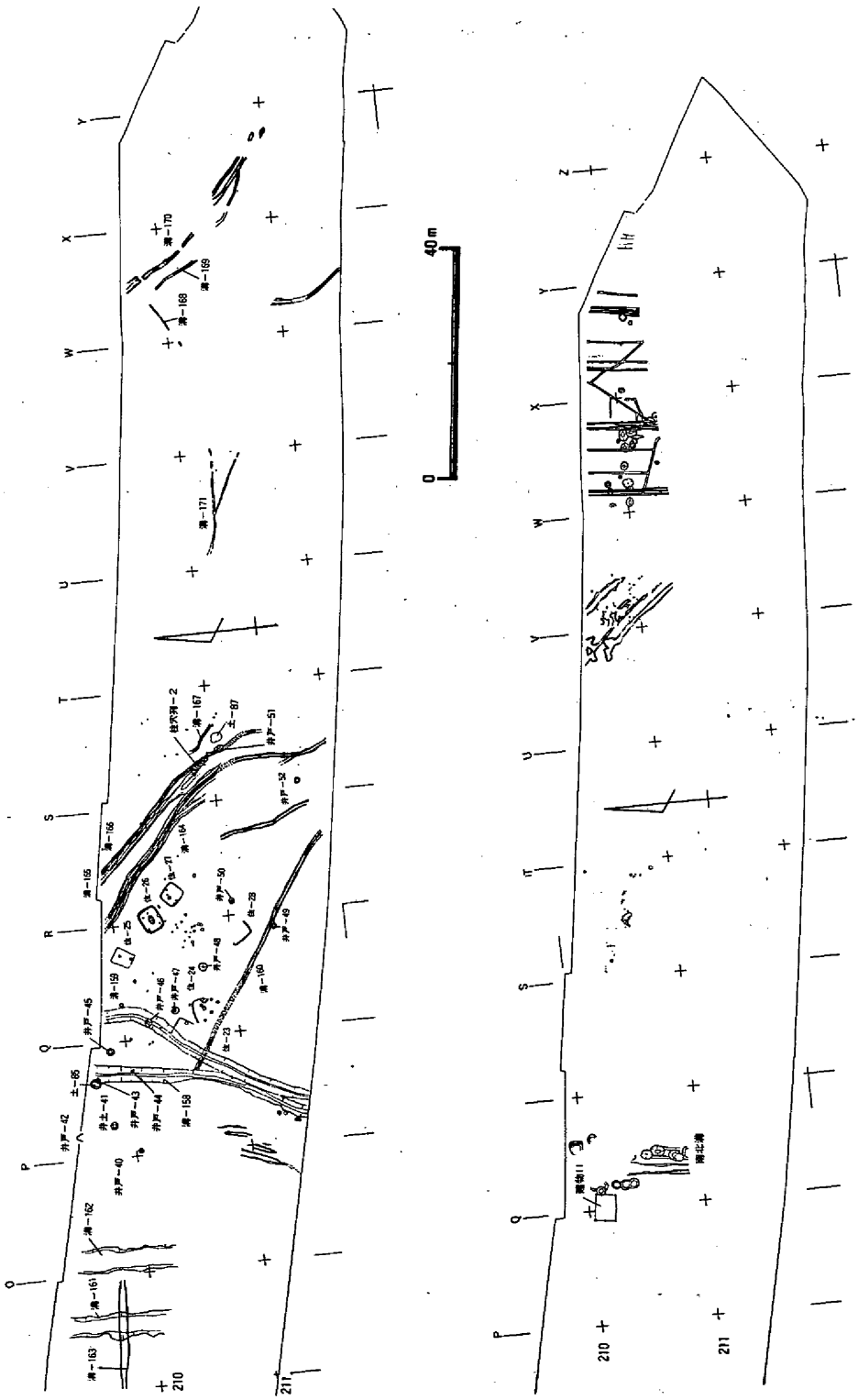
第386図　W～Y水田層出土遺物（上）・包含層出土遺物（1）（下）



第387図　包含層出土遺物（2）（1/2）



第388図　包含層出土遺物（3）（1/2）



第389図　古墳時代（左）・古代～近代（右）遺構配置図（1/1,200）

5. 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の高縄手Ｂ調査区は大きく分けて，Ｐ～Ｓ′の集落部分とＲ以東の水田部分から成っている。検出された遺構も主に集落部分に集中しており，他に一部溝が検出された程度である。また，集落部分も古墳時代後半の状況は不明確である。

検出された遺構には，竪穴式住居６軒・井戸13基・土壙２基・柱穴多数・溝14本・柱穴列１列，および水田である。

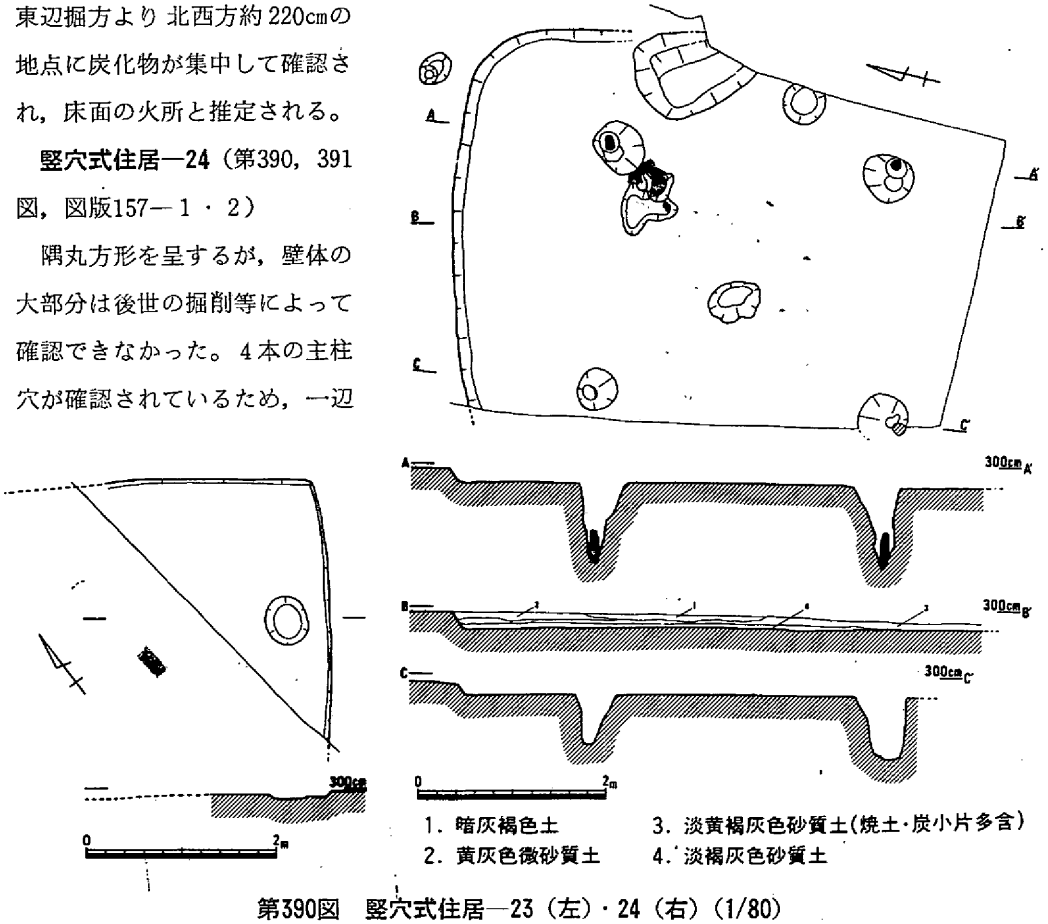
（1）竪穴式住居

竪穴式住居―23（第390図，図版157―１）

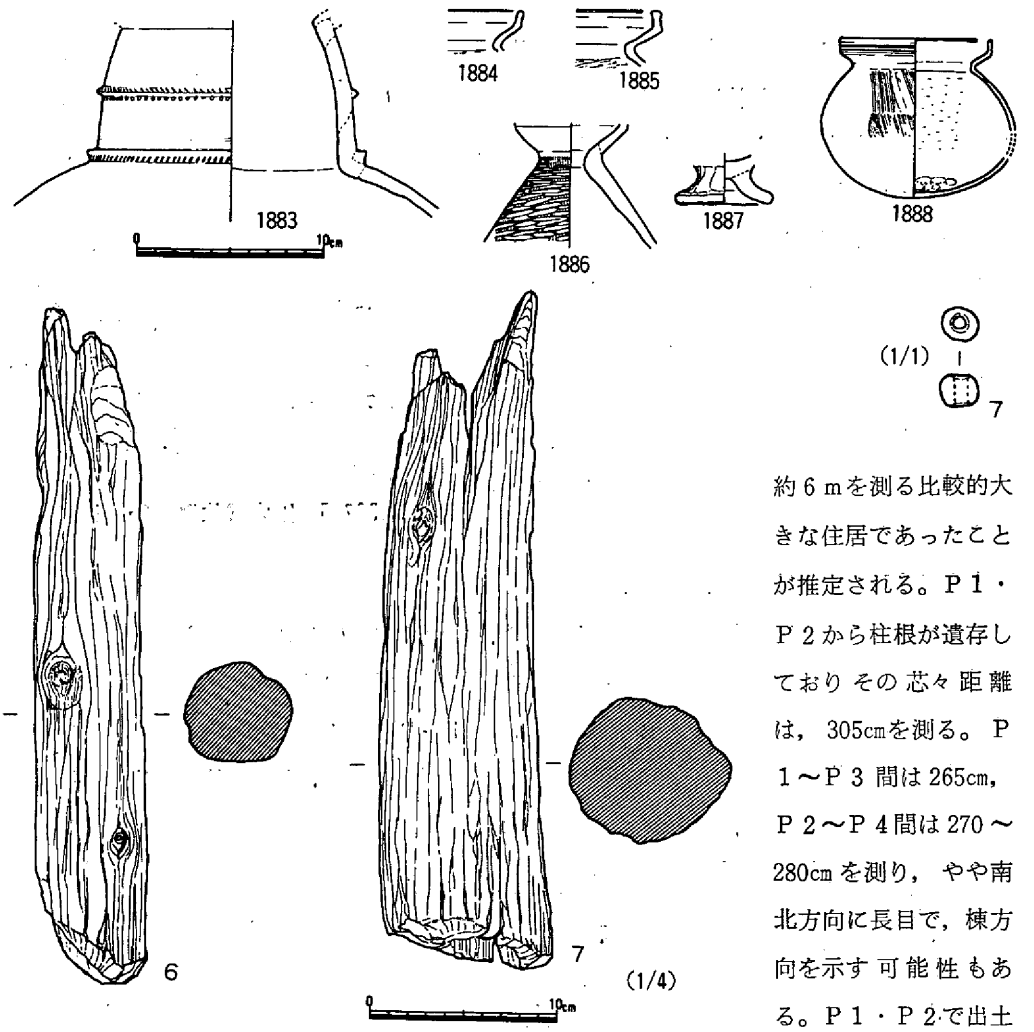
発掘区の境界に位置していたため，低水路部分との境界土手あるいは側溝のため全容を検出することができなかった。平面形は方形で，覆土は極めて薄く，床面までわずか３～４cmを測る。床面では，明瞭な柱は検出できなかった。不整円形の凹みが東辺近くに存在するが，深さ３cmで極めて浅く，柱穴とは断定できない。覆土中からはわずかな焼土細片が出土しているが，東辺掘方より北西方約220cmの地点に炭化物が集中して確認され，床面の火所と推定される。

竪穴式住居―24（第390，391図，図版157―１・２）

隅丸方形を呈するが，壁体の大部分は後世の掘削等によって確認できなかった。４本の主柱穴が確認されているため，一辺



第390図　竪穴式住居―23（左）・24（右）（1/80）



第391図　竪穴式住居—24出土遺物

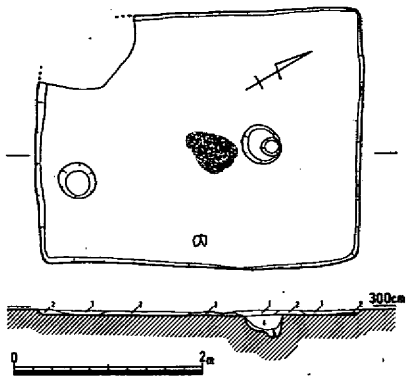
約6mを測る比較的大きな住居であったことが推定される。P1・P2から柱根が遺存しておりその芯々距離は，305cmを測る。P1～P3間は265cm，P2～P4間は270～280cmを測り，やや南北方向に長目で，棟方向を示す可能性もある。P1・P2で出土した柱根はかなり細く実際に住居の上部構造を支えるにはひ弱な規模を示す。用材はカヤである。P4付近ではガラス小玉が出土しており，この住居に伴う確実な遺物である。また，P2からは**1888**の小形甕形土器が出土しており，興味深い形態を示している。また覆土中から出土した**1883**の壺形土器は，装飾的な突帯と刺突文で飾られ，丁寧な器体の調整と共に注目される。住居のほぼ中央には，深さ7cmの浅い凹みがあり，その周辺では焼土の斑紋が認められる。また，住居東辺の土壙状凹みは，この住居より後世の掘込みと考えられる。出土遺物からするとこの住居の時期は百・古・Ⅱと推定される。　（岡田）

竪穴式住居—25（第392図，図版158—1）

210Q北東部で211Qに一部かかって位置する。長軸を南北方向からやや東に振って置く長方

形の竪穴式住居で，長辺約340cm・短辺約270cm・深さ６cmを測る。中央部には床面から浮いた状態で長径57cm・短径45cmの不整楕円形範囲で灰の堆積が認められる。これを伴うと考えられる北側の土壙は，長径43cm・短径39cmを測り，底は二段になって深さは17cmと23cmを測るが，熱影響を受けた痕跡は認められない。柱穴は南隅で１本を検出したが位置的にこの住居を支えたものとは考え難い。壁体溝は検出されなかった。

遺物は土師器の甕・高杯が出土しており，遺構の平面形態および検出状況からも，古墳時代前半期に属するものと考えられる。　　（光永）

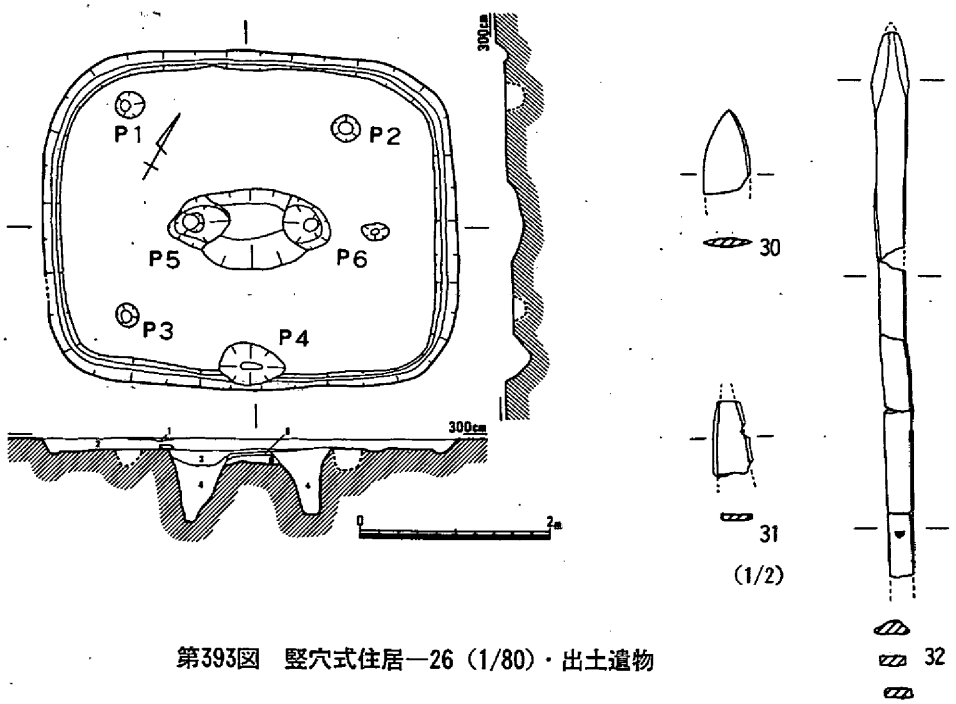


1．灰黄褐色砂質土
（灰褐色粘質土ブロックを含む）
2．灰褐色粘質土
3．灰褐色土
4．黄灰褐色砂質土
5．灰褐色土

第392図　竪穴式住居―25（1/80）

・**竪穴式住居―26**（第393図，図版158）

竪穴式住居―25の南東方約4.5ｍで検出された，隅丸方形の住居である。覆土は，淡黄灰色を呈する微砂質土で，ほぼ均質な土が埋積している。主柱穴は３本検出しているが（Ｐ１～Ｐ３），中央穴のＰ５・Ｐ６も主柱穴と考えられ，Ｐ１～Ｐ３の深さ約14～20cmをはるかにしのぐ，約70～75cmを測り，柱の径も約15cmを測ることが確かめられ，他の住居とは異なる柱配置



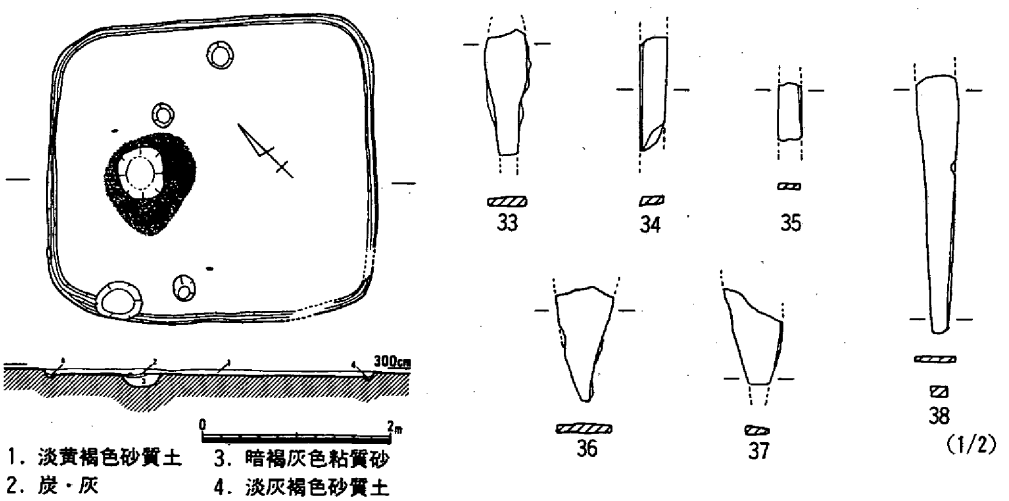
第393図　竪穴式住居―26（1/80）・出土遺物

が推察される。このＰ５とＰ６を包括して連接するように深さ約15cmの浅い土壙が掘りこまれており，２面の薄い炭化物層が検出された。この部分は，柱穴との切合いはなく，ほぼ同時に存在したと考えられる土壙状凹みで，火所のような性格・用途が推定される。Ｐ４は，壁溝に接するように掘りこまれた不整円形を呈する，床面よりの深さ約18cmを測る土壙で褐灰色を呈する微砂質土が埋積ししている。性格・用途等は不明であるが，「埋甕」のような機能も，民俗例から推察されよう。床面からは３点の鉄器が出土している。**30**は柳葉形を呈する鉄鏃である。**31**は用途不明で，両側辺に刃部が認められない。**32**は比較的良好な残存度を示す鉈で，先端及び茎の一部を欠くが，先端刃部の鎬なども明瞭に観察される。これらの鉄器は，住居の東半部に集中して出土している。床面及び覆土中からは，わずかな土器の細片が出土しているが，全形を示すものは皆無である。住居の埋積土等から，時期的には，百・古・Ⅰないしは百・古・Ⅱに比定される。（岡田）

竪穴式住居―27（第394図，図版158―２）

210Ｒの西よりの中央部に位置し，竪穴式住居―26の南東方向に近接する。長軸を北西方向に向け，長辺約345cm・短辺約320cm・深さ６cmを測る隅丸長方形の竪穴式住居である。

中央穴は北西よりにずれて位置し，長径55cm・短径45cm・深さ15cmを測るが，直接の熱影響は看取できない。この周辺には，長径約110cm・短径約95cmの範囲で炭・灰の掻き出しが認められる。この炭・灰層は中央穴上にも及び，中央穴が埋った状態での使用がうかがえる。壁体溝は全周を廻っており，幅約10cm・深さ１～５cmを測る。柱穴は，壁体溝を切るものも含めて４本が床面で検出されているが，いずれもこの住居を支える位置にはない。中央穴の位置からは，４本柱が考えられるが，これに相当する位置にはその痕跡が認められなかった。



第394図　竪穴式住居―27（1/80）・出土遺物

遺物は，壺・甕・高杯等の土師器，製塩土器，鉄器（33～38）が出土している。鉄器はいずれも床面からの出土である。これらの出土遺物から，時期は古墳時代前半に比定される。

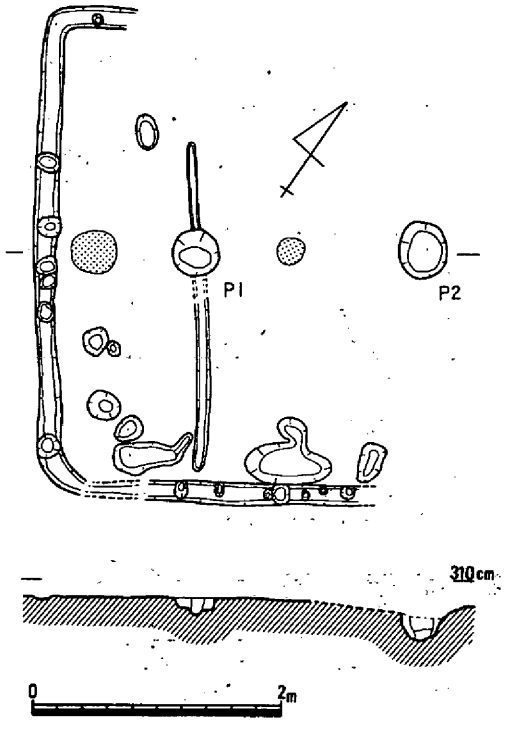
（光永）

竪穴式住居—28（第395図，図版160—２）

方形を呈する住居で，井戸—**48**の南東方約６ｍ，もっとも近い竪穴式住居—**24**の南東方約10ｍに位置している。主柱穴はＰ１・Ｐ２の２本と考えられ，それぞれ径10・18cmを測る柱痕跡が観察される。Ｐ１・Ｐ２の心々距離は約180cmを測り，ややＰ１よりに径約20cmを測る焼けた部分があり黄橙色を呈している。またＰ１と住居の南西辺との間にも同様に，焼けて黄橙色を呈する径38cmを測る不整円形を呈する部分がある。これらは，いずれも床面からの掘りこみ，凹部をなさず，平面的なものであることから，継続的に使用，あるいは利用された火所のようなものではないと判断される。Ｐ１・Ｐ２を主柱穴と推定すると，１辺約450cmを測る住居となることが推定され，近くの竪穴式住居—**72**などとほぼ同規模に近い。Ｐ１と平面的には重複し，住居の南西壁体と平行して，全長207cm，巾約10cm，深さ約３cmを測る浅い溝が検出されたが，住居の建て替えに伴う可能性は少なく，住居内の間仕切り，あるいは，平面的機能を分断するためや，屋内作業に必要とされた溝である可能性が十分に考えられる。壁溝内に不連続的に存在する小さな柱穴状の凹みは，深さ３～５cm前後を測り，明確に人為的に掘りこまれたものと断定はできないが，覆土とほぼ同質の微砂質土が埋積しており，同時に存在した可能性が強い。住居南辺の床面に散在する，不整な凹みもやはり覆土と同質の微砂質土が埋積しているが，極めて浅く，通常の生活に支障のない，床面の凹部と考えてよいだろう。

この住居の時期は，Ｐ１・Ｐ２から出土した甕の細片から推定すると，百・古・Ⅰないしは百・古・Ⅱの時期に比定され，竪穴式住居**23**～**27**と共に一つの住居群のまとまりを構成している。

（岡田）

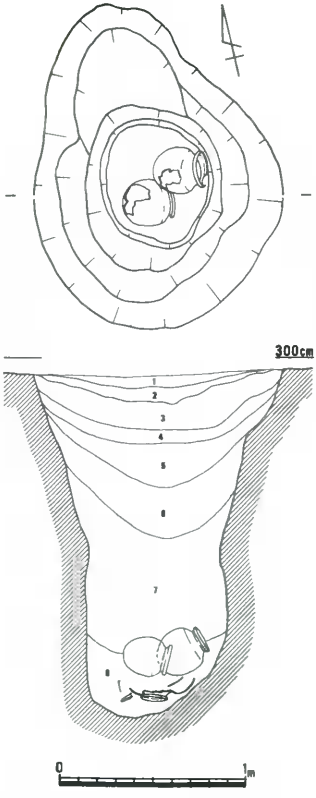


第395図　竪穴式住居—28（1/60）

（2）井　　戸

井　戸—40（第396図，図版161—1）

209Pの西側沿辺で，灰白色粘土層除去後に検出できた。平面形態は，円形の掘り方のものに井戸掘削時の足場を想像させる半円形の張り出しが北側に遺存するもので，南北方向に長い楕円形を呈する。規模は，長径178cm・短径132cmを測る。断面形態は，上半部でやや深めの皿状を呈していたものが中程で約75cmに狭まり，そして下半部に至るとふたたび広がり，若干胴張りの様相を呈する。検出面から井底までの深さは，約180cmを測り，井底の海抜高は調査時の湧水点より若干上位の約120cmに位置する。



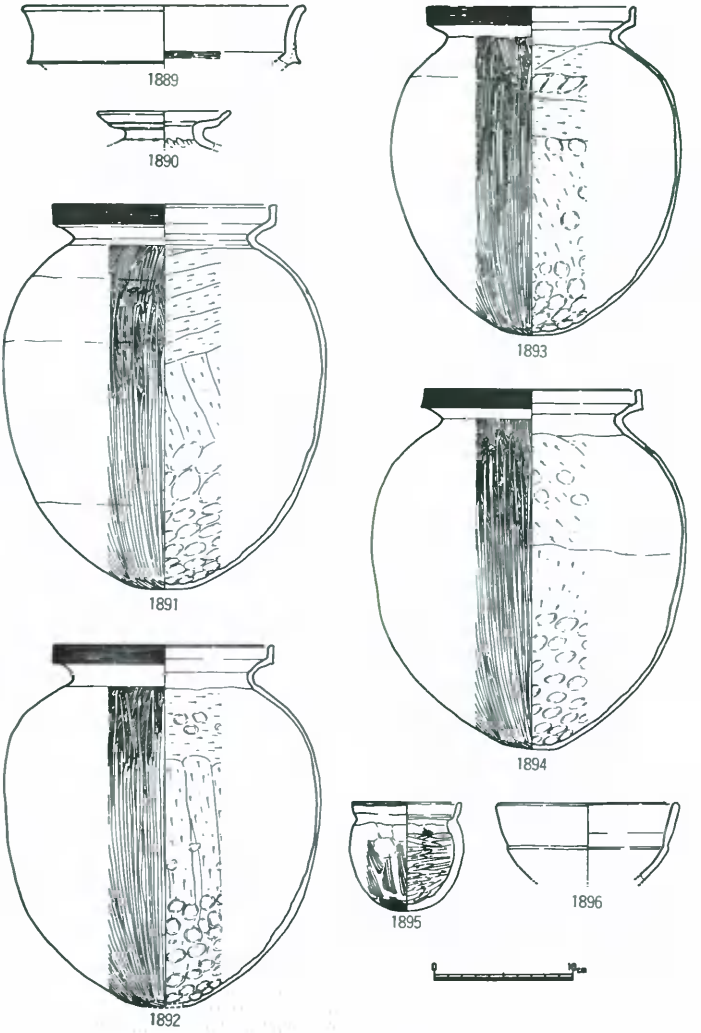
第396図　井戸—40（1/30）

土層断面に窺える井戸の埋没状況は，いずれの土層も比較的整然としたレンズ状堆積を示し，出土遺物も最下層の暗青灰色粘土層と，7層の青灰色粘土層下位にわたって完形品，もしくはそれに近い状態の甕等が一括して包含されているのが認められた。上位の層序においては，顕著な遺物の包含は認められなかった。

以上の事象から判断する限り，この井戸は，何らかの契機により甕等の一括放棄が行われ，その後自然に埋没が進行したものと考える。

出土した甕の多くは底部内面に炭化米の付着と，外面に煮沸痕としての煤と，若干の吹きこぼれ痕等が認められた。

井戸の埋没の時期は，下層一括出土の土器により，おおむね百・古・Ⅰ併行期に位置づけられる。

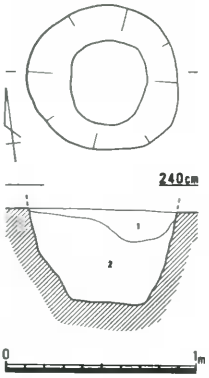


第397図　井戸一40出土遺物

井　戸—41（第398図）

弥生時代後期末頃の水田洪水砂除去後，水田層上面において検出できた井戸である。井戸検出状況から考えて，おそらく本来の掘り方は，洪水堆積砂よりさらに上層にあったものとすることができる。

検出面での規模は，長径80cm・短径75cmのほぼ円形を呈し，深さ49cmを測る。井底の海抜高は，約180cmを測り，前述の井戸—40に比較した場合，約60cm程高い。



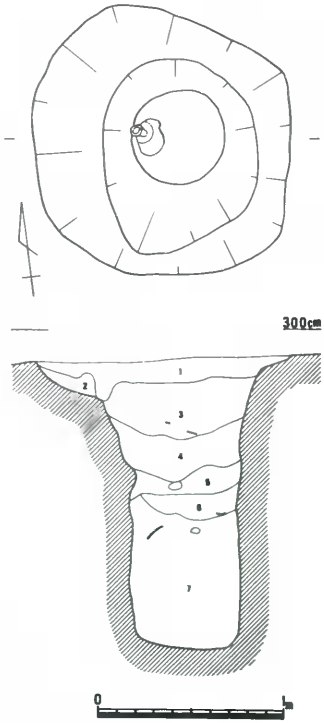
1．淡灰色砂　　2．暗灰色粘土

第398図　井戸—41（1/30）

埋土中にはまったく遺物が認められなかったことで，遺構の時期の詳細は不明である。しかし，洪水堆積砂上位層からの掘削である点と，周囲に所在する同様の井戸の存在等により，およそ古墳時代の初頭もしくは前半頃と考えられる。

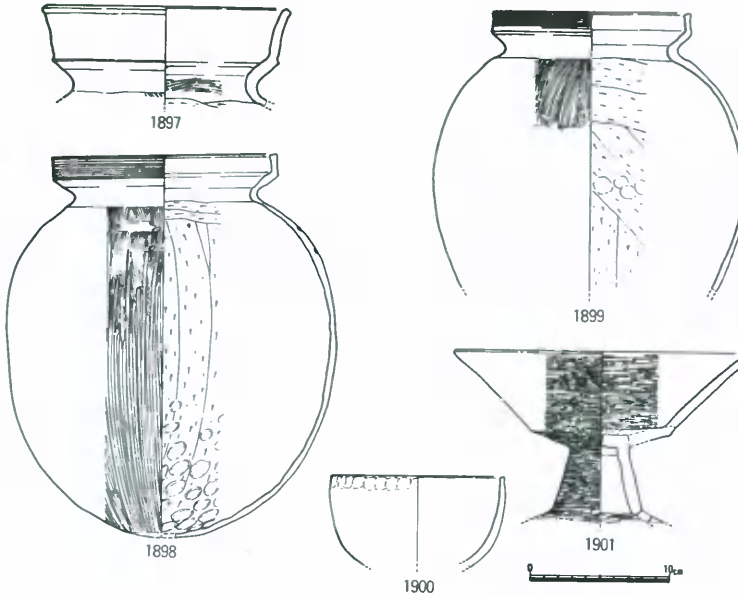
井　戸—42（第399図，図版161—２）

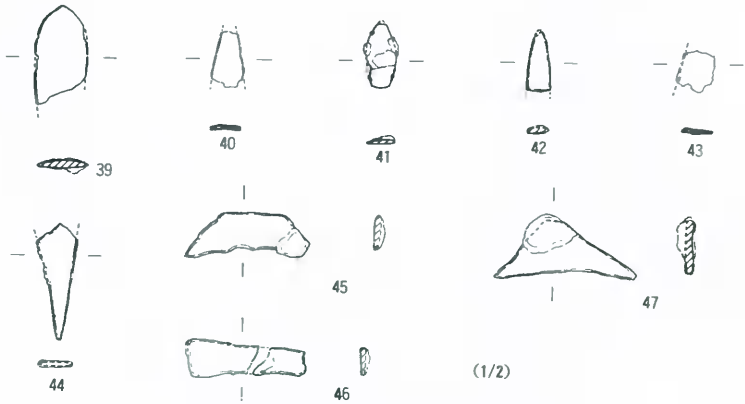
209Ｐの南西隅にあり，前述の井戸—41とはわずか約５ｍの距離に近接する井戸である。井戸—41が軟弱な旧河道埋積層としての水田層，及び洪水堆積砂を掘り込んでいたのに対して，これはより強固な微高地



1．灰褐色砂　　5．灰赤黄褐色土
2．褐灰色砂　　6．暗灰黄褐色土
3．黄褐色土　　7．暗灰褐色土
4．明灰褐黄色土

第399図　井戸—42（1/30）





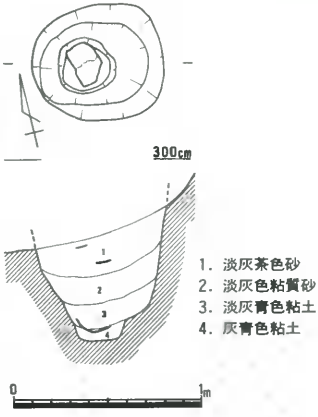
第400図　井戸―42　出土遺物

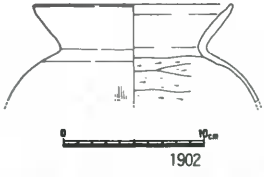
面を掘り下げてつくられていた。

平面形態は，不整形ではあるものの，ほぼ円形を呈する。長径155cm，短径145cmを測る。

断面形態は，浅い皿状の上端部から急に垂直気味に胴部へと続き，さらに平底の底部へと至る。規模は，検出面からの深さ約155cm，胴部の径50～60cmを測る。井底の海抜高は，約130cmに位置する。

埋積土は，いずれもほぼ水平堆積を呈し，自然埋没を示唆させる。埋積土中には，詳細の判然としない鉄器片が1層から7層にかけて包含されていた。





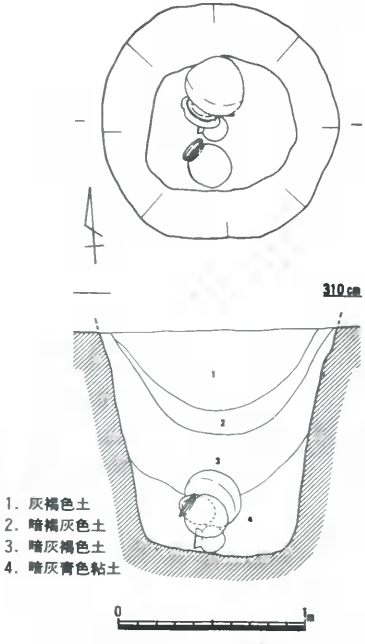
第401図　井戸―43（1/30）・出土遺物

埋没の時期は，伴出した土器によれば百・古・Ⅱ併行期頃と考えられる。

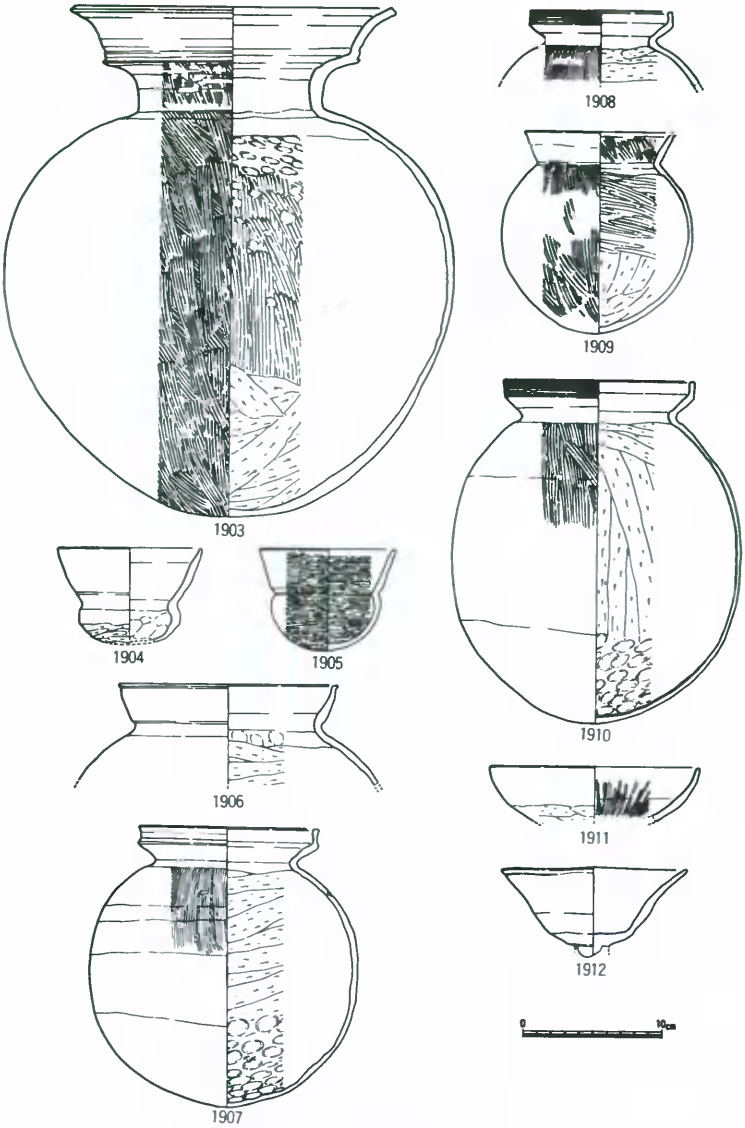
井　戸―43（第401図，図版162―1）

溝-158の掘りあげ後，その東側斜面に検出された井戸である。溝-158によりその上半部をほとんど切られて，わずかに下半部の遺存が認められたにすぎない。

遺存部の平面形態は，東西方向に長い楕円形を呈する。胴部の最大径約65cm，深さ約70cmを測る。井底へは，胴部からややすぼまり気味に続き，井底はさらに一段深く掘られ，二段構造を呈してい



第402図　井戸―44（1/30）



第403図　井戸―44　出土遺物

る。井底の最深部の海抜高は，約205cmと高い位置にある。

埋積土は，4層がいずれも同様なレンズ状堆積をみせる。遺物の包含は，さほど認められず比較的大きい胴部破片が3層と4層の間に認められたにすぎない。

時期は，出土遺物により百・古・Ⅰを示す。しかも，溝—158との切り合いから溝—158に先行しての位置づけができる。

井　戸—44（第402図，図版162—2）

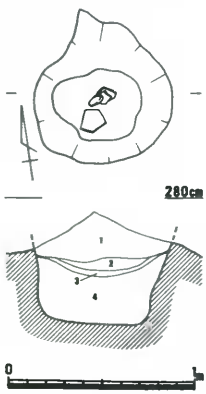
微高地上面209Pの南東隅において灰白色粘土層の除去後に検出できた井戸である。井戸-43と井戸—45とはいずれも約5mの距離に近接する。

平面形は，径約126cmの円形を呈する。井側は，比較的直線的に平らな井底へと続くもので，断面逆台形状を呈する。検出面から井底までの深さは，約120cmを測り，井底の海抜高約170cmに位置する。ただし，井戸本来の上端掘り方はさらに上位にあったものと思われる。

埋積土は，いずれもがレンズ状堆積を呈し，人為的な埋没の痕跡は認められない。おそらくは自然廃絶と考える。

出土遺物は，最下層の暗灰青色粘土と3層の暗灰褐色土に壺・甕・鉢・高杯等の遺存が一括して認められた。甕の内外面には，炭化米等の付着が認められ，より生活に密着した様相が窺われた。

井戸の埋没の時期は，出土した遺物により百・古・Ⅱ併行期頃と考える。



1．暗灰褐色砂　3．暗灰色粘土(含，炭)
2．淡灰褐色土　4．青灰褐色土

第404図　井戸—45（1/30）

井　戸—45（第404図，図版163—1）

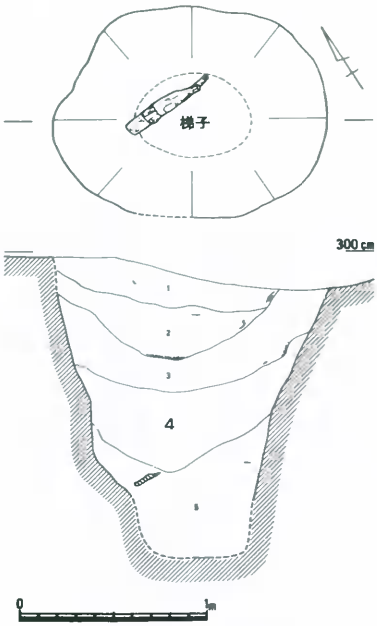
209Pの南東部分にあって，土壙—84と溝—158に切られて下半部分が遺存していた。上端面が存在しないことから平面プランは判然としないが，井底の形状等から，おそらく円形と考える。規模は，井側最大径70cm，深さ60cmを測る。井底の海抜高は，周辺に存在する井戸と比較して高く，約215cmに位置する。

埋積状況は，断面中央部分に薄く炭層がレンズ状に認められた。おそらく自然に埋没したものと推察される。

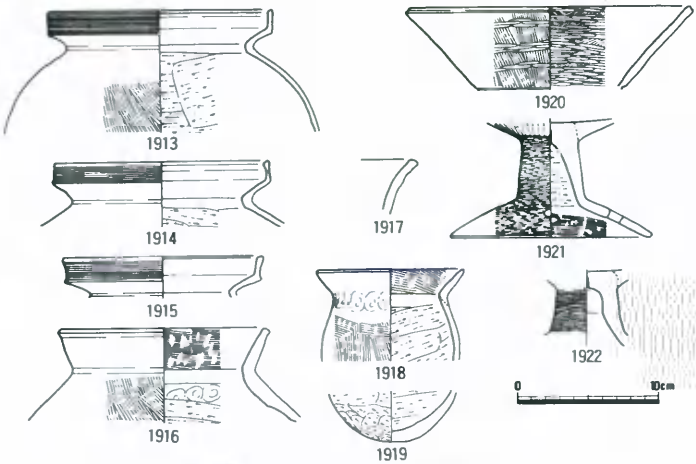
時期は，時期判断可能な遺物が出土しなかったことで判然としない。しかし，周辺に存在する他の井戸と，溝—158と土壙—84との切り合い関係等から，おそらく古墳時代前半の範疇と考える。　（島崎）

井　戸—46（第405・406図，図版163—２）

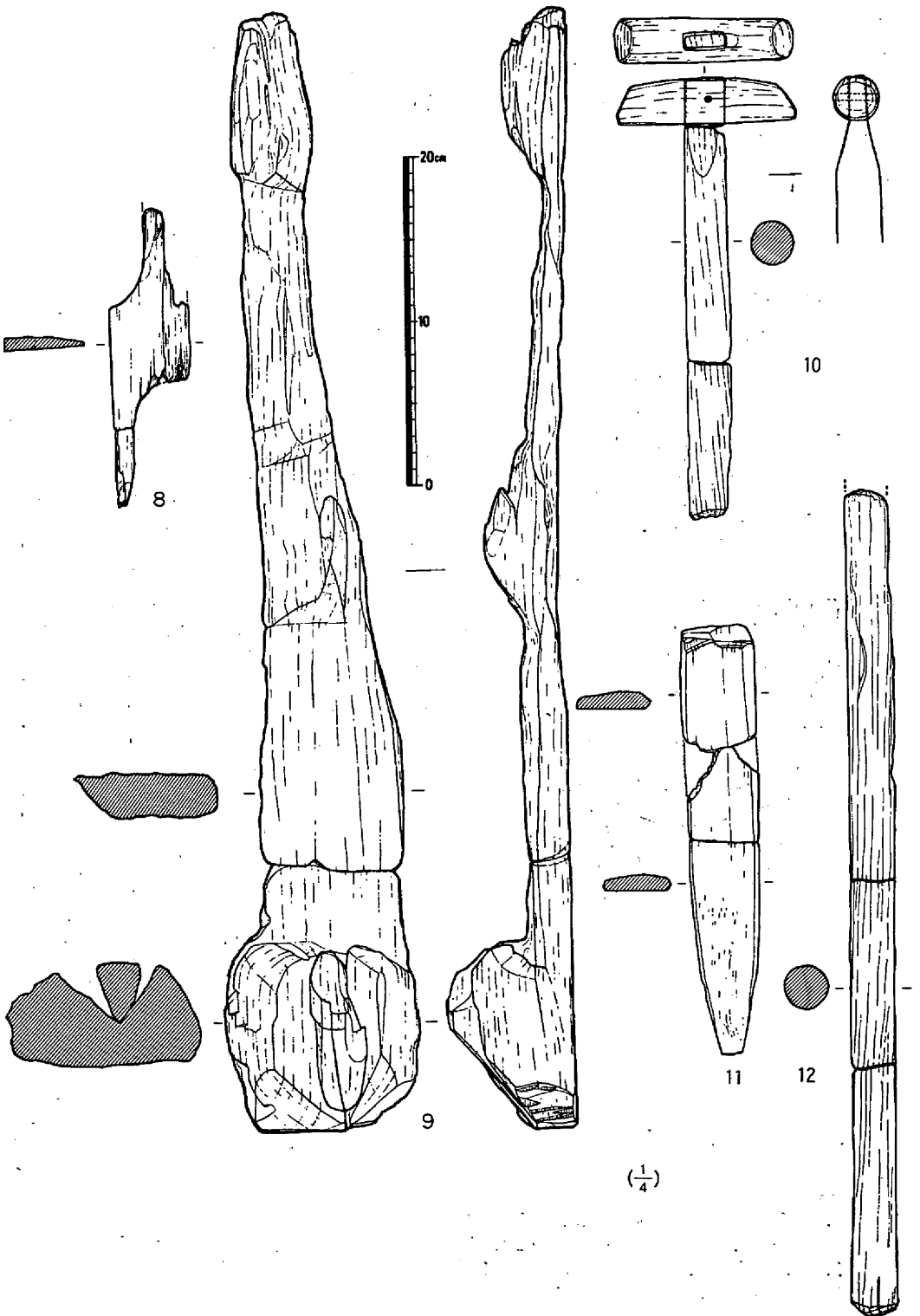
平面形は短径110cm，長径145cm，深さ160cmを測る。やや長円形を示す。井底は周壁の崩落によって平面形をあらわすことができなかった。海抜約2.2mより下位はグライ化しており，青灰色を呈する。井底は緻密でやや硬くしまった黒灰色微砂層に達し，湧水層となっている。第２層下位は平面的に炭化物層が検出され，さらに第３層最下位も同様である。このことは埋没に要する段階を示しているものと推定される。第４層より下層にかけて，木質遺体の残存が顕著で８～12の木製品の他，木片が出土している。９の梯子は地下水位の変動によって上部が収縮しやせているが，削り出された足かけの段は３段分が確認され，約20



1．淡灰黄色微砂（炭小片含）
2．淡黄灰色微砂（鉄分・マンガン粒）
3．淡灰褐色微砂
4．灰青色微砂質粘土

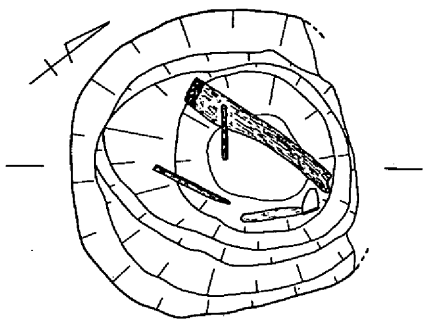


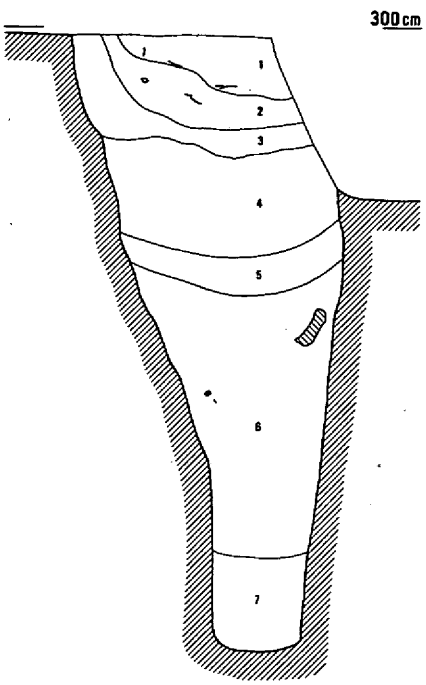
第405図　井戸—46（1/30）・出土遺物（１）



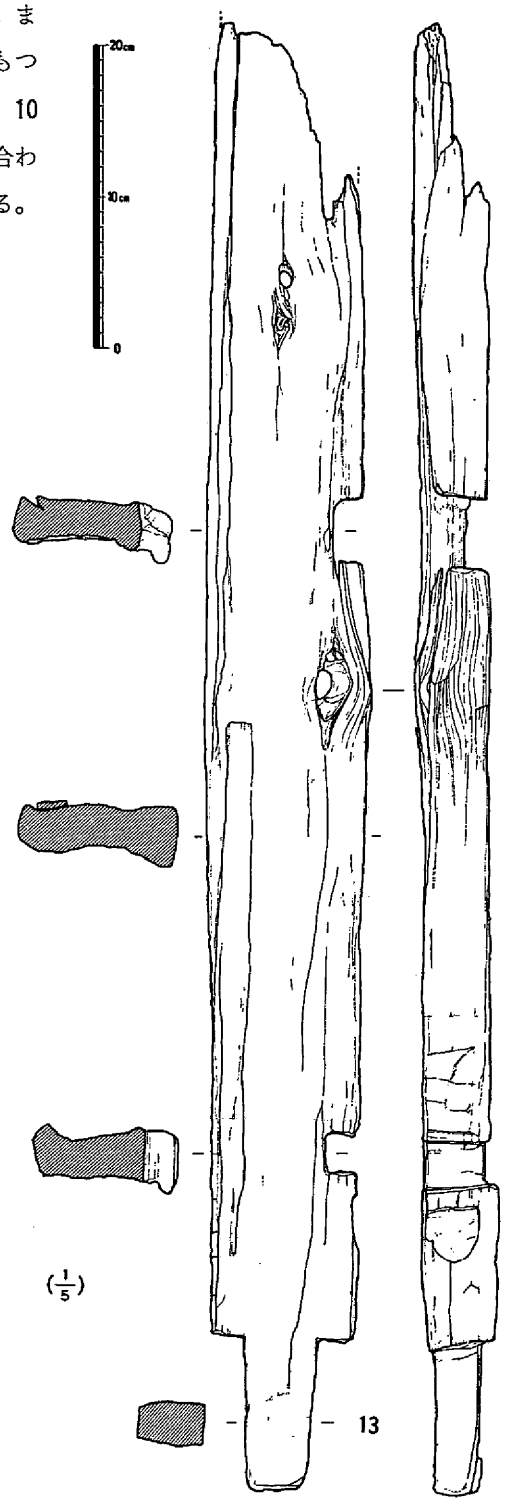
第406図　井戸—46出土遺物（2）

cm間隔で設計されている。用材はコナラである。また8は一部に小孔が穿たれ部分的にえぐり部をもつ板材であるが，糸巻枠材の可能性も考えられる。10は鋤の柄の部分で丹念に加工され，T字形に組合わされる。11は二又鋤の先端部で扁平に調整される。





1. 暗灰褐色砂質土（炭・焼土細片含）
2. 黄褐灰色砂質土
3. 黄褐灰色砂
4. 淡褐灰色微砂（炭含）
5. 黒青灰色粘土（炭含）
6. 暗灰青色粘土（炭含）
7. 黒灰色微砂質土

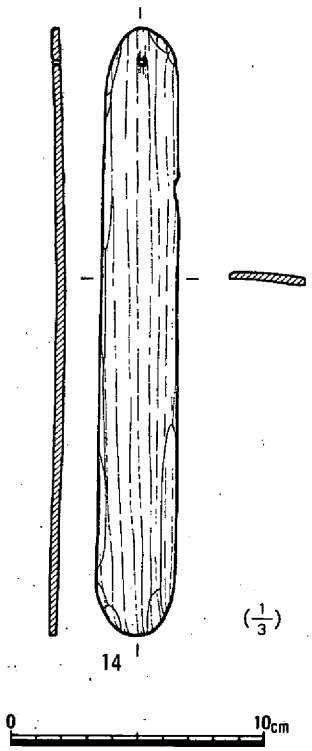


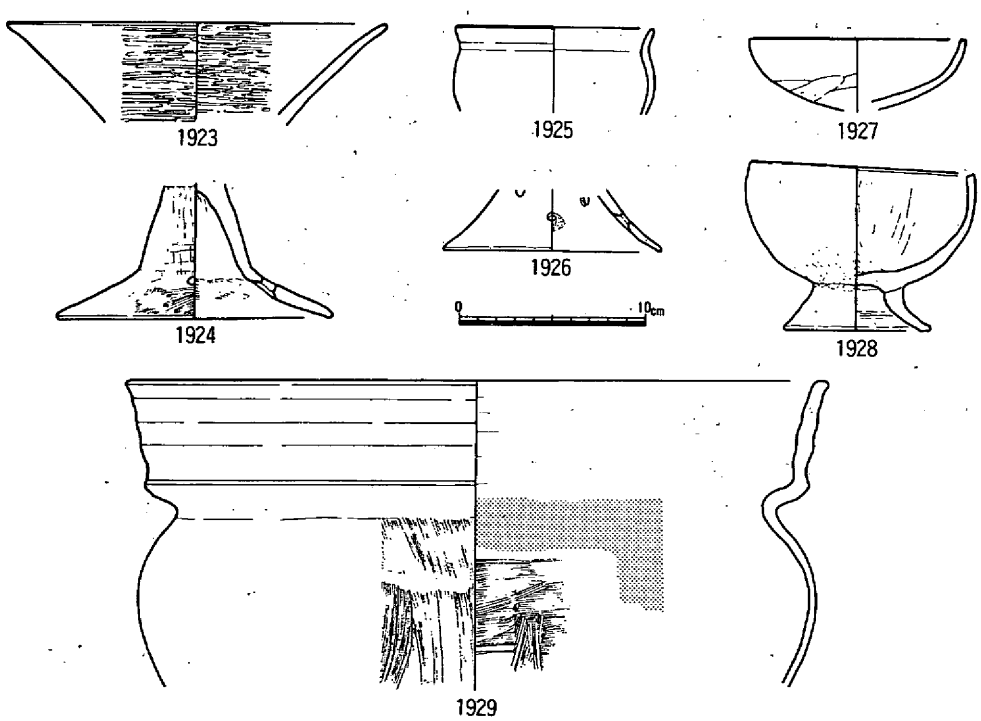
第407図　井戸—47（1/30）・出土遺物（1）

12もやはり鋤の柄となる用材と考えられ，10と同一個体の可能性もある。これらは，いずれも用材は，カシである。鋭利な鉄器を用いた丁寧な調整が特筆される木製品である。土器の出土は，第1・2層すなわち上層で目立っている。いずれも完形に復するものはなく，小片が多い。甕・高杯・壺などの器種が確認されているがいずれも百・古・Ⅱの時期に比定される。また，桃核も中層から下層にかけて出土し，桃核長1.84～2.23cm，幅1.51～1.68cmを測る6個が確認されている。

井　戸—47（第407・408，図版164）

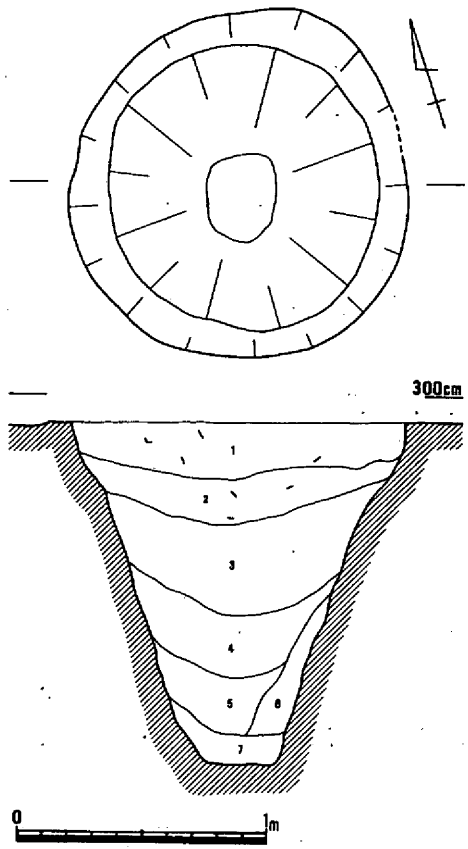
平面形は径約120cm，深さ約240cmを測る，近隣地区ではもっとも深く掘りこまれた井戸で，井底は径約35cmの円形を呈しやや北側に偏った位置にある。井底は礫層となっており，他の井戸とは湧水層が異なっている。第5層までは，段階的に埋積する層序が観察されるが，海抜約2mより下位は暗灰青色粘層が井底近くまで達している。最下層では人頭大の礫や，1923の高杯口縁部片や1924・1925～1929の一群の土器が





第408図　井戸—47　出土遺物（2）

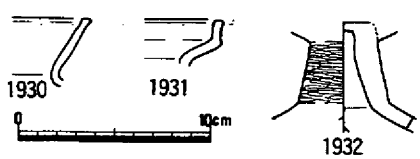
出土している。第６層上位から**13**の建築材が出土しており，比較的良好な保存状態が認められる。グライ化がはじまるのが第５層からであるため，第６層から下位にかけては木片などが比較的条数出土している。そのうち木製品としては**13**・**14**の２点のみである。建築材は残存長97cm，幅11cm，厚さ約4.5cmを測り，下端部はやや細い削りこみ部分を残して，仕口と組合わされる。側面には，幅３～4.5cmの枘組みを目的とした仕口が切りこまれ，その間は心々で41cmを測る。かりに上位の仕口が中心とすると全長128cmを測ることが推定され，後世の４尺に近い数字を示す。１間を８尺とした場合その1/2を示す数字を示すことは，この建築材の使用部位を考える上で重要な手がかりとなろう。用材はモミである。**14**はヘラ状あるいは木札状の木製品で上部に孔径１～２㎜の小孔が穿たれる。吊り下げて用いる穿孔と考えられるが，頻繁な使用による孔径の拡大化は認められないが，祭祀具のような性格も，丁寧な調整あるいはヒノキという用材からも十分に推察される。この井戸の時期は，土器などから百・古・Ⅱと推定されるが，この時期の井戸としては，その形状・深さが注目される。



1. 黄灰色微砂
2. 黄褐灰色微砂
3. 淡褐灰色微砂
4. 灰黒色微砂粘土(炭片含)
5. 黒灰色粘土
6. 灰黒色微砂質粘土
7. 淡黄緑灰色粘土
（黒灰色粘土ブロック多含）

井　戸―48（第409図，図版165―２）

平面形は，短径130cm，長径140cm，深さ約135cmを測り，ほぼ円形を示す。井底は径27cm～35cmを測るいびつな不整円形を呈し，平面形のほぼ中央に位置している。海抜約2.3ｍより下位，すなわち検出面から約60cmの深さから埋積土がグライ化し始め灰色ないしは

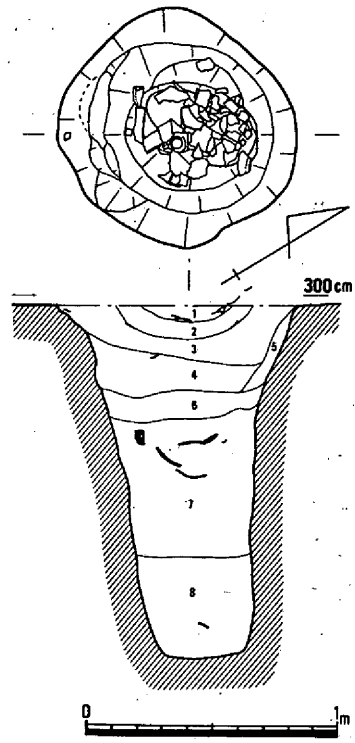


第409図　井戸―48（1/30）・出土遺物

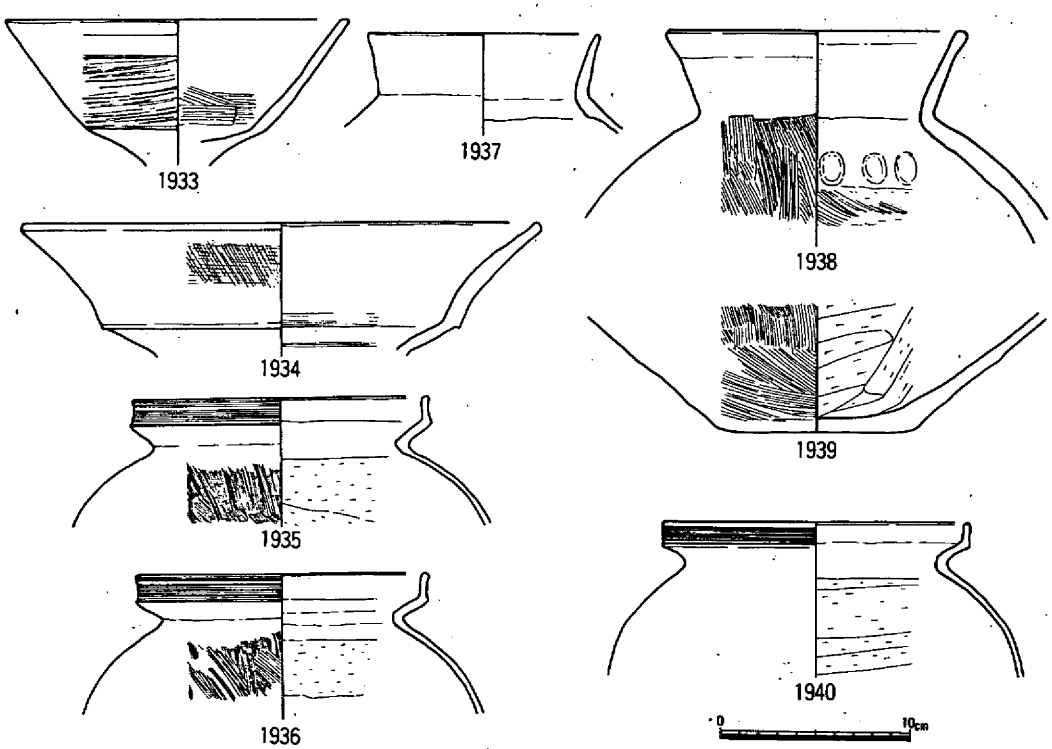
青色を帯び炭片や土器の細片が散見する。最下層は，黄緑灰色粘土と黒灰色粘土のブロックの混じった層が薄く堆積している。井底は，海抜約1.5mの黒灰色微砂質粘土層に達しており，井戸—47とほぼ同様である。出土遺物の多くは，第1・2層から出土しているが，細片が目立つ。時期的には百・古・Ⅱに比定される。

井　戸—49（第410図，図版166—1）

平面形は径85〜90cm，深さ140cmを測る，ややいびつな円形を呈する。井底は径約30cmを測る長円形を示し，やや中心より北へずれた位置にある。第6層より上層は，埋積段階を示す層序が確認され，検出面では比較的



1. 暗灰褐色砂（炭・小片多含）
2. 灰黄褐色砂
3. 灰褐色砂
4. 灰茶褐色砂質土
5. 灰褐色弱粘質微砂
6. 暗灰黄褐色弱粘土
7. 灰黒色微砂粘土
8. 灰黒色微砂土

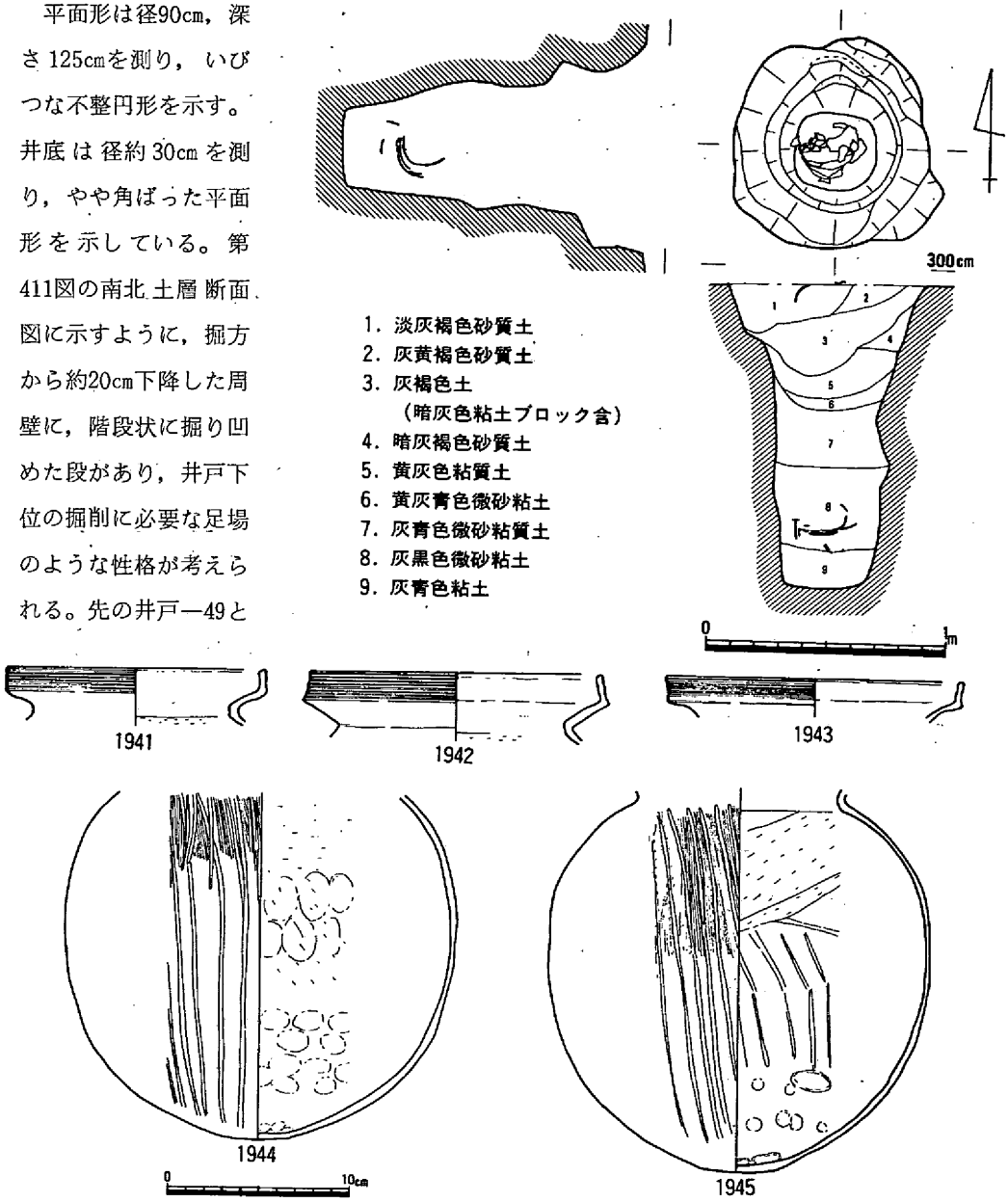


第410図　井戸—49（1/30）・出土遺物

土器が多く出土している。また，第7層上位でも，1938や1939などのほか高杯片などが集中的に出土している。井底近くの最下層からも，甕片の小片が桃核と共に出土している。この井戸も，海抜約2.5mすなわち中層位よりグライ化しており，井戸—47などと同様の地下水位レベルを示している。時期的には，百・古・Ⅰと推定される。

井　戸—50（第411図，図版166）

平面形は径90cm，深さ125cmを測り，いびつな不整円形を示す。井底は径約30cmを測り，やや角ばった平面形を示している。第411図の南北土層断面図に示すように，掘方から約20cm下降した周壁に，階段状に掘り凹めた段があり，井戸下位の掘削に必要な足場のような性格が考えられる。先の井戸—49と



第411図　井戸—50（1/30）・出土遺物

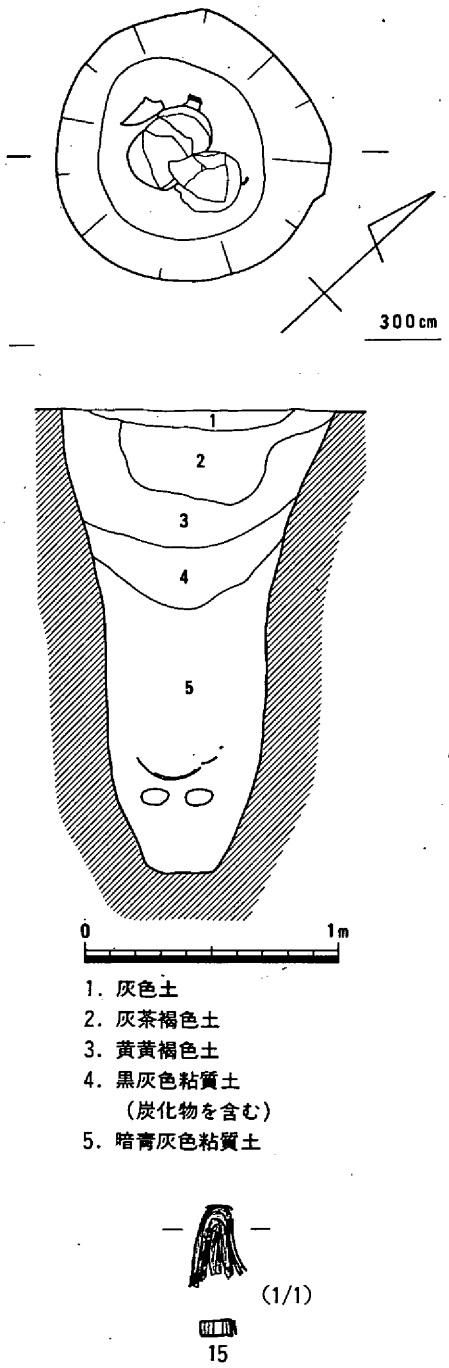
同様，最上層及び中層（第5層），下層（第8層）の部分で土器の出土が顕著で，上層では1941～1943の甕片が出土している。下層では，口頸部を失った2個体分の甕が出土しており，煤の付着した体部をほぼ完全に復元できた。(1944・1945)第8層下位では，桃核が出土している。最下層の第9層は灰青色粘土層で遺物は全く含まれていない。井戸の使用開始直後に埋積した土層と推定される。出土遺物から，時期的にはほぼ百・古・Ⅰに比定される。（岡田）

井　戸—51（第412図）

211Sの北辺中央部にあって，微高地端部に位置して，土壙—86に上端面の一部が切られてはいるものの平面プランは不整円形を呈し，井底の形状も上面と類似した形状を示している。さらに掘り方をみれば，井底に向って徐々にせばまり，再び若干のふくらみを呈して狭まって終る。規模は最大口径108cm，深さ185cmを測る。井底の海抜高は約88cmに位置する。しかし，井戸本来の掘り方上端は若干上位にあったものではなかろうか。

井戸の埋没状況は，いずれの土層も比較的整然としたレンズ状堆積を示し，出土遺物も下層（5層）の下位において完成品，それに近い状態の甕等が包含されているのが認められた。さらに埋土中最下層（井底付近）から竹製と思われる櫛の一部分が検出されている。上位の層中からは若干の破片が認められたにすぎない。

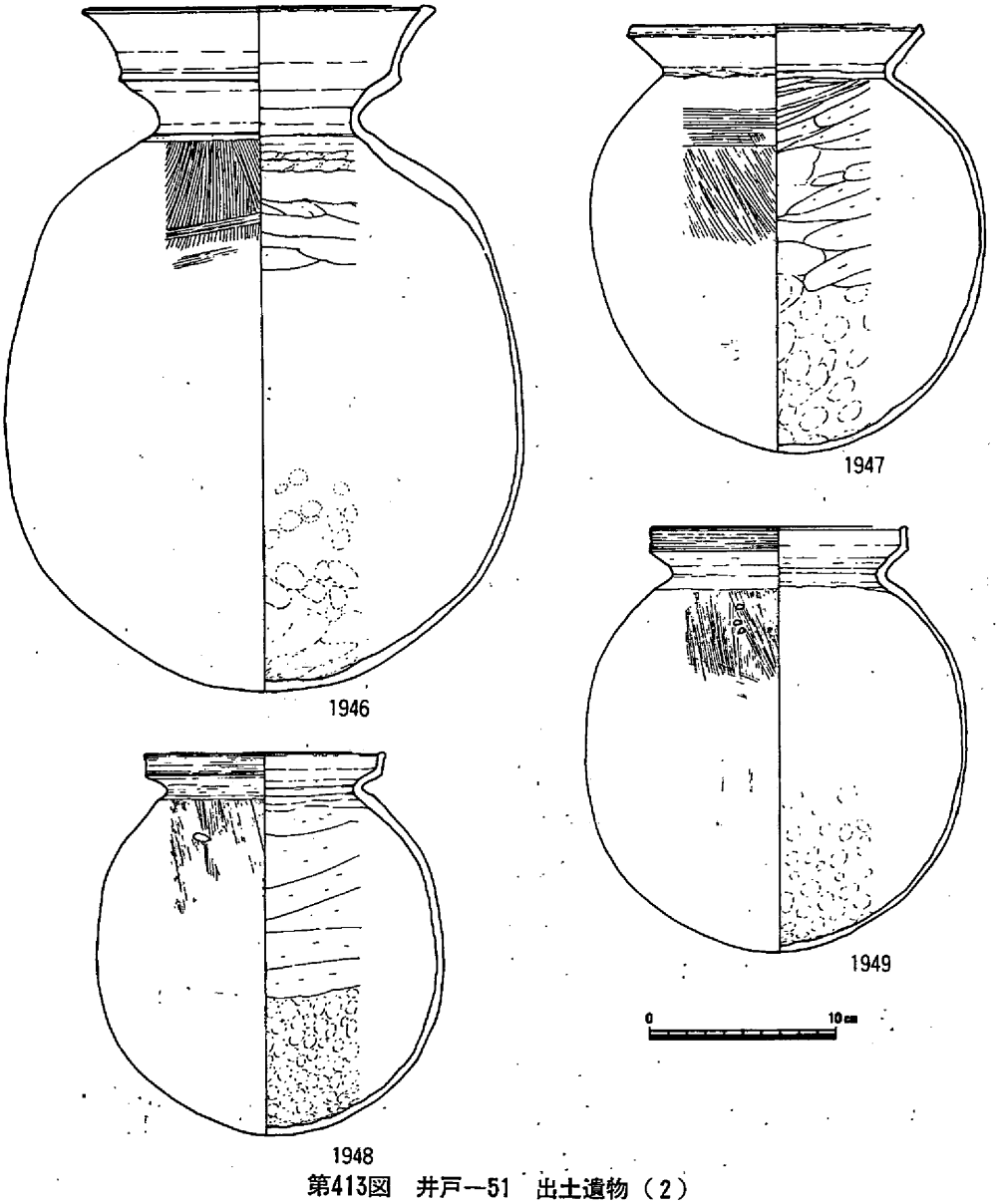
以上のことから判断するならば，この井戸は，何らかの契機により遺物の放棄が行われ，その後自然堆積したものと考えられる。埋没時期は，百・古・Ⅱといえよう。（二宮）



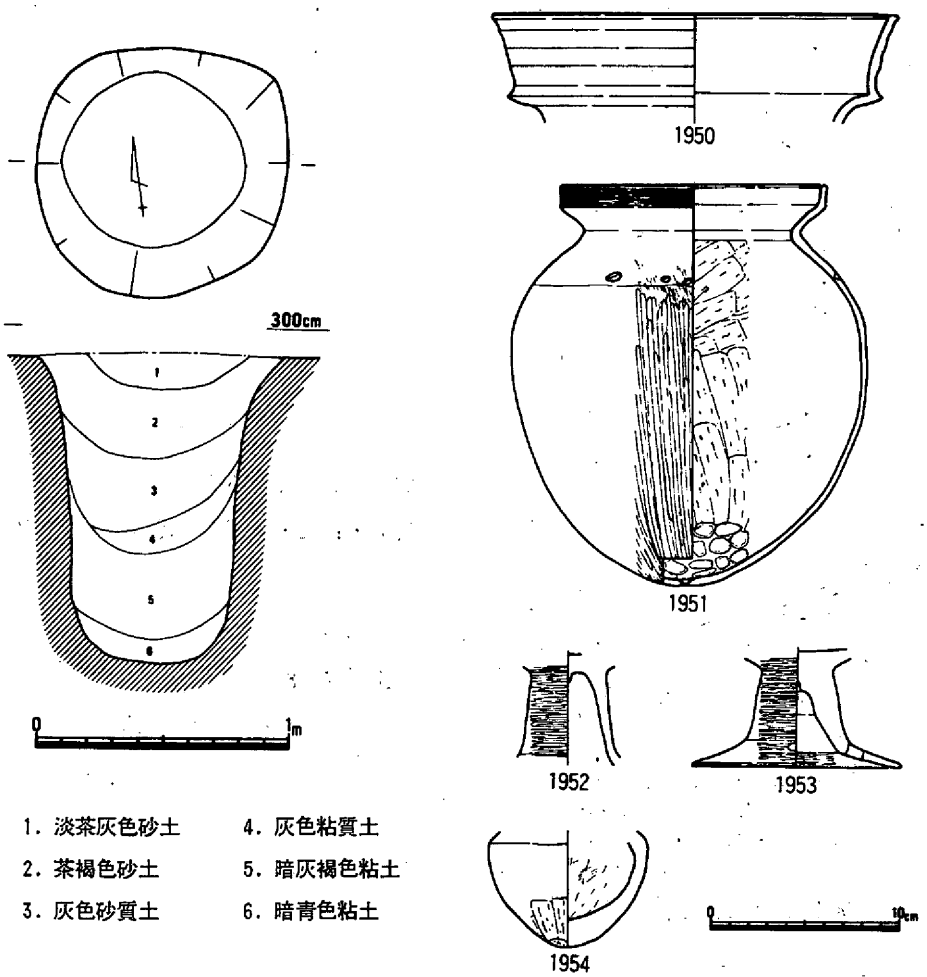
第412図　井戸—51（1/30）・出土遺物（1）

井　戸―52（第414図）

この井戸は，調査区中央部南端のＳライン東側に位置する。この地点は，微高地の東側端部にあたる。規模は，径約100cmでほぼ円形を呈する。深さは，約125cmを測り，底部の海抜高は約165cmである。井戸底部の径は，約60cmを測る。掘り方は，上部はやや擂鉢状に広く掘られ，その下部は角度をかえて底部まで直線的に掘られている。井戸内の堆積は，第１～６層までレ



第413図　井戸―51　出土遺物（２）



第414図　井戸—52（1/30）・出土遺物

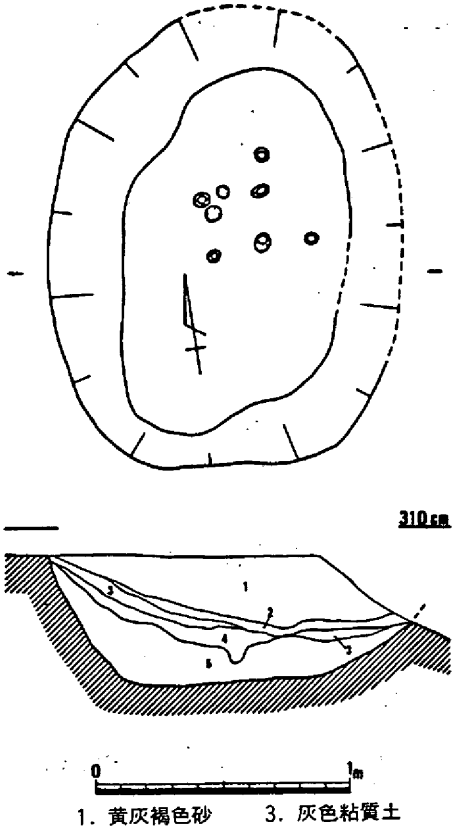
ンズ状に堆積している。

出土遺物は，各層から少量の土器が出土した。**1951**は，下層の第5層から検出されたもので，底部に4㎜の円孔が焼成後穿かれている。甕形土器である**1951**は，岡山県南部を中心に普遍的にみられるもので，底部に孔を穿つものはあまり認められない。出土したこれらの土器は，百・古・Ⅰ期の特徴を示すものである。（中野）

（5）・土　　壙

土　壙—84（第415図）

209P南東部で検出できた土壙で，井戸—45の埋没後に掘削された楕円形のものである。長径185cm，短径140cm，深さ50cmを測る。埋土は，中程に粘土の堆積がレンズ状に認められた。底面には，径5cm程の小穴が存在する。



第415図　土壙―84（1/30）

時期は，判然としないが溝―158との関係から古墳時代初頭頃が考えられる。

（島崎）

土　壙―85（第416図）

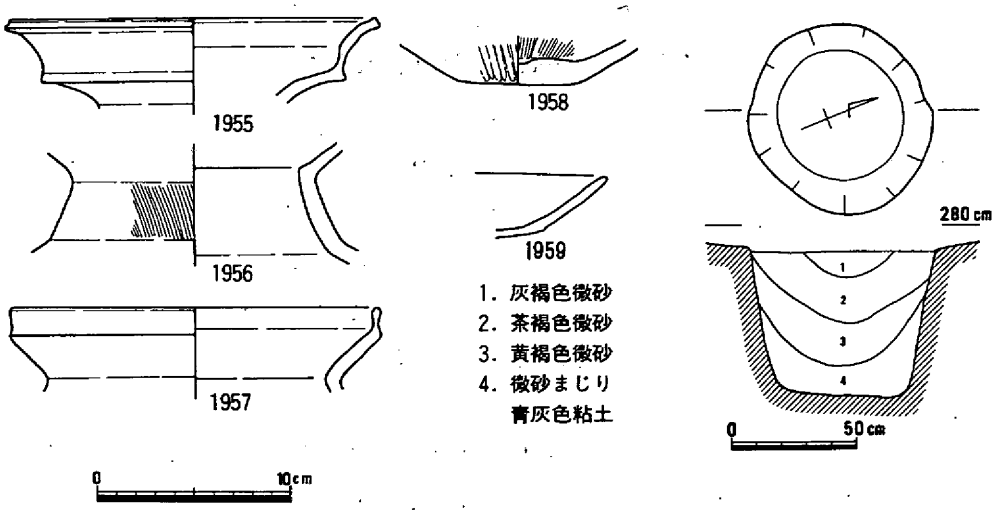
210Ｐの南西寄りに位置する。微高地部分にあたり，周囲には多数の溝がある。土壙の平面形はほぼ円形を呈し，掘り込みは井戸状を呈する。大きさは，直径75cm，深さ60cmである。

埋土中から土器片が出土しているが，いずれも小破片である。図化できたのは，壺1955・1956・1957，甕1958，高杯1959がある。

時期は，百・古・Ｉに属する。（正岡）

土　壙―86（第417図）

211Ｓの北端部において検出された。平面形は約190×150cmの不整楕円形を呈し，深さは最大で約12cmを測るにすぎない。埋土は暗褐色粘質微砂が１層のみである。



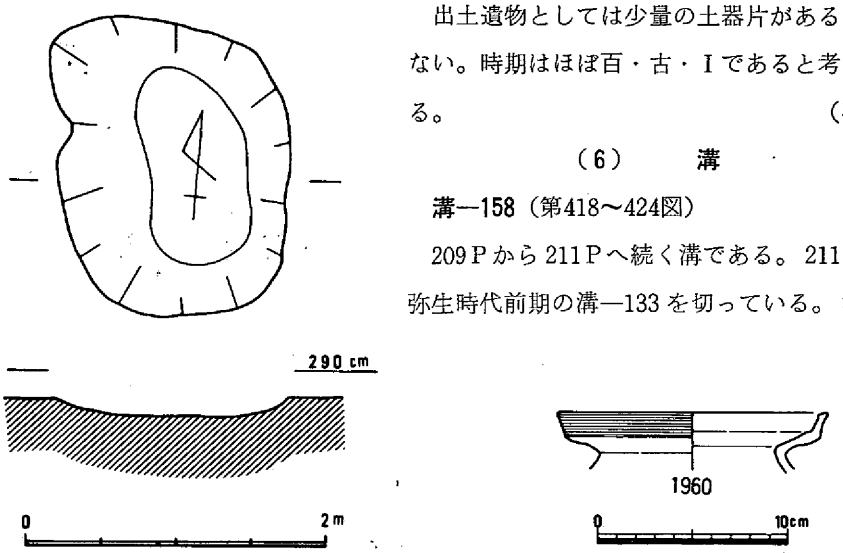
第416図　土壙―85（1/30）・出土遺物

出土遺物としては少量の土器片があるにすぎない。時期はほぼ百・古・Ⅰであると考えられる。（平井）

（6）　溝

溝—158（第418～424図）

209Pから211Pへ続く溝である。211Pでは弥生時代前期の溝—133を切っている。溝の規



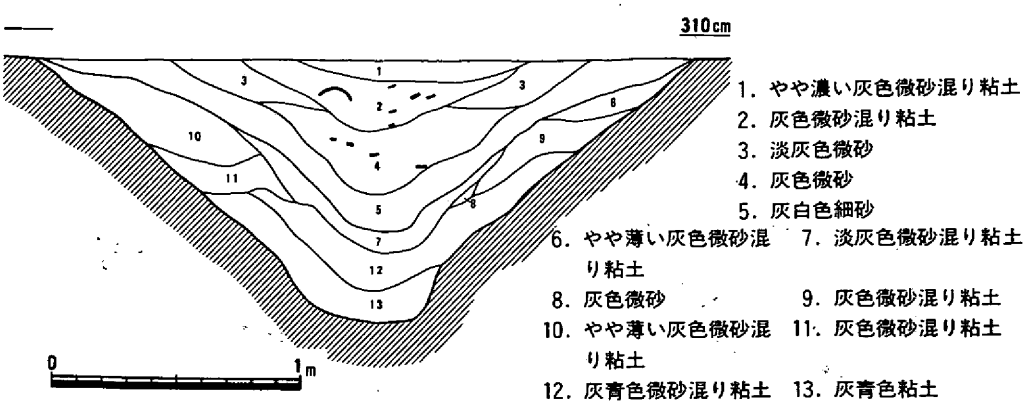
第417図　土壙—86（1/50）・出土遺物

模は，幅260cm，深さ106cmである。断面形はU字形を呈している。埋土は，下層が粘土質である。上層には，微砂・細砂が多い。埋土の上層には，土器片が多く含まれている。

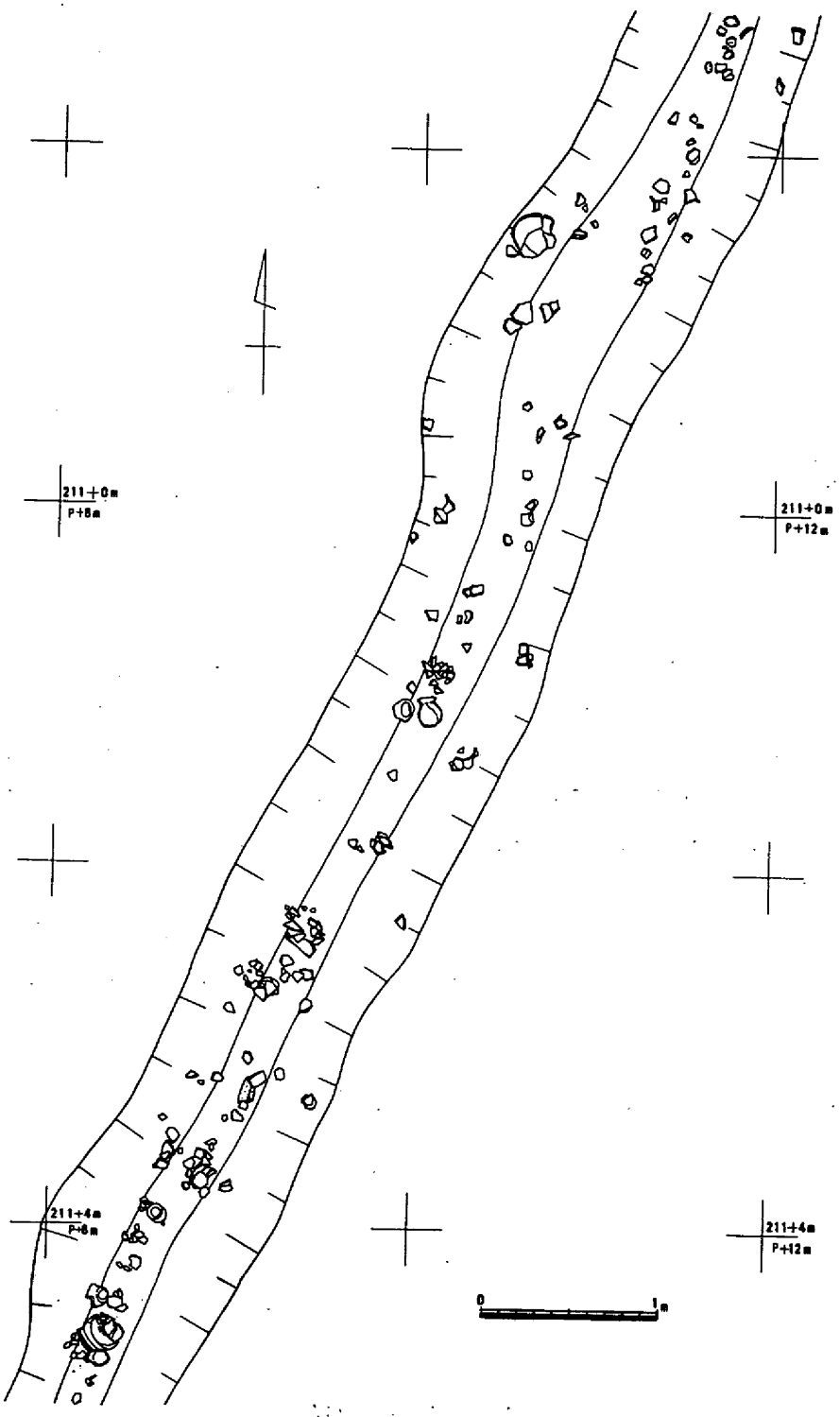
最終段階の1・2層には，百・古・Ⅲの土器が含まれているが，その下層は，百・古・Ⅰの土器を含んでいる。出土遺物には，壺1961～1975，甕1976～1995，鉢1996～2010，坩2011～2016，手捏ね土器2017，高杯2035～2043，鼓形器台2044，小型器台2045，土錘20，鉄鏃49・52，鉄器片48・50・51・53～55がある。

溝—159

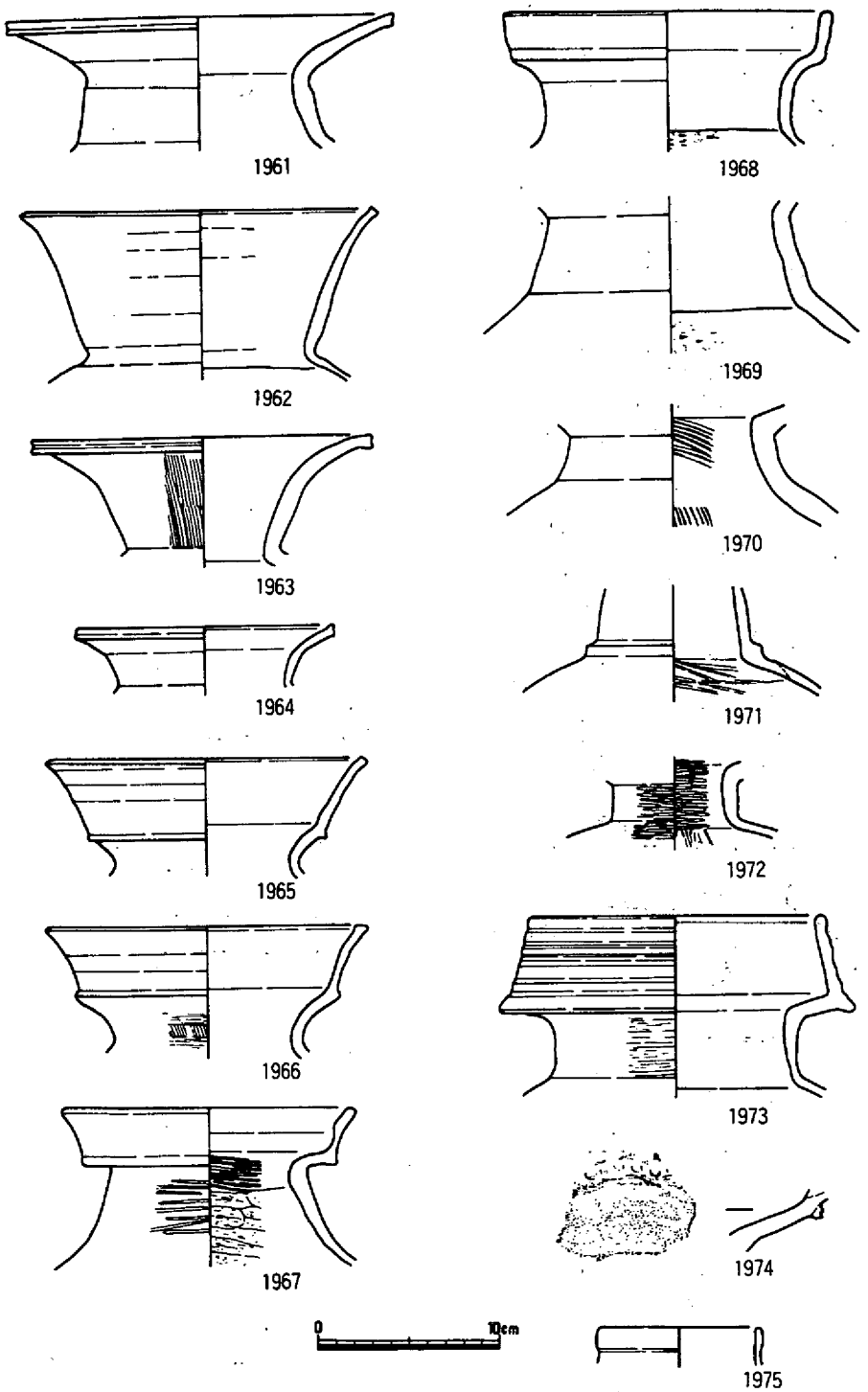
209Qから211Pへ続く溝である。211Pで弥生時代前期の溝—133を切っている。断面形はU字形を呈している。大きさは，幅350cm，深さ100cmである。埋土中からは，ほとんど遺物を検



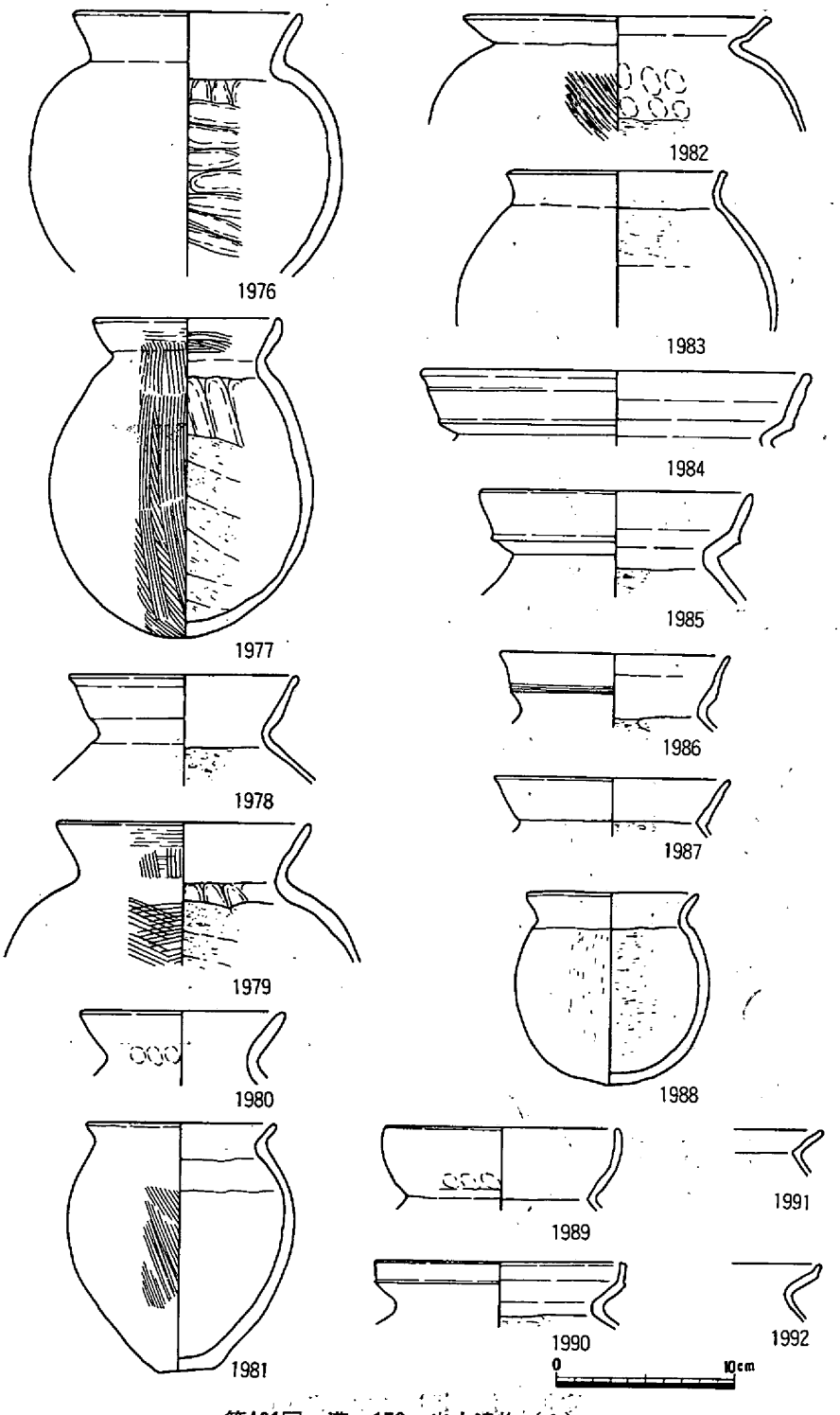
第418図　溝—158（1/30）



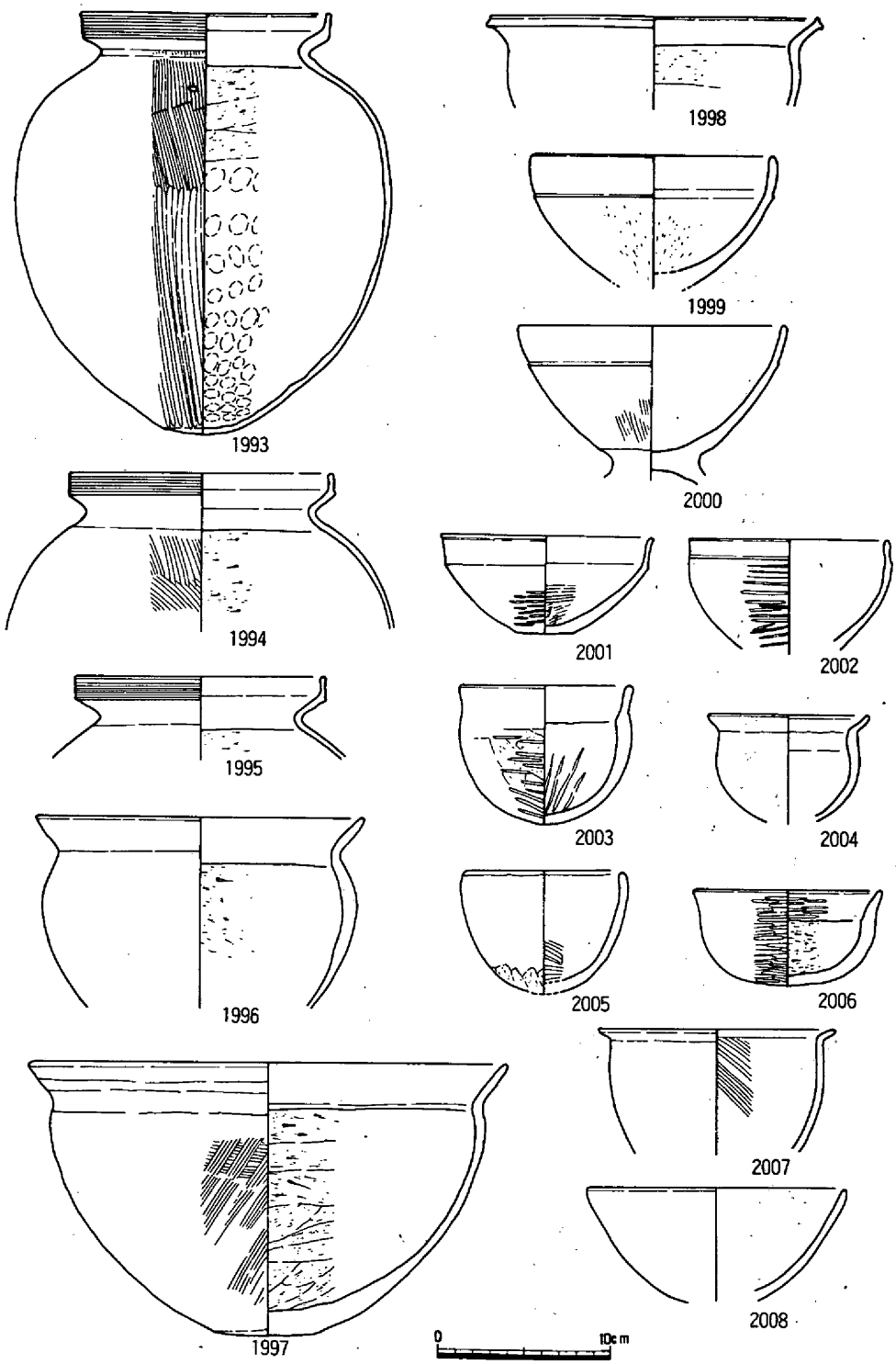
第419図　溝―158（1/40）



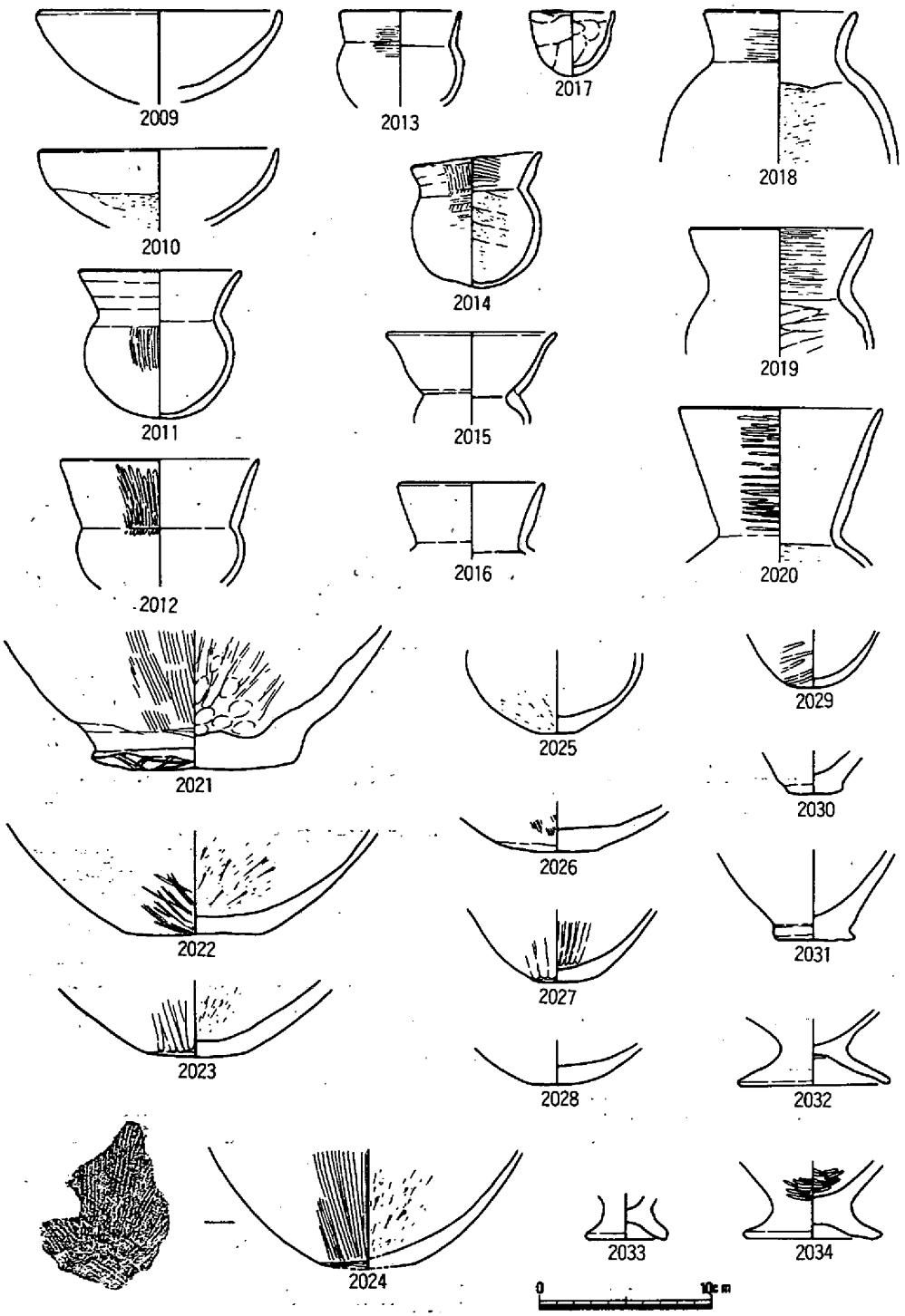
第420図　溝―158　出土遺物（１）



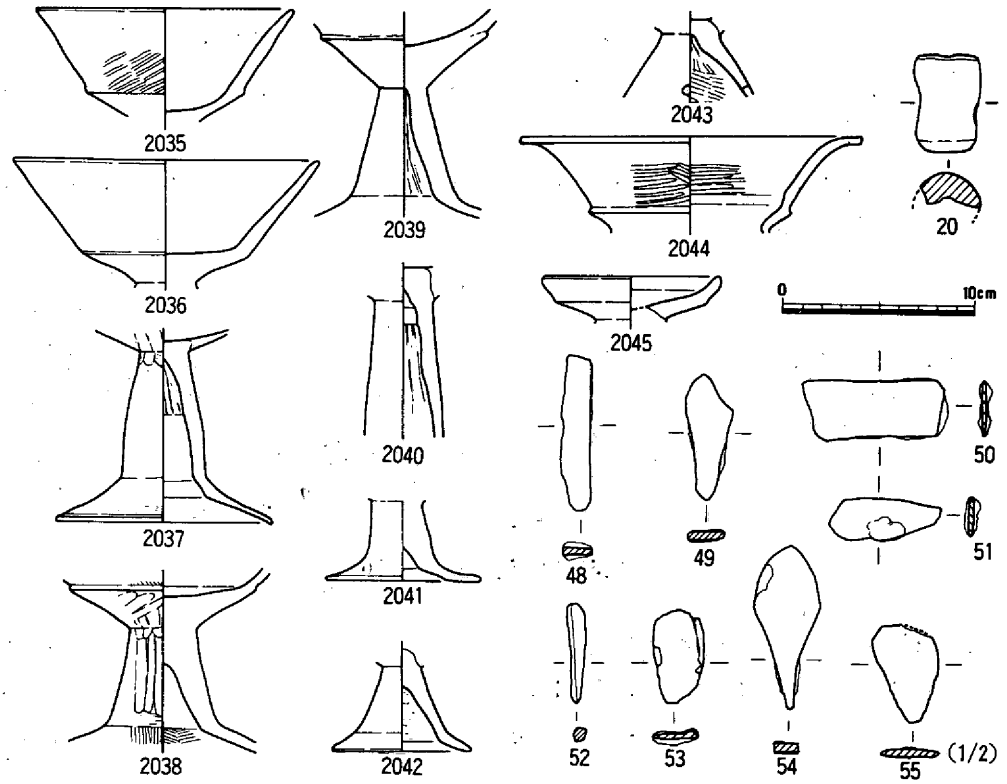
第421図　溝―158　出土遺物（２）



第422図　溝―158　出土遺物（３）



第423図　溝―158　出土遺物（４）

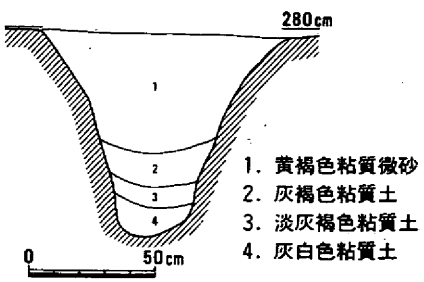


第424図　溝—158　出土遺物（5）

出していないが，わずかに炭化物を含んでいる。埋土や溝の重なりから古墳時代初めの溝と推定される。

溝—160（第425図）

210Pから211Rへ続く溝である。210Pでは古墳時代初めの溝—158に接している。他の溝の方向とは，流走方向が異なり，幅も狭い。よく残っている地点で測ると，幅98cm，深さ80cmである。



第425図　溝—160（1/30）

埋土中には，弥生時代後期の高杯片がみられたが，精製粘土の土器片等が含まれていることから古墳時代初めの溝と推定される。他に，縄文時代晩期の土器片，弥生時代前・中期の土器片もある。（正岡）

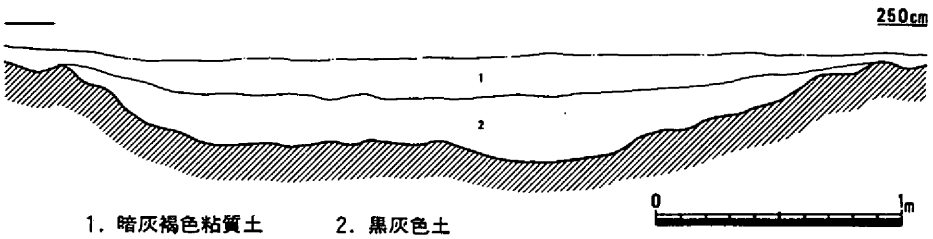
溝—161（第426図，図版169—2）

溝—163調査終了後，ほぼ溝—163と直交気味に

検出できた溝である。溝は，弥生時代後期末頃の洪水堆積砂を基盤とするもので，やや軟弱な様相を示す。溝は，南北方向に直線的な流走をみせ，幅約330cm，深さ約40cmを測る。

埋積土は，灰褐色粘質砂（上層）と黒灰色土（下層）からなる。しかし，遺物の包含は認められなかった。

したがって，時期は判然としない。しかし，層序関係から考えれば，おおむね古墳時代初頭頃への位置づけが推察される。



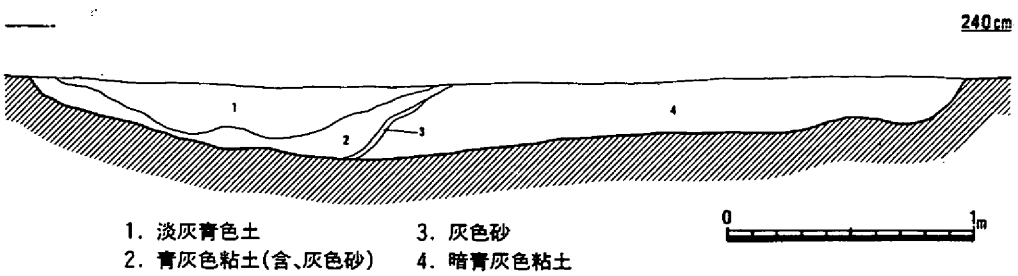
第426図　溝—161（1/30）

溝—162（第427図，図版169—2）

溝—161同様に溝—163に直交し，溝—161の東に並行した流走をみせる。溝—161とは，約7mの距離を保つ。規模は，幅350～450cm，深さ20～30cmを測る。溝—161同様に弥生時代後期末頃の洪水堆積砂を基盤とするため軟弱な様相を呈する。

土層断面に窺える埋積状況は，溝—161とは若干異なり，暗青灰色粘土の埋没が西端部分に認められ，新しい流路の存在が確認される。

時期は，溝—161同様に遺物をまったく伴っていないことから判然としない。しかし，検出層序によれば，溝—161との同時性が如実に窺われ，およそ古墳時代初頭頃への位置づけが可能である。



第427図　溝—162（1/30）

溝—163（第428図，図版169—1）

209Nのやや南辺部よりで，ほぼ東西方向に直線的に検出できた溝状の遺構である。検出できた規模は，長さ19m，幅70～160cm，深さ7～20cmである。

溝は，縄文晩期の河道埋積土上層に，河道流路とはほぼ直交気味に位置する。しかし，遺構自体は，東西両端部分で規模を縮小し，さらに東西両端を延長しての遺構の存在は確認できなかった。埋積土中からは溝底もしくは溝底から若干浮いた状態で，わずかに樹皮痕を留める自然木が，すでに粘土化した状態で検出できた。いずれも加工されたものは1例もなく，比較的細い雑木が溝に併行して遺存していた。木は，短長あり，長いもので約350cmを計測する。

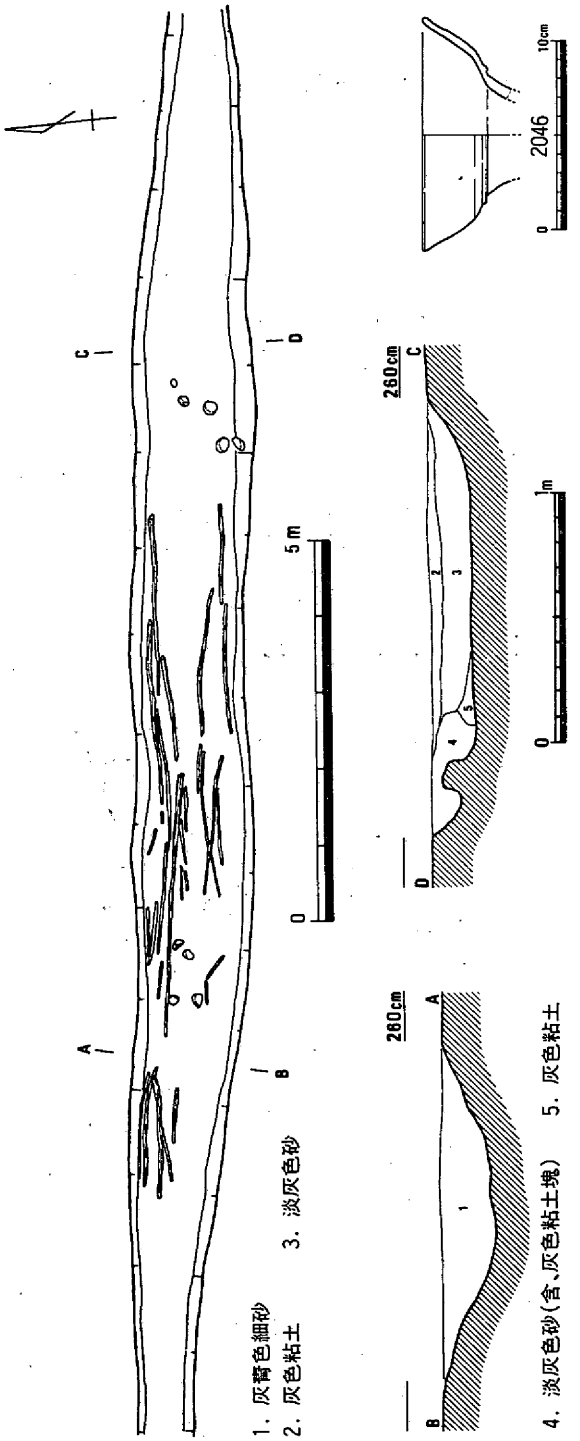
以上の状況から考えて，溝-163は，常に水を上流から下流へと通水させる溝としての性格を本来備えていなかったもので，おそらく材木の貯木場的な機能を果していたものと想定される。

溝の時期は，埋積土中からわずか1点のみ出土した須恵器の特徴により6世紀後半～末頃への位置づけが可能である。

（島崎）

溝—164（第429・430図，図版170・171）

209R南西隅から210Rを南東方向へ流れ，210S南西部から211Sへ貫流する溝である。さらに，210R南東部で二筋に分れ，211S南西部で再び合流するとも考えられる。幅は150cm前後を測り，断



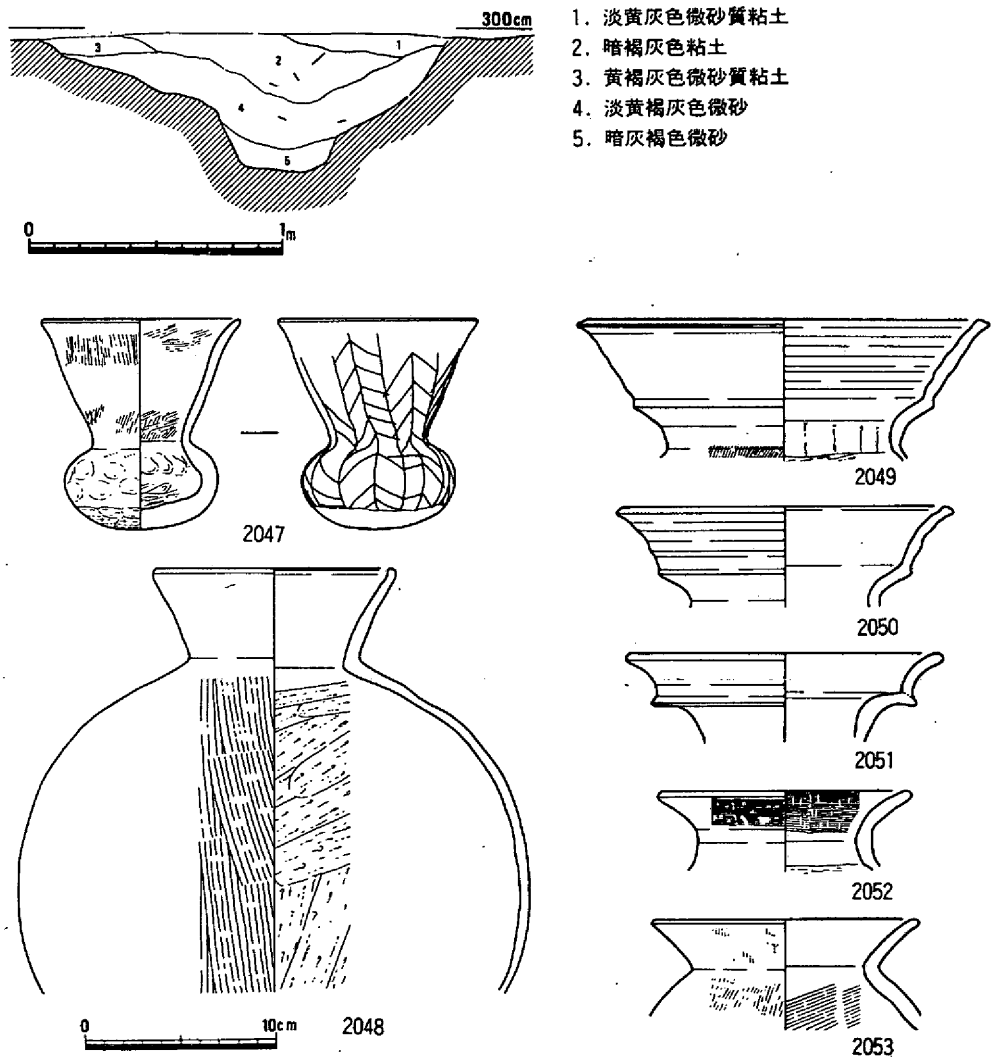
第428図　溝—163(1/100)・(1/30)・出土遺物

面形は深さ40cm前後のＵ字溝の底部に幅40～60cm，深さ20cm前後の逆台形の掘り込みを加えたものである。

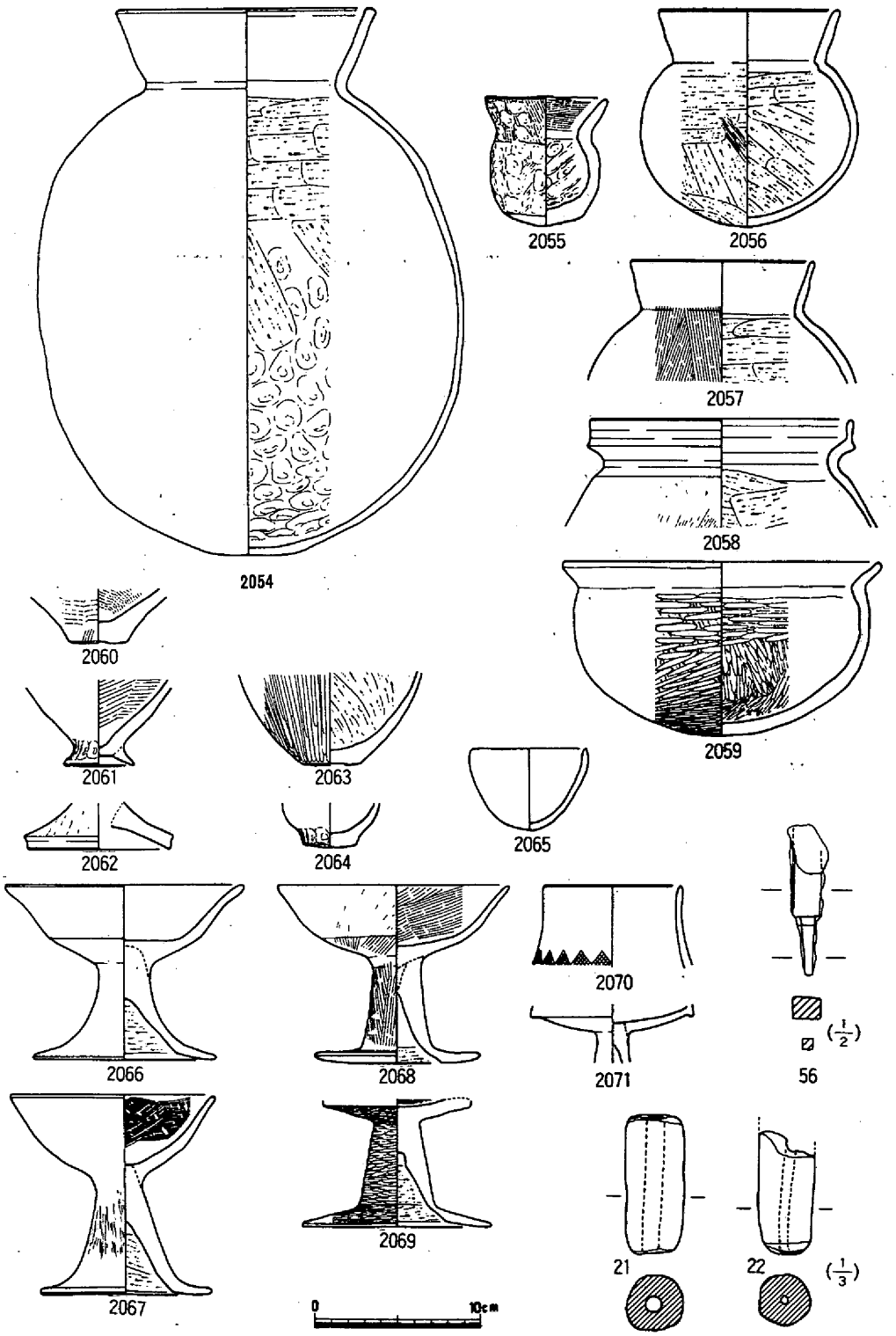
遺物は土師器（坩・壺・甕・高杯・鉢）の他に鉄器・土錘等がある。これらにより，時期は百・古・Ⅲに求められる。

溝―165（第431図，図版172）

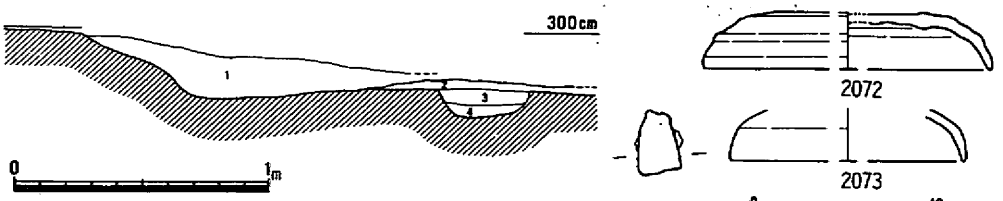
209Ｒ南端中央部から210Ｒを経て，210Ｓ南西隅までで確認された溝で，一部溝―166と流路の重複をみる。古墳時代水田層の広がりの西端に位置するためか，西側の肩は比高差30cm前後と明瞭であるが，東側の肩は明確でない。また，210Ｓでは二筋に分れ，東流する部分には後述する柱穴列も検出されている。



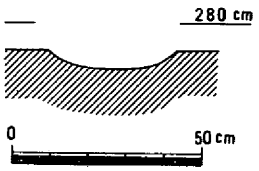
第429図　溝―164（1/30）・出土遺物（１）



第430図　溝一164　出土遺物（2）



第431図　溝—165（左）・溝—166（右）（1/30）・溝—166 出土遺物



第432図　溝—167（1/20）

時期は，古墳時代水田層と同様に6世紀後半に比定される。

溝—166（第431図，図版172）

209R南端中央部から210R・210Sを経て211S中央部まで確認された溝である。幅30〜40cm，深さ15cm前後の規模を保っており，検出面は古墳時代水田層の直下にあたる。遺物は須恵器杯等があり，時期は6世紀後半に比定される。　（光永）

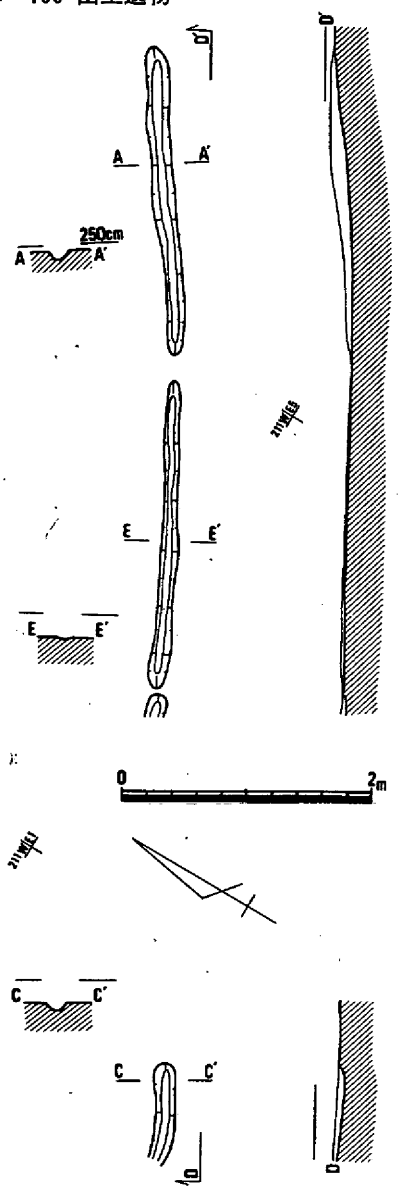
溝—167（第432図）

210Sの南西部分において検出された溝状遺構である。検出できたのは長さ約5mにすぎない。幅30〜40cm，深さ5cm前後を測る。埋土は暗灰褐色粘質土が1層のみである。

少量の土器片が出土しており，また弥生時代終末の洪水砂の上面において検出されたことから，時期はほぼ百・古・Ⅰであると考えられる。　（平井）

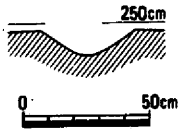
溝—168（433図，図版173）

210Wの南西隅で検出された。深いところで5cm程度あるが，溝底にかなり凹凸があるため，削平によってところどころが消えている。幅は15〜20cmと狭いが，かなりの削平を受けた結果と解釈される。溝底の標高は東端で241cm，西端では232cmを測るが，大部分が弥生時代後



第433図　溝—168（1/60）

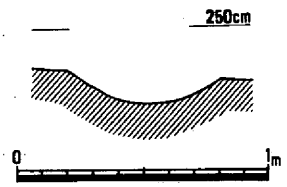
期水田の埋没部分上にあるため傾斜方向は決定しがたい。遺物は出土していないが，埋土や層位から古墳時代前期と考えている。



第434図　溝—169（1/30）

溝—169（第434図，図版173）

211Wで検出された。北西から南東方向に伸びている。この方向は，弥生時代後期水田が開かれていた時の微高地端線と平行している。水田埋没後も地形に痕跡が残っていたものであろう。幅30～45cm，深さ5～10cmで，溝底の標高は北西端241cm，南東端233cmを測り，南東に流れるようである。211Xに同様の溝があり，接続する可能性が高い。そこでの溝底の標高は228cmである。古墳時代前期と考える。



第435図　溝—170（1/30）

溝—170（第435図，図版173）

210Wから211W，さらに211Xに伸びている。211Wでは溝—169の東2mにあり，平行して走る。部分的に2本に分かれている。溝底に起伏があるためか，210Wと211Wの境付近では分断されている。幅45～70cm，深さ5～10cmを測る。溝底の標高は北西端で244cm，211W東端で207cm，211X南端では221cmを示し，北西から南東へ流れるものとみられる。遺物は僅少であるが，埋土や層位から判断して，古墳時代前期のものと考えてよい。（岡本）

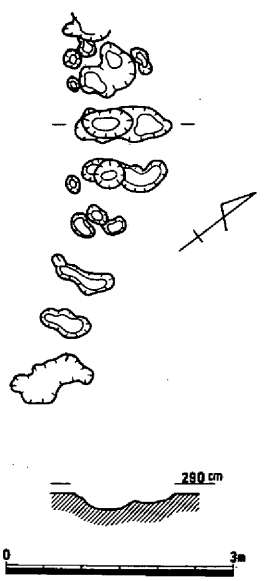
（5）柱　穴　列

柱穴列—2（第436図）

210Sの南西部から211Sの北西部において検出された。検出できたのは長さ約5mにすぎないが，北西—南東方向を示し，わずかに弧状を呈する。

形状は一定していないが，柱穴状の凹み，あるいは深さ5cm前後の浅い凹みが南西—北東方向に連なるものがほぼ等間隔に並んで検出された。埋土は暗灰色粘土である。

埋土中からは少量ではあるが須恵器片が出土しており，また溝—166を切って検出されていることなどから，時期は古墳時代後半以降のものであることは明らかであるが，その下限についてははっきりしない。（平井）



第436図　柱穴列—2（1/100）

（6）水　　田

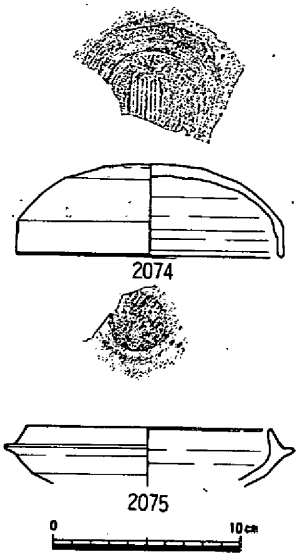
古墳時代水田層

209Ｒと210Ｒの溝―165以東では水田と考えられる層を確認した。土質は灰色粘土で，表土下約40～60cmで検出され，弥生時代後期末水田を覆う洪水砂の上に灰褐色微砂質粘土を一層挟んでいる。水田層は溝―165上面での海抜300cmから東へ徐々に下り，210Ｒ北東隅では海抜280cmとなる。また，これとともに厚さ10cmから４cm程度へと薄くなり，表面には若干の凹凸が認められる。

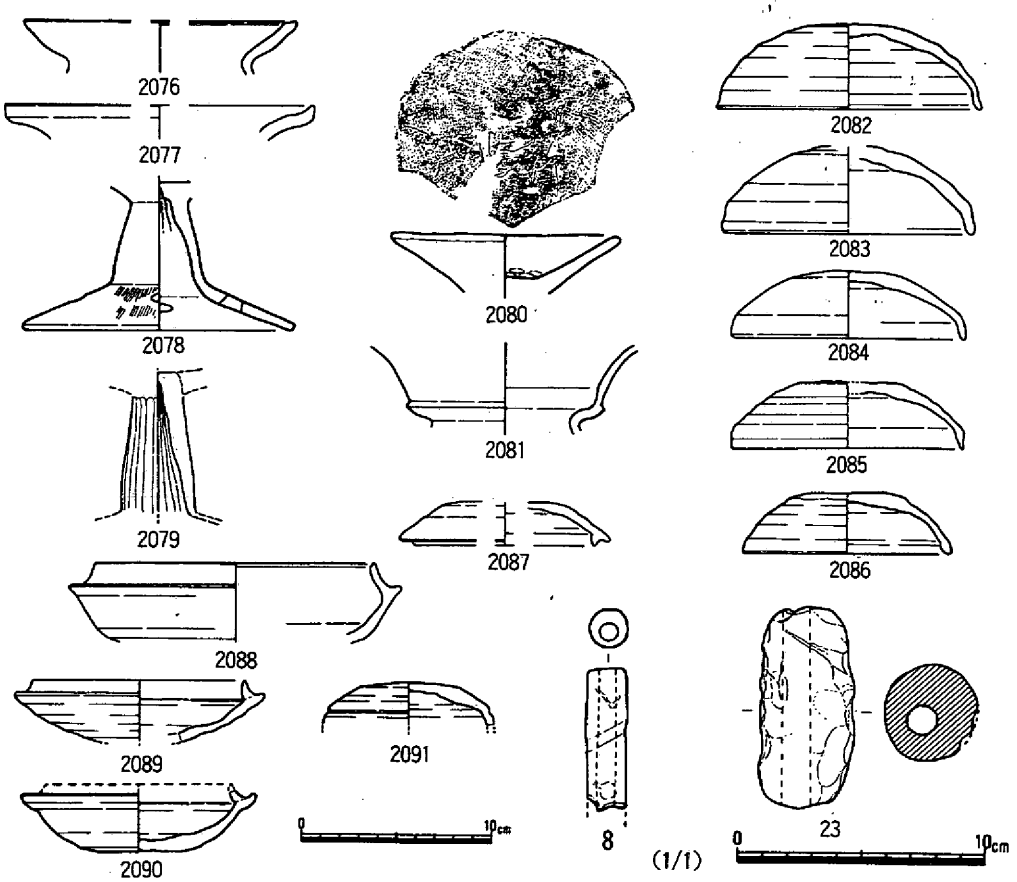
この水田の西端にあたる溝―165の位置は，弥生時代後期末の微高地肩部にほぼ相当しており，このことから古墳時代水田の広がりも弥生時代後期末水田の範囲と同様に考えられる。

遺物は，須恵器（杯・杯蓋）等の出土があり，これらによりこの水田経営の時期も６世紀後半に求めることができよう。

（光永）



第437図　古墳時代水田層出土遺物



第438図　包含層出土遺物

6. 古代・中世・近世の遺構・遺物

検出できた遺構は，全体を通しても掘立柱建物1棟・溝3本・柵列状遺構2条と少ない。また，遺物の出土量も少ない。

古代は，奈良時代と考えられる柵状遺構が2条検出できたのみで，他には存在しない。

中世は，掘立柱建物1棟・溝2本がある。いずれも条里と関連していたようで，主軸方向に並行関係が認められる。

(1) 建　　物

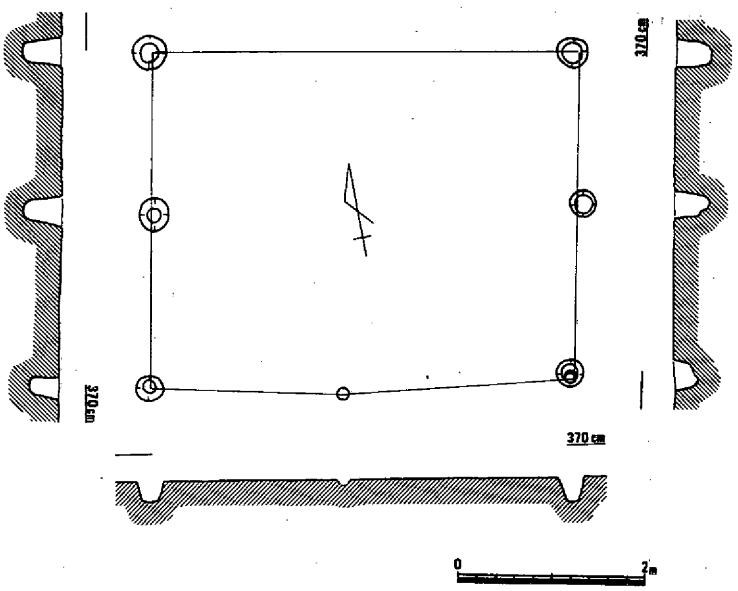
建　物—11（第439図）

210P北東隅から210Qにかけて検出できた掘立柱建物である。柱穴掘り方は，径約30cmを前後するもので，いずれもが灰白色粘土で埋没していた。

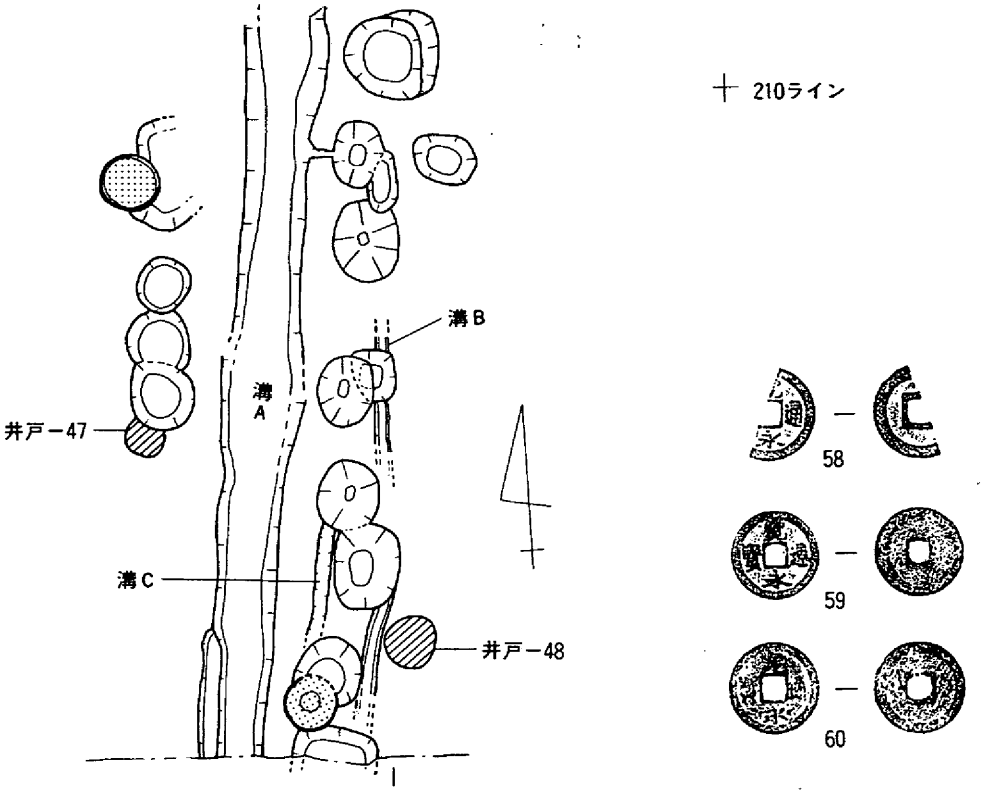
柱間は，桁行2間・梁間2間で，桁行約460cm・梁間約260cmを測る。建物の主軸は，N11°Wである。

時期は，柱穴内から遺物の出土がまったくみられなかったことから明確にはできない。しかし，埋土の状況からすれば，平安末から室町頃への年代比定が有力である。

なお，建物の東約4mの地点には，条里溝が現地表面で南北方向に遺存するのが観察される。建物は，この溝にほぼ並行するところから条里に付属する性格が考えられる。（島崎）



第439図　建物—11（1/30）



第440図　南北溝と野つぼ状土壙（1/200）・溝A出土遺物（1/2）（網目は，漆喰で作られた野つぼ状土壙）

（２）　溝

南北溝と野つぼ状土壙（第440図，図版175―２）

210Q地区の市道西側では，数条の溝が集中して検出された。この中でも第440図の溝―B・Cがもっとも古く，中世に遡り得る可能性が考えられる。現状では幅約40cm，深さ４cmと規模が小さいが，近世の開墾に伴う地下げ以前には，かなり大きい溝であった可能性もある。埋積土は灰白色微砂質粘土で，他の遺構にはさほど多く認められない土質を示す。

溝―Aは，今日に至るまで連綿と使用・踏襲された溝で，土層断面の観察だけでも約５条に及ぶ。埋積土は黒灰色砂質土を中心とするが，一時期の杭列も残存していた。いずれの溝もほぼ南北方向を示すが，やや東振（約6°～8°）していることが注目され，条里遺制との関係が認められる。

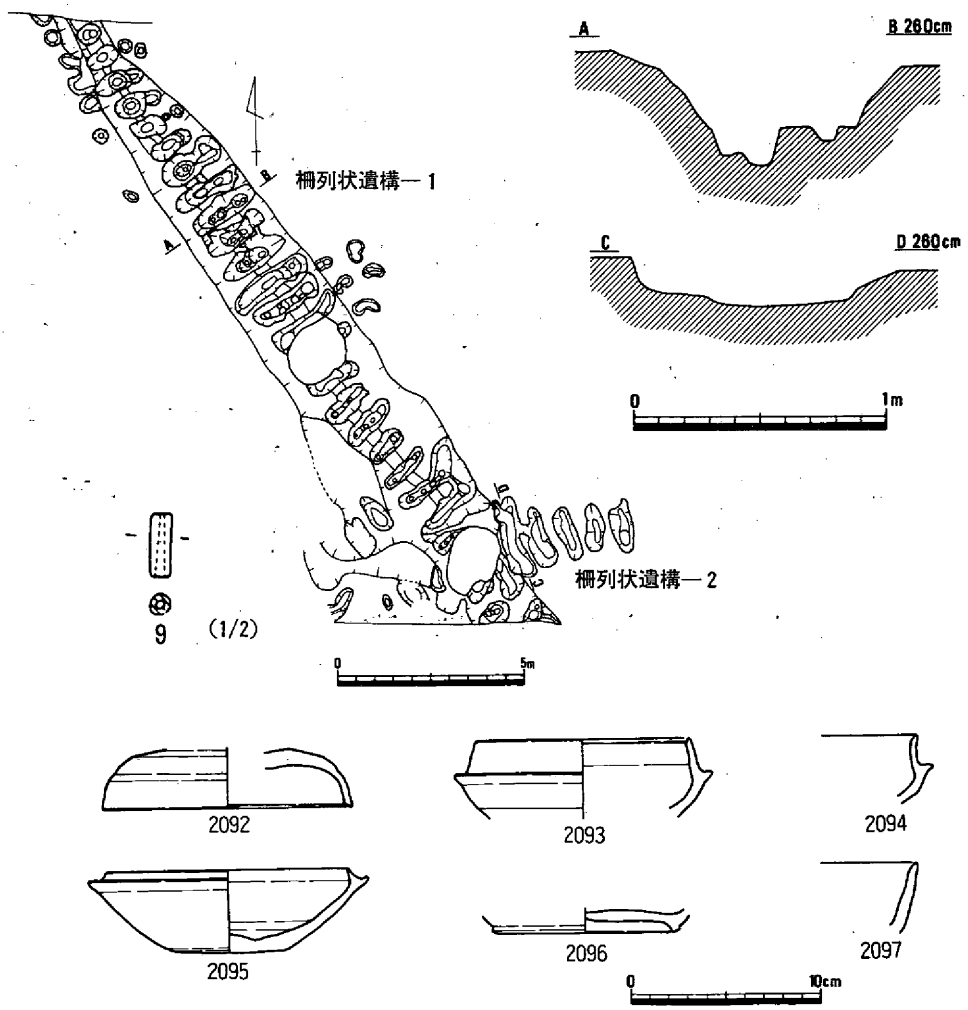
一方，この溝の両側には野つぼ状の土壙が集中して検出され，長径200cm前後，短径150cm前後，深さ約55～80cmを測る不整円形・隅丸方形を呈するものが10数基確認された。埋積土は青灰色微砂質粘土を主体にしているが，わずかな陶器片（染付など）が出土しているにすぎな

い。また，第440図に示すように底部・周壁を厚さ約5㎝の漆喰で固めてつくられたものもある。これらは，いずれも単に貯水目的ではなく，畑作に伴う肥料（主として人糞）を貯めておく野つぼ群と推察される。したがって，近代・現代では百間川地内の大半が水田であったようであるが，近世では，水田はもちろん，このように畑作が行われた可能性も十分に指摘できよう。（岡田）

（3）　柵列状遺構

柵列状遺構（第441図）

この柵列状遺構―1は，溝―148の上部に位置する。ほぼ東西方向に幅約200㎝の溝が検出され，その溝の幅に横長の掘り方があり，それが溝中を等間隔に連続する。この溝幅の掘り方の中には，2本の柱穴状のものが存在する。この柱穴状のものは，2本が対になっているようで



第441図　柵列状遺構（1/30・1/200）・出土遺物

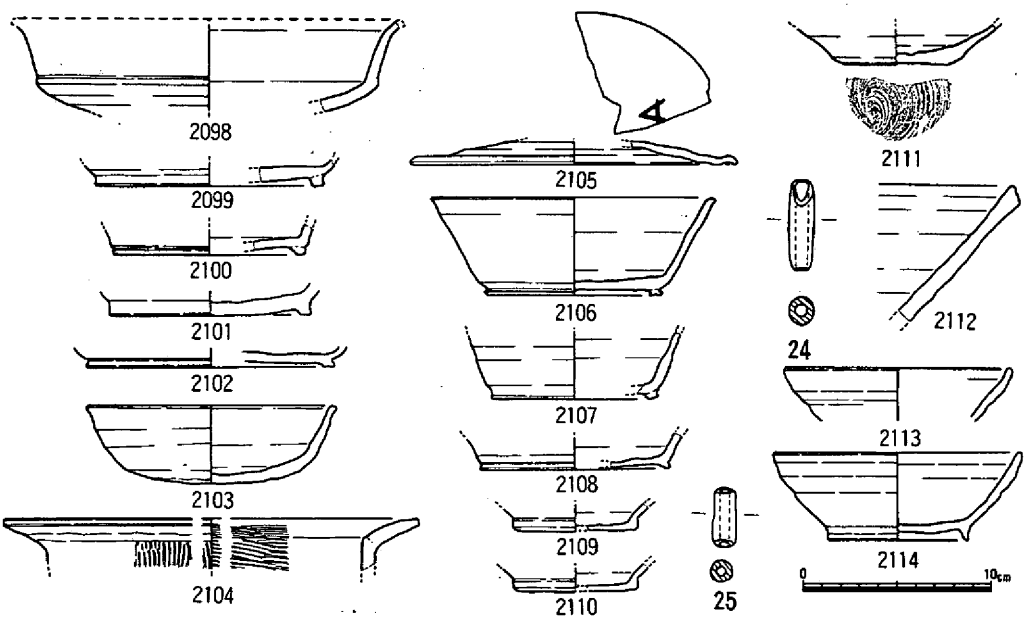
ある。このような溝に柱穴列が伴うような遺構は，百間川原尾島遺跡三ノ坪調査区で多数検出されている。

出土遺物は，2092～2097の土器及び碧玉製の管玉が出土した。前述した原尾島遺跡では，2095の６世紀後半～７世紀初頭の時期が与えられており，今回出土した2096，2097の奈良時代まで下がる可能性もある。

柵列状遺構―２は，東北東～西南西の方向に検出された。溝は伴なわなかったものの横長の掘り方が連続する。

出土遺物は検出できなかった。これらの遺構は，いまだ性格など明らかではない。

（中野）



第442図　包含層出土遺物

第4節　竪石調査区

1　調査の概要

竪石は，低水路より南の用水と西を市道幡多321号線および東を同9号線にかこまれた小字名である。この地区は，原尾島樋門が調査対象となったものである。当樋門の調査対象面積は685㎡である。なお，低水路北側においては用水路が通り南については工事用道路が横断している関係から，前者については調査対象外とし，後者について工事用道路の付け換えにより調査を実施した。

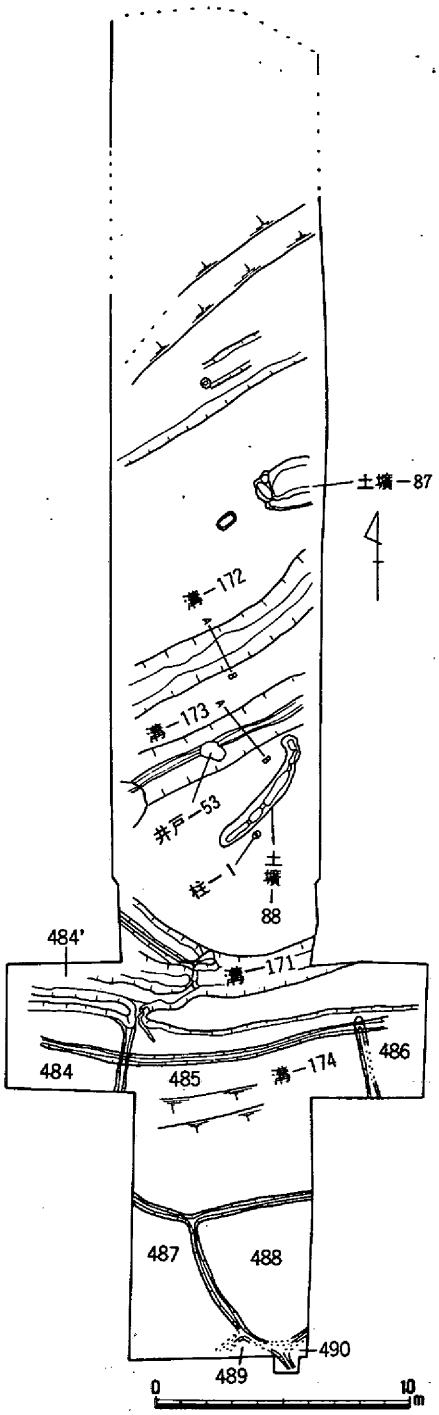
調査区における層序関係は，基本的に西壁面を対象としたが壁の崩壊により作図できなかった部分については東壁を図化した。堆積層が多いため百間川遺跡全体を被うと考えられている洪水層を1層として以下番号を付した。微高地は，調査区のほぼ中央に長さ32mに且って認められ，この微高地の南側と北側には1層とした洪水層が堆積している。洪水層のレベルは，北端の上面で223cm，下面で198cmを南端で上面が224cm，下面で202cmをそれぞれ測る。調査区約90mの間での南北端におけるレベル差は，上面において1cm，下面において4cmとなっている。なお，それぞれの断面図に示した如く地点ごとにおいては，これ以上の高低差が認められる。

2層は，水田層と考えられるものでありA—B・C—D・E—Fの各断面図に畦畔が認められた。この2層は調査区南の微高地端部においても認められており，断面の状況から微高地を造成していることが推測される。また北側においては，微高地が一段下がった部分において洪水層下にそれと推定されるものが存在するが，より北については認めることはできなかった。

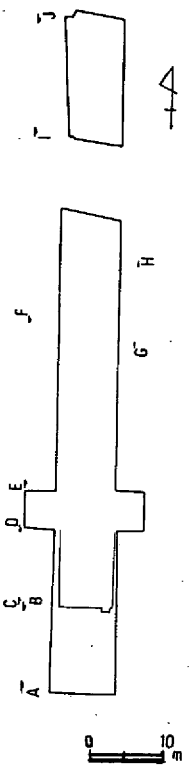
3～10層は，南側の微高地下りの堆積土である。水田層下の6層～8層においては縄文晩期の凸帯文を出土している。そして8層中より縄文後期に入ると考えられる遺物を一括して検出している。9層の明灰色粘土および10層の灰色微砂については遺物を認めることはできなかった。

微高地北側の下りの堆積土は15層～39層である。水田層と考えられる層は，前述したように微高地が一段低くなった部分に存在するが微高地下がりから土層断面図I—J間においては認めることはできなかった。土層断面図G—Hにおいては斜面堆積が認められ，20～28層において弥生前期及び縄文晩期の遺物を出土している。さらに30層は基盤層の崩壊したものと考えられ，また29層下の茶褐色粘質細砂で植物遺体を多く含んでおり，これら2層は遺物を含んでいない。

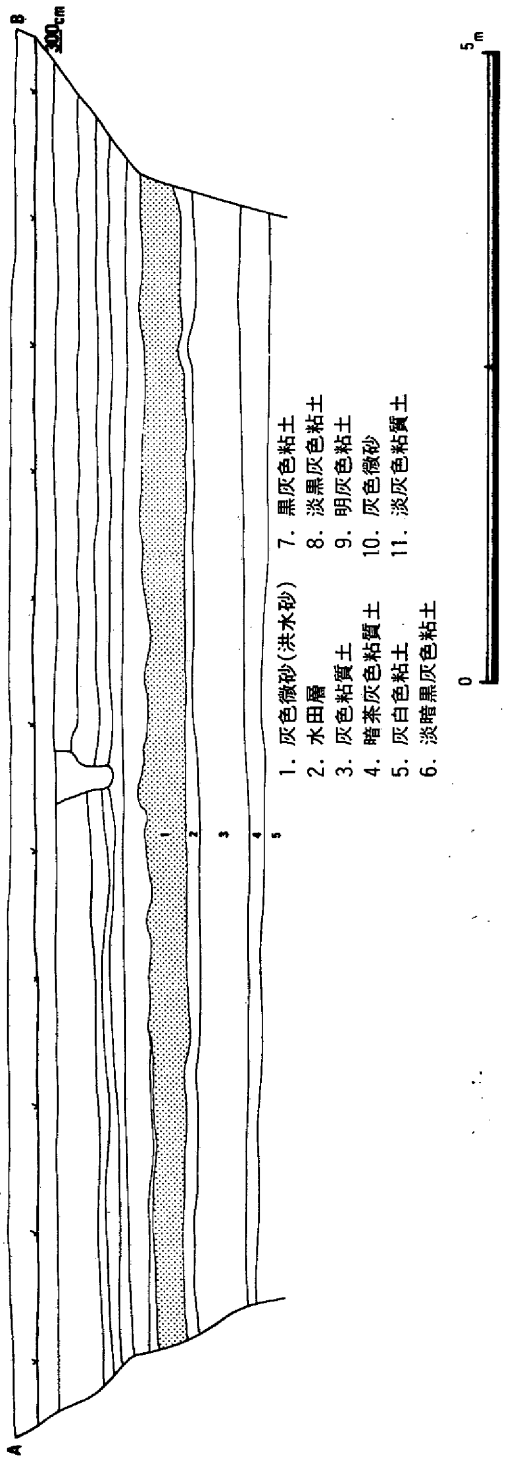
なお，土層断面図I—Jにおける1層から上に堆積する層中（上から6層目）においての遺



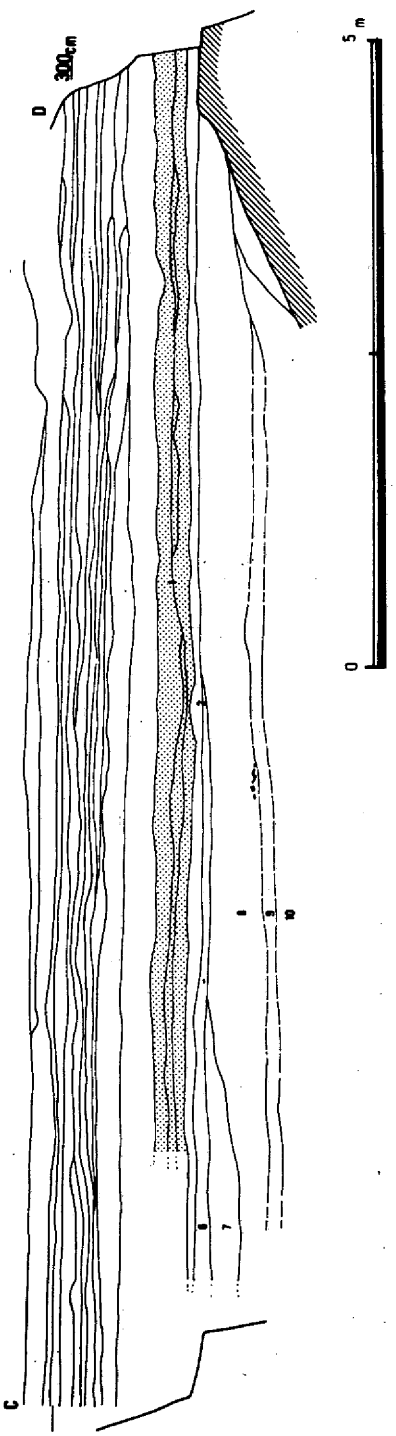
第443図　竪石調査区遺構配置図（1/300）



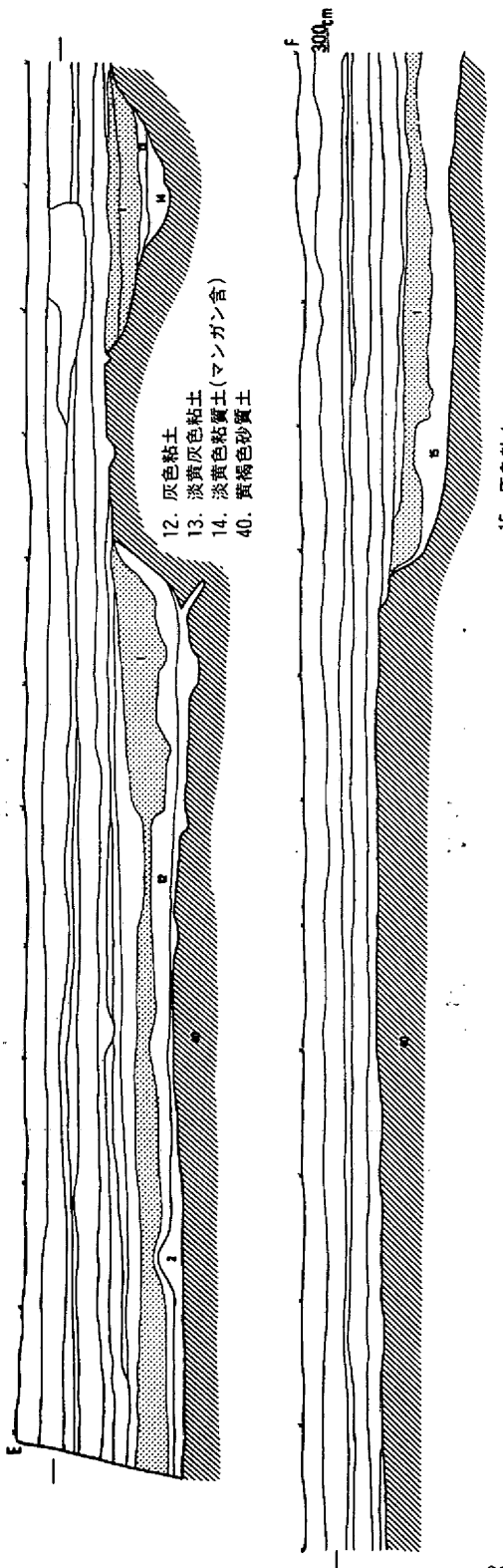
第444図　土層断面位置図（1/1,000）



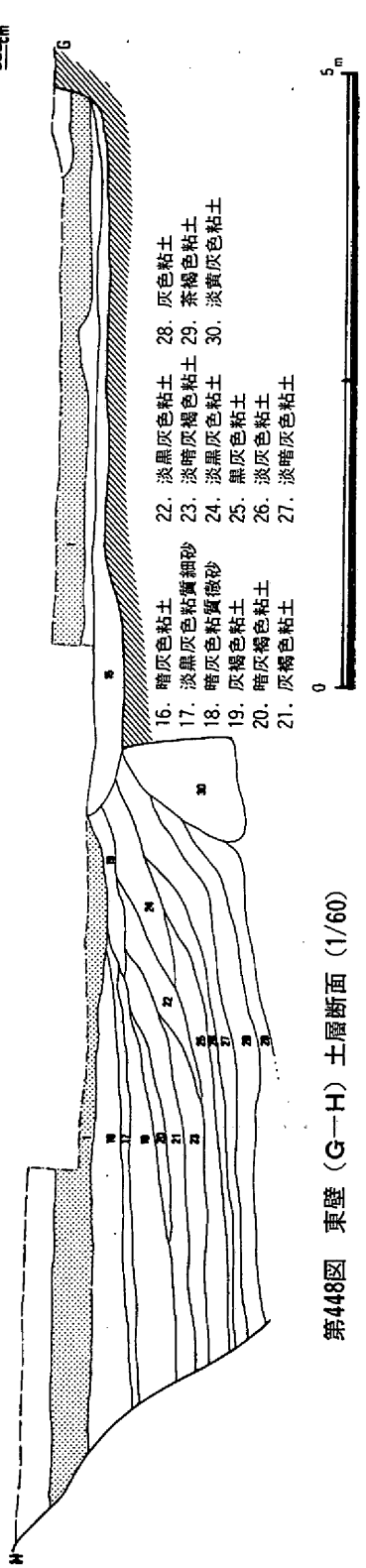
第445図　西壁（A—B）土層断面（1）（1/60）



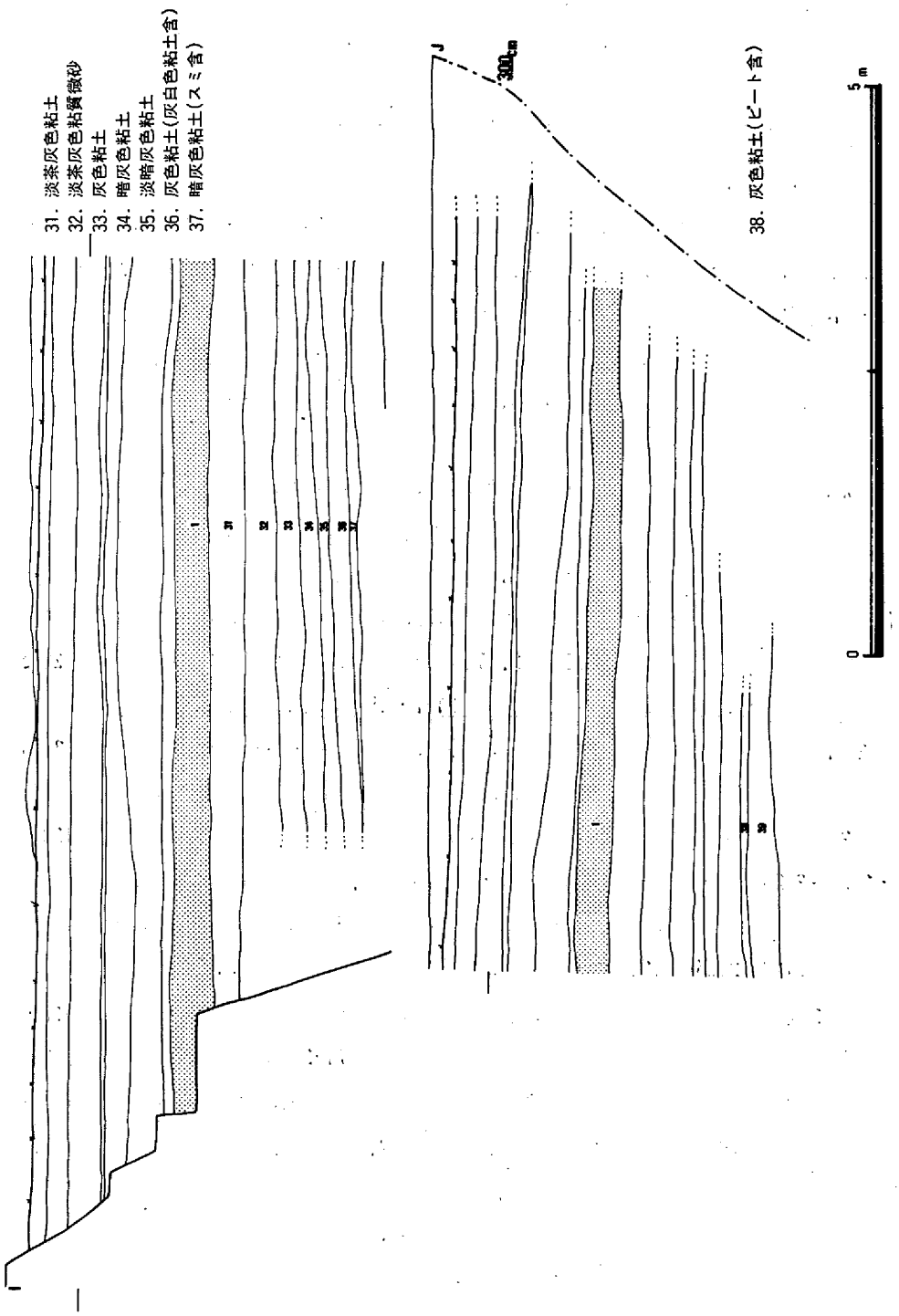
第446図　西壁（C—D）土層断面（2）（1/60）



第447図　西壁（E－F）土層断面（３）(1/60)



第448図　東壁（G－H）土層断面（1/60）



第449図　西壁（I—J）土層断面（4）（1/60）

物を出土している。

当調査区から検出した遺構は，弥生前期の溝以外はいずれも後期の溝・土壙・水田である。

2 縄文時代の遺物

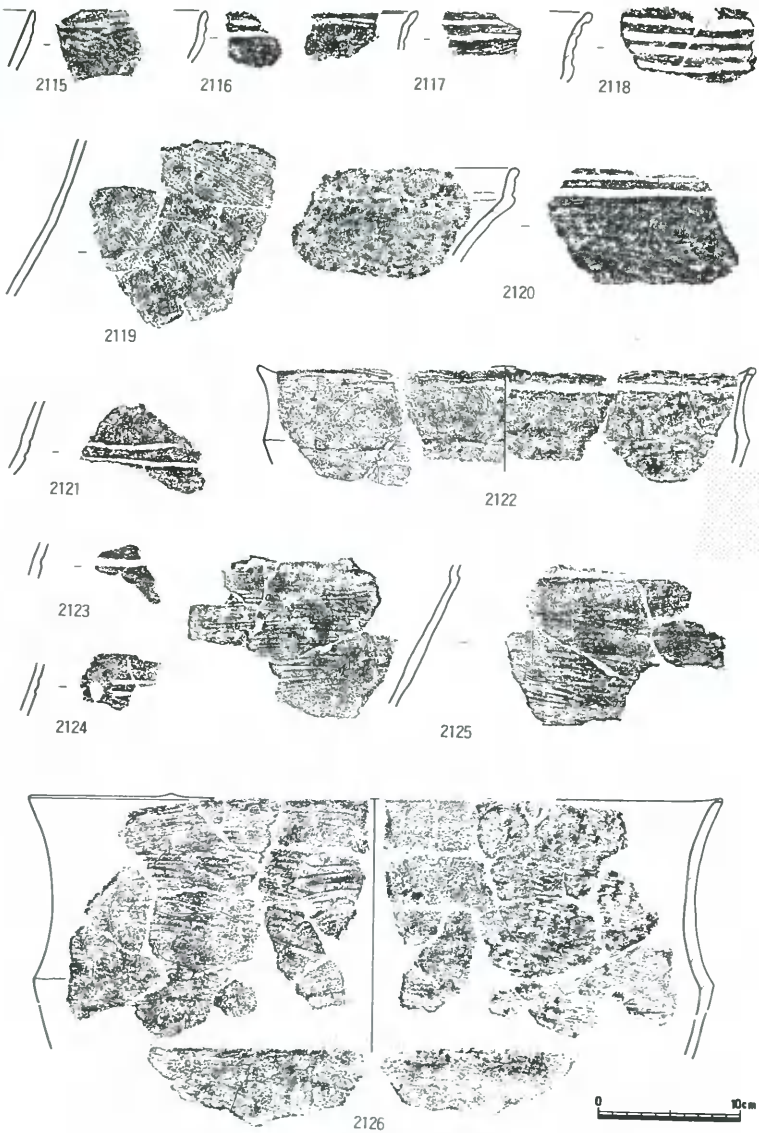
(1) 土器溜り—15（第450図）

縄文時代に属する遺物は，南（2130～2133・2135・2139・2141・2144・2146・2147～2148・2153～2152・2154～2155・2157）及び北（2128～2129・2134・2136～2138・2140・2142～2143・2145・2149～2150・2153・2156・2158）の微高地下がりと土層断面図E—Fの水田下層部分から出土している。いずれも縄文晩期に属するものであり弥生前期の遺物と伴出しているが，図版においては分けて示している。しかし縄文後期に属すると考えられる遺物は一括して出土をみている。

2115～2126は，土層断面図C—Dの9層である明灰色粘土の直上よりまとまって出土したものである。土器の説明は表に示しているが，百間川の調査において当時期に相当する資料がほとんど見られない状況であるため若干の説明を加えておきたい。

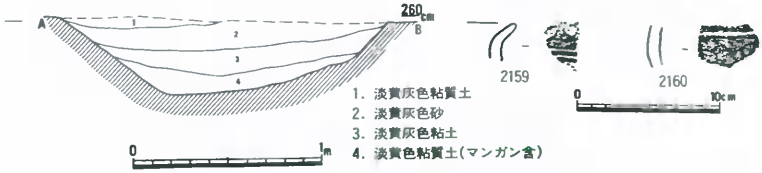
2115は口縁端を丸くし，外面に巻貝の条痕が沈線風に施文されているのが認められる。内面調整は，風化のため不明である。2116は，2115と同様な口縁端を示すが，口縁下外面には2115よりも明瞭な巻貝による沈線が2本認められる。2117・2118は浅鉢になると考えられるものである。2117は，外面に3本以上の巻貝による沈線を，内面にも同様の沈線が存在する。2118は，口縁部を外方に屈曲気味に外反し巻貝による沈線を4本施文する。粘土接合は内傾を示している。2119は，外面に二枚貝による条痕がみられ，内面は平滑に仕上げられている。2120・2121・2123～2125は，深鉢と考えられる口縁部と胴部の破片である。2120は，口縁が立ち上がるもので外面に巻貝による2条の沈線を施し下半は巻貝による調整を行う。内面は風化のため不詳である。2120・2123・2124は胴部の屈曲部に巻貝の沈線を施し，2124は巻貝の圧痕が認められる。2125も胴部の破片であり外面は巻貝により内面は二枚貝の調整がみられる。2122・2126は，胴部から大きく外反する口縁を有するものである。2122は推定口径35cmを測り，波状口縁となるもので口縁端面は巻貝による調整がみられ，口縁下内面に沈線を有する。口縁部外面は巻貝により，胴部内面は平滑に仕上げられている。2126は，推定口径48cmを測るもので，2125と同様に口縁部が大きく外反し，口縁端には突起が2ケ所認められる。口縁部および胴部外面は巻貝により調整される。口縁内面は二枚貝が，胴以下は巻貝ににより調整がなされる。屈曲部内面は，押圧痕が認められ粘土接合は内傾である。

以上の遺物は，2126が形態的に新しい内容を示すが，他の遺物と胎土・焼成は異なることなくその出土状況からも同一時期の所産として，さしつかえないと考えるものである。



第450図　土器溜り―15　出土遺物

第451図　包含層出土遺物（１）



第452図　溝―172　(1/30)・出土遺物

（2）　包含層出土遺物（第451・453図）

南と北の微高地下がりより出土しており，主に水田層下よりのものが多く検出されている。いずれも削り出し突帯を有するものである。なお，縄文時代の遺物の項で説明した如く，これらの遺物には第451図の縄文晩期のものが伴出している。

水田層下からこのような遺物の出土は，水田の造成が微高地および縄文晩期及び弥生前期を含む包含層を削平して造成していることが理解されるのである。

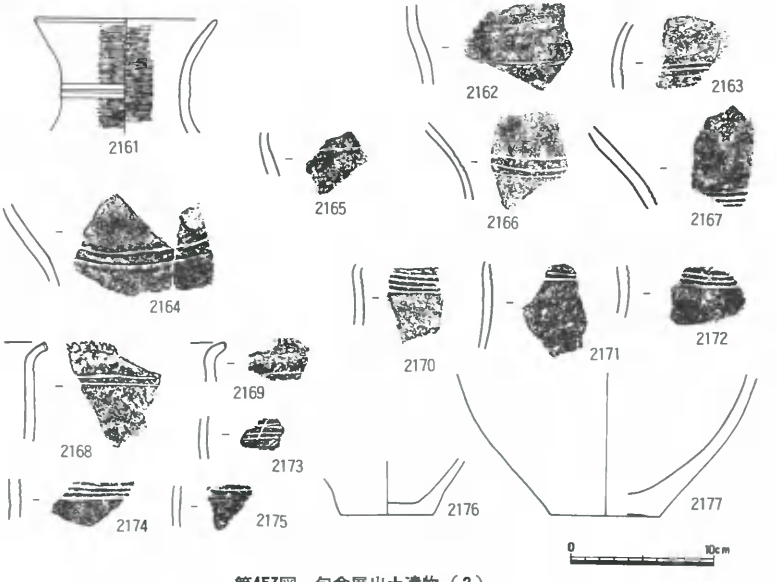
3　弥生時代前期の遺構・遺物

この期に属すると考えられる遺構は，微高地ほぼ中ほどに北東から南西に向って斜めに存在する溝が1本だけである。

（1）　溝

溝—172（第452図）

溝の幅は，160〜180cm，深さ約37cmを測るものである。溝埋土は，1層と2層が砂層で先に記した洪水砂と同じものと考えられるものである。3層は淡黄灰色粘土及び4層が淡黄色粘質土である。溝の底は，逆台形状を呈している。溝からの出土遺物は，**2159**と**2160**の削り出し突



第453図　包含層出土遺物（2）

帯を有する壺形土器の破片が４層から出土している。

４　弥生時代後期以降の遺構・遺物

（１）　柱

柱穴―１（第454図）

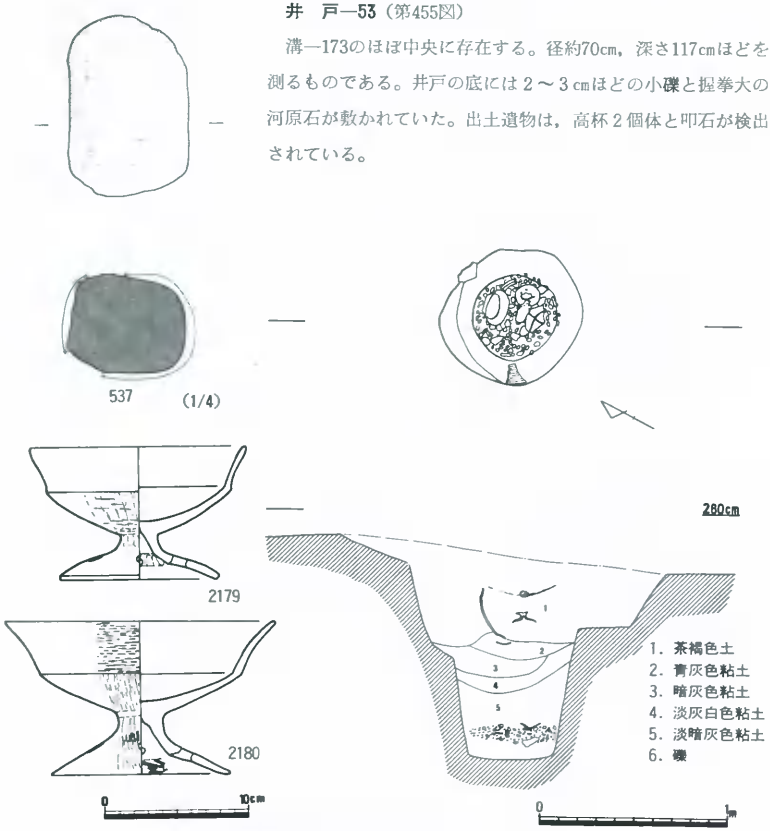
土壙―88の南側に検出された径25cm，深さ６cmほどのものである。内より**2185**の甕を検出している。

第454図　柱穴―１出土遺物

（２）井　　戸

井　戸―53（第455図）

溝―173のほぼ中央に存在する。径約70cm，深さ117cmほどを測るものである。井戸の底には２～３cmほどの小礫と握拳大の河原石が敷かれていた。出土遺物は，高杯２個体と叩石が検出されている。



第455図　井戸―53（1/30）・出土遺物

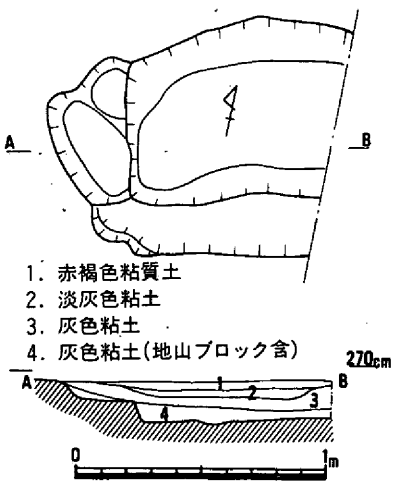
（3）土　　壙

土　壙—87（第456図）

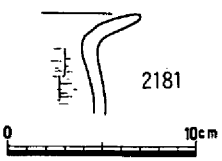
溝—172の北側にあり，幅192cmを長さは東部分が調査区外になるための不明である。プランは，楕円形を呈するが西と南は二段掘りとなる。特に西側については遺構の切り合いとも考えられたが，土層断面図に示した如く同一遺構の堆積状況を示していた。

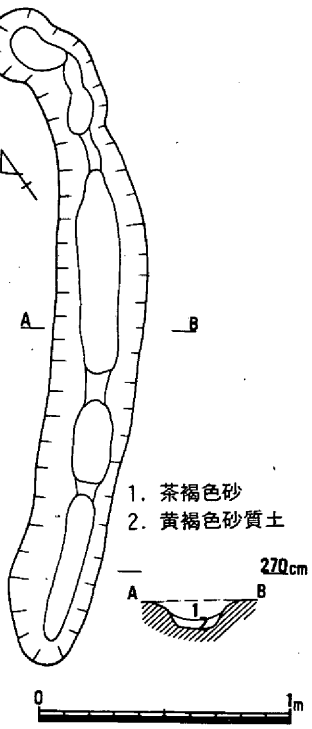
土　壙—88（第457図）

溝—173の南に検出されたもので，長さ515cm，幅70cmを測る。プランは弓状に曲がる。底は一様な深さを保つことなく凹凸が見られる。出土遺物はなく，砂層の堆積からその前と考える。



第456図　土壙—87（1/30）・出土遺物



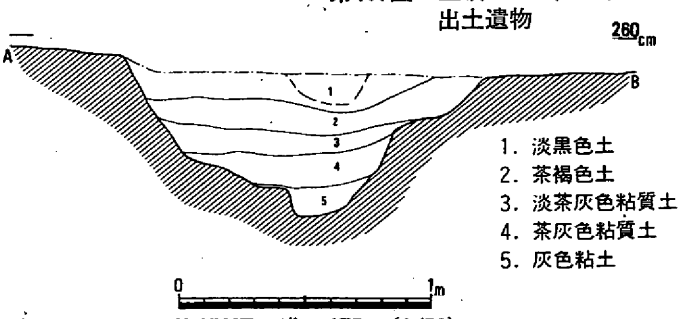


第457図　土壙—88（1/30）・出土遺物

（4）　　溝

溝—173（第458図）

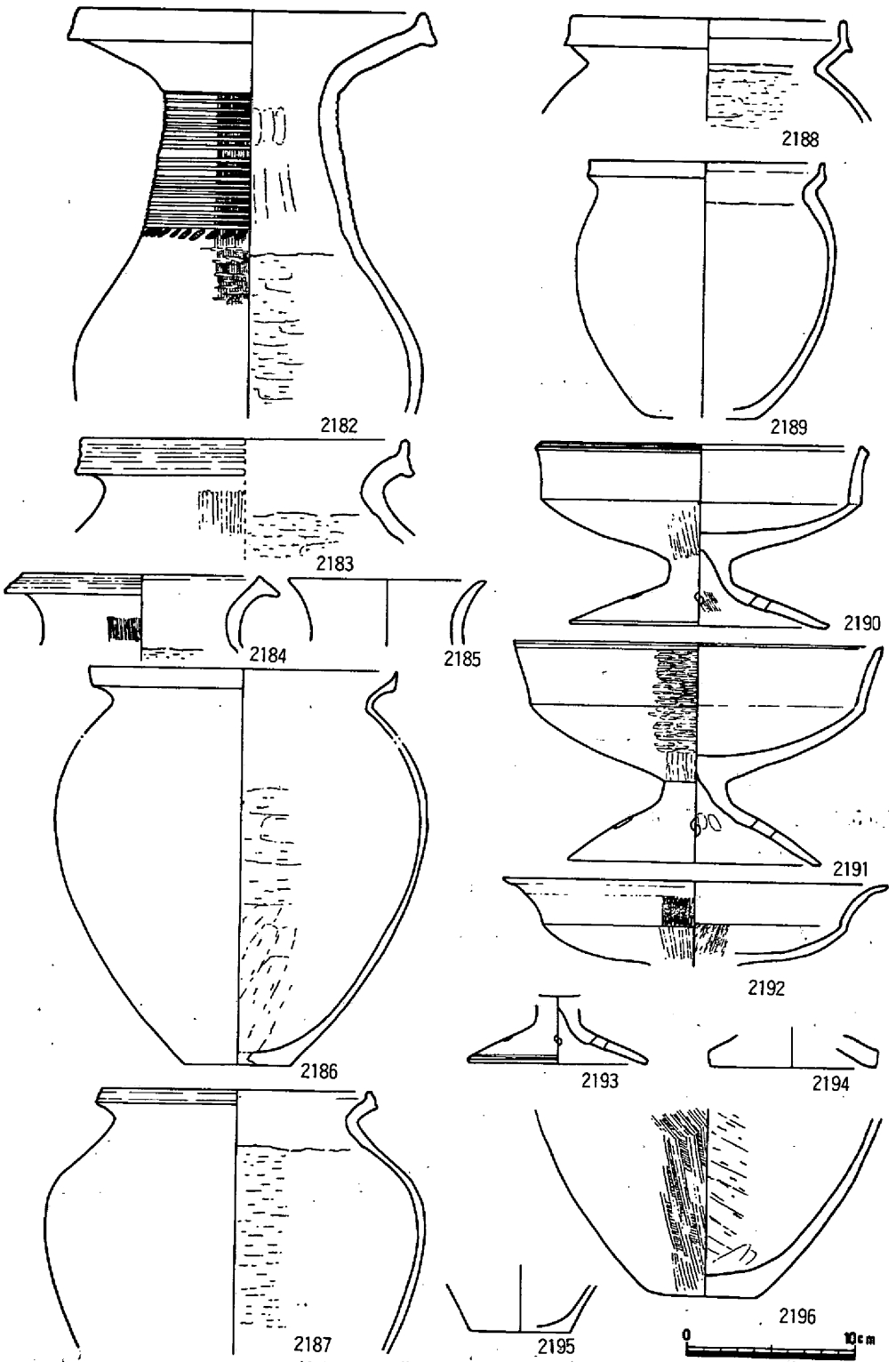
溝—172の南に沿って存在し，幅150cm，深さ56cmを測るものである。底は，二段掘りとなる。溝からの出土遺物は，1層の淡黒褐色土において多く認められ，この土器から百・後・Ⅲを中心とした時期が考えられる。



第458図　溝—173（1/30）

（5）包含層出土遺物（第462図）

2203・26・27は北微高地下がり，538～545は南微高地下がりから出土している。（下沢）



第459図　溝一173　出土遺物

（6）水田と用排水路（第461図）

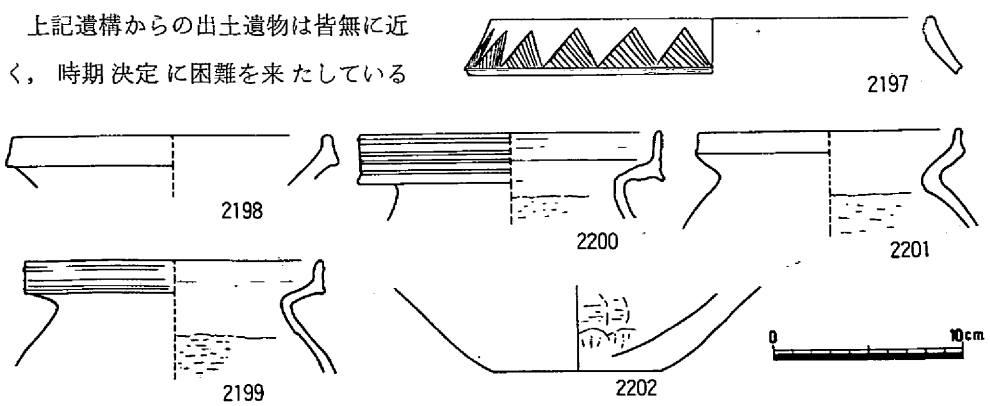
上記はいずれも洪水砂除去後に検出され，部分的ではあるが8面の水田及び，用排水路との関係を捉えることが出きた。

水田面の平均海抜は484′水田2.05m，484～486水田2.06m，487・488水田2.01m，489・490水田2.0mを測り，田面は僅かながら北から南へ低くなっている。484′水田は用水路及び大畦畔，484水田は大畦畔及び小畦畔，485・486水田は微高地及び小畦畔，487～490水田は小畦畔によってそれぞれ区画されていた。しかしながら当調査区からは一区画の水田面積も明らかにし得なかった。強いて推定し得る485水田の面積は約64.3㎡である。484′・484水田の間から検出された大畦畔は幅約100cm，高さ20cmを測り，微高地を掘削して造られたものであり，484～490水田にかかる小畦畔は幅約35cm，高さ6cmと低く，水田と同様の土壌からなる。なお，485・486水田から約数cm上部において東西方向に延びる小畦畔状の高まりを一部確認しており，上層にもう一面水田の存在した可能性も考えられる。

一方，用水路と考えられる溝が484′水田の北部から検出された。溝の北縁は微高地を掘り込んでおり，南縁は小畦畔によって区切られている。溝の肩部は北縁が高く，南縁が低い。その差は25cmを測る。溝の幅は約90cm，深さは約10数cmと想定され，洪水砂除去後の溝底は海抜2.09～2.04mを測る。溝は調査区中央付近で南縁が途切れた状態になっており，この部分から用水は484′水田に流れ込むものと考えられる。また，当用水路及び484′水田の東からも微高地を掘削して造られた溝が検出されている。幅約140cm，深さ約40cmを測り，洪水砂除去後の溝底は海抜1.88mを測る。溝底及び484′水田との位置関係から当溝は排水路としての機能を果したものと判断される。なお，484′水田と排水路の境に畦畔等の施設は確認されなかった。

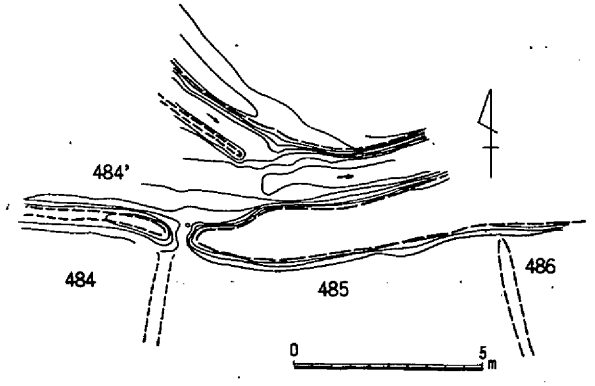
水口は484′・485水田間，485・486水田間2箇所検出された。前者は平・断面図から明らかなように大畦畔を掘削しており，洪水砂除去後の海抜高は2.06mを測る。堰等の施設は確認出来なかった。後者は小畦畔が北端で切れている部分であり，小畦畔との高低差は2cmを測る。

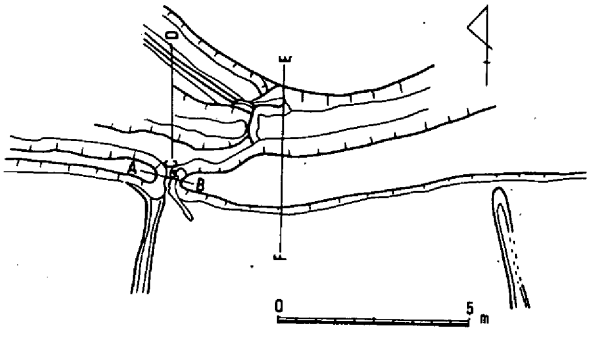
上記遺構からの出土遺物は皆無に近く，時期決定に困難を来たしている

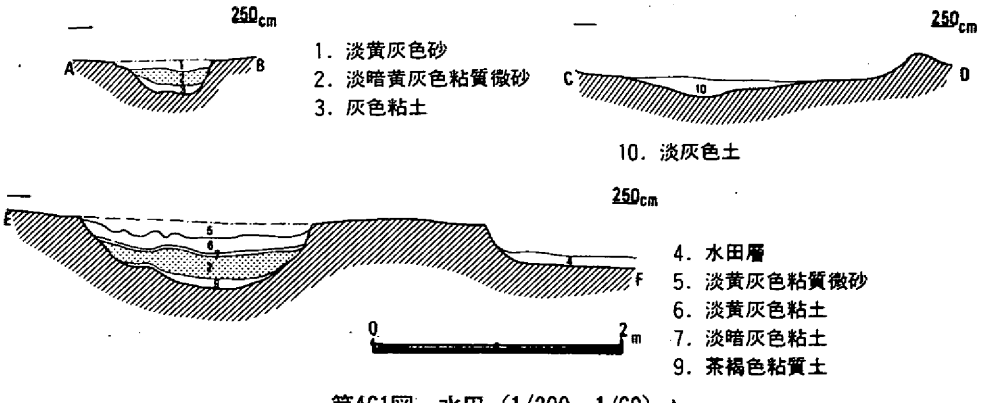


第460図　484′水田及び下層溝出土遺物

が，484′水田下から幅約150cm，深さ18cmの溝状遺構が検出され，水田層から溝内にかけて左図の遺物が出土している。これら遺物の特徴から上記水田遺構は百・後・Ⅲ以降開発されたものと考えられる。なお，前述の溝―172は下層より出土した僅かに確認し得る遺物から前期の遺構と判断されたものであった。しかしながら，当溝上層には水田埋没層と同様の砂層が堆積しており，溝の存続期間や現在までの調査例との検討から，当溝は後期の可能性が強く，前期遺物は流入したものと考えられる。溝―172は当微高地最高所を南西方向に流れる主幹用水路であり，この用水の一部が前記用水路を通り，一方で484′水田から調査区西に拡がる水田の排水を東の排水路（溝―171）に流していったものと考える。また，484′水田と排水路の間に畦畔状の施設が確認されず，484′・485水田間の水口が開口していたことは，当地区に用水を流した水田を水溜めにする場合には排水路の一

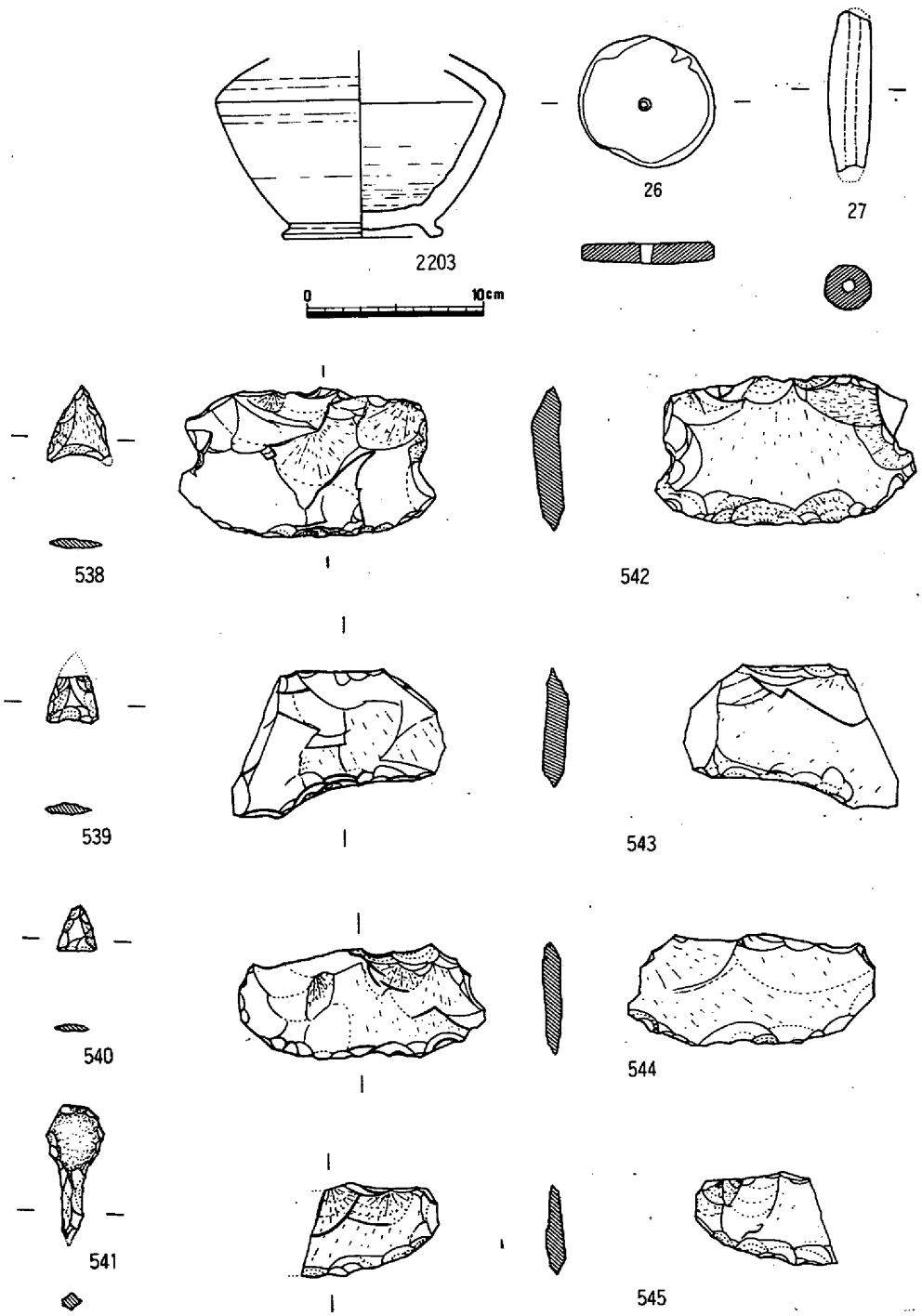






第461図　水田（1/200・1/60）

部に堰を設置しなければならないことから，想定された洪水直前の水田状況は，休耕されていたか稲収穫前の水落しが終了した時期と考える。　（江見）



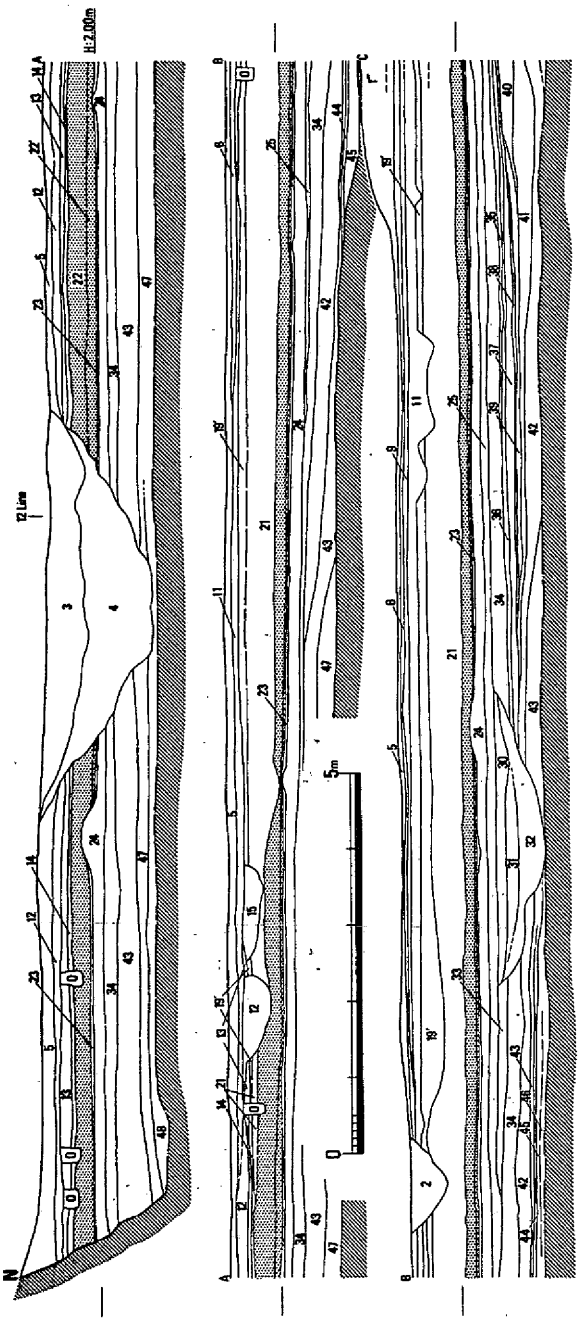
第462図　包含層出土遺物（3）（1/2）

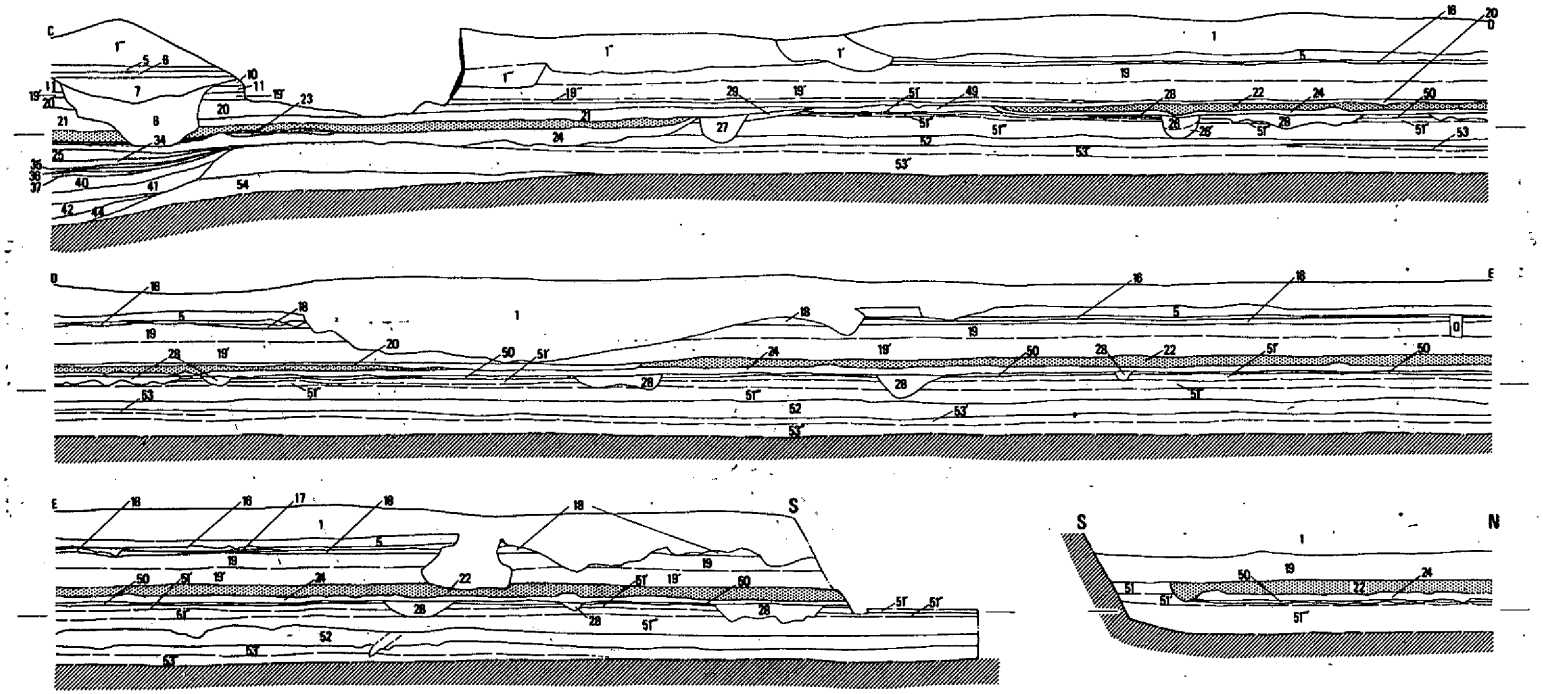
第５節　開山下調査区

１．調査区の概要

開山下調査区は現在のひょうたん池樋門設置部分にあたり，沢田集落へ通じる市道幡多９号線の東沿いで，現沢田橋の上流100ｍに位置している。百間川沢田遺跡の配囲を確認するための右岸用水路部分の調査によって，幡多９号線が百間川を越す付近を中心に微高地が検出されたため，ひょうたん池樋門の設置に先立って調査を実施した。旧沢田第１散布地で，先の報告書では右岸用水路第３調査区である。

調査区は全長100ｍ，幅は６～10ｍ，総面積は約790㎡である。用水路や道路の付け替えの関係で５つの調査区に分けて順次調査を実施した。調査区ごとに幅が異なっている。北から第１区，第２区と呼称している。検出された遺構はほとんど弥生時代のもので，水田が全面に，溝や不整形土壙群が３・４区の微高地部分に集中していた。他に中世の土壙が２基みられた。層位を第463図の土層図で説明しておく。**１～18**までは近世以降の堆積層，**19**は中世の堆積層，**20～21**は古墳時代～古代の堆積層で，**22**が弥生時代後期の洪





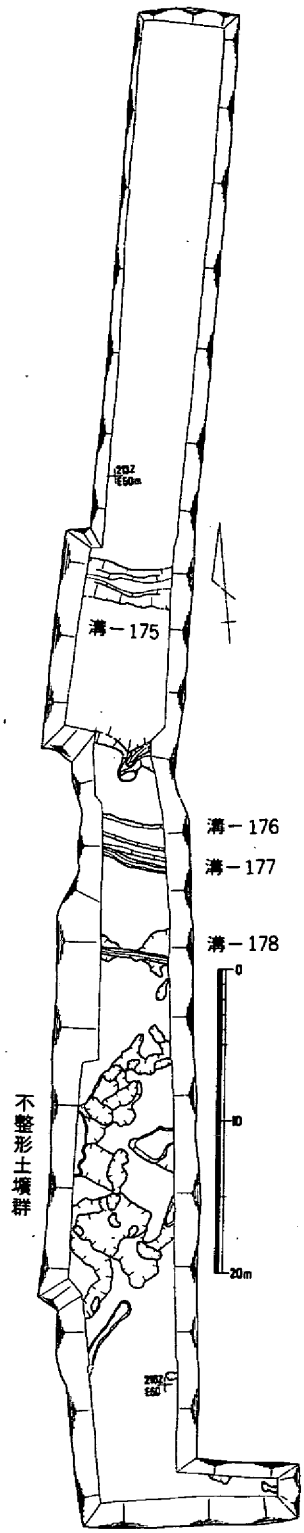
0. 暗　渠
1・1'・1''・1'''盛土・造成土
2. 攪乱壙
3. 現代埋土
4. 暗灰色粘性砂質土
5. 暗灰色細砂(耕土)
6. 灰褐色粘土斑粗砂
7. 暗灰色粘土斑灰褐色細砂
8. 暗灰色粘土斑粗砂
9. 灰褐色粗砂斑粘性土
10. 灰黄褐色粗砂
11. 灰黄褐色粘土斑粗砂
11. 灰褐色粗砂
13. 淡灰黄褐色粘土斑微砂
14. 灰褐色粘性微砂
15. 粗砂斑灰褐色粘土
16. 灰黄褐色粘土斑粗砂
17. 灰黄緑色微砂
18. 灰黄褐色粘性砂質土
19. 黄褐色粘性砂質土
19'. 灰色粘土
19''. 灰褐色粘性砂質土
20. 淡青灰色粘土
21. 暗青灰色粘土
22. 淡灰色～青灰色微砂
22. 淡灰色～青灰色微砂
(弥生洪水層)
23. 灰青緑色粘性微砂
24. 暗青灰色粘性土(水田層)
25. 暗灰色粘性土
26. 灰褐色粘性土
26'. 暗灰色粘性土
27. 灰黒褐色粘性土
28. 暗灰色粘土・暗褐色粘土斑
黄色粘土
29. 暗灰褐色粘性土
30. 青灰色粘性土
31. 細砂斑青灰色粘性土
32. 青灰色粘土斑細砂
33. 青灰色粘性土
34. 青灰色粘性土
35. 青灰色粘性土斑
暗灰色粘性土
36. 淡青灰色粘性土
37. 青灰色粘性土
38. 淡青灰色粘性土
39. 青灰色粘性土
40. 暗青灰色粘性土
41. 青灰色粘性土
42. 淡青灰色粘性土
43. 暗灰色粘性土
44. 灰黒色粘性土
45. 青灰色粘性土
46. 暗灰色粘性土
47. 淡青灰色粘性砂質土
48. 灰緑色斑淡青灰色
粘性砂質土
49. 茶褐色粘性土
50. 灰黄色粘土
51. 青灰黄色粘土
51'. 黄褐色粘土
51'. 褐色粘土
51''. 暗褐色粘土
52. 暗灰色粘土
53. 灰黄緑色粘土
53'. 暗灰黄緑色粘土
54. 灰青緑色微砂

第463図　開山下調査区土層断面（1/100）

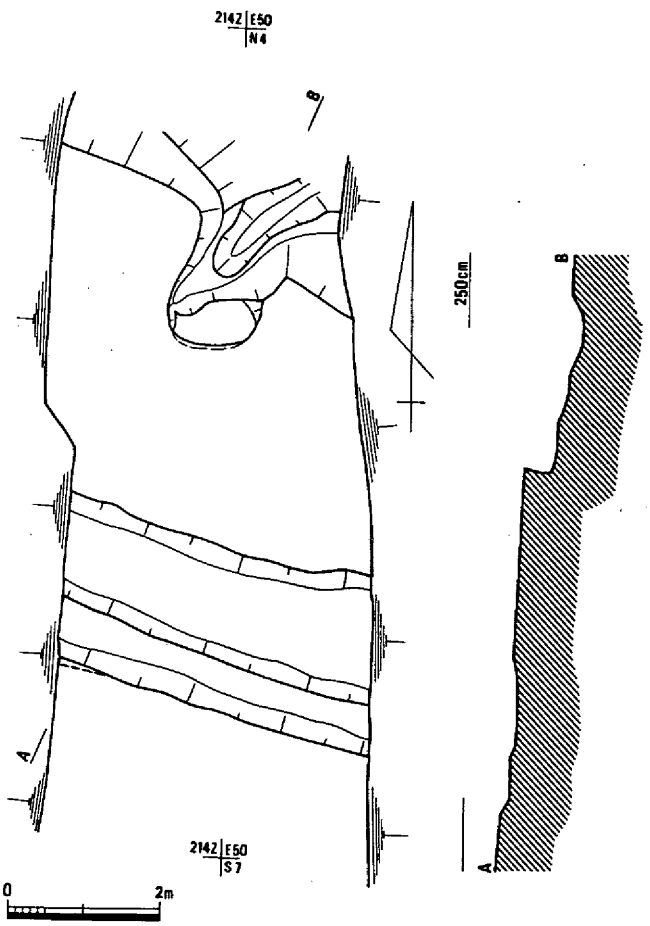
水砂層である。24は弥生時代後期水田層，25～48は低位部堆積層，49～54は微高地形成層である。

2．弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は溝と水田である。溝は５本検出されているが，うち１本は水田に伴っている。水田は調査区の全域で検出されている。この他に不整形土壙群を検出しているが，その性格は不明であり，さらには人為性についても疑問がある。なお，微高地端部を検出しているので第465図に示し，若干説明しておく。この微高地端部には落ち込みがみられるが，弥生時代の遺構と考えている。

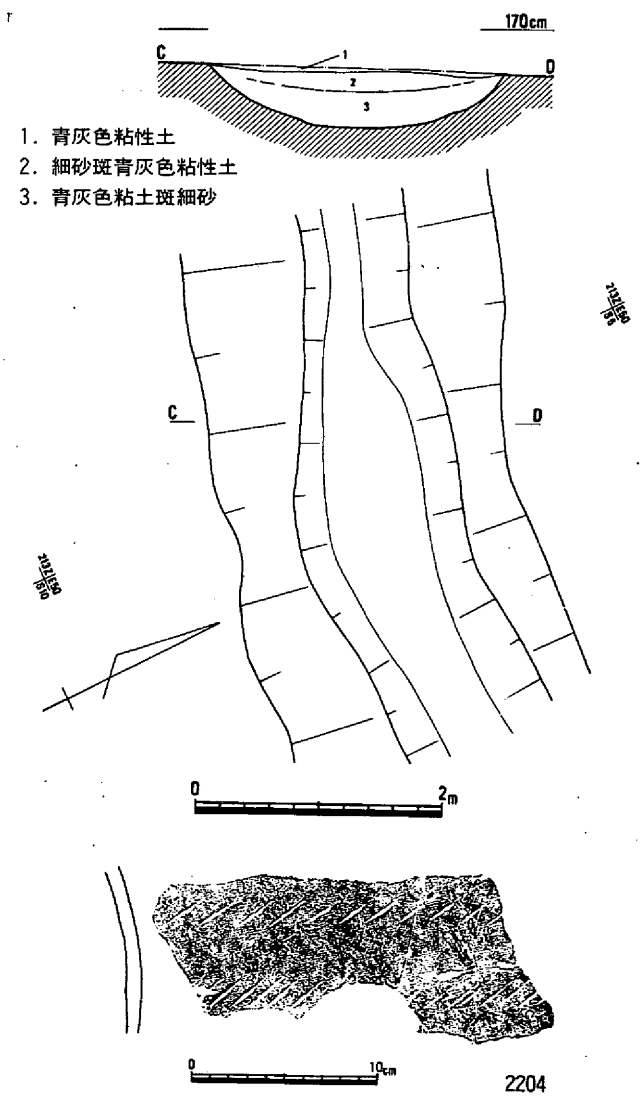


第464図　弥生時代遺構（1/500）



第465図　微高地端と溝―176（1/100）

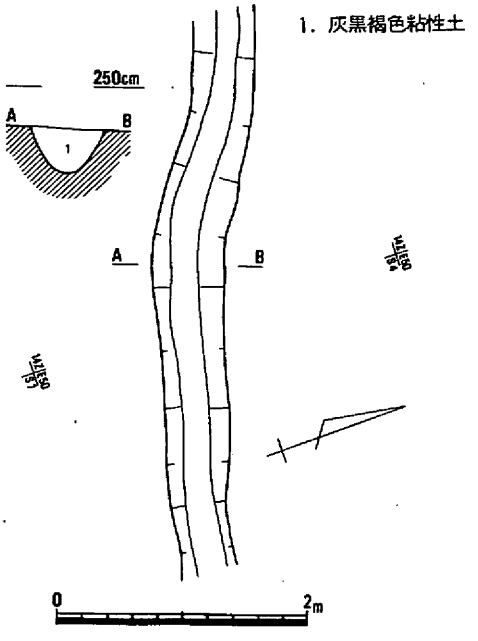
当調査区はちょうど中央付近で微高地と低位部に二分される。第463図の4段目の土層図の左端が微高地の端部にあたり，ここから北へ粘土層が下がっていく。**36～44**の層ではいずれも炭の薄層が互層でみられ，また炭粒も多く含まれている。この粘土層はさらに北へいくと上がってくるようで，このことから微高地端に河道状の大きな落ち込みが存在していたことがわかる。その幅は23m以上あったことは確かである。この落ち込みは高縄手B調査区で検出されたもの（第323図の中トレンチ土層図）と続く可能性が高い。検出した微高地端部には不整形な落ち込みがあり，底は溝状になっていた。溝が低位部へ流れ込む際の浸蝕によってできたものかとも考えたが判然としない。なお図示されている微高地部分は水田の開削を受けて平坦になっている。



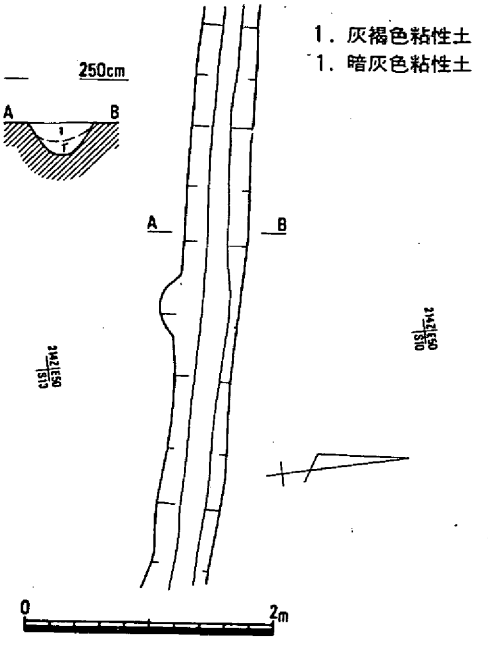
第466図．溝—175（1/60）・出土遺物

溝—176（第465図，図版197）

3区で検出された。弥生時代後期の水田層を除去すると，溝状の落ち込みが現われた。埋土は水田層の暗青灰色粘性土である。水田の南端から2・3mしか離れていない。このような溝状遺構は百間川遺跡群では微高地の縁辺や「島状高まり」の周縁ではかなり普遍的であり，したがって，水田と密接な関係をもつものと考えられている。ただ，この溝—176はかなり幅があり，底面に小凹凸をもたないことからすれば，やや特異である。幅140～170cm，深さ10cm前後，溝底の標高は179cmを測る。遺物の出土がないため正確な時代判定は困難だが，水田との関係から弥生時代後期の可能性が強い。



第467図　溝―177（1/60）



第468図　溝―178（1/60）

溝―175（第466図，図版199）

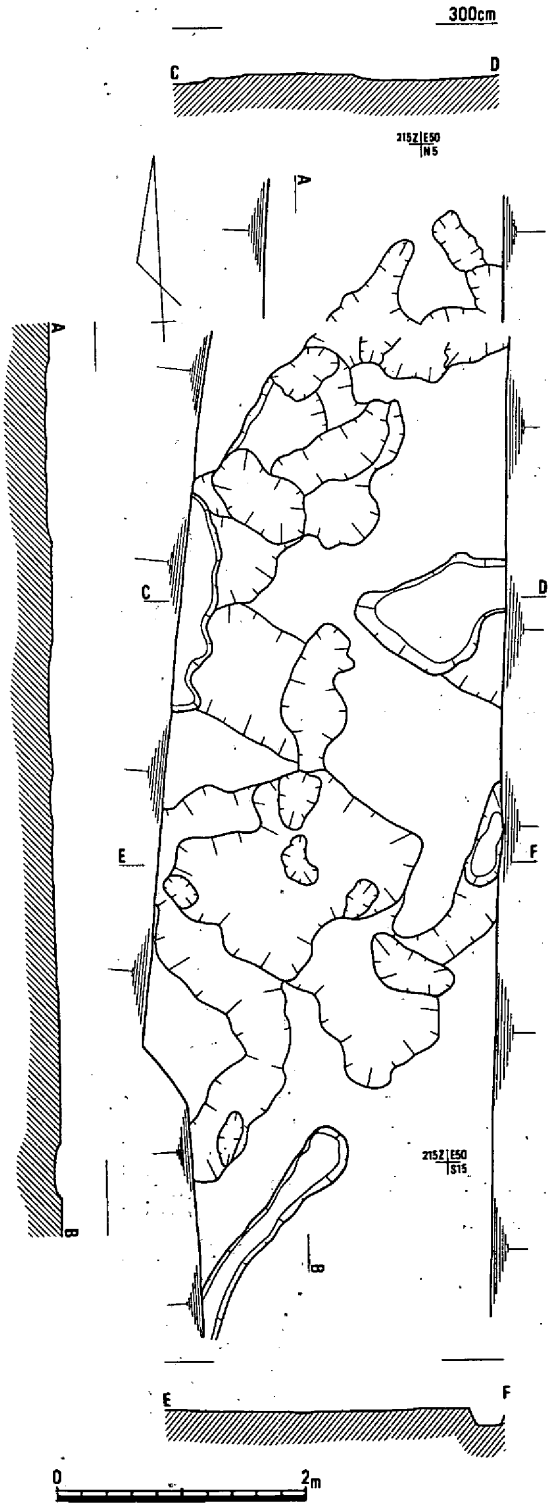
２区に位置する。検出面で幅250cm，深さ49cmを測るが，土層断面で復原すれば，幅388cm，深さ77cmと推測される。斜面の傾斜は緩やかであるが，途中に段をもつ。底の断面は皿状を呈し，平面を持たない。底面の標高は東端で86cmを測る。溝内の埋土は３層に分けられる。第３層は粘土斑細砂，第２層は細砂斑粘土，第１層は粘土と変化していく。当初は常に流れがあったと考えられる。後には停水して埋没したようである。櫛状工具の刺突文をもつ土器片が出土している。時期は百・中・Ⅱである。

溝―177（第467図，図版198）

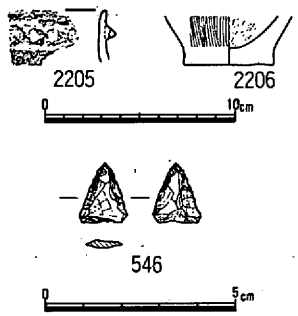
３区の水田南端付近に位置する。東西方向の溝で，水田開削により一部削られている。幅49～57cm，深さ35cm前後を測る。溝壁の傾斜は急で，断面形は深い椀形を呈する。底部は丸くなっている。底面の標高は180cmである。両端をくらべると，東端の底が２cm程低い。埋土は灰黒褐色粘性土１層である。時期は出土土器から百・後・Ⅳと考えられる。

溝―178（第468図，図版198）

４区の北端にあり，溝―177と5.2ｍの距離で平行している。幅46～50cm，深さ25cm程度である。溝壁の傾斜は急で，溝―177と同様，深い椀形の断面形をもつ。溝底の標高は190cmを測り，東西両端では東が4.5cm低い。溝内埋土は本来１層と考えられるが，色調によって二分される。時期を明示する遺物の出土はないが，溝―177と近いものと推測される。



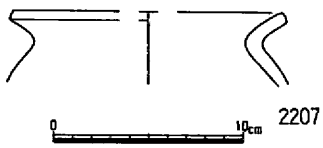
第469図　不整形土壙群（1/60）



第470図　不整形土壙群出土遺物

不整形土壙群（第469・470図，図版196）

4区のほぼ全域にわたって，不整形な土壙が複雑に切り合いながら密集しているのが検出された。個々の土壙の平面形はそれぞれ異なり，規則性のようなものをまったくもたない。多くは明瞭な底面をもたず，凹凸に富んでいる。埋土は暗灰色粘土と暗褐色粘土，それに黄褐色粘土がブロック状で混合しあったものである。土壙の深さは5～10cm前後と浅いものが多いが，中には20cm程度のものも若干含まれる。形態を見る限りでは，あまり人為性は考えられず，しいて考えれば，採土壙のようなものしか挙げられない。しかし，若干の遺物を含んでいる。これに類似したものとして高縄手A調査区の微高地基盤層上面で検出された土壙がある。水田層の直下にあり，溝—178に切られている。



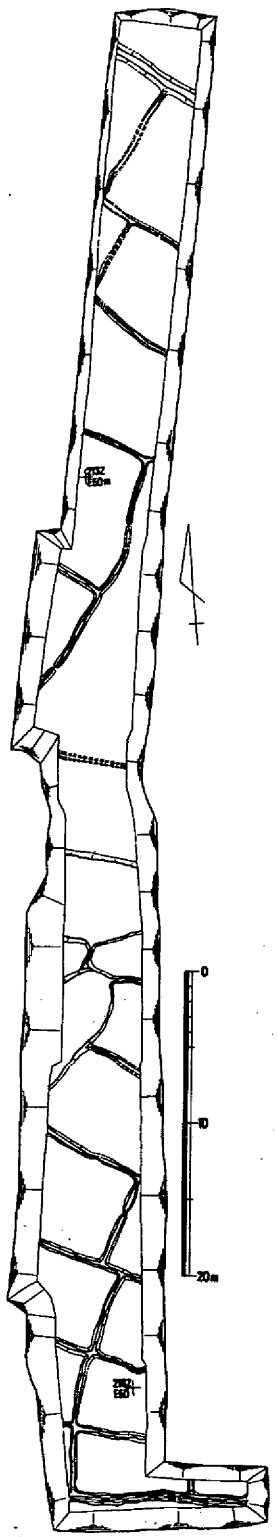
第471図　水田層出土遺物

水　田（第471～474図，図版200・201・202）

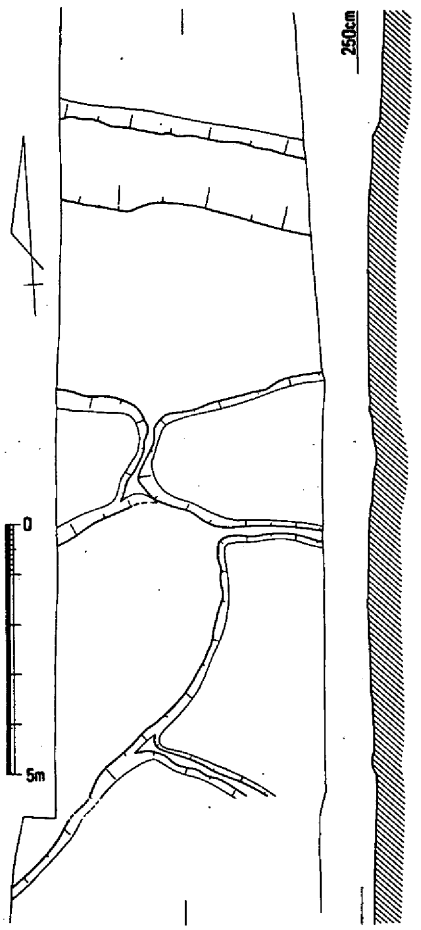
調査区の全域にわたって弥生時代後期の水田を検出した。水田は調査区の中央付近を境として，北は低位部の水田，南は微高地上の水田となっている。この両者の水田の間には境界として微高地が削り残されているが，幅は５ｍ程度しかない。

低位部の水田は南端の微高地から北54ｍまで調査した。この間に北西―南東方向の畦を６本検出していて，最北のそれは大畦となっている。水田１枚の大きさは南北間が平均して８ｍ程度である。東西間については調査区の幅が狭いため確認できなかった。水田面は溝―175の埋没している所が大きく落ち込んでいるが，旧状を止めていると思われる調査区北端の大畦南側で標高200cm，南端の微高地端で206cmを測るため，もともとは水平に近く作られていたと考えられる。小畦は幅40～50cm，高さ５～10cm，大畦は幅100cm，高さ20cm前後を測る。この大畦を境にして，北の水田が10cm程高くなっている。

微高地上の水田は北端の微高地から南へ36.5ｍまで検出した。36.5ｍ南に１本の溝があって，それから南は一段高くなっているため，この溝までが一つの段上の水田で，それより南では水田が検出されていない。下の段の水田面の標高は微高地付近で224cm，境界の溝の付近で217cmを測り，南へわずかに傾斜している。溝より南の一段高い部分の上面は標高231cmで，14cm高くなっている。下の段の水田の１枚の大きさは南北5.5ｍ，東西８ｍが平均で，低位部の水田よりは若干小形になっているようである。微高地に接する水田は不整形で幅３ｍ程度であるが，これは微高



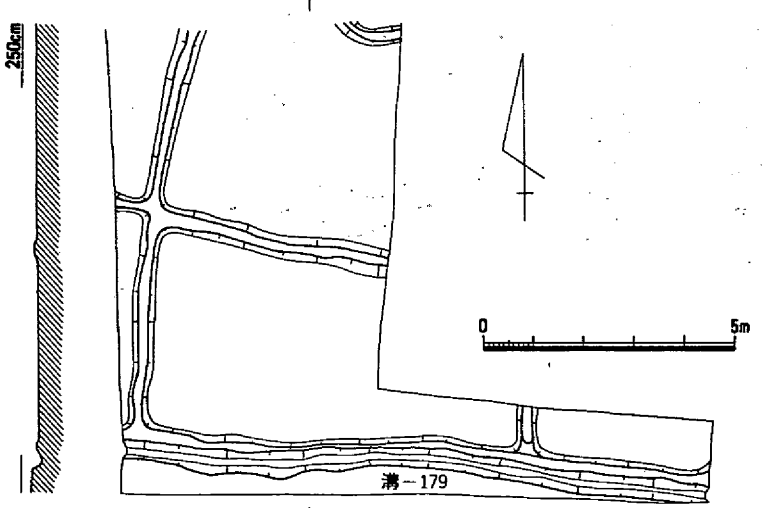
第472図　弥生時代後期水田（1/500）



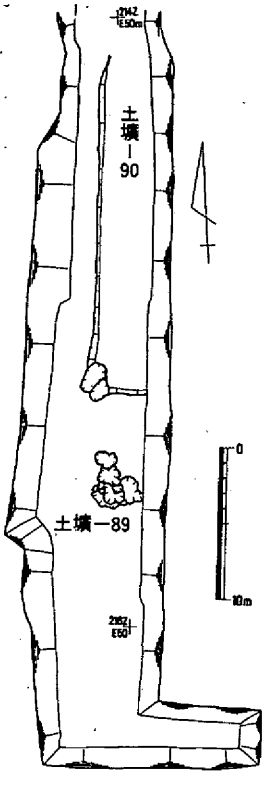
第473図　弥生時代後期水田細部（微高地付近）（1/150）

地から南へ「島状高まり」が伸び出していることによると考えられる。上の段は中世以降の削平を受けていて，すでに微高地の地山に近い土が露出しているため，この部分における水田の存在は不明である。下の段の水田には大畦はみられず，幅40～50cm，高さ5cmの小畦だけが検出された。調査区内には水口はみられなかった。

次に，微高地付近と調査区南端部を取りあげ，もう少し説明をつけ加えておく。微高地は削り残されたもので，調査区東端で幅 4.5m，西端で 6.5mを測る。この微高地の南にもう一つ微高地があり，二つの微高地は幅30cmの小畦で結ばれている。この小畦の両側に幅3mの細長い水田が入り込んでいて，このことから南の微高地は「島状高まり」である可能性が高い。微高地の上面の標高は241cm，「島状高まり」は243cmで，水田面より16～18cm高い。調査区南端部の溝—179は幅40～50cm，深さ20cmで，洪水砂が埋まっていて，水田に伴っていたことは確実である。この溝より南は一段高くなっているが，中世以後の削平を受けているため，この段に水田があったかどうかは確認できない。水田面と上の段の上面とでは14cmの差があるが，上の段が中世以降に削平されていることを考えれば，開田にあたってはかな



第474図　弥生時代後期水田細部（調査区南端・溝—179）（1/150）



第475図　中世遺構（1/500）

うこともできそうであるが，土層観察からは判断できなかった。北の土壙は長径150cm，深さ６cm，北から二番目の土壙は長径163cm，深さ７cm，東の土壙は長径180cm，深さ５cmを測る。中央の土壙は長径169cmと200cmの大小２基の土壙が重なっている。深さは14cmである。埋土から中世と判断される。

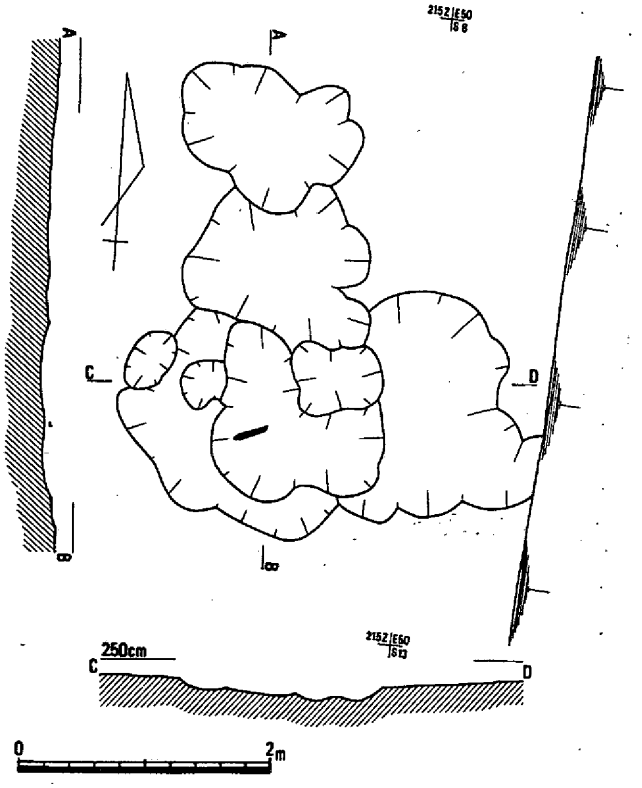
りの削平がなされたと考えられる。当調査区においてみられた階段状の水田は水に対する周到な配慮を窺わせる。

3．古代・中世の遺構・遺物

遺構については古代に属するものは検出されず，中世のものとして土壙が２基存在したのみである。遺物については古代以降のものが包含層中から出土しているが，遺構に伴う形では出土していない。

土　壙—89（第476図，図版203）

４区で検出された。４～５基の土壙が集合したような形をなし，壙底は凹凸に富んでいる。南北長で378cm，東西長は310cmを測る。細かくみれば南北に３基，東西に２基の土壙が連続しているようにも考えられ，次々と掘り直されたとい



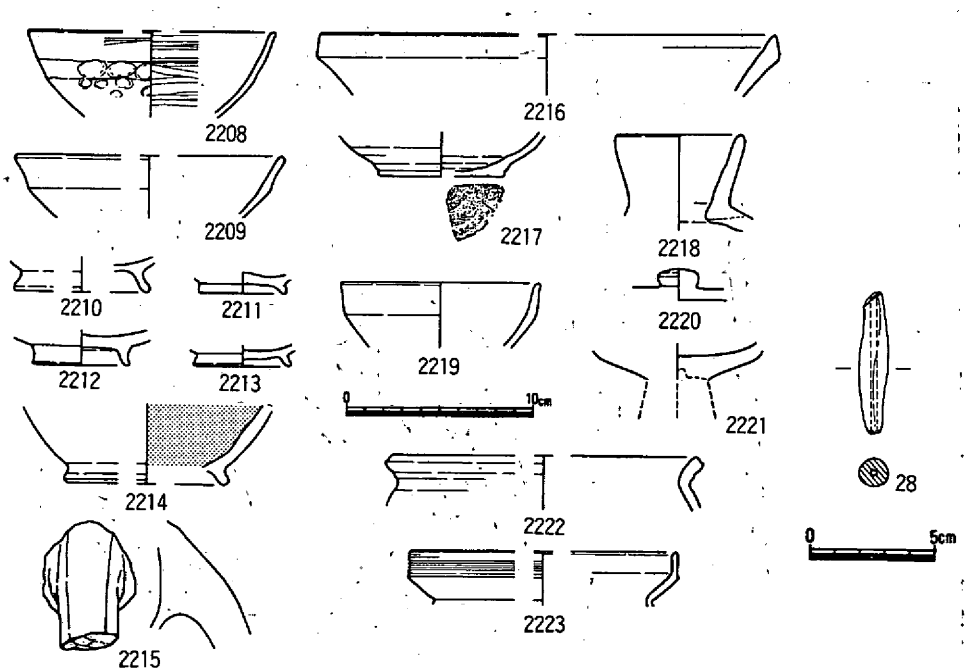
第476図　土壙—89（1/60）

土　壙—90（第475図，図版203）

3区から4区にかけて検出された長方形の細長い土壙である。南北22m，東西2.5mで，深さは8～10cmにすぎない。底面は5cm程度の凹凸はもつが，ほぼ平坦である。南西隅に不整形な落ち込みを2基もつ。1基は長径215cm，深さ20cmで，隣の土壙と接する部分がもっとも深い。もう1基は長径167cm，深さ26cmである。どちらの底も長方形土壙の底より深い。この土壙—90の性格であるが，その形状から水田の痕跡ではないかと考えたが，なんらその根拠を得ることができなかった。不明と言わざるをえない。

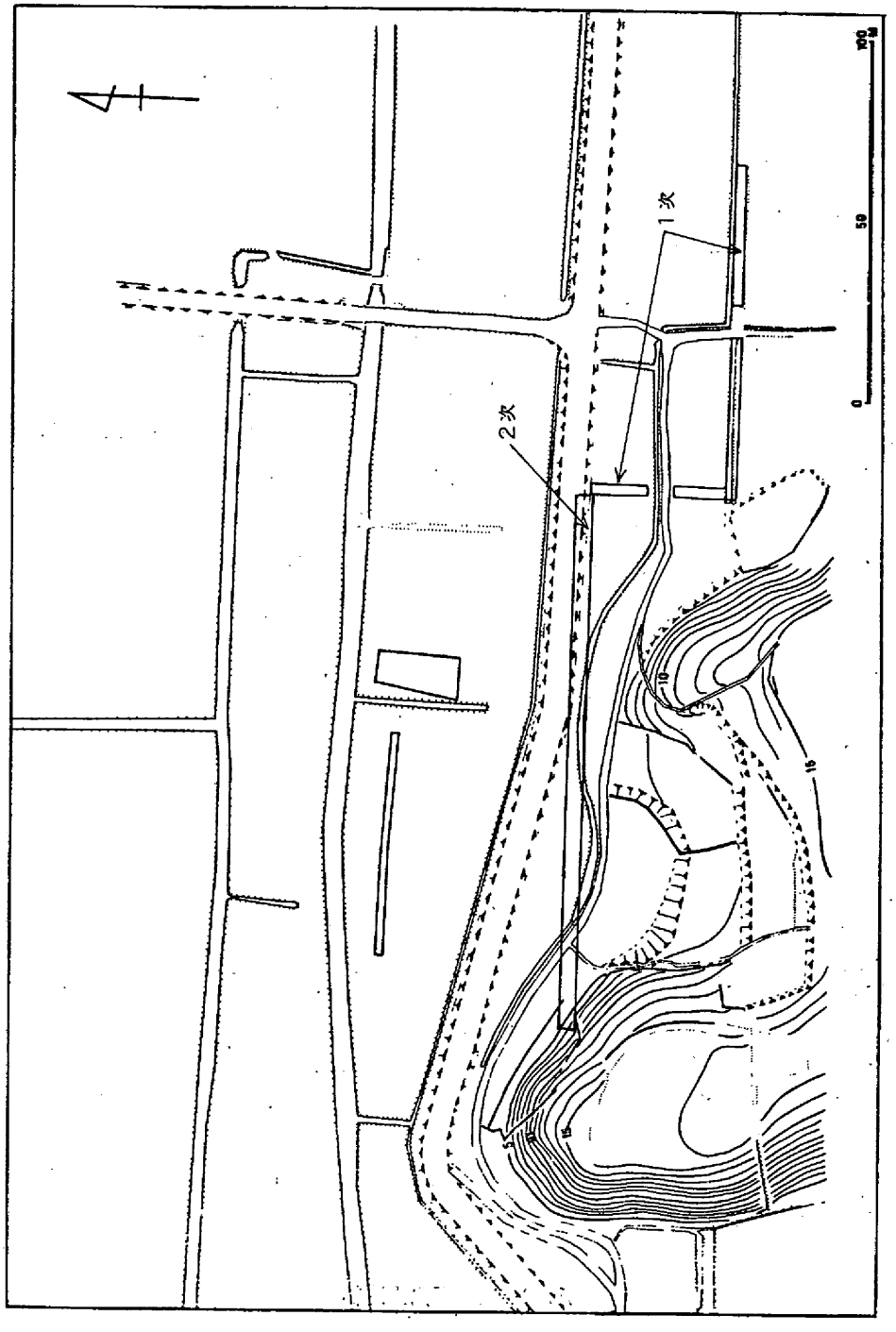
包含層出土遺物（第477図）

第477図に示した土器はいずれも灰色粘土層と通称している土層から出土したもので，第463図の19～19″の層がそれにあたる。さらに細かく言えば；**2218**・**2221**・**2222**・**2223**は19″の層から出土している。**2208**は瓦器である。内面には間隔のある暗文が施され，外面は下半に指頭圧痕，上半に暗文がかすかに残っている。**2209**～**2213**は早島式土器と呼ばれる土師質椀形土器である。高台の高さには変化がある。**2214**は黒色土器である。高台は角張り，ふん張る。**2215**は三足土鍋の脚片である。**2216**はこね鉢の口縁破片である。灰白色を呈し，口縁外面のみ灰色になっている。**2217**の底部は回転ヘラ切りである。**2218**～**2220**は須恵器で，古墳時代のものである。**2221**～**2223**は土師器片で，高杯形土器と甕形土器である。**2222**は胎土に砂粒・細砂を多く含み，にぶい橙色の色調で，口縁部はヨコナデする。土錘が1点出土している。　（岡本）

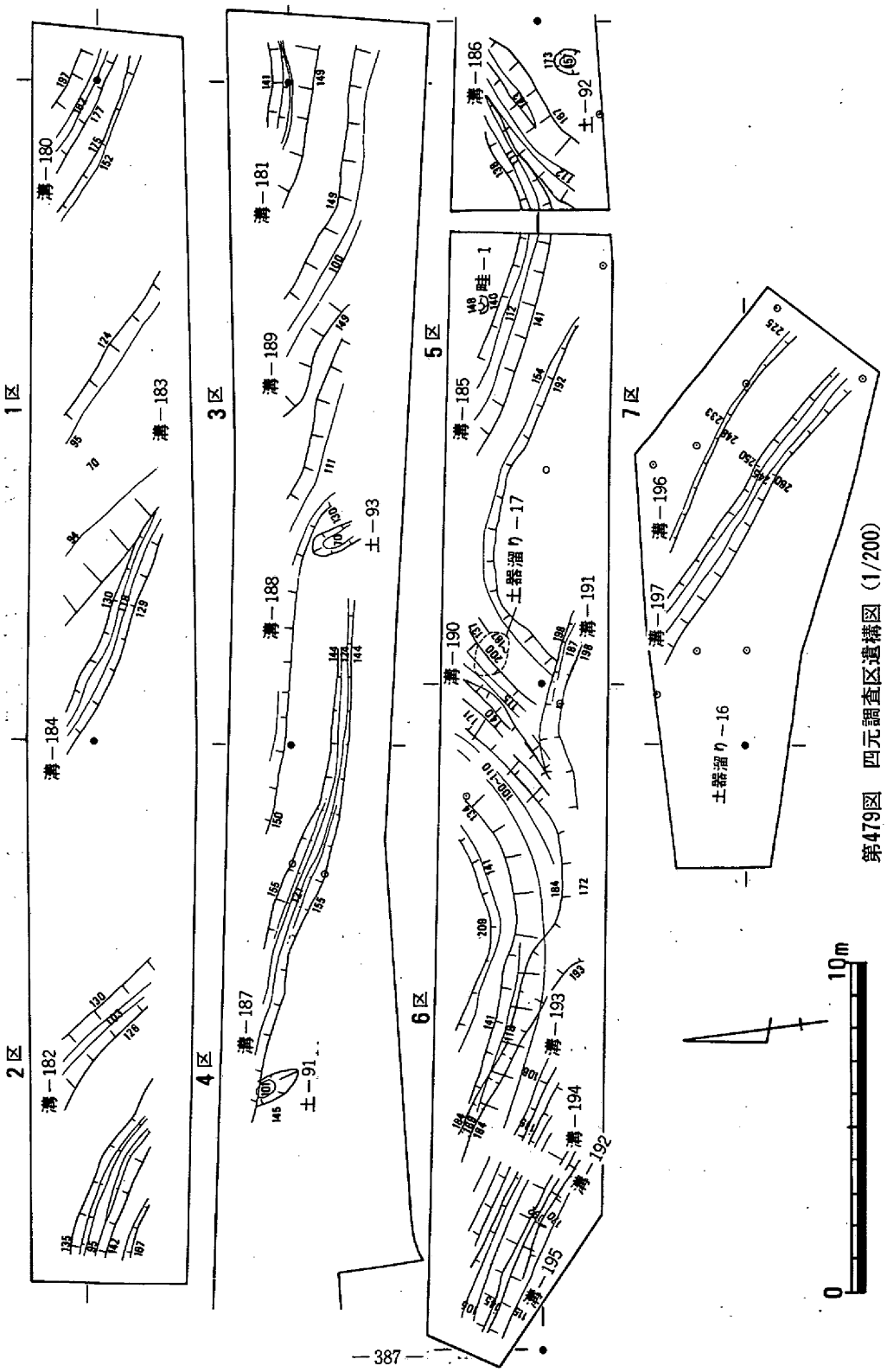


第477図　包含層出土遺物

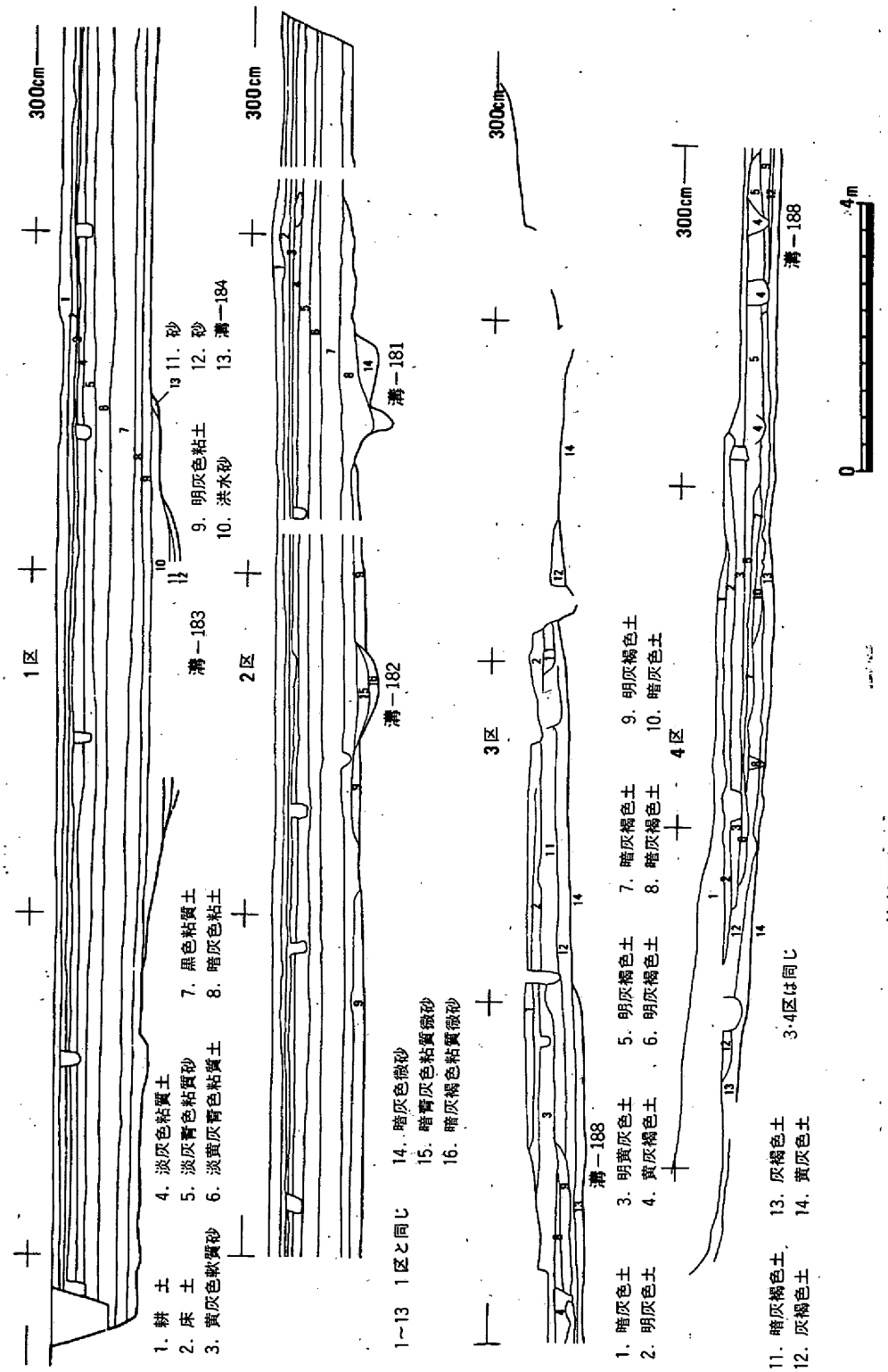
第６節　四元（よもと）調査区



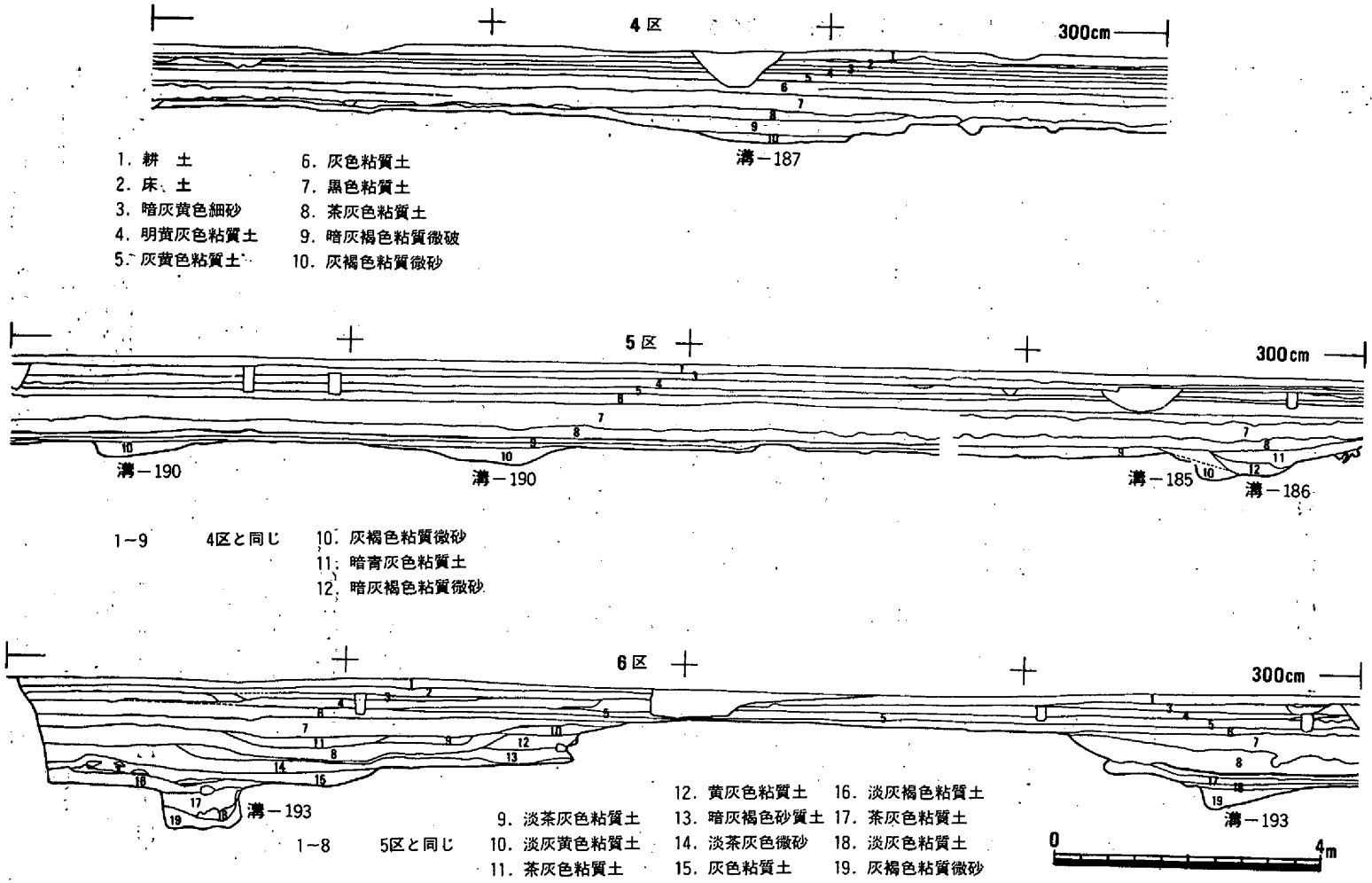
第478図　四元調査区位置図（1/2,000）



第479図　四元調査区遺構図（1/200）



第480図　四元調査区１～４区土層断面（1/100）



第481図　四元調査区4～6区土層断面（1/100）

1. 四元調査区の概要

この報告は当初沢田第2散布地と呼称していた地域の右岸用水路部分の第2次調査分だけのものである。すでに第1次調査区は百間川沢田遺跡として第2分冊に報告されている。(岡山県教委「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」46・1981

今回の調査区は南に操山丘陵を接し，西端は丘陵につき当る。全長150m・幅5m・面積750㎡を測る。調査は4分割して実施し，20m毎に小区を設定して東から順に1区・2区・～7区と呼んでいる。全体図は4分割したものを載せた。

調査期間は昭和56年7月～同年9月の3カ月間である。この間谷水と酷暑に悩まされる。

調査者は文化財保護主事浅倉秀昭と主事内藤善史である。

検出できた遺構は溝18本・土壙3基・土器溜り2カ所・畔状遺構1個の合計4種類24個である。これを時期別に見ると弥生前期では土器溜り1カ所，弥生後期では溝9本・畔状遺構1個・土壙3基，古墳前期では溝7本・土器溜り1カ所，中世では溝2本となる。

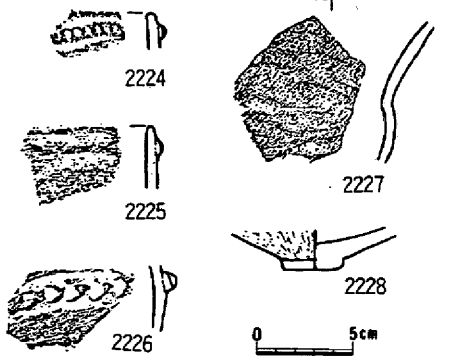
出土遺物は土器としては縄文晩期・弥生前期・弥生中期・弥生後期・古墳前期・中世のものが見え，全出土量は整理箱に12箱ある。最も多いのが弥生前期土器で6箱ある。石器としてはサヌカイト打製石鏃4点・同スクレーパー2点・叩石1点・投弾2点等が見える。土錘は2点どちらも溝中から出土している。

以下時期別に遺構・遺物を概説する。

第482図　四元調査区全体図（1/1,000）

2. 縄文時代晩期の遺物

本調査区では数点の縄文晩期土器片が古墳時代以前と考えられる溝の埋積土中から発見されている。図示したのは比較的大き目の破片で5点ある。**2224～2226**は口縁部に刻み目突帯を一条貼り付けた鉢形土器で，**2224**の口縁はやや波状を呈している。**2227**は外面に削痕・内面に磨きのある鉢形土器の体部。**2228**は外面削痕のある鉢底部。(浅倉)

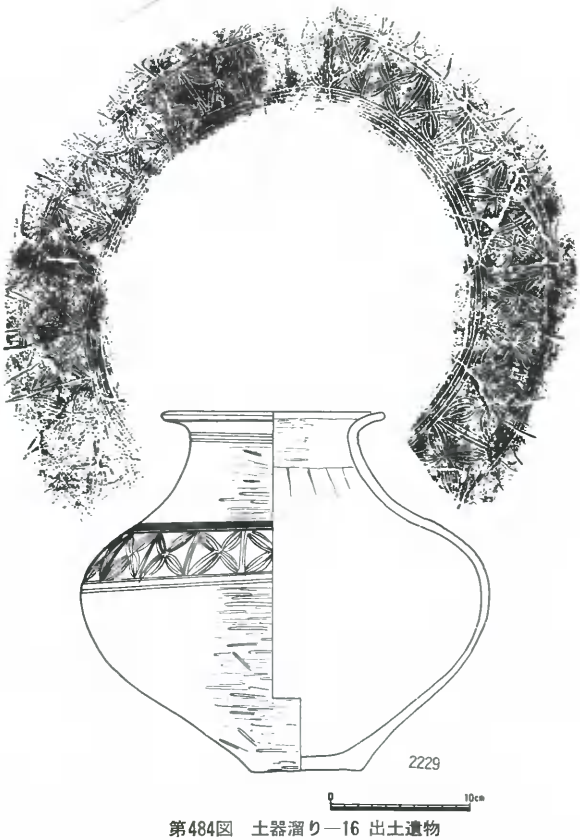


第483図　縄文時代晩期土器

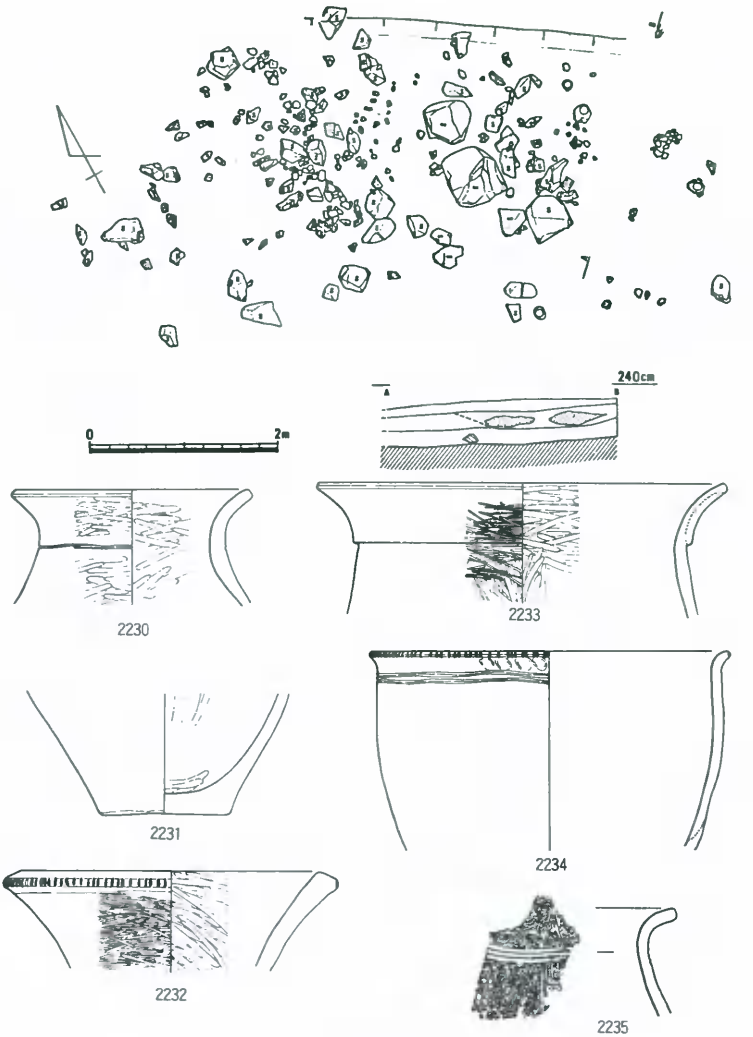
3.　弥生時代前期の遺構・遺物

土器溜り—16

7区の西半部，西から南にかけて丘陵を背負った海抜200cm前後の青灰色土層中に，60cm前後から10cm前後のものまで大小さまざまな多くの角礫と伴に遺物（第484～486図）が出土している。住居址等の遺構は認められず，状況からみて丘陵側からの流れ込みも考えられるが2229の壺のようにほぼ完型に近く復元できるものもあり，ある程度まとまって出土している。性格等は全く不明である。時期は百・前・Ⅱと考えられる。（内藤）

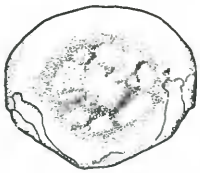


第484図　土器溜り—16 出土遺物

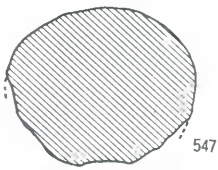


第485図　土器溜り―16(1/60)・出土遺物

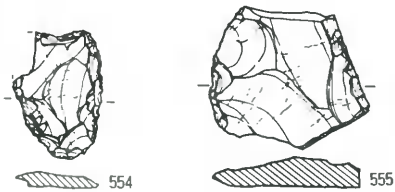
7区　茶褐色砂



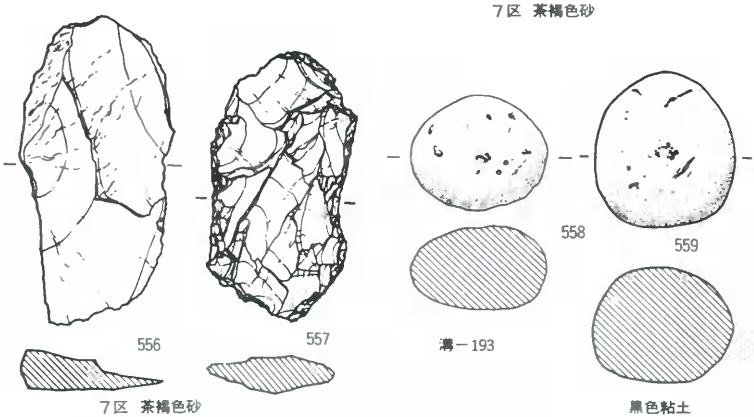
7区　茶褐色砂



7区　茶褐色砂



7区　茶褐色砂



第486図　7区他出土石器（1/2）

4. 弥生時代中期の遺物

弥生中期の遺構は確実なものは本調査区では見つかっていない。しかし土器はたった一点ではあるが 溝—188から出土している。口縁がくの字形に外反し，体部内外面とも刷毛目調整を行う淡灰褐色を呈する甕形土器片である。

第487図　弥生時代中期土器

5. 弥生時代後期の遺構・遺物

溝—181

２区と３区の境界部分で検出した北西から始って東に蛇行し更に南東に走向する溝である。規模は長さ14ｍ・最大幅120cm・深さ40cmあり，溝底の海抜高は95cmを測る。断面形はＶ字形を呈する。遺物は全く見えない。時期は土層から弥生後期以前と考えられる。図上から溝—193との関連が強い。

溝—183

１区のほぼ中央部で溝—180の西に検出した北西から南東に走向する溝である。規模は長さ５ｍだが幅が４ｍもあり，深さは60cmを測る。断面形はＵ字形を呈する。溝底の海抜高は70cmを測り，この調査区内で最低である。土器は縄文晩期を含むけれど埋没時期は洪水砂によって埋っていることより弥生後期の水田と同時期と考えられる。

溝—184

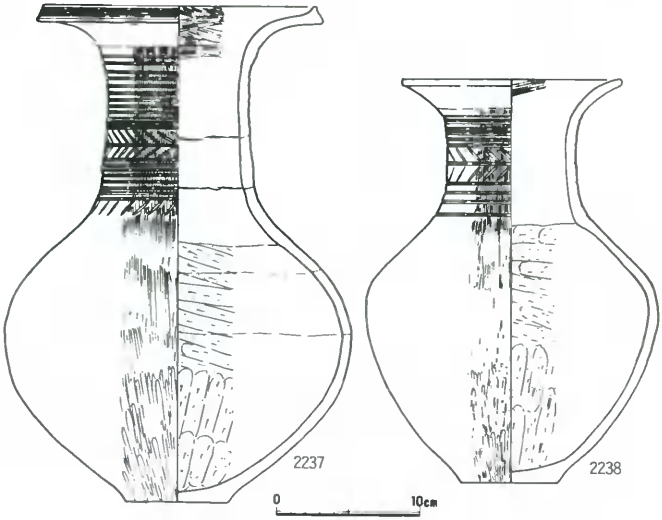
１区の西・溝—183の西で検出した西北西から東南東の走向を見せる溝である。規模は長さ８ｍ・幅80cm・深さ12cmを測り，浅いのが特徴である。溝底の海抜高は118cmを測る。断面形はＵ字形を呈する。遺物は全く見えない。時期は溝—183より古いことが切り合いで分る。

溝—185

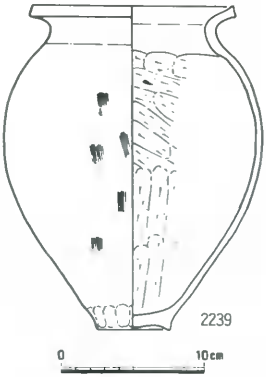
５区の中央部で検出した西北西から東南東へ走り，大きく弓状に曲折して北東へと走向する溝である。断面形はＶ字形を呈する。規模は長さ11ｍ・幅100cm・深さ30cmあり，溝底の海抜高は111cmを測る。遺物は見えない。溝—190と同じ溝であることが図上で読み取れる。時期は土器溜り—17と溝—190との関係から弥生後期と考えることができる。

溝—187

４区中央部から３区西部にかけて検出した西北西より東南東にわずかに蛇行を見せて走向する溝である。規模は長さ16ｍ・幅100cm・深さ35cmを測る。溝底の海抜高は120cmを測る。断面形はＶ字形を呈する。溝中央部分に土器溜りが検出できた。遺物はこの土器溜りのものが全て



第488図　溝—187出土遺物

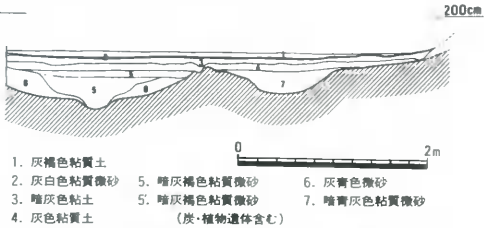


第489図　弥生時代後期土器

で，復元してほぼ完形になった長頸壺形土器が2点ある。この溝の埋没時期は土器の形態から見て，百・後・Ⅱと考えられる。

溝—188

3区の西端・溝—187の北東で検出した溝—187にほぼ平行する溝である。断面形はV字形を呈する。規模は長さ15m・幅120cm・深さ40cmあり，溝底の海抜高は111cmを測る。遺物は弥生中〜後期の土器片が見える。図上から溝—185



第490図　溝—190・193　(1/60)

との関係が最も近いと思える。時期は土層から弥生後期と考えたい。

溝—190

５区と６区の境界部分で検出した南西から北東に走向する溝である。断面形はＶ字形を呈する。規模は長さ５ｍ，幅100cm，深さ25cmあり，溝底の海抜高は115cmを測る。溝—185・194との関連が考えられる。古墳前期土器溜りはこの溝が埋没後水田層の上面に現われる。

溝—193

６区にあって南に大きく弓状に曲った溝である。断面形はＶ字形を呈する。規模は長さ20ｍ，幅200cm，深さ40cmあり，溝底の海抜高は100cmである。溝—181との関連が考えられる。土錘と磨石が出土している。時期は土錘と土層から弥生後期に比定したい。

溝—194

６区の西端にあって溝—193の南に平行して走る断面Ｖ字形の溝である。規模は長さ６ｍ，幅120cm，深さ40cmあり，溝底の海抜高は105cmを測る。溝—185・188・190と同じ溝と考えることができる。遺物は全く見えない。時期は溝—190からみて弥生後期に比定したい。

土　壙—91

４区中央部で検出した長楕円形の平面形をもつ土壙である。規模は長さ160cm以上，幅75cm，深さ44cmあり，土壙底の海抜高は101cmを測る。長軸はほぼ南北になる。底部及び傾斜面には炭が一面に付着している。それ以外遺物は全くない。時期は溝—187より古いことが判る。

土　壙—92

５区の東端で検出した不整円形の平面形をもつ土壙である。規模は直径80cm，深さ16cmで，土壙底の海抜高は157cmを測る。遺物は全く見えない。時期は土層関係から弥生後期に比定する。

土　壙—93

３区の西方・溝—188の南で検出した長楕円形の平面形をもつ土壙である。規模は長さ140cm以上，幅70cm，深さ60cmあり，底の海抜高は70cmを測る。遺物は出てない。時期は溝—187との切り合いからより古いと考えられる。

畦—１

５区のほぼ中央部・溝—185の北側にわずかに検出できた。黄褐色の地山が削り出されたもので，長さ20cm，幅50cm，高さ６cmを測る。上層に水田層らしき土層が見られないが，この付近まで水田が存在しても良いと思われる。

６．古墳時代の遺構・遺物

溝—180

１区の東端で検出した北西から南東に走向する溝である。規模は長さ４ｍ，幅110cm，深さ

25cmあり，溝底の海抜高は162cmを測る。断面形はU字形を呈し，溝底はやや南側に片寄っている。遺物は全く見られない。時期は土層断面の観察により古墳前期以前と考えられる。

溝—182

2区の西・溝—181の東で検出した北西から南東の走向を見せる溝である。規模は長さ4m，幅100cm，深さ27cmあり，溝底の海抜高は103cmを測る。断面形はU字形を呈する。縄文晩期・弥生前期土器片と土錘が出土しているが，土層と土錘から見て古墳前期と考えたい。

溝—186

5区の東端・溝—185の東で検出した南西から北東へ走向する溝である。断面形はV字形を呈する。規模は長さ5m，幅160cm，深さ55cmあり，溝底の海抜高は112cmを測る。溝—189・195と同一の溝ではないかと図上から考えられる。溝—185を切っているのでそれより新しいことが判る。遺物は全く見えない。時期は古墳前期に考えたい。

溝—189

3区中央部から東部にかけて検出した溝—188に平行して走向する溝である。断面形はU字形を呈する。規模は長さ11m，幅160cm，深さ50cmあり，溝底の海抜高は100cmを測る。図上から溝—186・195との関連が強いように見える。土器は縄文晩期を含む。時期は土層から古墳前期と考えたい。

溝—191

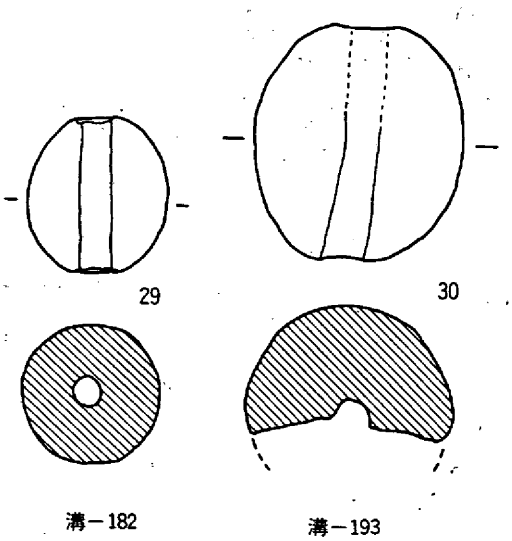
5区と6区の境界部分で検出した東西に走向する溝である。規模は長さ6m，幅60cm，深さ11cmあり，溝底の海抜高は187cmを測る。溝—192との関連が考えられる。時期は土層から古墳前期に比定したい。

溝—192

6区の西端で検出した西北西から東南東に走向する溝である。規模は5m，幅不明，深さ18cmあり，溝底の海抜高は170cmを測る。溝—191との関連が考えられる。遺物は全く見えない。時期は土層から見て古墳前期に比定する。

溝—195

6区の西端にあり，溝—194の南に平行して走向する断面V字形の溝である。溝—192の下層で検出できた。規模は長さ6m，幅不明，深さ30cmあり，溝底の

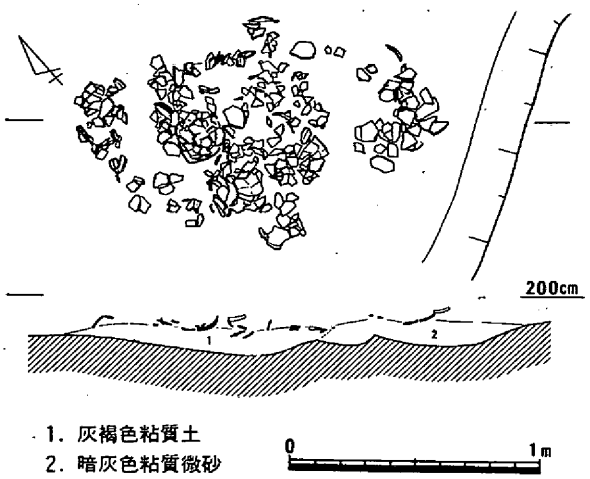


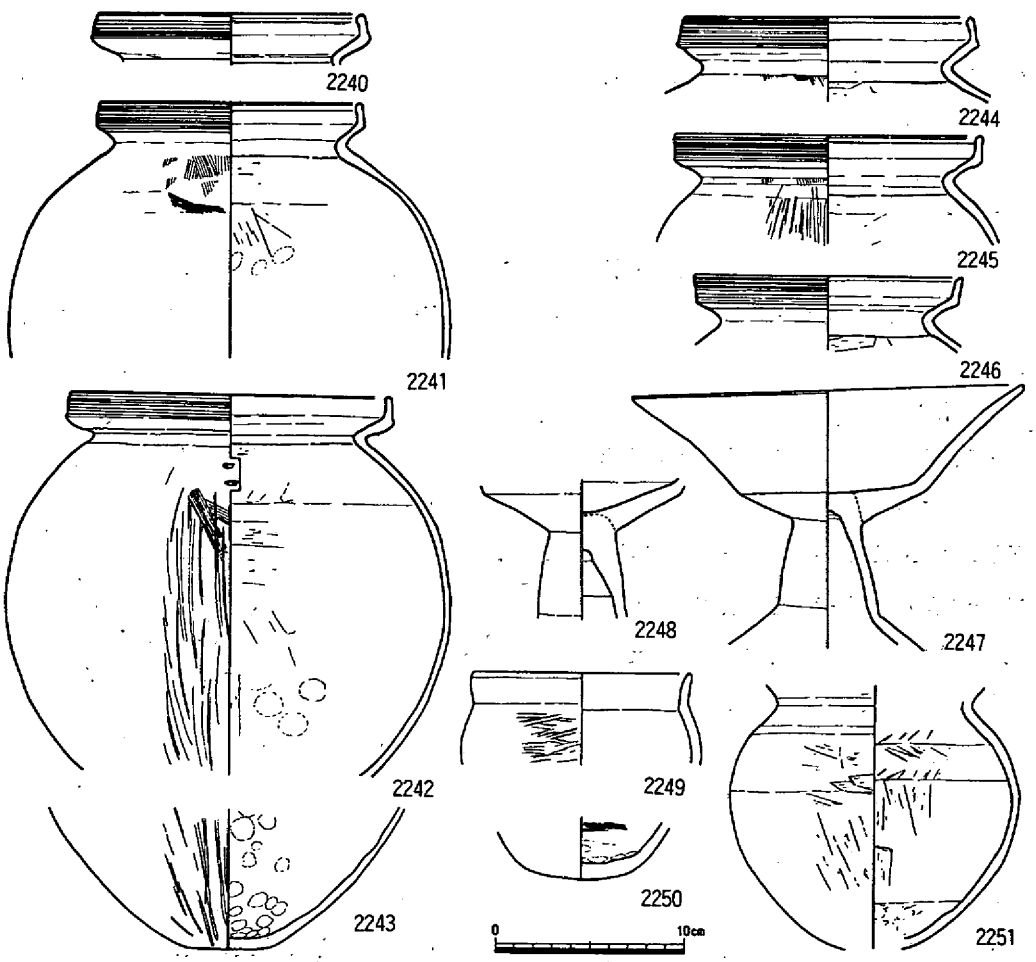
第491図　溝出土土錘（1/2）

海抜高は115cmを測る。遺物は全く見えない。図上から溝―186・189と同一の溝と考えられる。時期は土層から見て古墳前期に比定したい。（浅倉）

土器溜り―17（第492図）

５区の北西端６区との境近くで検出された土器溜りである。南側の丘陵からのびた微高地が溝-190に向って一段下がった海抜190cm前後の灰褐色粘質土層中で，150





第492図　土器溜り―17（1/30）・出土遺物

×100cmの範囲にかなりまとまった形で土器が出土している。図示できたものは甕・高杯など12点である。

時期は，百・古・Ⅰと考えられる。　（内藤）

7.　中世の遺構・遺物

溝—196（第479図）

7区ぼのほ中央部・発掘区の東端で検出した浅い溝である。北西から南東に走向する。長さ8m・幅不明・深さ20cm・溝底の海抜高225cmを測る。遺物は中世の土器細片が出土している。このことから埋没時期は中世と考えたい。

溝—197（第479図）

7区にあって溝—196と平行する溝である。長さ10m・幅90cm・深さ15cm・溝底の海抜高245cmを測る。遺物は中世の土器細片が出土しているため溝の埋没時期は中世と考えたい。

8.　四元調査区小結

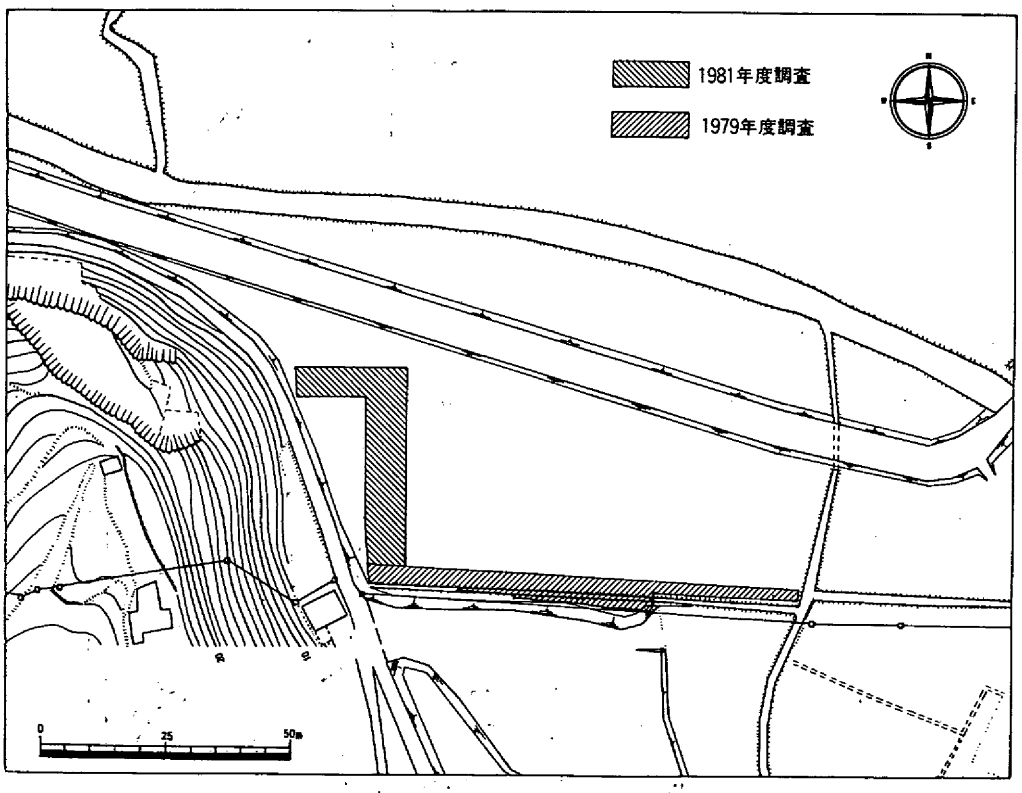
本調査区を概観してみると，遺構では弥生後期〜古墳前期の溝が注目され，遺物では弥生前期の土器・石器が目立つ。ここでは溝について若干の考察を行って見たい。中世の溝2本を除く16本の溝のうち確実に時期の限定できるものは遺物の出土から溝—187が唯一である。その他の溝は遺物が出土しているけれど時期を断定するほどのものではない。そこで時期をある程度比定するために図上における溝の関連を推定してみた。その結果を以下示すと，溝—181と193，溝—185と188・190・194，186と189・195，191と192の4組が最も関連が強いと考えられる。したがって16本の溝は9本にまとめることが出来そうである。9本の溝はそのほとんどが地形に沿った形で蛇行し，おそらく現水路のように西から東へと流走し，水田灌漑用水路として機能したものであろう。また，溝—190と193の土層断面図を見ると，いわゆる弥生後期の水田層と考えられる土層の下部にこの2本の溝が位置していることが判るから，溝—181・185・188・194も弥生後期以前とすることが可能である。なお前回報告の溝との関連は十分な検討を加えていないのでここでは述べられない。　（浅倉）

第4章　百間川長谷遺跡

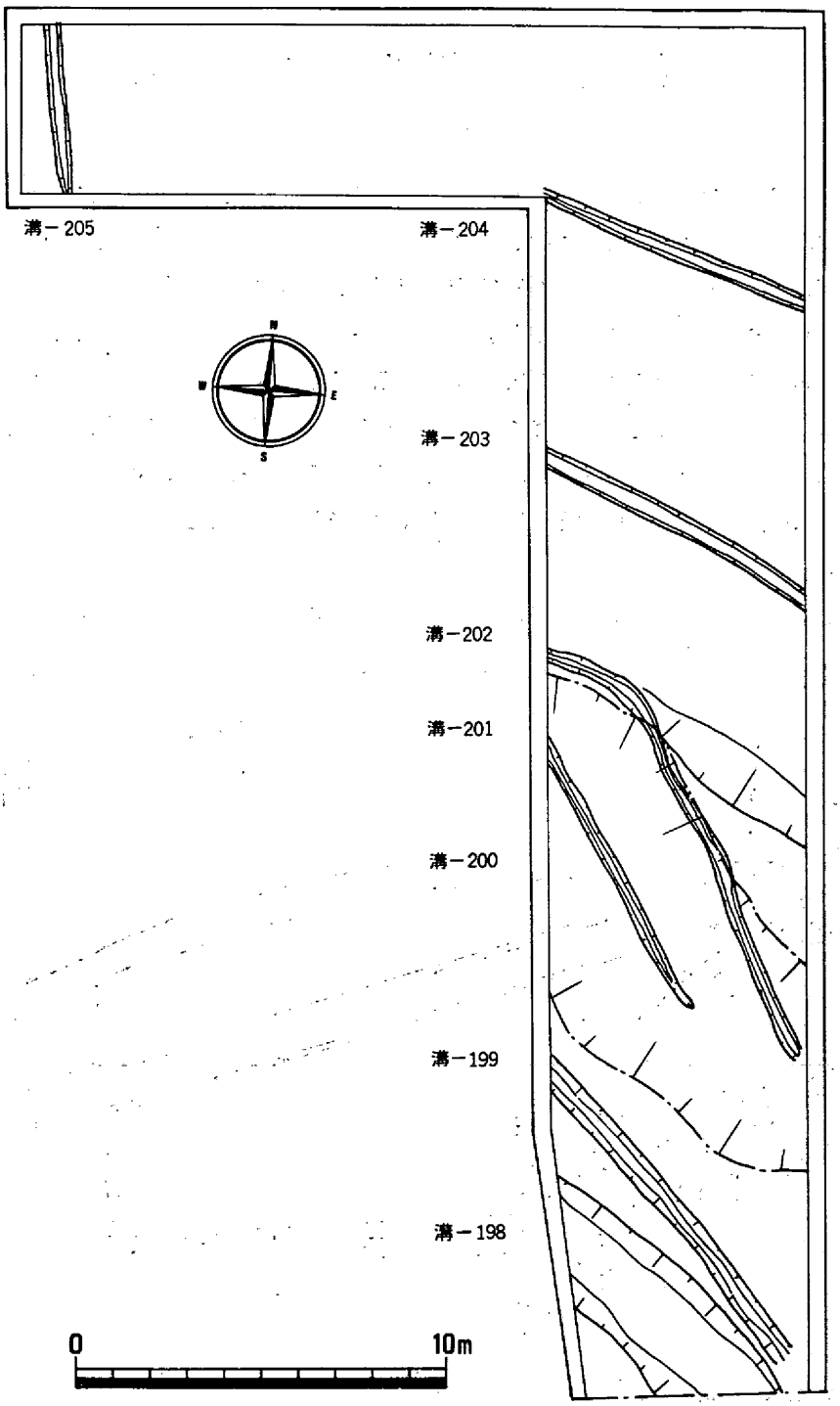
百間川長谷遺跡は，岡山市今谷に所在する。遺跡の背後には，操山山塊が連なり，その山塊から東に派生する尾根と尾根にはさまれた東向きの谷部の低地に遺跡は立地している。谷部の東側前面には，百間川が流走し，さらには旭川東岸に広がる沖積地が続く。

遺跡の立地する低地周辺には，条里制の痕跡が見られるが，遺跡の近辺，及び北西部においては，条里の乱れが認められる。その乱れは，北西から南東へ帯状に続くもので，条里制に規定されない河川の存在を示すものである。その旧河川は，遺跡の西側の丘陵の先端をかすめて，谷部に大きく曲折しながら入りこみ，さらに遺跡東側の岩間丘陵にぶつかる。そのため，この付近には条里の施行される頃は河川内もしくは，それに伴う低湿地が広がっていたと考えられる。

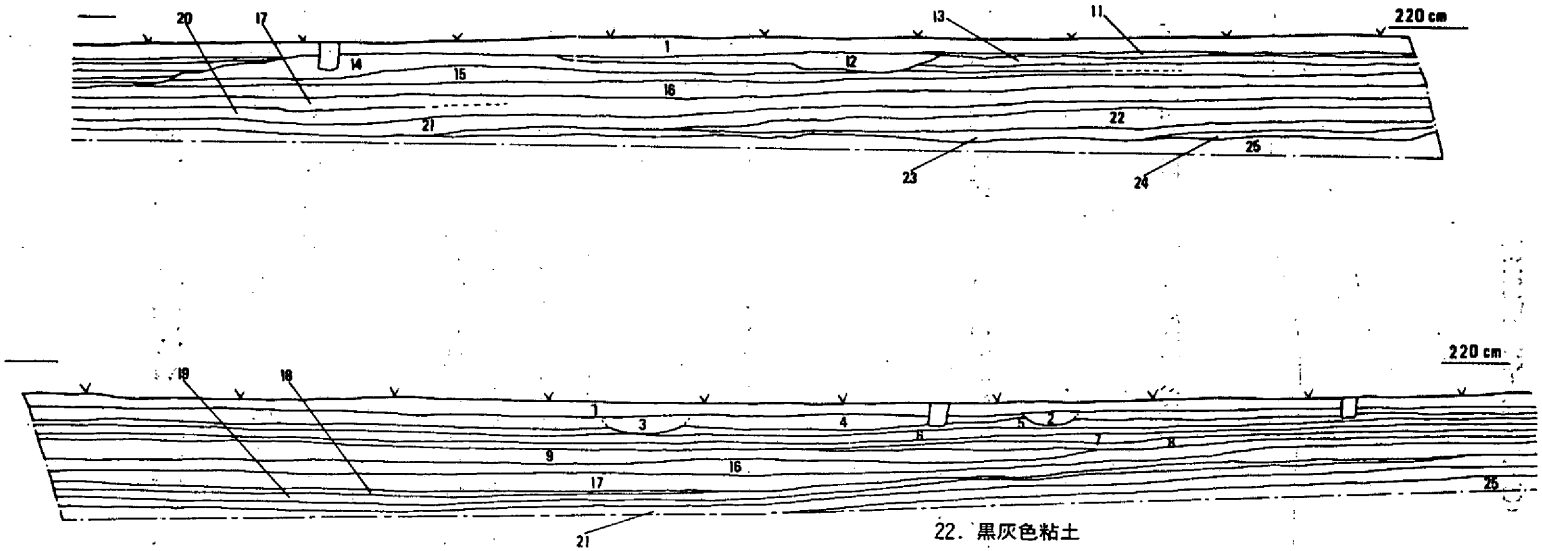
この百間川長谷遺跡は，昭和52年度の確認調査の結果に基づき，昭和53年度に右岸用水路部



第493図　長谷遺跡調査位置図（1/1,500）



第494図　長谷遺跡遺構配置図（1/200）



1. 耕　土
2. 茶灰褐色粘質土(溝－203)
3. 淡茶灰褐色粘質土(溝－204)
4. 茶灰褐色砂泥
5. 淡黄灰色砂土
6. 淡茶灰色砂土
7. 淡茶灰色砂泥
8. 淡茶褐色砂土
9. 茶灰褐色砂泥
11. 黄褐色粗砂
12. 明褐色微砂粘土
13. 淡灰褐色微砂粘土
14. 明黄褐色微砂粘土
15. 明茶褐色微砂粘土
16. 黄褐色砂
17. 淡青灰色粘土
18. 茶灰色砂泥
19. 茶褐色ピート質粘土
20. 暗黒灰色粘土
21. 暗茶褐色ピート
22. 黒灰色粘土
23. 暗黒灰色粘土
24. 暗灰色粘土
25. 暗茶灰色ピート質粘質土

第495図　東壁土層断面（1/100）

分の調査が実施され，平安時代から鎌倉末～室町初頭にかけての，水田址，建物，溝などを確認している。

第１節　樋門及び右岸用水路調査区

この調査区は，南から延びる丘陵先端部の東側山裾部にあたり，昭和53年度調査を実施した右岸用水路の西端部から北側に取り付く樋門部分と樋門から西へ続く右岸水路部分である。

調査区は，樋門部分が幅８ｍ，長さ約38ｍ，右岸用水路部分は，幅約5.5ｍ，長さ約14ｍを設定した。

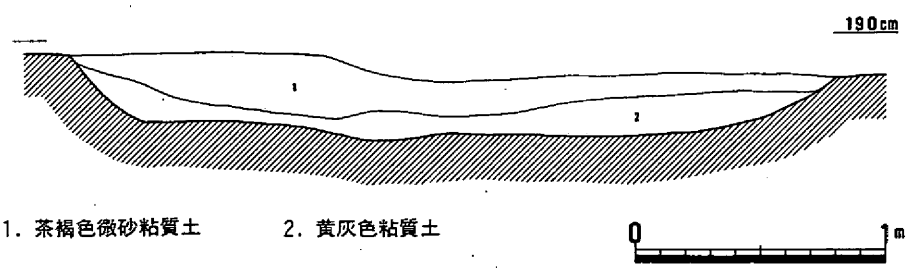
調査の結果，地形は全体に北西へ緩やかに傾斜している。樋門中部には，さらに段差をもった落ちが認められ，この段差より南側～東側に丘陵の裾部から続く比較的安定した地形が存在するものと思われる。今回検出した遺構は，溝７本で，その大部分は傾斜面に平行して確認されたものである。これらの溝からは，多量の出土遺物を出土したものもあるが，その大半は出土遺物が認められなかった。

出土遺物は，平安・鎌倉時代の須恵器，土師器を中心に，緑釉，白磁，青磁などが出土している。また，下層で弥生時代中期，古墳時代の土器を含む包含層が確認されたが，遺構の存在は認められなかった。

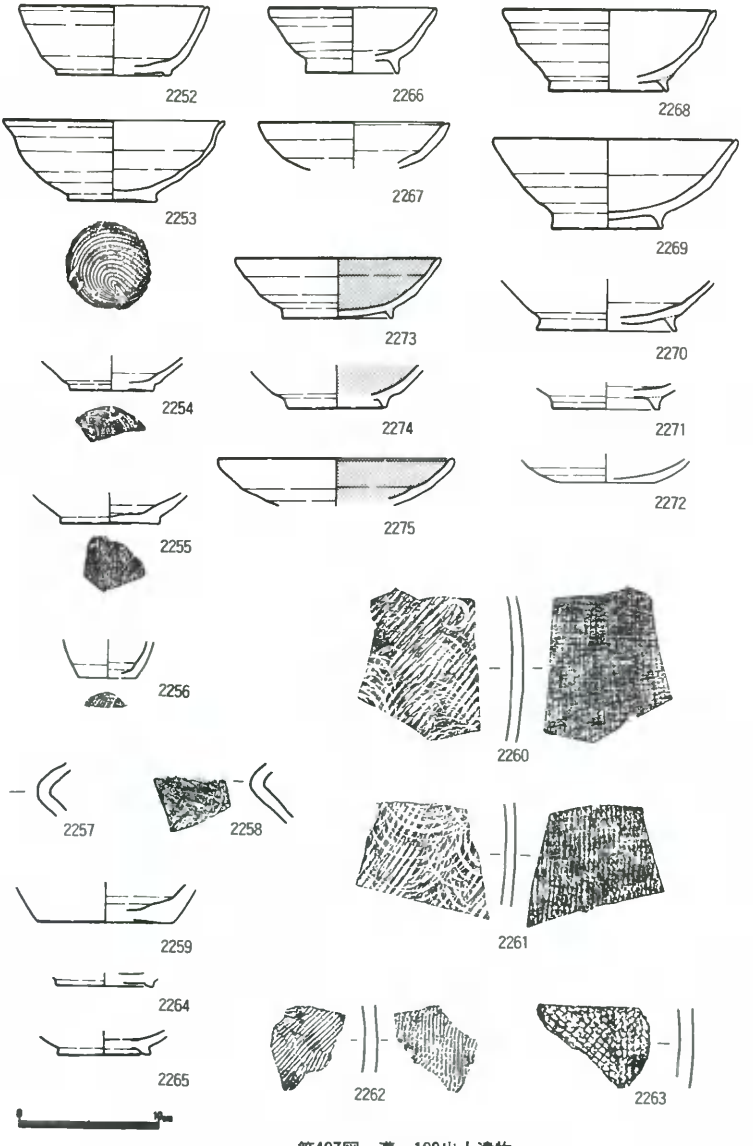
溝―198（第496図）

この溝は，調査区の南端に検出されたものである。溝は，幅約300cm，深さ約30cmを測り，南東～北西方向に検出された。前回調査で検出された溝―２の続きのものと思われる。溝内には，上層に茶褐色微砂粘質土，下層に黄灰色粘質土の２層が堆積しており，出土遺物は下層に多く包含していた。

出土遺物は，今回検出した溝の中で唯一，多量の土器が出土した。しかしながら土器片は小片が多く図示できるものは少なかった。土器は，須恵器（**2252～2263**），土師器（**2266～2272**），黒色土器（**2273～2275**），緑釉（**2264～2265**）などが出土した。**2256**は，小型の壺と考



第496図　溝―198（1/30）



第497図　溝一198出土遺物

えられるが底部にはヘラ描きがあり，「＋」の字の一部と思われる。2260，2261は，外面に叩きを施し，内面を同心円の叩きののち，さらに平行叩きを施すという特徴的な調整を行なっている。これらの土器は，その特徴からみて平安時代後半の11世紀後半〜12世紀初頭と考えられる。

溝—199（第498図）

溝—198のすぐ北側に検出された溝である。検出面は，溝—198より上層で，幅幅約70cm，深さ約15cmを測る。この溝は，前回調査の溝—2の続きと考えられる。

出土遺物は，ほとんどなく平安末〜鎌倉時代の土器が少量出土した。

溝—200（第495図）

樋門部の中央に存在する傾斜面の高位部際に検出された。溝は，傾斜面の落ちとほぼ平行の北北西〜南南東方向に流走する。規模は，幅約600cm，深さ25cmを測るが，肩部は明瞭でなく，底部も凹凸が激しい。

出土遺物は，須恵器，上恵器が少量検出された。土器は，いずれも平安時代後半，鎌倉時代のものである。

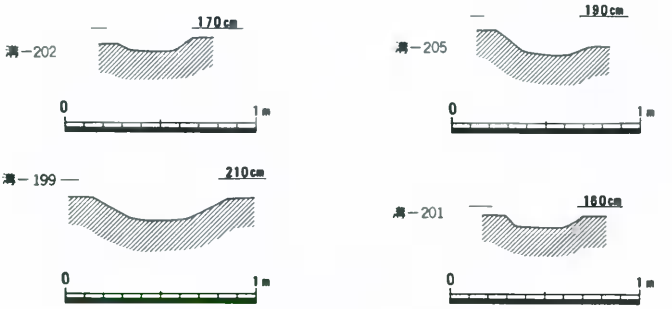
溝—201（第499図）

溝—200の下層に検出された。幅約40cm，深さ8cmの小規模なものである。方向は，溝—200と同様に北北西〜南南西を示すものである。

出土遺物は，全く認められなかったが層位的に平安時代後半，鎌倉時代の後期と考えられる。

溝—202（第499図）

この溝は，溝—200の下部に検出された。溝は，東側では溝—200と平行の北北西〜南南東の



第498図　溝—199・201・202・205（1/30）

方向に，さらに北側で西方向に曲がっていく。規模は，幅約40cm，深さ約10cmと溝一200と同様なものである。時期についても，出土遺物はないものの溝—200と同時期のものと思われる。

溝—203（第495図）

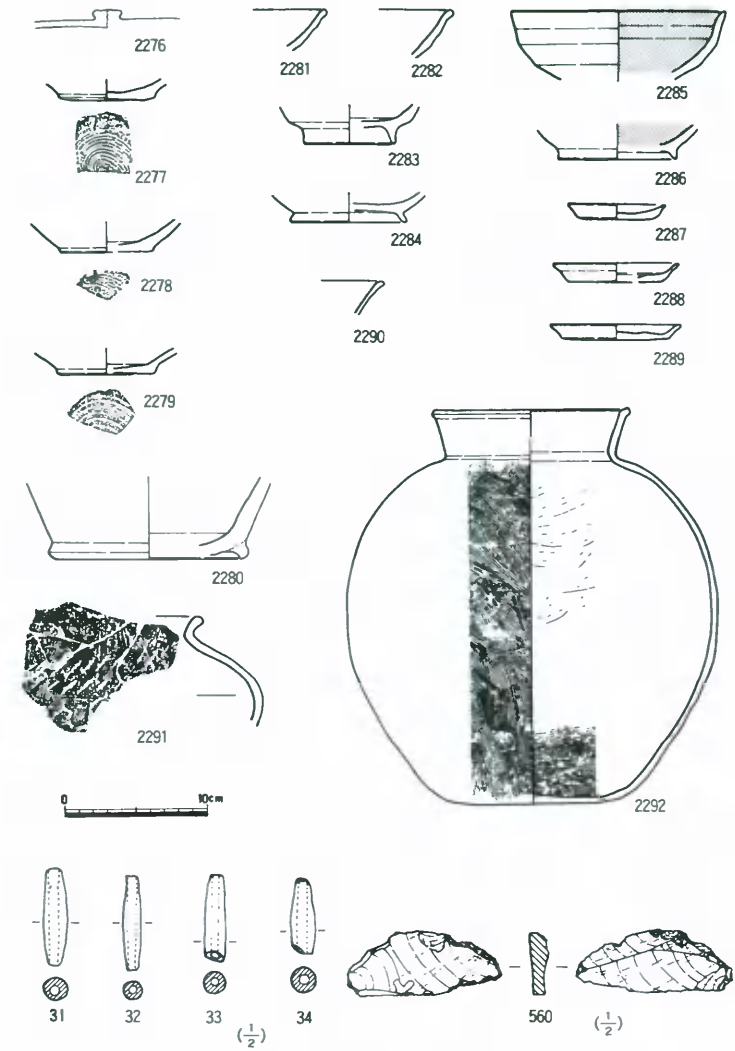
樋門部中央のやや北寄りに検出された。溝は，傾斜面の落ちと平行で南東〜北西の方向である。規模は，幅約30cm，深さ約20cmを測る。出土遺物は，土師器の少片を数点検出したが，時期を限定できるものではなかった。

溝—204（第495図）

この溝は，溝—203の北側に溝—203とほぼ平行に検出された。規模は，幅約40cm，深さ約15cmで溝—203と同様に小規模なものである。出土遺物は全く認められなかった。溝は，溝—203と約300cmの間隔で平行に存在，さらに規模も同様なことから考えて，両者の溝は同時期に存在したと思われる。

溝—205（498図）

用水路部の西端に検出された。この位置は，西側に存在する丘陵山裾から低位部に移行する接点と考えられ，この溝の上部には現代溝と思われ南北方向の溝が数条確認されている。規模は，幅約45cm，深さ約15cmを測る。出土遺物は，全く認められなかった。



第499図　包含層出土遺物

第5章　ま　と　め

第1節　百間川沢田遺跡発掘調査概要

岡山平野には，弥生時代の遺跡が多数分布していて，工事などにより，遺構・遺物が発見されることが多かった。しかし，遺跡の実態について詳細にわかるようになったのは，それ程古いことではない。遺構では，古墳などのように外表からでも確認されるものに比べて，集落遺跡は，発掘調査などによらなければその実態がわからないという事情がある。

特に沖積平野においては，現地表面は水田や宅地として利用されていることから調査そのものの事態が難しいものである。百間川の河川敷内では，1960年に鎌木義昌氏らによって発掘調査が行なわれ，弥生式土器を多量に発見している。このように岡山における沖積平野での発掘調査例としては早い方である。その後，現在の国道2号線の工事中に，縄文式土器（縄文晩期）・弥生式土器などが発見されたことから，この地域一帯が「百間川遺跡」として知れわたるようになった。しかし，岡山平野における集落遺跡の状況が判明するに至ったのは，さらに後のことである。

1960年代の後半から本格化した開発事業に伴う事前調査などによって，雄町遺跡・津島遺跡の一部が調査され，竪穴式住居・水田遺構などがわかってきた。さらに，岡山平野の広大な地域に遺跡が分布しているということも知られるようになった。このような動きのなかで，百間川の改修工事が具体化し，それに伴う事前調査が実施されることとなった。したがって，まず遺跡のひろがり，遺構の密度を把握する調査を開始し，それまでわかっていなかった地域からも遺構・遺物を確認することができた。また，長期間継続される発掘調査のなかで，発掘調査における技術の進展もみられた。この調査中，群馬県日高遺跡では弥生時代の水田遺構が発見されている。この頃と同じ頃，「百間川」においても，それまでほとんど気付かれていなかった，単に耕作土を盛り上げてつくっただけの畦畔の水田遺構を検出している。

岡山平野は，旭川が形成した沖積平野であり，多数の分流があり，さらに自然堤防や三角洲を形成し，このわずかに高くなったところに遺跡が存在している。大きな旧河道は高島から雄町を通った東岡山へ抜けるもの，また，高島から関をへて兼基へ至り，操山東部を南下するもの，高島から原尾島周辺に抜けるもの，三野から津島へかけて流れていたものなどがある。これらの河川は時代によって変動したであろうと思われるが，おおむね縄文時代後半から弥生時

代にかけては，かなりの流れをなしていたものであろう。

百間川周辺についてみてみるならば，上流部（原尾島）は砂礫層となり，遺物（須恵器・土師器）を含んではいるが遺構は存在していないことが確認された。県道瀬戸・宿・岡山線（旧国道2号線）の上流，さらに百間川沢田遺跡の中程（高縄手B調査区西端）において確認されたが，いずれも，縄文時代晩期以降，急激に水量が減少し，やがて埋没している。

沢田遺跡内（高縄手A・B調査区）の旧河道は40m余りの川幅の河道で，その両岸は高くなり，竪穴式住居・建物・井戸・土壙・溝などが多数検出されている。上流部の河道についてみれば，河道の下層から，縄文時代晩期の土器・弥生時代の石器・土器・木製品のほか多数の木片が出土している。しかし，今回の調査範囲内において河道を掘り下げることは出来なかったが，掘り下げていれば同様の遺物が出土していたものと推測される。河道は砂や粘土で埋っており，弥生時代前期には，その河道の流れは緩やかなものとなっていたであろう。

沢田遺跡内を流走している旧河道は干物樋門から高縄手，原尾島樋門（竪石調査区）と流れていることも確認されている。百間川沢田遺跡を流走している旧河道も，百間川原尾島遺跡内を流れているものと連続しているものと思われるものである。この旧河道は弥生時代後期に埋没し，その上面には水田遺構がひろがっている。

以上のように，百間川原尾島・沢田遺跡のあたりには，旭川からの分流がいくつも流れ，その両岸の自然堤防，中洲上には集落が立地し，周辺部のやや低くなったところには，水田遺構がひろがっている。この景観を変えさせたものは，弥生時代終末の時期におこった大洪水である。一瞬にして，水田・用水路などは洪水砂の下に埋没している。この砂は下流の百間川兼基遺跡の水田をも埋没している。沢田遺跡一帯の洪水砂層は数10cmの厚さであり，以前の凹凸をほぼ平坦なものとしている。その後の遺構は，この上面において形成されているが，生活区域の中心は，かつての自然堤防などの高まりに位置する傾向は何ら変わっていない。

岡山平野が形成された時期は明確ではないが，百間川沢田遺跡高縄手A・B調査区の微高地の斜面部分において，縄文時代後期および晩期の遺構・遺物が検出されている。このことから，既に沖積地が形成されていたことになる。縄文時代の地形は弥生時代の地形とほぼ変わらない状態となっていたものと思われる。

縄文時代の遺物は，各調査区において確認されているが，遺構としては高縄手A調査区の土壙状のものが確認されたのみである。

弥生時代前期の遺構としては，横田調査区において，竪穴式住居・溝・土壙を確認している。高縄手A調査区では，竪穴式住居・溝・土壙を検出している。高縄手B調査区では溝を検出している。溝の中からは多量のサヌカイト片を出土している。竪石調査区では縄文時代後期の土器片が出土しているが，遺構は確認されず，弥生時代前期の遺構も同様である。開山下調査区

においても確認されていない。また，横田調査区・高縄手A調査区で検出された溝は，その流走方向・規模等から同一の溝と思われ，同時代の遺構をとり囲む環濠と考えられる遺構である。

弥生時代中期の遺構・遺物は，横田調査区で水田遺構・溝・土壙が検出された。高縄手A調査区では，溝・土壙が検出され，多数のサヌカイト片も出土している。高縄手B調査区では，溝が検出され，弥生時代後期の水田遺構の下層から弥生時代中期の水田層を確認している。竪石・開山下調査区においては遺構・遺物はほとんどなく，わずか井戸が竪石調査区において検出された。四元調査区では遺構の確認はなく，遺物の出土のみであった。

弥生時代後期は，百間川沢田調査区の6調査区において検出された遺構は溝が大部分である。また少し低くなったところには，水田がひろがっている。干物樋門・竪石調査区の旧河道上においては畦畔が検出されなかったが，いずれにしても水田として利用されていたものと思われる。用水路は，弥生時代前期以降連続して利用されているものもあり，古い用水路が埋没した上層に掘削して利用している。

古墳時代では，すべての遺構を埋めつくした洪水砂層の上に再び生活が展開され，百間川沢田遺跡において，遺構・遺物の特に多い時期であり，初期の遺構が多数検出されている。横田調査区では，竪穴式住居・井戸・溝・土壙等も検出されている。高縄手A調査区においては，竪穴式住居が多数検出され，それも一ケ所に集中するように検出された。その一軒から「ミニ銅鏡」が床面上より検出されている。また井戸も多く検出され，その埋積土中からは多量の土器も検出され，木製品も含まれている。溝も多く，幅，深さとも規模は小さいものである。また，多数の土器溜りもあわせて検出されている。この土器溜りの中から変った土器も出土している。高縄手B調査区では，竪穴式住居・井戸・溝・水田層といった遺構を検出しているが，上流部（高縄手A調査区）に比べて遺構の密度は低い地区であった。竪石調査区・開山下調査区ではこの時期の遺構はほとんど検出されなかった。また四元調査区においては溝が調査区の大部分をしめ，他に土器溜りも検出する。以上のように遺構が検出されているが，遺構の密度は高縄手A調査区が高い。また竪穴式住居については，つくり付けのカマドは検出されない。

出土遺物は，井戸・土器溜りといった遺構から多量に出土している。また溝からは土器・石器のほかに木製品も出土している。井戸の中からは竹製の櫛・石帯等が検出されている。

奈良・平安時代は柵列状遺構・溝が検出され，包含層中より土器片が出土したにすぎない。

中世の遺構は，各調査区において検出され，溝・建物・柱穴列・土壙・墓などがある。溝は条里とされるものも含まれている。柱穴は多数検出されているが，建物にまとまるものは少ない。寛文年間以降，百間川の築堤が行われたことから，水田関係の遺構に限られてくる。

（二宮）

第２節　石　　器

今回の調査で出土した石器は，総数676点を数える。各調査区ごとの出土石器における内分けは，**表—61**に示す通りである。

大部分の石器が，遺構内埋土，遺物包含層など遺構から遊離した状態で出土しているため，遺物・遺構相互の関連から検討を加えるには不十分な資料であると言わざるを得ない。伴出する土器から，これらの石器の所属時期は，高縄手Ｂ調査区縄文時代後期包含層の石鏃を最古とし，以降古墳時代までと考えられるが，主体をなすのは，縄文時代晩期から，弥生時代前期である。

以下では，出土石器を縄文時代と弥生時代以降に分け，各々器種ごとの説明・検討を行う。

（イ）縄文時代の石器

縄文時代の石器は，高縄手Ｂ調査区晩期土器溜り（**土器溜り—13・14**）および，後・晩期包含層から出土している。石鏃，石鏃未製品，石錘，石庖丁形石器，石鍬，砥石，石錐，楔形石器，スクレイパー，石皿，磨石など216点が検出された。打製石器は全てサヌカイトを石材としている。磨製石器は，石皿のほか，石斧もしくは敲石の基部片があるのみで，数量的には乏しい。

石　鏃

後述する弥生時代の石鏃も含めて，基部等の形態によりⅠ類からⅥ類に分類した（註１，２）（**第500図**）。

Ⅰ類……平基式。基部が直線をなすもの。

Ⅱ類……凹基式。基部が内彎するもの。

Ⅲ類……基部に丸みをもつ円基式。

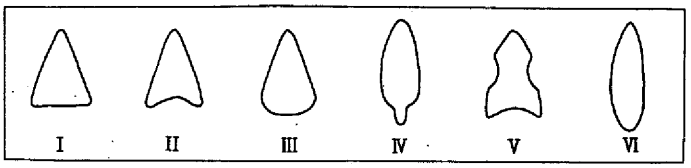
Ⅳ類……基部に茎を持つもの。有茎石鏃。

Ⅴ類……側縁が内彎し，抉りが入る。基部の形態はⅡ類同様凹基である。

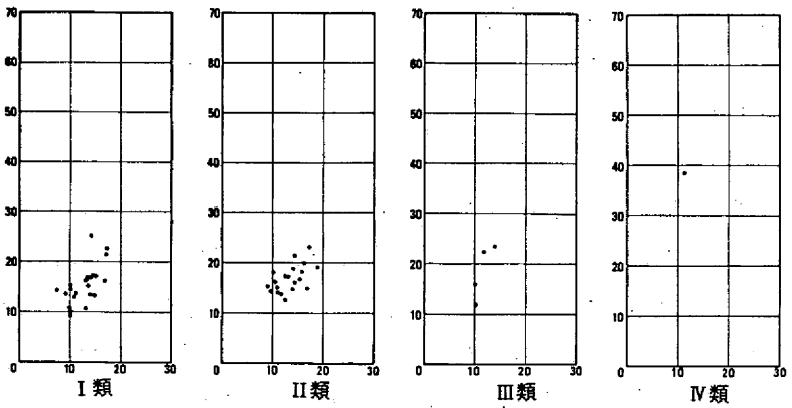
Ⅵ類……外形が木葉形をなす。尖基式。

縄文時代の石鏃は95点，未製品を含めると113点である。後期のものは１点のみで，他は晩期に属している。Ⅳ・Ⅴ類は検出されておらず，Ⅲ類・Ⅵ類も希少である。大部分（83.1%）は，Ⅰ・Ⅱ類で占められ，両者間には数量差はない。

表—57は，石鏃の最大長と最大幅の比率（長幅比）を，**表—58**は，重量の分布を示している（ここで用いた石鏃は，完形またはほぼ完形に近いもので，破損品は除いている）。

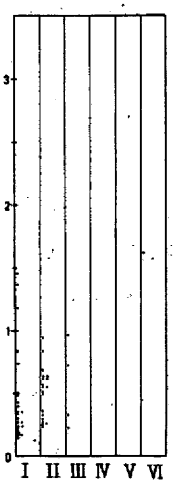


第500図　石鏃の形態分類



（単位cm）

表—57　石鏃の長幅比



表—58石鏃の重さ（単位g）

I・II類ともに長幅比は2：1から1：1の間に集中的に分布する。重量はI類が0.5g以下に集中するのに対し，II類はわずかに重くなっている。III・VI類は，数量が貧弱であるため，一概に傾向は見出せない。

後期の石鏃125（第325図）は，II類に分類されるが，他の晩期II類石鏃に比べ，基部の抉りが深くU字形をなし，縄文時代石鏃の特徴を表している。また，I・II類石鏃の中には133，160，172，214，251のように外形が五角形をなすものがある。このような形態の石鏃は，倉敷市広江・浜遺跡（註3）滋賀県滋賀里遺跡（註4）の晩期石鏃に類例が認められる。

石　錘

1点出土している（第255図121）。楕円形の扁平な河原石を利用しており，長辺の両端を簡単に打ち欠いた礫石錘である。重さは155.5g。

石庖丁形石器

刃部・背部の二次調整や使用痕が，打製石庖丁に類似した特徴を示すことから，他のスクレ

イパー類とは区別し便宜上この名称を与えている。

２点出土しているが，いずれも破損しており原形は不明である。両者ともに，刃部は磨耗し，滑らかで光沢を持つ（註５）。部分的には再調整を施し，刃部の再生を図っている。このうち一点は，刃部に限らずほぼ全面にわたって表面が磨耗し，光沢が見られ，使用痕と考えられる擦痕を持つ。また，背部は平担に研磨され，背部に加えられる背潰し調整と同様の意図で行われたと考えられる(**第346図—282**)。

県下における類例は，同じく晩期の北房町谷尻遺跡（註６）のスクレイパー，御津町原遺跡（註７）の剝片石器があげられる。いずれも刃部の調整は入念で，打製石庖丁としても遜色のないものである。

石　鍬

従来「打製石斧」として報告されている（註８）。４点検出されており，うち完形は１点のみである。全てサヌカイトを石材としている。大形剝片を素材にして，周囲から調整を加えている。側縁から基部にかけては，刃潰しかそれに近い調整が施され，鈍い縁辺を持つ。刃部は，片面に先端から１回～数回の深めの大きな剝離が施され，そののち縁辺に細かな調整を加え，鋭い刃先を作り出しているが，これは片刃を意図しているとも考えられる。また，片刃を作出していない面から見た場合，刃部縁は左右非対称で右上がりの扁刃となる。刃部には長軸に平行する擦痕が観察され，磨耗している場合があるが，しばしば再調整によって刃部の再生が図られている。刃部の形態および擦痕の方向から，この種の石器は「横斧」(註９）としての機能を持つと考えられる。おそらくは土掘具に使用されたのであろう。ただし，いずれの例も幅５cm内外の小形品であり，擦痕も肉眼で観察可能であるが微細である。このことから，土木等の重労働ではなく，食物採集の際の根掘具のような軽作業の用途が推定される（註10)。
県下における類例は，谷尻遺跡，原遺跡ほか，和気郡加部遺跡（註11）の資料が知られる。

石斧もしくは敲石

基部のみの破片である。表面の風化が著しく，研磨の判別はできない。円に近い楕円形をなす断面や，端部の尖がった基部などが乳棒状の石斧を想起させるが，先端部が欠損しているため断言はできない。敲石である可能性もある。

砥　石

破片であるため原形は不明であるが，大形の設置して使う類の砥石と考えられる。砥面は平滑で，中央に向かって微かに凹むが，擦痕はわずかに観察されるのみである。

石　錐

形態的には，（ａ）つまみにあたる頭部をもつもの，（ｂ）頭部を持たないもの，の２種に大別できるが，個体差は著しい。先端は，両面調整により細長い錐先を作り出し，断面がレン

ズ状，ひし形をなすものが多いほか，片面調整のため台形をなすものも認められる。錐先は基本的には一個体に一本であるが，両端に持つ場合もある。a類では，頭部は加工度は低く，その形状は素材剥片の形に大きく左右される。先端部の破損度は高く，消耗の激しい道具であったと考えられる。先端部の磨滅したものが2例認められ，回転運動による錐としての機能を裏付けている。

楔形石器

不定形の剥片を素材とし，上下両端に平行する二次調整を施した上下幅3cm前後の小形の石器である。多くの例が側面にいわゆる「截断面」（註12）を持つ。上方向からの加撃による縦長の剥離面である。上方向からの加撃を裏付けるように，スポール状の砕片が認められる（**第346図—290・291，第347図—318・320**など）。上下両端の調整はしばしば階段状剥離となり鋭い刃部を作り出している。これらの特徴から，楔としての機能を持っていたのではないかと推定される。また，上下の調整に質的差は認められず，「截断面」が両側縁で反転している場合もあり，打撃部と刃部の区別は無いものと考えられる。

スクレイパー

ここで挙げるスクレイパーは，素材剥片に二次調整を加え何らかの加工を施した石器の総称である。よって，その形態，大きさ，調整の程度などかなり個体差が激しく分類は困難である。素材剥片は石核から任意に剥離されており，その中に一貫した技法は見出せない。そのため剥片の形状はまったくの不定形となるが，概ね横長に近い剥片である。また，二次調整は，剥片の一部に数回施すだけのものから，一側縁全部もしくは両側縁，周囲の2分の1を超えるものなど個体差はあるものの，総じて加工度は低く，粗雑なつくりである。加工度の低さから，形態は素材剥片の形状に大きく影響され，変化に富む結果となっている。中には，調整は施されているものの，むしろ剥片の鋭い縁辺をそのまま刃部として利用している例もある。

このような特徴から，これらの石器は，必要な場合に応じて適宜任意に製作されていたと考えられる。また，定形化されておらず，つくりも粗雑なことから，持続的な使用よりも一過性の使用が行われたと考えられ，不必要になればまた他の石器（石鏃，石錐等）の素材として転用された可能性もある。用途は，植物採集，調理，木工等が想定されるが，応用範囲の広いかなり柔軟な性格を持つ石器といえる。他に，石小刀状石器，R・F，U・F（註13）もこれに準じた性格を持つと考えられる。

石　皿

一点のみ検出されている。欠損品であり全容は不明である。平担な自然礫の中央に向かってわずかに凹む。石皿の可能性はあるが確実とは言い難い。

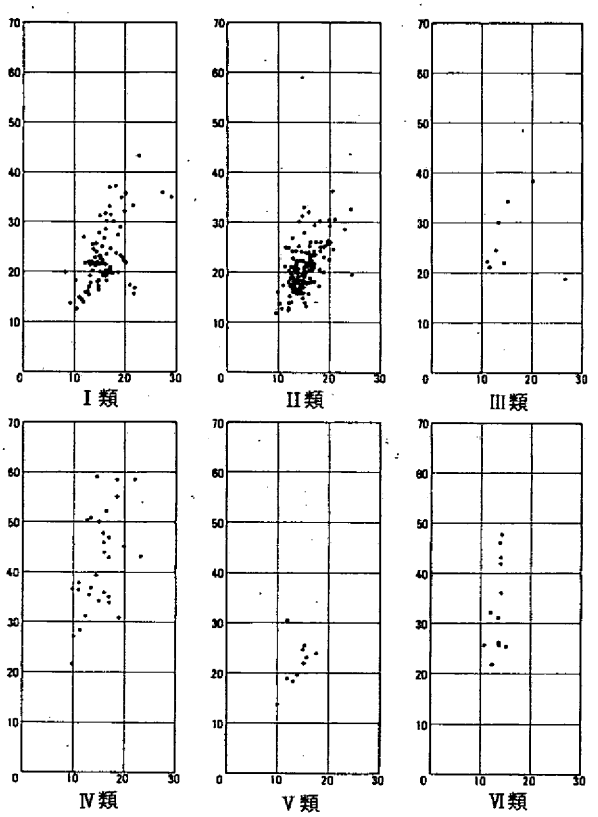
磨　石

いずれも自然の円礫を利用している。図示した例は敲石との兼用例である（第339図—209）。図の上端と側面には敲打痕が，下端には擦痕が認められ，敲打面と磨面は区別して使用している。主として食物の加工に使われたと考えられ，その際，敲き，磨り潰す一連の作業が一つの石器でまかなわれたのであろう。

（ロ）弥生時代以降の石器

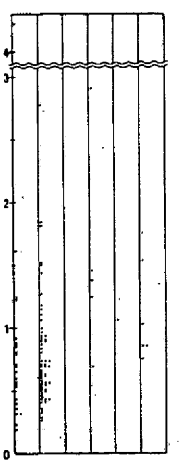
弥生時代以降の石器は，石鏃，石鏃未製品，石槍，石錘，磨製石庖丁，打製石庖丁，石鍬，太型蛤刃石斧，扁平片刃石斧，敲石，砥石，石錐，楔形石器，石匙，スクレイパー，のみ状石器，石小刀状石器，石皿，磨石，不明石器等，460点が検出された。縄文時代同様打製石器は基本的にサヌカイトを石材とし，一部打製石庖丁，スクレイパー，不明石器に他の石材が使われている。磨製石器では，粘板岩，結晶片岩，砂岩，玢岩，花崗岩，凝灰岩，頁岩等，多様な石材が使用されている。

前項と同じく器種ごとに記述する上で，縄文時代から継続して存在する器種に関して，同様の特徴を示す場合，重複する説明は避け，当該時期における特徴のみ取り上げる。



（単位cm）

表—59　石鏃の長幅比



（単位ｇ）

表—60
石鏃の重さ

石 鏃

弥生時代の石鏃は210点，未製品も含めて215点出土している。Ⅱ類が他を凌駕し（62.9%），Ⅰ類がこれに次ぐ。Ⅲ類からⅥ類は縄文時代同様僅少である。

表—50の作成にあたっては，この時代の石鏃長幅比の傾向をより際立たせるために，今回の報告分に，既に報告済みの百間川遺跡群の弥生時代石鏃を加えてグラフ化した。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類では，長さ20㎜前後，幅10㎜～20㎜に集中的に分布し，長幅比は2：1～1：1の間にほぼおさまる。Ⅳ類は幅が10㎜～20㎜に集中するのに対し，長さは20㎜～60㎜までとかなりの広がりを持ち，長幅比も3：1前後と狭長な傾向を示す。Ⅵ類では幅は10㎜～15㎜と限定され，長さは20㎜～50㎜までの広がりを持ち垂直方向の分布となる。Ⅳ・Ⅵ類はほぼ同様の傾向を示している。**表—60**は今回出土した資料から作成している。Ⅲ・Ⅴ類は完形が僅少で傾向は見出せない。Ⅰ・Ⅱ類は0.5ｇ前後～1.0ｇに集中し，Ⅳ・Ⅵ類はそれよりやや重くなるようである。以上のように，Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ類とⅣ・Ⅵ類では，長幅比，重さにおいて前者と後者の間に差異が認められる。この二者には基部の形態から，矢柄への装着方法の違いも想定され，対象となる獲物等，用途の区別があった可能性がある。

石 槍

完形品はなく，5点検出されたのみである。総じて小形で，石鏃Ⅳ・Ⅵ類に相似するが，幅，厚さが石鏃に比べて大形となる。幅15㎜前後，厚さ6～8㎜の幅狭で部厚いものと，幅20㎜前後，厚さ4～5㎜の幅広でやや薄いものが看取される。

石 錘

4点検出されており，いずれも自然礫を素材としている。礫石錘と，礫の長軸中央にごく浅い溝をめぐらし，両端を打ち欠いた有溝石錘があり，重さは，100ｇ台から500ｇを超えるものまで様々である。

磨製石庖丁

完形を1点含む5点が検出されている。石材には粘板岩，結晶片岩を用いている。前期から中期前半にかけての資料である。刃部の観察可能な4点のうち，1点は内彎刃を持ち，他の3点は外彎刃を持ち半月形・楕円形となる。刃部は両面から研ぎ出され，使用痕と考えられる擦痕や刃こぼれが観察されるがいわゆるプラントオパールの認められる例はない。紐孔の穿孔は基本的に両面から施されるが，溝—70出土の**72**は，片面からの一方向の穿孔が施されている（**第197図**）。溝—69出土の完形品**65**は，半月形外彎刃で，全面に顕著な研磨痕を残し，刃部には刃こぼれが認められる。県南における前期磨製石庖丁の良好な資料である。

打製石庖丁

安山岩製の1点を除いて他は全てサヌカイト製である。出土数7点と僅少であり，完形品も

3点だけで貧弱な様相を呈している。また，形態的にもばらつきが見られ斉一性に欠く。安山岩製のものは，刃部はほとんど未調整で背潰しを入念におこない，両面から紐孔の穿孔が施されている（註14)。欠損品である。サヌカイト製のものでは，完形の3点のうち両端に抉りの入るものが2点あり，いずれも外彎刃である。うち1点は素材剥片の形状を利用し，刃部はほぼ未調整で背部には自然面を残す。他，抉りの入らないものでは外彎刃，内彎刃の両方が認められる。

今回の調査では，石庖丁類の資料数が少く，また破損品が目立っている。

石　鏃

石材，形態的特徴等は縄文時代の項で述べた通りである。最大幅5㎝未満，重さ70ｇ前後のものから，最大幅が5㎝を超え，重さが140ｇを超えるものまで存在する。

太型蛤刃石斧

4点出土しているが全て破損品である。製作時における敲打痕，研磨痕が観察されるが，使用痕は刃こぼれが認められる程度で擦痕，装着痕等は見られない。

扁平片刃石斧

刃部の欠損する例が1点あるのみである。研磨のおよばない部分が目立ち，未製品である可能性もある。

敲　石

自然礫を利用したものが多いが太形蛤刃石斧の破損品を転用した例が1点ある。折損面を敲打面としている。

砥　石

手に持って使用する小形のものから，設置して使用したと考えられる大形のものまで大小様々である。概して複数の砥面を持ち，頁岩，花崗岩，凝灰岩，安山岩等柔軟な石材を用いている。

石　匙

つまみ状の突起を持つスクレイパーである。1点出土している。形態は縦長で木葉形をなす。刃部下端を欠損している。素材剥片の周囲に両面から入念な調整を施し刃部を形成している（**第189図—64**)。

不明石器

器種が不明で用途の推測がし難い石器群である。

投　弾

球状の礫で投弾としての用途を想起させるものである。

その他，石斧もしくは敲石と考えられるもの，石錐，楔形石器，スクレイパー，石皿，磨石

等は，縄文時代の項で述べた特徴と何ら差異は認められず，同様の機能の必要性とともに，形態も保持されていったものと考えられる。

以上が出土石器の概略である。個々の石器についての詳細な時期がいまひとつ明らかでないため，各器種の変遷や，石器群の移り変わりを把握することはできない。しかし，縄文時代晩期から弥生時代前期を主体とする中で，200点を越す晩期の石器群が検出された。そこで，弥生時代以降の石器群との比較検討をおこない，留意点をあげる。

まず，器種構成についてであるが，一般に弥生時代以降になって出現する石庖丁，太型蛤刃石斧，扁平片刃石斧，石槍を除く他の器種は，晩期から弥生時代へとそのまま引き継がれている。特に，石鏃，石錐，楔形石器，スクレイパー等小形の打製石器の一群は数量的な比率でも類似した傾向を示している。稲作の開始に伴って，食生活を含めた生活様式は大きく変化したと考えられ，先に挙げた石庖丁以下の大陸からの影響下で弥生時代に出現した石器群もその表れである。しかし，食生活の中でもやはり動物性蛋白質は狩猟に頼らざるを得ず，また，鉄器が一般化する以前では，木工，調理といった加工具は石器でまかなわれていたであろう。このような，縄文時代と共通した生活様式が，器種構成の中に端的に読み取れる。

また，晩期の石器として留意すべきものに，石庖丁形石器と，石鍬がある。谷尻遺跡，原遺跡でもこの両者は共伴して出土している。形態的特徴や共伴関係から，これらの石器と農耕の可能性を結びつける意見もあるが，やはり石器だけから可能性を論じることは無理である。ただし，本遺跡は沖積地に立地し，弥生時代前期の水田遺構も検出しており，晩期における，稲作の前段階の農耕の可能性が全く否定されるものではない。

次に，石器製作について若干の考察をおこなう。磨製石器は出土数も少く破損品が多いためその製作技術を述べることはできない。そこで，ここではサヌカイト製の打製石器にしぼって検討を加える。まず石器製作が遺跡内でおこなわれていたことは，多量の剥片・砕片，未製品そして，石鍬等の磨耗した刃部を再調整した際の磨耗痕ある砕片や，再生された刃部をもつ石器等からも明らかである。今回の調査では石核は検出されておらず，石器の素材となる剥片剥離技術に関しては，石器に残された素材剥片面からの推定によるが，スクレイパーの項でも述べたように，一貫した剥離技術といったものは看取されない。むしろ，任意に剥ぎ取ることが一貫していると言える。また，石器に施される二次調整も，全面におよぶことは少く，石鏃のような小形石器でも素材剥片面を残す例がしばしば認められる。総じて石器のつくりは雑であり，縄文時代から弥生時代への時期差や，器種によって特に丁寧に仕上げるといった傾向も認められない。今回の調査で検出されたサヌカイト製石器の総重量は約3kg，石器製作に伴う砕片，未加工の剥片の総重量が約10kgである。もちろんこれらが集落内で消費されたサヌカイト

の総量ではなく，一応の目安に過ぎないが，かなり無駄の多い石器製作がおこなわれていたとは考えられないだろうか。本遺跡で使われたサヌカイトは香川県国府台付近で産出したものと考えられる。その入手方法に関しては航海技術，他集団との交渉等，困難が想定される。しかし，石器製作技術や，砕片の多さから，当時サヌカイトは案外潤沢に入手することができたのではないかと考えられる

以上，石器についてまとめた上で留意点をいくつか挙げた。他遺跡との比較等検討の不十分な点は多く残されるが，県南における縄文時代晩期から弥生時代前期の石器群の資料は乏しく，資料の増加を期待するとともに，今後の課題としたい。（山田）

註

註１　小林行雄・佐原　真「紫雲出」1964

註２　平井典子「第７節　石器―百間川兼基遺跡１・今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』岡山県教育委員会　1982

註３　「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報第14号』1979

註４　『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡発掘調査団　1973

註５　前掲註１

註６　「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』岡山県教育委員会　1976

註７　鎌木義昌・江坂　進「岡山県御津町原遺跡」『瀬戸内考古学２』1958

註８　前掲註６，７，「百間川原尾島遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』岡山県教育委員会　1980

註９　佐原　真「石斧論―横斧から縦斧へ」『考古論集』1977

註10　「桑飼下遺跡」舞鶴市教育委員会　1971

註11　「加部遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告57』岡山県教育委員会　1984

註12　柳田俊雄「截断面ある石器」『ふたがみ』1974

註13　Ｒ・Ｆ　二次加工ある剥片

　　Ｕ・Ｆ　使用痕ある剥片

註14　「用木山遺跡」岡山県山陽町教育委員会　1977

		石鏃 I	石鏃 II	石鏃 III	石鏃 IV	石鏃 V	石鏃 VI	石鏃 (−)	石鏃未製品	石槍	石錘	磨製石庖丁	打製石庖丁	石庖丁形石器	石鍬	太型蛤刃石斧	扁平片刃石斧	石斧もしくは蛤石	敲石	砥石	石錐	楔形石器	石匙	スクレイパー	のみ状石器	石小刀状石器	R・F	U・F	石皿	磨石	不明石器	投弾	剥片	計
横田		4	13		3			1		1 (1.6)			1 (1.6)							2 (3.1)	2 (3.1)	11 (17.2)		20 (31.3)	1 (1.6)	1 (1.6)		1 (1.6)		1 (1.6)	2 (3.1)			64
		21 (32.8)																																
高縄手	A	7	26	1	1	6		1		1 (1.0)	2 (1.9)	2 (1.9)	1 (1.0)		3 (2.9)	4 (3.8)		1 (1.0)	2 (1.9)	5 (4.8)	7 (6.7)	12 (11.4)	1 (1.0)	15 (14.3)			2 (1.9)		1 (1.0)	3 (2.9)	1 (1.0)			105
		42 (40.0)																																
	B	29	89		2	2	8	9	5 (1.9)	3 (1.1)	2 (0.8)	3 (1.1)	3 (1.1)		1 (0.4)		1 (0.4)	1 (0.4)	7 (2.6)	4 (1.5)	20 (7.5)	16 (6.0)		31 (11.7)	2 (0.8)	1 (0.4)	14 (5.3)	5 (1.9)	1 (0.4)	4 (1.5)	1 (0.4)	1 (0.4)		265
		139 (52.5)																																
	縄文時代	36	43	4			2	10	18 (8.3)		1 (0.5)			2 (0.9)	4 (1.9)			1 (0.5)		1 (0.5)	29 (13.4)	22 (10.2)		27 (12.5)		1 (0.5)	8 (3.7)	1 (0.5)	1 (0.5)	3 (1.4)			2 (0.9)	216
		95 (44.0)																																
竪石		1	2										1								1			3						1				9
		3																																
開山下		1																																1
		1																																
四元		1	2			1							1		1				1					4				1				2		14
		4																																
長谷遺跡																								2										2
計		79	175	5	6	9	10	21	23	5	5	5	7	2	9	4	1	3	10	12	59	61	1	102	3	3	24	8	3	12	4	3	2	676
		305																																

表—61 出土石器一覧表

第３節　弥生時代後期の土器

当該期に相当する土器群については，すでに『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』（以下県報告51とする）において報告している(註１)。しかし百間川原尾島遺跡（以下原尾島遺跡とする）において，これら(註２，３)よりも先出的内容をもつ土器群の存在が明らかとなった。特に，これらの土器群との間に高杯，甕においてその形成手法に顕著な変化を認めることができたのである。このことは，百間川遺跡群における百・後・Ⅱの土器の流れを理解するのに重要な資料となりうるものである。以下，具体的に触れてゆきたい。

丸田調査区井戸―16は，この期の内容を示すべきものとしては他に類を見ないほどの質及び量に関しては第一級の資料である。報告によれば径150～160cm深さ116cmの井戸状の遺構である。遺物の出土状態は，井戸の埋積土である１～６層までのうちの６層中に包含されていた。その出土状態から，これら土器は時間的幅をもたずに投棄されたことが推測される。土器量は図化されているもので169点を数え，その器種も壺・甕・高杯・鉢・器台・蓋・製塩土器などが認められている。器種の多種に加え，個々の器種の多様さがみられる。このことから井戸―16出土遺物は，一括遺物として当該期の内容を明示できうるものと考える。以下これら出土遺物について触れてゆきたい。

壺は，長い頸部を有するものを**A**とし，短い頸部を有するものを**B**とする２種が認められる。さらに口縁部の形態から，**A**は１～４に**B**は１～４に分ける。

A$_1$は，口縁端部を斜めに拡張し，先にゆくに従い厚さを減ずる。口縁端部内面は，ヨコナデによる明瞭な凹部を形成するが，上方に立ち上がることはない。頸部は口縁部に向かって開き，口唇部と同様に凹線を有する。

A$_2$は，口縁端部の器壁が頸部のそれよりもやや肥厚気味になり，端部を形成する。頸部は口縁部に向って開き，口唇部と同様に凹線を施文する。

A$_3$は，口縁端部の器壁の厚さが変化しないものである。やや口縁部の外反が強くなる傾向をもつ。頸部は前の２者よりも顕著ではないが，やはり口縁部に向って開く傾向を持っている。

A$_4$は，口縁端部を丸く終らせるものである。頸部は口縁部に向って開く，特に，頸部外面はヘラミガキがおこなわれている。

B$_1$は，口縁端部を下方に肥厚気味にするもので，口縁端部内面にはヨコナデによる凹部を形成する。

B$_2$は，やや長めの頸部を有し，口縁部がやや肥厚気味となり，端部も肥厚気味に終らせる。

B$_3$は，口縁部が大きく開くもので，口縁部は肥厚しない。

B_4は，口縁部の開きはあまりなく，丸く終らせる。

甕は，口縁端部の形態からA～Fに，さらにAは1～2，Bは1～2にそれぞれ分ける。

Aは，頸部から口縁部にかけての器壁が厚くなるものである。

A_1は，口縁部が肥厚気味に上下に張り出すものである。

A_2は，口縁部がバチ形に上下に張り出すものである。

Bは，口縁部の器壁が胴部のそれとあまり変らないものである。

B_1は，口縁端部が直すぐ下方に張り出すものである。胴部調整は，荒いハケで底部についてもこの工具を用いている。

B_2は，口縁端部が上下に張り出すものである。

Cは，口縁端部を上方に拡張するものである。胴部調整は，沈線風の深いハケを用い，胴部下半にかけてはヘラケズリをおこなう。

Dは，口縁端部を下方に拡張する。

Eは，口縁端部の拡張をおこなわず，面取りをおこなうものである。

Fは，口縁端部を丸く終らせるものである。

高杯は，口縁部の形態からA～Eに分ける。

Aは，口縁部が杯部との接合部において上方に立ち上がり傾向を示し，そこから外方へ屈曲するものである。口縁部内面も屈曲の稜線を形成する。

Bは，杯部接合部から外方へ大きく外反する口縁部を形成するものである。口縁部内面の稜は形成しない。

Cは，小形のもので，ハの字状に開く杯部を有するものである。

Dは，小形のもので，杯部が内湾するものである。

Eは，杯部から上方に立ち上がる口縁部を形成するものである。

鉢は，口縁部の形態からA～Cに分ける。

Aは，口縁部の器壁が体部のそれよりも厚くなり，口縁端部を上下に拡張する。

Bは，口縁端部の面取りをする。

Cは，口縁端部を丸く終らせる。

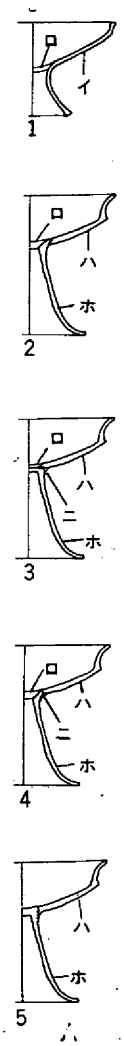
これら土器群において顕著な変化が認められるのは，甕及び高杯である。甕は，口縁部が明らかなもので図化されているものは，40点余りになる。先の各タイプにおいては，口縁端部に凹線を施文するものが認められている。またFを除いて凹線を用いない傾向のものも認められている。Aは凹線を多用するものであるが3560（註4）は凹線が一本のみでる。Bについても3583にみられるようにヨコナデによる明瞭な凹部を形成するが，3584のごとく凹線を形成しないものも見られる。Dは前段階において凹線を多用するものであるが，やはり無文化の傾向が

認められる。**3561**の底部は円盤状の平たい粘土を以って形成しており，胴部を形成する粘土との接合による押圧のため際立って底部がとび出す形状となる。この底部の形成手法は，**A**$_1$のものを除き，他のものにほぼ共通して用いられている。**F**については，このタイプがほとんどを占めている。

高杯は，杯部及び脚部を合わせて40点以上図化されており，甕と比肩をとらない量である。**A**は，前段階に認められる口縁端面に凹線を有する系譜に連なるものである。上東遺跡P－3出土の**805**（註5）は，その端部を水平方向に拡張するものがみられる。さらに奥坂遺跡（註6）において，その流れが明らかな資料が示されている。**B**については，これらより新しく出現したようである。この杯部の形態が異なるが，杯部と脚部との接合手法は共通した内容を示すものである。第501図は高杯形成の模式図である。1は，百・中・Ⅱの新相に属する高杯であり，**イ**とした部分が連続形成で，**ロ**の円盤充塡を用いている。この形成手法は，中期から認められ，次の段階でこの手法から杯部と脚部の〝組合せ形成手法〟に移行するものと考えられている（註7）。

今回出土した高杯についてその接合の観察結果として，その移行段階を示す資料が存在していることが明らかとなった。2は円盤を用いるものであり，**ホ**が杯部に対して独立した部分として成形されていない。このことは，4においても同様であるが，外側に**ニ**とした〝支持粘土〟を用いている。この両者は従来からの〝連続形成手法〟から脱していないことが知られる。3は，**ホ**が**ハ**と同様に独立した部分として形成されたものと考えられる。しかし**ロ**が用いられてはいるが図版219－4及び5に示したように形骸的に残されている。また，図版219－7のように杯部の底部外面に凹みをつくり接合面とするものと，その全く逆の手法が図版219－2に観察される。このように円盤を用いない手法も見られる。

いずれにしても，図版3及び6模式図の**ロ**と**ニ**を用いることからして，その製作手法が確立していない段階と考えられる。しかし，杯部と脚部が独立した部分として意志されるようになり，**3476**・**3479**に示されるように蓋として転用されている。そして，**ロ**と**ニ**の欠失及び部分としての独立，さらには接合時における技術面の克服により次の段階では新しい形成手法によって高杯が製作されるのである。



第501図　製作手法模式図

以上のように井戸—16出土遺物は，上東式とされる壺形土器の存

在，高杯における〝連続形成手法〟から〝組合せ形成手法〟にいたる間の移行期の存在，壺・鉢・甕の口縁端部を丸く終らせるものの存在，底部の円盤形成が甕以外に壺・鉢にみられる。このように各器種において斉一性のある内容を示しており，仮に特定の編年的位置を考える場合には，良好な一群であると思慮される。

『県報告51』において，百・後・Ⅱとした土器群及びそれと同一時期と考えられる今回出土した井戸—11それに井戸—16よりも古い様相を持つ井戸—17出土の甕・高杯について検討を加えたい。

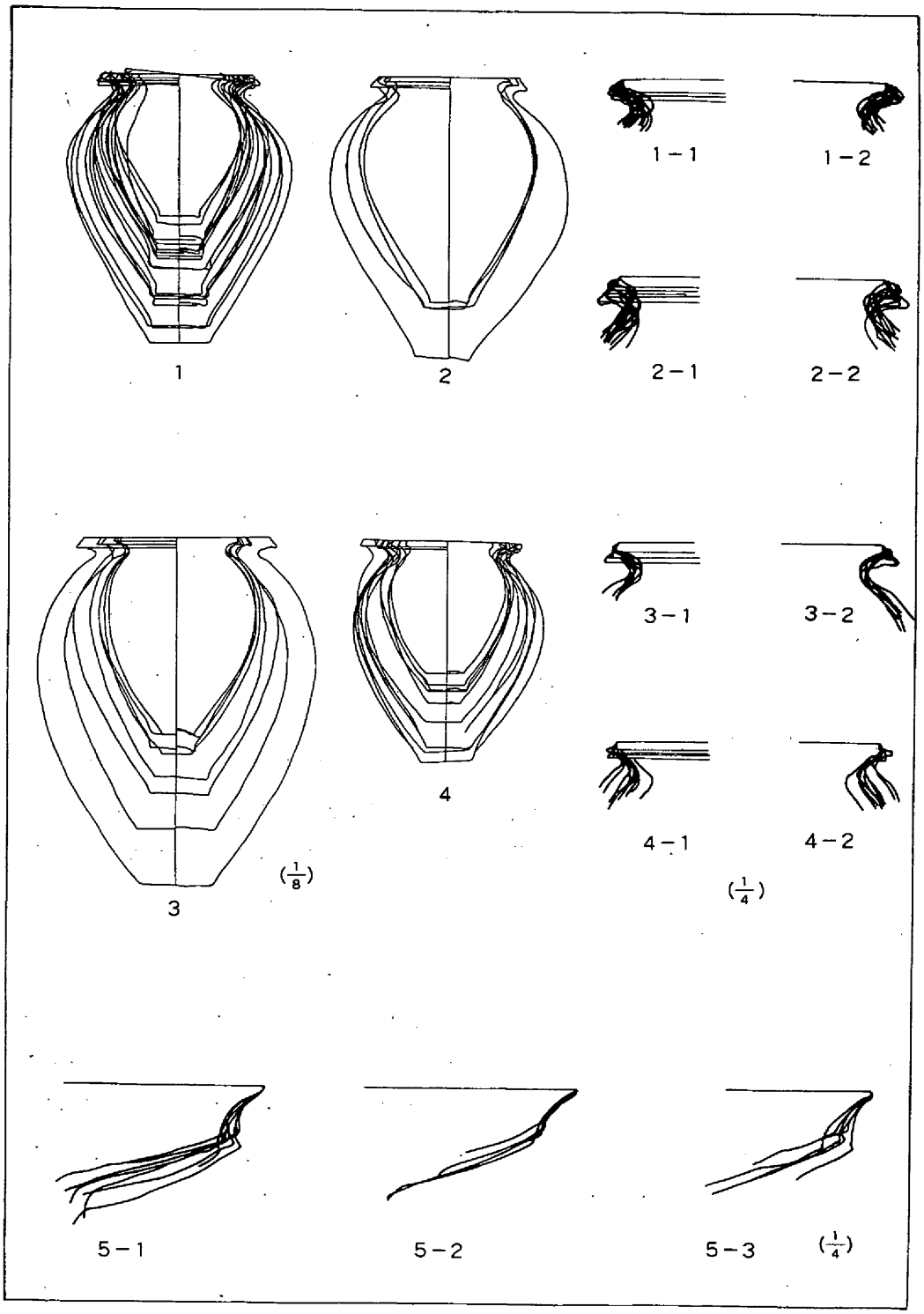
第502図は，甕の器形重複図である。1は井戸—16，2は井戸—17である。これによると，胴部最大形は上位にあり，底部にかけてほぼ直線に近い状態でしぼりこむ。底部は立ち上がり傾向を示し，全体の形態は無花実状を呈する。特に出土量の多い1は，器高に4種類の大きさが認められるが，このいずれについても先の形態に沿うことが観察される。また2についても出土量は少ないがこれと同じ形態を示している。1—1，1—2，2—1，2—2は口縁部の重複図である。1—1は，口縁部の立ち上がりと頸部の屈曲の関係をみたものである。頸部の屈曲は，口縁部を立ち上がりの下端に沿うようにつくる。1—2は，その屈曲部をより明瞭化させるため口縁部幅の線を除いたものである。これによると，内面と外面の屈曲線が極端に抉り込むということはなく，平均的にゆるやかな頸部から口縁部にかけての屈曲を描いている。

2—1は，口縁部幅より奥に入る傾向にある。このことは2—2に示したように，口縁部の屈曲が強く上方へ抉り込む様につくることから導き出される。

3及び4は，D—4と井戸—11の重複図である。前者の2者に対するものよりも胴部最大径がより下位となり，3に見られる如く顕著な張りを失しない撫肩状を呈し，これ以降の甕に引き継がれてゆく。底部についても，相対的に立ち上がりの傾向がなくなり，胴部との移行の線に際立った屈曲をもたないようになる。頸部から口縁部にかけては，2に顕著にみられた強い屈曲は極めてゆるやかになる。これは口縁拡張部からの屈曲が上方へ強く抉る傾向を失うため，逆に下方へ下がる形に変化してゆく。4—2はその内容をよく表わしていると考える。

高杯の重複図は，5に示したもので外側の線を描いた。5—1は，井戸—16出土のもので接合部からの立ち上がりが強く内傾し，接合部が外に張り出す形となる。そして，これは抉りこむように屈曲して立ち上がってから，さらに外方に広がるもので，前段階からの口縁部の造りの影響を多分に残している。5—3の井戸—11のものを見ると，接合部から内傾する屈曲は弱くなり，ほぼ真っすぐに立ち上がる。さらに5—2のD—4出土のものは，その立ち上がり部分がなくなり，接合部から外方に広がる口縁部を形成する。

このように，井戸—16出土遺物にみられる特徴は，『県報告51』において取り扱った土器群よりもその流れにおいて古い様相が多く認められ，かつ土器形成手法において画期が存在する



第502図　土器断面重複図

一群である。また井戸—17においては，**3636**の口縁部内面の明瞭な凹部，**3585**にみられる口縁端の肥厚は，これまで述べてきた内容のものよりも古い様相として把握される。しかし，高杯脚部形態と内面のシンボリ痕，甕Fの存在，さらには**3616**壺A_1が伴出することから，今まで見てきた時期よりもことさら古くさせる必要はなく，井戸—16の範疇に含まれるものと考える。この両者を含めた土器群は，後期のどの段階に位置付けられるのかを次にみてゆきたい。

後期の編年における標式遺跡である上東遺跡出土遺物を用いたのは，1938年で第Ⅲ様式と位置付けられている(註8)。1954年に後期前半と後半とを分け，上東遺跡出土のものを前者とした（註9）。1958年に坪井氏は，1954年の考えを追認している（註10)。また鎌木氏は1955年に上東Ⅰ式と上東Ⅱ式とし（註11)，さらに1962年に上東Ⅱを酒津式とした（註12)。このように，1950年代後半から1960年代にかけて鎌木・坪井両氏において精力的な編年作業がおこなわれた。

1970年代に入ってからは，大規模な開発行為に伴う調査が実施されはじめ，大量の出土遺物から編年作業が飛躍的に前進した。1972年には大系的な編年作業がおこなわれ，上東式を雄町7～10類に分類し，10類と11類との間に空白を設ける。そして，〝9類を上東式と呼称される時期に該当〟するとした(註13)。1974年では，1964年のものを追認し(註14)，さらに1977年において，上東を鬼川市Ⅰ～Ⅲとして〝式〟を用いて編年をおこなった(註15)。編年表には，鬼川市Ⅱに含まれる形で破線の空白を設けている。

雄町遺跡と上東遺跡は，県南の大規模な遺跡であるが，その所在する流域が異なる。このことから器種構成及び成形において，それぞれ相違する部分が認識されはじめたのが1980年以降である。この年代前半の1979年に上東遺跡の調査を受けて，〝鬼川市Ⅱを「弥生式土器集成」に示された土器のうちで最も中心的なもので「上東式」の本来の特徴を具備している一群である〟とした見解が出された（註16)。1972年に出されたものと上東式の内容において明らかな差異を生じせしめたのである。このことは1977年の鬼川市Ⅱの上に破線の空白の設定及び同報告中の〝編年対比一覧表〟の解釈によって生みだされたものと推測される。1980年において，これら一連の経過を踏え，後期をⅢ期に分け，さらにそれらを細分した(註17)。基本的には上東式を前・中・後とし，中と後であるⅦとⅧの編年基準を甕の底部形成と高杯の上下接合の変化に求めたのである。1984年には後期をⅠ～Ⅳ期に分け，Ⅱ期を上東式の盛行する時期に当るとした(註18)。そしてⅡ期に至って中期以降の円盤充塡から杯部に脚部を差し込んで接合するものへと変化したとされている。

以上のように1960年代から1980年代に至る後期の土器主に上東式の編年的位置付けをみてきた。このことから1972年と1980年の編年作業と，1974年と1979年にいたる上東遺跡に関するものについての中葉段階の認識に差が存在するようである。さらには，弥生式土器集成における

上東式の認識に起因することも思慮される。

1984年における図は，『県報告51』で取り上げた一群の土器と同じである。また1979年の見解についてもほぼこの土器と同じ内容により構成されている。したがって，1977年における鬼川市Ⅱはこの範疇に入るものと考えられる。この鬼川市Ⅱとされる高杯の形成はいずれも組合せを用い，壷の頸部が内傾化するなど『県報告51』で取り上げたものに近い内容を示している。

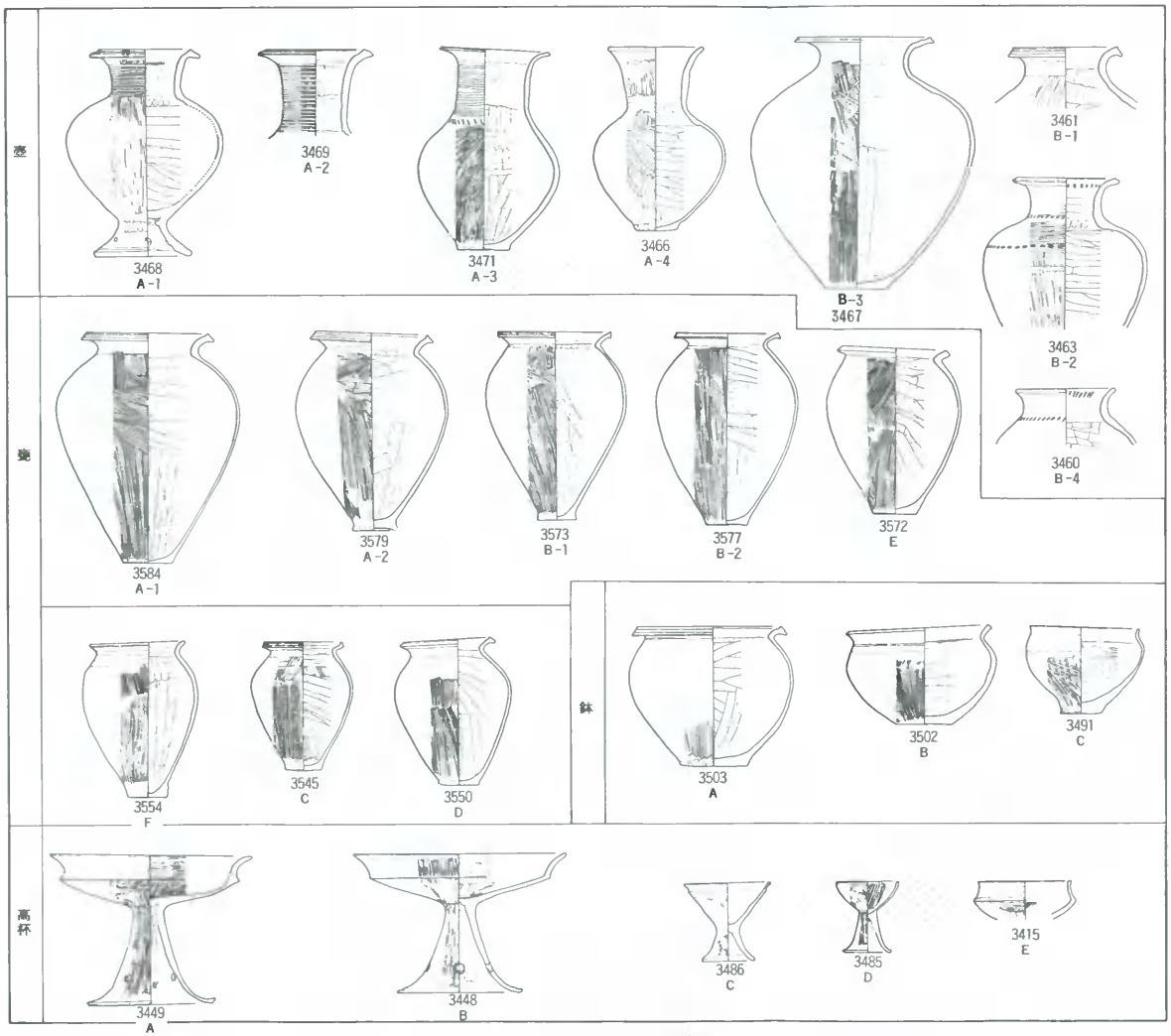
このようなことから，高杯及び甕の形成手法により前半期と後半期とに位置付けられるならば，今回報告の土器群は中葉段階の前半期に相当するものと考えるのである。そして，上東遺跡における鬼川市Ⅱの空白部(鬼川市Ⅱの範疇としてではなく)及び雄町遺跡での９類さらに，1980年のⅦ—ｄ期に相当する。また，Ⅶ—ｄ期において〝古い様相と新しい様相の間にかなりの違いを示しているので将来２期に区分して考える必要が生じる〟(註19) と述べられているが，いずれにしてもほぼこの段階に相当するものと考えられる。

以上のことから，井戸—16・17出土遺物は，『県報告51』よりも先出的な様相を有していることが明らかとなった。したがって『県報告51』の土器群を百・後・Ⅱの新相とし，今回報告のものを百・後・Ⅱの古相に位置付けることが妥当であると思慮される。

しかしながら，井戸—16で示された土器群の内容がそのまま他地域に受け入れられるとは考えられないが，これらの内容を具備した土器群の存在により後期中葉段階の土器の流れがスムーズに把握できうるものと考える次第である。また，この段階における高杯の形成手法は，周辺地域との比較検討に充分耐えうるものであり，一つの編年的要素として認識されると考えるべきものである。（下澤）

註

註１　下澤公明他「百間川兼基遺跡１・百間川今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』1982。
註２　本来，〝県報告56〟において報告すべきものであるが今回報告するものである。
註３　岡田　博他「百間川原尾島遺跡２」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56』1984。
註４　数字は註２に報告図化されたものと同じである。
註５　柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第２集』1974。
註６　正岡睦夫他「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告53』1983，においてNo.66住居出土359及びNo.24A住居址出土524によって流れが知られる。
註７　小林行雄・佐原真『紫雲出』詫間町文化財保護委員会1964。
註８　森本六爾・小林行雄『弥生式土器聚成図録』東京考古学会報1938。
註９　鎌木義昌，坪井清足「岡山県都窪郡庄村上東遺跡の土器」『弥生式土器聚成図録（第六輯）解説』日本考古学協会1954。
註10　坪井清足「岡山県都窪郡庄村上東遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』1958。
註11　鎌木義昌「中国」『日本考古学講座』弥生時代，河出書房1955。
註12　鎌木義昌「弥生式土器の編年」『岡山市史古代編』1962。
註13　正岡睦夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』1972。
註14　註５による。
註15　柳瀬昭彦他「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（16)』1977。
註16　藤田憲司「山陰鎬尾式の再検討とその併行関係」考古学雑誌1979。
註17　高橋護「弥生土器—山陽２—」考古学ジャーナル，1980。
註18　江見正己「弥生土器」えとのす24　1984。
註19　註17による。



第503図　百・後・Ⅱ古相器種分類図（1/8）（図中番号は報告書による）

第4節　古墳時代初頭の井戸について

今回報告した百間川沢田遺跡では，52基の井戸が検出された。この井戸は，いずれも古墳時代初頭に位置付けられるものである。先年報告した百間川原尾島遺跡，兼基遺跡，今谷遺跡においても87基の井戸が確認され，その内古墳時代初頭のものが27基にもおよぶ。(詳細については本文にゆずるとして)，ここでは，今回報告分の52基の井戸について概要をまとめるものである。

立地，分布

沢田遺跡では52基の井戸が確認されたが，これらの井戸はいずれも微高地に位置する。これは，多分に住居址との位置関係に起因し，規制されているものと考えられる。井戸と同時期に存在したと思われる住居址は，当地域を襲った弥生時代後期末の大洪水の後も，従来からの微高地上にその居住域を設定している。この沢田遺跡内においても，弥生時代後期の水田が微高地を掘削して開田されており，その微高地と水田面との比高差は約30cmあり，ここに洪水砂層が厚く堆積している。このような不安定な場所が微高地内にあるにも拘らず，住居址の占地している位置はいずれも微高地残存部及び「島状高まり」遺構が存在した地点及び隣接する位置に集落を形成している。井戸もまたその周辺に位置するものの，洪水砂層が堆積する地点にも存在する。このことは，井戸の上部が崩壊しやすい洪水砂層堆積域が井戸の選地の条件となり得ていないと考えられる。

この52基の井戸は，沢田遺跡のB～Sライン間の約350mに点在している。この点在する井戸は，大きく4つのブロックに分けることができる。それは，B～F，G～I，J～M，P～Sに分布する。この内，B～F，J～M，P～S存在する井戸は，中心域に住居址群が認められその周辺にあたる。J～Mの調査区北側に位置する井戸群については，周辺の状況から考えて調査区外北側に住居址群が想定される。このことは，B～F，J～Mを含めて半円形状に住居群が構成されていることも考えられる。

規模，形態

井戸の平面形は，不整円形，楕円形，円形を呈するものがほとんどである。当初掘られた段階では，円形的意識の中で掘られたと考えるのが妥当であろう。

規模は，崩壊，削平を受けているものの平均的に直径約110～150cmの大きさのものがもっとも多い。大きいものは，240×230cmのものも確認されている。

深さは，残存状態によるものの，深いものは約250cmのものもある。しかし，平均的な深さは約150～180cm測るものが多い。この井戸の深さについては，各地点による地下の水脈，水位

に規定されると考えられる。井戸底部の海抜高は，平均で約147cmで，140～160cmの間のものが多く占める。深いものとして海抜高50cm，浅いもので240cmの数値も得られる。この数値は，井戸が分布する約350cm間での地点別の特徴は顕著なものはない。

次に井戸の掘り方については，残存状況がかなり問題になる。今回検出した52基については，大きく2タイプがみとめられた。それは，やや開き気味の「U」字状のになるものと，上部が擂鉢状になるものに大別できた。後者のタイプは，井戸の上部より約50cm以上が擂鉢状に広くなるものである。このタイプのものとして井戸—8，17，26，27，28，31，33，37，41などが顕著な形を呈している。この井戸の上部を擂鉢状に掘るのは，井戸の下部を掘り下げる際のより効果的労働を考えてのことと理解できる。また，井戸—4，46など井戸の掘り方の途中の段的なものを有することがあるが，このことも上記のことと関連づけられるものであろうか。いずれにしても，これらの井戸は上部に援助がいるものの人間1人が入って掘ることが可能な規模の井戸である。

井戸の放棄

井戸には，よく出土遺物を伴うが特に井戸底部には完形の土器が出土する例が多い。52基の井戸の中で，23基の井戸底部近くに土器が検出された。これらの土器は，1個のものと，複数になるものがある。またそれらの土器は，口縁部に櫛描沈線を施す甕が多く認められる。壺の場合も井戸—20，32，43などで出土しており，特に井戸—32の壺は外面体部に竹かご目が付く土器である。

このような井戸底部での完形土器の出土は，百間川原尾島・当麻遺跡（註1），上東遺跡，川入遺跡（註2）など岡山県南部の沖積地遺跡でよく認められるものである。出土する土器は，いずれも特殊なものではなく，日常生活に使用されていたもので，甕にはススが厚く付着しているものが多い。しかし，井戸底部での完形土器の出土の例は数多く，意図的土器の放置と見るべきであろう。このような行為が，集落全体の行為としてではなく，個々の〝家〟での井戸廃絶の際の祭祀的なものとは考えられないであろうか。

放棄された井戸は，その後完全に埋められるのではなく，堆積状況からみてそのまま放置されたものと考えられる。また，その後，井戸の凹部には，土器などの遺物が大量に破棄されたような状況もよく認められた。

竪穴式住居との関連

沢田遺跡では，古墳時代初頭の住居址は28軒検出された。この住居址の周辺に存在する井戸は，当然住居址の住民が使用したものと考えられる。竪穴式住居—8と井戸—12，竪穴式住居—12と井戸—23，竪穴式住居—28と井戸—49など相関関係が求められる例は多い。住居址，井戸は，古墳時代初頭の時期と大きくとられているものの百・古・Ⅰ～Ⅱ期のものである。しか

し，ここではこの古墳時代初頭という限定された時期での集落域として，その中での誤差としてとらえてみる。このような前提に立って，住居址と井戸の関係をみてみると，住居址28軒，井戸52基という井戸の数が圧倒的に多いことが指摘できる。住居址が，後世の削平などにより消滅，未確認などが相当数あるとしても住居址1軒に対して，井戸1基という数値を越えるとは考え難い。このことは，比率的に言うならば住居址1軒に対して井戸は1基以上の比率が生じる。これら52基の井戸は，位置的に各々住居址に付ずいするような相関関係に存在するといえる。

以上のように，今回報告の古墳時代初頭の井戸について概要を述べたが，まだ竪穴式住居との詳細な関係など問題点を残している。しかしながら，百間川遺跡群においての古墳時代初頭の井戸については，竪穴式住居に比べて圧倒的にその数値は多く，その傾向は岡山県南部の沖積平野に存在する遺跡についても認められる。竪穴式住居との位置関係において，〝家〟との個別的関係が想起でき，集落の共有施設としての井戸の性格を再検討をようする必要があろうか。また，東日本を中心に台地上に存在する遺跡については，その台地上に井戸が存在することは少なく，台地縁辺及び谷間の湧水を利用していたと思われ，共有的施設の存在が考えられる。

いずれにしろ，百間川遺跡群に認められたこの傾向については，もう少し詳細な検討が必要と思われるものの，沢田遺跡での古墳時代初頭の井戸がより共有の段階からより占有的段階の位置としてとらえることができようか。（中野）

註

註1　伊藤晃，柳瀬昭彦，中野雅美他「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』1980
正岡睦夫他「百間川兼基遺跡1，百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』1982
井上弘他「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52』1982

註2　伊藤晃，柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第二集　1974
柳瀬昭彦，江見正己，中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』1977

第5節　花粉分析結果報告

岡山県百間川遺跡試料花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

昭和56年1月25日

はじめに

貴・岡山県教育庁文化課より依頼のあった百間川遺跡資料の花粉分析の結果をご報告します。

1. 試料

分析試料は合計で10点であり，これら試料の土質，花粉・胞子化石産出傾向についての内容を，表―62の試料表にまとめた。

表―62　試料表

試料番号	土　質	花粉・胞子化石産出傾向※
No. 1	淡灰色粘土	A
No. 2	黄褐色粘土	A
No. 3	淡灰色粘土	R
No. 4	褐色粘土	C
No. 5	淡灰色粘土	R
No. 6	暗灰色粘土	R
No. 7	黄褐色細砂混り粘土	C
No. 8	灰色粘土	A
No. 9	黄褐色細砂混り粘土	A
No. 10	灰色粘土	A

※A：Abundant 多い　C：Common 普通　R：Rure 少ない

2. 結果および考察

花粉分析結果は，検出された花粉・胞子化石総数を基数とする百分率で各試料における花粉・胞子化石の割合を算出し，付表—1として後掲した。この中で主要なものについてはダイアグラムで表わし，第504図として同様に後掲した。更にカラーおよびモノクロ写真で写真図版〔PLATE・1，2，3（モノクロ）4，5（カラー）〕を作成したので参照されたい。

今回の分析の結果，以下に列挙する花粉・胞子化石が検出された。

《針葉樹花粉（AP—1）》

モミ属（Abies），マツ属（Pinus），カラマツ属またはトガサワラ属（Larix, pseudotsuga），ツガ（Tsuga sieboldii），スギ科（Taxodiaceae），スギ属（Cryptomeria），コウヤマキ属（Sciadopitys），〔イチイ科（Taxaceae）・ヒノキ科（Cupressaceae）・スギ科（Taxodiaceae）の3つの中の何れかであるが鑑定判別の不能なもの〕……（T.C.T）。

《広葉樹花粉（AP—2）》

カリア属（Carya），クルミ属（Juglans），サワグルミ属（Pterocarya），ヤナギ属（Salix），ハンノキ属（Alnus），カバノキ属（Betula），クマシデ属（Carpinus），ハシバミ属（Corylus），クリ属（Castanea），クリカシ属（Castanopsis），ブナ属（Fagus），アカガシ亜属（Cyclobalanopsis），コナラ亜属（Lepidobalanus），ムクノキ属（Aphananthe），エノキ属（Celtis），ケヤキ属（Zelkova），ウルシ属（Rhus），カエデ属（Acer），トチノキ属（Aesculus），アカメガシワ属（Mallotus）。

《草本花粉（NAP）》

ナデシコ科（Caryophyllaceae），アカザ科（Chenopodiaceae），カラマツソウ属（Thaliotrum），セリ科（Umbelliferae），キク亜科（Carduoideae），ヨモギ属（Artemisia），タンポポ亜科（Cichorioideae），イネ科（Gramineae），スゲ科（Cyperaceae）。

《形態分類花粉（FP）》

三孔型花粉（Triporate pollen），三溝型花粉（Tricolpate pollen），三構孔型花粉（Tricolporate pollen），無口型花粉（Inaperturate pollen）。

《羊歯類胞子（FS）》

イノモトソウ属（Pteris），ヒカゲノカズラ科（Lycopodiaceae），ゼンマイ科（Osmundaceae），ウラボシ科（Polypodiaceae），ハナヤスリ属（Ophioglossum），コケシノブ科（Hymenophyllaceae），単条溝型胞子（Monolete spore），三条溝型胞子（Trilete spore）。

《その他の微化石》

Pseudoschizaea

次に各試料について花粉・胞子構成の特徴ならびに古植生，古気候について，下部から上部

へ順に述べる。

No. 10

針葉樹花粉は合計で12.0%を占め，主なものとしてマツ属が4.0%，スギ科，モミ属が各3.0%検出された。その他，低率ではあるが，ツガ，スギ属，コウヤマキ属等が検出された。

広葉樹花粉は合計で65.5%と多く，主なものとしてアカガシ亜属が24.5%，コナラ亜属が17.0%，ムクノキ属が4.5%，エノキ属が4.0%，クリカシ属が3.5%，ケヤキ属，トチノキ属がそれぞれ2.5%検出された。この他，クマシデ属，ハンノキ属，ハシバミ属，クリ属，ウルシ属，アカメガシワ属等の多種の花粉が検出された。

草本花粉は合計で18.5%を占め，主なものとしてイネ科が14.5%，ヨモギ属が2.5%検出された。

羊歯類胞子はウラボシ科，巣条溝型胞子が各1.0%検出された他は少なかった。

従って古植生は，アカガシ亜属，コナラ亜属，ムクノキ属，エノキ属などの広葉樹類を主体としてマツ属，モミ属等の針葉樹も良好に生育していたと推定される。

古気候は照葉樹であるアカガシ亜属やクリカシ属が高率で検出される。

No. 9

花粉の産出状況は No. 10によく似ている。

針葉樹花粉は合計で17.0%を占め，主なものとしてマツ属が6.5%，スギ科が4.0%，モミ属が3.0%検出された。

広葉樹花粉は合計で45.5%を占め，主なものとしてアカガシ亜属が19.0%，コナラ亜属が11.0%，クリカシ属が8.5%検出された。

草本花粉は合計で24.5%を占め，イネ科が18.0%，ヨモギ属が4.5%，スゲ科が2.0%検出された。

羊歯類胞子は単状溝型胞子が若干検出された他は少なかった。

従って古植生は，アカガシ亜属，コナラ亜属，クリカシ属等の広葉樹や，マツ属，スギ科，モミ属等の針葉樹が生育する林地が存在していたと推定される。またイネ科，ヨモギ属，スゲ科などの草本類も周囲に生育していたと考えられる。

No. 8

針葉樹花粉は合計で5.5%を占め，スギ科，マツ属，ツガ等が僅かながら検出された。

広葉樹花粉は合計で28.5%を占め，主なものとしてコナラ亜属が10.0%，クリカシ属が5.5%，アカガシ亜属が3.5%，ケヤキ属が2.0%検出された。また低率ではあるが，ブナ属，ハシバミ属なども検出された。

草本花粉は合計で36.5%を占め，主なものとしてイネ科が26.0%，ヨモギ属が10.0%検出さ

れた。

羊歯類胞子は合計で21.0%を占め，主なものとして単条溝型胞子が19.0%検出された他，ウラボシ科，ヒカゲノカズラ科，ハナヤスリ属で僅かながら検出された。

従って古植生は，イネ科，ヨモギ属，羊歯類が繁茂する草地が考えられる。草地の周囲には，コナラ亜属，クリカシ属，アカガシ亜属，ケヤキ属等の樹木から成る林地も存在していたであろう。

No.　7

針葉樹花粉はマツ属，スギ属，T・C・Tが僅かながら検出されただけで少なかった。

広葉樹花粉もクリカシ属，コナラ亜属が若干検出された他は少なかった。

草本花粉は合計で21.5%を占め，主なものとしてヨモギ属が19.0%，イネ科が1.5%検出された。

羊歯類胞子は合計で69.0%と非常に多く，その大部分は単条溝型胞子で61.0%検出された。この他，低率であるが，イノモトソウ属，三条溝型胞子，ヒカゲノカズラ科が若干検出された。

従って古植生は，羊歯類が繁茂し，ヨモギ属，イネ科等の生育する草地が推定される。

古植生は，樹木が少なくはっきりしないが，今まで高率で検出されたアカガシ亜属，クリカシ属などが減少または検出されないことから，No. 10，No. 9，No. 8と比較すると若干の変化も推定できる。

No.　6

全体的に花粉・胞子は少なかった。

針葉樹花粉は合計で7.0%を占め，コウヤマキ属，スギ科，マツ属等が若干検出された。

広葉樹花粉も合計で7.0%であり，コナラ亜属，クリカシ属，トチノキ属が若干検出された。

草本花粉は合計で31.0%で，ヨモギ属が21.0%，イネ科が10.0%検出された。

羊歯類胞子は合計で50.0%を占め，主なものとして単条溝型胞子が30.0%，ウラボシ科が6.0%，ハナヤスリ属が5.0%，ヒカゲノカズラが3.0%検出された。

従って古植生は，羊歯類やヨモギ属，イネ科などの草本類の生育する草地が考えられる。

No.　5

No，6より更に少なく，合計で50個体を得たにすぎない。

花粉・胞子構成は，樹木が少なく草本と羊歯類が主である。

草本花粉は合計で12.0%であり，イネ科，ヨモギ科，キク亜科が数%で検出された。

羊歯類胞子は合計で74.0%を占め，単条溝型胞子をはじめとしてヒカゲノカズラ科，ウラボシ科が各8.0%，イノモトソウ属が6.0%，ゼンマイ科が4.0%検出された。

従って古植生は，羊歯類とイネ科，ヨモギ属などの草本が生育していたと推定される。

No. 4

針葉樹花粉は合計で5％と少なく，マツ属，コウヤマキ属などが若干検出された。

広葉樹花粉はクリカシ属が5.0％検出された他は少なく，アカガシ亜属，ケヤキ属等が僅かに検出された。

草本花粉は合計で49.5％と多く，大部分はヨモギ属によって占められ36.0％検出された。この他，イネ科が8.0％，キク亜科が3.0％，それにタンポポ亜科，スゲ科などが僅かに検出された。

羊歯類胞子は合計で36.0％を占め，主なものとして単条溝型胞子が13.0％，ゼンマイ科が10.0％，ウラボシ科が9.0％，ヒゲノカズラ科等が2.5％検出された。

従って古植生は，ヨモギ属を主体とし，イネ科，キク亜科，タンポポ亜科などの草本類や，ゼンマイ科，ウラボシ科，ヒカゲノカズラ科等の羊歯類の生育する草地が存在していたと考えられる。

No. 3

針葉樹花粉は合計で12.0％を占め，主なものとしてコウヤマキ属が5.0％，モミ属，マツ属，ツガが各2.0％検出された。

広葉樹花粉は合計で20.0％を占め，クリカシ属が13.0％，コナラ亜属が5.0％，クリ属，アカガシ亜属が若干検出された。

草本花粉は合計で35.0％を占め，イネ科が21.0％，ヨモギ属が7.0％，キク亜科が5.0％，タンポポ亜科が2.0％検出された。

羊歯類胞子は合計で29.0％を占め，主なものとしてウラボシ科が13.0％，単条溝型胞子が9.0％，イノモトソウ属が5.0％検出された。

従って古植生は，イネ科，ヨモギ属，キク亜科等の草本類や，ウラボシ科，イノモトソウ属等の羊歯類が生育する草地が存在したと推定される。

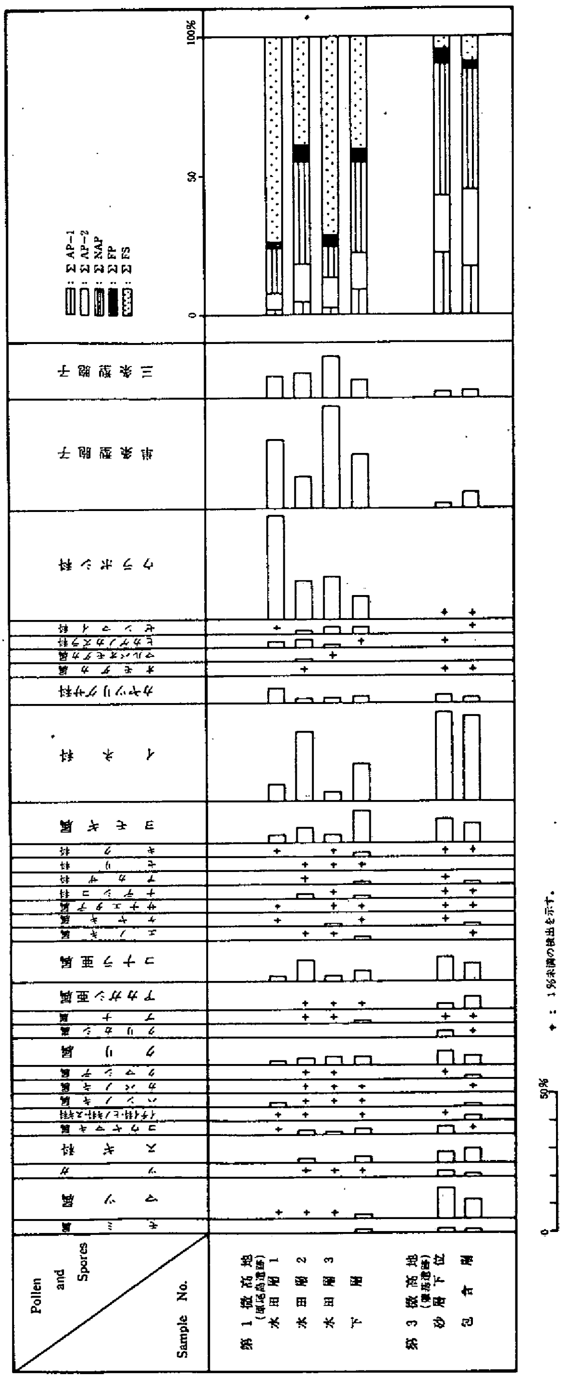
この草地の周囲には，コウヤマキ属，クリカシ属，コナラ亜属等の樹木が散在して生育していたと考えられる。

No. 2

針葉樹花粉は合計で9.2％を占め，主なものとしてスギ科が3.6％，コウヤマキ属が2.8％，マツ属が2.0％検出された。

広葉樹花粉は合計で24.4％を占め，主なものとしてクリカシ属が12.4％，コナラ亜属が8.4％，アカガシ亜属が2.0％検出された。

草本花粉は合計で37.6％を占め，主なものとしてイネ科が20.8％と多く検出された他は，ヨ



第504図　百間川原尾島遺跡丸田調査区・百間川兼基遺跡大上田調査区主要花粉・胞子化石ダイアグラム

モギ属が4.8%，ナデシコ科，アカザ科が各3.2%，キク亜科が2.8%検出された。

羊歯類胞子は合計で23.6%を占め，主なものとして単条溝型胞子が16.0%，ウラボシ科が3.6%，イノモトソウ属が2.4%検出された。

従って古植生は，イネ科を主体とし，ヨモギ属，ナデシコ科，アカザ科等の草本や，ウラボシ科，イノモトソウ属等の羊歯類が良好に生育する草地が考えられる。草地の近くにはクリカシ属，コナラ亜属，スギ科，コウヤマキ属等の樹木が林地を形成していたと考えられる。

No.　1

針葉樹花粉は合計で15.3%を占め，主なものとしてコウヤマキ属が6.0%，スギ科が5.9%，マツ属が3.0%検出された。

広葉樹花粉は合計で20.7%を占め，主なものとしてクリカシ属が10.7%，コナラ亜属が3.7%，アカガシ亜属が2.0%，トチノキ属が1.7%検出された。

草本花粉は合計で44.0%と多く，主なものとしてイネ科が23.6%，ヨモギ属が11.7%，スゲ科が3.0%，キク亜科が2.7%検出された。

羊歯類胞子は合計で16.7%を占

め，主なものとして単条溝型胞子が9.3%，三条溝型胞子が2.0%，ウラボシ科が1.7%，ゼンマイ科が1.3%検出された。

従って古植生は，イネ科，ヨモギ属を主体とし，スゲ科，キク亜科などの草本や，ウラボシ科，ゼンマイ科などの羊歯類が繁茂する草地が存在していたと考えられる。草地の周囲ではコウヤマキ属，スギ科，マツ属などの針葉樹や，クリカシ属，コナラ亜属，アカガシ亜属等の広葉樹が生育していたと推定される。

以上，各試料の花粉・胞子構成の特徴から花粉帯に分けて，古植生の変化を述べると次のようになる。

A　花粉帯（No. 10～No. 8）

No. 10から No. 8までの3試料がこの花粉帯に相当し，No. 10と No. 9はアカガシ亜属，クリカシ属などの照葉樹とコナラ亜属が主体となって広葉樹林を形成していたと考えられる。マツ属，スギ属等の針葉樹も生育していたであろう。

No. 8になると樹木は減少し，イネ科，ヨモギ属，羊歯類が多く生育する植生へと変化がみられる。

B　花粉帯（No. 7～No. 4）

No. 7から No. 4までの4点がこの花粉帯に相当し，その特徴は，樹木が更に減少し，反面，羊歯類やヨモギ属が急増する植生へと変化がみられた。

従ってこの帯では，何らかの影響によって草地化の進んだ時期と考えられる。

C　花粉帯（No. 3～No. 1）

No. 3から No. 1までの3試料であり，B花粉帯で急増した羊歯類やヨモギ属は減少し，イネ科に増加がみられた。

樹木ではクリカシ属，コナラ亜属，マツ属，コウヤマキ属，スギ科等が増加し，樹木もA花粉帯に近い状態まで回復したと推定される。

以上のことを簡単にまとめると表―63のようになる。

表―63　試料表

試料番号	花粉帯	花粉帯の特徴
No. 1 No. 2 No. 3	C	イネ科を主体とし，ヨモギ属，キク亜科，羊歯類が繁茂した草地。 周囲にはクリカシ属，コナラ亜属，マツ属，スギ科，コウヤマキ属等が生育する。
No. 4 No. 5 No. 6 No. 7	B	羊歯類とヨモギ属優占の草地。 樹木は極くまれである。

No.　8 No.　9 No.　10	A	アカガシ亜属，コナラ亜属，クリカシ属など暖温帯性の照葉樹林が推定される。

前回（1979）行った結果と比較すると，A花粉帯は第三微高地（兼基遺跡）の構成に近似した構成を示す。またC花粉帯は第一微高地（原尾島遺跡）水田層—2の構成に近似した構成を示す。

更に上記のような花粉構成から，この遺跡における森林植生の変化を考察すると，瀬戸沿岸のいくつかの遺跡（例　上東遺跡）との類似点が認められる。即ち，今回の柱状試料の最下部は地表より約3mと見なされるが，試料 No. 10より No. 8までの間は常緑カシ類（アカガシ属他）が優勢で，これらに伴い落葉カシ類（コナラ属他）も共存している。

C^{14} 年代が伴っていないので的確には判断し得ないが全層の当然堆積層から見て花粉帯R—Ⅲa～Ⅲbに相当するものと見なされる。

R—Ⅲaの減暖期でも，瀬戸内沿岸では照葉樹林が繁茂を続けていたと指摘されているのを裏付けしている。

試料 No. 7～No. 4の間は花粉構成上草本のヨモギ属や胞子が著しく増加している層は略々地表より2m前後と推定されるが，何らかの人為的な変革が生じた結果ともうけとられる。

更に上位の試料の No. 3～No. 1においてはイネ科花粉の再増加が認められるが，他の遺跡の稲科花粉の調査と併せて考えイネ属とみなしてもよい。只，この遺跡におけるB花粉帯の意味するものが，上東遺跡における無花粉層に相当するものかどうか検討を要する。

（付表および写真は省略する。）

岡山県百間川遺跡試料花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

昭和54年10月31日

はじめに

岡山県教育庁文化課殿より，埋蔵文化財発掘調査に伴い，花粉分析のご依頼を受けました。このほど分析が終了しましたので，その結果をご報告致します。

1.　試料

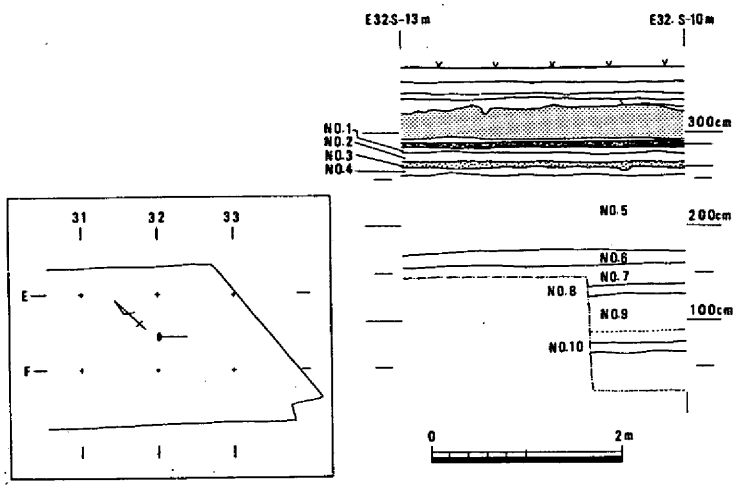
試料は，第1微高地（原尾島遺跡）4点，第3微高地（兼基遺跡）2点の合計6点である。各試料の試料番号，試料名，土質，花粉胞子産出傾向等については表—64に記載した。

2. 花粉分析の結果と考察

花粉分析の結果は，各試料について鑑定した花粉・胞子化石の総個体数を基数として，各花粉・胞子化石の百分率を算出し，付表—1として後掲した。その中から主なものについて第506図のダイアグラムを作成した。同様に写真図版（ＰＬＡＴＥ・１，２，３）を作成したので参照されたい。

このたびの分析の結果，以下にあげる花粉・胞子化石が検出された。

《ＡＰ—１（針葉樹花粉）》



第505図　花粉分析サンプル採取位置

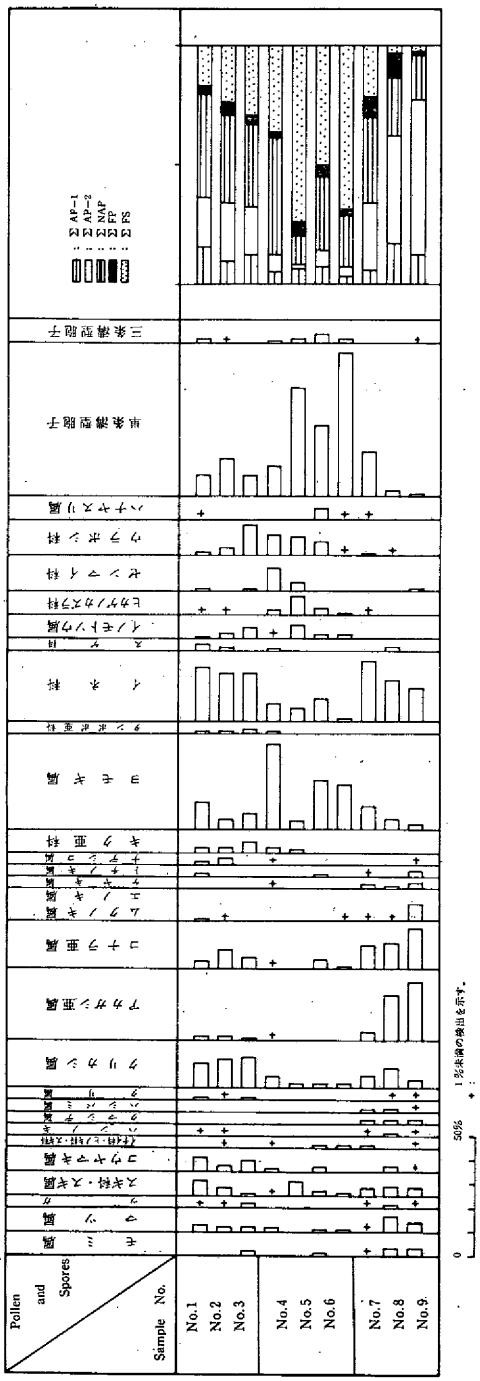
Abies（モミ属），Pinus（マツ属），Tsuga sieboldii（ツガ），T. diversifolia（コメツガ），Taxodiaceae（スギ科），Cryptomeria（スギ属），Sciadopitys（コウヤマキ属），T. C. T.（Taxaceae イチイ科，Cupressaceae ヒノキ科，Taxodiaceae スギ科）。

《ＡＰ—２（広葉樹花粉）》

Salix（ヤナギ属），Alnus（ハンノキ属），Betula（カバノキ属），Carpinus（クマシデ属），Corylus（ハシバミ属），Castanea（クリ属），Castanopsis（クリカシ属），Fagus（ブナ属），Cyclobalanopsis（アカガシ亜属），Lepidobalanus（コナラ亜属），Celtis（エノキ属），Zelkova（ケヤキ属），Moraceae（クワ科），Aesculus（トチノキ属）。

《ＮＡＰ（草本花粉）》

Persicaria（サナエタデ属），Caryophyllaceae（ナデシコ科），Chenopodiaceac（アカザ科），Crusiferae（アブラナ科），Umbelliferae（セリ科），Carduoideae（キク亜科），Artemisia（ヨモギ属），Cichorioideae（タンポポ亜科），Gramineae（イネ科），Cyperaceae（カヤツリグサ科）



第506図　百間川原尾島遺跡川内調査区主要花粉胞子化石ダイアグラム

Sagittaria（オモダカ属），Caldesia（マルバオモダカ属），Portulaca（スベリヒユ属）。

《ＦＰ（形態分類花粉）》

Monocolpate pollen（単溝型花粉），Tricolpate pollen（三溝型花粉），Tricolporate pollen（三溝孔型花粉）。

《ＦＳ（羊歯類胞子）》

Lycopodiaceae（ヒカゲノカズラ科），Selaginellaceae（イワヒバ科），Osmundaceae（ゼンマイ科），Polypodiaceae Monolete spore（単条型胞子），Trilete spore（三条型胞子）。

《その他の微化石》

Pseudoschizaea（淡水生藻類）。

次に各試料の花粉構成，古環境について述べる。

第１微高地（原尾島遺跡）・水田層—1

針葉樹花粉は全体の1.8％と非常に少なく，Pinus, Sciadopitys, T. C. T. が僅かに検出されたにすぎない。広葉樹花粉は全体の5.9％と少なく Alnus, Castanea, Lepidobalanus, Zelkova が低率で検出された。

草本花粉は全体の16.2％を占めた。その主なものとして Gramineae が6.3％，Cyperaceae が5.4％，Artemisia が3.2％検出された。

羊歯類胞子は全体の74.3％を占め非常に多かった。その約半分が Polypodiaceae であり37.8％検出された。その他に Monolete spore が25.2％，Trilete sp-

ore が8.1%，Lycopodiaceae が2.3%検出された。

従って古環境は Polypodiaceae を主体にした羊歯類が非常によく繁茂した草地と言えよう。

この草地には Gramineae, Cyperaceae, Artemisia 等の草本も一緒に生育していたものと考えられる。

一方樹木は種類も乏しく，草地の周囲に Alnus, Lepidobalanus, Castanea 等が散在して生育していたものと言えよう。

古気候は温帯であろう。

第1微高地（原尾島遺跡）・水田層—2

針葉樹花粉は全体の4.8%と少なく，Pinus, Tsuga sieboldii, Taxodiaceae, Sciadopitys 等が僅かに検出されたに過ぎない。

広葉樹花粉は全体の13.4%であった。その約半分が Lepidobalanus であり7.9%検出された。その他に Castanea, Alnus, Carpinus, Cyclobalanopsis, Castanea, Celtis 等が低率で検出された。

草本花粉は全体の36.8%を占めた。その大部分が Gramineae であり，25.1%検出された。そして，Artemisia が5.6%の他，Caryophyllaceae, Chenopodiaceae, Umbelliferae, Cyperaceae, Sagittaria, Caldesia 等が低率で検出された。

羊歯類胞子は全体の39.4%を占めた。その主なものとして Polypodiaceae が14.3%, Monolete spore が11.7%，Trilete spore が9.1%検出された。

従って古環境は，Gramineae を主体にした草本と，Polypodiaceae を主体にした羊歯類の良く繁茂した草地と言えよう。この草地には Sagittaria, Caldesia が生育していたと考えられることにより，池沼の存在が推定される。

一方樹木類は Lepidobalanus を主体にして草地の周囲に生育していたものと考えられる。

古気候は温帯であろう。

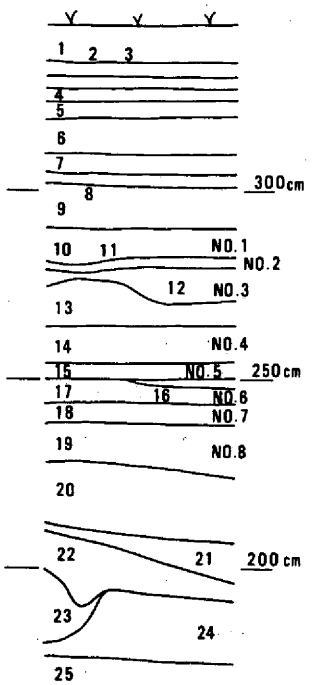
第1微高地（原尾島遺跡）・水田層—3

針葉樹花粉は全体の2.8%と非常に少なく，pinus, Tsuga sieboldii, Sciadopitys が僅かに検出されたに過ぎない。

広葉樹花粉は全体の10.8%であり，Castanea, Lepidobalanus, Alnus, Betula, Carpinus, Fagus, Cyclobalanopsis, Celtis, Zelkova 等が低率で検出された。草本花粉は全体の11.2%で Artemisia, Gramineae, Cyperaceae, Caldesia, Umbelliferae, Caryophyllaceae 等が3.5%以下の割合で検出された。羊歯類胞子は全体の71.6%と多産した。その半分以上が Monolete spore で37.1%検出され，その他に Polypodiaceae が15.5%，Trilete spore が15.1%検出された。花粉胞子化石以外のものに Pseudoschizaea が検出された。

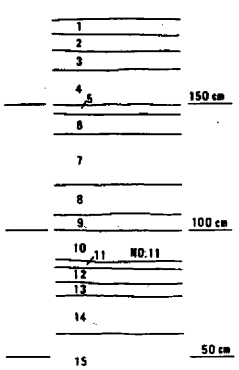
従って古環境は Polypodiaceae, Lycopodiaceae 等の羊歯類が非常に良く繁茂した草地と言えよう。この草地には Artemisia, Gramineae, Cyperaceae 等も一緒に生育していたものと考えられる。また Caldesia, Pseudoschizaea の検出により池沼が存在したものと言えよう。

一方樹木は Castanea, Lepidobalanus, Sciadopitys, Cyclobalanopsis, Zelkova, Alnus 等



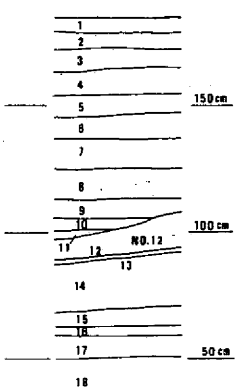
1. 暗灰色砂質土
2. 灰橙色微砂
3. 灰色微砂
4. 灰橙色微砂
5. 淡黄褐色微砂
6. 淡黄灰色微砂
7. 白黄灰色微砂
8. 白灰色粘土
9. 淡褐灰色粘土
10. 淡灰褐色粘土
11. 灰色粘土
12. 灰褐色微砂質粘土
13. 明灰黄色微砂
14. 淡黄褐灰色微砂
15. 淡黄灰色弱粘微砂
16. 淡黄灰色砂質土
17. 暗灰色粘土
18. 褐灰色粘質土
19. 暗灰黄色土
20. 淡黄灰色粘質土
21. 黄灰色微砂
22. 灰色粘質土
23. 淡褐灰色土
24. 黒灰色粘土
25. 淡灰黄色土

第507図　花粉分析サンプル採取位置



旧河道中西地点

1. 淡灰色粘土
(弥生時代後期水田層)
2. 灰青色粘土
3. ややうすい帯青黄色粘土
4. 淡灰色粘土
5. 淡青灰色粘土
6. 白色粘土
7. 淡灰色粘土
8. 暗灰色有機質混り粘土
9. 青灰白色粘土
10. 灰色粘土(縄文時代晩期)
11. 青灰色粘土
12. ややうすい淡灰色粘土
13. 淡灰色粘土
14. 灰色粘土
15. 灰褐色有機質混り粘土



旧河道中東地点

1. 淡灰色粘土(弥生時代後期水田層)
2. 灰青色粘土
3. ややうすい帯青黄色粘土
4. 淡灰色粘土
5. 淡青灰色粘土
6. 白色粘土
7. 淡灰色粘土
8. 暗灰色有機質混り粘土
9. 暗灰色粘土
10. 灰色粘土
11. 青灰白色粘土
12. 灰色粘土(縄文時代晩期)
13. 青灰白色粘土
14. 青灰色粘土
15. 青灰白色粘土
16. 灰色粘土
17. 青灰色粘土
18. 褐色植物

第508図　花粉分析サンプル採取位置

が草地の周囲に生育していたであろう。

古気候は温帯と思われる。

第1微高地（原尾島遺跡）・下層

針葉樹花粉は全体の9.1%であり，Taxodiaceae, Sciadopitys, Pinus, Abies 等が低率で検出された。

広葉樹花粉は全体の12.9%であり，Lepidobalanus, Castanea, Fagus, Celtis, Alnus, Salix 等が4%以下の割合で検出された。

草本花粉は全体の33.2%を占めた。その主なものとして Gramineae が13.4%，Artemisia が11.6%検出された。その他に Persicaria, Caryophyllaceae, Chenopodiaceae, Carduoideae, Cyperaceae 等が低率で検出された。

羊歯類胞子は全体の40.5%を占めた。その主なものとして Monolete spore が19.8%，Polypodiaceae が8.6%，Trilete spore が6.5%，Osmundaceae が2.6%検出された。

従って古環境は，Gramineae, Artemisia, Polypodiaceae などが良く繁茂した草地と考えられる。そして，この草地の周囲には Taxodiaceae, Sciadopitys, Castanea, Lepidobalanus などの樹木が生育していたものと言えよう。

古気候は温帯であろう。

第3微高地（兼基遺跡）・砂層下位

針葉樹花粉は全体の22.4%を占めた。その約半分が Pinus であり11.0%検出された。その他に Tsuga sieboldii が2.3%，Taxodiaceae が3.8%，Sciadopitys が3.0%等検出された。

広葉樹花粉は全体の20.5%を占めた。その主なものとして Lepidobalanus が9.1%，Castanea が4.9%，Castanopsis が2.3%，Cyclobalanopsis が1.9%検出された。

草本花粉は全体の47.1%を占めた。その大部分が Gramineae であり31.9%検出された。そして Artemisia が8.7%，Cyperaceae が3.0%の他に Sagittaria, Cichorioideae, Carduoideae, Crusiferae, Chenopodiaceae, Caryophyllaceae, Persicaria 等が低率で検出された。

羊歯類胞子は少なく全体の4.9%であった。

従って古環境は Gramineae を主体にして，Artemisia, Cyperaceae 等が生育した草地と考えられる。また Sagittaria が検出されたことにより，池沼が存在したものと言えよう。

一方樹木は Pinus, Lepidobalanus, Castanea 等が草地の周囲に林地を形成していたものと考えられる。

古気候は温帯に相当しよう。

第3微高地（兼基遺跡）・包含層

針葉樹花粉は全体の17.6%を占めた。その主なものとして Pinus が7.0%，Taxodiaceae が

5.3%検出された。

広葉樹花粉は全体の27.5%を占めた。その主なものとして Cyclobalanopsis が4.6%，Lepidobalanus が6.7%，Castanea が3.5%検出された。

草本花粉は全体の43.3%を占めた。その大部分が Gramineae であり30.6%検出された。その他に Artemisia が7.0%，Cyperaceae が2.1%等検出された。

羊歯類胞子は全体の9.2%であり，Monolete spore が5.6%の他に Trilete spore, Polypodiaceae, Osmundaceae 等が低率で検出された。

従って古環境は Gramineae を主体にして，Artemisia, Cyperaceae 等から成る草地と考えられる。また Sagittaria が検出されたことにより池沼が存在したものと言えよう。

一方樹木は，Pinus, Taxodiaceae, Castanopsis, Cyclobalanopsis, Lepidobalanus 等が主体となって草地の周囲に林地を形成していたものと考えられる。

古気候は Cyclobalanopsis が比較的多く産出することにより，照葉樹林帯に近い温和な気候と言えよう。

〈総合考察〉

以上の花粉分析の結果，第1微高地（原尾島遺跡）の水田層—1と水田層—3，水田層—2と縄文晩期包含層，第3微高地（兼基遺跡）の砂層下位と包含層は，それぞれ比較的似た花粉構成をしている。

第1微高地（原尾島遺跡）の水田層—1と水田層—3の場合，共に羊歯類胞子の割合が全体の70%以上であり，羊歯類の非常に良く繁茂した草地とされた。

第1微高地（原尾島遺跡）の水田層—2と下層の場合は，羊歯類胞子が草本花粉よりも少し多く検出されたものの，ほぼ同じ割合であった。また草本花粉の中では Gramineae が最も多産している点も類似している。

第3微高地（兼基遺跡）の砂層下位と包含層の場合は，草本花粉と樹木花粉の割合がほぼ同

表—64　試料表

Sample No.	名　　称	土　　質	花粉胞子化石産出傾向
1	第1微高地(原尾島遺跡)水田層1	黄灰色粘土	普　　通
2	〃　水田層2	〃	〃
3	〃　水田層3	暗灰黄色粘土	〃
4	〃　水田層4	黄灰色粘土	〃
5	第3微高地（兼基遺跡）砂層下位	灰色シルト質粘土	多　　い
6	〃　包含層	〃	〃

じであり，Gramineae を主体にした草地である点に於て良く似ている。また樹木の構成も良く似ていると言えよう。

第1微高地（原尾島遺跡）は何れの試料も羊歯類または草本類が良く繁茂した草地であり，樹木類は Lepidobalanus, Castanea 等を除いて非常に少なく，林地を形成するほど多く生育していなかったものと考えられる。

第3微高地（兼基遺跡）は Gramineae を主体とした草地の周囲に，Lepidobalanus, Pinus, Taxodiaceae, Castanea, Cyclobalanopsis 等が良好に生育し，林地を形成していたものと考えられる。

また，池沼の環境を示す試料として，第1微高地（原尾島遺跡）の水田層—2，水田層—3，第3微高地（兼基遺跡）の砂層下位と包含層があげられる。

何れにしても，各試料ともに Gramineae, Artemisia, Polypodiaceae 等の生育した草地の環境であり，その周囲に樹木が生育していたものと言えよう。

古気候は第3微高地（兼基遺跡）・包含層が照葉樹林帯に近い温和な気候であり，最も温かであったと思われる。その他の試料は大差なく，温帯に相当すると言えよう。

（付表および写真は省略する。）

岡山県百間川遺跡試料花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

昭和56年

はじめに

岡山県教育庁文化課より御依頼を受けました百間川遺跡試料の花粉分析の結果を御報告します。

1. 試料

分析試料は合計12点で，これらの試料の土質，花粉，胞子化石産出傾向について，表—65にまとめた。

2. 分析結果

花粉・胞子化石の抽出は，ＨＣＬ（塩酸）—48％ＨＦ（沸化水素酸）—比重分離（$ZnBr_2$）—アセトリシス処理—10％ＫＯＨの順で化学処理を行った。

花粉分析結果は，検出された花粉・胞子化石を基数とし，百分率を算定し，表（付表—1）

を作成した。また，主要花粉・胞子化石については，ダイアグラム第509図を作成した。さらに，主要花粉・胞子化石の写真図版（ＰＬＡＴＥ１，２）を作成したので参照されたい。

今回の分析によって検出された花粉・胞子化石は，以下に列挙するものである。

《針葉樹花粉（ＡＰ－１）》

Abies（モミ属），Picea（トウヒ属），Pinus（マツ属），Tsuga sieboldii（ツガ），Cryptomeria（スギ属），Sciadopitys（コウヤマキ属），T.C.T.〔Taxaceae（イチイ科）・Cupressaceae（ヒノキ科）・Taxodiaceae（スギ科）の３つの中の何れかであるが，鑑別の困難なもの〕。

《広葉樹花粉（ＡＰ－２）》

Juglans（クルミ属），Pterocarya（サワグルミ属），Salix（ヤナギ属），Alnus（ハンノキ属），Betula（カバノキ属），Carpinus（クマシデ属），Corylus（ハシバミ属），Castanea（クリ属），Castanopsis（クリカシ属），Fagus（ブナ属），Cyclobalanopsis（アカガシ亜属），Lepidobalanus（コナラ亜属），Aphananthe（ムクノキ属），Celtis（エノキ属），Ulmus（ニレ属），Zelkova（ケヤキ属），Moraceae（クワ科），Rhus（ウルシ属），Acer（カエデ属），Aesculus（トチノキ属），Ilex（モチノキ属），Tilia（シナノキ属），Araliaceae（ウコギ科），Ericaceae（ツツジ科），Phellodendron（キワダ属），Vitis（ブドウ属），Abelia（ツクバネウツギ属），Platycarya（ノグルミ属）。

表—65　試　料　表

試料番号	土　　質	花粉・胞子化石産出傾向　※
第２微高地(沢田遺跡)東縁水田層		
1	淡灰褐色粘土	A
2	灰色粘土	A
3	灰褐色微細砂質粘土	C
4	淡黄褐色微細砂	C
5	淡黄灰色弱粘微細砂	C
6	暗灰色粘土	A
7	褐灰色粘土	C
8	暗灰黄色土	R
SXO２遺構(沢田遺跡)		
9	淡灰褐黄土	R
10	暗灰褐色土	R
旧河道中西(沢田遺跡)		
11	灰色粘土	A
旧河道中東(沢田遺跡)		
12	灰色粘土	C

※A；Abundant 多い　C；Common 普通
R；Rare 極

《草本花粉（ＮＡＰ）》

Persicaria（サナエタデ節），Caryophyllaceae（ナデシコ科），Chenopodiaceae（アカザ科），Thalictrum（カラマツソウ属），Cruciferae(アブラナ科)，Geranium（フウロソウ属），Haloragis（アリノトウグサ属），Umbelliferae（セリ科），Carduoideae（キク亜科），Artemisia（ヨモギ属），Cichorioideae（タンポポ亜科），Gramineae（イネ科），Cyperaceae（カヤツリグサ科），Ranunculaceae（キンポウゲ科），Rubiaceae（アカネ科），Legumi-

nosae（マメ科），Sagittaria（オモダカ属）。

《形態分類花粉（ＦＰ）》

Triporate pollen（三孔型花粉），Tricolpate pollen（三溝型花粉），Tricolporate pollen（三溝孔型花粉）。

《羊歯類胞子（ＦＳ）》

Lycopodiaceae（ヒカゲノカズラ科），Osmundaceae（ゼンマイ科），Polypodiaceae（ウラボシ科），Pteris（イノモトソウ属），Monolete spore（単条溝型胞子），Trilete spore（三条溝型胞子）。

《その他の微化石》

Pseudoschizaea（淡水生藻類）

２ａ

第２微高地（沢田遺跡）東縁水田層

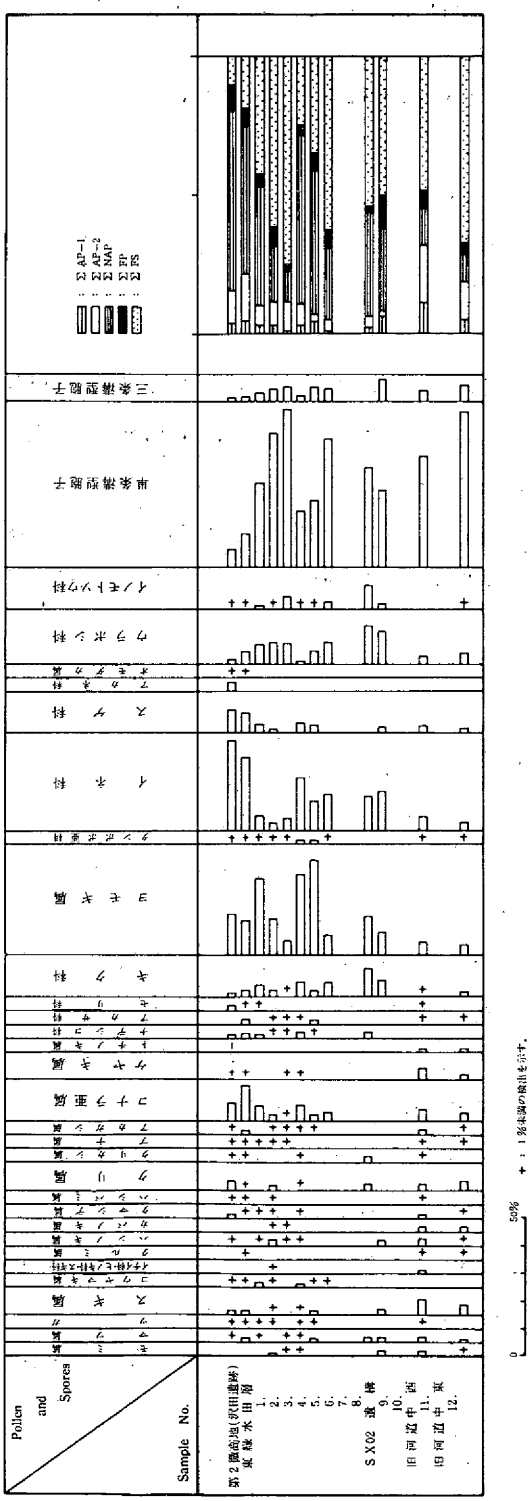
主要花粉・胞子の産出状況にもとづき，下位より下記の２亜帯に区分される。ＨＣ—Ｉ帯は，草本類と胞子の多産，樹木の低率の出現により，特徴づけられる。

○He—Ｉａ亜帯（No. 8～No. 6）

Artemisia が優占し，Monolete spore がこれに次ぎ，Gramineae が比較的高率で出現することが特徴である。Monolete spore は No. 8試料で46.4％と多産するが，その後減少し，No. 6 では20.4％になる。Artemisia は No. 8で7.2％であったのが，No. 7では34.0％に急増する。他に草本類では，Carduoideae, Polypodiaceae 等が検出された。樹木花粉は低率で，僅かに Lepidobalanus が2.0～5.6％の頻度で連続して検出された。

○He—Ｉｂ亜帯（No. 5～No. 1）

Monolete spore の減少，Gramineae の増加により特徴づけられる。他に Polypodiaceae の減少，Cyperaceae の増加がみられる。前帯で優占した Artemisia は No. 5 で5.2％に急減するものの再び増加し，No. 3では27.6％を占める。しかし，No. 2では12.4％に減少し，No. 1では14.8％を占める。Monolete spore は前帯で減少傾向であったのが，No. 5で57.2％に急増する。しかし，それより上位では減少し，No. 1では6.8％になる。Gramineae は，No. 5（4.0％），No. 4（2.5％）と僅かに減少するが，それより上位で急増し，No. 1で32.0％を占める。Cyperaceae は No. 4より上位で増加し，No. 1で8.0％を占める。Polypodiaceae は No. 4で8.0％を占めるが，減少し No. 1で1.6％となる。また抽水植物の Sagittaria が，No. 2，1で僅かに検出された。樹木花粉は，Lepidobalanus が No. 5から No. 2の間で増加し，No. 2で12.8％を占めるものの，No. 1では6.4％に減少する。他の樹木花粉は低率で，僅かに Castanea, Alnus, Cryptomeria 等が散在的に検出された。



第509図　百間川沢田遺跡高縄手A・B調査区主要花粉・胞子化石ダイアグラム

ＳＸＯ２遺構（沢田遺跡）

No. 10試料では，Monolete spore (28.0%)，Polypodiaceae (12.0%) 等の羊歯類胞子が全体の50%を占める。他に草本類では，Gramineae, Artemisia, Carduoideae が比較的高率に出現する。樹木花粉は低率で，僅かに Abies, Pinus, Cryptomeria, Alnus が検出された。

No. 9試料も，No. 10とほぼ同様の産出傾向を示し，羊歯類胞子が54.0%を占める。他に草本類では，Artemisia, Gramineae, Carduoideae が比較的高率に出現する。当試料も樹木花粉は低率で，僅かに Pinus, Castanea, Castanopsis が検出された。

旧河道中西（沢田遺跡）No. 11

Monolete spore が40.0%と多産する。他に草本類では，Gramineae, Artemisia, Polypodiaceae, Cyperaceae 等が僅かに検出された。樹木花粉は全体の32%を占めるものの，個々は低率で，Cryptomeria が5.6%で優勢で，Lepidobalanus, Zelkova 等が僅かに検出された。

旧河道中東（沢田遺跡）No. 12

当試料も Monolete spore が56.4%と多産する。他に草本類では，Polypodiaceae, Artemisia, Gramineae が僅かに検出された。樹木花粉は18.8%を占めるものの，No. 11

同様個々には低率で，Cryptomeria, Castanea, Lepidobalanus 等が僅かに検出された。

2 b　樹木花粉の産出傾向

樹木の変遷を検討するために，さらに検鏡し，樹木花粉を基数とした百分率を求めることを目的としたが，200個体鑑定できたのは No. 11のみで，他に No. 1，2，6，12が100あるいは125個体鑑定できた。しかし，他の試料では，花粉が少ないため不可能であった。従って当分析結果では，参考のため付表—1に検鏡できたものだけ樹木花粉を基数として百分率を算出して載せてあるが，ダイアグラムは作成していない。

樹木花粉の産出傾向について若干ふれておく。

第2微高地 東縁水田層においては，No. 6，2，1ともほぼ同様の産出傾向を示し，Lepidobalanus が42.0～54.4%の頻度で優占し，他に Cyclobalanopsis, Pinus, Cryptomeria, Scidopitys, Castanea 等が，12.0%以下の頻度で産出する。

No. 12，11では，両試料ともほぼ同様の産出傾向を示し，優占種は存在せず，16%以下の頻度で多くの種が検出された。その内では，Cryptomeria, Lepidobalanus, Alnus が比較的高率で，次いで Pinus, Cyclobalanopsis, Abies 等となっている。

3. 考察

3 a　古環境について

第2微高地（沢田遺跡）東縁水田層では，He—Ia 亜帯の No. 8試料の頃には，羊歯類を主として，Gramineae, Artemisia 等を伴う草地が考えられる。しかし，その後羊歯類は減少し，No. 7，6の試料では，Artemisia を主とし，羊歯類，Gramineae を伴う草地に変わったであろう。No. 6試料は，弥生時代後期水田層とされていて土質も水田土壌に近いものの，18.8%と耕作土と考えるには低頻度で，Artemisia が優占し，水田に伴う植物の花粉も検出されないことからも，当試料自体が水田土の試料とは考えにくい。しかし，付近に水田があった可能性はある。三好・臼井（1976）は，上東遺跡の花粉分析の結果，Oriza の出現，玄米，モミ，アワの栽培植物の種子・水田雑草・畦畔雑草の種子の出現等から，弥生時代後期に稲作の可能性が高いことを述べている。このことからも，比較的近距離にある当遺跡においても稲作が行われていた可能性が考えられ，イネ科花粉の詳細な検討を要する。He—Ib 亜帯（No. 5～1）の No. 5，4，3では羊歯類胞子が多産することから，羊歯類を主とし僅かに Artemisia, Gramineae 等が生育する草地が考えられる。しかし，徐々に羊歯類が減少し，Artemisia が増えてきていたであろう。No. 2，1になると，下部で多産した羊歯類胞子が低率になり，Gramineae が優占し，Cyperaceae が比較的高率で，抽水植物の Sagittaria 等が検出されることから，水田の可能性が考えられる。樹木花粉は，No. 8～No. 3の試料では，全体の約10%と低率で，付近に森林は存在しなかったものと考えられる。従って，多くの花粉は

周辺部及び遠方から飛来してきたものと思われる。ただ，ごく僅かに Lepidobalanus 等が生育していたであろう。No. 2，1においてもほぼ同様であり，付近に Lepidobalanus, Castanea 等が僅かに生育していたと考えられる。

ＳＸＯ２遺構では，羊歯類を主とし，Gramineae, Artemisia, Carduoideae 等が生育する草地が考えられ，樹木はほとんど生育していなかったであろう。ただごく僅かに Castanea, Castanopsis, Alnus 等が生育していた可能性はある。なお検出個体数が50個体と少ないため，正確な所はわからない。

旧河道中西及び東の両試料とも，羊歯類を主とし，Gramineae, Artemisia, Cyperaceae 等が僅かに生育していたであろう。樹木は，Lepidobalanus, Alnus, Zelkova, Cyclobalanopsis 等が僅かに生育していたのであろう。Cryptomeria 等の針葉樹は遠方から飛来したものと思われる。しかし，水平的，地域的に検討しないと正確な所はわからない。いずれにしても，全体の樹木花粉の頻度が低いことから，付近に森林はなかったものと考えられる。

以上のことをまとめたのが表―66である。

表―66　試料表

試料番号	花粉帯	優占花粉化石	花粉帯区分の主要要因	古環境
第2微高地東縁				
No. 1 No. 2 No. 3 No. 4 No. 5	He-Ib	Monolete Spore Gramineae	Monolete Spore, Polypodiaceae の減少 Gramineae, Cyperaceae の増加	下位では羊歯類を主とし，Artemisia を伴う草地であったのが上位では，Gramineae を主とし，Cyperaceae, Sagittaria 等を伴う草地に変わる。No. 2，1は，おそらく水田であろう。
No. 6 No. 7 No. 8	He-Ia	Artemisia Monolete spore	Artemisia の増加 Monolete spore の減少 Gramineae の比較的高率の出現	Artemisia 羊歯類を主とする草地
SXO 2 遺構				
No. 9 No. 10		Monolete spore		羊歯類を主とし，Gramineae, Artemisia を伴う草地
旧河道中西 No. 11		Monolete spore		羊歯類を主とする草地
旧河道中東 No. 12		Monolete spore		羊歯類を主とする草地

３ｂ　比較検討

当遺跡での前回の分析結果（1981）では，Ａ花粉帯では Cyclobalanopsis が優占し，Lepidobalanus, Castanopsis 等の樹木花粉が高率に検出されることから，そのころまでは，Cyclobalanopsis, Lepidobalanus 等の広葉樹林の存在が考えられる。しかし，Ｂ花粉帯では樹木は著しく低率であり，比較的頻度の高い Cryptomeria でも6.0％と低率で，大半の花粉は周辺部及び遠方から飛来してきたものと考えられる。従って，樹木花粉の産出状況から，第２微高地（沢田遺跡）東縁の水田層は少なくとも前回の分析（1981）のＢ花粉帯以上の層位のどこかに対比されるものであろう。

第２微高地（沢田遺跡）東縁の樹木花粉を基数とした No. 6，2，1について，No. 6は弥生時代後期の水田層，No. 2は古墳時代水田層と時代が判明しているので，ほぼ弥生時代後期から古墳時代を含む約2000年から1000年前の間について，他地域と比較検討を行った。当遺跡に距離的に近い上東遺跡（三好・臼井（1976））では，Cyclobalanopsis が優占し，Castanopsis, Lepidobalanus, Celtis がこれに次ぐ。上東遺跡は，全花粉・胞子における樹木の頻度が高く，付近に森林が存在していたものと考えられる。その頃の中国地方の山地部では，比較的 Cryptomeria, Lepidobalanus が高率で出現し，Cyclobalanopsis がこれらに次ぐ。平野部では，2000年前前後には，Cyclobalanopsis, Castanopsis 等の照葉樹が優占していたのが，人類の活動により破壊され，Pinus, Lepidobalanus 等の二次林が増加してきたと思われる。当遺跡の分析結果では，Lepidobalanus が優占し，Cyclobalanopsis, Pinus 等がこれに次ぐ。しかし，全体における樹木花粉の比重が低いことから，森林が付近に存在していたとは考えられず，花粉で優占する Lepidobalanus が二次植生として僅かに所々に生育し，大半の花粉は，周辺部及び遠方から飛来してきたものと考えられる。

中村（1967）は，各地の分析結果から2000～3000年前にスギ・ヒノキ・ツガ・コウヤマキ等の増加時代があり，その時代が湖面の上昇期と一致することから，降水量の増加にその原因を求めている。また，中村・畑中（1976）は，板付遺跡の分析結果より2880～3430年前の間に絶対量が減少し，組成比の上からも変化がみとめられ，これと同様な傾向が高地平野等の水田の分析結果にも認められることから，この植生破壊を降水量の増加が原因としている。これが広域的事実とすると，当遺跡の植生破壊も時代的には降水量の増加に起因すると考えられる。

上東遺跡においても2000～3000年前頃に，絶対花粉量が少なく，Cryptomeria が比較的高率に出現する傾向が見られるが，当遺跡のようにほぼ完全な植生破壊が行われたとは考えられない。当遺跡の植生破壊は人類活動によるものと大洪水による可能性があるが，試料からは大洪水とは考えにくい，人為的破壊と考えた方が妥当であろう。従って，当遺跡では弥生時代後期までには，おそらく人間活動によりほぼ全面的な照葉樹木の破壊があったと考えられ，その

後，二次植生としてのコナラ等が僅かに生育していたものと思われる。いずれにしろ，地域的に検討することが必要である。

参考文献

中村純（1967）花粉分析　古今書院　p. 232

中村　純・畑中健一（1976）板付遺跡の花粉分析学的研究　福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　p. 29—51

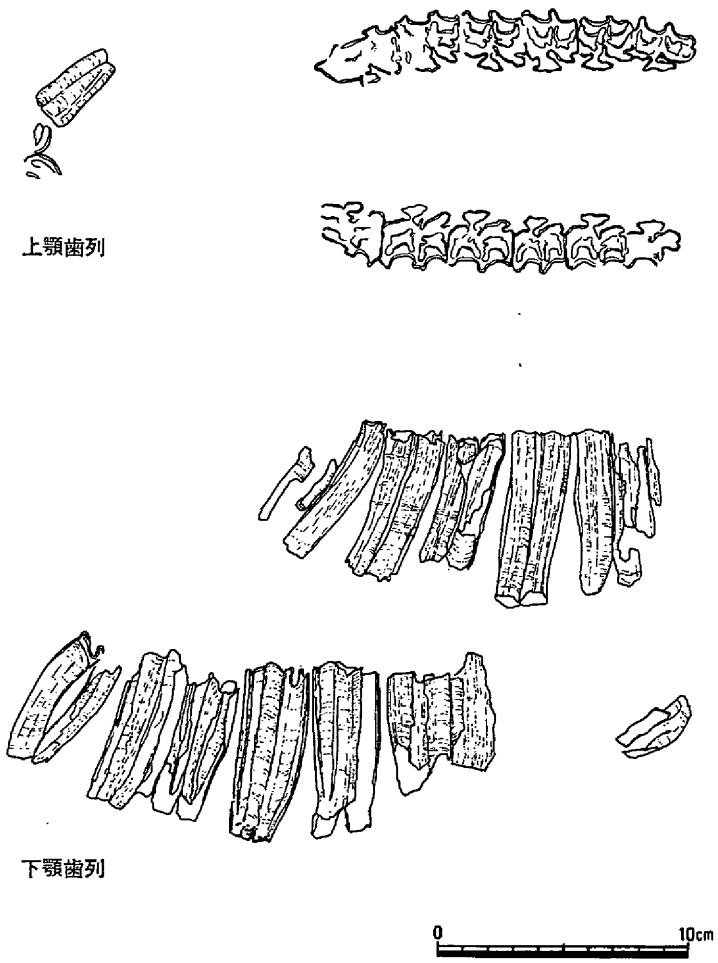
三好教夫・臼井洋輔（1976）上東遺跡（岡山県）の花粉分析「稲作の起源と伝播」年次報告　p. 30—35

百間川遺跡試料花粉分析調査報告（1981）（付表および写真は省略する。）

第６節　百間川沢田遺跡高縄手Ａ調査区溝―113出土の馬歯

金　子　浩　昌

本遺構において出土した馬歯は，上下の歯列であって，もともと上下の両顎骨中にあったものが，顎骨部分の溶解によって，歯の部分のみがのこったものである。次に計測値をあげてその大きさを示しておく。



第510図　溝―113出土馬歯実測図（1/3）

上顎歯計測(単位㎜)

	I^1	P^2	P^3	P^4	M^1	M^2	M^3
歯冠長：	19.0	34.0	26.2	25.0	23.2	22.9	24.5
歯冠巾：	10.0	23.1	26.9	25.0	24.0	24.2	20.6
全高　：				60.0		60.0	
		(L)	(R)	(R)	(R)	(L)	(L)

下顎歯計測(単位㎜)

	P^2	P_3	P_4	M_1	M_2	M_3
歯冠長：	39.5(+)	27.5	25.3	24.5±	22.8(−)	—
歯冠巾：	11.0	14.7	14.0	—	11.0	—
全高　：						
	(L)	(R・L)	(L)	(L)	(L)	

註　(R)・(L)は計測可能の側を示す

(R・L)は長・巾を左右両方の歯を使って便宜的に計測

歯はすべてエナメル質部分のみになっているので，その部分を用いる。

(+)，(−)は標本が変形し，原形よりも大若しくは小さくなっていると考えられる数値である。

P^2～M^3 臼歯列長　151.0

P^2～P^4 臼歯列長　84.0

M^1～M^3 臼歯列長　69.0

P^4 間巾 (P^4 の中央位置)　110

M^3 間巾 (M^3の中央位置)　102.7

P_2～M_3 臼歯列長　160.0±

P_2～P_4 臼歯列長　94.0+

M_1～M_2 臼歯列長　68.5+　(単位㎜)

表―67　下顎臼歯の比較　（単位㎜）

区分		P_2 長	P_2 幅	P_2 (エナメル幅)	P_3 長	P_3 幅	P_3 (エナメル幅)	P_4 長	P_4 幅	P_4 (エナメル幅)	M_1 長	M_1 幅	M_1 (エナメル幅)	M_2 長	M_2 幅	M_2 (エナメル幅)	M_3 長	M_3 幅	M_3 (エナメル幅)	P_2～M_3 臼歯全長	P_3～M_2 歯冠長
上東遺跡馬		30.5		(14.7)	26.5		(16.0)	25.0		(16.0)	24.0		(16.0)	25.0		(13.0)	27.0		(12.0)	156	102
川入遺跡馬		31.0	14.0	(13.0)	28.0	17.0	(15.0)	28.0		—	27.0	15.0	(14.0)	27.0	15.0	(13.5)	28.0	13.0	(12.0)	161	108
多々良遺跡馬		—			27.0		16.0	25.0		16.0	24.0		15.0	24.0		14.0	—			—	100
五島宇久島馬	L	31.5		13.4	25.5		17.0	25.7		17.2	22.7		16.7	22.5		15.5	29.0		13.6	156.9	96
	R	31.3		16.4	25.1		17.2	24.6		17.5	22.8		16.0	23.1		15.3	28.9		14.2	155.8	95.6
トカラ馬		31.0	16.0	(14.0)	27.0	17.5	(16.0)	25.0	17.5	(15.5)	24.0	17.0	(15.0)	25.0	14.5	(13.0)	26.0	13.5	(11.0)	157	100
御崎馬		33.0	16.0	(14.0)	32.0	18.0	(17.0)	31.0	17.0	(16.0)	26.0	16.5	(15.0)	31.0	15.5	(14.0)	—			166	113

（林田・鈴木・倉敷市上東遺跡出土の馬歯について岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 第２集 1974.3）

百間川沢田遺跡高縄手Ａ調査区208Ｊ溝―113出土の馬歯については上述したその計測のみの資料しかないが，大きさは，かつて岡山市川入遺跡において出土した馬骨とほぼ変らない大きさのものであり，その大きさは日本の中形在来馬に匹敵するものと考えられる。年令は７才前後と推定するが，判定の材料となった切歯の保存状況が悪いためにはっきりしたことは不明である。

表－2　弥生後期水田一覧表

番号	面積(㎡)	海　抜 (cm)	備　　考	番号	面積(㎡)	海　抜 (cm)	備　　考
308	—	237.6～247.3	水口308↔311	358	—	256～259.7	水口358↔359
310	(58.27)	230.4～234.1		359	—	257～260.4	
311	48.00	232.0		360	—		
313	(59.70)	229.1～236.4		361	(25.20)	298.6	水口361↕363
314	(71.07)	231.9～240.5		362	(12.80)	258.4～261.8	水口362↕364
315	51.73	234.5～242.6		363	22.13	259.1～262.0	水口362↔363
317	(49.80)	231.5～235		364	26.67	257.7～264.2	
318	56.93	232.5～236.9		365	23.60	259.7～260.7	水口365↕367
319	(30.00)	213.7～237.0		366	—	260.8～264.5	
320	40.93	235.3～246.3		367	25.20	240.6～245.3	水口367↕369
321	(56.00)	234.8～244.8		368	—	239.2～241.3	
322	(11.40)	237.2～240.8		369	16.27	240.7～244.1	
323	—			370	26.40	239.9～242.2	
324	(20.20)	243.8～251		371	—		
325	21.87	244.5～254.3		372	28.40	237.7～242.3	水口372↔375
326	14.67	245.1～256.9	水口326↔327	373	28.93	238.2～243.1	
327	23.07	247.6～257.8		374	—		
328	23.20	245.5～258		375	34.27	240.2～244.2	水口375↕376
329	21.47	245.4～257.2		376	24.13	238.6～243.9	水口373↔376　376↔378
330	(39.80)	242.1～255.7		377	45.20	240.1～253.3	
331	(9.60)	247.5～258.5		378	—	238.2～243.6	
332	(1.60)	242.0～244.8		379	41.47	240.4～254.2	
333	(1.25)	244.5～244.7		380	—	240.5～244.8	
334	(15.00)	228.5～241.5		381	—	239.6～241.7	
335	(13.13)	225.0～230.5		382	—		
336	(3.75)	227.0～229.0		383			
337	(19.17)	228.7～231.7		384	—	238.4～241.7	
338	(5.00)	231.5～234.8		385	—	239.2～242.5	水口385↕388　385↕386
339	(37.50)	227.6～239.2		386	—	251.7～252.9	
340	(15.00)	227.3～231.9	水口340↔341	387	—	238.9～243.2	
341	(37.50)	222.8～231.2		388	24.80	239.6～243.3	水口388↔390
342	(22.50)	222.3～227.9		389	—	240.6～243.6	
343	(17.00)	222.9～225.1		390	35.20	240.7～242.8	
344	(25.00)	219.5～223.5		391	(1.87)	241.2	
345	(5.00)	219.5～223.5		392	(28.00)	240.6～242.3	水口392↔393　390↔392　392↕395
346	(27.50)	223.5～249.5		393	(23.60)	237.7～241.9	
347	(4.16)	242～253		394	(6.50)	239.9～244.4	
348	—	254.6～263.8	水口348↔350	395	27.30	239.7～243.4	
349	—	255.5～264.7		396	22.40	237.7～242.3	水口396↕398
350	26.53	257.6～265.5		397	52.80	249.6～252.7	水口397↕401　395↕397
351	27.60	258.7～262.7	水口349↔351　351↔354	398	25.60	238.5～247.6	水口399↕398
352	19.73	260～267.5		399	21.80	258.6～263.9	水口399↕403
353	23.87	261.1～266.8		400	22.40	261.6～263.1	
354	27.33	261.2～265.2		401	20.80	260.1～264.1	水口400↔401　401↕405
355	12.67	261.4～267.3		402	27.20	260.1～263.1	水口402↕406
356	18.53	261.7～266.9	水口356↕357	403	(12.80)	261.1～262.6	水口403↕407
357	34.60	257.4～265.6		404	24.20	261.6～263.6	水口404↕410　400↕404

百間川沢田遺跡 2

番号	面積(㎡)	海　抜 (cm)	備　　考	番号	面積(㎡)	海　抜 (cm)	備　　考
405	25.20	259.1～263.6	水口405↔406　405↕410	454	15.73	259.6～261.6	水口454↔453　451↔454
406	34.40	260.1～264.1		455	21.60	217.1～225.2	水口455↔456
407	21.37	261.1～263.6	水口407↕413	456	4.18	215.4～226.4	
408	—	266.1～262.6	水口408↕404　408↕409	457	43.60	194.4～215.0	
409	—	262.1～262.6	水口409↔411	458	20.80	298.1～298.3	
410	2.0	259.6～262.6	水口410↕411	459	28.67	298.1～298.3	水口459↕460
411	27.07	260.6～264.1	水口411↔412	460	49.40	298.1～298.3	水口460↕461
412	29.73	262.6～264.1		461	—	298.2	
413	4.00	262.6～264.1		462	0.40	192.0～203.8	
414	25.60	239.4～244.1	水口414↔415　393↕414	463	27.00	191.3～201.7	水口463↕464
415	16.80	239.2～245.4	水口415↕417	464	47.60	188.0～204.6	
416	22.40	237.3～242.4	水口414↕416　416↔415　416↔417	465	(0.50)	192.5～193.7	
417	23.20	237.2～243.7		466	15.00	184.2～192.7	水口466↕467
418	24.00	238.4～242.2	水口418↕421　416↕418	467	42.80	181.6～190.8	水口463↔467　467↕468
419	22.13	239.7～242.6	水口417↔419　419↕420	468	—	181.5～187.3	
420	26.80	240.3～242.6	水口420↕422　420↕423	469	8.40	181.4～184.4	
421	19.33	236.5～241.2	水口421↕424	470	52.80	180.2～187.5	
422	23.47	238.1～241.8	水口421↔422　422↕424	471	(36.30)	176.3～182.5	
423	18.80	238.7～241.7	水口423↕425	472	7.60	178.2～182.8	
424	22.60	262.2～264.8	水口424↕426	473	52.80	176.7～180.5	
425	15.60	249.4～252.3	水口425↕423　425↕428　422↕425	474	(31.60)	176.4～180.0	
426	14.40	258.0～264.9	水口426↕430　426↔427	475	1.50)	178.7～185.4	
427	28.40	260.2～263.9	水口427↕430　427↔428	476	35.70	179.5～189.0	
428	17.20	261.6～263.3		477	(34.10)	175.8～185.7	
429	10.40	260.0～263.0	水口429↕431	478	39.60	191.2～217.8	
430	8.00	258.7～264.4		479	39.70	181.3～223.2	
431	11.47	262.0～263.9	水口431↕433	480	(11.60)	180.8～231.5	
432	15.60	261.4～264.0	水口432↕430	481	(22.90)	220～231.0	水口481↕482
433	29.33	263.0～264.9	水口433↔432	482	(30.40)	217.6～233.5	水口482↕483
434	19.73	238.2～244.2	水口434↔435	483	(11.00)	217.5～232.0	
435	14.40	238.3～243.6		484′	(5.00)	205	用水から
436	15.47	260.6～263.6	水口436↔439　434↕436	484	(17.50)	206	
437	16.00	260.6～263.6	水口435↕437	485	(54.16)	206	水口484↕485
438	13.07	260.6～262.6	水口438↔437　436↔438	486	(7.50)	206	水口485↔486
439	13.60	258.6～262.6		487	—	201	
440	0.8	259.6～262.6		488	(19.16)	201	
441	6.93	260.6～262.6		489	—	200	
442	8.80	259.6～262.6		490	(2.50)	200	
443	11.73	260.6～263.6		491	62.20	247.7～250.2	
444	12.00	257.6～260.6		492	59.20	248.1～250.1	水口491↔492　492↔494　492↔493
445	12.40	260.6～261.6		493	33.80	247.3～250.2	
446	19.60	258.6～261.6		494	47.80	246.5～250.1	水口494↔497
447	12.40	259.6～261.6		495	46.20	247～252.1	水口493↔495
448	10.67	260.6～262.6		496	(31.20)	244.7～250.6	水口494↔496　496↔499
449	1.20	260.6～261.6		497	(34.00)	275.0～278.5	水口497↔501
450	15.73	258.6～262.6		498	40.60	242.6～249	水口498↔502　495↔498
451	9.20	258.6～261.6		499	37.40		
452	1.47	261.6		500	40.80	274.0～276.5	水口497↔500
453	2.00	257.6～259.6		501	36.00	274.0～279.0	水口501↔505　497↔501

番号	面積(㎡)	海　抜 (cm)	備　　考	番号	面積(㎡)	海　抜 (cm)	備　　考
502	46.60	242.7～246.6		551	67.60	298.7～298.8	
503	38.60			552	50.40	226～236	水口552↔553　551↔552
504	40.20			553	27.86	226～236	
505	(26.80)	270.0～272.0		554	37.20	225～235	水口554↔555　553↔554
506	39.20	243.5～244.7	水口506↔509	555	31.06	227～236	
507	41.60			556	30.10	228.1～236.2	水口556↔557　555↔556
508	(30.40)			557	—	234～236	
509	38.40			558	(24.00)	298.9～299.0	水口558↔560
510	(39.60)		水口510↔513	559	—	298.9～299.1	
511	(4.80)			560	(52.60)	298.9	
512	52.20			561	(12.26)	298.8～298.9	
513	(28.40)			562	—	298.9～299.0	
514	(7.20)			563	—	298.8～298.9	
515	—			564	—	298.9～299.0	
516	(1.20)			565	(15.40)	299.1	
517	(4.90)			566	(13.60)	299.0	
518	(9.60)	250.1～251.4		567	(32.93)	298.9～299.0	
519	(20.80)	246.6～250.7		568	(4.10)	299.0	
520	(30.80)	247.5～250		569	(28.20)	298.9～299.0	
521	(6.67)	248.5～251.7		570	(36.93)	298.7～298.9	
522	(15.30)	248.1～250.4		571	(32.30)	298.7～298.8	水口571↔573
523	52.40	247.8～250.3		572	(10.93)	298.8	水口572↔573
524	(20.60)	245　～248.3		573	(61.60)	298.7～298.8	
525	34.80	246.1～249.9		574	(27.40)	298.7～298.9	
526	29.00	246～248.8		575	(2.80)	298.7～298.8	
527	(44.60)	243.3～246.3	水口527↔531	576	(7.33)	298.7～298.9	
528	45.40	245.0～247.8		577	(11.33)	298.7～298.8	
529	33.40	243.9～250.4		578	(35.80)	298.7～298.8	
530	(4.80)			579	(33.20)	298.7～298.8	
531	54.80	241.3～246.0		580	(6.93)	298.7	
532	43.30	232.5～243.0		581	(22.20)	298.7～298.8	
533	32.80	236.8～243.2		582	(12.40)	298.7	
534	(16.40)	241.5～245.0		583	(5.73)	298.7	
535	(37.00)	239.4～241.8		584	(18.80)	298.7	
536	59.80	237.0～247.4		585	(1.80)	298.7	
537	39.60	239.0～243.0		586	(19.60)	298.7	
538	39.20	232.5～241.5		587	(2.93)	298.7	
539	39.00	240.5～245.4	水口539↔543				
540	39.20	241.6～245.2					
541	37.60	240.3～243.7					
542	47.20						
543	—	243.5～255.0					
544	29.20	243.4～246.3					
545	43.20						
546	—						
547	—						
548	—						
549	(33.40)	298.8					
550	55.80	298.7～298.8	水口550↔551				

表－3　横田調査区竪穴式住居一覧表

細別 / 番号	種類	形	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(m²)	主柱穴	柱間距離(cm) 最大	柱間距離(cm) 最小	中央穴 プラン	中央穴 幅	中央穴 深さ	焼土 焼土	焼土 壇	壁体溝	付属施設 ベット状イコウ	付属施設 貯蔵穴	付属施設 カマド	付属施設 位置	柱穴長軸方向	時代	区名	遺物
1	竪穴式住居	円形	－	－	－	－	(280)	(200)	不整楕円	100×60	25	○	－	－	－	－	－	－	－	百・前・II	207 C・D	壺、甕、鉢、蓋 スクレイパー
2	〃	隅丸方形	380	－	－	－	－	－	－	－	－	○	－	－	－	－	－	－	－	百・古・II	207 E	甕
3	〃	〃	390	－	－	－	－	－	－	－	－	○	－	○	－	－	－	－	－	百・古・I	207 D	鉢
4	〃	〃	－	－	－	2	180	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	北西－南東	百・古・I	〃	壺、甕、高杯、鉢
5	〃	五角形	720	430	34＋α	5	310	280	不整楕円	106×45	25	○		－	－	－	－	－	－	百・古・I	206 D	壺、甕、高杯、器台
6	〃	隅丸方形	350	－	12.4＋α	2	205		不整楕円	160×75	10			○	－	○	－	－	東－西	百・古・I	〃	甕、高杯、製塩土器
7	〃	〃	545 (520)	510 (474)	27	4	260 (250)	250	円	63	8			○	○	－	－	－	－	百・古・I	205・6 D・E	壺、甕、鉢、高杯、管玉、鉄器
8	〃	〃	640	560	22＋α	4	275	255	長楕円	230×67	42			－	－	－	－	－	－	百・古・I	206 E・F	壺、甕、高杯、鉢、製塩土器、鉄鏃、砥、鉄片
9	〃	－	－	－	－	－	－	－	楕円	(137)	(10)				－	－	－	－	－	百・古・I	206 F	甕

表－4　横田調査区建物一覧表

番号	規模	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	桁行(cm)	梁間(cm)	面積(m²)	棟方向	柱穴掘方	検出地区	備考
1	1×1	177・189	142・154	177・189	142・154	2.8	MN－81°－E	円	206D・E	百・古
2	1×1	216・225	211・212	216・225	211・212	4.7	MN－10°－W	〃	〃	〃
3	2×2	188・205 214・208	122・113 158・112	393・422	235・270	10.3	MN－3°－W	円	206E	百・古
4a	2×1	145・165 156・157	226・245	310・313	226・245	7.3	MN－89°15′－W	〃	〃	〃
4b	2×1	140・162 154・163	213・212	302・317	213・212	6.6	MN－88°－E	〃	〃	〃
5	3×1	154～177 155～176	360	496	360	17.9	MN－6°－W	〃	205・6E	〃
6	1×2	297	141・147 138	297	288	8.6	MN－25°30′－W	〃	〃	〃
7	1×1	278	260	278	260	7.2	MN－13°30′－W	楕円	206E	〃
8	2×1(?)	141・132 162・147	240・254	273・309	240・254	(6.9・8.0)	MN－73°・74°－W	円	205E	〃
9	1×1	222・223	200	222・223	200	4.4	MN－95°－E	〃	206B・C	〃

表－5　横田調査区井戸一覧表

番号	区　分	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
1	206B	96× 75× 69	楕円形	甕	百・古・I
2	207E	82× 62×110	〃	〃	〃　・II
3	205C	190×200×155	不整円形	壺、甕、高杯、鉢	〃　・I
4	206D	138×118×220	〃	〃	〃　・I
5	207D	160×153×172	〃	甕	〃　・I
6	207E	111×102×129	ほぼ円形	甕、高杯	〃　・II
7	〃	163×148× 99	〃	壺、甕、高杯、鉢	〃　・I
8	208E	169×153×144	円形	甕、高杯	〃　・I
9	207E	105× 97×145	ほぼ円形	甕、鉢、高杯、製塩土器	〃　・I
10	206E	160×137×117	楕円形	壺、甕、鉢、高杯・製塩土器、ガラス滓	〃　・I
11	206E	115×108×187	〃	甕、高杯、椀、鉢、坩、台付椀	〃　・I
12	206E	(100)×(100)×(61)	円形	甕、高杯	〃　・I
13	206E	61× 53×107	長円形	壺、甕	〃・I

表－6　横田調査区土壙一覧表

番号	区　名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
1	201G	—	—		百・前・III
2	〃	70× 45× 15	楕円形	壺、甕、蓋、石器	〃
3	〃	—	—	壺、甕	〃
4	206D	75× 60× 44	楕円形	甕	〃
5	206F	—	—	壺	〃
6	207F	—×225×17～30	隅丸長方形(？)	壺	〃
7	205C	—×260× 10	長方形	高杯	百・中・III
8	206E	77× 77× 24	円形		百・中
9	〃	122× 90× 27	隅丸長方形		〃
10	〃	105× 78× 25	不整楕円形		〃
11	206E	115× 64× 8	不整長方形		百・中
12	206F	87× 85× 19	隅丸方形		〃
13	〃	37× 27× 20	楕円形		〃
14	〃	96(？)× 77× 25	隅丸長方形		〃
15	206F	116(？)× 48× 10 73× 52× 19	隅丸長方形 不整楕円形	甕	百・中・II
16	201F	106×　—× 14	—		百・古・I
17	202F	45× 45× 52	円形		百・古・I
18	205C	295×223× 10	隅丸長方形	甕、高杯	〃
19	207D	122× 93× 61	楕円形	甕	百・古・II
20	207D	203×113× 11	隅丸長方形		〃　・I～II
21	205D	105×102× 13	ほぼ円形	甕、高杯	〃　・II
22	206E	63× 53× 32	楕円形		百・古
23	206D・E	—× 91× 19	ほぼ円形	甕、鉢、高杯	百・古・I
24	〃	—×122× 35	〃	甕、高杯	〃

百間川沢田遺跡 2

表－7　横田調査区溝一覧表

番号	区　　名	幅 (cm)	深さ(cm)	断面形	出　土　遺　物	時　　期
1	201・2F・G	200	60	U字形	壺、甕、高杯、蓋、管玉	百・前・Ⅲ
2	205C	450	62	レンズ状	砥石、スクレイパー、壺、甕、蓋形土器	〃
3	205C・D	150	40	〃	甕、蓋形土器	〃
4	206B～D	94	22	〃	甕	〃
5	206E～207D	130	25	椀形	壺	百・前・Ⅱ
6	206F・C	90～130	15～30	V字形	壺、甕	百・前・Ⅲ
7	205D	30	12	〃		〃
8	206F	90	21	〃		〃
9	206F～207D	240～140	50～30	V字形	甕	〃
10	206E・F	75～95	10～20	〃		〃
11	207E	45	20	逆台形		〃
12	〃	40	20	〃		〃
13	207D	100～110	30	皿形		百・中・Ⅱ
14	〃	105	29	〃		〃
15	〃	84	17	〃		百・中
16	〃	50～65	12	〃		〃
17	201F・G	80～110	60	V字形	壺、甕、製塩土器	百・後・Ⅱ
18	〃	90	20	皿形		〃
19	203E	20～35	15	U字形		百・後
20	202F	30～40	5～10	皿形		〃
21	205C・D、206B	30～50	10～20	〃		〃
22	〃	30～60	2～10	〃		〃
23	〃	40～110	5～10	〃		〃
24	205C・D、206B	20～80	5～10	皿形		百・後
25	〃	40～80	5～10	〃		〃
26	204C、205B・C	20～45	10～15	U字形		〃
27	206B・C	110	10	皿形		〃
28	205B・C	35	10	〃		〃
29	206C	25	5	〃	土器片	〃
30	207C	30	5	〃	〃	〃
31	207D	130	55	U字形	〃	百・後・Ⅱ～
32	207E	60	5	皿形	〃	百・後
33	208E	60	5	〃	〃	〃
34	207E	30	5	〃	〃	〃
35	207、208E	20～35	5	〃	〃	〃
36	207、208F	70～100	5～10	〃	〃	〃
37	207E	38～56	5.6～8.5	逆台形		〃
38	〃	15～23	3.6～4.6	〃		〃
39	207F	55～62	4.7～6.1	〃		〃
40	〃	90～165	3～7	〃		〃
41	206E～207F	60～95	1.5～5.8	〃		〃
42	206E～F	70～75	1.5～2.1	〃		〃
43	207D～206E・F	165～215	4～6.8	〃		〃

番号	区名	幅 (cm)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	時期
44	207D	25	5	〃	土器片	百・古
45	〃	35	5	〃	〃	〃
46	〃	55	25	U字形	〃	〃
47	〃	35	10	皿形	〃	〃
48	〃	20	5	〃	〃	〃
49	207E	45	25	U字形	〃	〃
50	205C・D	45～100	15～20	皿形		〃
51	〃	50～100	15～20	〃	壺、甕、椀	〃
52	202F	30	7	〃		百・古・I
53	〃	75～95	10	〃		〃
54	201・2F・G	50～70	25	U字形		〃
55	204E	100～125	20	皿形		百・古
56	〃	110～140	10	〃		〃
57	206、207E	40	3～5	〃		〃
58	〃	45	5	〃		〃
59	207E	35	10	U字形		〃
60	〃	25～30	5～7	〃		〃
61	206E	30～35	6	〃	甕、器台	〃
62	206E	24	5	〃		〃
63	206E、206、207E	110	18	皿形	壺、甕、高杯	〃
64	〃	68	13	〃		〃
65	〃	87	24	U字形		〃
66	〃	78	16	皿形	甕、高杯	〃
63'	206F	72	11	皿形		〃
66'	〃	66	6	〃		〃
67	205C	40～70	2～6	〃		中世
68	206D	75～95	5～10	〃		〃
69'	206E	40～50	5	〃		〃

表－8　横田調査区柱穴列一覧表

番号	区名	柱穴数	柱間(cm)	全長(cm)	方向	柱穴掘方	時期
柱穴列－1	206E	5	110～147	499	MN－82°－E	ほぼ円形	百・古

表－9　横田調査区玉類一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
18	1	管玉	201、202F・G	溝－7・8	緑色凝灰岩	21.9	—	5.7	0.51	
76	2	〃	206E	竪穴式住居－7	碧玉	2.55	0.95	0.95	4.66	

表－10　横田調査区土製品一覧表

図	番号	遺　物	出土地区	遺　構	材　質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	備　考
65	1	紡錘車(未)	205C	土器溜り－1	土	43.3	45.0	6.0	20.56	
65	2	土　錘	206・7F	水田層	〃	(30.5)	13	—	2.14	
138	3	〃	205D	包含層	〃	(32.8)	31.6	24.7	28.4	
138	4	〃	205C	〃	〃	(37.4)	28.3	21.2	26.5	
143	5	〃	〃	〃	〃	(80.8)	(36.0)	27.0	77.63	
143	6	〃	206・7E	〃	〃	79	32	19	64.84	精製粘土
143	7	〃	205D	〃	〃	(52)	(22)	(17.5)	15.12	
143	8	〃	206E	〃	〃	(52)	23	(17.5)	24.36	
143	9	〃	207D	〃	〃	—	2.0	—	—	
143	10	〃	206B	〃	〃	49	15	10	—	
147	11	〃	206・7F	〃	〃	34.5	26	24.25	21.60	
147	12	〃	205・6D・E	〃	〃	43	10	10	3.72	

表－11　横田調査区石器・石製品一覧表

図	番号	遺　物	出土地区	遺　構	材　質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	備　考
11	1	スクレイパー	207D	竪穴式住居－1	サヌカイト	47.60	78.20	13.65	31.88	
〃	2	〃	207Da西	〃	〃	74.05	70.35	16.60	62.21	
12	3	楔形石器	藤樋	土壙－1・2	〃	22.45	23.90	6.10	3.50	
14	4	石　鏃	〃	土壙－3	〃	36.65	9.95	4.45	1.46	Ⅳ・完
19	5	〃	〃	溝－7	〃	23.30	17.05	3.00	0.84	Ⅱ・完
〃	6	〃	〃	〃	〃	25.20	18.85	3.60	0.91	〃
〃	7	〃	〃	〃	〃	36.00	20.55	3.15	1.52	〃
〃	8	〃	〃	溝－8下層	〃	11.95	15.75	3.10	0.48	Ⅱ・欠
〃	9	スクレイパー	〃	〃	〃	42.20	39.90	9.35	16.45	
〃	10	〃	〃	〃	〃	41.50	50.10	9.35	20.12	
〃	11	楔形石器	〃	〃	〃	20.60	23.60	3.75	3.01	
〃	12	スクレイパー	〃	〃	〃	23.40	45.70	6.35	5.44	
〃	13	〃	〃	〃	〃	62.90	70.65	14.25	55.93	
〃	14	〃	〃	〃	〃	35.10	39.60	7.25	12.40	
23	15	砥　石	205C	溝－2上層		30.50	20.70	13.60	—	
〃	16	スクレイパー	〃	〃	サヌカイト	38.0	59.0	5.0	13.60	
〃	17	〃	〃	溝－2下層	〃	45.0	52.5	4.5	14.32	
65	18	砥　石	〃	井戸－4周辺	頁岩	71.70	37.40	16.80	64.23	
〃	19	不明石器	206C	包含層		142.35	48.75	22.05	193.16	
〃	20	敲　石	208E	Pit	花崗斑岩	137.30	105.70	68.50	1340.00	
66	21	石　鏃	205C、205D、206C	灰白色粘土層除去中	サヌカイト	15.0	11.0	2.5	0.54	Ⅰ・完
〃	22	〃	207D	包含層	〃	16.05	13.25	2.70	0.41	Ⅱ・ほぼ完
〃	23	〃	〃	〃	〃	18.25	14.20	3.60	0.55	〃

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
〃	24	〃	〃	〃	〃	24.95	12.20	2.70	0.71	I・欠
〃	25	〃	206C	西側土手さがり斜面	〃	21.5	16.5	5.0	1.06	II・完
〃	26	〃	205C	包含層	〃	23.0	12.0	3.0	0.71	IV・欠
〃	27	〃	藤樋	微高地上、暗褐色粘質土除去中	〃	15.95	10.45	2.50	0.32	(一)欠
〃	28	〃	206C	包含層	〃		15.5	3.0	0.71	I・欠
〃	29	〃	206D	〃	〃	43.0	23.0	6.0	2.91	IV・完
〃	30	〃	206F	黄褐色粘性土(微高地上層)	〃		13.0	2.5	0.54	II・先欠
〃	31	〃	藤樋	暗灰褐色粘土除去中	〃	26.00	18.35	3.60	1.51	II・完
〃	32	〃	〃	微高地上、暗褐色粘質土除去中	〃	24.35	13.45	3.60	0.94	〃
〃	33	〃	〃	淡灰色粘土除去中	〃	21.65	16.90	2.50	0.70	〃
〃	34	〃	206E	暗褐色粘土(微高地)	〃			35.0	0.73	II・欠
〃	35	石槍	207Dと207D間土手	淡灰褐色泥砂	〃	54.0	14.0	8.0	5.69	欠
〃	36	楔形石器	藤樋	後期水田床土の直下層(白)及び下層水田上層の暗褐灰質粘土	〃	27.40	44.50	7.35	10.40	
〃	37	スクレイパー	205C、206C他	上層水田除去中、下層水田検出中	〃	30.0	46.0	5.5	9.52	
〃	38	石小刀状石器	藤樋	微高地、Base－10cm	〃	22.90	31.80	6.20	4.11	
〃	39	のみ状石器	〃	微高地上、暗褐色粘質土除去中	〃	31.00	21.10	5.90	4.07	
〃	40	楔形石器	207D	包含層	〃	29.40	21.45	7.20	5.12	
〃	41	〃	藤樋	水田耕土、水田耕土床土	〃	29.90	55.80	6.45	17.62	
67	42	打製石包丁	205C、206C	暗灰色粘土層	サヌカイト	38.0	44.0	9.0	15.10	欠
〃	43	スクレイパー	207Da東		〃	50.0	71.0	9.0	44.34	
〃	44	〃	205E	微高地基盤層	〃	49.0	80.5	7.5	25.57	

表－12　横田調査区金属器一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
63	1	鎌	206・7E・F	水田層	鉄	22	(23)	2	3.69	
76	2	不明	205・6D・E	竪穴式住居－7	〃	(26)	7	5	0.94	
78	3	鉈	206F	竪穴式住居－8	〃	90	15	13	9.94	
〃	4	鏃	〃	〃	〃	53	15	5	6.08	
〃	5	不明	〃	〃	〃	—	—	—	2.47	
〃	6	不明	〃	〃	〃	—	—	—	—	
147	7	鏃(？)	〃	包含層	〃	38	12	9	7.22	
147	8	鏃	206・7F	包含層	〃	39	19	4	4.94	

表－13　横田調査区土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
包含層(第6図)									
1	深鉢形土器	—	—	—	○口縁端部キザミメ、外面貝殻条痕	灰白色	微砂	良好	
2	〃	—	—	—	○口唇部にキザミメ。	暗褐色	砂粒含	良	
3	鉢形土器	—	—	—	○円面ヘラ描沈線2条。内面下半ヘラケズリ。	黒褐色	砂粒含	良	
4	深鉢形土器	—	—	—	○外面に横方向爪形文。	〃	〃	〃	
5	〃	—	—	—	○キザミメ貼付凸帯、内外面ハケ状工具。	にぶい橙色	砂粒多く含	良好	
6	〃	—	—	—	○凸帯にキザミメ。内面ナデか	黒褐色	〃	〃	
7	〃	—	—	—	○外面ヘラ描沈線文。	灰白色	砂粒含	〃	
竪穴式住居－1 (第10・11図)									
8	壺形土器	7.3	4.1	27.0	○頸部に3条のヘラガキ沈線。	暗赤褐色	微砂	良好	
9	〃	—	—	—	○胴部にヘラガキ施文。	〃	細砂含む	〃	
10	〃	6.0	4.2	23.5		〃	細砂	〃	○一部黒斑。
11	〃	14.2	—	—	○頸部削り出し凸帯。	〃	〃	〃	
12	〃	—	8.3	—	○外面ヘラミガキ。肩部ヘラガキ施文。	黄灰褐色	〃	〃	
13	〃	—	8.5	—	○外面ヘラミガキ。内面ナデ。	暗赤褐色	石英粒含む	〃	
14	〃	—	7.2	—		〃	〃	やや不良	○一部黒斑。
15	蓋形土器	34.9	6.8	15.3	○内面ナデ。	赤黄褐色	細砂	〃	○　〃　。
16	底部	—	10.8	—	○外面ハケメ？	黄褐色	〃	〃	
17	〃	—	8.0	—		暗赤褐色	微砂	〃	
18	〃	—	6.6	—		暗褐色	粗砂含	良好	
19	鉢形土器	10.8	6.2	9.4	○外面ヘラミガキ。円孔は2個1対。	〃	細砂	〃	○下半に黒斑。
土壙－1 (第12図)									
20	壺形土器	—	—	—	○内面指頭オサエ、ユビナデ。	鈍い赤褐色	細砂	良好	○径、傾き不詳。
21	〃	—	—	—	○外面ヘラ描き沈線、内面ユビナデ。	鈍い橙色	〃	〃	
22	甕形土器	—	8.4	—	○外面ヘラミガキか。	灰白色	〃	〃	
土壙－2 (第12図)									
23	甕形土器	—	—	—		灰白色	細砂	良好	
24	蓋形土器	—	4.8	—	○外面ヘラミガキ。	淡褐灰色	〃	〃	
土壙－3 (第14図)									
25	壺形土器	18.0	—	—	○体部外面ヘラミガキか。	淡褐灰色	細砂	良好	○傾きは不詳。
26	甕形土器	27.9	—	—	○体部内面指頭オサエ、ユビナデ。	鈍い黄橙色	〃	〃	○外面に煤付着。
27	〃	27.0	—	—	○体部内面ナデアゲ。	鈍い橙色	〃	〃	○外面煤、黒斑。
28	〃	19.5	—	—	○沈線文の下位に円形浮文。	褐灰色	〃	〃	○外面煤。
29	〃	—	—	—		鈍い橙色	〃	〃	○口径、傾き不詳。
30	〃	8.8	—	—	○口縁端部に鋭いキザミメ。	浅黄橙色	微砂	〃	○外面黒色。
土壙－4 (第15図)									
31	甕形土器	33.0	8.6	36.15	○17条のヘラガキ沈線。2列のヘラ刺突。	にぶい橙色	石粒多量含	やや甘	○内面丁寧なナデ
土壙－5 (第16図)									
32	壺形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ、頸部内面シボリメ。	橙色	砂粒細砂含	良	
土壙－6 (第17図)									
33	壺形土器	—	—	—	○体部外面にヘラガキ。沈線、刺突文。	橙色	砂粒多く含	良好	○小片
溝－1 (第18～22図)									
34	壺形土器	—	12.0	—	○外面に貼り付けキザミメ凸帯。	鈍い橙色	細砂	良好	
35	〃	—	8.2	—	○肩部外面に7条のヘラ描き沈線。	〃	〃	〃	
36	〃	—	13.4	—		褐灰色	〃	〃	
37	〃	—	—	—	○口縁部に紐孔。ヘラ描き沈線と列点。	灰白色	〃	〃	
38	〃	—	—	—	○貼り付け凸帯。	〃	〃	〃	○外面煤
39	〃	—	—	—	○外面に貼り付けキザミメ凸帯。	〃	〃	〃	
40	〃	—	—	—	○外面にヘラ描き沈線。	褐灰色	〃	〃	
41	〃	—	—	—	○外面にヘラ描き沈線と列点。	灰白色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
42	壺形土器	—	—	—	○外面にヘラガキ沈線。	灰白色	細砂	良好	
43	甕形土器	25.2	9.0	31.2	○体部外面タテハケメのちヘラミガキ。	褐灰色	〃	〃	○外面煤。
44	〃	21.2	7.6	28.7	○外面に10条。ヘラガキ沈線。	〃	〃	〃	〃
45	〃	27.6	8.0	37.7	○底部外面ヘラミガキ。口縁端部キザミメ。	鈍い橙色	〃	〃	〃
46	〃	22.0	7.2	27.5	○体部外面ヘラミガキか。	〃	〃	〃	〃
47	〃	17.8	6.6	27.3	○内面ハケメのち指頭オサエ。2ヶ所に穿孔。	灰白色	〃	〃	○底部焼成後穿孔。
48	〃	16.4	7.6	20.5	○体部内面ヘラミガキ。	鈍い橙色	〃	〃	○外面煤。
49	〃	19.3	—	—	○体部内外面ハケメ。	淡褐灰色	〃	〃	〃
50	〃	—	—	—	○体部外面に鋭いヘラによる文様。	灰白色	〃	〃	○口径・傾き不詳。
51	〃	18.0	—	—	○体部外面ハケメ。内面ヘラミガキ。	褐灰色	〃	〃	○外面煤。
52	〃	—	—	—	○口縁部指頭オサエ。体部外面ハケメ。	鈍い黄橙色	〃	〃	〃
53	〃	—	—	—	○体部外面ハケメ、内面ユビナデ。	鈍い橙色	〃	〃	
54	〃	—	—	—	○体部内面ユビナデか。	〃	〃	〃	○外面煤。
55	〃	26.8	—	—	○体部外面ハケメ。口縁端部キザミメ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
56	〃	—	—	—	○体部内面指頭オサエとハケメ。	鈍い橙色	〃	〃	○外面煤。
57	〃	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。外面ヘラガキ沈線。	〃	〃	〃	〃
58	〃	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。外面ヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	
59	〃	—	—	—		鈍い赤褐色	〃	〃	○外面煤。
60	〃	—	—	—	○外面ハケメか。	灰白色	〃	〃	
61	〃	—	—	—	○外面ハケメ。	鈍い橙色	〃	〃	○外面煤。
62	〃	—	—	—	○内面指頭オサエ。	〃	〃	〃	
63	〃	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。	〃	〃	〃	○外面煤。
64	〃	—	—	—	〃	鈍い黄橙色	〃	〃	
65	〃	—	—	—	○体部内面指頭オサエ。	鈍い橙色	〃	〃	
66	〃	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。	灰白色	〃	〃	
67	〃	—	—	—	○内面ユビナデ。	〃	〃	〃	
68	〃	—	—	—	○外面にヘラガキ山形文。	鈍い黄橙色	〃	〃	○外面煤。
69	〃	—	7.4	—	○体部外面ハケメ。	淡褐灰色	〃	〃	○内外面煤。
70	〃	—	5.8	—		鈍い橙色	〃	〃	
71	〃	—	10.0	—		〃	〃	〃	
72	〃	—	6.6	—		〃	〃	〃	○外面煤。
73	〃	—	8.8	—		〃	〃	〃	○底部外面剥痕。
74	〃	—	11.2	—	○体部外面ハケメのちヘラミガキか。	〃	〃	〃	○内外面煤。
75	〃	—	5.4	—	○体部外面ヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	
76	〃	—	7.4	—	○体部外面ヘラミガキか。	褐灰色	〃	〃	
77	高杯形土器	16.4	—	—	○調整不詳。	鈍い橙色	微砂	〃	
78	〃	19.2	12.8	17.0	○内外面ともヘラミガキ。2孔1対の紐孔。	鈍い黄橙色	細砂	〃	○完形品。
79	蓋形土器	—	7.2	—		明赤褐色	〃	〃	○内面煤。

溝－2（第23・24図）

80	壺形土器	12.5	—	—	○口縁部内外ヘラミガキ。	淡黄褐色	砂粒を含む	良	
81	〃	18.8	—	—	○ 〃	茶灰色	砂粒を含む	良好	
82	〃	14.91	—	—	○頸部にヘラガキ沈線。	淡黄褐色	砂粒を含む	〃	
83	〃	—	—	—	○削り出し凸帯の中沈線。	茶褐色	砂粒を含む	良	
84	〃	—	—	—	○段を有する。	淡茶灰褐色	砂粒を含む	良好	
85	〃	—	—	—	○ 〃	淡茶褐色	砂粒を含む	不良	
86	〃	—	—	—	○削り出し凸帯の中に沈線。	淡灰茶色	砂粒を含む	良好	
87	〃	—	—	—	○沈線を有する。	淡黄褐色	砂粒を含む	良	
88	〃	—	—	—	○ 〃	淡灰褐色	砂粒を含む	〃	
89	〃	—	—	—	○ヘラガキ沈線、刺穿文。	淡黄灰色	砂粒を含む	〃	
90	〃	—	—	—	○多条の沈線。	淡褐色	砂粒を含む	〃	
91	〃	—	5.13	—	○外面ヘラミガキ。	赤褐色	砂粒を含む	〃	
92	〃	—	8.4	—	○内外面ヘラミガキ。	淡黄灰褐色	砂粒を含む	〃	
93	甕形土器	22.18	—	—	○貼付凸帯キザミメ。外面8本ヘラガキ沈線。	淡茶色	砂粒を含む	〃	
94	〃	17.32	9.4	13.8	○貼付凸帯。外面ハケのちヘラミガキ。	赤茶褐色	砂粒を含む	良好	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
95	甕形土器	—	—	—	○貼付凸帯、外面ヘラガキ沈線。	暗灰色	砂粒を含む	良好	
96	〃	—	—	—	○口縁部端にキザミメ。外面1本沈線。	淡茶灰色	砂粒を含む	良	
97	〃	—	—	—	○貼付凸帯。外面6本ヘラガキ沈線。	淡茶灰褐色	砂粒を含む	良好	
98	〃	—	—	—	○外面沈線の間に刺突文。	黄褐色	砂粒を含む	不良	
99	〃	—	—	—	○外面多条の沈線。	暗茶灰色	砂粒含む	良	
100	〃	—	—	—	○ 〃	茶灰褐色	砂粒を含む	不良	
101	〃	—	—	—	○外反する口縁部。外面2本ヘラ描き沈線。	淡黄灰色	砂粒含む	良	
102	壺形土器	—	5.2	—	○外面ヘラミガキ。	淡灰褐色	砂粒含む	〃	

溝－3（第25図）

103	甕形土器	22.8	—	—	○外面はハケのちナデ。内面ヨコナデ。	茶灰褐色	砂粒含	良	
104	甕形土器	25.0	—	—	○口唇部オサエ。外面15条ヘラガキ沈線。	暗灰褐色	〃	良好	
105	〃	—	—	—	○口唇部キザミ。外面ヘラガキ沈線。	淡褐色	〃	〃	
106	〃	—	—	—	○外面ヘラガキ沈線。	黄褐色	細砂を含む	〃	
107	壺形土器	—	6.6	—		〃	〃	不良	
108	〃	—	10.2	—	○外面ヘラミガキ。	淡黄褐色	〃	〃	
109	〃	—	9.4	—	○外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ、ナデ。	淡赤黄色	〃	良好	
110	〃	—	7.6	—		黄褐色	〃	不良	○底部靭痕2～4
111	壺形土器	—	6.6	—	○内面ハケ状工具、ナデ。	淡茶褐色	〃	〃	○黒斑1ヶ所
112	〃	—	6.4	—	○外面ヘラミガキ、ナデ。	茶褐色	〃	良好	

溝－4（第26図）

113		—	—	—	○貼付凸帯、外面ヘラガキ波線。	茶褐色	砂粒を含む	不良	
114	甕形土器	—	—	—	○ 〃	黄褐色	〃	良	
115	〃	—	—	—	○外面ヘラ描き沈線。	淡茶褐色	〃	〃	
116	〃	—	—	—	○ 〃	黄茶褐色	〃	〃	
117	〃	—	—	—	○ 〃	淡茶褐色	〃	不良	

溝－5（第27図）

118	壺形土器片	—	—	—	○内面ナデ仕上げ、肩部に沈線1条。	淡黄白褐色	砂粒多く含	やや甘	

溝－6（第28図）

119	壺形土器片	—	—	—	○内面指ナデ、頸部に沈線1条。	暗黄褐色	砂粒を含む	良好	
120	〃	—	—	—	○	淡黄褐色	〃	不良	
121	甕形土器	—	—	—	○貼付凸帯。	茶褐色	〃	良好	
122	〃	—	—	—	○外面ヘラガキ沈線。	〃	〃	〃	

溝－9（第30図）

123	甕形土器片	—	—	—	○ナデ調整後ヘラ沈線、刺突。	橙色	石砂粒多含	良好	

包含層（第31図）

124	甕形土器片	—	—	—	○口縁端部にヘラガキ沈線とキザミメ。	褐灰色	石砂粒多含	良好	
125	壺形土器	11.9	—	—	○内外面ヨコヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	
126	〃	12.8	—	—	○頸部に竹管文二段。	〃	〃	〃	
127	〃	16.2	—	—	○2個の紐孔。	〃	〃	〃	
128	〃	—	—	—	○外面にヘラガキ沈線と刺突。	〃	〃	〃	
129	〃	—	—	—	○外面ヨコヘラミガキ。内面指頭オサエ。	〃	〃	〃	○外面黒斑
130	〃	—	—	—	○ 〃	〃	〃	〃	
131	甕形土器	—	—	—	○口縁部キザミメ。肩部外面ヘラガキ沈線。	鈍い黄橙色	細砂	〃	
132	壺形土器	—	—	—	○貼付キザミメ凸帯。内面ユビナデ。	鈍い橙色	〃	〃	
133	甕形土器	—	—	—	○外面12条のヘラガキ沈線と刺突。	〃	〃	〃	
134	〃	11.0	—	—	○内面指頭オサエ、ユビナデ。	灰白色	〃	〃	
135	〃	—	—	—	○外面に木葉文。内面ユビナデ。	〃	微砂	〃	
136	〃	—	—	—	○口縁端部と肩部にキザミメ。	〃	〃	〃	
137	〃	—	—	—	○口縁端部キザミメ。1条のヘラガキ沈線。	〃	〃	〃	
138	〃	—	—	—	○口縁部上面にヘラガキ沈線文。	暗褐灰色	〃	〃	
139	〃	—	—	—	○外面23条のヘラガキ沈線と刺突。	褐灰色	〃	〃	
140	〃	—	—	—	○外面ヘラガキ沈線と円形浮文。	〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
141	甕形土器	—	—	—	○外面ヘラガキ沈線と円形浮文。	褐灰色	微砂	良好	
142	〃	—	—	—	○外面にヘラガキ沈線と山形文。	鈍い橙色	〃	〃	
143	〃	—	8.0	—	○底部焼成後穿孔。	鈍い褐色	〃	〃	

土壙－7 （第36図）

144	高杯形土器	—	9.8	—	○脚部外面にヘラガキ沈線。透孔は6個。	灰白色	細砂	良好	

土壙－15 （第45図）

145	甕形土器	15.6	—	30.1	○外面ヘラミガキ、胴部貝殻腹縁刺突。	浅黄橙色	細砂多含	良好	

溝－13 （第46図）

146	高杯形土器	20.0	—	—	○内外面ヘラミガキ。	暗褐色	細砂	良好	
147	底部	—	8.6	—	○外面ヘラミガキ？	〃	砂粒含む	〃	

包含層 （第50図）

148	壺形土器	—	—	—	○外面にクシガキ文。指頭圧痕文凸帯。	鈍い黄橙色	細砂	良好	
149	〃	—	—	—	○外面クシガキ直線文、波状文。	灰白色	〃	〃	
150	〃	—	—	—	○内面横斜のハケメ。	灰褐色	細砂粒多含	やや甘	
151	〃	—	—	—	○内外共にヨコナデ。	灰白色	細砂多く含	良好	
152	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ、体外面ハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	
153	甕形土器	—	—	—	○体外面ヘラミガキ、底部ナデ。	にぶい橙色	細砂粒多含	〃	
154	高杯形土器	30.4	—	—	○口縁部外面7本の沈線、下部ヘラミガキ。	浅黄橙色	細砂多く含	〃	
155	〃	12.6	—	—	○口縁ヨコナデのち7本の沈線。	〃	〃	〃	
156	脚部	—	11.5	—	○内側ヘラケズリ。	〃	〃	〃	
157	〃	—	—	—	○ 〃	浅橙色	〃	〃	

溝－18 （第52図）

158	壺形土器	18.0	—	—	○口縁部内面に4条の凹線。	灰白色	細砂	良好	
159	甕形土器	15.0	—	—	○口縁端部に7条の凹線。	〃	微砂	〃	
160	〃	—	—	—	○口縁端部に2条の凹線。	鈍い黄橙色	〃	〃	○外面に煤付着。
161	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	〃	〃	〃	
162	〃	—	—	—	○ 〃	鈍い橙色	〃	〃	
163	〃	—	—	—	○口縁端部に2条の凹線。	浅黄橙色	〃	〃	
164	台付鉢形土器	—	5.2	—	○脚端部は指頭オサエ。	灰白色	〃	〃	○製塩土器。

「島状高まり」遺溝－15 （第64図）

165	甕形土器	—	—	—	○内傾した口縁、内外ヨコナデ。	黄橙色	細砂粒多含	甘い	○砂質
166	高杯形土器	—	—	—	○口縁端部に軽い沈線2条、内外ヘラミガキ。	橙色	精良・ち密	良好	

竪穴式住居－3，4 （第69・70図）

167	壺形土器	17.4	—	—	○口縁部内外面ハケのちヨコナデ。	黄灰褐色	砂粒含	良好	
168	〃	17.2	—	—	○体部内外ハケ。	淡茶褐色	砂粒含	良好	
169	甕形土器	13.0	—	—	○口縁部端部クシガキ沈線。	〃	〃	〃	○煤付着
170	〃	12.4	—	—	○ 〃	〃	〃	〃	○ 〃
171	高杯形土器	22.2	15.2	14.4	○脚裾部内外面、ハケのちヨコナデ。	赤褐色	精良	〃	
172	〃	14.8	16.0	21.0	○脚裾部内外面ハケ。	淡黄褐色	〃	〃	
173	〃	8.2	—	—	○外面ハケのちヘラミガキ。	淡茶褐色	堅微	〃	○内外面丹塗り
174	鉢形土器	11.8	4.0	6.7	○内外面ナデ。	淡黄褐色	砂粒含	〃	
175	〃	10.4	3.0	5.9	○	明赤褐色	〃	〃	
176	〃	11.2	1.8	5.8	○底部ヘラケズリ、外面上部ナデ。	淡赤褐色	〃	〃	
177	〃	10.6	—	6.8	○外面下半ヘラケズリ、上半ナデ。	白灰色		〃	

竪穴式住居－5 （第71図）

178	壺形土器	14.5	—	—	○体部内面オサエのちナデ。	赤橙色	砂粒・細砂	良好	
179	〃	16.5	—	—	○体部外面にタタキメが残る。	浅黄橙色	〃	良	
180	〃	22.6	4.3	—	○底部外面ナデ仕上げ。	にぶい橙色	石粒・砂粒	〃	
181	甕形土器	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	赤褐色	砂粒・細砂	〃	○小片
182	〃	16.4	—	—	○体部内面指ナデ。	灰褐色	砂粒含む	〃	
183	高杯形土器	—	—	—	○外面ヨコナデ。	橙色	砂粒・細砂	〃	
184	脚部	—	—	—	○外面ヘラミガキ	にぶい橙色	精良・ち密	良好	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
竪穴式住居－6（第74図）									
185	甕形土器	—	—	—	○口縁に5条のクシガキ。		細砂多含	良好	○小片
186	台付鉢形土器	—	5.6	—	○脚台裏裏オサエ、ナデ。	赤橙色	砂粒・石粒	〃	○製塩土器
187	〃	—	4.5	—	○ 〃	にぶい赤色	石粒・砂粒	〃	○ 〃
188	高杯形土器	18.8	—	—	○外面下半荒いヘラミガキ。	にぶい橙色	精良・ち密	〃	
竪穴式住居－7（第76図）									
189	甕形土器	14.0	—	—	○若干つまみ上げ気味、ヨコナデ調整。	灰褐色	砂粒・細砂	良好	
190	〃	—	—	—	○ヨコナデ仕上げ。	褐色	砂粒含む	〃	○小片
191	〃	13.7	—	—	○上部ヨコナデ。	褐灰色	砂粒・細砂	〃	
192	〃	12.8	—	—	○口縁ヨコナデ、外面ハケメ。	〃	〃	〃	
193	〃	13.8	—	—	○ヨコナデ、口縁外面ハケメ。	灰褐色	〃	〃	
194	〃	—	—	—	○ヨコナデ、7条のクシガキ沈線。	〃	〃	〃	○小片
195	〃	15.1	—	—	○9条のクシガキ沈線。	〃	〃	〃	
196	〃	16.6	—	—	○口縁10条のクシガキ沈線。	〃	〃	〃	
197	〃	16.0	—	—	○上部ヨコナデ。	褐灰色	〃	〃	
198	鉢形土器	—	—	—	○外面ナデ調整仕上げ。	〃	精良	〃	○小片
199	〃	—	—	—	○外傾する端部、ヘラミガキ。	褐橙色	〃	〃	
200	〃	15.4	—	—	○内面ハケのちヘラミガキ。	黄橙色	〃	〃	
201	〃	13.3	—	—	○端部オサエ、内面ハケのちヘラミガキ。	灰白色	細砂含む	〃	
202	〃	14.9	—	6.95	○内外ナデ仕上げ。	淡黄橙色	精良	〃	
203	〃	15.6	—	—	○内外共にナデ調整。	灰黄橙色	砂粒・細砂	〃	
204	〃	19.8	—	—	○器壁除々にうすく、凹線1条。	淡黄橙色	細砂含む	良	
205	高杯形土器	—	16.2	—	○表面ハケのちヘラミガキ。	橙色	精良	良好	
206	壺形土器	—	—	—	○内面上半ハケ、下半ヘラケズリ、底部穿孔。	灰白色	細砂含む	〃	○肩部黒斑あり
207	底部	—	8.3	—	○底部裏面ハケ。	にぶい橙色	石粒・砂粒	〃	
竪穴式住居－8（第78図）									
208	壺形土器	22.0	—	—	○外面ヨコナデ仕上げ。	橙色	砂粒・石粒	良好	
209	〃	—	—	—	○内面ヨコナデ？	淡黄橙色	細砂含む	〃	○小片
210	甕形土器	—	—	—	○ヨコナデ仕上げ、口縁外面クシガキ。	褐灰色	砂粒・細砂	〃	○ 〃
211	〃	—	—	—	○ヨコナデ仕上げ、外面肩部ヘラミガキ。	灰褐色	〃	〃	○ 〃
212	〃	—	—	—	○ヨコナデ仕上げ、口縁外面クシガキ。	褐灰色	〃	〃	○ 〃
213	〃	—	—	—	○口縁外面に8条のクシガキ沈線。	灰白色	砂粒含む	〃	○ 〃
214	鉢形土器	—	—	—	○端部ヨコナデ？	橙色	精良	〃	○ 〃
215	台付鉢形土器	—	5.2	—	○裾部表面圧痕残す。	灰～黒褐色	砂粒含む	〃	○製塩土器
216	高杯形土器	—	—	—	○全体ヘラミガキ。	橙色	精良・ち密	〃	
竪穴式住居－9（第79図）									
217	甕形土器	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	黄橙色	砂粒含む	やや甘	○小片
218	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ、口縁外面クシガキ。	明黄褐色	砂粒・細砂	良好	○小片
219	〃	14.6	—	—	○体外下半ヘラミガキ、内面下半ナデ。	褐～黒褐色	〃	良	
井戸－1（91図）									
220	甕形土器	15.2	—	—	○外面頸部にハケのちヨコナデ。	淡茶褐色	砂粒含	良好	○外面煤付着。
221	〃	14.2	—	—	○ 〃	〃	〃	良	
222	甕形土器				○外面はナデ、内面上半はヘラケズリ。	乳褐色	〃	〃	○外面煤付着
井戸－3									
223	壺形土器	—	—	—	○口縁部は頸部から大きく外反し上方に拡張。	淡茶褐色	砂粒含	良好	
224	直口壺形土器	11.4	—	—	○内外面ともていねいなヘラミガキ。	淡黄褐色	〃	〃	○外面丹塗り
225	壺形土器	—	8.8	—	○外面ハケのちヘラミガキ。内面ハケ、ナデ。	淡黄灰色	細砂含む	良	
226	甕形土器	12.2	—	—	○口縁部内外ハケ、ヨコナデ。外面体部ハケ。	淡黄褐色	砂粒含	良好	○外面煤付着
227	〃	13.0	4.5	17.8	○外面体部ハケのち体部下半ヘラミガキ。	淡灰褐色	〃	良	○ 〃
228	高杯形土器	19.6	—	—	○杯部内外面ハケのちていねいなヘラミガキ。	赤褐色	水簸粘土	良好	
229	〃	12.1	—	—	○内外面ともヘラミガキ、ヨコナデ。	淡赤黄色	砂粒含	〃	
230	〃	—	—	—		赤黄色	水簸粘土	不良	
231	鉢形土器	10.0	—	3.8	○内外面オサエ、ナデ。	淡赤褐色	砂粒含	良	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
232	鉢形土器	12.6	—	4.2	○内外面オサエ、ナデ。内面ヘラミガキ。	黄褐色	砂粒含	良	
233	〃	15.4	—	5.7	○内外面ハケ、ナデ。口縁部ヨコナデ。	淡灰黄色	〃	〃	
234	〃	15.4	—	5.5	○外面体部ハケのちヘラミガキ。	淡赤褐色	水漉粘土	良好	○黒斑
235	〃	11.0	—	6.8	○外面ヘラミガキ。内面ハケ、ナデ。	黄灰色	砂粒含	〃	
236	〃	14.6	—	—	○外面ヘラケズリのちヘラミガキ。	白褐色	〃	不良	
237	〃	—	—	—	○口縁部内外面ヨコナデ。	暗茶色	〃	良	
238	壺形土器	13.0	—	—	○外面体部ハケのちヘラミガキ。	黄褐色	〃	不良	
239	甕形土器	12.4	—	—	○口縁部内外面ハケのヨコナデ。	茶褐色	〃	良好	
240	〃	12.6	—	—	○「く」の字に縁。	淡黄褐色	〃	良	○22と同一個体
241	〃	—	—	3.0	○外面ハケのちヘラミガキ。	〃	〃	〃	
242	〃	15.2	—	—	○口縁部クシガキ沈線。	〃	〃	良好	
243	〃	14.0	—	—	○ 〃 。	茶黄褐色	〃	〃	
244	〃	8.6	—	—	○外面体部下半ヘラケズリ。	黄褐色	〃	不良	
245	〃	9.8	—	—	○内面体部下半ヘラケズリ、上半ハケ、ナデ。	黄茶褐色	〃	良好	
246	高杯形土器	12.2	—	—	○内外面ヘラミガキ。	茶褐色	〃	〃	
247	〃	16.4	—	—	○内外面ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	赤茶褐色	〃	〃	
248	〃	—	14.0	—	○外面裾部ハケのちヘラミガキ。	淡黄褐色	〃	〃	
249	鉢形土器	12.4	—	3.4	○内外面ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	黄褐色	〃	〃	
250	〃	10.8	—	3.4	○内面ヘラミガキのちナデ、ヨコナデ。	黒灰色	〃	〃	
251	〃	16.6	—	(6.2)	○内外面ハケのちヘラミガキ。	淡黄褐色	〃	良	
252	〃	19.6	—	6.5	○内外面ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	〃	〃	〃	
253	〃	10.6	—	6.5	○外面体部ハケのちオサエ、ヘラミガキ。	淡赤褐色	水漉粘土	不良	
254	〃	12.0	—	—	○外面体部下半ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	赤黄褐色	砂粒含	〃	
255	〃	10.4	2.8	8.5	○外面体部ヘラミガキ。	〃	水漉粘土	良	

井戸－4 （第96～98図）

256	壺形土器	18.0	7.5	32.6	○外面上半ハケのちヘラミガキ、下半部分的。	淡黄褐色	砂粒含	良	
257	〃	19.0	—	—	○内外面ハケのち（ヘラミガキ）ナデ。	黄褐色	〃	良好	
258	〃	19.4	—	—	○口縁部内外面ハケのちヨコナデ。	赤黄褐色	〃	不良	
259	〃	18.8	5.3	30.6	○外面体部タタキのちヘラミガキ。	淡黄褐色	〃	良好	
260	甕形土器	10.8	—	—	○外面体部タタキ。内面ヘラケズリのちナデ。	〃	水漉し粘土	やや不	
261	〃	10.5	—	—	○外面体部タタキのちハケ状工具。	〃	精良	不良	
262	鉢形土器	31.6	—	—	○外面体部ハケ。	〃	砂粒含む	良好	
263	甕形土器	12.8	2.8	18.0	○口縁部端面にクシガキ沈線。	淡灰褐色	〃	〃	
264	〃	14.4	2.4	21.6	○ 〃	〃	〃	良	○刺突2ヶ所
265	〃	14.3	3.6	23.9	○ 〃	灰黄褐色	〃	〃	○刺突3ヶ所
266	〃	14.8	3.0	24.4	○ 〃	暗灰褐色	〃	〃	
267	〃	15.0	4.2	23.8	○ 〃	〃	〃	良好	
268	高杯形土器	16.9	—	—	○内外面ヘラミガキ。	淡黄褐色	〃	〃	
269	〃	—	15.4	—	○内部裾部ハケのちヘラミガキのちヨコナデ。	赤茶褐色	〃	〃	

井戸－5 （第99図）

270	甕形土器	13.28	—	—	○口縁部端面にクシガキ沈線。	淡褐色	砂粒含む	良好	
271	〃	14.91	4.00	23.71	○ 〃	灰褐色	〃	〃	○体部刺突4ヶ所
272	〃	—	6.02	—	○ 〃	淡灰褐色	砂粒を含む	〃	

井戸－6 （第100図）

273	甕形土器	12.79	—	—	○口縁部端面にクシガキ沈線。	淡茶褐色	砂粒含む	良好	
274	〃	13.59	4.5	19.5	○外面体部ハケ。内面ヘラケズリ、オサエ。	灰白色	白色砂粒含	〃	○煤付着
275	鉢形土器	9.98	—	—	○外面ハケのちヨコナデ。	淡赤褐色	水漉し粘土	不良	○ 〃
276	〃	14.32	—	—	○外面ハケのちヘラミガキ。	茶褐色	砂粒を含む	良好	
277	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	灰白褐色	〃	不良	

井戸－7 （第101・102図）

278	壺形土器	16.2	—	—	○外面頸部ハケ状工具。	淡茶灰褐色	砂粒を含む	良	
279	〃	18.6	—	—	○口縁部内外面ヨコナデ。	淡赤黄褐色	〃	〃	
280	〃	17.2	—	—	○口縁端面クシガキ沈線。	淡黄褐色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
281	壺形土器	20.0	—	—	○口縁端面クシガキ沈線。外面体部ヘラミガキ。	淡黄褐色	砂粒を含む	良好	
282	〃	18.0	—	—	○口縁部内外面、外面体部ハケのちヨコナデ。	淡白褐色	〃	〃	
283	〃	14.91	—	—	○内面口縁部から頸部ヘラミガキ、ヨコナデ。	淡褐色	〃	〃	
284	〃	14.2	—	—	○口縁端に凹部。外面ハケのちヘラミガキ。	淡黄灰褐色	〃	〃	
285	〃	—	1.6	—	○外面ヘラミガキ。	淡赤褐色	精良	不良	
286	〃	—	7.32	—	○外面荒いハケのちヘラミガキ。	淡色褐色	砂粒を含む	良好	
287	甕形土器	14.2	—	—	○口縁端面クシガキ沈線。	暗灰褐色	〃	良	
288	〃	15.0	—	—	○ 〃	〃	〃	〃	
289	高杯形土器	20.2	—	—	○口縁部やや屈曲し外傾。	淡黄褐色	〃	不良	
290	〃	19.4	—	—	○杯部外面ハケのちヘラミガキ。	赤褐色	〃	良好	
291	〃	—	—	—	○ 〃	〃	〃	不良	
292	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。	〃	〃	良	
293	鉢形土器	14.92	—	6.80	○外面底部荒いハケ、体部ヘラケズリ。	淡灰褐色	〃	良好	
294	〃	16.6	—	—	○内外面ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	淡茶色	〃	〃	
295	〃	14.2	—	—	○ 〃	黄褐色	〃	良	
296	〃	15.0	2.8	7.7	○内面ヘラケズリのちヘラミガキ。	淡灰褐色	〃	良好	
297	〃	25.9	—	—	○内面ヘラケズリのちハケのちヘラミガキ。	淡黄褐色	〃	〃	

井戸－8 （第104図）

298	甕形土器	12.2	2.2	15.6	○外面ハケのちヘラミガキ。	淡灰褐色	砂粒を含む	良	
299	〃	17.92	—	—	○口縁端面クシ描沈線。	暗褐色	〃	不良	○煤付着
300	〃	14.4	—	—	○ 〃	灰褐色	〃	良	
301	〃	16.6	—	—	○ 〃	暗灰色	〃	良好	○外面刺突2ヶ所
302	〃	14.2	—	—	○ 〃	〃	〃	〃	○外面刺突3ヶ所
303	〃	—	—	—	○外面ハケのちナデ。	淡褐色	〃	不良	
304	高杯形土器	17.8	15.6	13.6	○脚部裾内外面ハケのちヨコナデ。	淡茶褐色	精良	良	
305	〃	19.20	14.8	14.45	○円孔4個。	淡黄乳褐色	微粒含む	〃	
306	〃	20.2	14.9	15.0	○内外面ハケ。	赤褐色	白色微粒含	〃	
307	〃	20.1	—	—	○口縁部内面ハケのちヨコナデ。	〃	長石含む	良好	○一部煤付着
308	鉢形土器	10.1	—	—	○外面ハケのちヨコナデ。	淡赤褐色	茶褐色粒含	やや良	
309	器台形土器	7.5	11.6	8.3	○円孔2段。脚部内面ハケのちナデ。	赤褐色	ウンモ含む	良	

井戸－9 （第105図）

310	甕形土器	14.3	—	—	○外面ヨコナデ、8本のクシガキ沈線。	褐灰色	砂粒・細砂	良好	
311	〃	13.9	—	—	○ヨコナデ調整、8本のクシガキ沈線。	浅黄橙色	〃	〃	
312	台付鉢形土器	—	5.7	—	○台内面ナデ、外面オサエ。	褐灰色	〃	〃	○製塩土器
313	甕形土器	14.5	—	—	○「く」字状に外反し、やや内傾する口縁。	灰白淡褐色	砂粒多含	良	
314	高杯形土器	—	—	—	○脚内面ナデ、外面ヘラミガキ。	浅黄橙色	精良	良好	
315	〃	—	—	—	○脚内面ナデ。	淡赤色	〃	〃	
316	〃	—	15.6	—	○内面ハケメ、外面ヘラミガキ(？)	赤橙色	〃	良	
317	〃	—	11.4	—	○内面ナデ、外面ハケメ。	にぶい橙色	細砂多含	良好	
318	鉢形土器	—	—	—	○上部ヨコナデ、下部ヘラミガキ。	浅黄橙色	細砂含む	〃	○小片
319	〃	—	—	—	○口縁内面ハケ、体部内面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	○ 〃

井戸－10 （第107～109図）

320	壺形土器	17.2	—	—	○外面肩部櫛描波状文、胴部ハケメ。	淡赤茶色	細砂を含む	良好	
321	〃	14.2	—	—	○外面ヘラミガキ、後ナデ調整を施す。	灰白色	〃	〃	○外面下部煤付着
322	甕形土器	15.5	—	26.9	○外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	灰黒茶色	〃	〃	煤付着
323	〃	15.6	—	—	○「く」字状に外反する口縁、外面タタキ目。	暗灰褐色	〃	〃	〃
324	〃	16.9	3.4	25.9	○外面タタキメ、内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	小石を含む	〃	小石→2～5㎜程度
325	〃	14.6	—	23.4	○外面ハケ後ちヘラミガキ。	暗茶褐色	細砂を含む	〃	煤付着
326	〃	16.3	3.4	26.1	○外面ハケ後ちヘラミガキ、内面下半指頭痕。	黒茶色	〃	〃	〃
327	〃	15.0	—	22.3	○内面底部指押え、後ちナデ。	暗茶色	〃	〃	〃 （若干）
328	〃	15.2	—	—	○外面胴部にクシメ。	淡赤黄色	小石を含む	普通	小石→2～5㎜
329	〃	15.0	(2.7)	22.9	○外面肩部以下ヘラミガキ。	暗赤茶色	細砂を含む	良好	煤付着
330	〃	14.8	—	—	○外面肩部ヨコナデ。	淡黄褐色	粗砂を含む	普通	外下半剥離

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
331	甕形土器	15.6	—	—	○外面ハケナデ、後ちヘラミガキ。	暗灰背褐色	細砂を含む	良好	○煤付着
332	〃	16.0	—	—	○外面ハケナデ、顎部内面粘頭痕。	暗茶色	〃	〃	○ 〃
333	高杯形土器	21.4	—	—	○内外面ヘラミガキ。	淡黄茶褐色	精製粘土	〃	
334	〃	19.7	—	—	○内外面ヘラミガキ。	赤褐色	〃	〃	○赤褐色化粧土
335	〃	20.5	—	—		暗赤褐色	〃	普通	○内外面まめつ
336	〃	12.5	—	—	○杯内面ヘラミガキ。脚ヘラケズリ。	黄茶褐色	〃	良好	○淡茶褐色化粧土
337	〃	—	13.0	—	○上部ヘラミガキ、脚・裾はハケ調整。	暗灰茶色	〃	〃	○ 〃
338	〃	—	13.9	—	○裾内外ヘラミガキ。	暗黄褐色	〃	〃	○暗茶褐色化粧土
339	小形甕形土器	—	—	—	○外面指ナデ整形。	白黄淡褐色	細砂を含む	〃	
340	鉢形土器	—	—	—	○外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ。	暗黄茶色	小石を含む	〃	○小石→2～3mm
341	椀形土器	13.7	4.2	7.2	○外面ナデ、内面クシ状工具によるナデ。	暗茶褐色	細砂を含む	〃	○細砂→0.5mm以下
342	鉢形土器	14.4	—	7.0	○外面ハケナデ、後ナデ仕上げ。	暗黄茶色	精製粘土	〃	○内面クシメ残る
343	深鉢形土器	22.7	—	—	○口縁端部若干つまみ上げ。	淡黄茶色	細砂を含む	〃	
344	台付鉢形土器	—	4.4	—	○脚部内外面圧痕多く残す。	〃	砂粒を含む	〃	○製塩土器
345	〃	—	4.4	—	○内面はナデアゲ痕を残す。	暗赤褐色	〃	〃	〃
346	〃	—	4.4	—	○脚部外面圧痕多く残す。	暗赤茶色	〃		〃
347	〃	—	4.5	—	○ 〃	〃	〃		〃
348	〃	—	4.1	—	○ 〃	暗赤褐色	〃		〃
349	〃	—	4.6	—	○ 〃	〃	〃		〃
350	〃	—	4.2	—	○ 〃	暗赤茶色	〃		〃
351	〃	—	—	—	○ 〃	暗赤茶褐色	〃		〃
352	〃	—	—	—	○口縁端部先細りで終る、外面タタキメ。	黄淡茶色	〃		〃
353	〃	—	—	—	○ 〃	白淡茶色	〃		〃
354	〃	—	—	—	○口縁端部は押えて終る、外面タタキメ。	暗赤茶褐色	〃		〃

井戸－11（第110～112図）

355	甕形土器	14.3	3.4	22.95	○口縁端部8条のクシガキ沈線。	褐灰色	砂粒・細砂	良好	○煤付着
356	〃	14.5	—	25.65	○口縁端部に7条のクシガキ沈線。	暗黄橙色	細砂含む	〃	〃
357	〃	14.0	5.3	20.85	○口縁端部をわずかにつまみあげる。	灰白橙色	砂粒含む	良	○平底のなごりあり
358	〃	15.7	2.9	22.15	○底部に穿孔あり。	灰白色	石粒・砂粒	良好	○外面ハクリ
359	〃	12.1	3.8	15.3	○「く」字状に外反する口縁。	灰白褐色	〃	〃	○平底を意識する
360	〃	13.25	—	17.8	○口縁端部8条のクシガキ沈線。	暗黄赤褐色	細砂含む	〃	○煤付着・黒斑
361	〃	14.6	—	—	○口縁端部6本のクシガキ沈線。	灰褐色	〃	〃	
362	〃	15.4	—	—	○口縁端部7本のクシガキ沈線。	褐灰色	砂粒・細砂	〃	
363	〃	10.6	—	—	○口縁端部は丸味をもって終る。	黄橙色	細砂含む	〃	
364	〃	11.5	—	—	○ナデ後ちハケ調整で仕上げ。	灰白色	砂粒・細砂	やや甘	
365	高杯形土器	20.7	—	—	○内外面ヘラミガキ。	黄橙色	精良	良好	
366	〃	18.0	13.1	15.5	○内面ヘラミガキ、外面杯上部ヨコナデ。	〃	精良・ち密	〃	○裾上面面取り
367	〃	21.0	—	—	○ヨコナデ後ヘラミガキ。	橙～黄橙色	細砂含む	〃	
368	〃	20.5	—	—	○ヘラミガキ、内面一部ハケメ残存。	黄橙色	精良・ち密	〃	
369	〃	—	—	—	○内外面ヘラミガキ。	浅黄橙色	細砂含む	〃	○突帯部ヨコナデ
370	〃	—	—	—	○表面ヘラミガキ。	橙色	精良・ち密	〃	○小片
371	〃	—	13.0	—	○脚部内面シボリメ後ちナデ、裾端に沈線。	黄橙色	細砂含む	〃	○穿孔数4孔
372	鉢形土器	—	—	—	○内面、外面くびれ以下はヘラミガキ。	橙色	細砂多含	〃	○小片
373	〃	11.5	—	—	○内面上部ハケ後ナデ、下部ナデ調整。	黄橙色	砂粒・細砂	〃	
374	〃	—	—	—	○わずかに外反する口縁、外面ヘラミガキ。	にぶい橙色	精良・ち密	〃	○小片
375	台付鉢形土器	—	5.1	—	○「く」字状の台付、ナデ調整。	黄橙色	細砂・砂粒	良	
376	鉢形土器	9.1	—	6.4	○口縁端部若干外反し、丸く終る。	にぶい橙色	細砂多含	良好	
377	〃	11.2	—	5.65	○外面は荒いナデ調整。	〃	〃	〃	
378	〃	—	—	—	○器厚な口縁で端部は丸く終る。	灰白橙褐色	細砂を含む	〃	○小片
379	〃	17.1	—	—	○わずかに内傾する口縁で端部は丸く終る。	黄橙色	細砂若干含	〃	
380	〃	15.0	—	6.85	○底部に一部ヘラケズリを認める。	橙色	精良・細砂	〃	
381	〃	13.8	—	6.3	○内湾気味に立ち上がり、底部ヘラケズリ。	〃	細砂を含む	〃	
382	〃	—	—	—	○器内はうすく、口縁端部ヨコナデ。	黄橙色	〃	〃	○小片
383	〃	—	—	—	○若干内傾する口縁端部でヨコナデ。	灰白橙褐色	砂粒・細砂	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
井戸－12（第113図）									
384	甕形土器	—	—	—	○内傾する口縁端部、クシガキ沈線。	黄褐色	砂粒・細砂	良好	○小片
385	高杯形土器	16.0	13.9	14.45	○脚内部ナデ。	橙色	細砂・精良	〃	○全面剥落
井戸－13（第114図）									
386	甕形土器	13.3	—	19.35	○体部外面ナデ調整。平底のなごりあり。	明黄褐色	砂粒・細砂	良好	○黒斑
387	壺形土器	15.6	—	—	○内外面ヨコナデ。	灰～黒褐色	細砂含む	〃	
388	〃	11.8	—	—	○外面ヨコナデ。	橙色	精良	〃	
389	甕形土器	13.6	—	—	○ヨコナデ、外面クシガキ沈線。	灰白色	細砂含む	〃	
390	〃	15.0	—	—	○ 〃	灰褐色	〃	〃	
391	〃	16.3	—	—	○ 〃	褐灰色	〃	〃	
土壙－18（第116図）									
392	甕形土器	13.6	—	—	○７条のクシガキ沈線。	鈍い黄橙色	微砂	良好	
393	高杯形土器	—	—	—	○	橙色	水漉粘土	〃	
土壙－19（第117図）									
394	甕形土器	17.0	—	—	○口縁にクシガキ沈線。	黒褐色	細砂含む	良好	
土壙－21（第119図）									
395	甕形土器	—	—	—	○口縁に10条のクシガキ沈線。	褐灰色	細砂粒多含	良好	
396	〃	—	—	—	○口縁内外ヨコナデのち端部外面クシガキ。	〃	〃	〃	
397	〃	13.1	—	—	○ 〃	暗黄褐色	〃	〃	○長石粒を含む
398	脚部	—	—	—	○内面シボリ痕を残す。	浅黄橙色	精良	〃	○細砂若干含む
土壙－23（第112図）									
399	鉢形土器				○口縁部内外ヨコナデ。	褐灰色	砂粒細砂含	良好	
400	甕形土器	13.6	—	—	○内傾する口縁端部、６条のクシガキ沈線。	〃	〃	〃	
401	〃	18.0	—	—	○口縁に８条のクシガキ沈線。	黒褐色	〃	〃	
402	〃	14.8	—	—	○口縁に７条のクシガキ沈線。	灰褐色	〃	〃	
403	〃	15.3	—	—	○内外面上部ヨコナデ。	〃	〃	〃	
404	〃	13.4	—	—	○内面体部ヘラのちナデ。	〃	〃	〃	
405	底部	—	(3.9)	—	○内面指頭圧痕多い。	褐灰色	〃	〃	
406	甕形土器	—	—	—	○体部内面ヘラケズリのちナデ。	〃	〃	〃	
407	脚部	—	12.25	—	○外面ケズリ、ナデ。	にぶい橙色	細砂を含む	〃	
408	〃	—	10.3	—	○穿し孔４？	橙色	精良・ち密	良	
409	高杯形土器	—	14.1	—	○脚部ヘラミガキ。	赤橙色	〃	良好	
410	鉢形土器	—	—	—	○体部外面ヘラミガキ。	灰黒色	細砂多く含	〃	
土壙－24（第112図）									
411	甕形土器	16.8	—	—	○口縁外面７条のクシガキ沈線。	暗黄橙色	細砂粒含む	良好	
412	〃	11.7	—	—	○７条のクシガキ沈線。	灰褐色	細砂粒多含	〃	
413	脚部	—	—	—	○内面ナデ。	浅黄橙色	精良・ち密	〃	
414	高杯形土器	22.8	—	—	○外面ハケ調整。	赤橙色	〃	〃	
溝－51（第127図）									
415	壺形土器	20.4	—	—	○内外面ヨコナデ。	乳灰白色	細砂	良好	
416	甕形土器	14.0	—	—	○７条のクシガキ沈線。	鈍い橙色	微砂	〃	
417	〃	14.4	—	—	○９条のクシガキ沈線、内外面ヨコナデ。	〃	〃	〃	
418	〃	15.1	—	—	○体部外面に右上がりの細いタタキメ。	乳灰白色	細砂	〃	
419	椀形土器	14.0	3.6	6.1	○内外面とも調整不詳。	浅黄橙色	水漉粘土	〃	
420	〃	10.0	1.5	5.0	○内面粗いハケメ。	灰白色	微砂	〃	○ほぼ完存。
溝－57～62（第131図）									
421	甕形土器	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	灰褐色	砂粒・細砂	良好	○小片
422	高杯形土器	—	—	—	○表面ミガキorナデ、裏はハケメ。	黄橙色	細砂含む	やや甘	〃
溝－64～66，63′，66′（第132図）									
423	壺形土器	—	—	—	○体部全体ヨコナデ。	浅黄橙色	砂粒・細砂	良好	○小片
424	甕形土器	—	—	—	○口縁外面３条の沈線。	褐灰色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
425	甕形土器	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	にぶい橙色	細砂多含	良好	○小片
426	底部	—	8.4	—	○内面ヘラケズリ。	褐灰色	砂粒多含	〃	
427	高杯形土器	—	—	—	○脚部ヘラミガキ？	橙色	精良	〃	
428	甕形土器	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	褐灰色	砂粒・細砂	〃	○小片
429	〃	—	—	—	○ 〃	灰白色	〃	〃	〃
430	高杯形土器	—	—	—	○	黄橙色	細砂含む	やや甘	

土器溜り－1 （第134～138図）

431	高杯形土器	15.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。	浅黄橙色	細砂含む	やや甘	
432	〃	15.2	—	—	○ 〃	〃	〃	〃	
433	〃	14.8	—	—	○ 〃	〃	〃	〃	
434	〃	15.0	—	—	○ 〃	〃	〃	〃	
435	〃	15.6	—	—	○ 〃	〃	〃	〃	
436	〃	9.3	3.8	13.2		〃	〃	〃	
437	〃	10.8	1.6	18.1	○外面ヘラミガキか。	橙色	精製粘土	〃	
438	〃	11.0	—	—	○外面ヘラミガキ。	〃	水漉し粘土	〃	
439	甕形土器	—	3.3	22.4	○6～7条のクシガキ沈線。	鈍い黄橙色	細砂	〃	○外面煤
440	〃	16.0	3.6	24.6	○肩部外面に2個の刺突、7～8条のクシ沈。	〃	〃	〃	○ほぼ完存
441	〃	16.6	2.8	24.6	○6条のクシガキ沈線。	〃	微砂	〃	○約½残
442	〃	14.2	—	—		〃	細砂	〃	○外面煤
443	〃	15.8	—	—	○口縁部に8条のクシガキ沈線。	褐灰色	微砂	〃	〃
444	〃	12.8	—	—	○口縁部に4条のクシガキ沈線。	淡褐灰色	細砂	〃	
445	〃	14.4	—	—	○口縁部に8条のクシガキ沈線。	鈍い黄橙色	〃	〃	
446	〃	16.0	—	—	○口縁部に9条のクシガキ沈線。	〃	微砂	〃	
447	〃	14.8	—	—	○口縁部に7条のクシガキ沈線。	〃	細砂	〃	
448	〃	12.8	—	—	○口縁部に8条のクシガキ沈線。	〃	〃	〃	
449	〃	14.2	—	—	○肩部外面に刺突。口縁部に7条のクシ沈。	〃	微砂	良好	
450	〃	15.5	—	—	○口縁部に9条のクシガキ沈線。	〃	細砂	〃	
451	〃	17.4	—	25.0	○体部内面粗いハケメのちヘラケズリ。	〃	〃	〃	○外面煤
452	〃	19.3	—	—	○口縁部ヨコナデ。	浅黄橙色	精製粘土	〃	
453	〃	16.6	—	—	○口縁部内面にハケメ。	灰白色	細砂	〃	○外面煤
454	〃	15.4	2.0	19.9	○体部上半外面やや右下がりのタタキメ。	鈍い橙色	〃	〃	〃
455	〃	—	2.6	16.6	○体部内外面粗いハケメ。	灰白色	〃	〃	〃
456	〃	15.8	—	—	○体部上半外面右上がりの細かいタタキメ。	浅黄橙色	〃	〃	
457	〃	13.5	—	—	○口縁部内面ハケメ。	〃	〃	〃	
458	?	—	2.6	—	○底部焼成前穿孔。	〃	精製粘土	〃	
459	高杯形土器	—	—	16.0	○外面ヘラミガキ。	橙色	水漉し粘土	〃	○口径・傾き不詳
460	〃	20.0	14.4	14.0	○透孔は4個。	〃	〃	〃	
461	〃	20.2	—	—	○杯部内外面、脚部外面ヨコヘラミガキ。	〃	〃	〃	
462	〃	22.2	—	—		浅黄橙色	〃	〃	○杯部傾き不詳
463	〃	20.2	—	—		〃	〃	〃	
464	〃	21.6	—	—	○杯部外面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	
465	〃	—	—	—		橙色	〃	〃	
466	〃	20.8	—	—		〃	〃	〃	
467	〃	20.8	—	—		鈍い橙色	〃	〃	
468	〃	21.3	—	—		浅黄橙色	〃	〃	
469	〃	20.3	—	—		〃	〃	〃	
470	〃	—	14.0	—		〃	精製粘土	〃	
471	〃	—	15.1	—		鈍い橙色	水漉し粘土	〃	
472	〃	—	14.3	—		浅黄橙色	〃	〃	
473	〃	—	14.2	—		橙色	〃	〃	
474	〃	9.8	11.9	8.9	○透孔は5個。	浅黄橙色	〃	〃	
475	鉢形土器	14.1	—	—	○内面ヘラケズリか。	灰白色	精製粘土	〃	
476	〃	18.6	—	—	○体部内外面ヘラミガキか。	〃	細砂	〃	
477	椀形土器	15.0	—	7.6		浅黄橙色	精製粘土	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
478	椀形土器	13.3	—	—	○外面ハケメ。内面ヘラミガキ。	橙色	精製粘土	良好	
479	〃	14.2	3.1	7.0	○外面ハケメのちヘラミガキ、内面ハケメ。	鈍い橙色	〃	〃	○ほぼ完存
480	〃	14.2	—	7.0		〃	〃	〃	
481	〃	14.4	—	7.0		橙色	水簸し粘土	〃	
482	〃	15.2	3.1	7.3	○外面ヘラミガキ。	鈍い橙色	精製粘土	〃	○完品
483	〃	13.2	—	9.7	○外面ハケメ。内面ヘラミガキ。	灰白色	細砂	〃	
484	〃	13.4	2.8	7.7	○体部内外面ハケメ。	浅黄橙色	精製粘土	〃	
485	〃	10.8	—	—		〃	微砂	〃	
486	〃	11.1	5.6	6.0	○体部内面ハケメ。	灰白色	精製粘土	〃	
487	〃	11.6	3.8	4.8	○体部外面指頭オサエ、ユビナデ。	〃	〃	〃	
488	〃	8.2	—	3.2	○内外面指頭オサエ、ユビナデ。	浅黄橙色	〃	〃	
489	〃	10.4	—	3.6	○ 〃	灰白色	細砂	〃	
490	手焙形土器	—	—	—		灰黒色	〃	〃	○推定部分多い
491	器台形土器	9.6	—	—	○ヨコナデ。	浅黄橙色	精製粘土	〃	
492	椀形土器	5.0	—	4.1	○内外面指頭オサエ、ユビナデ。	灰白色	〃	〃	
493	鉢形土器	—	4.4	—	○ 〃	浅黄橙色	〃	〃	
494	壺形土器	19.6	—	36.4	○外面ハケメのちヘラミガキ。	鈍い黄橙色	細砂	〃	○外面全体に煤
495	〃	19.2	—	—	○内面ヘラケズリ。	〃	〃	〃	
496	〃	—	—	—	○体部外面上半右上がりのタタキのちハケメ。	〃	〃	〃	

土器溜り－2（第139～141図）

497	鉢形土器	41.2	—	20.5	○体部外面タタキメ残存。	淡黄茶色	精製粘土	良好	○細砂含有する
498	壺形土器	14.0	—	—	○球形に近い体部、垂直の口縁で端部外反。	白淡茶色	細砂を含む	良	○内面黒色
499	〃	19.4	—	—	○逆Lに近い口縁、端部若干つまみ上げ。	淡褐茶色	〃	良好	
500	〃	13.4	—	—	○外面ヘラミガキ。	淡褐色	精製粘土	〃	
501	〃	21.5	—	—	○体部内外面荒いハケメ。	淡黄茶色	細砂を混入	〃	
502	〃	24.6	—	—	○上部ヨコナデ、外面の一部ヘラミガキ。	暗赤茶色	〃	〃	
503	〃	16.0	—	—	○外面ハケメ、上部ヨコナデ。	淡灰茶色	砂粒を混入	〃	
504	〃	17.1	—	—	○体部外面ハケメ。	淡黒色	細砂粒混入	〃	
505	〃	16.6	—	—	○体部ヘラミガキ、頸部オサエ後ちハケ。	茶淡褐色	細砂を混入	〃	
506	〃	20.3	—	—	○体部外面ヨコナデ。	淡黄茶色	〃	〃	
507	〃	—	—	—	○体部外面タタキメ。	白淡黄色	砂粒を混入	〃	○内面黒色
508	甕形土器	13.4	—	—	○体部下半ヘラミガキ、上半ハケメ。	淡茶色	〃	〃	○外面煤付着
509	〃	11.9	—	19.2	○体部外面ハケメ後ちヘラミガキ。	暗茶褐色	細砂を混入	〃	○ 〃
510	〃	13.4	—	—	○体部外面ハケメ後ちナデ。	暗茶色	〃	〃	○ 〃
511	〃	13.7	—	—	○口縁部に8条のクシガキ沈線。	暗茶褐色	細砂多く含	普通	○外面一部黒色
512	〃	15.3	—	—	○体部外面荒いハケメ。	淡茶色	細砂を混入	良好	
513	〃	15.5	—	—	○内外面ヨコナデ。	暗黄茶色	〃	〃	
514	〃	15.3	—	—	○「く」字状に外反する口縁。	淡黄茶色	精製粘土	〃	
515	〃	11.8	2.6	12.5	○外面荒いハケメ。	暗茶色	〃	〃	
516	脚部	—	10.5	—	○底部焼成前穿孔。	〃	〃	〃	○若干細砂を含む
517	高杯形土器	18.3	—	—	内面ヘラミガキ？	赤淡茶色	〃	〃	
518	鉢形土器	14.6	—	6.7	○外面下部ハケメ、上部ヨコナデ。	淡白黄茶色	〃	〃	
519	皿	10.7	—	3.1	○内面ハケメ。	淡茶色	細砂を混入	〃	○外面ハクリ
520	〃	19.5	—	5.2	○ハケメによる調整仕上げ。	白淡茶色	〃	〃	
521	台付鉢形土器	—	4.4	—	○脚部内外面圧痕多く残す。	暗赤色	〃	〃	○製塩土器
522	〃	—	4.7	—	○ 〃	〃	〃	〃	○ 〃

包含層出土遺物（第142図）

523	壺形土器	22.0	—	—	○口縁部内外面ハケのちヨコナデ。	淡茶褐色	砂粒含	良好	
524	〃	18.2	1.8	21.2	○外面頸部にタタキ。	赤褐色	〃	〃	○丹塗り
525	甕形土器	14.8	—	—	○口縁部端面クシガキ沈線。	茶褐色	〃	〃	○スス付着
526	高杯形土器	19.8	—	—	○内外面ハケのち（ヘラミガキ）	明赤褐色	〃	〃	
527	〃	19.4	—	—	○外面ハケのちヘラミガキ。	淡黄褐色	精良	〃	
528	〃	—	15.4	—	○裾部内外面にハケ。	淡赤褐色	〃	〃	
529	鉢形土器	14.6	—	6.2	○外面底部ヘラケズリ、体部ナデ。	〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
530	鉢形土器	11.2	—	—	○内外面ナデ。	赤褐色	砂粒を含む	良	
531	〃	5.8	4.5	8.5	○外面ナデ、オサエ。内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	〃	良好	○黒斑1ヶ所
532	杯身	9.8	—	3.9	○内外面ヨコナデ。	淡灰白色	〃	〃	
533	〃	12.2	—	—	○ 〃	淡青灰色	微砂	〃	
534	器台	—	—	—	○体部にタタキ。脚部に透し有り。	青灰色	細砂を含む	〃	

古代・中世包含層出土遺物（第143図）

535	高台付杯	14.0	9.8	4.6	○底部内面ユビナデ。外面ヘラケズリ。	灰白色	微砂	良好	
536	高台付杯	—	—	—	○ヨコナデ調整。	淡灰色	細砂を含む	良	
537	瓦器椀	—	—	—	○内面ヘラミガキ。高台部ヨコナデ。	灰白色	精良	良好堅	

高縄手A調査区遺構・遺物一覧表

表14　高縄手A調査区竪穴式住居一覧表

細別／番号	種類	形	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	主柱穴	柱間距離(cm) 最大	柱間距離(cm) 最小	中央穴 プラン	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	焼土 焼土	焼土 壌	壁体溝	付属施設 ベッド状イコウ	付属施設 貯蔵穴	付属施設 カマド	付属施設 位置	柱穴長軸方向	時代	区	遺物
10	竪穴式住居	円形	760	710	42.5	7	220	190	円	60×60	20～30	－	－	－	－	－	－	－	－	百・前・II	208 J	壺、甕、針 楔形石器、石錘 サヌカイト剥片
11	〃	隅丸長方形	430	－	(9.53)	－	－	－	－	－	－	○	－	○	－	－	－	－	－	百・古・II	208 I	壺、甕、高杯
12	〃	不整円形	500	500	19.6	4	200	200	長方	80×70 120×60	30	○	－	○	－	－	－	－	－	百・古・I	209 I・J	壺、甕、高杯、鉢 砥石
13	〃	隅丸長方形	480	410	17.0	2	210	－	楕円	45×50	10	－	－	○	－	○	－	－	N-38°-E	百・古・I	208 K	壺、甕、高杯、器台、椀 礎板2、土錘、鉄器
14	〃	隅丸長方形	400	360	14.4	－	－	－	不整	70×80	20	○	－	－	－	－	－	－	－	百・古・II	208 L	鉢・石鏃
15	〃	隅丸台形	485	415	20.1	4	210	140	楕円	35×30	5	○	－	○	－	－	－	－	N-57°-E	百・古・II	208 L	壺・甕
16	〃	隅丸長方形	387	355	13.7	－	－	－	楕円	85×67	15	○	－	○	－	－	－	－	－	百・古・I	208 L	高杯・鉢
17	〃	隅丸方形	432	428	18.5	4	185	175	－	－	－	－	－	○	－	－	－	－	N-28°-W	百・古・II	208.9 L	壺・甕・高杯・鉢
18	〃	隅丸長方形	445	(350)	(15.6)	2	165	－	不整円	38×35	(20)	○	－	○	－	－	－	－	N-67°-E	百・古・I	209 L	土器細片・砥石
19	〃	隅丸四辺形	380	310	11.8	4	165	125	楕円	100×50	10	－	－	－	－	－	－	－	N-55°-E	百・古・II	209 L	甕・鉢
20	〃	隅丸長方形	405	353	14.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	古墳時代前期	209 L	土器細片・鉄鏃
21	〃	隅丸台形	440	390	14.5	4	220	155	円	55×55	8	○	－	○	○	－	－	－	N-34°-E	百・古・II	209 L	火災 敲石、銅鏡、白玉、鉄器、甕、高杯、小形壺、椀
22	〃	(?)	－	－	－	－	－	－	－	－	－	○	○	－	－	－	－	－	－	百・古・I	209・10 K	鉢、手焙り形土器

表－15　高縄手A調査区建物一覧表

細別／番号	規模	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	桁行(cm)	梁間(cm)	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方(cm)	検出地区	備考
10	2×2	197・192 210・179	165・180 179・160	389	345、339	13.3	MN－4°－W	38～45	209M	百・古

表－16　高縄手A調査区井戸一覧表

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
14	207G	115×114×169	円	甕・高杯	百・古・I
15	207H	130×85×160 (189×184)	楕円(円)	甕	百・古・II
16	207H	160×130×200	不整長方	甕・高杯・製塩土器	百・古・II
17	207H	210×190×180	円	壺・甕・製塩土器	百・古・I
18	207I	240×230×175	不整円	壺・甕・高杯・鉄鏃・木製品(杭?)	百・古・II
19	207I	60× 60× 75	円	－	古墳時代前期
20	209I	170×165×165	円	壺・甕・高杯	百・古・I

百間川沢田遺跡 2

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
21	208 J	80× 70× 80	楕円	壺・甕・高杯・椀・器台	百・古・I
22	208 J	39× 38× 38	方	甕・鉢	古墳時代前期
23	209 J	163×155×170	不整円	土器細片	百・古・I
24	207 L	120×100× 90	円	—	古墳時代前期
25	208 K	170×148×154	不整円	壺・甕・鉢	古墳時代前期
26	208 K	140×115×170	楕円	甕・高杯	百・古・II
27	208 K	120×118×140	不整円	鉢・坩・木製品	百・古・II
28	208 K	168×145×192	楕円	壺・甕・高杯・鉢・坩	百・古・I
29	208 K·L	99× 88×130	楕円	甕・鉄製品	百・古・II
30	209 K	100× 78×132	不整楕円	壺・甕・鉢	百・古・II
31	209 L	118×113×138	円	直口壺・甕・鉢	百・古・II
32	209 L	155×160×135	円	壺・甕・高杯・鉢	百・古・I
33	209 M	165×148×161	円	壺・甕・鉢・高杯・木器	百・古・II
34	208 M	88× 72× 82	楕円	甕	百・古・I、百・古・II
35	208 M	44× 40× 19	円	(洪水砂層除去後検出)	百・古・I、百・古・II
36	209 M	88× 81×125	不整円	甕・鉢	百・古・II
37	210 M	100×115×145	不整円	壺・甕	百・古・I～II
38	210 M	105×120× 95	不整円		百・古・I～II
39	210 M	100×105× 70	円	甕・高杯	百・古・I

表－17 高縄手A調査区土壙・土壙墓一覧表

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
25	210 M	300×250× 50	不整円		縄文時代晩期
26	210 M		不整円		縄文時代晩期
27	210 M		不整円		縄文時代晩期
28	210 M		不整円		縄文時代晩期
29	207 G	140×130×100	不整円	壺・甕・蓋・太型蛤刃石斧	百・前・II
30	207 G	235×190× 30	不整	甕	百・前・II
31	207 G	170×110× 55	不整長方	土器細片・サヌカイト剥片	百・前・II
32	207 G	60× 26× 15	楕円	土器細片	百・前・II
33	207 G	420×240× 40	不整円	壺・甕・石器	百・前・II
34	208 G	140× 40× 30	長楕円	土器細片	百・前・II
35	208 G	210× 65× 35	長楕円	土器	弥生時代前期
36	208 G	280×100× 25	長楕円	土器	〃
37	208 G	125×100× 60	長楕円	壺・甕	百・前・II
38	207 H	200× 90× 60	隅丸長方	壺・甕・鉢・スクレイパー・サヌカイト剥片	〃
39	207 H	150×105× 20	不整長方	壺・鉢・石鏃・サヌカイト剥片・焼土塊	〃
40	207 H	115× 80× 15	不整楕円	土器細片・焼土塊・炭化物	〃
41	208 H	210×110× 25	不整長方	壺・甕	百・前・II
42	208 H	160× 75× 60	楕円	甕	百・前・II
43	208·9 H	285× 70× 20	長楕円	甕	百・前・III
44	207 I	—×—×—	—	甕	百・前・II

百間川沢田遺跡 2

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
45	207 I	(150×100×45)	不整	甕・蓋・石鏃	百・前・II
46	207 I	220× 90× 25	隅丸長方	土器細片・サヌカイト剥片・土製紡錘車	〃
47	207 I		不整	甕・石鏃	百・前
48	207·8 I	360×140× 20	長楕円	壺・甕・蓋・太型蛤刃石斧	百・前・II
49	208 I	120×100× 15	不整円	甕	百・前・II
50	208 I	100× 45× 30	楕円	壺	百・前・II
51	209 I	140× 83× 30	楕円	甕・石鏃	〃
52	209 I	105× 70× 25	楕円	土器細片	百・前・II
53	209 I	55× 55× 15	円	壺、土製紡錘車・磨石	百・前・II
54	208 I	38× 38× 20	円	壺	〃
55	208 J	160× 80× 20	長方	甕	〃
56	208 J	130× 80× 30	長方	壺・甕・蓋・サヌカイト剥片	〃
57	208 J	120× 70× 15	不整楕円	土器細片	〃
58	208·9 J	110× 53× 5	隅丸長方	甕・管玉	〃
59	209 J	180× 90× 70	不整楕円	壺・甕	〃
60	210 J	130× 80× 50	不整楕円	壺	〃
61	210 K	305× 80× 35	長楕円	甕	百・前・III
62	210 K	290×105× 30	〃	〃	〃
63	209 L	175× 90× 30	長方	土器・石器	〃
64	208 L	130×115× 50	不整	—	弥生時代前期
65	209 L	105× 70× 50	楕円	—	〃
66	207 L	200×180× 25	不整	焼土塊・木炭片	〃
67	207 L	230×185× 10	〃	—	〃
68	207·8H·I	300×125× 20	隅丸長方	壺・甕	百・前・III
69	206 F	147× ? × 74	円	土器	百・古・I
70	207 H	350× ? × 3	隅丸方?	土器細片	古墳時代前期
71	208 K	104×101× 30	隅丸方	土器	百・古・I
72	207 L	90× 70× 25	楕円	甕	百・古・II
73	208 M	42× 31× 17	楕円		古墳時代前期
74	209 M	77× 58× 13	不整方		〃
75	209 M	111× ? × 10	不整方		〃
76	209 M	87× 45× 9	長楕円		〃
77	209 M	159× ? × 16	円	土器	〃
78	210 M	105× 75× 45	楕円	土器	百・古・I～II
79	204 L		円		中世
1	208 J	105× 55× 19	長方	—	弥生時代前期
2	209 J		〃	—	弥生時代前期・中期

表－18 高縄手A調査区溝一覧表

番号	区名	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	時期
69	206～8 G・H	360	160	逆台	壺・甕・石器	百・前・II
70	207～9 J・K	400	130	皿・U字	壺・甕・鉢・蓋・石鏃・石錐・スクレイパー・石庖丁	百・前・II
71	207 G	100	18	レンズ状	土器片	弥生時代前期
72	203 L	200	55	逆台	甕	百・前・III

百間川沢田遺跡 2

番号	区名	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	時期
73	208 J	50	10	Ⅲ	甕	弥生時代前期
74	207L	90	5	〃	—	〃
75	208・9 G・H	50	15	〃	土製紡錘車	弥生時代
76	〃			〃	—	〃
77	〃	30	10	〃	—	〃
78	208G	50	10	〃		〃
79	203L	(100)	32	逆台	—	弥生時代中期
80	206・7 F・G	140	20	Ⅲ	—	弥生時代後期
81	〃	40	8	〃	—	〃
82	207G・H	105	15	〃	—	〃
83	〃	200	10	〃	—	〃
84	207G	70	5	〃	—	〃
85	208G	30	5	〃		〃
86	〃	30	5	〃		〃
87	〃	40	15	〃		〃
88	208H	80	15	〃	—	
89	208G	35	5	逆台		弥生時代
90	〃	80	10	〃		弥生時代後期
91	207・8 I	65	10	Ⅲ	—	〃
92	208・9 J	15	6	〃	—	〃
93	208J			〃	—	〃
94	208K	30	4	〃	—	〃
95	〃	80	8	〃	—	〃
96	〃	35	4	〃	—	〃
97	〃	30	3	〃	—	〃
98	209・10M	40～90	3～8	〃	—	百・後
99	206・7 L	60	15	〃	—	弥生時代後期
100	203L	310	50	〃	—	百・後・Ⅳ
101	〃	210	60	V字	長頸壺	百・後・Ⅲ
102	207F	100～120	2～12	U字		百・古
103	〃	48～62	10～16	〃		〃
104	〃	65～90	25～34	〃		〃
105	〃	?	10	〃		〃
106	207G	50	15	〃	土師器	古墳時代前半
107	〃	100	10	レンズ状	土師器	古墳時代前半
108	207G・H	130	20	〃	須恵器	古墳時代以後
109	207H	60	15	〃	土師器	古墳時代前半
110	〃	80	15	〃	土師器	古墳時代前半
111	〃	90	15	〃	土師器	古墳時代前半
112	〃	100	10	〃	土師器	古墳時代前半
113	208J	70	19	〃	土師（須恵器？）	古墳時代前半以後
114	〃	100・170	20・14	〃	土師器	百・古・I
115	〃	240	25	レンズ状	土師器（甕・鉢・高杯）	百・古・I

番号	区名	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	時期
116	208 J・K	270	15	レンズ状	土師器	百・古・I
117	208 J、208・9 K	180	17	レンズ状	土師	百・古・II
118	209 K	110	23	U字	土師器	古墳時代前半
119	209 J	40	17	U字	高杯	百・古
120	209M	90～160	3～11	皿		〃
121	〃	145～222	5	〃		〃
122	〃	160～368	9～20	〃	壺・甕・鉢形土器	〃
123	〃	10～30	2～4	〃	鉢形土器	〃
124	203 L	(15)	(10)	〃		百・古・I
125	206・7 G H	60～100	5～6	浅い擂鉢	須恵器	中世
126	207 G	60	10	U字	陶器	近世以後
127	207 I	40～100	5～6	浅い擂鉢	須恵器	中世
128	208・209 K	80	20	U字	須恵器・土師器	〃
129	208・209 K	70	5	〃	〃	〃
130	208・209 K	140	20	〃	〃	〃
131	208・209 K	110	5	〃	〃	〃
132	203・4 L	115	23.5	〃	早島式土器・椀・木片	中世(12C末～13C初)

表－19　高縄手A調査区土製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
173	13	紡錘車	207 I	土壙－46	土	(45.0)	(24.0)	10.8	13.71	5/6残
179	14	〃	209 I	土壙－53	〃	47.5	47.5	8.2	40.10	完
210	15	〃	209H	溝－90	〃	45.0	43.0	12.0	50.00	〃
222	16	土錘			〃	33.5	33.5	41.5		〃
228	17	〃	208K	竪穴式住居－13	〃	(50.0)	19.5	16.5		
228	18	〃	208K	〃	〃	(50.0)	18.5	17.5		
316	19	〃	208L		〃	57.0	14.0	14.0	10.42	完

表－20　高縄手A調査区玉類一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
184	3	管玉	208 J	土壙－58	碧玉	8.2	3.4	3.3	0.11	墓壙？
222	4	〃	208・9 L	土器溜り－3	碧玉	20.6	6.0	6.0	1.11	
224	5	〃	208 I	竪穴式住居－11	緑色凝灰岩	17.0	4.5	－	0.43	両側穿孔
236	6	臼玉	209 L	竪穴式住居－21	滑石	6.0	6.0	2.1		

表－21　高縄手A調査区金属器一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
209	9	摘鎌	208 J	水田層	鉄	114.0	44.3 (54.0)	4.8 (12.0)	70.50	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
224	10	鉄鏃	208 I	竪穴式住居－11	〃	(50.0)	28.0	2.5	12.99	
228	11	鉄鏃?	208 K	竪穴式住居－13	〃	24.8	13.8	3.0	3.31	
236	12	鉄鏃	209 L	竪穴式住居－20	〃	34.5	(16.0)	2.7	1.10	
236	13	小型素文鏡	209 L	竪穴式住居－21	青銅	29.7	29.0	5.2	2.15	
245	14	鉄鏃	207 I	井戸－18	鉄	53.8	(20.8)	5.8	7.63	
262	15	鉄鏃?	208 K	井戸－29	〃	40.2	23.0	1.2	2.05	
262	16	〃	208 K	〃	〃	32.5	(8.5)	3.2	1.97	
293	17	〃	207 H	土器溜り－5	〃	32.0	(15.5)	1.5	2.07	
307	18	〃	208 K	土器溜り－12	〃	18.0	10.0	4.0	0.60	
309	19	〃	208 K	包合層	〃	19.0	17.0	3.0	1.30	
317	20～23	古銭	203 L	近代墓	青銅	－	－	－	－	寛永通寶
317	24·25	キセル	〃	〃	〃	－	－	－	－	
317	26～28	釘	〃	〃	鉄	－	－	－	－	

表－22　高縄手A調査区石器・石製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
153	45	スクレイパー	204 L	斜面堆積－1	サヌカイト	54.30	35.75	8.50	18.25	欠
〃	46	〃	〃	〃	〃	64.80	31.10	5.30	11.95	欠
155	47	スクレイパー	210 N	斜面堆積－2	〃	39.00	51.00	4.50	12.65	
〃	48	R．F	210 N	〃	〃	35.50	41.00	5.00	12.59	
〃	49	不定形刃器	210 N	〃	〃	30.00	73.00	10.00	24.06	
158	50	楔形石器	208 J	竪穴住居－10	〃	51.30	37.30	17.20	29.40	
〃	51	楔形石器	〃	〃	〃	22.00	26.60	8.80	7.37	
〃	52	石鏃	〃	〃	〃	17.50	12.80	2.50	0.51	II・欠
160	53	太型蛤刃石斧	207 G	土壙－29	?	144.20	71.95	52.60	894.88	先端欠損
162	54	スクレイパー	〃	土壙－33	サヌカイト	49.45	46.00	7.30	21.13	
167	55	〃	207 H	土壙－38	〃	39.50	40.90	6.20	13.96	
168	56	石鏃	〃	土壙－39	〃	11.00	8.90	2.80	0.73	II・欠
173	57	〃	207 I	土壙－47	〃	23.00	15.80	2.20	0.71	V・完
〃	58	〃	〃	土壙－44	〃	26.65	17.15	3.25	0.43	V・完
〃	59	〃	〃	〃	〃	36.70	20.65	3.70	1.20	V・ほぼ完
174	60	太型蛤刃石斧	〃	土壙－48						
177	61	石鏃	209 I	土壙－51	サヌカイト	21.70	15.55	2.90	0.57	II・完
179	62	磨石・敲石	209 I	土壙－53		.00	104.00	55.00	210.00	
185	63	石鏃	209 J	土壙－59	サヌカイト	21.65	14.25	3.00	0.77	II・欠
188	64	石匙	209 L	土壙－63	〃	80.30	40.50	6.10	19.33	外湾刃・完
194	65	磨製石庖丁	208 G	溝－69最下層	?	57.00	126.00	6.00	76.42	
197	66	打製石庖丁	209 J	溝－70	サヌカイト	31.55	52.65	11.00	16.97	
〃	67	石鏃	〃	〃	〃	16.70	13.70	2.30	0.44	II・完
〃	68	〃	〃	〃	〃	23.45	16.35	3.65	0.90	〃
〃	69	〃	〃	〃	〃	29.40	12.25	3.20	0.87	〃

百間川沢田遺跡 2

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
197	70	石鏃	209 J	溝－70	サヌカイト	36.55	13.30	3.25	1.25	Ⅳ・完
〃	71	石錐	〃	〃	〃	30.25	16.00	5.55	1.74	完
〃	72	磨製石庖丁	〃	〃	結晶片岩	63.25	60.65	4.00	18.48	半截
〃	73	スクレイパー	〃	〃	サヌカイト	73.90	49.85	7.20	25.46	
207	74	石鏃	207 I	基盤上面	〃	20.00	18.80	4.00	1.23	Ⅰ・完
〃	75	〃	209 K	〃	〃	22.20	19.50	3.60	1.61	〃
〃	76	〃	208 J	〃	〃	17.00	14.80	3.50	1.07	Ⅱ・完
〃	77	〃	207 H	〃	〃	22.70	16.10	4.20	1.18	〃
〃	78	〃		〃	〃					〃
〃	79	〃	208 I	〃	〃	21.50	15.20	2.20	0.58	Ⅴ・完
〃	80	石錐	〃	〃	〃	27.05	13.30	5.60	1.80	完
〃	81	スクレイパー	〃	〃	〃	62.40	48.05	10.80	25.67	
〃	82	〃	203 L		〃	9.39	4.37	1.00	37.90	自然面残
〃	83	磨石								欠
209	84	石鏃	209 J	暗褐色粘土上面	サヌカイト	25.35	15.80	3.00	1.13	Ⅱ・欠
〃	85	〃	〃	〃	〃	15.25	14.05	3.05	0.51	Ⅱ・欠
212	86	砥石	209 K	「島状高まり」遺構－24	?	114.25	71.90	81.10	815.07	
〃	87	石鍬	209 I	「島状高まり」遺構－21	サヌカイト	121.60	55.85	22.85	141.91	
〃	88	スクレイパー	209 J	「島状高まり」遺構－22	〃	40.30	62.25	10.00	34.77	磨滅
〃	89	石鏃	208 I	「島状高まり」遺構－20	〃	15.80	18.50	2.95	0.60	Ⅱ・先欠
〃	90	〃	208 J	「島状高まり」遺構－22	〃	17.10	12.90	2.70	0.60	Ⅰ・完
〃	91	〃	〃	「島状高まり」遺構－22	〃	23.10	15.40	3.50	0.81	Ⅴ・欠
〃	92	〃	209 K	「島状高まり」遺構－24	〃	16.35	14.70	3.15	0.70	Ⅰ・完
〃	93	〃	〃	「島状高まり」遺構－24	〃	18.70	15.55	3.50	0.78	Ⅱ・欠
〃	94	太型蛤刃石斧	209 J	「島状高まり」遺構－21	玢岩	－	76.50	－	258.19	先端部破片
〃	95	〃	〃	「島状高まり」遺構－22		－	－	36.95	94.40	〃
222	96	石鏃	208 L	茶褐色土	サヌカイト	14.60	11.55	2.15	0.35	Ⅰ・欠
〃	97	〃			〃	18.30	13.00	3.50	0.58	Ⅱ・完
〃	98	〃	210 N	基盤層上面	〃	21.80	13.80	2.45	0.71	Ⅰ・欠
〃	99	〃	208 J		〃	21.80	13.50	3.50	0.62	Ⅱ・完
〃	100	〃	209 J		〃	21.70	16.85	3.85	0.92	〃
〃	101	〃	207 G	砂層上面	〃	26.20	18.90	3.20	1.17	Ⅴ・欠
〃	102	〃	207 H		〃	13.90	10.00	3.70	1.07	Ⅴ・完
〃	103	スクレイパー	208 G		〃	25.65	20.45	4.90	2.93	
〃	104	石錐	208 J		〃	32.70	12.90	7.10	1.60	
〃	105	〃	〃		〃	37.10	8.20	5.10	1.12	完
〃	106	〃	207 H	砂層上面	〃	31.10	20.70	3.50	1.44	完
〃	107	スクレイパー			〃					
〃	108	楔形石器	209 J		〃	28.00	26.35	9.80	8.20	
〃	109	R．F	208 J		〃	43.95	27.20	4.30	5.26	
〃	110	スクレイパー			〃	82.30	55.30	7.30	78.24	
〃	111	〃	208 J		粘板岩 ?	47.20	62.60	8.80	29.60	
〃	112	〃	208 G		サヌカイト	66.85	58.95	8.40	30.74	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
222	113	石鏃	208G		サヌカイト	60.20	53.60	16.85	50.44	上半欠損
227	114	砥石	209J	竪穴式住居－12	砂岩	230.00	70.00	40.00	110.00	
〃	115	〃	〃	〃	〃	190.00	70.00	30.00	61.00	
〃	116	〃	〃	〃	凝灰岩	120.00	40.00	30.00	17.00	
228	117	石鏃	208K	竪穴式住居－13	サヌカイト	7.20	14.90	2.50	0.31	II・欠
230	118	石鏃	208L	竪穴式住居－14	〃	93.35	52.35	20.60	130.50	先欠
233	119	砥石	209L	竪穴式住居－18	?	33.80	8.25	7.80	4.62	
238	120	敲石	〃	竪穴式住居－21	?	144.15	50.60	41.85	502.36	古・すり石兼用
255	121	石錘	208K	井戸－26		80.20	72.30	50.20	505.00	
293	122	石斧	207H	土器溜り－5	砂岩	45.00	41.90	23.80	117.10	
309	123	石帯?	207L			42.70	33.10	6.45	13.85	
310	124	石錘	208・9 M	暗灰色粘土層下層	火成岩	64.00	57.80	40.60	192.90	欠

表－23　高縄手A調査区木器・木製品観察表

遺物番号	掲載図	名称・用途	法量 (cm)	特徴	樹種	木取法	手法・備考
1	第257図	板状材 鍬?	残存長 28.7 幅 16.0 厚 2.8 枘穴4.0×2.4	○表面は平坦に調整されているが厚さに差がある。一部に表面の加工痕残る。 ○上部中央が弧状に、下部中央は鋭角に抉られている。 ○枘穴はほぼ中央で、少し窪みがある。		板目材	
2	第257図	板状材 鍬?	残存長 25.4 幅 14.0 厚 2.0 枘穴5.0×2.8	○表面は平坦に調整、厚さは比較的均一である。 ○一部に加工痕が残存する。 ○上端はまっすぐであるが、下端中央は弧状に抉られている。 ○枘穴はほぼ中央部に楕円状を呈している。		板目材	
3	第267図	双孔板材 (椅子?)	残存長 73.4 幅 15.0 厚 2.4 ほぞ孔 4.0×2.7	○表面は丁寧に調整され平坦になっている。裏面には手斧による削り痕が顕著に残っている。 ○木口面は面取りされる。両側縁は丸く調整される。 ○両端にほぞ孔があり、ここへ脚の先端を加工して組み合わせると考えられる。 ○裏面中央付近は削り込まれ薄くなっている。	ヒノキ	板目材	
4	第268図	棒状加工品	残存長 30.9 幅 3.0 厚 2.4	○断面四角形の棒状を呈する。先端部分は削られて、内溜する傾斜面を形成する。箆状と呼うべきか。 ○折損しているものと考えられる。 ○先端は薄くなって、断面形は三角形を呈するか。	ヒノキ	板目材	
5	第268図	二又鋤 または鍬	残存長 44.6 幅 5.0 厚 1.8	○表面は丁寧に調整され平滑にされている。裏面には削り痕をよく残す。先端は表裏とも丁寧に調整される。 ○二又の内側部分の側縁は丸く調整される。外縁は平面である。 ○先端にいくにしたがって薄くなる。 ○先端は外縁も丸く調整される。 ○外縁は二又に分かれる部位より少し上に肩をもつか。この部位から上は一段厚くなっている。	カシ	板目材	

表－24　高縄手A調査区土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
斜面堆積－1（第154図）									
538	深鉢形土器	－	－	－	○外面上部条痕、下部擦痕。内面ハケ状工具	灰褐色	砂粒細砂多	良	○小破片。
539	〃	－	－	－	○外面擦痕とナデ、内面ナデ。	〃	〃	〃	○ 〃 。
540	〃	26.6	－	－	○外面条痕文。内面ハケ状工具による調整。	褐灰色	石粒砂粒多	良 好	○1/6残存。
541	〃	－	－	－	○外面ナデか。内面ハケ状工具による調整。	灰褐色	〃	〃	○小破片。
542	〃	25.7	－	－	○内面きわめて細かいハケ状工具によるか。	褐灰色	砂粒細砂含	やや甘	○1/6強残存。
543	〃	－	－	－	○外面ヘラケズリ後ナデるか。内面調整丁寧	灰白色	砂粒かなり	良好堅	○小破片。
544	〃	－	－	－	○体部下半擦痕。内面ハケ状工具による調整	灰褐色	砂粒細砂含	やや甘	○ 〃 。
545	〃	39.6	－	－	○内外面剥落。ナデのみられる部分あり。	〃	〃	〃	○1/6強残存。
546	〃	－	－	－	○内外面ナデか。	〃	〃	良	○小破片。
547	〃	－	－	－	○外面ごく細かいハケ状工具か。	褐灰色	砂粒多量含	良 好	○ 〃 。
548	〃	－	－	－	○外面沈線より下ヘラケズリ、上はナデ。	灰褐色	砂粒多	良	○ 〃 。
549	〃	8.0	－	－	○外面擦痕、内面ナデ。	黒褐色	石粒砂粒多	良 好	○1/2弱残存。
550	〃	－	－	－	○体部外面下半擦痕。内面上半ハケ状工具。	灰褐色	砂粒細砂多	良	○体部1/6残存。
551	〃	－	－	－	○外面擦痕、ヘラケズリ。内面強いナデ。	〃	石粒砂粒多	〃	○小破片。
552	〃	23.1	－	－	○外面擦痕、ヘラケズリ。内面ナデ。	褐灰色	砂粒大量含	〃	○1/6残存。
553	〃	－	－	－	○外面ナデ。内面ハケ状工具による調整。	灰褐色	石粒砂粒多	〃	○小破片。
554	浅鉢形土器	30.6	－	－	○口縁外面ナデ。体部外面ヘラケズリ。	鈍橙色	砂粒多し	良 好	○1/6残存。
555	〃	－	－	－	○波状口縁。外面ナデ、内面ヘラミガキ。	〃	砂粒細砂多	良	○小破片。
556	〃	－	－	－	○外面屈折部に沈線。内外面ヘラミガキ。	黒褐色	砂粒大量含	良 好	○ 〃 。
557	甕形土器	－	－	－	○口縁外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ。	鈍橙色	砂粒多量含	良	○ 〃 。弥生土器。
558	底部	－	6.8	－	○内外面すべてナデ。	灰白色	石粒砂粒多	〃	○底部完存。 〃
559	〃	－	7.2	－	○外面ヘラミガキ。内面もヘラミガキか。	黒褐色	砂粒細砂多	良 好	○1/6弱残存。 〃
560	〃	－	7.1	－	○底面ナデ。	橙色	石粒砂粒多	〃	○底部完存。 〃
斜面堆積－2（第155図）									
561	深鉢形土器	－	－	－	○波状口縁。外面条痕、ヘラガキ。内面沈線	暗灰色	砂粒含	良 好	
562	〃	－	－	－	○凸帯、口縁部キザミメ。口縁部内面沈線。	灰褐色	〃	〃	
563	〃	－	－	－	○外面貼付凸帯キザミメ。内面沈線。	黒褐色	〃	不 良	
564	〃	－	－	－	○ 〃 。内面ナデ、沈線。	黒灰色	〃	〃	
565	〃	－	－	－	○ 〃 。条痕。内面ナデ。	淡茶灰色	〃	良 好	
566	〃	－	－	－	○ 〃 。内面ナデ。	黒茶褐色	〃	良	
567	〃	－	－	－	○凸帯、口縁部キザミメ。口縁部内面凹部。	淡茶褐色	〃	〃	
568	〃	－	－	－	○外面貼付凸帯キザミメ。口縁部キザミメ。	淡黄褐色	〃	良 好	
569	〃	－	－	－	○凸帯、口縁部キザミメ。外面条痕。	〃	〃	良	
570	〃	－	－	－	○外面貼付凸帯キザミメ。外面ヘラケズリ。	〃	〃	〃	
571	〃	－	－	－	○ 〃 。外面ナデ、ハケ？	〃	〃	〃	
572	〃	－	－	－	○ 〃 。	淡灰褐色	〃	〃	
573	〃	－	－	－	○ 〃 。条痕。	淡茶褐色	〃	良 好	
574	〃	－	－	－	○ 〃 。口縁部キザミメ。	淡赤褐色	〃	良	
575	鉢形土器	－	－	－	○口縁部内湾する。	淡灰色	〃	〃	
576	浅鉢形土器	－	－	－	○内外面ヘラミガキ。	暗灰色	〃	良 好	
斜面堆積－3（第157図）									
577	深鉢形土器	24.4	－	(6.0)	○口縁端キザミメ、胴部外面擦痕。	暗黄灰色	小砂粒	良 好	
578	〃	28.4	－	(12.5)	〃 〃	灰白色	〃	〃	
579	〃	25.4	－	(8.7)		暗茶灰色	〃	〃	
580	〃	33.6	－	(10.1)	○内面指頭圧痕文。	橙色	〃		
581	〃	34.4	－	(11.8)	○内外面に凹凸。	鈍い橙色	〃		
582	鉢形土器	－	－	(4.1)	○外面円滑な仕上げ。	暗黄灰色	〃	良 好	
583	深鉢形土器	－	－	(7.1)	○爪形文上位に条痕、下位擦痕。	暗灰茶色	〃	〃	○内面剥落
584	〃	－	－	(2.3)		黒茶灰色	〃	〃	
585	〃	－	－	(4.1)		暗黄灰色	〃	〃	
586	〃	－	－	(2.2)		黄灰色	砂粒多い	〃	

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
587	深鉢形土器	—	—	(2.3)			白色小砂粒		
588	〃	—	—	(3.1)	○条痕の上をヘラガキ沈線。	暗茶灰色	〃		
589	〃	—	—	(4.5)		〃	〃		
590	〃	—	—	(3.3)		鈍い橙色	〃		
591	〃	—	3.9	(2.0)		橙色	〃	普通	
592	〃	—	2.5	(1.7)	○外面底ミガキ？	茶灰色	砂粒	良好	
593	〃	—	2.2	(3.1)	○内面底ナデ、外面面取り？	橙色	小砂粒	〃	
594	〃	—	—	(5.2)		暗灰色	白色小砂粒	〃	○外面煤付着。
595	鉢形土器	16.0	—	(3.7)	○口縁部ヨコナデ。	鈍い黄橙色	精製粘土	〃	
596	深鉢形土器	—	—	(4.9)	○ヘラガキ沈線。	灰茶褐色	〃	〃	
597	〃	—	—	(2.8)		〃	〃	〃	
598	〃	—	—	(3.2)		鈍い橙色	砂粒大	〃	
599	〃	—	—	(3.3)		暗茶灰色	砂粒	〃	
600	甕形土器	—	—	(2.9)		茶灰色	白色小砂粒	〃	
601	〃	—	—	(6.7)		明褐色	〃	〃	
602	〃	—	—	(2.3)		黄橙色	〃	〃	
603	〃	—	—	(2.7)		黒灰色	〃	〃	
604	〃	—	—	(2.4)		橙色	砂粒大	〃	○外面煤付着。
605	〃	—	—	(3.3)		ススケ	白色小砂粒	〃	
606	〃	—	6.4	(4.4)		暗い橙色	〃	〃	
607	〃	—	8.4	(2.2)		黄橙色	〃	〃	
608	〃	—	4.2	(1.5)		鈍い橙色	砂粒多い	〃	
609	〃	—	7.0	(2.2)		〃	白色小砂粒		
610	〃	—	7.4	(2.2)		〃	〃		○内面煤付着。

竪穴式住居－10（第158図）

611	壺形土器	15.5	—	—	○端部はヨコナデ。	淡黄橙色	小石粒含	やや甘	
612	甕形土器	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。	〃	〃	普通	
613	〃	—	—	—	○ヘラガキ沈線、上はヨコ、下はタテナデ。	黄橙色	〃	やや甘	○外面煤付着。
614	壺形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ後ヘラガキ沈線で施文。	暗黄灰色	細砂	普通	○黒斑あり。
615	鉢形土器	—	—	—		暗茶灰色	〃	〃	○縄文時代晩期。
616	甕形土器	—	—	—	○屈曲部に1条、その下に3条のヘラ沈線。	暗黄灰色	〃	やや甘	
617	底部	—	7.0	—	○外面ヘラミガキ。裾部に2条のヘラ沈。	黄灰色	小石粒含	普通	
618	〃	—	(7.4)	—		淡茶灰色	〃	〃	
619	〃	—	7.4	—	○外面ミガキ。	橙色	〃	〃	
620	甕形土器	—	8.4	—	○体部外面ハケメ。	橙灰色	〃	〃	○外面に黒斑。

土壙－29（第161図）

621	壺形土器	—	8.5	—	○胴部外面ヘラミガキ。	赤褐色	粗砂	良	
622	甕形土器	20.5	—	—		明褐色	〃	〃	○外面煤付着。
623	〃	24.5	—	—	○口縁端部ヘラキザミ・頸部1条のヘラ沈線	褐色	〃	〃	○ 〃 。
624	〃	20.5	—	—	○口縁端部ヘラキザミ。	〃	砂粒	良好	
625	〃	20.0	7.5	24.5	○口縁端部ヘラキザミ・頸部ヘラナデ圧痕。	淡褐色	粗砂	良	○外面煤付着。
626	〃	19.0	—	—	○胴部上端に1条のヘラガキ沈線。	褐色	〃	〃	
627	鉢形土器	—	—	—		黒褐色	細砂	〃	
628	底部	—	8.0	—		赤褐色	〃	〃	
629	〃	—	7.6	—	○内外面ヘラミガキ。	明茶褐色	〃	良好	
630	〃	—	8.5	—		灰褐色	〃	良	
631	〃	—	8.8	—		淡褐色	粗砂	〃	
632	蓋形土器	—	19.0	—	○内面ヨコヘラミガキ。	褐色	細砂	良好	

土壙－33（第163図）

633	壺形土器	10.3	6.0	16.0	○ナデおよび細かいミガキ調整。	暗黄灰色	砂粒を含む	良好	○一部に黒斑。
634	〃	15.5	—	—	○内面ヘラミガキ、頸部2条の沈線。	灰茶褐色	細砂	良	
635	〃	—	—	—	○体部外面ヘラガキ。沈線は3本。	白褐色	粗砂	良好	○一部に黒斑。
636	〃	18.6	—	—	○頸部に2条の沈線。棒状の先端による刺突。	淡褐色	細砂	〃	

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
637	壺形土器	19.3	—	—	○内面シボリ状痕跡。	乳灰色	3㎜砂粒	良	
638	〃	17.5	—	—	○口縁端部へラミガキ。	白灰色	〃	〃	
639	甕形土器	21.2	—	—	○口縁端部へラキザミ、頸部2条へラ沈線。	赤褐色	粗砂	軟	
640	〃	(23.8)	—	—	○頸部外面1条のヘラガキ沈線。	灰橙色	小石粒含	普通	○煤付着。
641	〃	(21.4)	—	—	○頸部外面2条のヘラガキ沈線。	橙色	〃	やや甘	○ 〃 。
642	〃	(20.6)	—	—	○2条のヘラ沈の間に浅い円形の刺突巡る。	淡黄褐色	細砂	〃	
643	蓋形土器	—	21.8	—	○内外面ナデ。	褐色	2～3㎜砂	良	
644	底部	—	9.4	—		〃	粗砂	やや軟	
645	〃	—	7.5	—	○内面へラミガキ。	〃	2～3㎜砂	良	
646	〃	—	9.0	—		灰褐色	砂2～3㎜	〃	
647	〃	—	6.5	—	○底部外面圧痕。	褐色	細砂		
648	〃	—	8.4	—	○底部穿孔。	〃	2～3㎜砂	やや軟	
649	〃	—	8.5	—	○内外面へラミガキ。	灰褐色	〃	良好	

土壙—37（第165図）

650	壺形土器	15.6	—	—	○口縁部内面へラミガキ。	淡黄褐色	砂粒含	良好	
651	〃	—	9.4	—	○上げ底。	淡茶褐色	〃	〃	
652	甕形土器	23.6	—	—	○口唇部にミガキ。	淡黄灰褐色	〃	良	
653	〃	20.0	—	—	○外面へラガキ沈線3本。	〃	〃	〃	
654	〃	19.8	—	—	○外面へラガキ沈線2本。	〃	〃	〃	

土壙—38（第167図）

655	甕形土器	21.9	—	—	○口縁端部はヘラによるキザミメ。	淡桃灰色	粗砂	普通	
656	〃	18.4	—	—		淡灰黄色	細砂	〃	○器形推定。
657	〃	15.8	—	—	○調整はナデか。	茶灰色	〃	〃	○ 〃 。
658	壺形土器	—	—	—		淡灰黄色	〃	〃	
659	甕形土器	—	—	—		淡灰色	粗砂	〃	
660	鉢形土器	14.8	5.9	11.6	○調整はヘラミガキ。穿孔は2孔一対。	灰黄色	粗砂含む	良	
661	甕形土器	25.6	8.4	21.6	○口縁部はナデ。	淡灰黄色	細砂	普通	○外面煤付着。
662	〃	19.4	—	—	○外面ハケメ。頸部にヘラ沈1条。	灰褐色	粗砂含む	良	
663	〃	—	7.2	—	○調整はナデか。	灰橙色	小石粒含む	普通	○内外面煤付着。
664	鉢形土器	38.0	8.5	12.1	○内外面へラミガキ。口縁部ナデ。	淡黄灰色	石英粒含む	〃	○外面煤付着。
665	〃	18.9	8.2	14.2		赤褐色	粗砂含む	不良	

土壙—39（第168図）

666	壺形土器	16.4	—	—	○頸部にヘラ沈上段1条。下段螺旋で2条。	淡黄灰色	石英粒含む	普通	
667	〃	15.6	—	—	○調整はナデ。	暗灰褐色	〃	〃	
668	鉢形土器	29.2	—	—	○ナデおよびミガキ状の調整。	灰橙色	小石粒含む	〃	
669	〃	15.2	—	—	○内面ナデ。外面下半はヘラミガキか。	淡灰黄色	〃	〃	

土壙—41（第169図）

670	壺形土器	—	8.0	—	○外面へラミガキ、内面底部は押圧痕。	淡茶灰褐色	砂粒多含	普通	○内外面剥離。
671	〃	—	8.5	—	○ 〃 、内面へラ状工具。	淡茶褐色	砂粒含	〃	○底部外面ミガキ。
672	甕形土器	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。体部上端2条の沈線。	〃	砂粒多含	〃	○内外面剥離。
673	〃	—	7.0	—	○底部は焼成後穿孔。	〃	〃	〃	
674	〃	19.5	—	—	○体部上端に3条のヘラガキ沈線。	淡赤褐色	〃	不良	○器面剥落。
675	〃	—	7.0	—		〃	〃	〃	

土壙—42（第170図）

676	甕形土器	27.5	—	—	○キザミメ。ヘラガキ沈線。	暗褐色	粗砂	良好	○底部欠く。煤。
677	〃	24.0	—	—	○ 〃 。2本のヘラガキ沈線。	暗茶褐色	〃	〃	○煤付着。
678	〃	17.4	—	—	○わずかに上げ底。ヘラミガキ。	〃	〃	〃	○約½の破片。
679	壺形土器	—	8.0	—	○わずかに外反する口縁。浅い沈線。	〃	〃	〃	○小破片。

土壙—43（第171図）

680	甕形土器	24.0	—	—	○逆L字形口縁、キザミメ。ヘラ多条沈線。	暗褐色	細砂	良好	○煤付着。
681	〃	20.0	6.5	20.1	○「く」の字形口縁。無文。	黄褐色	粗砂	〃	○直接接合せず。

土壙－44（第172図）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
682	甕形土器	24.6	－	－	○頸部に２本で２段のヘラガキ沈線が巡る。	褐灰色	細砂	良好	

土壙－45（第172図）

683	甕形土器	22.2	－	－	○ヘラ沈２本が２段巡る。	灰黄色	粗砂	普通	○一部黒斑、煤付着。
684	〃	(19.2)			○ヘラ沈２本。	淡灰桃色	〃	〃	○口径推定。
685	〃	(23.0)			○内面はミガキか？	橙色	細砂	〃	○　〃　。
686	〃	(19.4)	－	－	○調整はナデ。	黄橙色	粗砂	〃	○一部煤付着。
687	蓋形土器	－	6.9	－	○調整はナデか？外面は丁寧な仕上げ。	淡黄橙色	〃	〃	
688	〃	21.6	－	－		淡黄褐色	細砂	〃	○縁に沿い煤付着。
689	底部	－	6.4	－		橙色	〃	〃	○一部に黒斑。
690	〃	－	8.4	－		淡黄橙色	〃	〃	

土壙－47（第172図）

691	壺形土器	15.6	－	－		淡黄灰色	細砂	良好	
692	甕形土器	－	－	－	○内面粗いハケ。	黒灰色	砂粒	良	
693	底部	－	8.2	－	○内面ヘラミガキ。	淡褐色	〃	良好	
694	〃	－	9.2	－	○外面ヨコミガキ。	白灰色	砂粒少	良	
695	甕形土器	18.2	－	－	○口縁端部の一部にキザミメ。	暗灰茶色	細砂	良好	○696と同一。煤付着。
696	〃	－	5.9	－	○調整はナデ。	〃	〃	〃	○695と同一。煤付着。

土壙－48（第174図）

697	壺形土器	－	－	－	○胴部上半部にヘラガキ沈線文。	淡灰黄色	砂粒含む	普通	
698	甕形土器	－	－	－	○口縁端にキザミメ。体部上端に２条のヘラ沈	淡茶灰色	〃	不良	
699	蓋形土器	－	－	－	○内外面細かなヘラミガキ。	淡灰黄色	〃	良好	○平面楕円気味。

土壙－49（第175図）

700	甕形土器	18.0	－	－	○キザミメ。2本のヘラガキ沈線間に部分刺突。	暗褐色	粗砂	良好	○破片。煤付着。
701	〃	22.0	－	－	○　〃　、１本のヘラガキ沈線。	〃	〃	〃	○破片。

土壙－53（第179図）

702	壺形土器	6.6	4.8	9.0	○外面ヘラミガキ。胴上方に２条のヘラ沈線。	淡黄褐色	細砂	良好	○少し欠ける。

土壙－54（第180図）

703	壺形土器	6.5	5.0	8.5	○外面ヘラミガキ、内面押圧ナデ。	淡灰黄色	砂粒含	良好	○ほぼ完形。

土壙－55（第181図）

704	甕形土器	28.2	－	－	○ヘラによるキザミメが巡る。調整はナデ。	灰茶色	粗砂	普通	○外面煤付着。

土壙－56（第182図）

705	壺形土器	15.6	－	－	○調整はナデ。	橙灰色	細砂	普通	○一部に煤付着。
706	〃	－	－	－		淡黄灰色	〃	〃	○一部黒斑。
707	底部	－	7.2	－	○調整はナデか？	黄橙色	〃	〃	○煤付着。
708	〃	－	6.2	－	○ナデ調整、外面一部ヘラミガキか？	灰黄色	〃	〃	
709	〃	－	7.8	－	○調整はナデか？底部穿孔は焼成後。	淡橙灰色	〃	〃	○一部煤付着。
710	〃	－	7.6	－	○調整はナデ。　底部穿孔は焼成後。	黄灰色	〃	〃	○　〃　。
711	蓋形土器	19.8	5.2	10.3	○　〃　。	〃	粗砂	〃	○一部黒斑。
712	〃	－	6.2	－	○調整はナデか？	黄橙色	細砂	〃	

土壙－59（第185図）

713	壺形土器	－	－	－	○頸部外面にヘラガキ沈線文。内外面指ナデ。	暗茶褐色	細砂	良好	○頸部破片。
714	甕形土器	15.0	－	－	○口縁端部にキザミメ。内面ヘラミガキ。	濃茶色	〃	〃	○小破片。
715	〃	15.0	－	－	○口縁端には凹面。	白茶色	〃	〃	○　〃
716	壺形土器	－	10.0	－	○外面ヘラミガキ。	明茶褐色	〃	〃	○刻圧痕あり。
717	甕形土器	－	5.0	－	○外面ヘラミガキ後ハケメ。やや上げ底。	〃	〃	〃	○内面煤付着。

土壙－60（第186図）

718	壺形土器	－	9.0	－	○ヘラミガキ。	淡茶白色	細砂	良好	○小破片。
719	〃	－	7.0	－		黄土色	〃	〃	○　〃

土壙－61・61'（第187図）

720	甕形土器	－	－	－	○L字口縁、多条のヘラガキ沈線、刺突文。	黄灰色	砂粒含む	良好	○煤付着。
721	〃	－	－	－	○　〃　、　〃　。	〃	〃	〃	○　〃

土壙－62（第188図）

722	甕形土器	－	－	－	○L字口縁、多条のクシガキ沈線。	暗灰色	砂粒含む	良好	

土壙－68（第191図）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
723	壺形土器	－	－	－	○頸胴部ヘラガキ施文。外面ヘラミガキ。	淡赤灰色	砂粒含む	良好	○内面押圧ナデ。
724	甕形土器	25.0	－	－	○逆L字口縁。ヘラ沈多条。刺突文巡る。	茶褐色	〃	〃	○器面剥離。
725	〃	－	－	－	○14～16条のヘラ沈、刺突文巡る。	黄褐色	〃	不良	○器面磨滅。
726	〃	－	－	－	○17条のクシガキ沈線。	淡黄褐色	〃	普通	○他の甕より粘質。
727	〃	－	(8.8)	－	○外面ヘラミガキ、やや上げ底。	茶褐色	〃	〃	
728	〃	－	8.0	－	○底部外面ヘラ状工具による押え底。	黄褐色	〃	〃	○器面剥離。
729	〃	－	(7.5)	－		〃	〃	〃	○ 〃 。

溝－69（第195・196図）

730	壺形土器	－	－	－	○口縁端部やや肥厚。	淡黄灰色	砂粒を含む	良	
731	〃	13.2	－	－	○ 〃 。	〃	〃	〃	
732	〃	12.0	－	－	○外反する口縁で端部は丸味を持つ。	白淡黄茶色	細砂粒含む	普通	
733	〃	15.4	－	－	○頸部に3条のヘラガキ沈線。	茶褐色	〃	〃	
734	〃	14.4	－	－	○口縁端部外面に1条の凹線。	赤茶色	砂粒を含む	良好	
735	〃	13.4	－	－	○口縁端部つまみあげ気味で丸く仕上げる。	茶褐色	砂粒を混入	〃	○転用器台か？
736	〃	14.1	－	－	○外面ヘラミガキ、内面指頭痕。	〃	〃	〃	
737	〃				○胴部3本のケズリ出し凸帯。	暗茶色	砂粒多く含	良好	○砂粒→2～5㎜。
738	〃	－	－	－	○体部にヘラガキ沈線。	茶褐色	砂粒を含む	〃	○彩文
739	〃	－	－	－	○ 〃 。	黄白色	〃	〃	
740	〃	－	－	－	○体部にヘラガキ沈線。	茶褐色	〃	〃	
741	〃	－	－	－	○ていねいなヘラミガキ。	暗茶色	〃	〃	
742	〃	－	－	－	○削り出し凸帯。	淡黄褐色	〃	〃	
743	〃	－	－	－	○ 〃 。	〃	〃	〃	
744	〃	－	3.2	－	○口縁部に小穴2個が2対。	暗茶色	〃	〃	○彩文
745	甕形土器	19.0	－	－	○口縁部はゆるやかに外傾。	黄灰色	〃	〃	
746	〃	19.8	－	－	○外面2条の沈線、口縁端部ヘラ刺突。	暗黄茶褐色	砂粒を含む	良好	○砂粒→1～2㎜。
747	〃	23.6	8.0	23.8	○口縁端部にヘラ刺突、体部はハケ調整。	白淡黄灰色	〃	〃	○底部焼成後穿孔。
748	〃	27.0	－	－	○内外面ヘラミガキ。	白淡黄茶色	〃	〃	○口縁端部一条凹線。
749	底部	－	9.3	－	○内面はヘラケズリ後ちヘラミガキ。	黒茶色	〃	〃	
750	〃	－	8.0	－	○外面底部に指頭痕、内面ハケ調整。	暗灰茶色	砂粒多く含	〃	○若干あげ底呈す。
751	甕形土器	－	－	－	○口縁端部ヘラ刺突。	黒褐色	砂粒を含む	〃	
752	〃	14.6	－	－	○器壁は除々にうすく口縁外反して終る。	白灰淡茶色	砂粒多量含	普通	○外面壁剥離。
753	底部	－	8.8	－	○外面ヘラミガキ。	茶灰色	〃	〃	
754	〃	－	7.9	－	○外面底部押圧痕。	淡茶褐色	細砂粒含む	良好	
755	〃	－	8.6	－	○若干あげ底、内面底部ナデ調整。	暗褐色	砂粒多く含	〃	

溝－70（第198～202図）

756	壺形土器	13.6	－	－	○頸部にヘラによる沈線が巡る。ヘラミガキ。	淡黄灰色	細砂	良好	○煤の付着。
757	〃	13.0	－	－	○内面ヘラミガキ。	赤褐色	〃	〃	
758	〃	15.6	－	－	○外面体部はヘラミガキ。	淡灰黄色	〃	〃	
759	〃	12.8	－	－	○口縁部内外面、体部外面ヘラミガキ。	茶褐色	微砂	〃	
760	〃	16.6	－	－	○体部外面ヘラミガキ。	淡茶褐色	細砂	〃	○黒斑あり。
761	〃	17.0	－	－	○口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。	茶色	〃	〃	○口縁の⅔残る。
762	〃	14.0	－	－	○外面ハケメ後ヘラミガキ。	暗褐色	〃	〃	○大きな破片。
763	〃		－	－	○上半ヘラケズリ、下半指頭圧痕。外面ハケ				
764	〃	－	8.2	－	○外面ヘラミガキ。	乳灰色	細砂	〃	
765	〃	－	8.0	－	○ヘラミガキ。	淡黄灰色	〃	〃	○口縁の½破片。
766	〃	－	6.8	－	○内外面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	○外面に黒斑。
767	〃	－	10.6	－	○外面ヘラミガキ。内面ナデ。	淡褐灰色	〃	良好	
768	〃	15.6	－	－	○内外面ヘラミガキ。頸部ヘラガキ沈3条。	淡灰黄色	〃	〃	
769	〃	14.4	－	－	○ 〃 。 〃 。	淡黄灰色	〃	〃	
770	〃	12.6	－	－	○内外面ヘラミガキ。頸部に4本の沈線。	淡黄土色	細砂	〃	
771	〃	14.0	－	－	○内外面ヘラとハケメ。2段・3本の沈線。	淡茶褐色	〃	〃	

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
772	壺形土器	—	9.4	—	○外面ナデ。内面ヘラミガキ。	淡褐灰色	細砂	良好	
773	〃	—	7.0	—	○外面ヘラミガキ。内面ナデ。	褐灰色	〃	〃	
774	〃	17.4	—	—	○頸部内外面ヘラミガキ。	淡褐灰色	〃	〃	
775	〃	14.5	—	—	○内外面ハケメ。頸部に一本の沈線。	淡茶褐色	粗砂	〃	○口縁部破片。
776	〃	—	—	—			細砂	〃	
777	〃	—	—	—			〃	〃	
778	〃	—	9.4	—	○調整はナデ。	暗灰褐色	〃	〃	
779	〃	—	7.8	—			〃	〃	
780	〃	—	7.8	—	○内外面ナデ。	淡黄灰色	〃	〃	○煤の付着。
781	〃	—	12.0	—	○内外面ヘラミガキ。	淡褐灰色	〃	〃	
782	甕形土器	27.2	—	—	○外面はナデ。削出凸帯にキザミメ。	淡灰黄色	〃	〃	
783	〃	27.8	—	—	○内外面ナデ。	淡黄灰色	〃	〃	
784	〃	30.0	—	—	○口縁内面にヘラガキ沈線。ハケメとミガキ。	淡黄灰色	〃	〃	
785	〃	21.4	—	—	○削出凸帯。	淡黄灰色	〃	〃	
786	〃	23.4	—	—	○口縁端面キザミメ。内外面ナデ。	淡灰黄色	〃	〃	
787	〃	22.6	—	—	○内外面ナデ。	淡黄灰色	〃	〃	
788	〃	19.2	—	—	○口縁端面にキザミメ。調整はナデ。	淡灰黄色	〃	〃	○煤の付着。
789	〃	18.7	—	—	○ 〃 。 〃 。	灰黄色	〃	〃	
790	〃	22.0	—	—	○ 〃 。ヘラガキ沈線。	黒褐色	粗砂礫	〃	○表面剥離。
791	〃	18.6	—	—	○調整はナデ。内面指頭圧痕。	淡灰褐色	細砂	〃	○煤の付着。
792	〃	—	9.4	—	○外面ヘラミガキ。	淡黄灰色	〃	〃	○ 〃 。
793	〃	—	8.4	—	○ 〃 。	〃	〃	〃	○ 〃 。
794	〃		—	—					
795	〃	27.0	—	26.8	○口縁端面キザミメ。外面ハケメ。	黒色	粗砂礫	良好	
796	〃	—		—					
797	〃	20.0	7.0	19.3	○3本のヘラガキ沈線。	黒褐色	粗砂礫	良好	○煤付着。完形。
798	〃	19.0	—	—	○キザミメ。ヘラガキ沈線。	暗茶褐色	粗砂	〃	○煤付着。
799	〃	20.0	—	—	○口縁端面キザミメ。4本のヘラガキ沈線。	淡灰黄褐色	〃	〃	
800	〃	19.0	7.6	18.0	○ 〃 。ハケメ。	黒褐色	〃	〃	○完形。
801	〃	19.6	—	—	○調整は内外面ナデ。口縁端面にキザミメ。	淡灰黄色	細砂	〃	
802	〃	—	7.8	—	○内外面ナデ。	淡褐灰色	〃	〃	○内面煤付着。
803	〃	—	9.0	—	○ 〃 。	淡灰黄色	〃	〃	○外面煤付着。
804	〃	—	7.6	—	○調整はナデ。焼成後に底部穿孔。	茶灰色	〃	〃	○煤付着。
805	〃	16.0	6.0	11.0	○口縁端面キザミメ。ヘラガキ沈線。	灰褐色	〃	〃	○完形。
806	〃	13.4	6.3	12.4	○口縁端面にヘラ状工具によるキザミメ。	淡灰黄色	〃	〃	○煤付着。器面剥離。
807	蓋形土器	—	5.4	—	○内外面ヘラミガキ。	淡灰褐色	〃	〃	○ 〃 。
808	〃	7.0	20.0	9.0	○ハケメ.	茶褐色	粗砂礫	〃	○煤付着。完形。
809	〃	—	4.0	—	○外面ヘラミガキ。内面ヘラナデ。	淡灰黄色	細砂	〃	○黒斑あり。
810	〃	—	6.0	—	○内外面ナデ。	乳褐色	〃	〃	
811	高杯形土器？	—	15.6	—	○ヘラミガキとハケメ。しぼり目。	淡褐色	粗砂礫	〃	
812	壺形土器	5.0	5.4	8.5	○ヘラミガキとナデ。	淡茶色	〃	〃	○口縁大半欠く。
813	〃	6.0	8.0	8.7	○ヘラミガキとハケメ。	黄白色	〃	〃	○剥痕。完品。
814	〃	7.4	5.0	10.5	○ハケメ。	淡黄土色	〃	〃	○完形。黒斑。
815		5.2	5.4	8.1		淡灰茶色		〃	○外面に黒斑。
816	鉢形土器	6.4	5.4	4.2	○ヘラミガキ。	灰黄褐色	粗砂	〃	○ほぼ完品。
817	〃	—	5.0	—	○ヘラミガキとナデ。上げ底。	淡茶褐色	〃	〃	○黒斑。
818		19.2	—	—		淡灰黄色		〃	
819		20.0	—	—		〃		〃	

溝－72（第204図）

820	甕形土器	—	—	(4.4)		暗い橙色	小砂粒を含む		
821	〃	—	5.2	(3.7)		茶褐色	白色小砂粒		
822	甕形土器	—	7.2	(8.5)		茶褐色・一部橙色	白色小砂粒		○内面煤付着。

溝－73（第205図）

823	甕形土器	—	—	—	○端面にキザミメ。頸部にヘラ沈2条。	灰茶色	細砂	ふつう	

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
824	〃	—	—	—	○ 〃 。	淡灰色	〃	やや甘	
825	〃	20.4	—	—	○口縁部外面は細かいミガキ。	暗茶灰色	〃	ふつう	

包含層（第207図）

826	壺形土器	—	—	—	○肩部に多条のクシガキ沈線が巡る。	淡赤褐色	砂粒含む	やや不良	
827	甕形土器	—	5.6	—	○外面ナデ。	茶褐色	細砂	良好	
828	〃	16.8	—	—	○端面にヘラによるキザミメ。	黄褐色	〃	〃	

水田層（第209図）

829	深鉢形土器	—	—	—	○外面上半ナデ、下半ヘラケズリ。内面ナデ。	鈍黄褐色	砂粒細砂多	良	○小破片。縄文晩期
830	壺形土器	—	—	—	○口縁部ラッパ状に強く外反する。器面剥落	灰白色	砂粒多	〃	○ 〃 。弥生前期
831	〃	—	—	—	○肩部に沈線文あり、直線3本と弧線1本。	淡黄褐色	石粒砂粒多	〃	○ 〃 。 〃
832	甕形土器	—	—	—	○口縁端面凹線2条。体部内面ナデ。	灰白色	細砂多し	良好	○ 〃 。弥生中期
833	〃	—	—	—	○口縁端つまみ上げ。体部外面ヘラミガキ。	〃	砂粒細砂多	〃	○ 〃 。弥生後期
834	底部	—	6.9	—	○外面ナデ。底部は少し上げ底。	〃	石粒砂粒多	良	○¼残存。弥生前期

「島状高まり」遺構（第211図）

835	壺形土器	—	4.2	—	○胴央部の凸帯にヘラ沈線。	黄灰色	石英粒含む	良好	
836	甕形土器	17.1	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ナデ。	灰黄褐色土	細砂含む	良	○鉢か？
837	底部	—	6.8	—	○ 〃 。 〃 。	灰褐色	砂粒を含む	良好	○一部黒斑。
838	高杯形土器	17.7	—	—	○内外面細かいヘラミガキ。	〃	細砂含む	〃	

溝－79・101（第216図）

839	甕形土器	13.4	—	(3.2)		鈍い橙色	白色小砂粒	良好	○口縁部煤付着。
840	〃	13.8	—	(4.0)		黄橙色	〃	〃	○器面
841	〃	—	—	(2.6)		黄灰色	小砂粒	〃	
842	壺形土器	15.8	—	(5.5)		明褐色	白色小砂粒	〃	

土器溜り－3（第217～219図）

843	鉢形土器	18.7	7.5	9.5	○外面ナデ。	淡茶褐色	精製土	良好	
844	〃	31.7	10.0	21.7	○胴部外面タテハケ、内面ヘラケズリ。	淡赤褐色	細砂	良	
845	手焙り形土器	—	—	—	○体部外面下半粗いハケ	灰褐色	精製土	良好	
846	壺形土器	16.5	7.1	28.5	○胴部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	淡赤褐色	細砂多	良	
847	〃	16.6	8.8	28.6	○胴部外面上半やや粗い斜行ハケ。	赤褐色	細砂	〃	
848	甕形土器	19.6	—	—	○胴部外面ハケ・内面ヘラケズリ。	黒灰色	〃	やや軟	○二次焼成。
849	〃	14.5	6.0	26.3	○胴部内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	〃	良	
850	小形壺形土器	8.0	—	—	○胴部内面指頭圧痕。	灰褐色	精製粘土	〃	
851	甕形土器	15.0	5.4	18.2	○胴部外面下半ハケメ状。	淡茶褐色	〃	良好	
852	底部	—	5.0	—		赤褐色	細砂	やや軟	
853	甕形土器	15.0	5.0	28.0	○口縁部5条のヘラガキ沈線。	褐色	細砂	やや軟	
854	〃	15.0	4.7	23.6	○口縁部5条のヘラガキ沈線。	灰褐色	〃	良	
855	〃	—	4.0	—	○胴部外面上半タテハケ・下半タテミガキ。				
856	〃	15.2	5.2	25.4	○口縁部ヘラガキ沈線。	灰茶褐色	細砂	良好	
857	〃	15.0	5.0	27.8	○胴部内面ヘラケズリ・下半圧痕残。	〃	〃	良	
858	鉢形土器	19.2	9.2	14.0	○上半外面ヨコハケ下半ヘラミガキ。	赤褐色	精製土	良好	

土器溜り－4（第220・221図）

859	壺形土器	17.5	—	—	○頸部にヘラ先による沈線。	淡黄褐色	砂粒含む	良好	
860	〃	17.3	—	—	○内面ヘラケズリは体部中央まで。	茶褐色	〃	〃	
861	甕形土器	14.9	—	—	○外面頸部ハケのちナデ。	淡茶黄褐色	砂粒含堅緻		
862	〃	16.1	—	—	○外面ハケのちヘラミガキ。	淡茶褐色	堅緻砂粒含	良好	○外面煤付着。
863	〃	—	—	—	○ 〃	茶褐色	砂粒含む	〃	○ 〃 。
864	甕形土器	13.7	4.7	24.1	○内面ヘラケズリ頸部までいかず。	茶褐色	砂粒多	良好	
865	〃	15.9	—	—	○口縁部端上方に拡張。	淡黄褐色	砂粒含	不良	
866	〃	13.3	—	—	○口縁部内面ハケのちヨコナデ。	〃	〃	良好	
867	〃	15.2	—	—	○外面ハケ。内面オサエ、ナデ。	淡黄褐色	砂粒多	良	○煤付着。
868	〃	15.7	—	—	○口縁部内外ヨコナデ。	黄褐色			○869と同一個体か。
869	〃	—	3.7	—	○外面ヘラミガキ。	灰褐色	砂粒含	良	○外面煤付着。

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
870	〃	15.1	4.7	26.5	○外面下半ヘラミガキ、上半ハケ。	黄灰色	〃	〃	○煤付着。
871	〃	—	—	—	○口縁端面に退化凹線。	淡黄褐色	〃	不良	
872	〃				○体部タタキ。内面ヘラケズリ。	〃	砂粒多	良	
873	〃	14.4	6.1	25.2	○外面体部タタキ。頸部タタキ逆方向。	淡灰褐色	砂粒含	〃	
874	高杯形土器	—	—	—	○円孔4個。	暗灰褐色	〃	良好	
875	〃	—	13.4	—	○ 〃	淡黄褐色	〃	不良	
876	〃	—	12.4	—	○内外面ヘラミガキ。円孔4個。	黄褐色	精良	良	
877	〃	—	14.4	—	○外面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	

竪穴式住居－11（第224図）

878	甕形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ	淡茶褐色	水漉し粘土	良好	○楕円形土壙出土。
879	鉢形土器	(16)	—	(7.0)		黄褐色	〃	普通	
880	〃	10	—	6.1	○口縁部内面に稜線。	〃	精製粘土	〃	○器面磨滅。
881	高杯形土器	(13.5)	—	—	○外面ヘラミガキ、内面不明。	〃	水漉し粘土	〃	○ 〃 。
882	〃	20.3	—	—	○ 〃 〃	〃	〃	〃	○器表面丹塗り。
883	〃	—	—	—		〃	精製粘土	不良	○器表面磨滅。

竪穴式住居－12（第226図）

884	甕形土器	17.0	—	—	○内外面ともハケ。	濃茶色	砂粒多	普通	
885	壺形土器	16.8	—	—	○外面ハケ。内面ヘラケズリ。	茶色	〃	〃	
886	〃	20.0	—	—	○ 〃 。 〃 。	黒褐色	〃	〃	
887	〃	13.8	—	—	○外面ハケ後ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	茶色	〃	〃	
888	甕形土器	16.2	—	—	○外面ハケ。内面ヘラケズリ。	暗茶褐色	〃	〃	
889	壺形土器	—	3.4	—	○外面ヘラミガキ。内面ハケ。	赤色	精良	〃	○丹塗り。
890	高杯形土器	15.6	—	—	○調整不明。	赤褐色	砂粒多	〃	
891	〃	20.4	14.6	14.0	○外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	〃	精良	〃	○復元完形。
892	器台形土器	8.8	10.6	8.8	○外面不明。内面下半ハケ。	淡赤褐色	微砂	〃	○完形。
893	鉢形土器	9.6	1.4	7.2	○外面ハケ。内面下半ナデ。	淡黄橙色	砂粒多	〃	○ほぼ完形。
894	〃	11.2	—	—	○調整不明。	淡茶褐色	〃	〃	
895	〃	9.8	1.2	6.4	○内面下半ヘラミガキ。	〃	細砂含	〃	
896	〃	9.4	2.2	7.4	○調整不明。	明茶色	精良	〃	○復元完形。
897	〃	12.2	—	—	○外面ハケ。内面ナデ。	黄土色	微砂含	〃	○細片。

竪穴式住居－13（第229図）

898	壺形土器	20.2	—	32.1	○外面上半ヨコハケ下半タテハケ。	灰褐色	細砂	良好	○体部内面煤付着。
899	甕形土器	10.6	—	8.9	○外面タテハケ・内面圧痕とヘラケズリ。	〃	〃	〃	○体部外面煤付着。
900	〃	14.2	—	—	○口縁外面5条のクシガキ沈線。	〃	〃	〃	○外面一部煤付着。
901	〃	15.2	—	—	○口縁外面10条のクシガキ沈線。	淡褐色	〃	良	
902	〃	14.4	—	—	○口縁外面クシガキ沈線。	灰褐色	〃	良好	
903	〃	14.0	—	—	○口縁クシ沈線・外面ハケメとヘラミガキ。	茶褐色	〃	〃	
904	〃	14.2	—	—	○ 〃	灰褐色	〃	〃	○内外面一部煤付着。
905	高杯形土器	12.6	—	—	○杯部内外面ヘラミガキ。	赤褐色	〃	〃	
906	〃	11.1	—	—		明茶褐色	〃	良	
907	〃	—	11.0	—		褐色	〃	軟	○器面剥離。
908	鉢形土器	8.4	—	3.0	○内面ヘラミガキ。	赤褐色	〃	良好	○内面一部煤付着。
909	〃 ○	14.0	—	5.1	○外面ヘラミガキ。	灰褐色	〃	〃	
910	器台形土器	—	9.0	—		赤褐色	緻密	良	

竪穴式住居－14（第230図）

911	鉢形土器	13.0	—	—	○調整はナデか？	淡黄灰色	砂粒含む	良	

竪穴式住居－15（第230図）

912	甕形土器	12.4	—	—	○体部内面ヘラケズリ。外面ハケメ。	暗褐色	砂粒含む	良	
913	〃	13.8	—	—		淡黄褐色	細砂	やや甘	
914	〃	20.0	7.8	35.8	○外面口縁ナデ体部ハケ、内面口縁ミガキ。	淡灰褐色	〃	良好	

竪穴式住居－16（第232図）

915	高杯形土器	—	15.0	—	○脚部外面にハケメ、透孔は4個。	淡灰黄色	微砂	普通	
916	〃	—	—	—	○杯部内面にハケメ。	赤褐色	精製粘土	〃	

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
917	高杯形土器	—	16.8	—		淡灰橙色	細砂	普通	
918	〃	9.2	—	—		明橙色	水簸し粘土	〃	○器面剥離。
919	〃	12.0	—	—	○内面ハケ調整。	淡茶灰色	細砂	〃	
920	底部	—	2.8	—	○内面粗いハケメ。	淡赤褐色	〃	〃	
921	杯部	11.7	—	—		〃	〃	〃	
922	底部	—	2.0	—	○調整不明。	淡黄灰色	微砂	やや甘	

竪穴式住居－17（第234図）

923	壺形土器	16.4	—	—	○器面剥離。	明黄褐色	水簸粘土	やや甘	○P－2出土。
924	甕形土器	14.8	—	—	○口縁端部外面はクシガキ平行沈線。	茶灰色	細砂	普通	○P－4出土。
925	〃	13.0	—	—	○口縁端部外面に8条のクシガキ平行沈線。	暗灰茶色	〃	良好	○外面煤付着。
926	〃	17.4	—	—	○口縁端部外面に7～8条のクシガキ平行沈線。	〃	〃	〃	
927	〃	14.4	—	—	○ 〃 〃 。	淡黄褐色	〃		○外面煤付着。
928	高杯形土器	—	—	—		明黄褐色	水簸粘土	普通	
929	〃	—	—	—	○器面剥離	淡灰黄色	微砂	やや甘	
930	〃	—	16.0	—		暗黄褐色	水簸粘土	普通	
931	小型壺形土器	—	—	—	○外面細かいミガキ。	灰茶色	細砂	〃	
932	底部	—	2.9	—	○外面ハケ後ヘラケズリ？	淡黄褐色	細砂	〃	○煤付着。

竪穴式住居－19（第235図）

933	甕形土器	15.2	—	—	○口縁端面に7条のクシガキ平行沈線。	灰黄色	細砂	普通	
934	〃	14.6	—	—	○ 〃 9条 〃 。	淡灰茶色	〃	〃	○外面煤付着。
935	〃	—	—	—		黄灰色	〃	〃	
936	底部	—	2.8	—	○外面調整はタタキか？	淡灰黄色	〃	やや甘	

竪穴式住居－21（第237・238図）

937	甕形土器	14.2	—	22.0	○体部外面上半タテハケ・内面ヘラケズリ。	淡灰褐色	細砂	良	
938	〃	14.3	—	24.1	○外面上半ハケ・内面ヘラケズリ・下半圧痕	淡灰茶褐色	細砂密	〃	○体部中央煤付着。
939	〃	14.5	—	—	○体部外面斜位ハケメ・内面ヘラケズリ。	灰茶褐色			○出土時底部まで残。
940	〃	12.0	—	16.5	○外面タテハケ・内面ヘラケズリ・下半圧痕	明褐色	砂粒	良好	○口縁・肩部煤付着。
941	〃	11.0	—	11.2	○内面底部圧痕多い。	淡灰褐色			
942	〃	10.7	—	12.1	○外面タタキメ。	〃	砂粒多	良好	
943	〃	10.0	—	10.7	○外面底部一部ヘラケズリ・内面ナデと圧痕	赤褐色	砂粒	〃	○外部下半粗い。
944	高杯形土器	19.8	—	—	○杯部内底面ヘラミガキ。	淡灰茶褐色	緻密	〃	
945	〃	—	—	—		淡茶褐色	〃	〃	
946	台付鉢形土器	12.8	—	—	○杯部外面斜めハケメ。	赤褐色	細砂	〃	
947	椀形土器	8.6	—	7.5	○外面底部カキトリ。	暗茶褐色	砂粒多	良	
948	鉢形土器	11.0	—	5.5	○外面底部粗いヘラケズリ。		〃	〃	
949	小型壺形土器	11.3	—	8.0	○内面底部圧痕。	淡赤褐色	細砂	良好	
950	〃	14.3	—	10.2	○ 〃	赤褐色	砂粒多	良	○完形品。
951	〃	10.5	—	6.5	○外面底部ヘラケズリ・内面底部放射状圧痕。	淡灰褐色	細砂多	良好	○ 〃 。
952	〃	—	—	—	○外面不明瞭。	赤褐色	精製粘土	〃	○胎土明瞭に区別可。

竪穴式住居－22（第239図）

953	手焙り形土器	—	—	16.8	○ほぼ完形。器表面に荒いハケ目。	灰黒褐色	微砂含	良好	○輪積痕跡明瞭。
954	鉢形土器	—	—	—	○器表面に細かなヘラミガキ。内面部分ハケ。	明褐色	精製粘土	〃	○口縁部を欠く。

井戸－14（第241図）

955	甕形土器	14.1	4.2	24.8	○口縁端部外面に7条のクシガキ沈線。	黄褐色	砂粒含む	良好	○下半に煤付着。
956	〃	14.1	—	—	○外肩部外面にハケメ。口縁外面クシガキ沈線。	暗灰褐色	粗砂含む	〃	
957	〃	16.0	—	—	○口縁端部外面に5条のクシガキ沈線。	淡褐灰色	細砂含む	〃	
958	高杯形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ。脚部円形透孔4個。	黄褐色	粗砂含む	〃	

井戸－15（第242図）

959	壺形土器	19.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	細砂	良好	
960	甕形土器	13.6	—	23.9	○体部外面ハケメ。口縁外面クシガキ沈線。	黄灰色	細砂含む	〃	○煤付着。

井戸－16（第243図）

961	甕形土器	13.4	—	—	○口縁端部外面7～8条のクシガキ沈線。	淡灰黄色	微砂	良好	○煤付着。

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
962	甕形土器	13.4	—	—	○口縁端部外面6条のクシガキ沈線。	褐灰色	微砂	良好	
963	高杯形土器	—	14.0	—	○脚柱部ハケのちヘラガキ。	淡黄灰色	〃	〃	○煤付着。
964	台付鉢形土器	—	5.0	—	○ナデ。	淡灰黄色	細砂	〃	○製塩土器。
965	〃	—	5.4	—	○台部ナデ。体部外面タタキ。	赤褐色	〃	〃	○製塩土器。

井戸－17（第244図）

966	甕形土器	15.6	—	—	○外面タタキ。	褐灰色	微砂	良好	
967	〃	12.4	—	—	○口縁端部外面に5条のクシガキ沈線。	〃	〃	〃	
968	台付鉢形土器	—	5.0	—	○台部外面指頭圧痕。	褐黄色	細砂	〃	○製塩土器。

井戸－18（第246～248図）

969	壺形土器	10.2	—	—	○内外面ヨコヘラミガキ。	赤褐色	細砂	良好	内外面赤色顔料付。
970	〃	19.8	—	—	○内外面ナデ。	淡灰褐色	〃	〃	
971	甕形土器	10.8	—	—	○胴部外面ハケのちナデ。	茶褐色	〃	〃	
972	〃	14.6	—	—	○口縁内外面ヨコナデ。	灰褐色	〃	〃	内外面一部煤付着。
973	〃		—	—	○口縁外面ヨコナデ・内面ヘラケズリ。	〃	〃	〃	胴部外面煤付着。
974	〃	15.0	—	—	○口縁部7条のクシガキ。	〃	〃	〃	
975	高杯形土器	19.1	12.3	13.2	○杯部内外面ハケのちヨコナデ。	淡灰褐色	〃	〃	煤付着。
976	〃	16.6	—	—	○内外面ヨコナデ。	〃	〃	〃	杯部外面煤付着。
977	〃	—	—	—	○脚部内面ヘラケズリ。	灰褐色	砂粒多	〃	脚部内面煤付着。
978	〃	—	12.0	—	○外面ハケのちナデ。	〃	細砂	〃	
979	〃	—	—	—		淡灰褐色	〃	〃	
980	〃	—	—	—	○脚部内面ヘラケズリ。	〃	〃	〃	脚部内面煤付着。
981	〃	—	12.0	—	○　〃　。	〃	〃	〃	
982	〃	—	14.4	—	○脚部内面ヘラケズリ・外面ヨコナデ。	〃	〃	〃	
983	甕形土器	12.0	—	22.3	○胴部外面タテハケ・内面圧痕のちケズリ。	灰褐色	〃	〃	
984	〃	14.0	25.0	—	○胴部上半タテハケ下半ナナメハケ。	〃	〃	〃	胴部内外面煤付着。
985	〃	13.6	24.1	—	○胴部外面タテハケ内面上半ヘラケズリ。	淡灰褐色	〃	〃	煤付着。
986	〃	14.0	—	23.0	○胴部外面タテ・斜行ハケ・内面ヘラケズリ	灰褐色	〃	〃	煤付着。
987	〃	13.8	—	—	○胴部外面タテハケ・内面ヘラケズリ。	暗褐色	〃	〃	外面煤付着。
988	〃	13.0	—	19.5	○胴部外面タテハケ・内面上半ヘラケズリ。	淡灰褐色	〃	〃	
989	〃	13.2	—	—	○体部外面タテハケ・内面圧痕とヘラケズリ	〃	〃	〃	外面煤付着。
990	〃	12.8	—	—	○体部外面タテハケ・内面ヘラケズリ。	灰褐色	〃	〃	煤付着。
991	〃	14.2	—	—	○内外面ヨコナデ。	〃	〃	〃	外面に煤付着。
992	〃	13.4	—	—	○体部外面ハケメ・内面ケズリ。	〃	〃	〃	煤付着。
993	〃	12.8	—	—	○口縁部7条のクシガキ。	〃	〃	〃	胴部内面煤付着。
994	〃	14.0	—	—	○体部外面タテハケ・内面圧痕・ヘラケズリ	淡灰茶色	〃	堅緻	
995	〃	12.8	—	—	○体部外面タテハケ。	灰褐色	〃	良好	煤付着。
996	〃	12.2	—	—	○外面ヨコナデ・内面ヘラケズリ。	〃	〃	〃	
997	〃	15.0	—	19.0	○胴部外面タタキ	淡灰黄色	〃	〃	二次焼成の煤付着。
998	〃	12.8	—	—	○胴部外面ナデ・内面ヘラケズリ。	灰褐色	〃	〃	

井戸－20（第249・250図）

999	壺形土器	—	—	—		黒色	砂粒含	良	表面に線刻。
1000	〃	9.62	3.70	19.45	○外面ヘラケズリのちヘラミガキ。	淡黄褐色	雲母微砂含	良好	
1001	〃	13.6	3.2	19.0	○外面ヘラケズリ。	〃	砂粒含		○外西体部モミ痕。
1002	〃	12.5	3.85	25.42	○外面タタキ。内面ハケ状工具による。	茶褐色	角閃石含む	良	
1003	〃	14.54	5.6	31.1	○外面ハケのちヘラミガキ。	赤褐色	砂粒含む	不良	○外面丹塗り。
1004	〃	14.2	—	—		淡黄褐色	〃	良	
1005	甕形土器	13.91	—	—	○外面体部ハケメ。	暗褐色	微砂含む。	〃	○スス付着。
1006	〃	—	14.61	—	○　〃	暗赤褐色	長石粒含む	良好	○　〃
1007	〃	14.35	—	—	○　〃	〃	雲母片含む	〃	
1008	〃	14.25	5.45	23.0	○　〃	黒褐色	砂粒多含	〃	煤付着。
1009	高杯形土器	20.2	15.51	14.4	○内外面ヘラミガキ。	淡黄赤褐色	精製粘土	良	
1010	〃	13.3	—	—	○　〃	暗黄褐色	雲母粒含	〃	
1011	鉢形土器	9.25	2.52	11.65		淡黄褐色	砂粒含む	不良	

井戸－21（第251図）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1012	壺形土器	15.3	－	－	○頸部外面斜行のクシガキ。	灰茶褐色	細砂	良好	
1013	甕形土器	14.3	－	－	○口縁部8条のクシガキ沈線。	乳灰色	〃	良	
1014	〃	13.6	－	－	○口縁部12条のクシガキ沈線。	赤茶褐色	〃	良好	
1015	〃	14.8	－	－	○口縁部8条のクシガキ沈線。				
1016	〃	13.0	－	－	○口縁部7～8条のクシ描沈線。	灰茶褐色	細砂	良好	
1017	〃	14.6	－	－	○口縁部8条のクシ描沈線・胴部外面ハケ。	灰褐色	〃	〃	
1018	鉢形土器	14.2	4.5	5.5	○内面ナデ。	乳灰色	蜜	やや軟	
1019	高杯形土器	23.0	－	－	○外面ハケ・ミガキ。	赤茶褐色	精製土	良好	
1020	器台形土器	－	－	－		乳灰色	蜜	良	

井戸－22（第252図）

1021	甕形土器	15.6	－	－	○口縁端部外面に7条のクシガキ平行沈線。	暗灰褐色	微砂	良好	○内外面に煤付着。
1022	鉢形土器	14.8	〃	〃	○外面ハケ後ナデ、内面ナデ。	褐灰色	精製粘土	普通	

井戸－25（第254図）

1023	甕形土器	14.2	－	－	○口縁部ナデ。体部外面ハケ。	黄褐色	微砂	良好	
1024	〃	13.4	－	－	○口縁内面ハケのちヨコナデ。	褐黄色	〃	〃	
1025	〃	13.2	－	－	○ 〃 。	褐灰色	〃	〃	
1026	甕形土器	14.4	－	－	○外面ハケ。体部内面ヘラケズリ。	灰褐色	〃	〃	○煤の付着。
1027	鉢形土器	10.6	－	－	○調整はナデ。	褐灰色	〃	〃	
1028	小型壺形土器	－	－	－	○体部外面ハケ。	黄灰色	〃	〃	○黒斑あり。

井戸－26（第255図）

1029	甕形土器	14.2	－	25.1	○肩部にヘラ先による刺突3個。	褐灰色	微砂	良好	○煤の付着。
1030	〃	13.4	－	18.6	○口縁端部外面に6条のクシガキ沈線。	灰褐色	〃	〃	○煤の付着。
1031	高杯形土器	－	－	－	○調整はナデ。	黄褐色	〃	〃	

井戸－27（第256図）

1032	鉢形土器	40.2	(7.6)	17.5		淡褐灰色	微砂	良好	○下半に黒斑。
1033	小型鉢形土器	12.6	－	11.0	○口縁部、体部外面ハケのちヨコナデ。	赤褐色	〃	〃	○煤付着。

井戸－28（第258～261図）

1034	甕形土器	17.2	－	－	○口縁端部外面に7条のクシガキ平行沈線。	褐灰色	微砂	良好	○外面に煤付着。
1035	〃	14.2	－	－	○ 〃 5条 〃 。	灰褐色	〃	〃	○ 〃 。
1036	〃	14.2	4.2	22.3	○体部外面ハケ後ヘラミガキ。	〃	〃	〃	○ 〃 。
1037	〃	14.2	3.9	21.4	○外面肩部にヘラ状工具による刺突1個。	〃	〃	〃	○ 〃 。
1038	〃	8.8	－	5.0	○外面はハケ後ナデ。内面ヘラナデ。	淡灰茶色	〃	〃	○一部に黒斑。
1039	〃	15.8	－	－	○口縁端部外面に5条のクシガキ平行沈線。	褐灰色	微砂	良好	○外面煤付着。
1040	〃	15.6	－	－	○ 〃 6条 〃	〃	〃	〃	○ 〃 。
1041	〃	14.8	－	－	○ 〃 6条 〃	淡灰褐色	〃	〃	○煤の付着。
1042	〃	14.8	2.9	24.2	○外面肩部にヘラ先による刺突2個。	褐灰色	〃	〃	○ 〃 。
1043	〃	－	6.6	－	○外面上半ハケメ。下半ハケ後ヘラミガキ。	灰褐色	〃	〃	○ 〃 。
1044	〃	15.2	－	－	○口縁端部外面に5条のクシガキ平行沈線。	褐灰色	〃	〃	○ 〃 。
1045	〃	14.8	－	－	○外面肩部にヘラ状工具による刺突2個。	灰褐色	〃	〃	○ 〃 。
1046	〃	14.6	－	－	○口縁端部外面に7条のクシガキ平行沈線。	褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
1047	〃	14.2	－	－	○ 〃 〃	灰褐色	〃	〃	○ 〃 。
1048	〃	14.0	－	－	○ 〃 9条 〃	〃	〃	〃	○煤付着。
1049	〃	14.2	－	－	○ 〃 7条 〃	褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
1050	〃	13.8	－	－	○ 〃 5条 〃	淡灰黄色	〃	〃	○ 〃 。
1051	〃	13.8	－	－	○外面肩部にヘラ先による刺突3個。	褐灰色	〃	〃	○煤付着。
1052	〃	14.0	－	－	○体部外面はハケメ後ヘラミガキ。	〃	〃	〃	○外面に煤付着。
1053	〃	14.0	3.0	20.8	○外面肩部にヘラ先による刺突1個。	灰褐色	〃	〃	○煤の付着。
1054	〃	19.2	－	－	○口縁端部外面に7条のクシガキ平行沈線。	褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1055	甕形土器	13.8	—	—	○口縁端部外面に7～8条のクキガキ平行沈線。	褐灰色	微砂	良好	○外面煤付着。
1056	〃	14.0	—	—	○ 〃 6～7条 〃 。	〃	〃	〃	○煤の付着。
1057	〃	15.0	—	—	○ 〃 5～6条 〃 。	〃	〃	〃	○外面に煤付着。
1058	〃	13.0	—	—	○ 〃 8条 〃 。	〃	〃	〃	○煤の付着。
1059	〃	11.8	—	—	○外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	〃	〃	〃	
1060	高杯形土器？	19.2	—	—	○調整ハケ後ナデ。	淡黄灰色	精製粘土	〃	○器面剥離。
1061	高杯形土器	—	11.8	—	○調整はハケか。円形透孔は4個。	淡黄褐色	微砂	〃	
1062	〃	—	14.2	—	○円形透孔は4個。	淡黄褐色	〃	〃	○脚部½片。
1063	壺形土器？	—	—	—	○外面ハケ後ヘラミガキ。	褐灰色	〃	〃	
1064	台付鉢形土器	—	4.6	—	○体部外面はタタキ。台部は指頭で調整。	暗赤褐色	細砂	普通	○製塩土器。
1055	〃	—	5.0	—	○指頭ナデ。	〃	粗砂	良好	○ 〃 。
1066	〃	—	5.2	—	○指頭ナデ。	〃	細砂	普通	〃 。
1067	壺形土器	13.4	4.5	26.0	○外面タタキ後ハケメ。内面ケズリ、ハケ。	灰褐色	微砂	良好	○黒斑あり。
1068	〃	10.4	—	—	○外面タタキ後ヘラナデ。内面ヘラケズリ。	灰黄色	〃	〃	○内外面に煤付着。
1069	甕形土器	16.0	—	—	○口縁端部外面に7条のクシガキ平行沈線。	褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
1070	〃	—	—	—	○ 〃 〃	〃	〃	〃	
1071	〃	13.8	—	—	○ 〃 5条 〃	淡灰褐色	〃	〃	
1072	〃	14.0	—	—	○ 〃 8～9条 〃	灰褐色	〃	〃	○煤付着。
1073	高杯形土器	20.0	—	—	○外面ハケ後ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	褐灰色	精製粘土	〃	○丹塗り。
1074	〃	—	—	—	○ 〃 。	〃	〃	〃	
1075	〃	—	—	—		淡灰茶色	微砂	〃	
1076	〃	—	15.4	—	○外面はハケメ後ナデか？	茶褐色	精製粘土	〃	
1077	鉢形土器	14.0	—	—	○体部上半はハケ後ナデ。	淡灰茶色	微砂	〃	○煤の付着。
1078	〃	8.3	—	6.7	○外面ハケ後一部ヘラミガキ。	淡褐灰色	〃	〃	
1079	〃	34.4	—	—	○体部外面ハケメ。	〃	細砂	〃	

井戸－29（第262図）

1080	甕形土器	20.0	—	—	○調整はヨコナデ。	淡灰黄色	微砂	良好	
1081	〃	14.8	—	—	○口縁端部外面に8条のクシガキ平行沈線。	〃	〃	〃	○外面に煤付着。
1082	〃	14.3	—	—	○ 〃 10条 〃	灰褐色	〃	〃	○煤の付着

井戸－30（第263図）

1083	壺形土器	17.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。	淡灰黄色	微砂	良好	
1084	甕形土器	15.6	(4.3)	24.5	○口縁端部外面に8条のクシガキ平行沈線。	灰褐色	〃	〃	○煤の付着。
1085	〃	12.8	—	—	○ 〃 5条 〃	淡灰茶色	〃	〃	○外面に煤付着。
1086	〃	12.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ。	茶褐色	〃	〃	
1087	鉢形土器	14.6	—	6.8	○口縁部ナデ。体部外面ハケ後ミガキ。	淡褐灰色	〃	〃	
1088	甕形土器	32.0	—	—	○ 〃 。体部外面ハケ内面ヘラケズリ。	褐灰色	〃	〃	

井戸－31（第264図）

1089	甕形土器	14.0	—	—	○体部内外面ハケメ。	灰褐色	微砂	良好	
1090	〃	13.4	—	—	○口縁端部外面に7条のクシガキ沈線。	褐灰色	〃	〃	○外面煤付着。
1091	壺形土器	11.2	—	—	○外面ハケメ。	淡黄灰色	〃	〃	○赤色顔料付着。
1092	底部	—	4.0	—	○調整はナデか。	褐灰色	〃	〃	
1093	鉢形土器	29.0	—	—	○体部外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	淡茶灰色	〃	〃	

井戸－32（第265・266図）

1094	壺形土器	17.2	7.4	31.4	○外面ハケのちヘラミガキ。	淡黄褐色	砂粒を含む	良好	○外面竹カゴメ。
1095	〃	12.8	—	—	○口縁部内外面ヨコナデ。	淡褐色	〃	良	
1096	〃	19.8	—	—	○ 〃 。	淡茶灰色	〃	良好	
1097	甕形土器	12.4	—	—	○外面ハケのちヘラミガキ。	淡灰褐色	〃	良	○煤付着。
1098	〃	13.6	—	—	○外面ハケ。	淡黄灰色	〃	〃	
1099	高杯形土器	20.0	—	—	○内外面ハケのちヘラミガキ。	淡赤黄色	〃	良好	
1100	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。	〃	〃	良	
1101	〃	—	—	—	○ 〃	淡黄褐色	〃	〃	
1102	鉢形土器	12.6	3.6	5.8	○内外面ヘラミガキ。	淡茶黄色	〃	良好	

井戸－33（第269図）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1103	壺形土器	－	－	－	○内外面ヨコナデ。明瞭な口縁端面をもつ。	鈍黄橙色	精良細砂含	良好	○小砂片。上層。
1104	〃	17.3	－	－	○内外面ヨコナデ。口縁端外方へ屈折。	灰褐色	細砂多し	良好堅	○⅙弱残存。5層。
1105	〃	－	－	－	○内外面ヨコナデ。口縁端内側へ少し肥厚。	暗褐色	〃	〃	○小破片。5層。
1106	甕形土器	19.4	－	－	○口縁端部内面へ肥厚。体部肩に刺突文。	灰白色	砂粒細砂多	〃	○口縁完存。5層。
1107	〃	－	－	－	○口縁立上がりクシ。口頸部ヨコナデ。	灰褐色	〃	〃	○小破片。下層。
1108	鉢形土器	－	－	－	○外面ヘラミガキか。	〃	細砂多	良好	○小破片。上層。
1109	〃	－	－	－	○口縁ヨコナデ。内面ヘラケズリ。外面ナデ	橙色	精良赤色粒	〃	○小破片。5層。
1110	高杯形土器	－	－	－	○外面ハケの後ヘラミガキ。	鈍橙色	〃	良	○小破片。下層。
1111	〃	－	－	－	○ヨコナデの後ヘラミガキ。内外両面。	〃	〃	良好	○小砂片。5層。

井戸－34（第270図）

1112	甕形土器	－	－	－	○口縁端部つまみ上げ。内外面ヨコナデ。	暗褐色	砂粒細砂多	良好	○小破片。3層。
1113	〃	－	－	－	○口縁立ち上がりクシメ。口頸部ヨコナデ。	鈍橙色	〃	〃	○小破片。1層。

井戸－36（第272図）

1114	鉢形土器	9.0	－	5.25	○内底面強いナデ。外面と内面上半ナデ。	灰褐色	砂粒細砂含	良好	○手捏土器。4層。
1115	〃	－	－	－	○内外面ナデ。	灰白色	砂粒多し		○小破片。
1116	〃	－	－	－	○体部下半外面ヘラケズリ。内面ヘラミガキ	〃	砂粒細砂多	良	○小破片。2層。
1117	甕形土器	－	－	－	○外面ナデ、内面は指頭によるオサエ。	暗褐色	〃	良好	○⅓残存。4層。

井戸－37（第273図）

1118	壺形土器	20.0	－	－	○外面ヨコナデ。内面頸部ハケ。	淡黄褐色	砂粒含	良好	
1119	甕形土器	13.0	－	－	○外面体部ハケのちヘラミガキ。	淡茶灰色	〃	〃	
1120	〃	15.0	－	－	○ 〃	暗灰褐色	〃	不良	
1121	〃	－	2.5	－	○外面ヘラミガキ（タタキ？）、内面ハケ	淡黄灰色	微砂含	良好	○底部木葉文。
1122	台付鉢形土器	－	3.2	－	○外面オサエ、ナデ。内面ナデ。	淡赤褐色	細砂含	良	○製塩土器。

井戸－39（第274図）

1123	甕形土器	15.2	－	－	○外面ハケのちヘラミガキ。内面ヘラケズリ	茶褐色	微砂、雲母	堅緻	
1124	高杯形土器	10.4	－	－	○内外面ヘラミガキ。	赤褐色	水漉し粘土	良好	

土壙－69（第275図）

1125	甕形土器	12.4	－	－	○口縁立上がり外面クシメ。口縁部ヨコナデ	褐色	細砂多	良好	○¼強残存。
1126	〃	－	－	－	○ 〃	褐灰色	砂粒細砂多	〃	○小破片。
1127	〃	15.0	－	－	○ 〃	〃	〃	〃	○⅙残存。
1128	〃	－	－	－	○ 〃	灰褐色	〃	〃	○小破片。
1129	〃	15.6	－	－	○口縁立上がり外面クシメ。頸部外面ハケ痕	褐灰色	〃	〃	○⅙残存。
1130	〃	16.3	－	－	○口縁立上がり外面クシメ、口縁部ヨコナデ	〃	細砂多	〃	○ 〃 。
1131	〃	－	－	－	○ 〃	浅黄褐色	砂粒細砂多	〃	○小破片。
1132	〃	15.0	－	－	○口縁部内面ハケメ残存、体部上端もハケ。	褐灰色	〃	〃	○⅓残存。
1133	〃	－	－	－	○体部内外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	浅黄橙色	砂粒細砂含	〃	○小破片。
1134	壺形土器	－	－	－	○口縁部ヨコナデ。頸部外面ヘラミガキ。	鈍黄橙色	砂粒細砂多	〃	○¼弱残存。
1135	鉢形土器	－	－	－	○口縁部ナデ。体部外面粗いヘラミガキ。	灰褐色	精良	〃	○小破片。
1136	〃	－	－	－	○口縁部・体部外面ナデ。体部外面にハケ痕	鈍橙色	〃	〃	○ 〃 。
1137	高杯形土器	－	－	－	○杯内面ヘラミガキ。柱状部内面ナデ。	〃	〃	〃	○図示部分完存。
1138	〃	－	－	－	○外面ヘラミガキ。内面ナデ。	浅黄橙色	精良細砂含	〃	○柱状部完存。
1139	〃	－	－	－	○杯内面ヘラミガキか。柱状部内面ナデ。	〃	砂粒細砂多	〃	○ 〃
1140	〃	－	14.4	－	○外面ハケの後ヘラミガキ。内面ナデ。	鈍橙色	細砂かなり	〃	○¼強残存。

土壙－72（第277図）

1141	甕形土器	14.4	－	－	○外部はナデ。口縁の一部にハケメ。	黒褐色	粗砂含む	良好	

溝－106・107（第281図）

1142	壺形土器	－	－	－	○外面粗いハケ・内側ヘラケズリ。	明灰褐色	精製土	良好	
1143	手捏土器	3.3	－	－	○内側ユビナデ。	灰褐色	密	良	
1144	〃	－	－	－	○内面圧痕・ナデ	淡赤褐色	精製土	良好	
1145	〃	3.5	－	3.5	○外面圧痕	乳灰色	〃	〃	
1146	〃	3.8	－	4.1	○内外面凹凸	灰褐色	〃	良	

溝－108（第282図）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1147	杯身	12.8	－	4.8	○底部外面ヘラケズリ。	淡灰青色	細砂		
1148	〃	－	－	－	○底部外面圧痕。	灰色	〃	良好	
1149	〃	－	9.3	－		青灰色	〃	〃	

溝－110～112（第283図）

1150	壺形土器	22.0	－	－	○内外面ヨコナデ。	乳灰色	細砂	良好	
1151	甕形土器	13.0	－	－	○口縁部6条のクシガキ沈線。	灰茶褐色	〃	良	
1152	〃	14.3	－	－	○口縁部5～6条のクシガキ沈線。	乳灰色	〃	〃	
1153	〃	14.5	－	－	○胴部外面タタキ・内面ヘラケズリ。	〃	〃	良好	
1154	小型壺形土器	7.0	－	－	○胴部外面ハケ・内面圧痕・ナデ。	〃	〃	〃	

溝－113・114・116・118（第285図）

1155	甕形土器	15.2	－	－	○口縁部6本程のクシガキ沈線。	灰褐色	細砂	良	
1156	〃	－	－	－		乳灰色	〃	軟	
1157	〃	－	－	－	○口縁部クシガキ沈線。	茶褐色	〃	良	
1158	椀形土器	－	－	－		淡褐色	〃	〃	
1159	高杯形土器	－	－	－		乳灰色	密	〃	
1160	器台形土器	7.0	7.5	13.0	○脚部外面ヨコヘラミガキ。	〃	細砂	良好	
1161	甕形土器	－	－	－		灰褐色	密	〃	
1162	〃	19.3	－	－	○口縁部5条程の沈線。	赤褐色	細砂	やや軟	
1163	〃	14.2	－	－	○口縁部に浅くクシガキ沈線。	明茶褐色	〃	〃	
1164	高杯形土器	－	－	－	○脚部外面ヘラガキ	明灰褐色	精製土	良	
1165	甕形土器	－	－	－	○口縁部8～9条のヘラガキ沈線。	灰茶褐色	細砂	〃	
1166	〃	－	－	－	○口縁部8条のヘラガキ沈線。	灰褐色	〃	〃	
1167	高杯形土器	－	－	－	○脚部外面ヘラミガキ。	乳灰色	精製土	〃	
1168	〃	－	14.0	－		赤褐色	〃	やや軟	

溝－115（第286図）

1169	壺形土器	14.3	－	－		赤茶褐色	細砂	やや軟	
1170	甕形土器	12.0	－	－	○胴部外面タタキ・内面ヘラミガキ状	赤褐色	〃	良	
1171	〃	13.8	－	－	○口縁部7条程のクシガキ沈線。	灰褐色	〃	良好	
1172	〃	14.5	－	－	○口縁部7条のクシガキ沈線。	灰茶褐色	〃	〃	
1173	〃	14.4	－	－	○口縁部8条のクシガキ沈線。	灰褐色	密	〃	
1174	〃	14.5	－	－	○口縁部7条のクシガキ沈線。	赤褐色	細砂	良	
1175	〃	14.8	－	－	○口縁部10条程のクシガキ沈線。	灰褐色	〃	良好	
1176	鉢形土器	26.5	－	－	○胴部内面ヘラケズリ。	明灰褐色	精製土	〃	
1177	〃	29.5	－	－	○胴部内面ヘラケズリ。	灰褐色	細砂	やや軟	
1178	高杯形土器	－	－	－		乳灰色	〃	良好	

溝－117（第287図）

1179	壺形土器	15.5	－	－		乳灰色	密	やや軟	
1180	〃	19.5	－	－	○口縁内外ヨコナデ。	〃	〃	良好	
1181	甕形土器	15.2	－	－	○口縁部8条のクシガキ沈線。	灰茶褐色	良	〃	
1182	〃	13.5	－	－	○口縁部4条のクシガキ沈線。	淡灰茶褐色	細砂	やや軟	
1183	〃	15.2	－	－	○口縁部11本前後のクシガキ沈線。	灰茶褐色	〃	良好	
1184	〃	14.7	－	－	○口縁部10本程のクシガキ沈線。	茶褐色	〃	〃	
1185	〃	15.4	－	－	○口縁部6本のクシガキ沈線。	灰褐色	〃	やや軟	
1186	〃	14.4	－	－	○口縁部6～7条のクシガキ沈線。	〃	〃	〃	
1187	〃	13.9	－	－	○口縁部9～10本のクシガキ沈線。	灰茶褐色	〃	良好	
1188	底部	－	－	－	○内面ヘラケズリ・圧痕。	赤茶褐色	〃	〃	
1189	鉢形土器	14.0	－	5.5	○外面斜行ヘラケズリ・内面ヘラ圧痕。	白灰色	細砂多	良	
1190	〃	15.0	－	6.0	○内外面ヘラミガキ。	赤褐色	細砂	良好	
1191	高杯形土器	16.0	－	－		赤茶褐色	密	良	
1192	〃	－	－	－		赤橙色	細砂	〃	
1193	〃	－	－	－		赤茶褐色	精製土	やや軟	○丹塗り。
1194	〃	－	－	－	○脚部外面ヨコヘラミガキ。	乳灰色	密	良好	

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1195	高杯形土器	—	—	—	○脚部外面ヨコヘラミガキ。	赤茶色	密	良好	
1196	〃	—	—	—		赤褐色	細砂	やや軟	
1197	〃	—	—	—	○脚部4孔を穿つ。	乳灰色	〃	良	
1198	器台形土器	—	10.4	—	○脚部外面ヨコヘラミガキ。	赤茶褐色	精製土	良好	
1199	〃	—	—	—	○脚部外面タテヘラミガキ。	乳白色	〃	〃	

溝－119（第288図）

1200	甕形土器	10.7	—	—	○口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	砂粒含	普通	○器表面磨滅。
1201	高杯形土器	17.3	—	—	○外面ハケの後ヘラミガキか？	赤黄褐色	水漉し粘土	不良	

溝－121（第290図）

1202	壺形土器	—	—	—	○内外面丹塗り　口縁の立上がり部分か。	赤橙色	細砂黒雲母	良好	○小破片。

溝－122（第291図）

1203	鉢形土器	—	—	—	○口縁部内外面ヘラミガキ。	橙色	砂粒細砂含	良好	○小破片。
1204	〃	—	—	—	○内外面全面ヘラミガキ。	〃	細砂かなり	〃	○　〃　。
1205	甕形土器	—	—	—	○内面上半ハケ。下半ヘラケズリ。	明赤褐色	砂粒細砂多	良好堅	○　〃　。
1206	〃	—	—	—	○口縁部立上がり外面クシメ。口縁ヨコナデ	淡褐色	細砂多し	良	○　〃　。

溝－123（第292図）

1207	鉢形土器	14.4	2.0	—	○体外面ヘラミガキかナデ。内面ヘラミガキ	橙色	精良砂粒含	良	○口縁残存少。

土器溜り－5（第293～302図）

1208	台付土器	—	13.6	—		淡灰褐色	微砂	良好	○丹塗り。
1209	壺形土器	15.0	—	—	○ハケ後ヘラミガキ。	乳褐色	〃	〃	○黒斑。
1210	〃	14.3	—	—	○外面ハケ後ミガキ。内面ハケ後ナデ。	淡乳褐色	〃	〃	○口縁1/8片。
1211	〃	13.5	—	—	○口縁内面ハケ。	淡赤褐色	細砂	〃	○器面剝離。
1212	〃	21.7	—	—	○調整はハケメ。	〃	〃	〃	
1213	〃	18.3	—	—	○外面ハケメ内面ヘラケズリ後ナデ。二重口縁。	淡乳褐色	微砂	〃	○器面磨滅。
1214	〃	18.6	—	—	○体部外面ハケ後ミガキ，内面ヘラケズリ。	淡黄橙色	粗砂含む。	〃	
1215	〃	19.1	—	—	○口縁部ヨコナデ。二重口縁。	〃	微砂	〃	○口縁3/4片。
1216	〃	20.6	—	—	○ハケ後ナデ。二重口縁。	淡赤褐色	〃	〃	○口縁1/8片。
1217	〃	21.4	—	—	○口縁部ヨコナデ。二重口縁。	〃	細砂	〃	○口縁1/8片。
1218	〃	17.3	—	—	○頸部ハケ後ミガキ。二重口縁。	〃	〃	〃	○一部煤付着。
1219	〃	17.8	—	—					
1220	〃	17.3	—	—		淡黄褐色		良	
1221	〃	16.4	—	—	○口縁外面ハケ後ヨコナデ。	乳褐色	微砂	良好	○内面に煤付着。
1222	〃	18.2	—	—	○頸部外面はハケ後ミガキ。内面ミガキ。	淡灰褐色	細砂	〃	
1223	〃	27.6	—	—	○ヘラミガキ後ナデ。	乳褐色	微砂	〃	
1224	〃	23.5	—	—	○外面はハケ後ミガキ、ナデ。	淡赤褐色	砂粒を含む	〃	○煤付着。
1225	〃	22.4	—	—	○外面はハケメ。口縁部にヘラミガキ。	〃	微砂	やや良	○　〃
1226	〃	15.9	—	—	○口縁部ヨコナデ。	暗黒灰色	〃	良好	
1227	〃	18.5	—	—		淡赤褐色	〃	やや良	○器面剝離。
1228	〃	10.1	—	—	○口縁内面ハケメ。	淡褐色	〃	良好	○丹塗り。
1229	〃	—	—	—	○ヘラミガキ。	赤褐色	〃	〃	
1230	〃	—	—	—	○外面ハケ後ヘラミガキ。	乳褐色	〃	〃	
1231	〃	—	—	—	○外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ。	淡赤褐色	〃	〃	○丹塗り。
1232	底部	—	5.3	—	○内面ハケメ。外面ハケ後ヘラミガキ。	淡茶褐色	〃	〃	
1233	甕形土器	13.6	—	—	○端部ヨコナデ。	黒灰色	〃	やや不良	○外面黒斑。
1234	〃	13.9	—	—	○ハケメ。	灰褐色	砂粒を含む	良好	○口縁1/4片。
1235	〃	12.2	—	—	○調整はミガキ。	淡赤褐色	水漉し粘土	〃	
1236	〃	14.3	—	—	○調整はハケ後ナデ。	淡灰褐色	細砂	〃	○口縁1/8片。
1237	〃	14.2	—	—	○口縁端部に沈線1条。体部外面タタキ。	〃	微砂	やや良	○丹塗り。
1238	〃	8.7	—	—	○外面ハケ後ミガキ。	灰褐色	細砂	良好	○丹塗りか。
1239	底部	—	7.5	—	○内面ハケメ？	茶褐色	〃	不良	○一部煤付着。弥生。
1240	〃	—	4.9	—	○外面ヘラケズリ。	〃	微砂	良好	○黒斑。弥生式土器。
1241	〃	—	8.6	—		淡赤褐色	細砂	不良	○器面剝離。〃　。
1242	甕形土器	13.8	1.7	18.1	○外面タタキ。内面指頭ナデ。	暗黄色	粗砂含む	良好	
1243	底部	—	2.2	—	○外面ミガキ。内面ハケおよびミガキ。	淡茶褐色	水漉し粘土	〃	

百間川沢田遺跡 2

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1244	甕形土器	17.0	—	—	○口縁端部外面8条のクシガキ平行沈線。	淡乳褐色	微砂	良好	○口縁¼片。
1245	〃	16.9	—	—	○ 〃 11条 〃 。	乳白色	〃	〃	○ 〃 ⅛〃。
1246	〃	15.9	—	—	○体部内面ヘラケズリ。	赤褐色	〃	やゝ不良	○器面剥離。
1247	〃	16.0	—	—	○口縁端部外面に6条のクシガキ平行沈線。	淡乳褐色	〃	良好	○ 〃 ⅛〃。
1248	〃	16.0	—	—	○ 〃 10条 〃 。	淡褐色	〃	〃	○ 〃 ⅓〃。
1249	〃	15.8	—	—	○ 〃 8条 〃 。	淡乳褐色	〃	やや良	○ 〃 ¼〃。
1250	〃	15.8	—	—	○ 〃 10条 〃 。	淡赤褐色	〃	良好	○ 〃 ⅙〃。
1251	〃	15.8	—	—	○ 〃 9条 〃 。	〃	〃	〃	○ 〃 ⅓〃。
1252	〃	15.8	—	—	○ 〃 7条 〃 。	淡黄褐色	〃	やや良	○器面剥離。
1253	〃	15.5	—	—	○ 〃 〃 〃 。	淡茶褐色	〃	良好	○口縁¼片。
1254	〃	14.9	—	—	○ 〃 8条 〃 。	暗黄色	砂粒含む	〃	
1255	〃	15.4	—	—	○ 〃 9～10条 〃 。	淡灰褐色	微砂	〃	○口縁⅛片。
1256	〃	15.6	—	—	○ 〃 9条 〃 。	淡茶褐色	〃	やゝ不良	○ 〃 ⅓〃。
1257	〃	15.6	—	—	○ 〃 8条 〃 。	淡褐色	〃	良好	○ 〃 ⅛〃。
1258	〃	15.2	—	—	○ 〃 6条 〃 。	赤褐色	〃	〃	○ 〃 ¼〃。
1259	〃	15.3	—	—	○ 〃 10条 〃 。	〃	〃	やや良	○ 〃 ⅙〃。
1260	〃	15.2	—	—	○ 〃 8条 〃 。	乳褐色	〃	良好	○ 〃 。
1261	〃	15.4	—	—	○ 〃 9条 〃 。	淡赤褐色	〃	やや良	○ 〃 ⅛〃。
1262	〃	15.2	—	—	○ 〃 〃 〃 。	淡黄褐色	〃	良好	○ 〃 ¼〃。
1263	〃	14.8	—	—	○ 〃 10条 〃 。	黒灰色	〃	〃	○外面煤付着。
1264	〃	15.0	—	—	○肩部にヘラ先による刺突3個。	暗黄褐色	粗砂含む。	良	
1265	〃	14.9	—	—	○口縁端部外面に9条のクシガキ平行沈線。	淡乳褐色	微砂	良好	○口縁¼片。
1266	〃	15.0	—	—	○ 〃 7条 〃 。	〃	〃	〃	
1267	〃	14.9	—	—	○ 〃 〃 〃 。	灰褐色	〃	〃	○口縁¼片。
1268	〃	14.8	—	—	○ 〃 〃 〃 。	淡茶褐色	〃	〃	○ 〃 。
1269	〃	14.7	—	—	○ 〃 6条 〃 。	淡赤褐色	〃	〃	
1270	〃	15.7	—	—	○体部外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	暗黄褐色	砂粒含む	〃	○煤付着。
1271	〃	14.8	—	—	○口縁端部外面に9条の櫛描平行沈線。	灰褐色	微砂	〃	○口縁¼片。
1272	〃	14.8	—	—	○ 〃 10条 〃 。	淡黄褐色	〃	〃	○器面剥離。
1273	〃	14.9	—	—	○ 〃 9条 〃 。	乳褐色	〃	〃	○口縁¼片。
1274	〃	14.7	—	—	○ 〃 6条 〃 。	淡赤褐色	〃	〃	○ 〃 。
1275	〃	14.3	—	—	○ 〃 7条 〃 。	淡茶褐色	〃	〃	○口縁¼片。
1276	〃	14.7	—	—	○ 〃 9条 〃 。	黒灰色	〃	やや良	○ 〃
1277	〃	14.6	—	—	○ 〃 〃 〃 。	赤褐色	〃	良好	
1278	〃	14.7	—	—	○ 〃 7～8条 〃 。	淡茶褐色	〃	〃	○器面磨滅。
1279	〃	14.7	—	—	○ 〃 7条 〃 。	淡赤褐色	〃	〃	○口縁¼片。
1280	〃	14.2	—	—	○ 〃 〃 〃 。	淡黄褐色	〃	〃	○ 〃 ⅛〃。
1281	〃	14.2	—	—	○ 〃 9条 〃 。	乳褐色	〃	〃	
1282	〃	14.4	—	—	○ 〃 7条 〃 。	暗灰褐色	〃	〃	○口縁¼片。
1283	〃	14.6	—	—	○ 〃 8条 〃 。	淡赤褐色	〃	〃	○ 〃 ⅙〃。
1284	〃	14.2	—	—	○ 〃 13条 〃 。	〃	〃	〃	○ 〃 。
1285	〃	14.4	—	—	○ 〃 8条 〃 。	淡褐色	〃	〃	○ 〃 ⅓〃。
1286	〃	14.4	—	—	○ 〃 10条 〃 。	〃	〃	〃	○ 〃 ⅙〃。
1287	〃	14.2	—	—	○ 〃 9条 〃 。	淡茶褐色	〃	〃	○ 〃 。
1288	〃	14.2	—	—	○ 〃 〃 〃 。	淡褐色	〃	やや良	○ 〃 ⅛〃。
1289	〃	14.2	—	—	○ 〃 6～7条 〃 。	淡赤褐色	〃	良好	○ 〃 ¼〃
1290	〃	14.0	—	—	○ 〃 8条 〃 。	淡黄褐色	〃	〃	
1291	〃	13.9	—	—	○ 〃 6条 〃 。	淡灰褐色	〃	〃	○一部煤付着。
1292	〃	14.0	—	—	○ 〃 9条 〃 。	淡赤褐色	〃	やや良	
1293	〃	13.4	—	—	○ 〃 10条 〃 。	乳褐色	〃	不良	
1294	〃	13.7	—	—	○ 〃 7条 〃 。	暗褐色	砂粒含む。	良好	
1295	〃	14.0	—	—	○ 〃 6条 〃 。	暗茶褐色	微砂	やゝ不良	○器面剥離。
1296	〃	13.7	—	—	○ 〃 8条 〃 。	淡黄褐色	〃	やや良	○口縁¼片。
1297	〃	14.1	—	—	○ 〃 〃 〃 。	乳褐色	〃	良好	○ 〃 。

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1298	甕形土器	13.9	—	—	○口縁端部外面に8条の平行クシガキ沈線。	暗赤褐色	微砂	良好	○口縁1/6片。
1299	〃	14.0	—	—	○ 〃 9条 〃 。	赤褐色	〃	や・不良	○ 〃 1/4〃。
1300	〃	13.5	—	—	○ 〃 8条 〃 。	淡赤褐色	〃	良好	○ 〃 1/6〃。
1301	〃	13.3	—	—	○ 〃 〃 〃 。	黒灰色	〃	〃	○煤付着。
1302	〃	13.4	—	—	○ 〃 6条 〃 。	淡赤褐色	〃	やや良	○外面一部黒斑。
1303	〃	13.2	—	—	○ 〃 8条 〃 。	暗赤褐色	〃	や・不良	○口縁1/6片。
1304	〃	12.9	—	—	○ 〃 9条 〃 。	淡乳褐色	〃	良好	○ 〃 。
1305	〃	12.8	—	—	○ 〃 7～8条 〃 。	淡灰褐色	〃	〃	○一部煤付着。
1306	〃	12.8	—	—	○ 〃 6条 〃 。	淡茶褐色	〃	〃	
1307	〃	13.0	—	—	○ 〃 10条 〃 。	淡黄褐色	〃	や・良	○口縁1/4片。
1308	〃	12.8	—	—	○ 〃 6条 〃 。	淡茶褐色	〃	良好	
1309	〃	12.8	—	—	○ 〃 7条 〃 。	淡乳褐色	〃	〃	
1310	〃	12.5	—	—	○ 〃 6条 〃 。	淡赤褐色	〃	や・不良	○口縁1/6片。
1311	〃	12.5	—	—	○ 〃 〃 〃 。	〃	〃	良好	○ 〃 1/4〃。
1312	〃	12.2	—	—	○ 〃 8条 〃 。	乳褐色	〃	やや良	
1313	〃	11.8	—	—	○ 〃 11条 〃 。	茶褐色	〃	良好	○一部煤付着。
1314	高杯形土器	21.1	—	—	○調整はミガキか。	淡黄橙色	〃	〃	
1315	〃	18.7	—	—	○ハケ後ナデ。	赤褐色	〃	〃	○口縁1/6片。
1316	〃	18.8	—	—	○調整はハケ後ヘラミガキ。	〃	水漉し粘土	やや良	○ 〃 1/6〃。
1317	〃	17.2	—	—	○ハケ後ミガキ。	〃	〃	良好	○一部煤付着。
1318	〃	16.2	—	—	○調整はミガキ。	淡褐色	微砂	〃	
1319	〃	19.0	13.8	12.8	○脚部外面粗いハケメ。杯部はミガキ。	赤褐色	〃	〃	○黒斑。
1320	〃	17.0	—	—	○調整はミガキ。	〃	〃	〃	○器面剥離。
1321	〃	—	15.0	—		〃	〃	〃	○ 〃 。
1322	〃	—	—	—	○調整はミガキか。	〃	水漉し粘土	〃	○ 〃 。
1323	〃	—	—	—	○外面ハケ後ミガキ。	淡赤褐色	〃	〃	
1324	〃	—	—	—	○調整はミガキ。円形透孔は4個？。	〃	微砂	やや良	
1325	〃	—	—	—	○杯部外面ハケ後ナデ。円形透孔4個。	〃	〃	良好	
1326	〃	—	14.7	—	○円形透孔は4個。	赤褐色	水漉し粘土	や・不良	○器面剥離。
1327	〃	—	11.5	—	○外面ヘラミガキ。円形透孔4個。	淡赤褐色	〃	良好	○底部1/4片。
1328	〃	—	13.5	—	○外面細かいミガキ。端部は指頭ナデ。	〃	微砂	〃	○内面一部に黒斑。
1329	〃	—	16.1	—	○ハケ後ミガキか。円形透孔は4個か。	〃	〃	〃	○底部1/4片。
1330	〃	15.6	—	—	○ハケ後ヘラミガキ。	〃	水漉し粘土	〃	○口縁1/4片。
1331	〃	14.9	—	—	○ 〃 。	赤褐色	〃	〃	○一部煤付着。
1332	〃	14.2	—	—	○外面ケズリ。	淡赤褐色	微砂	〃	○一部黒斑。
1333	〃	14.6	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ハケメ。	〃	〃	〃	○口縁1/4片。
1334	〃	—	—	—	○杯部ハケ後ミガキ。	〃	〃	やや良	○器面剥離。
1335	〃	—	15.6	—	○脚柱部はハケ後ミガキ。円形透孔4個。	赤褐色	〃	や・不良	○ 〃 。
1336	〃	—	14.9	—	○外面ハケ後ミガキ。円形透孔は4個。	〃	〃	良好	
1337	〃	—	16.0	—	○ハケ後ミガキ。円形透孔は4個。	淡赤褐色	〃	〃	○一部煤付着。
1338	〃	—	15.4	—	○ 〃 。 〃 。	〃	〃	〃	○底部1/6片。
1339	〃	—	17.1	—	○ 〃 。 〃 。	赤褐色	〃	良	○ 〃 1/4〃。
1340	〃	—	—	—	○外面杯部ミガキ。脚部ヘラケズリ。	淡赤褐色	〃	良好	
1341	〃	—	10.2	—	○外面ヘラミガキ。	淡黄褐色	〃	〃	○丹塗り。
1342	〃	—	—	—		赤褐色	〃	や・不良	○器面剥離。
1343	〃	—	—	—	○外面ハケメ。	〃	〃	〃	○ 〃 。
1344	〃	—	—	—	○外面ハケ後ナデ。円形透孔4個。	淡赤褐色	〃	良好	
1345	〃	—	11.8	—	○ハケ後ナデ。円形透孔は4個。	〃	〃	〃	○器面剥離。
1346	〃	—	13.9	—	○外面ハケ後ミガキ。内面ハケ後ナデ。	〃	〃	〃	○一部黒斑。
1347	〃	—	14.6	—	○外面ヘラミガキ。内面ハケメ。円形透孔4。	〃	〃	〃	○底部1/6片。
1348	〃	—	14.4	—	○調整はナデか。	〃	〃	や・不良	○器面剥離。
1349	〃	—	15.0	—	○ハケメ。円形透孔は4個。	淡茶褐色	細砂	〃	○ 〃 。
1350	〃	—	15.8	—	○調整はハケメ。端面に2条の沈線。	暗赤褐色	微砂	良好	○底部1/4片。
1351	〃	12.2	—	—		淡赤褐色	〃	〃	○口縁1/6片。

百間川沢田遺跡 2

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1352	高杯形土器	—	—	—	○外面ハケ後ミガキ。	赤褐色	水漉し粘土	良好	
1353	〃	—	—	—	○ 〃 。円形透孔は4個。	淡赤褐色	微砂	〃	
1354	〃	—	14.4	—	○ハケ後ミガキ。円形透孔は4個。	〃	水漉し粘土	〃	
1355	〃	—	10.9	—	○円形透孔は4個。	赤褐色	〃	やゝ不良	○器面剥離。
1356	〃	—	—	—	○調整はミガキ。	淡赤褐色	微砂	やや良	○ 〃 。
1357	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。	赤褐色	水漉し粘土	良好	
1358	〃	—	9.1	—	○外面ミガキ。	〃	微砂	〃	
1359	〃	—	9.4	—	○外面ハケ後ヘラミガキ。円形透孔は4個。	淡赤褐色	水漉し粘土	〃	○丹塗り。
1360	〃	—	11.0	—	○外面ヘラミガキ。円形透孔4個。	赤褐色	微砂	やや良	○器面剥離。
1361	〃	—	13.5	—	○外面ミガキ。円形透孔4個。	〃	〃	良好	○底部片。
1362	〃	—	14.0	—	○外面ヘラミガキ。円形透孔4個。	〃	〃	〃	○ 〃 。
1363	〃	—	13.2	—	○ハケメ。円形透孔4個。	乳赤褐色	〃	〃	○ 〃 。
1364	〃	—	11.4	—	○外面ヘラミガキ。円形透孔は4個。	淡赤褐色	〃	やゝ不良	○器面剥離。
1365	〃	6.4	10.4	5.0	○裾部内面ハケ、あとはミガキ調整。	〃	〃	良好	○丹塗り。
1366	〃	6.4	—	—	○杯部はミガキ。裾部はハケ。4個の円孔。	〃	〃	〃	○ 〃
1367	〃	13.4	—	—	○調整はミガキ。	赤褐色	〃	〃	○ 〃
1368	〃	9.2	—	—	○調整はハケメ。	淡赤褐色	〃	〃	
1369	〃	8.5	—	—	○調整はハケ後ミガキ。	〃	水漉し粘土	〃	○器面剥離。
1370	〃	—	—	—	○一部ハケメ。	暗淡赤褐色	微砂	〃	
1371	〃	—	—	—	○外面ハケ後ミガキ。円形透孔4個。	暗赤褐色	〃	〃	
1372	〃	—	—	—	○調整はヘラミガキ。	淡赤褐色	水漉し粘土	〃	
1373	〃	—	—	—	○杯部の調整はヘラミガキ。	〃	微砂	〃	
1374	〃	—	20.0	—	○裾部ハケメ。円形透孔は4個。	赤褐色	〃	やや良	
1375	〃	—	14.2	—	○内外面ハケメ。円形透孔は4個。	〃	水漉し粘土	良好	
1376	〃	—	14.2	—	○円形透孔は4個か？。	淡赤褐色	〃	〃	○一部黒斑。
1377	〃	—	14.7	—	○外面ハケ後ヘラミガキ。円形透孔は4個。	赤褐色	微砂	〃	
1378	〃	—	16.3	—	○ 〃 。 〃 。	淡赤褐色	水漉し粘土	〃	
1379	小型壺形土器	10.1	—	—	○細かいヘラミガキ。	〃	微砂	〃	
1380	〃	—	—	—	○調整ヘラミガキ。体部内面は指頭圧痕。	淡乳褐色	〃	〃	
1381	〃	13.2	—	—	○外面ヘラミガキ。	赤褐色	水漉し粘土	〃	
1382	〃	14.4	—	—	○調整はハケ後ヘラミガキ。	〃	〃	〃	○口縁部片。
1383	〃	—	—	—	○外面ハケ後ミガキ。	赤褐色	微砂	やゝ不良	○一部煤付着。
1384	〃	12.8	3.4	6.6	○口縁外面にハケメ。	〃	精製粘土	良好	○器面磨滅。
1385	〃	14.6	—	—	○調整はヘラミガキ。	淡褐色	水漉粘土	〃	○黒。剥蝕あり。
1386	〃	13.9	—	—	○内面ハケメ。口縁端面に2条の沈線。	淡乳褐色	微砂	〃	○一部煤付着。
1387	〃	14.0	—	—	○口縁部はヨコナデ。	淡灰茶褐色	〃	〃	○口縁片。
1388	〃	10.8	—	8.1	○体部は粗いヘラケズリ後ミガキ。	灰褐色	細砂	不良	○ほぼ完型。
1389	〃	12.7	—	—	○体部外面ヘラケズリ。口縁部ハケ後ナデ。	暗赤褐色	微砂	良好	
1390	〃	8.2	—	5.8	○体部はヘラケズリ後ミガキ。	灰白色	〃		○口縁片。
1391	〃	10.6	—	—	○体部ハケ後ヘラケズリ？。	赤褐色	〃	良	○ 〃 片。
1392	〃	9.9	—	—	○外面ハケ後ヘラミガキ。	暗茶褐色	水漉し粘土	〃	○丹塗り。
1393	〃	9.2	—	—	○調整はハケ後ミガキ。	〃	微砂	〃	○ 〃 か。
1394	小型鉢形土器	9.2	—	—	○調整はハケ。	淡赤褐色	〃	〃	○煤付着。
1395	〃	10.5	—	—	○内面ハケ後ミガキ、外面ミガキ。	赤褐色	〃	〃	
1396	〃	11.1	—	—		暗茶褐色	〃	〃	○器面剥離。
1397	小型壺形土器	—	—	—	○体部上半ハケメ。外面下半ヘラケズリ。	赤褐色	〃	〃	
1398	〃	—	—	—	○ハケ後ヘラミガキ。	淡赤褐色	細砂	やゝ不良	
1399	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ハケ後ミガキ。	乳褐色	水漉し粘土	良好	○底部黒斑。
1400	鉢形土器	14.3	3.3	5.4	○	暗赤褐色	〃	〃	
1401	〃	13.3	—	—	○ハケ後ヘラミガキ。外面一部ヘラケズリ	暗赤褐色	〃	良	
1402	〃	11.5	3.9	6.0	○外面ハケ後ミガキ。内面ハケ。	灰褐色	微砂	良好	
1403	〃	12.6	4.7	5.7	○ハケ後ヘラミガキ。	淡赤褐色	水漉し粘土	〃	
1404	〃	18.6	—	7.2	○下半タタキメ。上半ミガキ。	淡黄褐色	微砂	〃	○内面煤付着。
1405	〃	16.4	—		○ハケ後ヘラミガキ。	淡灰褐色	〃	〃	○口縁片。

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1406	鉢形土器	16.3	—	—	○ハケメ。	淡茶褐色	水漉し粘土	良好	
1407	〃	(16.2)			○外面ヘラケズリ。	淡黄灰色	微砂	〃	○口径推定。
1408	〃	12.2	—	—	○ハケ後ミガキ。	赤褐色	水漉し粘土	〃	
1409	〃	11.4	—	—	○外面指頭によるナデ。	淡赤褐色	微砂	〃	○口縁片。
1410	〃	10.8	—	2.8	○ミガキで調整され、一部にヘラケズリ。	〃	〃	〃	
1411	小型鉢型土器	11.0	4.1	7.2	○調整はナデ。	黒灰色	〃	やや不良	○外面煤付着。
1412	〃	6.2	2.0	4.5	○ 〃 。	淡黄褐色	〃	良好	
1413	鉢形土器	32.4	—	—	○体部内面ハケメ。	淡赤褐色	〃	〃	
1414	〃	—	—	—	○外面ハケメ。一部にヘラミガキ。	淡黄褐色	細砂	〃	○器面剥離。
1415	〃	36.2	—	—	○外面ハケメ。内面下半ハケ後ミガキか。	淡褐色	〃	〃	
1416	台付鉢形土器	10.8	9.0	7.9	○調整はミガキか。	淡赤褐色	微砂	やや良	○器面剥離。
1417	〃	—	8.6	—	○台部外面はハケ後ミガキ。内外面にハケメ。	淡黄褐色	〃	良好	
1418	〃	13.6	6.5	8.9	○ハケ調整後細かいヘラミガキ。	赤褐色	細砂	やや不良	
1419	〃	—	6.9	—	○外面細かいヘラミガキ。	淡赤褐色	水漉し粘土	良好	
1420	壺形土器	—	3.8	—	○外面ハケ後ミガキ。	淡乳褐色	細砂	〃	
1421	台付鉢形土器	—	6.7	—	○台部ハケ後ナデ。	乳褐色	微砂	〃	○一部煤付着。
1422	〃	—	4.8	—	○台部指頭ナデ。	灰白色	〃	〃	○製塩土器。黒斑。
1423	〃	—	4.4	—	○ 〃 。	黒灰色	〃	不良	○ 〃 。
1424	〃	—	5.0	—	○ 〃 。	赤褐色	〃	〃	○ 〃 。
1425	〃	—	5.0	—	○ 〃 ，体部外面ヘラケズリ。	暗桃色	細砂	〃	○ 〃 。
1426	〃	—	3.3	—	○ 〃 。 〃 。	淡桃色	微砂	やや良	○ 〃 。
1427	〃	—	3.3	—	○ 〃 。 〃 。	桃色	〃	〃	○ 〃 。
1428	〃	—	4.1	—	○ 〃 。 〃 。	淡桃色	〃	不良	○ 〃 。
1429	〃	—	3.5	—	○ 〃 。	桃色	〃	やや不良	○ 〃 。
1430	〃	—	4.2	—	○ 〃 。	黄褐色	〃	〃	○ 〃 。
1431	〃	—	3.4	—	○ 〃 。体部外面ヘラケズリ。	淡桃色	〃	〃	○ 〃 。
1432	手焙り形土器	—	—	—	○上部開口部片。	暗茶褐色	細砂	〃	
1433	鼓形器台	12.5	12.6	6.9	○外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	淡褐色	微砂	〃	
1434	器台形土器	7.9	—	—	○調整はナデ。	黒灰色	精製粘土	やや良	丹塗り、煤付着。
1435	〃	8.8	—	—	○ハケメが残る。円形透孔は4個。	淡赤褐色	微砂	やや良	
1436	〃	—	8.8	—	○脚部外面ハケメ。円形透孔4個。	赤褐色	〃	良好	
1437	〃	—	12.7	—	○脚上部ミガキ以下ハケメ。円形透孔4個。	淡赤褐色	〃	〃	
1438	〃	—	9.8	—	○円形透孔は2段で4個づつか。	淡褐色	精製粘土	〃	
1439	〃	—	12.1	—	○外面ミガキ．円形透孔は4個。	淡赤褐色	微砂	〃	

土器溜り－6～8（第303図）

1440	壺形土器	13.1	—	—	○外面肩部ハケ後ヘラミガキ。	灰褐色	精製粘土	良好	
1441	〃	22.3	—	—	○頸部ハケメ。体部外面ハケ後ヘラミガキ。	暗黄褐色	砂粒含む	〃	
1442	〃	19.2	—	—	○口縁部はナデ。	灰褐色	粗砂含む	〃	
1443	〃	17.0	—	—		黄褐色	砂粒含む	〃	○調整不明。
1444	底部	—	—	—	○外面タタキ。内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	〃	やや不良	
1445	甕形土器	19.2	—	—	○口縁端部外面に12条のクシガキ平行沈線。	褐色	砂粒含む	良好	
1446	〃	16.6	—	—	○ 〃 10条 〃 。	暗黄色	粗砂含む	〃	
1447	〃	15.0	—	—	○ 〃 5条 〃 。	暗黄褐色	〃	〃	
1448	〃	14.9	—	—	○ 〃 〃 〃 。	暗褐色	〃	〃	
1449	〃	13.6	—	—	○体部外面ハケ後ヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1450	〃	14.2	—	—	○口縁端部外面に7条のクシガキ平行沈線。	〃	細砂	〃	
1451	高杯形土器	—	12.9	—	○脚柱部外面ヘラミガキ。裾部外面ハケメ。	暗茶褐色	砂粒含む	〃	
1452	〃	—	13.9	—	○ 〃 。円形透孔4個。	赤褐色	細砂	〃	
1453	〃	—	17.0	—	○外面ハケ後ミガキか。	黄赤褐色	砂粒含む	〃	○器面剥離。
1454	小型壺形土器	9.0	1.0	6.8		白褐色	細砂	〃	○調整不明。
1455	〃	9.7	1.7	8.1	○内面口縁部ハケメ。体部ナデ。	赤褐色	精製粘土	〃	○1460とセットか。
1456	〃	8.8	—	—	○外面ヘラミガキ。	〃	細砂	〃	
1457	台付鉢形土器	—	8.6	—	○ 〃 。	黄褐色	精製粘土	〃	
1458	台付鉢形土器	—	7.1	—	○台部指オサエ。体部外面タタキ後ナデ。	暗褐色	粗砂含む	やや不良	
1459	〃	—	5.1	—	○ 〃 ，体部外面タタキ。	白灰褐色	砂粒含む	良好	

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1460	器台形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ。円形透孔は4個か？。	赤褐色	精製粘土	良好	○1455とセットか。

土器溜り－9（第305図）

1461	壺形土器	(13.5)	—	—	○胴部外面タタキ→ハケ→ヘラミガキ。	淡黄褐色	砂粒含	普通	
1462	甕形土器	(14.4)	—	—	○口縁拡張部10本の櫛状工具。ハケ後ミガキ	暗茶褐色	〃	〃	○器表面煤付着。
1463	壺形土器	—	—	—	○手捏ね土器。口縁部のみ欠損。	黄褐色	〃	〃	○肩部1か所黒斑。
1464	甕形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。胴部内面ヘラケズリ。	淡黄灰色	〃	〃	○器表面磨滅。
1465	小型丸底壺	—	—	—	○体部内外面ケズリ、外面は後にナデ。	淡黄褐色	〃	〃	
1466	鉢形土器	(15.5)	(2.0)	(6.2)	○体部外面ヘラケズリ、内面不明。	黄褐色	水漉粘土	〃	
1467	高杯形土器	(20.2)		—	○外面細かなヘラミガキ。内面不明。	〃	精製粘土	〃	
1468	鉢形土器	37.0	8.0	19.6	○体部外面ハケ。内面ハケ後ヘラミガキ。	〃	砂粒含	〃	○完形。

土器溜り－11（第306図）

1469	甕形土器	15.8	—	23.9	○胴部外面タテハケ・ヘラミガキ。	淡茶褐色	細砂	良好	○外面煤付着。
1470	〃	14.2	—	—	○口縁部6条のクシガキ沈線。	茶褐色	密	やや軟	
1471	〃	13.8	—	—	○口縁部7条のクシガキ沈線。	褐色	〃	良好	
1472	小型壺形土器	10.0	—	6.4		灰褐色	精製土	〃	
1473	高杯形土器	13.5	10.2	7.7	○脚部に4孔を穿つ。	赤褐色	〃	〃	
1474	〃	—	15.5	—		乳灰色	〃	良	

土器溜り－12（第307・308図）

1475	壺形土器	14.8	—	—	○内外面ナデ。	赤褐色	精製土	良	
1476	〃	12.6	—	—	○外面タテヘラミガキ。	灰褐色	細砂	良好	
1477	〃	16.4	—	—	○胴部外面斜行とタテハケ・内面ヘラケズリ	乳褐色	〃	〃	
1478	甕形土器	19.8	—	—	○口縁部外面ヨコナデと一部タテハケ。	明灰褐色	〃	〃	
1479	〃	12.3	—	—	○胴部外面タテハケ・内面ヘラケズリ。	淡褐色	〃	〃	
1480	〃	13.5	—	—	○口縁部5条のクシガキ沈線。	褐色	〃	良	○煤付着。
1481	〃	15.0	—	—	○口縁部9条のクシガキ沈線。	〃	〃	良好	
1482	〃	15.5	—	—	○口縁部7～8条のクシガキ沈線。	黒褐色	〃	〃	
1483	〃	13.6	—	—	○口縁部7条のクシガキ沈線。	灰褐色	〃	良	
1484	〃	15.2	—	—	○口縁部10条程の細いクシガキ沈線。	黒褐色	〃	良好	
1485	〃	15.0	—	—	○口縁部6条のクシガキ沈線。	赤褐色	〃	軟	
1486	〃	14.3	—	—	○胴部外面タテハケ・内面ヘラケズリ。	褐色	〃	良	
1487	〃	15.3	—	—	○ 〃 ・ 〃 。	赤茶褐色	〃	良好	
1488	〃	17.2	—	—	○口縁部8条のクシガキ沈線。	淡灰褐色	〃	良	
1489	〃	14.5	—	—	○口縁部7条のクシガキ沈線。	淡褐色	〃	やや軟	
1490	〃	15.6	—	—	○口縁部10条のクシガキ沈線。	淡灰褐色	〃	良	
1491	鉢形土器	32.0	—	—		明茶褐色	〃	やや軟	
1492	〃	13.0	—	—	○内面圧痕の後ヘラケズリ。	赤褐色	〃	良	
1493	〃	9.8	—	6.7	○胴部外面ヘラミガキ。	淡灰褐色	〃	良好	
1494	〃	13.7	—	—	○外面粗い斜行ハケメ・内面ヘラケズリ。	淡褐色	〃	〃	
1495	〃	12.6	—	—		〃	密	〃	
1496	〃	11.0	—	—	○胴部外面一部斜行ヘラケズリ	灰褐色	細砂	良	
1497	台付底部	—	5.5	—	○底部外面圧痕。	赤褐色	精製土	良好	
1498	底部	—	—	—		乳灰色	細砂	〃	
1499	〃	—	—	—		〃	精製土	〃	
1500	〃	—	7.2	—	○内面ヘラケズリ。	淡褐色	砂粒多	〃	
1501	椀形土器	8.2	—	2.8	○外面圧痕とナデ・内面ナデ。	〃	精製土	良	
1502	高杯形土器	18.8	13.6	13.2	○杯部内外面ハケのちナデ。	灰褐色	精製粘土	良好	
1503	〃	20.0	13.8	14.7	○脚部内外面ハケメ。	赤褐色	〃	やや軟	
1504	〃	12.0	—	—	○外面ヨコヘラミガキ。	乳灰色	密	良好	
1505	〃	19.0	—	—		赤褐色	精製土	良	
1506	〃	—	—	—	○脚部外面ヨコヘラミガキ。	〃	精製粘土	良好	
1507	〃	—	—	—	○ 〃 。	灰茶褐色	〃	〃	
1508	〃	—	13.2	—	○脚部外面タテヘラミガキ。	灰褐色	細砂	〃	
1509	〃	—	—	—	○脚部外面ヨコヘラミガキ。	赤褐色	精製粘土		○丹塗り。

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1510	高杯形土器	—	—	—		赤褐色	精製粘土	良	○丹塗り。
1511	〃	—	9.5	—	○脚部タテヘラミガキ。	〃	密	〃	
1512	〃	—	—	—		明茶褐色	精製土	〃	
1513	〃	—	—	—		淡灰褐色	〃	〃	
1514	〃	—	—	—	○脚部タテヘラミガキ。	赤褐色	〃	良好	
1515	〃	—	—	—	○脚部外面ヨコヘラミガキ。	灰褐色	〃	〃	
1516	〃	—	—	—		乳灰色	〃	良	

包含層（第309～311図）

1517	壺形土器	19.3	—	—	○頸部外面にハケメ。二重口縁。	暗赤褐色	砂粒含む。	良好	
1518	〃	19.6	—	7.0	○ 〃 〃 。	淡灰褐色	〃	〃	○器面剝離。
1519	甕形土器	15.3	—	—	○外面タタキノ（4本／1cm）口縁ヨコナデ	鈍橙色	石粒砂粒多	良	○ ½残存。
1520	〃	15.6	—	—	○口縁端部外面に7条のクシガキ平行沈線。	淡黄褐色	砂粒含む	良好	○口縁¼片。
1521	〃	14.8	—	—	○ 〃 9条 〃	黒灰色	〃	〃	○ 〃 ⅙〃。
1522	〃	14.5	—	—	○ 〃 7条 〃	黒灰色	〃	〃	○ 〃
1523	〃	—	—	—	○口縁立上がり外面クシメ。口縁部ヨコナデ	暗褐色	砂粒細砂多	良好	○小破片。
1524	〃	13.0	—	—	○口縁部調整はナデ。	黄褐色	細砂	良	
1525	甕形土器	—	5.3	—	○底面ナデ、外面きわめて細かいハケメ。	暗褐色	砂粒多し	良好	○底部完存。
1526	鉢形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。他は内外面ナデ。	鈍橙色	細砂多し	良好堅	○小破片。
1527	甕形土器	—	—	—	○口縁立上がり外面クシメ。口縁部ヨコナデ	鈍黄橙色	砂粒細砂多	〃	○ 〃 。
1528	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	鈍橙色	細砂多し	〃	○ 〃 。
1529	〃	—	3.0	—	○口縁部、外面ヘラミガキ、内面ナデ。	淡黄褐色	精製粘土	良好	
1530	〃	—	—	(4.9)	○内面円滑なナデ。	暗茶灰色		〃	○外面煤付着。
1531	小型丸底壺	9.2	—	(4.5)		灰茶色	小砂粒	〃	○黒斑。
1532	高杯形土器	—	—	—	○一部にハケメ。	淡赤褐色	微砂	良好	
1533	〃	—	15.8	—	○外面ハケ後ミガキ。円形透孔は4個。	赤褐色	砂粒含む	〃	
1534	〃	—	—	—	○外面はミガキか。	〃	〃	〃	
1535	〃	—	—	—		赤褐色	〃	〃	
1536	〃	—	—	—	○外面はミガキか。	淡赤褐色	〃	〃	
1537	台付鉢形土器	—	4.1	1.4	○台部は指オサエ。	暗茶褐色	〃	不良	○製塩土器。
1538	杯身	—	—	—	○底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	灰色	砂粒細砂少	良好	○小破片。須恵器。
1539	高杯	—	—	—	○体部に凹線1条。内外面ヨコナデ。	〃	精良	〃	○ 〃 。 〃
1540	壺形土器	—	—	—	○外面ヨコナデ。	浅黄橙色	ち密細砂含	〃	○ 小破片。
1541	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。内外面ハケメ痕跡。	鈍橙色	細砂多し	〃	○ 〃 。
1542	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。口縁端下方へ拡張。	灰褐色	砂粒細砂多	良好堅	○ 〃 。
1543	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。口縁端上方へ拡張。	黄橙色	細砂多し	良	○ 〃 。
1544	〃	13.9	—	—	○外面擦痕あり。内面上半ハケメ残存。	浅黄橙色	精良細砂含	良好	○ ⅙残存。
1545	〃	—	—	—	○外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	灰褐色	砂粒細砂多	良好堅	○小破片。
1546	〃	12.9	—	—	○内外面ヨコナデ。口縁部先端少し内湾。	橙色	〃	良好	○ ⅙残存。
1547	底部	—	2.2	—	○内面ナデ。外面もナデか。かすかな平底。	鈍橙色	砂粒細砂含	良	○底部完存。
1548	〃	—	2.9	—	○内外面ナデ。鉢形土器の底部か。	灰白色	〃	良好	○ 〃 。
1549	壺形土器	—	—	—	○台付の直口壺となるか。内面ナデ。	淡橙色	精良・ち密	〃	○小破片。
1550	鉢形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ。	鈍橙色	砂粒細砂多	〃	○ 〃
1551	甕形土器	13.0	—	—	○口縁立上がり外面クシメ。口縁部ヨコナデ	灰褐色	細砂多し	良好堅	○ ⅙強残存。
1552	〃	—	—	—	○ 〃 。 〃	〃	〃	良	○小破片。
1553	〃	13.4	—	—	○外面頸部に爪形が残る。立上がり部クシメ	褐色	砂粒細砂多	〃	○ ⅙残存。
1554	〃	—	—	—	○口縁立上がり外面クシメ。口縁部ヨコナデ	灰褐色	細砂多し	良好	○小破片。
1555	〃	—	—	—	○ 〃	明灰褐色	砂粒細砂多	〃	○ 〃 。
1556	〃	14.8	—	—	○ 〃 。 〃	〃	〃	良好堅	○ ⅙強残存。
1557	〃	—	—	—	○外面屈折部突出。口縁立上がりクシメ。	灰褐色	〃	良〃	○ ⅙弱残存。
1558	〃	—	—	—	○口縁立上がり外面クシメ。口縁部ヨコナデ	〃	細砂多し	良好	○小破片。
1559	〃	—	—	—	○口縁立上がり外面軽いクシメ。	明褐灰色	砂粒細砂多	良好堅	○ 〃 。
1560	高杯形土器	—	—	—	○内外面剝落。口縁端丸く肥厚。	鈍橙色	精良細砂含	やや甘	○ 〃 。
1561	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。内面下半ヘラミガキか。	黄橙色	〃	良好	○ 〃 。
1562	器台形土器	—	—	—	○内外面ヘラミガキか。口縁部かすかに外反	赤橙色	細砂多し	良	○ 〃 。

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1563	器台形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ。内面もヘラミガキか。	橙色	細砂かなり	良好	○小破片。
1564	高杯形土器	—	—	—	○内面ナデ、外面ヘラミガキか。	〃	精良・ち密	良	○柱状部完存。
1565	〃	—	—	—	○挿し込み式接合。内面ナデ。外面ヘラ磨キ	鈍橙色	細砂多し	良好	○ 〃
1566	甕形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部内面ハケノ残存。	浅黄橙色	砂粒細砂含	〃	○小破片。
1567	高杯形土器	—	—	—	○外面ヘラミガキ、内面ナデ。	明黄橙色	精良・ち密	〃	○柱状部½残存。
1568	〃	—	—	—	○柱状部と裾部の境に沈線1条。	橙色	〃	やや甘	○柱状部完存。
1569	〃	—	—	—	○内面ハケ状工具の回転痕跡。	鈍橙色	細砂多し	良好	○図示部分完存。
1570	〃	—	—	—	○外面ハケ、先端は尖り気味に丸くおさめる	橙色	精良・ち密	やや甘	○小破片。
1571	器台形土器	—	—	—	○内面ヨコナデ。外面はヘラミガキか。	〃	精良細砂含	良好	○ 〃
1572	椀	—	6.2	—	○高台端外方へつまみ出す。内面ナデ。	灰白色	〃	良	○須恵器。破片。
1573	高杯形土器	—	—	—	○内面ナデか。他は剥落。	橙色	精良・ち密	〃	○図示部分完存。
1574	〃	16.5	—	—	○口縁部ヨコナデ。外面下半ナデ。	鈍橙色	細砂多	良好堅	○½残存。
1575	杯蓋	—	11.6	—	○内面ナデ。裾部わずかに内湾。	橙色	精良・ち密	良	○柱状部完存。
1576	〃	—	—	—	○天井部ヘラケズリ。口縁端面をもつ。	灰色	細砂含	良好	○小破片。須恵器。
1577	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。口縁端面をもつ。	灰白色	細砂かなり	〃	○ 〃
1578	〃	—	—	—	○内外面ヨコナデ。口縁部つまみ出し気味。	〃	砂粒細砂多	〃	○ 〃
1579	鉢形土器	11.8	—	—	○内外面ヨコナデ。口縁端は丸くおさめる。	〃	細砂かなり	良	○½残存。須恵器。
1580	壺形土器	—	—	—	○内外面ヨコナデ。外面凹凸かなりあり。	浅黄橙色	砂粒細砂多	良好	○小破片。
1581	〃		—	—	○口縁端つまみ上げ。口頸部内面ヘラミガキ	灰白色	〃	〃	○½残存。丹塗。
1582	甕形土器	—	—	—	○全面剥落。二重口縁の壺か。	橙色	細砂多	やや甘	○小破片。
1583	〃	19.2	—	—	○口縁部ヨコナデ。口縁端部上下に若干拡張	浅黄橙色	砂粒細砂含	良好	○¼強残存。
1584	〃	14.0	—	—	○口縁立上がり外面クシメ。口縁部ヨコナデ	灰褐色	〃	良	○½残存。
1585	〃	—	—	—	○ 〃	鈍橙色	〃	良好	○小破片。
1586	〃	—	—	—	○ 〃	灰褐色	〃	〃	○ 〃 。
1587	鉢形土器	—	—	—	○ 〃	灰黄褐色	〃	良	○ 〃 。
1588	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部内面強いナデ。	浅黄橙色	砂粒細砂含	良好	○ 〃 。
1589	〃	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面ヘラミガキ。	鈍橙色	細砂多し	良好堅	○ 〃 。
1590	高杯形土器	—	—	—	○口縁端面ハケ。体部内面篦削り後篦磨キ。	浅黄橙色	細砂かなり	良好	○ 〃 。
1591	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ナデ。上端面に穿孔	〃	精良細砂含	良	○柱状部½残存。
1592	〃	—	—	—	○裾部外面ハケ残存。穿孔数不明。	灰白色	精良・ち密	〃	○ 〃
1593	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ナデ。	浅黄橙色	精良細砂含	〃	○柱状部完存。
1594	〃	—	—	—	○内面ナデか。外面剥落。	橙色	細砂多し	良好	○柱状部½残存。
1595	〃	—	—	—	○内面ナデ。外面剥落。上端面中央に小孔。	淡橙色	〃	〃	○柱状部⅔残存。

溝－128～131（第314図）

1596	椀形土器	14.0	—	—	○口縁部外面ヨコナデ・内面ナデ。	灰白色	密	良	
1597	〃	15.5	—	—	○内面ナデ。	〃	〃	〃	
1598	〃	15.3	—	—		白灰色	〃	やや軟	
1599	〃	—	7.0	—	○底部ケズリ。	灰白色	〃	〃	
1600	〃	—	6.5	—		〃	〃	〃	
1601	〃	—	7.0	—		〃	〃	〃	
1602	〃	—	6.5	—		白灰色	〃	〃	

溝－132（第315図）

1603	椀	14.3	5.8	4.7		灰黄色	白色小砂粒	良好	
1604	〃	—	—	(2.8)		橙色	〃	〃	
1605	〃	—	6.4	(1.4)		黄灰白色	〃	〃	
1606	〃	—	5.6	(2.9)		淡緑灰色	堅緻	〃	○白磁・貫入。

包含層（第315図）

1607	高台部	—	6.8	—	○調整はナデ。	白灰色	細砂	良好	
1608	〃	—	5.8	—		灰褐色	〃	〃	

近代墓物（第317図）

1609	椀	4.7	3.2	5.8	○型紙ズリ。	淡青灰色	堅緻	良好	○秋意淡泊。

表－25　高縄手B調査区竪穴式住居一覧表

細別／番号	種類	形	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	主柱穴	柱間距離(cm) 最大	柱間距離(cm) 最小	中央穴 プラン	中央穴 幅(cm)	中央穴 深さ(cm)	焼土 焼土	焼土 壌	壁 体溝	付属施設 ベッドコウ状	付属施設 貯蔵穴	付属施設 カマド	付属施設 位置	柱穴長軸方向	時代	区	遺物
23	竪穴住居式	方形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	古墳時代前半(?)	210Q	—
24	〃	長隅方丸形	—	—	—	4	330	270	楕円	50	7	—	—	—	—	—	—	—	N-9.5°-W	古墳時代前半	〃	柱根・ガラス小玉・土師器（壺・高杯・小形甕）
25	〃	長方形	340	270	9.2	—	—	—	楕円	43×39	23	—	—	—	—	—	—	—	N-30.5°-E	〃	210Q 211Q	土師器（甕・高杯）
26	〃	長隅方丸形	434	350	15.05	3	230	225	不整円形 2	50～60	70	—	○	○	—	—	—	—	N-61°-E	〃	210Q	土師器片・鉄鏃・鉋
27	〃	〃	345	320	11.0	—	—	—	楕円	55×45	15	—	—	○	—	—	—	—	N-44°-W	〃	〃	土師器（壺・甕・高杯）、製塩土器、鉄器
28	〃	隅丸方形	383	—	—	2	250	—	—	—	—	○	—	○	—	—	—	—	N-34°-E	〃	211Q	土師器片

表－26　高縄手B調査区建物一覧表

番号	規模	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	桁行(cm)	梁間(cm)	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	検出地区	備考
11	2×2	200～240	180	460	260	11.96	N－11°－W	円形	210P・210Q	

表－26′　高縄手B調査区柱穴列一覧表

番号	区名	柱穴本数	柱間(cm)	全長(cm)	方向	柱穴掘方	時期
2	210S・211S	8	60～80	500	北西－南東	不整楕円形	古墳時代後半以後

表－27　高縄手B調査区井戸一覧表

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
40	209P	80× 75× 49	円形	なし	古墳時代初頭～前半
41	209P	155×145×155	円形	壺・甕・鉢・高杯・鉄器	古墳時代初頭
42	209P	178×132×180	楕円形	壺・甕・鉢	古墳時代初頭
43	209P	—	—	なし	
44	209P	—	—	甕	古墳時代初頭
45	209P	126×126×120	円形	壺・甕・鉢・高杯	古墳時代初頭
46	210Q	144×110×160	不整円	土師器(甕・高杯)木製品(はしご,二叉鋤,柄など)	古墳時代・前期
47	〃	120× —×245	不整円	土師器（甕・高杯など）木製品（建築材・木札）	〃
48	〃	135× 135	円	土師器（甕・高杯など）	〃
49	211Q	90× 83	不整円	土師器（甕・高杯・壺）	〃
50	211R	90× 87	〃	土師器（甕片など）・桃核	〃
51	211S	108×105×185	〃	土師器（甕）竹製品（クシ）	〃

表—28 高縄手B調査区土壙一覧表

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ(cm)	平面形	出土遺物	時期
80	211R	約300×200×25	不整形	縄文式土器片・サヌカイト片・焼土片・炭	縄文時代晩期
81	211R	約250×350×20	〃	〃	〃
82	211R	約180×80×25	〃	〃	〃
83	211R	約366×160×80	〃	縄文式土器片・サヌカイト・石鏃・焼土片・炭	〃
84	210P	180×140×50	楕円形	なし	百・古・Ⅰ
85	210P	75× 75×60	円形	壺・甕・高杯	〃
86	211S	190×150×12	不整楕円形	土器片	〃

表—29 高縄手B調査区柵列状遺構一覧表

番号	区名	柱穴本数	柱間(cm)	全長(cm)	方向	柱穴掘方	時期
1	209V	9	70～80	350	東西	不整楕円形	古墳後半～奈良時代
2	〃	25	70～90	1950	北東～南西	〃	〃

表—30 高縄手B調査区溝一覧表

番号	区名	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	時期
133	209P・210P	250	95	U字形	壺・甕，石鏃，石錐	百・前・Ⅱ
134	〃	116	26	〃	土器片，サヌカイト片	百・前・Ⅱ？
135	210R～212T	300	50	レンズ状	〃	百・中・
136	210V・211U	460	100	〃	〃	〃
137	209P・210P	430	98	字形	壺，甕，鉢，台付鉢，高杯，石鏃，石槍？，撥形世器，石錐，石鍬，打製石包丁，石鍬，砥石，敲石	百・後・Ⅰ
138	210P・209Q	142	38	U字形	土器片，石鏃，サヌカイト	百・後・
139						
140	209S・210S	20～40	5	レンズ状	土器片	百・後
141	210T	40～60	10	〃	〃	〃
142	210S・T	30～40	5	〃	〃	〃
143	210S・T，211T・U	50～80	50	U字形	〃	〃
144	210W～X	90	45	〃	〃	〃
145	210V～212W	90	85	〃	〃	〃
146	212W	80	20	レンズ状	〃	〃
147	210V～212W	100	50	U字形	〃	〃
148	210V～212X	80	70	〃	〃	〃
149	210V～212X	100～135	50～60	〃	〃	〃
150	212W	70	10	レンズ状	〃	〃
151	210V～212X	70	40	U字形	〃	〃
152	210V～212X	65	40	〃	〃	〃
153	211U～212W	70	40	〃	〃	〃
154	210・211W	38～94	5～10	レンズ状	壺・高杯	百・後・Ⅱ
155	〃	40～50	5	〃	なし	百・後

番号	区名	幅 (cm)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	時期
156	210W・X,211W	30～90	5	レンズ状	なし	百・後
157	210・211X	30～40	4	〃	なし	〃
158	209P～211P	260	106	U字形	壺,甕,鉢,坩,手捏ね土器,高杯,鼓形器台,小型器台,土錘,鉄鏃,鉄片	百・古・Ⅰ
159	209Q～211P	350	100	〃		百・古・Ⅰ?
160	210P～211R	98	80	〃	土器片	百・古・Ⅰ
161	209N	330	45	レンズ状	なし	古墳時代前半
162	209O	375	28	〃	〃	〃
163	209N	170	17	〃	須恵器	古墳時代後期
164	209R～211S	150	100	U・逆台形	堆,壺,甕,鉢,高杯,土錘,鉄器	百・古・Ⅲ
165	209R～210S	160	55	〃		古墳時代前半
166	〃	40	15	U字形	須恵器	古墳時代後半
167	210S	30～40	5	レンズ状	土器片	百・古・Ⅰ
168	210W	15～20	5	U字形	なし	百・古
169	211W・X	30～45	5～10	レンズ状	土器片	〃
170	210W,211W・X	45～70	5～10	〃	〃	〃
171	210U	25～30	5	〃		〃

表－31　高縄手B調査区土製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
424	20	土錘	210P	溝－158	土	39.0	27.0	－	－	破片
430	21	〃	210R	溝－164	〃	62.5	26.5	－	45.17	
〃	22	〃	〃	〃	〃	55.0	25.0	－	27.7	
438	23	〃	210Q	包含層	〃	78.0	37.0	－	123.33	
442	24	〃	210・11W	灰色粘土層	〃	35.3	11.3	－	3.55	
442	25	〃	〃	〃	〃	23.15	9.6	－	1.39	

表－32　高縄手B調査区玉類一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
391	7	小玉	210Q	竪穴式住居－24	ガラス	－	4.7	3.55	0.10	
438	8	管玉	〃	包含層	碧玉?	18.0	5.0	－	0.48	
441	9	管玉	210V	柵列状遺構－1	碧玉	16.5	5.5	－	0.76	

表－33　高縄手B調査区石器・石製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
325	125	石鏃	212W		サヌカイト	24.20	12.85	3.50	0.70	Ⅱ・完
328	126	〃	211R	土壙－81	〃	18.70	16.25	3.70	0.71	〃
337	127	〃	210Q 東微高地高位部	土器溜り－13	〃	9.25	12.40	2.25	0.15	(Ⅰ)欠

百間川沢田遺跡 2

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
337	128	石鏃	210Q 東微高地高位部	土器溜り－13	サヌカイト	13.60	11.50	2.55	0.34	(Ⅰ)完
〃	129	〃	210R	〃	〃	11.95	14.35	1.90	0.24	完
〃	130	〃	210Q 東微高地高位部	〃	〃	13.50	14.10	2.90	0.40	(Ⅰ)完
〃	131	〃	〃	〃	〃	13.95	13.85	3.15	0.54	(Ⅰ)欠
〃	132	〃	210Q 東	〃	〃	21.55	13.20	3.65	0.80	(Ⅰ)
〃	133	〃	〃	〃	〃	19.70	15.35	2.10	0.68	(Ⅰ)欠
〃	134	〃	210Q 東微高地高位部	〃	〃	25.00	14.05	3.55	1.18	(Ⅰ)完
〃	135	〃	〃	〃	〃	14.55	13.05	2.25	0.46	(Ⅱ)欠
〃	136	〃	〃	〃	〃	13.65	11.80	2.10	0.24	(Ⅱ)ほぼ完
〃	137	〃	210R	〃	〃	17.80	10.80	2.30	0.33	(Ⅱ)完
〃	138	〃	〃	〃	〃	12.75	15.90	2.40	0.36	(Ⅱ)欠
〃	139	石鏃未製品	210Q 東微高地高位部	〃	〃	15.85	8.05	2.05	0.30	
〃	140	〃	〃	〃	〃	18.20	15.10	3.15	0.67	
〃	141	石鏃	〃	〃	〃	18.60	12.20	2.00	0.35	(一)欠
〃	142	石鏃未製品	〃	〃	〃	35.00	19.95	4.05	2.51	
〃	143	〃	〃	〃	〃	32.85	18.15	4.25	1.70	
〃	144	石錐	〃	〃	〃	24.10	6.95	4.70	0.66	石端磨滅
〃	145	〃	〃	〃	〃	21.20	10.65	5.40	1.00	欠
〃	146	〃	210Q 東	〃	〃	26.60	17.65	5.20	2.06	〃
〃	147	楔形石器	210Q 東微高地高位部	〃	〃	28.40	33.70	12.00	12.72	
〃	148	スクレイパー	210Q 東	〃	〃	57.35	28.20	5.85	9.96	
〃	149	〃	210Q R	〃	〃	60.80	40.00	5.05	13.91	
〃	150	再調整剥片	210Q 東	〃	〃	20.25	14.75	4.25	1.16	
〃	151	〃	210Q 東微高地高位部	〃	〃	32.45	24.50	3.95	3.16	
338	152	石鏃	〃	〃	〃	14.20	7.50	1.95	0.18	(Ⅰ)完
〃	153	〃	〃	〃	〃	14.15	8.90	3.10	0.34	(Ⅰ)欠
〃	154	〃	210Q 東	〃	〃	10.75	9.70	2.15	0.17	(Ⅰ)ほぼ完
〃	155	〃	210R 東辺	〃	〃	13.70	11.30	19.95	0.17	(Ⅰ)完
〃	156	〃	〃	〃	〃	10.65	13.05	1.80	0.23	〃
〃	157	〃	210Q 東	〃	〃	15.35	10.05	1.45	0.24	(Ⅰ)欠
〃	158	〃	〃	〃	〃	13.35	14.85	3.00	0.43	(Ⅰ)完
〃	159	〃	210Q 東微高地高位部	〃	〃	16.55	13.50	2.35	0.35	〃
〃	160	〃	210R 東辺 S×10南部分	〃	〃	16.40	13.25	2.85	0.49	(Ⅰ)ほぼ完
〃	161	〃	210Q 東	〃	〃	13.20	13.00	2.60	0.47	(Ⅰ)欠
〃	162	〃	210Q 東微高地高位部	〃	〃	16.80	15.70	2.95	0.47	〃
〃	163	〃	210R 東辺	〃	〃	17.00	15.00	3.10	0.73	(Ⅰ)完
〃	164	〃	210Q 東	〃	〃	16.30	16.80	3.85	0.84	(Ⅰ)ほぼ完
〃	165	〃	〃	〃	〃	16.80	21.05	4.30	1.44	(Ⅰ)欠
〃	166	〃	〃	〃	〃	12.50	8.45	2.00	0.18	(Ⅱ)欠
〃	167	〃	210Q 東微高地高位部	〃	〃	14.40	9.80	2.65	0.27	(Ⅱ)完
〃	168	〃	〃	〃	〃	15.35	9.10	2.70	0.30	〃
〃	169	〃	210Q 東	〃	〃	14.35	11.10	2.30	0.26	〃
〃	170	〃	210Q 東南斜面	〃	〃	13.00	13.55	2.70	0.31	(Ⅱ)欠

百間川沢田遺跡 2

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
338	171	石鏃	210Q東	土器溜り−13	サヌカイト	18.85	14.40	3.10	0.54	(Ⅱ)完
〃	172	〃	210Q東 微高地高位部	〃	〃	18.75	12.30	2.90	0.42	(Ⅱ)欠
〃	173	〃	210Q東	〃	〃	16.80	15.40	3.25	0.50	(Ⅱ)ほぼ完
〃	174	〃	210R東辺 SX10南部分	〃	〃	12.40	16.70	2.35	0.48	(Ⅱ)欠
〃	175	〃	210Q東	〃	〃	14.90	16.95	2.45	0.69	(Ⅱ)完
〃	176	〃	210Q東 微高地高位部	〃	〃	11.85	10.20	2.40	0.23	〃
〃	177	〃	210Q東南斜面	〃	〃	17.20	13.05	2.65	0.57	〃
〃	178	〃	210Q東 微高地高位部	〃	〃	22.90	11.70	2.50	0.73	(Ⅲ)ほぼ完
〃	179	〃	210Q東	〃	〃	9.80	9.05	2.35	0.21	(−)欠
〃	180	石鏃未製品	〃	〃	〃	16.75	14.80	3.15	0.72	
〃	181	石鏃	〃	〃	〃	17.20	8.05	2.15	0.31	(−)欠
〃	182	〃	210R東辺	〃	〃	16.35	14.35	2.45	0.41	〃
〃	183	石鏃未製品	210Q東	〃	〃	17.55	15.20	3.50	0.90	
〃	184	〃	210東南斜面	〃	〃	16.40	8.40	3.45	0.50	
〃	185	〃	210Q東	〃	〃	13.85	9.90	2.50	0.36	
〃	186	石錐	210R東辺	〃	〃	16.00	4.00	3.55	0.22	先端部のみ
〃	187	〃	210Q	〃	〃	17.55	5.20	4.15	0.34	
〃	188	〃	210R東辺	〃	〃	12.15	6.35	2.35	0.20	先端部のみ
〃	189	〃	210Q東	〃	〃	21.15	9.25	3.35	0.71	
〃	190	〃	210R東辺	〃	〃	36.15	8.50	7.60	1.86	完
〃	191	〃	210東南斜面	〃	〃	29.15	25.45	5.40	3.01	欠
〃	192	〃	210R	〃	〃	18.50	21.80	5.00	1.99	〃
〃	193	再調整剥片	210Q東	〃	〃	10.90	15.25	2.60	0.37	
〃	194	R・F	〃	〃	〃	21.30	22.90	6.45	4.11	
〃	195	楔形石器	210R	〃	〃	23.45	26.75	7.50	8.09	
〃	196	〃	210Q東 微高地高位部	〃	〃	22.00	20.70	6.35	2.90	
〃	197	再調整剥片	〃	〃	〃	30.00	35.05	4.40	4.66	
〃	198	〃	〃	〃	〃	29.45	18.60	3.85	2.25	
〃	199	楔形石器	〃	〃	〃	31.70	13.55	6.00	2.75	
〃	200	〃	210R	〃	〃	39.85	40.55	13.80	20.63	
〃	201	スクレイパー	210Q東 微高地高位部	〃	〃	29.85	43.20	4.80	5.83	
〃	202	〃	210R東辺	〃	〃	60.30	19.35	9.45	11.24	欠
〃	203	〃	210Q東	〃	〃	45.75	18.00	8.55	8.13	
〃	204	〃	210R東辺	〃	〃	42.40	37.70	12.25	19.16	
〃	205	〃	210Q東 微高地高位部	〃	〃	36.20	52.70	14.95	27.91	
339	206	石〃鍬	〃	〃	〃	52.25	50.80	26.60	52.87	欠
〃	207	打製石庖丁	210R	〃	〃	54.30	48.45	11.70	36.16	〃
〃	208	石皿	210Q東	〃	〃	67.85	93.90	21.60	212.64	〃
〃	209	磨石	210R	〃	〃	84.45	68.20	54.70	460	
343	210	石鏃	210Q東	土器溜り−14	〃	13.00	10.85	2.30	0.27	(Ⅰ)完
〃	211	〃	〃	〃	〃	11.30	12.55	2.75	0.44	(Ⅰ)欠
〃	212	〃	〃	〃	〃	15.10	13.45	3.10	0.30	(Ⅰ)完
〃	213	〃	210R	〃	〃	15.25	18.25	2.35	0.67	(Ⅰ)欠

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
343	214	石鏃	210Q	土器溜り－14	サヌカイト	17.30	12.90	3.75	0.55	(Ⅱ)完
〃	215	〃	210Q 東	〃	〃	14.90	14.10	3.20	0.55	〃
〃	216	〃	210Q 東	〃	〃	15.00	11.00	2.10	0.35	(Ⅱ)ほぼ完
〃	217	〃	〃	〃	〃	8.25	7.44	2.15	0.06	(—)欠
〃	218	石鏃未製品	210Q	〃	〃	24.75	15.80	3.85	1.42	
〃	219	〃	210R	〃	〃	32.50	15.05	7.10	2.82	
〃	220	石錘	210Q 東	〃	〃	17.45	8.60	4.20	0.57	
〃	221	〃	〃	〃	〃	23.00	9.25	2.80	0.45	
〃	222	〃	〃	〃	〃	24.55	9.70	5.00	1.10	欠
〃	223	〃	210R トレンチ内側溝	〃	〃	34.67	14.20	5.65	2.12	完
〃	224	楔形石器	210R	〃	〃	35.25	39.70	79.95	11.74	
〃	225	スクレイパー	210Q 東	〃	〃	43.40	36.35	54.40	8.76	
〃	226	剥片	210R	〃	〃	82.00	37.85	8.70	17.71	
〃	227	R・F	〃	〃	〃	44.70	23.50	4.70	4.05	
〃	228	U・F	〃	〃	〃	66.30	26.50	10.00	20.55	
〃	229	スクレイパー	〃	〃	〃	83.40	28.70	8.10	21.79	
〃	230	石鍬	210Q	〃	〃	100.50	46.70	13.60	75.85	
345	231	石鏃	210R	土器溜り14下層	〃	12.00	12.10	2.60	0.26	(Ⅱ)欠
〃	232	〃	〃	〃	〃	14.40	11.70	2.40	0.34	(—)欠
〃	233	〃	〃	〃	〃	27.20	13.30	4.00	1.10	
〃	234	スクレイパー	210	〃	〃	67.65	61.75	7.05	67.10	
〃	235	楔形剥片	〃	〃	〃	91.30	67.75	11.45	32.34	
346	236	石鏃	210Q 東 微高地高位部	土器溜り13上面	〃	9.20	10.09	1.55	0.14	(Ⅰ)完
〃	237	〃	〃	〃	〃	9.90	10.00	2.15	0.20	(Ⅰ)ほぼ完
〃	238	〃	〃	〃	〃	13.55	9.20	2.30	0.16	(Ⅰ)完
〃	239	〃	〃	〃	〃	14.20	10.25	2.10	0.27	〃
〃	240	〃	〃	〃	〃	17.10	14.90	2.50	0.50	〃
〃	241	〃	210R 西辺	〃	〃	13.30	11.35	2.75	0.41	(Ⅰ)欠
〃	242	〃	210Q 東 微高地高位部	〃	〃	11.95	13.80	2.50	0.55	〃
〃	243	〃	210Q 東	〃	〃	11.65	17.15	3.70	0.75	〃
〃	244	〃	210Q 東～210R	〃	〃	14.35	8.50	3.00	0.32	(Ⅱ)完
〃	245	〃	210Q 東	〃	〃	16.20	10.60	2.50	0.25	〃
〃	246	〃	210R	〃	〃	12.65	12.50	4.70	0.26	(Ⅱ)ほぼ完
〃	247	〃	210Q 東	〃	〃	11.35	10.10	2.45	0.24	(Ⅱ)欠
〃	248	〃	〃	〃	〃	9.25	13.85	2.30	0.24	〃
〃	249	〃	〃	〃	〃	9.75	13.20	2.00	0.20	〃
〃	250	〃	〃	〃	〃	16.00	14.45	3.25	0.51	(Ⅱ)完
〃	251	〃	〃	〃	〃	18.25	10.25	2.75	0.36	〃
〃	252	〃	〃	〃	〃	(16.45)	26.00	25.55	0.41	(Ⅱ)欠
〃	253	〃	〃	〃	〃	11.45	14.35	3.00	0.45	〃
〃	254	〃	〃	〃	〃	21.50	14.45	3.45	0.64	(Ⅱ)完
〃	255	〃	〃	〃	〃	24.60	(14.00)	28.00	0.69	(Ⅱ)欠
〃	256	〃	〃	〃	〃	20.00	16.25	3.95	0.62	(Ⅱ)ほぼ完

百間川沢田遺跡 2

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
346	257	石鏃	210Q 東	土器溜り13上面	サヌカイト	19.20	18.80	3.20	0.84	(Ⅱ)完
〃	258	〃	〃	〃	〃	17.25	20.40	3.20	0.81	(Ⅱ)欠
〃	259	〃	210Q 東～210R	〃	〃	23.35	(12.90)	3.60	(0.93)	〃
〃	260	〃	210Q 東 微高地高位部	〃	〃	23.20	17.20	4.55	0.95	(Ⅱ)完
〃	261	〃	210Q 東	〃	〃	15.95	10.15	3.15	0.33	(Ⅲ)完
〃	262	〃	210R	〃	〃	23.75	13.85	4.00	0.97	〃
〃	263	〃	210Q 東	〃	〃	38.55	11.45	3.35	1.62	(Ⅵ)完
〃	264	石鏃未製品	210Q 東 微高地高位部	〃	〃	9.75	8.00	1.30	0.09	
〃	265	〃	210Q 東	〃	〃	21.15	9.25	3.35	0.71	
〃	266	石鏃	210Q 東 高地高位部	〃	〃	14.95	13.90	1.95	0.30	(一)欠
〃	267	石鏃未製品	210Q 東	〃	〃	17.25	14.20	3.90	0.93	
〃	268	〃	〃	〃	〃	16.45	14.55	2.15	0.46	
〃	269	〃	〃	〃	〃	13.85	16.35	5.45	0.99	
〃	270	〃	210Q 東 高位部肩	〃	〃	21.25	18.70	3.60	1.44	
〃	271	石錐	210Q 東～210R	〃	〃	(18.65)	(7.95)	3.35	(0.46)	
〃	272	〃	210R	〃	〃	28.15	8.00	4.55	0.94	欠
〃	273	〃	210Q 東	〃	〃	23.85	14.00	5.25	1.17	
〃	274	〃	〃	〃	〃	35.35	10.65	3.65	1.07	(a)完
〃	275	〃	〃	〃	〃	(36.90)	7.85	5.00	1.27	(b)欠
〃	276	石鏃未製品	〃	〃	〃	28.30	8.55	5.10	1.17	
〃	277	石錐	〃	〃	〃	16.30	8.15	2.95	0.37	
〃	278	〃	〃	〃	〃	14.65	6.30	3.70	0.36	
〃	279	スクレイパー	210R 西辺	〃	〃	21.45	14.15	2.10	0.53	
〃	280	〃	210Q 東	〃	〃	35.65	44.50	15.25	29.90	
〃	281	〃	〃	〃	〃	20.25	28.95	5.50	3.50	
〃	282	打製石庖丁	210Q	〃	〃	35.10	31.60	8.45	10.09	
〃	283	スクレイパー	210Q 東	〃	〃	39.20	27.15	6.20	6.08	
〃	284	〃	210R	〃	〃	31.50	17.45	10.85	5.62	
〃	285	楔形石器	210Q (210Pの一部を含む)	〃	〃	39.60	27.80	6.10	8.21	
〃	286	〃	210Q (210Pの一部を含む)	〃	〃	46.40	22.90	6.50	7.22	
〃	287	〃	210Q 東	〃	〃	31.00	24.30	5.70	4.80	
〃	288	〃	210Q 東 高地高位部	〃	〃	28.35	21.45	5.35	3.44	
〃	289	〃	〃	〃	〃	12.75	14.75	7.45	2.24	
〃	290	〃	210R	〃	〃	34.20	11.70	4.80	1.83	
〃	291	〃	〃	〃	〃	31.65	16.80	5.00	1.26	
〃	292	石鏃	210Q 西	〃	〃	29.10	62.45	18.45	29.54	先端部
〃	293	再調整剝片	210R	〃	〃	23.65	36.70	3.15	2.37	
〃	294	〃	210Q 東 高地高位部	〃	〃	16.75	20.30	2.20	0.67	
〃	295	〃	210R 西辺	〃	〃	21.45	14.15	2.10	0.53	
〃	296	〃	210Q 東	〃	〃	16.30	11.10	2.10	0.44	
347	297	石鏃	210Q	縄文時代晩期包含層	〃	(5.95)	8.20	1.65	(0.09)	(Ⅱ)欠
〃	298	〃	210東	〃	〃	0.85	10.55	2.85	0.25	(Ⅰ)ほぼ完
〃	299	〃	210Q 東	〃	〃	14.95	11.45	2.60	0.29	(Ⅱ)完

百間川沢田遺跡 2

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
347	300	石鏃	210Q 西	縄文時代晩期包含層	サヌカイト	21.30	17.30	2.70	0.87	(I)欠
〃	301	石鏃未製品	210Q 東～210R	〃	〃	22.45	15.65	2.45	0.68	
〃	302	スクレイパー	〃	〃	〃	39.30	26.45	7.05	5.61	
〃	303	R・F	210Q 西	〃	〃	22.70	30.90	4.30	3.24	
〃	304	〃	210Q 東 微高地高位部	〃	〃	25.25	34.20	3.85	3.78	
〃	305	〃	210Q 西	〃	〃	42.00	69.80	59.90	18.35	
〃	306	〃	210R	〃	〃	11.70	17.65	4.10	0.83	
〃	307	楔形石器	210Q 東	〃	〃	20.60	11.00	6.00	1.66	
〃	308	R・F	〃	〃	〃	20.90	29.30	6.95	4.24	
〃	309	石鏃	〃	〃	〃	16.20	14.75	2.80	0.47	(II)完
〃	310	石鏃未製品	〃	〃	〃	16.30	9.65	3.50	0.47	
〃	311	石鏃	210R	〃	〃	13.35	16.05	2.90	0.51	(I)欠
〃	312	〃	210Q 北半	〃	〃	22.55	17.20	4.30	1.46	完
〃	313	〃	210Q 東	〃	〃	17.25	13.60	3.00	0.42	
〃	314	〃	〃	〃	〃	21.80	10.30	3.65	0.46	
〃	315	〃	〃	〃	〃	26.60	12.35	5.15	1.60	欠
〃	316	〃	〃	〃	〃	24.00	19.95	6.20	2.22	〃
〃	317	〃	〃	〃	〃	34.20	13.00	4.45	1.49	
〃	318	楔形石器	〃	〃	〃	21.95	23.10	6.90	0.57	
〃	319	〃	〃	〃	〃	23.05	19.55	7.65	3.01	
〃	320	〃	〃	〃	〃	31.55	13.70	9.00	2.26	
〃	321	〃	〃	〃	〃	26.20	23.10	6.95	4.07	
〃	322	のみ状石器	210Q 北半	〃	〃	39.70	19.80	5.00	4.51	先端欠損あり
〃	323	スクレイパー	210Q 西	〃	〃	41.15	30.00	5.70	6.94	
〃	324	〃	〃	〃	〃	30.45	28.60	6.50	6.13	
348	325	磨製石庖丁	210Q	弥生時代前期包含層	〃	(34.45)	(29.10)	(4.65)	(5.04)	欠
〃	326	〃	〃	〃						
〃	327	石皿	210Q 東～210R	〃	サヌカイト	46.95	66.70	17.60	71.44	
〃	328	敲石	210R トレンチ	〃		78.70	42.10	12.20	47.97	欠
〃	329	偏平片刃石斧		〃						〃
349	330	石鏃	210Q	古墳時代以降混入遺物	サヌカイト	21.00	6.75	3.50	0.46	(V)
〃	331	〃	〃	〃	〃	10.85	5.25	2.10	0.24	(I)欠
〃	332	〃	210R	〃	〃	16.05	8.50	2.40	0.32	(—)欠
〃	333	〃	〃	〃	〃	14.05	13.30	2.25	0.30	(II)欠
〃	334	〃	〃	〃	〃	18.25	15.95	3.55	0.62	〃
〃	335	〃	210Q	〃	〃	13.65	19.45	3.45	0.77	
〃	336	楔形石器	〃	〃	〃	15.20	31.50	70.50	3.70	
〃	337	砥石	210R	〃		41.95	63.45	54.00	153.34	
350	338	スクレイパー	211.5U 付近	落ち込み(焼土面)	サヌカイト	37.0	52.0	7.0	11.70	
〃	339	石錐	〃	〃	〃	24.10	8.05	4.20	0.88	先欠
351	340	石鏃	212V	淡茶黄褐色土	〃	26.0	17.5	4.5	1.65	II. ほぼ完
〃	341	〃	〃	〃	〃	19.0	13.0	3.0	0.59	I. 欠
〃	342	石鏃未製品	〃	〃	〃	41.5	16.0	6.0	4.43	

百間川沢田遺跡 2

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
351	343	楔形石器	211.5V	(水田下層)淡茶黄褐色茶泥	サヌカイト	29.80	29.80	9.95	7.83	
〃	344	〃	〃	淡茶黄褐色粘質土下	〃	32.50	18.85	8.25	5.40	
〃	345	スクレイパー	212V	淡茶黄褐色土	〃	36.5	28.0	10.0	11.03	
〃	346	〃	〃	〃	〃	31.0	20.0	6.0	6.04	
〃	347	〃	〃	〃	〃	37.0	32.0	8.0	11.14	
〃	348	R - F	〃	柵列状遺構内	〃	18.0	15.0	1.5	0.52	
〃	349	スクレイパー	〃	淡茶黄褐色土	〃	27.35	29.70	8.30	5.67	
〃	350	〃	〃	〃	〃	23.50	31.80	6.10	3.92	
〃	351	〃	211.5V	最下層縄文包含層	〃		36.5	6.0	9.67	
〃	352	〃	212V	淡茶黄褐色土	〃	32.0	39.0	11.0	16.69	
〃	353	石小刀状石器	〃	〃	〃	58.90	20.80	11.0	13.34	
〃	354	石鍬	211.5V	微高地上包含層—15(黒茶褐色泥砂)	〃	40.90	43.65	16.35	26.60	上半折損
〃	355	石斧もしくは・石	211.5ライン(T～V)	トレンチ内縄文包含層			45.45	36.55	140.04	欠
〃	356	石錘	212V	淡茶黄褐色土		59.80	89.75	18.00	155.5	
353	357	石鏃	210P	溝—133	サヌカイト	19.2	13.7	3.1	0.55	V.ほぼ完
〃	358	〃	〃	〃	〃	25.2	13.8	3.1	0.97	Ⅱ.ほぼ完
〃	359	〃	〃	〃	〃	22.8	15.3	3.7	1.31	Ⅱ.欠
〃	360	〃	209P	〃	〃	15.65	16.50	2.80	0.74	1.欠 Ⅰ
〃	361	〃	〃	〃	〃	14.45	11.70	3.45	0.51	〃
〃	362	〃	〃	〃	〃	25.10	16.95	6.65	2.21	Ⅱ.欠
〃	363	再調整剝片	〃	〃	〃	16.60	26.50	3.60	1.97	
〃	364	〃	210P	〃	〃	19.80	26.00	4.10	2.17	
〃	365	石錐	209P	〃	〃	33.15	15.40	6.40	2.32	先欠
354	366	石鏃	〃	溝—134	〃	13.90	12.45	2.75	0.48	Ⅱ.ほぼ完
〃	367	〃	〃	〃	〃	22.45	13.45	2.85	0.61	Ⅱ.完
〃	368	〃	〃	〃	〃	26.35	23.35	6.30	2.61	Ⅰ.完
〃	369	〃	〃	〃	〃	29.50	20.50	6.35	2.78	Ⅱ.ほぼ完
〃	370	楔形石器	〃	〃	〃	20.25	24.55	4.80	2.82	
〃	371	石錐	〃	〃	〃	30.15	11.20	3.10	1.59	先欠
358	372	石鏃	210S	溝—135	〃	24.40	20.30	4.80	2.14	Ⅱ.基部再調整
〃	373	〃	〃	〃	〃	21.45	15.40	3.20	0.74	Ⅱ.ほぼ完
〃	374	〃	〃	〃	〃	13.10	15.40	3.30	0.44	Ⅱ.完
〃	375	〃	〃	〃	〃	16.50	13.90	2.90	0.50	Ⅱ.ほぼ完
〃	376	〃	〃	〃	〃	19.80	14.10	3.00	0.72	Ⅱ.欠
〃	377	〃	〃	〃	〃	11.70	9.50	1.80	0.19	Ⅱ.完
〃	378	〃	〃	〃	〃	15.95	16.00	2.70	0.51	〃
〃	379	〃	〃	〃	〃	17.00	14.65	2.50	0.65	Ⅰ.完
〃	380	〃	〃	〃	〃	17.25	14.10	3.40	0.57	Ⅱ.完
〃	381	〃	〃	〃	〃	23.65	4.30	3.85	0.80	V.欠
〃	382	〃	〃	〃	〃	22.40	15.10	3.50	0.93	〃
〃	383	〃	〃	〃	〃	13.90	9.30	2.10	0.26	Ⅰ.欠
〃	384	〃	〃	〃	〃	14.00	12.00	2.40	0.32	Ⅰ.完
〃	385	〃	〃	〃	〃	16.40	15.00	3.15	0.80	Ⅰ.欠

百間川沢田遺跡 2

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
357	386	石鏃	210S	溝－135	サヌカイト	15.10	12.35	2.70	0.33	Ⅱ．完
〃	387	〃	〃	〃	〃	17.00	14.65	2.50	0.65	Ⅰ．完
〃	388	楔形石器	〃	〃	〃	20.45	19.30	6.40	2.41	
〃	389	石鏃	〃	〃	〃	13.80	9.35	2.70	0.32	Ⅰ．完
〃	390	〃	〃	〃	〃	20.45	9.45	3.90	0.86	Ⅵ．欠
〃	391	〃	〃	〃	〃	25.90	10.65	3.65	0.86	Ⅵ．ほぼ完
〃	392	〃	〃	〃	〃	26.45	13.70	2.85	1.03	Ⅵ．完
〃	393	〃	〃	〃	〃	25.70	13.70	3.10	1.76	〃
〃	394	〃	〃	〃	〃	28.20	10.65	5.35	1.54	Ⅵ．欠
〃	395	石錐	〃	〃	〃	34.00	10.00	6.90	2.00	
〃	396	〃	〃	〃	〃	27.50	6.75	6.75	0.64	
〃	397	〃	〃	〃	〃	32.40	8.75	4.35	1.13	
〃	398	〃	〃	〃	〃	29.40	9.15	4.00	1.10	
〃	399	〃	〃	〃	〃	30.90	16.75	3.60	1.65	先欠
〃	400	〃	〃	〃	〃	30.00	18.90	4.25	1.81	
〃	401			溝－136						
〃	402			〃						
365	403	石鏃	210P	溝－138	サヌカイト	25.7	19.7	3.4	0.91	Ⅱ．ほぼ完
〃	404	〃	209P	〃	〃	26.15	19.75	4.25	1.44	Ⅱ．完
〃	405	〃	210P	〃	〃	24.0	15.2	2.8	0.70	Ⅱ．ほぼ完
〃	406	〃	209P	〃	〃	24.30	18.30	3.95	1.27	Ⅱ．完
〃	407	〃	〃	〃	〃	17.65	13.85	3.10	0.57	〃
〃	408	石鏃未製品	〃	〃	〃	16.25	11.70	3.40	0.45	
〃	409	石鏃	〃	〃	〃	19.75	12.55	3.05	0.71	Ⅱ．完
〃	410	〃	210P	〃	〃	18.3	14.9	3.8	0.66	Ⅱ．ほぼ完
〃	411	〃	209P	〃	〃	18.30	16.65	3.40	0.74	Ⅱ．完
〃	412	〃	〃	〃	〃	19.35	15.10	2.25	0.47	Ⅱ．ほぼ完
〃	413	〃	〃	〃	〃	21.85	16.10	2.65	0.54	〃
〃	414	〃	〃	〃	〃	21.20	15.55	2.65	0.55	Ⅱ．欠
〃	415	〃	〃	〃	〃	18.75	16.60	3.15	0.74	〃
〃	416	〃	〃	〃	〃	24.05	15.00	3.10	0.75	〃
〃	417	〃	〃	〃	〃	18.75	13.55	3.55	0.55	Ⅱ．完
〃	418	〃	〃	〃	〃	22.40	17.55	3.45	1.14	Ⅱ．欠
〃	419	〃	〃	〃	〃	17.05	14.80	2.50	0.63	〃
〃	420	〃	210P	〃	〃	18.1	14.8	2.9	0.55	Ⅰ．完
〃	421	〃	209P	〃	〃	24.35	15.70	3.80	1.21	Ⅰ．欠
〃	422	〃	210P	〃	〃	33.2	21.4	7.9	4.13	Ⅰ．完
〃	423	〃	209P	〃	〃	14.10	19.55	3.25	0.81	Ⅰ．欠
〃	424	〃	〃	〃	〃	17.05	17.40	2.85	0.56	Ⅱ．欠
〃	425	〃	〃	〃	〃	14.25	14.00	2.65	0.44	Ⅰ．欠
〃	426	〃	〃	〃	〃	21.25	14.25	2.70	0.58	Ⅱ．欠
〃	427	〃	〃	〃	〃	24.45	15.90	3.30	1.04	(－)欠
〃	428	〃	〃	〃	〃	25.90	14.80	2.50	0.98	〃

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
365	429	石槍	209P	溝一138	サヌカイト	22.20	13.40	8.05	2.55	
〃	430	楔形石器	〃	〃	〃	26.00	26.40	8.00	5.19	
〃	431	石鏃未製品	〃	〃	〃	29.85	13.70	3.60	1.74	
〃	432	スクレイパー	〃	〃	〃	29.70	24.20	7.35	6.48	
〃	433	R・F	〃	〃	〃	23.60	15.00	3.40	1.41	
〃	434	〃	〃	〃	〃	26.05	18.95	5.25	3.28	
〃	435	〃	〃	〃	〃	3.10	18.60	4.80	2.64	
〃	436	石錐	〃	〃	〃	35.65	22.80	4.55	1.94	
〃	437	楔形石器	〃	〃	〃	22.50	20.40	8.00	5.19	
〃	438	〃	〃	〃	〃	33.90	31.80	10.20	9.24	
〃	439	スクレイパー	〃	〃	〃	31.25	28.30	5.50	5.74	
〃	440	再調整剥片	〃	〃	〃	33.35	9.20	5.25	0.92	
〃	441	スクレイパー	211P	〃	〃	70 0	48.0	7.2	9.10	
〃	442	再調整剥片	209P	〃	〃	24.35	28.10	6.10	4.45	
〃	443	打製石庖丁	〃	〃	〃	56.30	88.65	8.00	36.74	
366	444	不明石器	〃	〃	〃	95.80	62.50	29.40	156.07	
〃	445	石鍬	〃	〃	〃	87.05	45.05	14.50	74.17	
〃	446	砥石	〃	〃		59.20	57.05	13.55	72.29	
〃	447	・石	〃	〃		60.65	38.85	20.50	71.71	
376	448	石鏃	211V・W		サヌカイト	19.5	12.5	4.0	0.80	Ⅱ. 欠
〃	449	〃	210.211U・V		〃	24.0	13.5	3.0	0.83	〃
〃	450	〃	211U・V		〃	26.0	20.0	5.0	1.85	Ⅱ. ほぼ完
〃	451	スクレイパー	212W		〃	23.0	55.0	7.0	7.02	
387	452	石鏃	209P		〃	18.45	16.25	2.15	0.57	(Ⅰ)完
〃	453	〃	211P		〃	19.6	19.5	3.5	0.87	(Ⅰ)ほぼ完
〃	454	〃	209P 南北手土除去		〃	19.65	16.25	3.70	0.92	(Ⅰ)欠
〃	455	〃	209P		〃	20.60	10.60	2.55	0.70	〃
〃	456	〃	〃		〃	14.55	1.10	3.10	0.58	〃
〃	457	〃	〃		〃	15.35	12.75	2.60	0.43	(Ⅰ)ほぼ完
〃	458	〃	〃		〃	19.40	13.25	3.10	0.71	〃
〃	459	〃	210P		〃	19.3	16.3	3.1	0.81	(Ⅱ)ほぼ完
〃	460	〃	209P		〃	18.35	10.50	2.55	0.40	(Ⅰ)完
〃	461	〃	210P		〃	20.3	16.4	2.8	0.88	〃
〃	462	〃	209P		〃	22.50	14.90	3.10	0.90	(Ⅱ)完
〃	463	〃	〃		〃	17.05	17.75	2.70	0.45	〃
〃	464	〃	〃		〃	14.90	14.85	2.60	0.36	(Ⅱ)ほぼ完
〃	465	〃	210P		〃	24.2	14.5	3.6	1.11	(Ⅱ)完
〃	466	〃	〃		〃	20.75	13.70	2.95	0.77	〃
〃	467	〃	209P		〃	19.40	12.75	3.05	0.71	(Ⅱ)欠
〃	468	〃	〃		〃	19.40	14.45	3.20	0.63	(Ⅱ)完
〃	469	〃	〃		〃	17.90	14.50	2.80	0.63	〃
〃	470	〃	210P		〃	21.2	13.7	2.8	0.70	(Ⅱ)ほぼ完
〃	471	〃	〃		〃	13.8	14.6	2.5	0.38	(Ⅱ)欠

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
387	472	石鏃	210P		サヌカイト	25.00	14.00	4.30	1.14	(Ⅱ)欠
〃	473	〃	〃		〃	7.2	12.1	2.5	0.15	〃
〃	474	〃	〃		〃	17.8	15.5	3.1	0.70	〃
〃	475	〃	〃		〃	15.8	14.2	2.9	0.46	〃
〃	476	〃	209P		〃	29.05	16.90	2.25	1.00	(Ⅱ)完
〃	477	〃	〃		〃	19.45	15.05	4.15	0.94	〃
〃	478	〃	〃		〃	15.75	14.40	2.60	0.51	(Ⅱ)ほぼ完
〃	479	〃	210P		〃	16.1	9.9	2.9	0.34	(Ⅱ)欠
〃	480	〃	〃		〃	23.2	13.3	2.3	0.71	〃
〃	481	〃	209P		〃	13.95	12.00	2.00	0.29	(Ⅱ)ほぼ完
〃	482	〃	210P		〃	16.1	13.1	3.2	0.44	〃
〃	483	〃	209P		〃	16.30	14.30	2.60	0.51	〃
〃	484	〃	210.211V		〃	20	13	4	0.81	(Ⅱ)完
〃	485	〃	209P		〃	12.70	14.25	2.55	0.33	(Ⅱ)欠
〃	486	〃	〃		〃	12.85	10.50	2.20	0.23	(Ⅰ)完
〃	587	〃	〃		〃	17.90	15.65	3.10	0.55	(Ⅱ)ほぼ完
〃	488	〃	210P		〃	26.10	20.90	3.50	1.31	(Ⅱ)欠
〃	489	〃	〃		〃	21.9	16.2	4.3	1.25	〃
〃	490	〃	211P		〃	20.0	15.2	2.9	0.62	(Ⅱ)完
〃	491	〃	209P		〃	24.60	18.25	4.75	1.82	〃
〃	492	〃	〃		〃	14.30	13.15	2.40	0.41	(Ⅱ)欠
〃	493	〃	210P		〃	21.50	15.60	3.40	1.25	(Ⅰ)完
〃	494	〃	〃		〃	10.80	18.40	4.70	0.63	(Ⅱ)欠
〃	495	〃	209P		〃	17.00	13.30	3.70	0.86	(Ⅰ)欠
〃	496	〃	〃		〃	19.50	16.25	4.25	0.98	(Ⅱ)欠
〃	497									
〃	498	〃	211P		サヌカイト	17.8	15.7	3.8	0.70	(Ⅱ)完
〃	499	〃	〃		〃	21.10	13.75	2.55	0.45	(Ⅱ)欠
〃	500	〃	210P		〃	13.75	15.25	3.25	0.53	(Ⅱ)完
〃	501	〃	209P		〃	19.80	10.70	3.00	0.65	〃
〃	502	〃	210P		〃	22.4	14.2	3.5	0.80	(Ⅱ)ほぼ完
〃	503	〃	〃		〃	22.25	16.30	4.60	1.15	(Ⅰ)完
〃	504	〃	〃		〃	21.65	9.30	3.25	0.69	(Ⅳ)完
〃	505	〃	209P		〃	21.95	12.15	2.80	0.76	(Ⅵ)完
〃	506	〃	210P		〃	25.55	23.25	4.90	2.33	(一)欠
〃	507	石鏃未製品	209P		〃	23.00	13.30	5.25	1.47	
〃	508	石鏃	〃		〃	17.95	16.85	3.00	0.71	(一)欠
〃	509	〃	〃		〃	21.85	16.85	2.10	0.83	〃
〃	510	〃	209P 南北土手除去		〃	10.00	12.45	2.60	0.42	(Ⅱ)欠
〃	511	〃	209P		〃	19.80	15.20	3.35	0.84	(一)欠
〃	512									
〃	513	石槍	209P		サヌカイト	20.70	16.80	8.70	3.13	欠
〃	514	石錐	209P 南北土手除去		〃	21.75	11.75	4.25	0.92	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
387	515	石錐	209P		サヌカイト	14.30	9.15	3.75	0.57	
388	516	〃	210P		〃	33.85	9.35	3.55	0.98	
〃	517	楔形石器	209P 南北土手除去		〃	33.30	18.85	7.05	5.85	
〃	518	〃	209P		〃	20.30	16.40	5.45	3.02	
〃	519	〃	〃		〃	25.10	25.25	6.60	4.99	
〃	520	〃	211R		〃	41.00	47.10	8.20	18.64	
〃	521	〃	210P		〃	30.35	16.80	8.40	5.13	
〃	522	スクレイパー	〃		〃	31.1	26.6	6 .1	5.28	
〃	523	〃	209P		〃	36.75	29.50	8.00	9.31	
〃	524	〃	210P		〃	54.00	19.35	7.00	11.83	
〃	525	〃	211.5(W~S)		〃	30.5	20	8.5	6.36	
〃	526	R・F	210.211V		〃	24	44	8	8.75	
〃	527	〃	211. 5W		〃	28	15	2.5	1.43	
〃	528	スクレイパー	210.211V		〃	33.5	3.9	12	16.23	
〃	529	〃	209P		〃	41.00	18.50	10.50	9.23	
〃	530	〃	〃		〃	26.80	42.25	6.65	8.94	
〃	531	〃	211S		〃	39.30	36.00	6.45	10.86	
〃	532	打製石器	211V		〃	49	129	8	69.79	
〃	533	石錘	211P		〃	65.95	47.30	28.45	115.40	
〃	534	磨石	210P			76.40	75.80	56.65	485	破
〃	535	〃	209P			69.65	90.25	44.15	430	破
〃	536	敲石	211R			82.70	69.60	52.30	420	

表－34　高縄手B調査区金属器一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
388	29	鏃	210T	水田(弥.後)層中	鉄	(12.0)	(8.0)	1.5	0.18	
393	30	〃	210R	竪穴式住居－26	〃	23.0	12.5	2.0	1.14	
〃	31	〃	〃	〃	〃	20.5	11.0	1.5	0.95	
〃	32	鉈	〃	〃	〃	144.0	10.0	3.5	9.01	
394	33	鏃	〃	竪穴式住居－27	〃	33.5	11.5	2.0		
〃	34	〃	〃	〃	〃	31.0	15.5	2.0	5.68	
〃	35	〃	〃	〃	〃	25.0	16.5	2.0		
〃	36	鉈	〃	〃	〃	30.0	6.0	2.5	1.14	
〃	37	〃	〃	〃	〃	15.5	6.5	1.5	0.43	
〃	38	不明	〃	〃	〃	68.5	11.5	3.0	4.81	
400	39	鏃	209P	井戸－42	〃	35.0	19.0	3.0	3.81	
〃	40	〃	〃	〃	〃	41.0	14.0	1.3	1.61	
〃	41	〃	〃	〃	〃	20.0	12.0	1.0	0.60	
〃	42	〃	〃	〃	〃	23.0	12.0	1.1	0.96	
〃	43	〃	〃	〃	〃	22.0	9.0	2.0	0.72	

百間川沢田遺跡 2

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
400	44	不明	209P	井戸－42	鉄	15.0	13.0	1.2	0.50	
〃	45	〃	〃	〃	〃	44	17	2.0	4.41	
〃	46	〃	〃	〃	〃	—	—	1.4	2.66	
〃	47	〃	〃	〃	〃	23	50	2.7	5.33	
424	48		210P	溝－158	〃	42.0	8.0	2.0	2.9	
〃	49	鏃	〃	〃	〃	33.5	13.0	2.5	1.7	
〃	50	不明	〃	〃	〃	27.0	5.0	4.0	0.7	
〃	51	〃	〃	〃	〃	25.0	13.5	2.0	1.8	
〃	52	鏃	〃	〃	〃	44.0	17.5	3.0		完存
〃	53	不明	〃	〃	〃	26.0	16.0	2.5	1.2	
〃	54	〃	〃	〃	〃	37.0	16.0	1.5	4.5	
〃	55	〃	〃	〃	〃	19.5	11.0	1.5	1.8	
430	56	鏃	210R	溝－164	〃	45.0	8.5	6.5	6.93	
431	57	鏃	210S	溝－166	〃	(17.0)	11.5	2.9	1.0	
440	58	寛永通宝	210Q	近世溝	銅	—	2.4	—	—	
〃	59	〃	〃	〃	〃	—	2.3	—	—	
〃	60	〃	〃	〃	〃	—	2.35	—	—	

表－35　高縄手B調査区木器・木製品一覧表

遺物番号	掲載図	名称・用途	法量(cm)	特徴	樹種	木取法	手法・備考
6	第391図	柱根	残存長35.5 最大径 6	○柱にしてはやや細く、下端も斜めに切断されている。全体的にぶよぶよとして軟かくもろい。	カヤ	心持材	○丸物
7	第391図	柱根	残存長 36 最大径 9	○6よりはひとまわり大きいが、柱としてはやや細目。下端はやや斜めに切断される。	カヤ	心持材	○丸物。
8	第406図	不明	残存長17.9 最大幅 4.8 厚 0.75	○ゆるやかに湾曲する切込みがみられる。また径約2mmの穿孔がある。糸巻枠材のような道具の部品か。	ヒノキ？	柾目材	○板物。
9	第406図	梯子	残存長 68 最大巾11.9 厚 (突起部：6.1) (平坦部：2.6)	○全体的に腐食が進行しているが、下部ほどは比較的よく木表が残っている。段の突出部は鋭利な工具によって削りだされ、側面の調整も丁寧である。下端面折れて欠落している。	コナラ	板目材	○板物。
10	第406図	柄	残存長26.7 径 2.7 柄 径 2.7 柄 巾10.9	○鋤柄と推定されるが、現在のスコップの柄と何らかわらない形状を示す。断面長方形に削り細めた材に、柄部分を挿入し、径4mmの木釘で固定している。全体に残存良好で、使用による磨滅が柄部分（にぎり）に観察される。	カシ	面取材	○丸物。
11	第406図	二又鋤	残存長26.2 最大巾 4.6 最大厚1.05	○先端を欠く。片面は平坦で、一方はやや凸面をなす。鋭利な鉄製工具で丁寧な調整が施される。使用によるものか。側面は丸味をも。木表の残存は良好である。	カシ	板目材	○板物。
12	第406図	柄（部分）	残存長 50 径 2.65～2.85	○2カ所で折れている。下端は、鋭い刃物で調整され石突風に丸味をもつ。10と形質が極めて似ている。木表の残存は良好。	カシ	面取材	○丸物。
13	第407図	建築材	残存長96.7 最大巾 11 最大厚 3.9	○2カ所に方形の切込みを入れ、柄穴とする。下端部は、長さ10cm、2.7× 4.5cmの細く削り出された部分で他方の柄穴に挿入されると推定される。下側の柄穴下部には巾 3.5cmの削込みをいれる。残存良好な側面には手斧による調整痕（約 1.5cm）が明瞭に残される。	モミ	板目材	○板物。 原材は径25cm以上。
14	第408図	木札状木製品	全 長24.1 最大巾3.05 最大厚0.35	○頂部から 1.3cmの位置に両面から穿った2× 1.5mmの貫通孔がある。上・下端とその周縁は鋭利な鉄製工具により、なめらかに調整される。扁平なヘラ状をなしているがその性格・用途は明らかでない。	ヒノキ	柾目材	○板物

遺物番号	掲載図	名称・用途	法量(cm)	特徴	樹種	木取法	手法・備考
15	第412図	竪櫛	残存長 1.1 厚さ 0.2 現存幅0.45	○細くうすい竹ヒゴ的なものを束ね、折り曲げたものであろう。頂部近くを横に緊縛していたものであろう。その後、黒漆を塗布したものである。	タケ	—	○服飾具

表—36 高縄手B調査区土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
斜面堆積—4 (第325図)									
1610	深鉢形土器	30.0	—	—	○波状に線、外面に重下条線。	暗灰褐色	砂粒含	良好	
1611	鉢形土器	—	—	—	○縄文施文のち沈線。	淡黄灰色	〃	〃	
1612	〃	—	—	—	○沈線	淡黄色	〃	〃	
土壙—82 (第328図)									
1613	鉢	—	—	—	○内面、ナデ調整。	黄褐色	微砂多含	不良	○底部片。
1614	深鉢	—	—	—	○刻み目突帯をめぐらす。煤付着。	暗黄褐色	微砂多含	不良	
土器溜り—13.14周辺包含層 (第332～ 335, 340～342, 344, 348図)									
1615	穿孔土器片	—	—	—	○精製土器片に穿孔した破片。用途不明。	暗褐色	微砂	良好	○穿孔あり。
1616	壺形土器	—	—	—	○精製土器。棒状・文を飾る。	黒褐色	精良	不良	○火を受けている
1617	〃	—	—	—	○貼付けの棒状浮文を飾る。精製土器。	橙褐色	雲母多含	良好	
1618	深鉢形土器	—	—	—	○口縁直下にヘラガキ沈線による段がつく。	黄白色	微砂多含	不良	
1619	〃	—	—	—	○内外面ヘラミガキで仕上げる。	黒褐色	石英多含	良好	
1620	〃	—	—	—	○口縁部の立上りはほぼ直立。端面は平坦。	橙褐色	石英・長石	〃	
1621	〃	—	—	—	○精製土器。体部上位に穿孔あり。	黒褐色	微砂多含	〃	○擬口縁あり。
1622	〃	—	—	—	○精製土器。内外面共に横位のヘラミガキ。	淡橙褐色	〃	〃	○後元実測。
1623	壺形土器	18.3	—	—	○体部外面は、斜方向のヘラミガキ調整。	橙褐色	砂粒多含	〃	○器表面剝落。
1624	深鉢形土器	20.5	—	—	○内外面横位のヘラミガキで仕上げる。	黄褐色	微砂	〃	○精製土器。
1625	〃	31.6	—	—	○精製土器。外面はナデ、内面ヘラミガキ。	灰赤褐色	石英多含	〃	○擬口縁残。
1626	〃	—	—	—	○精製土器。体部上位は横位のヘラミガキ。	橙褐色	砂粒多含	〃	○煤わずかに付着
1627	浅鉢形土器	—	—	—	○屈曲する段がつく。	淡黄色	微砂多含	〃	
1628	〃	—	—	—	○屈曲する口縁部の内面には2条のヘラ沈線	黄橙白色	微砂	〃	
1629	小形鉢形土器	—	—	—	○2条のヘラガキ沈線がめぐる。	暗灰褐色	微砂多含	〃	
1630	深鉢形土器	—	—	—	○細目のヘラ状工具による線刻文様を描く。	黒褐色	砂粒含む	〃	○石英粗多含む。
1631	浅鉢形土器	—	—	—	○緩かに屈曲する。内面にヘラ沈線2条。	橙褐色	微砂多含	〃	○1628と同一個体
1632	〃	—	—	—	○精製土器。内面には2条のヘラガキ沈線。	明橙褐色	砂粒多含	〃	○内面押圧痕。
1633	〃	20	—	—	○体部は荒いケズリとナデで調整。	灰褐色	微砂多含	〃	○指頭痕残す。
1634	〃	24	—	—	○内面は斜方向のナデ仕上げ。	赤褐色	〃	〃	
1635	〃	37.8	—	—	○口縁内面には段がつき、玉縁状となる。	明橙褐色	砂粒多含	〃	
1636	深鉢形土器	—	—	—	○3条の斜線文と直線を組合せた文様を描く	灰黄褐色	〃	不良	
1637	〃	—	—	—	○ヘラガキ複線文を飾る。	〃	〃	良好	
1638	〃	—	—	—	○やや武骨なヘラガキ文を飾る。	灰褐色	〃	〃	
1639	〃	—	—	—	○直線と5条1単位の斜方向ヘラガキ文	灰黄褐色	〃	普通	
1640	〃	—	—	—	○ヘラガキ斜線文を飾る。	淡褐灰色	〃	〃	
1641	〃	—	—	—	○ヘラガキ文を飾る。	灰黒色	〃	良好	
1642	〃	—	—	—	○斜方向のヘラガキ文。	灰黄褐色	微砂	〃	
1643	深鉢形土器か		—	—	○細くて浅いキザシメ突帯をめぐらす。	灰黒色	砂粒多含	普通	○小口径。
1644	深鉢形土器	—	—	—	○荒いキザシメが施される。	暗黄褐色	粗砂含む	良好	
1645	〃	—	—	—		灰褐色	微砂含む	普通	
1646	〃	—	—	—		明黄橙色	砂粒多含	良好	
1647	〃	—	—	—	○3条を1単位とするヘラガキ斜線文。	灰黄褐色	〃	普通	○内面カキ目。
1648	〃	—	—	—	○火を受けて器表面荒れ。	黄橙白色	粗砂多含	不良	
1649	〃	—	—	—		灰黒褐色	砂粒多含	普通	
1650	〃	—	—	—	○波状口縁。内面にはヘラガキ沈線がめぐる	橙褐色	粗砂多含	〃	
1651	〃	—	—	—	○内外面共に横ナデ調整。	黄橙白色	砂粉多含	不良	○口縁部に黒斑。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1652	深鉢形土器	—	—	—	○外面には斜方向のタタキ風圧痕を残す。	灰黒褐色	微砂多含	良好	○棒状工具の刻目。
1653	〃	—	—	—	○火を受けて内外面共磨滅が甚しい。	黄褐色	石英・長石	不良	
1654	〃	18.6	—	—	○体部上位に押圧痕。下位との境に段あり。	灰黄褐色	微砂多含	普通	
1655	〃	19.7	—	約16	○波状口縁。口縁内面にヘラガキ沈線。	灰黒褐色	砂粒多含	〃	○火を受け器表荒
1656	〃		—	—	○２条刻目突帯。口縁上端にも刻目をめぐる。	黄橙白色	〃	良好	○押圧痕残す。
1657	〃	22.6	—	—	○口縁部上位と体部にヘラガキ沈線がめぐる。	明黄橙色	〃	普通	○一部に煤付着。
1658	〃	24	—	—	○内面上位に弱い指頭オサエ痕を残す。	灰黒色	〃	良好	
1659	〃	26.2	—	—	○内面は硬目の工具による横位ナデ（ケズリ）	黄橙白色	〃	〃	
1660	〃	31	—	—	○２条キザシメ突帯をめぐらす。	明黄橙色	微砂多含	〃	○内面横位調整。
1661	浅鉢形土器か	—	3.6	—	○揚げ底。内面ナデ仕上げ。	淡黄橙色	砂粒多含	普通	
1662	深鉢形土器か	—	6	—	○やや揚げ底。	赤橙色	〃	良好	
1663	〃	—	7.8	—	○揚げ底。外底部は不調整。	灰褐色	〃	〃	
1664	〃	—	8.4	—	○やや揚げ底。器表の剝落が目立つ。	灰黄白色	〃	不良	
1665	〃	—	7.6	—	○揚げ底。内底部は比較的平滑。	灰黒色	〃	良好	○揚げ底
1666	〃	—	7.3	—	○外底面はやや凸面をなす。	赤橙褐色	微粗砂多含	〃	
1667	〃	—	8	—	○内外面共に荒いナデ調整。	明黄橙色	砂粒多含	普通	
1668	〃	—	8	—	○外底部はやや凸面をなす。	明橙黄白色	〃	〃	
1669	〃	—	—	—	○内外面共に平滑なナデ仕上げ。	明橙色	〃	良好	
1670	〃	—	8.6	—		黄橙色	微砂多含	普通	○火を受けている
1671	〃	—	8	—	○外底部中心はやや凹む。	暗橙褐色	砂粒多含	良好	○煤付着。
1672	深鉢形土器	—	—	—		暗黄褐色	〃	〃	○ぶ厚く重い。
1673	〃	—	—	約3	○鹿骨共伴。ややぶ厚い丸底の底部。	黄白色	石英・長石	〃	○図化部分完存。
1674	小形鉢形土器	—	—	—	○網状文の一部を残す。	明黄褐色	微砂少量	〃	○搬入土器
1675	〃	—	—	—	○口縁端面は平坦で、内面に突出。網状文。	〃	〃	〃	〃
1676	〃	—	—	—	○網状文。	〃	〃	〃	〃
1677	〃	—	—	—	○網状文。	〃	〃	〃	〃
1678	壺形土器	—	—	—	○断面台形の浮文を貼付けて飾る。	橙褐色	精良	〃	○1616・1617と同
1679	浅鉢形土器	—	—	—	○内面に２条の横方向のヘラ描き沈線。	黄白色	砂粒多含	普通	
1680	〃	—	—	—	○内面に太い沈線が２条めぐる。	黒灰色	〃	不良	
1681	〃	—	—	—	○内面にヘラ沈線が２条めぐる。	灰褐色	微砂多含	普通	
1682	〃	12.6	—	約4.5	○内面は荒いヘラミガキ調整。	黄橙色	粗砂多含	良好	
1683	〃	13.4	—	—	○内面はナデ、擦痕調整痕を残す。	明橙褐色	長石・雲母	〃	
1684	深鉢形土器か	—	—	—	○細いヘラガキで文様が描かれる。	灰黄褐色	砂粒	〃	○1630と同一か。
1685	深鉢形土器	—	—	—	○内面に指頭押圧痕を残す。	白黄色	微砂多含	〃	○擬口縁あり。
1686	壺形土器か	—	—	—	○内外面共に横ナデ仕上げ。	黄褐色	〃	〃	
1687	深鉢形土器	—	—	—	○内面はナデ、外面は細いヘラミガキ調整。	灰赤褐色	〃	普通	
1688	〃	—	—	—	○精製土器	黒褐色	〃	普通	
1689	深鉢形土器か	28	—	—	○内外面共にヘラミガキ調整。精製土器。	灰褐色	微砂、精良	良好	○体部上位に段。
1690	深鉢形土器	33	—	—	○内外面共にヘラミガキ調整。	灰橙褐色	微砂多含	〃	○擬口縁残。
1691	〃	—	—	—	○ヘラ描文を飾る。	暗灰褐色	石英多含	〃	
1692	〃	—	—	—	○ヘラ描き文様。（３条１単位）	灰黒褐色	石英・長石	不良	
1693	〃	—	—	—	○太目の２条１単位の斜線文を飾る。	暗橙褐色	〃	良好	
1694	〃	—	—	—	○細目のヘラガキ文を飾る。	灰褐色	石英、雲母	不良	
1695	〃	—	—	—	○ヘラ描き文を飾る。	黄橙白色	砂粒多含	普通	
1696	〃	—	—	—	○２条１単位のヘラガキ文様を描く。	白橙褐色	〃	〃	
1697	〃	—	—	—	○７条１単位のヘラガキ文様を描く。	淡橙色	微砂多含	〃	○黒斑あり。
1698	〃	—	—	—	○多条の斜線文を飾る。	灰褐色	微砂	〃	
1699	〃	—	—	—		〃	砂粒多含	不良	
1700	〃	—	—	—	○斜方向のヘラガキ文。	灰黒色	石英、雲母	〃	
1701	〃	—	—	—	○ヘラ描き文を飾る。	白橙色	微砂	普通	
1702	〃	—	—	—	○ヘラ描き斜線文を飾る。	明橙色	微砂多含	良好	
1703	〃	—	—	—	○やや太目のヘラガキ文を飾る。	灰黒色	微砂	普通	
1704	〃	—	—	—	○ヘラ描き斜線文を飾る。	黄灰色	微砂多含	〃	
1705	〃	—	—	—	○ヘラ描き文を飾る２条突帯の土器。	橙色	石英、長石	良好	
1706	〃	—	—	—	○７条を１単位とする斜線文を飾る。	黒褐色	微砂	普通	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1707	深鉢形土器	—	—	—	○粘土接合痕をよく残す。	黄褐色	砂粒多含	良好	○煤付着。
1708	〃	—	—	—	○内面は斜行ハケ調整。外面はケズリ調整。	白黄橙色	微砂多含	〃	
1709	〃	—	—	—	○口縁上端面にもキザシメを施す。内面横ナデ	灰橙褐色	石英・長石	〃	
1710	〃	—	—	—	○口縁上端面にもキザシメをめぐらす。	黄褐色	〃	普通	○煤付着。
1711	〃	—	—	—	○口縁端部にも刻み目。内面にはヘラ沈線。	橙褐色	砂粒多含	〃	
1712	〃	—	—	—	○体部上位にヘラガキ沈線をめぐらす。	灰褐色	〃	良好	
1713	〃	—	—	—	○外面は硬目の工具で強い横ナデ調整を行う	白橙褐色	石英・長石	〃	
1714	〃	—	—	—	○内面の器表面は剝離。	灰橙褐色	砂粒多含	〃	
1715	〃	—	—	—	○外面は擦痕のようなナデ調整で仕上げる。	灰褐色	微砂多含	〃	○外面に煤付着。
1716	〃	—	—	—	○波状口縁の内面には沈線がめぐる。	橙褐色	砂粒多含	〃	○煤付着。
1717	〃	—	—	—	○２条突帯を下突帯。	明黄白色	石英粗砂	〃	
1718	〃	—	—	—	○２条突帯土器の下段突帯部分。内面横ナデ	明黄褐色	砂粒多含	〃	
1719	〃	—	—	—	○２条刻目突帯の下段。外面に煤多量に付着	灰黄褐色	微砂	〃	○煤は内面なし。
1720	〃	—	—	—	○内面は硬目の工具によるナデ。底部は丸底	橙～黒灰色	砂粒多含	〃	○内傾接合。
1721	〃	16	(6.3)	約15	○体部上位には押圧痕残。下位はヨコハケ。	黒褐色	〃	普通	○1721と同一個体
1722	〃	—	6.3	—	○外底部はケズリ調整。体部はヘラケズリ。	灰黒色			○1722と同一個体
1723	〃	19.1	約７	約5.5	○２孔の貫通孔は蓋のためか。タール状煤。	黄橙褐色	砂粒多含	良好	○ほぼ完形。
1724	深鉢形土器か	—	5.6	—	○外底部はやや凸面をなす。	黄橙白色	〃	〃	
1725	〃	—	5.8	—	○外底部はナデ仕上げ。内底部は平坦。	灰黒色	〃	〃	○粗砂多含。
1726	深鉢形土器	—	7.4	—		橙褐色	〃	普通	
1727	〃	—	—	—	○カキ目のような調整痕が目立つ。	黄灰褐色	〃	良好	
1728	〃	36.6	—	—	○口縁上端より貼付け突帯をめぐらす。	黒褐色	石英・長石	〃	○煤付着。
1729	〃	28.4	—	—	○外面はタテナデ、内面はユビナデ、オサエ	橙褐色	粗砂多含	〃	
1730	〃	29.1	—	約31	○内面には条痕風のカキメ調整を施す。	黄橙白色	砂粒多含	〃	○煤付着。大破片
1731	〃	36.6	—	—	○体部上位には指頭オサエ痕が残る。	黄橙色	〃	〃	○二次焼成痕あり
1732	〃	39.4	—	—	○２条の刻み目突帯をめぐらす。火を受ける	黄灰色	〃	不良	○推定器高約30cm
1733	浅鉢形土器	12	—	5.9	○内外面共にヘラミガキ仕上げ。外底は磨滅	灰橙褐色	微砂主体	普通	○完形片。
1734	深鉢形土器	—	—	—	○２条の刻み目突帯。口縁内面に浅い段あり	白黄色	砂粒多含	良好	○斜行ヘラ描き文
1735	〃	28.4	—	—	○波状口縁。口縁内面・体部に沈線がめぐる	橙褐色	〃	〃	○体部に煤付着。
1736	〃	33.2	—	—	○２条の刻み目突帯、口縁端部にはキザシメ。	明橙色、煤	〃	〃	○外面丹付着。
1737	〃	33.4	—	—	○２条の刻み目突帯をめぐらす。端面は平坦	橙褐色	〃	〃	○吹きこぼれ痕。
1738	〃	—	—	—	○体部上位は横ナデ、下位は縦位のケズリ。	灰褐色	〃	〃	○雲母が目立つ。
1739	〃	—	—	—	○体部上位は条痕風のカキメ、下位はケズリ	灰黄色	微砂多含	普通	○指頭押圧痕残。
1740	〃	—	—	—	○体部外面はカキアゲ風ケズリ。	〃	砂粒多含	良好	
1741	壺形土器	—	—	—	○精製土器。貼付け浮文を飾る。	灰橙褐色	微砂含む	〃	
1742	深鉢形土器	—	—	—	○火を受けて器表面剝落。	赤橙色	微砂	不良	○精製土器。
1743	〃	—	—	—		白黄色	〃	良好	
1744	〃	—	—	—	○精製土器。	〃	微砂多含	〃	
1745	〃	—	—	—	○体部にヘラガキ文が描かれる。	灰黒褐色	石英・長石	不良	○二次焼成痕。
1746	〃	—	—	—	○８条以上をし単位とするヘラガキ文を飾る。	灰茶色	長石多含	普通	
1747	〃	—	—	—	○内面には押圧痕を残す。	灰黒色	石英多含	不良	○火を受ける。
1748	浅鉢形土器	—	—	—	○口縁内面上位にヘラガキ沈線による段がある。	橙黄色	微砂多含	良好	
1749	深鉢形土器	—	—	—	○突帯に対してほとんど直角にキザミメを施す。	橙白色	〃	普通	
1750	〃	—	—	—	○口縁端面は平坦。	灰黒褐色	砂粒多含	〃	
1751	〃	—	—	—	○太目のヘラガキ文を飾る。	黄褐灰色	石英・長石	〃	
1752	〃	—	—	—	○比較的細くて多いヘラガキ文を飾る。	黄白色	砂粒	〃	
1753	〃	—	—	—	○直線と斜線の複線文様。	灰褐色	石英・長石	〃	○1754と同一個体
1754	〃	—	—	—		〃	〃	〃	○1753と同一個体
1755	〃	—	—	—	○体部上位に斜線文を飾る。２条突帯。	灰橙褐色	微砂多含	良好	○突帯は刻目なし
1756	〃	—	—	—	○細目のヘラ描き文（多条）を飾る。	黒褐色	微砂	不良	
1757	深鉢形土器か	—	6.6	—	○内底部は荒いケズリ調整。	灰橙褐色	砂粒多含	普通	
1758	〃	—	7.2	—	○外底部はケズリ調整。４mm程度の木の実痕	淡褐白色	〃	〃	
1759	〃	—	—	—	○外底部に網代状圧痕がみられる。	黄白色	〃	〃	
1760	深鉢形土器	—	8.4	—	○揚げ底。	白黄色	〃	〃	
1761	深鉢形土器か	—	約13	—	○外底部は平滑なナデ仕上げ。	橙黄白色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1762	蓋形土器	8.5	—	約2	○全体に磨滅。	明橙色	粗砂多含	不良	○二次焼成痕。
1763	〃	13.3	—	3.5	○穿孔あり。器表面は磨滅甚し。	橙褐色	砂粒多含	〃	○復元実測。
1764	壺形土器	—	—	—	○ヘラミガキで仕上げた外面にヘラ沈線4条。	灰赤褐色	〃	良好	○内面に押圧痕。
1765	甕形土器	—	—	—	○ぶ厚い口縁端部に刻み目をめぐらす。	黄白色	石英・長石	〃	
1766	〃	—	—	—	○体部上位にヘラガキ沈線3条がめぐる。	明橙色	〃	〃	
1767	〃	20.1			○外面は横ナデ、内面はハケ、ナデ調整。	橙褐色	砂粒多含	〃	
1768	壺形土器	43	—	—	○頸部にヘラガキ沈線2条がめぐる。	黄白色	〃	普通	
1769	〃	—	—	—	○ヘラ描き沈線3条。	黄橙色	〃	〃	
1770	甕形土器	—	5.7	—	○揚げ底。	黄白色	〃	〃	
1771	〃	—	7.2	—	○揚げ底。	灰褐色	〃	〃	
1772	〃	—	7.6	—	○外底部はやや揚げ底。	灰橙褐色	〃	良好	
1773	壺形土器	—	—	—	○体部上位には複線文をめぐる。	淡黄橙色	微砂	不良	

落ち込み（第350図）

1774	壺形土器	10.0	—	—	○内外面と横方向のヘラミガキ、ナデ。	暖灰色	微砂含	良好	
1775	鉢形土器	—	—	—	○内外面を横方向のヘラミガキ、ナデ。	〃	〃	〃	
1776	〃	—	—	—	○内外面ナデ。	淡灰色	砂粒含	不良	
1777	深鉢形土器	28.6	—	—	○外面貼付突帯キザミメ。	淡黄褐色	〃	良好	
1778	〃	—	—	—	○外面頸部に沈線。	黒灰色	〃	〃	
1779	〃	—	—	—	○外面突帯キザミメ。	〃	〃	〃	
1780	〃	—	—	—	○外面貼付突帯キザミメ。	灰褐色	〃	〃	
1781	〃	—	—	—	○　〃	〃	〃	〃	
1782	〃	—	—	—	○　〃	暗灰色	〃	〃	

包含層（第351, 352図）

1783	壺形土器	15.6	—	—		暗褐灰色	細砂	良好	
1784	?	—	—	—	○内外面ナデ。	〃	〃	〃	
1785	深鉢形土器	—	—	—	○外面に爪形文。	〃	〃	〃	
1786	?	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。外面擦痕。	灰白色	〃	〃	
1687	鉢形土器	—	—	—	○内外面ナデ。	灰褐色	砂粒含	〃	
1788	〃	—	—	—	○　〃	暗灰褐色	〃	〃	
1789	〃	—	—	—	○内外面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	
1790	深鉢形土器	—	—	—	○外面貼付キザミメ凸帯、ヘラ描き沈線文。	褐灰色	細砂	〃	
1791	〃	—	—	—	○　〃	暗褐色	砂粒含	〃	
1792	?	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。貼付キザミメ凸帯。	褐灰色	細砂	〃	
1793	深鉢形土器	—	—	—		灰褐色	〃	〃	
1794	〃	—	—	—	○外面貼付キザミメ凸帯、ヘラ描き沈線文。	灰黄褐色	〃	〃	
1795	〃	—	—	—	○貼付キザミ凸帯。	淡褐灰色	〃	〃	
1796	〃	—	—	—	○外面貼付キザミメ凸帯、ヘラ描き沈線文。	褐灰色	〃	〃	
1797	〃	—	—	—	○　〃	灰白色	〃	〃	
1798	〃	—	—	—	○貼付キザミメ凸帯。	〃	〃	〃	
1799	〃	—	—	—	○内外面擦痕。貼付キザミメ凸帯。	〃	〃	〃	
1800	〃	—	—	—	○口縁部波状。貼付キザミメ凸帯。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1801	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
1802	〃	—	—	—	○貼付キザミメ凸帯。	褐灰色	〃	〃	
1803	〃	—	—	—	○　〃	暗褐灰色	〃	〃	
1804	〃	—	—	—	○口縁部わずかに波状。貼付キザミメ凸帯。	灰白色	〃	〃	
1805	〃	—	—	—	○貼付キザミメ凸帯。	褐灰色	〃	〃	
1806	〃	—	—	—	○　〃	暗褐色	〃	〃	
1807	〃	—	—	—	○口縁部わずかに波状。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1808	〃	—	—	—	○口縁端部にキザミメ。貼付キザミメ凸帯。	灰白色	〃	〃	
1809	〃	—	—	—	○波状口縁。貼付凸帯、キザミメ。	黄灰褐色	〃	〃	
1810	〃	—	—	—	○貼付キザミメ凸帯。	灰白色	〃	〃	
1811	〃	—	—	—	○　〃	褐灰色	〃	〃	
1812	〃	—	—	—	○　〃	灰白色	〃	〃	
1813	〃	—	—	—	○　〃	灰褐色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1814	深鉢形土器	—	—	—	○貼付キザミメ凸帯。	鈍い黄橙色	細砂	良好	
1815	〃	—	—	—	○ 〃	灰褐色	〃	〃	
1816	〃	—	—	—	○ 〃	灰白色	〃	〃	
1817	〃	—	—	—	○ 〃	〃	〃	〃	
1818	〃	—	—	—	○外面貼付キザミメ凸帯。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1819	浅鉢形土器	—	—	—	○内外面ヘラミガキ、ナデ。	暗灰褐色	砂粒含	〃	
1820	〃	—	—	—	○ 〃	〃	〃	〃	
1821	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	
1822	甕形土器	—	9.0	—		褐灰色	細砂	〃	
1823	鉢形土器	—	2.2	—	○外面ヘラケズリ。	灰褐色	〃	〃	

溝—133（第353図）

1824	甕形土器	—	—	—	○口縁部はくの字状に外反し、端部にキザミ	鈍い黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1825	壺形土器	—	—	—	○胴部には方形に囲む突帯、中央に円形浮文	灰白色	〃	〃	〃
1826	底部	—	8.5	—		浅黄橙色	〃	〃	〃
1827	〃	—	7.6	—	○外面はヘラミガキ。	灰白色	〃	〃	

包含層（第361図）

1828	壺形土器	—	—	—	○頸部にヘラガキ沈線。	鈍い黄橙色	細砂	良好	○黒斑。
1829	甕形土器	—	—	—	○口縁折り返し。口縁部ヨコナデ。	褐灰色	細砂多し	良	○小破片。
1830	壺形土器	11.6	—	—	○口縁端部と頸部外面にヘラガキ沈線。	灰白色	細砂	良好	
1831	〃	—	—	—	○口縁部内面に波状文、端面に凹線文。	黄橙色	〃	〃	○小破片。
1832	甕形土器	25.2	—	—	○内面はヘラミガキ。外面はハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	〃

溝—137（第363・364図）

1833	壺形土器	17.6	—	—	○頸部から口縁部にかけて外にひらく。	浅黄橙色	細砂	良好	○外面一部剥離。
1834	〃	12.4	—	—	○口縁部は短かく外反し、端部は肥厚せず。	〃	〃	〃	○小破片。
1835	甕形土器	18.8	7.6	32.4	○底部は少しあげ底。内面はヘラケズリ。	鈍い黄橙色	礫を含む	〃	○底部穿孔。
1836	〃	11.8	—	—	○口縁端部は肥厚。外面に凹線文を施す。	浅黄橙色	細砂	〃	
1837	〃	12.4	—	—	○口縁部くの字状に外反。端部は肥厚せず。	鈍い橙色	〃	〃	○小破片。
1838	〃	13.4	—	—	○頸部直下まで内面ヘラケズリ。	〃	〃	〃	〃
1839	〃	16.4	—	—	○口縁部は肥厚。外面に凹線文を施す。	浅黄橙色	〃	〃	
1840	〃	16.0	—	—	○肩部にはヨコハケ。	赤灰色	〃	〃	○小破片。
1841	〃	12.5	—	—	○内面はヨコヘラケズリ。	灰褐色	礫を含む	〃	
1842	底部	—	8.8	—	○外面はタテヘラミガキ。	赤橙色	細砂	〃	
1843	〃	—	4.4	—	○内面はナデ。	浅黄橙色	〃	〃	○黒斑。
1844	〃	—	7.4	—	○外面はタテハケ。	鈍い黄橙色	礫を含む	〃	
1845	台付鉢形土器	—	4.0	—	○脚部外面は指頭圧痕。	浅黄橙色	細砂	〃	
1846	高杯形土器	28.6	—	—	○内面は5角形、外面は6角形のヘラミガキ	〃	〃	〃	○脚部欠。
1847	〃	26.0	—	—	○杯部外面はヘラケズリ。	鈍い黄橙色	礫を含む	〃	
1848	〃	15.8	8.8	10.2	○円板充填。	黄橙色	細砂	〃	
1849	〃	—	—	—	○杯部外面はヘラケズリ。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1850	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
1851	〃	—	13.2	—	○4方向に円孔を配する。外面ヘラミガキ。	鈍い黄橙色	〃	〃	○黒斑。
1852	〃	—	12.6	—	○円板充填。脚端部肥厚。	浅黄橙色	〃	〃	
1853	〃	—	11.0	—	○脚端部肥厚。外面の施文はヘラガキ。	黄橙色	〃	〃	
1854	〃	—	12.5	—	○脚端部肥厚。外面はヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	

溝群（第376図）

1855	甕形土器	8.6	—	—		淡黄褐色	砂粒含	不良	
1856	鉢形土器	—	—	—	○口縁部端に沈線。	淡灰色	〃	良	
1857	高杯形土器	—	—	—		淡黄灰色	微砂含	良	
1858	鉢形土器	15.8	—	—	○外面及び内面頸部ヘラミガキ。	淡黄灰褐色	砂粒含	良	
1859	壺形土器	—	7.6	—	○外面ヘラミガキ。	淡黄褐色	〃	不良	
1860	甕形土器	11.8	—	—	○口縁端面に凹線2条。	茶灰褐色	〃	良好	
1861	〃	—	4.6	—	○外面ヘラミガキ、上げ底。	〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
溝－154（第379図）									
1862	壺形土器	—	—	—	○口縁端部立ち上がる。内外面ヨコナデ。	灰褐色	石砂粒細砂	良好	○小破片。
1863	高杯形土器	—	8.9	—	○脚端部上方へ拡張。内外面ナデ。	橙色	精良・ち密	〃	○1/6強残存。
帯状水田（第384図）									
1864	壺形土器	—	—	—	○「く」の字に線を上方に拡張。	淡赤黄色	精良	良	
1865	甕形土器	—	—	—	○口縁端面に退化凹線2条。	淡黄褐色	砂粒含	不良	
1866	鉢形土器	—	—	—	○「く」の字の口縁部。	黄茶褐色	〃	良好	
1867	壺形土器	—	2.8	—	○外面ヘラミガキ。	淡赤茶色	精良	良	
水田層（第386図）									
1868	甕形土器	—	—	—	○口縁端部を上方へ拡張。口縁部ヨコナデ。	褐灰色	細砂多し	良好	○小破片。
1869	〃	—	—	—	○口縁端面凹線3条。内外面ヨコナデ。	〃	〃	〃	〃
1870	〃	—	—	—	○口縁端面に凹線。内外面ヨコナデ。	鈍い黄橙色	〃	〃	〃
1871	〃	—	—	—	○体部内外面ヘラミガキかナデ。	鈍い褐色	細砂含む	〃	〃
1872	高杯形土器	—	—	—	○柱状部内面シボリ目。穿孔4方向。	鈍い黄橙色	精良・ち密	〃	○1/4弱残存
1873	鉢形土器	—	—	—	○内外面ヘラミガキ。口縁ヨコナデ。	〃	〃	〃	○小破片。
1874	甕形土器	—	4.7	—	○内底面オサエ。内面こげつき。	灰褐色	細砂多し	〃	○1/3残存。
1875	壺か甕	—	5.0	—	○底部外面ナデか。体部外面ナデ。	鈍い橙色	砂粒細砂	〃	○1/4弱残存。
包含層（第386図）									
1876	壺形土器	16.4	—	—	○口縁部は外に開く。外面はハケメ。	浅黄橙色	細砂	良好	
1877	甕形土器	19.4	—	—	○口縁部は上方へ大きく拡張する。	鈍い黄橙色	細砂・小礫	〃	
1878	〃	—	—	—	○口縁端面凹線2条。体部内面ヘラケズリか	黄橙色	細砂砂粒多	やや甘	○破片。
1879	〃	15.8	—	—	○口縁端面に凹線文。内面はヘラケズリ。	浅黄橙色	細砂	良好	
1880	台付鉢形土器	7.2	5.4	9.7	○底部は円板充填。脚端部は肥厚する。	鈍い灰褐色	細砂・小礫	〃	○黒斑。
1881	鉢形土器	16.4	5.4	13.3	○体部内面ヘラケズリ後ヘラミガキするか。	赤橙色	精良	やや甘	○1/2強残存。
1882	壺形土器	—	—	—	○底面ヘラミガキ。内底部オサエ。	鈍い黄橙色	砂粒細砂多	良好	○小破片。
竪穴式住居－24（第391図）									
1883	壺形土器	—	—	—	○下段突帯上面にも刺突文。	明橙色	微砂含	軟質	
1884	甕形土器	—	—	—	○内外面とも横位のナデ。	淡褐灰色	〃	良好	
1885	〃	—	—	—	〃	淡灰褐色	〃	〃	
1886	器台形土器	—	—	—	○内面はナデ。	赤橙色	精製粘土	普通	
1887	台付鉢形土器	—	4.5	—	〃	灰褐色	砂粒多含	良好	○製塩土器。
1888	甕形土器	8.0	—	8.3	○胴部外面下半は平滑なナデ仕上げ。	白黄橙色	精製粘土	普通	
井戸－40（第397図）									
1889	壺形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。内面ヨコヘラミガキ。	淡灰白色	精良		
1890	〃	9.0	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部内面シボリ。	灰褐色	〃		
1891	甕形土器	15.8	(4.0)	27.0	○胴部、底部外面ヘラミガキ。	灰黄色	細砂		○胴部外面煤付着
1892	〃	15.4	(4.5)	25.6	〃	茶灰色	〃		〃
1893	〃	15.0	(3.8)	23.2	〃	〃	〃		〃
1894	〃	15.5	(3.8)	24.3	〃	黄橙色	〃		〃
1895	小型鉢形土器	7.7	—	6.7	○胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	灰白色	〃		
1896	鉢形土器	13.0	—	—	○内外面ナデ。	黄灰色	精良		
井戸－42（第400図）									
1897	壺形土器	16.8	—	—	○口縁部ヨコナデ。頸部内面ハケメ。	灰橙色	細砂		
1898	甕形土器	15.8	—	26.8	○胴部外面ヘラミガキ。	黄橙色	〃		○胴部外面煤付着
1899	〃	14.0	—	—	○胴部外面調整不明。	茶灰色	〃		〃
1900	鉢形土器	—	—	—	○口縁部外面指頭押圧。内面ヨコナデ。	黄灰色	精良		
1901	高杯形土器	21.0	—	—	○脚部内面ハケメ。他はヘラミガキ。	〃	細砂		
井戸－43（第401図）									
1902	甕形土器	13.8	—	—	○胴部内面ヘラケズリ。				
井戸－44（第403図）									
1903	壺形土器				○底部内面ヘラケズリ。	黄灰色	細砂		

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1904	小型丸底壺	—	—	—	○底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	灰橙褐色	細砂		
1905	〃	9.6	—	7.1	○内外面ともにヘラミガキ。	淡赤褐色	精選土		
1906	甕形土器	15.4	—	—	○外面ヨコナデ。	明黄色	細砂		
1907	〃	12.7	—	19.8	○口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケメ。	黄褐色	〃		
1908	〃	10.0	—	—	○外面ハケメ。	灰黄色	〃		
1909	〃	10.8	—	14.2	○外面ハケメ。内面ヘラケズリ後ハケメ。	赤褐色	砂粒多含		○外面煤付着
1910	〃	13.5	—	24.0	○外面底部調整不明。他はハケメ。	黄橙色	〃		〃
1911	鉢形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。	灰黄色	細砂		
1912	高杯形土器	13.1	—	—	○内外面調整不明。	橙色	砂粒含む		

井戸－46（第405図）

1913	甕形土器	15.5	—	—	○口縁部外面はクシガキ沈線文。	灰褐色	砂粒含	良好	○黒斑あり。
1914	〃	14.8	—	—	〃	灰橙色	細砂含	〃	
1915	〃	14.0	—	—	〃	灰褐色	〃	〃	○外面煤付着。
1916	〃	14.2	—	—	○口縁部外面は横位のナデ。	灰白色	砂粒含	〃	
1917	壺形土器	—	—	—	○内外面とも横位のナデ。	灰褐色	〃	〃	
1918	甕形土器	10.3	—	—	○口縁部外面は横位のナデ。	淡灰褐色	〃	〃	
1919	〃	—	—	—	○底部外面は無調整。	鈍い橙色	微砂含	〃	
1920	高杯形土器	19.8	—	—	○内外面ともハケメの後にヘラミガキ。	淡褐灰色	〃	〃	
1921	〃	—	14.0	—	○杯部内面調整不詳。	淡黄橙色	〃	普通	
1922	〃	—	—	—	○外面および杯部内面は円塗り。	褐橙色	精製粘土	良好	

井戸－47（第408図）

1923	高杯形土器	20.0	—	—	○内面は横ハケメ後に横ヘラミガキ。	浅黄橙色	精製粘土	良好	
1924	〃	—	14.5	—	○外面は縦ハケメ後に細いヘラミガキ。	明黄橙色	精良	軟質	
1925	鉢形土器	10.4	—	—	○内外面とも横位のナデ。	灰橙色	砂粉含	良好	
1926	高杯形土器	—	11.5	—	○透孔は二段で各4孔。	淡橙灰色	〃	〃	
1927	〃	10.8	—	—	○外面下半は面取り風のヘラケズリ。	橙黄白色	精良	普通	
1928	台付鉢形土器	11.0	7.6	8.6	○内外面ともナデを中心とする調整。	灰白色	砂粒含	〃	
1929	鉢形土器	36.0	—	—	○口縁部内外面とも横位のナデ。	黄白色	微砂含	〃	

井戸－48（第409図）

1930	甕形土器	—	—	—	○内外面とも横位のナデ。	褐灰色	金雲母含	良好	
1931	〃	—	—	—	○口縁部外面はクシガキ沈線文。	灰褐色	砂粒含	〃	
1932	高杯形土器	—	—	—	○脚部内面はヨコヘラケズリ。	橙色	精製粘土	〃	

井戸－49（第410図）

1933	高杯形土器	17.5	—	—	○杯部内面はナデ仕上げ。	明黄橙色	微砂多含	良好	
1934	壺形土器	26.8	—	—	〃				
1935	甕形土器	14.8	—	—	○口縁部外面はクシガキ沈線文。	灰褐色	微砂含	普通	○外面煤付着。
1936	〃	14.6	—	—	〃	黄褐色	微砂多含	〃	
1937	壺形土器	12.2	—	—		黄橙色	精良	軟質	
1938	〃	14.6	—	—	○口縁部内外面とも横位のナデ。	黄白色	微砂含	普通	
1939	鉢形土器	—	10.5	—	○底部外面もハケメ。	〃	粗砂含	〃	○外面黒斑あり。
1940	甕形土器	16.0	—	—	○口縁部外面はクシガキ沈線文。	淡黄橙色	雲母含	〃	○外面煤付着。

井戸－50（第411図）

1941	甕形土器	13.4	—	—	○口縁部外面はクシガキ沈線文。	赤橙褐色	微砂多含	普通	
1942	〃	15.5	—	—	〃	淡黄褐色	雲母含	〃	
1943	〃	15.6	—	—	〃	黄橙白色	〃	良好	
1944	〃	—	4.0	—	○胴部内面に掌圧痕。	橙褐色	微砂多含	〃	○内外面とも煤付着。内面に炭化米付着。
1945	〃	—	4.2	—	○胴部外面下半はナデの後にヘラミガキ。	明橙褐色	〃	〃	○外面煤付着。

井戸－51（第413図）

1946	壺形土器	18.7	36.1		○外面ナデ、肩部ハケ、内面下部指押え。	淡灰茶色	細砂含む	良好	○外面煤付着。
1947	甕形土器	12.8	20.1		内面上半ヘラケズリ、下半指押え。	暗茶褐色	〃	〃	〃
1948	〃	15.5	22.6		○口縁端部若干つまみ上げ。	淡赤茶褐色	粗砂含む	〃	○部分的に煤付着

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1949	甕形土器	13.8	22.4		○内面上半ヘラケズリ、下半指押え。	暗褐色	細砂含む	良好	

井戸－52

1950	壺形土器	20.2	—	—	○口縁部内外面ヨコナデ。	黄灰色	微砂含	不良	○外面煤付着。
1951	甕形土器	13.8	(4.4)	20.9	○外面ハケのちヘラミガキ。内面ヘラケズリ	黒灰色	〃	良好	○底部焼成後穿孔
1952	高杯形土器	—	11.0	—	○外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリのちナデ	赤黄褐色	水流粘土	〃	
1953	〃	—	—	—	○外面ヘラミガキ。内面ヨコナデ、ナデ。	淡黄褐色	〃	〃	
1954	小型土器	—	—	—	○外面底部ヘラケズリ。	淡灰褐色	砂粒含	〃	

土壙－85（第416図）

1955	壺形土器	19.0	—	—	○二重口縁で、大きく外反する。	鈍い黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1956	〃	—	—	—	○頸部は短かく、下方へひらく。	〃	小礫を含む	〃	
1957	甕形土器	19.0	—	—	○口縁部は短かく立ちあがる。	浅黄橙色	細砂	〃	
1958	壺形土器	—	6.0	—	○底部内面はハケメ。	鈍い黄橙色	〃	〃	
1959	高杯形土器	—	—	—	○口縁部は直線的にひらく。	灰白色	〃	〃	○小破片。

土壙－86（第417図）

1960	甕形土器	14.2	—	—	○口縁部クシガキ沈線	灰白色	微砂	良好	

溝－158（第420図）

1961	壺形土器	22.4	—	—	○口縁部内外面ともヨコナデ。	浅黄橙色	細砂	良好	
1962	〃	19.2	—	—	○口縁部は頸部から緩やかに外反する。	灰白色	〃	〃	○口縁部のみ復元
1963	〃	18.8	—	—	○口縁部は頸部から著しく外反する。	黄橙色	細かい胎土	〃	
1964	〃	14.4	—	—	〃	浅黄橙色	細砂	〃	○小破片。
1965	〃	17.2	—	—	○口縁部は二重口縁となる。	鈍い橙色	〃	〃	〃
1966	〃	16.5	—	—	〃	〃	〃	〃	
1967	〃	16.0	—	—	○頸部は短かく、内面はヨコヘラケズリ。	浅黄橙色	〃	〃	
1968	〃	19.0	—	—	○口縁部は曲屈して上方へのびる。	鈍い黄橙色	〃	〃	○小破片。
1969	〃	—	—	—	○頸部は短かい。	〃	〃	〃	
1970	〃	—	—	—	○頸部は短かい。内面はハケメ。	〃	〃	〃	○小破片。
1971	〃	—	—	—	○頸部に突帯を配する。	橙色	小礫を含む	〃	
1972	〃	—	—	—	○頸部は筒状を呈し、内外面ともヘラミガキ	〃	精製粘土	〃	
1973	〃	16.0	—	—	○口縁部は複合口縁で、口縁は内傾する。	鈍い橙色	細砂	〃	
1974	〃	—	—	—	○口縁部は複合口縁。円形浮文。	鈍い黄橙色	細砂	良好	○小破片。
1975	〃	8.5	—	—	○口縁部は短かく直立する。	浅黄橙色	精製粘土	〃	〃
1976	甕形土器	12.5	—	—	○口縁部は短かく外反する。内面ユビナデ。	〃	細砂	〃	○黒斑。
1977	〃	10.2	—	17.5	○底部は丸底。外面は粗いハケメ。	鈍い黄橙色	〃	〃	○煤付着。
1978	〃	12.6	—	—	○口縁部は外反する。	黄橙色	〃	〃	
1979	〃	13.8	—	—	○外面は粗いハケメ、内面はヨコヘラケズリ	鈍い黄橙色	〃	〃	○付着。
1980	〃	11.4	—	—	○口縁部はくの字状に外反する。	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1981	〃	10.6	3.4	13.6	○胴部外面はハケメ、内面はナデ。	〃	〃	〃	○煤付着。
1982	〃	16.8	—	—	○肩部内面は指頭圧痕。外面は粗いハケメ。	〃	〃	〃	
1983	〃	11.6	—	—	○肩部内面はヨコヘラケズリ。	灰白色	〃	〃	
1984	鉢形土器	21.6	—	—	○口縁部は短かく外反したあと上方へのびる	浅黄橙色	〃	〃	○小破片。
1985	甕形土器	15.0	—	—	〃	鈍い橙色	〃	〃	〃
1986	〃		—	—	〃	浅黄橙色	細かい胎土	〃	〃
1987	〃	13.0	—	—	○口縁部はくの字状に外反する。	鈍い黄橙色	細砂	〃	〃
1988	〃	9.6	—	13.6	○底部は丸底。	浅黄橙色	〃	〃	○完形品。
1989	〃	12.8	—	—	○口縁部は内湾する。	〃	〃	〃	○小破片。
1990	〃	13.5	—	—	○口縁部外面はナデ。	鈍い黄橙色	〃	〃	〃
1991	〃	—	—	—	○口縁部はくの字状に外反する。	褐灰色	微砂	〃	〃
1992	〃	—	—	—	○口縁端部は屈曲する。	鈍い黄橙色	細砂	〃	〃
1993	〃	14.4	—	24.3	○口縁部外面はクシガキ。肩部に刺突文あり	鈍い赤橙色	〃	〃	
1994	〃	15.0	—	—	○口縁部外面はクシガキ。	鈍い黄橙色	〃	〃	○煤付着。
1995	〃	14.6	—	—	〃	鈍い橙色	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1996	鉢形土器	19.0	—	—	○口縁部はく字状に外反する。	浅黄橙色	砂礫を含む	良好	○外面は磨滅。
1997	〃	27.6	6.2	15.6	○底部は小さな平底である。	〃	〃	〃	○口縁部に欠損。
1998	〃	18.8	—	—	○口縁端部をわずかに拡張する。	黄橙色	細砂	〃	○小破片。
1999	〃	14.0	—	—	○口縁部にくびれがある。	灰黄色	〃	〃	○台部欠損。
2000	〃	15.0	—	—	〃	黄橙色	〃	〃	〃
2001	〃	12.2	3.2	5.6	○口縁部は上方へ屈曲する。	橙色	精製粘土	〃	
2002	〃	11.4	—	—	○口縁部にくびれがある。	浅黄橙色	細砂	〃	
2003	〃	9.8	—	7.9	○外面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	〃	〃	〃	
2004	〃	9.2	—	—	○口縁端部は内湾する。	鈍い黄橙色	〃	〃	
2005	〃	9.2	—	7.0	○底部外面はヘラケズリ。	灰白色	〃	〃	○黒斑。
2006	〃	10.6	—	5.4	○外面はヨコヘラミガキ。	暗灰色	〃	〃	○2分の1あり。
2007	甕形土器	13.6	—	—	○内面はうすいハケメ。	鈍い橙色	小礫を含む	〃	○小破片。
2008	鉢形土器	14.8	—	—	○外面はナデ。	鈍い黄橙色	細砂	〃	○2分の1あり。
2009	〃	14.0	—	—	○深さは浅い。内面はナデ。	浅黄橙色	微砂	〃	○外面は磨滅。
2010	〃	13.8	—	—	○外面下半はヘラケズリ。	鈍い橙色	細砂	〃	○2分の1あり。
2011	壺形土器	9.0	—	8.7	○底部は丸底。	鈍い黄橙色	〃	〃	○完存。
2012	〃	11.5	—	—	○外面はタテヘラミガキ。	黄橙色	精製粘土	〃	
2013	〃	6.8	—	—	○内面はユビナデ。	鈍い黄橙色	細砂	〃	
2014	〃	8.0	—	7.9	○内面はヘラケズリ。	浅黄橙色	〃	〃	○完存。
2015	〃	9.8	—	—	○胴部は小さい。	鈍い橙色	〃	〃	○小破片。
2016	〃	8.4	—	—	○口縁部は内外面ともヨコナデ。	灰白色	〃	〃	○胴部欠損。
2017	鉢形土器	4.8	—	3.8	○手担ね。	浅黄橙色	〃	〃	○完存。
2018	壺形土器	4.8	—	—	○口縁部外面はナデ。	〃	〃	〃	
2019	〃	10.8	—	—	○口縁部はくの字状に外反する。	鈍い黄橙色	〃	〃	
2020	〃	12.0	—	—	○口縁部は直線的に長く外反する。	黄橙色	精製粘土	〃	
2021	底部	—	11.4	—	○成形がいびつ。	浅黄橙色	細砂	〃	○黒斑。
2022	〃	—	8.0	—	○底部は平底。	鈍い黄橙色	〃	〃	〃
2023	〃	—	5.4	—	○底部は外湾する。底部はヘラミガキ。	浅黄橙色	〃	〃	
2024	〃	—	5.5	—	○底部は外湾する。底部は粗いハケメ。	鈍い橙色	〃	〃	○内面に炭化物。
2025	〃	—	2.0	—	○外面下半部ヘラケズリ。	浅黄橙色	〃	〃	
2026	〃	—	4.6	—	○底部は厚い。	〃	〃	〃	
2027	〃	—	2.7	—	○底部は小さな平底。	黄橙色	精製粘土	〃	
2028	〃	—	—	—	○底部は厚い。	〃	〃	〃	
2029	〃	—	—	—	○底部は丸底。	灰白色	細砂	〃	
2030	〃	—	3.2	—	○成形はいびつ。	黄橙色	礫を含む	〃	
2031	〃	—	4.6	—	○底部は厚い。	浅黄橙色	精製粘土	〃	
2032	脚部	—	9.0	—	○脚の高さは低い。	〃	細砂	〃	
2033	台付鉢形土器	—	4.6	—	○脚部は小さい。	淡赤橙色	〃	〃	
3034	〃	—	7.8	—	○胴部は内外面ともヘラミガキ。	黄橙色	精製粘土	〃	
2035	高杯形土器	13.4	—	—	○外面にタタキメ。	灰白色	細砂	〃	
2036	〃	16.0	—	—	○杯部底は平坦。	鈍い黄橙色	〃	〃	
2037	〃	—	11.4	—	○杯部と脚部の接合部はヘラケズリ。	黄橙色	〃	〃	
2038	〃	—	—	—	〃	〃	精製粘土	〃	
2039	〃	—	—	—	○外面はナデ。	鈍い黄橙色	細砂	〃	
2040	〃	—	—	—	○脚部は細長い。	灰白色	〃	〃	○外面は磨滅。
2041	〃	—	8.2	—	○脚裾部は薄く、外方へひろがる。	鈍い褐色	〃	〃	
2042	〃	—	7.4	—	○脚部は小さい。	黄橙色	〃	〃	○外面は磨滅。
2043	〃	—	—	—	○円孔は4個。	〃	精製粘土	〃	〃
2044	鼓形器台	17.8	—	—	○内外面とも丹塗り。	鈍い赤褐色	細砂	〃	
2045	器台形土器	9.4	—	—	○台部は浅い。	鈍い黄橙色	〃	〃	

溝－163（第428図）

2046	·	7.0	—	—	○内外面共にヨコナデ。	灰色	微砂含む		

溝－164（第429図）

2047	坩形土器	10.5 10.0	—	11.1	○口頸部は内外面ともハケメ後にナデ。 ○胴部外面下半は不定方向のヘラケズリ。	灰褐色	砂粒含	良好	○黒斑あり。

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2048	壺形土器	12.0	—	—	○口縁部内外面とも横位のナデ。	黄橙色	砂粒多含	普通	
2049	〃	20.8	—	—	〃	淡褐灰色	砂粒含	良好	
2050	〃	17.0	—	—	○内外面とも横位のナデ。	灰褐色	〃	普通	
2051	〃	16.0	—	—	〃	橙灰色	〃	良好	
2052	〃	13.0	—	—		漆褐灰色	微砂含	〃	
2053	甕形土器	13.5	—	—	○口縁部は内外面とも横位のナデ。	黄灰色	砂粒含	普通	
2054	〃	14.5	4.5	32.5	○胴部外面はハケメ後に強いナデ。	淡褐灰色	〃	良好	
2055	小形甕形土器	7.2	—	7.7	○外面および口縁部内面はハケメ後にナデ。	淡乳褐色	細砂含	〃	○黒斑あり。
2056	甕形土器	10.6	—	13.0	○口縁部外面はヘラケズリ後に横位のナデ。	淡橙灰色	砂粒含	〃	
2057	〃	10.6	—	—	○口縁部内外面とも横位のナデ。	淡黄灰色	〃	〃	○外面煤付着。
2058	〃	15.5	—	—	〃	灰橙色	〃	〃	〃
2059	鉢形土器	18.8	—	10.4	○体部内外面ヘラケズリ後にヘラミガキ。	灰褐色	〃	〃	〃
2060		—	3.6	—	○体部外面はタタキノ。	淡黄灰色	精製粘土	〃	
2061	台付鉢形土器	—	4.2	—	○体部外面はナデ。	〃	砂粒含	〃	
2062	〃	—	8.4	—	○脚部外面はヘラケズリ後にナデ。	黄灰色	微砂含	〃	
2063	甕形土器	—	3.3	—	○底部は若干上げ底。	灰橙色	微砂多含	〃	
2064		—	3.2	—	○体部は内外面ともナデ。	灰褐色	微砂若干	〃	
2065	小形鉢形土器	6.8	—	4.9	○内外面ともナデ。	淡灰褐色	砂粒含	〃	○黒斑あり。
2066	高杯形土器	14.4	11.0	10.4	○外面および杯部内面はナデ。	橙灰色	〃	普通	
2067	〃	12.2	10.0	11.9	○杯部内面と脚部外面はハケメ後にナデ。	淡黄褐色	〃	良好	
2068	〃	—	11.5	—	○杯部内面はヘラミガキ。	橙灰色	〃	〃	
2069	直口壺形土器	8.2	—	—		灰橙色	〃	普通	○剥落顕著。
2070・71	台付直口壺形土器	—	—	—	○外面はヘラミガキ。	〃	〃	〃	

溝－166（第431図）

2072	杯蓋	15.0	—	3.0		青灰色	緻密	堅緻	
2073	〃	12.3	—	—		〃	〃	〃	

古墳時代水田層（第437図）

2074	杯蓋	14.0	—	4.8	○ロクロ回転は右。	灰色	砂粒含	堅緻	
2075	杯	13.0	—	—	〃	〃	〃	〃	

包含層（第436図）

2076	甕形土器	—	—	—	○縁端内面へ肥厚。口頸部ヨコナデ。	にぶい橙色	砂粒多し	良好	○小破片。
2077	〃	—	—	—	○口縁端を上方へつまみ上げる。	〃	砂粉細砂多	〃	〃
2078	高杯形土器	14.0	—	—	○4個の円孔。	橙色	精製粘土	〃	
2079	〃	—	—	—	○柱状部内面にシボリメ。	鈍い黄橙色	〃	〃	○½弱残存。
2080	鉢形土器	11.6	—	—	○浅い皿状。	黄橙色	〃	〃	○内面に布目圧痕
2081	鼓形器台	—	—	—	○中央部が小さくなる。	朱色	細砂	〃	○内外面丹塗り。
2082	杯蓋	14.0	—	4.5	○天井部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	灰白色	細砂含む	〃	○ロクロ回転右。
2083	〃	13.0	—	—	○天井部外面ナデ、他はヨコナデ。	〃	細砂多し	〃	○¼残存。
2084	〃	12.0	—	3.6	○天井部外面不定方向ナデ。内面もナデ。	灰色	〃	〃	○復元完形。
2085	〃	12.2	—	3.5	○天井部外面ヘラケズリ。	灰白色	微砂	〃	
2086	〃	11.0	—	3.2	○天井部外面荒いヘラケズリ。	灰色	細砂含む	〃	○ロクロ回転右。
2087	〃	—	—	—	○天井部ヘラケズリの後ナデ。	灰白色	精良	〃	○小破片。
2088	杯身	14.4	—	—	○底部外面ヘラケズリ、口縁端に軽い凹線。	灰色	〃	良	○⅙強残存。
2089	〃	—	—	—	○底部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	〃	微砂含む	良好	○ロクロ回転右。
2090	〃	—	—	—	○底部ヘラオコシナデ、他はヨコナデ。	暗灰色	細砂含む	〃	○ロクロ回転右。
2091	杯蓋	—	—	—	○天井部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	灰色	微砂含む	〃	○ロクロ回転左。

柵列状遺構（第441図）

2092	杯				○口縁部に端面を残す。内面仕上げナデ。	淡灰色	砂粒含	良好	
2093	〃				○口縁部に陵線を残す。	灰色	〃	〃	
2094	〃				〃	淡灰色	〃	〃	
2095	〃				○底部はヘラオコシ。	白褐色	〃	不良	
2096	〃				○内外面ヨコナデ。	淡灰色	〃	良好	
2097	〃				〃	淡灰褐色	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
包含層 (第442図)									
2098	杯身	—	—	—	○内外共にヨコナデ。	淡灰色	細砂	良好	○「棱椀」
2099	〃	—	12.0	—	○底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	灰白色	〃	不良	
2100	〃	—	10.0	—	〃	灰青色	白色砂含む	良好	
2101	〃	—	9.6	—	○底面ヘラケズリ、内底面不定方向ナデ。	灰色	砂粒細砂多	〃	○½弱残存。
2102	〃	—	11.9	—	○底面外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	〃	細砂多し	〃	○⅙残存。
2103	〃	13.0	—	4.1	○底部外面未調整、他はヨコナデ。	青灰色	大粒の砂含	〃	○ロクロ回転右。
2104	甕形土器	—	—	—	○口縁部ヨコナデ、他はハケメ。	淡赤褐色	粗砂多く含		
2105	杯蓋	17.0	—	—	○内外面共にヨコナデ。	乳白色	細砂含む	不良	○黒書あり。
2106	杯身	15.0	9.1	5.2	〃	青灰色	〃	良好	○内面底部マメツ
2107	〃	—	—	—	〃	灰青色	白色微砂含	〃	
2108	〃	—	—	—	〃	灰白色	細砂含む	〃	
2109	〃	—	—	—	〃	橙色	〃	〃	
2110	〃	—	—	—	〃	灰色	〃	〃	
2111	椀	—	5.6	—	○底部外面糸切り。他はヨコナデ。	暗灰色	微砂含む	〃	
2112	鉢	—	—	—	○内外共にヨコナデ。	灰白色	粗砂含む	〃	
2113	椀	11.8	—	—	○内外面ヨコナデ。	淡灰色	砂粒細砂含	良	○⅙残存。
2114	〃	12.9	7.2	4.6	○底面内外不定方向ナデ。他はヨコナデ。	〃	砂粒細砂多	〃	○½残存。

竪石調査区遺構・遺物一覧表

表－37　竪石調査区井戸一覧表

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
53	竪石	70×117	円形	高杯・敲石	百・後・Ⅲ

表－38　竪石調査区土壙一覧表

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
87	竪石	192× 16	隅丸長方形	甕	
88		150× 56	長楕円形		

表－39　竪石調査区溝一覧表

番号	区名	幅 (cm)	深さ (cm)	断面形	出土遺物	時期
172	竪石	160～180	37	逆台形	甕	百・前
173	〃	150	56	U字形	壺・甕・高杯	百・後・Ⅲ
174		20	10	〃		

表－40　竪石調査区土製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
462	26	有孔円盤	竪石		石	3.7	37	6	11.69	
〃	27	土錘	〃		土	45	12	5	7.2	

表－41　竪石調査区石器・石製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
455	537	磨石 (?)	竪石	包含層		127.0	82.0	69.0		
462	538	石鏃	〃	〃	サヌカイト	23.0	18.0	2.5	0.87	Ⅱ ほぼ完
〃	539	〃	〃	〃	〃	—	14.5	3.0	0.71	Ⅱ．欠
〃	540	〃	〃	〃	〃	13.0	11.0	1.5	0.23	Ⅰ ほぼ完
〃	541	石錐	〃	〃	〃	38.0	6.0	5.0	1.78	
〃	542	打製石庖丁	〃	〃	〃	73.0	41.0	8.0	32.68	
〃	543	スクレイパー	〃	〃	〃	—	49.0	6.0	17.93	
〃	544	〃	〃	〃	〃	69.0	30.0	5.0	16.17	
〃	545	〃	〃	〃	〃	—	24.0	5.0	6.29	

包含層（第450・451図）　表－42　竪石調査区土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2115	深鉢形土器	—	—	—	○口縁部近くに巻貝の条痕が沈線風に。	灰褐色	粗砂・雲母	アマイ	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2116	深鉢形土器	—	—	—	○口縁部下に巻貝の沈線。	褐色	石英粒	アマイ	
2117	〃	—	—	—	○内外面に巻貝による沈線。	〃	〃	良好	
2118	〃	—	—	—	○外面に巻貝による沈線4本。	淡褐色	石粒・石英粒	アマイ	○風化がひどい。
2119	〃	—	—	—	○外面は二枚貝の条痕。	黒褐色		良好	
2120	〃	—	—	—	○口縁外面に巻貝の沈線。 ○外面は巻貝の条痕の調整。	褐色	粗砂	〃	○内面は風化がひどい。
2121	〃	—	—	—	○巻貝の沈線。	〃	細砂	〃	
2122	〃	35+	—	—	○波状口縁は残存で2ヶ所。口唇部に巻貝の条痕。口縁外面は巻貝の調整、胴下部はミガキ。	茶褐色	粗砂	〃	
2123	〃	—	—	—	○巻貝の沈線。胴部下半は巻貝の調整。	褐色	細砂・石英粒	〃	
2124	〃	—	—	—	○巻貝の沈線と扇状押捺文。	〃	粗砂・石英粒	〃	
2125	〃	—	—	—	○外面は二条貝条痕、内面は巻貝の条痕。	〃	細砂・石英粒	〃	
2126	〃	48+	—	—	○口唇部の突起は2ケ所。口縁部外面は巻貝。胴部下は巻貝の調整。口縁部内面は二枚貝。胴部下は巻貝の調整。	〃	粗砂 石英粒多い	〃	
2127	〃	—	—	—	○口縁部外面に段を有する。内面に沈線。	(内)淡黒褐色 (外)淡乳灰褐色	細砂	〃	
2128	〃	—	—	—	○口縁外面に細い条痕。胴部下は削り。	茶灰色	粗砂 滑石	〃	
2129	〃	—	—	—	○口縁内面に沈線。	褐色	細砂	〃	
2130	〃	—	—	—	〃	黒褐色	微砂	〃	
2131	〃	—	—	—	○口縁内面は二枚貝の条痕。	暗茶褐色	細砂	〃	○スス付着。
2132	〃	—	—	—	○口唇部にキザミ。	淡灰色	石粒 石英粒	〃	
2133	〃	—	—	—		(外)暗茶灰色 (内)茶褐色	〃	〃	
2134	〃	—	—	—		茶褐色	細砂	〃	
2135	〃	—	—	—		(外)淡白灰色 (内)暗白灰色	石粒 石英粒	〃	
2136	〃	—	—	—	○口縁部外面は条痕。内面の口縁上半は条痕、下半は平滑。	(外)暗茶灰色 (内)茶褐色	細砂	〃	
2137	〃	—	—	—		茶褐色	粗砂	モロイ	
2138	〃	—	—	—	○口縁内面は平滑。	淡暗茶褐色	細砂	良好	
2139	〃	—	—	—		淡褐色	細砂 石英粒	〃	
2140	〃	—	—	—	○突帯のキザミ不明。	茶褐色	微砂	〃	
2141	〃	—	—	—	○口縁内外面は平滑。	(外)茶褐色 (内)暗茶灰色	細砂	〃	
2142	〃	—	—	—		茶褐色	〃	〃	
2143	〃	—	—	—	○口縁内外面は平滑。	〃	〃	モロイ	
2144	〃	—	—	—		淡灰褐色	微砂	良好	
2145	〃	—	—	—	○口縁内面は平滑。	(外)暗黒褐色 (内)茶褐色	粗砂	モロイ	
2146	〃	—	—	—		淡暗茶褐色	微砂	良好	
2147	〃	—	—	—	○突帯にキザミなし。口縁外面は巻貝。	暗茶褐色	石粒 石英粒	良好	
2148	〃	—	—	—		褐色	粗砂	〃	
2149	〃	—	—	—	○口縁外面は削り、内面は平滑。	(外)淡暗茶褐色 (内)茶褐色	細砂	〃	
2150	〃	—	—	—		茶褐色	微砂	〃	
2151	〃	—	—	—		淡灰褐色	細砂 石英粒	〃	
2152	鉢形土器	—	—	—		暗茶褐色	〃	〃	○スス付着。
2153	〃	—	—	—	○削りによる段が存在。段より下半は削り。内面はナデ。	(外)茶褐色 (内)黒褐色	細砂 金雲母	〃	
2154	鉢形土器	—	—	—		黒褐色	細砂	〃	
2155	〃	—	—	—		暗茶褐色	〃	〃	
2156	〃	—	—	—	○内外面ともサッ痕。	淡茶褐色	金雲母	〃	
2157	〃	—	—	—		(外)淡灰茶褐色 (内)黒褐色	石粒 石英粒	〃	
2158	壺形土器	—	—	—	○丹塗り研磨。	赤褐色	微砂 雲母	〃	

溝－172（第452図）

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2159	鉢形土器	－	－	－		褐色	微砂	良好	
2160	壺形土器	－	－	－		淡灰白色	石粒	〃	

包含層（第453図）

2161	壺形土器	12.8	－	－		淡灰褐色	石英粒	良好	
2162	〃	－	－	－		茶褐色	細砂	〃	
2163	〃	－	－	－		淡褐色	石粒 石英粒	〃	
2164	〃	－	－	－		淡灰白色	微砂 石英粒	〃	
2165	〃	－	－	－		暗茶褐色	粗砂	モロイ	
2166	〃	－	－	－		乳灰白色	石英粒	良好	
2167	〃	－	－	－	○削り出しの段。	茶褐色	粗砂	〃	
2168	鉢形土器	－	－	－	○内面はナデ。	淡茶褐色	石粒 石英粒	〃	
2169	〃	－	－	－		茶褐色	粗砂	モロイ	
2170	〃	－	－	－		黒褐色	微砂	良好	
2171	〃	－	－	－		淡暗灰褐色	細砂 石英粒	〃	
2172	〃	－	－	－		淡褐色	〃	モロイ	
2173	〃	－	－	－		淡暗灰色	〃	良好	
2174	〃	－	－	－		(外)淡茶白色 (内)淡茶灰色	細砂	〃	
2175	〃	－	－	－		茶褐色	〃	〃	
2176	壺形土器(底部)	－	6.6	－		淡灰白色	微砂	〃	
2177	〃	－	7.6	－		淡褐色	石粒 石英粒	〃	

柱穴（第454図）

2178	甕形土器	－	－	－		褐色	微砂	良好	

井戸－53（第455図）

2179	高杯形土器	15.0	10.8	9.3		褐色	精製粘土	良好	
2180	〃	18.8	12.4	10.6		淡褐色	〃	〃	

土壙－87（第456図）

2181	甕形土器	－	－	－	○外面にタタキ。	暗褐色	石粒	良好	

溝－173（第459図）

2182	壺形土器	20.2	－	－		褐色	微砂	良好	
2183	〃	－	－	－		〃	石英粒	〃	
2184	〃	14.0	－	－		淡褐色	細砂	〃	
2185	〃	11.6	－	－		褐色	水漉し	〃	
2186	甕形土器	18.0	6.3	22.0		茶灰色	細砂	〃	○焼成後の穿孔。
2187	〃	15.8	－	－		褐色	〃	〃	
2188	〃	16.2	－	－		〃	微砂	〃	
2189	〃	14.0	－	－		〃	〃	〃	○風化が顕著。
2190	高杯形土器	19.0	15.0	10.7		〃	〃	〃	
2191	〃	22.0	15.0	13.0		〃	〃	〃	
2192	〃	23.0	－	－		〃	〃	〃	
2193	〃	－	10.5	－		〃	水漉し	〃	
2194	脚	－	9.8	－		淡灰色	微砂	〃	
2195	底部	－	6.0	－		暗茶褐色	〃	〃	
2196	〃	－	7.5	－		褐色	〃	〃	

水田層（溝）（第460図）

2197	壺形土器	23.4	－	－		褐色	微砂	良好	
2198	〃	－	－	－		淡灰白色	〃	〃	
2199	甕形土器	－	－	－		淡褐色	細砂	〃	

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
2200	甕形土器	—	—	—		淡灰白色	微砂	良好	
2201	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
2202	底部	—	9.0	—		〃	〃	〃	

包含層出土遺物（第462図）

2203	長頸壺	—	9.0	—		灰色	微砂	良好	

開山下調査区遺構・遺物一覧表

表－43　開山下調査区土壙一覧表

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	出土遺物	時期
89	4区	378×310× 14	不整形	なし	中世
90	3・4区	2200×250×10	長方形	〃	〃

表－44　開山下調査区溝一覧表

番号	区名	幅 (cm)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	時期
175	2区	250	49	鉢形	甕形土器	百・中・Ⅱ
176	3区	140～170	10	皿形	なし	百・後
177	〃	49～57	35	椀形	土器片	百・後・Ⅳ
178	4区	46～50	25	〃	なし	〃　?
179	5区	40～50	20	台形	〃	百・後

表－45　開山下調査区土製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
477	28	土錘	3区	包含層	土	55.95	10.9	—	6.31	

表－46　開山下調査区石器・石製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
470	546	石鏃	ひょうたん池樋門4区	水田下、不整形土壙群	サヌカイト	15.80	12.40	2.20	0.36	Ⅰ. ほぼ完

表－47　開山下調査区土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
溝－175（第466図）									
2204	甕形土器	—	—	—	○内面ハケの後ヘラミガキ。外面細かいハケ	灰褐色	砂粒細砂多	良好	○外面に煤付着。
不整形土壙群（第470図）									
2205	深鉢形土器	—	—	—	○内外面植物繊維による調整か。	褐灰色	石粒砂粒多	やや甘	○縄文土器。
2206	甕形土器	—	4.6	—	○底面オサエ・ナデ、内面ヘラケズリ。	灰褐色	砂粒細砂含	良好	○½弱残存。
水田層（第471図）									
2207	甕形土器	—	—	—	○全面剝落で調整不明。口縁端面をもつ。	鈍赤橙色	砂粒細砂多	甘い	○小破片。
中世包含層（第477図）									
2208	瓦器椀	—	—	—	○内面やや粗い暗文。口縁付近外面に暗文。	黒～灰黒色	精良・ち密	良好	○小破片。3区。
2209	土師質椀	—	—	—	○外面口縁部ヨコナデ。内面は丁寧なナデ。	浅黄橙色	精良・細砂	良	〃
2210	〃	—	—	—	○外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	〃	精良・ち密	良好	〃
2211	〃	—	4.6	—	○高台部分ヨコナデ、他はナデ。	鈍橙色	〃	〃	○⅙残存。5区。
2212	〃	—	5.0	—	○高台部分ヨコナデ、内面ナデか。	〃	砂粒多し	良	○⅙残存。4区。
2213	〃	—	5.0	—	○高台部分ヨコナデ、底面に指頭痕風の凹凸。	〃	精良・ち密	良好	○高台完存。3区。
2214	椀形土器	—	—	—	○高台部分ヨコナデ、他はナデか。	黒色赤橙色	砂粒細砂多	やや甘	○黒色土器。小破片

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
2215	土鍋	—	—	—	○脚破片。接合部付近ナデ回わす。内面ナデ	黒褐色	砂粒細砂多	良好堅	○4区。
2216	こね鉢	—	—	—	○内外面ヨコナデ。口縁端面他より暗色。	灰白色	〃	良好	○小破片。3区。
2217	椀	—	6.5	—	○底面は回転ヘラ切り。内面にロクロ目。	灰色	細砂多し	〃	○1/8残存。3区。
2218	平瓶	6.5	—	—	○内外面ヨコナデ。口縁部はのせて接合。	灰～灰白色	砂粒細砂多	やや甘	○3/4弱残存。3区
2219	杯	10.4	—	—	○内外面ヨコナデ。体部に鈍い稜をもつ。	淡灰色	細砂多し	良	○1/6残存。3区。
2220	壺	—	—	—	○つまみ部分の破片。ヨコナデ。	灰色	細砂を含む	良好	○5区。
2221	高杯形土器	—	—	—	○内外面剝落。挿し込み式の柱状部接合。	鈍橙色	砂粒細砂多	良	○3区。
2222	甕形土器	—	—	—	○口縁部分ヨコナデ。頸部に強いヨコナデ。	鈍橙色	多〃	良好	○小破片。3区。
2223	〃	—	—	—	○口縁立ち上がり外面クシ。内外面ヨコナデ	褐灰色	〃	良	〃

四元調査区遺構・遺物一覧表

表—48 四元調査区土壙一覧表

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	断面形	出土遺物	時期
91	4区	160× 75×44	長楕円形	U字形	なし	弥・後
92	5区	80× 80×16	不整円形	〃	〃	〃
93	3区	140× 70×60	長楕円形	逆台形	〃	〃

表—49 四元調査区溝一覧表

(cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	断面形	出土遺物	時期
180	1区	400×110×25		U字形	なし	古・前
181	2区	1400×120×40		V	〃	弥・後
182	〃	400×110×27		U	土器若干　晩期・前期含　土錘	古・前
183	1区	500×400×60		U	〃　晩期を含む	弥・後
184	〃	800× 80×12		U	〃	弥・後
185	5区	1100×100×30		V	〃	弥・後
186	〃	500×160×55		U	〃	古・前
187	4区	1600×100×35		U	長頸壺	百・後・Ⅱ
188	3区	1500×120×40		V	土器少量　弥中含	弥・後
189	〃	1100×160×50		U	若干　晩期も含む	古・前
190	5区	500×100×25		V	土器溜り	弥・後
191	〃	600× 60×11		U	なし	古・前
192	6区	500×　×18		U	〃	〃
193	〃	2000×200×40		V	土錘・投弾	弥・後
194	〃	600×120×40		V	〃	弥・後
195	〃	600×　×30		V	〃	古・前
196	7区	800×　×20		U	土器細片	中世
197	〃	1000× 90×15		U	〃	〃

表—50 四元調査区土製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
	29	土錘	1区	溝—182	土	40.35	36.90	36.65	51.27	
	30	〃	6区	溝—193	〃	63.35	55.35	—	109.83	破損品

表—51 四元調査区石器・石製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
486	547	敲石	7区	茶褐色砂層	サヌカイト	70.4	118.3	40.4	153.6	石斧転用
〃	548	石鏃	〃	青灰色礫層	〃	21.8	12.2	3.2	0.80	Ⅰほぼ完
〃	549	〃	〃	茶褐色砂	〃	14.8	20.2	4.4	1.15	Ⅱ．欠
〃	550	〃	〃	茶褐色砂層	〃	34.9	18.5	3.4	1.46	Ⅱ．欠

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
486	551	石鏃	7区	茶褐色砂層	サヌカイト	16.8	17.8	3.6	0.80	V・欠
〃	552	〃	〃	〃	〃	10.2	9.1	7.2	0.13	欠5と同一個体
〃	553	打製石庖丁	〃		〃	63.6	42.3	8.8	28.20	
〃	554	スクレイパー	〃	〃	〃	45.4	31.9	5.5	8.05	
〃	555	〃	〃	〃	〃	51.5	56.8	12.6	38.50	
〃	556	U・F	〃	〃	〃	109.5	54.1	14.9	53.73	
〃	557	石錐	〃	〃	〃	95.3	48.3	14.7	69.80	未製品
〃	558	投弾	6区	溝－193					73.76	
〃	559	〃		黒色粘土層		54.7	48.3	40.04	153.76	
〃		スクレイパー	7区	溝断面	サカイト	33.6	39.0	7.0	12.02	
〃		スクレイパー	〃	側溝	〃	39.1	37.3	8.1	11.96	

表－52　四元調査区土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2224	深鉢形土器	－	－	－	○キザミメ凸帯。波状口縁。	黒色	細砂	良好	○小破片。
2225	〃	－	－	－	○キザミメ凸帯。削痕。	黄土色	粗砂	〃	〃
2226	〃	－	－	－	○　〃　。〃。	淡黄土色	細砂	不良	〃
2227	〃	－	－	－	○内面ミガキ。外面削り。	灰褐色	〃	良好	〃
2228	〃	－	－	－	○　〃　。　〃　。	淡茶色	粗砂	〃	〃
2229	壺形土器	15.2	7.7	25.2	○外面ヘラミガキ、ヘラガキで「木葉文」	淡灰橙色	細砂	ふつう	○丹塗り？黒斑。
2230	〃	15.9	－	－	○頸部にヘラガキ沈線1本。	淡褐色	粗砂	良好	○内面煤付着。
2231	〃	－	11.2	－	○内面はミガキか。	〃	〃	〃	○2230と同一個体。
2232	〃	20.8	－	－	○口縁端面にキザミメが巡る。	〃	細砂	良好	
2233	甕形土器	28.5	－	－	○調整はヘラミガキ。	暗灰褐色	粗砂含	〃	
2234	〃	25.1	－	－	○ヘラガキ沈線が2条巡る。	暗黄褐色	〃	〃	
2235	壺形土器	－	－	－	○ヘラ先、棒状工具による施文。	淡褐色	細砂	〃	
2236	甕形土器	17.0	－	－	○くの字外反。内外面ハケメ。	淡灰茶色	粗砂	良好	○小破片、百・中。
2237	長頸壺形土器	18.8	7.0	35.0	○口縁端に凹線文。頸部に沈線文と刺突文。	黄褐色	〃	〃	○復元完形。
2238	〃	15.0	6.8	28.5	○頸部に沈線文と刺突文。内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	〃	〃	〃
2239	甕形土器	14.0	5.0	23.0	○内面ヘラケズリ。外面ハケメ。	淡黄褐色	〃	〃	〃
2240	甕形土器	13.7	－	－	○口縁端部に7条のクシガキ平行沈線。	淡茶灰色	微砂	ふつう	○外面煤付着。
2241	〃	13.5	－	－	○　〃	灰橙色	〃	〃	○下半に煤付着。
2242	〃	16.5	－	－	○肩部にヘラ先による刺突が上下に2個	〃	〃	〃	○外面煤付着。
2243	〃	－	4.2	－		暗灰茶色	〃	〃	○　〃　。
2244	〃	15.0	－	－	○口縁端部外面に7条のクシガキ平行沈線。	灰橙色	〃	〃	
2245	〃	16.1	－	－	○口縁端部に8～9条のクシガキ平行沈線。	淡灰黄色	〃	〃	
2246	〃	14.2	－	－	〃　9～10　〃	明灰橙色	〃	〃	
2247	高杯形土器	20.6	－	－		淡灰橙色	精製粘土	や・甘い	○内面一部に黒斑。
2248	〃	－	－	－		淡黄桃色	微砂	〃	○器面剝離。
2249	甕形土器	11.4	－	－	○外面体部はタタキ	淡黄橙色	〃	〃	
2250	〃	－	5.2	－	○内面体部はハケ？	〃	細砂	ふつう	
2251	〃	－	－	－	○体部内外面ともヘラケズリ。	淡黄灰色	微砂	〃	○外面煤付着。

長谷遺跡遺構・遺物一覧表

表—53 長谷遺跡溝一覧表

番号	区名	幅 (cm)	深さ (cm)	断面形	出土遺物	時期
198	長谷	300	30	U字形	須恵器、土師器、黒色土器	中世
199	〃	70	15	皿形		〃
200	〃	600	25	〃		〃
201	〃	40	8	〃		〃
202	〃	40	10	〃		〃
203	〃	30	20	〃	土師器片	〃
204	〃	40	15	〃		〃
205	〃	45	15	〃		中世～

表—54 長谷遺跡・土製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
499	31	土錘	長谷樋門	包含層	土	35.0	—	9.0	7.01	
〃	32	〃	〃	〃	〃	34.0	—	8.0	5.03	
〃	33	〃	〃	〃	〃	(32.0)	—	8.0	7.15	
〃	34	〃	〃	〃	〃	(27.0)	—	10.0	6.24	

表—55 長谷遺跡石器・石製品一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
499	560	スクレイパー	長谷樋門	溝—198	サヌカイト	22.0	5.5	7.0	8.36	
		〃	〃	基盤層直上	〃	35.10	35.30	8.05	10.03	

表—56 長谷遺跡土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
溝—198 (第497図)									
2252	杯身	13.1	7.6	4.9	○内面底部乱ナデ。外面ヨコナデ。	淡灰褐色	砂粒多含	良好	
2253	須恵器椀	15.4	6.2	5.7	○底部糸切り。内外面ヨコナデ。	淡灰白色	砂粒含む	〃	
2254	〃	—	5.8	—	〃	白褐色	精良	良	
2255	〃	—	6.9	—	〃	灰白色	砂粒を含む	〃〃	
2256	壺	—	4	—	○底部糸切り。	暗灰色	〃	良好	○底部ヘラ記号。
2257	甕	—	—	—		〃	〃	〃	
2258	〃	—	—	—	○外面タタキ。	〃	〃	〃	
2259	〃	—	9.6	—		灰褐色	〃	〃	
2260	〃	—	—	—	○内面同心円タタキのち平行タタキ。	暗灰褐色			
2261	〃	—	—	—	〃	暗灰色			
2262	〃	—	—	—	○内外面タタキ。	灰色			
2263	〃	—	—	—	○外面・るタタキ。内面ナデ。	暗灰色	砂粒を含む	良好	
2264	緑釉椀	—	6.5	—	○高台付。	淡緑灰色	堅緻	良	
2265	〃	—	6.2	—	〃	〃	微	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2266	椀	11.7	4.1	6.5	○外面オサエ、ナデ。ヨコナデ。	淡褐色	砂粒を含む	不良	
2267	〃	13.2	—	—	〃	〃	〃	良好	
2268	〃	14.5	8.2	5.7	〃	〃	〃	〃	
2269	〃	16.8	7.5	6.3	〃	淡黄褐色	〃	〃	
2270	〃	—	9.6	—	〃	〃	〃	〃	
2271	〃	—	7.2	—	〃	淡茶褐色	〃	〃	
2272	〃	—	6.8	—	〃	淡褐色	〃	不良	
2273	黒色土器	14.3	7.6	4.2	○内面ヘラミガキ。外面ナデ、ヨコナデ。	淡黄褐色	〃	良	
2274	〃	—	6.7	—	〃	淡黒褐色	〃	不良	
2275	〃	16.5	—	—	○内面ヘラミガキ。外面ヨコナデ。	淡茶灰色	〃	良好	

包含層(第499図)

2276	杯蓋	—	—	—	○内面仕上げナデ。ヨコナデ。	灰色	砂粒含む	良好	
2277	須恵器椀	—	6.6	—	○底部糸切り。内外面ヨコナデ。	淡灰色	〃	〃	
2278	〃	—	6.4	—	〃	〃	〃	〃	
2279	〃	—	6.6	—	〃	〃	〃	〃	
2280	須恵器壺	—	13.0	—	○内面ハケ状工具。外面ヨコナデ。	灰色	〃	〃	
2281	椀	—	—	—	○内面ていねいなナデ。ヨコナデ。	白褐色	精良	良	
2282	〃	—	—	—	〃	褐色	〃	〃	
2283	〃	—	6.0	—	○貼付高台	淡黄褐色	砂粒を含む	〃	
2284	〃	—	7.9	—	〃	淡褐色	〃	良好	
2285	黒色土器椀	14.9	—	—	○内面ヘラミガキ。外面オサエ、ヨコナデ。	淡黄褐色	〃	良	
2286	〃	—	8.2	—	〃	〃	〃	〃	
2287	小皿	6.6	3.2	1.1	○内外ヨコナデ。	〃	〃	〃	
2288	〃	8.1	6.6	1.3	〃	淡褐色	〃	不良	
2289	〃	—	7.6	—	〃	〃	〃	良	
2290	緑釉椀	—	—	—		淡緑灰色	〃	良	
2291	鉢形土器	—	—	—	○肩部に刺突。	淡茶褐色	〃	良	
2292	壺形土器	13.2	8.7	27.6	○外面、内面底部ハケ。	淡黄褐色	砂粒少量含	良好	

1. 発掘前　遠景（南東から）

2. 発掘前　遠景（西から）

図版 2

1. 発掘前遠景
（北から）

2. 横田調査区　南側全景（西から）

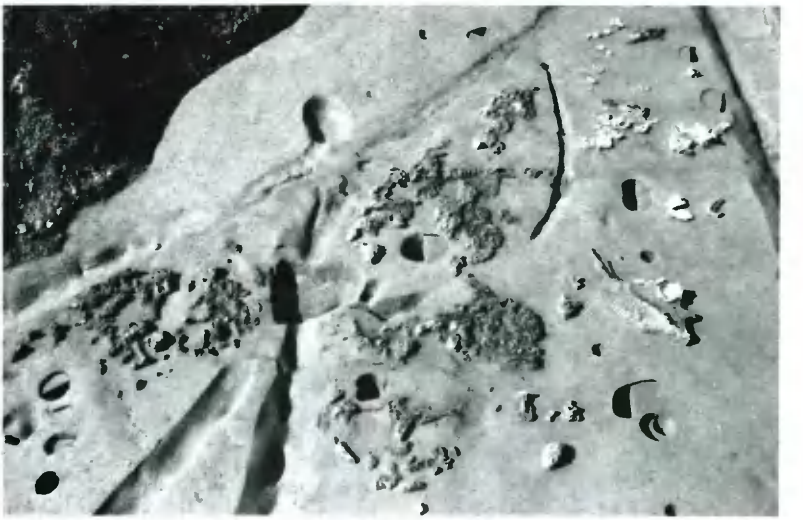
1. 弥生時代遺構（北から）

2. 弥生時代遺構（北西から）

図版 4

1. 弥生時代遺構（東から）

2. 溝－6・9・10（北東から）



1. 竪穴式住居－1（東から）

2. 竪穴式住居－1（東から）

図版 6

1.　竪穴式住居―1　遺物出土状況

2.　竪穴式住居―1　炭・焼土検出状況

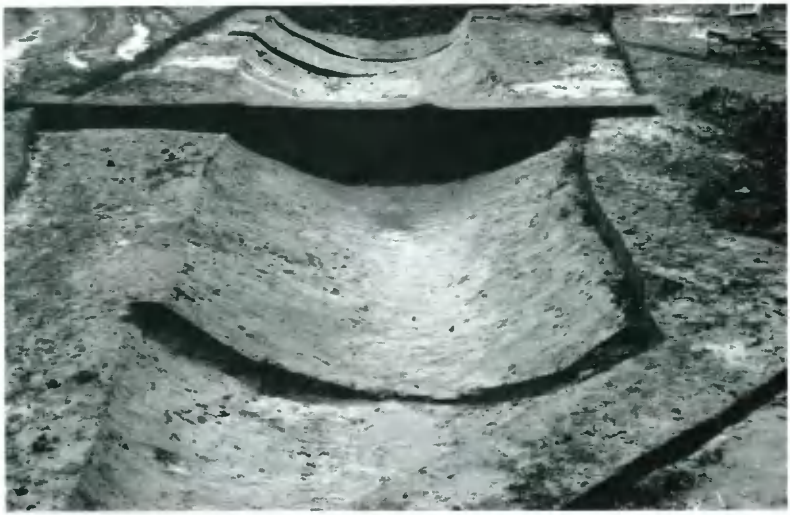
1. 土壙－4（北西から）

2. 土壙－6（南から）

図版 8

1.　溝―1（西から）

2.　溝―1　遺物出土状況（西から）

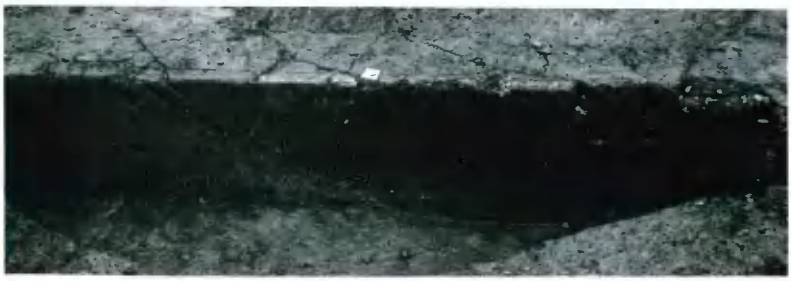


1. 溝－3（西から）

2. 溝－3　断面（西から）

図版10

1. 溝－5（東から）



2. 溝－5　断面（南から）

1. 溝－9（南西から）

2. 溝－9全景（北から）

3. 溝－9断面（西から）

図版12

1. 土壙－7（東から）

2. 土壙－15（南西から）

1. 土壙―8（南西から）

2. 土壙―10（西から）

図版14

1. 下層水田（北から）

2. 下層水田（東から）

1. 溝—17・18（南東から）

2. 溝—21～25（北東から）

図版16

1. 溝—38・40・41・42（東から）

2. 溝—39～41（西から）

1. 「島状高まり」遺構—15　東西土層（南から）

2. 「島状高まり」遺構—15　南北土層（西から）

3. 「島状高まり」遺構—15　盛土除去後溝—37・38　全景（北から）

図版18

1.　弥生時代後期水田
（南西から）

2.　弥生時代後期水田（北東から）

1. 弥生時代後期水田
（北東から）

2. 弥生時代後期水田（西から）

図版20

1. 弥生時代後期水田（北から）

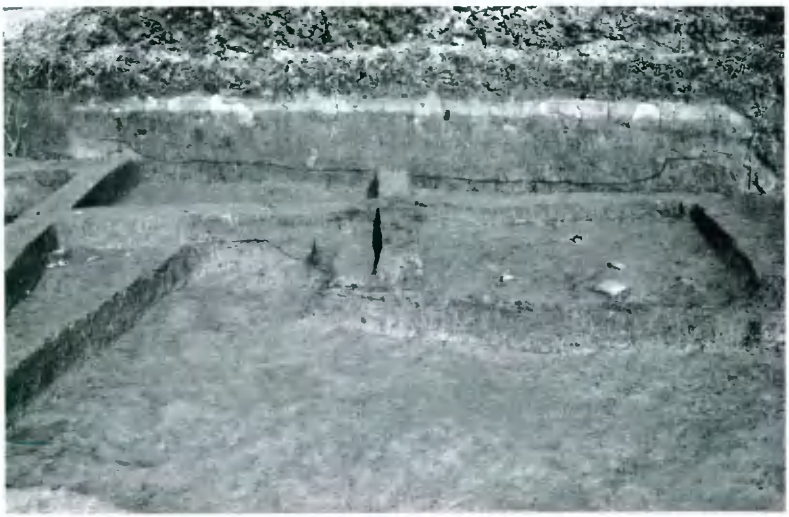
2. 弥生時代後期水田（北東から）

1. 水田・「島状高まり」遺構―15　全景（北西から）

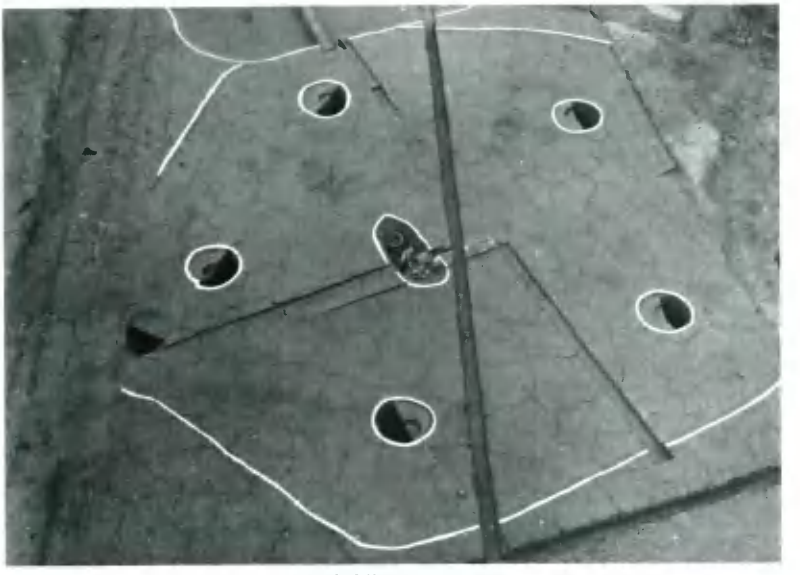
2. 微高地～水田間土層（東から）

図版22

1. 竪穴式住居―2・3（南西から）



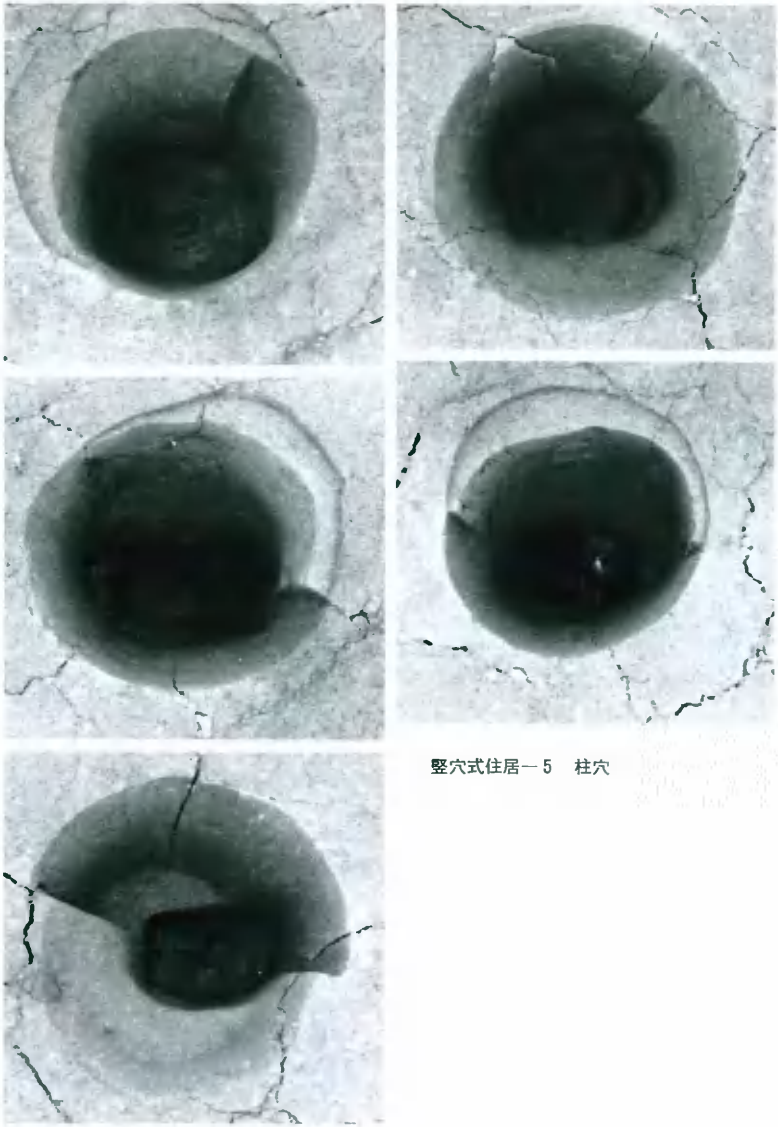
2. 竪穴式住居―4（南から）



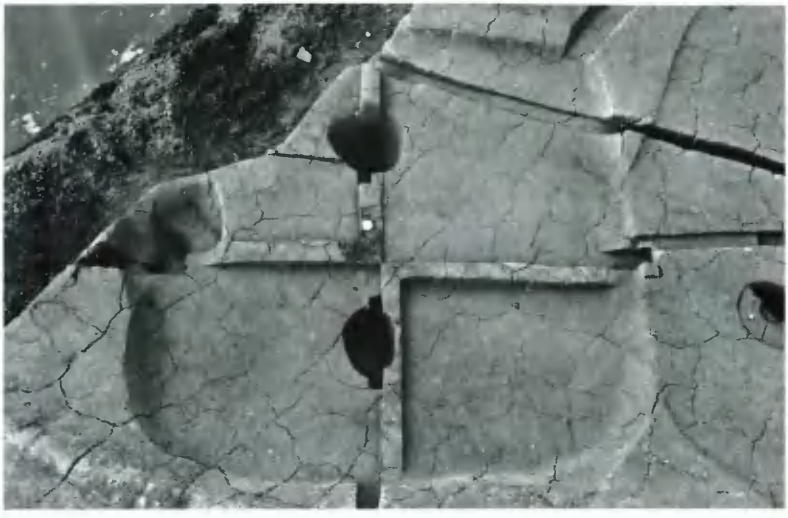
1. 竪穴式住居－5（北から）

2. 竪穴式住居－5　中央穴（東から）

図版24



竪穴式住居一5　柱穴



1. 竪穴式住居―6（東から）

2・3. 同土層断面（東から）（北から）

4. 同検出状況（東から）

図版26

1. 竪穴式住居―7
（南から）

2. 同最終床面
（南から）

3. 同遺物出土状況
（南から）

1. 竪穴式住居―8　検出状況（南西から）

2. 竪穴式住居―8　完掘（南西から）

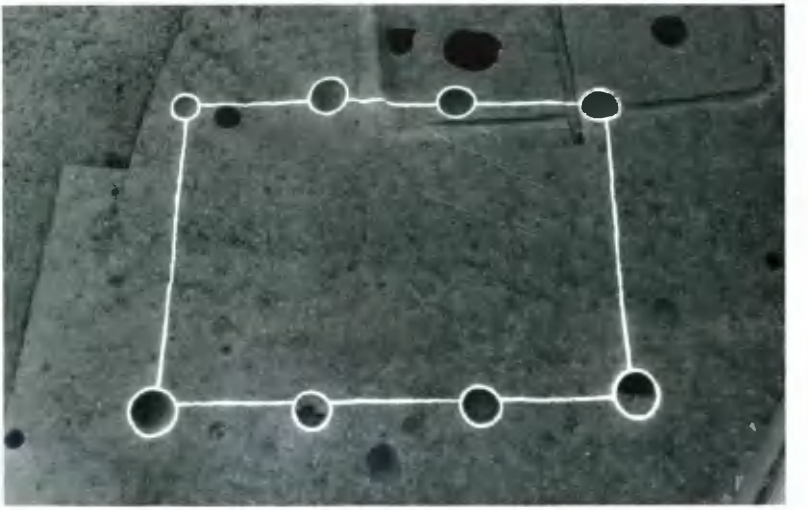
図版28

1. 竪穴式住居－9
（南西から）

2. 同上と竪穴式
住居－8付近
（南西から）

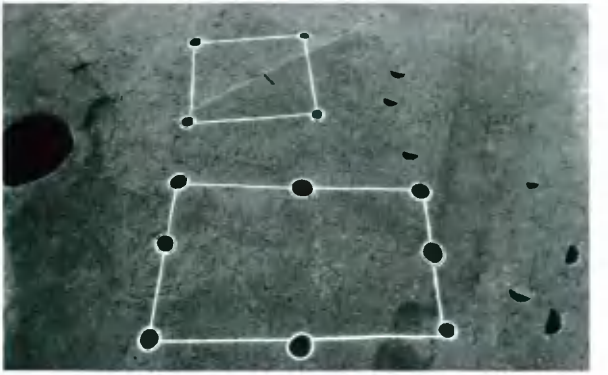
3. 竪穴式住居－9
土壙断面
（南から）

1. 古墳時代遺構群（北から）

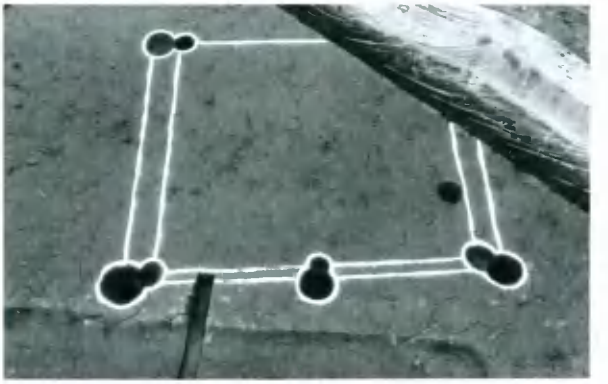


2. 建物－5（東から）

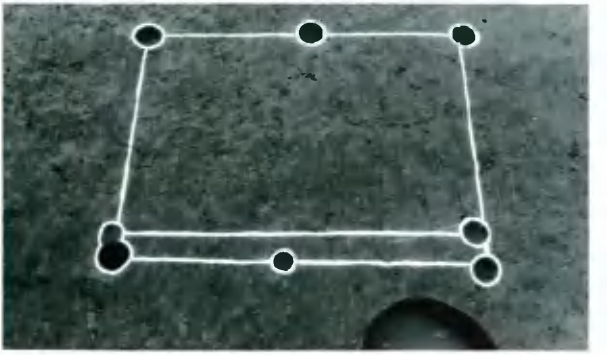
図版30



1. 建物―2・3
（東から）

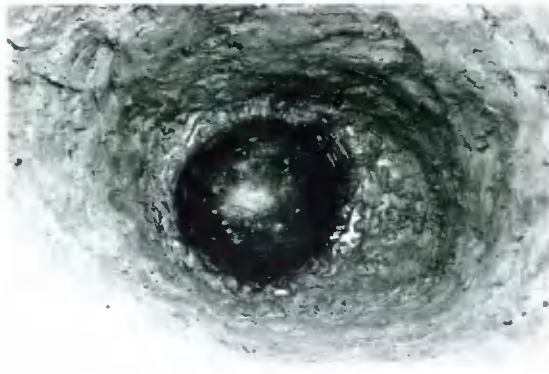


2. 建物―8
（南から）



3. 建物―4
（北から）

1. 井戸―2（南から）



2. 井戸―2　遺物近影

図版32

1. 井戸―3（東から）

2. 井戸―4（北東から）

1. 井戸―4　遺物出土状況（北東から）

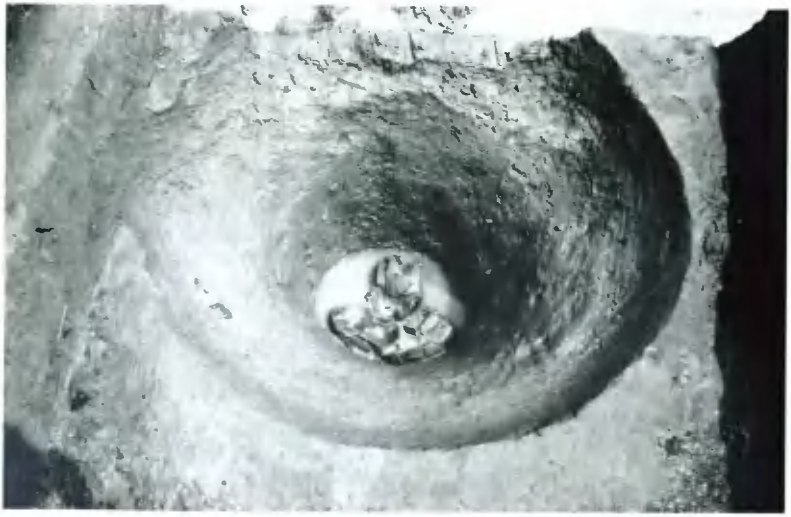
2. 井戸―5（東から）

図版34

1. 井戸―6（西から）

2. 井戸―7（東から）

1. 井戸—8　上層遺物出土状況（北東から）



2. 井戸—8　下層遺物出土状況（南西から）

図版36

1. 井戸―9（南から）

2. 井戸―9完堀（南から）

1. 井戸—10 断面（南々東から）

2. 井戸—10 上層遺物出土状況

図版38

1.　井戸―10　河原石検出状況（東南東から）

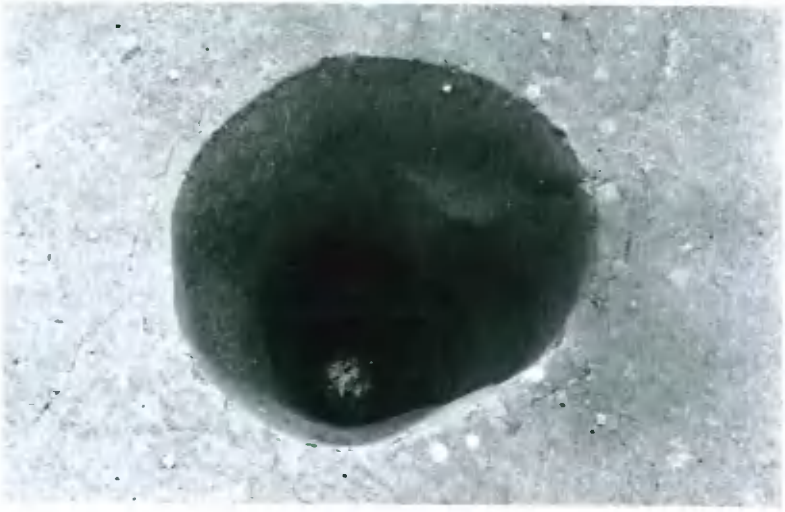
2.　井戸―10　河原石除去後（南々東から）

1. 井戸—10　下層遺物出土状況（南々東から）

2. 井戸—10　完掘（南々東から）

図版40

1. 井戸―11（東から）



2. 井戸―11完堀（東から）

1. 井戸—12半堀（西から）

2. 井戸—12完堀（西から）

図版42

1. 井戸—13半堀（西から）

2. 井戸—13完堀（南から）

1. 土壙—19（北から）

2. 土壙—23（右）24（左）（南東から）

図版44

1. 溝—64・66（北西から）
2. 溝—63・63′・66′（北西から）

3. 溝—50・51（東から）

1. 溝—52～54（北東から）

2. 溝—55・56（北東から）

図版46

1. 土器溜り－1（北から）

2. 土器溜り－1

1. 土器溜り－2（北々西から）

2. 土器溜り－2

図版48

1. 溝—69・69′
・中世柱穴群
（西から）

2. 溝—69・中世柱穴群（南から）

8

10

19

31

2

1

32

竪穴式住居・土壙出土遺物

図版50

34

35

43

45

44

46

溝出土遺物

47

48

78

79

5

6

8

1

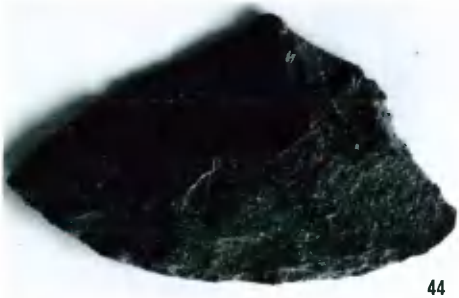
7

4

17

土壙・溝出土遺物

図版52



土壙・包含層出土遺物

竪穴式住居出土遺物

図版54

227

231

234

249

233

259

263

265

266

井戸出土遺物

274

279

281

284

298

305

309

306

井戸出土遺物

図版56

313

323

320

324

321

322

326

325

井戸出土遺物

330

331

329

339

327

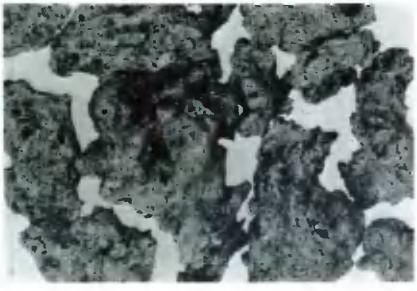
333

328

334

332

334～349


ガラス滓

1

井戸出土遺物

図版58

355

356

357

359

360

358

365

366

386

井戸出土遺物

437

455

481

479

451

493

490

494

496

土器溜り出土遺物

図版60

497

507

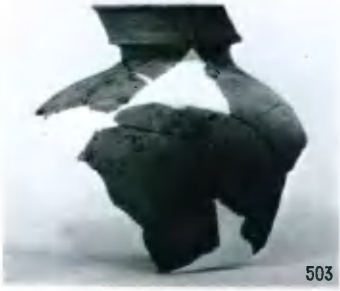
498

509

502

516

515


503

519

518

520

522 521

土器溜り出土遺物

1. 高縄手A調査区　207G　弥生時代遺構（東から）

2. 高縄手A調査区　208G　弥生時代遺構（東から）

図版62

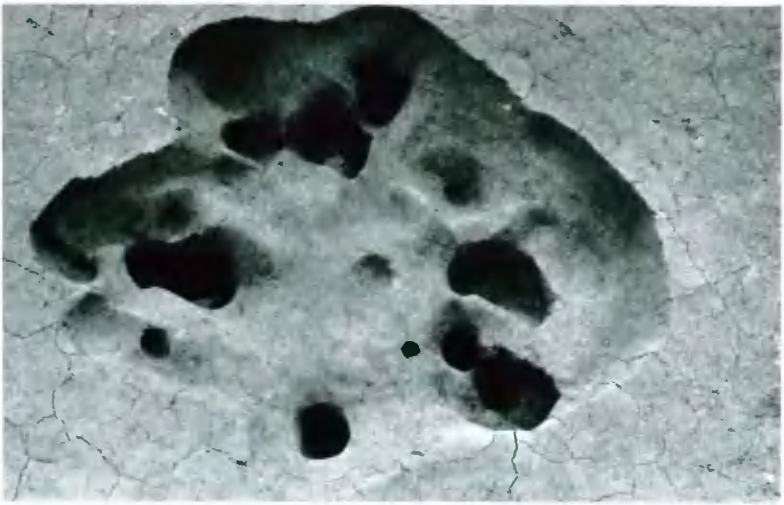
1. 207H　弥生時代遺構（東から）

2. 208H　弥生時代遺構（西から）

1. 207・8 L　弥生時代遺構（南から）

2. 209・10K　弥生時代遺構（西から）

図版64



1. 土壙—27（東から）

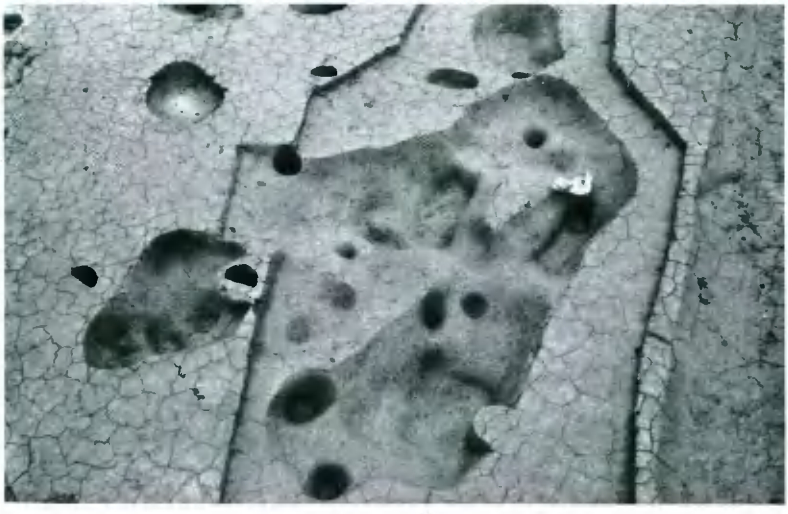
2. 209M 旧河道下がり（北々西から）

1. 208J　弥生時代前期遺構（東から）

2. 竪穴式住居―10（西から）

図版66

1. 土壙—29（南から）

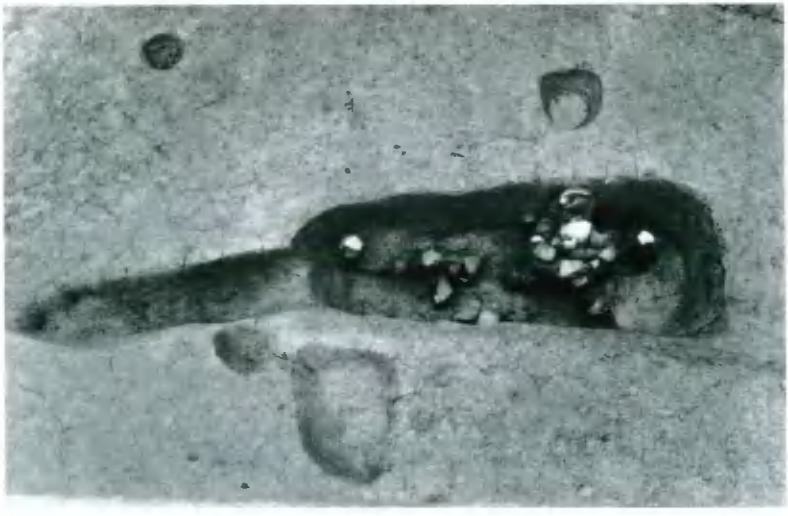


2. 土壙—33（東から）

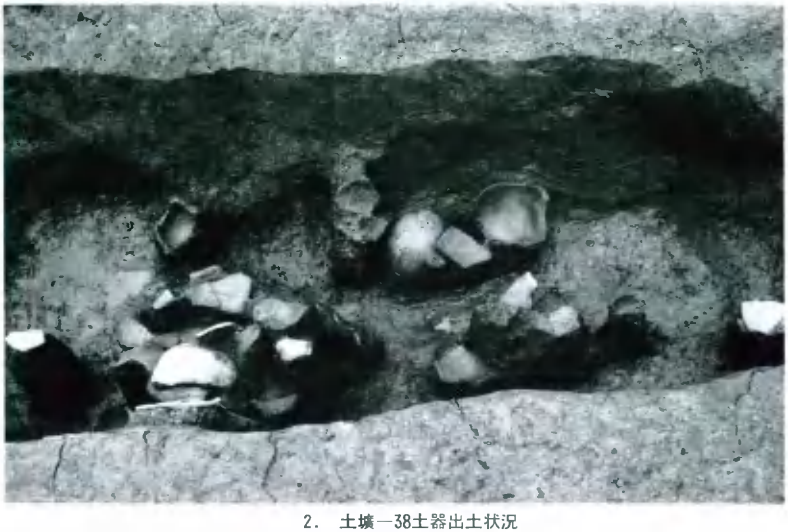
1. 土壙—35（西から）

2. 土壙—37（西から）

図版68



1. 土壙—38（南から）



2. 土壙—38土器出土状況

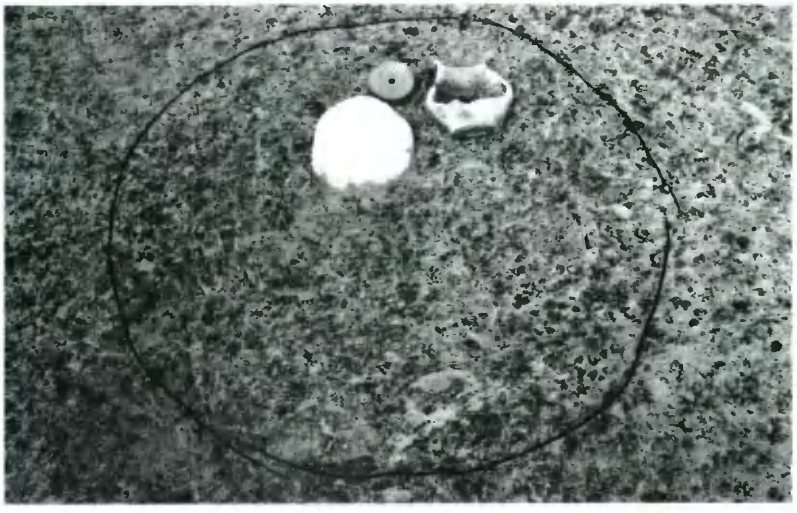
1. 土壙—39（北から）

2. 土壙—39土器出土状況

図版70

1. 土壙－48（東から）

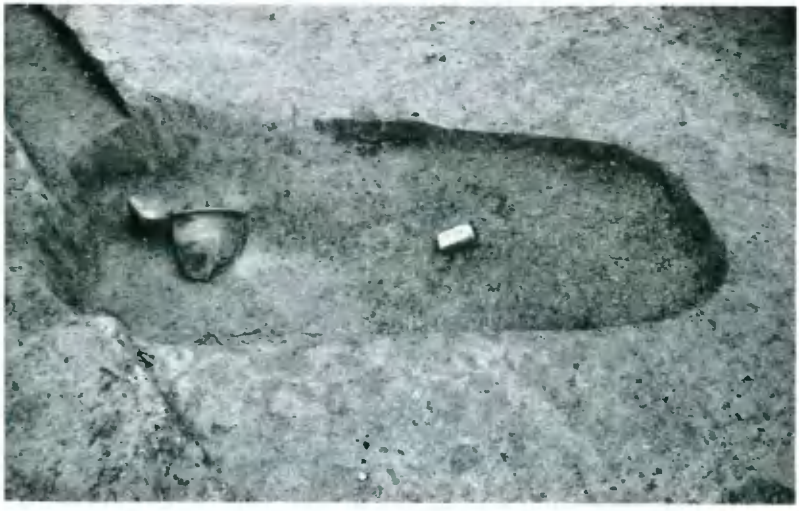
2. 土壙－42（南から）



1. 土壙—53（東から）

2. 土壙—55・56（東から）

図版72



1. 土壙—55（北西から）

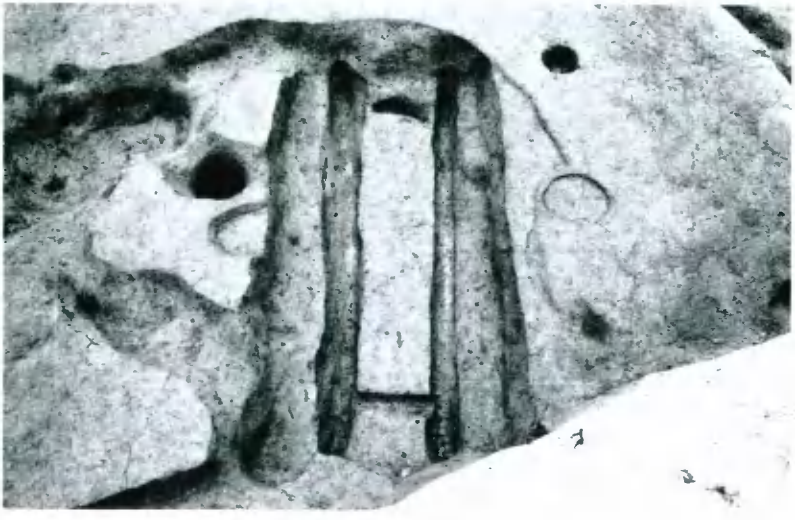
2. 土壙—56（南東から）

1. 土壙—61・61′（北西から）

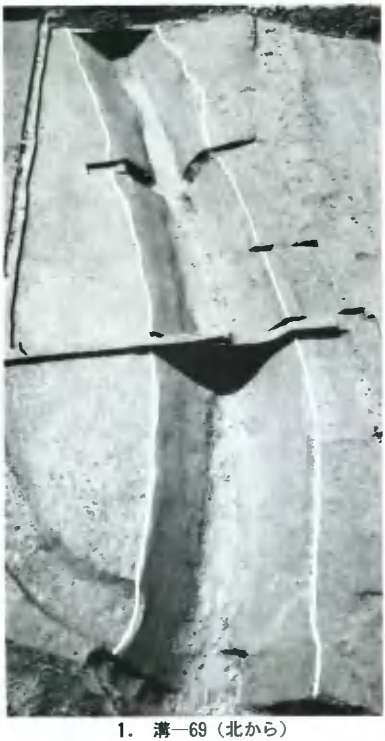
2. 土壙—62（北から）

図版74

1. 土壙―68（南東から）



2. 土壙墓―2（北東から）



1. 溝—69（北から）

2. 溝—69土器出土状況

3. 溝—69土器出土状況

4. 溝—69北壁土層断面（南から）

図版76

1. 溝—70（北から）

2. 溝—70断面（北から）

1. 209M　弥生時代後期水田（北から）

2. 206・7F　弥生時代後期水田（北から）

図版78

1. 209J～L　弥生時代後期水田（西から）

2. 210L　弥生時代後期水田（北から）

1. 208Ｊ～Ｌ　弥生時代後期水田（西から）

2. 208･9Ｊ･Ｋ　弥生時代後期水田（東から）

図版80

1. 207G・H　弥生時代後期水田（東から）

2. 206・7C　弥生時代後期水田（南から）

1. 208・9Ⅰ 「島状高まり」遺構（北から）

2. 「島状高まり」遺構—24 断面（北から）

図版82

1. 溝―75～78・90
（東から）

2. 208・9K・L　遺構掘りあげ状況（北西から）

1. 溝—80（北から）

2. 溝—98（北から）

図版84

1. 土器溜り－3（西から）

2. 土器溜り－3（北から）

1.　土器溜り－3土器出土状況

2.　土器溜り－4（北東から）

図版86

1. 209J・K 古墳時代遺構（南東から）

2. 209M　古墳時代遺構（北から）

1. 竪穴式住居―11（南から）

2. 竪穴式住居―12（東から）

3. 竪穴式住居―12
土器出土状況

図版88

1. 竪穴式住居―13（北東から）

2. 竪穴式住居―13土壙

3. 竪穴式住居―13柱穴礎板

1. 竪穴式住居―14（南東から）

2. 竪穴式住居―15（南西から）

図版90

1. 竪穴式住居―16（南西から）

2. 竪穴式住居―16中央部炭層

3. 竪穴式住居―20
鉄鏃出土状況

1. 竪穴式住居―17（左）・18（右）（西から）

2. 竪穴式住居―18床面検出状況

図版92

1. 竪穴式住居―21

2. 竪穴式住居―21銅鏡出土状況

1. 竪穴式住居―21
炉検出状況

2. 竪穴式住居―21
土器出土状況

3. 竪穴式住居―21
（北東から）

図版94

1. 208・9L　古墳時代竪穴式住居群（北東から）

2. 竪穴式住居―22土器出土状況

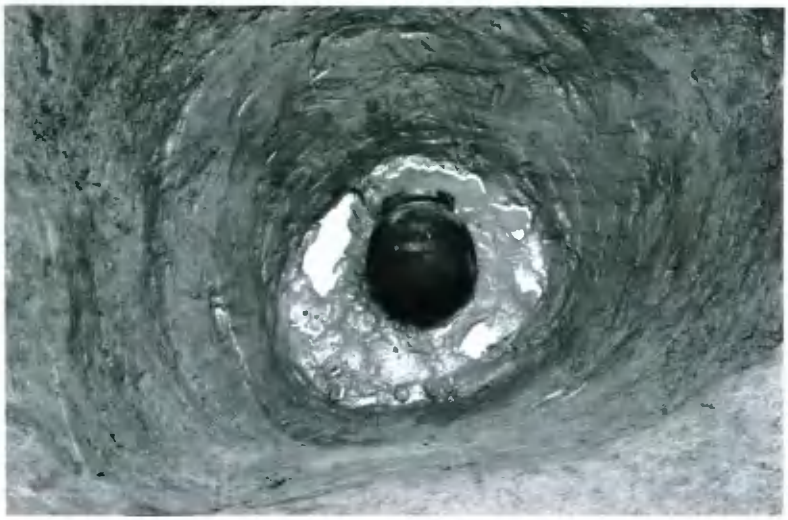
1. 井戸—14'（南から）

2. 井戸—14土器出土状況

3. 井戸—15（東から）

図版96

1. 井戸—16（南から）



2. 井戸—16 土器出土状況

1. 井戸—18（南西から）

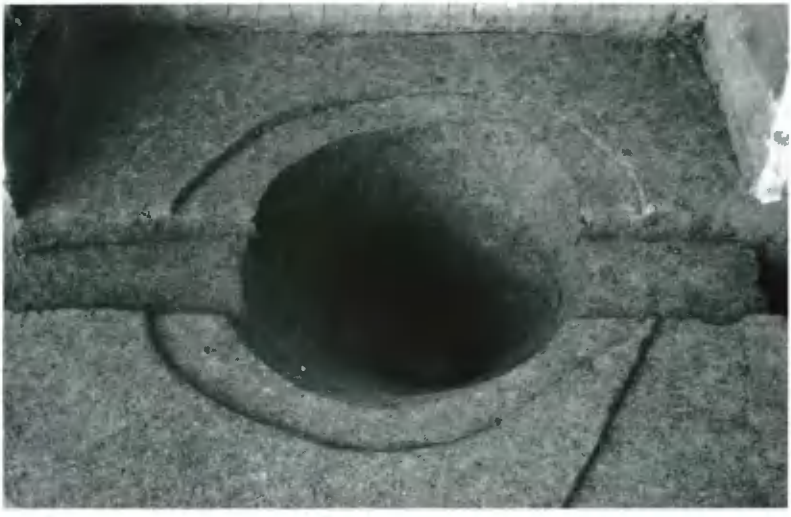
2. 井戸—18　遺物出土状況

図版98

1. 井戸―20（北から）

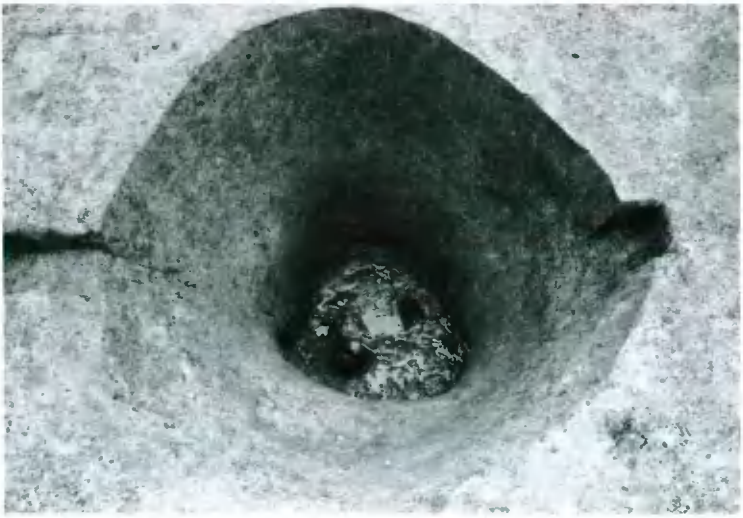
2. 井戸―19（南から）

3. 井戸―22（東から）



1. 井戸—25（南から）

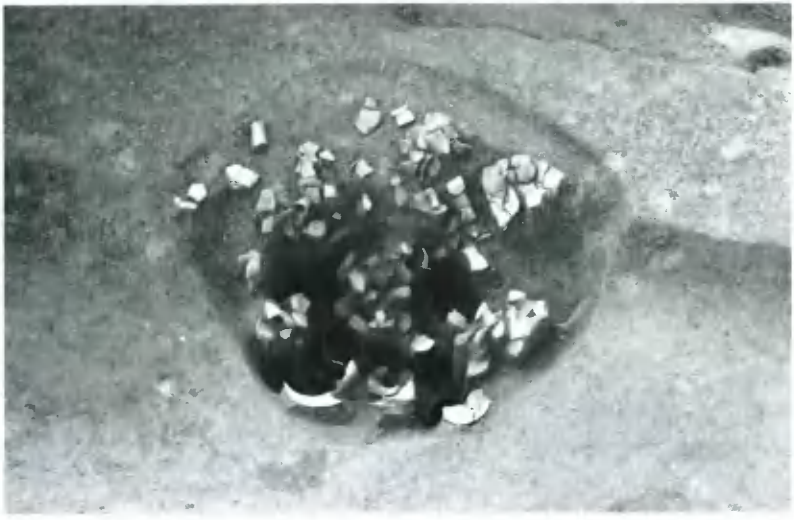
2. 井戸—26（南から）



1. 井戸—27（北から）

2. 井戸—27　土器出土状況

3. 井戸—27　木製品出土状況



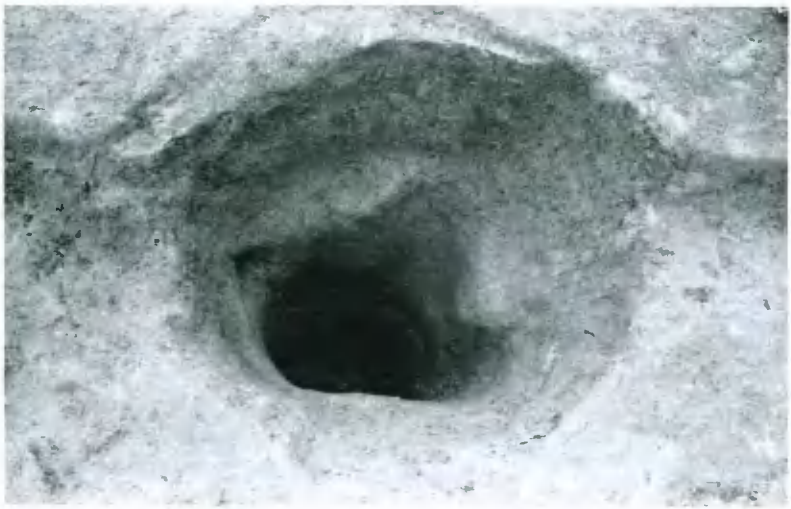
1. 井戸－28上層土器出土状況

2. 井戸－28中層土器出土状況

図版102

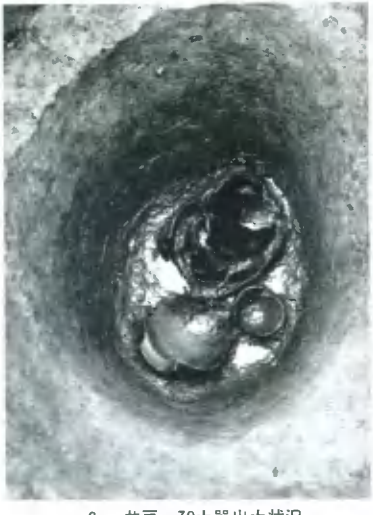
1. 井戸―28下層土器出土状況

2. 井戸―28最下層土器出土状況

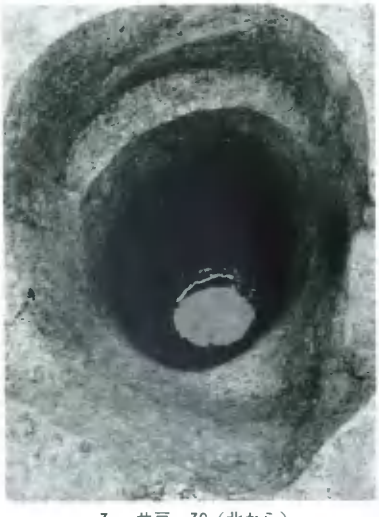


3. 井戸―28（東から）

1. 井戸―30上層遺物出土状況



2. 井戸―30土器出土状況

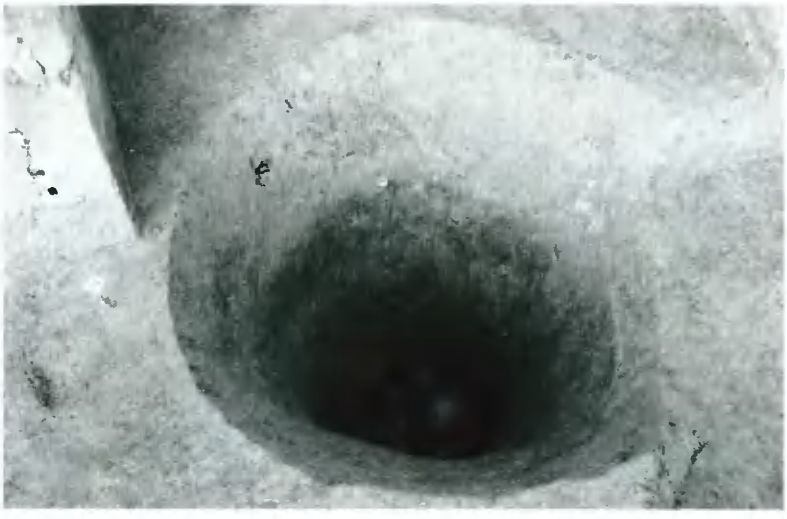


3. 井戸―30（北から）

図版104

1.　井戸—31（西から）

2.　井戸—33（東から）



1. 井戸—32（南から）

2. 井戸—32土器出土状況

図版106

1. 井戸－34
（東から）

2. 井戸－35
（南から）

3. 井戸－36
（南西から）

1. 井戸—37・38・39（北東から）

2. 井戸—39（東から）

図版108

1. 溝—113
（北西から）

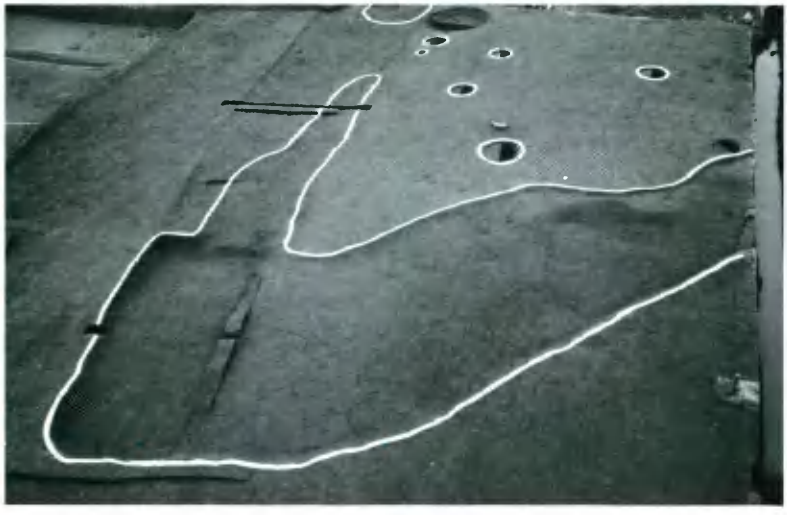
2. 溝—113馬歯出土状況

1. 溝―114～118検出状況（東から）

2. 溝―115土器出土状況

図版110

1. 溝—117土器出土状況



2. 溝—122（北から）

1. 土器溜り－5（南東から）

2. 土器溜り－5土器出土状況

図版112

1.　土器溜り－8（南から）

2.　土器溜り－8（西から）

1. 土器溜り－9（東から）

2. 土器溜り－12（北から）

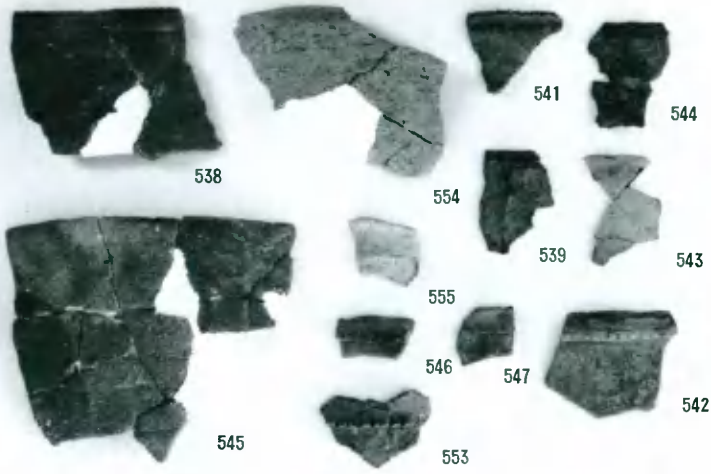
図版114

1.　土器溜り－12（東から）

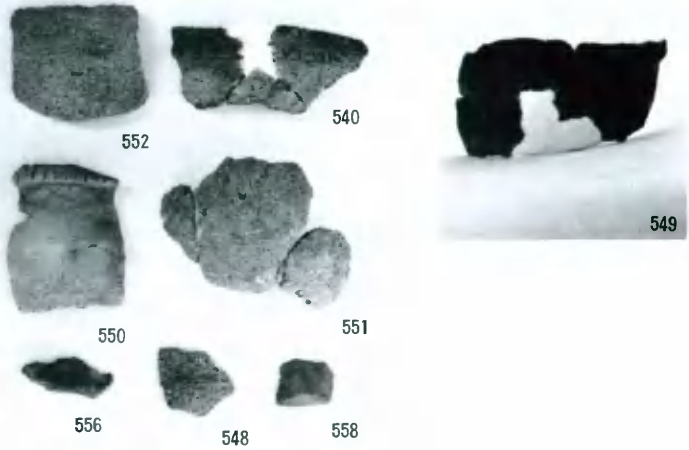
2.　土器溜り－12土器出土状況

1. 溝－128～131（北から）

2. 畝状遺構
（北から）



1. 斜面堆積―1出土遺物



2. 斜面堆積―1出土遺物

676

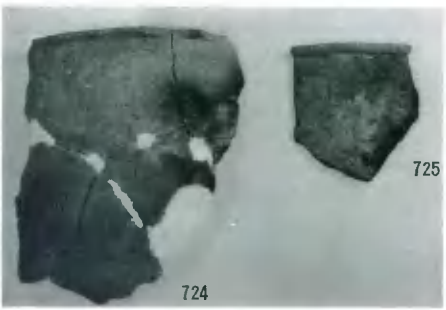
680

681

700 701

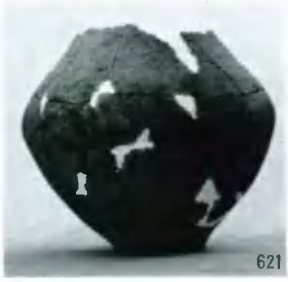
702 14 62

723


724 725

弥生時代前期土壙出土遺物（1）

図版118


621

625

623

626

661

670

664

674

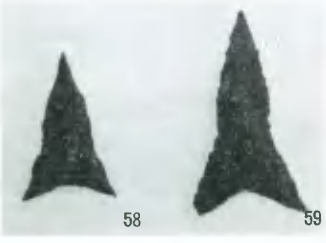
703

弥生時代前期土壙出土遺物（２）

53

54

55


58 59

56

57

64

61

63

3

弥生時代前期土壙出土遺物（3）

735

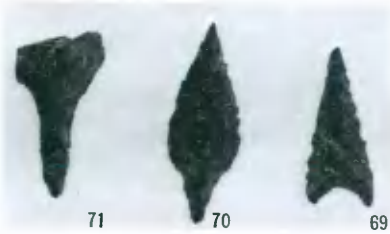
747

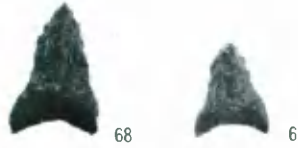
753

65

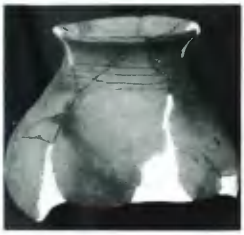
72

73


71 70 69


68 67

溝一69・70出土遺物


770

771

762

786

797

790

795

806

808

811

805

812 814

816

溝—70出土遺物

図版122

846

847

857

853

856

849

851

土器溜り—3出土遺物

844

860

845

873

843

850

858

870

土器溜り―3・4出土遺物

図版124

9

84

74

90

92

93

91

87

95

15

16

102

4

弥生時代後期水田・「島状高まり」遺構・包含層出土遺物

884

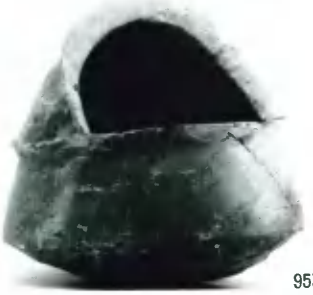
885

887

888

115 114

898


953

12

880

5

117

118

古墳時代竪穴式住居出土遺物

図版126

951

949

937

950

943

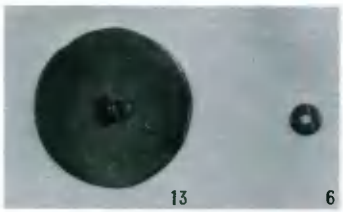
938

942

940

946

947


13 6

120

竪穴式住居—21出土遺物

955

1001

960

1000

1002

1003

1009

井戸—14・15・20出土遺物

図版128

985

986

988

984

14

983

997

井戸一18出土遺物

1029

1

1030

1033

2

1032

井戸—26・27　出土遺物

図版130

1036

1042

1037

1067

1053

1123

1094

1124

井戸—28・32・39出土遺物

井戸—33出土遺物

1

—

1208

1468

1463

1466

土器溜り—5・9出土遺物

1.　高縄手B調査区　落ち込み（南から）

2.　高縄手B調査区　落ち込み（南東から）

図版134

1.　土壙―80　検出状況（北東から）

2.　土壙―83　検出状況（北から）

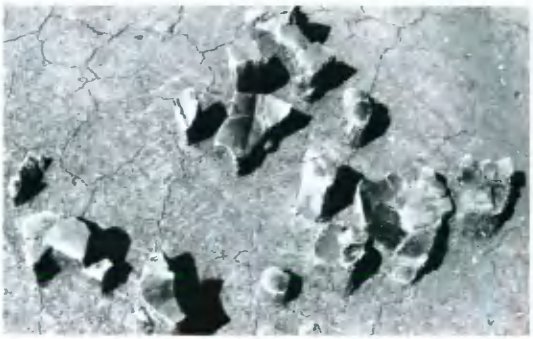
1. 土器溜り—13・14 検出状況（南から）

2. 土器溜り—13 土器出土状況（北から）

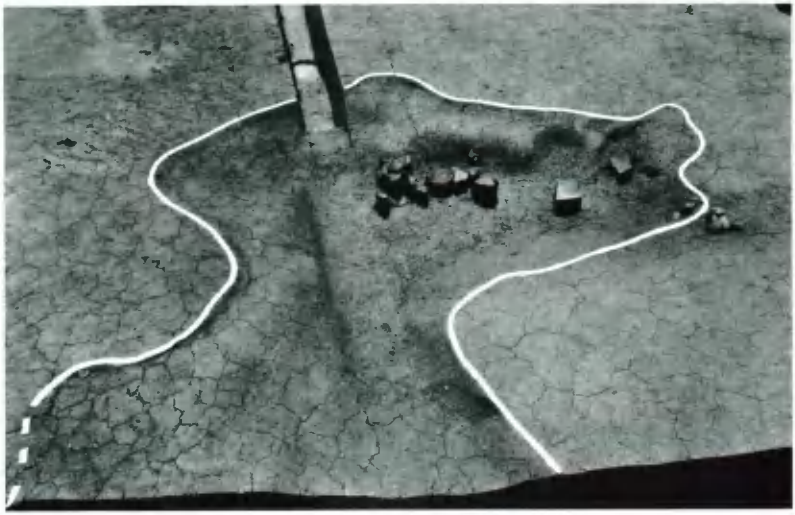
図版136

1.　土器溜り—13　土器出土状況と土層断面（南西から）

2.　土器溜り—13　土器出土状況（南から）



3.　土器溜り—13　東部分土器出土状況（南から）



1. 土器溜り—14 検出状況（北から）

2. 土器溜り—14 土器出土状況（北から）

図版138

1. 溝—137・138・158・159（東から）

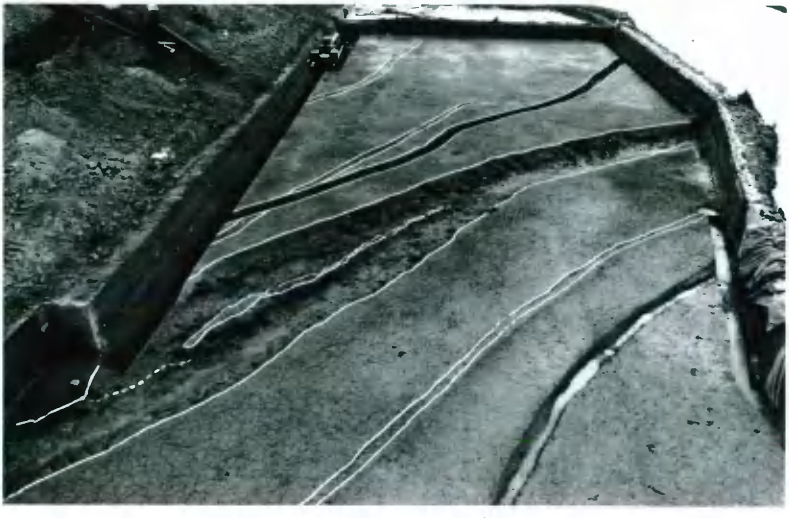
2. O・P溝群（南から）

1. 溝—133（北から）

2. 溝—134・137・158（北から）

図版140

1. 溝—135 土層断面（北西から）



2. 溝—135（西から）

1.　S～T　全景（西から）

2.　S～T　全景（東から）

図版142

1. 溝－135・136（西から）

2. 溝－135（西から）

1. 溝—136（北東から）

2. 溝—136　土層断面（北東から）

図版144

1.　V～W　溝群（西から）

2.　W～Y　溝群（東から）

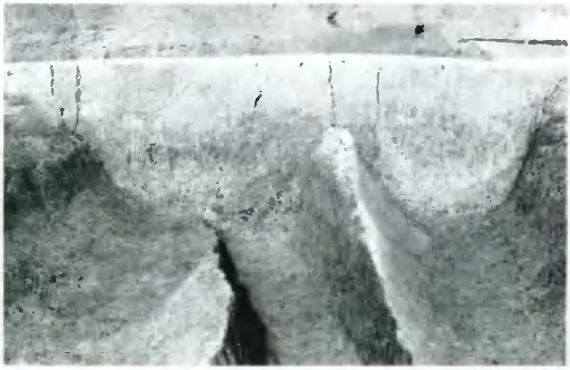
1. 溝－143（南から）

2. 溝－153（南東から）

図版146

1. W～Y 溝群（南東から）

2. W～Y 溝群（北西から）



1. 溝—148～150
（南東から）

2. 溝—145
（南東から）

3. 溝—145～147
（南東から）

図版148

1. 溝—148・149
（南東から）

2. 溝—148
（南東から）

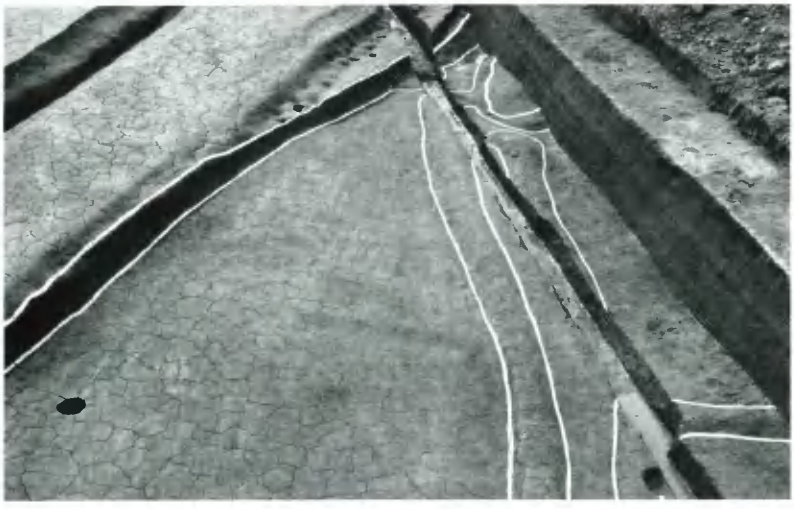
3. 溝—152
（南東から）

1. 溝－154・155・156（北から）

2. 溝－157（西から）

1.　N～P　水田（西から）

2.　O～P　水田（西から）

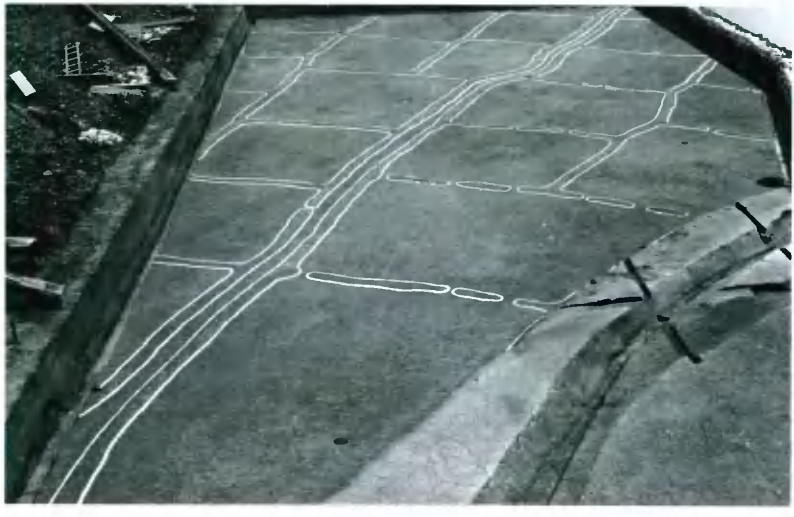


1.　水田取水口（南東から）

2.　水田取水口（南から）

図版152

1. R・S 水田（東から）



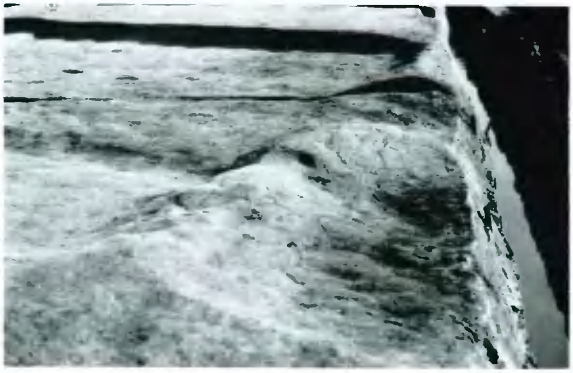
2. R・S 水田（西から）

1.　U・V　水田（西から）

2.　U・V　水田（東から）

図版154

1. 帯状水田
（南東から）



2. 帯状水田大畦
（北から）

3. 帯状水田大畦
（南西から）

1.　帯状水田・第2水田（南東から）

2.　帯状水田・溝―152（東から）

図版156

1.　V・W　水田（北から）

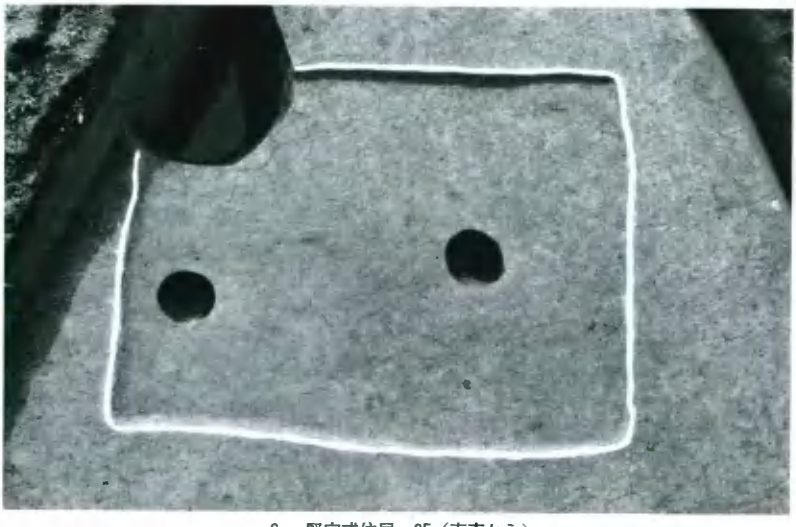
2.　W～Y　水田（北西から）

1. 竪穴式住居―23（右）・24（左）（東から）

2. 竪穴式住居―24柱根検出状況（西から）

図版158

1. 竪穴式住居―25・26・27，溝―164（南東から）

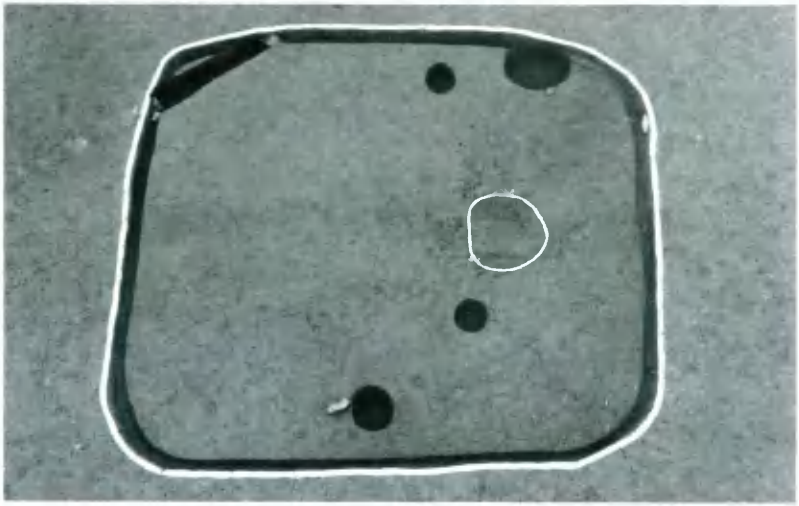


2. 竪穴式住居―25（南東から）

1. 竪穴式住居―26灰層検出状況（南から）

2. 竪穴式住居―26（南から）

図版160



1. 竪穴式住居―27（北東から）

2. 竪穴式住居―28（南東から）

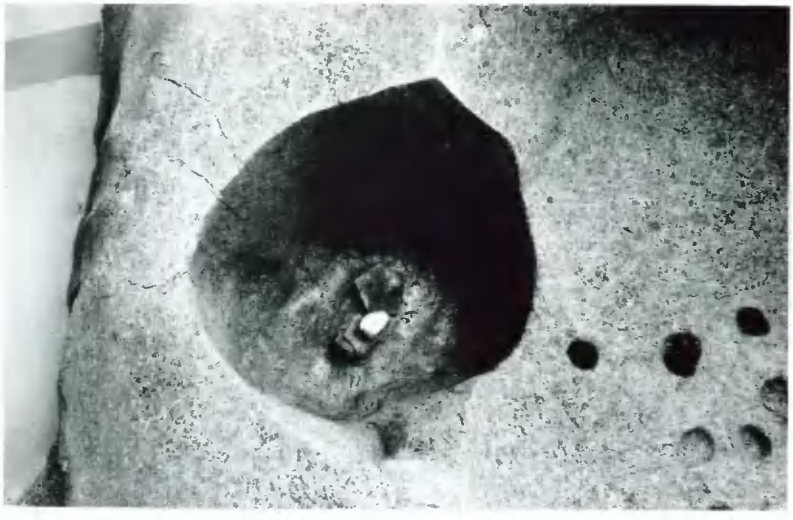
1. 井戸—40（南から）

2. 井戸—42（南から）

図版162

1. 井戸—43（南から）

2. 井戸—44（西から）



1. 井戸—45（北から）

2. 井戸—46（南西から）

図版164

1. 井戸—47（北西から）

2. 井戸—47木器出土状況（南から）

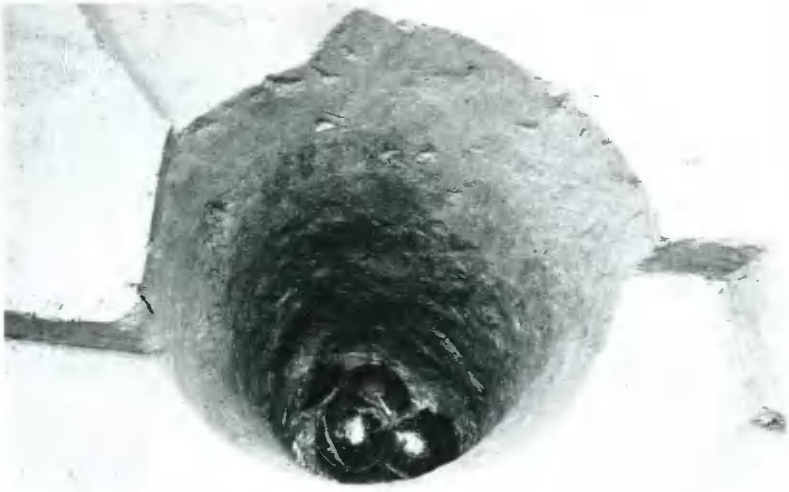
1. 井戸—48（南から）

2. 井戸—49遺物出土状況（南東から）

図版166

1.　井戸―50（南から）

2.　井戸―50遺物出土状況（南から）

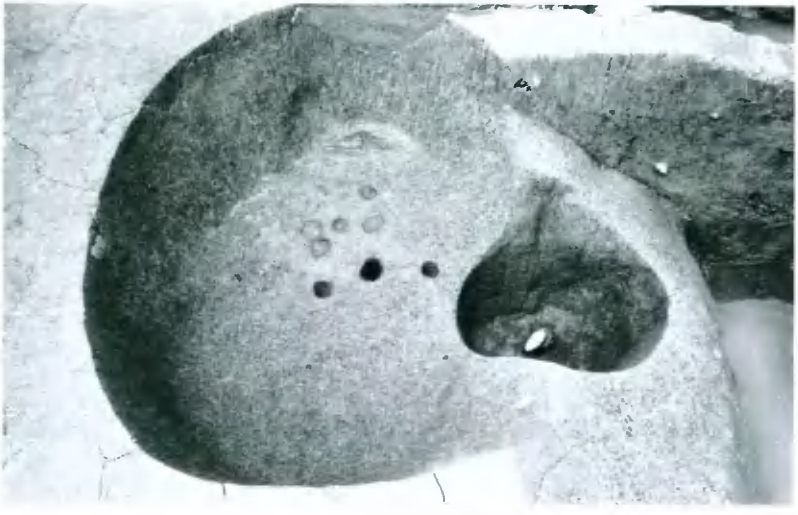


1. 井戸—51遺物出土状況（南から）

2. 井戸—51完掘（北から）

図版168

1. 井戸－52（南から）



2. 土壙－85（南から）

1. 溝—163（東から）

2. 溝—161・162（北西から）

図版170

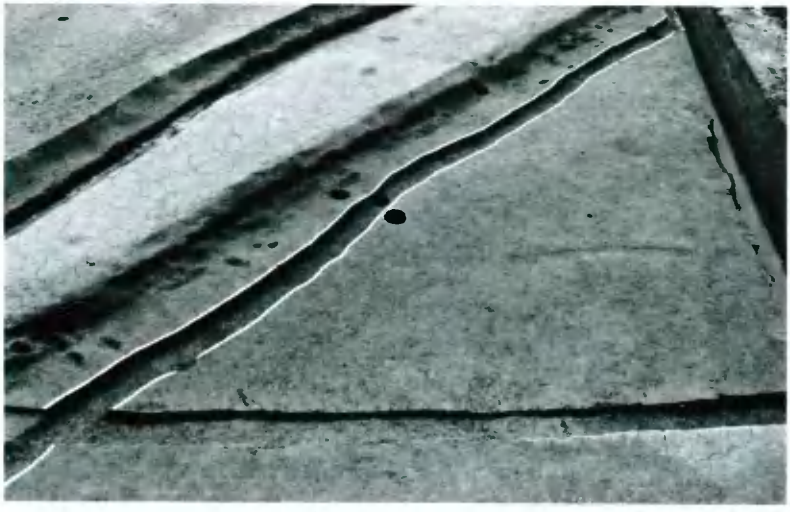
1. 溝－164（東から）

2. 溝－164遺物出土状況（北西から）

1. 溝—164土層断面（南東から）

2. 溝—164土層断面（南東から）

図版172



1. 溝－166（東から）

2. 溝—165および古墳時代水田（東から）

1. 溝－169・170（北西から）

2. 溝－168（北東から）

図版174

1. 柵列状遺構（南東から）

2. 柵列状遺構（東から）

1. 建物—11（北から）

2. 南北溝（西から）

3. U・V 溝状遺構（南から）

図版176

1610

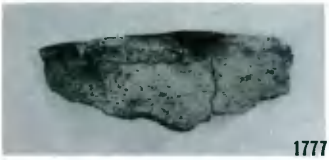
1610

1610

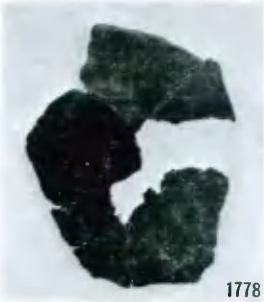
1610

1611 1612

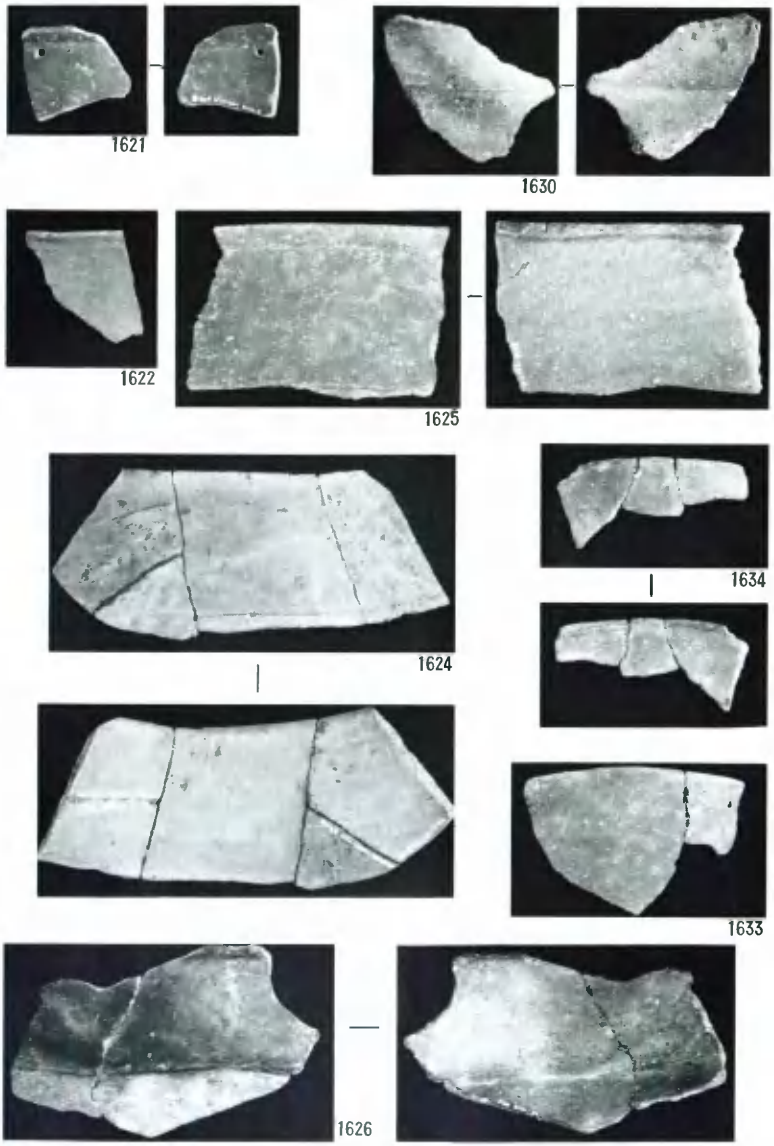
125


1777

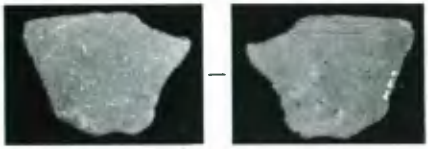
339


1778

斜面堆積および落ち込み出土遺物

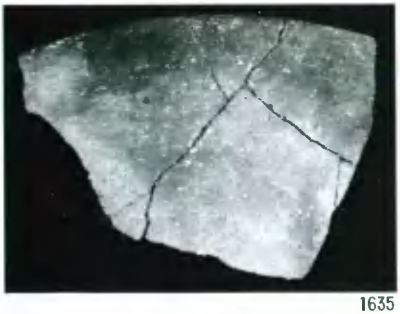


土器溜り—13　出土遺物（1）



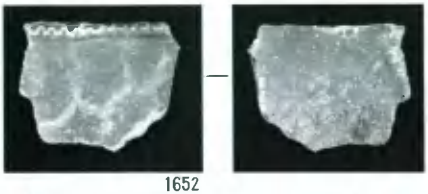
1632

1656

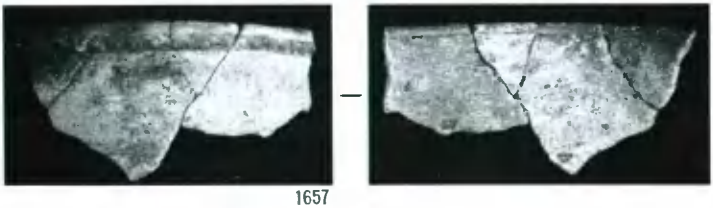


1635

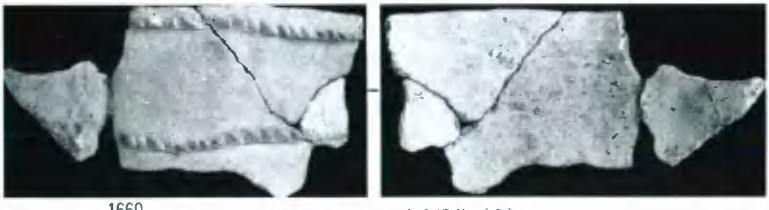
1659



1652



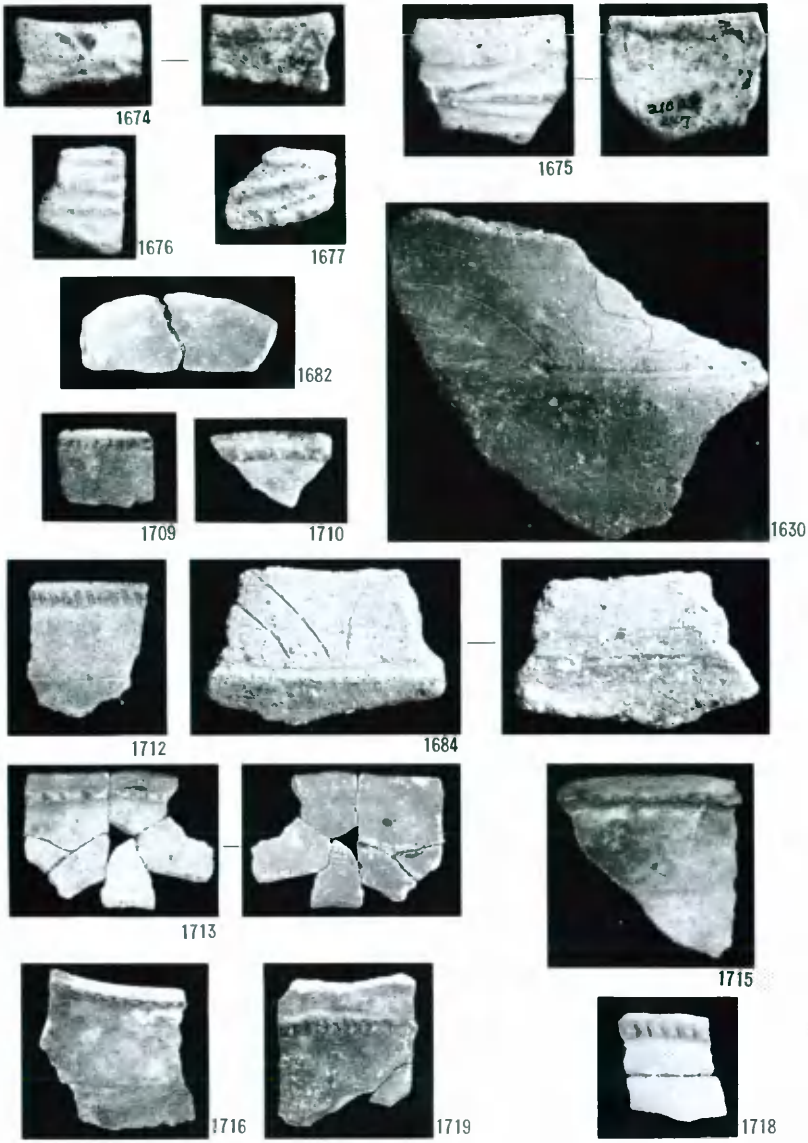
1657



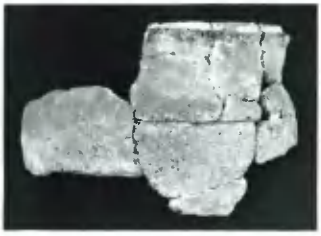
1660

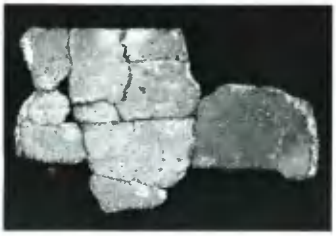
土器溜り—13　出土遺物（2）

土器溜り—13・14　出土遺物（1）（ヘラ描き施文土器）



土器溜り—13・14　出土遺物（2）





1721

1722

1721 内面細部

1723

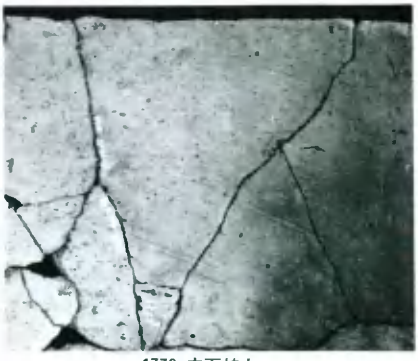
1723
穿孔部拡大

1733

土器溜り—14　出土遺物（1）

図版182

1730

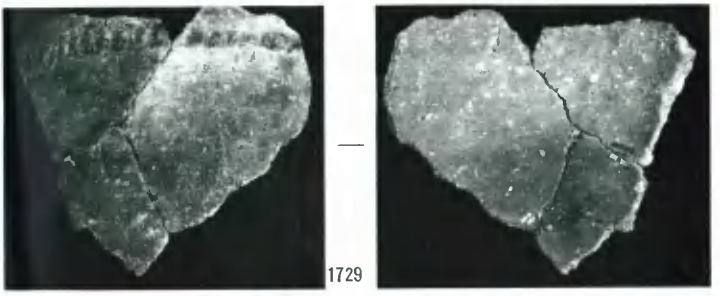


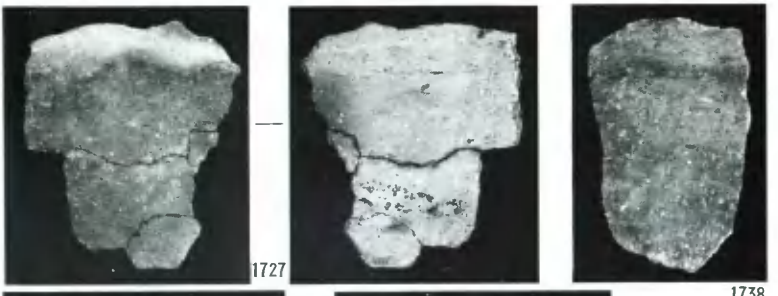
1730 内面拡大

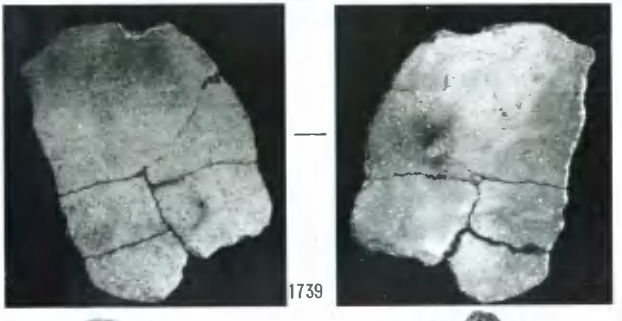
1732

1735

土器溜り—14　出土遺物（2）

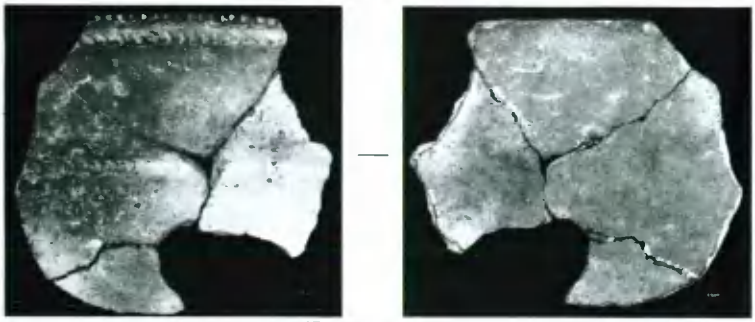




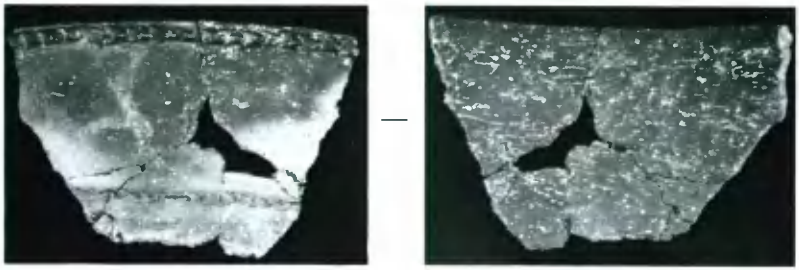


頭骨（ニホンジカ）

土器溜り—14　出土遺物（3）・土器溜り—13　出土頭骨（ニホンジカ）



1736



1737

土器溜り—14　出土遺物（4）・土器溜り—14南辺出土焼土塊

126

129

214

218

126・129・214・218 $\left(\frac{1}{2}\right)$

230 $\left(\frac{1}{2}\right)$

228 $\left(\frac{1}{2}\right)$

229 $\left(\frac{1}{2}\right)$

234 $\left(\frac{1}{2}\right)$

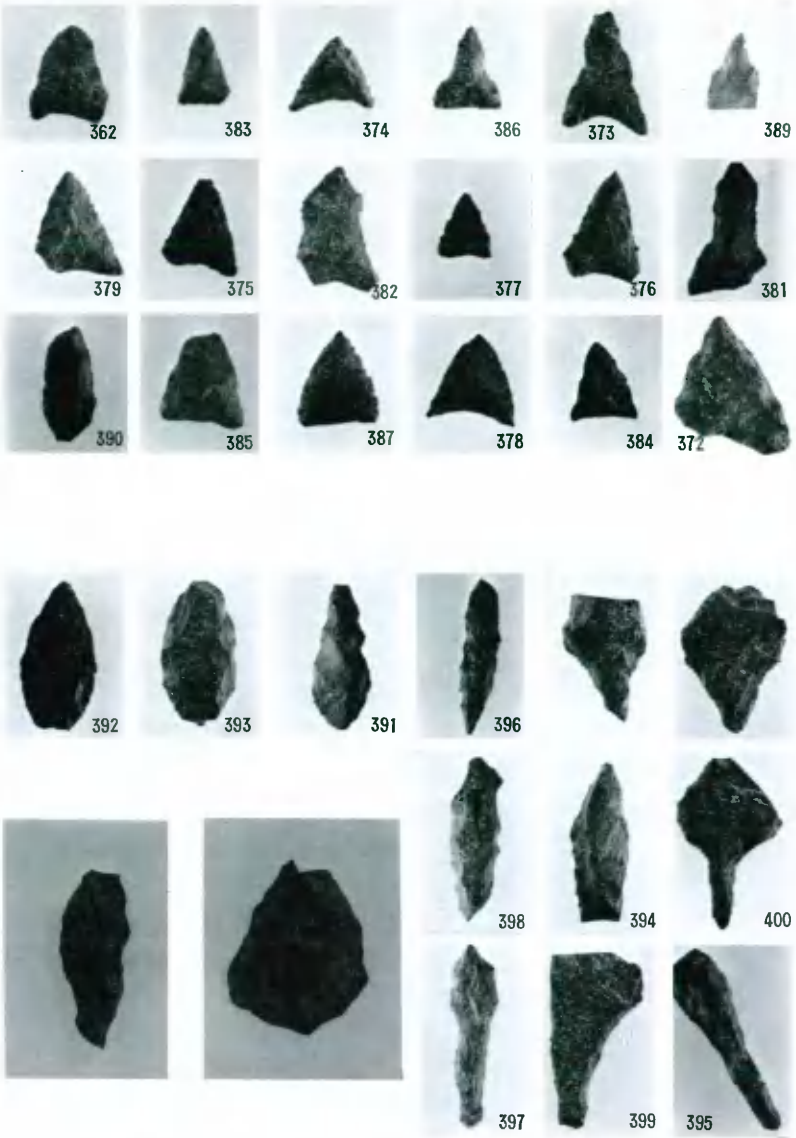
235 $\left(\frac{1}{2}\right)$

329

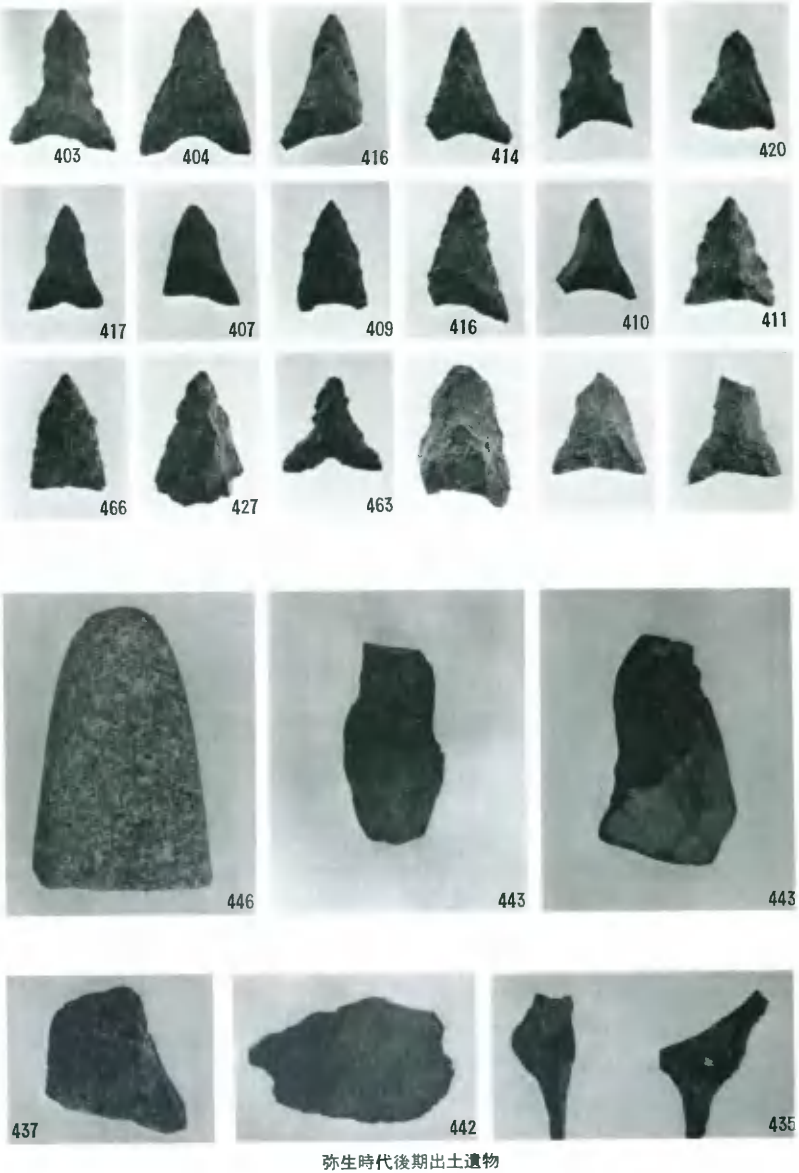
326

土壙—83・土器溜り—13・14・包含層出土石器

図版186

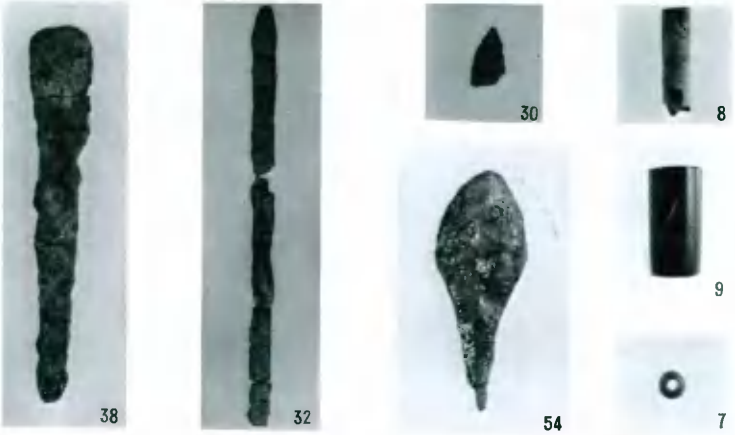


溝一135　出土遺物


403
404
416
414
420
417
407
409
416
410
411
466
427
463
446
443
443
437
442
435

弥生時代後期出土遺物

1. 溝—164 出土遺物



2. 出土鉄器・玉・管玉

1907

1893

1894

1910

1892

1899

1901

井戸—40・42・44出土遺物

図版190

1903

1907

1905

1909

1946

1928

1948

15

1949

1947

井戸—44・47・51出土遺物

8～12：井戸―46　出土
13・14：井戸―47　出土

井戸―46・47　出土木製品

図版192

竪石調査区全景（南から）

1. 大畔（東から）

2. 弥生時代後期水田（南から）

図版194

1.　縄文時代遺物出土状況（東から）

2.　井戸―53　検出状況（南から）

竪石調査区出土遺物

1.　開山下調査区不整形土壙群検出状況（西から）

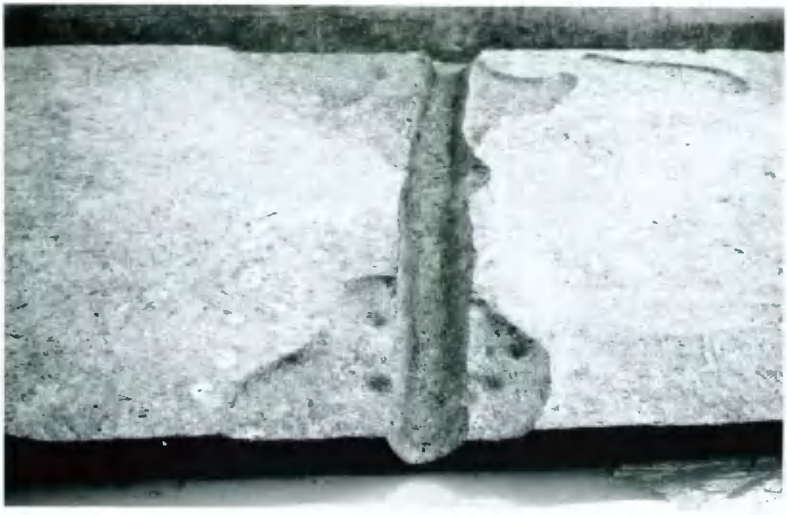
2.　不整形土壙検出状況（西から）

3.　不整形土壙群完掘後全景（北から）

1. 微高地端と溝 —176・177・178（北から）

2. 微高地端土層断面（西から）

図版198



1. 溝—178（西から）

2. 溝—176・177（西から）

1. 溝—175（西から）

2. 水田端と溝—177　土層断面（西から）

図版200

1. 3区 水田全景（北から）

2. 1・2区 水田全景（北から）

1.　4区　水田全景（北から）

2.　5区　水田全景（南西から）

図版202

1.　3区　水田細部・微高地付近（東から）

2.　5区　水田細部・南端溝—179（東から）

1. 土壙—90（北から）

2. 土壙—89（東から）

図版204

1.　四元調査区　1区・2区　溝検出状況（西から）

2.　四元調査区　3区・4区　溝検出状況（西から）

1.　5区・6区　古墳時代遺構面（東から）

2.　5区・6区　溝検出状況（東から）

図版206

1.　7区　溝検出状況（西から）

2.　7区　弥生前期土器溜り—15（東から）

1.　4区　溝－187　土器出土状況（南から）

2.　5区　古墳初期土器溜り－16（東から）

図版208

1.　5区　溝—185・186　土層断面（南から）

2.　4区　土壙—91（北から）

◁ 縄文晩期

▽ 弥生前期　　右下　弥生中期

2224

2225

2226

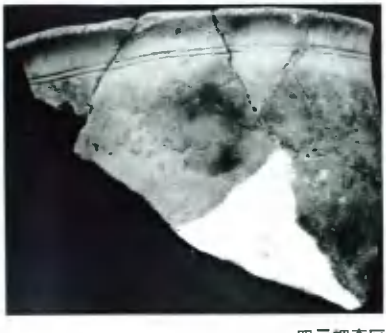
2227

2228

2229

2233

2230



2234

2236

四元調査区出土遺物（1）

2237

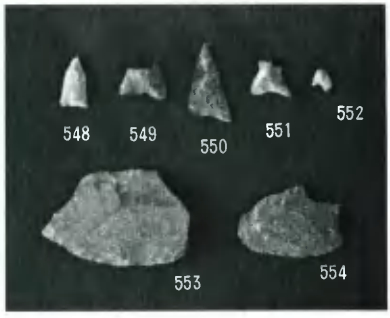
2238

2247

2239

2241

四元調査区出土遺物（2）



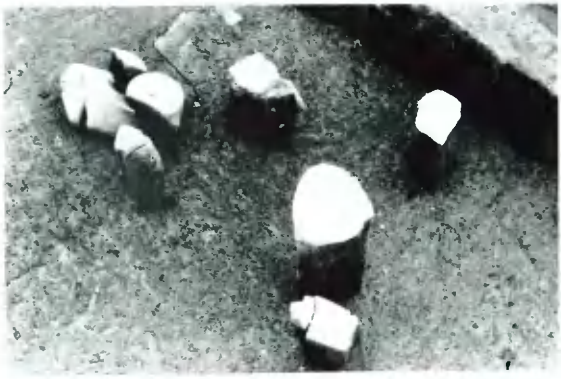
四元調査区出土遺物（3）

図版212

1.　長谷遺跡溝群　全景（北から）

2.　長谷遺跡　東壁断面（南西から）

1.
溝—202　検出状況
（北西から）



2.
溝—201　遺物出土状況
（北から）

3.
東壁際トレンチ内
遺物出土状況
（北から）

図版214

2253

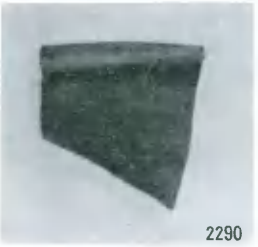
2269

2273

2205

2264

2292


2290

560

長谷遺跡出土遺物

1

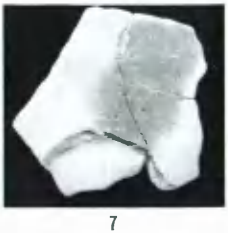
2

3

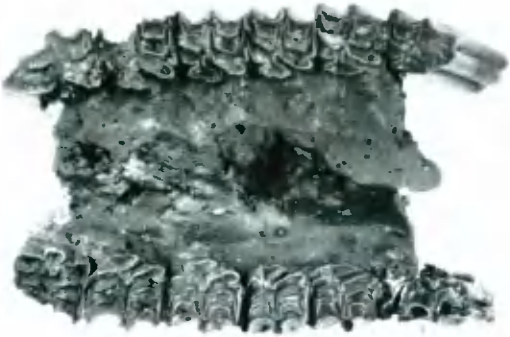
4

5

6


7

高杯形土器成形手法



ウマ

2.a　咬面

2.b　R下顎骨類側面（右より　$P_{2-3}M_{1-3}$）

溝—113　出　土　馬　歯

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59

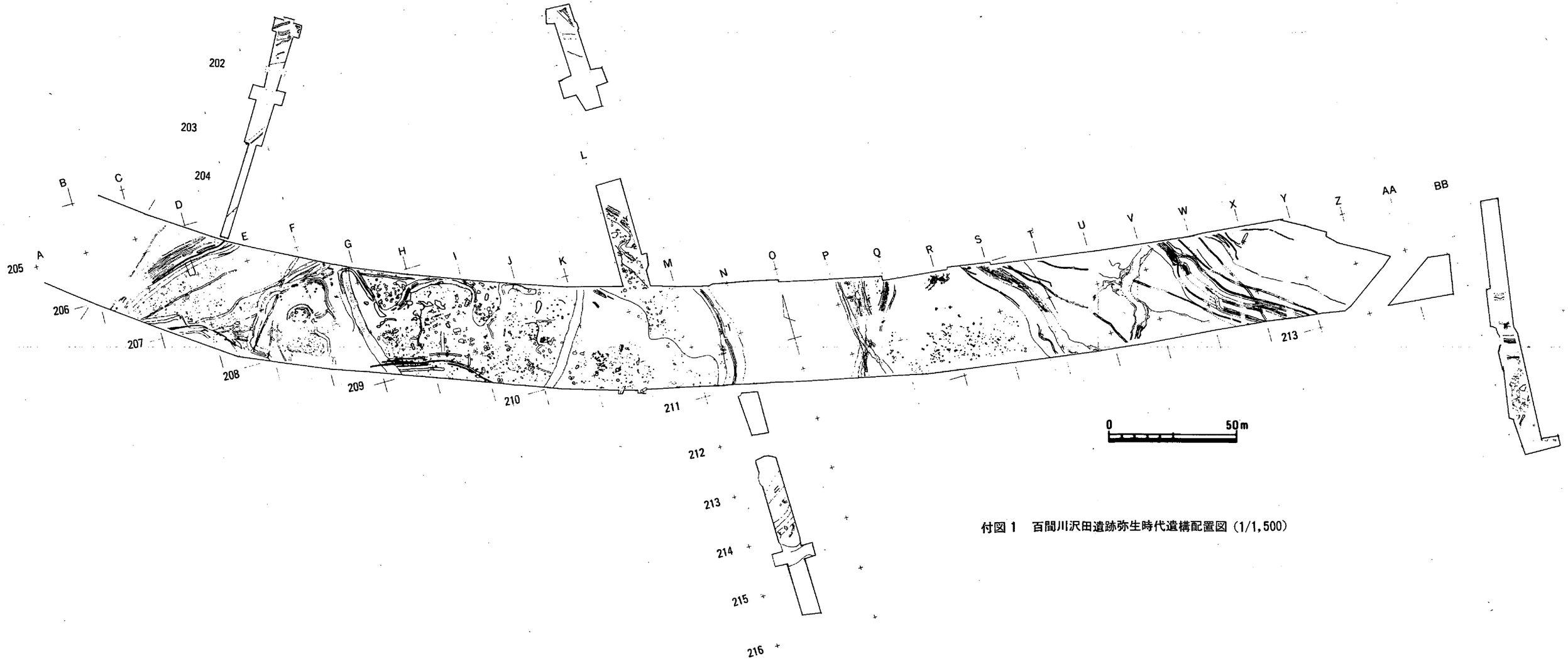
百間川沢田遺跡 2

百間川長谷遺跡 2

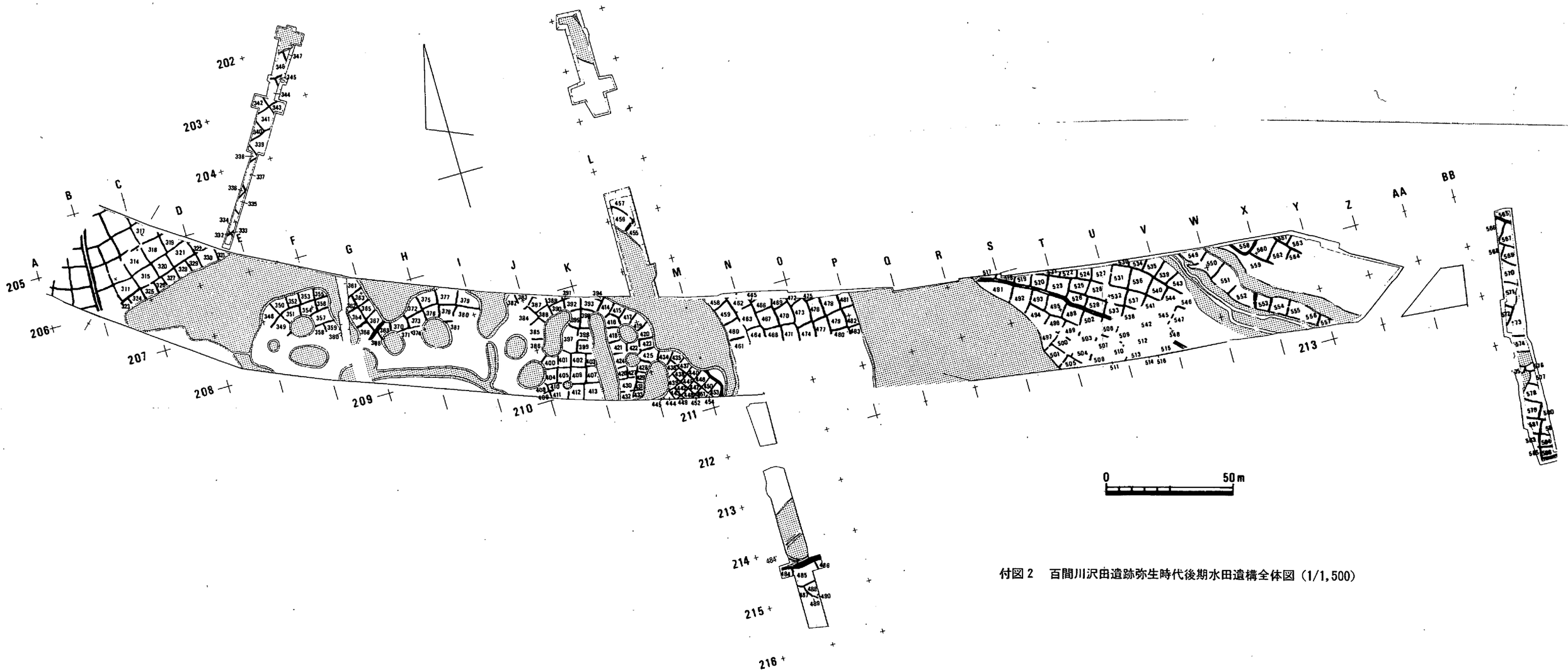
1985 年 3 月 15日 印刷
1985 年 3 月 30日 発行

編 集 建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会
岡山市内山下 2 丁目 4 番 6 号

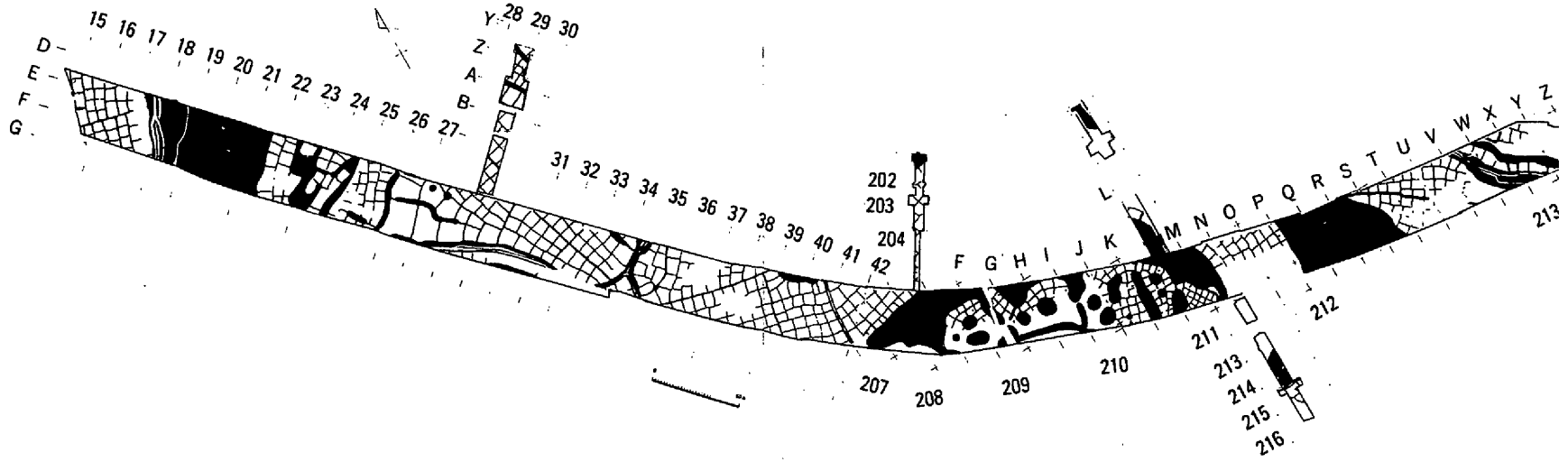
印 刷 岡山県農協印刷株式会社
岡山市富町 2 丁目 5 番27号



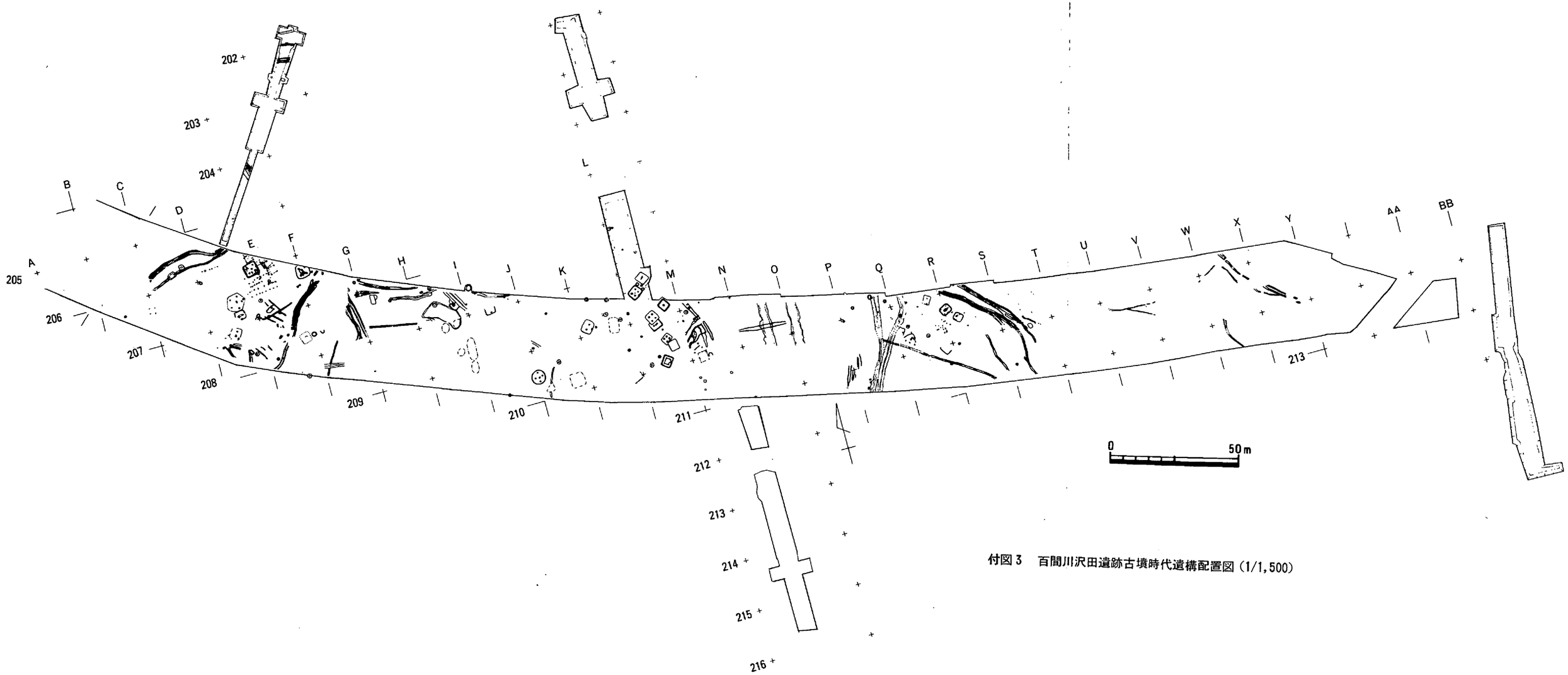
付図１　百間川沢田遺跡弥生時代遺構配置図（1/1,500）



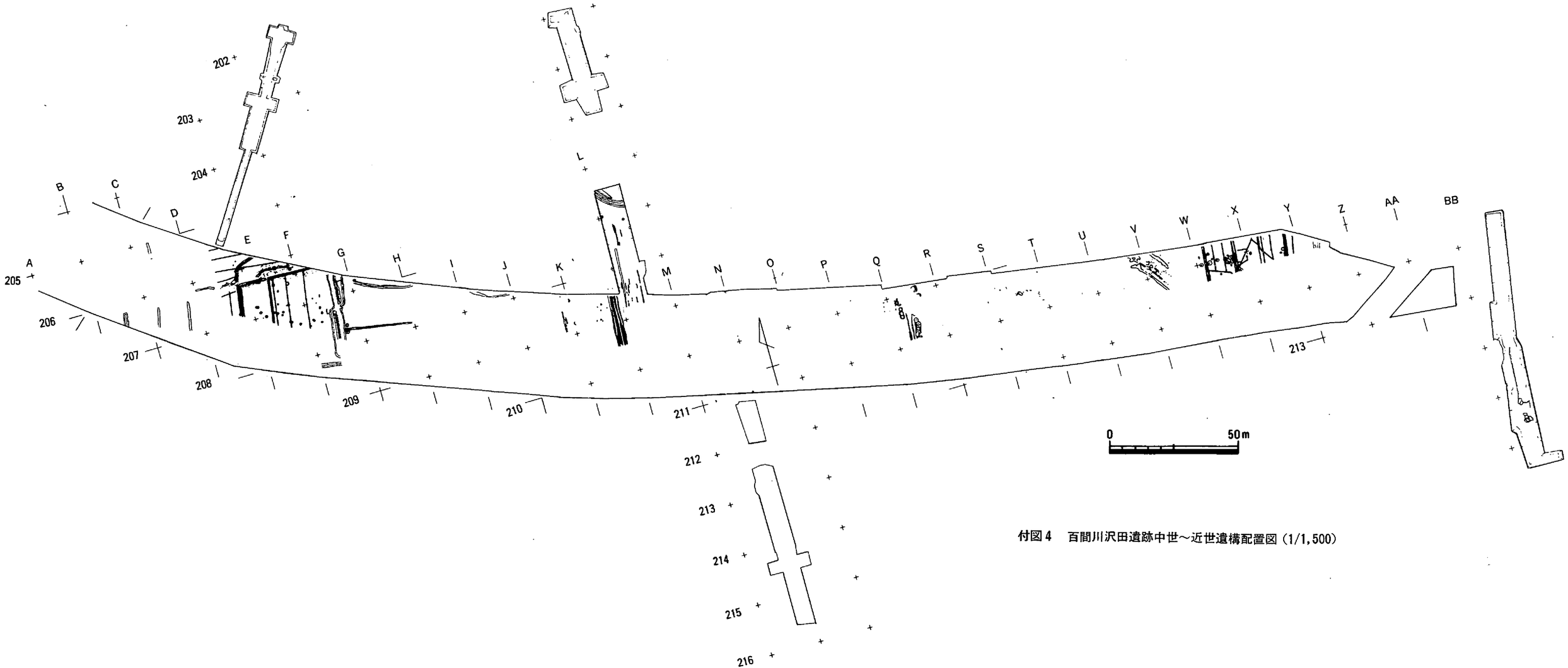
付図２　百間川沢田遺跡弥生時代後期水田遺構全体図（1/1,500）



付図２－１　百間川原尾島・沢田遺跡弥生時代後期水田遺構全体図（1/4,500）



付図3　百間川沢田遺跡古墳時代遺構配置図（1/1,500）



付図4　百間川沢田遺跡中世～近世遺構配置図（1/1,500）